國文注釋全書



文學博士本居豐穎
文學博士木村正辭
文學博士井上頼圀
校訂

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

源氏物語 岷江入楚

上

緒言

一岷江入楚ハ中院通勝ノ著ニシテ五十五巻ナリ、源氏物語ノ詳注ニシテ、定家ノ奥入ヲハジメ、紫明抄、水原抄、河海抄、花鳥餘情、弄花抄、細流抄等ノ説々ドモヲ引キ、且ツ自説ヲモ加ヘタルモノナリ、岷江入楚ト名付ケタル所以ハ、山谷ノ詩ニ岷江初濫レ觴入レ楚乃無レ底トイヘル句アリ、源氏物語ノ註釋書ハ定家ノ奥入ヲ濫觴トシテ、爾來註釋書ドモ多クアゲテ數フベカラザルヲ底モ知ラレヌ海ニタトヘタルナリト云ヘリ、其ノ趣旨詳シク自序ニ見エタリ、本書ハ内閣文庫本ヲ底本トシ、井上博士所藏本ヲ以テ校合セリ、

明治四十三年九月

編者識ス

ん浦島が子の箱の底に深くかくすといへどもおのづからおち散てみん人の爲にはあけてくやしからん事を恥る思ひながら猶とゞむる事をえずして五十五帖になしぬ山谷先生が詩にいへらく岷江初濫觴入楚無底と彼奥入は誠に岷江の初といふべきにや今此抄物の楚に入て底なきが如くなるは世くだり人の心おろかにしてはかなきふしまでをもらさず注釈せんとするが故也其うへみづから（かみイ）の聞おけることを書加るのみにあらず剰へ今案の臆說をさへ記付たる事誠に其おそれありといへども廣く世に傳へて普く後人をさとらしめんとの本意にありされはかへりて人のあざけりをはゞからざる物ならし時に慶長三のとしみな月の中の九日也是の書漸にして記しをはりつゝ岷江入楚と名付たる事しかり

此抄に引所の肩付

一河　河海抄也
一花　花鳥餘情也
一弄　弄花也
一祕　三西家の抄也稱院名の義也
一箋　三光院の義也此內或は彼抄出之所有或予聞書の所あり然而若菜の下より宇治十帖は予（我イ）聞書を箋と載了桐壺より明石卷までは彼抄の分を箋と書き聞書を箋聞と書之此內私と書之者予が今案之義也又諸抄に注せざるの所に肩付無之分は予か注加也諸抄に相違有て其外に今案を注し付る分を私と注し畢
一或抄　此外一本あり此內御說と有分は稱名院の義也

光源氏物語事

一弄全篇光源氏の君の事を詮用とす仍名之
一河或說に云く此物語をば必光源氏物語と號すべしいにしへ源氏と云物語あまたある中に光源氏物語は紫式部が作と云々是今案の義也紫式部が寛弘六年の日記に源氏物語の御前にあるをよませ給ふとあり又水鏡にも紫式部が源氏物語と書り代々の集の詞是に同じ奥入にも是より先に源氏物語と云物有然ば光と云字を可加也さりながら比類なければ源氏と計にてもくるしからざる歟

作者事

一紫式部　父越前守藤原爲時母右馬頭爲信女系圖左ニ有

良門 閑院左大臣冬嗣公六男勸修寺元祖 抄内舍人正六位上 贈左大臣正一位
―利基 從四位上右中將 贈正一位 藤原系圖左中將云々
――兼輔 中納言從三位 歌人 抄號堤中納言 承平薨五十五
――惟正 豐後守從五位下 刑部大輔 抄雅正河因幡守 從五上
―――爲頼 歌人 河明越後守 正五位下
―――爲時 歌人 花抄越前守
――――惟ノブ規ノリ
――――女子 歌人號紫式部源氏物語作者 上東門院女房 御堂關白妾云々 右衞門佐宣孝室 明匪攝津守爲信女 抄母右馬頭藤爲信女賢子 一說爲時姨雅正女也云々
―――女子 歌人 拾遺作者
――清正 紀伊守從五上 藏歌人
―高藤 小一條内大臣 寛平贈正一位 勸修寺兩家祖 延喜御外祖

上東門院彰子御事一條院后也

御堂關白道長公ノ女也母從一位倫子左大臣雅信女 長保元年十二月朔入内年十二去十一月從三位十二月七日女御同二年三月廿五日立后寛弘九二二十四日皇太后年二十三寛仁二年正月太皇太后宮萬壽三年正十九日落飾爲尼年三十九號上東門院法名清淨覺年宮年爵如元永保元十月三日崩八十七歲

紫式部母系圖 長曆三五七於東北院御剃除就之案之萬壽三御出家乖尼歟 此時如法爲尼歟可尋之一條院后後一條後朱雀二代國母也

清經 長良公六男 藤原三木
―元名
―文範 從三權中
―爲雅
――中清
―――範永
―爲信 河海常陸介 或說ニハ攝津守
――理明
――女子 右大辨爲時室 紫式部母

紫式部女大貳三位系圖

宣孝（權中納言爲輔子云々　藤原右衛門權佐　長保三卒）
　┬隆光（右京大夫歌人）──隆方（但馬守　歌人　號大貳三位承暦二卒）
　└賢子（從三位　承暦二卒後一條院御乳母太宰大貳成章卿之爲妻仍大貳三位號　母紫式部狹衣之作者歌人）

後一條院御乳母事

榮花物語廿六云又大宮の御かたの紫式部が娘越後の辨の左衛門督兼信の子うみたるそれぞと參れる由有右衛門權佐宣孝女子也是則大貳三位賢子也

紫式部の事

一 河 紫式部は鷹司殿（從一位倫子一條左大臣雅信公女）の女官（御堂關白北方）なりあひつゐで上東門院に陪侍す先祖右に注す私後に左衛門佐宣孝に嫁して大貳三位と辨局狹衣作者を生也

一 河 一部の內に紫上の事をすぐれて書出したる故に藤式部の名を改めて紫式部と號せられけり一說云藤式部の名幽玄ならずとて藤の花の色のゆかりに紫の字に改めらると云々（淸輔朝臣說）

一 河 或說云一條院の御めのとこの子也上東門院へ參らせらるとて我ゆかりの者也あはれとおぼしめせと申させ給ひけるによりて此名は武藏野の義也ともいへり或又作者は觀音の化身也云々此物語は越前守爲時書と云々非也

一 河 紫式部が舊跡は淸和院正親町以南京極の西頰今の東北院の向也此院は上東門院の御所の跡也

一 又墓所は雲林院白毫院の南にあり（今の紫野うなりと云所なり）小野篁が墓の西也宇治の寶藏の日記にも紫野雲林院にあるよし見えたり雲林院は淳和天皇の離宮也賢木卷に光源氏雲林院にて六十卷と云文をとかせ聞え給ひし所也式部は檀那院贈僧正の許可をかうぶりて天台一心三觀の血脉に入れり兼てより雲林院の幽閑をしめにけるも旁故あるにや

一 紫式部が日記に今日は里に出て史記と云文をよむ

など書けり史記に通じける事あきらけし

時代

一天正十八年(庚寅)迄は五々七十五年歟寛弘の初に造レ之康和の末に流布す自寛弘元(甲辰)至永保十三(庚卜)五百五十五年也寛弘より康和の間百餘年ばかり歟されども殊に世に盛にもてあそぶことは五條三位俊成卿京極黄門定家卿の頃よりと云々

物語の起

一大齋院選子(内親王村上女十宮御母安子中宮)所望上東門院(一條院后也御堂關白女)仍仰官女式部作進之云々選子を大齋院と申事は圓融院より後一條院まで五代の齋院たるに依て也天延二六廿六卜定長元四九廿二退同八六廿二薨齋院の間五十七年歟云々

一河此物語の起説々有といへども西宮左大臣安和二年太宰權帥に左遷せられ給ひしかば藤式部をさなうより馴奉りておもひなげきける頃大齋院より上東門院へめづらかなる物語や侍ると尋申させ給ひけるにうつぼ竹取やうの物語はめなれたればあたらしく作出して奉るべきよし式部に仰られければ石山に通夜して此事を祈申に折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみ渡るまゝに物語の風情そらにうかびけるをわすれぬさきにとて佛前に有ける大般若の料紙を本尊に申うけて先須磨明石の兩卷を書始めけり是によりてすまの卷に今夜は十五夜なりけりとおほしいでゝとは侍とかや後に罪障懺悔の爲に般若一部六百卷をみづから書て奉納しける今に彼寺にありと云々此事實なりと云々

一又大齋院より上東門院へ春の日のつれ〴〵なぐさみぬべき草子や侍ると申させ給ひけるに女院紫式部を召て何をかまゐらすべきと仰られければ式部申けるはめづらしきものは何かは侍るべきうつぼ竹取おちくぼいはや住吉などはめなれたればあたらしくつくりいだして參らせ給へかしと申ければさらばおもひはからひて作れと仰られけるを承りて源氏を作りけるこそいみじくめでたく侍れと云人あり又いまだ宮仕もせで里に侍るをりさる物語作りたるをいだしたるによりて召出されてそれゆゑ紫式部と名は付たりと申又第三の若紫の卷を殊

にたぐひなく作れりとて紫式部とはいはれたりとぞ何れか誠ならん

一宇治大納言の物語に今は昔越前守爲時とてさえ有て世にめでたくやさしかりける人は紫式部が親也此爲時の源氏は作りたる也こまかなることゞもをむすめにかゝせたりけるとぞさいのみや此事を聞し召てむすめを召出したりける此源氏作りたる事さまぐ\に申傳へたり參りて後作りたる成とも申何れかまことならん

大意

一君臣父子夫婦朋友の道を以て人を教と云々　誠に君臣の交仁義の道好色の媒菩提の緣に至るまで是を載せずと云事なし父子有親君臣有義夫婦有別長幼有序朋友有信

一彌大意は君臣父子夫婦朋友の道を以て人を敎也

一或說一部の作者天台四敎の法門に比すと云々

一此物語何としたれば男女の道を專とする也是毛詩關雎の德を可見と云々關雎者后妃之德也云々此后妃は文王の后太姒を云り賢女を得て文王の后になして天下の政をたすけたきと太姒のおもはれたる事をほむる也女は嫉妬の心ばかり有に此太姒は奇特なる心也是を以てしるべしとぞ

一易云家人卦家人利二女貞一彖曰家人女正二位乎內一注家人之義以レ內爲レ本者也故先說レ女也男正二位乎外一男女正位天地之大義也家人有二嚴君一焉父母之謂也父は父たり子は子たり兄は兄たり弟は弟たり夫は夫たり婦は婦たり家道正々而天下定矣易の家人の卦の意も女は內に位を正し男は外に位を正くするが家の正しき道也家正しければ天下も定るといふなり注の意家人の義は內を以て本とす故に先女を說くと云り女の內に位を正しくするから起ると也此物語に男女の道を專いへるも此理なるべし風流好色計とみなすはあしきぞと也

一大學云古之欲明明德於天下者先治其國欲治其國者先齊其家欲齊其家者先修其身欲修其身者先正其心欲正其心者先誠其意欲誠其意者先致其知致知在格物

注云心者身之所主也意者心之所發也實其心之所發欲其一於善而無自欺致推極也知猶識欲其所知無不

盡也格至也物猶事也窮至事物之理欲其極處無不到也此八者大學條目也　物格而后知至知至而後意誠意誠而後心正心正而後身修身修而後家齊家齊而後國治國治而後天下平

注云物格者物理之極所無不到也知至者吾心之所知無不盡也知既盡則意可得而實矣意既實則心可得而正矣

自天子以至庶人壹是皆以修身爲本其本亂而末治者否矣　意を誠にして心を正し身を修家を齊國を治天下を平にする道事イを明す也此物語一部の大意も是を本とせり能此物語に心を付て道の正しき所を守るべしとぞ學者是を思へと也

一箋此物語の根本莊子言寓に比す寓言者以己言借他人之名謂之注云又根なし草と訓ずるぞまた內篇七外篇十五雜篇十一以上三十三篇あり內篇は理の根本をあかすぞ桐壺より匂宮までの二十七帖に比すべし外篇は物の事本ノ跡イを明す宇治十帖に比すべし雜篇は事理まじへ明す是前の十七帖に比すべし

文體等の事

箋卷の序幷文體文法依司馬遷史記　本紀十二卷自桐壺至匂宮世家卅卷以宇治十帖比之列傳七十卷以前擬㆑之此外於卷卷文文句句有司馬文法

一の字褒貶は春秋左氏傳の法也是則筆誅と同物云々たとへば一字にて人の行狀をほめそしりたる事也此物語にてもてにをはの一字にて如此の類あまたあり段々の褒貶は資治通鑑の文勢司馬遷が詞をまなぶと云にや

毛詩三百篇之中以關雎婦人之德爲始以思無邪爲一部也大意此物語亦如此

尙書十三卷　一部在謹之一字　此物語もかくのごとし

禮記　一部在毋不敬之三字此物語もかくの如し

周易　一部在時一字　此物語もかくのごとし

一於內典者　面依㆓天台之法門㆒故立卷及㆓六十卷㆒

一內證有密法　又專示㆓因果必然之理㆒

凡內典外典千萬軸にして難解難入也仍權化の方便を以て一代權實內外の書典の其意旨をひろひて此一部に決す然れども假名四十七字を出ずして世間出世の萬法載てあきらかなる事明鏡に向ふがごときの物といへり然ば則天地と始終あり況人間にお

いてをや是によつて盛者必衰會者定離生老病死有爲轉變の理を深く示す此うへに於て世間相常住懐空之法文をたて煩惱即菩提生死即涅槃之旨を明す煩惱即菩提の文此物語の大意也

一或抄云おほむね莊子の寓言をうつして作れる物語なりといへり一事として先蹤本說なき事を不載也一字の貶褒は春秋に同じ但莊子は寓言のみ左氏は皆事實を記して文詞も又其法ありといへり今此物語は假名のおろかなる言葉也といへども左氏莊子のかみにたゝん事もかたからずや　抑男女の道を本とせるは關雎螽斯の德王道治世の始たるにかたどりその中に好色婬風のよこしまなる事を記せるは隱たるよりあらはなるはなし君子の愼む所專こゝにあり後人をしてこらさしめむと也すべて仁義禮智の大綱より佛果菩提の本源に至る迄此物語をはなれて何の指南をかもとめん學者深切に眼をつくべし

物語時代准據

一桐壺の帝を延喜に比す三光　師說日本の國史は三代實錄貞觀年中に至て終る今此物語宇多の末より是を記す則國史をつぐの謂也　又通鑑は周の威烈王より是を記する春秋につぐの義也此文法を以てかくのごときか

箋曰赤染右衛門が榮花物語には宇多の末より是を記す是國史の闕を以て補の理分明也　案之班固が前漢書と史記と時代一同也然るを司馬遷部立を改めかへて更に格別の書となしたるぞいま此物語も世繼と同時なりといへども史記の部立によつて是をあみつらぬ此深意殊に味ひあるもの歟

一桐壺のみかどを延喜に准ずる事也醍醐は殊に聖主にてましませば是も聖代明時を摸する義也

一物語の時代は醍醐朱雀村上三代に准ずる歟桐壺の御門は延喜朱雀は天慶冷泉は天暦光源氏は西宮左大臣如此相當するなり　又桐壺の卷に最初に兩所まで取分て亭子院の御事をのせたりこの頃明くれ御覽ずるに長恨歌の御ゑ亭子院のかゝせ給へるをぞまくらごとにせさせ給ふと云々又高麗人を宮の內にめさん事は宇多の御門の御いましめあれはと云々是御遺誡也　又繪合卷に朱雀院の御事を延喜

御手づからことの心をかゝせ給へるに又我御世の事どもかゝせたまへると云り又昭宣公の母は寛平法皇の皇女延喜の帝の御妹也頭中將致仕大臣の母も桐壺の御門と一御腹とあり此外も其證據おほし難者云以前の證據誠に其よせ有といへども此物語は光源氏を旨とせりされば西宮左大臣に准ずる事一世の源氏左遷の跡は相似たれども彼公好色の先達とはさして聞えざるにや今の物語は殊に好色を本としたる歟(はイ)如何　答云凡(作イ)物語のならひ大綱には其人の面影あれども行跡におきてはあながちに事ごとに彼を摸する事なし漢朝の書籍春秋史記など云實錄にも少々の異同はある歟仍(こイ)桐壺帝冷泉院を延喜天暦になずらへ奉ながら或唐玄宗のふるきためしをひき或秦始皇のかくれたる例をうつせり又天慶御門は相續の後胤おはしまさねども此物語には朱雀院御子今上冷泉院の御後なし或說云此條有作者意趣歟光源氏をも安和の左(丁イ)相に比すといへども好色の方は道の先達なるが故に在中將の風を學びて五條二條の后を薄雲女院朧月夜尚侍によそへ或かたの丶少將のそしりをおもへり又太上天皇の尊號も漢家には太公の舊跡本朝には草壁皇子等の先蹤を摸する歟是作物語の習也始にいづれの御時にかと書て分明にはあらはさゞるも此故也さりながら下には延喜の御時と云心をふくめり此外或桓武又一條院を桐壺の御門に准據し又光大臣伊周公を光源氏に擬(准イ)すなどいふ一義もある歟皆以て謬說也若桓武といはゞ其以後の帝王陽成宇多延喜の御事物語にあり一條院ならば延喜より後五代の事みえず其上須磨の卷に此頃上手にすめる千枝つねのりとあり兩人朱雀村上の御代の畫工也既に此頃といへり一條院まで存生せず又繪合の卷に朱雀院を當代のよし載之無異論乎

一總じて此物語作りたる意は業平中將は阿保親王の子伊豆内親王の宮に生れて其品高くたぐひなく又かたちきよげにやまとことわざ(詞イ)にたへなりしを學びて光源氏の君と名付いたすその振舞の彼二條五條の后に參りしによそへて薄雲女院又朧月夜の尚侍にかよはせ伊勢の齋宮のためしによそへて六條御息所の娘齋宮にくして下る別ををしむ是のみならず情をかけ契を結ぶ事各みなよせあること也

一或説には光源氏は西宮左大臣高明公は醍醐の御門の御子一世の源氏にてみめかたち世にすぐれたまへるを光源氏にたとへ我心にしめ奉りて紫式部の名によせて紫の上をあらはし太宰の帥にうつされしをすまの浦にしづみ給ふ例にたとへ紫式部高明公の妾たること年紀相違也不用之然るに又異朝におきて周公旦東征し給ふ事本朝には菅家(大臣家イ)左遷の事在(沈イ)中將沈淪等の事ならびに比す一様を摸せず用捨してよろしきにしたがふべし　問云いづれの御時にかといへるおぼつかなし例に申引べき帝いづれぞや　答云醍醐の帝の御子にこそ朱雀院と申す御名はあれ又高明公も源氏におはしませば延喜の聖主をや引申へき　重て問云若醍醐の帝を例とせば朱雀院と申御名は似たれども皇子もおはしまさゞりき村上の帝の御末のみこそさかえ給へれば此物語には桐壺の帝御位を朱雀院にゆづり給ひ朱雀院冷泉院にゆづり給ひき然ども子孫おはしまさざりしによつて御位を朱雀院の御子今上にゆづり給ひつる事を思ふに全く延喜の聖主とは申べからず位次を勘へて准據するにいさゝか相似たる例あり

桓武天皇――嵯峨天皇――仁明天皇――文徳天皇
　　　　　淳和天皇　　源光右大臣正二位左大將號西三條大臣
桐壺天皇――朱雀院――今上――春宮
　　　　　冷泉院比淳和天皇

是や叶ふべからん源氏は嵯峨天皇の御子にもあまたおはします又仁明天皇の御子西三條右大臣源光公とておはしますうへは是こそ相叶てみゆれ　答云作物語の習ひ少し似たる事ひとつあれば例とする事是同じ桓武天皇を例とせば平城天皇をばいかがたとへ申べき西三條右大臣は桓武の御孫にておはしますゆへ左遷の事聞えず光源氏の右大將自嘆には文王の子武王の弟とこそ名のられしかたとふるには高明公こそ似たてまつれ(給へれイ)醍醐の帝には御子也朱雀院には御弟也大臣の位をやめられて太宰權帥にうつされて後もとの宮にいつかれ給ひしぞかし御門の御夢にすくはれ浮出て後太上天皇の尊號をえ給ふも少しく相似たる例也又桐壺の巻に源氏の君をこま人に見せ給ふ宮中にめさん事は宇多帝の御誡あればとて鴻臚舘につかはされき桓武より

宇多には十代の御門をへだてたるにいかでか行末の例をかねて注し侍るべきや又繪合の巻に朱雀院の帝より秋好中宮に御繪奉らるゝ所に延喜の御手づからことの心かゝせ給へるに又我御代の事どもかゝせ給へる巻に彼齋宮の下り給ひし日の大極殿の儀式御心にしみておぼしめしければかくべき様くはしく仰せられて公望がつかうまつれるかいといみじきを奉らせ給へりと侍るうへは時代に疑ひなきにや又明石の巻に入道あいなく打ゑみつゝ何がし延喜の御門の御手より引傳へ侍る事三代になんなり侍りぬると云によらば桓武の時代あへて證據に叶べからず只あふぎて延喜の聖代を時代にはあて申べきと云にかさねたる問答とゞまりにき

一作意紫日記に云左衛門督公任あなかしこ此わたりにわか紫や候とうかゞひ給ふ云々又云源氏に似るべき人も見え給はぬにかのうへいかゞ物し給ひけんと聞ゐたり左衛門内侍といふ人侍りあやしくすゞろによからず思ひけるもしらず侍るに心うきしりうごとのおほうきこえ侍りしうちのうへ源氏の物語人によませてきこしめしけるに此人は日本紀をこそよくみたるべけれ誠にざえ有べしとの給ひけるをふとおしはかりにいみじくなん侍るざえかなと殿上人などのいひちらして日本紀の御局とぞ付たりけるいとをかしう侍る物かまことに思ふ事なくていたづらにいひ出せるにあらず又さりげなくておほやけ私につけて人の心をつけ大和もろこしを兼て物語の情をしらしむ五十四帖の内に男女よきあしきふるまひをあらはし三四代の明君も臣も身をあはせぬる事を載たりおほよそ管絃の道詩歌の趣時につけてしらしめ物につけて教へずと云事なし

光源氏准據 並摸行迹事私勘

一凡作物語のならひ其行跡を摸する事一様ならず光といふ名は仁明天皇の御子西三條右大臣源光此人を摸する歟美男につけて光と稱する事は廣幡右大臣顯光公の子息重光の少將を天下第一の美男につきて光少將となづく是を稱する歟

一一世の源氏左遷の事は延喜の第一の皇子西宮左大臣高明公の例也此公歸洛有て二たびさかへ給ひ

し人也高明公元服以前に源の姓を給ひ源氏の君もかくのごとしまた高明公の母は更衣周子（右大辨源唱女也）更衣の腹も相似たり須磨の浦に謫居のことは行平中納言に思ひよそへたり謫居の時風雨の變有て召歸さるゝ事は周公旦東征の事に比する也（又菅丞相於宰府天に祈る事有源氏ゝ龍王又住吉立願の事相似たり）好色の事は在中將の風を學べり則二條の后に准じては薄雲女院二條尚侍（朧月夜也）に密通の事をかけり秦始皇のかくれたる例とは日本の皇統におきては源氏の御子冷泉院のごとく即位の事は例なしと也但陽成院は業平中將の子と云說ありされば唐には此秦始皇は莊襄王の子にはあらず臣下呂不韋が子と云說あり是を冷泉院の事にたとへたり帝位にのぼらざる人太上天皇の尊號をかうぶる事漢高祖の父太公是を漢の始とする例也そのち日本にては草壁皇子等也

諸藝通達の事諸藝諸道に達せらるゝ事は北邊左大臣信公の面影を摸す

高麗の相人に逢ふ事延喜の皇子文彥太子を相したる事あり文彥はおくり名御いみ名は保明也廿一にて早世延喜の御代の前坊也

故人此物語稱美事

一順德院御記（承久二年）一切の物語おほしといへども或はある事或託事也伊勢物語は詞さしたる事なけれども尤上手めき詞殊勝也大和は無下におとれり其外なしいづれの物語をつくしても見ず其詮なき故也源氏の物語不可說の物也更に俗人の所爲にあらず紫式部書之始一條院御覽有之式部は日本紀をこそよく見たりけれと仰らる時に左衛門內侍此綸言をねたんで日本紀の御局と名付と云々誠に諸藝諸道皆此一篇につゝまる不可說未曾有也或說に源氏の歌は劣也狹衣の歌こそよけれと云人有と云々此條心さしうくあさましき事也更に同日の論にあらず誠に狹衣の歌も少々あしからざるはあれども源氏の歌には及ぶべからざる事雲泥也凡歌道はしるとしらざると水火の如くなる物歟（也イ）源氏は第一には詞つゞき人間の所爲にあらず不可說の事也第二に歌秀逸是又何人か是に及ばん第三作ざま也虛言をもて優美を盡すは是に過たる事も有ぬべき歟但未見之歌も又不可說也但是は我朝の最上也詞は更に人

間の所爲にあらざる物也未仔細をしらざるともがらは是非を辨ふべからざる物也古今後撰を大意とする時は則一條院の比と思へり猶々普通の物に非ずと云々

一水鏡（中山内府忠親公作也）云紫式部が源氏物語作り出して侍るはさらに凡夫の所行とはおほえ侍らず日本紀を始として諸家の日記に至る迄あきらかにさとるよりて時の人日本紀の局と號し侍る事あり凡物語の中の人の振舞をみるに貴き賤きにしたがひ男女につけても人の心をさとらしめ事の趣を教へずといふ事なし

一俊成卿六百番歌合判詞云源氏物語を見ざらん歌よみは無下の事也云々

一定家卿云源氏物語は紫式部歌よみの程よりは物かく筆上手也此物語をみれば心に面白き歌も能よまるゝとぞ

一花鳥餘情の序にも我國の至寶は源氏物語に過たるはなかるべし

一鴨長明無名抄にさても此物語作り出したる事こそ思へば〳〵此世ひとつならずめづらかにおぼゆれ誠に佛に申こひたるしるしにやとこそ覺ゆれそれより後の物語は思へどもいと〇（たイ）やすかりぬべき物也これを才覺にて作らんに源氏にまさりたらん事を作り出す人あらんやわづかにうつぼ竹取住よしなどを物語がたりとて見けん心ちにさばかり作り出しけん凡夫のしわざとは覺えぬ事也と云々

一俊成卿正治奏聞狀にも教長も清輔も源氏を見侯はずば共にうたてき事にとなりとのせられたり尤和語の奥樞なるものなり

諸本不同

一草書　中書　淸書あり仍各有差異

一石山にて須磨明石の巻より書始次第に書くはへて五十四帖になして奉りしを權大納言行成に淸書せさせられて大齋院へ參らせられけるに法成寺入道關白（御堂殿也）奥書を加へられていはく此物語世みな式部が作とのみおもへり老比丘筆を加る所也云々

一抑物語の證本一樣ならざる歟行成卿自筆の本も悉く今の世に傳はらず大監物光行は八本を以つて校合取捨して家の本とせり所謂二條師本　伊房本

冷泉中納言朝隆本　堀河左大臣俊房本（號黄表紙左大臣自銘）從一位麗子本（七御門右大臣女號京極北政所）法性寺關白本（唐紙小草紙號倚侍殿本）五條三位俊成本　京極中納言定家本（號青表紙）各證本たりといへども皆異同あり猶古本に勘合て且了簡を加ふべし其よき物をえらんで是にしたかふは古人の美言也

一河内本　河内守源親行が本也是は心得にくき所は詞をそへ或は詞をけづり義理を付たる程に色々の惑說が出きて作者の本意とはちがひたるぞ當流は定家卿の青表紙を用ひ來るぞ紫明水原より河海などゝ迄も皆河内本の注と見えたりされども其よき所をば當流にも用るぞ定家卿は此物語に系圖などをして紫上はたが子雲井の雁は誰といとこなどゝ云て有職を立るとてさへきらはれたるぞ其心は只詞の幽玄述作の妙處に心を付よと云敎也當流の心は萬事如此なるべしされぱくはしくしたる抄物などはなき也伊行がしたる奧入にこらごと書加へて青表紙の奧に書入られたるを奧入と名付たるぞ此青表紙は定家卿より爲氏まで傳りたるを或時爲氏見くたびれて此本を枕にしてそとまどろまれたるを爲氏　繼母阿佛の見付て家の本を聊爾にすると爲家卿に訴へて取かへされたると也其後又爲氏へ返し遣されけるが阿佛和讒にて奧入をばきり出して物語の本計爲氏へ返されたりといひ傳へたるぞと此事三光院内府の物語にて侍りき

一青表紙　河内本當流にかぎらず悉く相違の事は有也俊成卿定家卿父子の本猶異同ありと云々

諸抄

水原抄　大監物光行作

紫明抄　素寂作

源中最秘抄　同上

弘安源氏論議　左右方八人出ニ問題二ケ條ニ決ニ勝負ニ

河海抄　四辻左大臣善成公作

花鳥餘情　後成恩寺關白作（大内左京亮并美濃國持是院被遣之兩本少々異有）

仙源抄　畊雲作イロハニ分（於南朝昇進大納言右大將藤原長親花山院庶流）

奧入　伊行作（定家卿追ニ加物語本奧ニ書入仍號之）

弄花　肖柏老人聞書逍遙院潤色歟（七冊號牡丹花十輪院入道内府弟也）

雨夜談抄　宗祇作（帚木卷品定所之注）

和漢字抄
源通釋抄
善成公系圖
順德院—善統親王—尊雅王左大臣賜源姓—善成號四辻又清閑寺河海抄作者也物語博士惟良とは作者也惟光良清をとる義也

光源氏物語題號

一光少將本朝第一美男也
師輔九條右丞相—兼道忠義公—顯光廣幡左大臣號惡靈大臣—重光シゲミツ　光少將と此人を云たる也本朝第一美男
仁明天皇—源光右大臣正二位大將　是はいみなをひかると云たるぞ西三條の右大臣といふぞ
光の字　韵會に明の意也と注したるぞ　又論法に能前業を繼を光といふなるぞ　易の坤卦に地道は光也象曰光は大なる也　論法とは人におくり名する法也其人々の德を表して付る物也されば其法に光と云字は前の人のしおきたる事を繼ていよ〳〵よくしそへたる樣なる德ある人に謚を付る字と云也たとへば玉などのみがきさしたるを又跡にてみがきそへて光をあらはせるやうの心歟又はおほいなりと云心又あきらかなる心などいふぞ　源　荀子宗源應變注宗源根本也
一源の字は濫觴小水爲九河之源の義の説用之此物語も如此と也
一山谷第四に岷江初濫觴入楚乃無底岷江にて始は濫觴とてさかつきをたゞよはす也盃一つを浮ぶるほどの水が流あつまりて楚國にては底もなき程深きと云義也此物語もわづかに假名の四十七字を出ずして書あらはしたる物ぞ是は岷江に濫觴と云たる程の水ぞされども漢家の史記本朝の傳記詩歌管絃の道有職の事迄も殘さず書載たれば是を學する家々の注釋是を習ふ人々の聞書誠に筆紙を費す事其ばかりもなかるべし是則楚に入て底なしと云たると同じ事ぞ
一又古今の序に山下水のたえずと云々
一源氏の姓　是は嵯峨天皇弘仁五年に男女の皇子三十餘人に始て源氏の姓を下されてより始まる其の前は源氏の姓はなきぞ其前は皇子も凡人に下るとては色々の姓があつたぞ源の姓が出來てからは皇子を別の姓になすことは又ないぞ其例によつて帝

王の御子の臣下にくだるをば一世の源氏と云親王宣下あれば親王也臣下になる時の事也又親王の子の臣下になるを二世の源氏といふ天子の御孫也嵯峨天皇より後は別の姓になり給ぬ故に天子の子又孫をば皆源氏と云そ但近代は天子の孫ひこも御猶子にて親王に成給ふ事あり天子の彦其子までも三世の源氏四世の源氏とも云べきぞ嵯峨の御時は先北邊左大臣信公以下賜二源姓一也此外東三條左大臣常河原左大臣融等も同時に源姓を給ふ

一氏正義に曰氏は猶系也釋例に曰別而稱レ之曰レ氏合而稱レ之曰レ族

或抄云此物語光源氏の事をしるすによつて源氏物語と云されとも内證をいはゞ水の源と云意な　べ古今の序に山下水のたえずといへるごとく此物語わづかなる假名に狂言綺語なりといへども世間出世の本懐をあらはせるは誠に濫觴を浮ぶばかりの小水も九河巨海の深きをいたせるに同じ凡しるせる所の帝王四代年紀七十餘回其間の盛衰興廢史記通鑑に向へるに異ならす

物語之心詞用和歌作例

一中古の先達の中に此物語の心をば歌には詠ずべからず詞をとるはくるしからずと云一義あれども心をとりたる歌撰集にあまたみゆ

續拾遺集　　權中納言俊忠

ながめする心のやみもはるばかりかつらの里にすめる月かげとよめるは彼松風の卷におもひむすびつる心の闇もはるゝやうなりといへる心ときこえたり

同集　　典侍親子朝臣

あかざりし袖かとまがふ梅がゝにおもひなぐさむあかつきの空　浮舟の卷にこと花よりも是に心よせ有はあかざりし匂ひのしみけるにやといへる心なり

新古今集　　前太政大臣

しら露の情おきけることの葉のほのぐ〜見えし夕がほの花

續古今集　　太上天皇後嵯峨院

袖のかや猶がほるらんたちばなのこじまによせし

夜半の浮舟
同　小侍従
うちわたす遠方人にこととひて名をしりそめし夕かほの花
同　藤原光俊朝臣
此頃はゆくせ（ながろヽイ）の水をせき入て木陰涼しき中川の宿
同　鷹司院帥
明石潟波の音にや通ふらんうらより遠の岡の松風
新拾遺集　鷹司院帥
山風に瀧のよとみも音たてヽむらさめそヽぐ夜はの涼しさ　これらみな心をとれる歌也詞とる歌
新古今集　藤原家隆朝臣
虫のねも長き夜あかぬ古郷に猶思ひ添松風そ吹く
新古今集　攝政太政大臣
みし夢にやがてまぎれぬ我身こそとはるヽけふも先かなしけれ
新古今集　慈圓
在明の月の行へを眺てぞ野寺の鐘は聞べかりける
此外續古今になれよなにとてなく聲のなどいへるたぐひはあげてかぞふべからず大かた狭衣の物語の尋ぬべき草の原の歌をも猶本歌に用たる歌を近代集にあまた入たるにやひとへに心を取べからずとも定がたし且は俊成卿の六百番歌合の判の詞にも源氏みざらん歌よみは遺恨の事也云々
私云近代源氏物語の心詞連綿和歌に取用るの旨不及沙汰事也

河海抄序

光源氏物語は寛弘の始にいできて康和の末にひろまりにけるより代々のもてあそび物として所々の枕ごとヽなれり其中に中納言定家は巻々に難義を注して奥入と號し大監物光行は家々の口傳を抄して水源と名づけりしかのみにあらず伏見仙院坊におはしましヽ時問題を左右に奉らしめて論談の勝負をあらそはせられ後醍醐の院御位のはじめ彼梨壺の歌仙に仰て萬葉集を讀とかしめし例をうつされけるにや黒戸の人數を定て五十四帖を講釋せらるヽ義ありしに先師忠守朝臣七のながれの底の心をきよめて九かさねの中の撰に應せしかばしきりに顧問にあづかりてしば〳〵祕説を奏しき爰にな

まじゐにわかんとほりの末をうけてはるかに惟光良清が風をしたふいやしき翁あり柱をゐる道を學びし昔より椎が本のやどりをたづぬる今に至るまでみどりの袖の色のかはらぬなげきを忘れて紫の筆の跡にそむる心ざしをあらはさんとす此故に中葉の林に遊びてなほくゆがめるをわかち前修の海をくみて深きあさきをさだむおのづから岩根の松の人しれぬこと葉をひろひてわづかに軒ばの荻のほにいたすべきがごとくせり集めて廿卷とす名付て河海抄といふもとより窓の螢をむつびこずゑの雪をならさゞれば淺く見寡くきけるあざけりをはづといへども故を温て新をしるなかだちとせんが爲にいさゝか是をしるすといふことしかり

花鳥餘情序

あつまをもろ〳〵のうつは物のうへにおき紫をよろづの色の中にたとふるがごとく源ふかき水はくめども更に盡ることなくくもりなき玉はみがけばいよ〳〵光をます我國の至寶は源氏物語に過たるはなかるべし是によりて代々のもて遊びものとなりて花鳥の情をあらはし家々の注釋まち〳〵にして雪螢の功をつむといへどもなにがしのおとゞの河海抄いにしへ今を勘へて深き淺きを分てり尤抄中のむねに叶ひて指南の道をえたり然はあれども筆の海にすなどりて網をもれたる魚あり詞の林にまうでゝくひぜを守る兎にあへりのこれるをひろひあやまりを改るは先達のしわざにそむかざれば後生のともがら何ぞしたがはざらんやつゐに愚眼の及ぶ所を筆舌にのべて花鳥餘情と名づくる事しかなり

卷々の名の事

凡五十四帖の卷の名に四の意あり一には詞をとり二には歌をとり三には詞と歌との二をとり四には歌にも詞にも無事を名とせり云々　天台の教に四諦の法門有一には有門二には空門三には亦有亦空門四には非有非空門也一切の言教は此四諦を出ず是に依ての故に四諦の外別立一法性とも釋せり眞實の道理は言教の外に有べき者也右至㆓近年㆒此義を用ふ然は毛詩篇名の例あり此義よく相當せるに

や是師說なり　毛詩正義云名篇之例不レ過レ五纔取レ一或偏擧ニ兩字一或全取ニ一句一偏擧則或上或下全取則或盡或餘

桐壺年立

六條院誕生之年

六條院は桐壺の御門の御子母は更衣大納言の女也更衣は御門の御おほえならひなく時めき給へれば楊貴妃のためしも引出べきことになん有けるさきの世にも御契や深かりけん世になくきよらなる玉のをのこ御子さへ生れ給へり則六條の御事をいへり

二歲　三歲

若宮御袴着の事　源氏君是也

夏母御息所病惱の事　桐壺更衣是也

同人聽ニ輦車宣旨一退ニ出內裏一則卒去の事

若宮依ニ母服一退ニ出內裏一給事

御息所葬ニ送愛宕一同贈ニ三位一事

秋遣ニ靱負命婦一訪ニ更衣母一事

故更衣遺物御裝束一領御髮上調度等奉ニ御門一事

私送ニ命婦一事

御門御ニ覽長恨歌繪一の事

同愛ニ慕故御息所一給事

日數以後若宮參內事

四歲

春一宮立坊の事　朱雀院也母弘徽殿女御二條右大臣之女

五歲　六歲

若宮御書初の事

七歲　八歲　九歲　十歲　十一歲

若宮於ニ鴻臚館一謁ニ高麗人一事

若宮賜ニ源氏姓一事

先帝女四宮入內事　藤壺女御是也後に號ニ薄雲女院一

源氏君常祗ニ候藤壺御方一事　以上の事此卷に見え侍れど何れの年の事と慥に難レ定但四ケ年の間を出ざるべし

十二歲

源氏君御元服事　於ニ御殿東廂一有ニ此事一加冠左大臣理髮大藏卿藏人引●(入カ)大臣祿賜ニ馬鷹一事

其夜左大臣女爲ニ源氏君副臥ニ事　葵上是也女君は少し過し給へるといへるは其時葵上十六歳に成給へることをいへり紅葉賀の卷に四とせばかりのこのかみにおはすればと云々

藏人少將嫁ニ右大臣四君ニ事　藏人少將後に號致仕大臣是也

造ニ作二條院ニ事　内御曹司は猶淑景舍也

十三歳　十四歳　十五歳

已上三ヶ年事物語無所見

十六歳

源氏爲ニ中將ニ

藏人少將爲ニ頭中將ニ

桐壺

此卷の名一名つぼせんざい或は奥端有此名謬說也一卷二名也云々此卷の名詞をとれり桐壺の更衣の事をもとゝする故に此名あり卷の名の事はしめにくはし桐壺は大内五舍の内の淑景舍也源氏の母更衣此所に住す依て此名あり

此卷源氏誕生より十二歳の事まで見えたり但末の詞におとなになりてと云々此内に年を送る心あり十五六歳迄の心こもるべし仍帚木の卷には十六歳の事をしるせり

いづれの御時にか　此發端の詞甚深にしてあまたの理をふくめり先作意をあらはさずして聞傳へたる事を書おきたるやうにみせたり其始末なほ末々の卷に見えたり作意あらはれざれば傍人の難をもおはすことに其頃女房にもむらさき式部にあらそふほどの才ある人おほしとぞいふものは罪なくきくものはいましむるにたれりと云々　伊勢が集の發端に云いづれの御ときにかありけん大（御イ）みやす所と聞えける御局に大和國に親ある人さふらひけり云

云箋伊勢が集は其みのいやしき事をかゝず紫式部は時代をかゝず詞は同じくて其心各別也是作者の粉骨也たとへば風の詩に漢王の事を以て唐をそしるがごとし　河延喜の御時といはんとておぼめきたる也河原の院を何がしの院といひくらまを北山のなにがし寺など云に同じと云々　又著述の道を云に物をさしつめていひたるは優艶なる方なしいづれの御時にかと書出たる所一部を見ずして既に餘情限りなき事をあらはせるにあらずや　御桐壺の帝を延喜に准じ奉るに依りて今案凡日本の國史は三代實錄光孝天皇仁和三年八月迄記して其後國史に見えざる歟　今此物語は延喜より記す彼國史に繼んとの心にや彼孔子春秋も哀公まで記せり哀公は周の敬王の時代にあたれりさて孝王夷烈王以下の事を記さず司馬温公が通鑑に夷烈王廿三年より記せり是も左傳につぐべきとの心ある也此物語も宇多の御代記さゞると事能相叶へるにや御の字はおほんとよむべし所によりておともみともよむ也河海におほんと有は日本紀以下のよみやうと云云　現とも夢ともえこそわきはてねいづれの時を

いづれとかせん花山院　弄此詞一の深意あり秘説也云々　或箋云莊子逍遙遊篇の發端北溟有レ魚其名爲レ鯤云々　北溟といへるもたしかに其所をさゝざる所彼筆法の妙處也今此物語の旨すべて心をつけて見侍べき也

女御更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに　河從一位麗子本に女御御息所と有云々　女御　樂周禮云三夫人九嬪廿七世婦八十一女御比二三公九卿廿七大夫八十一元士一　河又女御叙二於之燕寢一以二歲時一獻レ功又云王者妃百廿人后一人夫人三人嬪九人世婦廿七人女御八十一人三夫人坐論二婦禮一鄭玄注曰夫人知二三台一從容論レ禮九嬪掌レ敎二四德一九嬪比二九卿一的會曰嬪有二婦之法度一也四德謂二婦德婦容婦言婦功一也　廿七世婦主レ知二喪祭與賓客婦服一也明二其能一服二事於人一也　九嬪的會昭容昭義昭媛修容修儀修媛充容充儀充媛云々　漢書註御謂レ進二御於王一也修一　尚書第三五子之歌御其母以從注云御ハ侍也　後漢書曰備二內職一爲二后正位一宮闈同二體天皇一八十一女御序二御于王之燕寢一云々女御比二八十一元士一　后は位を禁中の內に正くして身を天子とおなじくするぞ內に位を正しくするとは前に家人の卦に云たる心也さてその次に三夫人あり是

は三公に准じて居ながら女の事を行ふなりゐながらと云は女の法度也其次に嬪と云ものは九人也九人のつかさどる所皆格別也昭容とは人のかたちのつくろひはかやうの時は何たる衣裝をきるなど云事を明かにしる人也昭儀とはいかやうに宮仕をばする物ぢや其時は作法は如此あるなど丶云事をしる人なり昭儀とは援と同じ心ぞ引と云心也計會に邦人の依倚する所以援助にすと云たとへば物とりあつかひ取次などする心也此道に明かなる心也修容とはかたちつくろふ其時々々の出立様などする（也イ）を手にかけてする心歟修儀とは是も同じく物の取次などする事を教る心歟充容とは充は行也修也とあり是はかたちつくろふ容儀よしなど役々をあてがふ心歟充儀是も進退作法それがよきなど役あてをする心歟充媛これも取次などをする樣なる人は誰になど丶いひあてがふ心歟いづれも女中の官也嬪と云は九人の總名也其役々は如此也さて九つに分つといへども總じて云時は婦德婦容婦言婦功とて四色を司どる也婦德とは女の正しき道は如此などゝ云所をしる也婦容とは時節の出立衣裝以下の法度也婦言とは天子以下に對して如此の詞つき有など丶物云事の法也婦功とは何にても役々の有事をよくしるにや　其次廿七人世婦あり廿七大夫に比す喪とは父母兄弟の死する時又は祭などの時或は行幸などの其時后は何色嬪は何天子は何など丶其時々の衣服の事を司どると見えたり　其次に八十一の女御あり燕寢に序すとは酒もり又は天子の御寢なる時まで御そばをさらずたちならびて居て物を取次宮つかへする心也術書に御は侍也と侍ればおもと人とよむ不斷天子のあたりに侍りて宮つかふ心ぞ然れば大唐にて后は天子夫人は三公嬪は九卿世婦は廿七大夫女御は八十一元士の位にて殊の外さがりたる事也されども日本に用る所は后の次に女御をする歟　三夫人九嬪廿七世婦八十一女御合て百廿人也又歳時を以て功を献ずと云は其時節々々の役をすると云也日本の女御は殊の外賞翫ぞ后の次にする也いかなる親王攝家の女も直に后に成給ふ事はなし先女御入内とて參給ふ也さて可然人はやがて后に立給也是を中宮といふ又其外女御にてあるべき品の人も第一の皇子など生れ給て

若春宮などに立給へばいかやうの人の女も后に立也漢朝とは聊心ちがふぞ　弄女御は無位以上二位三位に至るまで有よし也　日本には雄略天皇七年に求稚媛吉備上道女也為女御是始也日本紀十四女御入内有勅別當如當代親王上卿奉勅給辨々仰史令事宣旨天慶九年以左少辨在躬爲女御藤子別當如此日本には其所を知おこなふ別當などをなされてことの外賞翫也さて女御の數日本に多くなるは文德天皇よりと云々稱名說也

更衣の事　更衣は女官の名なり一禪御說　是も漢朝よりあり漢武帝始て是を置也漢書列傳廿五　史記等に載せたり漢武帝狩獵などを遠くしありき給ふとて休息所を立られて其所々に宮女をすゑおく也陵上に寢所を立とて御寢所を立られ又其かたはらに別家を立て衣を更るよしあり是則更衣也此外史記漢書の義委しく河海に見えたり　日本には仁明天皇承和三年正五位上紀朝臣乙魚授二從四位下一爲二更衣一是始也（頭注云一注女官の名也御息所は女房名也同事な書替かへたる也但在官の女御なも御息所といふ也とあり　清凉殿記曰更衣其員十二人以下不レ滿二其數一尙侍宣下諸司聽レ着二禁色一　此心は其數十二人とあれども必其數ほとなくともくるしからぬと也女官も其役のさだまりたるは數がたらでは不レ叶更衣はさやうの官にてはなきと也　內侍のかみは諸司に宣下して更衣に禁色をゆるさるゝ也是を內侍宣と云也　さて更衣御息所同事歟各別歟と云に色々の義ありされども同事とみえたり水源には始には更衣と書後に御息所とあり凡昇進の義歟云々不用之又皇子誕生の後御息所と云々稱說又或抄說イ　河只何れも同事也何れの御時にか女御御息所とかける本も有と云々又弘安の源氏論義に御息所は御やすみ所也更衣と云も天子の衣をぬきかふる所なれば同じく御息所也同事を二つにいひたる也云々とイ假名にもみやすん所など書りよむ時もみやすん所と云心あるべし　榮花物語卅七みやす所更衣などに中將少將の娘受領のも皆參りけるを此近き世にはおぼろけ人は參り給はぬものにならひたるぞいとあさましき也云々

延喜御代后宮　女御五人　更衣十九人　中宮以下都合廿七人也河海に委私此內爲子親王光孝皇女也薄雲女院相似歟

桐壺帝之后實名露顯之分　女御三人　承香殿四宮母

麗景殿花散里姉 一人八宮母 更衣二人 桐壺 後凉殿 后二人 太后弘徽殿 女院藤壺 此物語に書載る所七人也如此后以下あまたの宮女也是は前にいふ如く后は天子と位を同くし三夫人以下三公九卿以下に比しておくは天地の間の事は陰陽相對して和合せざればならぬ也是女は位を內に正し男は位を外に正しくするなり是を婬亂の方に用るから天下國家もおさまらぬ也是をよく用る時は天下を治る道の政をたすくる道となる也

いとやむごとなききはにはあらぬが　無二止事一也位高くすぐれたる人の事はさしおかれぬ物なれはやんごとなしと云ほめたる詞也やんと讀べし　私此詞は桐壺の更衣をさして云也やんごとなききはにはあらぬがとは最上の位にはあらぬと也

すぐれて時めき　絶妙スグレ日本紀　時トキメク同上　めくはよみつくる也　日本紀には生の字をなまめくなどいへり時めくは時にあひたる也春めく人めくなど云類なるべし

はじめより我はと思ひあがり　花此段は女御更衣の中に三品の種姓をわかてり我はと思ひあがりは大臣などの女の女御成べしおなじ程とは桐壺の更衣と同じほどなる大納言などの種姓也下﨟の更衣とは非參議三四位など也是儒釋道の三教何れも中道をたふとぶ也其心なほも箒木に記すべし此桐壺の更衣は中品也　又上中下の姓を褒貶したる心也上﨟は物えじなども大やう成べし殊勝の詞也ましてやすからずといふにて下﨟の姓見えたり　河めざましき物とは詩に冷眼とかけりめもすさまじく見る也云々世俗に目にあまるやうなる事をいふ歟也イ

おとしめそねみ　劣猜猶陷の心歟云々おとしいれみおとさむとする心歟

うらみをおふつもりにや　「あしかれと思はぬ山の峰にだにおふなる物を人のなげきはなどいへるもかかる心にや

あつしく　あつしくは病がちに成ぬるよしなりつ文字淸なり　河伊弉諾尊神功既畢靈運當遷日本紀第一又靈運當遷と先代舊事本紀點せり又劣尫或曰支離弱故曰尫順和名　定家卿說　日本紀の如く病の事也意イ大都は同事歟又違例がちなり云々後漢書列傳七十四曹世叔妻傳生男如狼猶恐其尫生女如鼠猶恐其

武又令軍坊令即雖未滿六十若有尫弱長病不堪宿衛放出云いづれも病がちによわき事をいへりとみゆ後漢書にいへるは男をうみては狼のごとくすくやかなれども猶よわくやと思ひ女をうみては鼠のごとくなるをも猶たけくやと親のおもふ心歟

物心ぼそげに里がちなるを　花桐壺の更衣いつも違例がちなれば御いとまを申て母君の里亭へ出給ふ也

いよ／＼あかずあはれなる物におぼゝして　おもほしとよむべし人のそねみ深きに付て物よわき人の心は違例がちなる故に里へさい／＼出給ふをいよいよ哀に思召すさまなるべき事にこそ

人のそしりをも　如此いよ／＼あやにくに思召すより世ノ政もみだるゝ御心あるべし人のそねみ深くなどあるから御寵愛の御心も何のとおしたち給ふ御心のそふべき也

かんたちめうへ人なども　上達部は公卿也殿上人は四位五位六位までなり

あいなうめをそばめつゝ　無愛也　弄あぢきなき心也心は通ずる歟　河京師長吏爲レ是側レ目長恨歌傳　桀紂何得下守二斯位一而放二其毒一使二天下一側上目哉莊子　未レ容君王得レ見レ面已被二楊妃一遙側レ目妬令三潜配二上陽宮一一生遂向二空床一樂府上陽人

いとまばゆき人の　更衣は此人々に面をむくる事をもしにくき也　弄正體にむかはれぬ心也善惡に通ずる也　或抄御寵愛の甚しきをそねみたるさま人のかたぶけそむきたるうちもむかはれぬをいへる歟

もろこしにもかゝることのおこりにこそ　起驕兩義の内起を用欲起楊貴妃之故事而先發此說歟　殷紂愛妲己周幽王寵褒姒夏桀溺朱喜呉王夫差醉西施之類也　史記に妲己言從是とかけり是殷の紂が妲己のいふまゝに事をおこなへると也是史記の、おもむき筆誅の詞也　書にのせたる筆法にて紂が事をあしく云所を筆誅と云ぞ筆にて其人を罪したる也此桐壺の更衣はあしき事を申おこなはるゝ事はなけれども御寵愛の甚しきから萬機の政もたゆみ自然にあしき事もあればもろこしにもかゝるためしあればさやうにやあらんと天下にもてなやむ成べし天下宇内などもかけり猶河海にあり

あぢきなう　無爲史記高紀又古語拾遺　是はせんかたなき心也
無道日本紀　此外猶河に載之此段無道の心歟云々　此巻の末の詞に此人故にあまたさるまじき人の恨をおひしはて〳〵はとあり思ひあはすべし但是は女御更衣など計の事歟世間の政事とも見るにとが侍るまじ
もてなやみぐさ　世間の人の色々にとりあつかひもてわづらふ事の種と云也ことぐさなどの類也
楊貴妃のためし　是よりは叉楊貴妃の事をひきて云也此巻長恨歌の心を取てかけり其發端尤奇特也前の唐にもかゝることのといへるとは別段とみるべし花鳥には一つの心に注せらるゝ歟唐玄宗も始は明皇也後に貴妃故政みだれし也此帝も如此但延喜の御門には如此事なし是作物語也
いとはしたなきことのみ　此更衣の身にとりて人のそねみて穩便ならぬ事の忍びがたき心也其心末にみえたりはしたなきとはよわきものにつよくあたるをかなしむ心也
かたじけなき御心ばへ　桐壺の帝御懇切なる也叉などもなき人なれば是ばかりを頼むと也黍辱同無レ

比交猶河に載之
ちゝの大納言　更衣の父按察大納言也是より更衣の俗姓をいふ也天武天皇元年改御史大夫始爲大納言
猶河委
はゝ北の方　河𥫱々とあり河後漢書曰以博施爲德陰以不專爲德　男は南女は北に住べき謂也陰陽につかさどる故也仍貴賤ともに妻室を北方と號する也后妃を椒房と號するも北向河イに住給ふ故也云々
いにしへ人　或本にいにしへの人三本如此
おやうちぐし　花二親ある更衣女御達也秘よしあるにてと何をきりておやうちぐしさしあたりてとよの人の事をいふにてやすらかにきこゆるにや
さしあたりて世のおぼえはなやかなる　是は親などのいきほひを云也さしあたりは當事の事也帝の御寵愛の事にはあらざるべし　聲華白氏文集
おとらず　桐壺の更衣は孤獨の身なれども母君故ある人にておとらぬなり
とりたてゝはか〴〵しき御うしろみ　此詞あはれに誠に世の有様さる事成べしはか〴〵しきは物の實實敷などゝ云やうに心得べき歟はかなきとは實々

しからぬ事にいへば是に准じて心得べき也
ことあるときは猶より所なし　三本ことゝある時如此只ことある可然也云々　或説に何事も不慮の事ある時は也平生はたよりにもなる人あれども事ある時は後見になるものなき也云々　但面むきの事などのある時女のうしろみなとは用にたゝぬ事のある也此更衣はまして人のそねみおほければより所なかるべき事尤理かなへりより所は　據　又無レ賴（ヨリトコロナシ）　依所トモ

さきの世にも　前世よりの機緣純熟したるかと也きよらなるは淸也伊勢物語にいときよらかなるろうさうのうへのきぬと云々

玉のをのこみこさへ　さへの字妙也彌更衣寵愛あるべき也　玉は褒美の詞也　河毛詩に生芻一束其人如玉又曰有女如玉德如玉　箋曰如玉者取其堅而決（スイ）白也　又金子玉鋋などいへり　玉のをのこと命の方へもとりなす歟云々　是源氏の君の誕生をいへり後に源氏とこま人のつけ奉りける名も尤よせあり如此事妙所と也　河日本紀豐玉姬　あか玉の光はありと人はいへど君がよそひしたふとく有ける

あか玉は子也子を玉にたとへたる也日本紀云豐玉姬うの羽ふきあはせずのみこときら〳〵しと聞てあはれとて又かへりてやしなはんと思へどもよからじとおぼして御いもうと玉依姬をやりてやしなはせ給ふ時に豐玉ひめの玉依姬によせてよみ給へるなり

いつしかと心もとながらせ　いつか也　（頭注云）いつしかといつかとは少心違たり是は常に云いつしか也はや心もとながらせ給ては幾歟先皇誕生ありても御らんぜられず事也　弄閙云源氏君生れ給ひて日數いか程へて禁中へ參り給ふべきや

答云日數は定れる事なし皇子など御產ありて其まま御めのとの所におはします事のみあり源氏の君は別殿の故也

めづらかなるちごの御かたち　ちごとはをさなき子を云小兒也　老子經曰法物（德イ）滋彰々注曰法（德イ）好也　河に委
珍敷愛奇物（日本紀）　珍奇（メヅラカミアヤシ）（遊仙窟）　非常（メヅラシ）（同）　驚（イヤメヅラシ）　新（漢語抄）
梅豆邏（メヅラ）（日本紀）　神功皇后二韓（新羅高麗百濟）をうちたひらげ給はんとせし時に心見に御裳をはつりて釣ばりをおろして魚をつらせ給ふに鮎釣にかゝりけるを御覽じてめづらしと仰られけるより始まる詞也松浦と

は梅豆羅をあて字に書付たる也是松浦川にての事也古歌にめづらしき人をみんとやしりもせぬわが下ひものとけわたるらん伊勢物語に此みかどかほかたちよくおはしまして貌像（眞名本） 世にまれなるすがたといふ也

一のみことは　後に朱雀院と申せし也

右大臣の女御　後には二條の相國といふ弘徽殿の后の父なり

父の名を付けてよぶ事　法印などにも內大臣の法印殿（關白の事也）の法印左大臣の僧都などいふ也　懿德天皇二年申食國政大夫出雲色命爲二大臣一（舊事本紀）是大臣の始歟猶河に委

よせおもく　緣（ヨセ）（日本紀）　寄重　外戚方のおもおもしき人ある也

まうけの君　儲君　儲皇などかけり春宮に立ち給を云此一宮いまだ春宮には立ち給はねども是ぞうたがひなき春宮と世の人云也

この御にほひ　源氏の君也　花梅櫻はにほひある故に人にもてなさるゝ也さる程に賞翫せらるゝ事をにほひといふ也　黍稷（シヨシヨク）非レ（キヒヒエ）香明德惟馨といへる如く人の威德を匂ひといふ也

大かたのやんごとなき　一宮はおもてむきばかり執せらるゝ也

此君をば　源氏をばとりわきたる御寵愛なり

はじめよりおしなべて　桐壺更衣の事也　おしなべての宮づかへとは典侍掌侍などいふものは朝夕の奉公も定りて宮づかへのあるなり更衣は別殿に伺候して御とのゐなどばかりに參り給ふべき事と也（顧注云后より更衣まては天子の婦人なり）

おぼえいとやんごとなく上ずめかしけれど　おほえは帝の御寵愛也上ずめかしきは上らうしき也されどもあまり御前さらずさぶらひ給ふ故にうへ宮づかへなどする人のやうに見ゆる也

わりなくまつはせ給ふ　無別（日本紀）　無破　纒（文選）

まうのぼらせ給ふ　參進　參昇（已上日本紀に見）此外猶河にあり　承レ樂（歡イ）侍レ宴無二閑暇一（長恨歌詩）

なほどのごもり過して　晝同輦夜專夜（長恨歌）　春宵苦短日高起（同上）　わりなくまつはせ給ふ樣體を爰にいひのふる也楊貴妃の事を摸してかけり

おのづからかろきかたにも　前にもいへる如く餘り

御前さらずさぶらひ給ふ故更衣の位よりかろ〴〵しきやうに見えたる也　或說聖主なれどもかやうの事には天性輕きやうに見え給ふと也云々猶はじめの說可レ然や

心ごとにおぼしおきて（置 掟）　源氏生れ給てからさやうの所まで別して御心を付らるゝ也

坊にもようせずは　春宮坊也源氏を春宮にすゑ給はんと一宮かたにおもひうたがふ也ようせずは不用不善不能などかけりあしくしたらば也此一念より源氏を弘徽殿のにくみそめ給し也

人よりさきに參り給ひて　弘徽殿の事を云也漢高祖の后呂后に比して書り史記第九呂后本紀云呂太后者高祖之后高祖微時妃也生孝惠帝女魯元公主呂公之父臨泗侯謚呂宣王　呂后は高祖の若き時よりの妃也此弘徽殿も人よりさきに參り給ふ也　高祖戚夫人を寵して其の腹の趙王如意を位につけたく思ひ給ひしを呂后の張良などに云合て四皓をよび出して終に惠帝を位に付給ひし事も相似たる歟

弘徽殿太后腹　朱雀院　女一宮（一品宮と申す）　女三宮（葵の卷前齋院）

　箋曰弘徽殿は女宮二所也呂后は魯元公主一人也此物語のならひ其面かげありて其實なし後是にならへ

この御かたの御いさめ（此后の仰らるゝ事はいなみかたく御門もおほしめす也）　箋呂后爲人剛毅佐高祖定天下所誅大臣多呂后兄二人皆爲將　抄云呂后性强して女の樣にもなき也毒々敷人と也然どもさりとてはは高祖の若かりし時よりつき參りていさゝかもはなれぬ人也所誅とは韓信をも高祖の留守の間に斬り彭越をも蜀へうつさるゝ道にて逢てつれて歸りて又謀反したと云て殺されたり此御方とは更衣の（弘徽殿イ）事と云々是は弘徽殿の物えんじを帝も心苦しく思召と也いさめは制の字歟（也イ）たらちねのおやのいさめしうたゝねと云るも制する心也又諫の字にても有べしこしらへをしふる心也　抄云高祖に八人の子あり　長男齊王肥（母曹姬妃歟）　惠帝（母呂后）　趙王如意（母戚姬）　代王恒（母薄夫人）　梁王恢　淮陽王友　淮南王長　燕王建　此内四人其母を載ず是に准じて物語にみえたる桐壺帝御子八人也　朱雀院（母弘徽殿）　六條院（母桐壺更衣）　四宮（母承香殿女御）　冷泉院（母薄雲女院）　螢兵部卿宮　帥宮　八宮　式部卿宮　是も四人の御母を記さず是史記の面かげ也桐壺の御門を高祖に准じ弘徽殿の太后を

呂后の面かげに比する心あり

かしこき御かけ　かしこきの字河にあまたのす恐の字の心也但所によるべし是より更衣の心の中也叡慮の忝を云也

おとしめ・みおとさんとする義也

きずをもとめ　吹レ毛求レ疵〔漢書〕　好生ニ毛羽一悪生レ疵〔樂府大行路〕なほき木にまがれる枝もある物を毛を吹き疵をいふかわりなき

中々なる物おもひ　此物語中々と云詞に心をつけてかけり　凡歌の五もじなどにもなほざりにはおくべからず中々といふ心を末にいひおほするやうに置べき也と云々こゝの心は御寵愛なくばそれこそ物思ひなるべきに是は御門の御寵愛故に人々おとしめそねめば結句中々物思ひをすると云心也

御つぼねは桐壺なり　五舎の内淑景舎也　桐壺の御殿〔清涼殿也〕より艮の角に當たるその間に弘徽殿　麗景殿　宣耀殿などのめだうをへてとほる也　村上の御時宣耀殿の女御は小一條左府師尹公の女なり　河海には御さうしは曹子也とありつぼね同事也

うちはしわたとの　切馬道に板うちわたしてかよふ道也〔頭注、云間〕のきれたるところなどにかけたるを打橋と云也　又わた殿ははるかなる廊也

あやしきわざ　河村上の御時宣耀殿の女御藤壺に候はせ給て時めき給ふけるを中宮〔安子九條右府師輔公女〕弘徽殿のうへの御局におはしけるが常に心よからぬ事共ありける由世繼にあり彼例を云歟云々花山院の御時も女御〔閑院大將朝光女〕の繼母〔大納言延光舊室権中納言朝忠女〕さがなくてかやうの事どもありけりと世繼に見えたり花鳥には村上の御時中宮ねたみ給てその御方の人々こゝかしこの道に不淨をまきちらし侍る事ありさて御おくりの人のもきぬのすそたへがたうとはいへりと云云　私云河海はさがなき事どもぞとある本につきて注せる歟當時不用花鳥之義可レ然歟但心は同之歟箋猶村上花山の義載レ之　又或抄云雪月抄に此事打まかせてはけがらはしき物などをぬりおきたりける歟と云又裳を物にひきかくるわざなどをし置て行なやませける歟とも云猶不審にて人に尋られしかばいつぞや内裏にて此物語の談義有けるに桐壺の更衣おぼえすぐれたるによりてうち橋わた殿にあやしきわざをしけるは本文有かと御尋

有けるに或人申けるは後漢書皇后紀上に云後漢桓帝最愛鄧皇后を餘の后達嫉妬のあまり挟ニ巫蠱の道一と云事見えたり若此心かと奏しければさもいはれたりと云御沙汰有レ之由傳承と云々挟ニ巫蠱之道一とはかんなぎやうの者にましわさを道にかまへ置せてふみ越させなどしけるか挟の字をば字義にはかよふと釋せりとかくありて鄧皇后終にはかなくなれりと云々　此更衣もうせて後母北方命婦に逢て人のそねみ深くよこさまなるやうにて終にかく成ぬとなげく又先帝の皇宮（藤壺の母）春宮の女御の弘徽殿の御心さがなくて桐壺の更衣のあらはにはかなくもてなされしためしもゆゝしくてとおち給へば呪咀したるが鄧皇后に同じきとあり　私云此義正説猶可ニ引勘一　まさなき事正義になき事也云云河にさがなきとあり

えさらぬめだう　不去敢之馬道　えよぎぬめだうの妻戸也

こなたかなた　前わたりするあまたの局の女御更衣たちの心をあはせてなり弘徽殿以下なり

はしたなめ　河鬼　鬼（ハシタナメ）日本紀　或抄云はしたなげにいひはぢしむる心也これはさやうにてもあるべき也いましむる心もあり　又辱也云々

わづらはせ給ふ時もことにふれて　何事に付てもの心也

いといたう思ひわびたるをいとあはれと　思ひわびたるは桐壺の更衣の心也それを帝のいよ〳〵哀に思召すと也

後涼殿にもとよりさふらひ　俊成卿こうらうでんとよむべし　假名書の物を正字のごとくよめるはこはぐ〵しき也此殿清涼殿の西にあたりて近き也もとよりさふらひ給を外へ移したる故に恨尤なり

うへつぼね　箋曰弘徽殿藤壺の外にはうへの局を給はる事なし桐壺更衣にうへつぼね給はる事非レ例也（頭注云）弘徽殿藤壺には可レ然女御居給故也　如レ此御門の御政のちがひたる事末に更衣のうせたる所にみえたりさてうへつぼねとはまうのぼり給時にかりそめの休息などの局に給也末々の更衣などにうへつぼね給事は難き事也中宮后のまうのぼり給時は清涼殿の御座のかたはらの二の間をうへつぼねに給ふ定れる事也さて桐壺の更衣は女房ぞもとのまゝにて後涼殿をう

へ局に給ふ也常に御前にのみさふらひ給へばこゝ
にのみ御休息成べし更衣御寵愛甚しき故に餘の更
衣たちいろ〳〵はしたなめわづらはす故に又如レ
此猶恨みの有べき事出来る也世間のならひ如レ此
よく〳〵思ふべしその恨ましてといへる尤妙也
此みこみつになり給ふ時御はかまぎの事　源氏の君
三歳にてはかまぎの事ありおまへばかりにてあ
か色を着給也　皇子三歳着袴例　冷泉宮東　圓融下親　花
山宮東　河に委　給第八　天暦の御時内裏にて爲平親王御袴着
侍けるに　百敷にちとせのことはおほかれど今日
は君はためづらしきかな好古
一宮のたてまつりしに　弘徽殿腹の一宮也後に朱雀
院と申一宮其外次々差別有べき事也源氏御寵愛故
かくのごとし
藏づかさをさめ殿　内藏寮（クラレウ）　納殿（アサメドノ）後涼殿にあり　内藏寮
は百官の内也專御服などの事をつかさどる官也を
さめ殿は只何にてもをさめおかるゝ所なり
およすけ　助及日本紀　おとなびたるよし也
あさましきまでめをおどろかし給　つよく思ひ入こ
と〴〵しき心也

その年の夏　源氏君三歳の夏より桐壺更衣違例也そ
の年と時代をさゝず發端と一句の詞といへり
御息所はかなき　此物語皇子誕生の後必此名あり定
て先例歟凡更衣は便宜の殿にさふらひて御衣をあ
らためかふ以御やす所といふ其中において寵をう
る人を御息所といふ其理相叶へり御子などいでき
たるは勿論の事歟又東宮の正室は必御息所と云是
后がね也　一禪は御子の有無にはよらずと云々師
説には御子の出來を云と云々（頭注云）世繼更衣御息所みなちり〳〵と云詞あり
然らば打替ある歟
まかでなむとし給ふ　桐壺の更衣の里亭へ退出せん
とし給ふ也
としごろつねのあつしさに　前にいとあつしく成行
と有（頭注云）年來病者なるやうになられたればなりいつかむいか五六日
はゝ君なく〳〵　更衣の母の奏して更衣を退出さす
るなり　前にはまうでなんとし給ふとありみづか
ら退出せんとの心歟是はいとよわうなれりされば
更衣は其心も中々なきを母君の奏して退出さする
心面白歟如何さて此處退出の時の事にてはなき也
此末にまかでさせ給ひつと云所が實に退出也此次

には猶宮中にての事あり此筆法あまた有　私云色
色御押留の心もこもるべき歟
かゝるをりにもあるまじきはぢもこそと　此心づか
ひ殊勝也
忍びてぞ出給ふ　又是にも心あるべし若宮同じく出
亭へ出給はゞことくしきかたも有　うに思ひ
のあかたにゝ源氏の君を宮　留る也
ずさりければさいみ　御門の御體也　或抄云禁中は
神事所の故也云々
いとにほひやかにうつくしげなる人の　桐壺更衣の
體　花鳥のいろにも類せずと下の詞に見えたり
ことにいでゝも　此詞ことに哀也餘情を思ふべしこ
とにいでゝはいはぬ也引歌に不レ及
きしかた行末おぼしめされず　きしかたは過しかた
也行末は向後也前後不覺の義也
まみなども　めのあたりまばゆき體也病人のあしき
相也
たゆげにて　墮猛（タユシ）史記たゆしは訓にてはなし音也
いとゝなよ〳〵と　柔也なえ〳〵としたる也生得更
衣の體のやはらかにたを〳〵としたる人成べし

われかのけしき　我耶人かと云程也如レ存如レ亡と云
類也正體もなき體也
いかさまにかと　御門の御心何としてか更衣の病を
たすけんと也
てぐるまのせんじ　輦車也　車輪有て牛をはなつ云
云　河海抄こしに輪をかけて手してひく車をいふ
河職員令云輿車也注云擧行日レ輿輓行日レ輦と河に
委し　輦說文輓車也在レ車前引レ之也漢書注駕レ人
以行日レ輦花鳥延喜雜式云 輦にのりて内裏へ出入す
居はさうしをかぎり夫人及内親王は溫明殿後涼殿
のうしろをかぎる命婦三位は兵衛の陣をかぎる但
嬪女御及王孫大臣の嫡妻は輦にのる事兵衛の陣を
かぎる　西宮云親王大臣中宿老人此恩あるか女親
王女御尙侍は出入ごとに藏人奏聞して閤門重吉上
におほすなり　今案溫明殿後涼殿はみな中のへの
門内の殿也溫明殿は内侍所おはします殿也東の宣
陽門の内にあり後涼殿は西の陽明門の内に有此巻
のことはに後涼殿にもとより侍ひ給更衣のさうし
を外にうつさせ給てうへつぼねに給はすとみえた
り延喜式に夫人及内親王は後涼殿の後を限るとい

へる物語の心に相叶へり又兵衛の陣と云は中の重
の門の外也闈門と云は中重門を云也　或抄云今桐
壺更衣退出の道以下花鳥の説たよりありて可然歟
云々　河輦は石ばしの高き門よりのぼる中重を出
入の爲也中重の輦共云也牛車は牛つよる所まで入
る也牛車をゆりて上東門を出入する也　又てぐる
まはわきよりのる也輪ちさひくてはゞのひろくて
前のせばき物也和秘抄ノ義略之　又てくるまは男女僧皆是
をゆるさる宿德の大臣持僧御侍讀其外女房などまで
て也
輦ゆるさるゝ事　河清寧天皇三年奉億計弘計王以
青蓋車迎入宮中　同仁明天皇女御藤原澤子紀伊守贈右大臣総
継女病によりて退出の時輦車をゆるさる近去の後少
納言をもつて三位をおくらる　私云師説此義未引
勘之　或抄云雪月抄にてぐるまとはこしのやうに
てちひさきわをかけてながえは輿のやうにみじか
き也　又此更衣かぎりなるにまかづる時輦ゆるさ
れけるは圓融院の母后にやまひのうちにゆるされ
ければ近き例を思ひて式部が書けるにやいみじき
よし侍從三位公世卿申されけるとなり

又いらせたまひては　更衣のさうしへみかどおはし
まして也御いとまをゆるしかね給ふさま思ふへし
かぎりあらむみちにも　しでの山ふもとを見てぞか
へりにしつらき人より先こえしとて或抄引之
さりともうちすてゝは　みかどの御心也此詞は書か
ぎりある道なりともうちすてゝはよもとの給也さ
ばかり契り給ひつれば也又すこしはくるしからじ
なとゝたすけたる御詞にや
桐壺更衣
かぎりとてわかるゝ道のかなしきにいかまほしきは
いのちなりけり　此歌別のときにのぞみて心中をあ
りのまゝに詠ず殊にあはれなり云々　續後撰或抄
引之「いかにせむしなばともにと思ふ身のおなじ
かぎりの命ならずは　いかまほしきは生まほしき
也いきたき也或抄御說生死のならひ力及ばねども
いかまほしきとねがひたる也
いとかく思ふ給へましかばと　更衣の詞也花鳥の義
非也　此詞尤感ありかねてよろづたのみし心の外
に成ぬる事を思ふことば也世上も皆如レ此成へし
と云々　三說云箋云上の詞にかぎりあらん道にも
おくれさきたゝじとちきらせ給けるをさりともう

ちすてゝはえ行やらじとありし事也かくのごとくみじかゝるべき命の程をかねてしらずして契おきける事よと也此詞にてかぎりとての歌をしむ命は君が爲なり我身の爲にあらざる心明か也尤おもしろし又次の詞にきこえまほしげなることは有げなれどなど云るさま餘情かぎりもなかるべし　花みかどの御返歌なきにてかぎりなき御心まどひのほどあらはれて物語の書ざまいふばかりなきにや

けふはじむべきいのりとも　今夜より更衣の里亭にてかぢ修法などはじむべきとある故に退出をゆるし給なり是もふかくおぼしめす故也修法の事河にあり略之

まかでさせ給つ　これ實に退出の時也

御むねのみつとふたがりて　御門のおぼしなげくさまなりつとはやがてと云やうの心也急なる心也

御つかひの行かふ　河交加(ユキカヤウ)　ゆきちがふ也　ふるき物語などにも御つかひ雨のあしよりもしげし又くしのはをならべたるやうになともかけり

いぶせきを　おぼつかなきよし也

いとあへなくて　河最(イト)無(ナシ)レ敢(アヘ)　專(イト)　甚(イト)　よのつねのあへなきなど云同心也

こもりおはします　御門御愁歎の體也夜のおとゞなどへ引こもり給へる成べし

みこはかくてもいと御らんぜまほし　源氏の君の事也　御門御心源氏三歳にして母の喪にあふ事　河延喜の皇子文彦太子三歳の時母左大臣時平公の女薨ぜられしなり

かゝるほどにさぶらひ給ふれいなき事なれば　河海に委注したるを花鳥にやぶられてこれにつきて秘訣あり別にしるすべしとあり其外諸抄にさまざま釋したれどいづれもあやまれり　或抄御説に七歳まで喪服をきぬをかくのごとくかけるひとつの口傳とあそばすと云々　私云是花鳥にいへる義也口傳すべしと也　河いづれも略之

なに事かあらんともおぼしたらず　源氏君三歳なれば母更衣の事をもなにとも思ひわかぬさまなり

弄此さまことにあはれなり

よろしきことにだに　是は大形の事など云ほどの心也中品の事也これにましてとあれば一段すぐれたる御門の御なげきと也　河こよみによろしと云も

中品の日也又引歌有是に不及
かぎりあればれいのさほうに　私云前に更衣の進例
して退出の時も限りあればさのみもえとゞめさせ
給はずとあり又愛にもかぎりあれば例の作法とい
へり或抄例のさほうは葬送也玉とのと云所にしは
らくおくさほうあり　冠禮　婚禮　大葬禮
をたぎといふ所に　愛宕又愛宕山城國也鳥部野を
云也　桓武天皇平安城ニ都うつりの時葬所を諸人
葬所ニ定めらる　延暦寺の記に見えたりかれに珍
皇寺と云寺をたつ弘法大師の旧跡として今は東寺
の一の長者管領也然間に委々六道と云所也と云々
おはしつきたる心ち　更衣母北方おはしつきたる也
むなしき御からを　或抄御説引歌に不及と云々古詩
都「うつせみはからをみつゝもなぐさめつ深草の
山煙だにたて　弄にもさしあたりての心ばかりに
ても仔細なきと也
はひになり給はむを　河文武天皇四年己未道照和尚
遷化七十二歲　本朝火葬是より始る也　一もえはてゝはひ
に成なん時にこそ人を思ひのやまんこにせめ
ひたぶるに　一向也

さかしうの給つれど　更衣の母の色々にして思ひさ
まさむとかしこたてにの給へれども車よりもおち
ぬべきなり
さは思ひつかしと　送りの女房達のかやうにあるべ
きとかねて思ひし事と也
内より御つかひあり　勅使をおくらるゝ也
三位のくらゐをおくり給ふよし　みつの位とよむ諸
抄一同
贈三位例　河清和外祖母葬ニ山城國愛宕墓ニ贈ニ従
三位ニ　和秘抄に正三位といへるはあやまれり
宣命かきとて心　委細に書て死人にむかひて
つぶさによみてきかする也云々
女御とだにいはせず　河に大納言のむすめ立后の例
をのす公卿殿上人の女の女御たる例おなじくのす
されば御寵愛ゆへに后にもたて給ふべきに女御と
だにもいはせずと不足に思召てせめて従三位を送
り給ふ也后女御の例河に委
いま一きざみのくらゐ　箋更衣は四位女御は三位也
大納言殿上人の女までは女御の例おほし然を存生
に女御になされず又贈后例ありといへども世には

ばかる仍四位の人に一階をまして三位を贈らるゝ也　河中古までは女御もおほくは四位也近代は従三位ニ叙するの後に女御の宣下あり

おくらせ給なりけり　弄是はそのいはれを釋したる詞也所々に此類有　或抄云傾闕書云三位のくらゐを贈り給ふとがきてそれを今一きざみと侍れば更衣は四位のやうなれどたゞうちまかせていへる成べし

物おもひしり給は　分別ある人なり

さまかたち　桐壺更衣の事也前の詞に叶へり

心ばせのなだらかに　河心操平(コヽロバセタヒラカ)日本紀　汚論語

めやすく　みよきさまなり

にくみがたかりしことなどいまぞおぼし出る　此詞妙なり物の心えぬ人は猶跡までもにくむ也爰は物思ひしる人の心也桐壺の更衣の事をひとつ〳〵おもへばさまかたちより何も心ばせまでよき人にてありしといま分別するなり

さまあしき御もてなしゆゑにこそすげなう　無人望(スゲナク)日本紀　これは前の段にいへることの注にや存生の時は御寵愛のすぐれ御門の政道をも忘れおはしましたるやうなりし故にこそにくみしかとなり尤面白しそねみ給ひしかと云までを前の詞の注釋とみるべし

うへの女房　是は典侍以下うへ宮つかへする人々也人がらのあはれにといふよりうへの女房などの心と見るべし

なくてぞとは　「ある時はありのすさみににくかりきなくてぞ人は戀しかりける　是は前を釋しめして物語の作者の評したる詞歟此引歌面白し　或抄云凡引歌の事見様ひとつに非ず是等は心も詞も相應の引歌なり

はかなくひごろ過て　或抄五十日と云々　私云但それにもおよぶまじき歟　無墓(ハカナシ)或抄　私云あだなる心也

のちのわざなどにも　或抄百ヶ日也七日々々等の事成べしと云々

ほどふるまゝに　御心しづまるほどおぼし出る事おほかるべし心を付て見るべしあはれ深し　鷲定初拭涙

御かた〳〵の御とのゐ　河榮花物語宮うせ給て後何

事もおぼしめされずゆゝしきまで見えさせたまふ
此ごろは女御みやすん所の御とのゐたえたり　長恨歌云三千寵愛在一身
なみたにひちて　河に引歌春雨にぬれにしかども不及此歌　或抄「ひとりねの床は草葉にあらねども秋來るよひは露けかりけり　不及引歌
みたてまつる人さへ露けき秋なり　或抄云村上の御時中宮安子應和四年四月十八日にかくれさせ給へる頃女御みやす所の御とのゐたえてしほたれくたさせ給其としの秋せんざいに露のおきたるを風の吹なびかしたるを御らんじて　拾「秋風になびく草葉の露よりも消にし人をなにゝたとへん　桐壺の更衣も夏の頃うせ給て秋の御思ひ切なる御ありさま宮城野の露ふきむすぶなど詠し給ふ御前のつぼせんざいなど御覽するやうにとかけるかた〳〵思ひよそへらるゝにやと云々　同碩聞書夏の比なやみ給ふそのうつり又詞のことがら殊に哀深しと云云河後撰「人はいさことぞともなきながめにて我は露けき秋もしらるゝ　三抄にも此歌をひかれたり末の詞に弘徽殿には夜ふくるまであそひをぞし給ふなどゝ有ことぞともなき體なるべし此歌には我は露けき秋もしらるゝといへる是は御門の御事はさておきぬ見奉給へるうへ宮つかへ人などさへ御心の中を推量して露けきとなり尤面白歟　或秘抄哀深き詞物語の書様いふばかりなきと有
なきあとまで人のむねあくまじき　桐壺更衣の事を弘徽殿などの死後までいひ思へるさま也猶ゆるしなうといへる猶の字妙也此前の詞に物思ひしれるはにくみがたかりしと今ぞおぼし出るとあり弘徽殿などには猶にくみ給ふ也人の性をかき分たり弘徽殿如此河に說々あり
一宮を見奉り　御母弘徽殿後に朱雀院也
わか宮　母桐壺更衣　光源氏君なり
御めのとなどをつかはしつゝ　桐壺の更衣の里へなり君此所におはする也此後又ゆけひの命婦をつかはされし也いくたびもつかはされし內の事を一たび有さまをかける也
野分たちて　暴風　立てと讀べし　花たちは達也野分のやうなる風也立にはあらず哀なる折節なるべし　或抄碩聞書云此詞のつゞき愁傷の心をそへた

る時節成べし
はたさむき　將　肌　兩義也三抄將を用ふ肌も不捨
也　或抄將字用之弄花に秋風のやゝはたさむくと
いへるも將字也猶くはしく弄にあり
つねよりも　面白き詞也折節の感にもよほされて一
入思召出たるさまなり　或抄引歌「いつとても戀
しからずはなけれども秋のゆふべはあやしかりけ
り
ゆけひの命婦と云　靭負惣別左右衛門をゆけひと云
此官弓箭を帶て仍ゆけひと云　靭は矢を入るゝは
こを云也　河衛内府（ユケヒミ）（カキモリ）命婦は今の世に内侍の
外織物を着せぬ中﨟を云昔は命婦と號せり殿上人
以下の女也藏人と云下﨟の品を云加茂祭に命婦の
使藏人とてある也猶河に委　奧入　令曰婦人帶五位
以上爲内命婦五位以上妻爲外命婦又後宮職員令曰
其外命婦准夫位故周禮云内命婦謂九嬪世婦也外命
婦謂卿大夫之妻也帝の命をかうふる故命婦と云
或抄云雪月抄内侍司の中に典侍（テンシ）（從四位下）掌侍（シヤウシ）（從五位下）典内に
命婦をば定おかる或女房の五位に叙したるを命婦
と云　私云もろこしには九嬪世婦以下天子につか
ふるほどの女の總名を内命婦と云卿大夫の妻を外
命婦といふ日本には中﨟を外命婦といふとみえた
り
ゆふつくよに　暮月夜（萬）　夕附夜（萬）（日本紀）　命婦をつ
かはされし時分の體なり
心ことなる物の音　桐壺更衣の事也
きこえいづることのは　晉非ニ殊艷一尤態獨能致是蓋
才智明惠善功便佞也（長恨歌）　是は楊貴妃の事をいへり
ことのはとは歌などをいふべき歟
面かげにつとそひて　集（日本紀）　都ツト
やみのうつゝには猶おとりけり「ぬば玉のやみのう
つゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり
本歌の心うつゝなれどもぬば玉のやみにあふたる
はさだかなる夢にまさらぬといへり是はそのはか
なきやみのうつゝ猶おとりたるとなりうつゝにて
はあれども夢にまさらぬ心いま一段たくみあげて
いへり本歌さへめづらしきをあたらしく引かへた
る作者の心よく〳〵心をつくへしとぞ
命婦かしこにまかてつきて門引いるゝより　命婦の
車也

やもめずみなれど　寡　禮記云老而無妻謂之鰥老而無夫謂之寡注曰六十以上而無妻五十以上而無夫爲寡也此更衣の母儀も其年齢歟　私云年齢によらず夫なきをいへる成べし又年齢もちかふべからず

人ひとり　桐壺更衣の事也　或抄云私案之人ひとりとは更衣の母の事成べし

やみにくれて　上の詞にやもめずみなれどもとありて次の詞にやみにくれてふし給へるほどに草もたかくなりてと有母の事とは分明なるにややもめずみなれど母一人の心つかひにて人めのかざりもあり〳〵しくめやすくありしに今此愁傷にて毎事忘却にて家中の事をみいれ給はぬ故に草も高くなりあれたるさま成べし　同抄又の説用はやもめずみなれど更衣の御うしろみをする故につくろひ立たるを子をおもふやみにまどひて今はみはからふ事もなければ草もたかくなると云也云々愚案猶後の説可用歟ひとりの御かしつきなどいへる更衣の事とはよく聞えたり

あれたる心地して　ぬしなき宿はさびしかりけりといへる歌の心ありあれたる心ちしてといへる感あり現在にあれたる家にてはあるべからず草もすこししげり思ひなしのあれたるやうなるべし

月かげばかりぞやへむぐらにもさはらず　拾「八重むぐらしげれる宿のさびしきに人こそ見えね秋はきにけり惠慶　新勅「とふ人もなき宿なれどくる春は八重葎にもさはらざりけり貫之　此二首の引歌の内伊行釋は八重葎しげれる宿の歌をいたして此歌其時非古歌證歌たるべからずと釋せり定家卿はとふ人もなきの歌を出されたり但河海に此歌はさはらぬと云詞詮なれば貫之がとふ人もなき[illegible]相叶ふ歟云々　此説に可隨也并には[illegible]を月にかへたるなり云々諟抄　同

みなみおもてにおろして　こゝも命婦の車也

はゝ君もとみに　河はゝ君とみにとは早きと云心也急の心なり　私云とみは頓の字歟可尋心はひとしき也　箋云頓歟はゝ君もといへるにてたがひにしばしことのはもなかりし體の心あるさまなり尤かきざま妙也伊勢物語にしはすばかりにとみの事とて有

いまゝでとまり侍るか　母君詞とかくためらひていひ出たるなり

よもぎふの露わけいる　所のさま詞つかひあはれなり　拾　いかでかはたづねきつらん蓬生の人もかよはぬ我宿のみち

けにえたふまじく　河一眉猶回レ耐雙眼定傷レ人　遊仙窟

秘母君の身にてはかやうの御とぶらひにあつかることははづかしきとなり　私云けにえたふまじくとはいまゝでとまり侍るといへる詞をうけてげにえたふまじくといへるにや然ば命婦の心といふべくや如何げに今まで留り侍るといふを受ていへり

抄命婦の心と云々草子地ともいふべき歟

まゐりてはいとゞ　命婦の詞也

内侍のすけのそうし　典侍　河是より先に典侍を御つかひにつかはさる事あるべし

物おもひしらぬ心にもげにこそ　命婦の卑下の詞なり

やゝためらひて　河良久此心歟　校[illegible]　稍行　白氏文集

三十　閑健一同廿　此御使の命婦の[illegible]心あるやうに計なせりよく思ふべし

しばしは夢かとのみ　秘是よりは勅定の趣を命婦の申つたふる詞なりみかどの御口うつしなるべし

さむべきかたなく　夢かとのみとあるをうけてなり

更衣逝去の時分は只實の夢のごとく忙然とのみありしをやう〳〵少しづゝおぼしめししづまるから夢にてはなしされども其人の名殘はさながら夢幻のごとくにて其歎さむる方なしと云なり

といひあはすべき人だに　或抄に「思ふ事いはでたゞにやゝみぬべき我とひとしき人しなければのこゝろなり自餘の女御更衣たちは桐壺更衣をそねみたまひし人たちなればかたり合せ給はん人なき也

わか宮のいとおぼつかなく露けき中に　小萩がもとをとおぼしたる歌に叶へる也

とくまゐり給へなと　前の忍びては參り給ひなんやとは更衣の母の事とく參り給へとは若宮の事歟

はか〴〵しうもの〳〵給はずむせかへらせ給ひつゝ

是より命婦の詞也勅定の趣をきゝ誤りせきあへずして仰かねらるゝを人の心よわく見奉らんとおぼしめす御氣色を見參らせて少し承り殘すやうにて

參りたると語る也心づかひおもしろし
御文たてまつる　更衣の母へ勅書を命婦の傳ふる也
めもみえ侍らぬに　秘更衣の母の詞也　或抄思ひに
くれたるよし也おほせごとをひかりにてとおもし
ろく書たると御說也天子のみことのりを明詔など
も云なり光にてと尤面白し
ほどへば　秘是より勅定の御詞也　月日のうつらば
せめて思ひのうすくやならんと月日の過るをまて
ばいよ〳〵忍びがたくなるとなり
いはけなき人　稚(イハケナシ)幼(イトケナシ)
もろともに　桐更衣と御もろ心にはぐゝまぬとなり
更衣逝去の故也
むかしのかたみに　桐更衣のかたみにとなり
桐帝宮城のゝ露吹むすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそ
やれ　桐帝の御歌也　花宮城野は宮禁にたとへ露吹
むすぶはなみだを云小萩がもとゝは若宮の御事也
宮城野は露のふかき所なり云々　古今にこのした
露は雨にまされりとも　新古西行草ばの露のこほ
るらんともいへり　或抄御說時は野分の時分しか
も宮にておはしませば宮城野といふとあそばす也

見給ひはてず　前にこまやかにかゝせ給へりと有又
更衣の母君の詞にもめも見え侍らぬにとあり
いのちながさの　更衣の母の詞　河莊子曰壽則多(イノチナカキモノハ)
レ恥　箋云上東門院の御事をひかれたり八十七ま
でおはしませしが一條院后にて後一條後朱雀二代
の國母にておはせしかどもいづれをもさきにたて
させ給へりとみゆ
松のおもはんことだに　「いかにしてありとしられ
し高砂の松の思はんこともはづかし　秘人にしら
れん事はづかしとなり
百敷にゆきかひ侍らん　河百官の座を敷故に百敷と
云或百城と云　文選に金城百雉といへり若此事歟
雉は高さ一尺廣さ三丈云々築地の一簣(モツコ)也云々是を
百ばかりつゞけたるなりゆきかひは行通ふなり交
の字なり夏と秋と行かふ空のも行ちがふなり　古今
かりそめの行かひぢとぞ思ひこし今はかぎりのか
どで成けり滋春
たび〳〵うけたまはりながら　前にも御使ありし事
きこえたり
參りたまはんことをのみ　若宮は源氏なり內へ參り

たく思召御氣色となりいかにおもほしとはいまだ
三歳なればなりとく參り給へと御門の仰有しは若
宮の事と是にて聞ゆ
ことわりに　いかにおもほししるにかと御分別もあ
るまい事ながら此くさふかくすみなしたる宿より
内へ參りたくおぼしめすは理と思ふにつけてもか
なしきとなり
うち〳〵に　みづからは參内もあるまじきなどもふ
つと御返事申きるは頗いかゞなれば是は内々の存
分命婦までの物語など云やうの用捨なるべし
ゆゝしき身に侍れば　所によりて用かふる所有これ
は世俗に忌(イマ)々敷と云に叶へり　忌の字「わひぬれ
ばつねはゆゝしき七夕もうらやまれぬる物にぞ有
ける人丸　拾「ゆゝしとていむとも今はかひもあら
じうきをば風につけてやみなむ
そひおはします　若宮の更衣の母の方におはします
事なり．
宮はおほとのごもり　源氏の寢給ふとなり
みたてまつりて　命婦の詞御目覺てわか宮の御あり
さまをも見奉りて奏したけれども此御返事をみか
ど待おはしますらんによふくるとていそぐ也
くれまどふ心のやみもはれがたきかたはしをだには
るゝばかりに　河後撰兼輔「ひとのおやの心はやみ
にあらねども子を思ふ道にまよひぬるかな　更衣
の母の命婦に云詞なり心中の愁をかたりて成とも
すこしはらしたきとなり　河海花鳥はかたへはる
るばかりと云本に付て注せり當時所用青表紙の詞
に相違の詞是をのするに及ばず　或秘抄に注す
わたくしにも　みかどの御使ならても又來り給へと
なり御使なれば待おはしまさんとて心しづかなら
ぬと也
としごろうれしくおもたゞしき　更衣の在世の時は
うれしく面目らしき事の御使に此命婦もたび〳〵
來られしなりおもたゞしきは面の心歟又目たゞし
き同心なり
かへす〴〵　濁て讀べし　或秘説云私云上の詞にい
のちながさのいとつらう又その前にいまゝでとま
り侍るかと有これらにてみれば返々つれなき命と
いへる尤味あり
むまれし時より　更衣の事を母のかたるなり

故大納言今はとなるまで　更衣の父按察大納言逝去のきはまで更衣の宮づかへの事を申おかるゝなり或抄に更衣のみめかたちなどいたつらになしがたき人にてかく思はれしにや云々

宮づかへのほい　宮仕の本意なり

くつをるなど　河頽墮　退屈の心也

人げなきはぢをかくしつゝ　河人げなきは人間になき也人にひとゝも思はれぬ心也つゝは乍と云心也

伊勢眞名本

よこさまなるやうにて　河經文に九の横死あり其中八者爲横爲毒藥厭禱呪咀之所中害といへり藥師經或は毒にあたり神佛にいのられなどする皆横死のうちと見えたり

かしこき御心ざしを　かたじけなきめぐみを却而恨る也是も心のやみのまどひと也奥入には人のおやの心はやみにあらねどもの歌をひけり

うへもしかなん　命婦の詞御門もさやうに仰らるゝとなり

人めおどろくばかり　御寵愛のあまり甚しかりしも長かるまじき故にて有けり後涼殿の局あけさせられしなどの樣なる事に人々の恨もふかく成しなり或抄云夕がほの上と源氏の彌勒の世をちぎり給ひしなどあまりなる事なり此類となり

人の心をまげたる　弄聖主の御心づかひ殊勝なり但女の事に至りてはみだれ給ひし御事もましますならひとなり　或抄貞觀政要に太宗語侍臣曰天下を安ぜんと思はゞ先我身を正しくすべしと身正しくして影まがれることなしと也　河海に心をまげたる事はとゞめしと思ひしをとありてとゞめしは停止の義也定家卿の自筆の本にはとゞめたるとありおなじ心也云々　然而或秘抄私云今の青表紙此詞相違のうへ無詮にやと云々　箋云九條右丞相師輔公の息女七人のうち嫡女は村上中宮安子第二の女重明親王北方の中宮へ參り給ふついでかいまみあり中宮なかだちとして宮中にめし入て密通の事有て連續せしむ其後中宮ならびに重明親王うせ給ひて後終に召て尙侍と申て貞觀殿にさぶらひ其寵の甚しき事よるひるをわかず世人なげきていはく聖主の當代において萬民これを稱す然に登子の尙侍朝に入て萬機是が爲に廢すと云々此末に皆此義を

含てこれをかく
人わろくかたくなに成侍る　河頑(カタクナシ)　或抄侍るはつる
　雨説云々　はべる用之
うちかへし御しほたれがちに　是も前業にやとうち
　かへして覩してもなほ涙がちなりとかや　河神事式
　に泣を瞞垂(シホタレ)と云也
つきせずなく〳〵夜いたうふけぬれば　命婦の體也
　箋云つきせずなく〳〵決前生後の句と云　私云前
　を決するとはつきせずなくといふ也生後の句とは
　上のなくを下へつゞけてなく〳〵夜いたうふけぬ
　ればといふ此類を皆いふ也
こよひすぐさず　まことにまちおはしますべき事な
　ればこよひすぐさずといへる所おもしろしさま
　ざまの物語にほどへたる心と見えたり
月は入かたの空きよう　秘まへに夕月夜のおもしろ
　きほどに出したてさせ給ふといふにかけて見るべ
　し夜のふけ行たる景氣餘情かぎりなし
虫のこゑ〴〵もよほしがほに　河催貌(モヨホシガホ)也　一說云
　虫のこゑ〴〵もよほしがほ(夜ィ)なりとよむべし歌にも
　ながき夜あかずとあり其心なり是秘說云々　案之
　此義不甘心今時分非曉何可惜夜哉夕月夜は入かた
　の程也非可惜夜哉　或秘抄に此義をかしき說なり
　云々催しがほ可用之　もよほすは花には涙をもよ
　ほすなり抄并弄にはあはれをもよほすなり云々可
　然
草のもとなり　河古歌未勘　蓬がもと同風情𥡴抄云
　草のもとなりと云はてたるめづらかにおもしろき
　詞なり又或抄に感時花濺レ涙恨レ別鳥驚レ心
すゞ虫の聲のかぎりをつくしてもながき夜あかずふ
　る涙哉　抄命婦の歌なり　聲をつくしてもと云んと
　てすゞ虫といへり　或抄御說わがなく聲は鈴虫の
　聲のかぎりをつくしても及がたしとなり　私云此
　ながき夜にも猶なきつくさぬ我涙にはすゞ虫の聲
　のかぎりをつくしたりとも及ぶましきとなり
えものりやらず　花車にのりかぬる也　抄前にかど
　引いるゝよりといひて爰おもてにおろしてとあり
　つるに歸りさまをいふにえものりやらずと始終に
　車ともいひ出す餘情たぐひなしさても此物語の筆
　づかひかゝる所をよくみるべきにや
いとゞしく虫の音しげき淺茅生に露おきそふる雲の

うへ人　抄更衣の母の返歌也あはれあさからずさても虫のねしげく物思ひ隙なき折節かゝる御とぶらひの御使に今更かなしみをそへたる心歌のさまもよにめでたく又五月雨にぬれにし袖をといへる近江の更衣のうたの詞もよりきたれるにや絶妙云々　河母の服にて里に侍ける頃醍醐のみかどより弔の御文たまはりける御返事に近江更衣周子後撰「五月雨にぬれにし袖をいとゞしく露おきそふる秋のわびしさ　花昇殿の人をば男女ともに雲の上人と云也或抄公任卿の秘密口傳に殿上を雲のうへと申はたやすく人の上らぬ故とかゝれたぞ

かごともきこえつべくなむ　河かごとは所によりて其心かはるべし是はかこつ義也誓(カゴト)かねてちかひおく心也かねごと同じき歟託(カゴト)カコツ 恨心なり今の心也少事(カゴト)いさゝかなる心なり 露のかごとの心也　加言(カゴト)カネゴト コトバクハフ　かごとの歌河に有略之所によりてかはる事ちがふ心かこつ心いさゝかの心かこつくる心ことを加ふる心など歟或抄御説に雲の上人をかこつ心よのつねにはとはれてうれしかるべきをこゝにはとはれて露けさまさるによりてあまりの事に雲の上人をさへかこつ心尤あはれなり

をかしき御おくり物など　よのつねならば御使などにはおくり物あるべきことにこそされども只今は哀傷の折節なれば更衣の御かたみ(カタミ)とて送なり

御かたみ　記念(カタミ)遊仙窟　信(カタミ)文集

御さうぞく一くだり　女のきぬの一領也　河長恨歌の傳に青衣(セイイ)一對とあり　桐壺更衣の御さうぞくのきぬなり

みぐしあげの　弄みぐしとよむべし一注　河てうどは調度也むかしは女御更衣以下常に髮をあげらるる本儀也　河髮あげの調度どもをひろふたに入たる也　花内の女房は晴の時はかみあげとてかんざしなどして髮をいたゞきへあぐるなりそのてうどさしくしさいしなど云物成べし　私云今のみぐしあげとは十二月の末に落がみけづりたる髮とも取あつめてやきすつる事ありそれにはあらず鋏釵子(ハサミサイシ)差櫛(サシクシ)等を廣蓋に入る也天武十一年六月丁卯男女始結髪續日本紀　以下之略

わかき人々　是は若宮の御かいしやく人を云なり

かなしき事はさらにもいはず内わたりを　或抄更衣

の事はいはずとなり　私云さらにもいはず更衣の事のかなしさは勿論の事内わたりに遠さかりたるも又一つの物思ひとにや内わたりなとはなぐさみもおほければ更衣の事かなしさもおもひまきれんとにや

さう〳〵しく　寂寞サヤザウシ和名　或閑さひしき也

うへの御ありさま　みかとの御事也

とくまゐり　光君をとく内へ参らせ給へとなり

そゝのかし　もよほしたつるやうの心也

かくいま〳〵しき身の　更衣の母の心中也

うしろめたう　河影護ウシロメタシ　心もとなきやうの義歟

まゐらせ奉り給はぬなりけり　此段わかき人々と云也人々のありさまをかきてかくいま〳〵しきといふより更衣の母の心中をいへりいつれも物語の作者のかける詞と云へきなり

すか〳〵とも　河早速なり或清々以下略之

命婦はまたおほとのこもらせし　前に待おはしますらんと云へるによく叶へり　弄此時のさま尤哀にみたてまつるへし　抄主上いまた御寝ならさるなり尤あはれなり命婦をまたせ給へるなり

おまへのつほせんさいのさかり　此詞にて異説には此巻をつほせんさいとも云と云々　或は巻のはしをは桐壺奥をはつほせんさいといふ猶以異説なり不用之　つほせんさいは此巻の一名なり

河壺前栽　清涼殿東庭并同西庭（朝餉并臺盤前栽被前栽）延喜元左右衛門栽草架　中宮安子かくれさせ給て秋の御前のせんさいの露を御覧して　拾天暦御製「秋風になひく草葉の露よりも消にし人をなにゝたとへん　或秘抄庭の内に秋の野なとをうつされたる成へし

御らんするやうにて　前栽の露花のさかりなとを御らんするやうにて命婦の歸参を待おはしましけるなり

御物かたり　御門のまちおはしましたる體をかけり

このころ明くれ御らんする長恨歌の御繪　河亭子院は七條以南油小路以東一町　伊勢集云長恨歌のゑの御屛風亭子院にかゝせ給て所々の名をよませ給ひけるに御門の御手にて「紅葉はの色にわかれすふる物はもの思ふ秋の涙也けり　花長恨歌のうた紅葉はの色にわかれすの一首は御門の御手にてかかせ給へると伊勢集にのせ侍れは亭子院の御製に

て有へきにや今一首玉たれのあくるもしらてねしものをといへるは伊勢かよめる也貫之か歌は未見出侍らすたつぬへし長恨歌の繪は亭子院の御時かかせ給へるよしみえ侍れとその繪とて末の代につたはりたることも侍らすしかるを通憲(ミチノリ)法印(法名信西)唐書唐楊妃外傳なと云書を勘て新しく繪に書しをこそ今世には是を長恨歌の繪とは申侍れ是は平治の亂あるへきことをかゝみて後白河院に御心をつけ申さんために思ひくはたて侍るとそ如案安祿山がやうなる信頼かふるまひためしすべなかりける事也其繪は平治元年十一月十五日寳蓮花院に施入し侍るとて信西一紙をかきたる由御説にのせ侍るなり　弄凡此物語にかきたる事は即證據となるへしと云々　或抄雪月抄に伊勢が集にいはく長恨歌の御屏風亭子院にかゝせ給ひて所々をよませ給ひけり御門の師になりて紅葉はの色見えわかてふる物は又きさいの宮になりて月も日も七日のよるの契をはきえしほとにもまたそわすれぬ　公世卿云宇多の御門より延喜の御門へ參りける御寳物の内に此繪は目錄に入たると云り云々　又御證に弄に桀

花物語第五(伊周公左遷事)昔の長恨歌の物語もかやうなる事にやとかなしく思召るゝ事限りなしと云々　或秘抄云こゝにて此卷を長恨歌にて書と云事見えたり箋云凡日本の亂は鳥羽上皇御心の相違より出來始たり今に至るまでの亂も此みなもとの亂よりおこり崇德院御位にて微寵におはしましゝを美福門院の御寵愛の餘りに其腹の近衛院をたて申されんとて故なく崇德院を退け申さる一旦はさもこそあらめ遂には崇德院第一皇子重仁親王へ立跡給へきを又引たかへ後白河を立申さるこれに依て御鬱憤ふかかりし宇治左府申すゝめて主上上皇の御國あらそひ出來しより末々いきとほり散せずして如此今の世に及亂併一旦女事の愛着より萬代に亂に及べり能々深く愼むへしとそ

やまとことのはをもろこしの歌をも　河詩言志歌永言と云へり詩歌已に各別歟但これは詩をも歌とおしこめていへる歟　或秘抄私云古今の序にもからの歌にもかくそあるへきといへるも詩の事也無異論哉

まくらことに　河枕言也枕草子なと云樣なり奥入に

明くれのことくさのよし也　抄につねのこと也
忍びやかにそうす　命婦の心あるさまなり
いともかしこきは　秘母の文の詞也　勅書を下され
し事なり
かゝる仰ことにつけて　私云つけてもといへるおも
しろき也　更衣の逝去の後までもかやうに御あは
れみ深きをみていよ〳〵更衣の命ををしく母君の
思ふ心又はかやうにとふらひ給に催されたる心も
あるべし
みたり心ち　足寒時心亂帝範
更衣母返
あらき風ふせきし陰のかれしより小萩かうへぞしづ
こゝろなき　更衣の母の返歌也　花あらき風ふせき
しとは源氏の君の母更衣にをくれ給へる事をたと
へ侍りしつ心なきは静なる心なく心くるしきよし
なり
みたりかはしきを　抄兩義あり此歌更衣のなくなり
たる事をいはむとてふせきし陰のかれしよりと云
りされとも父帝おはしませは帝への返歌にはゝ
かるべき詞なりさればみたりかはしきと云にや又
は此程のみたり心ちにかきさまもみたりかはしき
となり此義尚可然云々　弄兩義ありたゝ書さまの
事にて可然歟御らんしゆるすべしと云まて草子の
地に評して云也
いとかうしも　抄御門の御心なり　或秘抄聞にしの
ひたまへるにしのはれぬと也桐更衣の參り初し時
の事までとりあつめおほしいてらるゝなり
かくて月日は　抄まことに哀なるさま也古今に「身
をうしと思ふにきえぬものなればかくてもへぬる
よにこそありけれと云歌の心なり秘同
故大納言のゆゐこん　弄大納言の心さしを更衣の母
の聞えしを命婦の語り申たる故にかく仰らるゝ
也
かくてもおのつから　かくて更衣のなく成給へとも
若宮光源氏の成人したまはゞと母君もなくさめ給御
詞なり　弄更衣の母の事をおほせらるゝなり或秘
抄私云上の詞に更衣の母の命なかきのいとつらう
とあり命婦のそれを奏したる故に其詞につきて此
勅定あるへしあはれにおほしやるといふも更衣の
母をおほしめしやる也
かのおくり物　更衣の母の命婦への送り物なり常の

時ならは此おくり物をは御目にかくべきにあらねどゝ更衣のかたみにとのやうにおくられたる故にみかとの御めにかくるなり
なき人のすみか　花臨邛道士幻術をもて蓬萊山にいたりて楊貴妃にあひてそのかたみの物を使者にさつけし時金釵カンサシ也鈿合ハサミ也此二の物を各そのなかはを引折て給ひしよし長恨歌にのせ侍りゆけひの命婦は帝の御使にて更衣の母のもとへむかひし時かの形見にみくしあけの調度めく物を奉り給ふかんさしはさみなとてうとの具なれと玄宗の使はまさしく楊貴妃にあへり命婦はさもなきによりてなき人のすみかたつね出たりけんしるしのかんさしならましかはとおほすとはかける也　河奥入推碧衣女取金釵鈿合各折其半授使者曰爲我謝太上皇謹獻是物尋舊好也長恨歌傳　抄長恨歌をもちて書出るさま作者の心云はかりなし　或秘抄聞書方士を蓬萊宮につかはされし事なり方士がとりて來たはまさしく貴妃に逢て取て來るか是はなき跡の事なれはいとかひなしとなり又奥入にはかたみのかんさしとあり

御門
たづねゆくまぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく　河まほろしは方士の事也幻術士の名なゝ玉のありかは魂の在所也　或秘抄に今も方士かやうなる幻術の士もあらはいつこにありとたにもしろしめすへきものをとなりみかとの御歌なり
繪にかけるやうきひのかたちは　花長恨歌の繪につきていへるなり　奥入に大液芙蓉未央柳芙蓉如面柳如眉對此如何不涙垂　私云大液池之芙蓉未央宮之柳也
ふてかきりありければいとにほひすくなし　私云鶴林玉露曰繪花者不畫其香繪人者不畫其情繪雪者不能畫其淸繪月者不能畫其明繪花者不能畫其馨繪泉者不能畫其聲
たいえきのふようひわうの柳も　河俊成卿本に未央の柳の一句をみせけちにしけりこれは行成卿の自筆の書様云々源親行云六條院の女樂に女三宮を二月ばかりの青柳にたとへたり人のかたちを柳にたとへたる事一部の内に兩所あり無念なるに似たり然而芙蓉柳是又いつれも捨かたきによつてかきな

がらみせけちにしたる歟云々花行成自筆親行か本には未央の柳の一句を除たり始は見せけちにしたれとも後には一向に略したるにや爲相卿本には未央柳の詞あり或秘抄私云花鳥には此段の詞相違ありけに通ひたりしかたち色あひからめいたりけんよそひはうるはしくけうらかにこそはありけめと云々けうらかはきよら同心なり五音相通故也弄未央柳青表紙には有仔細不能注也　又或秘抄芙蓉柳も貴妃に似たる事はさもこそなれども更衣ノ事をおほしめし出るにはたくひなきと也　抄云貴妃はたとへ物有しにや更衣はたとへんかたなし是又一重うへを書出たり或抄云未央柳此句を俊成見せけちにせられ昔親行ノ父光行か使トして尋しは楊貴妃をは芙蓉柳にたとへ更衣をは女郎花撫子にたとふみな二句つゝにてけされたるはいかなるしさいあるにか俊成答云いかてか我は自由の事候べき行成自筆の本にみせけち紫式部同時の人なれば申合するやう侍つらん我も若紫の卷にてふえたる事ありたとへば女三宮を柳にたとへたり此たとへあまたに成によりてけちたるかと後にこゝろえ侍りぬ

然るに定家卿の本に此句をけたす俊成女に尋ければ書寫のあやまりなりあまりに對句めかしくてやけしたるかたもあるかと云々是によりて愚本不用之愚案定家まさしき自筆にて大液芙蓉未央柳もけに通ひたるかたちからめいたりしよそひはうるはしうこそありけめなつかしうらうたげなりしをおほし出るに花鳥のいろにも音にもよそふべきかたそなきとある書寫のあやまりと云へきにあらず其上いくたひもたとへん事何のさまたげかあらん又是に付てひとつの不審あり此たとへは楊貴妃が事長恨歌の文也此ものかたりにあまたありと云ふべからず然に此定本にけにかよひたりしかたちを更衣の事のやうにいへるおくのこと葉にもよそふへきかたそなきとこそ見えたれいかゝ心えわくべき又撫子女郎花の句定本に見えず此句あらん本にとりて彌更衣のたとへにあらざるべし然はけつまてはあまりの事にやとあり

からめいたるよそひはうるはしう　唐めいたる出立にては芙蓉柳なとにたとへたるもかくこそありつらめなり　吉（ウルハシ）也　實也實々しき體也

なつかしうらうたけなりし　河假借(ナツカシ)貞觀政要　篭勞(ネヤラウ)也
あまりうつくしうたを〳〵としたる人はいたは
しくおもはるゝこゝろなり　我心を勞して人に懸
にする心也　良亮日本紀　河ほけ〳〵としたる心な
り　或秘抄同し此段河花兩抄の詞に相違有　なつ
かしくらうたけなりしけはひは女郎花のかせにな
ひきたるよりもなよひ河云たをやかなる心なり云々　なてしこの露
にぬれたるよりもらうたくと有（河云京極北政所
從一位麗子本に尾花の風になひきたるとあり）或本には
此句なし　（花此一段の詞爲相卿の本にはかゝれ
す其心を案するに桐壺の更衣のかたちけはひを
覺し出るに花鳥の色にも音にもよそふへきかたな
じといへるに又しかも女郎花撫子にたとへ侍れは
前後の詞相違するによりて此こと葉をすへて略し
侍るにや河内か家の本によらは楊貴妃のからめい
たるよそひは芙蓉柳にたとへ侍り更衣なつかしく
らうたけなりしけはひは女郎花の風になひき撫子
の露にぬれたるによそへ侍りさりなから（頭注云抄云撫子女郎
花の詞入たる本あり不用也同未央柳みせけちの事源氏最秘抄などに事々しくのせたれども無用也　これもいき
てありし時の事なり今はその人もなく成侍ぬれは

帝の御心には花鳥の色にも音にもよそふへきかた
なしと思ひ給へりこの心をやりて見侍れは前後の
相違もなきにや但源氏の本一やうならす人の所好
にしたかふへし　弄青表紙の本には女郎花なてし
このたとへを略して花鳥の色にも音にもとあり詞
つかひ重疊せずしてきゝよきにや心は楊貴妃を芙
蓉柳にたとへしはうるはしくこそありけめ更衣の
事を思ふには花にも鳥にもよそふべき方なしとな
り芙蓉柳にたとへしはなほざり成べき也　河花鳥
事　雅正(マサタダ)　後花鳥の色をも音をもいたづらに物思
ふ身はすくすのみなり　春は櫻鶯夏は橘時鳥これ
らを花鳥と云ふなり定家卿説案之菅家御作に花鳥
の鳥の方に鶴を令作給云々
朝夕のことくさ　言種
はねをならへ枝をかはさんと　河奥入在レ天願作ニ比
翼鳥一在レ地願爲ニ連理枝一長恨歌　或秘抄曰南方有ニ比翼
鳥一焉不レ比不レ飛其名謂ニ之鶼一似レ梟青赤也符瑞圖云
比翼鳥者名曰レ鹿見爾雅　一名蠻見山海經　其狀如レ鳥一翼一目
其色青赤處南方崇吉金門之山　結胸　國東不レ比不
レ飛見山海經爾雅　孫子瑞應圖云王者有ニ孝德明至一山海經

云見則大水連理事 連理仁木也漢武帝元年生其外不可勝計 木連理者仁木也見晋中興書 或異木同枝或旁出更還合也孝經援神契云德至草木連理孫氏瑞應圖王者德化洽ニ八方ー合爲ニ一家ー則草木連理已上符瑞圖

在天願云々 注云鳥各一羽相比而飛爲比翼鳥長恨歌

天暦の御集に「いきてのよしにての後の後の世も羽をかはせる鳥と成なん 御返し 女御芳子宣耀殿

「かくちきることの葉たにもかはらすは我もかはせる枝となりなむ

風のおと虫の音につけても 是は御門の一段と深切に御歌のこゝろをかきあらはせりそれに弘徽殿のあそひなとしたまふをとかめていはむためにやおもしろし

うへの御つほねにも 或秘抄云禁秘抄云藤壺は上御局也女御更衣參上の所也近代御所たり 萩戸は弘徽殿の上御局女御更衣可參上是御門なと有所也云云箋云上局は藤壺弘徽殿の二局に限ると見えたり花族の此局を給る歟然るに桐更衣後涼殿を上臈に給はる事其非例なり眼を付べしとそ上局の事前に有

あそびをし給ふ うへの・さばかりの御歎をもしらすかほにもてなしおしたちたる心つかひおはする御方なり風のをと虫のねにつけてさへ物のみかなしう覺さるゝにとあれば宮中の人の心あらんはおなしなけき成べきをさもあらぬ所を書あらはしたり世中の人何事にも心をつかふべきをしへを書るなり

ものしときこしめす みかとすさましと聞召なり

ことにもあらずおほしけちて 草子地なり 或秘抄云大臣なと薨せらるゝとき事深淺によりて或廢朝五ヶ日三ヶ日なとなり 廢朝とは天子はかりみつから政にのそみ給はぬ也廢務とは天下の政をとゝむる也是は一日にかきるなり廢朝の時は音奏警蹕をやめ禁中に物の音なし清涼殿の御簾をたる數日に及ふとも吉日ならねば御簾をあげす以上禁秘抄 音奏警蹕とは舞なとまふやうの事ともなり出る時は警し入る時は蹕すと云ぞ音奏とは物の音をならす事を云ぞ樂を奏すといふ故也

いとおしたち おしたちは雅意に任する心歟 最押イトオシ

立(ダチ) 或秘抄曰 呂后記曰爲人剛毅佐高祖定天下
かと〳〵しき 河方(カト〳〵シ)日本紀 才學同 廉々あるへきやうに
かと〳〵しくあるなり 私云總て更衣なとの薨す
る時に廢朝なとにおよぶべからずことに數日の物
音なとをとゝめらるへきにはあらずそれを議をた
てたる所がかと〳〵しきなりされとも御門の風の
音むしの音にも御おもひのまさるへきほとの御愁
傷をしらすかほにすへき事頗無骨の事也時宜にか
かはらさる所を誡て云ける詞也世間の體よく〳〵
思ふへし

月も入ぬ 弄此詞殊勝也終夜の事さま〳〵過ぬる時
刻見るがごとし 或秘抄云まへの夕月と云て命婦
更衣の里にて物語の内に月は入かたの空きよくと
有て又かへり參りて有さま奏する内に程がうつり
て月も入ぬとたゝ一詞かき捨たる月落長安半夜鐘
の句にも劣らす五天至日頭應白月落長安半夜鐘是
は一二句三藏法師渡天の勞を云盡して合句に如此
云たる所妙處也是も色々の哀傷を云盡して月も入
ぬと今眼前の景氣をいへる所を顯すといへるなり

帝 雲のうへもなみたにくるゝ秋の月いかてすむらんあ
さちふの宿 御門の御歌なり心は明なりみかとの御
心にも弘徽殿なとのおしたちたる心より桐更衣の
ことを又おほし出る心もあるへく能々思ふべし天
上の月さへ猶くもれるに母君のあさちふの宿の露
けき中に獨思ひなけき給ひけむ樣を光源氏にそへ
ておほしやれる御心尤あはれふかし歌の結にもあ
さちふの宿おほしやりつゝと詞へつゝけていへり
おもしろし

ともし火をかゝけつくして 月もいりぬといひてと
もしひをかゝけつくしておきおはしますといへる
おもしろし 河奥入 夕殿螢飛思悄然秋燈挑盡未
能眠 長恨歌 或秘抄あさちふの宿おほしやりつゝの詞
つゝき夕殿螢飛云々と書きつゝけたるよりも猶あ
はれふかゝるへし 私云此詩も夕の空は螢のとふ
比より燈をかゝけつくすまで夜のふけたるさまお
なし心歟

右近のつかさとのゐ申す 亥一刻左近衛夜行官人初
奏時終子四刻 丑一刻右近衛宿申事至卯一刻內豎亥一刻
奏宿以聞 或秘抄云近衛の夜行とて左右の近衛宮
中をめくりて警衛をいたす亥の一刻よりはしまり
て卯の一刻に終る也丑の一刻より右近のとのゐ申

なれば夜のふけたるさまを書あらはせり　私云夜の更ぬ間は時を申さす亥の始より左近衛の官人夜行して時を奏する也丑の一刻より右近衛のとのゐ申也さて卯のはしめに夜のあくれは時を奏せぬ成べしとのゐの簡とは今夜宿直したる近衛の官人上日〻夜(シヤウニチシヤウヤ)を奏する義歟可尋

人めをおほして夜のおとゝに　河夜御殿(ヨルノオトド)　清涼殿にあり四方に妻戸ありなほ河にくはし　或秘抄に云あまりにひさしくおはしますもいかゝなれはなり

あくるもしらて　河奥入玉すたれ明るもしらてねし物を夢にも見しと思ひかけきや(ゆめをもひきやイ)　是も伊勢か長恨歌を詠するなり

猶あさまつりこと　河奥入春宵苦短日高起従是君王不早朝 長恨歌　花春宵苦短日高起と長恨歌に云り玉すたれあくるもしらてと伊勢がよめるも唐の玄宗の楊貴妃を寵し給し時の事也今の桐壺の御門は更衣にはなれおはしまして御歎の餘に萬機の政をも打忘れ給ふやうなれば君王不早朝事は同しさまなればなほ朝まつりことはおこたり給ひぬへかめれと書るやうの心さま心詞すくれておほえ侍る也

弄長恨歌を引てかけり更衣の別を貴妃に比していへるなり　私云伊勢か歌上句春宵苦短といふ心を述下句は魂魄不曾來入夢と云處を述るそ　抄長恨歌には貴妃か寵によりてなり爰は更衣の御歎ゆゑにおこたらせ給なり猶の字殊勝なり　或抄更衣の在世を覺しめすには昔は寵によりてあさまつり事したまはず今は御歎ゆゑにおこたらせ給ふ猶の字殊勝なり　或抄聞　長恨歌の朝政のおこりは貴妃か寵の甚しき故なるか爰は一きは書出せり此帝は更衣のなき跡にさへ御歎ゆゑおこたらせ給ふとなり

物なともきこしめさす朝かれひのけしきはかり　河朝餉之間也於此所供之　私云膳をオモノとよむなり　或抄朝かれひは女房の陪膳にてやかて朝餉の間に三度きこし召むかしは內々の御膳の心也されともさふらはさる時は公卿四位の殿上人しかるへき人をえらひて陪膳にさふらふ事もあるなり大床子の御膳は殿上人の陪膳にて朝夕兩度まゐるなり此物語にかける所は醍醐の御門の比なればいつれも

うるはしく是を聞食しける時分なれば御覽じ入ざ
るを心くるしと各見奉るとなり中比よりは朝かれ
ひを毎日一度つゝまゐらせて陪膳の女房御さはを
とりはしをたてゝ末をゝりかけていたすはかりな
りいつれも儀式計に成て小供御とて御乳母などの
奉る分にてうるはしく三度當の御所にてまゐるるな
り　或抄朝餉は女房の陪膳にてむかひ給ふ計なり
大床子の御膳はうるはしくきこしめす御膳なれと
もそれも御手をつくへき樣にもなきなり是は殿上
人四位五位詰番しての陪膳なりされはさふらふか
きりはとかけり猶秘抄に委し
すべてちかうさふらふかきり　前の段には陪膳にさ
ふらふかきりといへり爰は總別の事を云なり
さるへきちきりこそは　是は桐御門と更衣との宿因
なりさしも桐帝は延喜に比して書奉れば聖の御門
の事なるに此事ゆゑには政もちかふやうなるはた
だ事にはあらずといへるなりさて女事に政のちか
ひたる所は村上へ登十の倚侍參られてから萬機の
すたれたるを下にふくめり是其人一樣を摸せぬ所
なり

此御事にふれたる　餘の事は正路なる心見えたり御
寵愛の甚しきによりて此更衣の事につけては道理
をもまけたるとは後凉殿の更衣を外にうつし給ひ
し事なり
たい〳〵しき　河最（イト）甚（イト）退々（タイ〳〵シキ）　此字不審　河斷
々しきなり　又五音の通歟云々　河事（フナ）　昤態わさ
引歌二首有畧之　本歌「なにわさを我はしつゝか
天照やひるめの神をしはしとゝめん　末歌「いか
はかりよきわさしてか天てるやひるめのかみをし
はしとゝめん　抄今案只退々の字其心叶へき歟世
の中の事もおほし捨たるやうになり行はといへり
物はよろつにすゝむ道をさきとしてしりそく道を
きらふ事也退々はしりそく心なれは萬事を思召す
てゝ退出したる樣成べし　或抄斷の字は物をたつ
と云々　弄たえ〳〵しき或抄聞書　退なり又云惰の心也
私云退怠の心何も可然歟
人のみかとのためし　河私語長恨歌　河楊貴妃うせて
後玄宗位をさり給し事なり是もさやうにおはしま
さんすらむとなげきけるなり　弄河に見えたり或
抄等同上　或抄后に別て位なと去給し事唐に多し

或秘抄人のみかとは他の御門といふ事也　秘今案玄宗の位をさり給へるは貴妃か歎にあらさるか作様に心を付ずは無念也雖然大方は此説相違物語の作者も心をやりてかく書なせるにもあらんかしさゝめき歎きけりと爰にて更衣の御歎の事をばまつ書はてたるなり玄宗の事抄に委し略之

月日へてわか宮まゐり給　源氏の君服暇の日數過て參内なり　或抄聞書源氏君更衣の服はてゝかへり參内なり月頃御らんせられぬに今更成長のやうに見えて此世のものとも見えぬなり　或抄御説源氏五歳の年服過て參内云々　私云三年の喪なればさやうにもあるべけれども只月日へてと大やうにいひたる面白し

このよのものならす　人間のかたちなとゝは見えぬとなり

いとゆゝしう　或抄聞書前に更衣の母のゆゝしきにとあるはいま〳〵しき身なり爰はほめたる義なりゆゝしく奇特なる人とほめたるなり文字も同字を種々につかふ物なればこの物語の世俗の詞にも如此ましはる也　私云このよの物ならすすくれたるをあやうく思ひ給ふ心を云歟

坊さたまり給ふにも　桐壺の帝の第一の皇子後に朱雀院と申す春宮に立給ふ事なり春宮の事河に委し略之　此時まて坊にておはしましけるは辭して前坊と申べし榊卷に六條の御息所の詞にて見えたり此時分現存と見ゆ延喜皇太子文彦早世まし〳〵き此物語の前坊に比すべきにや又三條院御子小一條院は春宮を太上天皇になし給ふ此物語以後の事也と云へども如此例ある事を注するなり　或抄愚勘故禪閤御説　辭して前坊と申へしと云々此義辭退にては有へからす醍醐の御代東宮文彦太子保明薨後其子慶頼王立坊又々早世其後朱雀院立坊なり同聞書かくして翌年に東宮を立たまふ也總して桐壺帝をば延喜に比す延喜には東宮三人あり保明太子一番に立たまふ二十一歳にて薨す謚號文彦太子と申なり古今春日山にて賀の歌の末の詞書にあり其子慶頼親王をたつ又御邪氣によりて早世河に天慶の御門朱雀院をたてゝ延喜の御跡をつきたまふなりさるほとに此春宮も承平の朱雀院に擬して書ると見えたり先坊をば文彦太子に似せたりいつれも坊

のたしろき有しなり
ひきこさまほしう　源氏を東宮に立はやと桐帝の思召なり　是漢の高祖の第一子呂后腹の惠帝をさしおきて寵愛の戚夫人はらの趙王如意を春宮になしたく思はれたるにたとふるなり其時張良かはかりことにて商山の四皓をよひ出して惠帝へつけたるを高祖の見て羽翼已成と云てとりかへられさりし事にたとへたり
御うしろみすへき人もなく　或抄秦書曰設レ變致レ權所以解レ結子房用之背致二四皓一而立二惠帝一
かきりこそありけれと世人も　弄光君は寵愛にてましませとも非義にまかせおはしますこと殊勝の義也　河世人も御いみ名の字也よの人とよむへし或抄是は後宇多院の御諱世仁なれば是をさけん爲なり後嵯峨院御諱邦仁なれば儒書の經史のうち邦人とあるをくにたみとよむ故實なり唐にも諱字さくる事勿論也
女御も御心おちゐ給ひぬ　抄弘徽殿の安堵也
かの御おは北のかた　更衣の母君源氏の祖母也　河おはとは祖母を云　抄祖母おほは皆同見子舍　わかむらさきの巻にも有　拾遺第九源重之母のあふみのこふに侍けるにむまこのあつまよりのほりていそくことは侍てえこのたひはあはてのほりぬることゝいひて侍けれはおはの女のよみける「おやの親と思はましかはとひてましわか子の子にはあらぬなるべし
なくさむかたなく　更衣の事を母君のなくさむかたなく歎くなり　或説源氏の春宮にも立給はぬゆゑ思ひのそひてなりと云々　此義用かたしたゞ更衣の事を思ひなけきし也
おはすらん所にだに　抄更衣の後世生るゝ所へ行たきとなり
又これを　桐帝の更衣の母のことをなけきたまふなり
此たひはおほししりて　源氏の母君更衣の失給ひし時は何の辨へもなかりしを此度は六歳になり給ふ故思ひしりて愁傷あるなり
とし頃なれむつひ　源氏の祖母のいひおきしことばなり
いまは内にのみ　祖母うせ給てから御うしろみもな

けれは内裏にのみおはしますなり

なゝつになり給へばふみはしめ　皇子七歳御書始例村上天皇承平二年三月廿一日　一條院寛和二年十二月八日　花御書始には御註孝經或は貞觀政要を讀始たまふなり御註孝經は玄宗の註なり　博士讀云御註孝經序五字尙復云此計(コヽマテ)次尙復讀五字如先皇太子親王等の書はしめに聊かはる事とも有なり　秘抄に西宮抄江次第等引之略之

あまりにおそろしきまて　何もあまりすくれたる人は世になかゝらぬ人なとあり帝の御心也

はゝきみなくてたに　母更衣の存生ならねば人々のねたみも有ましきとなり

みすのうちにいれ奉り　むかしはをさなき人なともみたりかはしく簾中なとへはいれぬ事なり

いみしきものゝふ　河夫物部等廿五部人同帶二兵仗一天降供奉す舊事本記　物部氏遠祖天津麻良神代に兵を取て天孫天降給し時御さきをうけたまはる以其子孫諸の物部を領して武勇の道を掌る其後勇者をものゝふといひならはすなり

あたかたき　河敵　仇同　怨同

さしはなち給はす　弘徽殿なとも源氏をえ厭却せぬとなり

女みこ二所　源氏のあね宮たちなり朱雀院御一腹なり　朱雀院御母弘徽殿女一宮同女二宮御腹別人前齋宮御母弘徽殿

なすらへ給ふへき　姫宮たちの御かたち源氏君に及はぬ事をいふ也

御かた〳〵も　或抄爰は女宮二所と弘徽殿の女御との事歟　聞書に云御兄弟の女宮たち又自餘の女御后たち也

なまめかしう　花なまめくに二の心あり嬌たるをなまめくといふは女郎花の歌の心なり又生の字をなまめくといふはものゝなま〳〵しきかたなる心なり又物語なとになま〳〵のかんたちめなと云は根本種姓よき人にあらす今はしめて公卿なとになる心なり又人のふるまひにつけてならぬ事をばなまなましきと云は伊勢物語に源のいたるか事をなまめくといへるかことしかやうの詞は所により事にしたがひて見侍へき事なり

たれも〳〵　えさしはなち給はすとは弘徽殿の事

これは自餘の后女御となつかしき物に思ひきこえ給へりと云歟　此段は弘徽殿方の御兄弟中はかりを云上段は物ねたみの諸人を云

わさとの御かくもんは　學問はわさととりたてゝし給ふ道なり　是は勿論さとくかしこくあそひわさにしたまふ事まてかしこきなり

ことふえのねにも　河箏柱附　蒼頡篇云箏頌耕反俗云象の古度形似琴短有十三絃柱高三寸　風俗通云本秦聲也或曰蒙恬造　横笛律樂書圖云音敵和名與古不江本出羌漢張騫使西域昔傳一笛風俗通曰武帝時丘仲所造或黄帝時伶倫造之　雲井をひゝかすは徹天の心なり

うたてそなりぬへき　あまりよろつにすくれたる事ともをいひつゝけばまことしからす人の思はむほとの心なりといふなり草子の地なり

こまうとのまゐれる中に　高麗人河應神天皇廿八年高麗王遣使朝貢　むかしは三韓もみな來朝したるなり　仁德天皇の時王仁なとのことし渤海客なと云皆此類なり

宮の内にめさん事は宇多のみかとの御いましめあれば　河寛平遺誡云外蕃之人必可二召見一者在二簾中一見レ之不レ可二直對一耳李環朕已失レ之慎レ之　是を案するに遺誡のことくならは蕃客に直に對し給ましき由を被載といへども宮中にめす事はいましめられざる歟然るに今の詞の本文にたがふ歟もし又此外別に勅制ある歟如何つく〳〵是を思ふに此文さしてめし見るへき故なくはたやすく宮中にめすへからすと云心をふくむ歟作者の料簡意をとつて文によらざる歟

花寛平の御遺誡に必めしみるへくはと書給へる必の字の心はめされで叶ふまじき時の事なり是にてうちまかせてはめさるまじきよし聞え侍る也河花等に見えたり　或抄河海に見ゆ可然云々　秘河には一わう不審をあけてたやすく宮中にめすへからさるなりと云々花には必の字々眼なりうちまかせぬ義也云々

鴻臚館につかはしたり　日本の玄蕃寮なり　職員令曰鴻臚館は玄蕃寮にあり　河寮頭を鴻臚卿と號す玄は遠也蕃は藩也遠藩より來朝の客に接する所なり古來此所にて渤客に餞する詩句多し漢朝の鴻臚寺又此義也此館延暦遷都の始東西の大宮に是をおか

る然るに弘仁に東の鴻臚舘をもつて東寺として弘法大師に賜ひ西の鴻臚舘をもつて西寺として修因僧都に賜其後七條朱雀に鴻臚舘を立て三韓の官舍をその中に置く今のかつ塚の邊云々　花職員令の玄蕃寮をば法師まらうとのつかさとよめり玄は僧蕃は客なり僧尼といふものを昔百濟國より來朝せし故におなしく此寮につかさとるなり又鴻臚の臚は腹の前を臚と云鴻の鳴時聲を出す所なる故に鴻臚の臚は聲を傳ると云心なり異國人來朝の時は通辭といふつかさありて兩國の聲をつたふる也　箋鴻臚の臚は聲を傳る心なり又鴻鴈は異國の鳥なり　河異國の聲を傳ると云義なり玄蕃寮を法師まらうとのつかさと云事は異國人は僧尼の始て來朝する故に云なり云々

右大辨の子のやうに　此辨たれとも見えす　河元明天皇和銅五年十一月辛巳加左右辨官史生各六員通前十六員　尙書者管轄之任權衡之職也上象七星七辨の故也漢朝尙書郎親近の官也仍口含雞舌香手握蘭故云握蘭之職也　私職原云官中事大辨所執行也仍爲重職以下略之無文才人不居之官　奥うつほの物かたりにも如此

事あり西宮抄にうつほの物語にも相人に右大辨の子としてあふ事有

ゐてたてまつる　河將ヰテ

相人おとろきて　聞書ニ右大辨の子と云をも先不審するなり　或抄にも御說に如此とあり　河三代實錄に仁明嘉祥二年渤海の客光孝天皇の親王にておはするをみて必天位にのほるへき人と相したる事なと有其外史記等を引畧之

河大鏡の勘物云　古老傳云延喜の御時異國の相人參來天皇簾中におはします御聲をきいていはく此人國主たる歟多上少下の聲なり國の體に叶ふと云云天皇はぢて出給はず先坊保明左大臣時平右大臣菅家列座す勅によつて相して云第一人菅家才能國に過たり各此國に叶はず官に久しかるべからざる歟貞信公淺膓公卿にて列をはなれて伺候し給ふ相人さえきつて申ていはく此人才能心操容貌國に叶へりさためて久しく奉公せん歟云々案之古賢皆此註をのす頗うたかひあり保明太子本の名はたるあつ延喜三年に誕生同四年二月十日太子にたつ二歲同廿三年三月廿日薨二十一歲聖廟は昌泰四年正月廿五日太宰權帥にう

つり給ひたれば保明誕生以前御遠行なり列座のよし頗參差傳記のあやまり歟相人參來の事は實事歟私云此外西宮左大臣實事等略之　或記曰西宮左大臣行幸の供奉し給けるを作（トモ）の別當廉平と云相人見て容貌人にすくれ給へりいまたかゝるいみしき人をみずとほめ申けるかうしろを見て背に苦相あり恐くは謫所に赴き給ふべしといひけり　高麗人の詞にも光源氏に聊亂れ愁ることやあらんといへり相似たるなり　和漢蹤跡一同歟以上河海　西宮事其在所朱雀院の西也時の人號二西宮一云々

國のおやとなりて帝王のかみなき位　花　國のおやと成とは六條院の太上天皇の尊號をえ給へる事をいへりみたれうれふるとは須磨の浦へうつされ給へる事也おほやけの御かためとは攝政關白の天子を輔佐し奉る事也源氏は終に尊號をえ給へりしからはおほやけの御かためにて其相たがふなり

弄又そのさうたがふべしとは大やけのかためと成給ひなはみだれうれふる事の相はたかふべしと相しけるにや或抄相人のみたる所たがはす終に國の親となりて太上天皇の尊號をえ給へる也但はしめより帝王のかみなき位にのほり給はゞみたれうれふる事やあらん天下輔佐の人臣にておはしまさばそのみたれうれふるの相はたかひてよかるべしと相したるなりこゝをよく桐壺のみかとの思召とりて源氏になし奉られしなり花鳥の評判是にはことなりよく分別あるべき歟　抄箋正義曰源氏其生天位にのほるへき相ある人なりされともかくのことくならは必其身をあやまるべししかる時は人臣にくたつて國家の輔佐として吉たるべき歟と相するに又臣下にも成て有ましき人なりはたして後には尊號をえ給ひしかばおほやけのかためと見るも又其相たがふべしと也此末の一段は花鳥の說可然宗祇の說は天下輔佐の人臣にくだられうれふる相かたがふべしと云々非也又の字相違せり又花鳥のみたれうれふるを左遷の事と見るも非なり弄花に淨飯王太子誕生の時河私仙人相する事右禪抄に委し略之

辨もいとさえかしこき　河　才（サエ）　伎（サエ）莊子　或說云さえは伎藝のこと也本才にあらすと云々案之和語はあながちしからすたゞ才覺のことなり內教のさえとも

有　弄才のさの字淸濁如何一禪合點右大辨才ある人
なり　或抄さの字淸べき由一禪說と云々然れとも
文字古本濁て聲をさすなり其故は神樂のさいのお
のこをもさ文字濁なりにこりて讀べきなり
はかせにて　河天平二年始置二文章博士一　漢書曰明
於古今溫故知新謂之博士　此外猶河にくはし略之
文なとつくり　箋作文なり鴻臚館にて此事連綿文粹
に多し　秘延喜八年の夏後江相公朝綱此所にて蕃
客を送る時の詩云前途程遠馳二思於鴈山之暮雲一
後會期遙霑二纓於鴻臚之曉露一云々或抄云此時蕃客
泪をなかし感して後數年をへて此朝の人にとふて
いはく朝綱三公の位に至るやと答云いまたし渤海
人いはく日本國は賢才を用る國にあらすと云こと
をしりぬと云々
けふあすかへりなんと　相人の源氏の君をありかた
き人とめてたてまつるなり　河感情日本紀
かやうに相したるは喜悅なからかへりてとは却て
はなり結句は名殘のかなしかるへき心を相人の面
白く作りたるなり
みこもいとあはれなる句を作り　源氏の作り給ふ詩
なり　或抄うつほ物語に云式部大輔左大辨かけて
淸原のおほきみありけりみこはらにをとこ一人い
てきにけり心のさときことかきりなし七歲になる
時ちゝこまうとにあふ時此子父にもまさりてこま
うとゝ歌をつくりかはしけり十二歲にてかうふり
せしなりこのとしかけかたちけうらにさえのかし
こき事さらにたとふべきかたなしと云々源氏の君
も七歲にて文はしめなとしこまうとにあひて句を
つくり給へる事十二歲にて元服し給ふ事旁思ひよ
そふる歟
いみしきおくり物とも　弄梅かえの卷に此進物の沙
汰有　秘抄同　秘箋曰此物語悉小因大果の道理に
て書あらはせりふかく是を思ふへし　こゝにおく
り物の事をそとかき梅かえの卷に薰物の末に合て
かけり
おほやけよりも　帝より相人に色々の物をたまふな
り
おのつからことひろこりて　隱密の事も自然に聞ゆ
るなりはしめは右大辨の子のやうになにかしなと
して高麗人にもまた此國の臣下なとにもすこし御

隱密のよしなり
おほちおとゝ　朱雀院御外祖弘徽殿の父二條の太政大臣也此時右大臣也
いかなることにかと　春宮をたてかへ給はんかなと思ふうたかひのある成へし
みかとかしこき御こゝろにやまとざうをおほせて
河和國の相人也　藤原仲直か光孝天皇を相し奉り廉平か高明公を相せしは皆やまとざうなり　弄花にあり倭國の相人もかやうに申となり　聞書に云やまとさうにおほせてといふへきをやまと相をといへる不審なり但おほするは課の字なり課試とはコゝロムルなり和國の相をこゝろむるなり是稱名院の見出されし義也然は三光の義又如此　私云此段いさゝか一義あり以前の註にてはみかとかしこき御心にてといひておほしよりにけるといふ所きさわかぬ所侍りおほするとは人を相する事をば相をおほするといふなり桐壺は延喜の聖主と比し奉ればかしこき御心にみかとの源氏に相をおほせておほしめしよれる所ありていよ〳〵相人に見せ給ひつればおなしすちに申なりさてこそ帝の御心と相人の心と相應したればまことにかしこきと思召なり大鏡に相人ならねとよき人は物を見給ふなり是は御堂關白の六男馬頭顯信の君出家の相ある事をいふ所にいへりされは必相を御覽したる所あるへし又古事談に先坊時平菅家を相し奉りし時貞信公をなにと日本に相應したる臣下にて國に久しく奉公せられんと申たるを寛平法皇聞召て三人の事は見及ばず貞信公におきては必向後よるへき由御覽せらるゝ所なり是によつて第一の姫君を朱雀院の西の對にて嫁娶の義あると云々貞信公は其時參議の大辨なり寛平法皇おなし東の對におはします云々是又天子の人を相し給ふ事なり其子を見る事父にしかすといへり愚案に桐壺のみかとやまと相を源氏の君におほせてかねておほしめしよりたるに相人の申たるもたかはぬと聞えたり此事愚意の僻案なり如何相をおほするも課の字なり卜筮元龜にもなにの課とあるは其生れの人にあてかひて見る心なり
いまの右衞門督ぞとくよりこの君をは出家の相こ

そおはすれとの給て中宮權大夫藤のうへに御せうそこ聞えさせ給ひけれどさる相あるべきはいかてとて後に此大夫殿をばとり奉り給へるなり正月に内より出給て（出家しイ）この右衞門馬頭の物見よりさし出たりつるにそむけるに出家の相ちかく成て見えつればいくつぞとの給ければ頭中將十（十九イ）にこそなり給はめと申合ければさてはことしそしに給はんとありけるにかくと聞えてこそされはよとの給ければ相人ならねどよき人は物見給ふなり

みこにもなさせ　源氏を親王になし給はぬ事なり

無品親王の　外戚（ゲシヤク）のよせなきにては無品は五位なりげしやくは外戚（クワイセキ）かたなり母更衣ゆかりの人々なるべしよせなきは無緣なり漂（タヽヨウ）日本紀　洋々（タヽヨウ）文選

親王は一品より四品迄は有品なり五品に當るをは五品とはいはず無品といふなり童體の時親王宣下あるは必無品なり光源氏いまた元服し給はす是によりて無品親王とはの給へり又親王になし給は天位につけ給はむ爲なり然るをみかとやまと相をおほせて此君を親王にもなさせ給はぬなりよせなきとは一のみこは右大臣の女御の御はらにてよせおもくうたかひなきまうけの君といへるに對して源氏君をは外さくのよせなきとはいへり御母かたによせおもき人なければみこにもなし給はぬはいとかしこき御おきてなり弄秘等同之　秘箋源平藤橘の四姓は正六位のむまれなり河五位下を始て賜ふを叙爵といふ親王は五位の生れなり河四品をはしめて給はるを叙品といふ叙爵といふに同し叙品せぬを無品とす生れなからの位にて親王の宣下計りをかうふれる故なり　私云職原云親王元服之時叙品當代后腹親王は三品歟自餘は四品云々然らは后腹の當代のみこの位は四位にて生れ給ふ故也始ての叙品三品歟其外は五位にてむまるゝ故にはしめての叙品四品歟源氏は更衣腹なれば無品成べし或抄惟仁は外戚のちかひにて清和天皇位につき給ふさやうの事まゝあること云々

わか御世もいとさためなき　桐帝の御治世の事也ちゝ御門の御代ならすは源の事をも人か用ましきとおほしめすなり

たゝ人にて大やけ　凡俗（ウト）日本紀　直仁 伊勢物語眞名本　王道補佐の臣とおほしめすなり

いよ／＼みち／＼の　前にふみはしめの事わさとの御學問なとゝ有仍いよ／＼とかけり　弄天下をたすくへき人は博學ならてはあしかるへきよしみえたり　無學行レ政猶無レ燭夜行云々人不學不知道ともいへり抄同河是を略之　私云西宮云凡奉公之輩可使備文書

　禮儀事　十一部
江都集禮百廿六卷　江革禮十卷　已上唐書　内裏式三卷　式暦
儀式十卷　年中行事　外記廳例　辨官記　叙位例
除目例　外記等文書目錄

　政理事十部
群書治要五十卷　貞觀政要十卷　已上唐書但君臣之間事在此書也　諸司式
延喜式五十卷　三代格各三十卷今案式有百十二卷　天長格抄官奏報申文例等　宣旨目錄　交替式三卷但新式一卷　勘解由使勘判
新定法式

　罪法事　三部
律十二卷　令十卷相兼政理方也　類聚檢非違使宣旨勅記事

　諸雜事
類聚國史二百卷　これらは必臣下の學ぶへき物ともなり

きはことに　源氏きははなれてかしこきなり

たゝひとにはいとあたらしけれと　秘箋曰主上は御廣才博學之義臣下よりも明鏡たるへき文なり眼をつくへし

世のうたかひおひぬへく　天子の位なとを望給はんと人の思ふへきなり

すくえうのかしこき道の人　宿曜道の事廿八宿九曜の行度をもちて運命を勘るなり弘法大師入唐之時宿曜經六十卷渡之近代絶之　弄宿曜道北斗道の法師なり秘抄同

源氏になし奉るへく　河嵯峨天皇弘仁五年五月八日男女都三十人賜姓是源氏の始也大方序分にも注せしぞ此以下略之

　河代々源氏大臣外除之
左大臣信　左大臣常有イ　左大融以上弘仁　右大臣多
右大臣光以上承和　左大臣能有天安　左大臣高明
左大臣兼明以上延喜以下又略之
花云延喜の御子高明親王は元服以前に源氏の姓を給六條院其例也秘抄載之

三代の宮つかへに　弄只久しく宮仕したると云心可

然歟　或抄河に光孝宇多醍醐かとあり然ともさして三代にてなくともたゝ久しくといはむため也
きさいの宮のひめ宮　これ又藤壺の事なり　弄此詞先帝はおはしまさて后宮はかりおはすと見えたりしからは光孝に准し奉るべき義歟もみちの賀を寛平に准せば御賀の比なほおはしますべし又其末にとしの始の參座し給にも內春宮一院とありいかさま此先坊ふち壺の參り給時の事なとみかと現存し給ふとは見えす旁光孝の准據可然なり
いとよう覺えて　箋前にみやす所に似給へる人をとあり　いとようおほえてとはにかよひ給へる心也
御かたち人になむと　ありかたき美人と云なり容貌たくひ有かたき人と云也　人のひもじ濁て讀なり
まことにやと御心とまりて　箋前にいとよう桐更衣におほえてとあるを帝の御心にまことさやうなるかと云所に御心とまりて御懇に仰らるゝなり更衣をおほしめす御心いよ〳〵あらはれたり
母きさき　薄雲の母后也
春宮の女御のいとさかなくて　弘徽殿なり　さかなきは不レ良（ナルヨカラ）也　恐同上　惡なり
あらはにはかなく　それゆゑといはむ計なり
ゆゝしうと　いま〳〵しくとなり藤壺の母后の心也
すか〳〵しうも　速なり又はしか〳〵と云心也云々
わか女みこ　桐御門の姬宮のなみに思召さむとなり
さふらふ人々御うしろみたち　後見たち也
御せうとの兵部卿のみこ　母后の御兄弟なり後に式部卿紫上の父なり
御心もなくさむへく　藤壺の御心ほそきさまをなくさめんとなり
藤つほときこゆ　禁中五舍のひとつなり　河飛香舍（キヤウシヤ）
藤懸二蝦手（カヘテノ）木一但上古非二此木一歟　建曆御記
あやしきまてそおほえ給へる　奇特なるまて桐更衣に藤壺の似給へるなり
是は人のきはまさりて　藤壺の女御は皇女なれは也
おもひなし　人の心からちかふ事なり
えおとしめ　あなつられぬ心なり
うけはりて　河諾（ウケヘリ）受張（ウケハル）請歟云々　うけ給心　祕その張本となりて不足なきなり　私云理運に我物にしたる心なりあかぬとは藤壺の族姓御かたち以下不足なき

よしなり桐更衣は族姓さしもなきをと思から人の
おとしめたるなり
かれは人もゆるし　更衣の事也　箋云草子地批判也
おほしまきるゝは　弄此詞尤餘情あり哀なる心也
祕おもしろき書やうなり
こよなく　無超なり所によりてかはるべし是はこと
の外の心なり
あはれなるわざなりけり　祕かく書とめたる所餘情
かぎりなし
源氏君は御あたりさり給はぬ　あたり不遠なり　或
抄高明公わらはにて七歳の時源の姓を給故に源氏
君と申なり其例なり
ましてしげく　藤壺は御寵愛ゆゑ桐御門のあたりは
なれ給はぬなり但ましてしげくわたらせ給とは藤
壺の御方へ桐の細々おはしますと也此説然るへ
し
いつれの御かた　是は自餘の后女御たちなり
うちおとなひ　餘の女御たち年のすこし行たるなり
いとわかううつくしげ　藤壺のことなり　ねん比に
かくるゝなり

もりみたてまつる　源の藤壺をみるなり
母みやす所　桐更衣なり源のすこしもおほえぬなり
三歳の時なれは也「なき人のかげたに見えぬやり
水のそこは涙をなかしてそこし此歌に不及歟
いとよう似給へりとないしのすけの　前にいとよう
おほえてとあり藤壺を更衣に似たりと申しゝとな
り
わかき御心に　源氏の母更衣に似たると申故に藤壺
をなつかしく思ふとなり
なつさひ　眤近なり　むつましく近つきたる義なり
うへもかぎりなき御思ひとちにて　河共萬(トチ)　みかと
藤壺源おとらす御寵愛の人とうしにてといふ也
祕主上の御心には源氏をも藤壺をもともに大切に
思てなうとみ給そと藤つほへ源氏の事をきこえつ
けらるゝなり
なうとみたまひそと　河疏史記厭同上外人(ウトキヒト)文集　せちに
藤壺のかくれ給をみかとのかく仰らるゝなり
あやしうよそへつべき　或抄更衣によそへつべき藤
壺桐更衣に似たまへばかくの給なり　源氏のかほ
たちふぢつほによそへつへく見えたまへればおほ

しめしゆるしてらうたくし給へと御かとの仰なり

なめしと　河無禮 新撰萬葉集 輕ナメシ 日本紀

つらつきまみなと　秘源氏の君のつらつきまみなとはよく更衣に似給ひたりしか今又藤壺を御覽するに更衣によく似給ひたれは源氏のかほたちにもゆゑなからすかよひて見え給ふとなり

にけなからす　無似氣なり但是は人間なからすなり驚ましきやうなる心也所にしたかふへし　奥入愛増の心なり　花にけなきは無似氣なり　似氣なからすは似たるとなり

おさな心　源のなり

こよなう心よせ　藤つほへ源の心よせなり

又この宮とも　秘弘徽殿の春宮の女御にてわれはと思ひ給へは此藤つほをもにくみ給ふに源氏の君は藤つほとへたてなくましませは過しかたは母君なくてたにらうたうし給へとみかとの仰にてすこしなほさりに覺したりし心もとり返し又にくみ給ふとなりそは〳〵しきは側々（ソバ〳〵）敷なりまさまにもむかはぬそはたちたる心なり

物しとおほしたり

よにたくひなくみたてまつりたまひ名たかうおはする宮　諸抄一同に弘徽殿はらの宮たちのことと云々聞書同前　名たかうおはするとは春宮なとの事也愚案然らは此よにたくひなしとは弘徽殿の心歟愚案此段いさゝか不審あり弘徽殿腹の姫宮たち朱雀院なとの御かたち名たかき事聞えす前に姫宮たちも源氏の君になすらへたるたになしとこそみえたれしからはよにたくひなしと御門の御心に藤壺をたくひなくおほしめし生得御かたちの名たかくおはするにくらへ給ふにも猶源のかたちはにほひにほひとしたる所のまさりたる也前にかきりなき御おもひとちともあり御かたちをもよそへつへきなといへりこれにて了簡をくはふる物なり是又僻案成へしや

よの人ひかる君と　河宇多第四の皇子敦慶（アツヨシ）式部卿のみやを玉光宮と申す好色無雙の美人なり又光孝天皇の御子式部卿是忠親王始は源氏にてひかる源中納言といふ後に親王になりたまふ又仁明天皇の御子西三條右大臣光といふ又日野系圖といふものに左大臣高明公を光源氏と是を云皆これらを下にふく

みてかけるなり
藤つほならひ給て御おほえもとり／＼なれはかゝやく日の宮と聞ゆ　弄榮花物語六君をかゝやく藤つほといふ御堂關白女上東門院十二にて入内の事あり花に中宮の參り給ひしをりこそかゝやく藤つほと申けれ　花上東門院藤壺にまし／＼しをはかゝやく藤壺とよの人申侍り當代の事をもよりきたれる事をば此物かたりに書たる事おほきなり　私云ならひ給てとは源氏にならひなり御おほえとあればかたちもといふ心有されば此前に名たかくおはする宮といへる所愚案のおもむきもいはれあるに似たる歟如何
この君の御わらはすかた　源氏の君の童形也
かへまうく　わらはにてうつくしきものもあけおとりとて元服してかはる事もあるなり末に其心あり御門の思召御心なり
十二にて御けんふく　河禮記曰天子之子十二而冠(カウフリス)云々人生て十二を一周と云ふ此年冠する和漢の例なり此外畧之左傳曰歳星十二歳一周天道大修故自夏殷天子皆十二而冠

ゐたち　奥入に居起なりたちつゐつなり
かきりある事に　一世の源氏元服の儀式はさたまれる事なりそれに猶事をくはへらるゝなりたゝ何とかなとおほし入たる成へし
一とせの春宮の御元服　過しかたを後にいふとておほく一とせといひつけたり朱雀院立坊以後の御元服なるへし
南殿紫宸殿　天皇御元服も同殿也此殿の事河に委
よそほしかりし　河莊(ヨソヲシ)日本紀
おとさせ　おとらすとなり
ところ／＼のきやうくらつかさこくさうゐん　河所饗　內藏寮(クラツカサ)　穀倉院(コクソウヰン)
秘北山抄云所々饗膳事
王卿　廳女房　別納　殿上　藏人所　兩亮諸大夫二百膳　穀倉院　屯食五十具盛五十具　廳別納各廿具　以上廳和例云々　同內藏寮　近衛南堀川西元明天皇和銅元七月丁酉　內藏寮始置史生四員　仁明天皇天長十年八月丙戌勅穀倉院西南角地東西各卅丈南北各四十丈宜爲內藏寮作之處　私云內藏寮諸國の綾絹綿なとを納おかれて御服の裁縫以下をつかさとる官也　秘穀倉院二

條南朱雀西納畿內諸國錢無主位職田及沒官田大宍稻等諸庄物勤ニ年中饗ニ有公卿及四位五位別當預リ藏人等　秘此所には五畿內諸國の錢無主の位職田沒官なとの稻なとを納らる官位につけて田のあるなり年中の饗膳かたをしたるなり

おほやけことにつかうまつれるおろかなる事もこそとて　おほやけはことひろき故に何もそさうなる事のあるをさやうになきやうにと取わきて仰らるゝなり

おはします殿のひんかしのひさしに　清涼殿なり中殿とも云常に天子のおはします故におはします殿とかけり殿をばてんと讀へし清涼殿の義河に委箋曰清涼殿にての元服は親王一世の源氏なとなり天皇太子は紫宸殿也但延喜御門太子の時寛平　年七月三日清涼殿の簾前にて元服をくはふ大夫時平權大夫菅家加冠なり理髪は左中將定國なり其日寛平の御讓を請給ふ　花西宮抄に云一世の源氏の元服　注御裝束親王の儀におなし但源氏の座まこひさしにあり西面北上なり前に圓座をおくその下にりはつのくをおくやないはこにいるひきいれ着座源氏をめす即座につくまたくら人をめしてりはつの具をおく理髪めされて圓座につく次に巾子を入て便所にさふらふ引入座に着ひき入てしりそく冠者くたるものもさふらひにて黄衣をきるつきに仙花門よりいりて拜舞つきに引入に祿をたまふ拜舞公卿以下御遊盃酒あり源氏は四位の上に天皇さふらひの倚子におはしますつく公卿ニ饗祿を給ふ本家よりとんしき廿具六諸ちんにわかつ今案親王の元服にはひの御座をてつして大床子二脚をたてゝ出御あり源氏の元服には殿上の御倚子をうつさるゝなり今も小朝拜なとの時は六位藏人二人殿上の御倚子をかきてたつる事あり花の異本に西宮抄に御ニ侍倚子ニとあり殿上の御倚子をうつさるゝと見えたり此物語の心と相違なきにや西宮抄のことくは御裝束親王の儀におなしとあれば猶大床子の前にたつべきにやその末に天皇さふらひの倚子におはしますと有殿上の御倚子はもとのまゝにてありと見えたり延長七年二月十六日清涼殿にて當代の源氏二人元服のこと李部王記式部卿重明親王の記與入にのす略之或抄西宮左大臣高明小倉中書王兼明二人源氏にて爰元服このみこたちなにことも世にすくれたまへれとも

更衣はらにてよせなき故源氏になり給ふいつれも延喜の皇子なりかやうの事ををりはへてかける歟云々

ひんかしむきに　箋曰母屋の御簾中入ひの御座はひんかしのひさし南の二の間しとねをしきたゝみ二帖をしく北むき元服の時ひんかし面向云々理髪の座は親王の座の東にさけ圓座をしくなり

いしたてゝ　倚子　箋云南殿にての時は倚子を用るなり清涼殿にては倚子を用る事なし是は臣下の事なりおよそ倚子は南殿にての義なり兀子と倚子と兩說なり冠者加冠おの〳〵平文の倚子なり但公卿の座は氈代をしかす案之に此段句切に心あるへしよみきりて是は主上の御倚子なり小朝拜の時のことく成へし引はなしてよむ時は常の平座と聞えたり然は倚子の先例詩に不及

くわんさの御座　冠者のはけふ元服する人を云源の事なり

ひきいれの大臣　是は加冠の人なり理髪の人かみをはやしもとゆひを取て冠の巾子はかりを見せてのくを加冠の人よりて冠をきするなりこれをひきいれとも加冠ともいふなりつねの冠の巾子をぬくやうに用意するなり

さるの時にて源氏まゐり給　抄成明親王天慶三年二月十五日申時綾綺殿の東廂にて御前において元服をくはふ此時刻ほとの事も心をつけてみるへし先例なきをばかゝぬぞ

みつらゆひ　河髮淑也　或抄童裝束の時は總角とてみつらゆふ物なり

大藏卿くら人つかうまつる　花諸說有と云とも下の詞にいときよらなる御くしをそくほとゝあれは理髮の人を云と聞えたり然らは大藏卿のくら人は藏人頭大藏卿と云心也　或抄河海に種々の注あれとも花鳥の義然へし藏人頭の大藏卿理髮したる成へし此事弘安の源氏論義にもひとつの難義にしたれとも今のやうに心えてみるにわつらひなき歟其外諸抄花鳥の說可然云々　又河海には大藏卿は理髮の人藏人は役送の人歟不用以下略之

みやす所のみましかは　秘元服の時后宮簾中にさふらふ例なり或抄まことに懷舊の御心さそとあはれなる御事也　延曆七年正月甲子皇后前殿に御す

延喜の御記云承和五年の日記に女御尚侍のれうに障子二脚をたつ又屏風をもつて座のうしろにひくと云々

かうふりし給て御やすみ所　西宮抄云親王しもさふらひにおりて衣をあらたむ黄衣なり御やすみ所は冠者の休所なり　康保二年八月御記に下侍東第一間施立屛風其中上鋪二枚茵一枚を敷て親王衣をかふる所とす西宮に見えたり　私云殿上の次を下侍と云なり殿上を侍といふ故なり

御そたてまつりかへ　花元服の後裝束わらはの時にかはるべきなり童體の時は赤色の闕腋の袍を着す殿上の童も赤色なり元服の後は源氏の君は無位の人なり　衣服令云無位は黄袍なり西宮抄にも黄衣と見えたり元服の後は縫腋の黄袍を奉るべし但延喜式縫殿寮式云無位は淺黄なり是によつて長和二年三月二十三日行成卿記云新冠兩王着ニ黄衣一淺黄也世謂ニ之黄衣一　此記の心は縫殿寮式の淺黄を綠の字と會釋して世是を黄衣と稱すと云詞綠袍を殘し侍るしかありしよりこのかた無品親王の服式は綠袍を用し時有縫殿の式に淺黄に二の心ありあさきとよむ時は令の文黄衣と相違なきなりあさきとよめは綠の字と聞ゆ權衣の心なり所詮此物語は桐壺のみかとを延喜帝王になずらへて侍れば長和以前の事なり西宮抄一世源氏元服の所にも黄衣とあり旁黄袍の說を用へきなり

おりて拜し　私親王は仙花門より入て東庭において拜舞太子は笏御衣等を給はりて堂上にて拜あり

淚おとし　源氏にて元服の儀式等に春宮のには事かはりたるを見奉る人々あはれに思ひ御門も猶御心のうち哀成べし又只彼さまをかんじたるにや　同親王以下元服の時拜舞はみな清涼殿の東庭にて御前へむきてあり春宮御元服は南殿にての義なり是は堂上にて御拜舞あり一注　或抄春宮の御元服は南殿の堂上にて拜あり是は堂下にてある故に皆淚おとすと云義ありされとも只源氏の容儀進退をかんずる心可然歟　抄箋曰一說源氏の容儀をかんするに淚おとすと云々非なり

みかとはたまして　前にねんしかへし給とありされどもこゝにてはえ忍び給はぬなり

むかしの事とりかへし　或抄みかとの御心中前にも

みやす所のみましかはとありとさらに更衣の事を
おほしめしわすれさる感情ふかし
きひはなる　河稚日本紀　或抄草のわかはのやうなる
こゝろ也わかきすかたをいふ天の青きをうけ地の
黄なる色そひてもえきになる其所きひはなり陽の
徳つゝくまゝ次第に色こくなるなり
あけおとり　あけおとりとはわらはにてみめよき人
の冠してみおとりするをいふなりあけとはかみを
理してあくる心歟　或説あけおとりけ文字をすみ
てよむ心は緋の袍の不似合にやあらんと也されと
も此義は不用
うつくしけさ　河愛常萬葉
引入の大臣のみこはらに　葵上の父左大臣後には攝
政太政大臣葵上の母は桐壺のみかとの御いもうと
三宮と申しゝ也仍てみこはらといふなり葵上の兄
致仕の大臣をも帚木の巻に宮腹の中將とあり
河左大臣は孝徳天皇大化元年六月始任左大臣はし
に注す　河うつほの君の一世の源氏にてみめかた
ち才能世にすくれたりしかば時の太政大臣のひと
りむすめに御かうふり給ひし夜むことりとてかき
りなくいたはりてすませたてまつりたまふ　或抄
河海にはうつほの物語をひけりさか木の巻に致仕
の大臣も又なくかしつくひとりむすめをこのかみ
の坊にておはするには奉らてと朱雀院の母后のの
給たりし此所の事なりおとうとの源氏にていとき
なきか元服のそひふしにとりわきとあるにや
春宮よりも　朱雀なり前に注す
うちにも御けしき　左大臣のかたより奏しける成べ
し
そひふし　横陳
もよほされ給けれは　内より催促し給ふ歟
さふらひにまかて　或抄殿上にて各盃酌あるへし侍
は殿上の事なりさて殿上人をはさふらひと歌なと
にもよめり又侍臣ともいふなり源氏元服の時主上
さふらひ所の御倚子につき給ひて御遊盃酒なとあ
りと西宮にみえたり其時冠者は親王の座の次につ
くなり此物語のおもては内侍宣旨をうけたまはり
つたへておとゝ參り給べきよしあり此下の詞に御
盃のついでに御歌なとよませ給へるよしみえたり
然は盃酒の事なとも御殿にて有へきにや又花鳥の

イ本に云西宮にいへることく御遊盃酒は殿上にて有て引入大臣をは更に御前へめされて御盃を給はる成へし追案に御装束親王の義に同しといへるは猶大床子の御座たるへし天皇侍所の倚子におはしませば元服の事はてゝ主上殿上に出御ありて御倚子につき給て御遊の事あるへきにや是は物語の心に相違すべし　私に云さふらひにまかて給ておほみきまゐるとあれば殿上にて御遊盃酒はありと見えたり末にまゐり給へきめしあればと云は此時は御殿へめされて祿御盃なと又たまはり給へる成へし限りある事にことをそへてといへるはかくのことき事なり

おほみき　河御酒日本紀　酒同神酒同　舊事本紀略之河委
三季冬つくりて春熟し夏のむなり又三寸とは酒をのめば邪風三寸身にちかづかず寸をキと云は馬なとをも四寸五寸と云なり又三木とは杜康と云者の妻男の外へ行ける間に男の日々の飯を園木の三またにそなへおきけるに雨露にうるほひて酒と成けるなり是を樹伯に祭と云々少々略之

みこたちの座の末に源氏つき給へりおとゝけしきはみたまふ　大臣おとゝ日本紀　花鳥には御遊盃酒のとき冠者の源氏は親王の座の次につくと云々又李部王記延長七年當代の源氏二人元服の時盃酒御遊の間兩度四位の親王の次につく仰によつてなりとあり源氏無位の人なれば親王の次に着べきいはれなき故に別勅にてかくのことしとかけるかとおほえたりさてけしきばみ給とは左大臣の源氏を聟にとるべき事をほのめかしたる樣に諸抄にしるせり然して稱名三光此義を用ゐす　源氏の列座次第のいはれなきを左大臣のけしきはみたるなり云々近代用此說なり　西宮一世の源氏元服の次第には源氏從四位上之由載之

あへしらひ　源のとかく返事なき體なり

おまへより内侍宣旨うけたまはり　奥加冠めしによつて御前に參する事　西宮にいはく加冠内侍つま戸において引入をめす女藏人祿をたまふ長橋をくたり沓をはかずして庭前にて拜舞　秘引入の大臣も殿上の盃酌の座におはしますを御前の一獻にめしたてらるゝよしなり内侍宣旨うけたまはるといへるを藏人かたの宣旨をば内侍宣旨といへばたゝ

藏人なとしてめしたるかと云樣に河海にはしるされたるか此所はたゞ女房の中に内侍たる人うへのおほせをうけたまはりて殿上人なとしてつたへめす義にやと見えたり然は此内侍は誰ともみえす
うへの命婦　禁中に常にさふらふを内命婦と云これうへの命婦なり外命婦とは臣下の妻なり
しろきおほうちき　白大袿一領
母宮は親王元服加冠の祿白大袿一かさね御衣一かさねなり　弄うちきは大小ありきぬのうへに着すと云々うはきのうへに着するなりかさねはきぬにしたがふなり長さ小袖にひとし　秘こうちきは女房ならては着せぬなり色はさたまらぬなり猶うちきの事弄にくはし略之　大臣は白橡の御衣を加ふ延喜九三內侍傳之
御盃のつゐてに　弄清涼殿にて別したる儀と見ゆ西宮云公卿御前の孫廂にさふらふ酒盃を給ふ舞樂御遊あり
桐壺いときなきはつもとゆひになかきよを契る心はむすひこめつや　桐御門の御歌なり左大臣にたまふなり河に稚日本紀　いとけなきは僻ことなりいときなきといふべし爲家卿說　花御門の御詠なかきよを契る心は宮はらの御むすめ葵上を源氏の君の御そひふしにさため給ふ事なり下の詞に御心はへありておとろかさせ給ふめるとは此事成へし　私云加冠の人に仰かけらるゝ故におもては元服の事なりちきる心は結ひこめつや左大臣のむすめの事をほのめかし給ふなり
御心はへありて　葵上の事をふくみたる仰なり
左大臣むすひつる心もふかきもとゆひにこきむらさきのいろしあせすは　左大臣の御門へ奉る返歌なり今日加冠の人なれは此もとゆひに行末なかかるべきことふきを結ひこめたるとなりこき紫はもとゆひのいろなれば源氏の御こゝろたにかはらすはとなり
河古歌引歌「君こすはねやへもいらしこ紫わかもとゆひに霜はおくとも　佐忠元服の夜能宣かよめる拾遺「ゆひそむるはつもと結のこ紫ころもの色にうつれとそ思ふ　男のもとゆひ紫のいとにてするなりあせたるは八雲に色のかはりそんしたる由なり云云但天河原はあせるらんと後撰にあり如何あれたる心歟　私云物の陵夷といふ心か陵はをか也高

き所なり夷はたいらかなりをかなとはたひらかに成てたひらか成所はたかくなりなとしたる事を云なり物のもとのまゝならぬことゝきこえたり池なとも淺くなるをあせると云なり　奥もとゆひによせてこき紫とよめり又女を紫といへばなり　秘紫は總して女を云又今は元服なれはなり歌の心は源氏の心だにたがはずはとなり

なかはしより　河長階（ナカハシ）　舞踏手の舞足のふむ所をしらすとなり　長橋といふは御殿より南殿へかよふ廊なり大内の時は此所にきさはしありて引入の大臣なともこの橋よりくたりて御前のたつみのかとにて御前へむきて舞踏し侍るへし　舞踏の事河に委し

ひたりのつかさ御馬　左馬寮なり御馬とあれば左馬寮といはず左のつかさの御馬と計いふなり此所に諸國の牧より引進むる御馬をおかる御監とてさま寮は左大將右馬寮は右大將の管領なり

藏人所のたか　御鷹飼御隨身は藏人所の被官なり當代には親王元服には馬を引に不及もし遊宴の興あらは引へき由新儀式に見えたり鷹の事行幸の卷にくはし河略之花鳥にくはし略之　奥藏人所は禁裏仙洞執柄大臣家にもあり殿上の次の間に布障子をへたてゝ藏人所といふなり地下の者伺候所なり　一注或抄大かた馬鷹犬なとを引出物とはいふ琵琶なとをおくり物といふと云々　秘引入大臣の祿には馬鷹などはなきなり限りある事にことをそへといへる此義歟

みはしのもと　清涼殿階下歟

みこかんたちめ　親王公卿までなりつらねては列してなり　弄問云引入の大臣の外の人々祿を給ふる事例ある歟　答源氏の君の元服を給ふ事は東宮の御元服の時の義を表する也其例諸卿こと〴〵く給ふ也　私云これもことをそへたるなり

その日おまへのをりひつ物こ物　をりうづ物とよむなりこ物は獻物なり　花獻物は總名なり元服の人の奉る物也其中に籠に入たる物をは籠物といふ又をりひつにをりたるもあり親王元服の時は獻物あり公卿以下是をとりて庭中に列立す第一の大臣一人座にとゝまりてなにぞの物とたつぬれば上首の人奏していはく其奉る御贄と申ておの〳〵物の名を奏す其時大臣仰ていはくかしはてにたまへ卽膳

部内膳司等すゝみいてゝうけとるなり一世の源氏
の元服には獻物なきにや但此物語の詞にかきりあ
る事にことをくはへさせ給ふとあれは一世の源氏
の元服なれども親王の時の例をもて獻物なと右大
辨うけ給はりて用意せるにや　箋右大辨勤仕之例
天慶三二十五源清平
とんじき　屯食(トンシキ)(イヒツヽミ)下﨟に下さるゝ物なり
ろくのからひつ　祿辛櫃奥入に寄る　秘　屯食は元服の
人の本家より諸陣の役者にこれをわかちたまふも
のなり　西宮抄にその仔細見えたり親王元服の時
は諸宮の長官たる人各下知して調せしむ是源氏元
服にかはる所なり祿のからひつは親王以下の元服
には是をたてす東宮の御元服の時の事なりさて下
の詞に東宮の御元服にも數まさりていかめしかり
けるよしをのせ侍り
なか〳〵限りもなくいかめしうなむ　東宮親王一世
の源氏はいづれも差別ありそれを東宮にもまさる程
なれば中々法度にもかゝはらぬ心にかくいへる
歟
そのよおとゝの御さとに　箋元服の當夜嫁娶の例

村上第四皇子爲平親王御寵愛甚し仍高明公女を元
服の夜進せらる　河延喜十二二十廿二保明親王私云時十歳歟
元服依故左大臣時平女參る俗に謂二副臥(ソヒフシ)一李部王記
寛和二七十八三條院于時親王御元服同日皇太子十一歳
法興院太相國女尙侍倂于副臥見大鏡　河源氏通執政
臣女事　九條の右大臣の女にはしめてつかはしけ
る　西宮左大臣年月はわか身にそへて過ぬれと思
ふ心のゆかすも有かな
まかてさせ　退出なり
いときびは　源のいとわかくひは〳〵としたると云
體なり
ゆゝしう　抄これはゆゑ〳〵しき心歟
女君は　葵上なり源十二歳葵上十六歳なり
過し給へる　源よりとしの過たるなり
いとわかう　源のいまたひわかきほとなれは葵上の
はつかしく思ふなり此こゝろ後にまてありて一期
うちとけさりし人なり
にけなく　無似氣なりにあはぬ心なり
このおとゝ　弄左大臣關白なるへし
はゝ宮　葵上の母宮は桐みかとの御妹なりしかもひ

とつ后腹なり
物あさやかなる　おほえきら／＼しきなり
この君さへ　源のおはしていよ／＼此左大臣のおほえまさるなり
春宮の御おほち　二條相國弘徽殿の父右大臣也
御子ともあまた　是は左大臣の子たちなり
致仕太政大臣母桐壺御妹藏人少將也
葵上母同し夕霧大臣母
藤大納言
春宮大夫以上二人母みえす
左中辨同藏人少將
くらうとの少將　執政臣の息藏人少將事例清愼公謙德公河に委右のおとゝの御事はいとよからねと左大臣と右大臣と中よからぬ也
四の宮　右大臣の女弘徽殿の妹　草子の地と云々
おとらすもてかしつき　右大臣ゝ左大臣におとらぬ威勢なり
源氏の君は　帝の御前さらすめしまつはすなり
さとずみ　左大臣の里亭葵上のかたなり
心のうちには　源氏の心中なり葵の上の年ふけたると恥かしく隔心あると源は藤つほのたくひなくおはすると思ふからつゐに中よからす打とけすしてはて給ふなり
おほいとのゝ君　葵上なり
ひとへ心　源の體なり心あさく無分別なる心也
おとなになり給て　花桐壺の巻は源氏十二にて元服までの事をかき侍れども此こと葉にては十二より後の事をふくませて申侍りはゝ木々の巻とのあはひ十三より十五のとしまでの事はかけたる樣なれど此一段能く詞にこもりて侍るへし
みすのうちにも　源おとなに成給へば藤つぼなどのおはします簾中へはいれ給はぬなり
ことふえのねに　琴は藤壺笛は源と云々あなかち然るべからずたゝ管絃の事なり
内すみのみ　源の內裏にのみさふらひ給なり
五日六日　二日三日如斯よむへし
たゝいまはをさなき　源のをさなき故に左大臣かたへ疎遠なるをもさのみ思ひとがめぬなり
御かた／＼の人々　或抄葵のかた源のかな也云々
御心につくべき　源のさい／＼おはしますやうにと

なり
おほな〳〵おほしいたつく　弄おほな〳〵はねん頃なる心なり　聞書云勞也いたはる心なりなにとかなとねん比に思ひいたはる心なり
うちにはもとのしけいさ　淑景舍也　桐壺也　河舍は殿の次なり庶人の家をも寢殿雜舍といふかごとし大内の五壺は仙家の五所にかたとるなり　西王母が家に五所十二樓有叉壺中の義歟源氏の直廬に母更衣の住給ひし桐壺をし給ふ也
人々まかてちらす　母更衣の人々ちらす其まゝさふらふなり
さとの殿　二條の院の事なり　花榮花物語云かくて大殿十五の宮盛明親王すませ給ひし二條院をいみしくつくらせ給てもとよりよにおもしろき所を御心のゆくかきりつくりみがゝせ給へは　今案法興院は二條京極にありもとは二條院と號す正暦二年に法興院とは名をかへられたるなり源氏の御さとの二條院はこれになすらへべきにや　秘河海に杢修理内匠つかさとあり當時用除本はもくの字なし修理職たくみつかさにて事たりぬへし此さとの殿は更衣の里なり二條院とて後に紫の上すみ給へる所なり花鳥に注し給へる准據又殊勝なり
になう　無二なり　私たくひもなくと云心歟
池の心ひろく　聞池のまん中の心もあり　花樓額題鵁鶄　池心浴鳳凰　白氏文集　苔生石面輕衣短　荷出池心小蓋疎　物部安貞　躬恒ちりぬとも影をやとめん藤の花池の心そあるかひもなき
かゝる所におもふやうならん　花つゐにはねかひのことくむらさきの上後には二條院にすみ給へる也此心二つありたゝ大かた思ふやうならん人をもと思ひ給ふと又藤つほの事を心にかけてとの詞なり私一義大かた思ふやうならん人をと也又藤つほのやうならん人をと云心有然れとも花鳥の義も叶へるにや　聞書藤壺のやうなる人の事といふ亦成べし
ひかる君といふ名は　秘光源氏の名の事を爰にて書あらはせり西三條の右大臣源光は無雙の才人なりその名を思ひよそへてかけるにや
こまうとのめてきこえてつけ奉けるとそいひつたへたるとなん　此詞奇妙に書なせり我書たる物といは

れじと人の事のやうに三重に書なせりつけ奉りけるとぞと人のいひつたへたるとぞ人がしるしておいたをみおよひたるやうに書たるなりいつれの御(心イ)ときにかといふ詞とおなし其外巻々にこの詞つかひあり

私註桐壺

一やう〳〵天下のもてなやみ草　上の詞おなし程それより下﨟の更衣次に上達部殿上人是天下といへる一人之行自近及遠之謂乎尤漸の字有歟

一もろこしなとにも　欲起楊貴妃之故事而先發此語乎

一此君をばわたくし物におもほしかしつき給ふ　儲君者至公也其思雖深切猶不可輕此君云香馨云私物可取限此具おのつからかろきかたに見えしをといへる叶此詞歟　一巻にての字多云々　又云中々と云詞多し

一面影につとそひておほさるゝ　面影はやみのうつつにおとるといへる歟

一けにえたふましく　けに今まで留り侍といふをうけて云　抄命婦の心と云々　草子地之評ともいふへき歟

一もろともに　更衣と帝ともろともにはくゝまれぬとなり更衣逝去の故なりさて次の詞むかしのかたみをといへる替更衣如子加憐愍給ふと云心歟

岷江入楚第二　箒木

十六歳
源氏爲中將（藏人少將爲頭中將）
光源氏君之稱號之事
夏雨夜之物語品定事
頭中將見源氏君之艶書等事
右馬頭藤式部丞參籠御物忌事
女房之品定再往問答之事
右馬頭物語女兩人事
頭中將物語之女之事（夕顏上是也）
式部丞物語之女之事
翌日源氏君退出葵上宿所事
其夜爲中神方違一宿紀伊守中川家之事
同時始見空蟬君事（空蟬君は權中納言右衛門督女爲伊豫守之室也）
小君初參源氏事（小君は空蟬君之弟也）
小君傳源氏之書於空蟬君事
源氏又爲方違宿中川之家事
空蟬君不見參事

箒木　以歌爲卷名

はゝき木の心をしらてその原の道にあやなくまと
ひぬるかな　源氏君の歌なり
花歌を以て卷の名とす此卷の雨夜の品定は源氏十
六歳中將と申せし時の事なり比は六月と見えたり
桐壺卷には十二歳迄の事あり然らば十三四五の三
ケ年の事は物語に所見なし但桐壺の末の詞も此卷
の始の段の詞に三年の事はこもるへきなり　弄源
氏十六歳の事なり

卷の名の事

あるにもあらすきゆるはゝき木とよめる歌にて號
せり此歌も是則がありとはみえてあはぬとよめる
歌をもてよみ給へり箒木の事は抄物等にくはし
はゝき木といふ名は此物語の大意に相當せり有無
の理肝要なり夢の浮橋卷も同心なり又人間の事も
皆はゝき木の有無の理なるへし一部にわたるへき
心なり桐壺卷は其前也　祇註云此卷をはゝき木と
いふは中河の宿にて源氏と空蟬との贈答の歌にて
付たり是則が歌に有とは見えてあはぬ君哉といふ

歌をとれる歌なり空蟬か有なから逢奉らぬを有とは見れとなき心に見るなり此巻の名なれと此物語五十四帖におよほす名なり其故は此物語は作り事にてなき事にてはあれとも又昔有し事ともを面かけにしてかけるなり（頭注云）總して夢の浮橋とつゝきたる詞はなけれとも此物語に始ていへり此巻の名にて定家卿始て「春の夜の夢の浮橋とたえして嶺にわかゝる横雲の空」本歌は夢のわたりのうきはしかとあり桐壺のみかとを延喜にかたとり奉り光源氏を高明公によそへ菅丞相の跡をうつし業平の行跡を摸す所々に物になすらふる事限りなしされはこと〳〵くある物かと見ればなくなき物かとすれば有物也仍て一部の總名なり天台にも四門をたつる中に亦有亦空門此物語にあたれり夢の浮橋も一巻の名といへとも一部の名なる物なり此物語に上中下の人人もろ〳〵の行跡みな夢の内の戯れなりたとへば莊子が夢に胡蝶となれるかしらす又胡蝶か莊子となれるかといふかことし此物語はいにしへの夢そともいひかたく今の身のうつゝともさだめかたきともに夢のわたりの浮橋箒木の有無なりされば紫式部か筆の跡其色深く其心はかりなきもの也大意をとりてかく　箋云義同前略之　秘桐壺巻に十二歳の事迄をしるすとみえたり但同巻の奥におとなに成給ふて後はとかき又里の殿は修理職たくみつかさに宣旨の下りてあらため作れと有然らは十三四五の事は桐壺の奥に籠り侍るべし　巻名の事河海にはゝき木の心もしらての歌の所にくはしくしるされ侍るなりはゝき木といふ名總じては源氏一部の名にかけてみるべし　此譯祇註に同し仍て略之

或説此巻は桐壺の巻の前と云々不用之　世間の有さまをはゝき木にはしめて夢のうきはしにてをさまれると見るべきなり

聞書云此巻を法花の一の巻にあてゝみるなり桐壺はいまた序分にも及ばず是を法花經の開經無量義經に准するなりさて此巻に始て夢の浮橋にて終るなり云々　此巻を序分といふは物語一部の作り様の大意をあらはせるなり又此巻を法花の二の巻にもあつるなり其故は二の巻の始は譬喩品なり此巻さま〳〵の人の心を物にたとへたる事有是いつかたへもおとしつけぬ所と則箒木の心もあらはれたる歟云々又桐壺の並と云は光君といふ名はこまう

とのめて聞えてとかきはてたりこの卷の始にて光源氏名のみこと〳〵しうと書出したる故にかくいへとゝ不用之

光源氏名のみこと〳〵しういひけたれ給ふとかおほかんなるに　河光源氏と云名はこと〳〵しく聞ゆれとふるまひに付ていひけたるゝとかおほしとなり名のみこと〳〵しくと讀切ていひけたれ給ふ以下をばふるまひの事と心得へきなり一つに讀つゝけは心たかふべし此發端の詞桐壺の終に光君とはこまうとのめて聞てといへるをうけていへるなり　弄名はこと〳〵しくて又いひけたれ給ふとかもおほしといふ義勿論なり　祇註云名のみこと〳〵しくとは光源氏といふ名はいかめしうとほめたる心なりいひけたれ給ふとかおほかるとは世に其名高く道のほまれ有人をも世上にいひけつならひなり　秘河に名のみこと〳〵しうとよみ切と云々可然但よみつゝけてもくるしからさるなり人をそしるかたよりいへはいかなる人もいひけたるゝ物也是世間の有樣なり花鳥に弘徽殿の方さまよりいひけつなりと有されとも只世間の人のいひけつなり

箋同之

名のみ　箋曰老子經云道可レ道非二常道一名可レ名非二常名一注云夫名者三才之總稱有二富貴尊榮高世之名一有二自然常在之名一常在名如三嬰兒之未レ言鷄子之未レ明珠玉蚌中美玉處二石間一內雖二昭々一外如二頑愚一無名天地之始有名萬物之母　釋云其在人心則寂然不動之地太極未分則安有二春夏秋冬之名一寂然不動則安有二仁義禮智之名一故云无名天地之始其謂レ之也所以爲此心之喩也　既有二陰陽之名一則千變萬化皆由レ此而出既有二仁義之名一則千條萬端皆自此而始故云　有名萬物之母母者言自此而生也　天地者非二專言一天地一也論語子路篇云子貢問曰鄉人皆好之何如子曰未レ可也鄉人皆惡レ之何如子曰未レ可也不レ如鄉人善者好之其不善者惡之也又求二大美一者不レ疵二小瑕一　私云箋に老子經以下をひけり此光源氏の名もあまりこと〳〵しくいひあつかふ程に世にたかぶる名に成也又有名は萬物の母と云りこと〳〵しくいひあつかふから千條萬端のとかもいてくべき物也と云心を引り又論語を引る心は世間の人の心は一樣になく善惡有るもの也されば子貢

も人に皆よみせらるゝやうにしてよからんかと孔子に問ふに不可と云そさらばにくまれんかととふにも又不可といふよき者にはよく思はれあしき者にはにくまれよといへりおしなへて人の心にかなふことはならぬ也結句よき者にはよくあしき者にはあしく思はるゝ事聖人の道なるへしされはかやうに色々人の源のとかをいひたつるとても世間のならひといふなり又大美をもとむるものは小瑕をきずとせすと云も大すぢめのよき人は少のことにけかるることはなきとなり又いひけたれたまふとか是はあまり美擧芳聲か有ゆゑに世人過失を求むるなり此とか好色のこととといへる義は非なり　以上箋の義なり

いとゝかゝるすきこととも を　是より好色の事なり秘同之　箋此詞より好色の事をいふ前にとかといへるを好色の事といはゞ爰にいとゝの字有べからす　光源氏といふほまれたかくおはする事にさへ色々の過失をいひつくるにいとゝ好色なとをおもてにし給はゞいよ〳〵過失をいひつけんと源の性うへにつゝみたる心見えたり

すき事とは漢書李廣傳に數寄とかけり數のかたかたと讀あまた有事をかたつきてこのむより又かたち〳〵なる心なり此段花鳥の義不審　祇註に源も好色の人なから面は實にして下に好色の心ましますなり　私云いひけたれ給ふとかおほき故好色の事を面につゝみ給所尤いはれ有

人の物いひさかなき　不良　悪恐　かやうにしのひたまへることをも書傳へたる故に紫式部か筆をつかふたるなり又物語の筆者の人のかたり傳へたるがさかなきと人のいふたるやうにおほせていへるなり

さるはいといたう　忍び給けるといふをうけてさあるはと云なり世をいたうつよくはゞかりて上に實を立給ふなり

まめたち　河歛色(マメタツ)遊仙窟　皺眉(マメタツ)同上　眞立(マメタツ)　まことしきなりいつれも上に眞實をつくりたる氣色なり

なよびかに　河麗なり心やはらかによわきやうなる心歟

おかしき　笑ふにあらずほめたる詞なり源のうへに

賓をたてゝまめだち給ふ故にやはらかにあだめき風流なる事はなくてなり

かたのゝ少將には　河の義不審候略之　花清少納言枕草子に物語の名とも出たる處にこまのゝ物語かた野の少將と有又かたのヽ少將もときたるおちくほの少將なとはおかしといへり又野分の巻にかたのヽ少將は文をかくに紙の色あひをえらひ侍るよし見えたり所詮かたのゝ少將といふ物語侍る上はそれにて事たりぬへし作物語をもて物語の例にひける是又一體なるへし彼物語に在中將の事をもとたちにして作りなせる事はさもや侍らんこヽにてはそれまての沙汰に及ぬ事なり　祇註にかたのゝ少將の事色々の義侍れと作物語にかたのヽ少將といふ人有其人無限色好なり光源氏とかたのゝ少將と同時にはあらねとも紫式部取合てかくいへるなり　かたのゝ少將とは只物語の名なり清少納言枕草子に有いふこゝろはかた野の少將は天性好色をうへからたつる人なり此源氏君はさはなくて下に好色の心有かたのヽ少將に見せたらば好色の道はさやうにはなき物をと源の上に賓を立るを笑はんとなり是迄は總論の詞なり

また中將なとに物し給ひし　弄爰より草子地の詞也秘同此時源の當官中將なれとも昔の事を後に記する故にまたの字過去のし文字あり箋同之祇註此巻にては勿論中將なるを又中將なとに物し給ひし時と書る事不審有へき事也然れとも紫式部此物語をかく事我作りたる物のやうになさずしてむかし有し事共をさま〱に傳へ聞し事を云ひうつしなとして取集め一部にしたるやうに書りさるほとに巻の末おほく其心をあらはせりむかしの事にいへはまた中將なとに物し給ひしの過去のしうたかひなきなりたとへば伊勢物語に業平の極官を貞觀年中にかけるは彼物語業平沒後に伊勢か書る故に極官を書し其たくひなり此義を分別すれば不審なきにや　秘今源氏は當官中將なり給ひし此し文字過去のし文字にては聊心得かたきやうなれとも當代の事をも物語に如此書事常のこと也　秘抄の注よし

内にのみさふらひよう　内裡にのみさふらひよくし給ふ也　箋桐壺巻に内住のみこのましくおほし給五六日さふらひ給て大殿に二三日なとたま〱に

まかて給ふと有　秘抄同之
おほい殿には　葵上の父左大臣なり　弄一禪勘に大臣なる人をもおほい殿といへる所有如何いつれも通用したる詞なり
忍ふのみたれやと　河奥入引之「春日野の若紫のすり衣忍ぶのみたれかぎりしられす　内裏にていかなるみたれ心かおはすらんと葵上方に思ひうたかひしと也うと〳〵しくましますなり花鳥に藤壺に心かよはし給ふ事と云々是はさしつめたる樣にていかゝとおほえ侍る　箋是に同し又引歌に及ばずと云々
さしもあためきめなれたる　箋花鳥の義非なり　祇註忍ぶのみだれやとうたがひ思ひしかと源の御心にはなひきやすき人に心をとめ給ふ事なき本性なるによりさもなかりけるといふ義なり御本性にてと書捨てゝ亂れ給へる心はなしと云心を持せてかけりかやうの詞をいひ捨ておく事此物語におほかるべしさるによりてかすかにも聞ゆるなり箋これに同じ　秘此段は悉皆源の本性を書あらはし侍るなり源の御心くせにていと心盡にわりなきふしをこのみ給となり源の一生涯の心はせをあらはし侍るなり花鳥の義非なり
まれにはあなかちに　祇註まれにはとはなひきやすきをきらふ御心なればすき心なきやうなれと又時時我になびきかたき人を心におもしろく覺すにより其かたにて有まじきふるまひもあり名のたつ事も有なるへし
なか雨はれまなき頃　秘花に六月とありされとも五月の事成べし箋祇注おなし弄に霖（ナカアメ）　爾雅云三日以上を曰レ霖云々　私云定家卿の一字題の百首に霖（リン）の字を夏の部に出されたり然らはさみたれとも訓ずる歟又心を取て五月雨に用たる歟　一義花に六月と有もし五月より降續て六月に晴たる歟
うちの御物いみ　内裡の御物忌也　物忌の事河に委伽毘羅衛國之大鬼神王之名也誓願利益衆生若人宅物怪惡夢等之時書吾名立門他界鬼神不令來入可令守護云々義淨三藏說也ことなかき故略して書なり河內裏御物忌の時に參り籠る人は丑の時より參る也御物忌に御字をかくす柳の枝を三寸ばかりに簡に作りて御冠の纓にさゝる或又左の御袖に白紙に

書てつけらる又御殿の御簾ことにこれをつく但二間にはつけず昔は忍草に物忌を書て簾にもつけ冠にもさしけるなりことなし草と云に付てかく用之無用のよし也「かさすともたちとたちにし我名にはことなし草のかひやなからん貫之　かざすともとは冠にさすゆゑなり此忍草はうらの白くてみしかき草なり軒端などに常に生る草也　箋御物忌には諸陣に札をたつ御簾の間ことに物忌を付紙屋紙にかく外宿の人とてよそに寝たる人（御物忌イ）は参らず主上ゆめ／＼簾外に出給はず毎日の御拝にも御簾をあけず母屋の御簾はみなこと／＼く物忌をつく二の間切簾出入の間には付ず殿上の小臺盤をたてず是大臣のつく臺盤なり大臣の参りこもる事普通ならぬゆゑなり凡御物忌の時他の殿に出御なし諸事簾中にて是あり四方拝には東庭へ出御匡房卿云神明天道を敬するによりてなりと云々以上禁秘抄の義なり

又御物忌數日つゝく事よからぬ事なり少々かろきはやぶるべし云々　私云是は禁中の作法なり其外昔は下々までせし事なり

いとゝなかゐ　秘久しく居給なり　内にのみさふらひよくといへるにつきていとゝといへり

おほ殿にはおほつかなく　是又前に忍ぶの亂やとありし事なり

御よそひ何くれ　裝束以下其外の事何くれまでなり

左大臣よりいたはりかしつき給ふ體なり

てうしいて　調出なり

御むすこの君たち　左大臣の君達なり

たゝこの御とのゐ所　源のとのゐ所桐壺なり

宮はらの中將　左大臣の嫡子桐壺卷に藏人少將とありし人なり母は桐御門の御妹なれは宮はらといへり後には致仕の太政大臣と云葵の上の兄源とはいとこなり仍他腹の左大臣の子の樣にはあらでしたしくするなり　河攝家息宮はら事　清愼公忠平公息御母宇多御女　補藏人頭事　忠仁公昭仁公　清愼公　謙德公　忠義公　畧之

右のおとゝのいたはりかしつき　二條相國このとき右大臣なり　此四の君中將の室なり　弘徽殿の妹なり

此君も　源の葵上はうと〳〵敷やうに此中將も右大臣の四君へうときとなりもの字肝要なり

里にても　頭中將の父左大臣の亭なり

我かたのしつらひまはゆくして　料理 遊仙窟　室禮（シツライ）左大臣の亭頭中將の居給ふかたには必靜に居給はぬなり

君の出入し給ふに　源の葵の方へおはするにひとつに出入をもするなり

學問をもあそひ　何事も諸共にし中よくおはするなりさて萬心おき給はぬ事なり是は雨夜の物語の序成へし

をさ〳〵立おくれす　河にあまた出せり所によりて心かはるへし　治　漸　優　長　轉了 日本紀　花 頗也　箋云爰は治の字歟治定の心と云々　猶河に委し頭中將の源に何事もおとらぬと云なり

まつはれ聞え給ふほとにかしこまりもおかす　秘へたてなくむつれ給ふ故におのつから禮儀をも忘れてともなひ給ふとなりかしこまりもおかすは無禮なる樣なりとなり是品さための物がたりなどのうちとけたる事の始めにかけるなり

つれ〳〵と降くらして　數日降續たる内にとりわきて一日降暮してしめやかなる程の宵の雨成へし面白體なり　誠に物語なとも一しほ面白かるへき折節の樣をよくあり〳〵と書出せり

殿上にもをさ〳〵人すくなに　内裡の殿上なり此をさ〳〵は頗也殿上にも御物忌にこもる人すくなきなり

御殿居所もれいよりは　源の御殿居所きりつほなり常には人々參りつとひ宮仕なとするか御物忌に人すくなゝるなり

おほとなふらちかくて文とも　秘 燈を近付てなり此文は學問かたの文なり書籍の事なり又ちかくとは切灯臺なり云々箋

ちかきみつし　御厨子（ミヅシ）

いろ〳〵のかみなる文　艶書（エンシヨ）なり　色紙にかきたるなり

さりぬへきすこしは　艶書なり色紙に書たる也源の詞中將に見せてもさも有ぬへきをは見せんとの給なり

かたわなるへき　河 片輪（カタワ）　頑也（カタクナシキ）　秘 其中にみくるし

きも有へきとなり下の心は與有文をはかくし給はんなり

そのうちとけて　又頭中將のことばなりかたわなるへきとはうちとけ過きたる文なるへしとかくいふなり．

數ならねと、頭中將卑下の詞なり

かきかはしつゝ　秘只大かたのは頭中將のうへにもかきかはして見えしとなり

おのかしゝ　河各自恣（ヲノガジシ）　各競（ヲノガジシ）日本紀　八雲云われ〳〵有の心なり　惠心僧都の作の極樂讃に近くも遠くも各かしゝおのか心に任せてと云心なり　河歌三首あり略之　箋云おのかじゝ四つあり一には互にといふ心二には恣と云心三には我々と云心四には各（ヲノ）競（キソフト）と云心なり秘にみつからの心さしのまゝになし各自恣なり云々

えんすれば　怨なり　注云悉也恨也仇也讎也聲に云也　弄うらむる心也えんずれば文ともをおろ〳〵（がつい）みせ給ふこゝろをいひ殘したるなるへし　祇注にさりぬへきといふより源氏と頭中將との互のことばにてあらはにきこえ侍り但えんずればといひすてたる次に源氏の詞あるべきを又頭中將の詞と見えたり心得かたきは文字なりさりなからやすらかにいひすてゝおく事此物語のならひなれば其たぐひと見ておくべきにこそ

やんことなく　一たん深くかくし給ふへき文はといふ心なり

おほそう　大總なり　大樣なるなどいふやうの心也大かたの心なり

これは二のまちの　次のまちと云なり只第一にかくし給ふへきにてはあらし次のにてあらんと云心也心やすきなるへし　祇注に頭中將源氏の方に有艶書を見給ふとていへる詞なり人見てもくるしからじと覺すをぞこれには置給ふらんとなり又やんごとなくといふより二の町の心やすき成べしといふまては草子地なりとも見るべきにや然らは前のえんずればといひすてたるにもよろしきにや秘抄箋弄兩度の聞書等此一段草子地なり推察してかきたる詞也

かたはしつゝ見るに　頭中將の見るなりかくさまざまなるは同詞なり

心あてに　河八雲云をしはかりなり
中にいひあつるも　此文の主を推量に頭中將のいひ
　あてたるも有なり
もてはなれたる　一向はなれたる人なとを思ひ疑ふ
　もあるなり
ことすくなにて　源の用捨奇特なり兎角にことすく
なにておはするなりもてはなれたるをさはなきと
の給へばいひあてたるか治定になる故に言すくな
　にておはするなり
そこにこそ　源の詞也河足下也　ソコなり　猶河に
委　花足下は人をかしつく詞なり頭中將をさして
の給ふなりそこにこそかゝる文はおほく有らめそ
れを見せ給はゞ此づしも心よくひらくへきと源の
の給ふなり
御覧じ所あらんこそ　中將の詞也
女のこれはしもとなん　これはとなりしもはやすめ
字なり　花これより源氏と中將との問答に一段有
べし第一段中將の詞なり　箋秘に花の義を用る也
　品さための第一なり　難つくまじきとは是はと
難のなきはあるまじき心也　箋云慈惠大師之弟子

泗洲大師梵網古迹云女人身中有二十惡事一從レ
生至レ死不レ得二自在一
やう／＼なむ　祇注に頭中將わかくは有りなからや
　うやう次第に世上の女のさまをしるとなり
たゝうはへはかりのなさけにてはしりかたき　うは
べはうはつらなりうはつらはかりなさけらしきな
り　秘手をかく事なりうはべのなさけに手はしり
かきと讀説不用之大かた手などもきたなげなく書
き事たらひたる樣なる人なり弄同不用之　河草書
の體軟眞字は人の衣冠正しき體草は人の走る姿行
は人のありく樣なとをいへり此卷の奥にもはしり
書なとありうるはしからぬうはべはかりのわさな
り祇注に女の文書の事なり又遠筆にかくなり云々
折ふしのいらへ　祇注歌よむ事なり
するふんに　隨分なり分にしたかふて也
おほかりと　おほく有となり
そもまことの　それもと云詞なり　弄實有事なりす
べて男女に通じて人の心つかひ善惡を見せしらせ
んための物語なり　秘其かたにつけて撰せんには
かたきと也　祇注分にしたかひてする物はあれと

も手かく人といふへくもなく歌讀といふへきもなきといふ義なり必と云字肝要なりこの道につけて此人はと必いはるゝやうなるはかたき事なるべし祇注是より品定なり此品定の事は世間の女の心をおほく見あつめたる人か源氏の君に逢奉りて世にはかゝる心有女もありとある心ある女もありといふを語り奉る事なり頭中將は世をくはしく知り給ふほどはなけれど源氏君よりはすこしこのかみにて女のさまをもよくしり給へる故に語り給へるなり大かた此卷は心得がたきにや侍らんたとへば當時も年老たる人は五十年六十年の間の事をいふとても其人の心はかくこそ有しかさやうにこそ侍りしかといふが如き事なりそれに當時の人の心昔の人の心に似たる有ことし此理にもとつけば煩ひなく心得らるゝものなり

わか心得たる事　祇注これも前のつゝきなれとかやうなる人有よしなり　秘何ぞひとつ知たる事のあれば我はとおもひて人を何ともなくいふなり女のくせなり　私云女に限らぬ心もちなるべし又々こゝこのおのかじゝはみづからほしきまゝなり　聞書云少知たる事を我とち人をおとしめ笑ふなり深き事をしらぬ故なり而は女の事なり

おやなとたちそひ　弄一段なり

おひさきこもれる窓の中　河若草の生長に未嫁の女をたとへたり　苗　楊家有レ女(ムスメ)初長成養在二深窓一人未レ識　長恨歌

かたかと　河片方(カタカト)　廉日本紀　かたつらはなといふ義歟

聞つたへて心をうこかすもあり　秘歌をもよみ琴をもひき手をかくなど一ふししいつる事の有をきゝつたふる也凡此品定は誰となく皆世に有とある人の有さまをいへりされとも少々物語の中にある人の性に引合て見るなり

かたちおかしくうちおほとき　河穩(オタヤカ)也今序然々其心歟　おほどきはおほとかなる義なりきとかと通ふなり

まさるゝ事なき　何をきかせん事もなきなり　花の義不審

はかなきすさひ　河なほさりことなり手すさひ同事なり

ゆゑつけてしいつる　河由付なりよし有てしいつる歟　秘末摘の琴などひき給ふと聞て源の心をとめ給ひし類なり自然に一藝は誰もし出る事あるなり
見る人おくれたる　秘中だちなどする人のくせにて必種々に其身のよき事はかりを取り出していひ立つるなり　おくれたるかたはわろき方なり
つくろひて　すこしもかたち有事をは事をそへていひなすなり
そらにいかて　それほとにはあらしと推量にいひくださんは無理なりされば誠かと見るにそらごとのまじりたるゆゑ見おとりの必ずするなり　祇注に是は品定の第一なりと心は人の娘のかたちおかしくわかやかなるやうの人の何にてもしいつるわさの有をいふなりゆゑづけてとは自然器用有てなりさやうなる人をその方なる人のことく〳〵しくいへるか見おとりすること有由をいへるなり此段は末摘にあたるなり末摘はよろつおくれたるところおはしけれど琴をひきたまひしを大輔命婦が源氏君にかたり申たりしことよく似たるなり又この段の始にかたちおかしく若やかなるほとゝいへり末つむはかたちあしき人なりちかふやうなれどことことしく似ることはなけれど一所なれど詮とするところの似たるをばそれにあたるといふなり　箋云するつむに相當と云々
うめきたる　箋云うめくは歎息のかたち云々
はつかしけなれは　弄頭中將のかゝる事どもを語りてさすがにはぢらひたる體也　私云頭中將の耻らひたるにては如何かやうの事とも分別して語る體のはつかしくと頭中將の心中を源の思ひ給ふとにや此義可然次の詞に相應せり
いとなべて　源の心なりおほくは見給はぬとなり
我も　源なり　花第二段源の心詞なり
うちほゝゑみて　源の體なり
そのかたかともなき　源の詞なり前に少しのとり所あれば媒などやうの人の事をそへてつくろひいふ事をいへり　されどもそのやうにかいむくうそばかりにてはあらじと源のゝ給ふなり
いとさばかりならん　頭中將詞也　花三段也　さばかりとはそのかたかともなきあたりへはとなり
すかされ　たばからるゝ心歟前にいへる如く色々の

事をとりつけていふて媒などのたばかりよするなり

とるかたなくくちをしききはというなりとおほゆばかりすぐれたるとは數ひとしう　花取かたなくくちをしきとは至りてわろき人をいふ優にすぐれたるとは至りてよき人をいふ數ひとしきとは世間に此二の品はおなじほどに有べきといふ心は餘りわろきとすぐれてよきといづれも有がたかるべき心なり此事は上らうにも下らうにもそのほど〳〵につけて有べき事なり　箋云論語云上智與二下愚一不レ移注上智不レ染二於惡一下愚雖レ教無レ成又班固古今人表を書るに上聖人上中仁人上下智人中上中々中中下下上下中下々愚人　秘抄同　上々の聖人と下々の愚人とまれなるものなり

人の品たかく　花是よりは人の品を三に分て先種姓のたふとき上の品の人の事を云也或抄御說に位高き人は臣下よくもてなすによりてよき事をそたてわろき事のかくるゝ故にことの外よく見ゆる也

おのつから　自然也

そのけはひ　河氣日本紀　形勢新猿樂記　景氣

こよなかるべし　花無此世なり　桐壺卷にこよなういへる大都はおなじ心なりことの外にすぐれたる心なり秘事の外なり

中の品になん人の心々　花是は至りての上﨟にもあらず又至りて下らうにもあらぬ中品の人也　私云人にもてかくさるゝ事もなき故なり

をのかしゝ　我々の心むけなり　或抄御說に中の品が一の大事なり空假中の中にも中道肝要なり

しものきさみと　花下のきざみは下﨟の種姓を云みたゝずかしとは聞けども耳にたゝぬと也　花下品の人の事は人のとり上る事もなければ耳にたつ事なきとなり前の詞のとるかたなく口をしきゝはとすくれたるとは數すくれしといふ詞をいひ述たるなり

くまなけなる　頭中將の殘る所なく心に入て思ひめぐらしたる體を源のゆかしくて又問かけ給ふなり　秘たしかに決すべき趣の見えたるなり

そのしな〳〵やいかに　源の詞也　花第四段いつれをみつの品におきてか　猶源の不審をかくる詞なり　他本何れを上の品におきてか　逍遙家本

いつれをみつの品とあり　秘　みつの品には何とわくへきと源の問ひ給ふなり
もとの品たかく　前とつゝきたる源の詞なり　花　是は種姓はたかき人なれど世におとろへて官位のいやしく萬たらはぬ人を云なり　秘　上品の人の身をもちさけたるを云なり　河　位みじかくと選叙令にも位のみじかきといふに卑の字をかけりいやしき心也
又なほ人のかんだちめ　直人諸大夫也中院事書云なほ〳〵しき同心歟　伊勢物語云父はなほ人にて母なん藤原成ける　花　なほ人とは種姓いやしき人をいふされども時世にあひて官位高く進みのぼる事をいへり　始の二に分たるはふるまひにつきて二やうある事をいふ次に三にわけていへるは人の種姓に三品有事をいふ今又二に分て云るは種姓高き人の官位いやしく種姓のいやしき人の官位すゝみのほれるとをならべていへりよく〳〵分別すべきなり　秘　是は諸大夫などの時を得て次第に昇進をして公卿など迄なり昇る人なり此二の品分別しかたきと問給ふなり

けちめ　河　結目　掲目　いちしるき心也
左（ヒダルト云ヤウニヨム也）のうまのかみ藤式部のせう　左馬頭　藤式部丞なり　秘　此問答の最中に兩人の參るなり　聞書に源頭中將などの物語には餘り入たちこまかなる事は似合ぬをさやうの事をいはせん爲に此二人を書出せり妙なり妙なり
世のすきものにて　此人々好色のかた有馬頭世の人のうへをもよくしり辨説の達したるなり
中將まちとりて　中將の馬頭を待かけて批判をゆつるなり
此しな〳〵　源の問給ふ二ケ條の義なり
いと聞にくき事　秘　物語の作者の詞なり　聞書云聞にくき事と云は源や中將などはの給ひかたき事おほかるべしときこえたり
なりのほれるとも　弄　馬頭が批判なり源の語に答る也　箋云源氏二ケ條の問の内始種姓よき人のおちぶれたるといやしき人の成昇たると如何と問ひ給ふ馬頭の答は先いやしき人の成昇りたるを答次にもとの品高きを答ふ是も法文の論義二問ある時のちの問を先答て次に始の問を答る例也其心自然に面白

し云々　箋非分の登用其身に過たる人の事也　惟光が娘藤内侍のすけの類也祇注秘抄に同　前の源の二ヶ條の間を中將の批判せんとしたる所へ馬頭藤式部參りたれば此人に讓りて定さするなり馬頭物よくいふ人なればやがて受とりて申侍り是よりも十八問答あり是第一段馬頭詞也　秘當時の成のぼる人をば世間からは昨日今日迄のさしもなき人ぞと思ひいへど既に昇進などしてあがればいひおとすべきにもあらずとなり祇注同之　私云さはいへどゝは官位を成昇るといへどもなり猶ことなりとは根本世の人のなるべきものゝなりたるとは世の人差別して思ふといふ心にや世人よの人と讀べし

又もとはやんごとなき　箋云品族たふとけれども沉淪してときをうしなふひとなり末摘君は常陸宮の女空蟬は中納言の女にて伊豫介が妻になるの類なり

世にふる（わたるイ）たつき　河便（メツキ）萬葉

心は心として　むかしの心はうせずして事のたらはぬなり

わろひたる　事のたらはぬ故人にもあなつられなとするなりさるから色々のわろき事どもゝ出くるなり　秘又是も末摘にあたる前はしわさにつけての事なり是は種姓につきての事なりよく／＼見わくべし祇注同之　此前の段より末まで大略馬頭が詞なり

とり／＼にことはりて　何れをも中の品に置くとなり儒道には過不及をきらひて中庸をたつとぶ佛教には空假中の中道をたつとぶなり

すりやうといひて人の國の　花又中の品にしな／＼有べき事を云受領とは諸國の守なり國衙莊園の事をとりおこなふ者なり　弄祇注等軒葉の荻の類と云々箋又同之

秘軒端の荻の類なり國のかみは一任四ヶ年つゝにてかはる也さて人の國の事とは云なり吏務をつかさどる人成べし參議の兼國は權守なるべし愚案受領といひて人のと句をきりて讀べき歟　或抄御說に人の國とは日本の外の國のやうなればかくのごとくよみ切べしとなり　箋聞書等皆此義なり　私云但日本のうちにても都の外をは人の國といひた

る例もありとおぼゆ如何
品定りたる中にも　受領と云物はおなし品なるべけれとも又其中にも大國小國の守なとにて少しのかはりめも有べし
けしうはあらぬ　下しうはあらぬなり但清てよむべし又恠しうはあらぬ也下すしき心にもあやしき心にも清て讀べし弄一禪勘云大かたかんなの物は字にあたらすとも淸ても濁ても聞よきやうにかとかとしからざるを女房の詞つかひとすさりとて其心はたかふまじきなり
えり出つへき　中の品にえり出るによき比と云なり
　その比受領の人の娘に可然かおほかりしにや
なま〳〵のかんたちめ　河生若達と云體なり或はなみ〳〵歟紫明抄　花なま〳〵とは物のなま成なる心なり始て公卿などに成たる家をいふなりなましいの心歟
非參議の四位ともの　花八座より(省イ)大納言までを參議
　といふ非參議とはいまた宰相にならぬ人なり　箋曰太政官の外を非參議と云亡二位亡三位の類なり　私云大中納言宰相迄を參議と云は太政官にて天下の政をましはりはかるといふ義なり然は總しては太政官の名別しては宰相の事なりそれにならぬ四位共を云なりなま〳〵のかんたちめは太政官になれる人なり但太政官にはならずして二位三位に成たると云義しかるへし
世のおほえ　當時のおぼえあるなり
いやしからぬ　種姓も下劣ならぬ人なり
やすらかに　太政官などは隙もなき官なりされば非參議などは身のいとまもありやすかるべし　弄もとのねざしいやしからぬといへる明石入道にかなへり　祇注秘抄箋これにおなし　又明石の上にかなふとあり
かわらかなりや　河なまめかすきよげなる心なり人のしつみおくれたるをはしめりたると云に對して心うべし云々　秘箋さはやかなる心なり聞書云そこきれいなる心也　弄かわきたるは奇麗なる心なり　私云史記禹本紀云諧カワラカ也と古本に點せり然は調と云心歟末の詞にたらぬ事などはたなかめるまゝにとあれは也諧は調なりと注せり
はぶかす　はぶくは物を省略することなり　聞書云

はふくと云は鳥などの羽にて物をおほふとて羽をひろげてたらぬ所へおほふかはぶくなりたらぬ事をしあはするをはふくといふなり家のうちの不足なきまゝに何事をも省略せすかゝはゆきまで女などをかしつくなりまはゆきとは其身の品に過たるもてなしをするを人の見てそばにてかゝはゆき心あるなり

おとしめかたく　色々もてかしつくに付てよくおひたつ娘などあるとなり是等明石の上にあたれり

宮つかへに出たちて　箋桐壺の更衣の類なり諸抄同此類むかしはおほく有し事なり

すへてにきはゝしきに　花第二段源氏君の詞なり河饍（ニキハシ）和名　新猿樂記云富饒　箋云上作の評論貴人も零落の家をば引くだして中の品におく或は又家中の不足なき家のむすめをばたふとふ仍かの詞にあたりて源の批判の詞なり

こと人のいはんやうに　中將の源をさしていふ詞なり　秘源氏は好色ゝ身にして如是の給ふは假令ぬと也　河好色ならぬ人のやうにと也にきはゝしきによるにはあらねとも女のさのみおちふれぬるはよからすとなり　私云是はにぎはゝしきをいひたつるにはあらねとも先色々の人の上を申て見るに無分別なる人のいはむやうに心得ず仰らるゝと中將のいふ詞なり　花是は中將の詞なれば問答の中へはいらぬなり

もとの品時世のおぼえうちあひ　花第三段馬頭か詞なりもとの品たかく時世のおぼえ相應したるは鬼にかなさいぼうと云がごとし　弄女三の宮の類也　箋同之　秘此段女三宮によく當れり朱雀院鍾愛の皇女にてましませども御手などもよからず御心もおくれたる所おほし

うちあひてすくれたらんも　前にもとの品時代のおほえうちあひといへるを受ていへるなりさてけはひ心持萬に付てすくれたらんもかくこそ有べき事なれとめつらしく奇特なる事とおとろかれじとなり薄雲女院などの類なり

なにがしが　馬頭我を指ていふなり何かしそれかしとは我とわか實名をいふ義なり　花馬頭か涯分（ガフン）にかみか上は及ばぬ事なればうち置と申なり下の段

に源氏の君の事を云に此御爲には上かかみをえりいてゝも猶あくましく見え給ふとなり　秘なにかしとは馬頭か自身を指て云然れば身に取て上品をば申かたきとなり
さて世に有としられず　秘是は夕かほの上の類也
むくらの門に　河引歌「今更にとふべき人もおもほえず八重むくらして門させりてへ此歌の心歟云々いかてはたかゝりけんと思ふよりたかへる事なん案に相違したるといふかことし　箋曰伊勢物語におもほえず故郷にいとはしたなくて有ければとある此類なり　此段は下品の人をいふなり
父のとし老　弄藤式部かいもうとの類也　祇注これは種姓させる人ならぬ中にも然べきか有べきと云心也　箋曰藤式部か身上を打あてゝよその事のやうに馬頭か申なり式部か父はさだめて老耆肥滿の人成べしせうとゝは式部をいふ式部か兄弟の女をいふ義なり
かたかとにてもいかゝ　秘仕出たることわざのよし有てなり　かやうの中にもとり所あるべき義なり
私云思ひやりことなることなき人の思ひの外にしわさなともよし有てし出たらんはかたそはならん事なりとも是程も奇特やと心のおとろかんといふ義歟如何
すくれてきすなき　上のえらひにこそ入らさらめ大かたおしなほしすてがたきものにてあらんといひて馬頭の式部か方を見やるなり或抄御說には父の年老せうとの顔にくげなるがきずなり
わかいもうとゝもの　式部か心也式部かいもうとに宜しきか有なり我上をいふと思ひてやらん何ともあひしらはぬなり　花藤式部か心なり
いてやかみの品と　祇注君は源氏なり葵上の父は左大臣也母は御門の御妹なれば上の品にはならひなけれと源氏の御心にあはぬ所有し義也秘抄同之
秘是は源氏君の御心なり　箋云是は葵上の事を云なり源の心を察してかける詞なり
しろき御そどものなよゝかなる　弄源の體なり御そとは先きぬをいへり但衣裳の總名にいへる所もあるべし　やはらかなるきぬどもなるべし　御そとは衣なり
なほしはかりを　弄夜陰の事なれば知音の中にて指

貫を略して直衣ばかりを引かくる事勿論なり一注
秘一禪の說如何と覺ゆ直衣にもかならずきぬをかさねきるをなほしはかりとはいふなりさしぬきを略せる說は僻りなるなり箋同之

ひもなともうちすてゝ　小紐（コヒモ）とて有但くひかみ可然歟　或抄御說にくびかみのひもの事なり古今の歌にいれひものといへるもくひかみのひもなり總別其物にとち付て置をひもと云別にあつるを帶と云なり何れも源のうちとけて物語を聞給ふ體なり

そひふし給へる御ほかけ　そひふしはそひやかにふすといふ心に云說あれともそれは優ならず添臥はすぐれ侍り　秘花の說然へし　河火影（ヒカケ）日本紀　豊玉姬のうの羽ふきあはせすのみことを產給し時火火出見尊火をともして御覽じけり云々又は側影なりほのか成影なり

女にて見奉らまほし　祇注源氏君を女に我かなりて見奉りなば猶たくひなく思ふへき心也此下の詞にあらはなり　箋云女にてみ奉らまほしといへる所によりて心かはるなり爰は見る人が女に成て源を見たきとなり又源を女になして見たきと云所もあるなり

此御爲には上かかみを　此源氏に相當の女は上品の上をえりいてゝも猶不足なるべきのよしなり

おほかたの世につけ　花第五段也馬頭か詞なり　聞書此段又肝要也　秘我物と撰定むべき人はかたきとなり　箋云凡人を公界にみる時は隨分然るべきと思ふ人もあひしたしみては第二等に落る事ありいはむや一家の骨肉と相たのむへき人百人の中に一人もえかたしと云々又孔子の門徒三千人に達者七十二人此中よりわつかに十人をえらひて十哲と云其中に顏回を猶すぐれたりとす佛弟子の中にも十大弟子をあく是又舍利弗を第一とす如此人はまれなるものなり

をのこの大やけに　おほやけは公庭なり朝廷也　公（オホヤケトヨム）　秘此段肝要なり此人こそ世のかためともなるべきとてとり出すべき人はかたき事なり　或抄此段肝要なり男の宮仕に比して女の上を云なり　箋云士者事也　漢志學以居位曰士　禮記云卿論季士注卿大夫所老有德行道藝者

世のかためと　箋曰殷高宗之得傅說（フセツ）周文王之得

太公望ニ之類也
まことのうつは物と　眞實の生れ付たる器量なり
されどかしこしとてひとりふたりして世中をまつり
こち　花天下の政をは太政官にて是をとり行ふ一日
萬機の政務なるによりて三公九卿を置てつかさと
らしむる也まつりこちしるは政知ると云心也ひと
りこちはひとりことかへりこちは返事こちはこと
といふ心五音通する故なり　箋曰孔子之門人の中
にも徳行には顔淵閔子騫冉伯牛仲弓言語には宰我
子貢政事には冉有季路文學には子游子夏十哲の中
にさへひとりして總を兼たるはなし佛の十大弟子
も智惠第一舎利弗多聞第一迦葉神通第一目連なと
とて得たる所かある也其ことく其道によき人をえ
らひて一々官々職々になして事をおこなへば廣き
おほやけ事も結句やすく／＼と調るなり
かみはしもにたすけられ　河上含ニ淳徳一以遇ニ其下一
下懐ニ忠信一以事ニ其上一史記猶河にくはし略之
せはき家のうちのあるし　河適（アルシ）毛詩　河國を治めむと
思はヽ先家を治め家を治るものは先身を治る心な
り　詩序に以ニ一家之事一懸ニ一國之事一と云り左傳

曰詩云則ニ寡妻一至ニ于兄弟一以御ニ于家邦一詩大雅註
云寡妻謂ニ大姒（妃イ）一也言文王之教自レ近至レ遠也　花天
下は廣しといへとも諸人力を合せてをさむれば中
中安きなりせはき家の内の事はあるじ一人のはか
らひなればゆづるかたなくして大事なる心なり此
のあるじはうしろみの事をいふべし　秘同　秘此
あるじはうしろみすべき女あるじの事なりうしろ
みなくては家中は治りかたきなり　箋云天下に對
する故にせばき家といふ也
とあれはかゝりあふさきるさに　河古今そへにとて
とすれはかゝりかくすればあないひしらずあふさ
きるさに　八雲抄にあふさきるさとはとするもか
くするも也云々　花の義あやまれり　秘顯昭か注
にあふさとはあふさまなりきるさとはきるさまな
りとさまかうさまと云心なりとするもかくするも
あしといひしらぬわざかなとよめり云々京極黄門
是に同じとせんとするもかくせんとするもあちこ
ちへ物のちかふなりそへにとてとは只詞也さ有と
思ひてすれは又かかりとなり世の中のさま也有に
はあらす後撰戀四に「けふそへにくれざらめやは

とおもへとも絶ぬは人の心也けりも此詞に同しき歟　祇注そへにとは我心に物を領解したる心なりさやうにしてよからんとおもへはちかふさらば又かやうにやせんとすれは又たかふ事有義なりあふさきるさは往さま來さまのやうの心なり只こなたかなた物のちかふ世のならひなりそれを女の上のこゝはよしと思へはこゝたかひかしこをよしとおもへはこゝはたかふ事に引歌也箋云かくのごとくと思ひ定めてとするもかくするも物のちかふといふ義なり花の説あやまれり

なのめにさても　是はこゝかよきとおもへば又あしき事が有あしき所があれば又よき事のまじるうちになのめにとはなほざりにおしなほしこらへころにて有ぬへき人のすくなき故色のうへにて女をあまたとりかへてみんと云にてはなけれども何として然るべきかあらんおなじくはわが力を入てなほさすとも自然によき人の心にかなふやうなるもやとえりそめたればそれかしとてもえらばんならば猶々然るへきやとさたまりかたく心のなりそめたるといふなり　箋曰なのめは斜なり一文字に直なるは十分なり虹形に斜なるは十分にはあらざれとも大概にこらへ此なり

かならずしもわか思ふに　祇注に此詞男女のうへのみならず君臣朋友の中にも大切の詞なり　弄此詞はすこしなため用る心なり思ふにかなはぬ女をもすてがたく思ふべき男の事をいへり　秘箋同之

物まめやかなりと　正首モノマメヤカ　或抄　河眞マメ　實なる男の事を云

されとなにか　河になにかしかと云心歟云々但されととと讀切て何かと詞にいへる事とみえたると云也然るべき女のなきをいふなり　箋云されどなにかと何を切此一句六字上の詞を決する也右件のことき人世になきといふ義なり河の義非なり　私云されどなにかかやうの人世にあらんと云なり

世の有さまを見給へあつむる　箋曰此句さらに起すなり

心におよはす　箋云世間渉獵の義なり及はぬ境界なく世を見あつめたる上に畢竟世上に心にくき事なきのよしなり　或抄猶馬頭か詞なり品定の種々の事を仰て世上を能々見るに心にくき事はなきなり

君たちのかみなき御えらひ　馬頭おほくの人の上を語りて世にしかるべき女のなき事を申さんとてかくいへり　源頭中將をさしてなり

所せう思ふ給へぬにたに　祇注是は馬頭かわが身のことを云なり所せきとは上臈はよろつ身をやすらかにし給はぬ物なれば其身はせばき義なりいやしき身は所せばき事なきよしなり總しての心はいやしき身にたにおもふにかなふ女はなきの心なりおもふ給へぬにたにといひて心をもたせて句をきりて下へはつゝかぬ詞なり　私云祇注に同し　花鳥の義相違歟　箋云所せく思ふ給へぬにたに（當流本無此詞）す貴人は萬身持輕からぬ故に所せばき樣也今馬頭たにと句を切上へかけて見るへき也下へはつゝか身いやしくて世間を廣く見及ふ中にたに心にかなふ女はなきと也　私云或抄御說此詞をあそばされす家（宗イ）敎にかきつかはさるゝ御自筆の本にも此詞なしと云々愚本以ニ彼家本ニ校合然るに此詞の所本になし河內本と注す然而彼雨夜の抄出祇注にこの詞有同（予）聞書には靑表紙に此詞なしと注せり家本にも此詞は有これをけたす只本になしとはかり注付てあれは近代くはへてよまるゝ歟

かたちきたなけなくわかやかなる程のおのかしゝ（弄）一種也又女の有さま也秘同之　箋曰おのかしゝの詞四つめなり此段は各競の字相當せりかたちきたなけなき美人の各あらそひて身をたつるの義なり

ちりもつかしと　祇注此一段のうち塵もつかにと身をもてなし文をかけとことえりをしてと云所が六條の御息所などにあたるへしことえりとは詞をえらふ義歟御息所は文書上手にておはしけるなり是より下となりせばあだめくといへるは木枯の女にあたるなり始の難とは今は第一の難といふ義なりこの段のつゝき總は一段なれど其事々のかはりめにそこはそれにかれはこれに似たるやうの事有べし　秘塵もつかしとは身をたてゝ清淨なる心なり　箋曰ちりもつかしは風流をもとゝしたる人也かくのごとき人はよく外をかさりて內心はさもなきなり表裏各別なり其かはりめに五つあり一には身體潔白淸淨一には文章かすかにえんに一には墨つきほのかに一には始は形を見えて後にはかくれ

一には物いひかはすもいきの下に引いれなどする也皆是虚僞にして實にはあらず其正しき心を守らずあひ近付く時は心やかてとけて心底を殘さず誠に是正しからざる第一の難也　同ことえりは文章の分明ならざるなり　又さやかにも此段引合て會面の義なり心に風流の過たる人からのことしなましいにちらとかたちを見えて又かくれ更におくふ（夫イ）かきつくりふりなり（らイ）花に一部文の事と云々またせとはよみとかれぬやうに書て隙をもついやすとありあやまれり　但本此字あり　箋曰此一段一部の文の事なりまたせとは返事なとのおそきをいふべし秘にまたせとは文かきなどほのかなるといふに對していへり言心は文などはかりにてはおぼつかなさに行てあはむとすればすへなくまたせてはやく出もあはてかすかにあひしらひてものをおもはする體なり又文のほのかなれば又さやかなるをもみはやとまつ心にやすべなくとは　正无便也　焉㒒　無便（タヨリナキ）　無爲　私云せんかたなき心歟　私云箋の義始に五つに分て釋せられたり然るに與の義に朱點をくはへられて始の義には朱點なし後の義を可用歟

おてかくすなりけりとは下に好色なる女のうへに實事を見せて正しき體をするかかくのことく有となり

なよひかに　しなやかなるやうの心なりいかにも女しく餘り入め過たる樣なる人にとりよりてみればあたゝめき好色なる人有是を第一番の難とせんとなりくつろきたちぬれば本性の好色をあらはして正體なきなり

ことか中に　箋曰有かなかに也此段諸抄誤れり　花云ことなる難有中に先二つをあけたり此義はよしなのめなるましき人のうしろみのかたは　箋曰なのめは斜なり斜なるはなゝめならぬなりなゝめにもあらぬは惡き事なり　私云是は馬頭なとやうの數ならぬ身上の妻に後見のかたなどを打まかせておく人の事を云歟　箋の義うしろのかたはとよみ切是は家の中取まかなふ樣の妻とする人はといふ義なりさやうの人は物のあはれ知過しとは折節の花紅葉の情をしり或はしりがきかいひく爪音などやうの事は平生相具する家童子にはいらざる義なれども餘に遍屈もなくうしろみはかりかたおちて實

の過たるも悪きとなり其心を次の詞に一種又いひ述たり此義の心なり諸抄相違仍不載之　箋云此段はすゝむをしりぞけ退くをすゝむるなり
又まめ／＼しきすちをたてゝ　箋云又の字は後見のかたは物の哀知過しといふ詞にかけて又と云也
花是は又まことしき後見のかたはかりを知て其外の事には心おくれたる人をいふなり
みゝはさみかちに　秘鬢の髪を耳にはさむなりとりつくろはずあるにまかせて我身をもつなりかひかひしき體なり馬頭かゆびくひし女の類なり
びざうなき家とうし　びさうは河に字あまた出さる然共箋云貧相なる也なきはつけ字なり貧相など云事になきと云事日本の詞なり　侘傺なきと云は侘傺なるなり侘傺は失レ志貌なり
離騒上悵欝抱余侘傺兮吾獨窮困乎此時也箋云如在なきと云も同之秘抄同之　いへとうじは家童子なりさためたる妻なり河の義略之
うちとけたるうしろみはかり　折節につけたる情もなく只家中の取まかなひはかりなり
朝夕のいて入に　不断の出入なり

おほやけわたくしの人のたゝすまひ　禁中以下私の參會までの人の行迹の體なとなり
わさとうちまねはむやは　外人などにさやうの事をかたる事はならぬなり
近くて見ん人は　妻室の事なり秘世間のうきをも又は外より歸りても何事も我妻にこそ語り合せんとするにも心有て打いらへなともせぬを云なり
なみたもさしくみ　聞書云涙のすゝむかた也
おほやけはらたゝしく　花公方の事につきて我腹のたつなり　秘主人なと持たる人のその方のうらみ有又傍輩朋友などに口惜き事の有時心有妻などには語りもすへきをとなり
なにゝかはきかせんと　箋云かくのごときの女には其性詰屈にして人の是非をもわきまへぬなり
何事そなとあはつかにさしあふき　箋云つきもなき人の體なりさしあふきはさし扇にはあらずさしよりたる體なりつき／＼しくもなき樣なり此段馬頭か指喩し女に相當なりあはつかにはあは／＼しき體なりあはたゞしきなどいふ類の詞なり　周章
祇注此段馬頭かゆびくひたる女に當るなりされば

彼女はみめかたちはあしかりしかど身をかいつくろひなどして心もけしうなかりしなり大やけ事に付てもはらたゝしき事有時心なき女などにはいひてもかひなきあまりに思ひ出わらひなどする事有べし口惜く思ひしあひてなど心になんてふそれがなど思ひてそら笑ひする事もある義なりあはれともとはあはれわが身かくならはゝ述懐の事有習なりさやうに男のあらむ時は女の心にも大方の事にはあらじなど深く思ひいれて男をもなくさめなどすべき事なれど其心もなくてこと〳〵しく何事そなど〻あは〳〵しくいひてさしよりたる體口惜かるべき事なり

口をしからぬ　くちをしきなり

たゝひたふるにこめきて　箋云此一段は上の段のうら也たゝとは所詮思案するに大やうなる人然るへきと也　ひたふるは一向なり河に永なり　こめきは巨なり大やうなるなり巨細と云は大小の義なり　秘おほとかなる心なり　花にをさなかましき體歟云々あやまれり　祇注是は天性心たての思ふままなるは有べくもなければかやうに又一段をかけるなりこめきはちひさきにあらず巨の字なりおほきやかなる性を云なり紫上のをさなおひなと是にあたるなり　弄乙女卷には雲井鴈十四歳またかたなりに見え給へといとこめかしうしめやかにとありをさなき心あるべからす

心もとなくとも　是は大やうに物やはらかなる人を教へ入て見んは今少し心のたらぬやうなる所有ともなほし所ありてさし過たるよりはまさりたらんとの義なり

けにさしむかひて見んほとは　花こめきたる人も大かたはよけれどもたちそふ程はさても有べきがたちはなれていひやる事のたらはぬ事のあらんは又くちをしかるべきとなり是かよき中にわろき事のましるをいふなり　箋云上件(カミクダン)の段に思ひとりて所詮こめきやはらかなる人そと思ひえたる中よりおとろきてけにさてかいとりたる所なからむ人は其事に臨て手を失ふへきとなり

わか心と思ひうる　女のしいつる事の至りのなきとなり　箋人に物をいひつけてさするにはわかたらひたる事にてなければ毎事不便なる事おほき物な

り
たのもしけなきとかや　箋答なり　或説とかや詞な 一本とかや詞也かも
りかもし濁て可用之 じ清て可用之
猶くるしからん　箋云猶の字上の段逼屈なき人より
もおとるべしと云なり　此段始は紫上の類末は相
違するなり
常はすこしそばそばしく　祇註心の事にあらずみめ
かたちのよろしからぬ事を云へるなり　秘まほな
るかたちとはよきをいへはそれに對してそばそば
しきはあしきなり心のつきなきとはかたちあしけ
れば人の心につかぬなりかゝる人も折節の出ばへ
のするとはたちふるまひの心たて人にまさる事の
ある義也是には花散里よくあたれるなり　弄秘箋
等同之仍略之となり
くまなき物いひも　くまなきとはいひ殘す所も思ひ
殘す所もなく心をめくらしいふなりさやうの人も
さためかねたるなり
うらなけく　馬頭の定かね何とあるへき事そなと案
じわづらひたる體なるべし
いまはたゝしなにもよらし　品とは種姓なり　花人
は唯心むけを本とすべし品もかたちもいらぬと云
心なり　三界唯心萬法唯識之心なり源氏一部の肝
要こゝに有 心イ　弄此詞一部の肝心也と花鳥にも有可
思之　秘此詞一部の肝心のよし花鳥にしるせり尤
可然　箋云一部之肝心此一句なり三界唯一心々外
無別法三界唯心萬法唯識之心也人の心性は族性に
もよらす人物にもよらす正路の心一にて事たりぬ
へしその上に然るへき器量あらばしかしながら臨
時の所分なりと思ふべしたとひ又少々の不足あり
とも内心の一つ實得ありて正しくは自餘は自然の
莊嚴なり
いとくちをしくねちけかましき　河佞人日本紀　佞は
諂也才也巧諂高才也　河論語注曰佞人口辭捷給數 操イ
爲民所憎者也　又曰佞口才也又曰佞人假仁者之
色行之則疑　花口きゝがましき人をねちけ人と
いふ心のわろき人をいふなり　河萬「なら山のこの
てかしはの二おもてとにもかくにもねちけ人かな
このてかしはは大とちと云ふ木なり此木の葉風に
吹れてあなたこなたへむくなりそれを二面と云な
りあちこちへむきて物いひする人に似せたるなり

是をねちけ人といふ
物まめやかにしつかなる　秘葵上紫上を人の本にして皆いふなり
ゆゑよし心はへ　其外のと云心なりその餘はと云事なり　あまりのゆゑよしとは物まめやかにしつかなる心のおもむきならんよるべをいふとあり其外のゆゑ〳〵しくよしつきたる心はえ打そへたらんは勿論よろこひに思ふべしすこしおくれたるとはたらはぬ所のあらんをもあなかちに難にもとめくはへしとなりうしろやすくのとけきとは心さたまり實々しき所だにつよくはうはへの情は自然にしても事たりなんとにや此以前に注する箋の義と同じおのつからもてつけつべきと云葵上にあたれり
　箋曰此段三界六道の衆生のあり様なり生死の道には貴賤上下是なし（道イ）品にもとらしといへる是なり地獄餓鬼畜生天上人間にかたちをかふといへども本來具足の佛性は金剛の正體なればかたちをは更にもいはずといへる是なり然は心法の一つを守る所にあり
えんに物はちして　艶なり又一種の性なり　弄夕顔上の類なりえんにはうつくしくやさしきなり　秘伊勢物語にいてゝいなは心かろしの歌をよみていにし女なとの類なり
うらみいふへきことをも　秘論語云匿レ怨而友二其人一左丘明耻レ之丘亦耻レ之是も又わろき性なり心には恨み深きをみもしらぬやうにて堪忍するなり
うへはつれなくみさほつくり　河後「はちす葉のうへはつれなきうらにこそものあらかひはつくといふなれ　花拾「あしねはふうきはうへこそつれなけれ下はえならすおもふこゝろを　今案みさほつくるとはしらすかほなる心なり松のみさほといふも霜雪をもしらすときはにつねある事を云下の詞にみさほにもてつけてといふもつねにかはらぬ心也
箋曰みさほは不變なり操也　私云松のみさほなと云は生得の不變義なりいつもかはらぬ心なりみさほつくるとはこゝろのそこはいろ〳〵に變するをうへはみさほなる體をするをみさほつくるといふへし作り事にする心なり
心ひとつに思ひあまる　是も又人には恨をもかくすゆへにわか心中ひとつにおもひあまるといふなり

いはんかたなくすこきことの葉

あはれなる歌をよみおき　心のそこには思ひはなれぬ心なりその末にみえたり

しのはるへきかたみ　或説此段夕かほにあたるといふにつきて此かたみは玉かつらの事と云々尤おやまれり只これも心の底から思ひはなれぬ故に跡にかやうの事をのこすなり　或抄御説に男にしのはれんとて髪のかみをきりてのこしおきなとするやうの事なり

ふかき山里よはなれたる　箋云此段伊勢物語にいてていなは心かろしといひやせんといひし女の類也　祇註此物語には夕かほの上これにあたれり歌なとをよみおきたりし事はなけれと大方の心たてよく似たるへし

海つらなと　よはなれたるなとは此世の外のやうなる人はなれたる所なるへし　河に海頬　又海濱（ウミベタ）　海頭（伊勢物語眞名本）

わらはに侍し時　右馬頭かわらはの時なり

物かたりよみしを　物かたり草子なとを女房のよみしを馬頭のきゝしなりかやうの女の事なとを作りたるをあはれに心ふかき事とおもひて涙をさへおとして聞しなり今おもへはかろ〳〵しくことさらひたる事とをかしく思ふなりことさらひは又わさとかましきなりことさらにつくりいてたる心なり下にも此詞あり此ことわりを君達にしらせたてまつらんといへるなり

心さしふかゝらん　是は女に心さしふかき男なり

つらきこと　此男の女にすこしつらき事のある時なり

人の心を　女の我をふかく男のおもふとはしりなからみ知ぬやうに少しのつらきふしをとかめてにけかくれて心さしふかき男なれはおもひまとはせむとするなりさなくは眞實ならぬ心をもついてにこころみむとするなり

なかき世の物思ひ　是はさやうのたちろきに男のふとおもひきりなとすれは女の後悔かいてきて物思ひになるなりこれかあしき女の性なり　聞書云いせ物語の有常か手を折りてとよみし女の事をふくむ也

心ふかしやなと　古「われを君なにはの浦に有しかは

うきめをみつのあまとなりにき　心さたまらぬ女のさまなりうきめをみつのとよみし女の類なり
あはれすゝみぬれは　心もおこらぬ一念にちやくと尼なとに成たるなり心あさき人のつねの事なり
おもひたつほとは　此きはゝ心すゝしく思ひたつなり必すゑとけぬ性のくせなり心すゝめるやうにてとかける奇特なり
かへりみすへくも　世にかへりみる事をすへくもなきなり
いてあなかなし　花これはあひしれる人のさとふらひて此女にいふ詞なり
ひたすらにうしとも思ひはなれぬ男　此女の心に一向にうしとも思はぬ男なり前に云るやうに女をふかく思ふ男のすこしのつらさをかこちてかくのことく心みんやうにしてかくのことく成行なりその男の女の尼に成たるを聞て涙おとすなり
つかふ人ふるごたち　つかふ人は何にても此女のつかひし人ごたちは後達也女の總名なり年よりたる女房なとの男のかたにとまりゐたるか君の御心はとは男の心は今もかはらてしたひ給ふ物をさてもあたら御身をすてられたる事よなとゝ世をそむきたる所へ來て男のありさまを女房に語りきかす事なり此女もそこからうしとも思ひはてねは執着に引れて後悔の心出來る也　ごだちの事河に委し
みつからひたひかみを　尼に成たる女の體なりむかしは垂尼とて髪をもそらす喝僧なとのやうにはさみたるなりさるによりてひたひかみをかいさくりといふあへなくこゝろほそく後悔のおこるゆゑなり
うちひそみぬかし　箋潜ヒソム顰　河嚬　蹙イタミヒソム　文選
八雲に云すこししめりほけたる體なり　箋云顰は眉蹙也平聲刪句也潜は溺流貌詩潜然出涕去聲涙下貌又易乾卦云初九龍潜潜は隱也潜陣藏也說文渉水也又水伏流也一曰藏也楊士云ちは子潜心仲尼龍潜乾卦云潜龍詩云魚潜ニ于淵ニ箋云潜は涙下也潜は藏也字相類するといへとも各別也所にしたかひて用ふへし所詮此段は涙いまたくだらざるのまゝ面をかくす義なり
忍ふれと　堪忍すれども也うちひそみてひたひがみにまぎらはしなどすれども涙のこぼるゝなり
そり〳〵ことにえねんじえず　これが前に長かき世

の物思ひとゝもなるといへる事なり
佛も中々　箋云一日一夜の出家の功徳もはかりなしといへとも此女眞實にあらす仍佛意にかなふへからす中々の字よく眼をつくへし
にこりにしめる程よりも　祇注此引歌「蓮葉の濁にしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく此歌あひたりともみえぬをあはせやうの侍るなりたとへは蓮葉はまつにごりにそみてしかもしまぬもの也尼になる物はにごりにそまぬやうなれども心は濁にそみたるものなりしかれはかゝる人は蓮のにこりにしめるよりもなまうかひなるへきの心なりされはあしき道にもたゝよひぬへしといふなり　秘此引歌詞ばかりをとる也心はちがふ也いふ心はうき世にある程は蓮の淤泥にありて濁にしまぬをはや世を一度はなれてたちかへる心あらは更に濁にけがさるゝなり　箋云不染世間法如蓮花在水也何かは露を玉とあざむくの本歌に問答の心あり中々に淤泥にそみたるにもおとれり悪道の因なりと云々
たへぬすくせあさからで　祇注これも同し女の事をいへり或は尼に成ると又尼になさでとりかへしてもみなよろしからぬ事は同し事なりさるにより下の詞にとあらんをりもかゝらんきざみをもみ過したらん中こそちぎりふかくあはれならめといへるなり
尼にもなさでたつねとりたらんもやがてあひそひて
此段他本にたづねとりたらんもやがてあひそひて其思ひうらめしきふしあらざらんやあしくもよくもあひそひて如此あり三家の本此朱點をくはふる分のことばなしされども此詞は尼になさで尋ねとりたりとも一たびそむきぬる心を思ひいでばうらめしと思ふ心のなくてはあらしと云る義なり
われも人もうしろめたく心おかれしやは　祇注さきのごとくたとひあひそひてありともさやうならん女はうしろめたくて心おかれぬ事は有ましきの心なりこれも伊勢物語に業平をすてゝ出し女のまたいひかはしたりしかどうたがはしくおぼえてなりひらの忘るらんと思ふ心のうたかひに有しよりげにものぞかなしきとよみしやうの類なり其心にて紫式部もかきつらんとみえたり秘箋の義同之箋曰たえぬすぐせあさからであまにもなさでたづねと

りたらんもやがてあひそひてわれも人もうしろめたく心おかれしやはとあらんをりをもかヽらんきざみをもみ過したらんなかこそちぎりふかくあ（要略耳是イ）はれならめ　箋云此段影略互見ひとつの文體也所詮大意は堪忍の心ある人とは始末あひしたしむへし然るを一旦のいきどほりにて心のさだまらぬ人はたとひふたゝびあひしたしむといふとも前のかろ〳〵しき心を思ひ出は又いづれの時かわれをそむかんと思はゞかならず隔心あるべきの文なり

又なのめにうつろふかたあらん人をば　祇注前の段は男の心さしあるをみしらずしてそむきうらむる事をいへり是は又をとこあた（ふイ）人有てうつろはんをおなじやうにうらみそむかば男はをこがましく思ふべしされば男の心はたのもしげなくともみそめしちぎりをちからなしとおもひて堪忍すべき心なり　秘なのめにうつろふはなほざりにうつろふなり　箋云心をさまらざる人用捨有べき義をいふ上の段はこゝろざしある男也よりて二たびあひしたしむ事あり此段は夫のこゝろざしやう〳〵變ずるの時分さきのやうによばなれたる所にかくれ尼などにならん企のあらん時かのをとこよきをりふしとこひねかふ心あるへし其時は身上いづかたへもつかぬ物になるべしされは眼前に別心ありともみしらぬさましてすくさはかへりて人にすてられぬ身と成べしとなり

心はうつろふかたありともみそめし　さやうならんたちろきにとは男の心のなのめにうつろふ時分をさして云なり　男の心のうつろふかたありとも女のかたよりみしらぬさまにてすぐさばさすがに男もみそめし心をいとほしきかたもありて十分ならぬ中なりともそのまゝ過さんとなり

すべてよろづの事　總じてといふ心なり　又畢竟也　祇註すべてといふは前のあまたの事をもつて肝要に見るへきやうをかけるなり此段のよき心持は紫上なとの類なり　弄上品の機なり紫上の類なり　箋云以上を一決する詞なり

ゑんすべき　怨なり　こゑにいふなり怨ずるとかける所はそとしたるうらみの心にいへるかとみゆ　箋云匿レ怨友ニ其人一左丘明恥レ之丘亦恥レ之　此語をひけり

うらむへからん　箋曰是は恨のうらみ也ふかきうらみに用るとみえたり

にくからすかすめ　箋云にくからずの詞奇特なり優レ顔不レ諫なり　箋云此段は紫上にあたれり但若菜の巻に女三宮の御事は一言もうらみ給はず

おほくはわが心をもみる人から　秘抄みる人とは女の事なり男の心も女のをさめやうから治りぬべしとなり

あまりむげにうちゆるべ　花えんずべき事をもうらみすうちけつやうなるはたうざはらうたきやうなれどまことに男を大事に思はぬに似たれば中々かろきかたにおぼゆるとなりかゝる人をつながぬ船のうきたるにはたとへたるとなり　祇注これ又女の物えんしもせず男の心にまかせたらんはたゞ男を思はぬにて侍るよしをかろきかたにぞ覺え侍るといへるなり下の詞につなかぬ船のうきたるためしとは船は浪の千里をもゆかんこそ本意ならめともつなぐ事なければ船のためにあやふきにたとへいふなり

つながぬ舟のうきたるためし　河觀身岸額離根草論命江頭不繫舟古人の釋一同に此詩をのせ侍りしかれども其心物語と相違するなり　詩者以是(觀イ)無常にたとへたり物語には源跡の心なり文選云泛乎若二不レ繫之舟一莊子注又賈誼鵩鳥之賦云野鳥入室主人將レ去請問于鵩予去何之云々此心也予以二管見一勘二得之一潛通二作者之意趣一努々自愛云々　九禪抄曰文選第十二六臣注賈誼鵩鳥賦云澹乎若二深淵之靜一泛乎若二不繫之舟一注云深淵無波散舟任運眞人用心不搖動無趣向亦似之也　同注云鶡冠子曰泛乎若二不繫之船一與入以下江頭につなかさる船といふ詩をひけり河にはしめて泛乎若二不レ繫之舟一此句をひけり其後一同に此句を用也　秘女のあまり男をさしゆるすもあしきとなり千里萬里の波上にうかぶ船をもいさゝかの纜(トモヅナ)にてつなぎおく如くに男の心をも女の心にてつなぎとゞむべきなり　聞書云女の心を船の纜にたとへたり嫉妬などにつながるゝ心なり　私云みる人から我心もをさまりもすべしと前にいへる心なり

中將うなつく　頭中將なり　河點頭　或頷狀漢書顏許淮南子　頷許遊仙窟　花第六段也中將の君の領納し

たる體歟
さしあたりておかしともあはれとも　秘第七段也頭中將詞なり　花に馬頭か詞といへるは誤れり男のうへに見る説あれとも只女にみるかよきなり　朧月夜の類なり　祇注おほろ月夜これにあたれりまことにたのもしけなき所有し人なり
たのもしけなきうたかひ　朧月夜の類也云々　弄つなかぬ舟の詞にかけてみれば男のたのもしげなからん事と見えたり如何　或抄御説に是を花鳥に第七段馬頭か詞とあり如何是は頭中將の詞なり又男の事と云々是も如何女なるへし　同頑注にあはれともおもはむ女のさせるふしもなき物うたかひなどしてそむきかくるゝやうならんは大事なるべしされば男の心あやまりなくばおしなほしてもみむと思へともあた〳〵しき女なればさもあらしといふにや云々
わが心あやまちなくてみすくさば　弄男の心にあやまちなくて女のあしき事をもみすぐさばともみゆ所詮此段男女たがひに此理ども見るべきにや　祇注此心たとへばわがおかしとも思ふ人もたらん人のうらむべき事もなきをあやまちあるやうにうらみなしてそれをかことに他人に心かはしなどする事あるをまことに大事なるべきといふなりされば
わがあやまちなくてみすぐさばたとひ一たんうらみありともなどかおもひなほしてみざらんの心なり
それさしもあらし　心不調にしてあだなる女はさしもあらじと云なり下の詞にともかくもたかふべきふしあらんをのとやかにみしのばむよります事あらじとの給ひてわかいもうとの葵上をほめておほすなり
ともかくもたかふへきふしあらんをのとやかに見しのはむ　花是は女の男のたかひたることあるをはらだちえんせずして見忍ぶをいふなり葵上の心むけこれにかなひ侍れば中將の君わがいもうとのひめ君は此さだめにかなひ給へりと思へるなり紫上はえんずべき事をばみしれるさまにかすめなす男の心までもをさまるやうなりこれを女の本樣にすべしそのつぎはたかふふしあれどものとやかに見忍びてかる〳〵しくはらたちえんしなともせぬなり

これは上らうのまことしきためしにすべし　紫上と葵上とを女の本様にしてほめたる心也　弄畢竟の理なりともかくもといへるより總じての批判とみるべきにや是は女の男のたかひめをはらたちえんせずして見しのぶを云なり

わかいもうとの姫君は此さためにかなひ給へりと

葵上の心むけ是にかなひ侍れば中將の君わか妹の姫君は此さだめにかなひ給へりと思へる也　弄此定にかなひ給へりとは畢竟品定めの事にや　秘ともかくもしこゝにて總を決していへる詞なり　箋云此段大事の義理なり

さしあたりておかしともあはれとも　是は男の心にふかく思ふ女の事なり本妻をいふべし

たのもしげなきうたがひ　是はかやうにふかく思ふ女のかたから男の行迹いかゞと思ひうたがふ也大事なるべけれとは男の女にうたがはれんは難義なるこゝろなり

わか心あやまち　是は男の心に眞實別條なくばさする女も見しりて思ひなほすべしと男の心にさおぼえたればとなり

それさしもあらし　わか心にすこしもあやまちなき男は又ありがたかるべしこれまで女におもひうたがはれん男のうへをいふなり男のならひすこしもみだれぬ所まじらぬはありがたかるべし

ともかくもたかふへきふしあらん　前にいへることくうたがはしく思ふ女にみなをさるゝまて實をたつる男はあるましけれはさやうに男の分る心ありとも女の堪忍の性だにつよくばしかるべきとなりとかく男の女のうたがひをはるゝほど實をたつる事はあるまじければさやうの所を堪忍する女の心を本とすべしと云なりともかくもといへるより總を決していへる詞といへる説よろしくや前に色々の義あれど此説猶相當歟

君のうちねぶりて　秘案のごとく源氏もかく思ひ給ふ故となり　或抄源氏の御さまなり此段よく葵上のこゝろにかなへばきゝ給へかしと頭中將の思ひたる成べし　弄是は葵上の體によく似たるとおぼせは源はこと葉をもませ給はぬとなり　私云頭中將の心に葵上の心によく似たるとおもへば源氏もさやうに聞給はんか詞をもませ給はぬを源の心に

あはずやまたいかゝありて如此あるらんとおもひて心にかゝりて思ふと也

馬のかみ物さだめのはかせになりてひゝらきゐたり

河物定の博士此名目先例未ニ勘得ㇾ假令物之合之判者同事也　輕（ヒヽラキヰタリ）粧（日本紀）　京極の北政所從一位麗子自筆本にひいちゐたりとありしからば如此よむべき歟一説云鶲（ヒエトリ）のうそをかまふる時ほこりて羽をたゝくかたちなり云々又云ひゞらきゐたりとある本もあり同心なりともに鶲のさへつる姿なり云々輕粧はかる〳〵しき姿歟　花　一切の事にはかせといふ事ありそれがいふ事が本になる也博士は博達の士といふ心也　秘　はかせとは博士也　集覽に學官の名也　注曰掌ㇾ通ニ古今ㇾ只古今にひろく通ずる士といふ心なるべし　ひゝらきは鳥の羽をはたたきすることくにほこりたる體なり弄箋同之

このことわりきゝはてむと　頭中將の心にいれて聞はてんとあひしらふ也　弄　あひしらひゐ給へり以上一日の講云々講釋一日の分と也

よろづの事によそへておほせ　花　第八段馬頭か詞なり　或抄　おほせとは萬事になずらへて御分別あれと云なり　花　雨夜ノ物語はしめは女のしなかむけのよしあしきを物にもたとへすありのまゝにかきたり此段よりは又本の道緒所手かき此三の藝にたとへて人のまことありいつはりある事をのぶこの下の段にはそのはしめの事すき〳〵しくともきこえむとて各むかしありし事どもをたがひにかたりいたすかくのごとく三段にかきわけたる詞のつゝきひとへに法花經の三周説法のすがたをとれり三周とは法説一周喩説一周因緣説一周也法説一周は方便品なり此品は直に妙法の道理をとき給て上根の聲聞舍利弗に對してさとらしむこれを法説と云次に喩説一周は譬喩品なり此品のはしめには法説の述成授記有これまでも舍利弗に對しての説法也そのつぎの段に三車一門のたとへをかりて三乘つひに一乘に歸する趣をのへて中根の（多イ）聲聞須菩提迦旃延迦葉目蓮にさとらしむ信解品藥草喩品までも喩説の述成授記なり次に因緣説一周は化城喩品也此品は過去久遠劫に大通智勝佛といふ如來の法華を説給ふを聞し人の中此退屈の思ひをなして小乘を修行せしかいま又釋尊の説法をきゝて回心向大

の聲聞となれる因緣をときて下根の千二百人に次第に授記し給ふかの法理を直に說とたとへをかりていふと過にしかたの因緣をとくと此三周のすがたいまの物語のつくりさまに相似たるなり世俗の文字の業狂言綺語の誤をあらためて讃佛乘の因緣轉法輪の緣とせる心なり下の詞に中將いみじう興じて法の師の世のことわり說き聞かせん所の心ちすと云此ことわりを思ひてかけるなるへし　秘まへ〱の段は人の心々をさしむきていひもてきてこれよりたとへをもちていふなり木道繪所手跡の三を云なり萬の道を源氏君中將の君にしらせんためなり政道にも又如此道までもしらではかなふまじきよしなり又よろづの事とは一切の事のもれぬよろづなり

木の道のたくみの　聞書云大工なとにはあらで木の道といふ物の文箱などやうの物をしたる工別にありしと云り　私云唯何にても木の道とは木にてつくりいたす物をいふへし番匠以下にも通すへき也
河良匠如ㇾ制ㇾ木帝範　箋云 帝範云 明王之任ㇾ人如ニ巧匠之制ㇾ木直者以爲ㇾ轅曲者以爲ㇾ輪長者爲ニ棟梁一短者爲ニ栱桷一无ニ曲直長短一各有ㇾ所ㇾ施明王之任ㇾ人亦猶如ㇾ是故良匠无ニ棄木一不下以ニ一惡一忘中其善上勿下以ニ小瑕一掩中其功上

よろつの物を　是は木の道のうへのよろつの物なり

その物と跡もさたまらぬ　これはりんじにする物には定れる樣なき故に何ともするなりそれはしよきとなり

そばづきされはみたるも　河側付とかくそはみゆかみたる體なり　宿日本紀宿(サレ)老同宿雪　皆同心也　案之されは左道の義なり人のされたるとはまことしからぬ體なり俊頼口傳に誹諧歌をされ歌といへりそれもたはぶれたる樣なり以下畧之　或抄御說にもされぱみとは左の禮といふ心なりかりそめにあらぬ異なる形をいふべし本樣さだまらぬ物はかたゆかみ異なるたくみなどにこしらへたるもまことにかやうにもしつへしとめづらしきやうなる事もあるなり其時々のやうかはりいまめかしきに目のうつる事なり是を宮づかへ人などのうへにたとへたり　幹ニ棄周鼎一寶ニ康瓠一兮弔屈原賦賈誼

大事としてまことに　秘是は人の本たいになるべき

人にたとへいふなりそれはされはみなどしたる人はかなふまじきなり世に有かたき物なり　祇注うるはしき人のてうどのかざりをば人の家あるじと云はるべき女のかたにたとへいふ也　花鳥にはさたまれるやうありなにくれのこはこやうのものとありてなにくれのこはこやうの物とは調度のかざりの香壺の箱藥の箱なとなり　私云調度の中にも定れる法度有ものを難なくすること上手は一かど別にみゆる也　河うるはしきは美麗なり

又ゐところに　或イ是より繪にたとへて云なり　花　西宮に云書所在二式乾門内東腋御書所南一有二別當一五位藏人預

すみかきにゑらはれて　河下繪をまづ墨にてかくは上手のするなり朽木かきとも云也色どりはそれよりもつきの事なり　一說に墨繪の事なり色どり繪は兎角まぎらはしても有べし墨繪は上手ならではかきえぬ物也　弄墨がきは下繪の事なりうへのさいしくことは繪のぐにてまぎらはし侍れば中々やすし下繪か大事なるといへり大かた唐繪も墨繪に筆勢はこもる物なるべし一注　秘彩色にはまぎるゝ事あり墨繪はいたりて大事也祇注同之

人のみおよばぬほうらい山

あらうみのいかれるいをのすかたから國のはげしきけたもののかたち　河韓子曰有客爲二齊王畫者一問レ之對曰狗馬最難鬼魅最易狗馬人所レ知也旦暮於前不レ類之故鬼魅無レ形者可類改易　文選云畫二鬼魅一易レ成好畫二狗馬一難レ爲レ好　三都賦注　秘後漢書張衡傳云畫工惡レ圖二犬馬一而好レ作二鬼魅一誠以二實事一難レ形而虛僞不レ窮也云々箋義同之　祇注此繪のさまその物どもなき女にたとへたり

しちにはにさらめとさてありぬべし　是まで前の繪の事をいふいつも見ぬ獸などのかたちは眞實には似ずとも筆のいきほひなどさもありぬへくかきなしたれは見事に目おどろくなりうはべはさもありぬべき女などの眞實の心のうちつかぬやうなる所あるにたとへたるなるべし

よのつねの山のたゝずまひ水のながれ　前にひける語とものことく朝夕人めにちかき物をよくかき出る所上手のわざなるべし何の道にも此心有べき事にこそ　祇注これはさるべき人の心おきての有べ

きやう前にいへる繪の樣は其物ともなき女にたとへ云なり
すくよかならねと（なる山イ）　河健スクヨカすくよかならぬとはつよからぬ也繪のすくみたるはわろきと云也　或抄云すぐよかなる山とは深山の景氣也すくよかならぬとかける本も侍れども上によのつねの山のたたずまひと云るこそすくよかならぬと見えたれここはふかき山なるべき歟大方繪には山水地形などがゆゝしき大事也　私云すくよかはつよき心なるべしすくよかならぬとはこゝの詞にやはらいたる所をかきませと有其心歟　呉融畫ニ山水ニ歌　良工善得ニ丹青理ニ輒向ニ茅茨ニ畫ニ山水ニ地角移來方寸間天涯寫在ニ筆鋒裏ニ日不レ落兮月長生雲片々兮水冷冷經レ歲胡蝶飛不レ去經レ歲桃花結不レ成一片石數株松遠又淡近又濃不レ出ニ門庭三五歩ニ觀盡江山千萬里よはなれてたゞみなし　花　雅兼卿の記に云天永元年十二月廿一日師匡房かたられて曰繪師　金岡子公望　公忠也公望か子深江々々か子廣高なり公もち公たゝ上手なりふか江は廣高よりは其名をえずしかるにかの時屛風をうる人あり深江これを見て廣高をゆしてみせしむ廣高云劣なり　深江かいはくしからば此野すち汝かくはかきてんや廣高かなはじといふ又此岩の淡又およぶべしや廣高よく見て又かなはじのよしを申深江曰これは公忠の繪なりかの人屛風の繪をかくごとに定てそのうらに署（シルシス）仍はなちてこれをみる所にその名あり時の人深江はよく此道をしれりとす云々金岡は山をたゝむ事十五重廣高は五重なり今案墨の濃淡をもて遠近の山をあらはすなり

金岡――公望――深江――廣高
　　　└公忠

けちかきまかき　秘　前栽をいふなり
その心しらひ　秘　弄心つかひなり　河　恥をはぢしろふといふがごとし　秘　これは人の本たいたるへき人のさうなり
わろ物は　下手をいふなり
手をかきたるにも　秘　是より手跡を云也　ふかき事はなくてといふより上品ならぬ手の沙汰也是も見たる所はさもありぬべくて實のなきをいふ也てんなかにはしりかきなどいへる達者めきたる體也是

も前の繪所のたとへとおなじけしきばめるとはかなは繪所をつくろひたる體也

猶まことのすぢをこまやかに書えたるはうはへの筆きえて　花　きゆるはおとりたる心なり　秘　唐穆宗問ニ筆法於挪公權一曰心正則筆正筆正乃可レ法　是は筆法のみにあらずこゝろの正しきか萬事によき事をいへりこれを則筆諫と云ふ　聞書に行成實方共に殿上人にてありし時殿上にて口論有りしが實方短慮の人にてやありけん行成の冠を笏にてうちおとされけれは行成は冠をとりて正しくきなほし袖かきあはせ實方にむかつて是はいかなる亂罸にあひ候やらんといはれければ返答にもおよばざりけるをみかど物のひまより御覽ぜられけり其後奥州の歌枕見て參れとて實方をはつかはされて遂に彼國にて逝去せられけり行成卿筆跡の棟梁として我朝の物かく程の者は彼餘流ならずと云事なし官大納言にのぼり有職人にすぐれて一條院の御代四納言の一人なり　俊賢行成齊信公任　此四人也いづれも皆有職博達の人ども也大納言也これも心正しき時は筆正しといふにひけり

いま一たひとりならへてみれは猶しちになんよりける　秘　歌道もかくのごとくなりかど／＼しきやうなるはきとめにたつ樣なれどもとりならべてみるにみざめのする事ある物なり大貳高遠が相坂の關の岩かどふみならし山たちいづるきりはらの駒と歌と貫之が相坂の關の清水に影見へていまやひくらんもち月の駒といふ歌と吟しくらべしにはしめはきり原の歌ことの外まさりたる樣なりしをいく度も吟じ合せてみればきり原の歌はきゝさめのしたるとなん何れの道にもか樣に心をつくべし　弄　此義をひけり箋も同之　私云此木の道繪所手跡の三つ則三車のたとへをとりていへる法花の心に准ずる歟

はかなき事たに　花　木の道繪所文書等ははかなき道也それだに實によれりいはむや人のこゝろをやと云心なり　祇注此三のたとへをいふ事馬頭か源氏の君に世間の女のあり樣をとあるもありかゝるもありとかたりたてまつれどまだとしわかうおはしませば直にそのことわりをしらせ給はずやと思ひてたとへを引て云る也これひとへに女の事をいふ

のみにあらず源氏の君頭中將は世をまつりごち給ふべき君達なれば女の上にて世間の人の心を教へたてまつるなり　白氏文集云太行路諷借夫婦以諷君臣不修也といへり秘同之　聞書云此やうの事ともは人の心もちにくらぶればやすき事といふなり

そのはしめの事　秘是法華の因縁を說也　前にさまざまいひしもいまだ事たらぬとて我身にむかし有し事どもを引いでゝ語り申す也　馬頭か詞なりちかくゐよればとはうちとけたる物がたりなる故に近くよるなり

君もめさまし給ふ　源氏也前に君はうちねぶりてとあり

中將いみじくしんして　頭中將ははじめより一段心にいれてあひしらひたると見えたり

つらつえ　河吟苦支頤曉燭前白氏文集

法の師の世のことわり　弄花鳥に法華の三周說法の事見えたり源氏君は世をまつりごち給ふべきしたかたなれば世上の善惡などをくはしくしらせ奉るべきために種々に申侍る也　秘まことに說法の砌にて法を聞ごとく也　花鳥に三周說法の事尤面白し總じて此品さだめは只口にていふまでにては無曲なり久しく年へたる人などはさま〳〵に思ひあはする事有べしこと〳〵く世のありさま人々のうへにある有さまなり凡此物語をみるには源氏の時代になりかへりてみるべき也何事も今の世にあはせてみれば虛誕のやうに思はるゝなり定家卿の戀の歌をよまんには凡骨をすてゝ業平のおきもせずねもせでよるをの歌をよみたる時の心になりかへりてよめと申されしごとく此物語をみるも其時に心をおきてみるべきこと肝要なり

むつこと　河親言也

はやうまたいと下らうに侍し　花第九段馬頭が詞也

河はやうはさきにと云詞也過にしかたの事なり古今にもはやうすみ侍けるなとあり　箋云舊時いまだ宦下臈なりし時分と也　又因緣說のはじめなり　つんどの下臈といふなり　弄馬頭か過し事をかたるなり

あはれとおもふ人　ゆびくひし女の事をいふなり

きこえさせつるやうに　箋云前にひさうなき家とうしといふその類のといふなり

いとまほにも　或抄眞直萬　河眞帆萬葉にまほとはうるはしきなりまほならずはうるはしからぬなり私云舟の眞帆といふは正體にひきたる帆也かたほといふは風のすちかひたる時追風ならぬに帆をひきたるなり　箋云まほとよみ又をとよむ　千載戀三に待賢門院安藝そなれ木のそなれ／＼てむす苔のまほならすともあひみてしかな是はまあを（眞青）の心に用之　萬「しなてるやにほの水海にこぐ舟のまほにも妹にあひみてしかな人丸　是は眞帆也然どもま（をとよむなり）をとよむべしほををとよむ事「こぬ人をまつほの浦の夕なぎにやくやもしほの身もこがれつゝ定家

わかきほとのすき心ち　秘眞實の本體とはおもはざりしなりされどもよるべとは思ひしなり

とまりにとも思ひ　馬頭心に此人を菩提始終の妻とも思はざりしなり

さう／＼しくて　河寂寞サウサウシ サヒシキ也　閑同　いづれもさひしきなり　箋云此詞常にさひしき也こゝは此女をたらはす思ふ心也　聞書云此女かたちなどのよからぬ故に此人ばかりを妻とたのまんは物たらはぬ心なりさひしき心にかよふなり

とかくまぎれ　心にいらぬ故にうちまぎれて細々も此女の所へゆかぬ心なるべし

物えんしを　此女の物ねたみの事末に見えたり

心つきなく　心にあはぬ女のしかも嫉妬ふかきは男の心つきなくおもふべき事なり　河開情（ココロツキナシ）遊仙窟

おいらかならましかは　弄おいらかは（閑イ）おとなしきこころなり又まことしきなり　聞書おとなしやかならばといふ心なり　箋云なだらか同心歟秘同之

うたがひ侍しもうるさくて　男の心に此人を必とも思はぬ人のかやうに嫉妬などふかくばいよ／＼思ひうとむ心もいでくべしこれみな人の教なり

いとかく數ならぬ身を　花拾遺「かつみつゝかけはなれ行水の面にかく數ならぬ身をいかにせん　私云此引歌に及はず　秘未だ官も淺くて年もわかき我身をば何とてこれ程まではたのみてかくゆるしなくはするぞとなり

しねむに心をさめらるゝ　秘さすかにおのづから心もをさまるとなり

此女のあるやう　箋云これより女の本性を云也

おもひいたらさりける　心の及ばぬ事までも心をつ

くるなり
この人のため　秘此人とは馬頭のため也何とかなと女の馬頭を思ふ也　私云此人とは馬頭也馬頭か女に成かはりてわれと我事を此人といふ也
おくれたるすちの　我心のたらはぬやうなる事をも随分たしなみて馬頭のためを思ふなり思ひはげみつゝとはかなはぬ事を随分たしなむ心なり勵也
とにかくにつけて　兎角何事につけても馬頭のためを思ふ也うしろみとは馬頭の裝束なにやかやの事につけても實々しく心に入るとなり
すゝめるかたと　秘すゝみ過たるかた也すゝしめると河内本に有きこつなき女の事也　弄さし過たる心なり　一本すゝめるとは强也又健也こは〳〵しく强きなり或抄强といふ字をすゝむとよめり下になよひゆきといへばすめるゝ義叶へり牧聞書にもすゝめるか可然歟嫉妬のかたにすゝめる事也と有御說にもすくめるとはきこつなき心と也すゝめるとはすゝみ（强也）過たる也と云々　私云三本すゝ（進也）める方とありてすゝめるはイ本とあり其上弄にもすゝめるとあり　聞書にはあまりに男をおもふ心のさし過たるとありすゝめるを用べし
とかくになひきてなよひゆき　箋云善惡の義萬端において夫の心に随順の心深なりなよひは和するの義なり是又やはらぎしたがひたる也　弄此女の馬頭になびくなり花鳥には女になびくと云々次の詞に合ては如何唯女の事也諸抄花の義あやまれりと云々
みにくきかたちをも　この女のわれとかたちを卑下してなりこの人にとはまた馬頭なりおもひうとまれしと随分かたちをもつくろひなどするなり實々しきうしろみのかたにもかやうのかたちつくろふことにもなにことにつけてもをとこを大切にするなり
うとき人にみえは　河外人（ウトキ）不レ見々應レ笑白氏文集
秘これこそ馬頭の本妻といはれて他人にもなほざりにみえてくるしかるべしとていづく（いつゝイ）をもよくつくろひてあるなりしかるべき心もちひなりおもてぶせとはかほをよこすなど俗にいふ類也
おもはれんとはゝかり　馬頭のかほよこしにやおもはれんと思ひはゞかるなり　みさほにとはいつも

かはらずたゞしくうるはしきと云なり常住に心づかひせしなり

心もけしうは　性しうなりけしうなきはよきなり

にくきかたひとつ　箋嫉妬のかたなり秘同之

心をさめす　此女何事をも馬頭の心にしたがうたるか嫉妬のかたはかりは心をさめず馬頭へあたりしとなり

そのかみ思ひ侍しやう（様なり）　馬頭の前の事を云はやうまだいと下らうに侍し時と同事也今ならばすこし分別もあらんがまへのわかゝりし時の事なればこゝの様體無分別にしたるとなり

かうあながちに　此女の何事につけても馬頭にしたがひ深切に思ふ人なれば何とぞしてこるゝはかりの事をしておとして嫉妬のかたもすこしなほさりにもなしさがなき事をもやめむとたくみ出したる也　秘馬頭か心に我にはよくしたがひたる人なれば少しおどしてみんわれをえ思ひはなるまじき本性とおもひたるなり

まことにうしなとゝ思ひてたえぬへきけしきならば句なり　箋云此女嫉妬ふかうして夫のくつろぎもなき故僞りて退屈の氣色を見せば女の心をあらためて嫉妬のかたも我にしたがふへし平生萬事夫にそむかぬあひだ此はかりごとしかるべしと思ひたるなりこれ馬頭の分別しいたしたるなり

かはかり我にしたかふ心ならは思ひこりなんと思ひ給うて　箋前にいへるごとくこれほど我にしたかふ心眞實ならばなり嫉妬の外の事平生夫の心にそむく事なき故なり

ことさらになさけなくつれなき　ことさらはわざとなり作り腹をたつる義なり

れいのはらたちえんしする　作りごとに馬頭の情なき體をみせたれは案のごとく女のいつものごとく腹だちえんずるなり

かくおそましく　形遠（ナゾシ）文選　花おぞ〳〵しくなり　秘馬頭詞なり女に對してなりおぞきなりおそろしきなり　弄同之

たえて又見し（句チキル）　弄契ふかくとも物ねたみをつよくせは絶て又とも逢みましきといふなり

かきりと思はゞ　前にいふごとくおぞましくは又逢見ましきほどにこれをかきりと思はゞ嫉妬をもせ

よとなり馬頭のまへにたくみしごとく誠に絶えぬへき氣色ならばといへるごとくにいま女に對していひたるなり

行さきなかく見えんと思はゝ　秘かぎりと思はゞ嫉妬をもせよわれは中たえん程にくるしからぬなり

又此まゝにそひはてんとおもはゞ此心をやめて少し馬頭のつらき事ありとも堪忍してなほさりにもありてさかなく物えんじの心だにうせなは一段大切に思ふべしとなり

人なみ〳〵にもなり　馬頭のわが昇進をもして立身せはとの義なり

又ならぶ人なく　嫉妬の心だになほらば馬頭も別心なくあひそひてすこし人なみの官位にもならんをみよといふなりその時の體は本妻なればならぶ人あらじとなり

かしこくをしへたる哉　馬頭の心にかしこくいひつとおもふとなり　箋云隨分の計略をかまへたりと自慢の思ひをなすなり　私云此女の心のとまるやうに色々然るべき事をいひ聞せて嫉妬をなほさんとするなり教へたつるとは人の心になき事を智惠をつくるなり此女に然るべき事どもをいひきかせ心のとまるやうに智惠をつくるなりかしこくとは我よくいひきかするをかしこく自慢なり哉の字淸落着也　花鳥にはかしこくしえたくるかなとありて注にしえたくるはこしらへたる心也と云々　三本をしへたつると有可用之

われたけく　われ此事を隨分たくみえたると義つよにいふ也　いひそしは　河に言殺（イヒソス）也いひころす程なり詩に看殺愁殺なとゝ多く作れり至極したる心也　弄いひそしとはつよくいひすこす心也　弄つよくいふなり

すこしうちわらひて　箋云女の動顚なき體也馬頭のかねて思ふにちかふなり　私云これは馬頭のあまりつよくいひ過したるから女の覺悟かさだまりてかくある也さやうの所よく〳〵思ふべし

よろつに見たてなき程をみ過して　女の詞なり馬頭か淺官不肖の體をかさらずいふ也上の詞に人なみなみになりといひし詞をうけて云也

人かずなる世もや　數ならぬ時のうしろみなどをしたるもくるしくもなしされば官位などもあがりて

馬頭の人めかん時にあはむといふ事を詮に女の心には思はずと也馬頭が心のいつか我にしたしくあらんと思ふ事ばかりを待し也いとのとかにとは官位などの人めかむ事は女の心にはいそかぬ也心やましくもとは不肖の時のうしろみなどをしたるも後悔にもなきとなり

つらき心をしのびて　馬頭のつらき事を女にねんじ過さばと云るをうけて也馬頭のつらき心を我はえ堪忍せじと也

年月をかさねむ　花人數に成んまでの事歟　馬頭の心のなほらん事又人數にならん時までのことなるべし

あいなたのみは　弄云かひなきたのみといふ心也あぢきなき心也又無レ愛（ナキアイ）云々　箋云人の愛せさるをたのむの義なり

かたみにそむきぬべき　互に也女の馬頭かかぎりと思はゞといひたる故にさらば我もたゞ今をかぎりと思ふ程にたがひに中絶ゆる時といふ事也

ねたけにいふ　女のいかにも動顛せず馬頭の腹のたつやうににくゝいふなり　三本ねたげにいふ時にの時の字なきかよしと云々

はらたゝしく成て　箋云馬頭のはじめは計略にそらはらをたてしにかくのごとくたがひに問答になりて馬頭の支度相違したる間今は實に腹立なり

にくげなること　たがひに色々の事をいふ也はげますとは猶むかひの腹をたてる樣にいひなす也又我心をはげましてにくき事をいふ歟

女もえをさめぬすぢにておよびひとつを　女の何事も馬頭にしたがふ心なるか嫉妬のかたばかりはえ心をしづめあへぬなり　河およびは大拇指云々　箋云およびは小指なり　此說を用へし

おとろ〳〵しくかこちて　こと〳〵しく馬頭の女をかこつなり

かたわさへつきぬればいとゝしくまじらひをすべきにもあらず　馬頭の數ならぬ程みえたり

はづかしめたまふめる　まへに女の見たてなくものけなきほとをといへるにあたりて馬頭のいへるなり

世をそむきぬへき　かたわさへつきぬれば今は出家入道の身ともなるべきと女をおどしいふ也

このおよひを　女のくひし小指也
馬頭手ををりてあひみしことをかぞふればこれひとつや
は君がうきふし　馬頭か歌なり　伊勢物語にとをと
いひつゝよつはへにけりといふ歌に上句おなじ是
作物語の故なりよく似合たればそのまゝ用ること
此類多し　河　請君細指數日氏文集　箋云上句古歌を
用る此類おほし下の句君かうきふしは此一事にか
ぎらずとかこちたる也
えうらみじなど　弄秘今は女もえうらみじと馬頭が言
也指をくひし事をかこちていふ詞也
さすがにうちなきて　是又女の性也こと〳〵しくか
こたれて又うちなきたるさまなり
うきふしを心ひとつにかぞへきてこや君が手をわか
るべきをり　女の返歌也馬頭かつらきこゝろをかぞ
へつゝいく度かこらへ過しつるかこれやわかるべ
きかぎりなるらんと也いひしらふは世俗に引しら
ふなどゝいふ類の詞也此歌をよみおきて馬頭の立
いてゝわかれたる也
まことにかはるべき　馬頭心には眞實是をかぎりと
は思はざりし也

日ごろふるまでせうそこ　日數をふる也　弄文にか
きらず詞にていふをも消息といふ
あくがれまかりありて　馬頭のたちどまるべきよす
がの所のなき也
臨時のまつりのてうかくに　花賀茂の臨時祭也　河
臨時の祭の調樂は十一月午日於ニ北陣一構レ屋有ニ儀
式ニ有ニ饗膳獻盃等一也箋云稱ニ北祭一是也　私云先賀
茂の祭四月に有を北祭と云臨時の祭も同前也　賀
茂臨時の祭十一月下酉まづ兼るに試樂調樂なとい
ふ事あり當日の儀式御禊庭の座など石清水に同し
庭の座に使舞人つく大臣以下かざしの花を使舞人
の冠にさす五獻はてゝかさねかはらけの事有社頭
の義はてゝ使舞人歸參て還立の義あり孫ひさしに
御倚子をたつ御引直衣に御草鞋をめす額の間より
出御させ給ふ階の間のとほりの庭南北二行に座を
敷て使舞人つくうしろに本樂の神なの所作人陪從
近衛のめし人つく出御ありて公卿めしあればすの
こながはしに候す階のもとに頭以下つきて使以下
をめす勸盃ありて神樂あり庭燎よりはしめて朝倉
其駒までうたふ庭燎にもゝろ歌有へければ人長作

法あり御神樂はてゝ祿あり此祭のおこりは宇多の
帝いまだ王侍從と申奉りし時狩し給ひけるに俄に
霧くらくなりぬその紛れに賀茂大明神老翁と化し
て臨時の祭石淸水等にあり我も所望の由申さる我
はさやうの事しり侍らず御門へ申させ給へと申さ
せ給ひければやうありて申也とてあからせ給ひけ
るかいく程なくしておぼしめしもよらぬ位につか
せ給ければ寬平元年十一月二十一日はじめて臨時
の祭を奉らせ給ふ其時の使は本院の大臣時平卿い
まだ右中將にてつとめ給うけるとなむ　前の午日
調樂ありと云々　十一月下酉臨時祭なり　江次第
延引之時於二藏人所一勘二日時一　延喜七年下酉有穢
同月丑日行　同八年又有レ穢十二月二日亥日被レ
行レ之　箋云宇多の御代の末に始て此義あり然ば
此物語には近代の祭也仍此物語に載する者也殊に
延喜四年十一月二十三日因二雨雪一着二深履一云々北
山抄此物語にいみじうみそれふる夜と云る此時の
儀也　賀茂臨時祭　試樂は前二十日にあり調樂は
先二日　江次第に載之　出御儀　出御淸凉殿御引
直衣御草鞋着御御倚子公卿着二宮圖座一賞參議長橋
座殿上人長橋二行敷レ疊舞人陪從　參集樂所　陪從參
集發二物聲一一舞二人進二入露臺一舞二八拍子一次他舞
人等次第相分進立駿河舞畢自レ上退到二竹臺下一袒
レ右進二御前一舞二求子一如レ前畢退

いみしくみそれふる夜　弄その夜のさま餘情あるべ
し

これかれ人々まかりあかるゝ　三本人々の字なし
河　班アカル　禮記　分心歟　分散　頒別八雲　あちこち
へ行心也　弄わかるゝなり　開書別字也古々か文字
濁てよむべき歟一閑如此　或云あかるゝは退出也云
云　箋私等別也云々

猶家ちとおもはむかたは　此頃馬頭かよふ所忍びた
るなどはあれどかやうの時心安く家ちとうちやす
まんかたは此ゆひくひし女の方ならではなき也
弄定たる人なき心也　私云家ちとは室家を云也定
りたる妻なり

またなかりけり　河いまたなき也　又なき　両說云
云　愚本三本にて校合す其本又なかりけるとある
をけちてまだとつけたり然はまだなかりける歟但
又なかりけんも然るべし

うちわたりたひね　内裏也
けしきばめるあたりはそゞろさむくや　花にはけしきばみそむくあたりはとありて注にかの女の事也とありゆびくひし女の事とみゆ此義あやまれり
秘 馬頭の思ふ物のあるあたりへと思へどもそれも夜もふけ侍る由也これは木枯の女なるべしこれは何とやらんけしきばみ風流過たる人をいふ也そゞろさむくやとは隔心かましくて何ともうちとけくつろかれぬ體也　箋云隔心の義木枯の女たるべし
いかゝおもへると　指くひし女のいかゝあると樣體も見かてら雪をしのきつゝゆく馬頭のゆかしき也
なまへわろくつめくはるれと　秘 はちたる體なり行たれともはつかしく手もちわろき體とみえたり
箋曰臆してはぢたるの體也　何とやらんこゝへは
聞書云はづかしき事世俗に爪くはるゝと云也
こよひ日ごろのうらみは　馬頭か心に日頃の恨は此雪をうち拂ひて男の方よりまけて來たりたるに女の心もとけなんと思ふ也
火ほのかにかへにそむけて　女の家の體おもしろかるへき樣也 河 耿々(カウ〳〵タル)　殘灯背壁影 白氏文集

なへたるきぬとものあつごえたる　聞書云夜の被など歟　なへたるきぬとは常にうちとけきるべき衣どもなりあつごえたるとは綿のあつく入たる也わたの入たるはおのつからなへやはらいたる心あるべし
おほいなるこにうちかけて　大なる篝(フセコ)なり薫物なとしたる體なり
ひきあぐへき物のかたひら　河 几帳の帷なり　木丁などの體もひきつくろひたる體也
こよひばかりやとまちけるさまなり　馬頭をこよひなどやと待しさまなりとみする也
さればよと心おこりするにさうじみはなし　花 この女の我をまつ物とみなして男の心にしすましたりと心おこりするによくみればその本人はなきといふなり　河 正身 萬 正員の事也云々　箋云聞書に東には主人を正員と稱する此心也　秘 家あるしなり
おやの家に此夜さりなんわたりぬる　秘 留守の女房のいふ詞也折しも今宵親の家へ出たるとなり花の說あやまれり仍不載　花 おやの家へこよひこゝへかへると云々

えんなる歌もよますけしきはめるせうそこもせすゆびくひし女の體也馬頭の思ひしにちかひてよく思ひきりたる體也うらみたるやうなる歌やなともをくらずけしきばまぬと也　箋云此詞上と別也憂も恨ものべすとなりひたやこもりは無意趣也せうそこは消息也アルカタチ アリサマなどよめり文にかぎらず詞にていふをも云歌せうそこなどにもをよばず意趣をものべぬ也　弄にひたやこもり直隱也　河に字あまたあり　一説理不盡なるやうなり

さかなくゆるしなかりしも我をうらみねは　秘此程さかなくゆるしなかりしは馬頭に思ひうとまれてよそへ行べきと思ひけるかとまであらぬふしをさへ思ふとなり箋同之心やましきは何とやらん心にかゝるなり心やましきまゝにさやうになかりし事まて色々に思はるゝと也

きるべき物つねよりも　花此女ありしにかはらず男のきるへき物などうしろみのかたを日ごろよりも猶心とゞめてしおきたる也　弄をとこの衣裳也　秘二心ある歟などゝ思ひたれば馬頭が衣裳などを可然様にとゝのへておゞなり

わがみすてん後をさへ　弄女のみすてん後までを思ふと也　或抄碩義に馬頭の見すてし後まで女の懇なるよしなり云々　両説いづれも可然也

さりとも絶て思ひはなつ　かやうに女のかたから堅固にうと／＼しくするとも女の一すちにえ思ひきらじと猶馬頭の思ふ也又衣裳のかたなどのうしろみを猶心にいれたるにて猶かゝつらふ心のあるそと思へるとなり

とかくいひ侍しをそむきもせずたづねまとはさむともかくれしのびす　花そむきもせずは男の尋來るにうちそむかずあひしらふ也又女の男にたづねまどはされむともかくれ忍ばぬ也河海の説いかゝとおほえ侍り　河はじめに世をそむきぬべき身なめりといふいまだそむかてありとて男のたづねまどはすにもけしからずもかくれ忍ばずしてつひにはひかくれたるといふなりかゝやかしからすはちかかやくなり　秘あり所をかくしもせずかはらず返事をするなり遠ざかりて尋まどはせんともせぬなりそむきもせずとは一本ナシ「河海にははじめに世をそむきぬべききざみになんあると云詞にかけてみるな

り　花鳥にこれをやふる只男の尋來たるにうちそむかすあへしらふなり云々しかるへし」又河海の說も猶すてがたき也　二義の內猶花鳥の說を用べき歟

かゝやかしからす　祇注はぢかゝやくなど云はたゝはづるなり　馬頭にふかくはちすとの心なり秘同之　箋曰只常の如くと云なり　河に耀カヽヤク日本紀

たゝありし心なから　秘女の詞なり馬頭の心をだに、もあらためば歸へきと云なり　みすぐすまじきとは女のえ堪忍せじと也　あらためては馬頭の心をあらためよと也

さりともえおもひはなれし　秘かやうに女のいへども猶こらさんの心にて馬頭が心をあらためんともいはぬ也

つなひきて「奥入引よせはたゝにはよらて春駒のつなひきするぞなはたつときく　馬のつなすまひをせし體　河に此歌は心かなはずつなひくは嫉妬の心也　花馬のつなすまひしたる體也　秘女をちとこらさんとて馬頭のわざとのけひきてよりつかぬ義なり引よせはたゞにはよらで春駒の歌にていふなり　箋曰此引歌不叶只詞計を用る也假令つなびきとは彼はかれか方へわれは我方へ引に互に意ををらぬ義なり又なはたつは名のたつなりそれを繩斷とかり用る也顯昭か歌云「あれぬれは繩たつ駒をいかにしてつなきとむらん春の若草俊成卿判詞云たゝにはよらで春駒の歌は名のたつ事をよそへいへるなりこれはひとへに繩をたつといへるよろしからずとかゝれたり

はかなく成侍し　女のむなしく成なり　箋曰性の急なる人かくのごとくあるべき事うたがふべからず聞書さりなから俄にはかなく成たるにてはあるべからず

たはぶれにくゝなん侍し「河ありぬやと心みがてらあひみねばたはふれにくきまでぞ戀しき　祇注たはぶれにくきの歌の心也あはんとはおもへどとかく女の心をこらさんとしたるはたはぶれたる心也　箋曰此引歌こゝろみがてらの詞奇特也歌の首尾相應眼を付べし　同曰此段は姦と愚直との二つをいましめたる馬頭が胸に虛僞のあやつりあり是姧曲なる故に其志をとげず女は實ありといへどもう

いとまほにも　或抄眞直萬　河眞帆萬葉にまほとは
うるはしきなりまほならずはうるはしからぬなり
私云舟の眞帆といふは正體にひきたる帆也かたほ
といふは風のすちかひたる時追風ならぬに帆をひ
きたるなり　箋云まほとよみ又をとよむ　千載戀
三に待賢門院安藝そなれ木のそなれ〳〵てむす苔
のまほならすともあひみてしかな是はまあをの心（眞青）
に用之　萬「しなてるやにほの水海にこく舟のまほ
にも妹にあひみてしかな人丸　是は眞帆也然どもま
をとよむべしほををとよむ事「こぬ人をまつほの（をとよむなり）
浦の夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ定家
わかきほとのすき心ち　秘眞實の本體とはおもはざ
りしなりされどもよるべとは思ひしなり
とまりにとも思ひ　馬頭心に此人を善悪始終の妻と
も思はざりしなり
さう〳〵しくて　河寂寞サウサウシ サヒシキ也　閑同　いづれもさ
ひしきなり　箋云此詞當にさひしき也こゝは此女
をたらはす思ふ心也　聞書云此女かたちなどのよ
からぬ故に此人ばかりを妻とたのまんは物たらは
ぬ心なりさひしき心にかよふなり

とかくまきれ　心にいらぬ故にうちまぎれて細々も
此女の所へゆかぬ心なるべし
物えんしを　此女の物ねたみの事末に見えたり
心つきなく　心にあはぬ女のしかも嫉妬ふかきは男
の心つきなくおもふべき事なり　河開情遊仙窟コヽロツキナシ（開イ）
おいらかならましかは　弄おいらかはおとなしきこ
ころなり又まことしきなり　聞書おとなしやかな
らばといふ心なり　箋云なたらか同心歟秘同之
うたがひ侍しもうるさくて　男の心に此人を必とも
思はぬ人のかやうに嫉妬などふかくばいよ〳〵思
ひうとむ心もいでくべしこれみな人の敎なり
いとかく數ならぬ身を　花拾遺「かつみつゝかけはな
れ行水の面にかく數ならぬ身をいかにせん　私云
此引歌に及はず　秘未だ官も淺くて年もわかき我
身をば何とてこれ程まではたのみてかくゆるしな
くはするぞとなり
しねむに心をさめらるゝ　秘さすかにおのづから心
もをさまるとなり
此女のあるやう　箋云これより女の本性を云也
おもひいたらさりける　心の及ばぬ事までも心をつ

くるなり
この人のため　秘此人とは馬頭のため也何とかなと
女の馬頭を思ふ也　私云此人とは馬頭也馬頭か女
に成かはりてわれと我事を此人といふ也
おくれたるすちの　我心のたらはぬやうなる事をも
随分たしなみて馬頭のためを思ふなり思ひはげみ
つゝとはかなはぬ事を随分たしなむ心なり勵也
とにかくにつけて　兎角何事につけても馬頭のため
を思ふ也うしろみとは馬頭の装束なにやかやの事
につけても實々しく心に入るとなり
すゝめるかたと　秘すゝみ過たるかた也すゝしめる
と河内本に有きこつなき女の事也　弄さし過たる
心なり　一本すゝめるとは強也又健也こは〳〵し
く強きなり或抄強といふ字をすゝむとよめり下に
なよひゆきといへばすめるゝ義叶へり牧開書にも
すゝめるか可然歟嫉妬のかたにすゝめる事也と有
御說にもすくめるとはきこつなき心と也すゝめる
とはすゝみ過たる也と云々　私云三本すゝめる方
強也
進也
とありてすゝめるはイ本とあり其上弄にもすゝめ
るとあり　聞書にはあまりに男をおもふ心のさし
過たるとありすゝめるを用べし
とかくになひきてなよひゆき　箋云善悪の義萬端に
おいて夫の心に隨順の心深なりなよひは和するの
義なり是又やはらぎしたがひたる也　弄此女の馬
頭になびくなり花鳥には女になびくと云々次の詞
に合ては如何唯女の事也諸抄花の義あやまれりと
云々
みにくきかたちをも　この女のわれとかたちを卑下
してなりこの人にとはまた馬頭なりおもひうとま
れしと隨分かたちをもつくろひなどするなり實々
しきうしろみのかたにもかやうのかたちつくろふ
ことにもなにことにつけてもをところを大切にする
なり
うとき人にみえは　河外人不レ見々應レ笑白氏文集
ウトキ
秘これこそ馬頭の本妻といはれて他人にもなほざ
りにみえてくるしかるべしとていづくをもよくつ
いつもイ
くろひてあるなりしかるべき心もちひなりおもて
ぶせとはかほをよこすなど俗にいふ類也
おもはれんとはゝかり　馬頭のかほよこしにやおも
はれんと思ひはゞかるなり　みさほにとはいつも

このさかな物を　花指くひし女をさかな物といふ也
　うちとけたる方は何事も心やすきうしろみの事
也
時々かくろへ見侍し程は　これ又人のをしへなりよ
そにてとき〳〵みるとわが物にして人の心ちかふ
事あり心よからぬ人はたちそひてからあしき所の
いてくるとなり又前に指くひし女の嫉妬をいひし
も此人などの事成へし箋曰此人ゆゑ指くひし女と
も中たへたる歟云々
此人うせて後　指くひし女なり
しは〳〵まかりなるゝには　木枯のかたへ細々ゆく
なり　河屢也　數をかさぬる心あまたゝひ也
ゑんにこのましき事　木枯の女の風流好色の過たる
體也是か馬頭の心にあはぬ所也それによりてうち
たのむべくもなくかれ〳〵にかよひし也その間に
又心かよはす人こそ有けらし也其事を末にいひ述
る也
あるうへ人きあひて　此殿上人誰とも見えず右馬頭
が傍輩成べし内裏より退出しさまに同車したる也
常に人のとうしやといふうへをすみて下をにこり
たるよし
大納言の家に　河此大納言誰人そや若馬頭か父歟
　弄馬頭に縁ある人なるべし只大納言といへるおぼ
つかなしもし馬頭の父にや　秘河に馬頭父にや云
云さも有にやいかさま馬頭に縁ある人なるべし
私云兩度の聞書に馬頭か父なるべしとあり又只馬
頭の大納言なる人の所にとまらんとなり其みちに
木枯の女の家あるなりいまひとりの殿上人は木枯
の女には心かけてつれたちたるなり馬頭のかよふ事
をしらぬなり
こよひ人まつらんやとなん　花月おもしろき夜なれ
ばなほざりにいふ樣なれども此女に心をかはし侍
るなり　弄かの殿上人女にちぎりけるにや
この女の家　木枯の女の家也
よぎぬ道　大納言の家へ行とて此家とほらでかなは
ぬ道也　河「吹風にあつらへつぐる物ならば此一も
とはよぎよといはまし　秘「春風は花のあたりをよ
ぎてふけ心つからやうつろふと見ん
あれたるくづれ　ついぢといはずしておもしろくか
けり

池の水かげ見えて 河木枯の女の家の樣也恰遺集に池
に月のみえけるをよめる伊勢　雲井にて相かたら
はぬ月だにもわが宿すきて行ときはなし　水影と
いふ詞歌などには面白からず仍逍遙院以下池の水
と云をとりて影みえて月だにやどるすみかをとよ
まれたり此說を用ふ也　箋曰宇治に河ぞひ柳のお
き伏なびく水影と有物を添ずしては水影とは詠
ずべからずと云々　弄に水影面白き詞也とあり
さる心をかはせるにや　前より此殿上人の心かはせ
るとみえたり馬頭は此體を見知てさらぬ樣にてみ
る也此殿上人は馬頭のかよふ事をしらず此女は又
馬頭とつれだちたる事をしらぬ也いづくまでもよ
く心をつくべき事なり
すゞろきて　箋坐（スヽロ）　心おもしろくうきたる體の心也
すのこだつ　簀子のやうなる物也
とばかり月を見る　しばしばかり也
菊いとおもしろくうつろひわたりて風にきほへる紅
葉の　所のさま言語たえし面白き夜の有樣なりあは
れとは感の生する也けにとは殿上人のすゞろきた
る體を馬頭のげに〱ことわりぞと思ふ也

ふえとりいてゝ　殿上人也　笛河にくはし
かけもよしなとつゝしりて　つゞしと聲をさす 河
「あすか井にやどりはすべし影もよしみもひ（寒水）もさむ
しみまくさもよし　催馬樂律なりやとりはすべし
といふ心にうたふなり　私云月の事はなけれども
かげもよしといふをかりていへる也　飛鳥井は大
和國飛鳥川のあたりなりかげもよしとは木の隱涼
しき也みもひもは寒水也みまくさは駒にかふ草也
花 あすか井うたのかげもよしは木の蔭也みもひ
もは寒水也みまくさは馬にかふまぐさなり一說明
日香井は京にある清水也二條万里小路に有と云り
つゝしるは噬也文選大人賦云噬二瓊華一 注噬食也文
章を口にてなす事を云そのつゝしりうたふも口に
てうたふなれは心たかはぬ也　箋云前漢書司馬相
如傳大人之賦咀嚼芝英今噬瓊花噬音祈イ小食也　花
鳥に文選と云るは誤れり本式にうたうには非ず噬
うたふそゝろうたふ也云々　箋幽書等同レ之
よくなるわごんを　河和琴に能鳴調ありそれにそへ
ていへる也　和琴は伊弉諾伊弉冉尊の御時つくら
しめ給ふと云々仍諸樂器の上に置也あつま琴とも

あつまとも云なり　鴨長明記云　和琴はもとは弓
六張を引ならべて用るを後に琴に作りたるなり件
弓は上總國の古濟物也　彼國の古注文に云弓六張
神樂の料矣云々　或抄菅を絃にかけ初し故にすが
がくといふなり云々　此義可尋之
けしうはあらすかし　けしうなきはあしからぬ也
律のしらへは女の　花飛鳥井は律の歌也呂は双調律
は平調也　秘律は秋をつかさどる又律は陰なれば
女の方也　時節神無月なれば折にあへる也箋弄等
同之　陰陽と分るに夏は春に屬し冬は秋に屬す
物やはらかに　或抄御說にりちのしらべは女のとよ
み切て物やはらかにとめあそはす也云々
すのうち　簾中也
いまめきたるものゝ聲　弄やまとごとなればいまめ
きたる物と云々　又管絃も昔よりつたへきたる事
はめつらしからずいまやうにめづらしき妙手はい
てくる事なり　一注　箋曰和琴は日本の聲なれば
唐の樂には和合せざりしを後に唐の樂に合奏する
也仍いまめくといふなり　秘只日本にて作りたる
物なればいまめくといふと云々

つきなからす　古今俳諧歌に人にあはむつきのなき
にはとよめるはたよりなき事をつきなしといへり
こゝも月のおもしろき夜なればたよりある心也つ
きなからずはつきある也
めてゝ　河感情（メテタマフ／ミコヽロ）日本紀
すのもとに　簾下也　聞書云是は上へあがりたるに
あらず簾の本近きえんのはしへあゆみよる也
庭の紅葉こそふみわけたる跡もなけれなとねたます
（す清なり）　秋はきぬもみぢは宿にふりしぎぬ道ふみわ
けてとふ人もなし　妬（ネタマス）　勵（ハケマス）　一說不レ妬あやま
れる說也ねたますとは庭の紅葉にふみ分たる跡な
き故に別にかよふ人なしと此殿上人の思ひてねた
まぬなり是あやまれる說也　花庭のもみぢふみ分
たる跡なきとは男のとはぬをいふかくいひてねた
まするなり　是は此殿上人の我か細々音つれ申さ
ぬなといひて女のかたよりねたむやうにいへる心
歟是又如何　秘ねたますといふ詞心得かたき歟ふ
み分たる跡のあらんこそ誰かかよひつらんとねた
む理あるべけれされども是は此女の所へ別の人か
よふときゝていへる也通ふ人はありともかやうの

紅葉などをも我こそたつね參りてみはやし侍れとなり此心にて女にねたますする心きこえたり猶歌に此心みえたり　祇注弄箋兩三度の聞書等一同に此義を用ふ

殿上人歌
ことのねも月もえならぬやどながらつれなき人をひきやとめける

河定家卿本には菊もえならぬ云々

親行本には月なり　花此歌は心かはせる男のよめる也つれなき人とは本の男を云べし　祇注琴の音も月もたくひなき御宿ながら御ためにつれなき人をばえやはひきとゞめ給へるかゝる折ふし我こそ庭の紅葉をもふみ分てみはやしたてまつれといふ心なればねたますする義きこえたり　秘月を菊にかきたる本ありいづれもおもしろしえならぬとはたたならぬなりつれなき人とはさだめて待人有べしと也されば我ならで誰かは紅葉をふみ分てこんと也　或抄云此兩説親行にたづねしかば神無月の頃にて月あかきよしみえたり又菊ををりてよみたる歌なれば月も菊もともにいはれ侍れども殘菊の題にて侍るうへ琴の音もきくもとそへたるは猶緣あるさまにやおほくは菊と侍り　えならぬ　とは吉不レ並たぐひ也ほむる詞也えもいはずといふ心也又文字には殊勝とかきたり其心言にはいはれずと云々　此義猶如何　ひきやとはひきやはとめけるなり

わろかめりなと　花わろかめりは男のみる前に女と歌よみかはする事あるまじき事とそらほけていへる也云々　此義如何　秘かやうに女と歌よみかはすは人めわろきとなり又の義は歌のわろきなり此義を用べし　聞書に歌を卑下の詞と云々　箋曰歌を卑下の詞又女をあまりこなし過していろ〳〵の事をいひたるはわろく申たるよと云なりいづれもよし云々

いま一こえきゝはやすへき人　花男のみつから云なりさて女の返歌に木枯に吹あはすめる笛のねといへり　私此義如何　秘馬頭を殿上人のさして云なり女は馬頭としらざるべし

手なのこひ給ひそ　手な殘し給ひそなり

あされかゝれは　河餧（アサレ）魚餧（ウチノアサレテ）　論語　鯘　あされはされ同事也あ文字はそへ物なり　或抄云よしはむとも心うべくや又はたはぶれたる詞也　俊成卿口傳に誹諧歌をされ歌といへりたはぶるゝがごと

し

女聲いたうつくろひて　聞書に風流過たる心みえたり

返歌女

木枯に吹あはすめる笛の音を引とゞむべきことの葉ぞなき　秘まへの歌は別にまつ人有べしとよめるをこゝにはつれなき人をは此うへにしなして我身數ならねばひきとゞむべきことの葉もなきとなり

私云一二の句此笛のねを木枯に吹あはせたるはうはの空なる聲なりさやうのうはの空なる人をはいかでかとゝむべきぞとなり　祇注に琴をたち入たるなり　聞書云ことの葉に落葉の心もありと云々

なまめきかはすにくゝなるをは　祇此女うへ人になまめきかはすを馬頭きゝて思へる事なり此女は馬頭か妻なりし故なり

さうのことを　河風俗通曰秦聲也或曰蒙恬所レ造五絃筑聲幷涼州箏形如琴瑟不知誰改或曰秦多二羗箏一者故曰二秦聲一釋名箏施絃高箏々然或曰漢恭帝使素女皷五十絃琴聲悲帝禁不得破琴爲二二十五絃一一丈三尺秦始皇時破二二十五絃一爲二十三絃一今之箏是也昔以レ竹造レ之其後以レ桐造レ之也

ばんしき調　盤涉調（ハンシキテウ）　箋曰まへの和琴は平調なるべし今神無月なれば當調子をひくなり　平調と盤涉とはともに律にて甲乙の聲也

いまめかしく　箋曰上には和琴の生得の音聲を云爰には調子のかはりたると樂器のかはるとを云也

かとなきには　秘一かとなきにてはあらねとも也物にかとのあるはいまた上手のくらゐへゆかぬ藝なり

まはゆき　聞書云あまり事過たるをかく云也和琴をひき歌よみかはしたるさへあるに又箏を彈したる重々したるなりそはにてまはゆくかくはゆきやうの心歟　私云末の詞にすへて男も女もわろき物はわかわつかにしれるかたの事を殘りなくみせつくさむと思ひつるこそいとほしけれとありこゝの女の體もいさゝかその心ある歟

たゝ時々うちかたらふ　弄前に木の道繪所なとのたとへにいひしことく大かたの物と實に用へきとの差別なり何事にもわたるへし　秘とき／＼のかたらひ人にてはかやうの人も仔細なしとなり　大か

たの物と實に用へきとの差別なり前よりみな此心なり

たゝ時々にてもさる所にて　或抄御説に本體の事なり　前にいへることくなるも宮つかへ人なとにても面白し時々かよふとも家なとにするおかん人にはなりかたきとなり

その夜の事にことつけてこそ　殿上人とこからしの歌よみかはしたる時の事なりまへにも此女を馬頭のこのましき所はめにつかぬ所あるといへり風流過たると心にあはす思ふ折しもかやうに事をみつけて中絶たるとなり

此ふたつの事を　木枯の女と指くひし女となり

わかき時の心に　馬頭今よりとわかゝりし時さへなり。

もて出たる　木枯の女のさまなり指喰の女にくらへても猶木枯の女はおとれりとなり

いまよりのちは　馬頭の連々年のよる程彌さやうのすき心ある女はいやとおもふへきなり

御心のまゝに　馬頭か源と頭中將とをさして云なり

をらは落ぬへき萩の露ひろはゝ消なんとみゆる玉ささの上の霰　河をりてみは落そしぬへき秋萩のえたもとをゝにおける白露　いつくにかやとりはとらん朝日こかさすや岡への玉さゝのうへ　祇注萩の露玉さゝの霰河海に引歌をかけりさらにあたらさることなり只心はうつくしくやうそうよわ〳〵とするさまの人をそ御心にはおほしめさむとの義なり　秘源頭中將なとの御心のまゝならはかやうのあたなる事をこそおほしめさめとなり引歌に及はす只あたなる心なるへし　弄引歌までも有へからすえんすきあためきたるさまなるへし末の詞にすきたわめらん女にとあり　箋曰萩の露篠の霰皆實なき人の性をいふ引歌におよはす

あえかなる　河八雲御抄云うつくしくひわつによわき體なり

いまさりとも七とせあまりの程に　孟子曰七年之病求三年之艾又橡樟七年といひてくすの木は七年になれは材木になるを儒者の秀才のたとへにいへりよろつの事かきりあるをは三年とも七年ともいふなり源氏君ことしは十六歳に成給へはいま七とせをへて廿餘年の齢に成給はゝ何事もおほし知へき

と云義なり　弄説々あれともしひて年數をたゝすに及はす櫟樟七年にして而後與衆木異也　述異記

秘馬頭源よりも七年はかりの兄と云義歟云々

只七は大數をあけて今ち（今少イ）と年もかさなりて思ひしり給へき由なり祇同　箋曰花には櫟樟七年の事を引也叉源氏十六歳なれは廿にをよはぬ人是非をわきまふへからさるとの義を云也一説叉馬頭源氏に七年の兄と云説有　箋義學記曰一年視ニ離レ疑辨レ志三年視ニ敬レ業樂レ群五年視ニ博習親レ師七年視ニ論レ學取レ友謂ニ之小成一九年謂ニ之大成一聞書云たゝ年の數をかさね給はゝ自然に御分別あらんと馬頭か申詞なり

すきたわめらん女に　數寄スキ　撓タハメル　好色す過きなひきやすくあた〳〵しき女なりたわめるは心つよからぬ心なり　箋曰媚なり

あやまちしてみむ人の名をも　すきたねめる女は風流過たる事からあやまちか出くるなりそれをあやまちしてといへり女のあやまちなり見ん人のとはさやうの女にちかつくは自然のちかひめのある時男の名をたつると云なり　或抄あやまちしてとは女のあるましきふるまひうちしてさて見む人の名をもたつへき物也と云り　みん人のとは男の事也

いましむ　誡なり　この理をよく〳〵御分別あれと返々いふ樣の心也

中將れいのうなつく　花第十二段なり　頭中將なり前にもうなつくと有し故にれいのといへり

君もすこしかたゑみて　源なりかたほゝにてすこしわらふ心なり

さることゝは　源も心中に領納し給へとと物語の作者のいふ詞なり

いつかたに　源の詞也いつれにても難のなきはなきをいふなり人のためくるしくあまりさかなき物語との給なり心中にはけにもと覺しなからかくうちの給ふ詞なり　おはさうすとはおはしますとなり

なにかしはしれ物の物かたり　花第十三段中將のことは也しれ物はされ物なといふかことし五音通なり是は夕顔上の事なり　秘しれ物　花鳥にはされ物と云々然へからす萬葉に浦島か長歌に世中にしれたる人のと云に癡（痴イ）の字をかきたりこゝは夕顔上の事なり彼性をろかにて痴なるかたある人なり痴

字尤然へし又左傳十三成公十八年之傳無レ惠不レ辨ニ菽麥ニ故不レ可レ立注曰不レ惠世所謂白痴云々箋同之人の愚痴なる事をしれ物といへり

さてもみつへき　秘何となくはしめてあふ人の心につくさまなりこのまゝもみたく思ひしなり祇同

なからふへきものとしも　秘祇注行すゑとをくとまてはおもはぬとなれゆくまゝにあはれとおほえわすれぬものにしはべれは女もたのむけしきみえしなり

たのむにつけては　女のかたから中將をうちたのむからはすこし疎略なるとおもはむと我心にもおほゆる事有しとなり

見しらぬやうにて久しきとたえをも　秘打頼むからに恨むへき事をもうらみてこそあれ恨をかくす性ある也

かくたまさかなる人　久しくへたてたる人ともまた久しくめつらしき人とも思はぬさまにしてゐるなり

もてつけたらんさまに見えてこゝろくるし　うはつらはかくいつものことくあひしらへともなにやらんいふへきことをもいはぬゆゑに隔心あらんとおもふから中將も心くるしきなり　秘此夕かほの上はとたえのあるをもうらむるやうにてもなかりしなりそれか結句心くるしきとなり

たのめわたる　聞書行末をかけて契るなり此間に玉かつらなともありし故なり　花の説あやまれり

おやもなく　秘夕顔上のおやは三位の中將也とくうせぬるよし夕かほの巻にみゆたよりなきまゝに此頭中將をもうちたのむよしなり

かう（くイ）のどけきにおだしくて　頭中將の久しくおはせぬをもうらみぬ故に油斷して又久しくおはせぬ事有しとなり

この見給ふるわたり　此見給ふるわたりなり頭中將北の方二條相國の四君なりそのあたりに夕貌上の事をよくしりて色々のことをおとしいはせたりしなり夕貌上物おぢし給ふ心にてこれ故はかなく行へなく成しなり此事夕貌の巻に右近か源へかたり申たる所に見えたり

後にこそ　此事を頭中將の後に聞出したるなり

さるうきことやあらんともしらす　二條の大臣のあ

たりから夕貌の上をおとしいふことを頭中將はしらて其頭せうそこなともかきたえしとなりそれを夕顔上に頭中將の無音と人のおとしていふ事とを思ひあはせてさてはと思ひしほるゝ義なり

心ほそかりけれは　夕貌上の心を頭中將の察して云なり

をさなき物　玉かつらの侗侍の事也

涙ぐみたり　頭中將の涙ぐみてかたりさしたる體尤思ひいれたるさまなり

さてその文のことばはと　頭中將の涙ぐみてかたりさしたる所を源氏のゆかしくおほしてとひ給へるなり

いさやことなることもなかりきや　弄此詞ことに幽玄なり　源の御心をはゝかりてかたり給はぬなり秘優なる詞なりはゝかりての給ふなり文の詞なとにて人の心もみゆへきなり扨源のとひ給ふを心得て中將もかやうにこたへ給ふ心つかひおもしろきなりまたなかりきやといひいてたるおも白しされはことなることもなかりつるなと大やうにいひいでたる詞なり馬頭なとの物語はいつくまてもこまやかに理を申あきらむるか然るへし此頭中將の物かたりの大やうなるさま〳〵の人々のしな〳〵をよく心をつけてみるへしかやうのところ尤肝心也

夕貌上 山かつのかきほありともをり〳〵にあはれはかけよなてしこのつゆ　河夕貌上頭中將へつかはすうたなり　山兒（ヤマカツ）　山賤　山下　下人なとかけり　垣本（カキネ）

祇注歌心は山かつのかきほありともとはあるゝとも也卑下の詞なりわかありさまのはかなきやうの事なり下句玉かつらの事にかけてあはれはかけよと頭中將をかこつ心なり歌のさま物あはれなるにや　私云かきほありともとは此後行衛なく夕貌上の成にしかはさやうに此かきほを仕すてゝあれたりともいへる心もあるへき也

思ひ出しまゝに　聞書夕貌上よりめつらしきおとつれに思ひ出てそのまゝ頭中將のおはしたるなり

れいのうらもなき物からいと物思ひかほ　聞書れいのとは前に心にこめて物をいはぬ夕かほの性といへる也　祇注れいのうらもなきとは夕貌上の心くせなりうらむへき事をもさそといはむははつかしき心にていひ出ぬ義なり是愚痴なる心なり

あれたる家の露しけきを　弄此さまあはれふかしあはれふかし

虫のねにきほへる　聞書虫の音にきほへるはもよはされてあはれきほへる也

むかし物語めきて　花うつほのとしかけか女の有さまに似たり末摘花の巻にしるすへし　秘うつほの物語にこれに似たる事ありさしていつれの物語にもかきるべからす　秘當時此家の體をみていふなりふるき物かたりにおよふへからす　私云むかし物かたりめきていへり只今の體むかし物語なとにわさと作りいてゝかきたらんやうなるあはれさなりといふなりむかしものかたりをひかんは心おとりすへくや

返歌頭中將 咲ましる花はいつれもわかねともなほ常夏にしくものそなき　頭中將の歌なり　私云これは夕貌上よりなてしこを折て山かつのかきほありともとよみておくられしその返歌をはしたまはてすなはち頭中將夕貌の上の家へおはしてさきの山かつの歌の返歌を直にのたまふ也さて又夕貌の上の嵐ふきそふ秋も來にけりと又よまれたりとみゆ此義いつれの抄にものせす如此心得ておきて沙汰にもおよはさる歟不審　秘さきましる花とは秋の庭のさま也のそ中にも床夏は女にたとへていふなり夕かほ上をなくさめていへるなりしく物そなきとはほむる心なから又床の縁も有へしなでしこ秋の七種の内也やまとなでしこをはさしおきてまづちりをたにとおやの心をとる　河さきにあはれはかけよなてしこの露といひしは玉かつらの君のことなりそれをはさしおきていもと我ぬる心をいふなり　ちりをたにすゑしとそおもふさきしよりいもとわかぬる床夏の花　ちりをたになといへるはこの引歌の心にていへりいもと我ぬるとは夕貌上なり色々の花はありとても床なつにまさらしと云也玉かつらのことをはさしおきてなりおやの心をとるとは夕貌上の心をとるを云也前の歌を訓釋していへることば也

和名序 鍾愛抽ニ衆草一故號ニ撫子一艶色裝ニ千年一故曰ニ常夏一
家位 瞿麥牛麥大鏡裏書曰染殿太后少之時容姿絶麗號ニ瞿麥一御取ニ美艶一耳今改ニ瞿麥一稱ニ常夏一盖避レ諱也云々

祇注撫子をさし置てとは玉鬘は我子也されはさし

置ていもとわかぬるの歌にて夕顔君の心をとる義なり夕顔の歌は我身をさし置撫子露に哀をかけよとかやうにあひしらへるおもしろし

又返夕貌上 うちはらふ袖も露けき床夏にあらしふきそふ秋も來にけり　夕貌上の歌なり　祇注大かたの床も露けきにあらしふきそふ秋もきにけりといへるあはれふかし此嵐ふきそふは頭中將の北方の忍ひておとしいはせたりし事のはけしさをとに出てはいはすして嵐ふきそふと思ひわひいへるさまかなしくや　河後撰にひこほしのまれにあふ夜の床なつはうちはらへとも露けかりけり

まめ〳〵しくうらみたるすちも見えす　夕貌の嵐吹そふなとゝ四の君のかたよりおとしいはせたるをなほさりなるやうにうらみなしたる故頭中將は思ひもあたらぬなり　是夕かほの心さまなり眞實うらめしきさまとも見えずとなり物つゝみしおほつかなきさまの人なるへし此つきの詞に夕貌の上の心もちゐよくきこえたり

心やすくて　又頭中將の油斷なり

跡もなくこそかきけちて　此事夕かほの卷に見えたりかやうにして五條わたりにて源氏の君は夕貌上をみそめ給しなり

はかなき世にてさすらふらん　河伶傳(サスラオ)　又龍鐘　流離日本紀　たゝよふなといふ心なり

あはれと思ひし　頭中將の夕顔上に心のとまりし也

おもひまつはす　夕貌の上の方からもわりなくしのふ心の見えは油斷もなくかよひみるへきほとにかくもあくからさしとなり

こよなきとたえおかす　無越なり事のほかの久きとたえおかしと也　四の君のかたからおとしいひたる事なとあるやうに頭中將のかたへしらせたらはさやうの所をもかくしてなく〳〵みる樣もあらん物をと也物はかなき性ゆへかやうに成ゆきし人也

なてしこのらうたく　玉かつらの事なり

これこその給へる　前にえむに物はちしてうらみいふへき事をもみしらぬさまに忍ひてといひし段をさしていふなり

つれなくてつらしと思ひけるをもしらて　河無益の片思なり　引歌　伊勢のあまの朝なゆふなにかつくてふあはひの貝のかたおもひして　花色には見

せすしてこの女のつらしと思ふをは我はしらすしてあはれと思ひしは無益のかた思ひにて有けるとなり秘同

いまやう／＼わすれ行　頭中將はさすか又思ひまきるゝこともありて忘るゝ心もあるなりかの女は猶えしも思ひはなれす胸こかるゝ夕へもあらんとなり

人やりならぬむね　人やりは人のつくり出したるなり人やりならぬは我とつくり出したることなり夕かほの上もわれとはかなく身をもちなしたる人なり

これなんえたもつましく　頭中將の詞夕貌上の性をいふなりえんにはかなきはかりにて實のなき心なり

されはかのさかな物　花第十四段中將の詞也さかな物はゆひくひし女なりことの音すゝめけんは木枯に吹あはすめると歌よめりし女なり此心もとなきは頭中將のかたる常夏也　弄是より又馬頭か詞也さかな物はゆひくひし女なり花には中將の詞とあり或抄頑聞書にも馬頭詞とあり　箋第十四段馬頭か詞なり花に中將の詞といへるは非なり此段に至りて三種の性を一決す　弄に馬頭か詞と云々

おもひ出あるかたは　ゆひくひし女のうしろみのかたなとの實々しかりしをいふ歟されともさしあたりて女とみんにはわつらはしく情おくれたるへしよくせすはあしくせはなり物えんしなとから事おこりあきたきとは義絶のもとゐたるへしとなり

ことのねすゝめりけん　木枯の女は風流過てすきたるつみおほしとなり

この心もとなき　夕貌上のさまなりいつれもおもひ所あれはさためかたき世中なりといふなり

世中やたゝかくこそとり／＼にくらへくるしかるへき　世中といふ物たゝかくこそとり／＼にくらへくるしかるへきものになんといふなり

このさま／＼のよきかきり　前の人々いつれもよき所々ありそれはかりにてわろき事をみなとりすてたる人はいつくにかあらんとなり

なんすへきくさはひ　可レ難種（キナンズクサハヒ）　難すへき事のなきはとなり

きちしやうてん女　河大吉祥天女　在金光明最勝王

經　吉祥天女は端嚴の天女也しかれとも佛の眷屬なれは法氣(ホツケ)つきてわつらはしからんとなりくすしからんはわつらはしからんなり　箋瑠璃金山寶華光照吉祥功徳海如來(最勝王經大吉祥天女品第八)吉祥天女有財城有園(國イ)其名曰妙華福光園(國イ)(室イ)莊嚴鏤二七寶一宮殿瑩二五六銖一其中有二天女一名二摩訶寶利提佐一月顏圓融也秋容拂レ雲花姿妙艶也春林增レ匂五色雲上瑪腦寶瓶出二珍寶一千葉寶蓋妓樂諸天作二供養一左手捧二如意珠一隨レ願雨二財寶一右掌手印二施无畏一任レ願休怖畏或歡喜地菩薩鎮生二如來家一或不動地薩埵妙遊二无相門一祇注是は世中の女のいつれも心にかなふやうなけれは吉祥天女こそかきりなく侍らめとおもへは佛法めきてくすみたるかたあれはそれも心にかなふましきよしをいへる也

弘安源氏論義云　四番　左問云　範藤朝臣　吉祥天女を思ひかけんとすれはほうけつきくすしからんこそうるさけれといふいかなることや　右答云　兼行朝臣　はゝき木のしなさためにかみしものしなをさためさしてたのみ所ある人々をいひあはせてもまことのより所はありかたくをらはおちぬへき萩の露ひろは丶消なむとする玉さゝの上のあられなといへるにも思ふまゝなる事はかなはぬ世なれは吉祥天女を思ひかけてもほうけつきくすしき難は有ぬへしといへる外は何と思ひわくかたなく侍り　左申たゝ物語のおもてにても心えられたるに似たれとも是もふかき故侍り四天王經云乃往(過イ)道去に王ありき四天香王となつく一の女子あり極好女といふ(吉祥天女なり)時に四國に各一王あり東は藥王南は藥光西は明達北は福田といふ此四王極好女を娶とて皆集會する時に極好女忽然としてかくれたりこれによりいぬゐの方四十七萬八千九百里を過て大海の龍王にとられて大海の底にあり其時父王四國の王大海にいたりて好女をえて本國にかへると云り思ひかけたる本説これにて准し侍るへし　判云左方又申所分明なり云々　此本説させる用なけれと事の次手にしるす物なり

式部か所にそけしきある　式部丞は六位の人なり藤式部なり　花第十五段頭中將詞なり　私云氣色あるは興かりたる體の事歟　箋云遂二儒業一次第事先大學生に補して灯燭料をたまふ九年の間螢雪の

つとめをなす此後大學寮においてこれを心みらる史記の難義を問ふ五條の中三條に通する者及第して則文章得業生に補す此間七年勤學其後式部省において課試をとく上古は秀才進士の二科有秀才をは方略といふ方略は無端の大事といふ心あり獻策の時問題にこたへてかく事至極の大事なり進士をは時務策といふ令條に見えたり近代文章得業生二人あり秀才の爲に始より給料を賜はりて學問の人なり此輩は方略の宣旨を蒙りて式部省にて課試せらるゝなり又入學の衆の中において器あるの時博士是を擧すれは大學寮においてこれをこゝろむる史記をよみ得たる者及第して擬文章生に補す其員卅人此人式部省において又こゝろみらる詩賦を作る及第の人則文章生に補す是を進士ともいふ或は御前において勅題をもつてこゝろみらるゝ事あり或文章生に補するの後さらに方略の宣旨を蒙て課試をとくる例これあり進士は時務策たりといへとも方略宣旨をかうふれるは方略の試なり文章生方略の宣旨を蒙て献策之例は當職の時と外國の掾と散位の時となり京官に任する後献策せさるは先例也或は文章生更に得業に轉して課試の例これあり或は文章生にとゝまつて方略の試にをよはさるの例これあり　此段猶乙女卷にくはし

しもかしもの中には　藤式部か詞なり

何事をかとり申さんと思ひめくらす　花第十六段式部か詞なり　私云しもか下の中にはといへる第十六段藤式部か詞也と見えたり何事をかとり申さんとおもひめくらすといへるは頭の君のものかたりをおそしとせめ給へは何事をか申さんと思慮したる樣體をいへり詞にいはむは相違にや

また文章生に侍し時　花是より藤式部か物語也　藤式部かまたわかかりし時の事なり此物語する時分は藤式部は翰林學士か得業生かなるへき歟　祇注云是より末の詞義あらはなり

かの馬頭の申給へるやうに　秘まへに朝夕の出入につけてもおほやけわたくしの人のたゝすまひよきあしき事の目にも耳にもとまるありさまをうとき人にわさとうちまねはんやはなといふやうになり馬頭のゆひくひし女の事なるへし

さえのきは　祇才學のほと也花に才の伎と云る如何

なま〳〵の博士　博士は博達の士也學問に博く達したる人と云也こゝの心はなましいの博士なとは耻しきと也　此段は狂言に書り又生の字をなまり讀りされと此女我やうなる博士をなとは耻しかるへきと也

それはあるはかせのもと　かやうに中女は藤式部の文章生なりし時師匠にしたるはかせのむすめともあまた有しにいひよりたりしと前を釋したるなり

おやきゝつけて　式部か師匠のはかせなり

わかふたつの道うたふをきけと　藤式部のかよひそめたるを父のはかせの悦ひてとりはやしたる體也ふたつの道は文集の秦中吟をひきていへり博士に似合たるさまなり奥入以下これをのす嫁娶露顯の禮といふ事女御入内以下にもある事なり　河兩道は富家の女は輕ニ其夫一貧家の女は孝ニ於姑一と云心也我は家貧しと名のるなり　花わか二の道をうたふをきけとは白樂天の秦中吟の中の全句也二の道といふは貧家の女と富家の女との得失を論ずるなりとめる家の女は嫁娶なとの事はふそくならぬままにはやく事ゆけともつひには其夫をかろんずる物なりまつしき家の女は婚禮なとはきとありかたきやうなれとも事成ぬれはその姑なとには孝あると云心也是は博士の女貧家なるによりて式部にいひきかせたる也きこえこちもこちはことゝ云心也

白氏文集秦中吟奥入河海等ニ載之

天下無ニ正聲一　悦レ耳即爲レ娯
人間無ニ正色一　悦レ目即爲レ姝
顏色非ニ相遠一　貧富則有レ殊
貧爲レ時所レ棄　富爲レ時所レ趍
紅樓富家女　（金イ）全縷繡羅襦
見レ人不レ斂レ手　嬌痴二八初
母兄未レ開レ口　已嫁不ニ須臾一
綠窓貧家女　寂寞二十餘
荊釵不レ直レ錢　衣上無ニ眞珠一
幾回人欲娉　臨レ因又踟蹰
主人會ニ良媒一　置レ酒滿ニ玉壺一
四座且勿レ飲　聽三我歌ニ兩途一
富家女易レ嫁　嫁早輕ニ其夫一
貧家女難レ嫁　嫁晩孝ニ於姑一
聞君欲レ娶レ婦　欲レ娶意如何

をさ〱うちとけても　殆なりほとんと也
かのおやの心をはゝかりて　此女の父博士は式部か師なれはもたしかたく思ふなり　花此女式部か心にはあはぬなり
いとあはれに思ひうしろみ　此女の式部か事を心にいれておもひうしろむなり
いときよけにせうそこ文にも　女々しからぬ體也むへ〱しくいひまはす　我物と理運なる體なり
まかりたゝて　此女心にあはねともかやうの事とものたしかたくてかよひたゝさりしとなり
こしをれ文　秘こしをれ歌といふ體なり　花鳥に折腰體なとの事をいへるまてはなき事なり　箋同之
箋前にいへるは消息文なり是は作文の事なり
なつかしきさいしとうちたのまんに　是よりかの女のあまりに才覺すきて女々しき所のなかりしを藤式部の申詞なり無才の人なとなまわろならんと此女は物の道理なとよく分別し道々しき心あれはさやうの所のなま心得ならん人のためにはつかしき所もあれはかた〱なつかしき妻なとゝはたのみかたきなりたゝの人さへなりまして源氏頭中將なとのやうなる君たちのためにはかやうなるなににかはせさせ給はんとなり
はかなしくちをしとかつみつゝも　藤式部か詞なり
秘女を或はかなし或は口をしなとはおもへとも宿世にまかせてあれは男はしさいもなきものなりすくせのひくかた侍るめれはとよみきりてをのこしもといふよりおこしてみるなり　大かた男子はやすきものなりとなり花鳥の義には上へつけてひとつに見るなりをのこのためしさいなきと云々如何
祇注をのこほとよきものは侍らすとの心なり
弄におほかた男子はやすき物なり云々すくせのひくかた侍めれはとよみきりて次の詞を見るへし
箋藝能の有無にもよらす或は宿世にひかれ或は一旦の寵に入ことも心にまかする故に男子たるものはさうさもなき物也と也　私云此義はいさゝか心得かたき段なり猶よく〱了見をくはふへきなり
のこりをいはんとて　此物語の末をきかんために頭中將のとりはやして藤式部をすかしいふ體なり
心はえなから　秘頭中將の藤式部をすかしていはせんとし給をは心得なからなり心はへにはあらす

・はなのわたりおこめきて　藤式部の物かたりする體なり　花 おこめくはおこつくなといふかことし
さていと久しくまからさりし　物語の末を又かたりいたす藤式部の詞なり　前にうちとけてもまからさりしとあり
物のたよりにたちよりて　心にもいれすたつねしさまなり
うちとけゐたる　藤式部のつねにかよひし方にはあらてものこしにあひたるなり
ふすふるにや　つねの人のふすふるといふかことしおこかましとは事をかしきやうの心歟久しくとはぬ故にかやうにあひしらふかと式部の思ひたるとなり
又よきふしなりとも　これは式部か心にあはぬ故にこれをかこつけにして中たへむによきふしと云なり
此さかし人　博士の女なり才覺なとありし故にさか・し人といふなり賢の字をさかしきとよめるなり
箋曰其人の行狀をとりてやかて名につくる事史記の筆法なり

世のたうりを思ひとりて　彼女の心は男女のあひたの事にもまよはす道々しき心なるゆゑに常の女のことく久しくとはぬなとゝいふ恨なとする心にはあらすよく世間の理を分別したるなり藤式部の推量はちかふなり前になまわろからんふるまひなと見えんにはつかしくと有しにてきこえたり
聲もはやりかにて　是は底に恨なとあるをかくしたる人のものいひなとはやかて聲にてもきこゆへし此人はすこしもさやうの所に貪着なくつくろひたる所なき體なりさかし人といふにかなへり
月ころふひやうおもきにたへかねて　かの女の式部に直に對面せぬいはれをのふる詞なり彼男めきたる詞の體なり　弄 ふびやうは腹病なり　又和秘抄には風病也　祇注箋に一同に腹病のよしをのす聞書同
こくねつのさうやくをふくし　河 極熱の草藥を服し
　延喜式云八十種の草藥廿四種の草藥中蒜是極熱の草藥なり又食藥を雜藥と云　花 河海ニ延ニ式云八十種云々河說在前仍畧之今案延喜式典藥寮式八十種廿四種草藥といふ事はあれともそれは皆本草

に出せる薬種ともを草薬といへり蒜は草薬の中にこれを出さす又極熱といふことはもかの式には見えさる事なり但内膳司式に供奉雑薬の中に有蒜春冬供進自五月至九月不進之よしのせたり夏秋の時分もこれを供進すれは極熱といふ名を世俗にいひつけたるにやいまの世にもきひる薬といひて常にこれを服用す此物語には俗なる事とも多く用たる故なり箋の義さうやく淸てよむへしとそ侍し　祇注に草薬はひるといふ物也夏の暑氣に用る物なり秘に土用の野ひるなといひて薬に用る事のあるなり此段みな狂言にかけり

まのあたりならすとも　まのあたりは目前なり直に對面せすともとなり　又親の字をまのあたりとよめり

ざうじらは　河雑事等なり

むへ／＼しく　箋云式部か心を承諾させしめんの詞なり　いつれも女しからすしたゝかなるさまなり

いらへに何とかは　かやうの物のいひさまに藤式部のあきれていらへむやうもなけれは何とかはといふなり

たゝうけたまはりぬ　何ともとりあはぬ體なり

さう／＼しくやおほえけん　式部のとりあはぬ體をさすか心にかゝりてや思ひけん又この香うせなん時に立より給へといふなり

たかやかにいふを　女の聲なりたゝうけたまはりぬとはかりいひて藤式部のはや立いつるゆゑに女のたかやかにいふなり

きゝすくさむも　藤式部の心つかひなり

しばしやすらふへきに　聞すくさむもいとほしく又さりとてとゝまるへきにはあらねはこゝのあひしらひに歌をよみてかへるなり

けにそのにほひさへ　いとくさきによりなんと女のいへるをうけてけにその匂ひさへといふなり

すへなくて　無便なり　生得心のとまらぬ人なるにさやうのにほひさへそひたらんは立とまるへきによりなきなり

にけめをつかひて　皆狂言にかけり

藤式部歌
さゝかにのふるまひしるき夕くれにひるますくせといふかあやなき　秘この香うせなんときにといふをとかめていへるなり我か來へきよひともまたすして

此香うせて後とあるはもしあらぬかこつけこともやあるといひかくる也　蒜は晝によせたり　祇注同之　花わかせこかくへき宵なりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも　この歌を下にふくめりひるまはひるを服する間をいふそれを晝間によそへたるなり夕くれといふよりひるますくせとよめる歟

いかなることつけそや　心におもはぬ事をとりなしていへる歟　式部か詞ことつけはかこつけなり

はしり出侍におひて　にけめをつかひてといへる末なりおひては追つきてなり

返歌博士女
あふことの夜をしへたてぬなかならはひるまもなにかまはゆからまし　秘不斷たちそふなかにてあらはひるまをまてともいはすあふへきをたまさかなるゆゑにかやうなるとなりおもしろき歌なり　祇注心あらはなり云々　まはゆきははつかしきなり箋同之

さすかにくちとく　彼女こは／＼しく才覺たてはかりなれとも又歌なともかやうにくちとく有しと式部のかたり申なり

きんたち　花第十七段なり　源氏頭中將のそらことを藤式部のかたるとわらひ給ふなり

いつこのさる女か　秘源頭の君なとのさるやうなる女はよもあらしとの給詞なり

おいらかにおにとこそ　河雄丹伊勢物語眞名本　河載ニ鬼一車ー何足レ畏　掉ニ巫三峽ー来レ爲レ危前中書王　花おいらかはまめやかにと云詞也　弄まことにといふ心なり　秘まことになり　花鳥にまめやかとに云々同心なり　眞成とかけりまめやかもまことのこゝろあるなり

むくつけき　箋云蠢々虫なとのむくめきむく／＼しき體なり

つまはちきをして　總別いやなる事におほくいへり

いはんかたなしと不足の言なり

あはめにくみて　河淡惡　あは／＼しくにくむ也　河にあは／＼しくにくむなりとあり此時はあはめとよむへきと心得給歟あはめといふは防心なり

これよりめつらしき事はさふらひなんやとてをりよろしき事を申せと君たちのせめ給にこれよりめつらしき事は侍らしと申て藤式部のかしこまりて

をるなり
すへて男も女も　花第十八段總説なり馬頭か詞なり
弄馬頭か詞なり此時の批判者なり　こゝにて總をひつくゝつて馬頭の批判する也秘同　箋云此段において上件の義を一决するなり
わつかにしれるかたの事を見せつくさむと　河論語云知者言未ニ必盡一　老子經云大辨如レ訥云々　これよりは悉皆人のをしへをいふなり　秘殘りなくしりたる事をも思はせておくかよき也あまりに才覺たてするはわろきなり　私云わつかに物をしれる人の才覺たてするはこと〳〵くみせつくさねは物しりたる人のさまに見るましき故に云つくす也わつかにしれる故なり
三史五經のみち〳〵しきかたを　河三史は史記漢書後漢書也五經は毛詩春秋周易禮記尚書也伊行釋には三史五經三道とかきて三道は紀傳明經明法と釋したりさとりあかさん義理こと〳〵くあきらむる也花女の身にて三史五經を明らかにさとりしらんはこは〳〵しくてあいきやうなからんとなり
秘又一段也紫式部かいふなり大かたにしてこそよからめといひておきて又されともあなかちに事にたてゝならはすとも世にある事をしらてはくちをしきとなり　私云此段紫式部が詞と抄にありされとも前の馬頭か批判の詞の末にや前にいへる博士の女のことく道をたてゝ女々しからぬこそあしからめすこしもかとあらん人の女といはんからに世の中にあることしらぬはくちをしからんとなり紫式部か日記にもけふは里に出て史記といふ文をよむなとかけり　弄女とても世にある事なと一向にしらてもくちをしきと也紫式部か才のほときこえたり自然にしるへきといへるは三史五經まてはこと〳〵しきのこゝろあるにや聞書に物を知たるも面にはみせねとも物知たる人の耳目にはよく見ゆへきなり
すこしもかとあらん人の　わさとたてゝ學せぬ人も目に見耳に聞事をよくおほえなとしたる人のそれを才覺にして女文なとにまんなをかき過しなと物しりかほするも又うたてしき事と云なり
さるまゝには　秘さありとてもこれが又うたてしき事なり

さるましき女とちの女ふみに　花女とちの文になかは過てまんなをかきすゝめたるなりまんなといふは眞名の草字かはりのいろはの類なり

なかは過てかきすくめ　一本かきすゝめとあり　聞書云すくめすゝめいつれもよろしかるへし云々　私云かきすゝめは字をかき過したる體歟　すくめは眞名をかきすくしてこは〳〵しく見ゆる體なり

此人のたをやかならましかはとみゆ　弄此かたのとある本あり此かたとは文かきの事をいへり　或説此人たをやかに文なとかきたらはよからんとの心なり　私云文かきのこは〳〵しきにてたをやかならさらん人とおしはからるゝなり手は人のかたちなといへり

心ちにはさしも思はさらめと　眞名といふ物は心のやはらかなる事も聲によみなせはこは〳〵しくきこゆるなり　私心ちにはとはかく人の心にはさは思はぬ事も人の見なしによるへし

ことさらひたり　わざとめきたるはわろき事なり

上らうの中にも　弄歌よむへき人のをしへなるへし

歌よむと思へる人の　秘歌よむへき人のをしへなり

はしめからそれにまつはれたるはあしきなり

歌にまつはれ　聞書云歌をよむとおもふからそのみちはかりにかゝりて歌たてをするをいましむるなり

おかしきふることをもはしめよりとりこみつゝ　聞書古事なとをあまりとりこみて書たるはあしきなり末に近江君の文なとの事に見えたり

すさまじきをり〳〵　聞書云人の機嫌もおしはからすつきもなき時なと歌よみかくる事をいましむなり其やうをいひのへたり

かへしせねはなさけなし　人の歌なとよみかけたらんに返歌なとをせぬは情おくれたる事なりこれ又歌人の教なり

さるへき節會なと　是は總別の節會の事なり

五月のせちにいそきまゐるあした　河五日節金谷園記屈原古事載レ之略之　聖武天皇天平十九年五月詔五日節宜用菖蒲縵云々　箋云續日本紀十八天皇御二南殿一觀二騎射走馬一此日詔曰昔五日節用二菖蒲一爲二縵一此來停二此事一從レ今而後非二菖蒲蔦（蔓イ）一勿レ入二宮中一花に五月五日の節天皇あやめのかつらをかけ

給て武徳殿に行幸あり內侍女藏人續命縷を群臣に給ふ三獻終りて六府騎射の事あり　箋曰騎射は推古天皇御宇始之云々此事久く斷絕歟江次第これをのせず西宮云　天皇出御あやめのかつらをつく日かけのかつらのことし鈴奏（スヾノソウ）武德殿におはします內辨外辨謝座謝酒等例の節會のことし宮內省菖蒲を獻す宮內省典藥を卒て菖蒲の机四脚をかきて治部省の幄の前に立次に御監奏次に續命縷を賜ふ內侍これをとつて太子にさつく女藏人これを取て公卿に賜ふおの〳〵拜舞次に左近諸衛府右近少將以下四十二人兵衛十二人先懸的少將騎飾馬出自馬出徐行不立一的十丈暫留次記馬勝負馬諸大夫給酒群臣拜舞車駕還レ宮雅樂奏樂　〻私云御監奏とは大將は御監とて左大將は左馬寮右大將は右馬寮を管領す又騎射は近衛の少將以下のわさなれはその変名又馬なとの事を奏するをいふなるへし此段花鳥の義はかりにて然へしこれまて委細の義に及ふへからす然れとも箋に西宮の義を引勘へられたる故にしはらくのする所なり

何のあやめもおもひしつめられぬに　花此あやめはあやめもしらぬ戀もするかなの歌の心と同し出仕を大事と思へるによりて其外の事は心につかぬよしなり

えならぬねを引かけ　花えならぬねとはよりもつかぬあやめの歌なとをよみかくるを云えならぬと云詞あまたあり蘆間になつむふねそえならぬといへるはたゝならぬ心なり又えならぬ花なといふはいはれす面白心なり又緣ならぬをえならぬといふはよせもなき心なり五日のあやめえならぬにはあらねともつきゝなき折ふしひきかけたる根なれはえならぬといふなり　秘えならぬはえんならぬなり今日は折にあひてえんなるへき事なれとも節會なとにまゐる人はいそかはしきに歌なとよみかくるはつきなけれはえんならぬなり　祇注同之弄花に詳也

九日のえんに　河九日宴　月令重陽日菊有二黃花一天數九秋數九仍曰二重陽一見二周易一續齊諧記曰桓〔景イ〕榮家九月九日當レ逢二大災一可レ盡レ家費長房云登レ高功採茱萸挿レ頭折二菊花一浮レ酒將レ攘二此災一桓〔景イ〕榮暮而歸二家內一鷄犬牛馬皆死長房聞レ之曰女無レ灾　平城天皇四

年九月九日幸二神泉苑一兼命二文人一賦詩賜レ物有レ差寛平遺誡曰五月五日九月九日文人武士行事繁多不レ可レ怠不レ可レ緩　花 重陽の宴には天皇南殿に出御ありて内辨外辨等あり文人博士をめされて題を奉らしめて各韻の字をさくりて詩をつくりて文臺の上にて講するなり三献ありて氷魚を給ふ御帳の左右に茱萸の袋をゆひつく御前に菊の花を瓶にさしてたてらる近代は宴の義たえたりよりて宜陽殿にて平座とて公卿以下着座して菊の酒を給ふよし仰らる其よしはかりなり　弄 花鳥に詳なり云々次の詞に菊の露をといへる歌なとの事なるへし　箋 江次第云此義絶之後於二宜陽殿一有二平座一　西宮勘物云承平以後依二御忌月一無二節會一同天暦依レ詔十月被レ行二殘菊宴一式部外任者可レ預二文人一者大臣奏仰二外記一藏人催二坊家一　私云坊家とは内教坊也音樂のかたをもよほす也内教坊は女の樂をつかさとる所也御帳の左右に付二茱萸嚢一御前立二菊瓶一天皇出御置物御机上置二御硯一内辨以下如二例節會一仰二參議一召二博士一献レ題内辨献二御料韻一次太子王卿屬レ文有二探韻一文人次第探レ之次取二文臺一置二内辨傍一内辨召二講師一次講二文御帳之東一是又箋に引勘る故載之　花鳥の説はかりにて然へし　聞書云禮記に有忌月無忌月と云々然とも唐大宗の代に忌月を用ふ日本にも忌日はかりを用ひたりしを天暦以後忌月を用ひらるゝなり

かたき詩の心を　難題なとの心なり

いとまなきをりに　秘 かやうの折ふしに菊の露をかこち歌よみかけなとするはつきなき事にてはなけれとも心つきなき事なり時節をおしはかりて有へきことなり　定家卿の詠歌大概にも時節景氣世間の盛衰とかゝれたるなりこゝもとにこゝろをかさるはいかなる秀逸をよみ出たりともこゝろつたなかるへし

菊の露をかこちよせ　花 菊の歌をよみかくるなり

さならても　聞書云五月五日九月九日はかりにはあらす萬にわたりてといはんための詞なり

後におもへはおかしくも　祇注歌よみかけなとする事は後のあはれにもなる事なるを折節のつきなき時よみかくるかあしきとなり皆これ男女のをしへなり　秘 歌をよみかくる事なとは老後の哀れにも成ぬへきをつきなき時よみかくる當座は心おくれ

に見え侍り歌よまん人のをしへ可然云々
あへかりける事（アント讀ヘシ）　有へかりける事となり
よろつの事になとかはさてもとおほゆる　花よろつの事につけて今こそはとおほゆる時のあるにも分別なき人の心にてはたゝ斟酌したらんはめやすかるへきとあり　祇注まへはすさましく似あはぬをりなとをいへりこゝは又一切そのをりかの折ひとへに心もなく思ひわかぬいやしき心はかりにてはなとかはあらんよしはみなさけたゝん事かめやすかるへきといへるなりこれ又人のをしへなり　私云此義あひあたらすなさけだゝざらんといへる詞に相違せり　弄思ひわかぬほとの心にてはなさけたゝさらん可然とにやさてもとおほゆるをりからとはけに後におもへはおかしくも有へきといひし時節の事思ひわかぬ計の心にてはといふに兩義あり一には分別なき心と云々又すこしは分別ある心をいふと云々はかりと云詞に當れり　又花鳥の義も可然なり前後の詞にかなへりとみゆ　此段よくよく心得わくへし大かたの人の事をいへり先なとかはとよみきりて心得へし　秘なとかはと云にて句をきるへし　さてもとおほゆるをりからは後におもへはの句にかゝるなり時節の機嫌を分別すへき事となり花鳥には分別なき人の心にては只斟酌したらんはめやすかるへきと也されとも只用捨有へき事と見るへき歟　箋時節の機嫌を分別すへき事となり此所に心おかは公界の義然るへしとなり花鳥に後に思へはの句にかゝりて注す無分別の人の心にては斟酌然るへしと云々　師説に但毎事を用捨して然へき義なり云々　箋曰花鳥の説然るへしなとかはの詞わかぬはかりの心にてはといふ下へなとかはとうけたり然は花鳥の義珍重云々　私云箋に花鳥の義尤可然云々誠に此説珍重にや
すへて心にしられん　弄此詞殊勝のをしへなり　秘殊勝の詞なり心をつくへし
いはまほしからん　いはぬはいふにまさるといへる心にや
君は人ひとりの　秘君は源氏なり人ひとりは藤つほの御事なりさま〳〵の事を聞にもたくひなく思ひ出らるゝなり　箋藤つほの御心むけ過不及なしと

源の心におもひつゝけ給ふなり只今の物語の中にもよき事のたらはぬもなくあしき事のさし過たることもなきとなり中道をたとふるに叶たるなり花鳥の說同之

いつかたによりはつともなく　此しな〳〵いつかたに一定するともなくてあけはつるなり　聞書云此一句か則品さためそ定まらぬ所か肝心なり　箋此品定落着せさる所か眞實の所也有空をはなれて中道實相と立て其中道にもとゝまる事をきらふ故にいつかたにもよりはてぬ也眼を付へし儒道の中庸の道もかくのことし中庸不ㇾ偏不ㇾ倚無ニ過不及一之名なり物ことに時にあたりたる中か中なりまん中を中と知れは則中にては無なり過は失ㇾ中不及は未ㇾ至過不及をはなれたるか中なり時にしたかふてよろしきを中といふなり

はて〳〵はあやしき事ともに　弄あやしきろんともと　イ本一日講分云々あやしきとは世上の人の事よきあしきのさた有しなり

からうしてけふは日のけしきもなほれり　花やうやうとして雨の晴たる心なり　弄霽雨の晴かたかりし空の晴たるなり御物忌もあきたる心にて日のけしきもといへる也　箋同之秘又同之　秘なか雨はれまなきと前にありしにかゝれりなか雨のはるゝけしきからうしてといへる誠にさる事也　祇注是は雨夜の物語の翌日なりからうしてとは長雨の晴るに俗にやう〳〵として晴たるなと云と同事なり

大殿の御心もいとほしけれはまかて給へり　秘おほい殿と云本もあり葵上の父大臣の事なり大殿の御心に源氏をいかにしてか里すみをせさせたてまつらむと思ひ給ふ故なり　箋同之

大かたのけしき　葵上の住給ふかたの體なり　箋大かたのたゝすまひきら〳〵しきなり

人のけはひも　葵上の體なり

けさやかに　箋きはをたてたるなり

かの人々のすてかたく　品さための時の事なり實々しき所をいひたてし類なり

あまりにうるはしく　箋折めたかにて柔和の心なきなり

とけかたく　秘あまり實めなるを源氏のわかき心には難と思ひ給ふなり

さう〳〵しくて　秘さひしくてなり　箋葵上の心をおきつめ給ふゆゑに物さひしくてよしなき別心もいてきぬへし

中納言君中務なとやうのおしなへたらぬ　花中納言君は源氏すまへうつろひのをり一夜たちとまり給ひし人也中務は君は末つむの巻に源氏になひきたてまつりて大宮の御けしきいかにそやときこえし人なり　此両人葵上の官女なり源のおもひ人なり花鳥にくはし箋同之

あつさにみたれ給へる　秘源の御さまなり雨の晴間一しほのあつさ成へし聞書云源のあつさにしとけなきさまなり中納言中務なとのめてたく見たてまつるなり

おとゝもわたり給ひて　秘葵上の父大臣の源のたまたまの御出とめつらしくて出あひ給ふなり

うちとけ給つれは御木丁へたてゝ　秘源氏のあつさにさうそくなともうちみたれ給ふ御さまなれはおとゝと御木丁をへたてゝましますなり禮をいたさるゝ義なり

あつきにと　源のおとゝのおはする故に木丁のとへもえ出給はてあつきにとにかみ給ふなりうちとけておはする所へおとゝのおはしたるをくるしかり給ふ體なりそれを人々のわらふなり

人々わらふあなかまとて　秘あなかまはあなかしかましなりこゝのやうたい几丁をへたてゝの對面と見えたり　花あなかしかましなり人々のわらふをの給ふなり

けうそくによりおはす　源の脇息によりかゝりたるなり

いとやすらかなる御ふるまひなりや　草子の評也箋うちみたれ給へるさまなれは大臣に直に對面もなく脇息なとによりつゝあつきにとにかみ給へる源の御さまあまり心安き源氏の御ふるまひやといふなり　弄に御木丁へたてゝとは源氏のうちみたれ給へるをりなれは葵上は丁をへたてゝおはするなり又源氏のあなかまと有しは大臣との間をへたてゝと見ゆと云々又あつきにとおとゝの心やましくおもふにてかくの給なり云々　私云此両義いつれも如何前の義よくあたれり箋の義同之　又頑注にも源のうち亂れて葵上と丁をへたてゝおはしま

す折ふしおとゝわたり給て心やましくおほしてあ
つきにとにかみ給ふとなり此義弄の義なり如何
くらくなる程にこよひなかかみ　河中神也又は長神
也　奥入中神なり或長神兩說歟光行說是也天一神
也金櫃經曰天一立中央爲十二將定吉凶云々立中央
之故號中神歟件方古今所違來也見尙書曆陰陽雜書安家記　件塞方
不可宿云々家榮抄又永久四年十二月二日縫殿頭家
榮依法性寺殿命令注進云天一方俗謂之長神己酉日
在艮六ヶ日蛇乙卯日在震卯五ヶ日鮒庚申日在巽六
ヶ日鳥丙寅日在離午五ヶ日雉辛未日在坤六ヶ日鹿
丁丑日在兌酉五ヶ日馬壬午日在乾六ヶ日龍戊子日
在坎子五ヶ日龜　自癸己至戊申十六日在天上　箋
曰中神は天一神立中央仍中神といふ一說長神云々
方に五日角に六日天にある事十六日仍長々しきと
いふ義なり件方古今たかへ來る所なり初日の夜方
たかへあらは次の夜はいます云々天一太白事件方
可正方一辰也假令十丈者以一丈五尺六寸六分を正
方とす此外は忌にあらす　三光中神とよまれしな
り
內よりはふたかりて　內裏より左大臣の里亭へは中
神の方ふたかりなり
さかしれいはいみ給ふかたなりけり　花さかしはさ
そかしといふ詞なり　れいはいみ給ふとはいつも
いみつけ給ふ方といふなり
二條院にもおなしすち　桐壺の更衣の里亭なり　內
裏より左大臣の亭へも二條院へも同し方といふな
り　秘花鳥河海色々沙汰せられ侍りいつれも然る
へき歟但さかきの卷にいたりて用る所あり花鳥の
義然るへし　弄花鳥につまひらかなり　聞書云花
鳥の說よし　河陽成院を三條院と號云々　脫履之（履イ）
後御此院二條北大炊御門以南油小路以東西洞院以
西なり京都の名跡なと准據なき事一事もなきなり
花二條院には陽成院に准據せるよし河海にのせ侍
れはさにてこそ侍らめと思給ふほとにいさゝかう
たかはしき事侍り其ゆゑは榊の卷に齋院の御くた
りの道つかひをいへる所に二條より洞院の大ちわ
たらせ給ふ程院のかたはらなれはとありこれにて
思ふ時は二條洞院のあたりにて有へきにや二條を
東へ過給ふとて西洞院を上へは何事にのほらせ給
ふへきそと覺え侍り但二條を東へ過給はゝ陽成院

の南の大路すなはち二條なれは西洞院をよこさまにとほらせ給ふを洞院の大路わたらせ給ふといふへきにや此ふんにて陽成院を二條院にさため侍れは又心もとなき事侍り若紫の巻に紫姫君二條院へわたし給へるに二條院は程ちかけれはとあり紫上の御さとは按察大納言の家六條御息所のあたりにて六條京極なりそれより陽成院まてははるかにへたゝり侍れは程ちかしとはいかてか申へきこゝに法興院は大入道殿の御所にてはしめは二條院と號しき榮花物語の第三の巻に見えたれは桐壺巻に里の殿作り給ふといふ所に此所を引のせ侍りそれは二條以北京極以東なり六條とは程へたゝり侍れとたて小路はともに京極なりいさゝか近しともいふへきにや然れは齋院の御くたりの院のかたはらといふは法興院はおなし二條なから東洞院と京極とは三町をへたてたりかたはらといはんにさのみのちかひは有ましくは法興院を二條院には准據し侍るへし聞書云花鳥よし箋云榮花物語第三さま／＼のよろこひにいはく永祚元年に大殿十五の宮盛明親王の住せ給ひし二條院をいみしくつくりみかゝ

せ給へはいとゝしうめも及はぬまてめてたきを御覽するまゝに御心もいとゝいみしうおほされて夜をひるにいそかせたまふ正暦元年正月攝政殿二條院にて大饗せさせ給同年五月に大殿病惱此二條院の物恠有仍東三條院へ渡り給ふ二條院をはやかて寺になさせ給ふ法興院と申す七月二日大入道殿薨去此法興院において追福勘物云法興院本名二條院なり盛明親王領二條院天暦母后御領二條北堀川東法興院二條北京極東　兼家公家本號東二條天暦母后正暦二辛卯七月供養積善寺也兼家本願仍號法興院關白　箋所詮世繼に注する所實也　勘物云法興院の本名二條院也盛明親王の領なり此後兼家公修造をくはへ里亭とす正暦元年云々此以下前に注するに同し　箋河には陽成院花には法興院のよしをのす兩樣共に難なし但榊巻にいたりみれは花の義然るへし殊に榮花物語第三に法興院を二條院とはしめは名つけたりとあれは法興院にて然へし

いとなやましきにとて　源氏の詞なり

いとあしき事なり　御前なる人々のつねにいみつけ給へる事を例にたかへなはあしき事也といふ也

きのかみにてしたしく　紀伊守源氏の家人なり

伊豫介（空蟬倍の夫）─紀伊守
　　　　　　　　　　─藏人右近將
　　　　　　　　　　─軒端荻（藏人少將妻）

此三人皆うつせみのまゝ子なり

中川のわたりなる　中川の徑也　奥入云見李部王記今京極川なり古は稱中川法成寺の始は人中川の御堂と云又在行成卿記　河 榮花物語云中川邊に御堂をたてらる法成寺東北院等なり　舊記云京極川二條以北號中川云々　東川加茂川　西川桂川　中川京極川　花 榮花物語第四云中川に左大臣殿ちかき所なりけりちゝのくらのかみすけのふ（助信）の朝臣といひける人のつくりてすみける池やり水山なと有ていとおかしうつくりたてゝ粟田殿の御かたたかへ所といひたりける家なりけり云々　今案此物語の中川の家は紀伊守か家にてやり水せんさいなと有て御方たかへ所になれり榮花物語と相違なきにや箋同載之秘同之

水せき入て涼しきかけに　此詞をとりて續古今に光俊朝臣このたひはゆくせの水をせき入て木かけ涼しき中川のやと

いとよかなり　源の詞なり

なやましきに　源の朦氣なり前にもなやましきとあり　聞書に暑氣なとにや云々

うしなから引入　御方たかへ所によりて門より下車なとし給はて叶はぬ所あるへし是は源の家司の家なれは下車なともし給ましき心やすき所との給也

しのひ／＼の御かたたかへ所　此段只今源の紀伊守か家へ方違し給ふ心をいひのへたり忍ひ／＼は源のしのひかよひし給ふ所はあまた有へしとなり　花 源氏の葵上の御さとへ程へてわたり給うて又ひきたかへてほかさまへ出給はん事いとほしく覺して紀伊守か中川の宿へたかへ給なり　秘 源氏のおもひ人のある所には自然いつくにも有へき也されともさやうの所へは唯今はえ御出もなき也久しく内裏にのみさふらひてたま／＼御いてあり又さやうの方へは御出もはゝかりあるとなり源氏の心つかひ然へし　聞書云此段源の心中を察してかきたる詞と見ゆ草子の地なるへし

きのかみにおほせことたまへは　秘 今夜御出あるへ

き事を仰らるゝなり
うけたまはりなからしそきて　奉（ウケタマハ）りなから退也
紀伊守先かしこまりたるよしを申てかげへ退てし
か〳〵申なり
いよのかみの朝臣の家に　紀伊守か父の家につゝし
む事ありて空蟬の君なとのこゝへうつりたるなり
なめけなる事や侍らんと　河滑なり無禮なり　私云
まへにも此詞あり
したになけくをきゝ給ひて　きのかみの傍輩なとに
いふを源の聞給てなり
その人ちかゝらんなん　源の詞也　秘女ちかくあら
ん所こそこのましけれと也
その木丁のうしろ　きの守のなめけなる事やといふ
を聞給ひて源のその木丁のうしろにねんこそこの
ましけれとの給なり
けによろしきおましところ　きよろしき清宜なりイ
本席（オマシ）　日本紀御座同莚　河史記云衛叔封布ﾉ茲　注云徐廣云茲菅蘇席之名也　弄きのかみ人をやりてこしらふるなりよろ
しかるへき所にとされことをうけていらへたる歟
但さふらふ人の詞歟　秘此詞はきのかみか詞也然
は人ちかならんうれしかるへきと云源の詞をうけ
てさやうにおほしめさんにはかなひてよろしきと
云義歟人はしらせやるはきの守の我家へさきへ人
をつかはすなり箋云此詞諸抄紀伊守か詞といへる
はあやまれりきのかみは伊豫守の妻なともわたり
たる比にていかゝといふを源のその人ちかゝらん
こそうれしかるへけれとの給を御前にさふらふ人
人のけによろしき御座所そといひて人をはしらせ
やるなり末の詞にかみ俄にとわふれと人々きき
いれすといへるにてよくきこえたり諸抄の説あ
やまれり　弄に但さふらふ人の詞歟といへる義よ
し
こと〳〵しからぬ所をと　紀伊守か家は源のために
は心やすき所なり
おとゝにもきこえ給はす　葵上の父左大臣なり　秘
あるしのおとゝにもの給はぬなり俄事なる故なり
守にはかにとわふれと　紀伊守なり前によろしきお
まし所そといひて人はしらせたるはきのかみの傍
輩ともとよくきこえたり
しん殿の東おもてはらひあけさせてかりそめの御し

つらひしたり　人の家の寢殿には東西を晴の方に用る也　はらひあけさせて御しつらひしたりと云るきの守の傍輩とものとりもちてしたる體聞えたり水の心はへなと　中川の宿のさまなり

風すゝしくてそこはかとなき蟲のこゑ〳〵　是は今夜の景氣なり　秘夏の暮つかたの體おもしろし花鳥に此時節をなか比より悉皆六月にありこゝに蟲の聲なとゝあるにて六月とせられたる歟此末の詞に月はあり明にてといへれは五月の末なるへきなり　箋云花鳥六月と云々只五月の末也そこはかとなきといへる詞の分明に虫の鳴にあらす夏の季に入てからは何ともしられぬ虫のなくなりそこはかとなきといへる詞尤面白し

人々　秘御とものの人々なり

あるしもさかなもとむと　玉たれのこかめを中にすゑてあるしはいもとやさかなもなきにさかなもとめにこゆるきの磯にわかめかりあけに　風俗玉たれ歌件の義は在細漢國　あるしはきのかみなり前の詞に俄にとわふれともといひこゝにこゆるきのいそきありくなといへる詞の義おもしろし

かの中のしなにとりいてゝ　秘まへのしなさためのに中のしなにそおくへきすりやうといひて人の國の事にかゝつらひてなとゝいひし事を此家の有さまを源の御覽して覺しめしおはするなり

おもひあかれるけしきにきゝおき給へるむすめ　伊豫守の妻のこゝにわたれると前に紀伊守か申しゝゆゑに源氏のしり給へる也後中納言右衛門督をかけたる左衛門佐此巻にいへる小君なりうつせみの君の弟なり　空蟬君伊豫介の妻弄に空蟬をは父の内へ參らせんなと思ひし人なり秘箋同之

此にしおもてには　源のおはするかたは寢殿の東面なりされは遠くせんとて伊豫守の妻なとは此同し寢殿のにしおもてにおくなりされとも源の心をつけ給ゆゑ人のけはひしるくきこゆるなり

きぬのおとなひはら〳〵として　河官響（オトナヒ）日本紀　或夏もすゝしにはりひとへをかさぬるなり仍有音歟云々　花夏もひとへかさね（引へきイ）にうちきぬ又はりはかまをきるゆゑにおと有へし鈴虫の巻にもきぬの音なひと夏の事にかけり眞實にもこの兩義をのす夏はみなすゝしをきるへきほとに音はあるましき

と云說あり頗いりほかなり夏もかいねりかさねと
て下のかさねは板ひきなり音有へし又はかまもい
た引なれは音なくてはかなふへからす
忍ひてわらひなとする　ゑみわらふなり
ことさらひたり　河　ことさらに作りて物いふ由也
かうしをあけたりけれは　秘　女のあるかたのかうし
なり夏なれはあけておきたるなりきのかみのはし
ちかなりとておろさするなり
かみ心なしと　きのかみ心なくはしちかなりと無興
する體なり
むつかりて　河　勘當也　世繼に御門むつかりおはし
ましてとあり　秘　日本紀に發憤とかけりいきとほ
りをおこすなり　箋　發憤なり又唯識論に熱の字を
むつかると訓せり小兒のなくをむつかると云世俗
に無興なる體いかる心を云と見えたり
さうじのかみより　秘　障子の紙なりひまの心なるへ
し　弄　紙のひまよりにや　聞書云障子の紙也又障
子上の所もあるなり或義に障子の空よりと紙より
と兩義と云々不用之
やをらより給ひて　源のたちきゝし給體なりやをら
は漸の字の心歟そろ〳〵とよりたる心也
みゆやとおほせと　秘　此女ともなり
このちかきもやにつとひ　伊豫守の妻わたりたる故
にせはき所につとへる成へし是はおなし寢殿のう
ちの母屋より西南に此人々の居たるなるへし
うちさゝめき　耳言^サヽメキ^萬葉
わか御うへなるへし　此さゝめき事は源氏の御うは
さなり　是も人の事なといはぬ事とのをしへなり
いといたうまめたちて　此卷のはしめにいへる詞に
よくかなへり
またきにやんごとなき　元服の夜より葵上へかよひ
そめ給ひし事也　實々しき體のおはしますが世間
の女の爲にはさう〳〵しきと也　よすが便なり貧
なり
されとさるへきくまには　さはあれとも御しのひあ
りきは常にありなといふなり
おほす事のみ　花　藤つほの事なり
まつむねつふれて　心にあやまりのある時何事もふ
と我心から心にかゝる事なりかやうの時藤つほに
心かけ給ふ事なとを人のいひたらんを聞つけたら

はいかゝあらんと心あやまりして思はるゝなりされとも此時は藤壺の事はいはぬなり

式部卿の宮の姫君に朝かほたてまつり　河是より槿宮と號すると云々　齋院の事なり桐壺のみかとの弟桃園式部卿宮女也さか木の卷に齋院になり給ふ源氏とはいとこなり　花桃園式部卿宮の御女あさかほの姫君に御文かよはし給ふ事此卷になしはしめていひ出して二十の朝顔の卷に齋院おり給てのち御文たてまつり給へる歌にみし折の露忘られぬ朝かほの花の盛りは過やしぬらんとありみしをりといへるは帚木の卷にいへる時をいふなるへし此時の歌は物語にかゝす　弄槿齋院の事なりさる事有しなるへし　祕これよりさきに此事なしはしめて書出し侍り此類この物語の格なり　箋別義なし

はうゆかめて　河方曲なり　祕圓は方にはしまるといへり朝かほの歌を正體にもかたらさるなり　私云方とはすくなる物なりこれをゆかめてかたるはすくならぬなり

くつろきかましく歌すしかちにもあるかな　河かろかろしく四度計なきよしなりつゝまやかなるとは極信の體なりそれに對する詞なり紫明抄云あはらなる也云々　花くつろくとは物のすき間ありてうこきやすきをいふ歌すんすることも女房のうへには好ましからぬことなり　閑書動のこゝろなり或抄御說極信に實なるはつゝまやかにつまるなりそれに對してあはらにしどけなきはくつろくなりこれによつていふ歟うちゆるへ用意なしといふ心なり　源氏のたちきゝをもしらすしてなり際ありてくつろきたる樣なるなりこれも女のようゐあるへきをいへなり　箋目莫傾聽と禮記の誡なれは源のたちきゝも道にそむけり又莫言人之短と崔之玉かいましめなれは女房ともの源の事をいふも用意のなき事をそしるなり

かみいてきて　紀伊守御前へ出來てなり

くた物はかり　饗膳ならぬ也さかな物なと計りなり

とうろかけそへ　燈籠なり

とばりちやうもいかにそは　河輿入　和加伊戸波止波利帳於毛多禮太留乎於保支美支萬世無己禮世无美左可奈波奈衞與介无安波比左多乎加々世與介无安波比左多乎加々世與介无催馬樂呂我家　我家とかけともわい

へんの曲と云うたふふしのさやうにきこゆる也源氏の君のさるかたの心もとなくてとの給ふはおほきみきませむこにせんと云心をとりて思ひあかれたる女とものあるを聞給てたはふれ給詞也めさましきあるしとは饗の事也さて紀伊守かなによけんともえうけたまはらすと申侍るはいかやうなる御さかなをまゐらせてよかるへきとも覺悟せぬよしをこたへ奉るなりいつれも催馬樂の我家の曲の詞なり　秘催馬樂我家の歌の詞なり今源氏のの給ふ心は今夜しかるへき御そひふしをまいらせよとたはふれたまふなり　私云おほきみとは王氏をいへる源氏も皇子の事なれはかた〳〵たよりある也

さるかたの　源のたはむれに御そひふしの事をのたまふなりさやうの心もうけなくは今夜の饗應曲もあるましきとなり

なによけんとも　なによからんとも覺悟せぬなり　秘しかるへき女も有かたきとなり　箋云紀守返答尤奇特なりみさかなになによけんといふ詞をとりて山海を盡しても然へき御さかなはもとめ得かたきなりと御そひふしのことを仰らるゝをそらおほれしたるなり

はしつかたのおまし　夏なれはすゝしきかたにかり初に源氏のよりふしなとし給へる歟　秘源氏もかりにね給ふなり

あるしの子とも　箋云紀伊守か子なりさしたる事なきによつて系圖にのせす人々もしつまりぬとあれともそれよりまへの體の事をこゝよりかくなり

わはなる殿上のほとに　弄問云帚木の巻に伊豫介か子の殿上すへきよし見えたりいか様の品なる人と心得へきにか　一答昔は人の種性さたまらす或は地下或は殿上時にしたかふなり其子のわらは昇殿したるを童殿上といふなり父は地下にても有へしと云々

いよの介の子　箋云紀伊守か弟藏人將監なり云々私云藏人の將監にかきらす兄弟も有へきなり　花伊豫守を介といへるは長官も次官も職掌同しき故にかよはして守を介といへり　すまの巻に大貳を帥といへるも此例なり箋同之

あてはかにて十二三はかり　河嬋妍日本紀　仙原云あてとは高貴なり妙なりあて人といふもあてなる人

なり　箋云空蟬の弟此卷に小君といふ樺中納言右
衛門督なる人の子なり後には左衛門佐といふ伊豫
守の子ともとは俗姓かちかうたる程にやうたいも
別に見ゆるなり
いつれかいつれ　委細に源のきの守にとひ給ふなり
これは右衛門督の末の子　きの守かこたへ申詞なり
あねなる人の　空蟬の便りにつきてなり
さえなとも　弄才なりさもしすんてよむと云々　一
注在河　細箋の義ざえと濁りてよめり
すか〳〵しうはえましらひ　すか〳〵しうは速々な
り親なとのなき故に殿上なとの義も急速にならぬ
なりましらひは殿上のましはりの事なり
あはれのことそ　源の詞也
此あね君や　空蟬の事なり小君をさして此あね君と
云なり
まうとの　河眞人は朝臣より次なり改眞人爲朝臣な
り　花まうとは御へんなといふか如し又朝臣も眞
人もともに申なり下には朝臣ともいへり　秘かは
ねをよひ給ふなり朝臣やなといへるに同し
後の親　花繼母なり　秘さあらは空蟬はきの守のま
ま母かと御尋あるなり
さなん侍ると申に　紀伊守のさやうに侍るとの返答
なり
にけなきおや　不似合おやとの給ふなり
うへにもきこしめしおきて　父の右衛門督存生の時
內へ奉らんの心さしあるよしもらし申しをきこし
めしおきてなり　秘父は宮つかへに參らせんと申
せしにと內にも仰ありしなり何とて受領の妻にな
したるそあはれの事やとなり
をよすけの給ふ　源のおとなしやかにの給ふと云也
ふいにかくて　きの守の詞也不意なり心ならす也
河不意日本紀の點におもひのほか或は又おもはす
とも或說無爲歟云々あやまれり
世中といふものさのみこそ　さうのみこそなり男女
ともにさたまらぬ浮世なれともとりわき女の宿世
はうきたる物ときの守の申詞なり
いよの介はかしつくや　源の詞　弄うつせみをかし
つくらんとなり
君と思ふらんな　主とこそ思ふらんとの給ふ也　箋
伊豫介かためにはうつ蟬は過分となり

いかゝはわたくしのしうとこそ　いかゝはより紀守か詞也　弄源氏君に心をおきたてまつりて私の主と云也　箋同之　秘おしいたしてしうといはんは源氏の御前にてははゝかりある故にわたくしのといふ會釋おもしろしいかゝはと句をきりてよむへし

すき〳〵しきことゝ　伊豫介にうつ蟬は似あはぬ事と紀の守をはしめて子ともに無用と申となりさりともまうとたちの　源の詞紀守をはしめて伊豫介成人の子ともあまた有へし

おろしたてんやは　弄紀守もすき物なれは伊豫介も心をはゆるさしとなり　秘箋同之

かの介はいとよしありて　伊豫介をほめて源のの給へる詞なり

いつかたにそ　源のうつせみのゐたる方をとひ給ふなり

みなしもやに　秘紀守か詞なりしもやは雑舍のことなり　河下屋雑舍の事なり

えやおりあへ侍らぬときこゆ　紀守の詞也下屋へおろしつれともおりあへぬかとなり　人のけはひなとこゝへきこえてはとの用捨なり

ゑひすゝみて　秘源の御供の人々なり

すのこにふしつゝ　夏の夜酔てはしにねたる體おもしろし

君はとけても　聞書源の御心に藤つほなとの事か心に有へし云々

いたつらふしと　河「いかなりし時くれ竹の一よたにいたつらふしをくるしといふらん

北のさうじ　東面の北のかた成へし

かくいふ人の　うつせみの事なり

ありつる子のこゑ　小君なり

ものけ給はる　物うけ給はるなり空蟬と小君となり

いつくにおはしますぞ　弄に空蟬の詞云々此義非也小君は源の御前よりかへりてうつせみにいつくにおはしますそと問ふ聲なり

こゝにそふしたる　花に小君かいらへ也云々是又非なり弄の義と同しこれはうつ蟬の返答まらうとはね給ひぬるかと源の事を御前よりかへりたれは小君にとふ詞なり

けどほかりけりといふ　是まてつゝけて空蟬の詞な

り　弄　空蟬の詞源氏の御寢所へいかにちかゝらん
と思ひしにさもなくてうれしきとなり
ねたる聲の　源の聞給ふなりうつ蟬はさきより寢た
れはすこしねおびれたるしどけなき聲なり小君に
似かよひたるなり
いもうとゝきゝ給うつ　小君より姉なれとも妹とい
へるなり　系圖には姉にてもあれ女をは末にかく
法也古今の序にもすさのをの尊を天照太神のこの
かみといへり天照太神は姉にてましませとも女神
たる故なり　箋同
ひさしにそおほとのこもりぬる　秘　小君の詞也源の
ひさしにね給ふと語る也花鳥に女房達の詞と云々
あやまれり　私云前にいつくにおはしますなとい
ふを弄に空蟬の詞といへるは此ひさしにそおほと
のこもりぬると云小君の返答に引合ていへる歟さ
れと前の說よくかなひ侍り
みそかにいふ　これまて小君の詞なりみそかは密の
字なりひそかと云心なり　音に聞つるといふより
源の御やうたいを小君のかたるなり
ひるならましかは　空蟬の詞

ひきいれつる聲を　源のたちきゝ給へる體なり
ねたう心とゝめて　心とゝめては河に引歌ありこれ
に不及也　花　これは源氏君の立聞し給うて心に思
ひ給ふなりうつ蟬の君の詞すくなきがとひきけか
しと思ひ給ふなり
まろはこゝに（はしにイ）　小君なり丸なり　河　夕顔の巻に薊之
女君は　空蟬なり此聲にて源の推し給ふなり
さうしくちすちかひたる程にこそ　障子くち也　花
障子は寢殿の母屋の南面と北面との中をへたてた
る障子なりちかひたるとは源氏の君の南おもての
御ましとちがひたる所をいふ也　秘　今夜の源の寢
所は西方也空蟬のかたは東なり然れは源氏の方よ
りはすちかひなるへし箋にも此兩義をのせて花に
は源は南面の御座なれはちかひたると云々すちか
ひのすの字無之如何　私云此兩義いつれもいさゝ
か疑あり前の詞に寢殿のひんがしおもてはらひあ
けさせかりそめの御しつらひしたりとあり然れは
源氏の寢所はしん殿の東のひさし也空蟬の方は北
面なれはすぢかひたるといふにかなへり此中のへ
たての障子と見るに疑ひなき歟如何又此北のさう

しのあなたに人のけはひするとあり東面の北の方
のへたての障子なり不審なきにや
ふしたるへきにや　うつ蟬のねたる所を源のおしは
かりなり
中將の君はいつくにそ　うつせみの詞中將をたつぬ
るなりうつ蟬の宮女の名なり
いふなれは　うつせみのかくいへはなり
なけしのしもに　うつせみの宮女とも下のたんに
ふしていらへするなり源の立聞給ふ體なり
しもやにゆにおりて　下屋に湯に下りてなり
木丁をさうじ口にたて丶　中へだてのさうしのきは
に木丁をたてそへてかけかねをはさ丶ぬなり
からびつだつ物をおきたれは　伊豫介の家よりかり
そめにうつり住たる體さるへきなり
けはひしつる所　空蟬の聲しつるかたを物ごしに源
の聞すましたるなり
さ丶やかにて　河細々許遊仙窟　少々　狹々　輕　小々
小蝿　いつれもちいさき心なり
きぬおしやるまて　源のうつ蟬のきぬをおしやる也
もとめつる人と　空蟬丶源氏を宮女の中將かと思ふ
なり
中將めしつれはなん　是よりうつ蟬に源氏の丶たま
ふ詞なり　花源氏君此時分中將の官にて有しかは
中將めしたれは參れるよし宣ふ也　秘箋等同之
祇注源氏君たちき丶給へばうつせみか中將はいつ
くにそと女房をよふを聞給うてわか御身の官中將
にておはしませはわれをよひつるやうにとりなし
てのたまへるなり
人しれぬ思ひのしるし　源のうつせみの事をおもひ
わたりつ丶いまたいひよらねは人しれぬ思ひとな
り心中の思ひか通してた丶いまよひよせ給ふとと
りなしての給へる詞なり
ともかくも思ひわかれす　空蟬のあきれたる心なり
やとおびゆれど　きもをつふしたる體なり
うちつけにふか丶らぬ　源のかさねての給ふ詞也人
しれぬ思ひのしるしなと丶のたまひこよひ忍ひよ
り給へるさまなとうちつけに卒爾なるとうつせみ
の思はんと陳し給へる也　秘うちつけなるやうに
こそ思ひ給ふらめ我は年月のおもひあるによりて
こそ今夜の方たかへもありつれと取あへすの給ふ

なり
かゝるをりをまち出たる　かやうの方違なとのつい
てをつくり出たるもかへりてあさき心さしにはあ
らすとの給ふなり
おに神もあらたつましき　源氏の體なりいかなる鬼
神もやはらきつへきさまなり桐壺の卷にもいかな
るあたかたきもにくむましきよしいへりそれも源
の事なり
はしたなくこゝに人とも　うつせみの心にもさすか
あらゝかにもえそむかぬなりよわき物につよくあ
たるをはしたなきといふこれはよわきにはあらて
物やはらかなる故につよくもあたられぬなり
心ちはたわひしく　あらゝかにはうつせみのそむか
ぬ物から又なひき奉らん事は有ましき事と思ふな
り
あさましく　箋空蟬の心也
人たかへにこそ　空蟬の詞也
きえまとへる　空蟬の體也
心くるしく　源の心に空蟬を心くるしく思ふなり
おかしと見給うて　源の心也

たがふへくもあらぬ　源の詞なりうつせみの人たか
へにこそといふにつきて前に中將めしつれは人た
かへにはあらしとなり
おもはすにもおほめい給ふ　源の詞中將とめしたる
程にいかなる御用そと參りたれは案に相違してお
ほめかしくの給ふとなりおほめくは治定せさる心
おほつかなきなと云におなし
かきいだきて　空蟬を源の御寢所へつれて行給ふ也
もとめつる中將だつ人　前にうつせみの中將の君は
いつくにそといひし人なり　中將たつ人とは源は
中將をみしり給はねはなり
やゝとの給ふに　弄中將を源氏のめしよする也と云
云　秘同之　箋云空蟬の中將をめしよする也此中
將を待えてちからにしてのかるへきとの心ある也
此義よし
あやしくてさぐりよりたるに　秘此中將也　中將君
の空蟬をしたひ来るさまなり
思ひよりぬ　中將の源氏なりとおもひしるなり
おもひまとはるれと　中將の心中なり
なみ／＼の人　河次々の人なり次の字をなみとよむ

なり日次等なり
それたに人のあまたしらんは　箋云此詞まことに金
言なりまことに中將君の用捨奇特なりこゝにてあ
らゝかにし奉らはのこりの空蟬の官女ともみな知
るへししからは實事の有無は人しらすかへりて外
聞に及ふへき所をかへり見るなり
心もさわきてしたひ奉たれは（とイ）　こゝまて中將の心さ
わきして參りよりたれとも源氏にておはしませは
すべき樣なきなり　或說下ひきたれとゝありすこ
し引て見たると也はなはた然るへからす　弄にし
たひ來れるにやと云々
どうもなくて　無動なりうごきもなきなり
おくなるおまし　箋はしめはひさしに源の寢給ふ是
は母屋なるへし
あかつきに御むかへに　源の中將にの給ふなり
女はこの人の思ふらん　空蟬の中將の思はん事さへ
しぬはかり思ふなり
なかるゝまてあせになりて　うつ蟬の體なり
いとほしけれと　源の心中なり
いつこよりとうて給ふ　河取出給ふなり

猶いとあさましきに　是より空蟬の心中なり
數ならぬ身なからも　空蟬の詞也箋秘かくのことし
私云猶いとあさましきにうつゝともおほえすこそ
といふより空蟬の詞と見ても相違はあるましきに
や
おほしくたしける　河下すなり
いかゝあさくは思う給へさらん　前に源のかゝるを
りをまち出たるもさらにあさくはあらしと思ひな
し給へとの給ふにあたりていへり
いとかやうなるきはゝきはとこそ　弄身のさたまり
たるをいふ也　祇注ぬしあるものにはかゝるたは
ふれはせぬならひのよしを申也　秘同之　花鳥に
は上﨟下﨟のきはをいふなり云々不可然とあり
箋云夫妻の道に高下はなき物なり女のよすか定て
二夫に見ゆる事はなきを思ひあなつり給ふは曲な
きとなり花の義然るへからすと云々
おしたち給へるを　河押立なり　無理にうちつけな
るさまをふかくうしと空蟬の思ふなり
心はつかしければ　空蟬を心はつかしきさまと源の
思ひ給ふなり

そのきは〳〵をまたしらぬ　箋云うつせみのことばを源の陳して世のありさまをもいまたわきまへずとなり

うひことぞや　河初事也

中々おしなへたる　源の世上をも思ひしりたる人のなみにの給ふこそ心うきとなり

おのつからきゝ給ふやうも　源の世の有樣をしらぬ事の理をいひのへ給ふなり自然にも聞給ふらん我は好色の方へ心のなき物なりされとも空蟬ゆゑにはかくのことくみたるゝと我思ふ心を深切になさんためと又世をひろくしらぬ事とへかけての給ふ詞なり

かくあはめられたてまつるも　河淡也あはめにくむ也　又沮(アハム)(阻イ)　秘あは〳〵しくいひおとさるゝなり　箋云制する義なり然るを淡の字を出せるは其義不叶追而これを勘へし云々又雨夜の物語の所に藤式部をあはめにくみ給ふと云も抑(チサヘトヾムル)止の義也

私云沮(阻イ)の字ははゝむともよむ也ふせく心なり又へたゝるといふよみもありこれは制止の義にかなへりといふへし

ことわりなる心まとひ　空蟬のあはむるは道理なり源の心まとひのけしからぬと源氏のうつ蟬に道理をつけてのたまふ詞なりうつ蟬のさまの心はつかしげれはなりさて道理をつけて女の心をやはらけ給うていひなひかさんと源の思ひ給ふなり

いとたくひなき御ありさまの　空蟬の心なり源のうつ蟬に道理をつけ給ふにて案のことく女の心やはらきたりさてその上にては世にたくひなき源の御ありさまなるにかやうにおちふれて受領の妻なとに成たる身にて心あさくうちなひかん事はあるましき事と身を卑下しかへり見てたゝ情おくれ心つきなき物には源の思ひ給ふともなひかて過さんと又おもひかへすなりはしめは無理におしたち給へるを心うく思ひなひかすさて又源の心やはらかにかたらひ給ふからは身を卑下してなひかしとの分別ありいつれも貞女の性見えたり

さるかたのいふかひなきにて　情しらぬ物と源の思ひ給ふらんすれとも貞心を忘れんよりは物思ひしらぬかたに源に思はれたてまつらんはくるしからぬ事と二道に思ふなり

人からのたをやきたるに　是より空蟬の體又心もちゐをいふ
なよ竹の心ちして　引歌二首あり一首略之　河「なよ竹のよなかきうへに初霜のおきゐて物を思ふ比哉
なよ竹はなべての竹よりもよ長くてたはみたゝやかにてしかもをれぬ物なり　私云此引歌に不及歟
箋云柔者勝强といへり　閑書になよ竹はにが竹といふ物歟
心くるしくはあれど　秘ほいをもとけぬをいふ也
箋なくさまといふ詞にかけてみるへし源の心なり
なとかくうとましき物にも　源の詞也
おほえなきさまなりしもこそ　箋不慮の參會こそ一段ふかき契の因緣なれとなり
世を思ひしらぬやうにおほし給ふなん（おほれイ）　箋云世なれぬ人なとの樣に思ひしつみ給へるは由なしとなり
一義には空おほれしてまた世になれぬふりにもてなし給ふと云々はしめの義然るへし
うらみられて　源にうつ蟬のうらみられてなり
いとかくうき身ゝほとのさたまらぬ　空蟬の心中なり伊豫介か妻になりて口をしきとなり

ありしなからの身にて　秘河云奥入に「とりかへす物にもかなや世の中をありしなからの我身と思はん
空蟬の一生涯此歌の心なりありしなからの身にてあらはまつ心も有へき物をと也　箋云權中納言ほとの人の女にて內すみもすへき人のおちふれて受領の妻となる事をあさましと身をうらみつるに今又源氏のかく心かけ給ふゆゑに一入宿世のつたなきを歎きおもひ給ふよしなり
あるましきわかたのみにて　空蟬を源の一旦こそかくの給ふともとけてしたひ給はん事は有ましきなりさやうなりとも昔のまゝの身にて親の跡なとに獨すみにてあらんには我かたからなりとも源をたのまんとなり
み直し給ふのちせもやと　河萬「わかさなる後瀨（世イ）の山の後に又あはんかならすけふならすとも　花のちのあふせをたのみでもなくさみなん心なり　弄もとの身なから源氏にとはれ奉らんは御心さしおろかなりともみなをし給ふやうもやとたのむへきにとなり　箋云ぬしさたまらぬ身ならはかさねての時は源にしたかひ申事もありもやせましとなりの

ち世は再會の事にいひならはせり根本はわかさなる後世の山の歌より出たる詞なり　聞書後世はのちのきはといふ也云々

いとかくなるうきねのほと　弄うきたる心なり　秘よすか定まりてかやうなるこそ口惜けれとなりうきねはうきたる心なり　箋云受領にあひくしてあたまふうらみなり　祇注かやうのはかなき契なれはそれをかくうきねとはいふさだまらぬをいふなり

私云いとかくうき身のほとのさたまらぬといふなり秘には空蟬の心中と有末には心中とは見えす詞のやうす見ゆしからは前に源のうとましき物におほすへきといふより理をせめて空蟬の源にうらみられていとかくといふより心中の所存を此一段にのふるといふへしやけにいとことわりなりと源のおほすも心中を推量してはいかゝとおほゆる歟此義尋ね決すへし

よしいまはみきとなかけそ　よし〳〵いまからはなり　河それをたに思ふことゝてわか宿をみきとないひそ人のきかくに　弄古今にはいひそとあり　秘それをたに思ふ事とて我宿をみきとないひそと古今にはあるをかけそと引かへて用ひたる面白きなり　總して詞をかへて用る事史記漢書等にも多し箋同之

おもへるさま　空蟬の思ひ入たるさまなり

おろかならすちきりなくさめ給ふ事おほかるへし　草子地なり　弄此夜實事ありやいなやの說々あり或說には貞女の一種なれは實事なしと見るへしと云々但此時はあひたるよし也詞にも見えたり一夜はわりなく隨ひてもその後つれなくてやみぬる事貞節あるにや此義用之草子地也　聞書云ちきりなくさめ給ふ事おほかるへしと云にて此時源氏にあひたてまつるなるへし　私云箋の義權齋院と此空蟬とは源氏一部の貞女なれは實事の有しといふは異說と難し申されしなり然るに後土御門院說再會戀といふに此心を詠し給へり然らは一たひは逢奉る歟如何又かさねておはせし時はかり初に物をもの給はさりしかはそれを再會のなきにとりなせる歟如何

鳥もなきぬ　詞のつゝきおもしろくかきなせり

にしさまにみとほし　弄たつみの方よりすちかひて西のかたへ見給ふ也秘箋同之
うちかけて　木丁のかたひらをうちあけてかくる也
火ちかう　火の近き也　又切灯臺の事と云々切灯臺をはおほとなふらみしかくともかけり
我心かくると　空蟬也
こきあやのひとへかさね　河こき綾は紅の色こきなり上にきてはうちきなりいまひとりも軒端の荻なり白きうす物のひとへかさねに二あひのこうちきと有此卷にも彼薄衣のこうちきのいとなつかしき人香にしめるといへり然とももやの柱にそはみてさたかにみえすと有は用意深きよしをいはんとて也仍なににかあらんとおほめくなり　花女房の裝束五月五日よりはひとへかさねをきるひとへふたつをひねりかさねたる物也此卋は更にひとへをきすこきとはこきうちきの事也こき紫に染たるへし河海に紅の色こきとしるされたりいかゝと覺え侍り　弄花鳥にみえたり　秘花鳥の說然るへし紫なるべし　箋曰花鳥の說よしひねりかさねといふ物の事なり

何にかあらんうへにきて　弄一重かさねの上にうは着をきるへし一禪書　箋又の說あり　但しほかけに不分明故何にかといへる也　秘ひとへかさねの上にうは着をきると云說あれとも只ほかけにみえわかぬ也箋曰只灯下彷彿故衣服不見辨の義正說也
かほなともわさとさしむかひ　秘空蟬の用意深き體也箋同之
手つきやせ〳〵にて　是も空蟬の體也　秘碁を打には手あらはなるへきをもよき程に引きかくす也用意あさからぬ樣也箋同之
今ひとりは　秘軒端荻也たつみの方より見給ふ程に東面なるにより殘る所なく見とほさるゝなるへし
ふたあゐのこうちき　秘二藍也ふたへともいふ同事也青花赤花二色にてそむるを云　箋同之　河年によりて淺深有と云々　弄同之　私云二藍の淺深は若年には赤色おほく青花すくなし次第に青花おほく赤花をすくなくして染る也後に赤花の色なとも見えぬ程なるか花たなといふ色也
ないかしろに着なして　軒端荻の衣裳なとも引つくろはす碁に心入たる體也よく〳〵おもふへし

くれなゐのこし引ゆへる　河袴腰也或抄御説に紅のこしと句を切て引ゆへるきはまてとよむへしと云云其義に及はざる歟又紅のこし引は裳の事歟云々
箋曰河の説よし

はうそくなる　河傍側也あらはなる心也うつほ物語云わかき人は物わひし給ふ物也されともさやうにはうそくにもあらすと云々　花舊説に傍側と釋し侍れといかゝとおほえ侍り飽足の二字相叶へきにやにきはゝしくほこりかなる心なるへしィ本に蜻蛉卷にも此詞あり見合て了簡すへし大かたは物ものしからぬ心とみえたり河海に傍側とかきてあらはなる心と釋せらるおほつかなし　弄見花鳥　秘河には傍側云々花には飽足也にきはゝしくほこりかなる心と云々しかれとも傍側猶よきか傍若無人の心なるへき歟憚所なき心なるべし　箋曰はうそく河には傍側あらはなる心と云々花には飽足にきははしくほこりかなる心と云々　師説河の説可然歟傍若無人の心にて憚所なき由也傍側河の聲如此但上の字濁て讀べし　聞書云傍側はかたはら〳〵也正體ならぬ心也云々

そゝろかなる　河尖するを也する〳〵としたる也
箋曰器量なる心なり　秘せいのすこしたかやかなる也　弄同之

まみ　月見なり

さかりは　河下場也　勘文紫式部か日記にも此詞あり隱蓑物語にもつやさかりはと有いつれも裳の事也　弄さかりたるさま也はの字濁る　秘又云霜の降りは同し心歟　秘さかりたるさま也　箋曰さかりはさかりたるさまなり云々此外は河をひける也
私云さかりは下場也さかりたる所也さかりははさかりさまなり霜のふりは是に同しさかりさまの義ならははの字濁てよむべし如何

ねちけたる所なく　秘あしき所なきなり　箋聞書云ねひれたる所なきなり

うへ（むイ）こそおやの　河宜閨宜（ウヘ）漢書云諾也源の心に是こそとおとしつけてうけかうてみる心なり諸の字の心宜しき歟　秘伊豫介の心には隨分然るべき女と思はんとの源の見給ふ心歟聞にけにもこれこそといふ心也

心ちそ猶しつかなるけを　弄人の性を敎たる詞なり

秘人はみさまよりは用意ことから本也此人はほ
こりかなるかた過たる也しつ〳〵としたるけをそ
へたきと也人の性の敎なり
かとなきには有まし　箋聞書に草子地の評なり　秘
一かとなきやうにはなき也是を捨かたきと也　聞
書云一かと有と云心歟一手なきにはあらぬと云也
私云物にかとの有はすくれぬ事をいふ心歟如何
けちさすわたり　河圍碁の結也　又闕なり　秘けち
淸て讀也かため所也闕河同　箋曰闕はためをさす心
なり結はかたむる心なり聞書同之
心とげに　河心疾也　心はやき也
さうとけは　河早速也いそかしく物さわかしき體也
おくの人は　花此時源氏君のかいまみは東の妻戸よ
り西さまに見やり給へり母屋の柱にそはめる人は
空蟬也今一人は東へ向きたる故に殘りなくみゆ西
の御方をいへり東よりみれは母屋の柱かくれにゐ
たるは西へ向ひたれはうしろはかりみゆへし西は
奥の方なれは向ふ方をとりて奥の人とは云也西の
御方は奥にゐ侍れとあらはにみゆるははしのかた
へむきたる故なるべし　弄奥のかたへ向へる人と
云々　一説但如何又有了簡　秘奥の人は空蟬也座敷
の奥なるべし花鳥の義不審あり　箋の義同之　聞
書空蟬は端の方なれとも居様の奥のやうにみゆる
也そはむいてゐたる故也云々
ちにこそあらめ　花ちは地也又持の心歟　弄同之
箋持の心可然歟　私云一決に及ざる義歟秘箋に同
し
こうをこそ　河劫也　秘一劫二劫の劫の字おひやかす
とよめり箋曰此義叶へりせめあひなとの時手一つ
をのかれん爲に他所へ打おひやかして石をくつろ
くる事あるを云也
いて此たひはまけにけり　秘軒端荻の詞也　いては
詞をおこす也　箋軒端荻のまけなり此前は勝とみ
ゆ
すみの所々　箋曰いまたかたまらぬ角々に手を入て
みんと也
およひをかゝめてとをはたみそよそ　河十廿卅四十
也請君屈一指數（白氏文集）
いよのゆのゆけた　奥入いよの湯のゆけたはいくつ
いさしらすかそへすよます君そしるらん　河いよ

のゆのゆけたはいくついさしらすやかそへすやか
そへすよますそよや君そしるらんや　雑藝伊與湯
温泉記曰云々略之豫州あを島の浦の湖中に有湯の
まはりけたの形也なみ七十七段也風土記けたの數
五百三十九歟云々素舜説　花六花集に古歌とて出せ
りいよの湯のゆけたの數は左八つ右九中は十六す
へて三十三有と云り雑藝歌にはかそへすよますと
うたへり又素舜か説にはゆけたの數五百卅九とい
へり是等の説に相違せり可尋決之又伊豫介任にあ
る時分也　おもしろくかき侍る物ならし或説伊豫
國あをの渡に山より海中へ出たる温泉あり其湯に
桁をわたしたる也たとへはしけくおほかるへき事
也十月ことに神事あり神人うたふ事あり歌に云い
よのゆのゆけたはいくつえそしらぬ左九つ右八つ
中は十六やれがとうとゝくりかへしうたひて酒宴
以下さま〳〵の事ありと云々箋河花の義皆これを
のす軒端萩目算の様體其人に不似合なり所々のも
くさん分明過たり譬は伊豫の湯のゆけたにひとし
きとなりかそへすよますと雑藝歌にはいへるをこ
れはかそへもしるべきとなり

すこし品おくれたり　箋曰髙のさまは空蟬にまさり
様にて只もてなしからの品くたれり人の教肝心の
詞なり　秘かやうのかたのはやりかなるさまをあ
らためたきと也
たとしへなく　弄空蟬の體也秘箋同之
めをしつとつけたれと　空蟬は桂かくれに口おほひ
なとしたるさまあらはにみゆへくもあらねと源の
つと心をつけ給ふ故に自然そはめにはつれなとの
みゆると也
めすこしはれたる　河目のと腫たる様也次の詞にね
ひれてと有　一説云晴て歟額高き心歟云々此義あ
やまれり　弄腫たる様なり一注額高にはれ〳〵とし
たるさまと云々尤可然歟　秘晴たる也額高なるな
り又は目の上のあつきを云也此義可然云々　箋曰
両義の内めはれたる心を用へしと云々
はなゝともねひれて　弄鼻なともたかゝらぬにや秘
同之　箋曰漢高祖を陸イ降準とて鼻高也とほめたり注
曰鼻高脩直といへり鼻高ならぬはほめぬかたち也
總別うつせみはかたちすくれぬ人なり　聞書ねひ
れは鼻のひきゝ體歟ねひれは寝臥の心也云々

いひたつれは　弄空蟬はよからぬかたちなれと進退
なとのもてなしによく見ゆるとなり是又人のをし
へなり　秘同之
もてつけて　箋品定にかたちをはさらにもいはすと
いへる所也只人は用意心さまとみえたり
此まされる人よりは　花西の御方の事也　打みる所
はまされるやう也　秘かたちは空蟬よりはまされ
ると也　弄見花　箋曰まされるかたちのおとれる
所是を思ふべし　・
にきはゝしく　弄軒端荻の事也　秘同之
そほるれは　河たはふれたる也　俊成卿女の說ほこ
りたる心也　箋の義河におなし一說をそるゝ也
さるかたに　是も又一かゝり有と源氏の思ひ給ふ也
まめならぬ　箋開書草子地なり源の實ならぬ御心に
は是も御らんしすてかたかるへしとなり源の心也
見給ふかきりの人は　源氏にみえしたかふ人は大略
引つくろひたるをのみ見給へりかやうにうちとけ
たる人をかいまみなとし給ふ事はなき程に今此有
樣を珍らしく見給ふなり箋同之
かいまみなとは　河覗其私屏日本紀　垣間見萬葉　間伊勢物語

眞名本にみゆ　伊勢物語云其さとにいとなまめいたる女は
らから住けり此男かいまみてけりと云垣のひまよ
り見たる心也　空蟬軒端荻の爲にはいとほしき事
と源の我なから思ひ給ふなり
いとほしなから　開書にかやうに源のくはしくかい
まみ給ふ事也
小君出くる心ちすれは　秘小君か出くる氣色のすれ
は立のき給ふ也
わた殿の戸くちに　箋曰最前より其儘此所に佇立し
給ふよしを小君に見せ給ふ也　秘同之
いとかたしけなしと　秘小君の心也　箋曰聊爾の御
座所を小君の心に恐れ思ふ也
れいならぬ人侍りて　花西の御方をいふ小君か詞也
箋いつもなき事のありてにくさうなる由なり
さてこよひもや　源の詞なり
なとてか　小君の詞也なとてかと何を切てみるべし
あなたにかへり侍りなは　軒端荻の歸りたらはと也
さもなひかしつへきに　箋曰源の心に小君か申やう
然るへければ定て空蟬も納得そと推し給ふ也
物の心は得つへきに　小君をさなけれともさやうの

所の分別もあれは聊爾なる事にてはあらしと思ひ
給ふ也是も源の心を察してかける詞也
わか君はいつくに　花こたちの詞也　秘小君を官女
のいふ詞也　聞書に若君と讀但我君の心歟云々
此みかうしは　小君の出入の所なり
しつまりぬ也　箋曰各寢定りたる也　秘しつまりぬ
也いてさらはたはかれとの給とつゝけて源の詞也
此子もいもうとの心は　前の小君の申樣にて源は内
内容蟬にいひ合せたる歟とおほし召也されとも空
蟬の心は普通にあらす仍いひ合すべき樣もなき也
只引入奉らんと小君もたくむはかり也ととわる也
秘此子もは小君也今をよき時分と思ふとなり云々
箋の義別義なし
紀の守のいもうとも　軒端荻もこなたに有かのそか
せよと源の小君にの給ふなり
いかてかさは侍らん　小君の詞也いかてかさやうに
のそかれ侍らんといふ也
さかし　源の詞也さやうにあらんと也尤と小君への
給ふ御返答也
されともと　源の心也　箋曰よくかいまみせしもの

をとおかしく思ひ給ふ也されともみたるとはの給
はぬ也用捨也
こたみはつま戸を　河今度は也　日本紀の點なり
うつほかけらふの日記にも如此事ある也假名のか
き樣也又此たひともあり前にはかうし此度は妻戸
より入なり
此さうしくちに丸はねたらん風吹とほせ　河六帖風吹
と人にはいひて戸はさゝしあけんと君にいひてし
物を　箋曰涼しく吹ぬべき樣にみせて下心は源を
道引申さんとのたくみ也
たゝみひろけて　弄屛風にや次の詞にみゆ　秘用之
箋曰屛風也たゝみよせて人有かたに立る也源を道
引ん爲也
戸はなちつるわらはへも　花戸のかけかねをはなち
つる童也
そなたに入て　東のひさしに寢たる人々の方へ行て
ぬる也
とはかりそらねして　聞書云小君の寢入たる樣して
居たる也
火あかきかたに　箋聞書云前にたゝみひろけたると

は只今いへることく火あかくて人の見る方へ小君のたてなほしたる也
やをらいれ奉る　秘やをらの詞は閑に忍ひやかなる心なるべし奥の詞にやをらおき出てと有此巻に此詞多し
いかにそをこかまし　秘おほつかなく思ひ給ふ源氏の御心用ひ思ひやりふかきなり
ひきあけて　箋聞書に心は引あけて也されとも氣の字を濁てよむは俗に近し清てよむべし
やをら入給ふと　静に忍ひやかなる也前に同し　箋曰源の用意隨分忍ひ給へとも夜更て物靜なる折なれはまきるべきやうなき也
やはらかなるしも　弄優になまめかしき様人にかはるべし　秘同之　箋曰源の用意の優に物やはらかなるにかへりてそれといふ計なる也面白き詞也
女はさこそ　秘空蟬の心なり此程源にかき絶給ふをはよきとは思へとも又さすがに忘がたきよし也
心とけたるいたにねられす　河君こふる涙のかゝる
冬の夜は心とけたるいたにねられす
ひるはなかめよるはねさめかちなれは　河櫻花にほふ物から露けきはこのめも物をおもふなるべし
愚案此歌の心不叶歟謙德公集云　女歌「よるはさめひるはなかめにくらされて春はこのめもいとなかりけり　此歌始終其心同しき歟いとなくは無暇也
秘箋此歌を引り　箋聞に源の事をさすかに忘かたく色々に物思ふとなり
春ならぬこのめも　前の歌の詞をとりていへり春ならぬといひかへたる所面白し
碁うちある君　軒端荻也　箋聞書に小君のこよひ來たるを空蟬の不審に思ひて此人をとゝめて寢させたるなるべし
いまめかし　箋聞にいつもはなき事なれは今めかしくといへり
わかき人は何心なく　荻也　箋聞に是にて空蟬のあやしく思ひて用心したる心は聞えたり前に心とけたるいたにねられすといへるも此心なるべし
かゝるけはひの　秘源の忍ひ入給ふさま也　箋同之
かほをもたけたるに　秘空蟬なり
あさましくおほえて　空蟬の心也
うちきて　打着してなり

すへりいてにけり　空蟬の帳の外へはひかくれたる
也
たゝひとりふしたるを　花是までは空蟬のひとりふしたると思ひ給ふ也もぬけたるをはしり給はぬ故也
床の下にふたりはかりそ
ありしけはひよりは　秘空蟬よりはもの〳〵しきとは思ひ給ひなから軒端荻とは覺しもよらざる也箋同之
いきたなきさま　荻也前にいとよくまとろみたるべしと有　秘空蟬にはかはりたるなり
やう〳〵見あらはし給うて　秘空蟬にあらさるよしを見さため給ふなり　箋同之
心やましけれと　源の心也
人たかへとたとりて　秘人たかへのやうにはしなし給はぬ也
あやしと　軒端荻の不審たつべきとなり
ほいの人を　本意の人也空蟬をさして云也秘是程我身をうとみはてぬる心ならは今人たかへのやうにして空蟬を尋てもあはではかへりてをこかましかるべきと也
彼おかりしかりつる　秘碁うちし時見給ひしさまならはそれもにくからすおほすと也　箋秘同之
わろき御心淺さ　秘草子地也箋同之　箋開にかく覺し移るは心淺きと也
やう〳〵めさめて　荻也
いとほしきやういもなし　荻の心淺き樣なるべし
あへかにも思ひまとはす　あへかは物よわき也　秘また世をしらぬ人のさまにはあらす見えたる也
箋曰荻のさま世の中をうひ〳〵しくも思ひたとらさるなり
われともしらせしと　秘源の御爲には我としらせすしてよかるべきを軒端荻に空蟬に心さしの有にてはなきよしをしらせん爲にあらはし給ふ也空蟬の殊の外につゝましく思ふ所を思召故なり　箋源の御身一つには誰やらんの樣にて然るべけれとも空蟬の爲を覺す故に源としらせ給ふなり
ことにあらねと　事の數ならぬなり
あのつらき人　空蟬なり
ことつけ給ひしさまを　秘度々の御方違も軒端荻へ

の御心さしといひなし給なり空蟬へのうたかひをあらせしかため也　ことつけとはかこつけの心也
たとらん人は　箋云樣體にてもやかて心とき人は我身の上の事ならぬとは分別すべきなり秘同之　箋聞に分別のゆきたる人は空蟬への心さしとやかて心えんするが荻はいまた心淺き人とみえたりたとらん人とは色々にあなたこなたへ分別して見る人は推量すべき也是はうちむきてあなたこなたとたとらす源の仰らるゝまゝに心得たるなるべし
にくしとはなけれと　秘荻のさまを源の思ひ給也
猶かのうれたき　秘空蟬也うれはしき心也
あやにくに　秘とにもかくにも忘れ給はぬ也　箋心つよき故に深く思ひしみ給よし也
この人の　秘荻なり
人しりたる事よりも　秘源の軒端荻にの給詞なり　箋源の荻にいひしらせ給詞也　是は軒端荻の體に應してうちひらめにの給詞なり
身なから心にも　秘源の我身をわか身ともせぬと也　箋云眞實に御心のとゝまらぬ故に兼てかくの給ふ也

又さるへき人々も　秘親兄弟なども我にはゆるさしとの給ふ也
忘れて待給へよなと　是もうちむきたる詞也
なほなほしく　河行幸巻になほ／＼しきひとのきはこそと有猶人の心歟いかさまにもよからぬ心也蜻蛉日記云なほ／＼しき手してちらけてんかちにといへり是もきすくなる體をいへり　花なほ／＼しきは尋常なほさりにかたらふ心なるべしなほ人もよの常の人をいふなり　秘まことしくの心歟直々敷也　箋云二義共に叶はす只すくめにかさらすの給ふ也　向ひの人の興もなきに對しての給ふ應機說法也
人のおもひ侍らんことの　秘軒端荻の詞也
うらもなくいふ　箋云荻の心もちひ興もなきよし也直々敷の詞此段にてよく／＼分別すべし
なへての人に　秘源の詞也
此ちひさきうへ人　秘小君也　童殿上したる故にうへ人と云
氣色なく　源の何となくもてなしてあれと荻に敎給ふ詞也

ぬきすへしたる　河與風集云女のきぬをとりて歸り
て返すとて「あふまてのかたみとてこそとゝめけ
め涙にうかふもくつ成けり　すべしたるはすべら
かしたる也　秘空蟬のきぬ也すへしはすへらかし
たる也箋同之　私云是によりて空蟬の歌有　河此
人を空蟬の君といふ也
うしろめたう　秘心にかねていねたるさま也箋同之
心もとなう思ひつゝねたる故にやかて聞付たる也
老たるこたちの聲にて　箋云老者の寢覺いさとき物
なれは也
おとろ〳〵しく　こと〳〵しきなといふ類歟
わつらはしくて　秘小君か思ふ心也源を具し奉りて
出る故歟　箋云小君の失心する也
まろそといらふ　小君のわれそと返事する也
夜中にこはなそ　弄さかしかりて小君をさかしとい
ふ歟　私云弄の義不審歟こたちの詞也
さかしかりて　秘さかしらがりて也箋同之　功者ふ
りして也云々
とざまへく　外さまへ來る也老たるこたちの事也
いとにくゝて　秘小君か心也箋同之

あらす　秘くるしくもあらすと答る也箋同之花同し
君をおしいて　小君の源をさきへおしいたして見せ
しとする也
人のかけの　源を老たるごだちの見つけたる也
又おはするはたそ　源の影をふとみていふ也　秘此
女のたそと問て又民部のおもと成けりと自問自答
也花には少輔のおもとゝ有本のかはりめなり　箋
同之　河侍者(白氏文集)御許(新撰楽記)　從渠(淚イ)遊仙窟徒渠(泥イ)(渠は汝なり 偏)
なり　河大鏡云いふかひなき程の物にもあらすおも
と程のきはにてそ有ける云々　和泉式部か童名を
御許丸とそいひける　花老人か源氏の君をあれは
たそと問てみつから又ひとりことに少輔の御局に
てありけりとおのか同列にみあやまりたるなりた
けたかき女房なれは源氏をそれと思へる也小君か
少輔の君をときにつれてありくそと思ひたる也お
もとは御局なといふかことし唯今立ならひ給なん
とは小君か今に少輔のおもとのたけにひとしく成
給はんするといふ也
たけたちかなといふ　是までは老ごだちの詞也たけ
たちとはたけたかきをいふなり

たけたかき人の　箋秘同之　秘たけたかきとて常に人に笑るゝ人なり民部の少輔のおもとの事なり此詞草子の地歟
これをつらねて　河列也行列の心也あゆみつらねたる也　秘民部のおもとをつれてありくと思ふ也
今たゝいま　秘此民部のおもとのせいほとに只今に小君のなるへきと也常に老人のいふ事也
此戸より　小君の出る戸より老人も出る也
わひしけれと　箋小君迷惑したる也ことわり也
かくれたち給へれは　源氏君也　私源氏のたちかくれ給ふなり
此おもと　此おもとは老人也　秘源氏を民部のおもとゝおもひてかやうにいふ也
おもとこよひは　老人か源氏を少輔君と思ひてさしよりて物語する也
えたふましく　堪忍しかたきなり
いらへもきかて　花おもとの返事をも聞かてあなはらいた／＼といひていそきいぬる也秘同之
今きこえん　今又やかてなといふ心也
からうして　秘源の此すきに出給ふ也　からうしては色々きづかひ苦労したる心なり
猶かゝるありきは　秘草子地也
覺しこりぬ　孟心得べき事也　箋作者の批判なり
小君御車のしりにて　車は後の方をよせて乗る故に先に乗たる物端のかたにのるなり跡より乗る者しりの方に乗也端のかたはなかえのかたなり
ありさまの給ひて　小君にこよひのさまを源のかたり給也
をさなかりけりと　箋小君か事をの給なり
あはめ給ひて　箋あはむるは恥しむる心也　秘同之
かの人の　箋空蝉なり
いとほしうて物も聞えす　秘小君か思ふ心也箋同之源の御心中をいとほしく小君のおもふ也
いとふかうにくみ給ふべかめれは身もうく思ひはてぬ　秘源の詞なり　箋同之　私云いとふかうといふよりなり心つきなしと思ひての給と云まてつゝけて源の詞とみるべし　聞書云いとほしうてといふより身もうく思ひはてぬといふまでを小君か心中と見たる義ありいとふかうにくみとは空蝉の事を源のつらしと思ひ給から小君をもむつかしくおほ

すましきと察して身もうく思ふとなり此義如何只
　今の義然へし
いよの介におとりける　秘源の我身はいよの介には
　おとりたるよとなり
有つるこ袿をさすかに　秘さすかにの字尤面白し
あこはらうたけれと　秘空蟬のつらきふし故小君を
　も今はあはれと思ひはつましきとなり
つらきゆかりにこそ　うつ蟬のつらきゆゑにこそ始
　終え思ひはつましけれと小君の事を源のゝ給也
わひしと思ひたり　小君の心なり
さしはへたる　わさと　文にはあらぬなりさらにさ
　して只今つかはし給へき文にはあらぬ心なり
歌源うつせみの身をかへてける木のもとに猶人からのな
つかしきかな　河空蟬は殰(モヌケ)なり　文選云蟬蛻とか
　けり彼ぬきすへしたる衣によそへていへり一説に
　は打磬蟬(タケイセン)ともいへり蟬のころ磬をうつに似たる故
　なり　後拾うちはへて音を鳴くらす空蟬のむなし
　き戀もわれはするかな　花蟬のもぬけたるを身を
　かふと云人からは蟬のからによせたるなり　師説
　云萬葉第一中大兄三山歌に虚蟬毛嬬乎相格良思吉(ウツセミモツマチアヒウツラシキ)(チトメニアイテカクテ)
　云々もぬけにあらすうつくしき心なり　箋云此歌
　は蟬蛻の心なり　私云此段河花の兩義以下悉箋に
　是をいす　此師說といへるは秘抄の義なり萬葉の
　心はもぬけにあらすうつくしき心なりせもしはそ
　へ字なりうつくしむ義なり歌の心はあらはなり
ふところに引入て　秘小君かとりたるなり
かの人も　にしの御かたなり　秘箋同之
かたくにおもほしかへして　軒はの荻にさのみ御
　心のとまらぬと又うつせみへの心さしかあさくな
　ることをはゝかりてなり
人かにしめる　河人香なり
身ちかくならして　身にふれ馴る心也
小君かしこに　うつせみのかたへ行たるなり
あさましかりしにとかくまきらはしても　秘かやう
　の事はする物かまきらはすへき方もなし源もかへ
　りて小君を心をさなしと覺しめしなとすへきと空
　蟬のいさめはつかしむるなり　此段いさゝか聞ま
　かふやうなる所ありあさましかりしにとかくまき
　らはしてもとは空蟬への御心さしなから此たひは
　軒はの荻にあひ給へりされはうつせみへの御心さ

しにはあらす荻への御心さしと人のしりてもみちひきなとしたるは然へからぬ事なれは人の思はん事とかくつみさりところなきといへる歟

かつはいかに　小君のかやうの事を一旦は源のうれしくおほすとも却てみおとし給ふへき事そとなり小君をうつ蟬のはつかしむるなり

ひたりみきにくるしく　花源氏君は此事ゆゑにうらみ給へりあね君も又はつかしめ給ふ小君か左右にくるしう思へるなり秘同之

さすかにとりて　うつせみの心をかける所いく度も此心なり心にはふかく源を思ひ奉りなからなひき奉らぬ所か貞女なり

いせをのあまのしほなれてやなとおもふもたゝならす　河「はつかしやいせをの海士のぬれ衣しほなれたりと人やみるらん「すゝか山いせをのあまのすて衣しほなれけりと人やみるらん　これは後撰に伊尹朝臣の女のもとにきぬをおきてとりにつかはすとてとあり　秘はつかしやいせをのあまの歌相叶歟

思ひみたれたり　うつせみの心中なり

にしの君も　荻なり

又しる人もなき事なれは　河古今「枕より又しる人もなき戀を涙せきあへすもらしつるかな　私云詞はかりをとれり

小君のわたりありくに　秘軒はの荻のかなり此小君して源のおとつれし給ふへき由契りおかせ給しにさもなきを思ふなり

あさましと思ひうるかたもなくて　荻の心中なり

されたる心に　秘草子地なり　されはみたる心にて源の御音つれを待なるへし

つれなき人も　秘空蟬なり

あさはかにもあらぬ　源のさまをうつ蟬のあさからぬと思ふなり　河あさくはかなき心歟　あさはかならぬはあさはかならすはかなからぬ心なり引歌二首肯之歌に及はさるか

ありしなからの我身ならはととりかへす物ならねと　河奥入「とりかへす物にもかなや世中をありしなからの我身と思はん　秘空蟬の心中始終此歌の心あり我身よすかさたまらぬ身にてあるならはとおもふなり貞節の心ふかくしてとりかへされぬ身の

かなしきとなり
この御たゝうかみの　前に源のうつ蟬の身をかへて
けるとありしそはにかきそへたるなり
かたつかたに　かたはらなとおなし
空蟬
うつせみの羽におく露のこかくれてしのひ〳〵にぬ
るゝ袖かな　₌義なし此歌伊勢集の歌なり　河海に
くはしくしるされ侍り
河此歌伊勢集にありかくのこと古今おほし
伊勢物語にもはしめてよみたるやうにかきて萬葉
歌あまたありあさか山かけさへみゆるの歌等なり
人わかうへに露そおく成あまの川の歌の下句も赤
人歌にこの夕へふりくる雨はひこほしのとわたる
舟のかいのしつくかの歌一同なり　隱曩物語にた
き物のめならふ人のあまたあれは忘られぬらん數
ならぬ身はこれも古今の花かたみの歌に五文字の
外はかはらす又此物語の過にしもけふわかるゝも
二道のうたも上句齋宮女御集にありかくのことき
の例あけてかそふへからす　箋云此歌全篇伊勢集
にあり仍河海に種々の了簡をくはへらる　是は空
蟬の贈答にはあらす伊勢集の古歌をよく此時相應

したれは御たゝう紙のはしに書そへたるなりこゝ
に深意あり伊勢は木かくれて露にぬれもはてぬと
いふ心なるを此空蟬の心には我身のかくれて逢奉
らぬを木がくれと定てそれ故に人しれず袖をぬら
すとなり九禪抄首書云伊勢物語にみちのくの忍ふ
もちすり誰ゆへにといへる歌の類なりとあり

岷江入楚第四　夕顔

夕顔　並二

河 三位中將女折夕顔花置扇送光源氏云歌云詞濟々焉

花 源氏十六歳の夏より十月までの事見えたりこれも竪の並なり以歌並詞爲卷名也　秘同之

弄 竪のならひなり空蟬卷の同頃よりの事あり　見

花鳥　箋云當流の義夕顔上の列傳なり　箋聞書柏木の卷に五十八を十とりすてたるといふよりくりあけて源のとしかくのことくなり

六條わたりの御しのひありきの頃　河　六條御息所
秋好中宮母儀前坊御息所　在所也　中將御息所貞信公女前坊御息所　後に重明親王の北方になる此例歟齋宮女御御母大臣女以下一同なり　伊勢物語云むかし左のおほいまうち君いまそかりけりかも川のほとりに六條わたりに家をいとおもしろく作りて住給ひける　花　六條御息所の事はしめていひ出せり　秘　文彦太子重明親王の事を前證にひけり帚木の卷にしのひ〳〵の御方たかへ所とかけり此語より出たり　箋云六條御息所へ源氏密通の事はしめて書あらはすといへとも此以前より此事ありとしるへし此物語の筆法なり又さきにかくへき事をはかねて序をかくたり帚木にしのひ〳〵の御方たかへ所といへる是なり

大臣　六條御息所前坊御息所秋好中宮母　此前坊桐壺の御門の御弟源氏の御叔父也

貞信公　中將御息所貴子也前坊保明親王御息所也保明は文彦太子也

後に重明親王の北方になる此例歟

醍醐帝─┬─保明親王前坊諡號文彦太子─慶賴王
　　　　└─重明親王─齋宮女御徽子女王なり

─桐壺帝───光源氏

─前坊────┬─秋好中宮母六條御息所大臣女なり

─桃園式部卿宮　　　梓齋院

─三宮攝政北方　葵上

此物語に前坊をたてたる仔細は延喜の御代に春宮兩度相違これによつてなり前坊文彦太子早世其御子慶賴王あひつきて東宮になり給おなしく早世仍朱雀院立坊なり延喜の時代をさすへきために前坊の號あり以上箋の義なり　私云前坊とは文彦太子なとのことく春宮にて位につき給はぬ以前早世し給ひ或は小一條院は春宮の位を辭し給ふ是皆前坊なり但小一條院は後に院號ありき

内より詣て給　箋聞内裏より六條へ直におはする也

大貳のめのとの　河　源氏の御めのとなり　惟光か母也　乳母職員令省部毗奈耶曰名師子胤其父以兒授大イ八乳母華嚴經云檀波羅密爲乳母尸羅波羅密爲乳母文字集略曰嬭乃禮反亦作㚷辨色立成云乳母和名女能度知於母乳人母なり　東云傳嬭　唐式云皇子皇孫乳母　史記傳云　武帝少時東武侯母掌養帝々壯時號之曰大乳母　日本紀神代下曰天孫取婦人爲母乳湯母及飯嚼湯坐矣凡諸神部備行以奉養焉于時權用

いきたかなりける夜かな　花いはねの心なりいもね
ぬもねぬねぬなり　きたなきは人のねこき心なり
つよく寝られたるをいふなり　秘よくいねたる物
かなとなり　箋
御車ひきいてよ　源の車なり御供の人のいふなり
かみもいてきて　紀伊守なり御供の衆をしつむる也
女なとの御かたゝかへこそ　きの守か詞なり源の御
歸をしつかにと下知するなり箋云こそと書きたり
又上の段にも猶あさましきにうつゝともおほえす
こそ是も同し　私云女なとの御方違こそ夜ふかく
いそき給はめ何とてこれは夜ふかくいそかせ給ふ
へきそといふなりいひ殘したるなり
君は又かやうのついて　源の心なり
さしはへては　河うちはへてなり　秘わさとの心な
り　箋云心安き道しるべのなきよしなり又態とは
いかゝなり
おくの中將も　中將のまきれあれはおくのといへり
前に曉に御むかへに物せよとの給とあり
いかてかきこゆへき　聞書文なとをもいかて何とし
てかつたふへきなり

よにしらぬ御心のつらさそ　空蟬のつらさ也秘　か
やうにつれなき事は又たくひ有ましきと也此中將
にはさといひきかせ給ふ也
あはれさも　又源の心には一段深切に思ふ事なり
めつらかなるためし　箋かくのことく源の空蟬にの
給ひていたつらふしなる事を中將にしらせんため
の御詞なり
なまめきたり　源の體なり　箋云媚なり女郎花なと
にいへる詞なり前に木枯の女のなまめきかはすに
にくゝなるといへるは生の字なり
鳥もしば〳〵なくに心あはたゝしくて　河數鳴あま
たゝひなくなりしはなくとも云周章アハタヽシ　秘
前に鳥も啼ぬといひてこゝに鳥もしは〳〵なくと
いへる面白し　前に鳥も鳴ぬとあり程もなく次第
にあくる體なり
源つれなきをうらみもはてぬしのゝめにとりあへぬま
ておとろかすらん　弄つれなきとよみたまへるは
中將のきくをつゝみてなり云々　またたとひあひ
たりともつれなかりしさまをうらみてもいふへき
にやうらみもはてぬなとある詞にこもるへきなり

細注とりあへぬまては鳥をそへていへるなりつれなきをうらみもはてぬとはこよひの契を實なしと中將にきかせんとてよみ給へるなり　秘實事なきよしなりとりあへぬの詞おもしろし此時實事の有無説々ありたとへ此時實事ありとても此以後源氏にあひ奉らぬ所にて貞節比類なきものなり　箋つれなきは實事なきよしなり鳥ゆゑ別のはやくて心さしをもとけぬなり夜明すは自然心さしをとくる事ありもやせんとなり此故に鳥をうらむるなり此時實事の有無河にはうたかふなり　花にもうたかひを殘されたり然るへからす貞女の段は未にて見えたり

女身のありさまを思ふに　空蟬の心なり

めてたき御もてなしも　源のやうたいのめてたきも何とも心にいらぬなり

つねはいとすく〳〵しう　秘平生は我身に似あはぬと伊豫介を思ふなり

夢にや見ゆらんと　秘伊豫介か夢にや今夜の體の見ゆらんとそらおそろしく思ふなり

空蟬返歌

身のうさをなけくにあかて明る夜はとりかさねてそねもなかれける　細注とりかさねてもは鳥をよせたり　秘身のうさをなけくに短夜なとは滿足せぬなり　箋云身のうき程を歎きたらすして明ぬる夜のさまなりとりかさねてとは身の落ふれて品さたまれる宿世のくちをしき是一つなり又源の思ひかけすちかつき給ふを程しらぬやうに心こはきさまを見え奉る心の外なる事是一つなり　私云箋の義實事のなきに落着するなり

こと〳〵くあかし　河事なりわざとかましき心也　弄あやなくに明行けしきなり　秘こと〳〵くあかくなるなり　箋云こと〳〵くなり盡なり

へたつるせきのと見えたり　河古奥入あふ坂の名をはたのみてこしかともへたつる關のつらくも有哉
同ひこ星に戀はまさりぬ天の川へたつる關をいまはやめてよ　秘あふ坂の名をはの歌は實なきかこつけによくかなへり又彦星の歌は障子をへたてゝの歌なれはこゝによく叶へり兩首ともに可用なり細注に逢坂の名をはの歌實なきよしのかこつけによく叶へる引歌也云々　彦ほしの歌をはのせす箋秘の義同し　私この二首の內奧入細注なとには

ひこほしのうたをはかきのせす相坂のうたはかり
なり
御なほしなと　源のおき給ひてのさまなり
みなみのかうらん　東南はおもてむきなり西北のかたに女房ともはつとひたるなるへし
にしおもてのかうし　秘　よひに源の立よりて物かたりなとせしを聞給ひしかた也　私云空蟬は北のかたに住へし西おもてには紀伊守の女なとの住方也
そゝきあけて　河　そゝき　勘物文今案戰の字をそゝめくともそよくともよめりそゝきあけてはそゝめきあけてなり　箋曰そゝめきなり　但そゝのかしあへる歟云々
こさうしのかみより　弄　障子の上より見るにやと云云　一注如何　秘　かみは上なりまへのは紙より火の影のすく也　箋云上の段は紙なり火のかけすくとなり云々　箋の義不審かうしに障子の有へき事如何　聞書にかみは上なり云々
すき心とも　内よりのそく女房の心なり
月は有明にて光をさまれる物から影さやかに見えて
箋云曉月の明るきはに空は月の光をさまりて地に影の分明なる物なり影と光との差別をよく書き分たりこの後のあくるさかひを明ほのといふなり中々の字眼なり天地のくもりもなく明かなる月こそ興あるへきをこの曉の月いはん方なけれは中々といふなり　秘の義大略同し　祇注月の光をさまるとはやう〳〵明かたちかうなれは月の光のほのかに成行に猶影はさやかに見えたる折ふしなるへし中々おかしきとは夜半の月なとよりもかけうすき曉月の面白心なり源氏君の立わかれたまふ折節なり此下の詞へかけてよく心をつけて見侍るへき物なり花に朝日の出て月の光のきゆるをいふと云々秘箋等に用ふへからすとあり　弄　あしたの月のさま妙なりたゝ人から面白し作（本ノマヽ）する人なと殊にかくのことく成へし
なに心なきそらのけしきも　秘　此時の源の心になりて此段は見るへきなり餘情かぎりなきものなり
箋云無心の天地なれとも見る人の心にありうれふる時はうれひよろこふ時は悦ありこと〳〵く一心よりおこる所作也
人しれぬ御心　源の心中なり

ことつてやらん　文なとのつてさへなきなりこれより小君をめしよせんとの御心もいてくるなるへしかへりみかちにて　引歌にも及はさる歟

殿にかへり給うても　箋葵上の左大臣の亭なり　秘かやうの御しのひありきのかへさは二條院なりと云説あれともあやまりなり　末の詞にも見えたり

　私云今夜の義は御しのひありきといふへきにあらす方違の序にうつせみにあひたまふは不慮のことなり

かの人の思ふらん心のうち　空蟬の思ひみたれしさまをおほしめしやるなり

すくれたることは　源の心空蟬はかたちなとはすくれねとも心たてをほめたる人なり

中のしなかな　品さために受領の女なとをは中の品と馬頭の申しゝをおほして源のおとしつけて中の品哉との給なり

くまなくみあつめたる　馬頭の事を源のおほし出るなりくまなくとは殘る所もなくくま〳〵まて見あつめたると云なり

このほとは大殿にのみ　秘此詞にて前に殿にかへり給ふと有は二條院にあらさる事みえたり　箋同之

かきたえて思ふらんことの　源の空蟬を思ひやり給ふなり

ありし中納言の子は　空蟬の弟小君なり　花前には右衛門督といひこゝには中納言といへり權中納言兼右衛門督たりし故なり紀守をめして源のの給ふ詞也

うへにも　秘源のしたてゝ内へも參らせんとなり前に殿上なともすか〳〵しくも思召ぬよしきの守の申せし故なり

いとかしこき　きの守の詞なりいとかたしけなきよしなり

あねなる人に　空蟬に申きかせんとなり

むねつふれて　源の御心にかゝる故なり

そのあね君は朝臣のおとうとやもたる　秘源の詞紀の守をさして朝臣との給なり前にまうとゝありし同心なりきの守の弟を空蟬のうみたるかと問給ふなり

さも侍らす　きの守の詞

おやのおきてに　うつせみの父は宮つかへにもと思

ひしにさもなくて受領の妻になる事心ゆかぬとなり

あはれのことや　源の詞也

けしうは侍らさるへし　きの守詞也もてはなれてうとうとしき故に侍らさるへしとおしはかりて申也

世のたとひにて　河繼母の間の事なり　請君掇蜂君莫掇變君父子成豺狼白氏文集　この外和漢の例おほし　聞書云繼母の繼子に身に蜂の取つきたるをとりてくれよといひて父に繼子のわれをおかさんとしたるといひて失たる古事のあるなり　花まゝ子はまゝ母にむつひぬことゝ世のたとへにまうすと也箋　同之　秘繼母にちかつかぬといふたとへあれはとなり

この子ゐてまゐれり　紀守の小君をつれてまゐるなり

あて人　前に注すほめたる詞なりかたちなとはあね君もすくれぬよし見えたり

めしいれて　源の御そはちかくめしまつはすなり

いもうとの君　うつ蟬なり

さるへきことゝ葉(はイ)　小君の體なりはつかしけにしつまりたる故にうつ蟬の事を源の仰いたされにくきとなり

されといとよく　うちいてにくけれとも源のかくいひなし給ふなりうつせみへの中たちにせんためにかやうにめしよせたるなり

かゝる事こそ　空蟬と源とはもとよりいひかはしたる中そと小君にいひなし給なり　花源氏の此小君に姉君はもとみし人のよしをしらせ給ふさてはかかることにて有たるよと思の外におもへる也

ほの心うるも　小君の心也

ふかくしもたとらす　小君のさすかをさなき故にとかくの分別にわたらすまことゝ思ひたるなり

御ふみもてきたれは　小君の源の文をうつ蟬のかたへもてゆくなり

女あさましきに　空蟬の體此子をさへはつかしく思ふとなり

おもかくし　河面隱なり正體になくかほかくしたる體なり

いとおほくて　秘詞のおほきなり

源見しゆめをふあふよありやど歎くまにめさへあはて

そころもへにける　箋云うれしきゆめの行末の又思ひあはする夜やあるとまつ心いられにかへりてまとろまれぬよしなり
ぬる夜なけれは　私云引歌の心あらはなり　河奥入
戀しさを何につけてかなくさまん夢にも見えすぬる夜なけれは秘同
めもおよはぬ御かきさまもめもきりふたかりて　源の風情をつくしたる艶書のさまも見られぬなり目もきりてはきりふたかりたる心なりうちきらしなといへる類なり
心えぬすくせ　空蟬の心中也　弄に受領の妻にさたまれること又源のかやうにの給ふ事なとをおもふ也　秘同之　箋には受領の品に定れる事とはかり注せり　私云受領の妻になる程なるつたなき宿世かと思へは又源氏にかやうに思ひかけられ奉る事なりこれ又ぬしさたまらぬさきならはなひき奉るへけれ共今なひき奉らは貞女の法にそむけり思ふやうならぬをかくいへるなり
小君めしたれは　源よりめすなりうつ蟬の返事を心もとなくおほすゆゑなり

御かへりこふ　小君のうつ蟬に返事をこふなり
かゝる御ふみ　空蟬の詞也
うち笑みて　小君のさまなり
たかふへくも　小君の詞也
心やましく　秘空蟬の心小君に殘りなく源の仰きかせられしよとつらく思ひたてまつるなり
いておよすけたる　空蟬の詞おとなかましき事はいはぬ物と云なり
さはなまゐり給ひそ　さらはな參り給ひそとなり
めすにはいかてか　秘小君詞也
つゐしようしありけは　河追從也きの守の體なり
君めしよせて　源の小君をめしよするなり昨日參らさりし事をの給ふなり
かほうちあかめて　小君の體也
いつらとの給ふ　源のうつ蟬の返事はとの給なり
しか〳〵と　小君の空蟬の申されし樣を申なり
いふかひなの事や　源の詞なり
又も給へり　源の文を又給へりとなり
あこはしらしな　秘吾子日本紀　我子也あとわと五音相通なり　秘小君をさしてなり源の詞なり

そのいよのおきなよりは　箋曰小君に源の計略して申きかせらるゝなり　秘同之　私云前にかつ〳〵申きかせ給ひしなり今又ねんころにつくり事をいひきかせ給ふなり

たのもしけなくくひほそしとて　祇注いよの翁よりはさきに見し人そとは空蟬の伊豫介か妻にならぬさきにわかあひ給ひし人そとさもなき事を小君にの給ふ也　くひほそしとはひわつなる事なりふつつかとは下すしくふとりなとしたるさまなり我をはひはつに物けなしとてふつゝかなるうしろみの伊豫介になれて我をあなつりぬると小君にかなしく思はせんとての給へるなるへし　秘くひほそしとは物のかひなきと云心なり

わか子にてをあれよ　小君は源氏のひいきにてあれとなり

たのもし人　伊豫介をいふ年よりたれは行さき短からんとの給なり

さもやありけん　小君の源のの給ふ事をさやありけんとなり

おかしとおほす　源の心也

わかみ〳〵しけ殿　源の御匣殿なり装束調する所なり河御匣殿別當内藏寮外御服なと裁縫する所なり順德院御抄　庶人も装束調する所をいふなり

されとこの子もいとをさなし　小君の事をいふなり

心より外にちりもせは　箋云艶書のゆきゝはあるときこえたりそれをふくませたり

とりそへん身のおほえ　箋曰引つゝけて見るへしめてたき事も我身からこそ　箋云萬事にわたる語なりいかに過分の義にても身に相應せぬ事はいかゝとなり

ほのかなりし御けはひありさま　秘有つる夜の源の有さまを心にわすれかたき也　うつせみの心中也

おもひかへすなりけり　草子地なり是又貞節のすくれたるなり

君はおほしをこたる時のまもなく　源の空蟬を忘れ給はぬなり

ひんなきふるまひ　源の用捨なり便なきはつきもなき樣の心なり

れいのうちに日かすへ給ひ　前に内にのみさふらひようし給とあり

さるへきかたのいみ　秘又御かたたかへなりさるへきとは中川の宿へおはしてよき方のやうにしておはするなり假に方違を思ひ出したる樣にしてなり
まねして　眞似とかけると也
やり水のめいほく　河面目なり
女もさる御せうそこ　小君してひるより空蟬へ仰つかはされたるなり
おほしたはかりつらん　秘女も更に御僞とは思ねとも也是より空蟬の心なり
まちつけきこえさせん事のまはゆけれは　うつ蟬の源を待つけ又あひ奉らんことのかゝはゆきなり
小君かいてゝいぬる　小君の御前へ出たる間にしらせすしてうつせみのはひかくるゝなり
かたはらいたし　花はつかしき事を云此卷のはしめにもあり
中將といひしかつほね　前に出し中將の君なるへし
さる心して　源の心して人なとをもはやくしつめてなり
からうしてたとりきたり　小君のやう〳〵として尋あひたるなり
いとあさましくつらしと　小君の思ふ心なり
かくけしからぬ心　空蟬の小君にいふ詞なり
いひおとして人々さけす　小君をいひおとして又源へまうすへきさまを空蟬のいひをしふるなり　河不遠サケズ
あやしとたれも〳〵　人々の不審すへきとなり
いひはなちて　空蟬の堅固にいひはなつなり
心のうちには　空蟬の心中也　此段も又ありしなからの我身と思はんの歌の心あり
いかに程しらぬやうに　人にこそよれ源氏なとへわか是程つれなくあひしらひ奉る事は身の程をしらぬ樣なり　心のうちにもなひき奉らぬにはあらねともぬしさたまりたるうへの貞心はかりにかくのことしとなり
とてもかくても　箋云女の性にはためしすくなかるへし殊勝の貞心なり　秘女の思ひとりたる心殊勝なりよくもあしくも一たひ伊豫介の妻になりてはいかなる事にも心をはうつすましきとなり弄同
むしんに心つきなく　河無心也とても品さたまりた

る身になる宿世からはいよ〳〵心つきなくおほす
とてもくるしからぬ事と思ひはへるなり
君はいかに　源の小君にいかにいひなすそと心もと
なく思ふなり
をさなきを　小君なり
ふようなるよしを　秘不用也小君か事を不用となり
あさましく　源の詞なり
御けしきなり　源の御けしきをいとほしく小君の思
ふなり
とはかり　しはらくなり又所によるへし
うめきて　嘆息のこゑなり源の體なり
源はゝきゝの心をしらてその原の道にあやなくまとひ
ぬるかな　河箒木の事先達色々に釋せり但大都は同
し事歟　秘はゝき木の事說々有只よそよりみれは
ありと見えて立よれはなきと也こゝへ來りても逢
給はぬは曲なきとなり　箋云箒木事よ所めにはあ
りと思ひて尋ねよれは見うしなふといひならはせ
りそれを見失ふ物ともたとりしらて尋ね來りたる
事の心あさゝよとなり　花に此歌は源氏のひとり
こち給ふなりさてきこえんかたこそなけれと小君

にかたりたまふなりと　この義しかるへからす云
云　花箒木は空蟬の君にたとへたり有とはみれと（えてイ）
あはぬゆゑなり　河そのはらやふせやに生る箒木
のありとはみれとあはぬ君哉　能因歌枕云はゝき
きにする（にたるイ）木の森の中にあるが下のしけりて遠くし
てみれは見ゆるか近くよりてみれは見えぬを云也
顯昭云信濃國その原ふせやと云所に森ありその森
によ所にてみれは箒に似たる木の末のあるを立よ
りてみれはその木も見えすとなん申つたへたるは
はき木とは庭はく木はゝき也家成卿家の歌合に藤
原爲忠（昭イ）歌基俊判の詞云昔風土記と申ふみ見侍りし
にこそ此箒木の山は大略見え侍しかされとし久
くまかり成てはか〳〵しくも覺え侍らす件の木は
信濃美濃兩國の境その原ふせやと云所にある木也
遠くてみれははゝきを立たるやうにて近くてみれ
はそれに似たる木もなししかれはありとはみれと
あらぬ物にたとへ侍と云々一說云杜の木の中には
はきゝ一本ましれり云々承曆歌合に師賢箒木の木
末やいつこおほ束なみなその原は紅葉しにけり此
心也　經信卿說（記イ）云此歌本入權辨伯耆本歌不快事也

皆以云改不快難下知所選而後俊頼以此歌入金葉集如何綺語抄云帚木に二の説有一には帚木のあゐる森のある也其森いとしけくて森の中にはゝき木生たるなりそれを遠くてみれは有様にて杜の下に行て見れは木しけりて見えぬ也一には帚に似たる木の其森にある也それを遠くてみるにはあるやうにてちかくよりてみれはうするなりされはかくよめり是はいとあさましありかたく非也　無名抄云此歌の心たしかにかきたる物なし信濃國にその原ふせやと云所あるにそこに杜のあるをよ所にてみれは庭はゝ帚に似たる木の梢の見ゆるか近くよりてみれはうせて皆常盤木にてなん見ゆると言傳へたるを此頃見たる人にとへはさる木も見えすと申昔こそさやうに見えけめ此頃は帚と見ゆる木の見えはこそ近くよりてもかくれめと申此事也或説には彼杜に帚木に似たる木有よそにてはゝき木かと見えて近くよりてはあらぬ木也と云り或又作帚木は杜の梢の最頂にある物也是を森の下にゆきてみれは木茂りて見えす遠くては見ゆる也此説を先達被用と云々　奥義抄に引後拾遺ゆかはこそあはすもあらめ帚木の有とはかりは音信よかし　令勘國史云仁明天皇承和二年六月勅如聞東海東山兩道河津之處或渡舟數少或橋梁不備由是貢調擔夫來集河邊累日經旬不得利涉宜每河加增渡舟二艘其價直者須正稅又造浮橋令得通行及建布施屋備于橋寄進作料吉用救急稻云々陽成天皇元慶四年云弘仁十二年國分寺尼法光爲救百姓濟渡之難於越後國古志郡渡戸濱建布施屋施墾田四十餘町渡船二艘令往還之人得其穩便而年代積久無人勞濟屋破損田疇荒廢望請被宛越後國俘囚人永令預守云々　案之ふせやはその原にかきるへからす所々に是をたつる歟信濃國にはその原にたてけるにや俊頼歌に「山田もる木曾のふせやに風ふけはあせつたひしてうつらをとなふと云り岐岨そのはら相近き歟たとへは谷のふせやしつかふせや皆同物歟或說云信濃には穴をほりてふみ板のかた〳〵をは土にうつみてかた〳〵に口をあけてそれよりおりのほる雪のふかきをりの料なりかれをふせやと號すと云々私云此卷の題號たる聞事なかけれとも是をのす

きこえんかたこそなけれ　源の詞なりいはんやうも

なきつれなきわさかなとかこち給へるなり
女もさすかに　箋云さすかにといへる字眼なり
返歌空蟬
数ならぬふせやにおふる名のうさにあるにもあらす
きゆるはゝき木　花 ふせやはいやしき屋なり故に数
ならぬとよめりはゝきゝはちかくよりてみれはう
するをきゆるとはよめりこれも女のひとりことな
りきこえたりといふは人にいはねともひとりこと
にいふをもそはなる人はおのつからきくゆゑなり
弄 ふせやはいやしきこゝろなり卑下の心はへな
り兩首よみかはし給ふと見ゆおの／＼獨こちたゝ
と云義あれと同しくはゝき木をよめるは返しとみ
ゆ　秘 弄の義に同し下の心ははやよすかさたまり
たるはあるにもあらすと云なり　此兩首花鳥には
各獨ことゝ云々ひとりことならは同し様に箒木を
は云ましき也贈答にて有へきなりこ君ねふたくも
あらてまとひありくなと云も此御使をするなるへ
し　箋云此贈答奇特の取合也ふせ屋はいやしき家
なり我身のねさし賤しきをいへり箒木と仰せらる
るにておほしめしはしらすや信濃國のその原のふ
せやに生る名彼こそ思ひ（消イ）きゝたれとなり

人あやしと見るらんと　小君のあなたこなたありく
を人の不審せんと空蟬のくるしく思ふなり
人々はいきたなきに　又御供の人々成へし
ひと所はすゝろに　源なりすゝろは　河に無端也
人にゝぬ　秘 貞節なる人のかゝるはなきと源のおほ
すなり
猶きえす　箋云人にまけぬなり又きゆるはゝき木と
歌にはよめれとも心地はきえぬなり　聞書云空蟬
のつれなきを程よりは思ひあかれると源の思ひ給
ふなり又此卷のはしめにわりなき事に御心のとま
ると源の性をいへりこれなとは御心にとまるへき
さまなり
さはれとおほせと　河 さらはさてあれと云心なり
花同之
かしこげにときこゆ　河 恐なりかたしけなきなり小
君の詞不思議なる所へ源のおはしまさん事はかた
しけなく有ましき事となり
いとほしと思へり　小君の心中に源をおもふなり源
の御ため何とかなとは思へともかくれたる所へ入
たてまつらんことは叶はぬなり

よしふこたに　源の詞さらはよし〳〵こ君たに御そばはなれすあれとてかたはらにふさせ給へる也

うれしくてめてたしと　小君の心中なり

つれなき人よりは　源の空蟬よりも小君をあはれに思ひ給ふなり　さはあるましき事なれは中々といへる面白し

おほさるとそ　私云とそとは紫式部かわか云たる事をしらせしのためなり　此物語好色をもつていふやうなれとも人の心もちのをしへいつれの書にもかやうなるはあるましき事なり心を付て見るへき事也と云々　箋同之　花いつれの御時にかといへる發端より其外卷々の結語共とそなとゝ書とゝむる筆法引あはせて見るへきなり云々

岷江入楚第三　空蟬

十六歳　中將

源氏自中川宿歸給事
箒木卷の終の詞をうけてかきつゝけ侍り則中川にとまり給へる夜の事

同六月頃又伴小君宿中川家事

空蟬君與西御方打碁事 西御方伊豫守之女也

源氏君垣間見給事

小君引導源氏君令通空蟬君寢所脱置薄衣遁去事

源氏君人違逢西御方事 西御方號軒端荻是也

源氏取薄衣出給事

老人見源氏君誤少輔君事 將イ

源氏還二條院遺歌於空蟬君有返歌事

空蟬　並一　以歌爲卷名

河うつ蟬の身をかへてける木の下に猶人からのなつかしきかな

卷並の事

うつほの物語に第三の並春日祭又第五吹上の巻並祭の使菊の宴などゝて有又濱松の物語と云物にも並一帖有是等の例也　箋曰濱松の並には大唐日本の事を同時にならへて書也　箋云凡此物語の並の樣一偏に同時の事とも見えず横竪有歟同つゞきのことをわかてるとみゆる並も有是を竪の並と云べきにや今の空蟬巻是也されば奥入にも此巻並とあれと箒木の次也並といふべくもあらず一説にはかがやく日の宮此巻もとよりなし　並一箒木空蟬は此巻にこもる　二夕顔といへり云々玉鬘の並は横竪相ましはれり末摘花關屋蓬生は一向横の並也うつほの物語の並も横とみえたり濱松の並も唐と日本との事を同時にならべてかけり是も横なり凡並の本意は横の義たるへき也奥入も猶横の義を存する歟中院事書云尙書の篇の竪横此並の義に相似也と彼序云以舜典合於堯典益稷合於皐陶謨盤庚三篇合爲一康王之誥合於顧命等也然共是は今の並の心にはたかひたる也並比隣退方弁配是等皆ならひならふの訓あり廣韻云弁はあはせたりと讀之自餘はならひに序と讀之是も今の

並の心に聊相似歟　花並の義は先横を以て本とすうつほ濱松等の物語の如し但此物語にかきりて竪の並有べき也たとへは一巻にかくいふイ事を末を分て兩巻になせるか如し又一巻の中に横竪を兼たる有末摘花の巻は始は若紫同時の事を書て末には若紫より後の事を書る故也空蟬巻は竪の並也歌を以て名とせり　弄並に三の様有此巻は竪の並也箒木巻のつゞき也　凡並とする事河海花鳥にみえたり　弄箋の義に同し總して並の事史記本紀の外に列傳を立たるに同しかるべき歟　箋曰並に横竪の沙汰の事河海にはしめて此了簡有　源氏以前の物語の並は皆横也同時をならへて書を横と云各別の年紀有を竪と云並の本意は横なり　横竪の事天台本書玄義第一云私謂實相之法横破凡夫之四執竪破三聖之證得　箋曰横竪之説依之者歟云々　私云史記本紀世家列傳なとに准據する事桐壺巻に注し畢ぬ抑本紀は帝王の次第年紀を立て記す者也世家には家を世々にすとの義なり代を重たる人を記す此物語宇治十帖に比す八宮の事より薫君達の事までを記せり列傳は一人々々の上を記す傳記也此巻又關屋の

卷は空蟬の君の列傳也末摘花卷並生卷は常陸宮の列傳也前後の年紀の混亂したるは其人の上に用の有事をいひ出せる故なり關屋の卷の始に故院かくれさせ給ひし又のとしなといふうはさはかり也此物語は史記の面影を摸したりと心得べしさやうに心得ればむつかしき事も無也此義三光講談に如此

ねられ給はぬまゝに　花是は帚木卷の終の詞につゝけて書り中川の宿にとまり給へる夜の事也秘箋等同なり　箋曰帚木卷の末を書殘して引分書たるは空蟬の列傳と見せん爲なりさらは中川の方違の事をは皆此卷に書べきを帚木の末に書くはへたるは彼卷餘り品定なとの事はかりにてすゝみ過たる故にいろへてかける也云々　聞書云帚木の始には桐壺の末に光君と云名はといふ詞を請て光源氏名のみこと〳〵しうと書出せり此卷も前卷の末を書續くる事同類なり　秘追加帚木卷に君はとけてもねられ給はすいたつらふしとおほさるゝにと云々此語より出たるなり

我はかく人ににくまれてもならはぬを　弄源氏君好色の由みえたり　秘源氏君好色を自稱し給ふ也空蟬なとの樣につれなき人はなきと也　箋曰源氏君の我につれなき人なとはなきとの自稱にはあらす小君をはつかしめむとの了見なり

涙をさへ　小君也

いとらうたしと　源の心也　箋最勞たし也ふかく思ひいたはる心なるへしと也

てさくりのほそく　小君か空蟬君によく似たる也

あなかちにかゝつらひ　かやうにつれなきをしひてしたはんもいかゝにて眞實めさましくつらしとおほす也

れいのやうにも　箋云小君を前々のことくもあひしたしみ給はすと也まとはすは纏の字也

この子はいとほしく　小君心中也

女も　空蟬なり

なみ〳〵ならす　箋次々ならぬ也普通の人にもあらぬ貴人と云也そこをはさすか空蟬の思ひしる也

やかてつれなくて　箋空蟬の心さすか源の此まゝ御音信なからんも名殘有べし　秘空蟬のさま〳〵に思ふ心也

しひていとほしき御ふるまひ　御方違のかこつけな

ともさのみしきらんは人しるへくうたてある也
よき程にかうてとちめてん　只今あなたよりかき絕
給ふやうなるかよき時分也兎角靡き奉らん事は貞
女に背けは此儘にとちめてんはよき時分と思ふ也
たゝならす　空蟬の心中さすかにかきたえんも名殘
有也是又貞心のすくれたるなるへし　花鳥云やか
てつれなくして空蟬君の源氏になひきなびかぬ事
は知かたき事也此一段の詞なとはおほつかなき樣
也終には二條院の東の院にうつろひし事もうたか
はしきなるべし　箋曰此詞を花鳥にとかめて中川
の宿の方違は作意ニ實戀なるを實否難知の由被
注レ之是河內方の說也厩物語の與をうしなへる然
るへからす〳〵　私云かうてとちめてん云々此ま
ま御せうそこの絕なんも仔細なき也とにかくに我
身はつれなくてはてんと思ふ程に也
君は心つきなしと　源の空蟬を思ひ給ふ心也
小君にいとつらうも　又小君を源のかたらひ給ふ也
うれたくも　河慨哉　慷哉 以上日本紀
心にしもしたかはす　源の心にもまかせぬなり
たはかれと　河將計　或方便

かゝるかたにても　わつらはしなからめしまつはさ
るゝを嬉しと思ひて小君かたはかるへきよし領狀
申也
紀の守國にくたりて　紀伊國へ下る也　箋任國にお
もむくなり
女とち　河とちは共なり萬葉には思共と有友の心也
思ふとち同事也萬葉に風の共とありそれも風とと
もにといふ心也　私云紀伊守か宿のさま也
夕やみの道たと〳〵しけなる　河癸入萬四夕やみは道
たと〳〵し月待てかへれわかせこそのまにも見ん
秘箋等引歌にをよはすと云々只詞はかりを取也
わか車にて　箋網代車なるへし今の世の板輿の准據
にて女房の乘物なり
ゐて奉る　ひきゐて也將の字の心也逍遙院自筆本に
は將の字を用ひらる
この子もをさなきを　源氏の心小君のをさなきをし
るべに賴みてあやふくおほさるゝなり
えおほしのとむましかりけれは　源の小君のしるへ
あやふしとはおほしなからえおはせてはかなふま
しくおほしいらるゝ也

さりけなきすかた　聞書狩衣なるへし
人見ぬかた　外さまの方也次の間に東のつま戸と有
此卷の寢殿の指圖分明也よく心をつけてみるへし
とのゐ人なともことにみいれ　とのゐ人は番なとす
る者なりそれも此子のをさなけれはめにもたてぬ
となり
我は南の　小君の内へ入なり
こたちあらはなりと　箋秘こたちは女房達也小君の
入たる跡をさゝぬをあらはに人や見とはさんと也
なそかうあつきに　小君のとふ也あらはなりといふ
につきてなせに此かうしともはおろされたるそと
いふ也
ひるより西の御方の　花伊豫介女空蟬のまゝ子也藏
人の少將の妻になり軒端荻といひし人なり　弄に
しの御かたといふにつきて諸抄さま〳〵にいへり
彼人の家西の方にあたれるにや　聞書空蟬のゐら
るゝ方より西に家有なるへし　箋曰此家中川の宿
より西にあたれる歟云々　同聞書伊豫介家は此中
川の宿より西にあたれる也
私云只今源の忍ひより給へる宿は中川なり前に紀
伊守國に下りなとしてのとやかなるとあれは也又
はしめの方違の時西おもてにそ人々つとひゐたる
へきとあれは此軒端の荻は中川の宿の西面に住へ
し其夜に源氏のうへをさま〳〵とり〳〵に物語せ
しさまなとも軒端の荻のさまに思ひ合せられたり
是によりて西の君といへる歟空蟬はもとより東面
にすまはれたりとみゆ是にて西の君といへる義も
たかひ侍らず
碁うたせ給ふといふ　博物志堯造圍碁碁音期字亦作碁此間云五一云
舜造也晉中興書云圍碁者堯舜以教愚子也　聞書云
爰に碁の事をかき出すは源に心靜にかいまみさせ
奉らん爲の緣におもしろく取なせり又碁なと精の
入物なれは身上をもしらるゝさやうの所をもたし
なませんとの教也空蟬は碁にもとりみたさす樣體
のよき也　軒端の荻は樣體のあしきなりよく〳〵
心をつけよと也
さてむかひゐたらん　源の碁打といふを聞てみたく
思ひ給ふ也
この入つるかうし　小君のたゝきのゝしりて入ぬと
いへるかうし也格子也

仲嬬　乳母皇子爲此世取乳母養兒之緣也　箋令云親王皮子者皆給乳母 謂者内親王嫁諸王所生子者不在給限 親王三人子二人所養子年十三以上雖乳母身死不得更立替古今集作者紀乳母 陽成院御乳母 大江高綱女也　玉箋　源氏の御めのと皇子の例たらば二人あるへき歟親王のつらならば三人たるへし下のことばにはくゝむ人あまたあるやうなりしかとゝの給へり大貳のさしつきに左衛門のめのとゝてあり末つむの卷に見えたり　秘　めのとの數の事花鳥にくはし

尼になりにける　大貳のめのとの病ゆゑにあまになるなり命こひとて尼になりける其趣末のことはに見えたり

五條なる家　大貳のめのとの家六條への道なるべし

御車いるべき門　秘　つねは大門をはさしたるべし箋同之

惟光めさせて　河箋　竹取うつほ隱袋などの古物語にはおほく實名をあらはせり此物語には名字をのする事まれなりこれみつよしきよ時かたなかのふみちさた平しけつね宮の侍ばかりなり若子細ある歟就中惟光良清は揚名介申文にも此名ありかたくよしある歟　九條右丞相記云天暦十一年三月廿日着南間文範朝臣申惟光朝臣可爲所監之由其詞次第相違云々此外寛弘之頃此名字あまたあり　箋　藤原惟光 寛弘元年正月召名任常陸權介同六年三月廿日任中務少輔　平惟光 長保六年正月廿四日任左馬權介寛弘六年正月廿八日任右衛門權少尉同七年二月十六日任右近將監長和六年正月九日補藏人見權記　大貳是光 寛弘元十一七任越前權大掾　高井是光 寛弘二二廿任因幡大目冷泉院御給　藤井是光 寛弘三十卅任美濃權大目左衛門督年給　此内以上三人は作名也 歟イ　又御堂關白申文良清惟光申揚名介云々　私云箋に此義を奥に注すといへども河海の義について此所にしるす者なり

またせ給ける程　源の御車をたてられて惟光をめして門をひらかせらるゝ大路にまたせ給ふなり

むつかしげなる大ちのさま　御洛 日本紀 大路萬 萬葉に歌あり是を略す　往還などのおほく小家かちなるあたりときこえたり

この家のかたはらに　惟光が家のかたはらなり

ひかきといふ物　檜垣也

はじとみ　河　半蔀なり　花　下はかうしはた板などをうちてうへにしとみをつりて外へあくるやうにしたるをいふ車にも半蔀とてあり上のしとみばかり

をあくれは半のしとみとはつけたるなり　弄見花鳥　秘車にも大臣などの車には半蔀とてありこゝの體は二階作りの様にちとたかき所と見えたり猶花にくはし　箋同之　同後拾遺雑一月のあかう侍ける夜はしとみに女とものたちて侍けるを男まゐらんなといひいれさせ侍ければ　讀人不知「誰とてかあれたる宿といひなから月よりほかの人をいるべき　箋聞是は此段の下心なり

すたれなともいとしろう　花伊豫簾又かやすたれの類なり　箋同之　箋聞書みすならはあたらしきは翠なるべし

ひたひつきのすき影　箋聞に夕かほの上は此のそく女ともの中には有へからす

たちさまよふらん　聞書奥よりのそく人は物などをふまへたる歟又のひあかりてうしろからなとみるをあなかちなるといふなり

たけたかき　奥はしとみの上よりみる女をたけ高きやうにおもひやりたるなり　一御云はしとみの上よりのぞくをんなを床なとをふまへすはたけ高き事はあらしとおもひやる心なり　秘半蔀の上よりみゆる程にたけ高き人と見えたり二階作りなるべし箋同之

やうかはりて　源の見ならひ給はぬさまなれはなり

御車もいたうやつし　箋網代車なら前に御忍びありきの時と有　私凡車は其人々の乗るべき車定れり又袖しるしとて其家の富の文をかくなり　網代車は女などの乗る物なれは誰ともしらせしとて乗用する物なり仍路次にて人に對ての禮などもなきなり

さきもおはせ給はす　河箋警蹕（サキコエ）　むかしは内々ありきにもさきをおひけりと云々用心のためなり變化の物もさきの聲におそるゝといへり　し西宮左大臣の神泉苑のうしとらの角にて變化の物にあはれけるにもさきの聲する時は引入けるとあり是はことさら忍びやつしたればさきもおはせすといふ歟　秘忍びたるさまなり　前呵とはさきをおふ事なり

或詩に　恐是驚前呵白鷺獨跨款段遠（遠く）事乞潤行

たれとかしらん　とうちとけ給ひて　源と人の知べきさまならば車のうちよりさしのぞきなどし給はかろ／＼しく人の思ふべきなり是は忍び給ふゆゑに

人のしらしとかやうにあるなり是は車の袖よりの
ぞき給なり袖とは物見の事なり云々
かとはしとみのやうなるを　河諸織戸など歟　秘折
戸なるべし　箋同之
いつこかさして　箋河古奥入世の中はいつく（こイ）かさして
わかなゝん行とまるをそやとゝさたむる　秘源は
玉の臺にいつも住給身にて此はかなきすまゐをみ
て觀念し給ふ事殊勝なり　弄源の性みえたり殊勝
なり云々　箋云此小家のさまを見て源の觀念殊勝
也三界は客舎のごとくなれば玉樓金殿も定れる主
なし常住のさかひにあらざれば宮もわらやも同じ
事と云なり河海に玉のうてなもと云所に　六帖何せ（にイ）
んに玉（イチシ）の臺もやへむくらはへらん宿にふたりこそ
ねめ　此引歌叶はすけつるべし　箋聞云宇治に浮
船の君の匂宮へ心うつりたる時分かをるのおはし
たれは何とやらんうちそむきたるあひしらひなり
しを薫は久しくおとつれぬをうらむるやと思ひ給
て云なくさめつゝ楚王臺上の夜の琴の聲といふ詩
を誦せられし事あり浮船苦うせ給て後薫大將の不
吉なる事をいひしと思ひあはせし事あり　これも夕

顏の上の末みしかかるべき前表にてかやうの口す
さみも有しなり　此物語にかやうの類おほし心を
つけて見るべしと云々
きりかけだつ物　河箋紫明抄云公良三位が說なとゝ
て秘事有けにいひたれどもあなかちしからざる歟
大嘗會のしとみやといふ物なりいま陣座の前に是
をたつ　裏書に私云へいのおほひをきりかけてし
たるなり俗にへいのおほひをきりかけと云　箋云
今も內侍所床子座の前等にこれありかりに用るし
とみのごとき物なり　河の義（ホイ）をのす　秘同之　箋
聞垣の代にしたるものなり板にてしとみなどのや
うにしたるなりきりかけだつはきりかけめくとい
ふなり
しろき花そおのれひとりゑみのまゆひらけたる　河
早晚升平宅開眉見君強開笑口展愁眉 以上白氏文集　箋「か
すかすに君かたちより引なれはやなぎのまゆはい
まもそひらく 蜻蛉日記　弄夕かほのつほみ蕾のまゆに似
たる故にいへり　ひとりとは小家のさまあはれな
るに心ちよけなる花の心也　秘箋同之
遠かた人に物申すと　源の口すさびなり　河古今旋頭一う

ちわたす遠かた人にもの申すわれそのそこに白くさけるは何の花ぞも　此本歌は梅花なりされともしろくさけるはといふにつきていまは夕かほの花におもひよそへられたるなり　秘白くさけるにつきて梅花をもちひかへていへり續古今に　小侍從歌「さきにけり遠かた人にことゝひて名を知初しゆふかほのはな　こゝの心をとりて用たるなり箋同之　新續古今「道のへの墻生のこやの程なきに餘りてかゝる夕顏の花　政村朝臣」さきてこそ賤か垣ねの數ならぬ名もあらはるれ夕顏の花　前右衛門督爲盛　箋聞うちわたすとは行とほる心なり源の心は内へ物申たきと思ひ給たる心なりそれを御隨身か聞て白くさけるは何の花ぞもと問ひ給と聞てこたへを申たるなり

みすゐしんついゐて　御隨身　河聖德太子甲斐の黑駒に令乘給て空をかけり給ひしに秦河勝一人御馬の口につきてめくりける是隨身のはしめなり　箋同

箋云源は當官中將なり小隨身たるへきなり

かのしろくさけるをなん　花源氏君の遠かた人に物申すと口すさみ給ふは何の花ぞと問ひ給ふ心なり

さて御すゐじん夕かほとはこたへ奉れるなり　箋云心ある御隨身なり

花の名は人めきて　秘夕かほは侍以上の人の家にはうゑぬ物なり　箋顏といふ字に付て人めくといふなり　私云朝かほといふはやさしき花なりそれに對して夕かほといへるは物めきたる心歟

あやしきかきねに　清少納言枕草子にあり

けにいと小家かちに　源の心なり御隨身の申ことくとおほすなり

このもかのも　河箋此面彼面なりこなたかなたと云同し詞なり　遊仙窟に兩邊をこなたかなたとよめり　古「つくはねのこのもかのもに蔭はあれと君かみかけにますかけはなし　後「山風のふきのまにまに紅葉はこのもかのもにちりぬへらなり　このもかのもの事二條院の御時人々にとはれけるに俊成卿範兼卿なとは一向につくは山はかりによむへき詞なりと申けるを清輔朝臣躬恒か歌の序に大井川このもかのもとかけりしかれは筑波山に限るへからすと申けると云々見顯昭抄　ふきのまに〱の歌の注定家卿僻案抄云このもかのもとは此面彼

面なり四方にちる紅葉の心なりつくは山にこそよめといふ事あれといつこにも有へき事なり云々父子の義相違は如何案之尤筑波山に限るへからさる物也紀貫之大堰川行幸和歌序にも我らみしかき心このもかのもにまとひとありこなたかなたといふ心なり　花 榊巻にも此面かのもにはふるひ人とあり　箋 紫式部か心にも筑波山に限るへからすと思へるにや　箋云此義然るへし　秘 つくはねに限るへからす

むね〳〵しからぬ　河花 不宗々歟宗は廣韻云衆也本也尊也　箋 棟々しからぬなり物の棟梁にあらぬ心なり　箋 聞本式なる殿なとにてなきと云心なり

はひまつはれたる　河 あかすしてかへらん人にふちの花はひまつはれよ枝はをるとも　但此歌におよはす

口をしの花の契や　秘 清少納言枕草子上に草の花夕かほは朝かほに似ていひつゝけたるおかしかりぬへき花の姿にて花のありさまこそいと口をしけれと云々　箋同之

一ふさをりて　箋 聞一枝とも一本ともいはれぬを奇特にかけり

このおしあけたる　秘 上の詞に門はしとみのやうなるとあり　箋同之

されたるやり戸くち　河 是も左禮なるやり戸口なり俊頼口傳にされ歌といへるゝ誹諧體なりゆかみなとしたる樣なり一說云されたるは世なれたる體歟　弄 雨義ありふりたる心可然歟　秘 されは左禮なり正體ならすゆかみなとしたるさまなり箋同之　箋聞 さすかとは正體ならすゆかみなとしたる遣戸口に扇を持て出たるわらはの體はさすかなるとなり　聞書されたるはふるき心なりされたるはきつともなき心なり

きなるすゝしのひとへはかま　扇出したる童の出立なり　黄生單袴（キナルスヽシ）きなる生（スヽシ）のひとへにはかまをきたる成へし

うちまねく　扇に緣ある詞なり

白き扇のつまいたうこかしたる　河 白き扇の香にしみたるなり俊成卿女の說こかすとは薰物のしみたる心なり一說白き扇のつまの香色なる歟　花 たき物にこかしたる心然へきにや下の詞にうつり香い

としみ深しとあり　箋 傍成輝女の説尤可然其外の説不足信用なり　秘同之　箋 是はかはほりの扇なるへし

これにおきて　随身にわらはのいふなり

枝もなさけなける　枝といふへきやうにもなくて何ともつきもなき花のかゝりといふなり

とらせたれは　わらはの随身にとらせたるなり

門あけて　箋 大貳のめのとの門なり　惟光か家なり

惟光朝臣のいてきたるしてたてまつらす　秘 此御随身花を直に参らせん事をいかゝと思ひやすらふ所へ惟光門を開て参りたるして奉るなりかやうのかきさまえもいはぬ所あるにや　箋云御随身は路次にては直にめしつかふといへとも車のうちへははゝかりあり如此花を猶豫する間に惟光参る間取次て奉るなり用意の奇特なりたてまつらすはたてまつらするなり

かきをおきまとはし　河 鎰なりおきうしなふなり

秘 惟光か詞なり

いとふひんなる　河 今の世にひんなきなといふ心なり　不便也

物のあやめ見わく　河 綾目　又黒白　文目（文たあやとよむ）毛詩云聲（色イ）成文　河古「ほとゝきすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉　清輔朝臣奥義抄云黒白もしらすと様なる事なりさして其事とはいひかたき事なりかやうの詞書は書籍にもたしかにしかた〳〵と見えたる事もなし只大意をもちておしはかりて云事なりとそ古人も申ける　兼盛歌に　おく山のゆつるはいかに折（成イ）つらんあやめもしらす雪のふれるに　顕注密勘云定家卿錦織物をはしめて龜の甲貝のからにまて文なきものはすくなし網のめこのめ絹め布めなといふより色ふし見えわかすくらからぬ時に先文と目との見わかるゝをくらきやみにもなり心もほれ〳〵しくいふかひなく成ぬれは其物のすかたをみれとあやめなとのわかれぬをあやめしらすとこそ申されし　箋云下京は人目まれなるなり　聞書源の御車の久しく大路に立おはしましたるを物の心ある人は不審におもはんなりされとも御車も忍ひたる體なり又下京邊にてさやうの事にさのみ心をつくへき人なきあたりなれと猶みたりかはしき往還の大路に御車たちたるを惟

光朝臣のかしこまり申詞なり
ひきいれて　門の内にて下車なり箒木にきの守の宿
へも引入るとありいつれも源の家人なり
惟光かあにのあさり　大貳のめのとの子ともなり
河安惠　内供奉慈覺大師の弟子天台座主始補阿闍梨　私云阿闍梨は梵語なり
無煩惱と翻せるなり　箋惟光　由阿闍梨惟光よりは兄とあり
少將命婦參河守妻
以上四人大貳乳母の一腹の兄弟なり此子とものつ
とひたる折しも源の渡御を滿足するなり
またなきことに　私云又なきを用ふるなり　河又な
き事なり一說云いまたなき事なり源氏大貳のめの
との家におはしましたる事はいまたなかりけるな
り
をしけなき身なれとも　箋大貳のめのとの詞也
御まへにさふらひ　私云さまをかへたる身にては源
の御あたりへひたくと參りさふらふへき事のは
はかり有へき思ひやすらひしとなり
思ひたゆたひしかと　河猶豫萬にやすらふなり
いむことのしるしに　河受戒なり　花尼に成て八齋
戒をたもつなり　秘八齋戒は殺生戒　如諸佛不殺
生一日一夜不殺生戒　能持不偷盜戒一如諸佛不偷
一日一夜不偷　邪淫戒忌諸イ　妄語一飲酒一同上如諸
佛不坐高大床一日一夜不坐高大床能持不如諸佛不
着花鬘瓔珞及香塗身薰衣一日一夜一如諸佛不自歌
舞及故作觀聽不一日一夜自歌舞及故作觀聽戒
よみかへり　河蘇生　又活
いまなんあみたほとけの　箋云源氏君へ對面申して
今生に思ひ殘す事これなきゆゑ今は聖衆來迎を他
念なく待つてまつるへきのよしなり
よはけになく　よはけに泣なり
日ころおこたりかたく　秘箋源の詞
世をはなるゝ　秘箋尼になる事なり
くらゐたかくなと　秘箋源の次第の昇進の行末をも
見給へとなり
こゝのしなのかみにも　河九品のうち上品上生の事
なり　秘箋今こそ阿彌陀佛のといへるに奇特の返
答なり
この世にすこし恨のこるは　今生に心にかゝる思殘
す事のあるは後の世のさはりになるとなり
なみたくみて　源のさまなり

かたほなるをたに　河細綱イ續日本紀遷延喜式頑をさなく
かたなりなる心なり　秘頑なり　頑愚の心おろか
なる心なりほの字清てよむへしかたをたも　河に
をさな〳〵かたなりなる心と云々此義如何箋同之
「まほに見なす　秘正體になり　ひいき目からなり
箋同之」
なつさひ　昵近なりむつましくしたしき心なり
身もいたはしう　秘我なから我身を労思ふ心なり
源をそたてあけ参らせたるから我身もおもたゝし
く面目有と思ふよしなり
すゝろに涙かちなり　大貳の尼のさまなり　私云此
段かたほなるをたにといふより涙かちなりといふ
まて草子の地歟
子ともはいと見くるしと　最見苦なり　秘大貳の尼
の源をみたてまつりてすゝろに涙かちなるを子と
も尼に成たるを後悔するに似たりとて見苦しと思
ふなり
ひそみ御覧せられ　秘かひをつくる體なり　顰也
箋同之
つきしろひ目くはす　箋尼姿を後悔するに相似たり
と子ともさしつきて笑て目ませをする體なり
君はいとあはれと　源のさまなり子ともはもときわ
らへとも源氏は實にあはれにおほすなり
いはけなかりし　箋源の詞也　三歳にて母更衣には
なれ六歳にて祖母にはなれ給し事なり
はくゝまん人あまた　秘左衛門のめのとにおくるゝ
事なし末摘花巻に見えたりめのとの員數の事花鳥
にくはし　箋云大貳左衛門のめのと兩人はかり物
語の上に見えたりあまたとある時は親王に准して
三人も有けるにや
したしく　秘箋大貳乳母は別してしたしかりしなり
人と成て　箋聞書源成長の後なり河に字をあまた出
せり
さらぬわかれは　伊勢物語「老ぬれはさらぬ別のあり
といへはいよ〳〵みまくほしき君哉　同「世中に
さらぬわかれのなくも哉千代もといのる人の子の
ため　秘いよ〳〵見まくほしき君かなの歌の心な
り　箋いよ〳〵みまくの歌にて見るへし尼公の心
を察するの義なり　聞書云乳母は母と同し心なり
けにおもへは　前に身もいたはしくといへるにかけ

て見るへし
尼上をもとかしと　秘前に身もいとみくるしと思ひてつきしろひつる子ともゝけにもと思ふなり　箋同之
すほうなと　秘又祈なとはしめらるゝなり源の仰付らるゝなり
ありつる扇　弄先とふらひをし給て今御覧するは殊勝なり　秘さきに此扇をやかて御覧すへきを此めのとを囲給事に用捨なり先扇をはさしおきて此とふらひをよくし給て歸り給とて見給心道の正しき所殊勝なり箋同之
心あてにそれかとそ見るしらつゆのひかりそへたるゆふかほの花　河「心あてにをらはやをらむはつ霜のおきまとはせるしら菊の花　心あてはおもひあてなり光源氏をいまたみしらされとも思ひあてにもしるきといへるなり詞にもまた見ぬ御さまなれといとしるく思ひあてられ給へるとあり又夕貌の花の美人にたとへたる事秘説あり　花夕顔は女の我身にたとへてよめり露の光は源氏によそへたるへし河海に夕貌を美人にたとふる事をのせ侍りここには相當せさるへし夕貌花はいやしきかきねに咲花なれは女も我身にたとへていへりわれと美人と稱すへき事にあらさる物なり毛詩に歯如瓠犀といへるは美人の歯をひさこのさねにたとへたる事もあれとそれも歌の心にはいらぬ事成へし　弄さし過たるやうなれと源氏と思ひやりて折ふしのなさけに出したる扇なるへし光そへたるは源氏によそへたるなり　聞書夕顔の上の歌なり但官女なとのよめるにても有へし　秘心あてはおしあてにも源氏にてましますと推したるによりて花の光もそひたるとなり夕貌上の歌と見るは卒爾なり　箋云この歌夕貌上の詠せるとみることはあまりに卒爾なりとて天文十年六月十五日栖雲寺發起の時今案の仰云稱名院の義なり遠方人に物申との給ひしを聞て何の花とも我さへ分別もなけれとも推あてに申さは道行人の光そへたる夕かほとこそ申へけれと云々　これについて箋の義云木枯の女のことくならは此歌尤夕貌上の詠なるへし夕顔上はさやうのかろ〳〵しき人にはあらす自歌とは稱しかたし自然官女なとの私の義としてかくのことき時は

相かはりて詠する事も有へし然れは夕貌上の歌に
あらさる所も決しかたし所詮作者をつけすして見
る義可然歟與に一光ありと見し夕顔の上露はたそ
かれ時のそらめなりけりとあり彌疑を決すへし又
此次の詞に夕貌上の歌にあらさるよし分明なり
箋聞義は前に同し是は頭中將とみなして出したる
成へしと云也
あてはかに　河妙　　譚姸日本紀
おもひのほかに　箋帚木の巻にあれたらんむくらの
門にといへる類なり
にしなる家は何人のすむそ　源の惟光に問給ふなり
箋聞惟光か家の西隣なるへしと也　聞云五條北む
きの家極へ出る通なり云々
とひきこえたりや　惟光の尋ね知たるかとなり
れいのうるさき　秘惟光か心中にむつかしと思ふな
り
ばうざの事　河病者惟光返答なり
はしたなけに　聞書惟光のとりあはぬ返事なり
にくしとこそ　秘源の詞なり惟光のむつかしく思ひ
てとりあはぬ返事を察してのゝ給ふ詞也　箋聞折ふ
しのつきなきと思ふかとなり
このあたり　箋聞其家中の者は何の用そと思ひてあ
きらかに答しとなり扨またりのものにとへとはの
給ふなり
やともりなるをのこ　楊名介の家の留守居なるへし
やうめいの介なる　源氏物語三ヶの大事の一なり
花鳥入云此事九條殿の外更に無へ人なして此世の
説には諸國の介也云々九條殿は月輪入道關白の事
也河海にのせたる事皆あやまれり別に是をしるす
へし河の義是ゝ略す
女なん　箋日楊名介か妻なり此妻の女は夕貌君の乳
母なり
ことこのみて　事このましく色めかしき成へし
はらからなと　河腹族　兄弟日本紀
宮つかへ人　秘こゝへ來りかよふに宮つかへ人なと
もあるとなり
きかよふと申す　惟光か詞如此やと守の申すとなり
えしり侍らぬにやあらんときこゆ　惟光の源へ申す
なり
さらはその宮つかへ人　源の心なり然らは其宮仕へ

人成へしとなり
したりかほに　秘かやうの宮つかへ人なとの我はか
ほにてかやうの歌なとはよみ出せるならんとおほ
すなり
物なれて　箋宮つかへ人ならてはかやうにかる〳〵
しき事あらしと源のおほすなり夕顔上の歌にあら
さる事見えたり
めさましかるへき　聞云さし過たるめさましきなり
是はかやうの宮つかへ人なとの好色なる物といひ
かはし給てはいかなるかろ〳〵しき事かあらむと
源のおほすなり
さしてきこえかゝれる　秘かやうに歌をまゐらする
はさし過たる事なるを源はにくからす思ひ給ひし
なり
れいのこのかたには　箋作者の評なり　秘好色のか
たにはちとかろ〳〵しき御心そとなり
御たゝう紙に　花後撰十九に伊勢にまかりける人と
くいなんと心もとなかるときゝて旅のてうとなと
とらする物からたゝむ紙にかきてとらするか心を名イ
はむまといひけり　讀人不知「をしと思ふ心はな
くてこのたひはゆく馬にむちをおほせつるかな
返し「君か手をかれ行秋の末にしも野かひにはな
つ馬そかなしき　私云箋皆これをめす
あらぬすちに書かへ給うて　弄用心深きなり若菜巻
に此心みゆ　秘若菜下に柏木の文のかきさま然る
へからさるよし源のゝ給ふ事あり
よりてこそそれかとも見めたそかれにほの〳〵みえ
し花の夕かほ　河花の容　無上萬葉　此歌五文字の
折てこそとかける本ありさてこそ花ををるにも又
車よりおるゝ心にもかよひたれと云ふ義もある歟
然共古本に皆よりてこそとありほの〳〵みつると
あるも近つきてこそそれともみゆれといふなり
弄なれたき心なり夕貌を女によそへよめり又女の
ほの〳〵みつるとよめるにこたへてなれてこそと
よめるにや　秘箋弄に同しおりてこそと云本有不
用之　箋云それかとそ見ると云をとかめてよそめ
はかりは治定しかたきなり下句のみつるは源の見
るなりおかしきひたひつきといへるすき影の事な
りそれかとも見めは人のみるなり上下の句に同字
あれとも其心各別なり夕顔は女によせたり上の歌

に夕貌を女に比すといふ河の義を花に彼られたるはよし又其外の花の義はわろし箋聞近くよりてこそ何とも見わかむすれよそ目はかりにて夕顔と定めたるは不審なりといふなり
聞書源と見てよみかけたれとも近くなれすはえしらしとなり猶々したしくなれとなり

ありつる御ずゐじん　はしめに夕顔折し随身なり

また見ぬ御さま　秘源氏とやかてしるかりけれはみすくさしとてさし過たる様也しかとも折節のなさけ過さしとしつる也　箋云源の御返事を見て女共の評議の詞也源と見定めたるとはきこゆ然れは夕貌上はやりかに歌なと詠しかくへき事有へからさる也白露の歌を官女とものしわさと見るへし

いらへ給はて　秘源のやかて御返事もなきを無風流におもひしにまたかやうにわさとかましく御返事あるによりて又いかにそなと夕貌の宿にとりあつかふなり　箋云大貳の尼公みまひの間源の御返事の遅々せしを興をうしなひてさては聊爾の義にてやなと各恐怖せし也　箋云頭中將やらん源氏やらんしらねとも心あてに歌をよみかけたれは返事なかりし程に見たかへたるかと思ひたれは今返事のあるとなり　私云頭中將かと思ひしか（はるゝイ）と前にもあり此義能見るへし

わさとめかしけれはあまえて　河嬌アマヘテ箋聞わさとかましく返事のあるにて又調子にのりて又歌をまいらせん歟なと人々のいふなり

いひしらふ　箋此詞にて夕貌の上の所作にあらさるよし見えたり

めさましとおもひて　秘箋文の御返事を申へきなと人々の思ふ體を此隨身事過うるさく（たるよしイ）思ひていそき歸り參となり

御さきの松　河御前松明

はじとみはおろして　夕貌の宿なり

ほたるよりけに　河「夕されはほたるよりけにもゆれとも光みねはや人のつれなき　けには勝なり螢よりまさりてみゆるなり　花くはし　聞書此引歌詞はかりなり

御心さしの所には　花六條御息所の事なり　秘引かへけたかき體なり源氏一部の内にも心にくゝよしある人にかけり

うちとけぬけしき　秘此詞夕貌の宿にて歌なとよみかけされ過たるを御覽したる目うつりに有かたう思ひ給へるなり箋同之此段にいたりて彌夕顔上の所作にあらさる事見えたりと注せらる

ありつるかきね　夕顔の宿也垣根とは面白く書なせり

つとめてすこしね過し　六條の御息所にとまり給へる翌朝なり

あさけの御すかた　源の御さまなり　河朝明形（アサケノスカタ）又且開容儀（アサケノスカタ）爲　引歌二首これを略す常にあさけとは朝食なり仍てあさけの烟夕けのけふりなといへり是はたゝ朝明の心なり

けふもこのしとみの　秘此半蔀のあたりいつも何となく過し給ひしか歌を讀かはし給ひし後は御心をとめて過給ふなり

ゆきゝに御めとまり　弄戀路のならひいさゝかなることよりそこはくの思ひとなるなり世の恨なとも同しかるへし

惟光ひころありて　數日の後源へ參りたるなり

わつらひ侍る人　秘箋大貳のめのとなり

おほせられし後　秘惟光か詞也

はか〳〵しくも　たしかにいはぬなり夕貌上の忍ふ故なり

さ月の頃ほひより　秘五月の頃より此宿へ來れる人ありされともことの外人に忍ふさまなれはたしかにもしらすとなり是夕貌上なり

その人とはさらに　夕貌の君なり此君のめのとは楊名介か妻のむすめなり

中かきのかいまみ　源の仰られてから惟光も心かけてかいまみたるとなり

けにわかき女の　前に女なとわかく事このみて宮つかへ人なと來りかよふとありしをうけてなり

しひらたつ物　延喜式　褶（シビラ）　覆レ袴之衣なり　內藏式云　駕輿丁褶（チヤウノウハモ）　勘文　榮花物語云女房四五人はかりうす色のしひらかとはかりゆひつけたりしひらはうは裳也　箋云褶會袴褶騎服也此心は馬にのる時着る物とみゆむかはきなとの類歟云々裳なと引かけて人をうやまふ體の見ゆるは同輩の人はかりとは見えすとなり　秘云かことは少事なりかたきはかりなと云心なり箋同

昨日夕日の殘りなく　花南むきの家西うけたるなる
へし　花夕かほの宿は西むきの家成へし
文かくとてゐて侍りし　聞書居てか出典尋決すへし
かほこそいとよく　河佳人　カホヨキヒト日本紀　これ夕かほの
上の事也
ある人々　妻女共なり
しのひてうちなくさま　是は頭中將との中たへたる
折節なり又四君かたよりおどしいはせしうつりな
れはなり
しらはやとおほしたり　源の心を惟光か察したる也
おほえこそおもかるへき御身のほとなれと　花惟光
か心中に思ふなりやん事なき御身なれはこそかろ
かろしき事も似合給はぬやうにおもはれ御かたち
たくひなく人もなひきやすかるへきをいさゝかは
かやうのしのひ事をもなし給はてはと思ふとなり
聞書云おほえこそおもかるへき御身のほどなれと
いふにて此段よく聞えたり但稱名院おもかるへき
程なれはと云々これをもつて是を案するに前に書
のする所の秘抄の心これなりしかれはおほえこそ
おもかるへき御身の程なればといひつへきかろか

ろしき事は似合はねといふ字をくはへて見るへし
さて御年齡御かたちなと好色の御心のなからんも
なさけなくさう〳〵しかるへしと惟光か思ふなり
かやうにみれはのはの字も仔細なく侍る也
人のうけひかぬ　これも惟光か心中に源の好色に理
をつけて思ふなり數ならぬ身さへすき心はあるに
と思ひ出るなり
もし見給へる　秘惟光か源氏へ申詞也箋
せうそこなと　秘惟光か文をつかはしたるなりいひ
よりて様體を見んとなり
猶いひよれ　秘源の詞なり始て夕顔の宿の事尋給ひ
し時はむつかしく思ひて大かたに惟光か申たるか
唯今はかく源へ理をつけて思ふから源も猶いひよ
れと仰らるゝなり
かの下かしもと　秘彼家の體なり雨夜の物語の時の
事なり
さてかの空蟬の　秘貞節をつよくたてたる故に御意
のとゝまるなり
この世の人にはたかひて　弄源につれなき人のまれ
なるなり

おいらかならましかは　弄こゝにては大やうなる心
なりおいらかはうら〳〵として人になひきやすき
なる女をいふそれは又誰にもさるへき程に心くる
しきあやまちとはかけり　一禪勘　秘こゝにては
大やうなる心なり箋同之　なほさりのつれなきに
て有へきならは一夜のあやまちにてやみぬへきを
あまりに貞節をたつるやうに見えし程に却てまけ
し心のふかくて思ひすてられぬとなり　秘人まか
せならはとなり
かやうのなみ〳〵までは　箋云草子の地下の品の心
なり
ありし雨夜の　弄大人の耳に細事を入る事惡き事也
いふかしく　いふかしくとは不審なり物のおほつか
なき事なりされはおほしめしもよらぬ事ともまて
馬頭なとの申たるを聞給ひてさやうの下品のくま
〳〵までおほつかなからす知たくおほしめす心の
出きてかやうに源の御心の成たるとなり
いとゝくまなく　箋云いとゝの字妙なり箒木に實を
たつる樣にて下に好色なると源をいへり
うくもなくまちきこえ　花軒端の荻なり　これをも
御心にはおほしすてぬなりうらもなくはうちむき
たる體なり軒はの荻の本性なり
つれなくてきゝ　秘空蟬の聞へき所あれははゝかり
給ひて荻へも音つれ給はぬとなり
まつこなたの　秘うつせみの心をみはてゝと覺す也
箋同
伊豫介のほりぬ　秘空蟬の夫なり　任はてゝのほれ
るなるへし　箋云伊豫介上洛任はてゝのほれるに
はあらす任中の上洛なり此卷の末十月に空蟬をぐ
して又伊豫へくたるなり
いそきまゐれり　秘伊豫介源へ參るなり
舟みちのしわざ　海上苦勞のよしなり
いとふつゝかに　伊豫介が體なり
人もいやしからぬすち　箋云源の詞の體も慇懃にき
こゆ俗性はつねの受領のなみにあらざる歟
ねびたれと　河調行すこし年老たる心なり
ゆけたはいくつと　花中河の宿にて碁うち侍りし事
を思ひ出し給へはまはゆきやうにていよの守には
とひにくゝ思ひ給ふなり秘箋同
物まめやかなるおとな　伊豫介の事也

うしろめたきわさなりや　ゆけたはいくつ〳〵といふより哀とおほしなさるといふまて源の心中也
なのめならぬかたはと　箋云是より眞實をし直しにもあらぬあやまちと源の納得し給ふなり
馬のかみのいさめ　花雨夜の物語の時のことなり箋同之　すきたわめらん女には心おかせ給へとあり
うつ蟬の君はさいはひしつほくなる人をかう思ふとなのめならぬかたわなる心と思ひなし侍れはつれなき心のねたさもつみゆるさるゝやうなり秘同之　此の物語はかゝる所に心をつくへしとあり弄女の事ゆゑ名をもたつなとかたりしことなり秘同之
人のためは　秘源へはつれなくてつらき空蟬なれとも伊豫介かためには然へき人となり此あはれは感し思ひ給ふ心歟箋同
むすめをはさるへき人にあつけて　軒端の荻少將をむこにとりし事なり箋同之
北方をは　箋云空蟬なり秘同　箋任中の上洛なれは空蟬をくして伊豫へ下るなり
一かたならす　源の心空蟬と荻との事なり

今一たひ　空蟬へ對面の事なり
人の心を　秘うつせみのつれなきさまなり
おもひはなれたり　空蟬の心也
さすかにたえて　秘よそ〳〵にて文なとはかりはとりもかはすへきをと空蟬の心なり
なけの筆つかひ　秘なほさりの筆つかひなり　箋云なほさりの筆つかひに又御目とまるへきふしなとをくはふるなりさすかにといふ詞にかなへり　河にないかしろなり
わすれかたきにおほす　源の空蟬を思ふさまなり
今一かたは　花軒はの荻の事なり　弄人の性の見えたる事心うへし秘箋同之よく眼を付へしと也
とかく聞給へと　軒端の荻を少將にあはすれ（來ぬイ）とも源の御心動せぬなりぬしあるともなひくへき人ゆへなり
秋にも成ぬ　弄いとゝ物おもひそふ時分なり　箋云源十六歲の秋也　河古「木の間よりもりくる月の影みれは心つくしの秋は來にけり　私云河の引歌諸抄にのせす此歌にをよはさるなり
人やりならす　秘箋我からの物思ひともなり　藤壺

空蟬等なるへし
大殿にはたえま　葵上のかたへ源のうと〳〵しき也
六條わたりにも　秘さま〳〵心をつくし給しかとも
藤壺をおほすやうにはなきなり　御息所のつれな
かりしをいひなひかしてなり　おもむけきこえ我
方へおもむかせたるなり　いひなひかしたるを云
也
ひきかへしなのめならんは　河なのめならんはなへ
てならんはなり　花六條わたりのとけかたかりし
をさま〳〵いひなひかし給て又ひき返し音信さら
んはいとをしかるへしとなり
よそなりし御心まとひ　秘御息所の事也　箋御息所
へはほい中イかなひて後御中十分ならぬ也
いかなる事にかと　草子の地なり
女はいと物をあまりなるまて　秘御息所なりしうね
き心さまなり後は靈になる程の性なれは是を察す
へし源の心にあはぬもことわりなり　箋同之
よはひの程も　秘箋御息所は源氏より八歳の姉なり
さか木の巻に源廿二歳御息所卅歳なり玄からは今
源十六歳御息所は廿四歳なり　弄同之

人のもりきかんにいと〻かくつらき御夜かれ　源の
密通の事外聞いか〻とおもひ給に又かく夜かれか
ちなるはいよ〳〵人きゝくるしきとなり
ねさめ〳〵　秘箋前坊の御息所として秋好中宮を生
給て程なく前坊にわかれ給し事今又源氏のかよひ
初給て又夜かれかちなる事なとおほしつ〻けて身
をうらみ人をうらみさま〳〵物おほすなり
霧のいとふかきあした　後朝のさま艶なる體なり
いたうそ〻のかされて　秘源のあなかちにふかく忍
ひ給ふ事ならねと明ぬといそかしたてられておき
出給さまなるへし　箋云源の忍ひ給はぬさまを見
るへし
打なけきつ〻　源のいたくそ〻のかされておきうき
體はたえまかちなる故に御息所もうちとけ給はぬ
を源の打なけきて出給ふなるへし
中將のおもと　秘御息所の官女なり
みかうし一まあけて　かうしを一間上たるなり
御木丁ひきやりたれは　御息所のおはする几丁をす
こし引のけたるなり
御くしもたけて　秘御息所のさまなり

過かてに　河難過なり
しをん色のをりにあひたるうす物の裳　私中將君の體なり　河よのつねには紫菀色の裳と心得たるか僻事なりしをん色のをりにあひたるとよみきるへし紫菀色のきぬにうすものゝ裳なり　紫菀色とはおもてはすはうらは萠黃なり秘箋河の義よしと云々
見かへり給て　秘　源のみかへり給なり
かみのさかりは　秘中將の髮なりさかりは前に注す
源 さく花にうつるてふ名はつゝめともをらてすきうきけさのあさかほ　花朝かほは中將君にたとふるなり是はあさかほに女をたとへたり毛詩云有女同レ車顏如舜花とあり　秘箋用此義　秘はかなく心をあたにはうつさしとつゝめともとなり　私云御息所を置て又心をうつす事をはつゝめともと云義なり箋同　箋云うつろふといふ事は花の本意にはあらねともとなり
いとなれてとく　中將の物なれたるさまなり　箋云源こしたかひたてまつる體底の心動せさる故也
中將君返歌 朝きりのはれまもまたぬけしきにてはなにこゝろをとゝめぬとそ見る　秘妙なる返歌なりわが身のうへをはさしおきて御やすところのうへにとりなして今朝夜ふかくいてたまふをいふなり　箋云御息所の身の上はかりに引かけて此御かへさをいそかれて朝霧の晴るをさへまたれさるはよく／＼御心のとまらぬよとなり一向わか身の上には聞なさゝる事奇特の返答なり
おほやけ事にそ　箋云上の歌の注なり我身のうへをおきて御息所の事にいひなすをいへり
おかしけなるさふらひわらは　花さふらひわらはゝ童女なりわらはゝ夏はひとへかさねのあこめかざみはりはかまをきるへし其上に男の指貫をきたりめつらしき出たち成へし　弄花鳥に童女と云々或説不審云々さふらひはさふらふ心也わらはの品定かたし花鳥にしるせり　一禪勘云此童の事別勘の義女と云々如何只男たるへき歟　弄首書問云女の指貫を着ることいか成時にか　一答女は馬にのる時にさしぬきをきるなり　箋云此童の事花鳥に童女と云々剩別勘にのせらる然へからす只常の男の童なり然はひとへあこめかさみはり袴の上に指貫

を着るの義是をけづるへし　聞書只童殿上したる
人の參通ふ成へし童女と見るはあしきなり云々
私云わらは殿上の義におよはす唯常にさふらふ童
男なるへし
大かたにうち見たてまつる　箋此以下一段草子地源
氏のさまを云なり秘
物のなさけしらぬ山かつも花のかけには　秘古今序
云大とものくろ主はそのさまいやしいはゝたきゝお
へる山人の花の陰にやすめるかことし
ほと〳〵につけてわかかなしと思ふむすめを　箋云
不ㇾ重ㇾ生ㇾ男重ㇾ生ㇾ女云々
いやしきにても　聞書源氏のした〳〵のいやしき人
になしてもそのあたりにさふらはせはやとなり
ましてさりぬへき　箋云源氏のかりそめの詞をもか
よはし玉さかの御出入もある所々は世にためしな
き事とうれしく思ふとなり
明くれうちとけても　秘いさゝかのとたえをも心も
となく皆おほすなり　箋二つにもわけられぬ源氏
の御身なれは各のめか（なイ）れぬやうに有へきにあらす
仍て人々かやうにおもふへしとなり是まて草子の
地なり
まことや惟光かあつかりのかいまみ　箋夕貌の宿の
事なり　箋云あつかり花に惟光を隣のかいまみの
めしろにつけ給へれはあつかりと云々預とは春日
社の預り吉田預年預等皆其所を取あつかふ者の名
目なれはかくいへり　私云まことやとは前にいへ
る事の中間に別事をいひて又前の事をおこしいふ
とておほく物語にかけり　聞書惟光か外源の忍ひ
給ふ方々への中たちあまたありと聞えたり
あない見とりて　案内をよく〳〵見たるとなり
その人とはさらに　惟光か源へ申詞なり案内をよく
よくみたれともいかやうの人とはしらぬなり
つれ〳〵なるまゝに南のはしとみある中や　河の義
略之　秘つれ〳〵なる故に車なとの過る音すれは
出てのそきなとするとなり此宿二階作りのやうに
高き所と見ゆ上の段に丈高き心ちそすると云々
箋同之　弄中屋は中居なり聞書同之河同之
このしうとおほしき　箋夕顔上なり　此主人なり
かたちなんほのかなれと　たしかにはみえねとも夕
貌上の體然へきとなり

一日さきおひて
右近の君こそ　箋宮女をうやまうていふ詞女嬬こそ
といふことし
中將殿こそ　花頭中將の事を云也　秘箋同之
箋云此こそは言葉のこそ也頭中將そと推して云也
あなかまとてかく　河手搔　花人のきかくにと手に
てあばく也
いかてさはしるそ　秘此わらはに何として頭中將と
はしるそと跡より來たるおとなのいふなり
うちはしだつ　河打橋也　私云此事は足つたひの爲
にかけたる橋をかつらきの橋によそへていひたる
なり　秘此中屋にかよふ道にうちはしあるなり
いそきくる物は　秘物の字に心はなきなり只いそき
くるなり　あかし榊の卷なとにあり　秘明石卷に
きやうたうする物はとあり同之
かつらきの神こそさかしう　河役優婆塞(エンノウハソク)金峰山與ニ
葛城峯ニ爲ニ行通ニ於兩山一召ニ集諸國諸神一令レ渡レ橋
之時金峰大神不レ勝ニ呪力一而且作始之葛木一言主
大神叉且作始中ニ於行者ニ云自形尤醜夜間作云々
以下略之　箋是をのす　箋云道のなき所の間をか
けはしにてかよへる故かつらきの橋をいへり　秘
此さかしうの字いかん嘲哢していふにやとおほえ
たり　箋云師說さかしうとは嘲哢して云歟云々
箋云渡しとゝけさる故に葛城と云へし　花橋より
落ぬへけれは心さかしうはしたつなり　聞書云役
行者のかつらきの橋日本の橋の始也と云々河無用
の事を心さかしうし初てと橋をかこつなり云々
私云さがしうは險難の義歟山路にあらされともか
つらきの岩橋といふより岩橋なれは險の心歟　河
「岩はしのよるの契りも絕ぬへし明るわひしきか
つらきの神
君は御なほしすかたにて　夕貌の宿のわらはのおと
なにのそきていひしさまなり車の中なる人をいふ
みずゐしんとも　そんぢやうそれ〳〵なとゝ見しり
ていひたる名を惟光かきけは頭中將の隨身ともに
て有しとなり
かそへし　たれ〳〵とかそへたてしとなり
きこゆれは　惟光の源へ申せはなり
ことねりわらはは　花中少將のめしくするわらはを小
舍人童といふなり夕顏の宿のわらはゝ頭中將のと

もの者ともを見しりてかそへたつるをあつかりかそはにて聞しなり　私云預りは惟光か事なり　箋花の義をのす又云夕貌の上へ文なとの時に童のみなれたる人ともなるへし聞ゆれはとは惟光か源へ申せは也

たしかにその車をそ　秘源の詞也たしかに其車のゆくへを見とゝけんする物をとなり

もしかのあはれに　花雨夜の物語に頭中將のかたりし床夏を思ひ出給ふ也　秘同之　私云もし床夏にやと源のおほすより猶尋ねまほしき御心のふかくなるなり

いとしらまほしけなる御けしきをみて　惟光か心なり源のふかく御心におほすと御氣色を見定てからわたくしのけさうもと惟光も若き人のあるにいひよりてそれにかこつけて案内をよく見たるよしを申出るなり此用捨尤奇特なり

あないものこる所なく見給へおきなから　惟光は夕貌上を誰とはしらねとも主人の事に忍ふ體なる人あるをよくしりなからなり

たゝわれとちとしらせて物なといふ　惟光といひかよふわかき人のあるか我同輩はかりと見せて居る也主人ある事は惟光にしらせぬなりそれをよく知なから惟光もそらしらすしてはかられありくとなりかやうにしてよく案内をしりて源を道ひき申さんためなり　花にわかきおもとは夕貌上なり云々此義如何　花わかとちは我とうしなり夕かほの上を女房とものわか同僚のやうに人にしらせて物なといふなりそれをこなたにはよくしりたれともわさとしらぬよしにそらおほれしてかくされまかりありくと源氏君にかたり申なり　秘箋主人あるとは若きおもとの惟光にしらせぬなり仍彼氣にまかせて知さる體にてあるなり

いとよくかくしたりと　此おもと惟光に夕貌上の事をかくしすましたりと思ふなり

ちひさき子ともなとも侍るかことおやまりも　夕貌宿にちひさき子ともなとのふと夕貌上の事をいひなとせんとするを若きおもとの惟光にいひまきらはすなり

又人なきさま　此おもとの同輩の外に別に主人なきさまをしひてみするなり

かたりてわらふ　惟光か源へ申て笑ふなり

尼君のとふらひに　源の詞　大貳の尼をとふらはんとなり

かりにてもやとれるすまひのほと　箋源の心也　秘夕顔の宿のさまなりこれこそしもの品とおほすなり　かりにてもとは此夕貌上たとひ俗性よき人にてもかり初にもかやうのすまゐするは下の品なりそれにもしすくれたる人なとを見つけたらはと一段源の御心とまるなり前にさひしくあはれならんむくらの門といへる義なりこれまて源の心を察して云なり

惟光いさゝかの事も　源の御心にたかはしと奉公するなり臣下の守へき道なり

おのれもくまなきすき心　何事も御心にあはんと思ふにましておのれも好色の物なれは色々にして源をおはしまさせたるなり惟光もわたくしにかたらふ人あるなり又かやうの方はかりにて御心にあひ奉らんは曲なし何事のいさゝかなる事にも御心にたかはしと思ふ所に實の忠ある心をこめてかけり

この程の事くたくしけれは　河細砕　クタクシ　日本紀 白氏文集　花夕貌の宿へ光君のはしめておはしましたる事はくたくしけれは物語に書もらすとなり　秘同　秘箋云草子地なり　秘花の義をのせたり又云此書様一つの文法なり　後漢書列傳廿五蘇竟傳（ソキヤウデン）又與仲説書諫之文多不載云々　箋同之

女をさしてその人と　箋源の名をも夕貌上の名をあらはさぬ故にかくし給なり　秘同之　頭中將にはばかりて源へ夕顔の上の忍ひしは理なり

やつれ給つゝ　河鑑　褻日本紀　窄同

おりたち　その事に身をなしたる様の詞也

おろかにおほされぬなるへしとみれは　惟光か心なり夕顔の上を源のふかくおもひ給ふと見しるなり

わか馬をは　秘惟光か馬を源へ奉るなり

けさう人の　惟光かわたくしのけさう人の心をおしはかるなり此程まてはわかけさう人にてありつるに我を物けなく思はんよとなり　河假相人 新猿樂記 伊勢物語眞名本

となりに中やとり　大貳の尼のやとへも源とか思ひ合せんすらんと中やとりもし給はぬなり夕顔上の忍ふ故なり

女もいとあやしう　秘夕貌上の心也
まとはしつゝ　夕かほの宿より源の御かへさになと人をそへて見するをやかて心得てとかくしらせぬやうにまきらはすなり
さすかにあはれに　名をさへしらせ給はぬ物からあはれにおほす事類なき也　河さすかにといへり
かろ〳〵しき事とも　事とものとの字　清濁兩義なり　弄ともはかろ〳〵しき事ともをおほしかへさぬなり猶との字清て可然歟如何
かゝるすちはまめ人のみたるゝをりもあるを　箋聞かゝるすちは好色の事なり小野宮右大臣實資公は世に賢人左府と稱せし人なれと好色の道には亂れしなりそれを賢者の一失と人のいひし事あり
いとめやすくしつめ　まめ人もみたるゝ事かある物なりされとも源は今まて實をうへにたてゝしかも亂るゝ事おはせさりしを此夕かほの上には心をみたし給ふとなり
あやしきまてけさのほとひるまのへたて　花夕貌の宿より歸り給てのあした晝まのへたてもあられかたく戀しく思ひ給ふははかなく成ぬへき前表にて有そとなり秘花同之　箋云一日不見如三年　又云長久なるへき前表なり
さまて心とゝむへき　秘源の心なりよく〳〵思案すれはいつくにさして心をとゝむへき事もなきをとなり
人のけはひ　箋是より夕顔上の體をいふ也
いとあさましうやはらかにおほとき　あさましうとはたゝ一すちにやはらかにおほとき過たるなり　秘只こゝに源の若き御心のとまり給へるなるへし
いとやんことなきにはあるまし　箋云あまり柔和なる故におも〳〵しき方のすくなきなり此故にさしたる貴人にはあらしと推量せらるゝにや　但三位中將の女なれは隨分の清花の族なるへし
かへす〳〵おほす　源のあまり我心なから物くるほしき程なる故我心中を色々にさくりて見給なり
いとことさらに　別してやつしたる姿となり
かりの御そ　河狩衣　短裳(カリキヌ)　舊事本紀
むかし有けん物のへんくゑめきて　河海云中關白少將の時赤染か兄弟にかよふ事三輪明神事舊事本紀大己貴事等委細にのせらる仍是を略す　花二つの

本緣河海にのせ侍りき大物主大己貴は一體二名なり三輪大明神の御事なり此大神いかなる因緣にてか色にふけり給ふらん神のいさむる道ならぬとはかゝる事よりよめる成へし　秘三輪明神の本緣よくかなへり　箋同之

箋云中關白少將の時以下略之河に委し此事河海に引勘へられなから天延貞元天永の頃なり寛弘以往わつかに卅ケ年なり如何云々　箋云此物語近例をも連綿もちひ來るなりいはんや三輪の本緣を源として中關白の近例を下にふくめりと見るへし

人の御けはひはた手さくりにも　秘源氏とは手さくりにもいちしるきなり

猶このすき物の　秘此程惟光かしいたし事と惟したるなり　私云惟光かし出たる事としらは源とはかくれ有ましきゆゑに源を夕顔の宿へおはしまさせそめたる事をも惟光かしらぬかほして惟光かけさうはかりを今もゆふかほにみするなりそれを夕顔の宿の人々惟光引合たると推しなから惟光も猶前とおなしさまにこらへいひよらんとすれは不審のはれぬなり

たいふを　弄花に大夫とありすまに民部大輔の朝臣ともいへり但それにはよるへからさる歟　秘末にてこそ民部大輔にも成つらめ只こゝは五位なる故に大夫といふ歟　箋こゝは叙爵の大夫なるへし

かけておもひよらぬさま　夕顔上へ源のかよひ給ふを惟光はちともしらぬかほして猶わかき人々に惟光のあされありくなりそれによりて源とも女ともえ思ひさためぬなり

あされありけは　河され同事なり　秘同之

やうたかひたる　事のさまの色々にたかひたるを分別しわつらひたると云歟又女の物おもひは男の心さしのなき事なり是は心さしは切なるから誰ともしらぬか物思ひなりされはよのつねの物思ひとはやうちかひたるといふ歟

君もかくうらなくたゆめて　秘うちむかひてはさらにそむくべくは見えされとも自然ふといつくへも行てはと思ひ給なり是も夕顔上の名のりなともせぬ故なりたゆめては油斷させてなり

かりそめのかくれかと　秘夕顔の宿也こゝも又暫時の宿と見えたり定てゆく所有へしとおもひうたか

ひ給なり　箋同
おひまとはして　秘さらに打すて丶はおきかたきさまなるをうちわひ給ふ也　是は夕顔上のいつくへも行へなく成たらん時さても忘られぬへきならはいつくへゆかんとも打すて丶おくへきか扨て過してんとおほされぬなり
さるへきにこそは　さるへき前世の契にてこそはとおほすなり
人にしむ　しむは染なり物に着するなり
いさいと心やすき所にて　秘源の詞なり　聞書にいさ（さの字清と云々）如何
猶あやしう　秘夕顔上詞也
よつかぬ御もてなし　よのつねならぬなり末の詞にかほはかくし給つれはとありさやうの事をいふにや
けにと　源もことわりと思給ふなり
いつれかきつねならん　河帝王系圖云欽明天皇御宇三河國狐爲人云云水鏡にも此事あり此外河の古事略之花はかられははかされ給への心也　秘たかひにはかされたるさま也といふなり　箋云人の心をたふらかす物は狐なり故事本縁いらさる事なり
私云三光講談の時に衆語云故甘露寺一位伊長卿三光の外疎亭にて和歌の會ありし時疑眞僞戀と云題にていつれか狐といふ心を詠せられしに逍遥院へ渡るに彼一談合點の事申送られしをいつれか狐の歌めつらしとて爪點を合せられしを三光院いまた十八九歳の時にて祝着之間愚詠にて候由を申されしかは祖父逍遥院年齢似合すとて合點せられさりし其時はいと無念なりし如此事能々心を付へしとそ語られ侍しと也
なつかしけにの給へは　源のさまなり
よになくかたはなることも　夕顔上の體なり何事も打まかせたるさまなり是は源のわかき御心にかなひたるなり
猶かの頭中將の　雨夜の物語に頭中將のかたりしとこ夏によく似たりとおほすなりよく見付給へるなり
けしきはみて　秘何ともいはてはひかくるへき心さまはみえさるとなり　頭中將かたりし床夏はたえまのしけかりしゆゑにゆくへなく成たりしなり是

は源のとたへもなき程にやらんかの床夏に似たる物からわれにしられすして行へなくならん心なとは見えぬとなり

かれ〳〵に

さやうに思ひかはる　箋云夕貌上は定てぬしある人なるへけれとたちろきのあれはこそ今かく源のかたらひつき給へ然る時は源のとたえもあらんにこそ我に今うつろひかはるやうなる事もあらぬとなり　さやうの詞金言なり

心なからもすこしうつろふ事　箋云われなから行さきの心はしらさる物なりもしうつる心か源のあらん時はと有ましき事まて思ひすくさるゝなり　秘同

八月十五夜　聞書　ハツキジウゴヤと云々　秘陰陽変會をいむ日なりといへり　箋同之

あはれいとさむしや　曉ちかく成にける成へしといへるより此段小家かちなるあたりのさま心をやりて見るへし

なりはひにも　河農猶あり略之　秘毛詩生民篇云誕后稷之穡　説文穀可レ收曰レ穡　遊仙窟　家業　私云毛詩にいへるは農作の心なり家業といへるは何にても其家々にすることわさ歟如何是も耕作の事にはかりにいへる歟

ゐなかのかよひ　商人なとの體なり

北殿こそきゝ給ふや　北隣南隣なとの義にあらす賤しき女の家あるしなといふにや　花ゑいきゝ給やゑいは人のきかぬをとかむる詞なり定家卿本には北殿こそきゝ給ふやとあり在家のとなりあはせに物いひかはすも是等なり

あはれなるおのかじゝの　箋われとちなり

おきいてゝさゝめきさわくも　鷄鳴の頃よりおき出てさわく小家のさまなり

女いとはつかしく　夕顔上の性見えたりかやうの體を大かたにははつかしくうち思ひたるとなり

えんたち　箋風流たちたる人なとは誠にきえも入はかり面目なかるへき所のさまと云なり　夕顔上はさほとに思はぬとなり

されとのとかに　夕顔上の大やうなるなり

いとあてはかに　箋聞夕顔上の體なりあて人なとの心なり媚の心なりはかは付字なりそこはかなとい

ふ類なり我身もちさへくつれすは何をか思ひいれぬ心なり

こめかしく　巨めかしくなり大やうなるなり

らうかはしき　亂かはしきなり

中々はちかゝやかん　秘中々はちぬさまのよきとなり

こほ〳〵と　清濁ゴボ〳〵三光　コホ〳〵名稱

なるかみよりも　河古「あまのはらふみとゝろかしなるかみもおもふ中をはさくるものかは　蜻蛉日記云空くらかり松風の音高くて神こほ〳〵となる

私云ふみとゝろかしといへるよりなる神よりもとかける面白し

からうすの音も　河碓音タイ　踏春具フミウスツクなり　獨到ニ山中ニ宿靜向ニ月中ニ行何處水邊碓夜春ニ雲母聲ニ白氏文集

まくらかみと　河枕上あたり近き小家のさまなり

あなかしかまし　源の心中なり

何のひゝきとも　からうすの音を源の何ともきゝわかすこと〳〵しきおとなひとおほすとなり

くた〳〵しき　作者のかきのこしたるとなり

白たへの衣うつきぬた　箋云白妙の字與あり　秘只擣衣までなるを白たへといひのへたり優にして面白し　歌「昔より白きころもをうつなれとこゑには色の有ける物を　後京極殿の歌なり

空とふかりのこゑとりあつめ　これまた空飛ふといへるにて又餘情あり　聞書云連歌に砧に雁を付る事此詞によりてと云々

されたるくれ竹　箋かしけたる竹也　秘枝ゆかみすくならぬ竹也　河の義同し　詩にも屈竹なと有

花前にされたるやり戶くちといふに同し

前栽のはし　源の心なり

かへの中のきり〳〵す　河季夏蟋蟀居壁　月令詩二首略之　秘花鳥に毛詩の七月篇云八月在宇九月在戶十月蟋蟀入我床下とありまとほに聞ならひ給へる耳さしあてたるやうにとあるは我床下に入と云心に叶へりと云々此義さも侍らん但蟋蟀は宮殿のあたりなとにたまさかに聞ゆるを此いやしき家にてはまちかくきゝ給をめつらしきことに思ひ給ふ心なるへし　箋云師說尤然へし階に滴とも詩に作れり階の餘滴かと思ふはかり蛩吟のほのかなる事を云り

中々さまかへて　秘心さしの切なる故なり　箋聞是

より草子地とも見るへし又只も見るへし
つみゆるさるゝ　草子地なり
白きあはせ　秘夕貌上の衣裳なり
うす色のなよゝかなる　河薄色　柔やはらかなるなり　箋云白きあはせのきぬに薄色の紫のうはきなり
あえかなる　ちいさくかよわきさまなり
花やかならぬ　箋紫白は花やかならぬ出立をいふなり
心はみたるかた　河心あるかたなりよしあるをよしはみといふかことしはみはよみつくる字也　秘箋同　箋云源の心のよくほりにはいまちと物ふかくあらはやと覺す是は風流かたへかろ〳〵しきにはあらす人まかせにぼけ過たる人さまなり心うつくしき人なるへし
此わたりちかき　源の夕貌上をいさなふ詞なりわたりはあたりなり
いかてかにはかならんと　秘夕貌詞此詞にも人まかせなる性見えたり　箋同
この世ならぬ　此心末に見えたり

よなれたる人とも　はや人に嫁したる人のやうになきとなり
右近をめし出て　秘夕貌上の官女めのとの子なり
すゐしんをめさせて　右近をして源の隨身をめすなり　前に夕顔の花折し隨身なるへし　箋云源氏と云事をあらはさるゝこゝろはしめてみゆ
このある人々も　夕かほ上の官女ともなり　秘御心さしの切なるを見知て定てあしき事にはあらしとみなたのみ思ふとなり
明かたもちかう　夜の更過次第々々に明かたちかうなれるさまなり
鳥のこゑなとはきこえて　或ハナシ　清濁　箋云ての字の清濁の事はの字ある時は濁へしはの字をのくる時は清なり
おきなひたる聲にぬかつくそ　翁めきたるなり　河額突也　稽首なり　箋禮拜をいふ
たちゐのけはひ　おきなびたるといふにおもしろし禮拜のおとなり
あしたの露にことならぬ世に何をむさほる　源のちやつと聞給ては現世の祈りなとにやとはかなく聞給ふにさはあらてみたけさうしんなり是當來を祈

るなり　河箋云　樂天秦中吟　七十而致仕禮法有二明文一何及二貪榮一者斯言如レ不レ聞可レ憐八九十齒落双眸昏朝露貪二名利一夕陽愛二子孫一　河後漢王符傳　居二累卵之危一而圖二大山之安一爲二朝露之行一思二傳世之功豈不惑哉云々註云蘇子曰人世若二朝露一託二於桐葉一耳其與幾何云々

みたけさうしにやあらん　秘此詞かみに入たる本あり　私云鳥の聲なとはきこえてみたけさうしにやあらんたゝおきなひたる聲にぬかつくそきこゆるとあり此義猶劣なる歟何をむさほる祈にかと源のはかなく聞たまへはさあらてみたけさうしむと聞給なりさてこそ心もおもしろく侍れ　河みよしののこかねのたけ　萬十五短歌　御嵩は金峰山なり　みたけは七高山の一つなり　明玉集「あさもよひ紀の河上をけさみれは金の御嶽に雪降にけり　清少納言枕草子云あはれなる物わかき男のみたけしやうしんしたる人くしたるもあはぬ夜な〳〵たつるをくるしき事にこそ思へるめるを思のほかにきひしくへたてなして獨ゐてうちおこなひたる曉のぬかの程いみしくあはれなり　箋みたけとはかりも云なり　聞書云大和國なとには今もする事なり

なもたうらいだうし　弄みろくじけんとそ　河同本云々　河箋云金峰山の金剛藏王は彌勒出世の時地にしくへき金を守護し給ふ神なり金剛藏といふは是なり仍御嵩精進に彌勒を禮するなり又彌勒は一生補所の菩薩釋迦大師ノ付屬をうけて第十減劫の始に下生して三會に說法し給ふへきゆゑに當來導師といふなり　過去釋迦現在觀音當來彌勒

かれきゝ給へ　源の夕貌上にの給ふ詞なり前に此世のみならぬと有し是にや

あはれかり給て　感したる心にや

歌源うはそくかおこなふ道をしるへにてこん世もふかきちきりたかふな　イわするな　河箋云涅槃經云若有善男子善女人諸根完具受三歸依是則名爲優婆塞　又曰若受三歸及受一戒是名一分優婆塞　うはそくとは俗ながら佛弟子に入る人なり比丘比丘尼優婆塞優婆夷を四部の弟子と云也　うつほの物語にうはそくかおこなふ山の椎か本あなそば〳〵し床にしもあらねは　秘なもたうらいたうしと云ふ聲をしるへにて來生までを契おくへきとなり　私云此の世のみならぬ契をし給ふ折ふしなもたうらいたうしと公院

を聞てかれ聞給へ此世とのみはおもはさりけりと
感したるなり
長生殿のふるきためしはゆゝしくて　河七月七日長
生殿夜半無人私語時在天願作比翼鳥在地願爲連理
枝長恨歌　秘箋玄宗の比翼鳥連理枝は末とけされはい
ま〳〵しくあたなる契なり仍て引かへ萬劫をちき
るへきとなり
みろくの世をそ　彌勒　箋云五十六億七千萬歳也
河從二釋尊入滅一至慈尊出世隔五十七倶胝六十百千
歳往生要集　彌勒下生經云將來久遠刧於此國界成佛云々
箋載之
いとこちたし　河秘　おほきなる心なり　箋　ことの外
なり　巨なり　聞書ことない事なとゝ俗にいふ心
なり
返歌夕顔上
さきの世のちきりしらるゝ身のうさに行末かねてた
のみかたさよ　秘　箋身のほとのはかなさを觀して來
生まて何のたのみの有へきそとなり現在の因を見
て未來の果をしるといふ心なり　私云さきの世の
契とは前世の宿因なり欲知過去因見其現在果欲知
未來果見其現在因ととけり前世の宿因つたなくて
現在かくのことし今生かくの如くなれは未來のな
のむ所なしと身のつだなきをかへりみてよめり尤
面白し　聞書云前果のつたなき事を夕顔の思ふな
り　頭中將とも契はてぬ事云々如何
かやうのすちなともさるは心もとなかめり　弄行末
かねてたのみかたさよの詞をうたかはしく思ひ給
なり云々一註又心もとなく源氏の君の思ひ給へる
心歟一勘如此又歌のさまも物はかなくうたかはし
き人さまなり云々可然歟　秘　源の心中なり此歌の
さまも物はかなくうたかはしき人さまなりかたか
たおほつかなく思ひ給ふなり　箋云作者の批判な
り此歌物はかなきさま早世の前表なり歌の風體を
よく〳〵思ふへし　箋聞同之　或抄御說に草子の
地云々　聞云あくる十六日の夜むなしく成へき人
なる故に歌なとの風も物はかなきなり　かねて何
とやらん心もとなき也　私云猶箋の義を用ふへし
いさよふ月に　河萬山のはにいさよふ月をいてぬか
と待つゝぬるによそふけにける　いさよひの月十
六日の月の山のはに月しろあかりて出やらぬをい
ふなりといへり是も十五夜の曉なれは十六日の月

といはんもいたく不レ違歟能因歌枕にもいさよふ
とは山の端にさし出る月をいふといへり但いさよ
ふはいつれもやすらふ義なり猶豫とかけり 萬「も
のゝふの八十うち川のあしろ木にいさよふ波のゆ
くへしらすも 同「君や來ん我やゆかんのいさよひ
にまきの板戸もさゝすねにけり「かくらくのはつ
せの山の山きはにいさよふ雲はいもにやあるらん
是もやすらふ心なり或說云いさよふはいさなふな
りさそふ心なり然共いさなふともたしかによみた
る證歌未二勘出一今の歌萬葉には不知夜歷とかけり
あなかちに十六夜にかきらさるものなり 花いさ
よふいさよひともにやすらふ心なり十六日の月は
もち月よりちとおそく出るによりてやすらふどい
ふにや·これは十五夜の明かたの月なりそれも入か
たの月のしはしやすらひていらぬ心にみるへきに
や 祕河花にくはしくしるされ侍りこゝは只十五
夜の月の入かたに山の端にしはしやすらふ心也
聞書山のはに入かね出かねたるをいつれもいさよ
ふと云ふなり
ゆくりなく 河不意日本紀 卒爾同 水原抄云とりあ
へぬ心歟云々案之不意の義は取あへぬ心歟思ひや
りなく又卒爾も今の心には叶歟 弄問云ゆくりな
く如同心歟 一勘不意とかけり
女はおもひやすらひて 箋聞月は山のはに入かねて
いさよふを女も不意にいつくともしらぬ所へうつ
ろはん事を思ひやすらふなりされはいさよふ月に
ゆくりなくあくかれん事を思ひやすらふといへり
にはかに雲かくれて 月を我身にたとへて夕貌上の
思ひたる折ふし俄に雲かくれたるなり是も夕貌の
あしかるへき前相なり
あけ行空いとおかし 明方の體面白きかきさまなり
はしたなき程に 源の忍ひたるありきの明過たるは
はしたなかるへしとなり
れいのいそき いつも曉ふかき御かへさ成へし
かろらかにうちのせ 夕貌上を源の車にのせ給さま
なり 祕源のみつからいたきのせ給ふなり
右近そのりぬる ひとつ車に右近も乘なり
そのわたりちかきなにかしの院 河箋河原院歟五條よりその
わたりちかきなにかしの院とあれはなり六條坊門萬里小路
の坊門の南萬里小路東京極御息所の先蹤におもひかなへり 彼院
は左大臣融舊宅なり又六條院と號す後には宇多院

の御領也延喜御記云此日參入六條院此院是故左大臣源融朝臣宅なり大納言源朝臣奉進於院 秘河に見えたり河原院なり 私云なにかしの院とはそんてふその院といふなり人の實名をいはすしてそれかしなにかしといふ同事なり 箋聞書云むかしは臣下の家も皇居になるなり勿論皇居を給りて臣下の家とする事連綿なり

あつかりめし出る 河諸院に別當預りあり河に例あり略之 秘平生人すまぬ院なと必預あり

あれたる門の忍ふ草茂りて 河原院のさまなり 私云拾遺第三秋歌に河原院にてあれたるやとに秋來ると云心を人々よみ侍けるに惠慶法師「やへむくらしけれる宿のさひしきに人こそ見えね秋はきりけり 此歌こゝにはいらぬ事なれと事の次に書のする者なり

たとしへなく 物にたとへていはんやうもなしといふ心なり

こくらく 庭も物ふり木立なと高く成たる體なり

霧もふかく 弄道すからのさま〳〵を思ふへし云云

すたれをさへ 私車にてのさま面白し 聞書何とやらんものあはれなるさまなり是れも惡しき前表なり

ならはさりつるを 秘源の心なり

歌源いにしへもかくやは人のまとひけんわかまたしらぬしのゝめのみち 秘わか身にはいまたしらさるとなり 箋聞往古より此道にはかくのことくまよふ物なりわれはいまたしらさるとなり 聞書夕貌上にあくかるゝ體ためしもなきとなり 私云またかやうなる事をも身にはならはぬをさても〳〵心つくしなる事にもありけるやといふ詞より歌へつゝけていにしへもかく人のまよふ道かといへるなりさて夕貌上はかやうの心つくしなる道にはし馴給ひたるかとの給を女のはちらひたるといふにや 又夕貌上ゆゑ我よりさきに夕貌上を見そめたる人もわれ程夕貌上に心をつくしたる歟といふにや此義は劣なるにや

返歌夕貌山のはのこゝろもしらてゆく月はうはのそらにて影やたえなん 弄山のはゝ月をかくす所なるをしらてゆく月の心なり山の端は源によそへたり 秘源の心をもしらて我身はうはの空にさそはれて行よと

なり次の夜うせぬへき人なれは何となくあちきなき心ありしなるへし　箋聞 山のはの心もしらて月の行ことくわれも半空にて影たへんするやらんしらぬとなり

かのさしつとへる　箋せはき所に住つけたるならひとおもひ給なり　聞云夕顔宿のせはきにおほくあつまり居たるならひに此院のひろきさまを物おそろしく思ふとおほすなり今夜なく成ぬへき人なれはかやうにありしなり　源の心なり

かうらんに御車ひきかけて　榻なとなき歟又わさとならすかうらんに御車の轅をもたせかけたるなり

たちたまへり　車をたつるなり前にもあり

きしかたの事なとも　箋聞頭中將のかよひし時の事なり

あつかりいみしう　秘此院の預なり

けいめい　河おとろきてなといふ詞也一説經營歟めとえと五音横通の字なり蜻蛉日記にもをさなき人けいめいしてとあり　秘源の御出おとろきありくさま也河に經營共と云々然へき歟　箋聞以下皆經營なり云々

此御ありさましりはてぬ　箋聞ことの外あつかりか馳走しうやまひ申にて源氏君を右近かしりすましたるなりしりはてぬといへは猶源氏とはかねても推したる成へし　秘同

かりそめなれと　秘假事なれときよけによくしなす也

御ともの人もさふらはさりけり　秘預りか詞なり

ふひんなる　箋聞不便なるなりつねにふひんといふ心なり

しもけいしにて　河下家司なり　諸大夫なり　此院のあつかりの事なり

殿にもつかうまつる　弄左大臣家にもつかうまつるなり　聞書同之　秘むつましきとは此預りは源へも被官なり　殿とは葵上かたなり左大臣家へも參りつかうまつるとなり

めすへきにやと申さすれと　此預も人して源へ此よし申入るなり

ことさらに人くましき所　源の御返事なり別て人遠き所をもとめてこゝへはおはしたれは人もめさしとなり

御かゆなと

とりつく御まかなひ　陪膳役送なとのなくて不都合なるよしなり

おき中河とちきり給事より　河「にほ鳥の沖中河はたえぬとも君にかたらふ事つきめやは　或云おき中河は名所なりおきな河とも有　水源抄云河枝川なとはひる事あれ共本體のおき中はたゆる事なしそれかことくに君にかたらふ事つきめやはといへ(思ふイ)るなり是正説なり　箋聞おき中川沖中河なり海中をなかるゝ川なり是はたえぬ事をいふなり又は鳰は息の長き物にて息長河といふと云々いき長き故に水底に久しくいるなり是もたえぬ事にいふなりいとおと相通なり人の名にも息長足宿禰といふなり上の義かた〳〵よせありて鳰鳥のおきなか河とはつゝくるなり　秘同之

かうしてつから　源のあけ給ふなり　箋聞内へあくる一つ間のかうし歟云々

木たちいとうとましう　前に木くらうとありあれたるさまの物むつかしきなり

けちかき草木なとはことに見所なく　箋聞遠きはまきるゝ所もあり近きはむさとしけりて一段と見所もなくなりたるとなり

秋ののらにて　野等也らの字に心なし　河古「里はあれて人はふりにし宿なれや庭もまかきも秋の野らなる

池もみくさに　いつくまても殘らすふりたるなり河原院の池の體別してひろく物すこかるへし

いとけうとけに　是より源の詞也　河氣踈(ケウトキ)也　氣外(ケウトキ)
同　けうときとは人氣のうときなり

へちなうのかた　別納なり　猶河にくはし　へちなうは別に建たる局なり別納にて大饗おこなはれたる事おほし小寢殿なり　秘小寢殿雜舍なとなり預りは此かたに給るなり　弄へちのやなり

けうとくも成にける所かなおになとも　箋聞是又あしき前表なり　聞書われをはみゆるしと源のゝ給ふ事自慢のやうなれと女のおそろしく思ふをなくさむる詞なり

かほは猶かくし　花狩衣の袖なとを覆面にするにや又扇なと指かさして半面にはたかくれたる心にやおほつかなし　秘昔は覆面をたれておもてをかく

してあり〱事のあるなり　聞書同之　箋同之
歌源
夕露にひもとく花は玉ほこのたよりに見えしえにこそありけれ　花ひもとくはかくしたる顔をあらはしたる心なりえは縁なり　秘箋かほをあらはす當意によりてこそそれかとも見めの歌詠し給ひし時の事をいひ出し給ふなり其時はかりそめの様なりしも機縁純熟のはしめにて有けるよとなり　秘聞ひもとく花とは此時分の秋の草花をさしていふなりそとの玉鉾のたよりに見えし縁にひかれて夕露の花のひらくる時に成たるとなり花の顔ともいへは開くる花を源のかほをあらはすにたとへていへり下には夕貌の花の心をふくめり　箋云玉鉾は道の枕詞なり玉鉾とはかり詠する事此物語始なり必道とそふへきなりと先達のいましめありといへとも此作例あるうへはしせんとしてはかくのことくに詠すへき歟云々

露の光やいかに　源の詞なり　弄夕顔をりし時の事なとを思ひての給へりと云々　秘心あてにそれかとそみし光そへたると有し光やいかなるとなり　箋露の光やいかにといへるちやつと聞ては自稱のやうなれとさにはあらす上の歌に心あてにといへる詞にあたりての給ふなりその時の上の歌の心あてのことくなる歟又御推量と相違したる歟いかにとの給ふなり　聞書光そへたるとありしやうにはあるましきと前の歌にあたりて卑下しての給ふと云々此説劣なり

しりめに見おこせて　夕貌上のさまなり源の顔をあらはし給へるをまむきにはあらてしりめにみおこせたるなり

返歌夕顔上
光ありと見しゆふかほのうは露はたそかれときのそらめなりけり　河此歌源氏を光ありと見しか今はそらめにて有けるとそしりたる様につねの人は心得たるにやさにはあらすさきに心あてにそれかとそ見るといひしは源氏かと見しれりといふ心なりそれをこゝにいひ出して露の光やいかにとおもはれたるにあなかちにつゝむけしきなるを女のかたよりさし過ていひたりけると思ひてその人かと見しはそらめにて有けるとおほめきたる心なり云々　箋云河海の義尤可然又そらめの詞心有引歌に「空めをそ君はみたらし河の水あさしやふかしそれは

われかは伊勢　箋同以上河海　箋云拾遺上雑下詞書云賀茂にまうてゝはべりけるをとこのみはべりていまはなかくれそいとよく見てきといひおこせてはべりければと云々箋云此引歌尤相當せりこゝろあてのうたの作者ゆふかほのうへにあらさること分明なり云々　私云たそかれ時のそらめとは光そへたると歌よみかけしはわれにはあらすといふ心をあらはしたる歟　秘叢扇を出しゝ時はかやうにうちとけて有へき事ともおもはさりしをいまははつかしかるへき事なれは返歌大事なるによりてそのをりはそらめおほつかなかりきとおほめきたる歌なり　又今案次の詞にけにうちとけ給へるさまよになくなとある詞をみるに了簡あり但如何

秘はしめの義は弄に同し心あてにそれかとそ見るの歌よみしはたそかれ時のそらめにてありけるよと珍しくよめる成へし　又の義末の詞にてみれはそのたそかれ時に見しは物の數にてもなし今此あらはし給御すかたのたくひなきはといふ心もあるへし　私云弄に了簡ありといへる此義成へし　聞書ニ時光ありと見しはなほさりの事なりと源をほめたるなり　私云以上弄秘等之義を箋に是をやふりて河の説を用たり猶末に其心をいひのふへし

けにうちとけ給へる　箋云此一段は露の光やいかにと源のゝ給ひし詞をうけてけにと云りたそかれ時のそらめなりけりの歌に引つゝけてみれは歌の義理源をほめたるに似たり然れは餘の歌にあらすかくのことき所能々思惟すへし

所からまいてゆゝしき　箋聞源の御さまこゝには不相應なるまでにみゆるとなり

つきせすへたて給へる　源の詞夕かほの名をはかくし給へとも我はあらはすと也　秘同之

今たに　源のあらはして後たに名乘給へとなり　秘此うへは名のりし給へとなり

むくつけしと　箋おそろしき心といふかことし

あまの子なれは　夕かほの源、返答なり　河「しら浪のよするなきさによをすくすあまの子なれはやともさためす　花宿もさためすといふ心なり秘同聞書にいやしき心と云々如何

さすかにうちとけぬ　聞書何も人まかせなる物から又かやうの所もあるをさすかにといふなり

あひたれたり　河あまえたるやうなる體歟　秘箋同
弄同し
よしこれもわれから　河「海人のかるもにすむ蟲の我からとねをこそなかめ世をはうらみし　花あまの子と女のいふにつきて藻にすむ蟲のととりよせて我身の人數ならねはなのり給はぬもことわりなりとうらみ且は又かたらふなり　秘我身ふせうなる故となりあまの子といふ返事にわれからの詞妙なり　箋云海士の子と我からの詞妙なり　花鳥に源の人數ならねは名のり給はぬも理と云々如何　箋はしめより源氏の名をあらはさゝれはさためて夕貌上も名をゝしむへからす然る時はわれからなりと云
惟光尋ね　此院へ參れるとて御くた物を參らする也
右近かいはむ事　秘惟光か心なり我身の上のやうにしなしてたばかりよりたるなり　箋云此あひたは源氏にあらさるのよし惟光か計略したる事なり
箋聞同之
かくまてたより　惟光か心源の御心にあひたるよとおしはかるなり

我いとよく　はしめは惟光かいひよるへきさまにみせたるなりさてさやうにも有へき物をと思ふなり
たとしへなく　秘なにかしの院のさま思ひやるへし
箋たとへんかたなきなり源河原院の有さまなり
おくのかたはくらう　聞書ひろき所の奥の方よりくらくなる體なり
夕はえを　夕榮なり　箋聞源と夕貌との夕はえを互に見かはし給ふなり　箋云先達不庶幾之詞なり
思ひの外にあやしき　夕貌の心なり何ともおちつかぬ心かするなり
歎き忘れて　源のすくれたる御さまに物思ひも忘らるゝなり
すこしうちとけ行　箋云心はみたるゝかたをそへたらはと上の詞にいへり此段にてよく分別をくはふへし心あさき人にはあらす
つと御かたはらに　夕顏の物おそろしく思ひて源の御あたりをつとはなれぬなり　河集日本紀
心くるし　源の夕貌を心くるしく思ふなり
かうしとくおろし　おくよりくらく成たる故なり物おそろしくおもへれはなり

なこりなくなりにたる　秘源の我はあらはし侍るを猶心のへたてありけるとうらみ給ふと也　聞書顔をかくし給へる名残もなくうちとけ給しなり

猶心のうち　夕貌の名かくしを源のうらむるなり

うちにいかにもとめ　秘禁中に源を尋給ふへきをおほしやるなり源はいまた殿上人にておはす殿上の上日上夜とて晝夜奉公するなりそれを毎月つけおきて其勢とて官位をなすなりひるを上日と云夜を上夜と云又は宿直とも云源は別してみかとの御鍾愛なれは尋ねさせ給ふへきなり

六條わたりにも　弄源の思出し給たよりにて靈も通せしなり

うらみられん　箋云源の心に思ひしり給ふはよくよく月日をへたて給へるなるへし

いとほしきすちは　秘六條御息所の事也　何心もなき夕顔のさまを源のおほす心なり

おもひくらへ　秘箋夕かほのあまりおほときてさしむかひの心やすきと御息所の心ふかくとりくるしき心をおもひくらへて互に取捨たく思ひ給なり此念慮通してたよりをえて靈も出現せるにや　私云とりすてはやとはのけつくはへつなり用捨なり

御枕かみに　源の枕上なり女は御息所の念なるへし

おのかいとめてたしと

ことなる事なき人を　秘夕顔の上は三位の女なりその本性のさしもなきをことなる事なきといへり又は御息所の有ましき契をさまく\いひなひかしていくほとなくさしもなき人に思ひうつり給ふ所をねたく思ひ給ふなるへし

御かたはらの人　秘夕顔上なり

物におそはるゝ　源のおそはえゝやうに一夢さめたる躰さて火もきえたるなり物おそろしかるへきさまを思ふへし

たちをひきぬきて　河横刀日本紀

わた殿なるとのゐ人　秘源の右近にの給ふなり

いかてかまからん　秘右近か詞なり

あなわかく\し　源の詞也

山ひこのこたふる聲　河山孫也（ビコ）　河古「うちわひてよはゝん聲に山ひこのこたへぬ山はあらしとそ思ふ　聞書にひろき所の人もなき體なり山ひこあまひこ木玉同類なり

人はえきゝつけて　源の手たゝき給ふを人はえきか
ぬなり
此女君　秘　夕貌上なり
わなゝき
いかさまにせんと　物のけにおそはれたる體なり
あせもしとゝに　河伊勢物語云みのもかさもとりあ
へすしとゝにぬれてまとひ来にけり　六帖「秋霧の
しとゝにぬれてよふこ鳥さほのやまへに啼わたる
なり　花箋きたる物の身につくほとにぬれたるを
いふへし
われかのけしき　我か人かもわきまへぬなり　秘箋萬
「夢にたに何とも見えすみゆれともわれかもまよ
ふことのしけさに[きイ]　私云夢にたに何とも見えすと
いへるおもしろし
物おちをなん　夕顔上物おちの事前に見えたり右近
か詞なり
いとかよわくて晝も空をのみ見つくるを　河病者の
空を見るは死相の一つなり　秘箋云河の義如何今
夕貌上は御病者にはあらす所詮總別此人の物思ふ
すかた成しをいふなり　源の心なり

いとほし　河憐なり
われ人をおこさん　源の詞也右近はくらしとてゆか
ねはなり
山ひこのこたふる　箋云引歌に及はす廣き所のさま
なり　私云前に引歌いるへからず
右近を引よせて　夕貌上のそはへ引よするなり
わた殿の火も　秘其夜のさまをおもふへし
この院のあつかりの子　秘今夜さふらひたる物とも
なも此院の預の子とはまへに殿にもしたしくつか
うまつるとありし人なり　箋同
むつましうつかひ給ふわかきをのこ　箋云院の預り
の子又別人ならは今夜さふらふ者四人なり[歟]
うへわらは　河殿上童也　侍童なり　私云尋常には
宮つかへ女の上かけてありくを申にや　箋同河の
義如何　秘只男たるへし常の上からはなり　以上
箋　弄殿上童也　聞書云殿上したる童を云なり上
童[歟]
れいのすゐしん　秘夕貌の花なりし随身なり
しそくさして参れ　源の仰らるゝ詞なり
つるうちして　鳴絃

こわづくれとおほせよ　おほせよとは仰せよなり隨
身には直には仰られぬなり
人はなれたる　はの字清て讀へし
さふらひつれと　あつかりの子か申詞なり
かう申はたきくち　聞書あつかりの子則ち瀧口なり
河御所の近邊にあり　養寛平に衆をおかる十人廿
人時にしたかふ内宮あり熟食あり月奏を進す西宮記
瀧口　藏人所の被官なり院にては武者所なり今の
世に貫首なとの拜賀にはめしくするなり　以上弄
の義なり
弓つる　河弓弦　つるうちせよと仰せよと前にあり
火あやうし　河誰何火行史記　本朝文粹第一云題二夜
行舍人鳥養有三歌　源順　夜行翁夜々警レ火舊府中
呼曰火危彼誰何云々　秘文選五十六　陸倕新漏刻銘云
揆レ景測辰徼レ宮戒レ非守以二水火一分二鼓日夜一以レ水
守レ壺者爲二沃漏一以レ火守レ壺者爲二夜視刻數一　私
云是漏刻之註也　衛宏載二傳呼之節一較而未レ詳註
衛宏漢舊議曰夜漏起宮中城門傳五伯宮官イ直符衛士周
廬擊木折傳呼備火河秘等之義悉箋等載之
うちをおほしやりて　秘此人の火をともしに行間に

さま／＼の事を思ひ給ふ也又禁中なとおほし出す
なりまへにいかにもとめさせ給ふらんをいつくに
たつぬらんとおほしやりてとあり此心よりかやう
の事にふれても思ひやり給へりとなり一は孝心を
わすれ給はさるなり　箋同
なたいめんは　名謁　是を名對面といふ也　河裏書
云亥一剋侍臣名對面延喜元年よりおこる　同亥一刻侍臣奏之後
瀧口武士名對面事あり　花亥一刻に内豎時の簡を
奏す其後侍臣のなたいめんありなたいめんとは名
謁をいふ殿上に御とのゐしたる侍臣互に名をとは
れて名のる事なり此次手に瀧口のとのゐ申ありと
のゐ申といふも名謁と同しきなり瀧口は廿人ある
物なりいつれも亥の刻の事なれはいたくもふけぬ
にこそはとかけり　河延喜九年正月廿日藏人源揚
宣旨云候瀧口輩三ケ夜已上無レ不參早頂ニ着到
一宜待後仰者　秘延喜近衛式云　凡夜行者内裏官
人一人近衛一人起亥一刻迄退イ子四刻但右起丑一刻迄退イ
寅四刻　已上の義箋にのせたり又曰とのゐ申は延
喜元年よりの事なれは此物語にむねとかけり
ふけぬにこそは　箋云こそはと句をきるへし

かへり入て　源の人をおこして歸り給へるなり　秘箋云是もいまた火ともして參らさる以前なり
さなからふして　夕㒵上はそのまゝ臥てゐたるなり
こはなそ　源の右近にの給ふ詞なり是は何そなり
まろあれは　河丸と云名昔あまたあり是又男子の通稱なり此以下河の義略之也　箋云昔は日本には男子の通稱なり唐に孔子孟子なといふ類なり
いとうたて　右近か詞也
おまへにこそ　秘夕㒵上を云右近かいふなり
そよなどかうはとて　そよとはおまへにこそと右近かいふをおきよとの給ふなりなどかういとあまり物おちし給ふといひつゝさくり給へは夕顔上はいきもせぬなり
けどられぬる　物に氣をうはゝれたる心なり
しそくもてまゐれり　秘瀧口と有　聞書に隨身か云云
御木丁を引よせて　箋聞に夕㒵上をしそくもて參れる人々に見せしとの源の用意なり
れいならぬ事にて　此人源の御身ちかくは參りつけぬなり

なけしにて　長押とかけり敷居の事なり
猶もてこや　猶もちて來よゝなり
所にしたかひてこそ　秘瀧口は源を恐れてきと參らさるゆゑに猶もて參れ所によるとの給ふなり
夢にみえつるかたち　源の枕かみにつゐてといへる女の面かけに見えたるなり
むかし物かたりなとにこそ　河江談云　寛平法皇與京極御息所同車渡河原院歷覽山水形勢入夜月明假取下御車疊爲御座與御息所令寵給之間開塗籠戶有出聲法皇令問給對云融候欲給御息所法皇御云汝存生爲臣我爲君何出此語乎早可退歸者靈物抱御息所御腰半死牛童獨近侍仍以後童令召人々者寄御車令乘御息所顏色無之不能起立扶抱乘還御之後召淨藏大法師令加持纔蘇生云々　箋等にのする分注　此事よくかなひたり
身のうへも　源の身の上なり　秘我身も恐怖あれともそれをも忘れはて給うて夕㒵上の事をいかにとおほすとなり
いひふれ給ふへき　何かといひ合せ給ふへき人もなしとなり

ほうしなとをこそ　秘　宇多のみかと浄藏をめす事河にあり
つよかり給へと　前に丸あれはなとの給ひし事なり
あかきみ　河我君なり　我子をあこと云也　秘　わか君とかしつく詞なり
けはひ物うとく　河人のたましひに魂魄の二種あり三魂は内を守る魂なり天人の姿なり五陰離散すれは則遠くはなれ行隔生の魂なり七魄は屍を守る其形鬼神のことし五六歳はかりの物にて小神通あり是を無想の身とする也十三年に本有に歸するなり十三年まては屍にそひて居たるなりされは魂さり魄とゝまる程になつかしき氣遠さかり面おそろしくなる也箋同
物むつかしとおもひける心ちみなさめて　秘　右近はおそろしく思へる心ちもうせはてたるなり
南殿の鬼のなにかしのおとゝ　箋　河に世繼（大鏡）に貞信公宣旨をうけ給て着陣せんとする時南殿の御帳のうしろより物の聲して帶劔の石つきをとらへたりあやしみ給ひてさくりたれは毛おひ爪は刀のとくなる鬼なり貞信公心をしつめて勅命をうけ給りて定めおこなふ人とらふるは何ものそとて太刀を引ぬきてかれか手をとらへ給へはまとひてうちはなちてうしとらの角のかたへにけさりにけりと云々箋の分註也　河おひやかす　劫史記　脅同上
あなかまといさめ給ひて　右近かなくを源のなくさめてさりともむなしくはなしはてし泣そと制し給ふ也
この男をめして　秘　瀧口なり　聞書しそくさしたる人歟と云々
いへとおほせよ　此男して別に使をつかはさるゝ歟それに仰つけよとの詞とみゆ
なにかしのあさり　秘　惟光か兄なり　法師なとをこそと前にありそれにて思ひ出給ふなり
かのあま君　大貳尼なり　忍ひていへとの給ふにこれにかくし給ふ事なり
物の給ふやう　秘　かやうにあるへきやうに物の給ふやうなれと心中はかなしくかきみたるとなり
大かたのむく／＼しき　河いふせくおそろしきなり
夜中も過にけんかし　前に夜もいたうふけぬにこそとあれと時のうつりたる成へし時のうつらぬもか

やうにおほゆへし
松のひゝき木ふかく　前に木くらうとありて又木たち物ふりなとあり又松のひゝきは木ふかくきこゆるものなり
けしきある鳥のから聲　秘河原院の有さまかやうなるへし人のしけき所には聞なれぬ心歟　聞書に聞なれぬからびたる聲也　弄山にすむふくろうはこれにやと河内本にあり面白云々
ふくらうはこれにや　河梟古堯反說文云食父母不孝之鳥なり　文集第一凶宅詩賦云梟鳴松桂枝狐藏蘭菊叢蒼苔黄葉地日暮多旋風秘箋等にこれをのす　秘河の義をのせて此賦の末の句に前主爲二將相一後主爲二公卿一云々よく融公の舊宅に叶へり　私云凶宅は舊宅古宅なとにはかはりて怪氣なと有て人の住すてたるやうの心歟日本の名跡にもさやうの家あまたありとみゆ云々
はかなきやとり　秘此院にやとりをとりし事なり
君につとそひ　右近も源をたよりにはなれぬなり
わなゝきしぬへし　聞書わなゝきぬへしなり死ぬへしにあらす
又これもいかならん　秘右近をもあやうく思ひ給也
われひとり　源一人なりさかしきはかしこきなりおほしやるかたも　何ともおほしうるかたもなくあきれたるなり
火のほのかにまたゝき　風なとあらゝかに吹體見えたり　河灯のかすかにひらめくは人の目たゝきに似たり
屏風のかみ　屏風の上歟只あたりと見るへし
くま〳〵しう　花くまとはかくれたるをいふ物のかくれてあるやうなる心なり　箋云かくれ也　秘に花の義を用ふ物おそろしと思ふ心よりかくおもひなさるゝなり
物のあしおと　河延喜八年清涼殿霹靂の後貞崇法師候清涼殿之時聞大人足音是邪神所爲也云々　李部王記　箋聞書に此義を載す
とくまゐらなんとおほす　秘惟光を待兼ね給ふ也
とく參れかしと思ひ給ふなり
ありかさためぬ　秘惟光なり　聞書惟光も好色の故なり云々　河「風のうへにありかさためぬちりの身はゆくへもしらすなりぬへらなり　但此歌にお

よはす
夜のあくる程の久しさ千夜をすくさん　河「とはぬ
間はちとせを過す心ちしてまつはまことに久しか
りけり　奥入云此歌近代の歌なり證歌とするにた
らす後拾遺現存の作者隆方歌なり
からうして　辛（苦イ）勞なる心なり
命をかけて何の契に　いかなる前生の契にてか今か
く一命にかけて難義なる事にあふらんとなり
おほけなくあるましき　藤壺に心かけ給ふ事のそら
おそろしきむくいかとおほすなり　箋同　若紫
巻の序なり云々
内にきこしめさんを　是は夕貌のはかなく成たる事
なり　秘内裏にきこしめさんをはしめて天下にか
くれ有ましきとなりおほしめくらすといふまて源
の心中なり
からうして　箋聞前のからうしてといふよりも猶お
もかるへしかさねてかきたる面白し
夜中あかつきと　秘今夜しも惟光遲參するよしなり
めしにさへおこたり　常は御あたりはなれぬものゝ
こよひはめしたるにさへ遲參なりとかきわけたり

右近のたいふの　秘はしめは惟光かわかけさう人の
分にしてありきし事を思ひ出たるなり
君もえたへ給はて　右近にもよほされて
われひとり　源ひとりさかしかり給ふ程は右近のな
くにも催されぬが惟光の參りてかなしき事を覺え
給ふなり
いきをのへてそ　秘花に杜子美か詩尤面白し箋同
花あまりにあきれたる事には中々かなしさもおほ
えぬ也ちと心をとりしつむる時には涙をはなかす
物なり杜子美か詩に驚定初拭涙と作れるは此心な
り
えもとゝめす　源の涙こほれ初ては又とゝめ難き也
やゝためらひて　とかくのたひかねたるさまなり
すきやう　河誦經也
昨日山へ　弄物のちかふ時何もかくあるなり世間の
常のさまなり箋同之
まついとめつらか　秘昨日山へといふより惟光か詞
それをいひすてゝ此夕貌上の體を不思儀なる事哉
といふなり
れいならす　河不例なり　秘夕顔上は自然かねて違

例なとし給ふ事はなかりつる歟となり
さることとも　秘源の詞なり
おのれもよゝと　秘よゝとはつよくなくなり　聞書に惟光も源の御さまにもよほされて聲にたてゝなくなり　河六帖　君によりよゝ〳〵〳〵とよゝ〳〵とねをのみそなくよゝ〳〵と
さいへと　秘惟光か參りて力をつけ給ふやうなれとこれも又いまた年のゆかぬ物なれはなり　箋聞源もさかしう惟光も同し事なれとも何事も功のいらぬなり
しほしみぬる　花しほれたる心なり
此ゐんもり　源の用意おもしろし
此人ひとり　此院守ひとりはしたしけれとも下々の物いひもらすへけれはかくさんと惟光の申也
けんそくも　河眷屬なり
さてこれより　秘源の詞也
けにさそ侍らん　秘惟光か詞まことにさやうならんとなり
かのふるさとは　秘夕顔の宿なり
とかむる里人　聞書曰只あたりの人の不審すへきとなり
おのつからゆきましり　山寺なとはかやうの事たくひおほきゆゑ人しけきもまきるゝ事あるとなり
昔見給ひし女房　秘惟光か父のめのとなり
みつわくみて　聞書云青表紙に此詞なしと云々　河支離とかくと云々日本紀云水神罔象　此云美都波伊弉冊尊所生神なり　髮白くて老嫗貌也と云々
後撰「としふれは我くろ髮もしら川のみつわくむまて老にけるかな　一説年よりぬれは腰かゝまりせくくまりて二の膝とかり出たる中にかしらましはりて三の輪をくみ入たるかことくなりと云　秘としの老たるなり
かこかに　河俗にかこ〳〵としたると云心歟秘同
明けはなるゝ程のまきれに　明くれのほとにや
この人を　夕顔なり源はえいたき給はぬなり
うはむしろにおしくゝみて　惟光の車にのせんためにうはむしろにつゝむなり　箋河に類聚國史云弘仁八年八月從三位橘常子薨以席裹葬　箋の分を註す河に委し　弄問云いかやうなる莚にや一答なき人をむしろにてつゝみて外へうつすをいふ也

さゝやか
したゝかにしも　莚にてつよくもえつゝまねは髮のこほれ出たる也
めくれまとひて　源のさまなり
はや御馬にて　車には夕貌上と右近とをあひのせてひんかし山へ惟光か送る也　河源氏は馬にて二條院へ歸り給へと光か申なり車にもしたひ乘て行たくおほす故にかく申なり
君に馬をは　惟光か馬には源の乘給ふなり
くゝりひきあけ　惟光か指貫のくゝりなり
身をすてゝ行に　惟光か車の供をする事なり
おはしつきたり　二條院へかへりつき給ふなり
人々いつくより　二條院にさふらふ人々の源の樣體をなやましけなると見て不審するなり
いきかへりたらん時　秘源の心まとひあはれなり
われもいたつらに成ぬる　源の心中なり
内より御使あり　勅使なり
おほいとのゝ君たち　秘連枝中には頭中將はかりをめしいれ給ふ也別して御中よき故なり　箋聞此時もえんのきはまてゆくへし　河源は簾中よりの給ふ也
めのとにて侍もの　秘源の詞なり　大貳のめのとの事也色々そら事をかまへて頭中將に源のの給ふ也
その家なりけるしも人の　秘夕顔の上の穢氣をまきらはさんとかくの給ふなり
おちはゝかりて　此病人わか人かおちておそく取出るなりさて内に久しくおきたるを聞つけ給ひたれはすこしの穢にふれたるとの給ふなり
神わさなる頃　神事におもひおそれてなり
おもうたまへかしこまりて　花夕貌上うせ侍る事は八月十六日の事なり九月は齋月にて朔日より御神事なり卅ケ日の穢にふれ給ふによりて參内かなふましき事なり　秘箋同
しはふきやみにて　河咳嗽病也
むらいにて　河無禮なり　秘簾をへたてゝ申は無禮なりと頭中將に謝しての給ふなり　花同之
さらはさるよしを　秘頭中將の詞なり
かしこくもとめ　箋聞ねんころに委しく尋給ひしと也
立かへり　頭中將勅使とみえたり殘りの大殿の君達

つれたちて參り給ふ也立歸りは私のたはふれ事申さん爲也
いかなるいきふれ　頭中將の詞也　觸穢なり
のべやらせ給ふ事　源の所存をのへ給ふおもむきまことしからすとなり定て忍ひありきの事ならんと推量して中將の云なり
むねつふれて　秘頭中將のうたかはしけにの給ふを心のおにゝわつらはしく思ひ給ふなり　聞書同
こまかにはあらて　秘源のかやうにこまかにはあらすとも大方に此よしを申されよとなり
たい〳〵しけれ　退々なり　箋聞迷惑したる心なり　聞書云聊爾なる事との給ふなり
心のうちには　源の心中に夕顏の事を忘れぬなり
藏人の辨を　秘頭中將の弟なり　頭中將には大かたの事を語り給ひて此人してくはしく奏し給ふ也　箋云藤大納言の兄左中辨と云人成へし
大殿なとにも　秘葵上の父大臣へも藏人の辨して申給なり
日くれて惟光　夕貌を東山へ送りて惟光の歸參なり
めしよせて　惟光を源のめしよするなり

いまはとみはてつや　源の心まとひあはれなり
とかくの事　秘永々しくおきてもいかゝとて明日葬送すへきよしを申なりとかくの事とは葬送なり
そひたりつる女は　秘源の右近はいかゝと問給ふなり
それなん又　惟光か詞夕貌と同しさまに右近か成へきとなり
けさは谷に　河古「世の中のうきたびとに身をなけはふかき谷こそあさくなりなめ　案之とりべ山の谷拾遺集の歌に有　私勘「とりへ山谷にけふりのもえたらははかなく見えし我としらなん　无作者
私箋云河の義如何こゝは靈山邊の事なるへし谷といはんにさも有ぬへし又さしてもふかき谷こそあさく成なめと有は谷にもとかける殊に面白し　右近の君か悲しみのあまりに谷に身をなけてうせんといへる事也
かのふる里人に　右近か夕貌の宿へ告やりたきといふを惟光か制しておくなりこしらへは誘るなり
いといみしと　源の心なり
われもいと心ち　源の詞夕貌上のことく右近かなく

なりさうなると惟光かかたるを聞給ひてそのこと
く又源のいくへくもなしと惟光にの給ふなり
何かさらに　かく源のゝ給を惟光か御心をつけて申
詞也　秘不慮の事と思事も定れる事なりとなくさ
めて申なり
人にもらさしと　聞書人にしらせしと思ふゆゑに惟
光か萬手にかけてするなりされは源も人にしらせ
しとおほしてさのみなけき給ひそとをしへ申なり
さかしさみな　源の詞さそかしさう思ひなせとゝ也
秘定れる事とは思ひなせとなり
うかひたる心のすさひに　河荒も詩少荒淫すさひは
なほさり事なりかりそめのすさひに夕貌をいたつ
らになしたるかかなしきとなり
かこちおひぬへき　夕貌上のゆかりにかこたれんな
り
少將の命婦　秘惟光かいもうとなり　聞書同　箋聞
源の御めのと子と云々
あま君まして　大貳の尼なり
さらぬ法師はら　惟光か詞也大貳尼なとのやうの人
には勿論しらせてかなはぬ法師はらにもこと樣に
いひなすなり　秘の義同之
かゝり給ひつる　秘箋なくさむる心なり　耕雲の義
なり　聞書歌「霜かれの草の戸さしのさひしさも霞
にかゝる春の山さと　定家卿の歌なり此かゝること
いへる同し心なり　箋聞せめてと安堵したる心な
り
ほのきく女房　秘二條院にさふらふ女房なり
さらにことなく　秘ことなくは無事なり難なくせよ
となり少も取つくろひて然へく沙汰せよと源の惟
光にの給ふなり　箋同　聞書俊成卿歌合の判に然
へき歌をはこともなくよろしとかけり
なにかことゝしく　秘惟光か御前をまかり立とて
の詞なり何か結搆にすへきにもあらすと申なり忍
ふ事なる故なり　秘同之
いとかなしく　なほさりにせんやうに惟光の申を源
のかなしく思ひ給ふなり
ひんなしと　秘源の詞惟光か心もいかゝと憚なから
の給なり
いふせかるへき　不審なり　おほつかなかるへきな
り

たい〳〵しき 秘惟光か心 聞書あるましき事と思也
この頃の御やつれ 秘夕顔の宿へかよひ給ふ折のかりのよそひなり
あやうかりし物こり 箋聞河原院にての事なり源の御心にも聊爾なる事とはしり給ふなり
たゝいまのからをみては 秘妙語なり あはれふかき物なり 箋聞魂は又生れてもくるなり魄はかへらぬ物なり
たいふすゐしん 惟光と夕顔の隨身なり
道とほくおほゆ まことにさるへき事なり
十七日の月 八月十七日の夜なり
かはらのほと 賀茂川原也 東の河原は皆鴨川なり
鳥邊野のかた 秘鳥部野のかた（あたりイ）よりうちけふりたる體なと平生の心ならは物むつかしかるへきを只今の心には何ともおほされぬなり 聞書但鳥部野の詞入たるは異本なり云々 鳥部野の事河にくはし
おはしつきぬ 東山へなり 靈山と云々
あたりさへ 只（其イ）今のあたりのさまなるへし
みあかしのかけ 燈明のかけなり

そのやには 板やなるへし女は右近のなくさまなり
聲たてぬ念佛 箋云葬送以前は無言念佛の由萬歳身後抄に見えたり河の義なり猶河にくはし又無言念佛十五之功德をうるよし聖敎に見えたりと云々
てら〳〵のそや 寺々の初夜なり 河諸寺初夜後夜の長講とておこなふなり 以下略之
清水のかたそ 秘十七日の夜參詣の人のさまなり
河緣起云寶龜十二年初建立延暦十七年更造大佛殿大同二年又造伽藍此觀音寺堂前之額清水寺大門之額是坂上田村丸私宅寄附沙彌賢心 以下略之
此尼君の子なり 惟光か父のめのとの子なり
大とこ 河大德日本紀云肅宗勅天下名山置大德七人僧之官也云々 箋聞行功のつもりたるをいふなり
涙のこりなく 源の心おもひやるへし
入給へれは 源の此板やへ立入給ふなり
右近は屛風へたてゝ 秘夕顔上をおきたる屛風の外に右近かふしたるなるへし
おそろしきけも 源の心夕貌の上のさまなり
てをとらへて 源の死人の手をとらへてなり此段源のなけきのさま思ふへし

わつらひ給ふ事はなし物おもひ又はけがらひにふれ給へるをまきらはさんとの御わつらひなりしかけふは眞實にわつらひ給ふとなり源の御さまなり

御いのりかた(とイ)〳〵に　方々にて御祈のあるなり又内裏よりもあふひの上かたなとの事をいふ歟

まつりはらへすほう　箋云内典の御祈は修法護摩大法秘法なり外典の御祈は陰陽寮修すへし祭の數祓の數際限なき事なり

世にたくひなく　秘源のたくひなき人からなるによりて世に不相應なる故いかゝと人々の思ふなり　箋才能世に秀て當時不相應の人は長久ならぬ事定れる義なり

くるしき御心ちにも　源の御心なり

かの右近をめしよせて　聞參りたることをはかゝす此卷は皆かやうなり云々

惟光心ちもさわきまとへと　箋源の御わつらひを大事に思へは惟光か心に物のいらぬよしなりされとも右近をありつくるなり是も源のわつらひ給うちにも御心をそへらるゝ故仰のかたしけなさに惟光のかくするとなり秘同

いさゝかひまありて　源の御煩のよろしくおほさるる時なり

めしいてゝつかひなと　秘右近をめし出すなり

ぶくいとくろうして　箋云　服最黒なり　秘右近か服衣の色ふかきなり說々あり不可用之　弄同　箋右近か服の色のふかきなり主君の服といへとも源に憚りて重服を着せすして輕服を着したる成へし然を心喪によりて常よりも色ふかきをきけるにや河海に異說あり不用之　河海云淸少納言枕草紙にふくいとくろき男のしらはりきたると云々源光行俊成卿に此物語を申談し句をきり聲をさす時此所に至りて筆を(ひがイ)をさへて右近初參の時着服然へからす況隱密たり如何(イナシ)と有しに枕草子にも此詞ありとて聲を淸てさゝる云々　いはれはふくりとくろきなりかほかたちの事なりいとりと五音相通の字なり云々　花鳥に尤　然河海に見えたり云々しかりといへとも師說此義を不用也以上箋の分注也　私云河に主君の服を着する事枇杷大納言延光一生の間村上天皇の御服を着す出仕にはゝからすと云々朝廷の事猶かくのことしいはんやわたくしにお

いてはをや
みしかゝりける契に　秘源ハ右近にの給詞なり　箋
夕貌上早世の事なり
とし頃のたのしみうしなひて　秘右近か主君をうし
なへる事なり箋
心ほそくおもふらんなくさめにも　右近の心ほそか
らんを源のなからへはよろつにはくゝみてなくさ
めんと思ひしとなり
程もなく又たちそひぬへき　秘源のわれもなからへ
かたきと也　幽玄にあはれなる詞也　箋同　弄此
詞殊幽玄也
よわけになき給へは　箋聞源の病中無力なるさま也
いふかひなきかたをはおきて　右近か心なり夕顔上
の事をはおきて又源の當今の御わつらひをはいみ
しくおもふとなり
あしをそらにて　花空をあゆむ心ちしてと下の詞に
あり同事なり御法の巻にも此詞あり
あめのあしよりも　河しけき事をは如雨脚と詩にも
作れり
おほしなけきおはしますを　秘箋云源のわつらひ給
故に主上の御心をつくさせ給を不孝不義の天命そ
のおそれある故に源の心をつよくなして何とかな
と養生し給ふとなり
せめてつよく　箋聞我心を責てなり
大殿もいみしくけいめいして　花けいめいはおとろ
くといふ心にいへる説ありこゝの詞は誠におとろ
くにかなへり上にも見えたり　秘箋同
おとゝひゞに　大臣の毎日見まひ給ふなり
廿餘日　はつかあまりとよむへし
なこりのこらす　病の餘氣もなきなり
おこたるさま
けからひいみ給しもひとつにみちぬる　秘箋天下觸
穢なり
おほつかなからせ　桐帝の源を久しく御覧せぬなり
内の御とのゐ所　弄桐つほなり　秘桐壺まて源の參
し給ふなり觸穢なれはくるしからさるなり
大殿我御車にて　秘左大臣の車にて直に葵上の方へ
誘引申さるゝなり且は養生大切と思ひ給故成へし
我にもあらすあらぬ世に　源の心なり聞書異本によ
みかへりとあり不用之

なか月はつかのほとにそ　秘箋三十日あまりにて平愈なり　前にはおこたるさまとあり此度本腹なり
なかめかちにねをのみなき給ふ　源のさまなり
見たてまつりとかむる人もありて御もののけなめり
なと　聞書若紫巻にわらはやみの事かき出へき序分也
右近をめし出て　秘箋よりは二條院にての事なり
猶いとなんあやしき　秘源の詞也
まことにあまの子なりとも　秘箋夕貌上のあまの子なれはと有し事なり　弄彼院にていひし事を思ひ出ての給へり
さはかりにおもふを　源の詞也　箋聞さはかり源のふかく思ひ給ひしを見しらぬやうに隔心ありしかつらかりしとの給なり眞實の海士の子のやうなるいやしき人なりとも心さしのおろかならんとは源の心中におもはさりしとなり
なとてか　秘箋に右近か詞也
いつの程にか　箋聞いつのまにさやうに俗姓なとまてはあらはし給はんするそとなり又ふかく別してかくし給ふへきいはれはなしとなり

何ならぬ御名のり　私云さしもなき御名のりなとやうに右近か卑下していふ詞なり　聞書久しくなれ給はぬほとにかくいふなり
はしめよりあやしうおぼえぬ　秘箋源の通ひ給ひし様誰人ともみえすふかくしのひて世にめつらかなる有さまなりし故に夕顔上も心を殘されたると也
私夕顔の名をかくしたるいはれを右近かいひのふる詞なりおほえぬは不覺悟事なり
きこえ給ひなから　きこえ給へるなり
さはかりにこそ　私云此御名がくしとは源の事を云なり　さはかりにこそとは大かた源とは推量したれともふかく忍ひ給ふゆゑに名をあらはし給はぬはことわりなから夕貌上をなほさりにまきらはしとは源の一旦のすさみはかりなれはこそか樣には打とけ給はさるらめと夕顔の心にふかく源をうらみ給ひしと右近か申なり　秘箋の義同し
あいなかりける心くらへともかな　秘箋源の詞なりさては兩方の心の相違してのことにて有つるよとなり　私さて此次に源の名をかくしたりしいはれを右近にいひのふるなり

われはそしかへたつる心も　源の心には夕貌上の推量のやうなる隔心はすこしもなかりつるなり
人にゆるされぬ　秘忍ひありきの事なり　箋云隔心にはあらす所せき御身なれは世をつゝむゆゑそと源の御心中をいひしらせ給ふなり
うちいさめ　内裏なり
うるさき身のありさま　秘我身を人もゆるさぬさまをは今こそ右近はしるへけれとなり　箋云所せき身をいふ
はかなかりし夕　夕顔上を源のみそめし時なり夕貌の歌よみし時の事なり
かゝるへき契にこそはものし給はめと思ふもあはれになんまたうちかへしつらうおほゆる　この段かゝるへき契にこそと哀にも又うちかへしつらうも覺ゆるといへるにや又かゝる契を哀に思ふに又うちかへしつらうおほゆる事はかうなからふましきにてはなとかさはかりふかく心にしみけんといふにや
かうなかゝるましきにては　秘一段と心にしみて思はれしはかくなかゝるましきゆゑなりけるにや

箋云とても行末とけましきならはおもひしむ事なくてこそあらめと思ふなり
猶くはしう　秘源の詞かさねて右近にの給なり
なぬか〳〵に　秘妙語なり　河七日云々佛事經文おなし地藏菩薩因緣經十輪經等にことにとけり　箋云初七日より盡七日まて四十九日の間忌日の佛像を圖しても其人と知すしては廻(回イ)向を何とすへきそとなり妙語といへり
何かは隔てきこえさせ侍らん　秘箋に右近か隔心には非すとて所存を述るなり夕貌上存生の時つゝみはてられし名をいく程もなくなき跡にて申あらはさん事の憚にてこそあれされともか程まて御心さし深けれは申へきとなり右近か心用神妙に見えたり
おやたちは　秘箋右近かかたり出す詞也　聞書父母なり
三位中將となん　夕貌上の父なり
いとらうたきことに　箋三位中將の夕貌上を愛子にて有しとなり
我身のほとの心もとなき　箋三位中將官位昇進も時

世にあはぬ人ときこゆ
頭中將また少將に　葵上の兄也前には藏人少將なり
三とせはかり心さしある　秘箋ことしまては四ヶ年なり　聞書頭中將三年通ひ給ふ二年めに玉かつらの君誕生三年めに頭中將と義絶四年めに源氏かよひ給ふ也則今年の事なり玉かつらの君四歳にて筑紫へ下りしは此次の年の事なり是弄の義なり
こその秋の頃　秘箋嵐吹そふ秋もきにけりの歌の時分の事なり
右の大臣殿　箋頭中將の北方四君の父右大臣なり
物おぢを　夕貌上の事也
にしの京におほんめのとの　秘箋楊名介の妻なり
箋云西京は右京なり東京は左京なり　弘仁十年十月五日官符左右京職各置職二員
すみわひ給うて山里に　にしの京に住わひて也
河　伊勢「住わひぬ今はかきりと山さとに身をかくすへき宿もとめてん
ことしよりはふたかりける　箋云うつろふへき山里大將軍なとにや方あしき故に此夕顔の宿へ方たかへにわたりしと也　秘方違さためて五條なる家へ出給ふなり　箋聞大將軍は三年ふたかるゆゑにことしよりはといふなり
よに人にゝす　これより夕貌上の心（ことイ）をいふ也
つれなくのみもてなし　物思ふかたをも恨のあるをももてかくしたる體なり此心前に見えたり
されはよと　秘箋前に源の頭中將のかたりしとこ夏おほしいつとあり其時の推量かあひたるとなり
あはれもまさりぬ　源の心也
をさなき人まとはしたりし　秘をさなき人のあるかと聞給なり　箋頭中將の子のある歟となり
中將のうれへし　雨夜の品定物語の時の事なり
しかおとゝしの　右近か詞也しかはさなり
女にて　秘玉かつらなり　箋云三歳ときこゆる也
箋云此段より玉鬘の巻出るなり
さていつこにて　源の詞なり玉かつらのいつこにそとの給ふなり
人にさとはしらせて我にえさせよ　玉かつらをえたく思ひ給ふなり
かの中將にも　秘頭中將にもかたりたく思ひ給へともこの尋ねよりたるさまをしらせじとてかたり給

はぬなりいかさま源のわか御子にもとおほすなり
かことおひなん　箋此段はかこつなりかこたれぬへ
しとなり　いふかひなきかことくは夕かほ上をは
かなくしなしたるを頭中將のかこたんと宣ふなり
とさまかうさまに　箋頭中將にしらるとも又源のや
しなひ子にせらるゝ共いかさまにも養育し給ふへ
きとなり
そのあらんめのとの　夕顔上のはかなく成たるをし
りたらはめのとなとのかこたんほとに何とそいひ
まきらはして玉かつらをよひとりたてまつれとの
給ふなり
さらはいとうれしう　秘右近か詞也
にしの京にておひいて　玉かつらの西京にておひた
ち給はんは心くるしきなり
はか〳〵しうあつかふ人なしとて　玉かつらの事を
はか〳〵しくあつかふ人なきゆゑに了簡なくてこ
そ西京にはおき參らすれといふなり
かしこになんと　箋云西京なり彼所に玉かつらをや
しなひ申すとなり
夕暮の静なる空のけしき　此續きの詞面白き體也

心よりほかにおかしきましらひ　秘右近か心中なり
かの夕かほのやとを　箋右近か心中なり　秘夕顔の
やとを源の尋給ひしも此御前の有さまを見るに猶
はつかしきとなり
竹の中に家ばとゝ　河鴿　和名云伊倍八止本草云頭
短灰色なり箋同
ありし院にこの鳥の鳴なきしを　弄彼院にても此
とりの鳴し成へし　秘箋ありし院とは河原院なり
院にこのと讀切て鳥のなきしとよむ說ありこのと
云ふ詞はうたひ物なとにやすめ詞におほくおく也
此時は家はとの聲にふくらふを思ひ出たる也さも
有ぬへきにや　一說只ありし院にと讀切て此鳥の
鳴しと讀へき也此河原院には八月十六日終日居給
し程に鳩のなく事も有へきなりこれを思ひ出す成
へし物語には前に鴿の沙汰なかりし故にむつかし
き沙汰ありかやうに心をやりてみれは相違なき也
としはいくつにか　秘源の夕顔上の年をとひ給也
箋云此夕貌上の年を尋給事ふとしたる様なれとも
いとおそろしとおもひたりしさまの面かけにらう
たくとあり此物おちしたる様は年も堅固微弱にて

そと思ひいて給心よりふととひ給ふなり
なかゝるましき　夕貌上の物よわく物おちしたるも短命なるへき相にてそとの給ふなり
十九にや成給ひけん　秘右近か詞我はなくなりにける御めのとの子と申すなり
右近はなく成にける御めのと　箋云我俗性を申なり死去したりし御乳母の子也と申あらはすなり　弄右近か母も夕貌上のめのとなり　私云揚名介の妻は右近か母死亡して後夕貌上の乳母歟
三位の君の　夕貌上の父三位中將なり
かの御あたり　夕貌上とひとつにそたちたるなり
おふしたて
おもひいつれはいかでか　夕貌上とおなしことくおひたちたりしを思ひ出つれはいかてか我も世にはなからへんとなり
いとしも人に　秘箋拾遺　おもふとていとしも人になれさらんしかならひてぞみねは戀しきの心也　箋聞此歌の心人にはなれぬがよきと思ひてさうすれは忍ひかたく戀しきとなり
物はかなけに　夕貌上の事を右近かいふなり

はかなひたるこそ　秘箋源の詞女は物はかなけなるかよきとなり
かしこく人になひかぬ　わか心をたてゝ女の人にしたかはぬはあしきとなり
みつからのはか／＼しく　秘源のみつからなり　源の心のすくよかならぬゆゑかいか程も女はやはらかなるかよきとなり
女はたゝやはらかに　河五行大義第二第七論德　陽體剛強自任陰柔順從陽婦人有三從之禮無自專之義　箋同
何　私云人にたらされなとする體歟さかしたゝぬ
あさむかれん　聞書愛せらるゝ樣なる心なり云々如心なるへし
見ん人の心には　秘箋夫をいふ也
わか心のまゝに　秘箋夫の心のまゝになり
このかたの御このみ　秘此御好には叶はんする物をと右近か云ていよ／＼悲しく思ひ出てなく也
空のうちくもりて　時節の景氣あはれをもよほしたゑさま心をつけて見るへし
源見し人のけふりを雲となかむれはゆふへのそらもむつましきかな　弄そらのうちくもりたるけしきより

よめるにや九月廿日あまりのそらのけしきなと思ふへし　秘時雨かちなる空なるへし烟を雲とは變化して跡もなくみなせはなり箋同　此外の義弄に同し　聞書花にはむつかしき哉とあり逍遥院かくのことくよまる夕の空も物むつかしく心にかゝりおもひをもよほすなりしなえうらふれなといふやうの心歟稱名はむつましきにてよく聞えたりと云云然れとも後にはむつかしきか面白きよし申さると云々　私云　新「見し人のけむりとなりし夕より名もむつましきしほかまの浦とあり　此歌紫式部の詠なり夕の空の雲はさなからなき人のけふりの行へにやとなかむれは物うかるへき夕の空さへなつかしきといへる義にや

えさしいらへもきこえす　右近なり　弄右近はゝかりはちたる心なり返しをせさる事感ありと云々　秘箋右近歌をえよまさるにはあらす新參なるによりて斟酌の義なり　私云むねのみふたかりてといへるも面白し

かやうにて　秘箋云此二條院に夕貌上のかやうにて有へき物をとなり

耳かしかましかりし　夕貌上の宿をおほしいつるなり

まさになかき夜　河箋八月九月正長夜千聲萬聲無止時白氏文集　みゝかしかましかりし砧といひて八月九月千聲萬聲尤面白し　箋聞源の御なけきの所か千聲萬聲無止時なり云々

かのいよの家の小君　秘箋又詞を轉してうつせみの事を書出たり物かたりのさま見つへし

ありしやうに　秘今は空蟬に音つれ給事もなきなり

うしとおほしはてにけるを　空蟬か心源のうしとおほしはてたるをさすか思も忘れぬなり

遠くくたりなんと　弄伊豫へなり　秘箋伊豫守のくしてくたるなり源のわすれやし給ふとこゝろみに又御違例をもとひかてらおとろかすなり

うけたまはりなやむを　秘これより空蟬の文の詞也　箋云なやみ給源よりもよそにきく空蟬のなやましくきくとなり

空蟬　とはぬをもなとかとはてほとふるにいかはかりかはおもひみたるゝ　わつらふ歟　秘箋云源のなやみ給ふをも空蟬ははゝかりてとひ奉らぬを源も又音つれ給はぬ故

に思ひみたるゝ由也 弄同 此歌花鳥に異説あり不可用之花鳥に下句思ひわつらふとあり源氏の病惱を思ひよせたりわつらひ給ゆゑにとひ給はぬとおしはかる心なりあまりにいりほかの說なり青表紙は思ひみたるゝとあり

ますたはまことになんと聞えたり 花いけるかひなきと云心也 河「ねぬなはのくるしかるらん君よりも我そますたのいけるかひなき 私箋に此歌を用ゆ箋聞益田の池はぬなはの有(生イ)な所なり

めつらしきに 秘空蟬のかたより音つれ申をめつらしき物におほしめすなり

いけるかひなきやたかいはまし事にか 箋源返事の詞也 秘箋うつせみの方より益田とあるはいけるかひなきと云事かそれは誰かいふへき事にてかあらんすらん源の方よりこそ仰らるへけれとなり花同 箋此故は空蟬の餘り程しらぬもてなしには源の御身にては誠に生るかひなきと也

源返 うつせみの世はうき物としりにしを又ことの葉にかかるいのち」 河「うつ蟬の世はつねなしとしる物を秋風さむみしのひつるかな 家持 この歌諸抄に不引之 私はかなき物と思ひはてしを又かやうにとはれ侍てそのことはに命をかけたる也 花うつ蟬の世とはむなしき世と云心なり 箋云世間の有さまのはかなけれは身を世になからへん物とも思はさりしを今の音つれによしなき命をかけとゝめけるよと也又はつれなき命の面目なき義もあるへし

はかなしやと

御手もうちわなゝかるゝ 箋病後のさまなり

もぬけを忘れ給はぬ 箋空蟬の心なり此歌にうつせみのとよみ給ふ猶かのもぬけの事をわすれ給はぬよと思ふなり箋同 花鳥の義同之

おかしうもおもひけり 空蟬の心也

さすかにいふかひなからす 秘うつ蟬も一向にかけはなれてはおもはさるへし 箋一向にかけはなれんもさすかに本意なきの義なり空蟬の事には段々にさすかの字每度是あり眼を付へし

やみなんと思ふ也けり 空蟬か心を察して書る詞也

かのかたつかたは 花軒端の荻なり秘同箋同

藏人の少將をなん 箋系圖の外の人なり

少將の心のうちもいとをしう　箋聞軒端の荻へ文やり給はん事は少將への爲にゝ無故實なるとなり
又かの人のけしきも　されとも軒端の荻の返事のさまもゆかしけれは文つかはし給ふなり
しにかへりおもふ心は　秘箋たゝありにうちむきてかき給ふ詞人による心面白し　箋花に源の今煩ひ給ふてよみかへり給ふ様なる折節なれは此詞興有
源　ほのかにも軒はの荻をむすはすはつゆのかことを何にかけまし　弄かことこゝにてはかこつけの義也
秘箋同之秘一夜の契もなくはかやうにはおほすましきをそれをかこつけにとなり　聞書そとの契をもむすはすは源の我をとはぬなといふかこつけ事はあるましけれとも一夜の契ゆゑかこち申と云なり　箋云およそ艶書の歌は逢てもあはさる趣をみする是第一の用意也此物語のいましめなり然れは此歌よのつねの義にそむく是又見所あり人により事にしたかふへきをしへなりいはれは源の先むすひそめたる荻の葉なれは人のとかむへきにあらすさそによりてかこち給ふのよしなり　私云此歌裏の義ありおもての義は上の註にきこえたり下の心はかいまみの夜空蟬ゝ君はもぬけてはひかくれしかは此人に契をむすはすは何にかことをもかけましといふ事をふくめりと云へしや
たかやかなる荻に　箋云人めを憚さるよしなり尋常の義に非す　私云かみにいへる箋の義尤叶へりかやうにし給ふは上の詞の少將のためはいとほしなから彼人のけしきもゆかしといへるによくかなへり　箋荻の葉にふみをつくる事　河後撰に左大臣小野宮あき大輔かうつまさのかたはらなる家に侍しに荻の葉に文をさしてつかはしける「山里の物さひしさは荻の葉のなひくことにもおもひやるる
忍ひてとの給へと　源のなほさりにの給ふなり
とりあやまちて（リイ）少將もみつけて　箋云少將の此御詞つれをしりたりともくるしからすとなり詞書歌一部の大意此一義なり
御心おこりそ　秘源の好色におこりたる詞なり　箋草子地なり
少將のなきをりに　忍ひてと小君にの給し故なり
秘少將のなきをりにとよみきりて心得へし心うし

とおもひてとはかやうの御音信はうしと思へとも
なり　箋云軒端の荻の心うしと思へともといふに
二義あり源の其後かきたえ音信し給はぬをうらむ
るの義一つ又は藏人少將によすか定りたるにかや
うに音信給ふを心うしと思ふ義一つとなり
おほしいてたるを　秘思ひ忘給はぬを嬉しく思ふ也
口ときはかりをかことにて　箋聞是はかこつけなり
口ときに歌おもはしからぬをかこつけたる義也
軒端荻返し
ほのめかす風につけても下荻のなかはゝ霜にむすほ
れつゝ　秘箋云一夜のあやまちは夢にも思ひまきら
はすへきを只今さたかにおとろかし給ふゆゑに今
さらにおもひしほるゝよしなりなかはゝ過半なり
霜にむすほゝるゝは思ひしほるゝ也一説に半はと
いふを源と少將とあひかねて思ひむすほゝるゝと
いふ説あり如何　弄かくのことし　聞云只今とは
れ參らせてたのむ心も又物おもひもそふ故に思ひ
むすほゝるゝとなり　箋聞荻もさかりなるやうに
は風のもてはやす過半霜にむすほゝれたると也
手はあしけなるを　秘此軒端の荻は何も當世樣にて
さのみ然へき人とも見えさるよし委見えたり　聞
云あしき手のつくろふは猶あしきと云をしへなり
しなゝし　是まて荻の手の事也
ほかけに見しかほ　碁うちし時の事なり
うちとけてむかひゐたる人はえうとみはつましきさ
まもしたりしかな　箋云此段は藏人少將の心中を源
の察したまふなり此軒端の荻のさしむかひは人ひ
とりなれは少將のさためて酩酊（斟酌イ）すへきとなり
心はせありけもなくさうときほこり　荻のさまなり
何の心深き事もなくあさ〳〵とにくけもなき人さ
まと也
猶こりすまに又もあた名　河古こりすまに又もあた
名はたちぬへし人にくからぬ世にしすまへは　箋
云おほし出るににくからすといひて此引歌奇特な
り　いま夕貌上に物ごりし給へとうき世なれは又
こりすまの心あるよしなり又も此道には名たつへ
きとおもからぬみ心とおもひなり給ふなり
かの人の四十九日　秘箋いつくにても訓によむへし
花十月四五日の間四十九日にあたるなり　箋云又
本へ立かへりて夕顔上の事を書なり　夕貌上の列
傳なれは別人の事相交へき事ならねともそれは文

章の文なり史漢にも此類あり
ひえの法花堂にて　箋河李部王記云天慶八年正月十
八日室正五位下藤寛子卒二月八日當三七日於叡山
東法華堂修諷誦布施名香一褁僧施錢萬百文篁か
日記云此男の涙盡せすなく其なみたを硯の水にて
法華經を書てひえの三昧堂にて七日のわさしてけ
り　法華三昧堂在北觀西院弘仁三壬辰四月五日結構
秋七月上旬土木之功甫就被行法華長講延暦寺縁起
略之
さうそくよりはしめて　聞書さうそく布施の料なり
御ふみのしにて　箋源の侍讀したる儒者なり
もんさうはかせ　河文章博士なり　箋云文章生の翟
學業をへて四品の後博士に任するなり
くわんもんつくらせ給ふ　箋云源氏の自作の願文を
文章博士に見せ合せらるゝ義也しかれは文章博士
めしてといふ所に句をきりて心得へきなり　箋云
願文自作之例河云清和天皇貞觀九年勸學院南邊更
建一院號延命院自制願文云々　箋家室之四十九日
願文之例　花云重明親王家室藤原氏四十九日願文
後江相公朝綱書之見文粹詞云生者必滅釋尊未免栴
檀之烟樂盡悲來天人猶逢五衰之日云々　聞書栴檀
に五衰と對したるは栴の字千の字の音を借と云々
その人となくて　夕顏上をあらはさぬなり
あはれと思ひし　秘妙なる語なり
阿彌陀佛にゆつり　箋云諸宗の成佛は自心開發の義
なり彌陀一佛超世之悲願は他力本願なれは彼攝取
不捨にまかせて讓るといへる義甚深なり　箋聞四
十九日の忌日佛は東方藥師なり故に西方の彌陀を
對するなり法華普門品には觀音の事を説給ふにむ
かひの無盡意菩薩を對向に出す類なり云々
たゝかくなからくはふへき事　箋云源自作の願文の
草を儒者の一覽して添削すへき義なきの由を申也
何人ならん　秘箋文章博士の心にあやしく思ふなり
すくせのたかさ　箋聞夕貌上の事をいかなる宿世た
かき人そと博士のいふなり
はかまをとりよせて　前にさうそくとあり
源氏なくなくもけふはわかゆふしたひもをいつれの世に
かとけて見るへき　箋云今日結縁の功德をもつてい
つれの時にかともに解脱の門に入へきとなり　箋
とけては解脱也師説にむすほゝれたる思はいつれ

の世にとくへきと云々　箋ともに解脱門には何時か入へきと云にて此心は自然にこもれり又一義に來生の再會を期し難きなと云說あり然るへからす
　花云來生の再會をもとむる心云々　秘施し給ふ袴に手ふれ給さま也云々然へし　私云此義弄同箋聞同　私云箋の分註之他の說不載之朱墨點如箋
このほとまてはたゝよふなる　箋云四十九日まては中有にたゝよふ心なり　秘四十九日の間は中有にたゝよふの義なりしかれは其誠の生所六道輪廻いまたさたまらす仍造佛造經等の善根を修して善果をえしめんとなり中陰經の說なり　箋云天台宗の心は極惡極善の衆生は中有を經すして直に生所相さたまるのよし存するなり法相一宗の義善人惡人の差別是なし皆かならす中有の位をへて生を轉すへきなり云々
ねんすをいとあはれにし給ふ　源のさまなり
頭中將を　源の見給ふにも思ひ出らるゝなり
かのなてしこ　秘箋此玉かつらなり
かことにおちて　箋此かことはかこつ也語出たらは頭中將にかこたれぬへきゆゑ有間遠慮し給ふなり

かの夕かほのやとりは　彼夕顏のやとりには夕顏上いかに成給ふそと思ふなり　箋不審餘義なき事なり
たしかならねと　箋聞源と云事を大かたは知給ふ也
惟光をかこちけれと　秘自然惟光かむかへ取たるかとのうたかひあれともあらぬさまなり云々　箋云上の義然るへからす是は惟光かしるへしてうはひ取たる人有へし是も內々源氏を心當に疑ふ成へし
かけはなれ　堅固しらぬさまにいひはなつなり
おなしことすきありきけれは　惟光かもとよりいひよりし時にかはらす夕顏上の事をしらぬさまにてわたくしのかたらひ事ともいふさまなりしらぬさまをみせんためなり
もしすりやうの子ともの　秘箋受領の子ともの夕顏上をとりて頭中將をおちてやかて任國へ相具してやくたりけんとせめての推量なり
此家あるしそ　弄揚名介妻は嫡女歟又一人は筑紫に住つゝ一人はのほりき　秘箋同　箋玉かつらの卷にみゆ云々
右近はこと人　秘箋まへにいへることく右近はこと

乳母の女なりされは心をおきてしらせぬとなり
右近はたかしかましう　古郷の人のいはんさまをおしはかるなり
君も今さらに　源も今さら人にしらせしと思ひ給ふゆゑにかたく右近か古郷へいはぬとなり
わか君のうへ　河玉かつらなり女子をもわか君と云事年わかき心也　私云故郷へ夕顔上の事をしらせしとて音つれぬ故右近も玉かつらの事をえきかぬなり
あさましく行へなくて過ゆく　箋云此かきさま玉かつらの巻の筆勢をあらはすへき爲と見ゆと也
君は夢にたに　源の夕顔上を夢に也ともみたきと也
此御法事し給て又の夜　箋云法事相通する義分明也
ありし院なから　河原院なり
そひたりし女のさまも　箋云さためて此例有へし勘へし云々河原院にて源の見給し夢のさまなり
あれたりし所に住らん　聞書あれたる所には住つきたる物なとも必あるなりそれも源は守りつよき人なる故に此人に取つきたるよとおもひ給ふなり
神無月ついたち頃　箋聞必朔日にかきるへからすと云々　秘箋伊豫介任國下向の餞別をおもてむきにて別て沙汰あるなり下心ある故なり
たむけ　河幣禮又醮禊餞別の送物なり　又手向或酹祭禮具なり
又うち〳〵にも　秘箋空蟬のかたへなり
くしあふき　聞書云くしは櫛なり物のとゝこほりたる所をすぢをやる物なり扇は逢と云心なりいつれも祝したるなり　河箋云帥隆家くたりの時中宮より餞に扇をつかはしける　新古「涼しさはいきの松はらまさるともそふる扇の風なわすれそ
ぬさなと　河藏臚羇中にては道祖神に手向る故に旅行の人にこれを送る事古來の義也黄帝四十人餘子あり最末の子好旅遊敢不留宮中遂於旅途死其時誓曰吾爲神可守旅客其名號遊（逝イ）子今道祖神是也仍羇旅の人に餞を送る事は此故なり餞別の所を祖席と云又此神をさへの神とも手向の神とも云なり　箋の分註之
かのこうちき　秘箋空蟬のぬきすゑしたる薄衣を取て歸りしを今返しつかはすなり
源氏 あふまてのかたみはかりと見しほとにひたすらそて

のくちにけるかな　河古あふまてのかたみとてこそ
とゝめけめ涙にうかふもくつなりけり　箋云さり
とも逢夜もやとそれまての形見にとゝめしうす衣
の袖くつるまて我思ひのいたつらに成にけるよと
也　空蟬のかたにあらは此袖はくちましきの心も
有へしひたすらは一向になり　秘同
こまかなる事とも　花草子地なり　箋文おほければ
のせすといふ義上にみゆ此巻の筆法なり
御つかひかへりにたれと　うす衣の返事はかりは内
内にて小君して奉なり

空蟬返
蟬の羽もたちかへてける夏ごろもかへすを見てもね
は泣れけり　箋云河海にあり薄衣に冬のさうそくを
添てつかはしけるをさてたちかへてと云歟云々
箋云此義ならは今返遣されし薄衣は夏衣にて時を
失へり我身の有さまかくの如しと音をなくといふ
にや又の義は衣を返すは不逢人のゑわさなれはか
へすを見ても音をなくと云歟　花もぬけの衣は夏
のこうちき也旅のさうそくは冬の衣かへのさうそ
くをてうしてつかはしたる也
おもへと　秘箋おもへとも〳〵なり深く思時の詞な
り源の心に空蟬の事を思ひつゝけ給なり此段空蟬
か心に見る義は非なり
けふそ冬たつ　箋云九月の末なるへし　花箋立冬也
河海にたつのたの字聲を濁てさしたる如何たの字
清へし以上秘箋同

源
過にしもけふわかるゝもふたみちに行かたしらぬ秋
のくれかな　箋云花鳥に過にしは夕顔上けふ別るゝ
は空蟬の事是には十月の歌なるを秋の暮哉と詠る餘
情比類なしといへり道の好士可思之云々總別春と
秋との中に夏と冬とこもる也　河拾遺には雜の春
に夏を混し雜の秋に冬をこめたり　箋云此義非正
義哉只九月盡の歌と分別すへし其故は上の詞に伊
豫介神無月朔日頃にくたるとあるはあらまし事な
れは當時今十月にはあらす又けふそ冬たつ日なり
けるもしるくといふも九月中立冬の節の日をいへ
り然れは是も十月に非すけふわかるゝといふは九
月盡秋の別の事なり四十九日も過秋もけふの空に
とちむる別にもよほされて哀傷の心切なれはかく
詠し給なり過去の人も今日行秋も二なから往事渺
茫として總て夢に似たるなり若けふ別るゝと云に

空蟬か事をふくむへくは詞書に其何有へきを伊豫介下向の事は書もらしたりこまかなる事ともあれとうるさけれはかゝすといへり物語のうへの證據分明也其上此卷は夕顔上の列傳なれは卷の終を夕顔上の事にてかきをさむる旁以九月盡哀傷の歌と治定すへきなり然れは秋の暮といへる其わつらひなき者歟　河海に齋宮の女御集に「過にしも今行末もふた道になへて別のなき世なりせは以上箋の分註也　秘には花鳥の說をのす河弄の義等略之

猶かく人しれぬ事　箋作者の批判詞也　秘是より草子の地なり　今案此段は帚木の發端の光源氏名のみこと〳〵しうといひ又かくろへ事をさへ末の世にいひつたへける人の物いひさかなき事よと侍り又こゝにあなかちにかくろへ忍ひ給ひしもいとほしくとかける悉皆帚木の始よりこゝにいたりて源氏の好色の事をありのまゝにかきあらはすと見えたりいかさま此一段は帚木の發端を結すると見えたりかやうにかけて見侍れは心甚深者乎　箋云是も空蟬の事にあらす夕顔上の事なり　師說今案云此段帚木の發端に名のみこと〳〵しう又かくろへことをさへかたりつたへけん人の物いひさかなさよ此卷にあなかちにかくろへ忍ひ給ひしもいとほしくと書ける悉皆帚木の始より此卷に至りて源の好色をありのまゝに書あらはしけるなるへし然らは此一段帚木の發端を結する語と見えたり云々箋云此卷の終の一段此物語一部の事をいふ帚木以來とはかりは事せはし此卷の次に一部の五十四帖貴賤をえらはす善をもつくろはす惡をもかくさぬ由を述たるならし

かやうのくた〳〵しき事　箋はしめは隨分用捨をくはへて惡をかくすへきの心なりしかれとも史官の法度實錄なる故に私ありの樣に有て其諱をのこさすかくとなり　花の義同之　私云花に本には事多かるとは別にくはしく書たる一本あれとも是は其內をなほ折中して省略してうつしたるといへる也みなつくり事なり云々此本に事おほかるといふは河內の本にある歟青表紙に此詞なし

かくろへ忍ひ給ひし　秘夕顔上空蟬なとの事なり皆此事をはもらすましく思ひたれとも源は桐壺の帝の御子なるかよき事はかりにことえりしてもらさ

はわたくしある誹侍へし又實錄の心にたかへりさ
れはありのまゝに志るすとなり
あまり物いひさかなきつみさり所なく　祕　あまりに
又ありのまゝに志るすとてかきすこしたる事も有
へしとなり　聞書云筆者の用捨なり云々　箋いふ
物は咎なくといふ本文あれとも金言耳にさかふな
れは中過しも有へきといふなり

岷江入楚第五　若紫

十七歳十月まて任宰中將

源氏君瘧病事
三月三十日爲加持向北山聖坊事
遊山之次臨望某僧都之姉尼等隱居所之事
御供人之物語國名所之次申明石入道女有樣事
小柴垣垣間見之次見十歳許女子給事　紫上是也尼君則紫上外祖母也
僧都來告源氏君渡事於姉尼公事
僧都奉請源氏於我坊事
僧都語尼上并姫君之樣事
同時源氏對面尼公之次見姫君給事
同日北山聖坊奉加持并僧都參候事
聖人奉獨鈷僧都奉贈物等事
源氏遣消息於尼公許事
頭中將左中辨以下參御迎事
僧都持來琴源氏彈給事
源氏君歸京向葵上宿所事
又之日遣書於北山尼公之許事　尼上イ

二三日後又遣惟光於北山相尋少納言乳母事
藤壺宮煩病退出給事
源氏憑王命婦密通事
藤壺宮御懷姙事
あつきほとはいとゝおきもあかり給はす三月は
かりになれはといへりこれは六月の事也しから
は御懷姙は四月よりの事なるへし
源氏見夢遣人條之事藤壺の事也
秋七月藤壺參內之事
九月比源氏過六條京極之次故按察大納言舊宅之事
紫姬君之外祖母之異也
十月朱雀院行幸舞人以下沙汰事
北山尼公卒去事　爲九月廿日事
源氏宿装上京極宅逢少納言乳母給事
翌朝於歸洛之路使隨身歌妹之門事此女不知誰人也
遣惟光於京極家問姬君給事
源氏誓攬和琴歌常陸歌事
源氏自出迎取紫姬君於二條院事
少納言乳母同乘西對寄御車事
姬君手習之次書源氏返事給事

若紫　以歌爲卷之名

手につみていつしかもみむ紫のねにかよひける野へのわかくさ　此歌をもて卷の名とせりわか紫とつゝきたる詞は見えす式部卿の姫君を紫上となつけ侍るは桐壺女御のゆかり尋出たるによりて也されは此卷の詞に秋の夕はまして心のいとまなくおほしみたるゝ人の御あたりに心をかけてあなかちなるゆかりもたつねまほしき心もまさり給なるへしとあり紫の上の事を此卷にはしめてかきいたしたり源氏十七歳の三月より冬までの事みえたり

わらはやみにわつらひ給て　河 卷頭の詞　瘧病(わらはやみ)　瘧俗言發心地(をこりこゝろち)　瘧疾二日に一度發也　花 瘧瘧なり寒熱あり毎日にやむをは日おこりといふ日まぜをは隔日瘧といふ　秘 箋云瘧音虐通作瘧又病也一云小兒口生瘡通作瘍　箋 夕顔卷には河原院にて靈氣にあひ給ひし故也

よろつにましなひかちなと　花 ましなひは厭術也さま〳〵の事ともあり杜子美詩の手提髑髏血といふ句を誦しても瘧はおつるといへり加持は眞言教經陀羅尼のちから也　抄 花鳥杜子美詩の手提血といふ句を誦しても瘧はおつるといへりと云々これは五音の句に似たりこれは杜子美か花卿歌云子璋髑髏血模糊手提擲還崔大夫といふ句也　ましなひは厭術也人々ましなひわつらひしをとは俗語にかたのことくものをさたするをましなふといへり沙汰しましくりておつるなるへししかれはましなひといふはかろくわつらひといふは重き貌也如此同し詞を用かへつるは此物語のならひ也かくの如く分別すへきをや　箋 杜子美花卿歌云子璋髑髏血模糊手提擲還崔大夫注梓州副使段子璋反以兵攻東川節度李奐敗北於綿劍南節度崔光遠率其弟將花卿定討之子璋既誅卿定特功大掠肅宗聞之怒由是不見推用公作花卿歎蓋痛惜之也　詩の心は首を斬たと云はかりの事をかくの如くいふ也　手提擲二還崔大夫一　心華黠也紅雲此黠を用可也　手提擲二還崔大夫一　此黠語不合也云々　秘 此句古今瘧のおつるといふ物也又師說云ある人此句をもて瘧をましなふにおちす杜子美夢に告て云花卿か歌は温句也寒瘧を治すへしといまの瘧は熱也寒句をもてこれを治すへ

し其句に云夜深經二戰場一寒月照二白骨一此句にて則
おつと云々
きた山になにかしてら　箋北山　河箋何有山萬　河此
寺鞍馬寺也昔四十九院有けり佛法盛地也云々箋河
原院をなにかしの院と云同體也　六帖歌に「さゝ
浪やしかの山ちのつゝらをりくる人たえてあれや
しぬらん　此歌につきてつゝらをりは志賀寺かと
云說有僻事也鞍馬のつゝらをりは淸少納言枕草子
に見えたり　鞍馬寺の事　舊記云治部大輔藤原伊
勢人桓武天皇御宇造東寺行事間取騎用馬於鴨河原
放失尋跡行逢此由奉拜毘沙門天始建立此寺云々
箋水鏡云延曆十六年藤原伊勢人といふ人貴船の明
神の御をしへにてつくりたてまつりし也　弄秘に
くらまとみゆ云々
かしこきおこなひ人　箋系圖の外の人也
こその夏も世に　秘箋世間に流布せし也　秘常に世
にあるさま也　弄同
人々ましなひ　聞書此段の義稱名はしめて見出さる
と云々　箋上の詞によろつにましなひと云は厭術
の事也此次の詞は世間の口まねのことく諸人わつ
らふの義也然はましなひの詞は輕き心わつらひの
詞は重き心有へし　秘前に註す
やかてとゝむるたくひ　北山のおこなひの加持して
おほく瘧をおとしたると也
しゝこらかしつる　秘箋しそこらかす也瘧はしそひ
らかしてはおちかぬる也　河爲發世俗にしそひら
かすといふやうの心也
とくこそこゝろみ　北山のひしりの德心をこゝろみ
られよと人の申也
おひかゝまりて　河老屈　箋秘同箋河に圓融院御瘧
疾給之時召天台座主慈惠僧正奏老病無術之由參尋
三之後隨召來入奉加持即御平愈花に圓融院瘧痛を
いたはらせ給時天台座主良源僧正を召れし事は天
元四年の秋の事也小野宮右府記にみえたり時人以
良源僧正稱應化佛聽輦車　弄秘に執救阿闍梨二人
其後更被任大僧正云々
むろの戶　室の戶也　秘箋無漏の義也
やゝふかういる所　是より鞍馬への道のさま也
三月のつこもり　河やよひとよむへし自餘の月も同
之　定家卿說云々

山のさくらはまたさかりにて　弄本歌を引に不及おもしろき時節也しかうして猶秘箋等に此歌をのす河「里はみなちりはてにしを足曳の山のさくらはまたさかり也　躬恒　聞書には一故郷の花はちりつつみよしのゝ山の櫻はまたさかりなり　赤人此二首河にのする所也　花今の世にもくらまの花は都の花散はてゝ後さかり成といへり

いりもておはする　秘景氣たくひなし

所せき御身にて　箋秘河にひろき心也云々あやまれり高貴の人は其身かろからさる故にかへりて世間せはきの義也

寺のさまも　箋鞍馬寺昔は四十九院之處佛法盛成地也

深き岩の中にて　河古「いかならんいはほの中にすまはかは世の憂事のきこえこさらん　河佛弟子須菩提住西大石窟箋　呉苑云陳思王遊漁山忽聞岩裏有誦經聲清遠寥亮使解音者寫之爲神仙之聲道士効之作歩虚云々寒山詩云余家有一窟々中無一物云々

あなかしこや　秘ひしりの詞也かたしけなき也

一日めし侍しにや　源とひしりの見しりて一日めしつるに參らさりし事を申す也

げんかたのおこなひも　河驗方也山伏をは修驗道と云　箋修驗也　聞書驗者なとを立るは眞言の本意にてはなきと也　秘年老ては現世の祈禱なとは本ともせす後世の勤をこそ本とはすへけれと也　私云此義如何但世の事を思ふ給へねはと云に當れり

大とこなりけり　大徳なり

さるへき物　河符也すかせはのまするなり世俗に飲入るをすき入るといふなり　箋符也河にふんつくりてと云々　符は藥を飲か如し內心の不調故煩はあるそ佛力にて加持して內心調る義なり　秘符となるへし河內本にはさるへきふんとあり弄同

すかせ　秘箋食字也吸心也桧の葉をすきてなと云に同し加持なとまゐる　箋佛日影後衆生之心水謂加衆生之心水持佛日謂持　私或人云衆生の心水清淨なる時佛日の光自然にうつる也

僧房とも

つゝらをりのしもに　秘箋に此詞によりて志賀寺と見るはあやまれり　河に清少納言枕草子にとほくて近き物くらまのつゝらをりと云々　滅陜九折

盤折　通ニ巖嶺ー白氏文集遊ニ悟眞寺ー詩以上河箋に載之

おなしこ柴なれと　弄萬の事しさまによりてやさしくみゆる也　秘僧都の房のしつらひ可然さま也

きよけなるやらうなと　河屋廊

なにかしの僧都　箋紫上の御母の叔父尼公と兄弟也

河榮花物語に覺忍僧都を北山の僧都と號す此義を模す秘箋同

この二とせ　秘箋に三年禁足のよし末にみゆ

心はつかしき人　源の詞也僧都をさしての給ふ也

あまりやつしけるかなきゝもこそすれ　秘箋に源氏の忍ひてわたりたまへるほとに聊爾なる御さまを僧都のきゝもこそすれとはゝかり給へる詞也　箋云高き處にて物いふ聲近くきこゆへきと云にや

きよけなるわらは　弄僧都の童なるべしと云々又箋尼公のかたの女わらはにもや　秘箋尼公の女わらはなるべし

あかたてまつる　閼伽閼伽は梵語也佛前を清むる水也寅の時に必吸物也此時分に水に湯氣の生する也醫書には井花水といふ

花をり　箋時花とて時々の花を佛にたてまつる也

かしこに女こそ　箋源の供奉の人々たはふれいふ也

是にて前のわらはゝ尼公の女わらはときこえたり

おりてのそくも　是も御供の人とも也さて女子ともわかき人などもありとくはしく見たていふ也

君はおこなひし　源也　念誦などのさま也

日たくるまゝに　秘おこりは心にまきるゝ事のあれはおこらぬ事もある也

しりへ（うしろイ）の山にたち出　うしろの山也　河門前秋水後秋山終日蕭々晩景閑　長谷雄卿　秘源の立出給ふ也おこりをまきらはさん爲に遊山し給ふ也

かゝる所にすむ人　秘源の詞也

これはいとあさく　秘さふらふ人の詞也聞書に是は良清か詞歟云々　私云只誰ともなくて可然歟

人の國　箋他國也　秘河他國也異朝の事にはあらさる也伊勢物語に人の國にても猶かゝる事なんやまさりけると云に同し

御ゑいみしう　秘箋源すまにてゑをかき給ひしことをこゝにていひ出したる也弄同

ふしの山

なにかしのたけ　花なにかしのたけは惣して所を定むべからず別しては淺間の嶽をいふへきにや富士淺間を對していふ故也　箋　花鳥淺間當河海大峯釋迦嵩云々　秘弄に花の義可然歟

よろつにまきらはし　秘此段悉皆良淸か物語也　箋同之　箋良淸か父は前播磨守也　國々傳案内者（何國の人）也　私云又にしの國のといふより良淸か物語とみるへき歟

ちかき所にははりまのあかしこそ　花是よりは藏人大夫良淸か物語也又良淸は播磨の守か子なるにこそ國の名所をよくしれる也　私云猶前の義然へし
　箋須磨明石の兩卷かき出すへき詞の序也

いたりふかきくまは　河阿曲隈

ゆほひか　弄ひろき心也ひの字一禪は濁てあそはしきと也或ゆほいかと云々　河寛ひろき心也　箋秘同　私云何の手のこもりたる景もなく海の面のひろき體こと所に似す面白と也いたりふかきくまとは手のこもりたるをいふへし

かの國のさきのかみ　箋秘播磨前司也　明石入道のこと也しほち　河新發意ははしめて釋門に入の名也最初發心の義也經に新發意菩薩といふがごとし　花御堂の關白出家し給うては入道殿と申き是より出家の人の入道といふ事をはゝかりて多田滿仲をは多田の新發意と申侍り以上　箋秘兩抄にくはしと云々

家いといたしかし　箋河にかたはらいたきほと也といふ也　秘事過たる體を云也以上　弄　箋同

大臣の後にて　箋秘亜相の後胤にて次第の昇進をも理運の人と也明石入道の事也

出たち　河身の出身をもたて出仕をもすべかりける也

よのひか物にて　ひかみたるなといふやうの心也

近衛中將をすてゝ　秘中將などにて宮中にちかきまもりの官こそねかふ所なるべきに近衛をすてゝ國守にならん事は頗無念の事なるへしされは世の人にたかひたるをひか物とは云り　箋近衛をさへとのへもる身のみかきもりをさをさしくもおもほえすゝ忠岑かうれひしに現外國に近衛中將を申かへむすとひかめる心也　箋云只濫職に心の有にや私云濫職とは得分のおほき官をいふ受領は今の世

の代官なといふかことし　近衛中將任國例　河藤
原實方朝臣長徳元年正月十三日辭左中將任陸奥守
即日還昇　此外例猶可勘　秘山蔭中納言辭二中將一
任二備前（心イ）守一下向之由見二三代實錄一　箋云實方に配
流の名也例たる可らず山蔭中納言の例也　以上箋
の義註之

おくまりたる山すみも　河奥日本紀　文選に奥の字をふ
かきとよめり　叢雲奥（フカシ）これも山ふかき心也

海つらにいてゐたるひかく〳〵しき　面目なきとて出
家入道する程ならはふかき山なとにこそこもるへ
きを此すまゐのさまもひかみたる也

けにかのくにのうち　秘海つらならてはこもるへき
所もなきなり　私云是より海つらに家ゐしたるこ
とわりをいふ

ふかき山里は　深山とは妻子なとも住かたき故にこ
の海つらにあると也

心をやれる　只今のすみ所隱居とは見えす面白く與
をやるへきすまゐのさまと申也

さいつころ　河近曾也萬にをとゝひのさいつころと
有一昨日のさき也箋同　秘箋に良清か父播磨守に
て有し時の事也

京にてこそ所えぬやう也けれ　弄心えぬと兩義有
秘京にてこそ世のましらひもなけれ此國にては國
の守なるによりていかめしくすみなす也

そこらはるかに　河幾多（ソコラ）日本紀　幾図若干（ソコハク）同心也

さはいへと　弄人にもあなつられてなといひしかと
さすかに餘慶ありしと也　秘國守なりしかはゆた
かなる心かまへもあると也　箋上のあなつられて
の詞をうけていへり

さてそのむすめ　秘箋源の問給也　箋明石上是也

けしうはあらす　秘良清か返答也

代々の國のつかさ　箋前播磨の國司を云國司は一任
四ヶ年とて國司に成ては五年目にかはる事なれは
代々のつかさとはいへり

さらにうけひかす　秘諸國守は一任四ヶ年にてかは
る故に代々と云也　さやうの任におもむく人こゝ
ろおはするもあれとうけひかぬと也

我身のかくいたつらに　秘入道の我身のしつむ事さ
へあるにと也

この人ひとり　秘此娘をたにいたつらになさしと也

おもふさまことなり　秘箋此入道夢のつけあるによりて國母なとにもなさてとおもふ望ある也

われにおくれてその心さしとけす　入道死去の後は其心さしとけかたかるへしと也

おもひおきつるすくせ　入道の心に夢の事を思ふ也もしそのおもふにたかはゝ海に入ねと也

ゆゐこんしおきて　是は入道の死去しての遺言にはあらす平生入道のなからん時の心もちひをいひをしふる義也

君もおかしと　源也

人々海りうわうの后に　海龍王也　秘箋只海に入ねといふによりて龍宮の事をとりあはせていふ也花鳥に青龍天女の本縁をひけりそれにおよはさる事也　私云河花の義略之

いつきむすめ　常にいつきかしつくと云義也　弄一禪いつきとあそはしたり

かくいふは　此物語中人の事を云也　秘箋良清也

くら人よりことしかうふりえたる　河巡給の心也
花正月五日の叙位に六位藏人はかならず巡爵とて從五位下に叙せらるゝ事也かうふりとは爵の事也冠位の事河にくはし　秘箋今年巡爵にあつかりて良清叙爵せし也

入道のゆゐこんやふりつへき　秘此良清は入道のゆゐこんやふりつへき心あるへしさてたゝすみよるとはさやうの下心にていひよるならんと人々のたはふれいふ也

いてやさいふとも　又そこにあるかたはらの人のいふ也いかに然へきよしを良清は申なせとも此入道はゐなかひかみてさしたる事はあらしといひおとす也ふるめいたらんおやにのみしたかひたらんはとよみきるへし　私云したかひたらんはいてやさ云ともゐなかひたらんと前にかへし心得へし花の義略之

はゝこそゆゑあるへけれ　秘良清か詞也　弄系圖には誰ともなし松風の巻に大井の故卿兼明親王の末とみゆしかれは彼女御に准して心うへきにや
秘箋明石上の母族嬉然へき人也　松風の巻にみゆ

なさけなき人になりてゆかは　河後々の國司の事也
河内本作者素寂はにの字を止て了見を加へたる信用にたらす　弄人なりゆかはと兩義也　秘箋今

までは國の守の所望するをもいひのかれつるか此以後自然無法なる國守なとあらは入道の心にも任せしと也人なりゆかはとに文字をのけて了簡の一說用へからす　私云人なりゆかはとは情なき人國司に成てゆかはと云歟用へからさる也
君は何心ありて　源也人々の色々に申すををかしくおほして宣ふ源の御詞也　秘すくせたかはゝ海に入ねといひしこと也　花六帖十六「あまのすむ底のみるめもはつかしく磯に生たるわかめをそかる　弄秘箋此引歌用かたしと云々
たゝならす　これも又源の御心にかゝる也
もてひかみたる　秘源はちとよのつねの人にちかひたる御心なれは（思ふイ）此むすめにも御心とまるへきと人々の推量していふ也
おこらせ給はす　秘今日はかやうの御物語にうちまきれて瘧もおこらせ給はぬと也　箋瘧のおちたると治定して也
御物つけなと　秘箋御物のけなとゝかける前の夕貌巻よりの心をおもはへてことにそのよせあるにや
かゝる旅ねに　源の心に樣變りて面白く思ひ給ふ也

日もいとなかき　猶同し日也はやかへらせ給なんと
　あれは猶日たかく殘るへし
いたうかすみたるにまきれて　弄かゝる所にても忍ひ給源の心つかひ也　秘前に坊なと有所なれは人めを忍ひ給て夕暮の霞たるに立出給ふ用意有樣也
かのこしはかき　前に有し僧都の坊をさしていふ也
人々はかへし給て　是又源の用意ふかし
にしおもてにしも　しもといへるは只今のそき給かた西面なるへし
ちふつすゑ奉りて　河持佛也　幼年なとより一心にたのみておこなひいれたる本尊をいふなり
おこなふあまなりけり　僧都の妹紫上の祖母也
花たてまつる　前にはわらはの花をるとありしと也
中のはしらによりゐて　尼公也
けうそくのうへに　脇息也
いとなやましけに　箋此間わつらひしよし奥にみゆ
かみのうつくしけに　垂尼也
十はかりにや　秘箋紫上也
白ききぬやまふき　花箋うら山吹は面黄うら紅也花山吹は面うすくちはうら黄也

かみはあふきを　ふるき物語にも此物語にもおほくたとへたり　聞書に清少納言枕草子に髪は五重の扇をひろけたるやうにと有

かほはいとあかくすりなし　秘紫のなきなとしてかほをすりたるさま也

何事そやわらはへと　秘此尼公紫上に似たる所の有也

子なめりと　箋源の推量の心也實は孫なり

雀の子をいぬきか　河犬公　箋河に上東門院のうへわらはにこの名あり榮花物語に見えたり　河此物語にもあてきなれきなと有きは公の字也又は君の字也世俗にあねきをはきなといふは姉君伯母君といふ心也内裏女房の詰番に上臈をは何の局中下臈をは何君とかゝるゝ也　爲家卿と阿佛房とゐられたる所へ爲氏卿ゆかれしか椽にてこわつくりてあかり障子をあけていらんとしけるときに阿佛房障子のしりをおさへて一首あそはしたらんときにあけんといはれしに爲氏卿とりあへすあかりしやうしをたちいれていにしへにいぬきかかひし雀の子とひあかりしやうしとおもひしとよまれけり

ふせこのうちに　弄鳥を入る籠をもいへるにや

くちをしとおもへり　紫の體也

このゐたるおとな　まへにおとな二人とあり此人少納言なり

れいの心なし　いぬきをしかる詞也少納言也

さいなまるゝ　河罪なまるゝ也

いつかたへか　雀の事也

少納言のめのとゝそ　秘紫上のめのと也少納言のめのとゝ人のよふを垣こしに源の聞給也さて紫上のうしろみとやかて推し給也

いてあなをさなや　尼公の紫上を憐愍したる體なり

おのかかくけふあすに　尼公のわつらはしき故なり

つみうる事と　河籠繋飛鳥　沙彌戒經　秘箋涅槃經第四金剛身品持戒比丘比丘尼不レ得ニ畜ニ養奴婢牛羊非法之物一

こちやといへは　秘こちへと也ついゐたるは紫也

つらつき　これより紫上のさま也

まゆのわたり打けふり　秘けふりはにほひやかなるさま也

かんさしいみしう　花をさなき時はいまたかんさし

をはせねともおとなに成てかみあけしたらはうつくしかるへきといふ心也　秘花の説如何さまてなくとも只かんさしすへきあたりうつくしくといふ心也　弄花の義如何末の巻にもみゆ箋花の義如何さるはかきりなう　秘さるはとは藤壺によく似たるとなり

心をつくしきこゆる人　箋藤壺に似たる也紫上の父宮と藤つほと兄弟なれは藤壺と紫とはおはめひ也弄同

涙そおつる　源の心中也

あま君かみをかきなてつゝ　わか黒かみをなてすや有けんなとあり

うしろめたけれ　尼公のわつらひかちなる故紫のゆくへおほつかなくおもふ心也

かはかりになれは　秘尼公の詞也よのつねの人は十はかりにもなれはおとなしやかなる物を此君はいときなくましますと也

こひめ君は　秘紫上の母也　此尼公のむすめ也

殿におくれ　秘按察大納言におくれ給しこと也　私按察大納言は此尼公の夫紫上の外祖父也

たゝいまおのれ　尼公のわかなくなりたらはいかかと也

み給ふもすゝろに　源の心也

おさな心ち　紫上なり

ふしめに　秘くすみたるさま也　私云泪なとのこほるゝをまきらはさんとうつふしたるやうの心歟

かみつや〳〵と　河艶(ツヤ)　又光也

尼公おひたゝんありかもしらぬわか草をおくらす露そ消ん空なき　河稚草日本紀　おくらすはおくらかすなり露を我身によせたるなり　弄此歌ことにあはれなり云々　秘箋尤あはれふかしわかさきたつへきといふ也　私云きえん空なきとはきゆるもきえやられしと也ゆくそらもなきなとつねのこと也

又ゐたるおとな　少納言なるへしけにとは紫のおとなしからぬ事をうけたる詞歟只尼公の歌のさまをけにといへる歟

返少納言はつくさのおひ行末もしらぬまにいかてか露のきえんとすらん　秘箋なし　箋云生ゆく末も見とゝけらるへきと也　いかてかの字に眼をつくへし　私云花に伊勢の初草のなとめつらしきの歌をひけり如

何
僧都のあなたより　秘かやうに歌なとよむ所へ僧都の來りたまふ也
けふしもはしに　此詞面白し案のことく源ののそき給しと也
このかみのひしりの　箋云此上の也兄にあらす
あなゝみしや　尼公の詞
この世にのゝしる　秘僧都の詞世にこと〳〵しくて名のたかきをいふ
いて御せうそこ　秘源へ僧都の音信申さんとて立也
かへり給ぬ　源のひしりの坊へ歸給ふ也
あはれなる人を　秘源の心也源のたまさかの御ありきにもかやうの人を見付給ふにましてすき物の心のまゝのありきをする人はいかにとおほしやる也
おかしうおほす　これまてはかゝる人を見つけたることにつけてすき物とものうへをおほす也
さてもいとうつくし　これよりは紫上のうつくしきちこおひなるをたれ人ならん藤壷の御かはりにも見たきとおほす心のふかくつくと也
うちふし給へるに　秘源也うちやすみ給へる也

よきりおはしましける　秘僧都の弟子使に來て云詞也　秘よきるとは過の字也河海に過也すきおはしましける也云々如何過は渡なりわたり來る心也凡過の字は平聲去聲兩音の字也然れ共よきるの時は平聲也　毛詩第一江有汜篇云江有レ汜之子子歸不以我過ニ云々又山谷詩云近人積水無鷗鷺時有ニ歸牛浮レ鼻過一是皆平聲也　來る心也此類あまたあり
聞書云よきるといふはこちへ來る也　此一本はよきよと言心歟よきおましは世俗によけてなといふ心也のけてゆく心歟
おとろきなからさふらふへきを　秘驚つゝやかて參へきをと也
うれはしく思ふ給へてなん　河憂也　やかて參へきを僧都を訪られぬをうれはしく思ひてなと人しての給也
草の御むしろも　河樹下集　いにしへのいもゐの庭に餘れりし草のむしろもけふや敷らん　天台大師の御忌日に慈惠僧正詠せらる千僧讀一心也又草座草莚同事歟
いぬる十餘日　秘源の詞也聞書いぬるは過し也　と

をかあまりとよむへしいつれも同し
かやうなる人のしるしあらはさぬ　秘効驗あらは仔
細有ましきを萬一驗なくは聖の威徳もいかゝと思
ひ給ふ故に忍ひ給ひしとなり　是も源の用意ふか
き類也
いまそなたにも　僧都のかたへも只今案内仰らるへ
きと思ひ給時分ニ也　聞書只今そなたにも參り給
はんと有是によりやかて僧都の御むかへに參られ
たるなり
すなはち僧都　秘僧都のやかて參給也
はしたなう　源の心也
かくこもれる程　聞書僧都三年こもりのことなとな
り
すゝしき水のなかれも　弄春秋にかきらす涼しく清
て見ゆる心也秘同
せちに　懇切也　ねんころに也
かのまたみぬ人に なイ 秘前に僧都の尼公に源の御事を
こと〱しくいひきかせ給しを立聞給ふ故に今見
おとりすへけれともとおほしなから御出あると也
あはれなりつる　聞書紫の事也

いふかしく　河未審　紫の事をくはしくしりたく思
ひ給也
けにいと心ことに　僧都のおなし柴のいほりなれと
と申されしことく此坊は見所おほき也
とうろなとにもまゐりたり　にもの字心得かたし但
やり水にはかゝり火をともしとうろなとにもおほ
となふら參りたりと心うへし
みやうかうのかなと　名香の香也　花佛にたてまつ
る香を名香といふ牛頭栴檀なといふ名ある香を云
なるへし
世のつねなき御物かたり　弄此時僧都の詞殊勝也秘
同　秘源に世のつねなき事を說きかせ申さるゝ也
すへて僧は俗に對しては必無常の法理を演說する
を禮義とすへし
わかつみのほと　聞書是は源の心世間の罪也
あちきなき　聞書是より藤つほの事と云々　私云只
わかつみのほとゝいふより藤つほのことゝ見る義
然るへし
ましてのちの世　いけるかきりは現世也それは藤壺
の事に心をなやますか現世の苦なりその果が感し

て後世の罪はましておもき苦なるべしとなり　秘源のまして我御身のうへを思ひ給ふ也
かゝるすまひも　源の山住なともしたく思ひ給ふ也
ひるの面かけ　秘のそき給ひし時の事也紫也
こゝにものし給ふは　これより源の紫の事を僧都にとひ給ふ詞也　秘源の詞也夢を見るよしつくり事にの給也
夢を見給ひしかなけふなむ思ひあはせ　かならす夢（イナシ）とそ見るへからさるよし但末の詞に實に夢と見ゆる歟
うちわらひて　秘僧都也
たつねさせ給ひても　此人の事をあさ〳〵（きイ）と僧都の申たるさま僧都に似合ひたる也
故按察大納言は　河養老三年始置㆓按察使㆒　私職原云陸奥者上古以來爲㆓邊要㆒爲㆓其國境廣㆒元明天皇和銅五年九月分置㆓出羽國㆒元正天皇養老二年置㆓按察使㆒令㆑監㆓察兩國事㆒仍陸奥出羽按察使と云
その北のかた　按察の北方は今の尼公也僧都の妹也京にもまかてねは　秘僧都の禁足するをいふ也僧都の禁足にて京へも出ねは妹の尼公のわつらふかたよりなき故に尼公の北山へ來りて居らるゝとなり
かの大納言のみむすめ　源の詞也　秘何となきさまにの給也
すき〳〵しきかたには　好色の方にはあらすと也
おしあてに　前にも紫を此尼公のむすめと思ひ給ひしとありのそき給し時の事也
むすめたゝひとり侍し　是は尼公のむすめはひとりありしかなく成て十餘年になると也これ紫の母君也兵部卿宮北方なるべし
故大納言　按察也
内にたてまつらん　紫の母君を父按察は内裏へ參らせんと思ひしと也
かしこういつき　一段とかしつきたる也
すきさ侍しかは　女を内へたてまつらぬさきに按察のはかなく成たると也
兵部卿の宮なん　藤壺の兄宮也　秘乙女卷には式部卿也紫の上の父宮也
もとの北方　秘本臺ちとおそろしき人也　秘此人の事末に見えたり髭黒の北方なとの母也紫上とも後

まて中よからす見えし人也
なくなり侍りにし　紫の母君也
物思ひにやまひつく　弄法師の詞と見えたり　秘僧都の詞與あり法師なとは物に貪著のなき故にかく思ふもことわり也
さらばそのこ　源の心尼公の子かと紫を思ひたれは孫にて有けるよとおとしつけ給也　秘同
みこの御すちにて　秘兵部卿宮は藤つほの御兄なるは紫をそのすちにて似かよひたると思ひ給ふなり源の心也
人のほとも　秘人からもと云心也　以下源の心也
さかしら心なく　河進心萬　聞書たゝ何事もなき也
心のまゝに　源の今よりをしへたてゝ見たくおもひたまふ也
いとあはれに　秘是より源の詞なり
それとゝめ給ふかたみも　聞書「とゝめおくかたみの子たになかりせは何に忍の露をかけまし　私紫の事を猶たしかに聞すへたくてなるへし尼公のむすめに子はなきかとの給也紫上を子とは大かたしり給へともおとしつけんとて問給ふと也

なくなり侍し程　秘僧都の詞也女子一人侍るとなり
それも女にて　尼公も女子一人有又其子も女也と也これ則紫上也母君のなく成し頃生れ給ひしと也
それにつけて　秘尼公の此事を物思にし給ふと也私もよほしとは紫の事につけて尼公のむすめの事を猶思ひ出し給ふといふなるへしよはひの末は尼公のとしたけたる事也
されはよとおほさる　秘源の心也前にさてはその子也けりとおほしあはせつとありこゝにては弥治定したる也
あやしき事なれと　僧都へは申にくき事なれともなとゝあひしらひたる詞なるへし源の詞也　秘僧都にの給也思ふ心ありてと讀きりてひとりすみにてなんとゝいふにかけて見へき也
またにけなき　秘未又兩義也　聞書未　面白也　花此姫君また七歳はかりなれは似合ぬやうによのつねのいもせの思ひをなして辭退やし給はんすらん只今はその名はかりいひなつけなとのやうならんときをくみての給なり紫上いまたいときなけれはよのつねのことく男女のかたらひなと有へきた

めにてなしと事を分てことわり給詞也
いとうれしかるへき　秘僧都の詞也
またむけに　無下也　御推量の過たるをさなきといふ也
そも〳〵　抑(イナシ)也前にいふ事をおさへて更に云詞也抑の字は則おさゆるとよむ也　秘いまた僧都の詞なり
女は人に　僧都の詞めきたり
なり給ふ物なれは　なれはとは物しやけなといふやうのこと葉也
かのをは北の方　おはは祖母也前にもあり
かたり侍りてきこえさせん　祖母に申てそのやうを源へ又申さんといふ詞也
すくよかにいひて物ごはき　僧都のすく〳〵しきさまなり
わかき御心ちに　源の心なり
あみた佛　僧都の詞也
そやいまた　初夜の時也
すくして　阿彌陀堂の行事過して歟
山風ひやゝかに　弄暮春　山中のさま也秘同

瀧のよとみもまさりて　河に引歌あり之に及はす　秘雨に瀧の音をますと也　山中一夜雨樹杪百重泉なといふがことし　百重の泉とは瀧の事也　瀧のよとみのまさるとはよとみたる瀧が雨に水のまさりて音のみなきる心也おもしろく書り
ねぶたけなるど經　讀經也　弄引聲の阿彌陀經なるへし　私云例時とて聲を引て讀也弄同
すゝろなる人も　何心なき人もと也
ましておほしめくらす　源の心物思ひ給ふ事のおほき比也
すゝのけうそくに　念珠の脇息にあたる也　河枕草子にすゝのけうそくにあたりてなりたるこそ心にくけれ　秘心にくゝやかましきさま也尼公の體也
扇をならし　源の奥へ物の給はんとて也
おほえなき心ちすへかめれと　思ひかけぬ時分なれとも也
きゝしらぬやうにはとて　秘思ひかけぬ事ながら餘りにきゝしらぬやうにやとて少納言の君ゐさり出る也さて人も見えさるゆゑとて又ひか耳にやといひてすこししりそく也つねにあるさまなり

すこししゐきて　弄此詞つかひ面白し用心也
佛の御しるへはくらきにいりても　河從冥入於冥永
不聞佛名法花經　秘詞　所のさまに似合たり
うちいてんこわつかひ　少納言の心源をはち思ふ也
いかなる御かたの　少納言詞なり　秘此出たる女の
いふ也と
けにうちつけなりと　源の詞也　秘みし事也
源はつ草のわか葉のうへを見つるより旅ねの袖も露そ
かわかぬ　秘紫上をみし事なり　私云露のおき所草
の葉のうへなりされは若草をほのかにみつるにひ
かれて我袖も露けしと詠し給へるにや
ときこえ給ひてんや　かやうにつたへてくれられん
との給也
さらにかやうの　少納言詞也
うけたまはりわくへき　わくへきといへるおもしろ
し紫上のいときなきをかくいふ也
物し給はぬさまはしろしめしたりけなるを　秘僧都
も大かたは物語申されぬへきをと也たりげなると
は大かた申されてありけるなりといふ也　僧都の
大かた申たりし心也

おのつからさるやうありて　秘源の詞也　源のかく
の給は心もちあらんと思ひ給へと少納言にの給也
いりてきこゆ　かく源のの給ほとにいひ傳ふる也
あないまめかし　尼公の詞
よついたる程に　ちとおとなしきとや推量し給ふら
んと也
さるにてはかの若草を　秘花鳥にくはし　花源氏君
の小柴垣のかいまみし給ふ時祖母の尼公のおいた
らんありかもしらぬ若草と口すさみ侍しを源氏の
君のきゝ給て初くさの若葉の末をみつるよりとの
給ふを尼公はこれをしり侍らていかてか聞給ふら
んとあやしく思ひ給へるはまことに理也　聞書に
紫を源のおとなしき人かとおもひ給へはまた生た
らんありかもしらぬの口すさみをしり給へりされ
はいときなき程をはしり給ひぬらんと也又其口す
さみをはたれか申つらんとのそき給へることをし
らて色々に不審する也
ひさしうなれは　前の色々の不審に逗留のゆきたる
をおとろきて返歌のおそくては曲なきと御返しを
する也　秘程をふるはなさけなしと也

河尼公
まくらゆふこよひはかりの露けさを太山のこけにく
らへさらなん　弄若草をの御歌をすき心にはとりな
さぬ返し也み山の苔とは袖をよめる也　花高光集
「おくやまの苔の衣にくらへなんいつれか露はこ
ほれまさると　尼公かの初草の若葉のうへはとか
くのあひしらへに及はぬ事なれはたゝ旅ねの袖も
露そかわかぬはかりの返答を申給へる也そなたの
御旅ねは只今夜はかりにてこそあれ我山住の袖を
おほしやれかしと也　此外の義　弄に同し
ひかたう侍る物をと　秘引歌なし「夕されはいとゝ
ひかたきわか袖に秋の露さへおきそはりつゝ此歌
かなふへき歟となり　花み山の苔はいつも露けき
なれはひかたくといへりこゝの詞にかなへり古歌
さためて侍らんかし聞書右の歌をはしめてひかれ
し也面白と云々
かやうの人つて　秘源の詞也かやうの人つてはなら（ならすイ）
はす（玉イ）直に申たき事あると也　聞書紫の事を申合せ
たき心也　花の義これをのせす
あま君いてひか事　秘此の給をさなき人の事はすち
なきひか事なる物をと也

きゝ給へるならんといとはつかしき御けはひに何事
をかいらへきこえんと　私云きゝ給へるならん今は
直に仰られたきとあるも今の紫の事はあるましき
ひか事なれは詮なき事なり又はつかしき御けはひ
にあひ参らせんもつゝましきとかた〳〵斟酌ある
よしなり二をかねたるとの字にや
はしたなうもこそ　秘要にさふらふ人々の云也
けにわかやかなる人　秘わかきやうなる人こそとて
尼公の出給ふ也
うちつけにあさはかなると　弄一禪源の詞云々さも
やとみゆ問答の詞こゝをうけてみるへし　秘源の
詞也心にはさもとは源の我心にはつきなきやうに
もおほえぬと也　河あさはかは淺くはかなき心歟
佛はおのつからとて　花上に佛の御しるへはくらき
に入てもさらにたかふましかなる物をと宣ふこゝ
に又佛はおのつからとはみつからの心さしのあさ
はかならぬは佛も自然にしらせたまふへきと也
秘わか身のあさはかならぬ志はさりとも佛は照覽
あるへきとなりおのつからとてと云にて讀切るへ
し尼公に對してことえうち出し給はぬと也

けにおもひ給へよりかたき　秘尼公の詞也　源のう
　ちつけにとの給へるをうけてけにとはいへりまこ
　とにおもひかけぬ折ふしの給事なからこれほとま
　てに仰らるゝをいかてかあさく思ひ参らせんと也
あはれにうけたまはる　秘源詞紫の事也
かの過給にけん　秘紫の母のこと也　かはかりにと
　は子のことくにしてはくゝみたてんとの給心歟
いふかひなき程のよはひにてむつましかるへき人
　秘源のいときなき時母更衣におくれ給し事也
おなしさまにものし給　花おなしさまにとは紫上も
　母におくれ給へり源氏のわれも更衣にはなれ給へ
　はたくひになさせ給へとの給也　秘今此紫も母に
　はやくはなれ給ひてみなしこなれは源とおなした
　くひなるへしと也
かゝるをりもありかたくてなん　秘なんとよみきり
　て心うへし　今までついてなくて申さぬと也
おほされん所をも　秘尼公の心をも何かとはゝから
　す申と源のゝ給也
いとうれしく　秘尼きみの詞也かやうにおほしよる
　はありかたくうれしき事と也

きこしめしひかめたる　秘さりなから此ことをおし
　く聞しめしたる歟と也よつきたる年なる人なとゝ
　聞あやまり給ふるかと也いまた堅固いときなき人
　にてある物をと也
あやしき身ひとつをたのもしき人に　秘紫の事あや
　しき身は尼公也
みなおほつかなからす　秘源の詞也たしかによく案
　内をしり侍者をと也
所せうおほしはゝかりて　河これははかなき心に云
　歟　以前の所せうには聊かはるへきか如何　私云
　これも何かと所せくおほしはゝかりける紫のいは
　けなき事も何も様體はよく知給たりさやうの所を
　心せはくきつかひし給ひそといふ義也
思ひよるさまことなり　さまことなるとはいもせの
　道のためにはあらすと也
にけなきことをさもしらて　秘尼公の心也(歟イ)さてうち
　とけてもいらへ給はぬと也　私云凡源の心をさく
　るなるへし
そうつおはしぬれは　秘僧都の堂よりかへり給へは
　源も立のき給ふ也

かしこうイ
よしかうきこえそめぬれは　源のたち給とての詞也
おしたて給うつ　前に屏風の中をすこしひきあけて
とありこれも同し屏風なるへし
曉かたになりにけり　前に初夜といひつれと夜いた
うふけてとあり其後尼公と物語し給へるほとに時
のうつりたる體なり
ほくゐ三昧おこなふせほう　せんほうイ　法華三昧
也　河三昧は梵語也爰に正受と云ひ又は正見とな
つく又法花懺法は南岳の智者大師おこなふ所の法
門也　私云懺法は六根の罪を懺悔して清淨に歸す
ると云義也　花止觀に四種三昧ありいはゆる常行
常坐半行半坐非行非坐也懺法は天台大師の絶イ式讃遊
式つくり給て六時に六根の罪を懺悔する法也
源吹まよふみやまおろしに夢さめて涙もよほすたきの
おとかな　箋なし　私云御法のこゑにうき世の夢も
さめ感も生しけるさまなるへし所に似合たるさま
尤面白歟
僧都さしくみに袖ぬらしける山水にすめる心はさわきや
はする　河さしくみはさしよりになりやかてといふ
心也　花源氏の涙もよほす瀧のおとゝよみ給へる
につきてさしくみに袖ぬらしける山水とは僧都の
返歌によみ侍る也すめる心はさわきやはするは僧
都の我身の事也さて耳なれ侍るとはいつも耳なれ
た瀧の音なれは住山の身は心もさわかぬといへる
心也　又案するに二首なから源氏の君の御歌なる
へしすめる心はさわきやはするとは僧都の事をよ
み給へり下の詞に耳なれ侍りにけりやときこえ給
とかけり　私云花鳥に兩義をのせられたり　猶諸
抄の義與に非す　弄花にこれも源氏の歌にやと云
云如何一本僧都とあり可然歟　秘僧都歌也さしく
みはさしより也我身は耳なれ侍れは聞もおとろか
すと也　聞書に僧都の歌也始て聞給ふ人は瀧のひ
ひきも物すこく耳にそたつらん住馴たる人の心は
さわかぬと也歌心あまりさしめにいひ過したれは
耳なれ侍りにけりやなとあひしらひ申たる詞也
私云歌二首つゝきて間に詞もなき故に僧都の歌に
はあらさるかといへり只僧都の歌にて然へしかや
うの所あまたあり
明行空はいとたうかすみて　所の景氣面白し思ひ
やりて見るへし前に雨すこしうちそゝきとありし

か晴て名殘あるさまなるへし

名もしらぬ木草　花 白氏草堂記云雜木異草盖ニ覆其上ニ綠陰蒙々朱實離々不レ識ニ其名ニ四時一色

にしきをしけるとみゆる　引歌に及はすといへとも

註之　河 元輔集「花のかけにしきをしけることよひ

かなたゝまくほしき庭とみえつゝ

しかのたゝすみありく　秘 春山におもしろきさま也

なやましさも　源のわつらはしき心もなくさむると

なり

ひしりうこきもえせねは（とイ）　秘 弄 僧都の坊（カイ）へ参りたる

とみゆ

こしんなと　河 護身也　護身の法五あり一淨三業二

佛部三金剛部四被甲五蓮花部

かれたる聲の　ひしりのこゑなり　河 歯落ぬれは聲

のすく也ひかめるとは老人の聲の調子にのきたる

心歟云々

あはれにくうつきて　秘 くうは功なりこうの入たる

也東屋卷にもあり　功コウは漢音クウは呉音也

私云薰修の功つもり宿德したる程を云也

たらによみたり　河 陀羅尼は梵語也陀羅尼を漢字に

なすを譯すと云

おこたり給へる　源のおこりのおちたる事也

よにみえぬさまの御くた物　僧都のいかなる珍物も

かなと馳走申すと也谷のそこまてなといへるおも

しろし

ことしはかりのちかひ　花 僧都禁足の事也　秘 前に

も此二とせとあり三年住山の人と見えたり

山水に心とまり　秘 源の詞也

かしこけれは　これもかたしけなき也

いまこの花のをり過さす　花のちらぬさきに又もお

はせんと也

源 宮人に行てかたらん山櫻風よりさきに來ても見るへ

く　弄 ことに幽玄の姿たりと云々　秘 幽玄の歌也

めもあやなるに　源のさま也うとんけのと源をほめ

ていへれはかくかけり歌の心源のもてなしとりあ

つめすくれたるをめてゝ僧都のよめる也

僧都 うとんけの花まちえたる心ちしてみ山さくらにめこ

そうつらね　河 天台優曇花者三千年一現（現イ）前則金輪

王出云々　文句云優曇花者（新イ）斯云靈瑞（花イ）為瑞應

花金輪王出濟求滅少金輪路現此花乃生作金輪王之

先花又云靈瑞花俱遇花故云疑云法華無量劫難聞譬
言如靈瑞者有所以若三千年此花現者何爲靈瑞乎
答云一義云此花開時分應三千年輒得三千年非云出
現　案之優曇花は輪王出世之瑞也故號靈瑞花人壽
八萬歲時節金輪王遶四州其時海水半減するにより
て此花出現する也是を光源氏を待えたるによそへ
たる也詞に時有て一たひ開く也とあるも法花の久
遠時一現の心なり　秘　優曇花此云瑞應　泥洹經云
閻浮提之內有ニ樹王ー名ニ優曇華ー有レ實無レ花優曇
鉢樹之有ニ金華ー者世之有レ佛
ほゝゑみて　源のことま也
時ありて一度ひらく　源の詞也　弄　前の僧都の歌は
金輪王出世の心をもて源に比して申しを源の卑下
の心にて佛世になしてこたへ給へりと云々　一禪
御說には此義なし前の歌の心をうけて答給云々
秘　源の我身を卑下しての給也佛のうへになしての
給也
ひしり御かはらけ　秘　加持のひしり也源の盞を聖に
たまはる也
聖　おく山の松の戸ほそをまれにあけてまたみぬ花のか
ほをみるかな　弄　さしあたりたる心殊勝なり　秘　面
白歌云々山さくら戸をまれにあけての句法なり
私云むろの戸にもまかてすとあれは松の扉をまれ
にあけてと云假合たりかほをみるかなといふ花の
うつくしき心也かほ鳥かほ花なともうつくしき事
也云々かほにおほえ給といふもおなし心歟朝かほ
なといふ朝うつくしき花といふ心歟
とこたてまつる　河　獨鈷也　獨鈷は菩提心の表相也
弄　聖の何心もなくとこを奉るをみて憚（便イ）ありて僧
都も色々たてまつり給也機嫌時宜を思へし
さうとく太子の　聖徳太子也　聖徳太子は用明天皇
の子也　上宮太子とも申す也　河に本朝神仙傳を
ひけり之を略す　河　欽明天皇御宇聖徳太子六歳冬
十月百濟國より經論律師禪師比丘尼以下をはしめ
て種々の寶物をたてまつる也云々但太子の金剛子
の念珠非傳以下に無所見云々　或人云法隆寺に太
子御たから物の中に念珠兩三連今にあり其中に金
剛子の念珠一連あり又彼寺緣起にも見えたり云々
秘　僧都引出物を申さるゝ也
くたらより　百濟國也　イ本ふたらくよりと云々

こんがうしのずゝ　花百濟國より金剛子のわたりたる事は元興寺資財帳第九云喜多迦子金剛子葉百濟國所獻也云々但聖德太子の數珠の緣はいまた見出し侍らすさもありぬへくよりきたれる事をはつくり事にいひなすつねの事也

そのくにより　百濟國より入たる箱也

すきたるふくろに　聞云するゑ也又はすきたる也

河婆利袋われはたはりぬすり袋いまはえてしか翁さたせんとあり　はりは玉也すり袋はすき袋きとりと五香横通のひゝき也

五えふの枝につけて紺瑠璃のつほともに御くすり

河貴布禰は鞍馬寺の鎮守也鞍馬貴布禰の中間に僧正谷といふ所あり藥師佛不動尊靈驗の地也　藥師佛の右の御手には紺瑠璃の壺をもたしめ給ふ僧都のおくりものにこの壺に藥を入てたてまつるも醫王の藥におもひよそへたるなり　弄御なやみによせたり

御おくり物　河贈物也

河君もひしりより　河秘源も皆々に布施をしたふなり

うちに僧都入給て　秘僧都の坊の内へたちいりて尼公に紫上の事を申さるゝ也

たゝいまは　向來（タヽイマ）遊仙窟

いま四五年　四とせ五とせ也

おなしさまにのみ　まへと同しやうの尼公の返事也

ほいなしと　源の心也

源夕まくれほのかに花の色を見てけさは霞のたちそわつらふ　僧都のちひさきわらはして尼公へつかはさるゝ歌也　花かの若草を花にたとへてよみ給へり

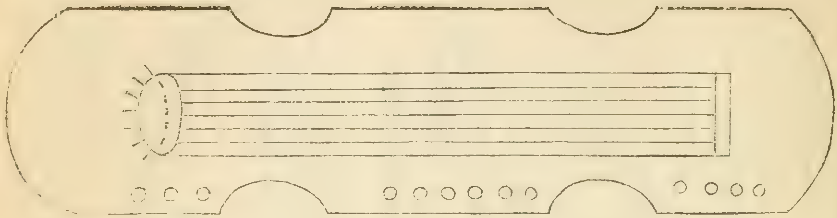
返尼公まことにや花のあたりは過うきとかすむる空のけしきをもみん　花此返歌のかすむるそらは源氏の立そわつらふとよみ給ふ事をかすむるとはいへりおほめかしていふ事をはかすめといふへし　弄空の御けしきをみんとは大かたの花のうへにのみよめる也又下の心も有へき歟　秘源の今とまり給るをみるへき也花のうへをはかり申さるゝ也　私云まことにやは眞實にやといふ也

うちすてかい給へり　尼公の手のさま也　よき手にて艶事かゝらず書たる心也

大殿より　秘葵上の父おとゝ也

頭中將左中辨　大殿の君たち也
とよらの寺のにしなるや　河かつらきの寺のまへな
るやとよらの寺の西なるやえのはゐにしら玉しつ
くやましら玉しつくや以下略之催馬樂のかつらき
といふ歌也　弄山寺にたよりあり　秘同　新古「か
つらきやとよらの寺のえのはゐに猶しら玉をしつ
く月影鴨長明　續古「かつらきやとよらの寺の秋
の月にしになるまて影をこそみれ具氏卿　是皆か
つらきの歌にて詠せり筆のついてに注之
人よりはことなる君たちなるを　秘御むかへに參り
たる人々も皆類なき殿上人なれとも源の御前にて
はけおさるゝと也
ひちりきふくずゐしん　河篳篥　末摘花の卷にあり
さうの笛もたせたり　秘是も隨身なるへし　河笙は
說文云笙十三簧象鳳之身吳云列管以象鳳翼也　或
云鸞翼鳳音　爾雅云夫笙謂之簧郭璞曰列管匏中施
簧管端列仙傳曰王子喬好吹笙作鳳鳴鸞類故通言之
李嶠笙詩曰形寫歌鸞翼聲隨舞鳳哀鸞鳳夫婦
僧都琴をみつからもて參りて　河琴神農作云々元五
絃宮商角徵羽是也加文武二絃合七絃也琴操曰長三
尺六寸六分象三百六十六日前廣天武後挾象尊卑上
圓下方象天地五絃象五行淸御原天皇吉野宮にて日
暮に琴を彈せしめ給うけり前岫のもとに奇雲聳け
り神女降りて曲につきて袖をあくる事五廻天皇の
外餘人不見うたひて曰く「處女子かをとめさひす
もからたまをたもとにまきてをとめさひすも　こ
れ五節の濫觴なりをとめの卷にあり
此器曲上古渡來本朝之條勿論也允恭天武以下令彈
給之由見日本紀其後延喜の比までも間彈する人有
之歟中古以來樂曲斷絕云々此器于今相殘當家者也
又白虎通云琴者禁也禁追於邪氣以正人心也云々當
家者此心によらす源氏わらはやみの時分といひひ
しりのことばにも御ものゝけなとくはゝれるさま
なりといへり僧都琴をあたかちにすゝめ申も若有
心歟　本當家は西辻宮大納言家の御前の事也今小
路云々今出川也

琴圖



長三尺六寸　イ三尺六寸六分云々

七絃也　黒漆樂器也

私云此圖所詮なしといへとも近代不及見の物たる間以或本寫之者也

山のとりもおとろかし　琴書云師曠晋之樂官也工ニ於琴ニ能易ニ寒暑ヲ占ニ風雨ヲ晋平公鼓レ之感ニ玄鶴ニ六十下舞匏巴鼓ニ琴瑟ヲ鳥舞而鳴魚躍而遊矣 列子

心ちいとたへかたき物をと　秘源のかくの給ひつゝ弾し給也

僧都もあはれ何のちきりに　花上の僧都の歌に光源氏をは優曇花にたとへて輪王出世によせたり故に此詞はある也　聞書に日本には輪王の出世したる事はなき也しかれともその日本の末の世に生れあひ給へるはをしき事と也

このわか君をさなき心ちに　秘紫上なり

みやの御ありさま　秘紫の父兵部卿の宮也

うちつけなつきて　紫のさま也

君はまつうちに　秘源の參内ある也

いといたうおとろへにけり　源の瘧の餘氣におとろへ給ひたるをみかとおほしたるさま也

ひしりのたふとかりつる　源の御瘧に効驗有し故也

あさりなとにも　みかとの御詞也　聞書是ほとの聖をみかとのしろしめさゝりけるよと仰らるゝ也

秘阿闍梨は七高山阿闍梨　比叡山比良山近江　伊吹

山美濃國 愛宕山山城國 神峰寺攝津國 金峰山大和國 高木山同上 每年穀五十斛春秋各四十九日修藥師悔過新天下五穀 承和三年定

大殿參りあひ・葵の父大臣源に内裏にて參會也

一日二日うちやすみ　秘 大殿の我御方に源を誘引し給ふ也

わか御車に　大殿の車なり　秘 源をは端にのせ奉りて大殿は奥のかたにのり給ふ也車はおくのかたはさかりなり

もてかしつき　大臣の源をゐかめ給ふ事也

心くるしく　源の心也

殿にも　秘 葵上の御かた也

女君れいの　秘 葵上也　常にうちとけぬ葵のさま也是か源の心にあはぬなり

おもふこともうちかすめ　是より源の心詞なり

よに心もとけす　よにあふ坂のなといへるよの字也

とき〳〵はよのつねなる　秘 源の葵へ申さるゝ詞也

とはぬはつらき　秘 葵上の詞也　源のいかゝとたにとはせ給はぬといふにあたりて葵上をも久しくとひ給はさりつれはおほししれといふ詞也　箋 後撰

戀五おさよりの朝臣としころせうそこかよはし侍ける女のもとよりようなし今は思ひ忘れねとはかり申て久しく成にけれはこと女にいひつきてしようそこもせす成にけれは本院の藏人「忘れねといひしにかなふ君なれととはぬはつらき物にそありける　箋云此引歌不叶

君をいかに思はん人にわすられてとはぬはつらき物としらせん　此歌然へし物にやあらんとかきたる所此引歌相叶哉

うつくしけなる　葵上なり

まれ〳〵はあさましの　源の詞なり　弄秘 たまたまの給ひいつる詞のかやうにとはぬはつらきなとゝいふ事はあるましき也　箋 たまさかの一言も曲なきと也傍におきて時々忍ひたまふ事なとこそとはぬはつらきなとゝいふ恨もあらめ本臺の人には似合さる詞ぞと源のの給なり

とはぬなといふきはゝ　弄 夫婦の中にいふへきさまにもおらすと也

よしやいのちたにこそ　弄 本歌河にみえたり　河「命たに心にかなふ物ならは何かは人をうらみしもせ

む　一禪
うちなけきてふし給へり　源也
なま心つきなき　聞書に草子地と云々葵上の事を源の機にあはぬ故にしひてもの給はぬ也
世をおほしみたるゝ　源の心藤つほの事なと也
このわか草　秘紫上也
兵部卿宮はいとあてに　弄秘あてなるとにほひやかなるとはかはるとみえたり兵部卿宮は匂ひやかなるかたはなしと也　私云あてなるとは高貴とかけれはけたかき心歟にほひやかなるはにほ〳〵と餘情のある心又は愛敬のある心也
かの一そうに　河一族　箋藤つほと一類なる也　父宮藤壷御一腹の故と也　花是は父宮には似給はて藤つほの女御におほえ給ふをあやしく思給ふ也ともにひとつきさいの宮のはらなれはかやうによそならす一物に見え給ふにやとの給ふ也
ひとつきさいはら　秘父宮のかたはかはれともをはのかたへ似たると也そうとはひとつ族姓也
又の日御ふみ　秘北山への御文也
もてはなれたりし　秘是より文の詞なるへし

源氏
面かけは身をもはなれす山さくら心のかきりとめてこしかと　河皆てこし也越にあらす　秘とめては留て也とゝめて來れとも面かけは身をはなれさるよし也　箋云源の心は花に留て歸り來れり我身に何物ありてか面影のまたかくそふやと也
よのまの風　河拾「朝またきおきてそみつる櫻花夜の間の風のうしろめたさに　元良親王
おしつゝみ給へる　箋花河につゝみ文をにて文の事にいへるおほつかなしつゝみ文は宇治の卷にもみえたりたて文にては有ましきにや嫁娶記にみえ侍り艶書のつゝみ様は假令紫或は紅の薄様二かさねに歌をかきておしたゝみて引むすひて墨を引てそれを又薄様一かさねにて藥もしは砂金のことくつゝみて同薄様をほそく切てひねりてくひをゆふなりこれに墨を引ひかさるは兩説也河の義略之
さた過たる　河さたは央也　箋なかさたなといへり央は説文云界中也師古云半なり又萬也許從未央漢武帝賦惜蕃華之未央　河さた過たる半過たる年也百年の半の義歟五十餘の心歟一説云さたは正也中さたも中正也さた過は正過たる也たとへは盛の

此過て也萬葉十八に云「おきつ浪へなみのきよるさたの浦このさた過て後戀んにも是も此比也めもあやとは一說あやめ同事也云々今案其心かはるへし目おとろくの心なり　弄齢の半過たる也

めもあやに　箋怪也驚也

あなかたはらいたや　秘尼公の心也

ゆくての御こと葉　秘是より文の詞也　箋ゆくては便宜也

ふりはへ　秘わさと也、弄河うちはへ也

また難波津をたに　河此詞をつねの人は歌をいまたよますと心得たるもあるにやさにはあらす古今序に難波津淺香山の歌を手ならふ人のはしめにもしけるといへる事いろはのやうに一字つゝかきていまた此歌をたにかきえすとさて返事にそのはなちかきなんみまほしといへる也　秘面かけは身をもはなれすの返歌をは紫上のじたまふへきをいまた手ならひなとをさへとりたてゝし給はぬと也歌のことにはあらす手跡の事也河海に見えたり　箋手跡（習イ）の事也古今序に難波津淺香山の歌を手ならふ人のはしめにもしける云々

返尼公
あらし吹をのへのさくらちらぬまを心とめけるほとのはかなき　弄此歌も花のうへのみによめり源氏君の歌は紫の上君を櫻にたとへてよめり尼公の返歌は面には（一向にイ）花のうへにていへる也一抄　秘に花のうへのみをいへり　箋花の上をいふ　箋云源の文の詞に夜の間の風も云々　此本歌は吹さる風をかねていとふ也況嵐ふく尾上の櫻なれはいとゝうしろめたうとあり眼を付へし

いとうしろめたう　弄前の文の詞をうけてかけり私云此前の歌心の限とめてこしといへる所をかく詠せる也嵐吹尾上の花は散へき事程もあらしその程計を心とゝめ給はんはうしろめたきといへるにや前の義と同しけれと猶いさゝか筆をくはふる也

少納言のめのとゝいふ人あへし　河あるへし

さもかゝらぬくまなき　秘惟光か心也

いはけなけなりし　聞書惟光は小柴垣のもとより源ののそき給し時そとみたるへし源の御覽すれは惟光よくはえみましき也

つき〳〵しう　秘惟光かよくいひつゝくる也　つきつきしからぬをはつきなきといふにて心得へし

方便遊仙窟
御ふみにも　源の御文也
かの御はなちかき　河放書　箋幼少の人手習のはしめに一字つゝかきたる也　花にうつほの物語になかたゝの大將わか宮の御れうにまゐらせたる手本にもはなちかきといふ事あり　一說西圓法師云圓花近也云々たゝそのはなちかきなん見給へまほしき沙汰の外の說也　以上箋　或說に放をは學といふ訓あり其心歟　素寂說此義不用之放書也難波津をさへとありし程に只そのはなちかきのつふ／＼としたる樣なるを見たきよし也

源氏 淺香山あさくは人をおもはぬになと山の井のかけはなるらむ　弄なにはつをたにといひし詞に便りてよみ給へり秘箋同　秘かけはなるはかけさへみゆるの影の字のかたによせたり　箋同　花さきに難波津をたにといへるによりて淺香山をとり出し侍古今の序の詞を思ひよせたる也かけはなるらんはかけさへみゆるの本歌を思ひなから然も又遠かる事をかけはなるとはいへり

返尼公 くみそめて悔しと聞し山の井のあさきなからやかけを見すへき（ろイ）　花これはくやしくそ汲そめてける淺けれは袖のみぬるゝ山の井の水の歌によりてくみそめてくやしとはいへる也心は水をくむほとにちかつきよりてはねたくとくやむ事もあるへけれはたゝかけを見るはかりにてやみなはよかるへきと云心也　秘同　弄本歌のことくやしくやの心有あさきなからやかけをし卑下しはちたる心也影を見すへきとは見えかたしと也　或抄みるへきは源氏をまちみるへき也　箋本歌は同前影みるはかりは淺しと見給ふ共くみそめて底のにこりを見えたてまつらんはいかゝと也　聞書諸本みすへきとあり　青表紙にはみるへきと有

これ光もおなし事を　花惟光歸り參て尼公はいまた同し返事を申させ給ふよしを申也

このわつらひ給ふ　秘少納言のめのとの詞也此尼公此程わつらひ給ふほとにいまちととりなほしてと也

心もとなうおほす　源の心也

藤つほのみやなやみ給ふ事ありて　花三月四月の頃の事なるへし　秘箋同

まかて給へり　弄三條の宮へ也
心もあくかれまとひて　源の心也
内にてもさとにても　秘源の體也内は内裏のきりつ
ほ里は二條院なるへし
わう命婦　箋王氏の命婦也
見たてまつる程さへ　秘源の心まとひの體也
宮もあさましかりしを　花是よりさきに源氏の君は
女御へまゐりちかつき給へる事此詞に見えたり
秘箋是よりさき源氏藤壺へ密通の事有へし此物語
の習ひこゝにはしめてかきあらはせりさて宮もあ
さましかりしをおほしいつるにとはかけり
いみしきみけしき　弄ふかく思ひたる心歟いみしき
は善惡につけてちとすくれたる事をいふ也
なとかなのめなる　花源氏の心に藤壺の女御をなと
少なほさりなる所もましりたまはでかうとりあつ
め世にすくれ給て人の心をのみつゝ（つくさせイ）ませ給ふ事よ
とせめての事に思ひ給ふと也宜とはなほさりの心
也數多所に有詞也　秘いよ〳〵思ひますさまのあ
る也
何事をかは　秘源の心まとひにことの葉もなき様也

くらふの山にやとりもとらまほしけなれと　河拾「墨
染のくらふの山に入人はたとる〳〵も歸りきなゝ
ん　奥入云惣して此歌の心更に叶はすくらふの
山の本歌尤尋の故ある歟末勘出さす　今案暗の字
によせて夜のおそくあくへき心にや　花六帖　くらふ
山くらしと名にはたてれともいもかりといは（イナシ）ゝよ
るもこえなん　今案この歌いたくかなはねともく
らふ山をくらきかたによめる歌なれはこゝの詞に
すこしたよりあるにや心は夜かはやくあくれはし
はらくくらき所にやとりかとらまほしきと也　京
極の中納言こゝの詞をとりてよめる歌　建暦曉戀「こ
よひたにくらふの山にやともかなあか月しらぬ夢
やさめぬと　建暦三内裏戀三首の内「やとりせぬくらふ
の山をうらみつゝはかなの春の夢のまくらや　箋
以上此分を註す　秘只くらき心にて夜をしたふ心
なるへし　弄同　古今一秋の夜の月の光しあかけ
れはくらふの山もこえぬへらなり　定家卿歌三首
花に有此内建暦三年三月の歌に用ひられ侍る光其
よせある歟　河密二通繼母一之事　則天皇后者初太
宗之妾也後爲二高宗后一光仁后井上内親王通二桓武一

給之由見二國史一云々　箋註之

源氏見ても又あふ夜まれなる夢のうちにやかてまきるゝわか身ともかな　弄逢みても實なきかことく只夢のうちのやうなれは此夢中にてきえもうせまほしきと也　秘同　箋云見てもは當意をいふ又あふよまれなるは此以後の事也此夢覺なん時は源の身も夢と共につれて行末なくならはや也かさねてみるへき夢のさめかたからんを歎くあまり也

むせかへり給ふさまも　源の體也

さすかにいみしけれは　秘さすかの字妙也　藤つほの心也源のさまを女御もさすかにあはれと見給ふ也

返藤壺世かたりに人やつたへんたくひなくうき身をさめぬ夢になしても　花源氏の夢中にやかてまきるゝとよみたまへるもわか身を夢になさはやといふ心也うき身をさめぬ夢も同心也さめぬ夢といふはぬるかうちの夢にはあらすはかなき世をいふへし世語に人や傳へんと我身の有さまのためしすくなき事と也　弄趣向面白き歌也なき身になしてもかやうの事は人のいひ傳ふへき事也さめぬ夢とは此まゝ夢のことくにて我身ははてたきと也さめぬ夢とは此まゝに身も滅すへしと也身の滅するにつけては何ゆゑそといはん時に名殘は必す殘るへき如何と也箋云さめぬ夢とは此世の別の事也よし我身は夢にたくへて跡なくなるとも人のいひ傳へて殘らんうき名はともに消ましき也是をはいかゝせんと也

おほしみたれたるさまもかたしけなし　藤つほの御さまを源の思ひ給ふ也かたしけなきは過分なる義なり

命ふの君そ御なほしなとは　秘女なとにまきれてまゐりより給ふ也又はいつくにてもなほしなとぬきかへ給ふなるへし

なきねにふしくらし給つ　河「あふこともいまはなきねの夢ならていつかは君を又もみるへき　右上東門院の一條院崩御の後あそはせる歌也秘箋同　花なきねはなくをうちかへして云る詞也上東門院の御歌も大略同心也　箋云なきねは泣寐なるへし此歌も寢の字ときこゆ花鳥の義如何

御ふみなともれいの御らんしいれす　後朝に源より參らせられたる文をも藤つほの御覧せぬと也

うちへもまゐらて　源は物思ひと又そらおそろしく
思ふ心もありて籠居し給ふなるへし
又いかなるにかと　聞御門の御心也藤つほもなやみ
給ひ又源も籠居給ふをかた〳〵いかにおほするに
かと思ひなけき給ふ也
おそろしくおほえ給ふ　源の心也御門のかくおほし
なけくを源の心中にはそらおそろしく心あやまり
て思はるゝ也　秘源の病腦を又いかにと内におほ
しぬへきもそれさへおそろしきと也
なやましさもまさり　藤つほ也かさねて源にあひ給
へる事を心にうき事におほしなけくから御なやみ
もおもる也
とくまゐり給へき　藤壺にいそき參內し給へとの事
也
まことに御心ちのれいのやうにもかくおほしなげく
うちにはや　御懷妊なり人しれすおほす事といへる
此事也
心うく　御門の御子にはあらぬを藤つほの御心にお
ほしわきて心うく思ひなけき給ふ也
三月になり給へは　花三月をみな月とかける本もあ
り藤壺の女御たゝもなく成給て三月はかりに成給
ふ也　此三四月の頃御心ちわつらひて御さとにま
し〳〵ける時源氏君ちかつきより給しより御懷妊
ありて卯月の頃よりは六月は三月はかりになる也
さるほとにみな月とかける本も心はちかはぬなり
かくてあくる年の二月十餘日に冷泉院は生れ給ひ
十一ヶ月にあたれるにや　秘卯月より六月まて三
ヶ月也一本六月とありみな月とよむへし心は同し
事也或說に六月とあるを六月（ムツキ）とよみて冷泉院十六
ヶ月にて生れ給ふと云說あり不可說の事也十一ヶ
月にて生れ給ふ也箋花秘同し
いまゝてそうせさせ給はさりける事を　秘人々は何
とて奏し給はぬそと申也心しらぬ人々の申事也
わか御心ひとつにはしるうおほしわく　藤つほの心
也　秘源の事也
御めのとこの辨命ふなとのみそ　花諸本に相違あり
一本は御めのと子の辨命婦と云々王命婦は御めの
と也其人の子を辨命婦といふ心也親行本には辨と
命婦との間に句をきりて二人の名とす辨も御めの
と也是と王命婦との二人也又御めのとの辨命婦と

何をきらねは辨命婦は一人の名也　聞書云御乳母此辨命婦とよむへしと云々　私云是又用かたし

秘二人の名也河内本には何をきると云々青表紙には辨の命婦と讀る　弄一人也王命婦かむすめ也但し二人によみて心得よかるへきにや

箋辨と命婦と親子の事也命婦は王命婦なり然るを河内本に何をきりて二人の名とす青表紙には辨の命婦と讀來れり　逍遙仰には二人可然と云々　箋云親子あひならひて命婦たるへからす二人といふ義正說なるへし王命婦は御めのと也其の子の辨の君と心得へし花鳥の說如何

かたみにいひあひあはすへきにあらねは　私云此詞につきていよ／＼王命婦とむすめの辨の君と二人なりかやうの事を二人なから見知たてまつれは（イ）共親子のあひたなれは談合すへき樣のなきと也他人ならはともかくもいひあはすへしとにや

内には御物のけのまきれに　そうしけんかしといふまて草子の地也　秘かやうに内には奏する也

みな人もさのみ思ひけり　秘皆人もさやうに思ひけりと也

いとゝあはれに　御門の御心にいよ／＼藤つほに御思ひのまさる也

そらおそろしう物をおほす事ひまなし　藤壺の心也

中將の君も　秘源氏也

さまことなる夢をも見給て　おとろ／＼しきとは事事しき心也　河およひなうとは光源氏天子の親と成給へき兆歟その中にたかひめありてとは左遷の事歟　毛詩文選のことは略之　花たとへは源氏の北方の御はらに御子いてき給ひて位につかせ給へきさまの御夢にあはする也　弄此事末の卷に見えたり秘同　箋さまことなるとはいかやうの夢にか有けんおしては知かたし

あはする物をめしてとはせ給へはおよひなうおほしもかけぬ　秘源氏の天子の父たるへきといふ義歟　箋云此事みをつくしの卷にみえたり　みをつくしの卷に云すくように御子三人みかと后ならひて生れ給ふへし　中のおとりは太政大臣にて位をきはむへしと勘へ申たりし中のおとりはらに女はいてき給ふへしとありて事さしてかなふなめり云々

その中のたかひめありて　花これは源氏の御子をこ

と人の御子にいひまきらはしたるやうの事也河海に相違の事といへるはいかゝとおほえ侍り左遷は朧月夜の事によれり藤つほの御事ゆゑにはあらさる故也　孟　秘に花鳥の義よし云々　箋河云左遷の事也　花云左遷は朧月夜の事也　藤つほの事故にはあらすと云々秘にも花の義にしたかへり如何

箋云此夢の他藤壺の一義イ義に非す彼みをつくしの卷に此夢の事を分明にかけるに源氏一世の事也左遷の義分明也河海の説にしたかふへし花に源の御子の他人の御子にいひまきらはすやうの事といふは頗穿鑿の説也おそらくはこれをけつるへし

この夢あふまて又人にまねふな　河　水原抄云善悪夢不可語謹イ人といふ本文あり其心也云々　今案これは隠密の心也本文に及ふへからす　花　夢にはさまさまの夢あり　思夢といふは思ひねの夢とてひる思ひし事のみゆる也妄夢といふはすちやからちもなき事を見る妄想の夢なり正夢といふはまさしき夢也般高宗の傳説をゆめみ給し類也非夢といふは善悪につきてきざしの夢也丁固か松を夢に見しかば十八歳にして三公になり江淹か五色の筆を見しかは文藻日々にあらたに成しかことき也源氏の君の御夢いかゝ見給けん心もとなし

この宮の御事　聞　藤壺懐妊し給ふ事を源の聞給て心中に思ひ合せ給ふ也

むくつけうわつらはしう　命婦もそらおそろしうなり藤つほもいよ／＼おほしこりたる也

七月になりてそ　七月に藤つほ内へ参り給ふ也

いとゝしきくイ　秘　懐妊四ケ月なるへし　箋同　秘　内にもめつらしくおほしめす也

ふくらかに　秘　懐妊のさま也

御あそひもやう／＼　花　世もやう／＼涼しくなる時分をいふ也　箋　新涼の時分也　秘　秋にもなれは也

こなたにのみとは藤壺の御方にのみみかとのおはします也

しのひかたきけしき　源の思ひあまるさまなるへし

宮もさすかなる　藤壺の御心也

かの山寺の人は　秘　紫上の事をいふ也　花　紫上のうは君心ちわつらひしかよく成て京の六條の家にいて給ふ事也

京の御すみか　故按察大納言紫上の外祖父の家也

おなしさまにのみ　秘いときなきよしのみ返事のある也

此月頃はありしにまさる　河「出ていなは（伊勢物語）誰か別のかたからんありしにまさるけふは悲しも　花「忘れ（謙徳公集）なん今はと思ふ時にこそありしにまさる物思ひはすれ　今案藤壺の御事云々　秘引歌無用云々藤壺の今はかき絶たる様なり此ことをのみ覚しまとふ也　箋同　藤つほの御事也他事をわすれ給也

月のおかしき夜しのひたる所にからうして　花此忍ひたる所は誰ともしらす六條院京極のあたりなるへし六條の御息所の事をいへるにや覺束なし　秘六條の御息所也　聞書誰ともみえす　私からうしては思ひたち給ふといへるも藤壺の御事ゆゑにとなる事なきあたりへは物うくおほしけるなるへし

しくれめいてうちそゝく　前に月のおかしき夜といひて又時雨めきてそゝきたる秋のそらさなからみるかことし

いたうあれたる所の　花是は紫のうは君の御さと也故按察大納言の家に侍り　惟光の源に申也むらさきの上の外祖父也

二

かのあまうへ　按察の後室紫上の外祖母也　花上にはよろしう成てとかきて今又かくいふは老病にて再發せるにや

あはれのことや　秘源の詞也

わさとかう立より給へる　秘ついてならてわさとといへり

いとかたはらいたき事かな　秘少納言の詞なるへし　箋同

いとむつかしけに侍れとも　秘いつくも見苦しくて忝と也　箋見苦しき所のさま聊爾なれともと也

かしこまりをたにとて　箋御出のかたしけなきよし也　聞書むつかしけにとは座敷の様體を見くるしといふ也わつらひの事也

ゆくりなう物ふかきおまし所に　秘弄のうちつけに心もおき奉らぬやうなりと也　源もならひ給はぬさまなるかとおほす也　箋云物ふかきとはあまりに俄なるゆゑ御座所のはしちかなるをわさと狂言にてかくのことく申なす也

けにかゝる所はれいにたかひて　秘源の御めには見ならひ給はぬよし也　箋云此源の心中にても猶分

明にきこゆ　私云兩義の内箋の義可用之歟如何
但奥にいたりて見るへし
つねに思う給うたちなから　秘源の詞
かひ無さまにのみ　秘紫上の事を同心し給はぬ事也
なやませ給ふ事　前に尼公のわつらひよろしくて京へのほり給と聞給ひしか今又再發してわつらひ給ふ成へしそれをは源のしり給はさりしと也
みたり心ちは　秘内よりの返事也
みつからきこえさせぬことの給はすること　聞書きこえさせぬことと句をきりてみるへしの給はする事とは紫上の事也
かくわりなきよはひ　秘いとけなき也今ちと年齢もかさなりてと也
ねかひ侍るみちにも　秘後世のさはりとも成へきと也
いとちかければ　秘程なき家居なれはかくいふ聲をも源の聞給なりたえ〲きこえてといふにてよみきるへし　聞書源を奥ふかく尼君の居所ちかき所まて入たてまつりたる故に聲もきこゆると也云々
私云然らは前のゆくりなく心ふかきおましなるゆゑ狂言にいひたるといへるよりも然るへきか如何
心ほそけなる御こゑ　秘尼公の聲也
いとかたしけなき　秘いまた尼公の詞也
この君たに　秘紫上也いまちと成人もあらは只今の御出のかたしけなきをもみつからも申さるへき物をと也
かしこまりもきこえ給ひつへきほとならましかは
秘ほとならましかはといひ殘したるはそれほとの年齢ならは源へ只今たてまつりて心やすく見おくるへき物をと思ふ心こもれる也
あはれにきゝ給ひて　秘源の聞給て也　秘此詞にて猶前の義よく聞えたるにや尼公の寝所ちかく源を請し申たると也
何かあさう　秘源の詞也　尼公のたまさかにもおほしめしかはらぬやう侍らはとあるをうけての給へる詞也
此世の事には　聞書前世よりの緣にやと也
かのいはけなう　尼公の紫の源の御いてのかしこまりを申給ふ程にもなきとの給をうけての給也

いてやよろつおほししらぬ　秘少納言の詞也　聞に
尼公の煩ひ給をも紫のいはけなくて思ひしらぬと
也
おほとのこもり　紫の寝給へると少納言か云なす也
あなたよりくるおとして　その折節紫の聲のするを
源の聞給ふ也
うへこそ　紫の詞也　尼公をさしていふ也
この寺にありし　北山にての事をの給ふ也
いさ清みしかは　又紫の詞也いはけなきさま也
かしこき事きこえたり　只今尼公のわつらひ給へは
随分の事聞出たりとはしりきての給へる也心ちの
あしきもなくさむとありしかはと也
いとおかしとき〻給へと　秘源の用意也紫上とはし
り給へとも人々くるしけに思ひたるさまを見しり
給ふゆゑにきかぬ體にし給ふ也
まめやかなる　これ又源の用意也こ〻にて紫の事を
いひ出し給はて煩の事はかりの給ふ也
けにいふかひなのけはひや　秘源の心也尼公のの給
ふことくまことにいはけなきに也さりなからよく
をしへたて〻見たきよしなり

又の日　源のとふらひ給ふ翌日也
源いはけなきたつの一こゑき〻しよりあしまになつむ
ふねそえならぬ　花姫君の御聲を源氏の君よへはき
かぬやうにして侍しかとも何かきかぬと御めのと
をはしめて思ふへきならねはたつの一聲とはよみ
てやり給へる也かやうの事は世間に常に有事也
秘よへはきかぬかほをつくり給へとも此歌にては
たつの一聲とよみ給ふ也なつむは行やらぬなりえ
ならぬは不自由也　箋秘になつむは泥の字也行や
らぬ也えならぬは自由ならぬ也　河云えならぬは
たゝならぬ也
おなし人にやと　秘河に引歌あり用ふへし　箋同
河「みなと入の蘆わけ小船さはりおほみおなし人
にやこひんと思ひし　同古「堀江こくたな〻し小船
こきかへりおなし人にやこひわたるらむ
少納言そきこえたる　秘少納言の返事をする也
とはせ給へるは　秘少納言文の詞也尼公は北山へ出
給ふこと也
いとあはれとおほす　源の心也
秋の夕はまして　聞藤つほの物をおほしみたる〻也

春男秋女とて男は陽に陽かくは、る故に春をいたみ女は陰に陰かそふる故に秋物を思ふ也　花藤つほの御事故也　秘藤つほの事也　私云おほしみたるゝは藤つほなりその人の御あたりに心をかくるは源の事也よく見わくへし

あなかちなるゆかりも　秘そのゆかりを尋給ふ也

藤壺は紫上の御をは也

きえん空なきとありし　源の心也　花尼公の歌の詞也　秘「おひたらん有かもしらぬ若草をおくらす露そきえん空なきの歌を尼公のよみし時の事を思ひ出給ふ也

見えおとりやせんと　秘源の切に思ひ給ふゆゑに自然ちかくみはみおとりやせんとまておほす也

源氏手につみていつしかもみむ紫のねにかよひける野へのわかくさ　いつしかはいつかと也しはやすめ字也

河此歌紫の名の始也此紫上の名字先達色々に釈せりいつれも今案の了簡也根にかよひけるとは藤つほの女御のゆかりと云也古今に「紫の一本ゆゑにむさしのゝ草はみなからあはれとそみるといふ歌の心也或はむさし野といへはかこたれぬともいひ或は露わけわふる草のゆかりをともあり朝かほの巻にも昔こそさはいへと紫のゆゑこよなからすものし給めれとあり皆一もとゆゑの義也六條内大臣有房公は紫は色の最頂なり云々佛の相好をも紫磨金の膚と云也　此物語の中第一の美人なる故に此號有と云々是もあまりいりほかなるなり箋の義以上同之　秘むさし野の歌の心也　河の説然へし　私云此歌は源の紫上の事を思ひやりてたゝ独口すさひに詠し給へりとみゆ又時分秋の末とみゆそれに若草と詠したる事如何されと昔はかやうの事も沙汰なかりけるか又尼公の若草の詠を思ひ出給ふ故人きかぬひとりことなれはなほさりに時分相違したれど詠し給ふ歟

十月にすさく院の行幸　花朱雀院は後院也天子脱屣の後の御在所也三條朱雀に四町に造られたり延喜の御宇には宇多の御門を朱雀院と申侍り十月の行幸は紅葉の賀のことなるべし　弄朱雀院行幸は紅葉賀の巻の行幸也末摘巻横竪の並也紅葉賀は此巻の中末摘巻の中とにあたる也秘同　箋云是は来十月に行幸のあるへき事のあらましをいふ也實は紅

葉賀巻にみえたり前に連々稽古の最中也　秘朱雀
院は代々の仙洞を申也
まひ人　まひびとゝよますまいうとゝよむ也
やんことなき家の子　舞人には摂政家大臣家以下の
子とも丶出る事也されは源氏頭中將なともまひ給
し也
山さと人にも　尼公の住給ふ北山也　秘とかくうち
まきれて久しく音信給はぬ也
ふりはへつかはしたる　秘まへにもふりはへさせ給
へるにきこえさせんかたなくとありそれもわさと
問給也愛に同心也かやうの同詞を同巻にかきてみ
せ侍る此類おほし此物語の文法也心をつくへし
たちぬる月の　弄九月の事也　秘弄に尼公逝去故に
少納言も返事なき也是は僧都の返事の詞とみゆ
花尼公九月中旬の頃まては六條京極の家にすみし
かおなしき廿日に北山にてつゐにうせ侍る也
せけんのたよりなれは　秘世間の道理也　僧都に似
合たる詞也
かなしひ（みイ）思ひ給へるなとあるを見給ふに　僧都の返
事を源の見給也

よの中のはかなさも　源の心也
うしろめたけに思へりし　秘紫上の事也
故みやす所に　秘桐壺の更衣に離れ給し時の事まて
源の思ひ出給ふ也　箋みやす所と號する事更衣を
も女御をもいへり又明石の中宮をも申き懐姙ある
より御子を生し給へるを御息所と號する歟とみえ
たり如何一禪はそれによるへからすと云々　私云
此事桐壺の巻に註す
はか〳〵しからねと　源の母更衣におくれ給しは三
歳の時の事なれはたしかにおほえ給はねとあはれ
ふかく思ひやりてねんころにとふらひ給へる也
少納言ゆゑなからす　紫のめのと心ある人とみゆ
いみなと過て京の殿に　秘紫上の京へ出たまふ也　聞
外祖母の服は三十日なるへし然らは服は百五十日
歟
みつからのとかなる夜　紫の方へ源のおはしたる也
おそろしからんとみゆ　源の心也
れいの所に　秘前にありし南のひさしなるへし
御ありさまなと　秘尼公の御ありさまを申也
御袖もたゝならす　源の御袖也

宮にわたしたてまつらん　秘少納言詞也紫の父兵部
　卿の宮の御かたへわたしたてまつらんと也
このひめ君の　秘紫の母君也父宮へわたしても繼母
にてはいかゝとおほつかなく尼公の思ひ給ひしと
也　私紫の母君は兵部卿宮の室也本の北方さかな
くて物思ひに成てうせにしよし此卷の始に僧都の
源へ語り申されし也その本の北方は今の兵部卿宮
の北方にておはすれは紫のためには繼母也
いとむけにちこならぬ　秘一向に二歳三歳の時なら
は無分別にても有ぬへし紫ははや十はかりにも成
給へは他人の中のすまゐもいかゝと也
またはかく〳〵しう　紫の十はかりなれはまた人のお
もむきをしる程にもなきと也それを中空なるとい
へり中半なる心歟
あまたものし給ふなる中の　秘系圖に紫の女をとゝ
ひ三人有其中にて一のあなつらはしき人なるへし
それを口をしと也二人はさかなき北方の腹なれは
也　箋云兵部卿宮御女三人有冷泉院の女御と髭黑
大將の北方とは北方の腹也いま一人は紫上也
すき給ひぬるも　秘尼公の事也

しるき事おほく　北方のさかなき事也何かとあらは
　にはいはて面白くかきなせり
かくかたしけなく　源のおほせ事也
なけのことのはゝ　河なほさりの詞也又はないかし
　ろ也
のちの心もたとりきこえさせす　源の後に御心なと
　かはるへき歟との遠慮に及はすと也
御としよりもわかひて　紫上十はかりなれはおとな
　しくてもいまた似合はぬ程也それにとりわきとし
　の程よりをさなかましくおはしますと云也
なにかかう　秘源の詞也そのいはけなきこそ我も本
　意なれと也
猶人つてならて　紫のやうたいをも見たくおほえて
　かくのたまふなり
源氏あしわかの浦に見るめはかたくともこはたちなから
かへるなみかは　河新勅「あしわかの浦にきよする
しら浪のしらしな君をわか思ふとは　秘箋此引歌
を用ふる也　弄蘆の若きによせたり　花あしの葉
のわかきに若の浦をあしわかのうらといへるにや
爰にはわか君になすらへていへり對面はなくとも

よらてはいかゝかへるへきの心也　秘蘆のわかきに若の浦をよせたり此浦にはみるめなき所なりともいたつらに歸らん浪は心の外そと也　箋同　聞定家卿かける源氏物語の名所にこれを入と云々
めさましからんと（あイ）　花人つ（もイ）てならて聞え給はすはめさましからんと也面目にあるましからん心也秘同けにこそいとかしこけれ　少納言詞也眞實かたしけなくおそれ入たると申心也　源の御詞をうけて也
（返少納言）よる波の心もしらでわかのうらに玉藻なひかん程そうきたる　花まことは源の御心もしらでなひきたまはん事はうきたる心ちすると也　秘同箋一旦よる波にひかるべき玉藻はおほつかなしと也
わりなきことゝ　花いまたいはけなき程の事なれはわりなき御あやにくにてあると申侍る也　秘いまたいはけなきよし也　箋年齢不相應のよし也
聞ゆるさまの　秘少納言か物なれて御返事を申と也
なそこえさらん　河人しれす身はいそけとも年をへてなそこえかたき相坂の關　伊行釋にはなそ戀さらんと云々奥入にはこえかたきとあり理可然也
弄花に本歌をすこしいひかへ給へると云々奥入には未勘と云々　秘引歌のなそこえかたきの詞をもちひかへたり此類あまたあり心はいかさま一たひはあふへきのよし也　箋云引歌前に有略之　私箋にはなそこひさらんとあり秘にはこえさらんとあり奥入には未勘と云々河引歌無之河海に奥入をひけり不審云々
身にしみて若き人々おもへり　源氏の御さまにめてたると也
君はうへをこひきこえ　秘君は紫上也うへは尼公也
御あそひかたき　紫のあそひのときとも也
宮のおはします　秘紫の父兵部卿宮也
少納言よ　紫の詞也
宮にはあらねと　秘源の詞也
こちとの給ふ　秘こなたへと也
あしういひてけり　紫の心也
めのとにさしよりて　紫の少納言にさしよりて也
いさかし　河卒（伊勢物語眞名本）　さそふ心歟
いまさらになと　秘源の詞也
されはこそかう　秘少納言の御覽せよいまたかく云かひなき御樣そと源へ申也よつかぬは世なれぬ也

手をさし入て　秘うへにきぬをかいとり給ふなるへ
しそのあはひへ手を入て髮をさくり給なるへし聞
書みすこしの事歟
うつくしうおもひやる　おひさきのおもひやらるゝ
也又みすこしなれはかくいへる歟
うたてれいならぬ人の　秘紫の心也
ねなんといふ物をとて　紫の詞也
つきてすへりいりて　木丁なとのおくへ入給ふにつ
きて源の入給ふ歟又みすこしならはみすの內へ入
給ふなるへし
いまはまろそおもふへき人なうしと見給ひそ　源の
詞也　秘おもふへき人と句を切てなうしと見給ひ
そと讀也
あなうたてや　少納言詞也
さりともかゝる　秘源の詞也
うちない給て　源のさま也
とのゐ人にて　源の今夜は宿直し給ふへきなり
めのとは　秘少納言也
うつくしき御はたつき　紫のはたつきなるへし
河偏愛(ウツクシ)漢語抄　愛色(ウツクシ)

そゝろさむけに　鷄皮(ソヽロサムシ)遊仙窟　鳥はたたつといふこと
なり　物のおそろしき時に身の毛たつ物也
らうたくおほえて　源の心也
ひとへはかりを　はたにきる物也　紫上にひとへを
きせてかたはらにふせ給ふ也
いさ給へよ　源の詞也是もさそふ心也
おなしくはよろしき程に　秘紫の御年の程もなほさ
りならは然るへき事なるへき物をとみな〳〵いひ
さゝめく也
こと有かほなりや　よの常のきぬ〳〵めきたると也
いとあはれにみたて(つくろイ)まつる　是より源の詞也
かくてのみはいかゝ物おちし給はさりけりと　いか
かとよみきりて物おち(ほイ)し給はさりけりとよむへし
かくてのみはいかゝおはすらん物おちし給はぬか
なといふ詞也
宮も御むかへになと　秘少納言詞也父兵部卿宮より
御むかへまゐらせんとの給と也
此御四十九日(ナヽナヌカ)　花十一月九日ころあま君の中陰はつ
る也此時ははや朱雀院の行幸なとも過たるへし
弄十一月上旬彼行幸以後なるへし　秘同

たのもしきすちなから　秘　源の詞也　花　兵部卿宮の
御事ちゝにてはましませとうと〳〵しくならせ給
ふ也　秘　うと〳〵しきは父宮も同事也我はあさか
らす思ふかたはかへりてしたしかるへきと也
霧わたれる空もたゝならぬに霜はいとしろう　霧わ
たり霜ふりくたる朝のさまことに面白かるへし
まことのけさうも　秘　まことのきぬ〳〵ならはと也
いとしのひてかよひ給ふ所のみちなりけるを　花　上
に月の面白き夜忍ひたる所にかよひ給ふと有その
人の事なるへし夕かほの卷のはしめに六條わたり
の御忍ひありきとあれはしのひてかよひ給ふ所と
いふもあひかなひてきこえ侍り但系圖には別人に
云り　秘　誰ともなし　弄　此事物語のかさり也　是
又大切の事也誰ともなし或抄此所誰ともなし紫上
の里と二條院との道なるへしみちすからの餘情に
かけり面白し例のはんひの句と心得へし
源氏朝ほらけ霧たつ空のまよひにも行すきかたきいもか
門かな　河　妹之門　催馬樂にあり　猿丸大夫集云あ
ひしれる女の家の前をわたるとて草をすむひてい
れたりける「いもか門行過かねて草むすふ風吹と
くなあはん日までに　妹之門催馬樂「いもかかとせ
なかかと行すきかねてやわかゆかはひちかさの雨イ
もやふらなんしてのたをさあまやとり笠やとりや
とりてまからんしてのたをさ　秘　いもか門催馬樂ナシ
也うたはせてなといふあたり面白し
返誰ともなし立とまり霧のまかきの過うくは草のとさしにさはり
しもなしセイ　河　後撰に女のもとにまかりけるに門をあ
けさりけれは　兼輔朝臣「秋の夜のくさのとさし
のわひしきは明れとあけぬ物にそ有ける　返し
いふからにつらさそまさる秋の夜の草の戸さしは
さはるへしやは　花　是ほとすきうくはなとかたち
より給はぬ草の戸さしなれはさはるへきにもあら
ぬ物をといふ心也　秘　此はかなき草の戸さしには
さはるへしともおほえ侍らす御心さしあらは立と
まり給へと也此段物語のかさりにて奇妙也いまむ
なしく歸り給道には何のよしもあるましきを此事
をかきいたしたる筆者の妙こゝもとにありぬへし
殿へおはしぬ　二條院なるへし
おかしかりつる人の　秘　紫上也　花　若君の事也　花
六帖「よもすからたつさはりつる妹か袖名殘戀しくお

もはゆるかな　私云引歌におよはさる歟
ふみやり給ふに　秘紫上也
かくへきことのはもれいならねは　秘常の後朝の文
　にはかはりはてたる也さてかくへき詞もなき也（もイ）
かしこ（かくこイ）にはけふしも　秘父宮の御いてある也　私けふしもとはよへ源氏のおはして實事ならねとそひふしなとし給へるにつけてかく思ふ也
年ころよりもこよなう　兵部卿宮と故尼公とは御中よかるへからすされはこのあれたるさまをも久しく見給ましき也
かゝる所には　兵部卿宮の詞也
所せきほとにも　所せはきやうにことく〵しきほとの紫の御身にもあらすとの給也
めのとはさうしなとして　秘つほねくしてあるへしと也有へきやうを父宮乳母にいひきかせ給ふなり
君はわかき人々なと　秘ことはらの姫君たちとひとつにましますへき也
ちかうよひよせ　紫をはちかゝ宮のちかつけ給ふ也
かの御うつり香　秘源の御うつり香也
おかしの御にほひや　父宮の詞也

としころもあつしく　秘父宮の詞也尼公の御かたにまします故に宮の御かたへはうとく〵しかりと後悔し給ふ也
あやしううとみ給ひて人も心おく　花此人もは兵部卿宮のいまの北の方をいふなり　私云いまの北方といへる不審もとよりの北方とみゆ
心くるしうなと　秘まへより連々まゝ母の北の方に見ならし給はゝよかるへきをさやうにもなくてかゝる折ふし俄になれ給はんは紫のため心くるしと父宮の給ふ也
何にか心ほそくともしはしはかくて　秘少納言詞也
　今ちと御心もつきてこそ也　私前にかゝる所にはいかてかしはしもをさなき人の過し給はんと父宮の宣へるをうけて何かはといふなり　花かゝるきほひにしもなにか心ほそくともとありて後に少納言のめのとの詞也うは君のなくなり給ていく程もなきをかゝるきはひ也とはいふなり　私云此詞の相違花鳥には河内本の後なる故なるへし
よるひるこひきこえ　秘尼公をしたひ給と也　はかなき物もきこしめさすとていふまて少納言詞也

なにかしかさしもおほす　秘父宮の詞也
行さきの身のあらんこと　紫の心のうちを察して書けり
いみしうくし給へは　ことのほか屈したる也
君の御もとよりは　秘源の御方より也
參りくへきを　源の惟光して仰つかはされたる詞也
とのゐ人奉れ給へり　源のこゝの體を見おき給てとのゐ人なとつかはさるゝ也
あちきなくもあるかな　秘少納言の申也
あなかしこ物のついてに　秘父宮の聞給てはと也紫へも父宮へ此源氏の事をかくし給へと申をしふる也
ありへてのちや　おとなしくならせ給てのちやといふ心也
うしろやすくつかうまつれ　兵部卿の少納言にかく仰られしと也
たゝなるゝよりは　聞書兵部卿宮のうしろやすくつかうまつれと仰られしにつきて實事なとはあらねと源のとまりなとし給へる事の思ひ出られて心にかゝりわつらはしかりしと也

いたうなけかしけにも　かゝる御すき心もなといひて又おもへは惟光の實事なとも有たるやうにや思はんと一段となつかしけには云なさぬ也心つかひ妙也前の詞にたゝなるよりはといへるも實事なとなけれは事あやまりならぬと又とまりなとし給はは只何事もなきやうには思はれぬといひたる詞也
たいふもいかなる事にかと心えかたく　花大輔は惟光なり少納言か事ありかほにはいはぬ物から御すきことも思ひ出て侍りつるなとゝいひしを心えかたくあやしと思ふ也
まゐりてありさまなと　秘惟光かへり參りて也
あはれにおほしやらるれと　是より源の心也
さはることとものありて　秘源より惟光して仰らるる詞也
宮よりあすにはかに　秘少納言か方よりの返事也
私云これはたゝ惟光に云る詞なるへし兵部卿の宮よりあす紫のむかへを參らせられんと也　とし頃の蓬生此あれたる所なからさすかわかれんも名殘をしき心を面白くかきなせり紫のうはの歌也
いとなむけはひなとしるけれはまゐりぬ　惟光源へ

歸參也

君は大殿に　秘源は葵上の方におはする也

れいの女君とみにも　葵の源に對面し給はぬ也

あつまをすかかきてひたちには田をこそつくれ　河「ひたちには田をこそつくれたれをかかね山をこえ野をこえ君がおまたきませる　風俗常陸哥　あつまは和琴の惣名なれとも又東調とて秘曲あるなり常陸歌風俗の秘事四首その一の心也東調にてすかかきて此哥をうたふ也いまの世にしれる人まれ也云々　花和琴に菅搔片攪とて神樂催馬樂にもちゐる事あり　常陸五拍子にはすかかき三度拍子にはかたかきといへり又箏にも東ことの曲の終にかくをすかかきといふと云々　花一禪講釋の時も不分明と云云可尋之　秘此段古來不審也源中最秘抄なとには色々の沙汰有花鳥河海不及沙汰也いかさま此物語いつくにてもちとより所のなき事はかゝさる也ひたちにはの歌をふとうたひ出されしはいかさま心あるへき事也今案葵上れいのとみにも對面せす物むつかしきふうなるをうらめしく思ひてさま〳〵の事人のうへなと思出給に末つむ花の事をふと思ひ出給ふなるへしすゑつむは常陸宮の御むすめ也しかもすゑつむにあひ給事此時分にあたるへしと云々　聞書末つむへ通ひ給ふ時分にあてゝ見るへし逍遥はしめて此義を見たてらるゝと云々末つむの事をいふへき序にこゝよりほのめかしてかけり面白し　是は源の和琴をすかゝき給てひたちにはの歌をうたひ給へるなり

まゐりたれはめしよせて　秘惟光歸參りたる也

しか〳〵なむと　秘あす又宮へわたり給へきよしを申なり

口をしうおほしてかの宮にわたりなは　源の心也

わさとむかへいてんも　又宮へ所望申事も如何と也

ぬすみいてたりと　宮におはするをぬすみとらんもいかゝなれはわたり給はぬさきによびとらんとの心也

あか月かたにものせむ　源の惟光にの給詞也

車のさうそくさなから　弄とりつくろふへき事と惟光思ふへけれはたゝ常のまゝとの仰也　秘同

おほせおきたれと　仰おきてよといふ詞也

うけたまはりて立ぬ　惟光也

君はいかにせまし　是より源の色々分別也
すきかましきやうなるへき事人のほとたに　人のほとたに物を思ひしりとは紫上心なとかはすほとの女ならはかやうにむかへとり給ふもつねの事なれはくるしからすこれは年齢のにつかはしからぬをいかゝと思ひ給ふ也
ちゝ宮のたつね出給はらんも　兵部卿宮のもし尋出給はゝ人にこそよれ源なとの御身には似合ぬ様體とはしたなからんと也
さてはつしてんは　かやうに色々遠慮あれとも専用はさやうに世をはゝかりて取はつしてんとはえおもひきり給はぬまゝ夜ふかくいそきおはする也
秘とりはつしてはと也
女君れいのしふ〳〵に　秘葵上也
かしこにいとせちに　源の葵上への給詞也
わか御かたにそ　聞書葵上の方にても源のやすみ所は又別にあるへし
門うちたゝかせ　紫のおはする所の門也
たいふつまとを　惟光也
こゝにおはしますと　秘源の御出のよしを惟光申也

をさなき人　秘少納言詞
なとかいとよふかうは　秘いつくよりその御朝かへりなるへしと少納言は思ふ也
宮へわたらせ　秘源の詞也
何事にか　秘少納言詞也
君いり給へは　秘源の内へ入給ふ也
いとかたはらいたく　秘みくるしきをと少納言のわひあへる也
ふる人は　としよりたる人なとゝいふ也
またおとろひ給はしな　いまた御目のさめしいておこしてんとて源のの給也
かゝる朝霧をしらて　弄いまた夜深き空をいへり面白しと云々　秘いまた夜中なるを如此いへるおもしろし
やともえきこえす　聞書あたりの人の何ともえ申さぬと也
宮の御むかへに　秘父宮かと思ひ給ふ也
御くしかきつくろひ　源のかくし給也
宮の御つかひにて　紫のねをびれてかく髮なとつくろひ給まて父宮とおほしたるを源の宮の御使との

たまへるにて父宮にはあらすとあきれ給へる也
まろもおなし人そとて　父宮にかはらす源もしたし
き人そといひしらせ給ふ也
たいふ少納言　弄たいふ女房歟云々大輔歟不分明一
禪たいふと云々　秘紫上のめしつかふ人也　聞書
大輔は惟光少納言は紫のめのとなり云々　私云少
納言と惟光といへる義不審かきいたきて出給は坐（所イ）
敷よりの事なるへし此前まて惟光參りよるへから
す又惟光のおとろかん事もいかゝとおほゆ又系圖
の外の人の名にも若紫卷にたいふとありて紫上の
女房と思ひけり（しろせりイ）唯たいふ少納言二人なから女房の
名なるへしさて大輔少納言と三光なとよまれしか
とおほゆ大輔といへりとて惟光にてあるへきには
あらす
こゝにはつねにも　源の詞
わたり給へるなれは　父宮のかたへわたり給とある
を聞給うて也
ましてきこえかたかるへき　こゝへさへ細々參りか
たきにまして父宮のもとへわたり給はゝ音つれも
申かたかるへけれはと也

人ひとり　誰にても一人御ともに參られよとの給也
心あはたゝしくて　少納言詞也
宮のわたらせ　兵部卿宮今日こゝへ御出ならはいか
か申さんと思ひわつらふ也
よしのちにも人はまゐりなん　秘源の詞也　女房た
ちは後になりとも參れといひすてゝいて給ふ也
御そともひきさけて　河提ヒサケテ秘　ひきさけて
さほなとよりひきおろして也
二條院はちかけれは　秘二條院は法興院に准する也
同し京極の通りなれはちかき也しからすは程遠か
るへし
猶いと夢の心ちし侍るを　少納言の車のうちより申
詞也
そは心なゝり　秘それは心も也河同　源の詞也車よ
りおりゆかんともかへらんとも心次第也　かへら
んならはおくらせんとの給也
かへりなんとあらは　秘少納言は歸らはかへれと也
にはかにあさましう　少納言心也
宮のおほしの給はん　秘父宮の也
たのもしき人に　秘母にも祖母にも早くおくれ給故

と也

涙のとまらぬをゆゝしと思ひてねんしゐたり　秘今ことのはしめと思ていま〱しきと堪忍したる也

御丁屛風なとあたり〱　秘あたり〱は當の字歟榊巻にもいたやともあたり〱いとかりそめ也とありあたりにまかせたる心也　花あたり〱したてさせ給とありて註にはあるへき所にあたりて也云々花の義如何又し文字未審　秘花鳥にあたりあたりは當の字ありたりにまかせとあり如何此あたりあたりとはそこ〱といふ心なるへし或説あたりあたりとはそこ〱といふ心なるへし河内本にはあたり〱たてさせ給ふとありてしの字なし此しの字はやすめ字也　私云あたり〱したてさせ給ふとよむへし

おましなとたゝひきつくろふはかりにて　花むしろしとねなとあるを只ひきのふるはかりの事也　秘二條院は久しく人のすまぬ所なれともひきつくろひて然へくなりと也　私云此義如何只御丁屛風なとも此臺にすみ給はねはなかりつれと常におほくこしらへてあれは只とりわたしてひきつくろふはかりといふなるへし

君はいとむくつけう　紫上源のそはに寢給をおそろしくむつかしく思ひ給ふさま也

こゑいとわかし　老若の心にはあらす稚の字の心也わかきとよめり幼稚の義也

いまはさは　源の今よりは少納言とは寢給ましき事といひをしへ給也

めのとはうちもふされす　少納言の心おちつかぬ也

明行まゝに　いまた夜ふかゝりしと見えたり

たとゞのつくりさま　河殿の字をおとゞと讀也家の事也野分の巻にもおとゝの瓦なとゝ有也又春のおとゝなともいへり又大臣ならぬ人をもそれかし殿といふ心におとゝといふなりうつほの物語にも大將のおとゝなと有又此物語にもあね大臣ともいへり

はしたなく思ひゐたれと　有にくき程結構なる體也

女房なともさふらはさりけり　しらぬ女房なとのなきゆへに簾中ははれ〱しからぬよし也

日たかうねおき給うて　源也

さるへき人々　秘故郷の人をめさんと也

夕つけてこそ　暮かけてなといふ心也
たいにわらはへ　只今紫の居給は西の臺なり又此たいは東の臺なり源のすみ給ふ方なるへし
四人まゐりたり　これはいまた朝の事なるへし
君は御そに　紫のいまたふし給へる也
かう心うくな　是より源の紫にいひをしへ給ふ詞也
すゝろなる人　故もなき物かやうにあらんやはわれも紫上にゆゑ有物そといろ〳〵にいひなし給ふ也
女は心やはらかなるなん　河 端嚴經天台大慈心柔輭軟 華嚴經　陽體剛強自在陰柔順從陽 五行大義第二　花 源英明　男女婚姻賦云至剛者男至柔者女 在文粹　秘 花鳥に源英明男女婚姻賦をひけり作者英明にあらす後江相公也あらたむへし　秘 後漢書列傳七十四曹世叔妻傳陽以レ剛爲レ德陰以レ柔爲レ用男以レ强爲レ貴女以レ弱爲レ美故鄙諺有レ云生レ男如レ狼猶恐ニ其尫一生レ女如レ鼠猶恐ニ其虎一
御かたちはさしはなれてみしよりも　よそ〳〵に見しをかたちよりもと也紫上のかたちなり
おかしきゑあそひ物とも　繪やもてあそび物也
やう〳〵おき出見給にひ色のこまやかなる　河 鈍色此色紫上外祖母の服を着する也　一說に見給にひいろとよむへし火色は紅也祖母の服中なれともはしめてわたり給吉事なれは紅を着せらるゝ也　今案鈍色也紅葉賀卷にも外祖の服三ヶ月と見えたり其義歟その上今の義結構にあらす例のことゝきこえたりうちなへたりともおきいてゝとありたゝ日ころのすかたのまゝなりこまやかは濃の字也色のこき也但いまの祖母の服さまて深かるへきにあらす或又色をほめたる心にもおほくいへりしからはその心歟　花 やう〳〵おき出見給ふの詞は上へつゝきたる詞也あそひ物ともを姫君のおきて見給ふ心也にひ色は外祖母の服いまた三ヶ月の事なれはにひ色のたくひともをき給ふをいふ也又火色を服者のきる事も其例なきにあらざれともこゝの詞はにひ色たよりありてきこえ侍り
秘 花鳥の說尤然へしにひ色を用へき也
うちゑみなと　紫上也
われもうちゑまれて　源の我身もと也
東のたいにわたり給へるに立出て　秘 源の東の臺わか御かたへいて給ふ間に紫上庭なと見給ふ也

四位五位こきませに　河こきませてはかきませて也
雨こきたれてといふにかきたれてふる也かとことと
五音通する也　私云引歌二首ありこれを略す
はかなしや　尼公の事をも忘れ給ありつき給やうな
るをさな心をいへり
君は二三日内へも參り給はて　源の參内もし給はす
紫をなつけ給也
やかてほんにとおほすにや　秘御手本にもやと也
むさし野といへはかこたれぬ　河「しらねともむさ
しのといへはかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ
引歌同略之　秘藤つほの御ゆかりと也
とりて見ゐ給へり　源のかき給へるを紫の見給ふ也
源氏ねはみねとあはれとそ思ふむさしの丶露わけわふる
草のゆかりを　花ねはみねと丶は草の根を寝る心に
よめる也業平中將妹に對して詠る歌「うらわかみ
ねよけに見ゆる若草を人のむすはんことをしそ思
ふこのねよけも根を寝にたとへたるなり　秘草の
根を寝ぬるかたによせたりいまた結ふ程はなけれ
ともと也　私云露分わふるは藤壺の事なるへし
いて君も　秘源の詞也

またようは　秘紫の詞也
うちほ丶ゑみて　源也
よからねとむけにか丶ぬこそわろけれ　弄此詞人の
性をそしへたり肝要也云々　秘あらくとも先何事
もさたしてこそす丶む道もあるへけれはと也人の
性をそしへたる詞肝要也
心なからあやしと　源のわれと不審に思ひ給ふ也
返紫かこつへきゆゑをしらねはおほつかないかなる草の
ゆかりなるらん　花實方集「かこつへきゆゑもなき
身にむさしの丶わか紫をなに丶かたらん　秘心は
何事にかこちかけらるへきゆゑをしらぬと也何の
ゆかりといふ事をもさらにしらぬ物をと也引歌花
に同しまへの手習にむさしのといへはかこたれぬ
とあるをとりてよめる也
故あま君にそ　紫の手外祖母のに似たり
いまめかしき手ほん　尼公の手にてすこしふるめか
しき故にかくいへる歟只おひさき見えてあかりぬ
へき手なれは源のかくの給也
やともつくり　屋共也ひ丶なの屋也
物思ひのまきらはし　藤つほの事也ゆかりを尋ね出

て思ひなくさみ給ふ也
かのとまりにし人に　秘是より故郷の事也
宮わたり給ひて　兵部卿宮也
きこえやるかたなく　人にかくともらすなと源の給
し故也
少納言も思ふ事なれは　少納言も源のおほすことく
にもらすましきと思ふ事なれはと也
ゐてかくしたると　少納言かいつくともなくくした
てまつりたるとゝまりたる人々のいふ也
こあま君　尼君も繼母にあはせん事を心くるしくお
もひ給ひしをめのとなとも同心なるとおほすなり
さしすくしたる心はせのあまりおいらかにわたさん
を　私云心はせのあまりと句をきるへき歟さておい
らかにわたさんをひんなしとはいはてと心得へし
さし過したる心はせのあまりておいらかは大やう
なといふこゝろなり何となくわたしまゐらせんこ
とはいかゝなとゝうちむきてはいはてかくゐてか
くイ
へしたるとなるへし
ひんなしとは　無便　河ひんなしとはたよりなき也
無禮の心にはあらさる也

はふらかしつる　放埒(ハウラツ)はうらかしとよむへしいた
つらになすといふ心歟
あたらしかりし御かたち　父宮も僧都もかく思ひ給
ふなるへし
きたのかたも　秘紫の繼母也
はゝ君を　紫の實母の事也
やう／＼人まゐり　秘これより又二條院の事也　紫
上のあとにとゝまりし人二條院へ参る也
御あそひかたきのわらはへ　前にありし御あそひの
ときともとみゆこゝの體をめつらかに引かへおも
ふ事なく思ふ也
君はをとこ君のおはせすなとして　紫の源のおはせ
ぬ夕なとに心ほそく尼公の事をも思ひ出給ふと也
をさな心也
宮をはことに　秘父兵部卿宮也
のちのおやを　秘源也
ものよりおはすれは　ほかよりおはすれは也
さかしら心あり　花是よりは姫君のいまた何心もな
くけんしの君をあそひかたきのやうにし給ふ事を
いふ也　秘紫のいまたなに心もなきをいふ也　聞

書さかしら心は嫉妬なとの事也　或說是より世上の夫婦の事をかける草子の詞也世間の人の夫婦のあるかたは何かと物いひかましき事も有へしさやうにあれは又われもたかふふしいでゝ惡しかれは又女もうらみかちに成て覺悟のほかなる事も出來する也此紫の上は何心もなくてよきもてあそひ物と源のおほす也　又さかしら心とはなましひさかしたてして何やかやもむつかしきよりは是はおもしろしと也

むすめなとはた　秘むすめなとよりはしたしきと也

或抄御說に父子兄弟にさかし（るイ）と云語をひき給云々

これはいと　夫婦のやうにもあらす父子にもあらすそれをさまかはりたるといふへし

岷江入楚第六　末摘花

私源氏君十七歲の春よりの事あり

おもへとも猶あかさりし夕顏の露におくれしといふ發端の詞は夕顏の卷をうけてかけり故爲橫並也

末摘花是也

太輔命婦語常陸姬君有樣事

朧月夜之比立聞常陸君琴音事

頭中將立隱透垣本見歌事

同時源氏與頭中將同乘向大殿御所合物音事

源氏與頭中將語常宮琴音給事

源氏童病事　若紫卷の始と同時の事也橫の並これにみえたり

八月廿日始見參常陸姬君給事

朱雀院行幸舞人樂人等定事

源氏遣消息於常陸宮事

於大殿御所令習舞樂等事

冬比宿常陸宮給事　是より奧は若紫卷以後の事也故又爲竪並

女房着貂裘事

使隨身拂橘樹雪事

歲暮常陸宮姬君送御裝束於源氏許事

源氏給返歌事

歌求子歌給事

十八歳

正月七日宿常陸宮事

翌日還二條院與紫君戲給事

平仲物語事

末摘花　以歌幷詞爲卷名

なつかしき色ともなしに何にこの末摘花を袖にふれけん　詞には猶かの末つむ花にほひやかにさしいてたりと云々　私河には卷名歌とはかりあり此卷は若紫の横竪の並也源氏君十七歲の春より十八歲の春のはしめまての事あり歌とことはをもて卷の名とせり　紅の末つむ花は末よりつむによりて末摘花といふ常陸宮の姬君の鼻のあかきによりてたとへるなり秘同　弄源十七歲の二月の事よりあり若紫の前よりの事也　箋並横竪相兼たり　卷名歌詞源氏十七歲の春より翌年十八歲の春にいたる若紫以前の事もあり並たるに依て也是列（別イ）傳の義也　末摘花は末より咲下る花なり然る間咲にしたかひて末より次第に摘故に末つむ花といふ也　葵（あ）藋（なひ）の花の咲のほる類にはあらす　箋同若紫の卷より以前の事もあり後の事も有

おもへとも猶あかさりし　河此卷は若紫の卷の横並也仍夕顏卷につゝけて如此かける歟紫上を二條院へむかへられしよりもはるかに以前の事也とみえたり　花夕顏の卷につゝけて發端のこと葉をかけり若紫の卷は三月に北山へわらはやみましなひに出玉へるよりはしめてかけり此卷は若紫の卷よりさきの事を云り故に夕顏の卷につゝけて書る也

信明集時雨つゝ木する〱のうつるとも露におくれし秋は忘れし　弄此詞心深し樣々思心をふくめり　秘此發端面白し玉鬘の卷の發端と相似たり然れとも玉鬘の卷は彼玉鬘の事をいひ出さんとてそと云出すと也去程に夕顏上の事は唯（順イ）書也此卷は夕顏上を忘かたく思給ふ故に深切に思給由の詞也

凡思へ共と歌の五文字におくは必思へとも〱と深切に思心のある由也古今思へとも身をしわけねはの歌も思へとも〱とかさねて思心の有也此する摘なとに耳とめ給ふも夕顏上に別て後又さやうなる人にもしや又あひ見んの心也　箋發端有力以短慮不可窺之兩抄の義は夕顏卷に引つゝけて書の由計を注せらる無其味者乎是は夕顏上の不幸短命の愁歎源氏一世不忘給仍彼名殘に相似たる人求之給故に此宮の君の事出來之義也優艷好色の義に非す源氏仁德之性能可費工夫也凡おもへとものの詞思へとも〱と深切のとき用る詞也　古今身をし

わけねはの歌此心也仍て普通の五文字に斟酌する
詞也　以此義發端不殘之處可知云々或抄思ふまし
きとは思へともといふ也又論語に既往不咎といふ
本文あり是を心にもちてさは思へとも思はるゝと
いふ心也本文の心は過去したる事をは思はしと云
義歟
夕かほの露におくれて　末つむの事なとに耳とゝめ
給ふも夕顔は別れて後又さやうなる人をや見ると
の心也　秘同
こゝもかしこもうちとけぬかきりの　弄葵上六條御
息所なとの體也　秘同　箋同　或抄御說に葵上は
あまりのふかくうちとけ給はす御息所はしふねう
心ふかき也いつれもこのましからすと也
けしきはみ　箋心を置たる貌也
心ふかきかたの御いとましきに　河挑　花司馬相如
琴心をもて卓文君を挑むといへり挑は女の氣色を
とる心なるへしこゝのいとましきはいさゝかかは
れり心くらへなとやうの心也戰をいとむなとい
ふ心に叶へり　秘挑戰なとの心也　あらそふ心也　聞書あ
らそふ心也　箋曰挑字也　廣勻に挑は撥と注す撥
は治也實の過たる體也夫妻の間如此之儀相應せさ
る也箋聞同
けちかくなつかしかりし　箋夕貌上の事也物やはら
かに女しかりし故也秘同　箋挑戰の字花に引之其
不叶戰を挑と云は其日其地にて一合戰可仕之由兼
日約諸（束イ）之義也爭心也　此字此段に不相當文君を相
如か琴心を以て挑と云も其心各別也
私葵上六條御息所なといつくもわれをとらしと爭
ふやうにもふかきといへる歟猶追て決すへし
いかてこと〳〵しきおほえは　箋聞に俗姓なとはさ
してなき人也とも也
つゝましき事なからん　聞葵御息所なとのやうに心
ふかゝらぬ人といふ也
見つけてしなと　箋云見つけてしかなと云る雨夜の
物語故也
こりすまにおほしわかれ（たイ）は　河引歌こりすまに又も
なき名云々箋云夕顔巻に此詞有り相合て眼を付べ
しいかなる人も哉と覺す也末摘の事云出さん爲也
箋聞夕貌上は源の心に能合たれは命短くてうき事
にあひ給り仍こりすまにと云り又末摘により給へ

は形を始め鼻等（など）の赤かかりし事又こりすま成へしゆゑつきて　箋聞よしある也

さてもやとおほし　すこしゆゑつきたるあたりの事をは耳とゝめ給て其中にこれはととりわきおほしよるほとのあたりはかりへこそ一ふての御たよりもあれと也それにはや源へはなひき奉る也

いとめなれたるや　秘草子地也　箋此一段惣論也　箋聞めなれたるとは源につれなき人のなきはあまり出もないやうなると也　箋曰かくのことくなひきやすなれとも又女の性に種々の差別ある事を次の段にてあらはす也

つれなう心つよきは　箋曰女の種類有事をいへり心つよくなさけなく源に承引申さぬ人も又ある也ほとしらぬは分際もなき人のおもきをいふ　源の一度物なとの給ふても又末とけての給事なきは又ことかたへうつろひ行もある也さま〳〵の人のうへを云也　私云此義如何

さても過しはてす　箋云まめやかに實法たての末もとげさるをいふ

なこりなく　箋云これは源のしゐての給かと下まつといへともさもなきあまりにありありてさせる事なき男にあひしたかふ事をそしる（なじイ）也　此段第（侵イ）二段也又此次に空蟬なとの事をのふる也惣して歌に三段をたてたり　箋聞此一段の心つれなう心つよきとはもし源へ心つよき人は底には實なくしてうへに實をたてたる也たとしへなうはたとへんかたなく也しはやすめ字也あまり身の程もしらす堅固に情なくいひはなつ也さて源もいひさし給ふ也さる時そのたてたる實の末もとほらす思ひくつをるゝ也頽字也それをさてしも過しはてすと云也仍退屈してあけくにむさとしたる男なともつ也是も底から源へつれなからんとの性にてはなき也さてなほなほしきかたにさたまりぬれはおのつからいひさし給へるもありと也　私箋の義同前といへとも注之

なほ〳〵しきかたに　花よのつねなる心也

かのうつせみを　箋在國以後の事也　秘空蟬下國の後の事也こゝもとは悉皆草子地也さるほとにとりあつめてさま〳〵の事をかく也

荻の葉も　箋軒端の荻の事

ほかけのみたれたりし　秘　軒はの荻碁うちし時のこ
とほかけ　花　火影を荻の穂によそへてかけり
大かた名殘なき物わすれをそえし給はさりける　秘
源の性をかく也こゝまては草子地也　箋云以上三
段物語の作者の批判也　如此源氏の性を段々に分
て細かに評論する心は假令は女の性心短く外さま
にうつろふは力およはす詞をかけ見そめ給ふほと
の人をは捨給はすは源氏の性也況や夕顔上の事は
世にたくひなく心にしめ給ひしに程もなくて本意
なき餘りにせめてそれにたくふ計の人も哉と夕顔
の名殘を忘給はさる所をいひたつへきの意趣也
左衛門めのとゝて　箋　系圖の外の人　秘　源のめのと
也大貳のめのとにつきては此左衛門のめのとを大
切にし給也
太輔の命婦　箋　源の御めのと子也
内にさふらふ　大輔命婦内裏に奉公也
わかんとほりの兵部大輔　秘　王孫をいふ也　箋　河に
王家無等論　經　世雄無等論　うつほあて宮の御乳
母子一人はわかんとほり一人は大貳の子云々　一
說　我無等論又和漢通二才覺一私に漢に通する歟云
云　以上河の義也　此外略之
君もめしつかひ　源也
母は筑前守の妻にて　箋云大輔命婦か母左衛門乳母
也　初は王孫の兵部大輔か妻にて大輔の命婦を生
り後には筑前守か妻にまてあひくして在國せし也
然に實父に別の妻あり是命婦か繼母也筑前は繼父
也　筑前守は左衛門乳母の後の夫也兵部大輔か妻
は大輔の命婦か繼母也
ちゝ君のもとを里にて　箋曰母は新父（夫イ）にしたかひて
筑前國にくたれは繼母はむつかしけれとも實父の
方にありしよしなり
故ひたちのみこの末に　箋　是より末摘の事を語申也
花　光孝天皇承和五年正月任常陸其後貞純代明元長
等の親王任之　弄　兵部大輔か彼宮へ參る便にて語
る也　秘同
とひきゝ給　源のとひ給也
心はへかたちなとふかきかたはえしり侍らす　秘　大
輔命婦の詞也見る人のおくれたるかたをはいひか
くしてよき所計いふ事箒木卷にもあり常にある也
心をつくへきをしへなり　弄箋同

かいひそめ 秘潜字也 かくるゝ義也 箋同 河の
義略之
さへきよひなと 秘さるへき也
物こしにてそ 箋曰大輔命婦は宰相の人也見も定す
して推擧の儀以外の事也箒木にみる人おくれたる
かたをはと有萬端用捨の有へきをしへ也 秘私云
箒木の詞 秘弄は前に注す 箋にはこゝに引面白
琴をそなつかしき 末摘のきんをひき給ふと也
三の友にて 河今日北窓下自問何所爲欣然得三
友三友爲誰琴罷輙擧酒酒罷輙吟詩三友遞相
引循環無已時一彈愜心中一詠暢四支猶恐中
有間以醉詠繼之白氏文集六十二北窓三友 秘
樂天か北窓の三友は琴詩酒也 秘同 是は琴をそ
なつかしきかたらひ人とし給へるの命婦の中につ
きて源のかくの給也
いま一くさやうたてあらん 河女房なれは詩の事歟
伊行釋には酒といへり 弄酒の事也 花同 一勘
如此河海に見えたり但詩はからの歌なれは女もつ
くらん事なるべきにあらすうたてあらんの一くさ
は酒をいふと愚意には存しより侍り 秘河には詩
の事と云々但酒にて可然也詩は女の學はんもつき
なからす只酒なるべし 箋聞今一くさは酒也日本
にて用へきならは詩のかはりには歌にてもあるへ
しその上日本の女房の詩作る事も其例おほし馬内
侍にてやよく詩をつくりける事大鏡にみゆ今出川
院大納言局も詩を作りて兼作集にいれりとみゆ
ちゝみこの 秘故常陸宮也
さやうにきこしめすはかり 秘命婦詞也
いたうけしきはましや 秘源詞也 箋聞なにとて卑
下するやうには申ぬそと也 聞書物おもはせぶり
なしそとの給也
わづらはしと思へど 命婦の心也
つれ〳〵にまかてぬ 命婦の内裏より末摘のもとへ
參りたる也
ちゝの大輔は外にそ住ける 箋云此宮に親しき人な
るへし 或抄命婦か父兵部は常陸宮へ家禮の人に
て時々ゆきかよひてほかにすむ也 私云箋の心は
兵部大輔も王孫なれは常陸宮の末の親族ともにて
やと聞ゆ
まゝはゝのあたりは 箋云兵部大輔か後の妻也

の給ひしもしるく　秘源のかねての給しにもかはらすと也　この比のおほろ月夜にとの給ひし事也
おはしたり　常陸宮へ源のしのひておはしたるなる歟
物のねすむへき　秘命婦詞也　秋の空なとこそ物のねもすみ侍るものを今はつきなき夜のさまとりあへすと也
猶あなたにわたりて　源詞也
うちとけたるすみかに　花晴むきにてはなきかたをいふ也　秘内々の方なり命婦かわかつほねなとなるへし　是は源をかくしてまたせ申間の事也
しん殿にまゐりたれは　秘末つむのましますかたへ命婦のまゐる也
かうしもさなから梅のか　ひるのまゝおろさぬ也面白くかけり夕霧巻にもかうしもさなから入かたの月の山の端ちかき程とかけり　此時分春の夜のおもしろきさまなるへし　或抄御說に梅か香の面白さにかうしもさゝぬと也面白し
御ことのねいかにまさり侍らんと思たまへらるゝ夜のけしき　秘命婦か詞　箋聞源には物の音すむへき夜のさまにもあらすといひ末摘へは御琴の音まさるへき夜のけしきと二やうにいへり此人の心をみせてかけり思ふへき事也　或抄云此命婦か詞表裏あるやうなれと常に人のいふ當座の詞也云々如何
あはれしる人こそ　イ本あはれきゝしる人こそ　秘末摘か詞也　花伯牙琴を彈すれは鍾子期音を知たる心也　河琴の音をきゝしる人のあるなへに今そたちはてし弦をもすくへき　以上箋に是を註す
弄にも此歌を引　弄命婦をさしてしる人といへり
百敷に行かふ人のきくはかりや　百敷に行かふ人こそおほけれとも命婦はかりなさけしれる人なきと也　一には百敷に行かよふ人なれは耳きゝにてはつかしけれともと也　秘命婦は百敷に行かよふ人なれは耳はつかしきと也私云此義然へしめしよするは琴をとりよせ給也
いかゝきゝ給はんと　秘命婦か心也源の何と思ひてか聞給はんとあやうく思ふ也
ものゝねからの　源の心也琴はうつは物の音から生得すくれたる物なるゆへに聞にくゝなとはあらぬといへる歟

いといたうあれわたりて　是よりこゝのあれたるさまを思ひめくらし給源の心中也
さはかりの人の　猶源の心なり　秘故常陸宮の事を思ひたまふなり
かしつきすゑたりけんなこりなく　引かへたるさまを云也
昔物かたりにも　花鳥にうつほのとしかけか女の事をひける尤然へし但是ひとつにかきるへからす此類多し　箋同　花にありうつほのとしかけか女の事也又大かたの事をも云へし　諸抄かくのことし仍うつほの物語略之
物やいひよらましと　此ついてにいひやよらましと也
命婦かとある物にて　命婦心あひしらひして大かたにひかせ參らせておく也　何事もちやつと聞たるは善悪もわかれぬ物なりされは源に聞わかせたてまつらしとてかくのことくあひしらひたる也
くもりかちに侍めり　箋命婦の詞也　朧月夜の體をいふ物の音もゆるひてすみぬへき夜のさまならすと申也

まらうとのこんと侍りつるいとひかほにもこそ句いま心のとかにを句みかうしまいりなんとて　秘かやうに句をきりてよむへし　箋同　客人の來らんとありつるといひてさのみ琴をもひかせたてまつらて命婦のたつ也
中々なる程にても　秘源の詞也源の御けしき御心に入たるなりと命婦の思ふ也
心にくゝてと　秘命婦か心つかひ也　何とかあらんと心もとなく思ふ故也
いてやいとかすかなる　秘命婦か詞也
けにさも有事にはかに我も人も　源の詞也　秘さやうにたゝ人なとの樣にはあるましきと命婦の申をも源の理と思給ふ也
けにさもある事とは命婦か常陸の姫君の事をかたり申を源氏君のけにさもある事と心得給ふ也うちとけかたらふへきゝはとはさすか宮なとの御女にうちとけかたらふへきにはあらねとあはれにさひしさ御ありさまなれはさやうのけしきほのめかしきこえよと命婦をかたらひ給也　私云此義いさゝか不審　花
あはれにおほさるゝ　秘故ひたちの宮なとの事也

又ちきり給かたや　秘源の又今夜とちきり給かたはあるかのさま也
うへのまめにおはしますと　源へ命婦の申也源の實法にましますよしを内裏に仰あるを申やふる也うへとは御門なり源のあまり實はかりにてあたあたしきかたなしともてなやませ給か實ならぬ御心をしりたる命婦なとの心にをかしく思ふをりをりある也されはかやうの御忍ありきの體を見せたてまつりたらはいかならんと申也
たちかへりうちわらひ　秘源のたちかへり給ふ也
こと人のいはんやうに　源の詞なり　花命婦は御めのとこなれはかくの給ふ也　秘おしかくしてもおかれよかしと也
女のありさまくるしからん　男のかゝるふるまひをあた〳〵しきといはゝ女の好色なるをは何とすへきそとの給ふり
あまりいろめいたりと　秘命婦かさま也　命婦か我身のうへをの給とはつかしく思ふてこたへ申さぬ也
しん殿のかたに　琴ひき給ひしかたのゆかしくてけはひもきこゆやと源のたち出給ふ也前にかへりたまふとあれとまことにはいまたかへり給はぬ也
すいかい　透垣也
おのれこりたる　常陸宮のあれたる體なり
もとよりたてる　頭中將也かけにつきては物の陰のかたへ源の立かくれんとし給ふ也
この夕つかた内よりもろとも　此詞よりぬきあしにあゆみのき給ふにふとよりてといふまて源と頭中將との二人の樣體以下を草子の地に書たるなり此頭中將のかく尋ありきけるは此いはれなりとことことくかきあらはせり詞にみえたり
あやしき馬にかりきぬすかた　頭中將の體也　花上に内よりもろともにまかてたまふとありそれにかりきぬすかたおほつかなし其は内より退出の時いつくにても裝束をあらためん事うたかふへきにあらす但禁中にて蹴鞠の時布衣をきたる例もあるにや　箋云花に疑あり鞠の時にかりきぬを着る例をひけり其儀にあらさる事也　衣裳をあらためらるる事於此奥之詞其類ありうたかひなき者乎　箋聞頭中將は源にみしられしと路次にて狩衣にきかへ

たる也車の人也馬に乘んため也又此奥の詞に直衣着かへ給は二人なからとみゆ源も此時は狩衣なるへし

ないかしろ　とりつくろはぬ體也態人にまきれん爲也

えしり給はぬと　源の跡につきて頭中將の來りつるをえしり給はさりし也

ことうたに入給ひぬれは　源の寢殿へこそおはすへきをさはなくて命婦の居るかくれの方へおはしたるを心得す思ひたれは其内に末摘の琴をひき給へはそれにきゝついて寢殿のすいかいのもとにいまたたゝすみ居たる也

したまつなりけり　河下に待也

君はたれとも　源はいまた頭中將とも見わかぬ 知り給はイ なり

ふりすてたまへる　頭中將の詞也

頭中將 もろともに大内山はいてつれといるかたみせぬいさよひの月

箋云源と頭中將とあひ友なひて大内山を出然るに源のおはしたるかたをしらす仍認來るよしなり

大内山は大内をいふ名所にあらす　箋花云大内山は仁和寺の名所なれともこゝには内裏の心に用ふ日本紀に内裏をおほうちとよめる源頼政大内守護の武士にて三位を望し歌に「いつとなく大内山の山守は木かくれてのみ月をみる哉勘入分如此　名所の大内山の事宇多院の山陵大内山に有仁和寺の西云々伊勢此所に住けるにならひの岡の松風すこく吹とかきたり文永五年の山陵使不知此所云々承平三四六若狹國所獻之雉放於大内山云々以上花私右箋の分註之　秘大内山名所にてあれともこゝにては只禁中をさして云也　箋いさよひの月　花にやすらふ月の心に相違なし但上にもいさよひの月おかしき程にとあり十六日の月を云にや云々

箋云いさよひはやすらふ心然へしやすらふ月にたゆめられて入方をしらさりしと云なるへし

うらむるもねたけれと　頭中將のかやうにいひてうらむるか源の心にはねたき也

この君と　秘頭中將と見定給也

人の思ひよらぬ　源の頭中將をにくみての給ふ詞なり

返源 里わかぬ影をはみれとゆく月の入さの山をたれかた

つぬる　花「里わかぬ月の光をは見れとも明かたの入さの山まてはたつぬる人もなきにおもひもよらぬ事とにくむをそへたり　秘面白歌也月をはなへてたれもめつれとも入かたまてを尋ゆく人はなき物をと也　箋義同　箋入さの山非名所

かくしたひありかは　花頭中將の詞也　秘同

するしんかくこそ　箋花隨身は近衛つかさの身にしたかへてつく物也　箋然へき御供の人なくてはと云義也　大和物語泉大將定國故左の大いとのに時平公まうて給へりけり外にて酒なとまゐりて醉て夜いたくふけてゆくりもなく物し給へりおとゝ驚き給ひていつくに物し給へるたよりにかあらんなときこえて御格子あけさわくに壬生忠岑御供に有御階のもとに松ともしなからひさまつきて御せうそこ申す「鵲のわたせる橋の霜のうへをよはにふみわけことさらにこそとなん給ふと申にあるしのおとゞいとあはれにおかしと覺して其夜一よおほみきまゐりあそひ給て大將も物かつき忠岑も祿給はりなとしけり云々　此等の例をおもへるにや私此義悉く秘にのする分也然れとも箋の分を書寫

或抄云泉大將は時平のおとゝの聟也かやうに夜半に醉ておはしたれはおとゝけしきあしかりしに忠岑此歌を詠しておとゝのけしきなほりかはらけたひ〳〵に成にけるとそ　此義逍遙はしめてこゝにひかると云々

おしかへしいさめ　源と頭中將とのたはふれことなれとも又實々しくもいふをおしかへしとはいふなり

かうのみ見つけらるゝ　秘源の心也かやうに見つけらるゝやうなれと夕顏上の事をは頭中將はおほろけにもしり給はぬよとおほす也

おもきこふに　箋云劫也　某の詞にあり

あまえて　聞云たはふれかはしたる心歟云々　或抄にはそれにむすほゝれたる心と云々

ひとつ車に　源と頭中將とたかひにえ行わかれすして同車なり頭中將は馬なりしかは源の御車なるへし

おほ殿におはしぬ　源のかよひ給所へも頭中將のちきれるかたへもえ行給はて二人なから葵上の父大臣へかへり給也

人みぬらうに　弄内より出給しかともいつくにても狩衣に成給しにや　花一勘　狩衣なりしを直衣にきかへたる歟　狩衣すかたを直衣にあらため給也まへにかり衣すかたのないかしろなりしとありしも内より出給とて直衣を狩衣にあらためて出給て又こゝにて直衣にあらため給なるへし　箋云禁中にて狩衣にあらさる事此段にて分明也

つれなう今かへるやうにて　人みぬかたにてかろかろしきかりきぬすかたを直衣にあらためて後只今帰り給ふかほをつくり給ふ也

おとゝれいの　秘葵上の父おとゝ也

こまふえ　高麗の笛也　右の樂を吹也

いと上すに　左大臣の上手なる也

内にもこのかたに　此内にもは葵上のおはする方也

このかたは樂のかたに心得たる人なり

中務君　秘葵上の官女　箋云須磨の巻に此人ゆゑ大殿にとまり給よしみえたり

頭の君の心かけたるを　秘中務に頭の君の心かけたるをもてはなれて源へしたかひたてまつるを葵上の母大宮の聞給て此頃御けしきよろしからぬ也わさと琵琶はひけとゝはかやうの心はへありてひかぬよしなりたまさかなるは源の事也

たえてみたてまつらぬ　秘源氏を中々みたてまつらぬ所にかけはなれんと思ふもさすかに思ひきられぬ也

ありつる琴のね　秘源（一本源ナシ）頭中將は末摘の琴の事を思ひ給ふ也

あらましことに　箋云頭中將の心の中のたくみ也

さまあしからんなとさへ　さへの字おもしろくそれほとまてにとある事のやうにあらまし思はるゝ頭中將の心也

この君の　源也頭中將の心に源のはやくやいひより給はんとあやうく思ふと也

そのゝちこなたかなた　秘草子地也こなたかなたは源と頭中將と也

いつれもかへり事みえす　源へも頭中將へも返事なき也

さやうなるすまひする人は　これより源も頭中將もあまり物思ひしらぬ末摘の心かなといつれも思ひ給ふ也中將はまいて心其中にいられしけり今は中

將は猶いら〳〵しく思ひ給ふとなりさて前の詞ニ人の心と見えたり猶草子の地とみるへし　秘かやうにかすかなるすまゐ（すイ）なる人のたまさかなるいらへもなきはいかなる事そとおぼつかなく思ひ玉ふ也

れいのへたて給はぬ　秘源と頭君とへたてぬあはひ也

かすめたりしこそ　秘文の返事なきかと源へ頭中將の問給也　花かすむとは思ふ心をほのめかしたる心也

されはよ　源の心さては頭君のいひよりけるよとおかしくて返答をむさとの給也

いさみんとしも思はねはにや　我は返事をみんとも思はぬ（し歟）故に見さるよし也わさと源のきは〳〵との給也さかと文を見しとも又みさるともきは〳〵との給はぬ面白詞也　箋云王衍問ニ阮籍ニ曰非老道同異答云將ニ無ソ同云々　此類そ　花はや返事を見給をそらほけての給と心得て中將の人によりて返事するよとねたく思ふ也

人わきしけりと　弄源のあひしらひのやう彼返事を見給ふやうなれはと也　秘頭中將の心也かやうの仰は源へは返事のあるかとねたく思ふ也

君はふかうしも　源はさのみ心にしまぬ事なれはかうなさけなきにつけて思ひさまし給へとも頭中將のかくいふにつけて又もよほされ給と也

ことおほくいひなれたる　こと葉おほくれんしたるかたとありてれんするは練也練磨するなといふ心也うちおかぬ心也　私云是は河内本の説歟　さためて頭中將はねんころにいふへしさやうのかたにそなひくへきと也　秘此義如何　私頭中將は源より年もゆき世をも又ひろくみる人なりされはかやうのかたもことよく口きゝたるらんそのかたへいひなひかさんと源はおほす也たかひの心相違なり

したりかほにもとの事をおもひはなちたるらんけしきこそうれはしかるへけれとおほして　箋云もとのこととは源氏は最初のことなるを頭中將は後より心かけ給ひしにさしこえて頭君になひき（かたらひイ）たらんは口惜き事と源のおほしてしきりに命婦をうたかひ給也

おほつかなう　秘是より源の詞なり

みしかき心は　箋云源の人を中空になしたる事はなき物をと也
人の心ののとやかなる事　箋云人の心みしかくて女のかたよりかはる人おほきなりされは心ならす本意をうしなふ事のある也　秘人の心とは女の心をいふおほとかになくて男のあやまちになる事のあると也是は大かたのことわりをの給也　私云此義不審只源の我身の上をの給とみるへし
おのつからわかあやまち　箋云源の咎ならすしてとかを得るを云成ぬへきにて一句也
心のとかにて　箋云心長閑也そのぬしは心のとかなるにしかも親類の何かととりさはくる事もなき人は心やすきと也前のゝ給ひし中に親類なとのこり(とかイ)さはくりて中絶し給ひしはありけるなるへし
いてやさやうにおかしき　秘命婦の詞也たゝ時々のつひてなとの御音つれはかりはいかゝと也　箋云命婦が卑下の詞也源の今あらましことに結搆にの給ゆゑ用捨の機遣みえたり　私云前の秘の義如何箋の義尤面白し
おかしきかたのとは　風流におもしろき事(計イ)のさまにはいかゝと申也
御かさやとり　催馬楽の妹か門いもかかとせなかかとゆきすきかねてやわかゆかはひちかさの〳〵雨もふらなんしてたおさ(なイ)あまやとりかさやとりやとりてまからんしたておさ(なイ)
かたはしもありかたう　源の御このみのかたはしもあらしと也
らう〳〵しうかとめいたる　命婦か詞にてさてはらう〳〵しきかたはなき人なるへしと心得給ふ也
秘源の心也おしはかりての給也
いとゝめ(こイ)かしく　箋花におさなかましき心云々　箋云亘字也大やうなる心也
わらはやみに　河若紫巻始同時也是横の並也　箋秘以下同
人しれぬ物思ひ　花藤壺の事也　秘藤壺に逢給し事也花藤つほにあひ給し事を若紫巻にかきあらはす所は四月邊也春より密通の儀此巻にて分明なる哉
かのきぬたの音も　花又はしめにかへりて夕かほのやとりの事を云なり　秘夕顔上の一周忌になる也箋同

よつかす心やましう　秘世なれぬ心歟よのつねならぬ心也

いかなるやうそ　秘源の心也かやうにつれなきはいか成ゆゑそと也

ヽいと物しと　箋云これは無與の義也

いとほしと思ひて　箋命婦の心　秘同

御物つゝみ　末摘のさまをいふ也

てをえさしいて給はぬかと　花文の返事なとなき事也　秘箋弄同

それこそよつかぬ　秘源詞也わろき事よと也　聞書命婦のいふやうつきてそれこそとの給也

かゝやかしきも　箋河はちかゝやかしき心也

何事も思ひしつまり給へなんと思ふにこそ　箋四句箋云身を心にまかせぬ時分にはあらすと也なにやかやとよつけるすちなくて何やかやとは色々さまさまなといふかとし世つけるすちならてとは人つてには何かと事もをかね（とゞかればイ）と直に一言をもかはされはやと也又の義人にいひよるは文なとしたしく成て次第々々に心もとくるならひなれとも此末摘はやうかはりたれは普通のおもむきをはさしをきて直に申され度とにや　花云何やかやとは何かと云詞也云々よつきたるとはなれ〳〵しき心なり云々

以上箋の分注之

心いられしうたてある　聊爾なとはあるましき事也

猶世にある人の命婦か心　箋同

大かたなるやうにてきゝあつめ　花命婦か源氏の御ことを心に思ふ事也一度きゝたまふ事を忘れたまはぬくせのおはしますと也　私はゝきゝの雨夜の物語よりかゝる心のつきそめ給ひ夕顔上の心につきて忘れかたかりしよりあるましき事にも御心のかゝるくせのいてき給へる事也

よひゐ　河宵居也

よしめきなともあらぬを　末摘の様體なとのすくれぬとは今命婦か時々のおしはかりにも思ふなり

ちゝみこのおはしける　常陸宮の事

よにめつらしき御けはひ　源の事也

なま女はら　末摘にさふらふ女房也

ゑみまけて　聞書ゑみまうけて也　私云ちゝみこのおはしましけるといふよりもいれ給はぬ成けりといふまて草子の地歟

御心につかすは　箋曰命婦か無覺悟此一言にみえたり
ちゝ君にも　箋父の兵部大輔にも談合せす心ひとつにての義卒爾の事也　秘同
八月廿よ日よひ過るまてまたるゝ月「したにのみこふれはくるし山のはにまたるゝ月のあらはれは
いかに　箋此引歌を註す
ほしのひかりはかり　或抄御説月明星稀烏鵲南飛といふ詩をひけり
いとよきをりかな　命婦か心也
しのひておはしたり　源の末摘のかたへおはしたるなり
いまめきたるけを　箋曰琴のしらへも古體なるへし
みたれたる心　箋命婦か心也
心やすく入給　箋源也
いましもおとろきかほ　箋源の御出を申合せさる體にする也
しかく〳〵こそおはしまし　命婦か詞源のおはしたる事をいふ
いなみきこえ　辭退する心也いなせそといふにかよはして心うへし
たはやすき　河引歌あり略之　河たやすくと云詞は文字をそへていへる也　定家卿説秘同
いとはつかしと思ひて　秘物こしにても源へ對面あれと命婦の申也それをも末摘の心にはつかしく思ひ給ふ也
人に物きこえんやうも　秘姫君の詞也
うちわらひて　是より命婦か詞也
いらへきこえてたゝきけとあらは　箋返答もなくて唯きけとならはともかくもと也　秘同
すのこなとは　秘命婦詞也禁中には御持僧なとの居る所也
ふたまのきはなる　本尊なと安置する所歟　わたくしの家にも有之也
てつからいとつよくさして　或抄末摘の手つからさす也と云々　これ命婦のさしたるとみゆ如何
御しとねうちおき　箋曰此茵は末摘の料也
いとつゝましけに　是は末摘のさま也
あるやうこそはと　末摘の心何のわきまへもなき成へし

わかき人二三人あるは　末摘の人とも也
御ぞたてまつりかへ　末摘の衣裳を人々のあらたむる也　わかき人々はおのれとなま心けさうしたるに末摘は何の心もなくしておはしますと也
をとこはいとつきせぬ心(御イ)さまを　つきせぬとはかきりもなく風深なるさま也
見しらん(ぬイ)人にこそ　箋曰色をも香をもの心也
たゝおほとかにものし給ふ　命婦か心なりかやうの大とかなるかたは心やすしと也
我つねにせめられたてまつる　箋曰命婦か無所爲之趣筆誅也　源につねにせめられ奉りて迷惑のあまりこれ程まてはみちひき申たるか大略源の御心もとまらしと思ふ程に末摘の物思ひやいてこんと也此心中末摘へ對して以外の命婦か無所存の義なり
君は人の御ほと　秘君は源也さすか宮の御すらなれは心にくゝ思ひ給ふ也
されくつかへる　左禮覆箋同　風流好色の過たる當時のかろ〳〵しき女を云歟
よしばみ　河よしある也はみとはつくる詞也心はみされはみなと皆同事也

えびのか　衣被香　又裛被香　裛はつゝむ　香字抄云採ニ栴檀樹ノ葉皮春篩爲レ香故(東宮切韻云藥皮)　又裛衣香俗云衣比邪王家方裛衣香有是をえひの香と云　一云薫衣香の一名なり一云すへて薫物の名なり云々以上箋　箋聞えひの香は薫衣香也薫衣香はうつくしたき物と云也
ましてちかき御いらへ　秘ちかき返事はなきと也文の返事さへなけれは直にことはをはかはしたまはぬ也
源いくそたひ君かしゝまにまけぬらんものないひそといはぬたのみに　箋しゝま上のしの字は濁り下のし淸也　棲遑をしゝまと訓す　花云やすらひたる心也無言を行する事なり末摘君一切返答これなき故に如此と云々　箋曰捿遑を無言といふ事不審河云日本紀棲遑不レ知ニ其所ニ云々是無言事ニアラス如何同第六垂仁五年　皇后其兄叛與天皇殺サントスル時ノ語ニ進退字アリ俯仰喉咽進退而血泣日夜懷悒無所訴言云々　河抄進退の字をしゝまいてとよめり然らは君か進退に源氏のまけて堪忍あるの由也下心に無言の心をふくめり源に物なの給ひ

そと制止のなきをたのみにし給と也　しゝまの詞
說々これあり或云誓言也云々或云至島至心の字の
心云々或云自志任或云止島　以上箋分注之
私云河の義前に注す猶秘說あり云々　秘しゝまは
無言也人の無言をするにわれはまけて居る也我も
物ないひそといはぬはかりなるとなり花鳥にみえ
たり耕雲本にはしゝまと聲をさせり箋聞いくたひ
か文をつくさせても返事もし給はす又たま〳〵い
ひよりたれとも物もの給はぬはわれを進退にし給
物也されとも我には物な申しそとの給はぬはかり
をたのみにて物をは申と也
のたまひもすてゝよかし　末摘のつゐに返答もなき
に歌はかりにてもなくて古歌の心まて引そへての
給をいふ也源の心にはこれほとなる人と末摘をし
り給はぬ故也
玉たすきくるしと　河襷彼方此方へかける心也—河
「思はすはおもはすとやはいひはてぬなそ世の中
の玉たすきなる　秘こゝの心はなましひにかけた
るをいふなり　箋同
侍従とて　箋末摘の乳母子也

かたはらいたしと　あまり末摘の無言なるをいふ也
返末摘にかはりて侍従のよむ也
かねつきてとちめん事はさすかにてこたへまうきそ
かつはあやなき　たゝこれはわらはへの諺に無言を行
せんと約束して無言々々どうしまにかねついてと
いひて何にてもうちならして後物いはぬことをす
る也此物語にはかくのことく世俗の事をもおほく
用る也箋同又花にしゝまにかねつくと云によりて
かねつきてとちめん事とはよめりとちむるは口を
とちて物いはぬをいふ也鐘つきて物いはぬ事は八
講なとの論義の時證義かねといへは威儀師磬を打
ならす其後は論義をやむる也其心にも通する也
箋われも人もわさと無言そと制すへきにてはなけ
れともさしてこたふへき事もなきといふ也　秘同
人つてにはあらぬやうに　箋曰末摘のそへ聲のやう
にいひなす也
程よりはあまえて　弄宮のほとよりはと源の思ふ心
也　箋云侍従が事也分際よりはあいらしき樣なれ
とも其人の聲にかはれるはめつらしき樣體なれは
源の廢忘し給よし也　箋御抄の義は侍従か似せた
る聲を末摘そと聞給て今ちとかろくはやりかなる

と思ひ給ふ也其時めつらしきにとは此間一切無言
にて有しに始て聲を聞給て悦しき餘りに中々物も
申されぬと也秘箋如此之間別にのせす　以上箋
又源 いはぬをもいふにまさるとしりながらおしこめたる
はくるしかりけり　花六帖「心には下行水のわきかへ
りいはて思ふそいふにまされる　箋まへの引歌を
のす　秘こゝろはあらは也　箋千言萬答不レ如ニ一
默ニ之義なり　されともこゝろにかゝるよしなり
聞書琵琶引別有ニ幽愁暗恨生ニ此時无レ聲勝レ有レ聲
これはまた源のひとりことのやうによみたまへ
る歟
なにやかやと　箋此詞上にもあり
いとかゝるもさまかへて句　箋めつらしき様體と也
思ふかたことに　箋もし別人に心なひきて源にはか
くうと〳〵しきかと思疑ひ給ふ也　秘同
たゆめたまへると　油斷させる心也いたしぬきたる
心也
わか方に　箋云我方はつほねなるへし上の詞に源を
うちとけたる方にやとし申たるよしあり此所にて
局の義見えたり

さる御心も　末摘の何の用意もなきを云也
今はかゝるそ　箋源也
うちうめかれて　箋聞歎息したる體也
しりかほならしと　源の御かへりを命婦はそらしら
すして也
猶思ふにかなひかたき　秘源の觀念し給ふ也　箋同
かろらかならぬ人の御程　箋源ハ性をいへり人から
なれは一旦のやうなとにてやかてすておかるへき
事はいかゝと也　かやうの古宮に自然しかるへき
人をみつけはやと思ひ給ひしにさもなきを觀し給
ふ也されとも人による事なれは末まても思ひすて
給ふましきと也是源の性也
こよなき御あさいかな　頭中將の源の朝寝をとかめ
たる也
心やすきひとりねの床　秘源詞也　獨ねなれは心安
く油斷していねすこしたると陳し給ふ也　ゆるひ
は　緩の字也
内よりかと　内裏よりの退出かと問給ふ也
しかまかて侍るまゝなり　内より退出しさまにすく
に參りたると頭中將の返答也

朱雀院の行幸　花若紫と同時横の並也　弄秘箋同
おとゝにも　頭中將の父左大臣也
御かゆこはいひ　河周書云黄帝始烹穀爲粥
ひきつゝけたれと　箋おの〳〵のくるまにて源の御車をも用意したれと頭中將のひとつ車にのりたまふなり
猶いとねふたけなりと　弄葵巻にも頭中將の物語に秋の事なといへる此時の事也　秘箋同　しかまかて侍るまゝ也とみゆ又源と同車し給へり早大殿へも出給しかへさにや　或抄にはもろともに大殿へもおはし參內もありとみるへし云々
かしこには　秘末摘の御かたへ也
雨ふりいてゝ　秘まへに笠やとりの詞あり其詞をうけたり　私おはせんことはおはしよらす後朝の文をたに也御心のとまらぬ也
かさやとりせんと　弄雨によりてかけり前に命婦の笠やとりといひしにたよりあり
御心のうちにはつかしう　末摘の心也
けさの御文のくれぬるもとかうしも中々思ひわき給はさりけり　箋聞後朝の文のあるへき事とも世なれぬ心に思ひわき給はすといふ也又の義ははしめて人にあひ給ひてはつかしく思ひ給ふ故文のおそきをもなにともおほさぬとなり兩義いつれもしかるへし
源夕霧のはるゝけしきもまたみぬにいふせさそふるよひのあめかな　花夕霧のはるゝけしきは女君にたとふる也　秘心あらは也　箋曰上句は末摘の君のへたてを云かゝるうへに雨のさはりさへあると也いふせさは不審也おほつかなき心也
雪ま待みんほと　雨のはれは出給はんと歌の詞有へし尋へし　箋心はあきらかなれと引歌あるへし
おはしますましき　箋聞文の體おはしますましきと人々おしはかる也
おもひみたれ給へる　末摘の心物つゝみしたる心なれは何の分別もなく物はつかしく思ひみたれたるなるへし
侍從それいの　前にも返歌をかはりてしたれはなり
返末摘にかはりて侍從かよめり　はれぬよの月まつ里を思ひやれおなし心になかめせすとも　秘心あらはなり　箋云晴る夜なりとも月まつ宿は心盡しなるにいはんやはれぬ夜にまつ心は

いか計と也さらはたとひ晴ぬ夜の月を待とも同し心のなかめならはなくさむへきと也せめて晴ぬ夜の月まつ心を察してなりとも御覧せよとなり聞書なかめに雨をもたせたり

むらさきのかみの　箋云故常陸宮の世ざかりの時代の紙成へし色のかはりたる紙也惣別紫は灰をさすほと色のます物也　秘同　或抄はひおくれとは灰のたゝ（らイ）ぬ也紫の紙のあくの名殘もなく色のかへりたるよし也　私云河にはひおくれたるは色あひのおくれたる也光行同事也云々此義如何灰の義可用之

手はさすかにもじつよう　箋曰凡手跡はつよしとてもむくやきなくては也いはんや女手のきつくならんはこのむへからす

なかさだのすちにて　花中さだは中比の手跡也　河長定のすちともあり中央さたすきたるに思ひ合すへし　弄中古のやうにてよろしからぬ也末の巻にかなの事をいへるに近代よくなりたるやうにみゆ　秘箋同　今こゝになかさたのすちとあるもそしりたる心なるへし

かみしもひとしく　秘ちらしてもかゝさる也　花同　箋曰凡女手はちらして書て懐紙短冊みなかくのことしいはんや艶書なとをちらさてかきたらんは見くるしかるへし

みるかひなう　源の心に末摘の文を見所なく思ひ給ふ也

いかに思ふらんとおもひやるもやすからす　こよひおはせぬをいかに思ふらんと思ひやりたまふさすか人のほとの心くるしき也

かゝる事をくやしなと　是又源の性なりよのつねの人ならは一たひにてうちもおき給ふへきを人からを心くるしくうちすてかたくおほす故に一段と後悔也

おほしなす御心をしらねは　おほしなすといふまては源の心中也　さておほしなす心をしらねはと又あとへも此詞をつゝけて心うへし　秘源はかはりはてましきと也其御心（心さしイ）をしらねはなけき給ふ也

まかて給にひかれて　秘末摘のかたへ御心もありしをおとゝにひかれて大殿へ出給ふなるへし　弄同　私云此義如何末摘への御心さしは知かたく也

箋曰禁中より大殿退出の時さそひ申さるゝ也さて源のおもはす大殿へおはする也心ならぬ體なり

君たちあつまりて　大殿にてのさま也

その頃の事にて　舞ならひなとし給ふ事をその比のことわさにてといふ也

いとみつゝ　あらそふ心歟

おほひちりきさく八のふえ　箋河云律書圖云大篳篥小篳云々事物紀原云説文曰羌人所吹其聲悲切本名篥尺八樂書等此器無之　河云詠二尺八一遊仙窟長一尺八寸舌四寸八分云々　又云聖僧傳云玄宗前身羅漢也好吹二尺八一被二擯出一之云々　以上箋　弄今の世のよりも大なるひちりきか昔はありし也尺八のふえむかしは一尺八寸に竹をきりたる物ありて樂器に用る也　一勘

たいこをさへかうらんのもとに　花鳥の勘例奥（興イ）にあり　箋花云禮記曰鐘鼓在レ庭琴瑟在レ堂　延喜四年二月廿四日覽二舞樂一左大臣時平公　仰令レ推二大鼓階前一自打之云々　今案大鼓は必堂下にて打事也但寛治五年五月廿五日殿上競馬六番の時　堀河院主上自打二大鼓一給此時置二堂上一也　以上箋分注之

おはさうす　只おはします也

御いとまなきやうにて　秘此比源の御障もなきよし也

せちにおほすそ　懇切におほす也

ぬすまはれ　秘深切なる所へこそ身をぬすむやうにてしのひありき給へ也ぬすまはるゝはぬすまるゝやうにといふ歟

かのわたり　箋末摘の邊なり

たのみこしかひなくて　末摘かたの人々の心也

しがくなと　試樂也　樂のならし也　私云紅葉の賀の卷に試樂を御前にてせさせ給ふとあり其時の事也

いかにそなと　大輔の命婦に末摘の事をさすか問給ふ也

ありさまきこえて　命婦の末摘わたりの事を申也

なきぬはかり　秘源を命婦かうらむる也

心にくゝもてなして　聞書源の心也　命婦か心にくき樣にてやまんと思ひし事を源のゝこりなく見つけ給てあさまになりたるとおほす也

くたいてげる心もなく　河腐クタク　或抄心もなく

とよみきりてこの人とよむへしと御説末摘のあり
さま見つくし給ふ心也この人は命婦なり
物はいはて　末つむの體を源のおほしやる也
いとまなき程そや　秘　源の詞也
物思ひしらぬやうなる　秘　あまり末摘のつれなかり
しをこらさんためと也　箋曰懲字也　詩曰戎狄是
伐荊舒是懲　コラスナレ共讀クセニコロスト云
是は末摘を源の心につかぬとはの給はて了簡して
の給ふ詞也
われもうちゑまるゝ　命婦也
人にうらみられ給ふ御よはひや　箋曰齡字成へし
御としやと云心也　御抄云よはひやと云心也　玉
鬘卷夜にかくれたるをこそよはひとはいひけれ此
詞の例をひけり如何　箋の義用へし
おもひやりすくなう　かやうの心にさのみあはぬ所
へは無音し給心にあひたる所はかりへ音つれなと
やうに隨意にし給はんも御年のほとよろつ御心の
まゝなる人なれはことわりと又思ひかへす命婦か
心也
この御いそきのほと　紅葉賀の行幸也

むらさきのゆかり　花　紫のひめ君の二條院へうつろ
ひ給ふ事は行幸はてゝ霜月の比也
六條院わたりにたに　御息所也
あれたるやうとは　末摘也
おほしおこたらす　心はたえすかけ給也源の性奇特
也
所せき御ものはち　心にかけすして過たまひしかも
し見まさりやするとかいまみし給ふと也
けさやかにとりなさんも　わさとかましくかたちを
みんやうもなきと也
うちとけたるよひゐの程　源のしのひしり給へる也
されとみつからは　秘　末摘の奥ふかなるさま也
おしやりなと　おしやりたる所もみたれさると也
おしやりなともみたれぬ故に末摘をさたかに源の
御覽せぬ也木丁のたちとなとあるへきやうなる故
也心もとなくとは末摘のよくも見え給はぬを云也
御だいひそくやうの　河御臺　河秘色磁器也越器也
其色翠青絶世也臣庶不レ得レ用レ之故云二秘色一今の
青磁の茶碗の類也　陸龜蒙集に有二越器詩一云九秋
風露越塞（寒イ）開集得千峰翠色來好向中霄盛沈瀣失嵇（共イ）中

散闕遺杯　花李部王記天暦五六九御膳沈香折敷四
枚瓶用秘色うつほに秘色のつきと云々　今案秘色
青き茶碗の類をいふ也　以上箋分注之
人わろきに　箋曰ひそくは珍敷物なれとも古物見く
るしくて人めわろき也
なにのくさはひもなく　箋曰露宿風飡の體也麁食を
云　秘然へき道具もなくおろそかなるさま也　弄
おろそかなるさま也　箋河云毛詩第一羣篇（羔羊イ）　退レ食
自レ公注退レ食謂レ減（械イ）レ食云々　膳を出すをまかると
云也云々　箋曰まかてゝ人々くふと云處に毛詩の
語を引尤然るへし何のくさはひもなきとは膳の麁
食を云然る所に御抄に道具のおろそかなるよし注
せらるあやまり也
しびらゆひつけたる　箋褶　夕顔巻に有　玉篇褶徒
頬切衣裳有表裏而無絮也又似立切袴褶也句會袴也袴褶騎服也　しひらは
字注はかまの類とみゆ
くしおしたれて　秘古體也　箋河云陪膳に候女房櫛
をさす事本儀也然といへとも毎年ふるめかしくお
かしき體也
ないけうはう　箋大唐に敎坊是あり　河内敎坊は大
宿にあり今の大とのゐ也内裏の宮女の候所也云々
私云女房の樂をならはす所也琵琶行にも名屬ニ敎
坊第一部ニとあり
内侍所　箋曰今は神殿たり惣しては此前内侍司（所イ）のつ
ほね也女官なとまて皆候すへし
あるはやと　箋聞はやはあるは也なるはや歟
あはれさもさむきとしかな　箋官女の詞
古宮のおはしましゝ世を　常陸宮なり　箋曰大唐の
王子王孫は諸侯王也代々重濟々故國家費過分之由
群臣議レ之弃損之通鑑に見えたり大唐四百餘州す
ら猶如此況乎日本纔に六十餘國依無餘慶四世无位
定之削之仍故宮末々零落過法以此道理物語之上可
加分別也當時之諸家零落之眼以不可具之
とひたちぬへく　河萬葉貧窮問答長歌の反歌「世中
をうしとやさしも思へともとひたちかねつ鳥にあ
らねは　弄貧窮問答の歌たよりあり秘同　箋此段
萬葉にてかけり
たゝいまおはする　箋曰源の用意ふかき也
侍從は　秘晴ぬ夜の月まつ里の歌よみし人　箋同
齋院に　弄誰ともなし　秘箋同

ひなひたり　河夷イナカヒタル也　夷國(ヒナノクニ)日本紀夷邦(部イ)
夷放國　夷曲(ヒナブリ)日本紀云々　以上箋
いとゝうれうなりつる　うれへつると心うへし　箋
曰上の詞にあはれさもさむき年かなといへる詞を
うれへたる雪といへり　私云人わろき事ともうれ
へあるともあり
かのものにおそはれし　箋河原院にての事おほし出
らるゝ也　秘同
ほとのせはう　箋曰此宮も限あること〳〵(くイ)寝殿以下
せはきにはあらされ共河原院のいかめしく手ひろ
なるよりは此宮はつまやかなる也
人氣のすこし　箋曰是もふる女房のかすかなる人數
なれとも河原院の人すまぬ所にくらふれはさすか
に人氣ある也
いさとき　秘　ねられ給はぬ也箋同　夜さとなる也
寝(さイ)るとき也うちとけてもねられぬ也
おかしうもあはれにも　源の心にあひたる人ならは
一段と心くるしうも有へし又一しほ面白くもあら
ん也
いとむもれ　箋曰はえ〳〵しからぬ也

からうしてあけぬる　秘　心もとまらぬさま也　箋風
吹あれたる冬の夜逢人にも御心とまらすはあかし
かね給かと(こイ)ことわり過たるへし
かうし手つから　源の御手つから也　箋曰上下ひと
つの格子は内へあくる故手つから也
ふりいてゝ　ふりすてゝなといふやう也
うらみきこえ　源の末摘をうらむる也
いときように　秘　源の御さま也
ゑみさかえて　老人ともの源を見ての體也　さかえ
てとはつよく興に入たる體也
はやいてさせ給へ　秘　老女ともの末摘へをしへ申也
見ぬやうにて　秘　源の末摘を見ぬやうにして也
うちとけまさりの　秘　源のちとみなほすかと思ひて
也
あなかちなる　箋曰草子地也　或抄いかにそうちと
けまさりといふより是まて草子の地云々猶箋の義
を用ふへし
まつゐたけの　秘　是より末摘のありさまをいへりみ
な狂言にかけり　箋曰此末摘のかたち定て此類な
る人有し成へし引勘へし

をせなかに　せなかのかゝみたる樣なるへし
されはよと　前の詞に手さくりのたと〳〵しき（さイ）にあ
やしう心えぬとありさてされはよと思ひあたり給
成へし
ふげんほさちのゝ（つイ）り物　箋象也箋曰諸佛菩薩各乘物
有之孔雀金翅鳥馬師子象等皆門證之表相ある事也
象を梵には伽耶と云那伽と云異物志云象之爲獸形
體特（持イ）詭也身倍數牛目不レ踰レ豕鼻爲レ口役望レ頭若レ
尾馴良承レ敎聽レ言則詭帝釋象王名二檀羅那一身高九
由旬高由旬云々　河觀普賢經云普賢菩薩乘大白象
鼻如紅蓮華色
色は雪はつかしう　是は末摘のかほの色也
さほにしろく　河小青也きはめて白きはすこし青く
見ゆる也或本にはあをきまてとあり　箋曰白き色
至りきはまりては青き也白馬を青馬といふかこと
し
ひたひつきこよなうはれたるになほしもかちなるお
もやうあり　箋曰額の大きなるに下かちにみゆるは
よく〳〵長き顏と也ちひさき額ならははてしもな
く長くは見ゆましき也こゝをこよなう晴たるとか

けり　私云腫たるの義用へからす晴たるとははれ
はれとひろくみゆる體也
さらぼひて　箋曰河に髐莊子やせつまりたる也
いたけなるまて　あまりやせたるは骨たかにていた
さうなる也
みやられ給　源のみやる也
かみのかゝりは　箋曰懸塲なりさかり塲同し　聞書
かゝりはしも髮のかゝりは也云々猶塲の字を用ふ
へし髮かしらつきのよき人也
うちきのすそに　箋　袿大小あり　男女通用　或説云
女は貴人着之云々
き給へる物ともをさへ　是より草子の地前にかたち
の事を色々いひし故き給へる物をさへといへり
ゆるし色のわりなううはじらみ　秘花の説然るへし
箋花云　延喜十七年　參議三善清行請レ禁二深紅衣服一
奏議曰但淺紅輕黄朱及火色者不在制限長保元年太
政官符云紅紫服提坊（防イ）自存中袴直袍下褻（襲イ）之類或是用
紅或亦用紫誠雖禁其深染未曾制其淺色　今案に紅
紫はふかき色を禁色となつけあさきをゆるし色と
云制禁におよはす誰も着用する故也　常に人の心

得たるは禁色にてたやすく着用せすゆるされて用
るゆへにふかき色をゆるし色と云説あるはあやま
りなりと云々　聽色事延喜式云　紅梅色紅紫不以
爲褻服と論語郷黨篇にいへり　然は此二色を云歟
今案ゆるし色は紅の薄き體也　箋曰兩抄の今案
共に以然へし延喜式に載る所も薄紅梅と心得て別
儀なし論語の文是又相當せり是はゆるさるゝ色な
り薄きはゆるし色也
うはじらみたる　箋花云紅の色のうすきを云　箋云
色のかへりたる也わりなうといへる詞にてみえた
り一かさね兩抄にはうちき一かさねとあり河内本
かくのことき歟
なこりなうくろきうちき　弄秘紫の色のくろみたる
也花同　箋云此詞にて紅のうはしらみたると云は
べにの色のぬけたると知へし
箋云兩抄には紅の色に袿一重と有紅の袿とみえた
り然らは紅を小袿と見て紫を大袿と見るへき歟
花きぬの次第にきぬのうへにうはきそのうへに小
[illegible]ち[illegible]は次第におとりにする也　箋曰然ら
[illegible]うはきはふききの裝也此上に紅のうちき
をき給ふと心得へき歟
うはきにはふるきのかはきぬ　箋河拾遺云中宮安子
ふるきのかはきぬを高光少將入道横川にすみ侍け
るにつかはしける　箋曰拾遺無之如何「夏なれと
山はさむしといふなれはこのかはきぬは風をふせ
かん御返し「山風もふせきとりつるかは衣うれし
き波に袖はぬれつゝ　六帖五「とこしへに夏冬ゆけ
や皮衣扇はなたす山に住人　貂裘　貂　和名フル
キテン　ト云獸也云々如鼠云々　西宮云臨時祭舞人
歸路着黒貂裘云々　花に江次第云昔蕃客參入之時（終イ）
重明親王乘鴨毛車着黒貂裘八重見物云此間蕃客纔
以件裘一領持來爲重物見八重大慚云々　杜千家廿（士イ）
二奉送魏六丈佐少府之ミ塵（廣イ）詩云李子黒貂弊得無妻
嫂欺（注）蘇李（季イ）子未用黒貂裘弊又出遊數歳大困而歸兄
弟嫂妻皆[illegible]笑之　又云鬼應疑　髮蟾亦戀貂裘斟酌
孀娥寡ト塞奈九秋月詩也以上箋　むかしも着する
事は[illegible]云々　弄うはきとはきぬより上の事云々
こだいの心ゑつきたる　河古代由付　上古奔走した
る衣裳なり
もてはやされたり　たはふれていへる也わろきかた

ちに出たちまてもわろきゆゑいよ〳〵わろきと云也

われさへくちとちたる　聞書末摘の物をの給はぬ人なる故にかくいへり源のあきれて物もなかなかいはれぬ也

れいのしゝま　前の歌をうけていへり　われさへ物もいはれねともしゝまの心みたきに何かとの給也

ぎしき官のねりいてたる　河儀式官也　花政官也　秘辨少納言内記外記史なと也式儀をみたらさる職也

そのこと〳〵しきさまを云也　箋同

すゝろひたり　聞書すゝろいたり云々　或抄に物のとゝのほらすそろはぬ心歟云々又つねのすゝろなると云同し心歟

いとほしくあはれにて　秘源の心也

たのもしき人なき　秘源の詞也　末摘のたよりなきさまを源の見そめ給へれは打とけ給ひてこそよかるへきに隔心し給ふ曲なしとかこつけていそき出給ふ也歌の心又是に同し

朝日さすのきのたるひはとけなからなとかつらゝのむすほゝるらん　花好忠集「あさひこやけさはつらゝにさしつらん軒のたるひの下の玉水　箋つらゝも垂氷も同事なり朝日にあたる軒の垂氷はさすかに解て露はすかれともいまたこゝろよく氷は解さるなり末摘君の心のとけたるに似て更にさもなしといへりとけなから猶むすほゝるゝとよめり又つらゝのさまもさるやうなるへし　秘の義箋に同し

たゝむゝとうちわらひて　いはまほしき事をえいはぬさまなり

よめにこそ　夜目也

よろつかくろへたる　私家のあれたるさまはかりにかきるへからす末摘のかたちの事も心にこもれる歟

松の雪のみあたゝかけに　貞松彰歳寒と云り霜雪にも凋まさるは松の性のあたゝかなる故也又眼前に異木よりは松にかゝりたる雪はあたゝかけに見ゆる也　花松の雪は白き綿をむしりかけたる樣なれはあたゝかけなると云にや　秘あたゝか氣にと寒は只雪のふりつもりたる樣まて也　箋曰河には歳をしらさる故にあたゝか也云々花には綿に似たりと云々共以其儀におよはすふりつもりたるさまな

り
人々のいひしむくらの門　花雨夜の物語にいひし事
なり
あるましき物思ひは　箋曰藤つほの事也　聞書同
秘色々のことをあらましなから思ひ給ふなりかや
うにそは思ふやうなるにすむ人の心につかぬ事を
思ひなけき給ふ源の心也　箋曰かしの字二つあり
上の葎の門はかうやうなる所ならんかし是は推量
の分を一決せり此次のかしは願ふ心也あるましき
物思ひはそれにまきれなんかしと思ふやうなるす
みかにあはぬ御ありさまと下へつゝきたるかし也
ねかふ心なりかやうにあれかしと思ふにたかへる
と也
と思ふやうなる　秘此詞は影略互見の句也かうやう
なる所なりけんかしと云也まきれなんかしと思ふ
やうなると二をかさねたる詞なり心をつくへし
秘本のことし落字ある歟　私云此義たしかに聞わ
きかたし只箋の義と同し事とみるへし
とるへき（かたイ）所なしと　心くるしきむくらの門には心さ
しふかゝらん人をおきて戀しとおもはゝやなりも
し又かやうにおもはしからすはせめてすまゐのさ
まの心やすくはよからん也心くるしきすまゐに心
さしふかからぬ人をおきてはとる所なしとの源の
心なり
我ならぬ人はまして　源の御心殊勝也末摘のかたち
のあしきを見あらはし給ては彌見すて給ましきと
の心也
たくへおき給けん玉しひ　故常陸宮の末摘をうしろ
めたく思ひ給し餘執のしるへにやと也
名にたつ末のと　箋花「浦ちかくふりくる雪は白浪
の末の松山こすかとそみる
河「我袖は名にたつ末の松山か浦より浪のこえぬ
まそなき　弄花には浦近くの歌有此時のさまみる
樣にかけり我袖はの歌の詞とみゆ只松山の浪を思
ふなるへし
御抄云今案此兩首を共に引用るにや雪のさまと又
源の物思ひのたゆみなきと二なからをいへる歟云
云　箋曰只雪の當意なるへし浦ちかくの五文字所
にあはぬ故に名にたつと引かへたるとみゆ
ふかゝらすとも　こゝの景氣なとをなをさりの口す

さみにもあひしらはん人もかなと也
おきなのいみしきそ　いみしきはよき事にもあしき事にもかよはしてかける詞なり
はしたなるおほきさの女　箋半なる也或はしたもの云々只とちつかぬといふ此の女なるへし
雪にあひてすゝけ　秘きぬのすゝけたるを雪に對してかきたるさま面白し　箋曰雪のうへは一入きぬの色すゝけたり　箋聞雪にはえあひて白き夜のいよ／＼すゝけてみゆる也
あやしき物に火をたゝほのかに　花翁に手をあたゝめさせて門あけさせんため也　弄花の説如何　箋曰秘に只朝のさま也花の説あまりなる歟云々
よりてひきたすくる　聞書はしたなる女のたすくる也　箋曰此詞にて火は翁のためにあらすと知へし
御ともの人　翁と女と二人してえ門をあけねは源の御とものゝ人のあくるなり
源ふりにけるかしらの雪を見る人もおとらすぬらす朝の袖かな
河「秋の野の（にイ）さゝわけし朝の袖よりもあはてこし夜そひちまさりける　花あさの袖は朝の袖也　箋曰此老翁の門をさへあけやらす袖のさむさをうれふる心よりもあはれとみる袖のたえかたきと也　御抄今案に我袖は名にたつ末の引歌この歌の時あひかなへり
わかきものはかたちかくれす　箋文集第一秦中吟夜深烟火盡霰雪白紛々幼者形不レ蔽老者體無レ温悲端與二寒氣一併入二鼻中一辛　箋曰古來の義只此翁はしたなる女なとのさむき體を見給て口すさみ給とはかり釋して甚深の義をしらす師説此上件の一部か自然に秦中吟の全篇に相似たり故にふとこの句を顯し給し也　おほとなあふらきえにけるをともしつくる人もなし夜深烟火盡句也うれふなりつる雪かきたれ霰雪白紛々の句也翁のいみしきそいてきたるむすめにやむすこにや　幼者形不蔽老者體無温の句なり
をとらすぬらす朝の袖かな　悲端與寒氣
はなの色にいてゝ　箋曰悲端與寒氣併入鼻中辛此上件の樣體秦中吟に似たれはおとらすぬらすの歌を詠し給ひて末摘の鼻の事を思ひ思へるなるへし併此末摘の鼻の色をもつて秦中吟を思出給成へし塞

き時は常の人の鼻さへ色つき辛きもの也況や末摘の鼻はさそとなり奇特なる詩か自然に出合たり文章の絶妙是をあちはふへし

いまみつけられなんとすへなう　頭中將にみつけられてはいかならんとおほす也　秘すへなうとはすへきやうなしと也無心の事と也

よのつねなるほとの　秘源の心殊勝也　箋同

まめやかなるさまに　花まことしき見つきをし給ふ也上にも此詞はありし也

ふるきのかはならぬ　秘おもしろき詞也

はつかしけならぬを　秘末摘の性なり　箋曰末摘のけさうたゝさる人ゆゑなり

おとるへき人　箋空蟬は權中納言の女なれは也

しなにもよらぬ　箋雨夜の物語にありし事なり

心はせのなたらかに　是よりは空蟬の事を源の思ふ心中なり

やみにしかな　箋哉の字清てよむへし

としもくれぬ　箋源十七歳の冬也　かくはかけとも末々（凡イ）は年内の事なり

内の御とのゐ所　源の內裏におはする時の御とのゐ所桐壺なるへし　秘源十　歲の正月なり　私云これはいまた同し冬の事也　此末の詞についたちのころとあるより明年の事成へし

たいふの命婦　末摘への中たちの命婦なり

御けづりぐし　源のけつりくしに命婦參る也御めのと子なり

あやしき事の　秘大輔の命婦詞也　箋同

なにさまの事そ　源の詞なり

いかゝはみつからの　秘命婦の詞なり

かしこくともまつこそは　かやうによみきるへし　箋曰命婦か自分の義ならはいかゝ隔心申へきそとなり

ことこめたれは　聞書云言を籠るなりいふへきことをつゝみておく義なり

えんなりと　源の命婦を艶過たると仰らるゝ也

かの宮より　秘末摘よりなり

ましてこれは　源のきこえにくゝ侍ると命婦かいひたるをとかめてこれはましてとりかくすへき事かとの給なり

むねつふる　かやうにはの給へとも源の心にもいか

なる文のうちならんと思ひ給ふ也　聞書には命婦の迷惑したる也と云々或抄にも命婦か心とあり此義を用へし

みちのくにかみの　檀紙也奥州よりすきはしめたる故になつくみちのくのまゆみのかみといへり檀の字をまゆみとよむ也以上箋

いとようかきおほせたり　箋曰つぶ〳〵とえりふるき也

歌も　箋曰艶ならぬ也手も歌も艶ならすしたゝかなるといふ成へし

末摘から衣君か心のつらけれはたもとはかくそそほちつつのみ　花元眞集いつかわれたみたのつきん唐ころも君かこゝろのつらき限りは　箋同注之　今案袂はかくそとあるはへちに本様にすへき衣のあるときこえたれは源氏君心得すおほしたる所にあのこと命婦か末摘よりのつゝみに入たるきぬをとり出たり

つゝみ　箋河裹　緩　泥繪　平具延喜式

ころもはこ　箋河に衣筥　蒔繪延喜式

これをいかてか　是より命婦か詞前に申かねたる子細を只今申のふる也

ついたちの　箋曰只今元日にはあらす年頭のために歳暮の御音信也

ひとり引こめ　命婦の中にて取ておくへきにてはあらすと也

ひきこめられなん　秘源の詞也

袖まきほさん人もなき身に　猶源の詞也　箋河 六帖

「あは雪はけふはなふりそ白妙の袖まきほさん人もあらなくに

あさましのくちつきや　秘末摘の歌事の也　秘箋

てつからのことのかきり　末摘のとみ給也前の侍従が歌ともよりもあしきにてみしりたまふへし

筆のしりとるはかせそ　秘はかせとは諸道の師を云也ちとをしへ申人もあるましとなり箋河

かしこきかたとは　末摘の一段と精を入給はすは是ほともいてくましき程に骨を折たる歌とはこれらなるへしと嘲哢したる心也

いまやう色の　是より末摘の送り給ふきぬの色を云也　箋花云紅梅のこきをいふこき紅にもあらす又紅梅にもあらぬはしたの色此比出來れは今様色と

いふかゆるし色と同し然るを紅の色のふかきによりて禁色に似たれはえゆるすましうとはいへり世繼云禖子内親王紅梅十二を奉りたるを内の御使にて中納言の局み奉りてうつくしの今やう色やと申けり云々　花うつほわらはにつゝしのこうちきわかきみのいまやう色のこうちき云々　河ゆるし色今様色ともに紅色なり見延喜式　然らはゆるし色同物歟紅にならへてはゆるし色といひ紅に訓する時は今様色といふ也えゆるすましくとはゆるし色によそへてそしる歟云々　花にみえたりこれはきぬの事也

なほしのうらうへひとしう　秘当時のなほしとはみえす上古にはうらおもて紅の直衣とある歟と云々今案紅の直衣の事所見分明ならす是は直衣にてはあるへからすいまやう色のえゆるすましうつやなえふるめきたるといふまてはきぬの事なりされはふるめいたるといふにて句をきりてなほしのうらうへひとしうよりは直衣の事也こまやかなるといふを色のかたにはみるへからすをりざまなとのこまやかなる心歟是今案の義なり云々　箋花上にいへる今様色はきぬを云此直衣も今様色のうらおもて同色なるをいふにや云々　河云おもてうら同色のこき也これも舊義歟云々御抄の説ふるめいたるといふまてを一句にしてきぬの事と見るなほしと云詞より直衣の事にみる也　花の説も大略かくのことし然るを松殿装束抄紅直衣連綿也法性寺關白直衣布袴紅梅織物直衣紫織物指貫皆練着之　寛弘四三五法性寺關白左府行曲水宴主人着桃花直衣柳色指貫山吹色衵永久三十一十四五節童御覽日法性寺關白紅梅浮文繭木打指貫皆紅色以上箋の分　私云秘の義はきぬはいまやう色直衣はこと色のこまやかなるといふ義也然に箋の義は紅の直衣の例をひけり此義も勿論きぬは今やう色なり直衣も同し色のこまやかなるといふ義なりしかれは紅直衣のかたを執せられたるとみゆ

こまやかなる　箋秘におりさまを云ふ上にいへるいま様色はきぬをそいふ此直衣も今様色のうらおもて同色なるをいふにや

なほ〳〵しう　箋曰直々敷也　平懐の體也

そはめにみれは　源の手ならひし給ふを命婦のみる

なり

源なつかしき色共なしに何に此末摘花を袖にふれけん

箋曰源氏後悔のひとりことなるへし秘同　河「人しれす思へはくるしくれなゐの末つむ花の色にいてなん人丸　同萬「よそにのみみつゝやこひん紅の末つむ花の色に出すとも

色こき花とみしかとも　そも源の手ならひなり　河「紅の色こき花とみしかとも人をあくにはうつるてふ也箋秘同　此歌よく叶へり　私云灰のあくを飽によせたり

をり〳〵の月かけ　河親行說月かけ也　河にはつまかけとありてかたはしの影なり云々花に書寫のあやまり歟と云々　今案是は命婦の事なるへし源氏は月かけならてたしかにみ給ふ命婦時々月影なとにかはりみ參らせたる計と覺えたり　まへに物こしにて語ひ侍とあり又此比の朧月夜に忍ひてものせんともありかやうの時々計命婦はみ參らすへし箋曰命婦はいまたひた面には見奉らすよひ〳〵の月影はかりにはほのみたるを思ひあはする也　源の事に見る義は非なり花說誤也　一本つまかけ云云河花これをのす但花にはかきあやまれる歟云々これより命婦かこゝろなり鼻のことをおもひあはするなり

返大輔命婦くれなゐのひと花ころもうすくともひたすらくたす名をしたてすは　河太詩シタフ　永日本紀　疋白氏文集　疋如同

箋同　花命婦か末摘の方人してよめる也箋同秘同

箋曰跡へかくのことき歌をよみ捨たるてにをはと心得たりさにはあらす名をしたてすはうすくともとかへりたるてにをは也

なきてひとりこつを　命婦也

よきにはあらねと　源の心也

かいなてにたに　おしなへてといふ心也又すへらかなる義にや末摘の口つきのせめて命婦ほとにもあれかしの心也　秘かやうならはとなほさりならばと也せめて此命婦の口つきほとならは也　聞書此なみならはと也　箋曰箏より出たる詞也やかて此說にかいなての心やりはかりと有初心の時は手ひとつに六すちの絃かあきらかにかゝれす心やりはかり成物也此事をわして書り　私云箋の義心よく叶へりさておしなみなといふやうに心得たる義可

然
人のほとの心くるしきに　箋末摘君の種姓かろからぬを云
名のくちなんは　箋曰人々參れはあやしく思ふへし此衣箱のまいり所を人もしらは末摘の名をくたすへし然れは源氏まて名をくたし給ふへしと也
人々まゐれはとりかくさんや　命婦にの給詞也やは付字也但命婦に下知の詞也
かゝるわさは　猶源の詞也　花末つむのおくれたる衣をあさましとおほしてかゝるわさは人のする物かと命婦まて心をとりなして思ひ給へる也　秘此衣を源のあさましとおほす也
なにゝ御らんせさせ　秘命婦心
われさへ心なき　命婦か我さへ遠慮なく御目にかけたる事よと後悔する心也　花に源の命婦まて心おとりして思ひ給ふ也といへるは如何
やをらおりぬ　源のおはする內の御とのゐ所より命婦のかへる也
うへにさふらへは　禁中の臺盤所に命婦のさふらふ也女房いさふらふ所也
さしのそき　源也
くはや昨日の　さあとてなけ出したる也　秘さあといふかことし箋同
心はみすくさるゝはとて　箋用捨の過たる心也　常陸宮の音信さし過したりと源の思ひ給ふなるへし
秘同　花に心たちと有　命婦か衣箱とり傳たるをさし過たりとの給ふ云々　秘云非也
女房たち何事ならんと　臺盤所にさふらふ女房たち也
たゝ梅の花の色のこと　箋是より源の御口すさひ也
秘同河に求子の歌也春日の社においては三笠山とうたふ他社においては各其所をうたふと云々此心は源の心中に常陸宮のをとめとうたひたく思ひ給ふ也鼻の色を思ひての給ふ故なり　此義秘說也秘同　花には風俗歌とあり奥入には求子の歌と有如何又求子駿河舞とてあつまあそひにあり風俗は別事也尋へし一注又口決あり
命婦はいとおかしう　秘命婦は心得ておかしと思也なとて御ひとりゑみはと　花源の御ひとりゑみを末摘の事をはしらぬ女房のあやしく思ふ也秘同之

箋曰命婦の事歟
あらすや 秘命婦の釋して云也 花にはそこに在ける一人の女房の詞云々如何 弄しらすなとおほめく詞也 箋曰命婦か獨ゑみに見れは此詞心得やすし傍輩の女房の命婦か思ひ出し笑ふをとかむるをさにてはなし源のをかしき事をの給へるをわらふ也と此次の詞にて釋してきかする也 私云源のひとりゑみにみれは命婦かあらすといへるはよくしらぬされともかくのことくにて有へしと推量に釋してきかするなりさむき霜あさといふより命婦の釋してきかする詞也
さむき霜朝にかいねり好める 弄あかきにすきたる鼻やありつらんなとされこと也秘同 秘かいねりは紅也 箋花衛門府 風俗歌云 多々良女乃花乃如加以禰利好牟夜滅紫色好牟夜 政事要略 たゝらめの花は只梅の花の如く也かきあやまりなり云云 箋曰但うたひものなれはふしにひかれてたゝらめと聞る也と云々 是はあかき鼻やありつらんと云心也かいねりは紅也 河搔練は兩面ふくさはりにて中重なし紅色なり火色うらおもて紅の打物中へあり
あなかちなる御ことかな 弄しひてかくの給ふをいへり秘同 これはかたはらの女房の云也 左近命婦 肥後の采女 箋曰此二人鼻赤人なるへし 是は心しらぬ女房たちのとり／＼にいふ也 或抄云三笠の神は鹿島より出給へはかしまは常陸國なれはよそへてひたちの宮といはまほしき心也云々
私云もし此事弄に秘說といへる歟如何
御かへりたてまつり 源よりの返事を奉りたれは末摘かたの人々よりて見る也
返源 あはぬ夜をへたつる中の衣手にかさねていとゝみもし見よとや 花拾「衣たに中にありしはうとかりきあはぬ夜をさへたてつる哉 秘いとゝへたておほき中と思ひしにから衣きつゝきとへたてあるさまにうけたまはるは猶々心のへたてをかさねよとあると也結句は我も見ん人も見よの心也かさねては重ね／＼へたてたる也かこちたる心也箋同
すてかい給へる 源のなけやりさまの體也
つこもりの日 箋曰源十七歲のとしの暮也
かの御衣ばこ 末摘の衣箱をとゝめおきて只今きぬ

を入てつかはさるゝ也
御れうとて人のたてまつれる　花源の御ためにと人の奉れるきぬとも也さなから末摘のかたへおくり給也
御そ一くたり　源へ人の奉れるをこと／＼く具してといふ義也さてえびそめといふよりそのきぬの色なるへし
えひそめ　蒲萄(エビゾメ)　紫色の最淺也箋同
山ふき
命婦そたてまつれる　末摘へ命婦のつたへたるなり
わろしとや見給ひけんと思ひしらるれと　是は命婦の心也
ねび人ともはさたむる　末摘の御かたの年より女房なとこれよりのは御そも歌もおとるましきと批判したるなり
たゝおかしきかた　歌も源のは艶なる計なり義理なとは末摘のかたしかなると也凡歌の道ことわり過たるは見くるしき事なりさりとてことわりきこえぬは沙汰之外也此さかひをよく／＼思ふへしとそ
ひめ君も　末摘のわか歌をかきとめておきたまふなり
ついたちのほと　箋曰源十八歳の正月也秘弄同
ことし男たうか　花男踏歌は正月十四日の事也初音の巻に委しるすへし　箋曰初音巻にくはし天武天皇の朝にはしまりて聖武天皇の御ときかさねてはしめおこなはる河にくはし　私云毎年おこなはれぬ故にことしはといへり女踏歌は毎年正月十六日也
ところ／＼あそひのゝしる　然るへき人々も男踏歌には出給也仍うちならしの所々にあるなり
さひしき所の　秘常陸宮也
なぬかのせちゑ　白馬節會也　河天武天皇十年正月七日天皇小安殿(コアドノ)に出御ありて宴會あり云々是七日の節會の始なり　弄白馬ひるおこなはれたるへし
よふかしておはしたり　源の末摘へおはしたるなり
けはひうちそよめき　源の方より末摘の官女ともまてきぬなとおくり給ゆゑにちと物々しき體なり
君もすこしたをやき　河婀娜(タヲヤカナリ)遊仙窟　竇同上　窈窕同末摘のありさまなり
あらためて引かへたらん時　末摘の心もかたちもあ

らたまりたらはいかならんと源の心に思ひ給ふなり是は年のあらたまりたると也又衣裳なとのかはりてちとみなほしたるにてかやうに源の思ひ給ふ也

むかひたるらうのうへもなく　聞書やねなとは板間かちなる也

日のあしほともなく　河日脚　東の妻戸をあけ給へはかく有へし

雪すこしふりたるひかりに　雪のふりたる朝さやかに晴る物也それに日の映したる光なり

さしいてゝ　末摘のさまなり

かたはらふし　すこしかたふきかゝるにより髮のかかりなとしたる體也

こほれいてたる程　髮の體なりかみのかゝりのうつくしき入なるよし前にみえたり

おもひなほり　すこし源の心に樣體を見なほし給てもしかたちなともなほりてはと思ひ給ふ也

いとほしかりし物こりに　花にはいとおかしかりし物こりとありてまことにわらふへき事といふ也云云　三本なとにはいとおかしかりしと有此義を用へし

あけもはて給はて　秘上下續きたる格子なるへし今の紫宸殿なとのことくなりそれは内の方へあくる也まへにもあり

けうそくをおしよせて　弄長きみかうしを引かけ給成へし上下つゝきたるを脇息によせかけん事たより有へき歟但分明ならす一禪勘前に末摘のかたちを見あらはし給しにこり給て格子をあけはてぬ也おひなほりを見はやとおほせとかたちはかはるましき物なれはなり

御びんぐき　三光びくきといふやうによまるびんぐきとたしかにはねてはよまれさりし也　源のさま也

ふるめきたるきやうだいのからくしげかゝげのはこ　河鏡臺　唐匣(クシゲ)　搔上函(カヽグノハコ)　鬢をかく具足入たるはこ也　私云　三本　きやうたいのからくしけとあり是は鏡臺の具のからくしけといふ成へしかゝけの箱はかきあけの箱也鬢をかきあくる道具を入る箱也鏡臺なとは男の具足ときこゆ　秘かやうの御具足は故宮の御物なるへし　聞書又はふるめきたる

きやうたひのからくしけかゝけのはこと青表紙に
ありと云々　三本にはきやうたいのとあり
おかしと見給　源の心也
につきこりと　よのつねのあきたる心也
ふなり
ありしはこのうちの　秘ふるとしに源より奉られし
衣裳をそのまゝめすなり
心ばをさながら　聞書心はへなり又心はへとかきた
る本もあり
さもおほしよらす　さもおほしよらすといふまでを
上へつけてみるへしつねの人ならは源の御方より
おくり給ふきぬはかりを着用し給ふは源へ對して
ははつかしくも思へきを此君はさやうのかたをは
何ともおほさす大やうなる人と也
けうあるもんつきてしるきうはき　花此一段の詞說
說有一には源氏のおくり給へるきぬともの中にか
かるうはきもありけるをいま見いて給也一にはう
はきはかりは末摘の方にしたてられたるをめつら
しく思ひ給也　秘花に二說ありいつれも然へし
聞書此うはきは末摘の方にしたてられたるなり

私云此義然へし　河の義不審の間略之
ことしたに聲すこし　是より末摘に源のの給ふ詞な
り
またるゝ物はさしおかれて　河古「あら玉の年立か
へるあしたよりまたるゝ物は鶯の聲またるゝ物は
うくひすの聲とよめりされともその聲はさしおか
れて末摘の聲のきゝたくうちとけたまはんを見た
きと也あら玉のとしたちかへるとあれは御けしき
のあらたまらんと云也
さへつる春はとからうして　末摘の詞也　河古「百千
鳥さへつる春は物ことにあらたまれとも我そふり
ゆく　我そふりゆくといふ心をのべたまへる末摘
の詞也卑下しての給ふなり
さりや年へぬるしるしと　源の又詞也はや年をかさ
ねたる中のしるしと也又百千鳥の歌の心にてわれ
そふり行といふをさりやとしへぬるとの給へる歟
夢かとそ見るとうちすして　又源の口すさみなり
河奥入夢とこそ思ふへらなれ覺束なねぬにみしか
はわきそかねつる　新聲宛轉夢不レ夢　伊行釋奥入
云伊行か釋不レ叶可レ勘レ之　今案忘れては夢かと

かとそ思ふ思ひきや雪ふみ分て君をみんとは　此歌の詞をいふにや　兩賢之釋相違如何　秘別に引歌有へき歟又業平の小野にての歌の心も面白かるへし弄　業平小野にての歌も此時の樣にあたるへきにや　聞書業平の歌の心也　或抄御說同之

くちおほひのそはめ　末摘のさま也

みくるしのわさや　源の心也

二條院に　末摘よりすくに二條院へ也

紫の君　紫上也はや名のやうにかけり

かたおひ　紫上いまた成人の人ならねはおひとゝのほらねともうつくしきしたちといふ也かたなりとも有

くれなゐはかうなつかしきも　花紫の姫君の事也くれなゐは紅顏をいふなり　弄紫上のきぬの事也　秘花の義如何只きぬの事なり　聞書紅はきぬ也きる人から也　私云花の義は末摘の鼻の赤きに對して紫上の紅顏のにほひやかにうつくしきをいへる心也　只きぬの事也

むもんのさくらのほそなが　秘是はうはき也　河櫻色は面は白くうらはこき蘇芳也　ほそなかは細長也幼少貴女の着する物也

こだひのをば君の御名殘にてはぐろめもまたしかりけるを　花山海經云東海有二黑齒國一其俗婦人齒悉黑染　今案日本は東海の中の國也かの俗にならふにやむかしはいとけなき女は左右なくかねをつけされは古代のをは君のならはしにて紫の姫君も十歲にあまるまてはくろめもなかりけらし　或抄故をは君の名殘とはかの服なりし故と云々此箋如何花の義然へし

ひきつくろはせ　歯くろめさせ給へる也

御心くるしき物を見てゐたらてと　花末摘の事也私云此義は心くるしきはみくるしき心也みてゐたらでとよむべし　聞書此義を用ふ　又三光の義は心くるしきは紫の事也心くるしきとはねんころに思ひいたはる心也前にも此心有也其時は心くるしき物を見てゐたらてと見ての字を淸也　此うつくしき紫の上はかりを見て居ずしてなせによそを思ひあつかふそと也心はひとしき也猶此義を用へし

われもかきそへ給　是は源の事歟又紫上歟いつれともみるへしかみいとなかきといふよりは源の末摘

のかたちを繪にかき給ふ事をいふ也かたにかきて
は繪にかきて也
わか御かけ　源のかたち也　則源の心也
あかばなは　赤鼻也
さてましれらん　よきかほにあしき所のましれるさ
へみにくきと也源の心也
まろかかくかたには　源の詞也
うたてこそあらめ　紫の詞也
さもやしみつかん　紫の心いまた分別なき體也
そらのこひをして　源の也紫のしみやつかんと思ひ
給へるを見てかくし給ひてたはふれ給也
うちにいかに　内裏也眞實に思はせん爲にかやうに
の給ふ也
よりてのごひ　紫の拭給ふ也
へいちうかやうにいろとりそへ給な　源の詞なり
河平仲は平の貞文か字也女のもとに心さし有けし
きを見えんとて硯の瓶に水を入てもちて目をぬら
してなくよしをしける女心得て墨をすりて入たり
けるをしらてれいのやうにかほにつけてかへりた
るをみて家なる女のよみける「我にこそつらさは
君かみすれとも人にすみつくかほのけしきよ　宇
治大納言物語にあり大和物語にもあり云々　弄河
内本には硯水にかみをひたしてとあり云々平仲か
やうにてあるにて聞えたりよろしかるへし　私仲
の字にこりてよむ歟　一答勘秘河にあり　私云赤
きに又墨をそへ給へるなり
あかゝらんはあへなん　河ありなんといふ心也　聞
書あやかると也　私云此義如何只さてもありなん
といふやうなる所にいへる事おほしあかきはこら
へてもありなんといふ成へし　聞書こゝにて平仲
か事をいふは紫に男女の道をかつ〳〵しらする義
なり
いもせとみえ給へり　河いもせはいもうとゝせうと
とを云　伊弉諾伊弉冊尊兄弟はしめて夫婦と成給
ひしによりて夫婦をいもせといふなり
いつしかとかすみわたれる　いまた春のはしめなれ
はかくいふ也　末摘よりかへり給ひし同日とみえ
たりしからは三月八日なるへし
梢ともの心もとなき　いまた木のめもはつかなるさ
まなり

梅はけしきばみほゝゑみわたれるに　河「匂はねとほ
ほゑむ梅の花をこそわれも行てはをらまほしけれ
花ほゝゑむは笑也梅のやう〳〵ひらけたるを云索
笑梅と杜子美にも詩につくれり
はしかくしのもとのこうはひ　仁和芹川の行幸の次
に八條院に幸す御輿よするたよりとせんかため
にはしめて階隱を作云々李部王記に天慶六年にみ
えたり　今案南階の間に柱を二たてゝ上をふきい
たすをはしかくしといふ鳳輦を東むきにかきするゑ
て左のわきより乗御ゼウキヨ―下御カギヨあらんためなり
いとと〳〵さく花にて　最早開花となり
源いろつきにけり　紅梅なれはおもしろくかけり
くれなゐの花そあやなくうとまるゝ梅のたちえはな
つかしけれと　秘義あらは也　末摘の事を思へる也
梅の立枝は面白けれとも末摘は思ひうとまるゝな
り
うちうめかれ給　源の御さまなり
かゝる人々の末々いかなりけん　秘草子地也聞書紫
と末摘との事を人々と云也　花にはあないとほし
かゝる人の御行末とありて是は物語の作者の詞末
摘の事也私云花の義は末摘の事とはかり見たり河
あないとおしかゝる人のとはかりあり是を用ふへ
からす

△秘抄奥勘物

花鳥七勘故常陸のみこ　光孝天皇承和五年正月任二常陸大
守一考二續日本後紀第五一承和五年正月庚申朔壬申
四品忠良親王爲常陸太守從五位下藤原朝臣貞公
爲レ介

嵯峨天皇
- 仁明天皇諱正良
- 忠良親王二品式部卿容貌美麗貞觀十八二廿二薨五十八歳

しゝまの事　天文八年五月十二日議定所において講
釋の時じしまは河海に日本紀を引て進退の字をひ
ける尤然へき也わかいく度もそなたの進退にまけ
て堪忍する也物ないひそとうけたまはらは又それ
にしたかふへし今まては物ないひそとはうけたま
はらさる程にと也當時皆じしまを無言の樣に心得
て用るは僻事にや進退の字の心也　然をしまにか
ねつくかたにとりなしてよそへいへる成へし人の
我まゝに物を沙汰するをじたいにするといへるは

この進退の字をじゝまいてと讀るに通へるにやと覺えたり然ばしゝまと聲を讀へきにや先公此聲を用給へり　私云先公とは逍遙院也此抄稱名の義也

あるはや（清）とおかしう　はやの詞は者乎の字の心歟物をといふ詞なるへし

あらすさむき霜あさに　是はこゝにある人々の我身のうへかと心得るを命婦のさにてはなきと也命婦の我身のうへの事といひたる也さてあらすとはいへり其故は此命婦は左衛門のめのとのむすめ也されは衛門府の風俗の歌の詞なれはわか身のうへといひなす成へし此義を申也　私云弄花に口决あるやうにいへり此義歟

けうあるもんつきたる　花鳥の二義非歟只末摘の心也したぎなとをも源に對して是は皆源より奉り給へる物をとはちたまふへきを只このうはきはかりをは末摘の心にもはち給也其外をは何とも思ひ給はぬと也是も心のおくれたるかと也此由申候　又案之花鳥の初の義宜歟ありしはこの心はとは心はへ也皆源より參らせ給衣裳也さもおほしよらすとは源氏は思ひより給はぬ也これ程不辨に有へきとは思ひより給はすしたてられたると思ひ給へる也けうあるもんつきて此うはきを源の御覽してこれこそ我方よりまゐらせたるに似たると思ひ給へる也かやうにみれは源の心にて然へき歟私云此兩義共に如何只はしに注したる分可然歟如何

末つむ花　古人しれすおもへはくるし紅の末つむ花の色に出なん　顯に云紅の花は末よりさけ（れイ）はやかて末よりつむされは末摘花とよめり　私云顯は顯注密勘歟　萬葉に「よそにのみ見つゝやこひん紅の末つむ花の色に出すとも　私云此萬葉の心よりよめる歟よそにのみ見てあるへきものをとなり私云上件以上秘の奥に注する分注也私云萬か此私とは秘の義なり

岷江入楚第七　紅葉賀

十七歳
神無月十餘日朱雀院行幸事
先於内裏有試樂事
源氏中將與頭中將舞青海波給事
藤壺女御與源氏贈答事
行幸其夜舞賞源氏叙正三位頭中將叙正四位下事
源氏於藤壺女御三條宮對面兵部卿宮事
十二月卄日紫姫君除服事九月廿日外祖母尼公卒去十二月廿日三ヶ月服滿故也

十八歳
正月一日參朝拜給事
紫君比々奈遊事
正月二日參賀處々給事内春宮一院三條宮等也此院爲古來不審
二月十餘日藤壺女御御產男子事冷泉院是也
去年四月藤壺里居之比與源氏有密通事則懷姙之事ありそれよりことしの二月までは十ヶ月也しかるを源中秘抄に横竪の年紀をしらすして冷泉院は三年胎内にましますと思ひて羅睺羅尊者六年耶輸陀羅の腹に有し事を例に出せり大にあやまれる事也

源氏贈消息於王命婦許事
四月若宮初參内事　若宮似源氏給事
源氏折撫子贈王命婦許事
紫君習箏給事
夏比源氏與源内侍戯事
又源内侍於温明殿彈琵琶事
源氏歌東屋立寄給事
頭中將見顯引解直衣帶事　此時源内侍五十七八の人也二十よのわか人とは頭中將を云へし但源氏君ことし廿一と云說ある歟こゝにては一往かなふ樣なれとも猶しかるへからす
十月藤壺女御立后事
源氏任宰相兼中將事
中宮入内源氏供奉事

紅葉賀　箋云詞心にて付たる巻の名也
箋此巻に紅葉賀とつゝきたる詞無之末の花宴藤末葉等に至りて此時の事を紅葉の賀といへり花に一説もみちのかけやさう〳〵しからんといふ所を賀の日やと書たる本有と云々　箋云巻の名に符合せしめんためか凡賀とは其年の滿數を賀して行末の寶算を祈る心也　説文云賀とは以禮物相奉慶也
賀と號する先例　花紅葉賀うつほに神泉苑に紅葉賀きこしめすへきと云々　藤の花の賀　藤井の宮に藤花の賀し給ふ云々　雪の賀　紅梅の賀　承和の御時行るゝ事有以上花鳥此御賀誰人とも所見なし　天皇之御賀仁明天皇嘉祥三年三月庚辰興福寺大法師等爲奉賀天皇寶算滿于四十云々是初例也 秘
同　又同十月癸卯嵯峨天皇太后遣使奉賀天皇四十寶算也凡厥山海珍味數百捧説而天皇御紫宸殿音樂遞奏歡樂終日云々　太上天皇之御賀　淳和天皇天長二年十一月丙申奉賀太上皇五八之御齡云々是始也
秘同　源氏十七歳の十月より十八歳の七月までの事あり河内本に十月までの事ありと云々花にもかくのことし如何　私云以上箋の分注之弄秘此義に

同し　河朱雀院行幸紅葉陰也此文字陰不見巻中花宴巻御紅葉賀とはいへり此名目に秘事有之　或抄御説に此巻の名心にて付たるへし面白し又河内本には十八歳の十月までの事とあり七の字を十文字にあやまれる歟以の外わろし
朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり　箋云三條朱雀に四町に造られたり是彼院なり天子脱屣の後の御在所なり　延喜の御宇に朱雀院と申は宇多のみかとなり　古今に朱雀院の女郎花合とあるも宇多御門の御事なり位をさりたまひて後此院に御座あるへし

行事

蔡邕云天子車駕所レ至見ニ令長三老官屬一親臨軒作レ樂賜以ニ食帛一民爵有レ級或賜ニ田租一故謂ニ之幸一 漢儀注
注　晋灼曰民臣被ニ其德一以爲ニ僥倖一也　又師古曰倖者吉而免凶可慶幸也故福喜之事皆稱爲レ幸

朱雀院行幸之先例

延喜十六年三月七日辛酉行幸朱雀院有法皇五十御賀
花鳥には此例をもちひたり
又同年八月二十八日行幸朱雀院詩題高風送秋韻　康保

二年十月廿三日行幸朱雀院 題飛葉共舟輕 十月之例康保二年に相當せり 全篇の義は延喜十六年に隨へきにや 花に延喜を用へきとあるは此卷に一院といふ事あり寛平法皇に准す延喜の御門崩御の後に一院はかくれさせ給へり仍桐壺御在位の中崩御の事みえさるなり以上箋是河花の義也 秘 花鳥に種々沙汰あり宇多御門御賀三ヶ度也朱雀院の事は前に注せり古今に朱雀院の女郎花合と有も宇多院也行幸事河海に康保二年十月をひけり時節是にもとつく歟 弄 宇多御門の御賀にひする事花鳥にくはし但必五十賀とは心得へからさる也又垣代四十人の數も說々不同也只院の御賀に心得へし朱雀院は三條朱雀に在と云々朱雀冷泉いつれもおりゐの御門のおはします院なり 箋 聞書曰代々のおりゐの御門朱雀院におはしましつるを承平のみかとを朱雀院と申奉りてより此義なき也 承平の御門は延喜より後の事なれは此紅葉賀の時分をは其以前と心得へし 行幸とは天子車駕しておはしまして民に物なと給ふ事のある也ゆいてさいはひすといふ心也河海裏書云知見抄春宮の女御の花の賀にめしあつけられてと云り是は誰人の御賀そや賀とは如何なる事そ此春宮には陽成天皇也御母の女御は二條后也其二十の御賀也賀とは御年の十にも二十にも三十にも必つもる年の御祝の遊をせらる也ゆゝしく大事の事なれは十年に一度つゝせらるゝ也春するをは花の賀といひ秋するをは紅葉の賀といふ也それならぬ御遊をは花の宴月の宴といふへき也賀とはいふへからす 私云以上伊勢物語の義なり此義不審あり 九 稱名院云賀は四十歲にて始て是を賀する也四十の四文字を忌て五八の賀と云也みてる年を賀して行末を祈る心と云々河海の說如何

よの常ならすおもしろかるへきたひの事なりけれは 今度の御賀別して引つくろはるゝ故に尋常ならす面白かるへき度の事といふ也

御かた〲物み給はぬ事を 秘 禁中の外なれは各女御なとの御見物叶はさるとなり箋同

うへも藤つほの見給はさらんを 聞に物見給はぬ事を口をしかりといへるは后女御たちの心なり是はみかとの御心に藤つほの御覽せさらん事を口をしくおほすと也とりわきたる御心さしのほときこえ

以上箋　河　わか紫の巻云十月に朱雀院の行幸有へしとて舞人なとやんことなき家の子ともとあり位ある人ほと何のかたにもよき也

名をえたるまひのし　舞の通の者の事也今の世にも樂人舞人其道々地下にあり

こゝしうなまめいたる　箋巨々敷也大やうなる心也其道の者は練磨して勿論ならひなとはなけれとも大やうに風流なるやうなる事は源なとのやうにはえまひいたさぬと也なまめいたるすちをえなんみせぬとは餘情のなき心なるへし

こゝろみの日かうつくしつれは　試樂の日かやうにあまり出來たれは賀の日や結句ふできならんと也もみちのかけやさう／＼しからん面白くかけり

見せたてまつらんの　藤つほへみせたてまつらんとのみかとの御心となり

よういせさせつる　是まてみかとの御詞也

つとめて中將の君　秘翌朝源より藤壺への消息也

いかに御覽しけん　是より源の文の詞なるへし

よにしらぬみたり心ちなからこそ　藤つほのことゆゑ何をもわきまへぬ思ひの心中とかこしなしたる詞なり歌の心とひとつ也　箋聞舞のさまもさそみたりかはしかりつらんと也

源 物思ふにたちまふへくもあらぬ身の袖たちふりし心しりきや　花源氏の歌也立まふへき心もなかりしかともけふの事は只御前にみせ奉らせ給ふへきためとありしかはなきてをつくし奉ると思ひ侍りし心さしをはさりともしらせおはしましつらんといふ也　秘同箋云藤壺のみ給ふ故に手をつくしけると也

あなかしこと　源の歌のさまの隨分のやうに舞を申なしてかこちかましきをおそれたるといふ心也あなかしことあるをよみきるへし

御かへりめもあやなりし　箋云物語の批判なり　箋云此御返りのありしは舞を興し給よし也　花あやは文也錦なとの文を目にみることくうつくしき心也　秘平生はたまさかの御返事もなかりしにけふ御返りの有は昨日の舞をたくひなくおもしろく思ひ給ひしゆゑにてあるそと草子地の詞也

返藤壺 唐人の袖ふる事は遠けれとたちゐにつけてあはれとはみき　箋青海波は左の樂唐の樂なれは外國のことは遙にして知かたけれとも昨日の舞の手は忘れか

たしと也　箋云あはれとは舞の苦心を云よし也一
向にけさうの方にはあらさる也弄秘同　河或本云
浦人の袖ふることは遠けれと浪のたちゐにあはれ
とはみき云々樂の名海邊なれは勿論と云々然るに
證本ことにから人とある歟　聞書云袖ふることは
遠けれとゝは舞の善惡まてはよくわきまへねとも（ぬことなれイ）
と也此義如何
おほかたにはとあるを　秘舞の興大かたならさるよ
し也　箋云愛の義也　箋河の説に源に藤つほのお
ほけなき下の心あるゆへ大かたに御覽しける云々
如何以上秘箋同　藤つほの文のことは也、
かきりなうめつらしう　是より源の心也
かうやうのかたさへ　箋云樂ならは樂（イナシ）とはかり聞給
へきに左の樂を唐朝のつたへといふ分別さへまし
ますと源の心に感し給ふ也秘同
人のみかと　私　唐を云
御后こと葉の　秘后の御したちと也　箋云藤つほを
よき立后の器かなと源の思ひ給ふと也是を只今藤
つほは后にあらすと云不審の義を河海にのせらる
はなはた然へからすかねてもとほゝゐまれてとあ
る時は當時后といふにあらす后かねと云義也　私
云河に則天皇后なとの事をひけり沙汰に及さる義
なれは略之
ちきやうのやうに　持經のやうに也　箋聞前のかれ
うひんかにかけてみるへし云々
行幸にはみこたちなと　是より行幸の當日の義也
箋云花には前日也と云々然るへし
東宮もおはします　箋花に延喜十六年三月賀令喚皇
太子此時の太子は保明太子也　私云此物語　にい
へるは源の御兄朱雀院也
もろこしこまうと　箋河に左唐右高麗　天平十一冬
十月皇后宮之維摩講終日供養大唐高麗等種々音樂
爾乃唱此言詞萬葉第八
くさおほかり　箋云種々の樂數おほき也秘同
つゝみのおと　大皷鞨皷三皷なとゝて色々ある也
ひとひの源氏の御夕かけ　試樂の日あまりなるまて
みえ給し故に行幸の日は御祈禱なとあるなり　秘
まへに神なとそらにめてつへきと有し事也其故に
誦經をさせ祈禱なとさせ給也　私云此事は弘徽
殿の給へる事也それをみかとのきこしめすへきに

はあらす如何
春宮の女御はあなかちなりと　是又弘徽殿の事也
かいしろなと殿上人地下も　箋云奥にあり
いうそくのかきり　箋當時隨分の人々也秘同　河右族
也　華族也　又は有識也
宰相ふたり　左衞門督　右衞門督　箋樂所の奉行也
系圖の外の人々也　二人の宰相は參議左衞門督參
議右衞門督也　御賀樂行幸參議之例　延喜十六年
法皇五十御賀樂行事保忠卿于時三木
世になへてならぬをとりつゝ　世にすくれたるを師
匠にとりつゝ也これはかねての稽古の樣をいふ也
木たかき紅葉のかけに　箋花に是より御賀の日の事
を云云々箋云此儀然へし行幸の日はといふより當
日なるへし
私云箋如此書てこれをけす也但行幸の日はと云よ
り當日の事とみて其あひの詞は前日の事をいひ出
したると心得ても相違あるましき歟如何
四十人のかいしろ　箋河に長秋卿笛譜云四十人の內
序二人破二人あり垣代三十六人云々舞人の立そひ
也輪臺の輪作といひて舞臺の上にまろく立めくる
也此時懸比巴あり云々以上箋　輪臺は青海波の前
に吹樂也其間に輪を作る歟云々　弄四十人とある
事は又自然の事にや此物語に物の數を云にかなら
すしもよせなきのみなり垣代は地下堂上相ましは
る云々
いひしらす吹たてたる　秘四十人のかいしろとよみ
きりていひしらすとよむ也四十人か皆悉吹たてた
るにてはなき也　箋樂所の樂の事を云四十人の垣
代か吹たつるにあらす
まことのみ山おろし　秘花に朱雀院には池山ある所
なり
青海波のかゝやき出たる　箋云源の舞給ふなるへし
おそろしきまて　身のけたつなといへるやうの心歟
かさしのもみち　箋冠の角にさす也頭花加佐之又挿頭
花
ちりすきて　箋云散透て也箋清てよむ過るにはあらす
かさしの事　花鳥につくり花立木の枝兩樣也源の
かさし誠の紅葉なるへしちるよしあれは也　菊の
かさしは河海云後撰に元良親王の四十の賀に菊を
かさして參議伊衡朝臣「萬代の霜にもかれぬしら

きくをうしろやすくもかさしつる哉　折二御前花一かさす事　西宮鈔臨時か康保三年三月十一日花宴に時に月明風和侍臣折花挿公卿以下冠以上箋
左大將さしかへ給　箋系圖の外の人也秘同
えならぬを　えもいはすおもしろき花也
空のけしきさへみしりかほなる　天氣も是を感したる様なると也
又なき手を　箋試樂の時にもこえたり秘同箋聞曲の手をつくす也試樂の日此上はあるまじと思たれは又けふは一かと面白きと也
いりあやのほと　箋河に舞に有取綾手故に入綾と云云　花に俊頼歌郭公二村山を尋ぬらん入あやの聲やけふはまさると　顯照注云舞には入あやとてさらにとてかへしおもしろくまう事によせてほとゝきすの入あやの聲やまさると讀る也已上箋　花若菜巻上云柏木右衞門督らくそんの入あやを舞と有六條院の御賀の事也
物みしるましき　秘面白き詞也
承香殿の御はらの四のみこ　弄女御誰ともなし　秘桐壺のみかとの御子也　箋桐壺帝第四皇子螢兵部卿宮の御さしつき也
しうふうらく　河秋風樂盤渉調
さしつきの　源の舞につきてはと也またわらはにてといへるは前にいひける雅明親王の七歳にてまひ給へる事を思へる也
ことさましにや　秘あまりの面白さゆゑかへりて興もさむるはかりなり世俗にいふかことし　箋かへりて興かさむる也　私云青海波秋風樂のすくれたる故のこりの舞のおもしろからぬをことさましといふ也
源氏の中將正三位し給ふ　箋花に延喜御記云貞觀以來奉レ賀時有叙位之例　箋云今日行幸賞必可有之又舞之賞これあるへし勿論の昇進哉
正下のかゝいし給ふ　秘正四位下に叙する也箋同
この君にひかれ給へる　秘源にひかれて各昇進し給ふと也源の何事もすくれ給へる故に叡慮も御心よきさま也それゆへ彌かやうの賞なとをもおこなはるゝと也
さきの世ゆかしけなり　前世の戒行のたかきかしらるると也　秘源のさきの世のゆかしきと也

宮はその日まかて　まかんてとよむへし　秘藤壺の里の亭へ退出し給ふ事也

うかゝひありき給ふをことにて　藤壺の御あたりをうかゝひありき給ふをし事にしてと也ことをやゝにしてなといふかことし

おほい殿にはさわかれ給ふ　秘葵上方也　聞書さはかれ也もてあつかはるゝ心也

いとゝかのわか草　秘紫上のかやうにかたなりなる人とは葵上方にはしらさるなり　私云いとゝかのは藤壺の事をはしらす何事も疎遠なるそと思ふに二條院に人むかへ給ふをさやうのことゝおもひうたかふ也是は若紫巻にむかへとり給へる時分の事也

心つきなしとおほえたり　葵上かたの心也

うち〳〵のありさまはしり給はす　葵上の方に紫のいまたいはけなきをしり給はねはかくおほすもことわりと也

心うつくしくれいの人のやうに　秘是は葵上の性をいふ也ちとうちとけさるやうに平生の有様の有也さやうにたになくは他人にわくる心も有ましき物をと也匿怨友其人也よろしからぬさまのある也

我もうらもなく　源の心也

人の御ありさまの　葵上のかたち以下不足なる所はなき也

人よりさきに　源の元服の夜よりのそひふしなれは也

心をもしり給はぬ程こそ　物の分別もなき程こそ也

おほしなほされなんとおたしく　葵上の御心かろからねはつゐにはみなほし給はんと穏に思ひなすと也

ことなりけり　人にことなる也かやうにおも〳〵しう源のみなし給へる所人にはことなることと又葵をほめたる也　私云此段秘の義別に注之

秘人のありさまの　葵上のいつくもたらひたる事をの給也

同人よりさき　うひかうふりの時より初て聊心もへたてさる物を也

同心をもしり　初こそあれ終にはなほり給へきとこそ思ひしと也

をさなき人は　是より紫上の事なり

見つゝ給ふまゝに　秘みならひ給ふまゝに也

いとよき心さまかたちにて　心さまもかたちもすくれたる也

むつれまとはし　聞書まとはしか然らは惑の字なるへし又まとはし歟纏の字也つきまとふ心也何心もなくとはいままて夫婦のかたらひなけれは也

殿のうちの人にも　源のおはします二條院にさふらふ人にもかくし給ふ也或説左大臣方の衆と云々是はあやまり也

猶はなれたるには　はしめてむかへ給ひし時よりすみ給ひし二條院の西の對なるへしこなたはすみ給はぬたいと前にもあり

われも明くれ　源也

よろつの御ことゝもをしへきこえ給うてほんかきてならはせなとしつゝ　三光院講談の時をしへきこえ給うてほんかきてとよまれし也　愚本かくのごとく心しるしあり九禪同之　聞書にはをしへきこえたまひ手本かきてとあり

まん所けいしなと　河政所　家司　家中をとりおこなふものとも也しかるへき家々にはある也さやうの衆までを各別に定おき給ふ也

心もとなからす　何事も不足なきよし也

これみつよりほかの人はおほつかなく　箋家司の中にも惟光はかりならては此事をたしかにしらさる也秘同　私云殿のうちの人にも前の詞にいへる二條院なる事よくみえたり

かのちゝ宮も　秘兵部卿宮也

ひめ君は猶とき〳〵　紫上故尼君を時々思ひ出給ふと也

君のおはする　源のおはする時は也

いとらうたく　源の心也

いたくゝしなとし給へは　河若し也　箋云屈の字也紫上の體也

心くるしうて　源の心也

しつ心なくおほえ給ふ　源の心也

僧都はかくなんときこえ給うてあやしき物から　父宮はいまたしり給はす仍て僧都はといへり　秘源のかく大切にし給ふを僧都心やすく思ひ給ふと也あやしき物からとは紫の年のをさなきを心もとなく思ふ心也

かの御法事なとし給ふにも　秘紫のうは君の法事也箋云北山の尼君の百ヶ日なるへし　此法事は僧都のし給ふを源のいかめしくとふらひ給ふと也

三條の宮に御ありさまもゆかしうてまいり　秘源のおもてむきにてまゐり給へる也　箋云藤壺の御所也

命婦中納言名中務　秘三人の君也　箋同

けさやかにも　さやかにきはをみせたる心也河清萬葉秘　あまりにとさまむきなると源のおもひ給ふなり箋同

しつめて大かたの御物かたり　源の無興の心おししつめて也

兵部卿宮　秘藤つほの兄弟紫の父箋同

此君おはすと　秘源也

たいめしたまへり　箋云兵部卿宮は簾中におはすへし仍出て對面し給ふ也

いとよしあるさまして　兵部卿の宮のさま也源の心也

女にてみんは　凡女にてみはやといふことに二つ心あり女になりてと女になしてとの義也こゝの源の心は我身を女になして兵部卿宮を夫にみたきといふ義然るへき歟

かた／＼むつましく　かた／＼とは源の心に紫上の事心にあり又藤つほの御兄なれは又宮の様體人物なとよくおはする故かた／＼也

宮も此御有さまのつねよりことになつかしううちとけ給へる　源の様體のつねよりもなつかしきを子細はしらねともめつらしくめてたく見給ふと也

むこになとは　紫上の事を兵部卿宮はいまたしり給はぬ也

女にて見はやと　箋云兵部卿宮の女に成て源を夫に見たきと也秘同

聞書源を女になして見たき也云々　私云箋の義然へし

色めきたる御心　兵部卿の宮の心をいふ也

くれぬれはみすのうちに　秘藤つほのおはする簾中へ兵部卿の宮の入給ふ也

うへの御もてなしに　桐壺の御門の源のおさなくおはしましゝ程は藤つほのおはする簾中へもめし入し事を思ひ出てあちきなくおほす也

わりなきや　草子地也
しは〳〵もさふらふへけれと　秘源の詞也　数の字の心細々になといふ心也
ことゝも侍らぬ　河殊なる事なき也
すく〳〵しうて出給ひぬ　直々しき也　けさうたゝぬ體也面むきなる心也
宮の御けしき　藤つほの事也
ありしよりは　源の藤つほにあひ奉り給へる事若紫にありし事なり
はつかしういとほしけれは　命婦の心に藤つほの御心をはち思ふ也
はかなのちきりやとおほしみたるゝ事かたみにつきせす　秘はかなの契やとは源の心云々如何　箋云藤つほの御心のうちさすかかくのことしとなるへし　箋聞互にかよふ御心はさもあるへし云々　聞書同
少納言はおほえす　秘是より又紫の事をいふ也かやうに源の大切にし給ふを云おほえすとは思ひよらすと云也
おほいとのいとやんことなくて　秘葵上也こゝかしこは六條の御息所なと也　いとやんことなくとはもとより葵上本妻にて左大臣の女なれはいへり少納言か心中也
おとなひ給はんほとには　秘紫上のおとなしく成給はいかゝあらんと思ふなり
されとかくとりわきて　又我となくさむる心也さりともかほとまて源の懇切におはすれはあしき事はあらしとたのもしく思ふとなり
御ふくはゝかたは三月こそはとて　箋河物忌令曰祖父母父方は暇卅日服五月母方は暇廿日服三月　花に紫君の外祖母九月に逝去母方の服三ヶ月なるに依て十一月晦日に除服云々　御抄云此除服九月の末よりかそふれは十二月に及へし末に朝拝に参り給ふことあり十二月晦日ときこゆ　已上箋　弄紫祖母逝去は九月廿日比とあれは九月十日は十二月廿日比なるへし晦日に除服は日をえらひ給ふにや聞書弄の儀よし云々
又おやもなくて　箋紫君の母上はやくうせ給し故に外祖母のやしなひにて成人し給ふ人なれは心喪の服をも色をもふかく日数をものへて除服とみえた

り　花秘同河説非也
まはゆき色にはあらて　秘薄紅なるへし　箋花に祖母の恩をふかくみ給ふ人なれはしはらくまはゆき色を着せしめ給はぬ也紅うす色紫をのそきてまはゆき色といふは紅梅もえきくち薬梅櫻なとかくのことく名高ききぬをいふにやと云々巳上箋
いまめかしう　箋聞此程は服なれぬき給てめつらしき也
ぢのかきり　聞書地のみえぬ程文を織たる也
をとこ君はてうはいに参り給ふとて　源十八歳の正月也花箋同コテウハイ　コテウハイ常に用兩義也花小朝拜也朝賀の事には非す云々　河小朝拜は神武天皇より始て延喜五年停止せらる又同九年よりおこなはる群臣の請によつて也又河に朝賀也云々非也巳上秘也　私云小朝拜之儀公事根源抄にくはし
さしのそき給へり　源の紫のかたをさしのそきたまふなり
けふよりは　元日なれはかくの給る也
うちゑみ給へる　秘源也。
いつしかひゝなおしすゑて　年こえてやかてなれはいつしかといへるなり
そゝきゐ給へり　聞云そゝめく也あつかふ心也をさなき人のあそふ體なるへし
三尺のみつし一よろひ　三尺の御厨子の一雙也
ちひさきやとも　ひゝなのやとも也
なやらふとていぬきか　秘紫の詞也ひゝなの追儺也
箋河に追儺十二月晦日也　鬼やらひの事也　箋云此ひゝなのやにて追儺のまねをしたる也　河云金谷園記云以下無之爲陰氣時絶陽氣始來陰陽相徹化爲疾癘病イ之鬼爲人家作病黄帝使防相氏黄金四目身着朱衣手抱桿楯口作儺々之聲以駈疫癘之鬼至今歳除夜爲之　宮詞詩　王建
金吾除夜追儺名畫袴朱衣四隊行院々燒灯如白日沈香火底坐吹笙　除夜に儺を追ふこと也鬼やらひと云追の字をやらふとよむ也儺の字はかりをも鬼やらひとよむ也禁中よりはしめて諸家まてある事也私云此中少々これを略す禁中の儀式公事根源抄にくはし　聞書晦日に有事也そのまねをけふしたる歟又よべこほちたる歟北山にて雀の子にかしたるいぬき也

いとたいしと　最大事也紫上のいまたをさなきさま
也
けにいと心なき　秘源の詞也
けふはこといみして　秘正月一日なれは也
所せきを　源のいきほひいかめしうて參內し給ふさ
ま也
ひゝなの中の源氏の君　前にもあり
ことしたにすこし　秘少納言か詞
物ゝくさせ給ふなと　是まて少納言か詞
あそひにのみ心いれ給へははつかしと思はせ奉らん
とていへは　少納言かいひつる事を釋していへる詞
也はつかしと思はせとは御男なとまうけ給うては
といふ事也
心のうちに我はさは　秘紫の心のうちに也　我はさ
ては也
いまそおもほししりける　紫のをさなき體也　少納
言の中にて男もちたると思ひ給ふと也
さはいへと御としのかすそふしるしなめりかし　此
詞草子の地歟さはいへとゝはあそひにのみ心を入
給へとも是ほとの心得もゆきたるは年のかすそふ
しるしと也
かくをさなき御けはひの　人にしらせしと源のし給
へともおのつから三條院にさふらふ人もをさなか
るましきを聞て不審におもふと也
いとかうよつかぬ　是ほとまてはをさなき人ならん
とは人々のしらて不審する也
うちより大殿に　內裏より葵上の父大臣のかたへお
はする也
れいのうるはしうよそほしき　秘葵上のさま也二條
院の人の事下心にある故也　よそほしきは粧の字
歟こと〳〵しくひきつくろひうちとけぬさま也出
仕なとの時も引つくろひたるを行粧といふ也
ことしよりたに　秘源の詞也
よつきてあらため給ふ　よのつねのやうならはとい
ふ歟
わさと人すゑて　聞書葵の心中也　秘二條院に人す
ゑ給ふきこえあるによりて猜うとみ給ふ也　私云
わさとゝはとりわきておほす人なるべしとの心也
うとくはつかしくおほさるへし　私云おほさるへし
と推量してかける詞尤面白し葵上は心ふかくおは

する人なれはおしはかりならては知へからすと也
しひてみしらぬやうにもてなしてみたれたる御けはひには　聞書葵上の隔心を源の方からみしらぬやうにてみたれかゝるにさすか葵上も心つよからすうちいらへなとし給へるさまは又人にはことなりと源のおほす也
四とせはかりかこのかみに　秘源は葵上より四年はかりおとり給ふと也　桐壺巻に女君はすこし過したる程にてとあり此巻は源氏十八歳葵上廿二歳なるべし
うち過し　源よりもとしのふけたるを云也
さかりにとゝのほり　秘葵廿二歳さかりなるべし
あかぬ所は　秘不足なる所なきと也
わか心の　源の我とおもふ心也おほししらるゝといふまて源の心中也
おなし大臣と　秘草子也　箋同　左大臣只今の重臣なり
宮はらに　當代の御めひ也箋同
ひとりいつき　左大臣の宮腹にはひとりむすめなり
めさましとおもひ　左大臣のかたの心

をとこ君は　秘源は何ともおほさぬ也
なとかさしもみならはひ給ふ御心のへたてともなるべし　秘ならはひ給ふは敎給也ならひ給ふゆゑ何とも思給はぬと也　箋同　是まて草子地也なんてふさまてと源もおしたちておほす也たかひの心おとりゆゑとことわる也
おとゝもかくたのもしけなき　秘葵上の父大臣也
つとめていて給ふ　源の葵上のかたにとまり給てのあした也　正月二日なるべし
名だかき御おひ　玉の帶なり名物花鳥にみゆ箋同　箋花に落花形鴛通天など云帶あり云々　私云花或本には落花形鴛鴦通天とあり　箋云當官三位中將也はしめて玉帶を用らるべし四位の間は碼瑙帶を用ふれば也　花にうつほにうへ世の中に名たかくつたはりける御帶あまたある中によしとおほすをとり出させ給て大將にこれついたちのてうはいなとあらん折物せられよとて給ふ云々已上箋　私云玉の帶有文無文丸鞆巡方あり三位以上用之事による也四位參議も用之　碼瑙帶　丸鞆はかり也石の帶と云四位の人用之　犀角帶　巡方丸鞆あり　五位

の人用之四位も時によつて用之
烏犀角（イナシ）の帶　是は牛角にてする也六位用之
これはないえんなと　秘源の詞也今日なと此帶は過
分なりと斟酌し給ふ也箋同　弄正二三月中に清涼
殿にて文人をめして詩を作り講せらるゝ事あり主
上ならひに執柄赤色袍を着す保元に信西申おこな
ひて後は絕たる事也一注
私云箋內宴の事いまた書入られす　私云公事根源
抄云內宴正月廿一日內宴と申は內々の節會也仁壽
殿にて行はる文人とも題を給り詩を作りてやかて
御前にて講せらるゝ廿一日廿二日の程子の日にあた
らは其日おこなはれて三獻の後親王公卿に若菜の
羹を給ふ保元に信西申行侍し後はたえて侍るにこ
そ　私弄に一注とてしるしたると相違あり不審
猶江次第西宮等引勘へし
それはまされるも　秘大臣の詞也
めなれぬさま　逸興なる體を云にや
けによろづに　是より源のさまをいふなり
たまさかにても　箋源をはかりそめになりともむこ
なといひてもてはやさは此人そと也

さんさしにとても　河參座元日參賀の事也箋
內春宮一院　箋河云內（桐壺帝）春宮（朱雀院）一院（作寛平法皇花鳥同之桐壺帝尊親也）
花云陽成院を可申哉云々　秘一院花に有云々弄
一院　花にみゆ先帝と申はましまさぬとみえたり
如何
藤つほの三條の宮　源の參賀也
けふは又ことにもみえ給ふかな　源の御さまを藤壺
の女房たちめてきこゆると也
宮は御木丁のひまより　秘藤つほの也
おほす事しけかりけり　藤つほの御心中也
この御事のしはすも過にしか　箋藤つほ御產の事源
は四月に密通の義あり箋同　二ケ月許の相違とき
こゆ以上箋　弄源氏密通は四月也みかとの御子なら
ば三月よりなるべき心也秘同之　花去年三月に藤
つぼ御里ゐし給ひて源氏君通し給ふ三月よりは十
二月か十ケ月にあたれども誠は卯月よりの事なる
べし然れば正月にあたれどももちこざるゝゆゑに
二月十餘日に御產はありし也
この月はさりともと　正月にはさりともと思ふ也
つれなうてたちぬ　閑正月も又過る也

うちにもさる御心まうけ　内裏にも御産の御用意也
宮人は藤つほの宮人也
御ものゝけにや　御姙娠（嬢姙イ）の事も御物のけまきれにおそくみつけたるよし奏したりと前にみゆ
宮いたうわひしう　藤つほ也
身のいたづらに　引歌に及ばず
御心ちもいとくるし　藤つほの御心ちなり御産の近づくに又かやうに物をおほしみたるればいとくるしかるべし
中將の君いとゞ思ひあはせて　秘源也　私云此義諸抄聞書等になし思ひあはせとは前にみ給ひし夢の事也此御産の月ののひぬるにていよ〳〵源の我子と思ひ合せて御祈などをし給ふ也
みすほうなど　秘此時の祈の事薄雲卷にみえたり箋さとはなくて　そのことゝはなくて也
世の中のさだめなきに　秘藤壺の心也箋同　聞書云藤つほ御産の時いかやうの事もありてはと大事におほすと也　聞源の心也　私云此兩義を案ずるに源の心とみて然るべし御産の時いかやうの事もありて藤つほのはかなくなどもなり給ては又かさねての對面もなくはやゝみなんとそれをさへとりそへておほす也箋にも藤つほの心と有てかくのごとく墨にてしるしあり源の心とみて可然也
二月十餘日のほどに男みこ　箋云冷泉院也　秘一ケ月こえて也
なごりなく内にも宮にも　此程の御産延引を思ひなげきし名殘なく三條宮にも内裏にも悅び給ふ也
命ながくもと　藤つほの御心なり此次にいかにもならばやとおぼしめす也是は源の密通の事を覺しなげく故也
弘徽殿などのうけはしげに　河咒咀つみもなき人をうけへばといへる歌も此心なり　聞書咒咀は日本紀にはヨロコブ心と故吉（名イ）田右兵衛督兼在卿申云々此事尋べし　弘徽殿の后かたに此時何ともなり給へなど思ひ給べきを口をしく思ひ給ゆゑにそれに思ひのつよりていかにもしてながらふべきよしをおもひ給ふ也
さはやいたまひける　心のさはやかによくなるなり
うへのいつしかと　若宮を父みかどのゆかしくおも

ひたまふさま也
人しれぬ御こゝろ　秘源也
ひとまに參り　人のなき間也三條の宮へ也
うへのおぼつかなかり　先源のみたてまつりて御門へ有さま申さんとの給也
むつかしげなる程　うぶやの内なればむさとしたる體なるなどの給ひてみせ給はぬ也
うつしとり給へる　秘よく源に似給へると也
宮の御心のおにゝ　花引歌ありそれに及ばず心のおにとは心におそろしく思ふ事也　私内心にいつはりのある時そらおそろしく思ふ心歟　聞書源によく似給へるをくるしく藤壺の思ひ給うて彌源へ若宮をみせ給はぬ也
人の思ひとかめしや　源の密通の事也
身のみそいと心うき　これまで藤つぼの心也
命婦の君にたまさかに　源氏逢給ひて也
わか宮の御事を　源のみたてまつりたく思ひ給ふ也
かうしもあながちに　秘命婦の詞也
いまおのづから　内へ御參の時み給ふべきよし也
おもへるけしきかたみにたゞならず　秘源也おのづからみ給ふらんとは申たれども命婦も源の御心をさそと思ひ源も又我御子とはしり給ひたれどもうちつけにさそともの給ひかたき事なれは也かたはらいたき事なればといへるか此事也　箋源と命婦との心也
人つてならで　藤壺にいつか直に對面あらんと思ひわひて源のなき給ふ也
心くるしき　命婦の心也源のさまを心くるしく思ふ也
源　いかさまにむかしむすべる契にてこの世にかゝる中のへだてぞ　箋云過去の宿執かしられぬなり契あればこそかくの如くなからめしからは中のへだてはあるまじき事ぞと也このよといひて子の心有花同已上箋　聞書よのつねの中は子などのいできてからしたしき物也是は子のありてから藤つぼの御心のへだてのまさるをいかなる事ぞと也　此世にといふときは一たびは逢給ひながら同じ世に御心のへだてのいてきたるはいかなることぞとゝ也　秘何としたる契ぞと也此世子によせたり
かゝる事こそ心得がたけれど　箋云かみの歌を訓釋

したる也　秘何とも心得ぬと也
宮のおもほしみたれたるさま　命婦の心也　聞書藤つぼも源の事をたゝにはおほさぬ故也　秘さすか
さしはなちてもあひしらはさると也
河命婦みても思ふみぬはたいかになげくらんこやよの人のまとふてふやみ　箋云みてもは命婦なり抄に藤つぼと云々みぬはたとは源也　おもふとはわすれぬ事也こや是や也子の心を合也昔より子を思ふ道にまとふといふはかゝる事にてそといふ也　花こやよの人と云るも子の事也子を思ふやみの心也　弄わか宮の御事をよめり秘同秘　みてもとは藤壺也みぬはたは源也聞書同之　私云箋にはみてもは命婦也と有秘弄聞書にはみてもとは藤つほと云々両義の内如何或抄御説に命婦かみまゐらせてたにもわか君をうつくしくあはれにみ奉るに源のさそゆかしく思ひ給らんとよめる也云々是は箋の義に同し又藤つほの御心にみれは前の詞宮のおもほしみたれたる様なとをみたてまつれはとありこれは常にみ給ふ藤つほもそれに付て物もおほしみたるゝ也又源は若宮をゆかしく思ひみたるゝをみて命婦のよめる歌歟こやよの人のまとふてふやみといへるは二人なからを親の事におとしつけてみたる面白かるへしと存るも如何
あはれに心ゆるひなき御事ともかなと　箋緩ならぬ也　河無心也緩也心ゆるしなき也しとひと同しひひき有　私云油断もなく互に心やすからぬ中といふ也　此詞にてみてもみぬはたは藤つほと源の事とによくきこえたりと存す如何
しのひてきこえけり　命婦の詞
かくのみいひやるかたなくて　秘物からとよみきるへし　源のこゝへおはして命婦には時々あひ給へとも何のかひもなくてかへり給ふ也
人の物いひも　秘藤つほの御心也箋同　箋云定て命婦か源の様体を物語申つらんをとりもあひ給はす身をつゝしまれたる所を物からとかきたる絶妙也私かやうに源のかひなく帰給ふをさへ人の物いひいかゝとわつらはしくおほしめす也
命婦をも　秘源のことゆゑ命婦をもうとみ給也
うちとけむつひ　箋云藤つほの御心のをさまれる所此段にてみえたり殊勝の義也又やたはかりの有へ

きとの用心也
人目たつましく　箋云俄に命婦をうとみ給はゝ人の
不審あるへしとの用捨奇特也人のめにたつましき
と也みとかめられぬやうになり
なたらかにもてなし給ふ物から　箋云物からの詞此
段に二あり上のは源のなけき給ふ心の中を藤つほ
もふかくあはれをはしりなから木石になりはてゝ
思ひきり給ふ所也此物からはうへはなたらかにし
て底に隔心し給ふ也
心つきなしとおほす時も　箋云命婦に咎はなけれは
かやうにへたてらるゝ事本意の外なりそれを心つ
きなしといへりいつものことくしたしくめしつか
はゝ又もや有ましきあやまちも出こんの用心也
いとわひしく　箋いとわひしくは王命婦か心也
箋云まへ〳〵の御あひしらひにかはれるそと覚悟
の外に思ひぬへきを物語に察する詞也
四月にうちへ　秘若宮参内也箋同
あさましきまて　秘源に若宮よく似給へる也
おほしよらぬ　御門の御心也
又ならひなきとちは　秘ならひなくうつくしき人の
をさなたちはいつれもおなしものとおほす也箋同
又とは此外に別にうつくしくすへきやうはあらし
なれは似かよふかとも又源と御兄弟の事なれはこ
との外ならぬといふ事也　箋云容貌無雙の故似か
よひたるとおほす也河
おもほしかしつく　みかとの若宮をかしつき給也
源氏君をかきりなく　源を東宮にたて給はさりし事
を口惜くおほす也源は更衣腹の故なり桐壺の巻に
も有也
心くるしう　源のたゝ人にておはするを父みかとの
あたらしくおほす也
やんことなき御はらにおなし光にて　藤壺は先帝の
皇女その御腹にいてき給へれは也されとも若宮の
御かたちなとのおとり給はゝ曲もあるましき也然
るに源氏にまかふはかりなれはかくいへり
きすなき玉と　弄璋也白圭無玷おもひ所のなきと云
也　秘春宮にとおほす也
宮はいかなるに　若宮の源に似給へる事にも又あま
りとりあつかひ給ふにも人のみやとかめんと藤壺
の御心にくるしくおほすと也

中将のこなたに御あそひなと　源也こなたは藤つほの御方也
いたきいて奉らせ　箋云源に若宮をみせ申さるゝ也みかとのみつからいたき出給へるとはみるへからさる歟　或抄みかとのいたき給ふと云々　私此義如何
みこたちあまた　秘　勅定也箋同
そこをのみなん　秘　源をさしての仰也箋同
昔は皇子たちも外戚かたなとにつきて各諸家にやしなひ奉るそれを養君にしたてまつるといふあつかり奉る人をは御うしろみなといふにやされは禁中に朝夕をさなくよりおはします事はなかりし也かゝる程より　若宮の御としのほとより朝夕御らんしたる也別して御寵愛のゆゑと又外戚かたなとに然へき人なかりし故也
おもひわたさるゝ　物のかよひたる事をいふ也
おほえたれ　似たる事をいふ也
いとちひさきほとは　秘　源ならてはをさなき人をまちかくみ給事なき故におしなへてかやうなるとのみおほす也
中将の君おもての色かはる　心のおにゝかくあるへし
秘　此つゝき奇妙也如切如磋如琢如磨瑟兮僴兮赫兮喧兮なとの文勢也箋同　九禅抄瑟僴者恂慄也赫喧者威儀也
かた〳〵うつろふ心ちして　或抄面色のかはる事なりと云々　私云前の詞におもての色かはる心ちしてとあり是は赤面なとしたる體歟此かた〳〵うつろふとはおそろしうもかたしけなくもうれしくもあはれにもとある詞の末なり上にいへることくさまさま心中のかはるをうつろふといへるとみゆ但如何源の心の一すちに思ひさためられぬをいふとみえたり
なみたおちぬへし　聞書草子地歟　源の落涙もありぬへきと也
物かたりなと　若宮也をさなき人の常にある様也
我身なからこれに似たらんはいみしういたはしうおほし給ふ　箋云源の我身を自愛し給ふ心也
あなかちなる也　箋草子地也

宮はわりなく　藤つほの心なり
中將は中々なる心ちの
わか御かたに　聞書二條院の內源のすみ給ふかたなり藤つほの御方へ文なとかくへきために紫上のおはするかたへはましまさぬ也
おまへの前栽の　何となく青みわたれるといひてとこ夏の花やかにさきいてたるとかけるも面白しかき給ふ事も　草子地箋同
源よそへつゝみるに心はなくさまて露けさまさるなてしこの花　箋云新古今雜上贈皇后宮にそひて春宮にさふらひけるとき少將義孝か久しくまゐらさりけるになてしこの花につけてつかはしける　惠子女王「よそへつゝみれとつゆたになくさますいかにかすへきなてしこの花　花に是を載す秘に義あらはなりと也
花にさかなんと思ひ給へしも　河「わか宿にまきしなてしこいつしかも花にさかなむよそへてもみん
引歌秘箋同
聞書よそへてみてもかひなくなくさまぬと也種まきしなてしこなから我宿の物にはならぬ心也　私云此歌に二つの心あるへき歟一つには只今折ておくり給へるまことのなてしこの花をわか宮によそへて見奉れはいよ／＼若宮の事の戀しくて露けさのまさると也又一つには今日若宮をみ奉り藤つほによそへて見奉るから露けさのまさると也其時はなてしこの花とは若宮をさしていへる也次の詞も本歌の心よくかなへりいつしかはやく花に咲に思ひつるか花にはやさきたれとも種まきなから我物にならぬをかひなきといへる也
さりぬへきひま　秘藤つほの御ひま也
たゝちりはかり　河ちりはかりはすこしはかり也されともなてしこの歌なれは塵をたにすゑしとそおもふの歌によそへて云也　秘一筆はかりもと命婦かしひて申詞也箋同　私云瞿麥なてしこ常夏とこなつ也　なてしこは本名とこなつは異名也かやうの物異名を好み用る事和歌に好まぬ事ゝ也ちりをたにの歌は床をそへよめる歌也さやうの所をみわけすなてしこ床夏なと本歌をとりちかへなとして符合なとにする事分別あるへきやうに三光申されし也事のついてにしるし付る也

はなひらに　只なてしこの花についていへる詞也花をも一ひら二ひらといふ也

わか御心にも　藤つほの御心中也

あはれにおほしゝらるゝ　若宮の御事に御物思ひのある也

[illegible]袖ぬるゝ露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなてしこ　秘物思ひのたねとおほすゆゑ也箋同うとまれぬは畢ぬ也

よろこひなから　秘命婦のうれしく思ひて也よろこひなからもとはよろこひつゝ也

れいの事なれは　秘いつものやうに御覧もいれましきと御返事をは思ひたえて源のましますも也

うれしき事にも涙おちぬ　うれしきにさへと也

つく〳〵と　藤つほの御返事をみたる名殘の體也

にしのたいに　二條院の西對紫のおはするかたなり

しとけなく　源の體也

あされたるうちきすかた　弄大うちきばかりをきて直衣を着給はぬ也うちきはなほしの下にきるもの也一注

女君ありつる花　秘紫の體也ありつる花はなてしこおもしろき書さま也

あいきやうこほるゝやうにて　是まては紫の體なり

おはしましなからとくもわたり給はぬ　箋二條院へ源のおはしましなからやかても紫の方へ渡給はぬの腹立也　是は藤つほへの文かきたまひ又かの返事なとみ給ひしに程のありつる也

れいならす　秘源のおそくおはしつるをうらみかほなる也　是は紫の心を察してかける詞也

はしのかたについゐて　源のさま也

こちやとのたまへと　秘こちへとなり

おとろかす　紫のきかぬかほしたるなり

入ぬる磯のと　紫の口すさひ也　箋「河みるめこそ（しほみては古イ）入ぬる磯の草なれやみらくすくなく戀らくの多き

くちおほひ　聞書紫のふといひなからはちたるさまなり

あなにくかゝる　源の詞いつのまにかやつの事口なれ給つるそとされの給へるさま也

みるめにあくは　紫上のみることのすくなきとの給御返事也まさなきは正しくなき事となりあしき事と也　箋河に「いせのあまの朝なゆふなにかつく

てふみるめに人をあくよしもかな　或抄御說にもあまりつねにみるめにあくはわろき事也
さうのことは　花箏は秦聲也世謂蒙恬爲之絃有十三象十二月其一以象閏也
なかのほそ絃の　箋云箏は大絃四筋中絃四筋細絃四筋合て十二筋此外に巾の絃一筋きはめて細也十三絃の中の細絃と云河花雨抄之說相違人の兄弟の幼少なるを中のおとりと云此義に同し已上箋　秘箏の十三絃のうち斗爲巾此三すちの絃ほそき也そのほそをの中の第一のほそきといふ心也兄弟をもおとうとを中のおとりといふ事やかて此物語にあり巾の絃のせまりたるをおしくたす心なるらん　弄巾の絃なるへし細絃よりも猶ほそき心なり中のこのかみといへるにや花鳥義不審
平調におしくたして　弄今案に平調におしくたしてとかけるかねてのしらへもしは一越調にて有けるか箏には一越調をしらへるによりカイ一越調さかり一越調とて二樣にありけり一越調とはことちも手もとのかたへよせてたつる也それを一越調と云又保曾呂俱世利は狛一越調の樂也平調の曲にはあらすまつ平調にしらへて其調子ともをしへ給うて後呂の聲になほしてほそろくせりをひかれけるかこま一越調と云はそのころ平調にて呂也以上洞院大將入道公敎號觀喜院釋也以件自筆寫之律平調より絃のせまりたるは呂一越調歟又狛律平調聲歟にてありけるを平調におしくたしたるなるへしほそろくせりは狛一越調の樂也律平調の位にて呂のしらへにかはりたる物也されは通法平調にといへるにや又律平調よりかりたるしらへにて有けるを平調律にくたし其外の調子なとをもひかせ給ひて後に狛一越調になしてほそろくせりを引給ひけるにや何れにても其理有へしかたき調子ともをとあれはあまたの調子ともをと云るにや絃の物にも調子を引たるを今の世には管はかりに吹事に成侍る也長享二年十月七日記之
同人記歟　箋云此以前の調一越調なるへし手もとへせまりたる調なれは巾の絃なと誠に切にして堪かたきものなり盤涉はさかり過たるに平調はよき程にたいらかなる調也一越をおしさけてしらへられたる也　私云此段心得かたき樣なる歟おしくたしてとはもとは一越調にても有へしいかさまかりたる調

子を平調にしらへたる也さておしくたしてしらへかきあはせはかりとよむへしさてほそろくせりは長保樂の破なり弄花の義にも狛一越といふはその聲平調にて呂なりとあり河海にも長保樂は右樂大食調とあり大食調は平調の聲にて呂なり狛笛の一越調に通する故にかくいへる歟不審なき歟又昔は絃にも調子をひくと弄花にありされはかきあはせはかりとはいへるなり

横笛穴名　笛ノ穴ノ名

左樂　干平調　五下無上　上雙調　夕黄調　中盤渉　六下一越　口

右樂ノ笛狛笛也

干下無　五雙調　上黄鐘　夕盤渉　中一越　六下平調　口

えゑしもはてす　紫の源をえ怨しもはてぬ也

さしやりて　手のとゝきかぬるほどの體也

ゆしたまふ　秘 左の手也　箋云左手也取と推と由と也ゆる心也ゆの音ともとりゆの手をともいへり

宮商角徴羽の聲の位を左の手にてあひしらふ事也

かたきてうし　色々のむづかしき手ともなるべし樣樣秘密の調子などもあるもの也

たゞ一わたり　一通りづゝにてならひおぼえ給ふなり

大かたらう〳〵しう　秘 かしこくそむかへとりしと思ひ給ふ也

ほそろくせりといふ物　箋 河に長保樂大食調右樂 破保曾呂倶世利　急賀利夜須　樂の目錄などにはほそろくせりかりやすと別々にもあり

いて給ふべしとありつれば　秘 源の今夜もとまり給ましきけしき也　今夜はいつかたへそおはせんとかねて人々に仰られし成へし

雨ふり侍ぬべし　源の御供の人々の雨のふるべきをみていそきたる心也

いとらうたくて　源の心也

ほかなる程はこひしくや　源の紫にの給ふ詞也

うなづき給ふ　紫のさまなり

われもひと日も　我も一日もみねは戀しきと源の詞也　秘 一日不見如三秋

くね〳〵しう　物をくねる心也

人のうらみおはしとおもふも　源の所存をのへ給ふ也くね〳〵しき人のうらみをおはぬやうにして源の久しうながらへて紫上に行衞とほくあひそはんとの心ぞと也

さすがにはづかしくて　をさなき中にもすこし分別のましろやうなるをさすがにといふなり
やがて御ひさに　紫のさま也
こよひはいてす　源の御他出なきとの給ふ也
皆たちて　雨降ぬへしとこわつくりし御供の人々也
おものなと　御膳也　ヲモノト讀也
いとはかなけに　源と紫ともろともに御膳まゐる也何となくまゐりすさひ給へるさま也
さらはね給ひねかし　秘紫上の詞也猶も源の他出などやあらんとうたがはしさにの給ふ也あやふけにといへるはうたがはしき也
かゝるをみすてゝは　源の詞也　私云源の心也
いみしき道　いかばかり志ふかきかたへもゆきがたきと也
おのづからもりきく人　此一段は紫上の様體を眞實しらぬ人のかやうのかたはしばかりをつたへ聞て大殿かたへいへるなり
誰ならん　是より此人をいかやうなる人ならんと大殿がたに色々いひあつかふさま也紫とはしらぬ也
いとめざましき事にも　さやうに源などの他出をことに出でとゞめなどする人はとおもふ也
その人ともきこえす　所詮しかるべき人にてはあらじ先今まで誰ともしられずさやうに源などゝたはふるゝやうにするはよき人にてはあらじと也あてやかにとは高貴とかけり位などあり然るべき人にてはあらじとの推量也
うちわたりなどにて　内裏あたりの宮づかへ人が一旦源の寵し給ふにほこりてさやうならん也さて人のとがめてはと世を憚り給ひてかくし給ふなるべし
心なげにいはけなくて　箋をさなくて也　箋云いはけなき心なるべし　秘をさなくて也かやうに紫ををさなき人とはおしはからて只さしたる事なき人をかくしておき給ふとおしはかる也
さふらふ人々も　葵かたにさふらふ人也
うちにもかゝる人　秘禁中にも此事をきこしめして也
いとほしくおとゝの思ひなけかるなる事も　此詞のつゞきおとゝのおもひなけかる事もいとほしくといふ義也みかどの御心成へり

げにものけなかりし　是よりみかどの源へ御敎訓の
勅定とみえたり　秘葵の父おとゝの思ひなげき給
ふ事をみかどのいとほしくおぼしめして源への仰
と也　源の幼稚の時よりかくものしたるとは懇に
いたはりかしつき給ひたる大臣のありさまなるを
それほどの事分別なきにてはあらし物のかやうに
なさけなく疎遠なるはよろしからぬ事と仰せらる
るとなり
さばかりの事たとらぬ　秘かやうの所を分別すまし
き人にてはなきをと源に御敎訓の勅定なり
かしこまりたる　源の體なり勅答をも申されず恐れ
たるさまはかゝりなるはとりあはぬさま也心ゆかぬ
なめりとは源の稚體が合點ゆかぬ體と御門のみし
り給ふなりさていとほしくおぼしめすとは葵上の
父大臣の心中をおぼしめすなるべし源の勅定をも
領納なき體にみゆる故にかくおぼしめす也
さるはすき〳〵しく　秘みかどの御心也　御門の御
心に源はさしも宮中の女房などにも又こなたかな
たの人にもいづれにみだれたる事もきこしめさぬ
にいづくのかくれにさやうのことありて葵上かた
などへも疎遠にてうらみらるらんと色々におぼし
めして又内々に仰らるゝ也　このみゆる女房とは
みかとへうへみやつかへもする程の女房なり
かやうのかたはえ過ざせ　是よりはみかどの御好色
の事をいふ也かうやうのかたは好色がたの事也
うねめ女藏人　箋秘に典侍掌侍なとは勿論とおもふ
也　次第をいはゞ女藏人釆女也元三の御藥内膳司
齒固釆女役送して女藏人につたへ女藏人陪膳ゝ典
侍に渡す也御厨子所には釆女の中を撰で得選と云
得選役送して命婦に傳へ命婦陪膳の典侍にわたす
節會の時は内膳司の晴の御膳をば一の釆女これを
供す陪膳の采女とて執せらるゝ也　然れば上臈にもなり下臈にもな
り時にしたがふ事也　箋云曰以上花鳥の分也
弄いまも藏人とて内裏に祗候す賀茂などの女也一
注
かたち心ある　かたちよく心ある也
はかなき事をも　是より又源の事をいふ　源の一ご
とはをもかけ給ふにつれなきはなしそれゆゑにめ
ふれたるゆゑにやみたれ給はぬ也げにそとはみか
どの仰られしごとく眞實さやうにあるとなりさて

あまりすき給はぬとて女のかたよりたはぶれごとをいひかくる人もあれどなさけなからぬほどにうちいらへて眞實に亂れ給はぬとなりそれをまた眞實あまりことたらはぬやうなると出もなく思ふ人もあると也　源内侍の事をかく（いふイ）べき序也
とし老たるないしのすけ　是より源内侍のすけの事を書此段物語の狂言也箋同　私云系圖の外の人也
人もやんごとなく　種姓よき也
そなたには　好色のかたには也
かうさたすぐるまで　秘源の心也さた過るはなかば過る也　河さだは央の字也なかばと讀也百年のなかばといふ心歟　五十餘計の事歟　私云此義に及ばず年のたけたるまでといふなるべし
いぶかしく　源のいかなりともまことにはみだれしと不審におぼしてたはふれての給ふに似合ぬ事ともおもはざりし也
あさましと　源の心也
物などの給ひて　聞書たゝたはふれことなるべしあひみそめ給へるにてはあるましきと也
つれなくもてなし　源のさらぬかほにておはする也

女はいとつらしと　戯れ事ばかりの給ひてつれなしかほしておはするをつらしと源内侍の思ふと也
うへの御けつりぐし　聞書典侍など御くしをけづるなるべし源内侍の御けづりくしせしなるべしうへは御門也
みうちきの人　秘御したゝめとて御髪に參る人はうへにうちきを着するを云也箋同
河中院事書云御もとゝりとる人のこと也云々御けつりくしの人はわらはくひの無文の裝束を給はりて着する也仍御うちきの人と云也一說云御裝束奉仕する人也御門の無文の紫の御直衣をたまはりてきる人をみうちきの人と云々花藏人私記第十三云御髪御鬘事侍臣之間撰堪事人供無定例皆着當色袍（闕之御料染紫色絹也禁殿人所）　今案御もとゝり取御鬘に參る人は紫のきぬの直衣をきて祇候するをうちきの人と云也
弄みうちきとはきぬのなをしを云　一注　或抄御說うちきの人とは白ききぬをきると也　聞書御もととりとる人とあり又御さうそくめきする衣文の人と也又御けつりくしは源内侍みうちきの人は御もととり取人と云々又御けつりくしは御もとゝり取

源氏
さゝわけは人やとかめんいつとなく駒つなくめる森の木かくれ　箋云此篠のくまに心はとまれともぬしある森の木かくれなれは必とかむる人のあるへきと也花に蜻蛉日記「さゝわけはあれこそまさめ草かれの駒つなくめるもりの下かは已上箋　秘此内侍好色の人なれは男おほくいつも有へき也われゆかはとかむる人のあるへきと也　私云いつとなく時をもわかす不断なといふ心也たえすかよふ男おほかるへし

わつらはしさに　源の詞也かよふをとかむる人有へけれはわつらはしきに思ひなからおはせぬといふやうにのたまひなしたるなり

ひかへて　源内侍の源氏をひかへたる也

またかゝる物をこそ　箋秘に源のやうにつれなき人をはいまたみさるとなり花に萬第四イ「白かみに黒かみましりおふるまてまたいとかゝる物はおもはす坂上郎女已上箋　私云白髮の生するを惣別ならは黒髮に白髮ましるといふへき也それを白かみに黒髮ましるといへるは白髮はかりに成て黒髮はすこしあるといはんため也

いまさらなるはち　源内侍の年よるまて好色をたてたるか源ゆゑ名ををるとの義歟常の女にはことなるへし

いまきこえん　箋後日に必と也　秘後にまた聞えんとは人めも有とて源のたち給也

思ひなからそや　源の詞前のわつらはしさにとの給へる詞同心也のへての給へる詞也

せめておよひて　しひてあなかちになといふ體の心也常のせめての事にといふには心かはるへき歟およひてとは又もとり付ひきもとゝむへきはかりと也

橋はしらと　河「津の國のなからの橋の橋柱ふりぬる身こそ悲しかりけれ　秘箋聞書等一同に此歌をひけり　弄「世中にふりぬる物はつの國のなからの橋と我身也けり　奥入「おもふこともかしなからの橋はしらふりぬる身こそかなしかりけれ　私云奥入に注する處の歌は初五文字相違はかり歟此両首の引歌の内橋柱の詞歌の心にふりぬる身こその歌然へき歟

うへはみうちきはてゝ　御鬘なとの事過て也聞書に

は御さうそくの衣文はて丶也云々猶別に注する分を一決して定へき也

いとおかしう　みかとの御心也

すき心なしと　御門の御詞源の好色ならぬと人のもてなやみしよし此前の詞にあり

内侍はなままはゆけれと　すこしはつかしきやうの心なるへし

にくからぬ人ゆゑは　源のため故は也内侍の心也

河奥入「にくからぬ人のきせけるぬれ衣は思ひにあへすいまかわきなん　箋秘に引歌上の句は同し下の句はいとひかたくもおもほゆるかな　私云厭かたくもおもほゆるかなとある心こ丶によくかなへる歟こ丶の詞にぬれ衣をたにきまほしきたくひもあれはといへるは厭かたくもおもほゆるかなといふによく叶へり

いたらぬくまなき心にて　頭中將の我とわか事を思ふ心也

つきせぬこのみこ丶ろも　箋云好み心歟此御心歟好み心とは源内侍か好色をいふ此御心とは源のいたらぬくまなき御心の程を云定めて行衛（如本）あるへし我もかたらひつきて源の御心をみるへきといふにや此末の狂言をかくへき序の詞なるへし聞書に好み心也好色の心也　箋聞好み心なれは源内侍か事也此御心は源の事也云々　私云二義の内源内侍の年たくるまて色めくをつきせぬ好み心といへるにや弄花に頭中將の好色の心にてゆかしく思ひてかたらひつきたる也云々此義は好み心を頭中將と見たる義歟猶源内侍の事と見ておもしろくやとおほゆ如何

この君も　箋頭中將也源氏につきては頭中將ほとなる人たれかはあるへき也

かのつれなき人　箋源の事を云

みまほしきはかきり有けるをとやうたてのこのみや箋云人の高下高卑は限りある物識頭中將に誰人かは及へき隨分の人なれとも源氏のなすらへにもおよはされは只源氏のみみまほしき也されは人の分際の限りあるものなるへしといふにや引歌に及ふへからす此頭中將にてもなくさめかたきなり　箋云うたてのこのみやうたての好色やと草子地の評なり秘同　私云内侍か心なり源氏のつれなくおは

するなくさめにと頭中將をおもひつれとみまほしき事は源氏の君にかきりたるといふ事をみまほしきはかきりありけるをとやゝとはかりかきりありけるをとやと句をきりてうたてのこのみやとは草子地也さて又句をきりてみるへしこゝに引歌二首河海にあり用るに及はす

いたうしのふれは　源内侍の頭中將にかたらひつきたる事をふかくしのふ也猶源にあひたてまつらんとおもふ心のふかきゆゑ也或抄頭中將の忍ふ也云云不審

みつけきこえてはまつうらみ　源内侍の源氏をみてはまつうらみたてまつる也かのつれなき人の御なくさめにと思ひつれとみまほしきはかきりありけるをとやみつけきこえてはまつうらみきこゆるをとかやうにつゝけてみれは心得やすしと存す如何前のみまほしきはかきりありけるをとやと云詞へここを付てみるへし頭中將にてもなくさめすして猶みまほしきは源也と思ふからみつけきこえては先つれなきよしをうらみたてまつると也さてうたてのこのみやと評したるも頭中將へは源のつれなきなくさめにと思ひてまつかたらひつきたりさらはそれにてもなくさめすして猶源にうらむるはとにかくに好色過たる事なりといふ義にや

なくさめんと　源の心也

かなはぬ物うさに　源の御心にものうきゆゑに思ひたちかたくおはするを久しうといふ也

うんめいでん　河温明殿　箋云花に中衞の東に有是内侍所のまします所也古語拾遺云第十代崇神天皇漸畏神威鑄改鏡劔奉安置神代之靈器於別所云々禁秘抄云垂仁天皇御宇始爲別殿御温明殿白河院仰云内侍所神鏡飛出天欲上天而女官懸唐衣袖奉引留依此因緣女官守護云々　温明殿は神鏡始て前殿にうつりおはします時の御殿とみゆ内侍所とも賢所とも申たてまつる内侍所とは神鏡のおはします御殿に必内侍司のさふらふ也是白河院の勅定の如く歟近代おはしますは春興殿なりそれをも内侍所と申て今も女官とものさふらふ也主上神鏡と別殿におはします事は崇神天皇よりの事と古語拾遺にみえたり是を正説とすへし職原抄にも此義載たる也

たゝすみありき　源のたゝすむ也

この內侍源內侍も溫明殿にさふらふ也
御前なとにても　御前の御あそひなとにおほろけの
女房の所作はあるへからす琵琶の上手なると也
物うらめしう　源の御事なとを物うらめしく思ふな
るへし又物思ふ時ひく物の音は其こゝろあるへけれ
はあはれにきこゆといへり
うりつくりになりやしなまし　河「山城のこまのわ
たりのうりつくりなよやらいしなやさいしなやい
かにせんいかにせんはれいかにせむなりやしなま
しうりたつまてにやらいしなやうりたつまてに
催馬樂山城呂三段　箋云うりつくりにしいかにせんせ
んはれいかにせんの詞をとる也秘花同
「山城のこまの わたりのうり つくりならひて後そ
悔しかりける右催馬樂をとりて詠せる歌也已上箋
聞書うりつくりの歌をうたふ事は歌の詞に成や
しなましとは此うりつくり我をおもふといひて彼
者のつまにやならんと也其心をもつてかゝる物思
ひをせんよりはかゝるいやしき物の妻に成てなり
とも思ひをなくさめやせんいかにせんとうたの心
にある心にわか思ひを引合て此歌をうたふにや折
節も又瓜の時分也
すこし心つきなき　琵琶は上手にて物あはれにきこ
えたるに此歌をうたひたるは似あはぬやうなるを
すこし心つきなきとはいふ也
かくしうにありけんむかしの人　河此事定家卿本に
はかくしうとあり親行本には文君なといひけん昔
の人もとあり両說いつれも證本也をの〳〵可レ隨レ
所レ好也

鄂州事

夜聞歌者宿鄂州　　白氏文集卷之十
夜泊二鸚鵡州一江秋月澄徹隣船有二歌者一發調堪二愁
絕一歌罷繼以レ泣泣聲通復咽尋聲見其人一有婦顏如二
雪獨倚二帆檣一立娉婷十七八夜淚如（似イ）二眞珠一雙々墮二
明月一借問誰家婦謌泣何凄切一問一霑レ襟低レ眉終
不レ說

文君事

史記曰是時卓王孫有女文君新寡好音故相如繆與レ
令相重而以二琴心一挑之相如之臨卭從車騎雍容閑雅
甚都及下飮二卓氏一弄上琴文君竊從レ戶窺レ之心悅而好
之恐不得當也既罷相如乃使レ人重賜二文君侍者一通二

慇懃二文君夜亡奔相如　案之鄂州猶叶物語意歟源
内侍聲はいとおかしくて山しろ歌をうたひたるを
鄂州にて樂天の歌を聞しに思よそへたる歟いかゝ
已上河　花此文君を定家卿の本には鄂州に有けん昔
の人もかくやおかしかりけむとあり河海には兩説
を出しなから鄂州は猶物語の心にかなへりと註せ
られたりうりつくりの歌をうたふを源氏の立聞給
ふは鄂州の女のうたふを樂天の聞し心は似たるや
うなれと彼鄂州の女は十七八の者とみえたり源内
侍のすけはさたすきたるよはひなり頗なすらへか
たく侍るにや是によりて愚意には文君猶たより有
て思侍る其故は卓文君年よりて司馬相如にすさめ
られて白頭吟と云歌を作れり相如是をみてあはれ
と思ひけるにや源内侍のすけも年よりて人のもて
なさぬうらみありしによりて物語の作者文君をひ
きよせて書たるなるへし　箋河内本卓文君といひ
けん云々青表紙に鄂洲也河海には兩樣共にいたし
てかく州を用花鳥には文君を用たりかく州と云は
文集第十に夜聞歌者宿鄂州と云詩の事也只よるう
たふ者をきく當意を思ひよせたる事也是を花に不

被用故は其時の詩娉婷十七八と云句有是年齢相違
と云々又文君を用る心は司馬相如琴心を以て挑て
卓文君を得たれとも後には捨てられて白頭吟をつ
くれる此年齢あひ類するの故に文君の義を執せり
其理あるに似たりといへとも青表紙に鄂州を用來
るうへは異論に及はさる歟已上秘　箋同
みゝとゝまりて　源の心也
ひきやみていといたうおもひみたれ　源内侍のひは
をひきやみて物思ひたるけはひ也
君あつまやを　源のうたひ給うたる也　河あつまや
のまやのあまりのあまそゝきわれたちぬれぬ其と
ひらかせ二段かすかひもとさしもあらはこそその
とわれさゝめおしひらいてきませ我や人つま　催馬
樂東屋律二段　箋その戸ひらかせと云詞をとりてかく
うたひ給ふ也秘同　私云前の詞に夕立して名殘す
すしきとあり雨そゝきの詞にたよりおもしろし
おしひらいてきませ　箋源内侍のそへうたひたるなり
秘同　秘第二段の詞也
れいにたかひたる心ちそする　箋秘につねの女にか
はりたる返答をそしる也　よのつねのめはおもふ

ともいひかたきこたへなるへし
源内侍 立ぬるゝ人しもあらしあつまやにうたてもかゝる雨
そゝきかな　秘うたてはうたゝ也　箋花にうたては
うたゝ也　轉の字也云々　箋云うらめしき雨そゝ
きなるへし晴てたにくる人も有ましきと云歟　或
抄轉の字はしけくもかゝるといふ心也云々
うちなけくを　此詞にてうらめしき雨そゝきといふ
心みえたり
われひとりしも　秘我身ひとりにては有ましきと源
のおもひ給ふ也源の御事はかりを思ひみたるゝと
はかりは思はねと何事にてもあれ好色の事にこれ
程心をくたくらんと源の思ひ給ふ也
源 人妻はあなわつらはし東やのまやのあまりもなれし
とぞ思ふ　花内侍のすけは修理太夫かよふときゝ給
うて人つまとはよみ給へる也　箋是も催馬樂東屋
にわれや人つまとあり其便ある也まやは本屋也あ
まりは廂也其はしにさへかゝりそめもなれましきと
也已上秘　箋云人つまは東屋の軒のつまに縁あり又
人つまとは修理大夫かよふと聞給ひしゆゑ也
うち過なまほし　人つまのわつらはしきといひなし
てうち過たくおほす也
人にしたかへは　秘むかひにしたかへは也　聞書む
かひの好色なる故に源もかくみたれ給ふとなり
私云伊勢物語におもふをも思はぬをもけぢめみせ
すといへる心歟
これもめつらしき　私これもやうかはりてめつらし
き心ちし給ふ也
頭中將はこの君の　秘まめたちは實々しきさまをし
給ふ也　源の頭中將の好色過たるとてもとき給ふ
てそれを源も忍ひたる事ともおほきをはいかにし
てかはみつけんとつねに頭中將の思ふと也
これをみつけたる　源と内侍のすけとの樣を頭中將
の見付たる也頭中將も内侍に通ひし故なるへし
たゆめ　箋云油斷させ申也　河頭中將のみつけなか
ら猶たゆめて源氏のね入給ふを待ける也
やをらいりくる　箋聞に漸也こゝにて頭中將のより
くる也
君はとけてしも　聞書此内侍源の心にあはねはうち
とけてもね給はぬ也又藤壺の御事御心にはなれさ
るへし

此中將とは　源も聞つけなから頭中將とは思ひよらぬ也
すりのかみ　河修理大夫也大夫とは此職のかみなり
秘此内侍を修理大夫のわすれかたくする也系圖の外の人也
おとな〳〵しき人　修理大夫年おとなしき人なるへし
あなわつらはし出なんよ　秘源の詞
くものふるまひは　河わかせこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも　衣通姫
聞書修理大夫のこんとは女のかねてしりぬらん物をさも云さりしをすかし給ふとの給ふ也　秘此人の來るへき事はかねてもしるへき物をと也
中將をかしきをねんして　頭中將のをかしきをこらへてなり
こほこほとたゝみよせ　屏風をたゝむ音也　聞書こほこほ　九禪こほこほ又ごほごほ
なよひたる人　聞よわき人也　河なよゝか同しこと也
さき〳〵もかやうにて　此内侍は修理大夫のかやうにみつけたる事前にもありし故に一入心をまとはす也
この君をいかに　源をいかゝと内侍の思ふ也
ふるふ〳〵つとひかへたり　頭中將を控へたる歟秘同
たれとしられて　源の修理にしられぬやうにとおほすなりされとまことは頭中將なれはよく見知たる也
中將いかてわれとしられきこえしと　頭中將も源にみしられしと思ふ也
あか君〳〵と　あか君とは我君也頭中將にむかひて手をすりてわひことするさま也
ほと〳〵わらひ　此體をみてはやこらへられすわろふへきさまなり
このましうわかやきて　内侍のすけのさま也つくろひたるうはへこそわかやかなるやうにもあれかやうの處にてこそ眞實の年のよりたる樣のあらはれたるはといと心つきなかるへし
五十七八の人　秘音によむ也源内侍の年の程なりさわけるけはひえならぬ二十はかりのわか人　秘二十はたちとよむへし

あらぬさまに　頭中將の我にはあらぬけしきをことさら作れりしか中々しるくみつけらるゝとなり

しるくみつけて　源はやかて中將とみしり給ふなり

をこになりぬ　箋河に鳴呼花　をこ〳〵しくなるなりあなつらはしくなる心なり

つみ給へれは　頭中將の手を源のつみ玉ふなり

ねたき物から　頭中將のみしられたるかねたき也

わらひぬ　頭中將也

まことはうつし心かとよ　源の心詞也　河現心也まことの心歟とよ　箋云眞實の物ねたみかと也

たはふれにくし　河引歌かなはす略之　箋云にかにかしきされ事なり

もろともにこそとて　源に直衣をきせ奉らねは頭中將をもぬかせ給ふなり

とかくひきしろふ　引合給ふほとに直衣のほころ〳〵とほころひたる也

頭中將みぬるイ
つゝむめる名やもれはてんひきかはしかくほころふる中のころもに　（いイ）　秘源の御忍ひの事もあらはるへきと也　箋源の忍ひ給ふ名のかくれ有ましきとねたけに申さるゝ也　聞つゝむめるは源の上に實法をたて給ふやうなれともその名あらはれんといふ也

うへにとりきは　是まて頭中將の詞　河紅のこそめの衣下にきんうへにとりきはしるからんかも秘箋同　秘花ほころひたるなほしをうへにきはうき名はかくれ有ましきと也　箋云何やうにもほころはされようへにきたらは猶よく源の御名のたつへきとなり

君　源也

返源
かくれなき物としる〳〵なつ衣きたるをうすき心とそみる　河頭中將を其人とはかくれなきにかく來らておとすをあさき心なりとよめる也　弄誰としられしとかまへたるをうすき心なりとよみ給ふ也

秘同　箋云頭君の名やもり出んといたはりかほにいへるを源は引かへてありとある程の事の名かくれなき物と知なからかやうにみあらはさるゝかへりて心あさしと也　夏衣きたるとは頭中將の來れるをいふなるへし

うらやみなき　弄兩人なからうらやむへき事もなき體の契なる事なれはいふにや　秘頭中將とあひ具してかへり給ふ也　私云うらやみなきとは互に同

しくみたれたるさうそくの體にてかへり給ふをいふ也

君は　源の心也

内侍はあさましく　名殘おほき心をいへる歟

御さしぬきおひ前に直衣はかりをとりてとあり

（源内侍）うらみてもいふかひそなき立かさねひきてかへりし波の名殘りに　箋秘に源と頭とを云引つれて歸り給ひし義也

聞書立かさねは太刀のえんもある歟あなかち太刀の事をよめるにはみるへからす　私云此義如何うらみてとは浦によせたる也

そこもあらはに　河「別ての後そかなしき涙川底もあらはに成ぬと思へは秘箋同

おもなのさまや　箋秘に面つれなきさまやと也

わりなしと　よへ思ひまとひしもさすかに返事ー給也源の心也

（返源）あらたちし波に心はさわかねとよせけん磯をいかゝうらみぬ　花よせけむ磯は頭君にたとふうらむへくはその人をそうらむへきか心はさらにさわく事もなかりしと也　秘頭中將をこそうらむへき事なれと也花鳥によせけん人は頭中將にたとふとあり如何今案あらたちし浪は頭君也よせけん磯は源内侍の事なるへし連々頭君をかよはせし故に今も又如此事ありと也　箋云浪は頭君也磯は源内侍なり浪に咎はなきそなた波を許容する磯をこそうらむへけれと也　私云いかゝうらみぬとは磯をいかてうらみぬ事あらんうらむるそと也

とのみなん　返事も物うくなほさりにし給ひしをみせたり

おひは中將のなりけり　直衣のうへにする帶也源内侍のかたより也源の指貫にそへておくれる帶なり

わか御なほしよりは色ふかしと　花直衣を用ゆる人昔は直衣のきれをおひにもちひたる也今の世も主上の御おひは御引なほしのきれを用ひ給ふなつのなほしは二藍あるひははなたを年よりて着する源氏は宰相中將うす二あゐの色なり頭中將は年はまさりたれと官ひきゝによりてこき二あゐのなほしを着用すへし官のたかきは宿德の色を用ひ官のひきゝはわかき色をもちひるならひなりふちのうら葉の卷に夕霧の宰相中將のなほしの事源氏の君の

宣ふとて非參議のほとなにとなきわか人こそ二あゐはよけれとの給へり非參議とは二位三位なとの中將をいふすてに夕霧は八座に昇進し給事なれははなたのなほし着給へきと云心也さかきの卷に源のおひをうす二あゐなるおひの御そにまつはれてと有今頭中將はこき二鑑なれはわか御直衣よりは色ふかしといへる也近代直衣のおひに下襲の色を用ふ禁色の人冬蘇芳（表白裏濃打綾）夏蘇芳（表草文生）四位以下非參議人冬躑躅（表白裏濃打平絹）夏二藍穀大かた今も直衣をきるほとの人はなほしの色をもちひなほしきぬ人は下襲の色を用へき事なるを直衣きる人の下襲の色を用ゆるは略義とそ覺え侍る　箋帶は直衣のきれを用る義也直衣ゆるさゝる人は下かさねの色を用へき（なイ）也其中にも禁色非色の差別あるへし色の事は貴人ほと早々宿德する故也頭君源氏に年ましたれとも色こき也　藤裏葉　榊卷　此兩義花の分也略之花に源氏を此段にて宰相中將と註せらるいまた三位中將也巳上箋

はた袖もなかりけり　源の直衣の袖もなきなりほころひはほろ〳〵と前に有し時ほころひぬるなるへし　秘鰭袖なり或說にははたは詞也將字也不用也

箋鰭袖也又の義將の字と云々

おりたちてみたるゝ　それに身をなしてよとなり

御心をさめられ給ふ　源の心也

中將宿直所より　頭中將禁中宿直の所なり

とちつけさせ　秘中將の方よりかく申さるゝなり

箋花に源の直衣のかた袖

いかてとりつらん　源の心也

この帶をえさらましかは　秘此帶なくてはと源の思ひ給ふ也　はた袖のうへにつかはるゝ故也

その色のかみ　帶の色なり

源中たえはかことやおふとあやうさに花田の帶はとりてたにみす　河かことこれはかこつなりかこたれやせんといへる也返歌にもかくてたえぬる中とかこたんとあり　花石河のこまうとにおひをとられてからきくひ（いイ）するいかなるおひそ　はなたのおひの中はたえたり（さいばら呂石川）今案帶を人にとられたるは石川の歌よせ有又東路のみちのはてなるひたちおひかことはかりもあはむとそ思ふとあれはおひにかことはよせありたゝしひたちおひのかことは少し

の事の心也今のうたのかことはかこつけ事ゝ聞えたり中將のおひはまことは二藍なれとも歌には花田のおひとのみよみならはし侍るうへ石川のこまうとにとられしとかた〳〵其たより有て覺え侍る則中將の返歌にも君にかくひきとられけるといひかくてたえぬる中ゝ讀るも石川の曲を思ひよせたるかと聞え侍る中將の返歌は内侍のすけと是も知人なるによりて無興したる心也　かことはかこつ也頭君と内侍のすけとの中を云　箋秘に催馬樂の石川を引也花田の帶にはあらね共取用る也

返頭中將
立かへり　頭君よりやかて返事也

君にかくひきとられぬる帶なれはかくてたえぬる中とかこたん　秘わか中はそなたへひきとられて絕はてたるとなり　箋云頭君源内侍を我物にしての返答也

えのかれさせ給はし　文の詞なり是も我物にして理運にいひたる也

おの〳〵殿上に　源頭兩人なから參内なり

物とをき　源と中將とのよへのたはふれの名殘なく物へたてたるやうにはるかなるさま也實々しき體なり

おほやけ事おほくそうしたくす日にて　花頭中將貫首たるによりて宣下の事ともうけ給はるをいふ也　秘上へ奏聞すると下へいひ下すと也

いとうるはしく　互に實目なるなり

人まに　人のみぬ間に也

物がくしは　秘頭中將の詞也源へ頭のさしよりて也

ねたけなるは　頭君の體也

なとかさしも　秘源の詞也頭中將の見あらはしてうれしけにみるを源のためにねたけなるしりめといふ也されは源は又頭君こそ立なからかへり給ひつれは口をしからんといひねたまし給ふ詞也

まことはうしや世中よ　河引歌なし　花古歌の詞あるへし猶尋ぬへし　弄本歌未見歌の詞ならても世中を觀したるにても然へき也聞同秘同　箋云理はあきらか也引歌未勘

とこの山なると　花人のおもふともしらぬよしをこたへてうき名をもらすなといへり口かためたる心なり　河「いぬかみの床の山なるいさゝ川いさと

こたへて我名もらすな　此引歌諸抄一同
ともすれは　秘此事を封にし給ふなり
いひむかふる　私人のあひ手になるはむかふになる
心也それをいふ也
ものむつかしき　源典侍か心にもいらす物むつかし
く思ひ給ひしにかゝる事さへありて彌うとむ心の
いてき給ふと也
女はいとえんに　源内侍の源をうらみたてまつるを
わひしくおほす也
中將はいもうとの君　頭中將は葵上にもいはすして
心におもふ也
おとしくさ　花しせんの時のおちあたるたねにせん
とおもふ也
やんことなき御はら〳〵のみこたち　秘是よりうる
さくてなんといふまて草子地なり　秘此段頭中將
と源との間の事を評したる詞也御はら〳〵のみこ
たちとは源の御兄弟たちの事也うへの御もてなし
のこよなきとは源をすくれて御門の寵愛し給ふを
云なり
さりきこえ　箋河に所をさる也

この中將は　頭中將は何のと思ふ也　秘誰も〳〵所
をおけとも此中將はさもなき也
ひめ君の御ひとつ腹　箋云葵上と一腹頭中將も御
門の御ためにはおひ也みかとの御いもうとの腹也
みかとの御子と　是より頭中將の心中也源は皇子の
けちめはかりと也
おなし大臣と　攝祿の家となれは人にことなる勿論
也
みこはら　みかとの御妹なれは也
おほえ給はぬなるへし　是も頭中將の心中を察して
かける詞なり
人からは　是より頭中將の體をいふ
この御中のいとみ　源と頭との事也
されとうるさくて　あまり色々の事あれはくた〳〵
しき故に省略したると也
七月にそ后ゐ給ふめる　箋花に藤つほの女御中宮に
立給ふ事也河内本に十月云々非也其故は皇太后宮
藤温子昭宣公女寛平九七月中宮昌泰二七月爲皇后是
等之例を摸する也秘同弄班子女王光孝后宇多御母寛
平九七廿六日皇太后　河左傳曰帝嫡妃曰皇后　後

漢書曰以備內職爲后正位宮闈同體天皇周禮曰王者
立后又曰以陰禮敎六宮鄭玄曰陰禮婦人之禮也六宮
後五前一又云六宮謂后也婦人稱寢曰宮隱弊之宮一
燕寢五也后象王立六宮而居之亦正同臣禮記云后之
言後也在夫之後也故以女謂後達皇后既居後宮也令云中宮職
謂皇后宮皇太皇后皇大后亦云中宮也釋曰今稱皇后者爲中宮也神武天皇辛
酉尊正妃爲皇后踏鞴五十鈴姬

源氏の君宰相になり給ひぬ　秘是より宰相中將也
河稱德天皇　天平神護二年正月八日石上宅嗣任參
議中納言弟麿男元中衞中將宰相中將始也

みかとおりゐさせ　桐壺御下位あるへき御下心也

このわか宮　冷泉院也　秘藤壺の御腹の若宮也

御母方　藤つほの御親類皆親王たち也

源氏のおほやけこと　天下を輔佐の臣は藤氏をもつ
て本とする故也凡源氏は嵯峨天皇よりはしまりて
後は天子の御子人臣にくたる時は必源の姓を給る
故に皇子をは源氏と申也親王も臣下にくたれは源
氏也くはしく桐壺卷に註ｌ畢　わか宮冷泉院御外
舅親王なれは人臣にて御うしろみすへき人なしと
云也源氏の執柄右大臣能有例歟

はゝ宮をたに　藤つほ中宮に立給ふ事なり

つよりにとおほすになんありける　御門のおりゐさ
せ給はんのといふより是まて草子地也

こうきてんはいとゝ御心うこき源ふことわり也　弘
徽殿は御心さかなくてさらぬ事にさへ御心うこく
に是は御ことはりと也　弘徽殿をさしおきては皆
人もおもふ也

されと春宮の御代　朱雀院の御即位あるへき事也

おほしのとめよ　桐御門の弘徽殿へことわり仰らる
るさま也

けに春宮の御はゝにて　これより世の人のいひあつ
かふさま也

廿餘年になり給へる　箋聞書廿餘年とありてはたと
せあまりとよみて可然と云々　聞書稱名細々廿餘
年を音によまると云々猶はたとせあまり可然歟云
云　箋廿餘年と音に讀へし云々　私云はたとせあ
まりを用へし

世の人も聞えけり　けに春宮のと云より又草子地歟

まゐり給夜も　秘中宮入內なり　聞書藤つほ立后あ
りてはしめて參內の時なり

宰相の君　源也
おなしきさきときこゆる中にも　是より藤つほのやんことなき事をいふ先藤壺の中宮は先帝の御女にて后腹の四宮也されは御身の位先やんことなし其腹に玉の光かゝやきたる冷泉院生れたまひしも御門の御寵愛たくひなくおはしませは何事もたらひ給へるといふ也聞書、はきさいはらのみことは冷泉院の御事也云々　私云きさいはらのみことといふまてを藤壺の中宮の事にみるへき歟さて玉の光かかやきてといふは若宮の御事とみるへきにやたくひなき御おほえは御門藤つほを御寵愛の心とみるへし如何

わりなき御心　秘　源也

御こしのうちも思ひやられて　河伊勢物語二條の后のまた春宮の御やすん所と申ける時氏神にまうて給けるにこのゑつかさにさふらひけるおきな「大
（代イ）
はらやをしほの山もけふこそは神世のことも思ひいつらめとて心にもかなしとや思ひけむいかゝ思ひけんしらすかし　花中宮の行啓には鳳輦に召さるゝ事もあり又庇のいとけの車に乗給ふ時も有也供奉の人の行粧も乗物によりてかはる事侍る也

そゝろはしきまてなん　秘とひたつはかりといふやうに也　聞書同し

源つきもせぬ心のやみにくるゝかな雲井にひとをみるにつけても　秘心のやみはわか宮也雲井に人をは藤つほなり　花心のやみはわか宮の御事を思ひ給ふなるへし　私云此初の五文字つきもせぬとは藤壺の御事若宮の御事をかけたる詞なるへし心のやみとは若宮の御事也雲井に人をとは藤壺の后に立給へはいよ〳〵雲井はるかにおよひなき心ちするを詠し給へる歟　又私云心のやみに雲井に人をなといへるつきもせぬの五文字に月の心は無之歟なと如何

物いとあはれなり　源の心中なり

みこはおよすけ給ふ　是より若宮の御事をいふ

みたてまつりわきかたけなる　是はよく源に似給へるを云

宮いとくるし　源に此若宮の似給ふ事也　藤つほのくるしく人めをおほす也

思ひよる人なきなめりかし　いまた不審する人もな

きを云也
けにいかさまにつくりかへて　聞書源の御かたちは天下にならふ人なき上の上也又この若宮も同しく上の上なりされはさやうにすくれたるかたちを別につくりかへんやうはあるましき也上の上はかやうのかはかたちにならてはすへきやうなき故によく似給へるなり月日の光の空にかはる〳〵に明らかなる類なりとよの人も思ひなすと也　私云此段草子地歟

岷江入楚第八　花宴

十九歳
二月廿日餘南殿櫻宴事
源氏宰相中將舞春鶯囀頭中將舞桃花苑事
其夜於弘徽殿細殿逢右大臣六君事（朧月夜尙侍是也）
取替扇事
翌日後宴事
源氏對面大臣殿之次語先日花宴日事共事
三月廿餘日二條右大臣弓結則有藤花宴事
此日右大臣折藤花送源氏君歌之事
右大臣以息男四位少將爲使事
其日源氏着布袴向二條弟事
始知扇之主事（右大臣六君是也）
源氏與右大臣六君隔几帳贈答之事

花宴　巻名　簽南殿櫻宴事也則花宴也

秘大唐には牡丹を稱し日本には櫻を稱す櫻宴花宴差別不可有之

花宴例類聚國史卅弘仁三年二月辛丑幸神泉苑覽花樹命文人賦詩賜祿有差花宴之節始於此矣云云花宴度々之例雖有之延長四年例此卷に相叶へり兩抄被載之

源氏十九歳の春也巳上秘簽之義也 當官宰相中將正三位也

河卷名　此卷に南殿の櫻宴あり　南殿は紫宸殿也此南殿の巽角にあり是大內草創よりの樹なり貞觀に枯るといへとも根よりわつかに萌出るを坂上瀧守勅を奉てこれをまもる枝葉再盛云々延喜御記にも群列櫻樹東頭になとあり天徳に燒たりけるを康保元年十一月にうゑらるすなはちかゝる同二年正月にまた植られて三月に花宴あり兩度之間一は重明親王家樹一は西京より移しうゑらる其後度々燒亡に每度うゑらるゝ者也

花宴事

延喜十七年三月六日乙卯御記云晩頭常寧殿看花命實頼令吹笛令一兩侍臣唱歌臨昏還清涼殿坐東北廂參議保忠朝臣侍殿上櫻下施筵召大內記理平直（直貞イ）内御書所勘解由次官諸蔭播磨權大掾橘正臣文章生春淵善規坂上恒蔭藤原高樹等令賦春夜翫櫻花絶句邦基朝臣常幹千古同預其座理平作序子二剋召理平讀詩訖給文人綿又鋪座階前其上朝臣以下侍唱歌之召備前介善行彈箏藏人所藤原有時吹笛讃岐掾千兼彈琵琶保忠朝臣時々彈琴吹笙夜深給保忠朝臣御衣侍臣絹息所殊以女裝束給近侍管歌盃酒者數人延長四年二月十七日御記云此日殿前櫻花盛開仰召文人聊開花宴昨暮豫令召可候文人今日遣使召常陸太守貞眞親王左大臣云々　有所煩不參申剋常陸太守親王參入同剋御藏人立倚子東北庇自北第二間敷菅圓座兩三枚於北階南簀子敷爲親王納言座櫻樹下敷座西面爲文人座酉剋左衛門督藤原朝臣參即着倚子令召親王藤原朝臣等即參來侍座仰令召文人即文章博士公統朝臣民部大輔博文朝臣右中辨文江民部少輔諸蔭傳內御書所大內記橘正臣以下文章生以上七人參入仙華門着樹下座侍臣給紙筆仰令獻題藤原公統朝臣進昇殿藤原朝臣座前給之令書題目奏花房紅蠟珠仰又令上又書奏書之櫻繁春日斜仰以後所上爲題

又仰令探韵字右近權少將實賴探韵奉上次親王以下
就文臺探韵仰淸平朝臣元方左衞繼時尹甫等探韵令
就進中（筵イ）座子時內藏寮給淸着中納言藤原朝臣參入仰
令探韵其後仰召書所膳者四五人時々並奏以助
謳吟及子刻終頭取文章以三公統朝臣一爲講師讀詩仰
文人等近侍砌下令講其後管絃頻奏吟詠不止仰常陸
太守親王彈箏中納言藤原朝臣彈琴左丞相親王納
言御衣文人給綿侍臣及樂所人等給疋絹寅二刻入內
侍臣退出　度々花宴の內に延長四年例探韵以下は
相似たり　康保二年三月五日丙子今日有花宴并詩
其由緖去（乃木イ）正月廿七日掘東都櫻樹植南殿巽角自紗埋
根朱檻迎粲項月之間逐日鮮明上達部今日留此座其
憐其意自日中及夜半詠古詩讀詩歌且以眺望且以愛
翫而已但此間行事具見陣記已下略之　于時少外記
大江昌言候陣座聊記之　同三年二月廿二日御記云
今朝立倚子於庭樹下就花下座親王公卿又移座同樹
北邊奏管絃行盃酌亦召爲平親王令候座伊尹朝臣折
花插王卿頭其後延光朝臣執盃互斧令詠和歌巳剋入
內公卿等退出云々
拾遺集　天德三年三月內裏に花宴せさせ給けるに
九條右大臣一「櫻花こよひかさしにさしなからかく

て千とせの春をこそ見め　花　此卷は詞をもて卷名
とせり但卷の詞には南殿の櫻のえんせさせ給とあ
りておくの二條のおとゝの藤の宴の所に藤の花の
宴し給ひけりとあれはこれにつきて卷名を花宴と
いへるにやと覺え侍れと古來花宴とは櫻を翫ふ事
をいひならはし侍るうへこれは禁中の事なりかれ
に又此の宴なれは猶南殿のさくらのえんをもて名
目とせりと心得べき也國史云弘仁三年二月幸神泉
苑覽花樹命文人賦詩賜綿有差云々花宴の濫觴なり
ことし源氏君は十九歲宰相中將正三位也　弄卷名
南殿櫻宴事なり　此卷は紅葉賀卷の次の歲の春な
り源氏君十九歲也花鳥に委し　花宴例　嵯峨弘仁
三神泉苑花宴事初也　南殿花宴例　村上康保二三
於南殿有花宴云々　詩探韵例　延喜十七年延長四
年二月等の例也彼是度々の義を兼用之此卷にかけ
るなり
花宴舞樂例　天曆三三十二有之地下の舞人はかり
にて堂上の舞はなかりき云々
きさらきはつかあまり南殿のえんせさせ給ふ　箋
二月例（ニイ）　弘仁三年殊花宴始也延長四二十七日村上
康保二三廿二日植南殿櫻　禁秘抄在紫宸殿巽角凡自

草創之樹なり　貞觀此樹枯自根纔萠枝葉再盛或上
瀧守奉勅守之也云々　延喜御記　詳列櫻樹東頭云
云箋云常寧殿花宴此事與天德燒亡爲櫻燒康保元年
正月栽之岡本家重明親王家櫻十一月又移栽之自西京此後度々
燒失後度度被栽之左近櫻以後堀河院御宇已來之木也云々
南殿花宴寛平三三五　常寧殿花宴延喜十七三六
清涼殿花宴延長四二十七　仁壽殿花宴天慶四三十五
花宴の在所取々の説用難有之宴席を開く事は多は
清涼殿に渡御有て被行て打亂たる宴は南殿にては
其便有ましきなり今此物語も宴席をは清涼殿にて
行はるゝと心得へき也　箋云此卷の花宴事は紅葉
賀の卷におりゐなんの御心ちかくなるよしあり御
脱屣程あるましければ御在位の名殘に此宴を開給
ふとの心なり延長四年の例を引用る也醍醐御門代
の末の年號なるによりて其面影あり　凡勘例一度
の例を守らす此物語のならひなりかれこれをもて
取合て分別すへし箋已上　花桐壺の御門を醍醐帝に
なすらへ奉るにつきて御の御宇に花宴行れしは延
喜十七年三月六日常寧殿の花宴詩題春夜翫二櫻花一
延長四年二月十七日清涼殿花宴詩題櫻繁春日斜此
兩度の例は過へからすみな探韻作文御遊の事あり

延喜常寧殿の花宴も宴席をは清涼殿にてひらかれ
しなり此物語の花宴も南殿の櫻を御覽ありて宴を
は清涼殿にかへらせ給ておこなはるゝ事と心得へ
きなり但南殿の櫻を御覽の事は村上天皇康保二年
三月植二櫻樹一於二南殿一有二花宴一詠二古詩一誦二和歌一
云々此時は探韻なとはなかりしかとも南殿の櫻を
御覽の例也又醍醐の御代の後の事なれと准據には
引もちふへきにやさては朱雀院の天慶四年三月十
五日仁壽殿花宴題花樹暮雲深云々これも宴は清涼
殿にてあり次に此物語の花宴は桐壺の御門の末の
年なりきさらきの廿日あまりなといへるわたり延
長四年二月の宴をとりよせてかけるにやとそおほ
え侍る
后東宮の御つほね　箋　后は藤壺東宮は朱雀院也秘同
左右にして　箋　春に讀なり南殿の東西なり東宮は左
東后は右西なるへし弄秘同
まうのほらせ給ふ　参昇　参進なとかけり　花　花鳥
に延喜の例をひきて清涼殿にかへらせ給うてと心
得へし云々此義可然哉うち見たれたる宴は南殿に
ては其儀そのたよりありかたきにや
こうきてんの女御中宮のかくて　箋　秘に藤つほに立

后をこえられて同座もこれなし然といへとも今日
はやむ事をえすまいり給ふなり
日いとよく晴て　箋云延徳の世には天も與する故に
四美侍るなり二月末の時節の景氣又其比の宮中の
有樣上代の體を思やりてみるへし末代零落の眼に
てたやすくこれを見は作者の粉骨もむなしかるへ
し秘同　私云前の紅葉賀の日は日くれかゝる程に
けしきはかりしくれとあり此花宴には日いとよく
晴てとかけりいつれも時節に相應したる感をおも
ふへし
その道のは　秘文字にたつさはる人々の事なり　箋
花に先第一儒者奉仰献題（二献之題勅定之）　箋云春夜翫櫻花
延喜十七櫻繁春日斜　延長四　花樹春雲深（天慶四）此
題也　次書韵字盛申從南庭中之文臺上近衛次將先
探御料韵字二字置筥蓋昇自御階獻之　箋云延長四
年夏右近少將實頼探韵奉上次王卿撰属文者文人（尋）
各進文臺頭探一字見之奏官姓名及所探韻字也今案
探韵と云は各分一字詩也こと〳〵く韵字かはるな
り端作春日同賦春夜翫櫻花各分一字應製詩（探得其字）如
此書之也　箋云儒者は詩一首と書之半生の懐紙も
切韵の時は如此不然時は題中取韵と註に書之（已上箋）
たんゐん　秘韵字を一字つゝさくり得て詩を作るな
り花に見えたり
春といふ文字　弄（イニナシ）韵字を一字つゝさくりえて作るな
り其作法は先題を儒者の定て後古詩を一字つゝに
してさくるなり詩の名句或は時にあひたる句を用
なり庭上にして儒者の文臺のうへにふせおくを中
少將なとおりて主上の御ために韵をふたつ取て奉
る叡慮にかなはんを一字御用あるへきの故實なり
二なからとゝめおはしまして詩を案し給ふなり諸
臣は各一字を採用なり作者十人あれは五言詩二句
を一字つゝ韵も分つなり十四人の時は七言の二句
を用なり花鳥にくはし
宰相中將春と云ふ文字　源の字春也　河眞淳臻韵也
花花宴の詩に春と云韻字はあひにあひたる事なり
源氏の君の榮花の春を思よせていへるなり　箋云
御門榮花の時節に逢ぬる時を得て春字をさくりえ
られたる自然の幸なり
こえさへれいの人にことなり　弄韻字をさくりえて
は各其由を申す官姓名何の字を給なりなと名のる

と云々折節花宴に源の春字を探あたり給ふ事自然の幸なりこわつかひ進退等よろつの事に心つかひすへき事とみえたり

つきに頭中將 秘是もさのみおとり給はざるよし也

さての人々は 秘源頭中將の外の人々を云なり

おくしかちにはなしろめる 秘臆したるさまとなり 花おくは臆病の心なり人のおくしたる時はよそへ目かくはゝれすして必鼻の上かしろしろとみゆるなり 箋花中程の人は顏か赤くなるなり一段とおくする人は鼻の色しろむなり

地下の人は 地下の文人なり 聞書堂上の人は朝夕になれつかうまつるさへなり御ましてと云也

御かと春宮の 桐壺朱雀いつれも御才覺のすくれたるなり

かゝるかたにやむことなき 臣下にも大才の人のおほきとなり

やすき事なれと 秘詩の絶句一首作へき事いとやすき事なれと時宜にしあつかひたる歟今案あなかちに詩の事にあらす立出て探韻たまはる時の進退をいふにや

年おいたるはかせ 弄功者のなれて臆せぬよしみゆ何事にも稽古をつむへき事のをしへ也 秘箋弄之に同し

れいなれ 河例馴なり物なれたるなり常になれたるなり 箋云延長(喜イ)四年文章生七人云々

かくともなとは 延長四年の例をもつてかけると見えたれと此度は舞樂なしされと事をとりくはへてかく也 箋花に凡花宴は御遊はかりにて舞樂はなし

花宴舞樂之例

天曆三三十一二條院花宴陽成院事 同月十二日仁壽殿花宴此両度舞樂あり則春鶯囀を奏す但地下の伶人許にて殿上の舞はなし箋已上 此物語のならひすこしも面影あれは藍よりもあをくかきなしたるなり

春のうくひすさへつるといふ舞 箋天曆の例也見右此樂花宴に便あり一名は天長寶壽樂と云旁以たよりある者也弄秘同 河春鶯囀壹越調大曲新樂一名天長寶壽樂 南宮横笛譜云昔儛二此曲一者有二左大臣源信朝臣及巨勢式人等一仍承和御時勅二信朝臣一以二此曲一令レ傳二習之一成康親王合二于御笛一儛二於清涼

殿前ニ視レ之者無レ不ニ感泣一
源氏の御もみちの賀　箋秘に以前の巻の名こゝに見えたり
春宮かさし給はせて　箋秘に朱雀院舞を源へ御所望なり此舞は春鶯囀の樂なるべし　弄源氏君はいつれの舞とも見えす
袖かへすところ　河纓舞袖なり
一をれけしきはかり　私云河海には一かへりとあり同心なり　箋云花宴に殿上の舞の例これなし此時も本式に殿上の舞樂あるにはあらす時の興に舞して遊の舞なとのことときの儀なり
左のおとゝ　箋云こゝに始て左府とかけり　秘葵上にふさはしからぬをうらむる心あれとさやうの事をも打わすれ給ふなり弄同
涙おとし給ふ　箋云承和御時成康親王合ニ于御笛一舞於清涼殿前視之者催感涙云々
頭中將いつらおそしと　秘紅葉賀の時の源のかた手なれは何とておそきそとあるなり
桃花苑といふまひ　箋秘弄に此樂上古は舞ありき今は斷絕云々　河舞圖云婆羅門僧正將來女形也如ニ吉祥天女ニ無禮柔々靜々云々　箋聞云大唐には人の死したる時あたらしく樂を作りて葬送の時これを奏するなり此桃花苑も人の葬送に作りたる樂なりさて吹て見れは吉の聲あり不審なりとて棺（椰イ）樹をひらきて見れば彼死人蘇生したそそれより吉の樂に用るなり
すこし打過して　箋花に久しくまふ也　秘ねん頃にまふ也
かゝる事もやと　秘かやうの御所望なとありてはとて內々稽古して用意もありしにやとなり
御そたまはりていとめつらしき事に　秘花鳥義可然也　箋勅祿をたまふなり　花花宴に殿上の舞又勅祿を給事めつらしき例なり云々　給御衣例　延喜延長河に延喜十七年花宴保忠朝臣賜御衣管絃盃酒に侍する者數人女裝束絹等給之云々　同延長四年花宴親王納言賜御衣文人に綿樂所疋絹云々　弄花宴に（舞樂の有し例はあれとも堂上舞人の例はなき故にめつらしき例といへり）　箋勅祿を賜ふ也
上達部みなみたれ　箋源氏に舞を所望は臨時の處分なり紅葉賀のかた手なれは頭中將にならへて御所望なり然間各やむことをえすして次第に上達部に

及へりと見えたりかねて期せざる事なり花宴に堂
上の舞其例いまたなき　如此臨期の體にかきなす
なるべし
けちめも見えす　河結目又掲目
ふみなと講するにも　花に詩とも講するとあり　箋
花に詩を披講する時は庭中にたてたる文台をかき
て御前にたてゝ文人ともは階下にすゝみて講頌す
るなり　箋云詩を作文と云此故に詩といはんがた
めに文なとゝいふなり
源氏の君の御をは　箋河に御詩をはといふを略して
いへるなり秘同
かうしもえやらす　箋云毎句秀逸なる故に各感する
とて講頌中々事もゆかぬ體なり一説河に大方の人
は難字ある故よみとかぬ心云々此義以下相違なり
絕句は詩人に不可有難字縱難字雖有之御前也講詩
參勤之人々其器に非すしては席をうかゝふへから
すこれはあやまりなり又一本講師もえよみやらす
と云本あり講師は讀師にをしへられてよむ物なれ
はとゝこほる義はあるべからす又秀逸を感して是
非を沙汰すへき仁にあらす旁以道理不叶仍青表紙
に例之者也　私云是は講師とよみてあやまるなり
講するを事をえしやらぬとの事なり聞書には宗祇え
よみやらすとなほすと云々非なり
くことに　秘毎何秀逸の故なり
かうやうのをりにも　秘草子地なり桐つほのみかと
は何事をも源氏君を先にし給よしなり
中宮の御めのとまる　秘中宮は藤つほなり春宮女御
のかやうにたくひなき人をは何とてにくみはて給
そとなり箋同　箋開中宮の執着の心にてはなし密
通ありし事をそらおそろしく御心にかゝるなり
わかかう思ふも　秘又かやうにおほしめすもあさま
しきとなり箋曰藤つほの心ひくもあさましき事と
藤壺中宮
雲泥の心中をおもひくらへ給ふなり
大かたに花のすかたを見ましかは露も心のおかれま
しやは　秘ちと心得かたきなり　古今歌「露ならぬ
心を花におきそめて風ふくことにものおもひそつ
く　心は花はさくをも散をもしらすかほにてある
へきを露のことく花のうへに心をおく故に由なき
物おもひのあるとなり此歌にて心得へし今源のす
かたすくれたるによりて心にかゝれりとなり大か

たならましかは源のうへをさま〳〵の思ひ事もあるましきとなり心に思ひ給ふ故なり
箋云花をも花と思はぬ人は心つくしもあるましきなり所詮公界むきに花を見は心に苦労はあるましき物をといふなり露ならぬ心を花におきそめたる故の物思ひそとなり心のおかれましや（たゝ）け世上の隔心のかたなり大かたにの五文字能力の人たる所なり公界のかけしろひなき身ならはといふなり是を藤壺源へ見せ奉ると見ては散々の事なり歌の前の詞にて取合て分別すへし花をにくむ人も不審又愛するもひかことゝいふ義なり　弄箋畧之　聞書心おくといふは隔心と又心をかくるかたと二つなり公界むきに花を見は何ともあるましきなり心をかくる故にさま〳〵あつかはるゝなり
御心のうちなりけん事いかてかもりにけん　箋云草子の判にいふなり源へ贈答にあらさる故にかくかけり　秘かやうの御歌は人にかたり給へき事ならねは御心ひとつにてあるへき物をとなり草子の地なり弄同
夜いたうふけて　定家卿自筆の本閇字あり　私云延長四年花宴御記に寅二尅に入内侍臣退出云々
おの〳〵あかれ　河分散　箋退散
かたらふへき戸くち　玉命婦か局なるへし箋花同
猶あらしに（イれらくは）「なほあらしとことのはくさに云事を聞しる人はすくなかりけり　箋秘に中々と思ひながら也
こきでん　秘桐壺のすちむかひなり　漢語抄
ほそとの　箋河に細殿忠教朝臣秘説云廊の字をよめり舊記廂をほそ殿と點す是も其心歟
三のくち　箋河に弘徽殿に南北へ細くとほりたる戸あり是は北より第三にあたる戸なり格子遣戸なり秘同　弄弘徽殿南北へとほりたる廊あり南の第三の戸の事なり一説弘徽殿の東にわたり廊ありそれを細殿といふほそ殿へ出る所に戸三有南の第三にあたるくるゝさしたる戸なり　花三の字は音によむへしこきてんのほそとのゝ戸三あり第三の間にあたる戸といふ心なり河海にいへる相違なし　秘ほそ殿は廊なり廊の第三の口なり
女御は　秘弘徽殿也
おくのくるゝ戸も　箋河くるゝ戸にくきさしかため

萬葉　河くるゝ戸にくきさしかため萬葉長歌くるゝと
とよむへし或はたゝき戸とも號する也　私云おく
のくるゝ戸もとあれは三の口の戸とは各別歟
世中のあやまち　秘世間の人のあやまち如此事故な
るべし
弄よにあやまちする事なとを思ひ給ふなりされと
も源氏の今夜のあやまちは思ひつゝありしなるべ
し　箋聞書こゝはたゝ世間のことなりされとも此
事よりすまの浦の事もおこれり　或抄御説に此詞
尤面白し諸人のをしへなりかやうなる時わか心に
あやまちなき樣に用心すへし
いとわかうおかしけなる　是より朧月夜のさま也
おほろ月夜に　箋秘にこれより則名とす　河「てり
もせすくもりもはてぬ春のよのおほろ月夜に似る
物そなき　伊行釋しく物そなき　已上箋
こなたさまにはくる物か　三本にさまにはとあり
弄異本ににはの字なしやすらかなるかかはうたか
ひたる詞にはあらす云々一注箋秘に此か文字清て
よむ疑のかに非すこなたへくる物にてあるよと此
詞奥にも見えたり

あなむくつけ　朧の詞なり
何かうとましき　源の詞なり
源ふかき夜のあはれをしるもいる月のおほろけならぬ
契とそおもふ　秘かやうに思ひかけさるはおほろけ
ならぬ契にてはなきかとなり　同天文八三六日入
月思案心あるへし此朧月夜の行衛もしらぬ名殘は
只入月のと思ひなさるゝなるへし二月廿日の月入
とみん事おほつかなきよし申なり　箋云入月とい
ふに心あるへし月と云物はみちひく人なけれとも
わか山のはをさして入物なりそのことくに契おき
たることとく本意をとくる事はおほろけならぬ契り
そとなり　私云ふかき夜のあはれをしるとはおほ
ろ月夜にゝるものはなきといへるよりたよりて詠
せる歌なるへしおほろけとは少縁とかけりおほろ
けならぬは少縁ならぬなり
あさましきに　朧のさまなり
こゝに人と　朧月の詞なり
まろはみな人にゆるされ　箋時の計略なり　秘源の
自稱にはあらす人にゆるされたるとは當座の計略
にの給なり此人にすまはせしのためなり　弄おそ

れぬよしを女にいはんため了見の詞なり

此君と　秘さては源にてましますよと朧のしるなり

箋同

わひしとおもへる　秘是より朧の心なり

ふひ心ちや　源の心なり

程なく明ゆく　春のみしかよの更たるさま思ふべし

あはたゝし　河周章也　𤏐也

女はましてさま〳〵に思ひみたれたり　箋聞云思ひかけす源に逢給へる事又は春宮へ参らせんと内々おとゝの給ひしさやうの事ともなるべし

猶名のりし給へ　秘源の詞なり

いかてかきこゆへき　秘向後何として申かよふへきそとなりこのまゝ一たひにてやみ給はんとはよもおほされしと源の給なり

朧月夜

うき身世にやかてきえなはたつねても草のはらをはとはしとや思ふ　此まゝはかなく消なは草の原までも尋給へき事なるに名のりし給へとあるになのらすはたつね給ましきにやとかこちたる歌なり秘同箋云しきりに名を尋らるゝにて志のふかゝらぬはしられたる也　其殿は眞實の志ならはなき跡までも尋らるへき也今にかきるへき事かはとなり名譽の作者なり　なのらすは尋給ましきかと恨たるなり　私云　秘箋大略同義なり

ことわりやきこえたかへるもしかなとて　河水原抄云このこと不得其意但とかくいひまきらはすほとはきゝもあらはさゝりつるをこのうたの聲のなまめかしきにきゝさためてことわりなりといへるなり云々此歌はいつれぞと尋んほともおほつかなかるべしといへるなりしかなとてはさはなといふ心なり　花聞えたかへたるとは源氏君の思ひ給ふ心むけを女のきゝたかへてひとへになのらすは思ふましきにとりなして草の原をはとはしとやとよみ給へるなり源氏心ははしめよりさにてはなし問へき事はとふへけれとも猶露のやとりをたとらん程もてさわかれん事のうしろめたきによりてたしかに名のり給へとはいへるなりしかなとてはしかしかの心にてあると云心を下の歌にのへ給へり小ささかはらに風もこそふけは露のやとりをもとめ失ふへきいはれなりわつらはしくおほす事なくはと下の詞にかきつゝけたるは二條のおとゝのわたり

わつらはしかるへき事を小さゝか原の風にたとへたるへし　河海の說いまたいひおほせす　弄源氏の心はしかなりといひきかせ給ふなり其心を歌によめり　秘源氏の詞なりこれはことわりなりしかなりとなりけにさにてあるそとなり　河海の說尤可然花鳥にはしかしかの事と云々如何　箋云源氏詞也道理にをれて近頃餘義もなきなり申しはあやまりたれとも我も一つ存分の候其存分はいつれそと露のやとりの歌なりしかなは而なり次の歌をこれこれ云亦也申ちかへたる此理申へき爲そとなり花にはしかしかのいはれにてあると云心を下の歌にてのへたり云々　箋云花の說も面白きにや大略右の義に一同と也　箋云秘の義はきこえたかへたるもと云かの字不消なり

近源 いつれそと露のやとりをわかんまにこさゝか原に風もこそふけ　弄此人は弘徽殿かたの人とみえたれは右大臣と源とはよからぬ御中なれは尋んにつけてさわかしきことも有へき故にこそ名のり給へといひけれ心さしのあさきにはあらすと陳したるなり篠には風も殊にさわかしくつゆもとゝまらぬ物なれはよそへてよめりこさゝは小篠也秘同　秘河海にをさゝとある歟但猶こ篠歟源と大臣とは風もはけしく露もたまらぬことくなるとなり　箋露のやとりをもとめうしなふへきいはれを陳したる歌なり　箋云露と云物は風のふかぬ程なり風とは或は心は心にもあらてよすか定るか又はこと人のかたらひつゝきなりいかさま尋ぬへき程を待かたきは露の心なり此いはれにて名のりし給へとは申せしとなり　秘源とは大殿わたり聞もよからぬ故に風はげしく露もたまらぬことくなると云々　箋云いつれそと云所肝なり末の詞に世になれぬは五六の君かとあり此詞を引合て見るへきなり

わつらはしうおほす事ならすは　秘そなたのわつらはしくおほしめさぬ事ならは也　箋云女のためあしからすは露顯しても尋へきなり　箋云此詞より見れは前の歌の心右大臣の義も一往子細なき歟

すかひ給ふとも　たらす心なりかやうにしたかひかほなるは源をたはかりての給ふかとなりさもいひあへすわかるゝさまなり

うへの御つほね　秘弘徽殿へなり

あふきかはりをしるしに　秘両方とりかへて源の出給なり　花和泉式部假名の記にかへる人の扇をとりかへてとかけり又東坡詩云換レ扇誰逢ニ春夢婆ニとつくれり春夢婆は女の異名なり唐土には夫婦の約をなすもしるしには扇をとりかふる事あるなり
弄合歡扇なともいふ事あり

きりつほ　源の內裏にての御さうしなり　箋秘に昨日花宴の後朝なれは人々おほきなり

おとろきたるも　秘やう〳〵ね覺したる人なり

さもたゆみなき　源のいつく〳〵へ忍ひおはしたるなと色々にいひあつかふへし

つきしろひつゝ　河突（ツキシロヒ）　色々とりさわくるなり

そらねをそしあへる　源の御かへりをしらぬかほせんとてわさと寢入たるさまをつくるなり

入給うて　源の寢所へ入給ふなり

女御の御おとうと　女をもおとうとゝいふなり

また世になれぬ　いまたよすか定まらぬ事をいふへし

五六の君　六は朧月夜なり

そちの宮の北方　秘螢兵部卿宮の事なり　此頃は螢兵部卿を帥のみこと中業の父宮を兵部卿宮と申せしなり

頭中將すさめぬ四の君　右大臣の四女は頭中將の北方なり　不肯（日本紀）すさめぬとは不愛なり　人もすさめぬ櫻花云々駒もすさめすかる人もなし皆不愛の心なりされはすさむとは愛する義也手すさみなといふ此心なり

中々それならばおかしからまし　秘今夜の女も源の心にあひたれども中々とは世なれぬよりはの心なり弄同

二條太政大臣（此時はいまた右大臣）
- 弘徽殿太后（此時は女御　朱雀院御母）
- 帥宮北方（螢兵部卿也　源の御弟也）
- 致仕大臣北方（四君也致仕大臣此時は頭中將也）
- 五君
- 朧月夜尚侍（是は六君也六君とあれ共一人は見えす）

六は春宮に　箋此朧月夜なり

たづねんほどもまきらはし　いづれとさだめがたき心なり

さてたえなんとは　秘女のさまなり

ことかよはすべき　河言かよふなり
心のとまるなるべし　草子地なりきりつぼへかへり
給てつくづくと色々におもひ給源の心中なり
まづかのわたり　河葵上のあたりの事なり　花
には葵上の事と見え侍れど葵上は室家の事なれは　河海
いふに及ばす藤壺中宮の御事をいふにやそれもた
だならねはその中にもおくまりたる心むけはみゆ
べきなり　弄左大臣のあたり葵の方のありさまの
おくふかき事なり源の心ゝ善悪をはよく分別し給
ふ事みえたり花鳥に藤壺わたりのさまをいふなり
云々但末に藤壺の事を思ひ給ふしからば葵の邊然
べき歟秘同　箋云河の説然べし花の義如何
その日はこえんの事　弄箋云秘に後朝御遊なり　花
後宴といふ名目は男踏歌の後二三月に弓の結ある
事を云それを花宴にとりなすなり
さうのこと　秘源の所作し給ふなり
ふちつほは暁に　秘うへつほねにまゐり給ふなり
かの有明いてやしぬらんと　箋秘に右大臣の女だち
物見に參給ひしが歸り給ふべしと思ひてうかがは
せ給ふ也弄同　朧月夜の君也心もそらにて思ひ

いたらぬくまなきなどいへることは有明の月に縁
あることはなり
御まへよりまうて　秘に源の退出のみきり惟光良清
兩人まゐりあひて樣體申すなり弄同
たゝいま北のちんより　箋花に中の重の北陣は玄輝
門のかたなり
御かた／＼の里人　花宴の物見の爲に方々より參り
つとひたるを云也
四位少將右中將などの　箋秘に朧の兄弟だちなり
弄右大臣の息なり
こきてんの御あがれ　箋花に内より退出し給事を云
むねうちつぶれ給ふ　源の心也
ちゝおとゝ　秘右大臣の聞給ひてこと／＼しくし給
へきもいかゝとなり
よく見さだめぬ　秘色々思案し給ふなり　朧のさま
源の心にあひたれどもなほよく見定たくおほすな
り
さりとてしらであらん　此まゝ一たびにてはやみが
たしと色々に思ひ給ふなり
ながめふし給へり　源のさまなり　是はいまだ源の

内裏にての直廬桐つほにての事なり
ひめ君いかにつれ〳〵ならん　花紫の姫君の事なり
秘上の詞につく〳〵とながめふし給ふとあるによ
りて姫君の事をさ思ひいたし給ふなるべし弄同
日頃になれば　姫君を見給はて程へぬれば屈してや
あらんとおほしやるなり紅葉賀巻に久しくおはせ
ぬ時はくしなどし給へりとなり
かのしるしの扇は　秘とりかはし給へる扇なり　箋
檜扇也　河云檜扇の南方のうへ二枚づゝをうす様
にてつゝみていろ〳〵の糸にてとぢて末にあはひ
むすびに結ひたるなり五重の扇も同じく五まいつ
づつゝむなり　花櫻のうすやう表白く裏紫なり
私花の本にはすはうとありこきがたにとはこき紫
の雲をかきて月をいたしたるにや云々箋云櫻かさ
ねのうらのこき紫　私こきすはうなるべし其かた
に泥霞を引て月を出したるべし花に雲といへる不
審一本三重がさねとあり青表紙には櫻かさねにて
とばかりを用　凡扇三重も五重もあり　花手習巻
に髪は五重の扇をひろげたるやうに云々　河清少
納言枕草子なまめかしき物三重かさねの扇五重に

なりぬればあまりあつくて　秘檜扇なり抄に見え
たり他本三重かさねとあり青表紙には三重の字な
し　弄三重かさねは三枚を別々につゝむなり
ゆゑなつかしう　弄常の物をもゆゑなつかしうもち
ならしたると人の心つかひみゆべき事なり
草の原をはといひしさまのみ心にかゝり給へば　秘
前の朧の歌の事なり
源よにしらぬ心ちこそすれ有明のつきのゆくへをそら
にまかせ(へイ)て　秘源氏のうたの中にも秀逸なり五文字
殊更妙なり云々花鳥に色々あり其體面白し　花私
の義を註す略之　箋云明はてゝよりは有明の月の
行衛はいづくともしられざる也まかへてとは行衛
をうしなひたる心なり世にしらぬは忙然と是非を
わきまへぬ心也面は月をしたふ義也下の心は朧月
夜誰ともしらす其人ともわかぬはたとへば有明の
月の行衛なきがごとくとなり　この世にしらぬは
かならずしも世の字の心にては有まじきやうに申
されしよにあふ坂の關はゆるさじの歌のたぐひに
ぞ申されし　花吉水僧正の歌に「有明の月の行衛
を眺めてぞ野寺の鐘はきくへかりける　此歌をと

りてよみ侍るなり源氏は詞をも歌をもとりてよむべきなり俊成卿も源氏見さらん歌よみは無念の事といへり又花宴卷はことにすぐれて艶なる卷なりとも申給へり

かきつけ給ひて　箋云かの扇にかきつけ給ふなり

おほい殿にも　秘葵上なり

わか君も　箋秘に紫上なり

あかぬ所なり　秘不足なる所もなくなり

をとこの御をしへ　草子地なり我御心のまゝにをしへなさんとある詞をうけてさやうならはあまり男かたなとへなれたるやうにもや有るべきと也　箋物語評也亂りかはしき事もやましらんと心もとなくとなり後の葵の卷の新枕の事書出すべき序の詞也

れいのくちをしう　秘まへ〳〵はつよく源をしたひ給ふ事前の卷に見えたり

わりなくはしたひまつはさす　是ははや紫のおとなしくなり給ふけぢめを見せてかけり

おほい殿には　葵上かたへ二條院よりおはしたるなりおほい殿にも久しうなりにけるとかきてされと先二條院へかりそめにおはしてさて葵上へおはしたるなり前に大殿の事をかけるにふくませて二條院より大殿へおはしたる事をばかゝぬが面白き也

つれ〳〵と　葵の對面し給はねは源のつれ〳〵なるなり

さうの御ことをまさくりて　秘手すさびにそろ〳〵と引なり

やはらかにぬる夜はなくて　秘河に催馬樂貫川律歌なり　箋聞に花の義なり瀬々の手枕は浪枕なり浪荒くてぬる夜なしと云ことを葵上のやはらかならぬ心さまをよせてうたひ給ふなり　花鳥におとゝもたり給と次の詞にありおやさくる妻と貫川の曲を思ひよせたりと云々　私其義に及ざる由秘にのせらる　秘葵上の心もとけ給はぬをおほす也花鳥におやさくるつまとあるを思ひよせてかきたりと云々さまてはあるましき歟云々弄同　私箋聞にはおやさくるつまを花鳥の義を用らる秘には其義に及ばざる由のせらる又聞書にはおやさくるつまとは心はちかふと云々但おやさくそつまをこゝへ合てみるへきならば葵の父おとゝの只今おはしまし

たるかそとさまたけになりたるやうなるをいへる心なるべし然はおやさくる妻を合せずして見る義可然歟　河催馬楽貫川ぬきかはのせゝのやはらたたまくらやはらかにぬるよはなくておやさくるつま以下略之

一日のけうありし　箋花に花の宴の事秘同　與ありしなり

こゝらのよはひ　秘許々等也

明王の御世四代　箋河海にくはしく侍る但此物語のうへにては年久しく年﨟つもり給ぬるとか可心得なり代のかすにかゝはるべからずと云々　箋河に周文王武王成康に擬すと云々本朝に於ては陽成光孝宇多醍醐なり貞信公元慶四年誕生延長まで已に四代なり于時左大臣なり尤准據に足る者乎又貞信公は延長八九廿二朱雀院受禪之日蒙関白詔此引入も澪標巻以前は攝政の號無之歟延喜御代も内覽の臣許にて無関白號なり　一説忠仁公に准す云々然者淳和仁明文徳清和

文ともきやうさくに　花鳥きやうさく　弄聞にきやうしやく又はきやうさく河に景迹介にあらはなる心なり或云さとくしる心也以下略之　介の文の景迹の二字をば形迹と釋せり人の形迹のすくれたるを云りこゝのことばのきやうさくも文とものすくれたる心にいへるにや又景迹は思ひやるといふ心にも用たり推量といふ詞に景迹ともかくなりそれも人の行跡を見てぬしの賢否をしる心になれば心は通ずるなり大かた心得にくき詞なり心をやりて見るべきなり　弄ほめたる詞也おしはかる事をも云詞なり　秘詩ともをほめたるなり勝れたる作なり　箋秘に日本紀天武紀下十一年八月癸未與に景迹行能　箋云日本紀に六はせと訓するうへは作文共の心はせすくれたるをいふなり　花介の文に景迹の二字を形跡と譯す人の行跡の勝れたるを云と云々

みちみちの物の上手　秘源のよくしりてめし出し給故なり云々弄同

おきなもほと〳〵　秘別勘に殆は將の心なり箋同

箋云花宴に殿上の舞は邂逅の事なれば承りても心のうかるゝやうなりしと也猶口决あり花に頭中將などまひしにつきて父のおとゝも舞たき心の有し

となり猶別にしるす事あり
ことにとゝのへおこなふ　秘源の詞なりさもなきよ
しなり
おほやけことにそしうなるものゝし　弄奸也かたむ
心なり朝にも出つかへぬ物の中に上手なとをたつ
ね出給へるとなり箋云奸の字わたくしすると註す
　秘そしうは奸字かたむ心なり公方の御用などに
は出つかへすして隠れ居る者の中に物の上手なと
あるをは召し出し侍るとなり　箋聞そしうは奸也
かたましきなり疎路なる心なり聞書同　河おほや
けことかたむものゝしともを云奸なり云々いと上
手ならねどもおほやけわさをしわたす心なりかた
ましくなとやうの詞也云々
桃花苑なん　箋云御衣を給はらし事は御面目の由被
申なり　秘頭中將の舞給ひしを源のいま褒美し給
なり
ましてさかゆく春に　花とてもの事におとゝのたち
出給て袖かへす所をものこし給はましかは一しほ
めてたき後代の例ともなりぬべきと申給ふ詞なり
弄まして左大臣の舞給はましかはさかえたる世の

面目なるべしと大やけの御かたになりての給ふな
り
秘おきなもほと〳〵舞出ぬべきとありしほとにと
てもの事に大臣の立出給はゝ桐壺の御代のめいほ
くなるべき物をとなり　箋云此大臣出仕なき事無
念となりとてもの事に一上（イチノカミ）の出仕ならは一座の光
美なるべきとなり口決あり「いまこそあれ我もむ
かしは男山さかゆく時もありこしものを　私云此
箋の義不審立出給へらましかはと云を出仕の事に
註せられたり其日左大臣の出仕なかりしにはあら
す源氏君のまひ給へる事をいふにのとかに袖かへ
す處をひとをれけしきはかりまひ給へるにゝるへ
き物なくみゆ左のおとゝうらめしさも忘れて涙お
とし給とあれは出仕し給へる事は必定也立いて給
へらましかはとなり諸抄の義も舞に立出給はゝと
いふ義なり箋の義はしはらく推量するに延長四年
二月十七日御記に曰花宴日也今日遣使召常陸太守
貞直（眞イ）左大臣云々有レ所レ煩不參云々左大臣不參の事
有此事を思ひいてゝかやうに註せられたるかとそ
おほゆる

辨中將なと　箋秘に兩人也葵上兄弟也辨の中將はわ
ろし　辨中將は左大臣息なり或本に中將辨とあり
兩人にや
かうらんにせなかをしつゝ　かうらんのまへせなか
をなしつゝなり
かのあり明の君　朧月夜の事云なり
春宮にはう月はかりと　箋秘に六君朧なり東宮にま
ゐらせ給事すてに來月とあり
おほしみたれたるを　朧の心なり
をとこ君も尋給はん　箋秘に源なり
いつれともしらて　さたかにしらては如何なるへし
ゆるし給はぬあたり　箋秘に弘徽殿方なり
やよひの廿餘日右大臣の弓のせちに　箋弘徽殿の父ニイ
河弓結也　踏歌後宴弓結也　延喜七年二月廿七日
御記云踏掌所奉仕踏歌後宴云々御射場中務卿親王
左大臣以下侍更召殿上公卿等預召立書別如例御賭
物臣下賜令弄踏歌後宴なり弓をいる事あり一勘定
れる事にはあらす藤花の時分の宴なれはかくのこ
とくとりなし侍るなり　箋云惣別は踏歌の後宴に
弓結ありそれはおほやけ事なりこゝの心は私に小
弓遊ありし其結に藤宴をせらるゝなり箋聞に弓を
射たる結願なとのやうの義なりおしあけにの心歟
秘仙源云結はつかうて射る心云々　今年右大臣の
亭にて踏歌の後宴ある也私の宴例考へしとあり
やかて藤のえんし給ふ　河飛香舍藤花宴有興延喜二年三月廿日
左大臣飛香舍藤花下有獻物事かイ
うつほの物語云三月十日はかりに藤壺に藤の花の
賀したまふ　おほやけ事になすらへて右大臣の亭
にて藤花の宴あり又天暦三年四月十二日飛香舍藤
花宴には和歌管絃等あり
花さかりはすきにたるを　櫻なりなへての盛は過た
るなり
外のちりなんとやをしへられたりけん　花古今の歌
に外の散なん後そさかましとよめるは花にいひを
しへたる心なれは歌の詞になき事をも心をとりて
かくのことくかけるなり定家卿の歌はおほくは此
物語よりいてたりと見え侍る「いこま山いさむる
嶺にゐる雲のうきて思ひのきゆる日もなしとよめ
るは本歌の雲なかくしそといへるは雲ゐさめたるなイ
心なれはやかてこゝろをとりていさむる嶺とよめ
るなりこの詞に相似たるやうなれはよりもつかぬ

事なれと筆の次に申侍るなり大かた源氏なとを一見するは歌なとによまんためなりよまむにとりては本歌說を用へきやうをしらすしてはいかゝと思ひ侍れはいときなき人のためにしるしつけ侍るなり　箋云「見る人もなき山里の櫻花外の散なん後そさかましと云は花にいひ敎たると云義にておさへて書也定家卿い駒山いさむる嶺に云々雲なかくしそと云はいさめたる心なれは如此用るなり此歌の取やう外の散なんの引歌を手本に取るなり已上花已上箋　秘面白き書さまなり古今の本歌後そさかましとをしへたるをもて書たる詞也花鳥に見えたり弄同　私云此取やう尤絶妙なりとそ心を付へし

つくり給へる殿を　下の殿

宮たちの御もき　花河弘徽殿の御服の宮達なり源の姉妹なり弘徽殿の御腹の女宮たち御裳着右大臣の家にて有し也箋秘　私御もきの事はこれより已前にありし事を云なり

はなく〳〵とものし給ふ　右大臣方の體なり　萬事きらく〳〵しくもていてゝ人の目おとろくやうになりこのましきさまそとなり

とのゝやうにて　右大臣かたのやう體とそ

おはせねは　秘源の事なり右大臣内裏にて對面の次兼約たりしかとも今日おはせぬなり

四位少將　箋藤大納言の弟右中辨の兄

右大臣 我宿の花しなへての色ならは何かはさらに君をまたまし　秘おとりたる歌なりわか宿の花のなをさりならぬよしなり　箋云おとれる歌なり作者の心をつくへき所也云々　箋聞我宿の花を隨分と自慢のやうに詠せりさてしたりかほなりやとみかとの仰られたると末の詞にあり聞書此歌は我やとの花世間の花のやうならは何かはさらに源をまたんまたすともおはすへし花をはなへての人の賞する物なれはなり我宿の花をはなへての花のやうに見所はあらしとをしはかり給うてこそまつにもおはせさるらんと我宿の花を卑下して源をうらみたる也さりなからおくれて咲櫻とある時は世間に花の稀なる時分なれは自慢のやうにきこえたるなりかやうの所か大事也これによりてみかとはしたりかほなとの給ひし也自慢と御らんしたるなり作者心を付へし云々　私云此兩義なへての色ならばと云義見分

て心をつけかへたり初の義は普通ならすすくれたる花なれはこそ源をも待申せとなり後の義よのつね花をは人の賞する物ちやそおしなへてのにてあらはまたすとも源にはおはすへしと世間のつらほとの花にてもあらしとおほしくたしてこそおはせさるらめとの義なり案之花しなへての色ならはとは普通ならすすくれたるといへる心にやとおほゆ其故は今日源を請待申たく思ふ故に庭前の花をすくれたるといひなして是を御らんしにおはせよと申にこそ使をも参らすれ普通の花ならは源の御ために御らんせさせかたきそと計略していへるにても源を請せんとのかこつけなれはとかなかるへし是右大臣の自慢とはみるへからす源を請し申さんとの計略とおもふへしされとも御門の御覧してはしたりかほなりやとわらはせ給へるは自慢のやうに御らんしたると心うへし此義然へくやと存す如何

九禪弄此歌は前に櫻二本はかりと書て此藤の花のたくひなき心をもて源氏に賞翫してよみたる也如此見なせは我宿へかとあるまし右大臣の心聞えかたきなりこれおもしろきなり永正十一年宗仲宗祇説とていへり　私云此義弄花両本不載之如何

上に奏し給ふ　此歌を源の御門へ御目にかけ給ふ也

したりかほなりやと　御門御らんして我宿の花をはめたるやうなるをわらはせ給ふなり　弄右府の歌に我宿の花をほめたるやうなるをわらはせましますなり歌を人のかたへつかはす事故實あるへき事なり歌の心は源氏の君を賞翫の心なるへし

わさとあめるを　御門の御詞なり

女みこたち　箋源の御兄弟兼姉妹たちなり　弄源氏のおとゝいの女宮達もおはする所なれはなへてのさまには思はしと源にをしへ給御詞なり右府は源と御中よからぬわたりなれはかくなくさめ仰ある詞なり　箋源と右大臣と御中よからぬ聞ついてかてらによそ〳〵しからすし給へと御教訓あるなり御門の御子たちをそたて給ふ弘徽殿なれはおしなへてのやうにはおほすましきとなり

櫻のからのきのなほし　弄秘に花に見えたり　箋花に行幸巻に櫻のからのきの御なほし今やう色の御そひきかさねてしとけなきおほきみすかたいよいよたとへんかたなし箋云今案此物語に二所同し御

様の事をかげりからの木は地の色はさたまらす又は色々の糸もしは一色にてもおりたる物なりから織物二重おり物のことし唐装束とて著する事ありそれは下かさねうへのはかまなと唐の綺を用るなり花同 花 櫻のからのきは表白き唐の綺にすはうのうらをつけたる也 河 直衣布袴 例あまた出せり略之 常の袍に指貫にて裾を引をは袴とはかり云なり

しりいとなかくひきて 下襲のしり也則裾の事なり直衣布袴と云出たちなり 弄 直衣に下襲してこれを引給ふなり 箋 花に西宮上臈者直衣の下着下襲隨便不二常事一云々今案しりとは裾なり裾は衣のすそをいふなり袍に下かさねをかさぬるをは布袴といふ上下用之事なり直衣布袴は依ㇾ時依ㇾ人事なり帯は丸鞆也或革帯ともいへり晴の時は著二蒔繪太刀一云々

みな人はうへのきぬ 箋 秘に各は袍をきるなり袍とは常の装束なり是を位袍と云其位にしたかひたる色をきるなり

あされたる大君すかた 箋 秘にしとけなき姿なり

弄 親王の姿のやうなりと云ふにや又直衣姿を云にや大人の姿とほめたる詞なり 花行幸巻にしとけなき大きみすかたとあり然らはあされたるもしとけなき心にや常の袍に指貫にて袍を引は尋常の事なり直衣に裾を引事普通ならすしてしとけなきすかたなるへしあされたるはされたるといふも其心たかはさるへし大君は王の字なり大人のすかたなどいふ心なり河の義同し仍略之 又直衣すかたを則大きみすかたといふ説あり 私云此義不用歟箋にのす

いつかれ 河 寵厳 いつきかしつく心也

中々ことさまし 秘 草子地なり 前の詞におはせねは口をしく物のはえなしとおほしてとありさてかやうにておはしたれは中々興もさむるほとゝ源のさまをほめたるなりはえなしと前にいへるにつきて中々ことさましと云歟

ゑひなやめる 秘 そら酔なり

女一宮女三宮 箋云女若菜に一品宮と申是也 女三前齋院なり葵に齋院に立給ふ此二人弘徽殿の御腹なり

こなたのつま　藤は寝殿のかたへちかきなり藤はと
あれは櫻はあまたにある也
袖くちなと　花　榮花物語に枇杷殿の大饗に女房の袖口にこと〳〵しく出されたるを小野宮右大臣實資難せられし事ありいまの物語にも弘徽殿の女御のかとめい給へる御かたにて袖口とも目にたつはかり出されたるを源氏の君はふさはしからす思ひ給ひてふちつほわたりにはかやうにこと〳〵しくはし給はぬ物をと思ひあはせ給ふ也　弄　踏歌の時の出しきぬなとのことくことさらめきたりとよろしからす思ひ給ふなり　一勘云袖口とは簾の下より女房のきぬの袖をいたすなり今の世にも大饗なとの晴の儀式の時はいたしきぬあり又車よりも袖をいたすなり　秘　けふはうち〳〵なる事なるをあまりにこと〳〵しきさまとなり
ふちつほわたり　秘　前にかのわたりのありさまとありしは葵上の邊と見るかよきなりこゝにて藤つほわたりといひ出したれはなり　河　ふさはしからすとは不祥なり日本紀によからぬなり
なやましきに　河　源の詞なり

かしこけれど　かたしけなき也おそれがましき心歟
かけにもかくさせ給はめ　箋　御兄弟をかこち給ふ事なり　花鳥に忠仁公の例を引伊勢物語「咲花の下にかくるゝ人おほみありしにまさる藤のかけかも
秘　花鳥の説おもしろし但こゝは唯姫宮だちをかこちたる義尤然へし云々　花　伊勢物語咲花の下にかくるゝは業平行平のもとにてかめにさしたる藤花を詠すと云り心は忠仁公の藤氏のさかえを思ひよそへてよめるよし詞に見えたり故に今二條のおとゝを忠仁公になすらへてかけるにもかくせさせ給はめと源氏のの給へるも箋の花にかけたる詞也
よからぬ人こそ　秘　こゝにさふらふ女房の言なり
いやしき人こそゆかりむつひはすれどなり箋同
あなわつらはしとはこゝにさふらふ女房の言也
おしなへてのわかうとにはあらず　源の心也弘徽殿のいもうとどもこゝにあるべし
そらたき物　箋云とこ夏の卷に見えたり弄　秘　此殿のありさまを云なりそらたき物の樣もけしからぬとなり床夏の卷にもみゆ悉皆人の用意をかけり
さしもあるまじき　秘　この朧月夜の事なり　こゝに

ておしあてに物などの給ふとていづれの君としら
るべきにてはなけれどもと云詞也
扇をとられて　からきめを見る　箋催馬樂石川いし川
のこまうとに帯をとられてなり扇とうたひかへ給
へるはとかめさせんの心なり　聞書賀茂の名所な
り昔高麗人の住ける家有し也　花源氏君扇のぬし
をしらんばかりことはうたひかへ給ふなり扇のぬ
しはやかて心得べき故なり　私猶花にくはし
さまかへたる　秘かやうにいふは一向扇の事をしら
ぬ人なるべし　箋帯を扇といふを不審する人ある
は一向前後もしらぬ人ぞとなり　私云さまかへた
るとは帯を扇といひかへたる事を云　いはれをし
らぬ人は源氏君のはやあやまり給へるぞと思ひて
さまかへたるこまうとかなどとかめたるなり
いらへはせて　箋六君なり此人と推し給ふなり秘同
花扇とられたる人はゝや聞しりて打なげくけはひ
の色にあらはれたるなり源はいひすましたると思
ひ給ひてその人のかたによりゐて歌をよみかけ給
なり
源梓弓いるさの山にまとふかなほのみし月の影やみゆ
ると　秘弓の結なれば縁あり一目の戸ぐちを云な
り　箋弓の結に縁あり　河側見月　花弓の結の目
なれば梓弓入さの山とはいへりほの見し月は有明
の影のほそとのゝ戸口を思ひ出したる心なり
何故かと　秘何故にまどふぞとなり
えしのはぬなるべし　秘さては源のわれをしり給ふ
と朧の思ひてえしのひ給はぬなり　箋云草子地な
り朧のおもからぬ心をかきあらはすなり
朧月夜こゝろいるかたならませば弓はりの月なき空にまよ
はさらまし　河釋云一旁曲一旁直若張弓云々　花頃
はやよひの廿日あまりなればやう〳〵下弦の弓
はり月になる頃なりまよふといふは心にいらぬ故
にこそあれと源の歌の中の五文字にかゝりてうら
みたるなるべし　秘ふかく心に入たる事ならばた
づねまとはさらましとなり　前の歌のまどふ哉と
いふにかゝりたる返歌也朧は天性歌よみ也弄同
聞書此中の五文字にかゝりたるとかめやう前の草
の原も同じ格也面白し　箋云眞實心にいる事なら
ば惑ふ義はあるまじきなり源のまどふ哉とあるを
とがめてまどふとあるはうはの空なる心からとな

り頃は廿日あまり下弦の月なり
たゝそれなり　箋秘にほそ殿にての聲色きゝしり給へれば此人と知給ふなり
いとうれしき物から　花草の原をはとはしとや思ふといひし其人の聲とは聞なせり　うれしき物からの結語おもしろくかきなせりかつ〳〵うれしくはあれともいまた六の君とはたしかにしらぬ心をふくませたり　箋云花に草の原の君そとは凡聞なしたれとも六君にや又もし別人にやたしかに知給はぬ心也云々花説さもありぬへし此結語誠に物語の眼也源氏の心にあくかれて有明の行衛を尋知たき心なれは其人此時はたしかに知ぬるは本意のうへの本望なり　されとも女の身にて人にこそよれかろ〳〵しき事やと心に淺く思給ふよしなり源氏の性萬事においてかくのことし眼をつくへし　秘花鳥の説面白し但師説此結語は返歌をし給ふ事はうれしくはあれとも女の身にとりてはちとかろ〳〵しとおほしたるなり是源の性なりいつくにも此心あり　弄尋あひたるはうれしけれとも女の返歌すへき事のさまは然へからすと思ひ給心あれは物からといひのこしたり是又源の性なり花鳥説も其故あるにや五六君の間未分明云々此外心ありいつれも面白き歟此時のさまうれしけれとも猶あちきなく物思ひなるへき心をこめて物からといへるにや云々感あるにや　聞書はうれしき物からかろ〳〵しきとなり箋聞には五六君未分明事云々さて箋聞にも青表紙の義退て思ふ時はかろ〳〵しきか難なるとなり師説也云々　私云うれしき物からかろかろしきが正説なり花に五六分明ならねと弄の義にいよ〳〵物思ひのますと云は異説なり然ともいつれも面白しと心得へし　箋秘に凡源氏物語の中にも此巻すくれたるとなり六百番判にも紫式部は歌よみの程よりも物語かく筆は殊勝の上手はなの宴の巻はことに艶なる物なり

岷江入楚第九　葵

秘源氏十九歳の卯月より廿歳の年中の事みえす

廿一歳

源氏大將事始見此卷致仕大臣子爲三位中將

源氏大將爲東宮御後見事 東宮者冷泉院也

前坊姫宮爲齋宮 齋宮者秋好中宮是也

齋宮卜定事物語の中にたしかならすといへとも去年卜定事あるへし三年齋なはりて伊勢へくたり給ふゆゑなり

葵上懐姙事

弘徽殿后腹女三宮立齋院給事

四月齋院二度御禊事

大將君爲　勅使參議供奉事

葵上見物與六條御息所爭車事

殿上將監勤大將假隨身事

賀茂祭日紫君參會木事

與紫上同車見物祭事

源典侍折扇書歌送源氏車事

葵上煩物氣事 六條御息所生靈

六條御息所同煩心地源氏君出訪給事

齋宮可有兩度御祓事

葵上生男子事 夕霧大將是也

八月廿餘日葵上俄卒去事 廿五歳

葬送鳥部野事

源氏君着妻室服事

九月齋宮入右衛門府事

六條御息所送付菊枝文事 源氏君有御返事

同月齋宮入野宮事

十月三位中將着姉服參源氏方事

源氏折撫子花以若君御乳母宰相君獻宮御前事

源氏與葵上女房中納言君等物語給事

葵上中陰畢源氏君始出仕事

大殿於源氏御曹司見手習歌等給事

源氏參院并中宮給事

着無文袍卷纓事

還二條院改服給事

妻服三ヶ月歟葵上八月卒故十月除服歟但九十日未滿除服あるへからすといへとも西對へわたり給ふによりてしはらく吉服を着し給也

廿二歳 大將

源氏君與紫君始有密通事　女房年十四

正月一日參處々給事

參大殿献消息於宮御方事宮御方は葵上母宮也

葵　以歌爲卷名

河はかなしや人のかさせる葵故神のゆるしのけふを待ける源内侍へ　秘卷名源内侍與源氏贈答の歌によれり又賀茂祭の事を詮とする也源氏廿一歳より廿二歳の正月までの事有廿歳の年の事物語のおもてにみえす猶花にくはし　私云源十九歳の四月より廿歳の年の事みえす弄の義略之　花歌をもて卷名とせり源廿一歳の事此卷にあり花宴は源十九歳の時の事をかく故に廿歳の事は物語にかけたる成へし舊說に此卷を花宴の同年の事にいへりこれにつきて六の疑あり一疑云二條大臣の藤宴は三月下旬の事なり此卷の齋院の御禊は四月なり兩月の間いくはくの日數もなし然に朱雀院受禪冷泉院の立坊源氏君の任大將齋院齋宮の卜定等條々の事いつのまにおこなはるべきぞや二疑云花宴卷には源氏宰相中將十九なりことしならは源氏十九歳にて大將に任し侍へし然るに若紫卷に廿に一あまりて宰相にて大將兼給ふといへるかの卷の詞に相違あるへし三疑云花宴年は紫上十二歳なり葵卷に新枕の事あり十二歳にて夫婦のふるまひ有へき事おほつかなし醫書には女子は十四歳にてはしめて天癸いたれは男事ありとみえたり天癸とは月の事をいふ歟四疑云花宴のとしは冷泉院二歳歟澪標の卷に春宮にて十一歳の時御元服有とみえたれは二年の不足あるなり五疑云齋院の御禊は二度あり初齋院に入給はんとて御はらへあり又紫野の野の宮に入給はんとて御はらへあり此卷の御禊二度の禊なり其證これおほし然は初度の禊同月に有へしや同月の事は其例なき故なり六疑云伊勢齋宮も一代に一度立かはらせ給ふ秋好中宮の齋宮にたち給事は朱雀院受禪の後の事なりそれに此卷に齋宮は去年うちへ參り給ふへかりしを樣々さはる事ありて此秋入給ふとありされは朱雀院のゆつりをうけ給ふ事は葵卷より以前の事と知るへし此六ケの疑にて源氏の任大將は廿一の年の事と定侍るなり

世中かはりて後　聞書御即位の事こもる也　河桐壺帝の位をさらせ給事也弄秘同　花桐壺の位を朱雀へゆつり給事也此事花宴の年ならすは去年の事なるへし但紅葉賀卷にみかとおりゐさせ給なんの御心つかひちかくとあれは去々年花宴の後夏秋の事た

るへきにや　聞書此物語には御即位大嘗會なとの事をかゝす仍宗祇法師一禪へ尋申たる一冊ありとそ

よろつ物うく　秘朱雀院の代始なれは二條大臣弘徽殿の女御なとのよろつ御まゝなるへし源の父帝の御代にてなき故よろつ御心におほすまゝにもなきこととものなり　花物うくは藤つほの中宮のひたすらたゝ人のやうに院にそひさふらひ給へる事をいへりと云々　私云此義如何

御身のやむことなさも　聞書大將に成給ふ心こもるなり　花大將に成給ふ事也　私云宰相に一兼大將也　大將は顯職なるなり隨身なとさたまりて召具するなりさてかる〳〵しき御忍ひありきなともなりかたきなり　弄此詞より大將とみえたり　榮花物語卅九　大將には三位中將宰相にならせ給て大將かけさせ給つ宰相の大將ときこえさするいとめてたくいまめかし　後二條關白師通　承保四年三廿七任三木同四月三日兼左大將本には已上勘物也

こゝもかしこも　秘六條御息所なと也
私云こゝもかしこもといへるは忍ひ給へるかたかたなり

なけきをかさね給むくいにや猶我につれなき人　花つれなき人は藤つほ中宮也　秘弄同　河古今「われを思ふ人を思はぬむくいにやわか思ふ人のわれをおもはぬ　私云源の御忍ひありきもたやすからぬやうになりて忍ひつゝかよひ給ふ御かた〳〵へもうとくおはすれは源へうらみのある人おほくあるなりそのむくいにや又源へ藤つほのいよ〳〵つれなくおはするといへるなり猶われにつれなきといへる猶の字面白し

今はましてひまなう　是より院と藤つほの御あひたの事を云

たゝ人のやうにて　秘御脱屣ありてたゝ人のやうに藤壺にそひおはします故に御隙なきと也弄

今きさきは　秘弘徽殿也　花朱雀院御位につき給ふゆゑに弘徽殿女御を皇太后宮と申也弄同　聞書此卷より前に立后なるへし　私云紅葉賀卷藤壺女御の中宮になり給へる所に春宮の御代いとちかう成ぬれはうたかひなき御位なりと弘徽殿へみかとの仰られしは此事なりかやうに院の藤つほの所に

ましますを心やましくて弘徽殿は内裏にのみさふらひ給ふと也
心やすけなり　秘　藤壺はならふ人なくてまします也
御あそひなとを　秘　院中をいふ也
いまの御ありさましも　御位にては勿論覺しめすままの事也院に成給ひては又萬御心やすくふるまはせ給へはいまの御ありさましもとはいへり
たゝ春宮をそ　花　冷泉院を東宮と申事こゝにはしめてみえたり立坊は受禪の後の事なるべし　秘　冷泉立坊事前に有へし源廿歳の時の事なとにや　私春宮坊は各別にあれは細々見たてまつり給事有へからす戀しうとは院中宮いつれもなるへし　聞　此詞のうつりは御門の御心とみゆ云々
大將君によろつ　冷泉院の御うしろみの事を源へ仰らるゝ也　源此時三木の大將なり若菜卷に廿に一あまりて大將かね給とあり參議大將を兼たる例河海にくはし 榮花物語廿九　私云前に注する間略之二條關白事なり　花　源氏を大將といふ事これよりはしまる大將は參議より大臣までも兼帶する也　河　大將天平神護元年止近衞府　平城天皇大同四年四月廿二日改近衞大將　藤原朝臣内麿 大納言眞楯男 爲左近衞大將改中將大將坂上田村麿爲右近衞大將

參議兼大將例

藤原房前 中衞大將　同豊成 中衞大將從三位葛田丸男　此已下十八人略之
藤原常行 右近衞　同伊尹 左大將　河にのする所十四人中間略之

かたはらいたき物から　聞　書源の心中也　秘　藤つほはかたはらいたしとおほすなり　私云此義如何
まことやかの六條のみやす所の　弄　記者の詞なり聞及ぶ事のやうにかけり秘同　秘　御息所とは御門御子持給たるを申也
前坊の姫宮　秘　前坊とは東宮を辭退し給ふを申小一條院なとのことし坊とは東宮を稱するなり花同
花　秋好中宮に前春宮の御むすめ母は六條御息所なり齋宮卜定は去年のことなるべきにや此秋野宮に入給ふよしみえたり則又明年群行の事あり　秘　此前坊桐御門の御弟也
齋宮に爲給しかは　秘　秋好中宮なり代の始には必齋宮かはりたまふなり去年朱雀院の代の始に卜定して齋宮を定られて今年野宮に入給ひ明年くたり給

ふべき也　卜定ありて三年めにくたり給べきなり
此外秘に同し
齋宮事
河崇神天皇六年以天照太神託豊鍬入姫祭於倭笠縫邑以大國魂神託停名城入姫令祭垂仁天皇廿五年丙辰三月依神宮御託宣奉祝伊勢國五十鈴川上以第二皇子倭姫命令着御祭給是齋宮始也　景行天皇庚子廿年第二皇女奉仕天照太神　延喜神宜式曰凡天皇即位者定伊勢太神宮齋宮齋王仍簡内親王未嫁者卜定若無内親王依世次簡諸女王卜之
大將の御心はへも　秘六條御息所を源のすさめたるなり　私御息所の心なりさきの詞にこゝもかしこもおほつかなさのなどありしか御息所なとへも疎遠なる事みえたり
をさなき御ありさまの　秋好のをさなくおはする也
ことつけて　かこつけてなり
くたりやしなまし　秘源の御心のおろそかなれは此齋宮に具してやくたらましとおほすとなり　私云かやうに御息所の内々おほしけるに不慮の事ありて又葵の物のけ日々にあらはれ給へる事ありし故かた〳〵伊勢へつひにくたり給なり
院にもかゝる事　桐みかとなりはしめて院とかけり　私云かゝることゝは源の疎遠につきて御息所の伊勢へやくたらんとおほしたつ事なり
故宮の　秘父みかとの源に御教訓也故宮は前坊也みかとの御弟也
おほしときめかし　前坊の御息所を御寵愛ありし事なり
おしなへたる　源のよのつねの人のやうにもてなし給ふ事をの給也
いとほしき事　事と句をきりてみるなりこれはかろかろしくもてなすなるかいとほしき事一つ又齋宮をもかくいふやうの心と心得へし
齋宮をも此みこたち　秘秋好をとみかとの御子たちのやうに御心におほすと也
いつかたにつけてと　何事につけても御息所へ源のかよひ給ふ程ならはおろかなるましき事そとなり
心のすさひにまかせて　かりそめなるやうになと申かよひ給ふ事はあしき事なりあるましき事なからせめて懇にも思ひ給はゝ然べきなりかろ〳〵しく

し給ふはいよ〳〵世の人のもとくべき事と也
わが御心ちにも　秘源の心也心中には領納し給ふ
也
人のため　又帝の御詞御親心也　桐帝の源にをしへ
給ふ御おや心なり六條御息所の物のけになり給ひ
し事にかなへり秘同
けしからぬ心の　花藤つほへのかよひ給ひし事なり
秘藤壺の御事をおはろげにても聞しめしてかと也
又かく院にもきこしめし　或抄御門の御教訓により
源の色々おほす心なり
人の御名もわが御ためすきかましう　源の心也　此
御中かやうに一旦の様にてうと〳〵しく成給へは
よのつねのあた〳〵しき好色の道のやうになるな
りそれは我かためも人のためもまことにいとほし
きなり御息所も源との間には似あはぬとなりいと
と〻やんとなしとは御門の仰につきていよ〳〵や
んことなくはおほすなり
又あらはれては　秘かやうに院にもかくれなくしろ
しめしたる事なからいまた忍ひ給ふ也
女もかけなき御よはひ　花みやす所廿九源廿一これ
をにけなきと云也　秘此次の年御息所卅にていま
内をみ給ふと也御息所は源に八のこのかみ也弄同
心とけ給はぬ　秘御息所の年のましたるゆゑに源へ
斟酌のあると也
それにしたかひたるさまに　弄源の心をいふ御息所
の御けしきにしたかふ（つゝみたるイ）やうにておもてにたてすも
てなし給ふを御息所はうらめしく思給ふ也　私云
もてなしてといふまて源の心をいふ
院にきこしめしいれし　私御息所の心にみるへし
ふかうしもあらぬ　私源の心さしふか〻らぬと也
おほしなけきけり　私御息所の心也　私院に聞しめ
しいれ世の人もしらぬなくなりたれと源のおもて
へはいたし給はぬなりそれは女のかたより年のち
かひたるを似合ぬ事とつゝみ給ふやうなるをそれ
に源のしなしておきて面へ出し給はぬなりそれを
さやうそと御息所のみ知給ひてわれに心さしふか
からぬ故にわか心とけぬけしきをかこつけ事にし
給ふと察して御息所の心中に思しなけくなり
朝かほの姫君　秘桃園式部卿の女なりつゐに源にし
たかはす始終よきほとにて有し人なり槿の名は斎

木の巻に人のかたりしよりの事也弄同　私云かゝる事をは六條御息所のうへをつたへきゝ給ていよいよ御心をさめ給となり源氏物語の一部の內貞女は槿姬と空蟬と也。
みにくしと　秘六條御息所の如くにてはとおほす故也
はかなきさまなりし御返なとも　源よりつねに御文なとはあるなりそれも大方の返事はかりは有しなりそれを大かたの返事もなきと也
さりとて人にくゝ　秘槿は源につゐになひき給はぬ人なりさるからはしたなくはあらぬ御もてなしを人にはことなると源もほめ給へるなり
大殿にはかくのみ　葵上也　かくのみとは御息所の事又槿姬君なとの事なり
あまりつゝまぬ　秘葵上の御方にはかやうの事をも源のふかくつゝみ給はさる故にかへりてさのみえんすへき樣もなきなり　聞書源のもて出たる好色の體也
心くるしきさまの　花葵上のつはりの事　秘懷姙也
めつらしくあはれと　源の心なり

たれも〳〵うれしき物から　これは父大臣母宮以下成へし
ゆゝしう　あふなく思ふ心歟
さま〳〵の御つゝしみ　御祈なとなるへし
おほしおこたるとは　秘御息所へとたえあるさまなり面白きかきさまなり　是は六條みやす所へいとゝたえおほきを云　聞書六條御息所へなりまた前に方々の事ありさやうにもみるへき歟　おほかるへしとは是も察してかける詞也
その此齋院もおりゐ給ひて　秘此齋院誰ともなし自然におりゐ給ふなり弄同　河齋院事　嵯峨天皇弘仁元年置齋院司以皇女有智內親王爲齋王（母交野女王）　延喜神事式云凡天皇卽位定賀茂太神齋王仍簡內親王未嫁者卜定　蓬生卷に侍從かゝよひまゐりし齋院もうせ給ぬとあるは此齋院歟
きさいはらの女三宮ゐ給ひぬ　秘弘徽殿の御腹花宴に御裳きの事有し人成へし桐壺第三の皇女御母弘徽殿の太后　花延喜式云凡定齋王畢卽卜定城內使所爲初齋院卽先臨川頭祓潔乃入　又云齋王於初齋院三年齋畢其年四月始將參神社先擇吉日臨流祓禊

云々　即廻歸使留野宮　又云凡齋王毎年四月中酉日參上下兩社祭　今案賀茂の齋院は卜定ありて後東河にのそみ給てみそきの事ありてすくに初齋院へ入給ふ初齋院とは大内の中に大膳職或は左近府なとを點してそれにて三年潔齋の事あり其年の四月に御社へまゐり給はんとて祭の前に吉日を撰て又御潔の事あり則紫野の野宮に入給ふ是を二度の禊といふさて中の酉の日賀茂社へ參給て祭事にしたかひ給ふなり毎年の御禊は必午日これを修するなり今女三宮は桐壺御門の御讓國の後卜定ありて初齋院へ入給ふへし初度の禊の事は此物語にみえすいま此卷にいへるは野宮へ入給はんとての二度の御禊をいへりその故は初度の禊には勅使參議一人供奉す二度の禊には大納言中納言參議以下あまた供奉す毎年の禊には一かうに供奉せす此度は公卿もかすさたまりたる事なれとゝあり仍二度の禊うたかひなし初度の事はみえさる也

すちことになり　秘女三宮の齋院に立給ふ事神事なとにつきて心くるしき事おほかるへし

こと宮たちのさるへき　秘別に立給ふへき人なき故に立給ふと也

かんわさなれと　河神日本紀 神態　私神事

人からとみえたり　秘何事も人から也　聞書定りたる事も別して引つくろはるゝ人による事かと也

こけいの日かんたちめなと　花延喜式に二度の禊の勅使には大納言中納言各一人參議二人四位五位各四人すへて十二人勅使なりそれを數さたまるとはいへり源氏大將は參議二人のうちなるへしこれをもて是をいふに此卷にいへる二度の禊うたかひなきもの也河海なとにも分明ならさるによりてくはしくしるす所也弄義花に同し略之　秘齋院を卜定して二度の禊あり是は第二度の禊とみえたり花鳥にくはし

おほえことに　秘人をえりいたすなり

下かさねの色うへのはかまのもん馬くら　花御禊の日の勅使公卿は染裝束を着す馬には唐鞍或は倭鞍を用ふ杏葉をつくる也　秘かやうの晴の日は皆染裝束とて下かさねうへの袴を色々にそめて用る也　聞大かた法式あるうへにとりつくろひたるなるへし物語のかさりにかきなせるなり

とりわきたるせんしにて大將君もつかうまつり給　秘大將供奉の例花鳥にみえたり　河齋院御禊大將前駈例可勘云々　花國史云貞觀三年四月十二日丙辰賀茂齋内親王臨鴨水修禊是日使入紫野齋院大納言正三位兼行右近大將源朝臣定監禊事云々齋院御禊大將供奉の例也

物みくるま心つかひしけり　御禊を別して引つくろはれ源氏君なとの供奉の故成へし

一條のおほち　此大路大内裏の北の大路たるによつて一段ひろきなりひろさ廿丈歟

所々の御さしき　御棧敷也

人の袖くちさへ　御禊の役にしたかふ人の事は勿論なり見物衆の袖口さへ又物見なると也

大殿には　秘葵上也

御心ちさへなやましけれは　葵上は御心おも〳〵しくてかやうの物見なともし給はぬにまして懐妊ゆゑおほしもかけさりしなり

わかき人々いてやおのかとち　葵上にさふらふ人々のけふの物見をすゝめ奉る也我等はかり忍ひたるさまにてみんは物さひしからんなとゝ思ふなり

けふの物見には大將殿をこそ　およそ人とは源へかまはぬ世間の者さへこれをみ奉らんとはかりの物見そとなり葵の御らんすましきはあまり成事と也

大宮きこしめして　弄葵の母宮也　女房たちの申事を大宮のきゝ給へる也秘同

御心ちもよろしき　葵の御心ち也

さふらふ人々も　各の申所も理なりとの給て俄にもよほし出給ふ也

俄にめくらし　弄車のたち所もなき時分に叶へり

めくらしおほせて　御車御供の人なとをふれめくらさるゝ也

日たけゆきて　秘俄なる故に見物の人も居定り車のたち所なとも有ましき也　聞書かやうのありきなともおそく行はあしき事なり人の中なとわりなくとほる事權門たてなる物なりこれ故御車の所あらそひもありし也

きしきもわさとならぬ　葵の見物に御出の様體もとりあへぬさま也

ひまもなくわたりたるに　これははしめよりたちたる物見車の事をいふ

よそほしくひきつゝきてたちわつらふ　よそほしくといふよりたちわつらふといふまてか葵の見物の車の事なりよそほしくは粧こと〳〵しく車數なとあまた有て物見の人のひまなけれはたちわつらふなり

よき女房車おほくてざう〳〵の人なきひまを　秘雑人の無なり　雑人なとはなくてよき女房車おほくたちたる所をみすまして葵の御車をたてんとさしのけさするなり是權門過たるさまなり此女車ともの中に六條の御息所の車も有しなり

あんしろのすこしなれたる　網代車あみしろと書なり仍あんとはぬる心によむへし三光なと常に如此凡車は唐庇檳榔毛車等はみな檳榔をもてふく尼眉半蔀網代等にはみなあしろをふけり今御息所の網代はいつれとさためかたし但尼眉には靑末濃の下すたれをかく網代には下簾をかけすといへとも女房の乘用するには八葉の車にも下すたれをかくる事に侍れはいつれにても相違なかるへしすこしなれたるとはちとふるひたるをいふなり　聞書御息所の忍ふ故にわさとふるひたる車にのり給ふ也

いたう引いりて　御息所の物ふかく忍ふさま也

袖くちものすそかさみ　河汗衫きぬの上に着するものなり　花唐衣に裳をきる事は下つかへまてもきる也かさみは童女のきる物也

ことさらにやつれたる　ことさらはわさとやつし忍ひたる體のあらはなる也

車ふたつ　いつれも御息所の供奉の女房なと成へし

さやうにさしのけなと　秘御息所方の人の云なり

自餘の車のやうにはさしのけさせしと也

いつかたにもわかき物とものゑひ過　いつかたにもとは御息所方の人も葵上方の人もなり　秘わかきものゝしかも沈醉したる故に制止にいらさるなり

おとな〳〵しき御せんの人々　花地下の前駈也　葵上御息所なとの御車に供奉したる人々なるへし

齋宮の御母みやす所物おほしみたるゝ　秘草子の地の注なり　源のうと〳〵しくおはします事を思ひみたれ給へる時分なるへし

つれなしつくれと　秘人にしられしとすれともなり　聞書御息所ならぬやうに供奉の人ともすれ共葵かたの人はおのつからみ知なり

さはかりにてはさないはせそ　秘やうないはせそな
と云なり　葵方の人のいふなり六御息所としりて
からそれならはいよ〳〵やうないはせそなとゝい
ふ也

大將殿をそかうけに　葵上方の人の詞　花豪家なり
けんもんふりをいふ心なり源をこそ權門には思ふ
らめなとゝいふなり

その御かたの人も　その御かたとは源の方の人なり
葵の御供には父大臣の人其外源の御方の人もある
なりその源の御方の人は御息所の方の人をよくみ
知たれは笑止也とみなから御息所の方人せんもい
かゝにてそらしらすしてあるとなり閑書同　秘御
息所とは大略しれとも今となりてはしらぬかほを
つくるなり俄なる喧嘩のさまをあり〳〵とかけり
私此義すこし不審あり

つひに御車とも　葵上かたの車をたてならへたる
也

人たまひ　河奥入人給小車名也權記に多此名あり　河清少
納言枕草子云よき所の御車の人たまひなとあまた
引つゝきて云々　花出車をは公方より點せられて
その人にたまふ故に人給となつくるなり枕草子云
所もなく立かさなりたるによき所の御車人たまひ
引つゝきておほくくるをいつくにたゝんとすらん
とみるほとに御前ともたゝおりにおりてたてる車
ともをたゝのけにのけさせてと云々

おしやられて物もみえす　御息所の御車のさまなり

心やましきをは　心やましきとは車なとやりのけら
れて見もみえぬさまなりそれよりもわさとやつし
忍ひ給へるをはや御息所としりていよ〳〵さしの
けたる所をねたう口をしく思ひ給ふとなり是物の
けになるへきはしめ也

かくやつれ　秘御息所の心

しちなともみなおしをられて　河昔は女房車にも榻
をたてける本儀歟　弄一勸女車には榻を用ふのほ
りくたりのやすからんかためなり見物にはかきら
さる也　秘牛なとはつしたる也　私牛なからは榻
を用る事なき也

車のどうに　牛を用ていふ說不用之　稱名院

何にきつらんと思ふに　御息所の心中

物もみて　見物もせすして也

とほりいてんひまも　あまり見物の人のおほきなり
ことなりぬと　秘はや斎院の行啓なるとなり
つらき人の御前わたりの　御息所の心つらき人は源なり
心よわしや　御息所の心中を察してかけり
さゝのくまにたにあらねはにや　影をたにみんの詞をとるなり河古今神祇歌「さゝのくまひのくま川に駒とめてしはし水かへかけをたにみん　花影をたにみんと思へともさゝのくまにたにあらねはつれなく過給ふとなり下の御息所の歌に影をのみみたらし川のつれなきにとあり　聞此引歌古今神祇歌なり神事にたより有て面白し　弄ひのくま川に駒とめての歌をひきていへるなり御息所の方をみやり給けしきもなきを影をたにみんともおほさゝるにやと思ひなして心をつくし給也源の何となくみやり給方も有しにや　私此歌の義如何影をたにみんとは我かたから源の影をたにみんと也源の方より影をみんともおほさぬにやとは書たかへるか
けにつねよりも　前に物み車ともかねて心つかひするよし有し也
しりめにとゝめ給も　秘源のそれかとみ知て目とゝめ給もあるなり
大殿のはしるければ　秘葵上なり　御供の人以下葵上と見知給て實々しくて過給しなり
御ともの人々　秘源の供奉の人々此葵上の車の御前をはれいをいたして過るさまなりいよ／＼御息所のくちをしくみ給ふ也
おしけたれたる　御息所の心中にかやうに物もみえぬ所に車をおしやられたると供奉の人まて禮をいたして過るとは事の外の相違かなと思ひ給ふなり物のけになり給ふへき序なれは一段御息所のくちをしくおほすへきさまにかきなせり
六御息所
かけをのみみたらし川のつれなきに身のうきほとそ思ひしらるゝ　秘けふの祭の縁あり　聞書心あらはなり　弄御息所の源をはなれみ給へとも源はさもなきことをよめり　或御説にしはし水かへかけをたにみんの歌を心にもちて前のさゝのくまにたにあらねはといふ詞のゆくへなり　九「戀せしとみたらし川にせしみそき神はうけすも成にけらしな此歌をひけり如何

河みたらし川は神山よりなかれ出て賀茂社貴布ね片岡の社の中よりとほれる小河なり御手洗ともかけり餘社の前になかるゝ河をもみたらし川とよめる歌あり松尾社にもみたらし川とよめり但松屋は賀茂一體の神なる故歟能因歌枕には神の御前なる水をみたらしといふと云々　兼盛歌にあさまなるみたらし川といへり富士の事なり

なみたのこほるゝ　身上を思ひしりたる體也

人のみるも　御息所の御車のうちにものりそひたる女房なとあるへし

めもあやなる　目もあやはうつくしき物の文をみるやうなる心なり　後拾遺俊頼歌「紅葉は錦とみゆときゝしかとめもあやにこそけさは成ぬれ此めもあやは目もあやなき心なりもみちのちる事をいへりその心かはるへし

みさらましかは　御息所の心よわく思ひかへし給へる心成へし

ほと〳〵につけて　齋院御禊の供奉の人々分にしたかひて結構したるなり

かんだちめは　公卿は裝束以下別段なれはかくいへり

ひと所の御ひかり　源の事なりこゝを三段にかけり惣別供奉の人結構したる中にも公卿は一かとある中に源氏はなほ各別にみえて自餘の人の出たつもおしけたれたるやうなりといへり

大將の御かりの隨身殿上のさうなとのする事はつねの事にもあらすめつらしき行幸なとのをりのわさなるをけふは右近の藏人のさうつかうまつれり　河大將行粧刷之時一員府官供奉するは例の事なり右近藏人のそうは藏人右近將監なりつかさことに皆かみすけせうさくわんあり近衛府は大將はかみ中少將はすけ將監はせう將曹はさくわんなり六位侍將監に成たる時左右近のせうとよふなりかりの隨身とはかりそめの義なり一員當日はかりかりそめに隨身に供奉したるよし也　秘花鳥にも源氏第一の難義なりと云々くはしく花鳥にしるせり只事に事をくはへてかきなすなるへし　弄口傳云此物語の寓言の體と心うへし源氏大將をほめんために如此かきたる成へし　禪閤御記聞書源氏には秘事にする事をもかけりそれは用るなりさやうのまきらか

しにかやうの事をかくなりこれはたゝ結構にかきなしたる事と心うへし　花此事第一の難義なり諸抄にもたしかならす先かりの随身といふは一員ともなつくるなり近衛將監將曹府生を一人つゝかりそめにわたしてつるゝ事をいふなり職によりて随身を給はるはかきりありて出頭のたひによの常めし具するなり其外時にしたかひて一人つゝめしわたすをかりの随身といふなり假令納言の大將以下は右は左左は右の番長一人近衛五人すへて六人の随身をゆるされてめし具するなりそのうへに拜賀なとの時は將監將曹府生を又一人つゝ具するを一員ともかりの随身ともいふはいつれも皆地下の輩なり藏人のそうとは殿上の藏人の將監をいふそれを一員に具する事は例なさ事なり又行幸の時は左右近衛將監將曹は本陣に供奉するによてわたくしの一員にめしわたす事かなはぬ事なり此一段の詞心得かたき事也別に猶しるすへし　右近の藏人のそうは伊與介か子紀伊守軒はの荻なと兄弟なり

私云すまの巻に此時の事を思ひいてゝ引つれてあふひかさしゝそのかみをおもへはつらしかものみつかきと詠せし此人なり

さらぬみすゐじんとも　右近のせうの外の御随身とかゝやくはかり出たちたるなり是は皆地下なり惣別随身の出立かやうの時に行粧になるもの也

もてかしつかれ給へる　源のさまなり

木草もなひかぬは　河君子之德風也小人之德草也草上尙之風必偃論語　訓若風行應如草靡文選

つほさらそく　秘見物の女房ともなり　河清少納言枕草子云みくるしき物つほさうそくしたる人のいそきはしる市女笠にきぬを中ゆひたるをいふなり云々　或抄云白きはかまにくゝりを入て上に白きかたひらをきて其うへに帶をするなり女の旅すかた也　私云これは百年はかりのさきまてありしと聞及ひたる笠かたひらといふ出たちか但同し體歟如何市女笠とはつほね笠をいふと云々

又あまなとの　私世をすてたる尼なとの物みるは似合ぬ事と也伊勢物語にも「世をうみのあまとし人をみるからにめくはせよともたのまるゝかな此詞かきに尼の物みたるにつかはすとあるにや　私勘伊勢物語云むかしことなる事なくては尼になれる人ありけりかたちをやつしたれと物やゆかしかりけん賀茂の祭見に出たりけるををとこ歌よみてや

るよをうみのあま云々是は齋宮の物見車にかく聞えたりければ見さしてかへり給ひにけりとなん

けふはことわりに　弄老女なとの見物に出たるはよのつねにはにくき物なりされとけふはとわりとみえたるとなり　聞書源の世にすくれたるさまをみんとするはことわりそとなり源をこと〳〵しくほめていへるなり

口うちすけみ　老女なとの口もゆかみたるやう成也

かみきこめたる　これもつほさうそくの體歟聞書同

手をつくりてひたひにあてゝ　大鏡云一條院春日の行幸に御輿に大宮東三條院詮子そひのらせ給云々ゐなかの民百姓まて神佛のやうに額に手を合せてをかみ奉りけり　花宋朝に司馬相如といひし君子の洛中に入し時は是をみる者手を額にくはふといふ事通鑑といふ書にみえたり　秘花鳥に司馬相如とは思ひあやまりてしるし給ふなるへし司馬温公なるへし司馬温公か事なり相如は漢の代の人なり公の字を如の字にあやまるなるへし通鑑も宋朝通鑑なるへし司馬光卦闕衛士以手加額曰司馬相公也云云　弄花に司馬公か事をひけり其儀に及ふへからさる歟聞書同

をこかましけなる　或抄嗚呼なりこゝにては心なく物もしらぬやうの心なり

おのかかほのならんやう　身體を忘れて源をみたてまつるなり心に入たるはさやうにあるもの也

ゑみさかえ　物みにほこりゐたるさま也

みいれ給ましき　源の心にもかゝるましきほとの人也えせずりやうとは受領の中にも品くたりよからぬなり帚木巻にも受領の中にも品ありとみえたり

心のかきり　心つかひしたるなりわか心には隨分と思ふ心なり

のりさまことさらひ　これよからぬ人のさまなりわさと事このましく人の目にたつやうにといふなり

ましてこゝかしこにうちしのひ　源の御心にかゝるましき程の人さへかく心けさうするなりましてかりそめにも思ひかよひ給ほとの人なとはかやうに及びなき源の御さまをみて身の數ならぬを思ひしりあちきなく思ふ人おほしと也

式部卿の宮さしきにて　秘桃園也弄同　花朝かほの姫君の父宮なり　桐みかとの御弟

いとまはゆきまて　源のさまを桃園のの給なり源の叔父也

神なとはめもこそとめ給へと　秘源をいたはりての給なり紅葉賀に弘徽殿の詞はそねみにくみ給かたよりの給なり心あひかはれり

姫君は　槿姫君也

とし比きこえわたり給御心はえ　槿姫君の心中なり源の年來ねんころにきこえ給に姫君の御心はとまりけるなるへし源の御ありさまのめてたきはかうしもいかてとまてみえ給をみ給ひてなのめならん人なりともかやうにねん比なるにはなひきもすへき事なるをまして源にはといふ心なりされともけちかくとはおほさぬは槿の貞心なるしるし也　弄義同

わかき人々はきゝにくきまて　聞書此槿姫君は祭をみ給はせぬ歟但み給へるか云々　私わかき人々なといへるさま只今みたる體とみゆれは君もさしきにて祭を御らんしけるとみえたり

祭の日は　卯月中の酉の日也　私云賀茂祭は卯月に兩度あり中の申の日あるは國祭といふこれは欽明天皇の御宇四月に吉日をえらびてまつらるゝよし所見あり又和銅に詔ありて山城國司これを檢察するとみえたり此國祭は賀茂の本祭なるべきにや酉の日の祭は公家より使をたてられて走馬を獻せらるあひかはるべき歟關白の賀茂詣も同日云々　中の酉の日の祭はひつしの日先上卿陣に着て六府をめして警固の由を仰す當日の使は近衛の中少將つとむ昔夢のつけ侍りしよりけふ人々葵桂の鬘をかくるなり賀茂松尾の社司まへの日より然へき所々へたてまつる欽明の御宇より此祭はしまる下賀茂御祖上賀茂別雷二の神祭也已下略之以上公事根源抄　私賀茂太神は山城國の地主にておはしませは中の申の日は國よりたてまつる祭也中の酉日は內裏よりの祭なり昔物語におほくかけるは中の酉の日の祭也此物語にかけるも此祭なり

大殿には物み給はす　秘葵上なり祭をは見物なきとなり

かの御車の所あらそひ　秘源にくはしく人の語る也

あたらおもりかにおはする人の　弄左大臣殿の家風をの給へる　秘葵上かたの事なり心よりおこりてかやうにはあるましきとなりされとも御息所のあたりへはむつ〳〵共なかりし故にさるおきてに人

人をしたかひてかやうの事も出來ぬると也　聞おも／＼しきはかりにてあまり大やうなる故にかやうの事も出來ぬるとなり源の心也
宮す所は心はせの　みやす所は何事にも心つかひのある人となり葵上かたの樣になきとなり
おほしうんじにけん　河慍ウンシウレヘ老子　伊勢物語にあてなる女の尼になりて世中を思ひうんして
まうて給へり　源のみやす所へおはするなりかの口をしく思ひ給ふへき心をもなくさめんと也
齋宮のまたもとの宮に　河もとの宮とは卜定所歟六條の御息所の在所歟さか木のはゝかりとは神事の憚の心なり　花延喜式云凡天皇即位者定伊勢太神宮齋王仍簡内親王未嫁者若無内親王者依世次簡諸女王卜定訖即遣勅使於彼家告示事由神祇祐以上一人率僚下隨勅使共向卜部解除神部以木綿着賢木立殿四面及内外門　今案秋好中宮は去年卜定ありていまた諸司へ入給はすもとの宮にまし／＼て神齋し給ふをいふなりさかきのはゝかりとはこれをいふなり　秘卜定ありて左衛門のつかさに入給ふへきをさはる事ありてまたもとの六條京極の宮におはしますと也弄同　河榊とは眞賢木とも眞坂樹とも日本紀にかけり　天照太神あまの岩戸をとち給し時八百萬神達天香久山の坂樹をねこちとりていのり給ひしより神の緣木とす榊は非本字本朝作字云々龍眼木と書也
さかきのはゝかり　秘神事とて對面なきなり　私心やすくもとあれは御簾こしなとの對面はかりにて源をかへし給へる也
ことわりと　源もみやす所のことわりとおほす也
かたみにそは／＼しからて　秘只今對面なきをいへり源の心也　そは／＼しきは物の側やうの心なりこなたかなたへすれはあなたはあなたへそむきむきに物をする心也
つふやかれ給ふ　源のつふやく也
けふは二條院に　秘源也祭見におはせんため也
にしのたいに　紫のおはするかた也
もろともにみん　紫上をは源と同車してみるへしとなり
久しうそき給はさめるを　女の髮の事也或抄云ひんそく事は一年に兩度はかりあるとなり千尋百ひろ

なとゝいはひそく祝詞有と云々此義如何
こよみのはかせ　河暦博士　推古天皇十二年歳次甲子正月戊午朔始用日　私陰陽道にも天文博士暦博士あり
まつ女房いてねとて　私けふは源も女車にていて給ふへきと也　私これは紫の方の女房たちをめし出して出たちなとを御覧するさま也
らうたけなるかみともの　只かみとものよきさま歟しからは良の字なるへし
うきもんのうへのはかま　河浮線綾の袴也わらはの袴なり若菜巻にもあり　花西宮云女親王對面總角者着汗衫半臂下襲表袴玉帶等又齋宮齋院乃童女總角青麹塵汗衫半臂下襲表袴白柳帶　今案童女は晴の時は打袴の上に表袴をきるうき紋は窠霰也よのつねには表袴をはきず　弄打袴とは板ひきの袴也一勘以下花同　秘童女のとりつくろふ時袴を着するよし花にみえたり
かゝれるほとけさやかに　白きはかまに黒き髪のかかりはへあひたるべし
君の御くしはわれそかんこそ　秘紫のを源のそき給なり
ところせうもあるかな　あまりなるまて髪のおほく長き也
いとなかき人も　紫の髪のさまなりいかなる髪のなかき人もかやうなるはまれなると也　少納言あはれに源のかやうにとてはやし給ふをうれしく思ふ也
なさけなからん　あまりこと〳〵しうといふ也
ちひろと　髪のなかゝれとの祝詞か千尋なり
源はかりなき千ひろのそこの見るふさのおひゆく末は我のみそみん　河かみそきの具足に海松を用る也九禪　碁盤上に　山菅　山橘　海松　青目石二置之也是等を髪にはさみそふるなり云々此正説可尋
秘祝言なり河海説さも侍るへし　花うつほの十一云かみのうつくしき事みるをつくりつけたる樣也
返紫上千尋ともいかてかしらんさためなくみちひるしほののとけからぬに　花源氏君の千尋といはひ給ふに付て定なき御心をみちひる汐にたとへて千尋の海も定なきと讀給へりいつしかにくき御心也かし　秘みちひる汐とは源の心のさためなきをよめり紫上

やう〳〵おとなひたる心也弄同
物にかきつけて　紫のさまなり源のめてたしとみ給なり
けふも所もなく立にけり　秘今日も物見車おほきよしなり　禊の日もおほかりし故にけふもといふ也
うまはのおとゝのほとに　秘一條也左近馬場宿屋也云々左近馬場は一條西洞院右近馬場は一條大宮也
花おとゝは乙殿やとて左近の馬場にあり五月の騎射の時中少將着座する所なり賀茂祭大内の時は北陣はてゝ一條を東へとほるによりて左近の乙殿の程をわたる也
よろしき女車の　源典侍也
こゝにやはたゝせ給はぬ　こゝになせに御車を立られぬそたてられよ所さりきこえんと源内侍の人しらて申さする也
いかなるすき物ならん　車の中なれは源はいまだ此内侍としり給はぬ也
いかてかえ給へる　源の返答也
ねたさに　いかてよき所をえ給そとうらやむ心なり
扇のつまををりて　河檜扇也　秘檜扇のはしを折たるにや歌をつけたる歟
源典侍 はかなしや人のかさせるあふひゆゑ神のゆるしの今日をまちける　秘葵はあふといふ心なりあふ人とよめる神のしるしのけふを待けるとは今日の葵のたよりをこそ期しつるに人と同車し給故にかひなしとなり　私云人とあひのり給へるを人のかさせるとはいふなるへし
しめのうちにはと　河古歌の詞歟可勘　花しめのほかといふ事あれは注連のうちも有へきなり　私引歌いまたなし心は我身にはるかなるよし也　弄引歌未見可勘　聞書人のぬしある心歟又へたる心歟云々　九「木枯も心してふけしめの内はちらぬ紅葉そ大原の山此歌名寄に有周防内侍か歌也源氏物語かけると同時分なれ共み出すまゝ書之也續拾遺歌也　此歌しめの内とはあれとも心あはす時代も如何引歌なくても心はあふ歟しめの内とは今の祭に付てそへたり心は神のゆるしを待えたれ共人のしめおきたる源氏なれは思へともかひなきといふ義にや但此歌もわか物にしたらはこそちらさぬ心源氏ぬしあれはむなしきと云にはかなへとも源

氏物語同時分の歌なりとあり　私云此義弄花両三本に無之然共先かきのせたり此引歌更に用かたし引歌なくても心はあふかといへる義然るへし

かのないしのすけ　源典侍なり手にて源のみしり給ふなり

いまめく　河今めくはよみつけたる詞也

かさしける心そあたにおもほゆるやそうち人になへてあふひを　河八十氏人とは人の氏姓のおほき心なりあなかち八十にかきるへからす或は八は数のかきりなり百姓ともいふなり八は和語数の多也八十島共八百日行ともいふみな多き心也八は数の限なり　秘源の一度かさしもくやしきとなり八十氏人はおほくの人になひきやすなる物をとなり結句のあふひをアヲイとよむへしあふ日とはよむへからす其故は古今物名に葵をかくしてあふひのまれにとかくしてよめるを葵を心にこめて讀時逢日と讀は物の名に讀たる紛骨曲もなく成へし　弄の義別事なし略之　花後撰第四賀茂祭の日物見侍ける女の車に云入て侍ける「行かへり八十氏人の玉かつらかけてそ頼むあふひてふ名を　返「ゆふたすきかけてもいふなあた人のあふひてふ名はみそきにそせし

はつかしと　秘源のちとにくしとの給故なり

くやしくもかさしけるかな名のみして人たのめなる草葉はかりを　花あふひは人たのめなる草の名なるへし　秘源典侍か歌なり弄同　聞書心あらはなり源をうらみたる心なり

人とあひのりて　源と紫と也　花栄花物語云弾正宮和泉式部とひとつ車にて祭み給ふ式部か方の簾おろして紫の紙の物忌を付たり　今案栄花にいへるは前の簾をはあけたる成へしそれは車の中に几丁の帷をはるによりてくるしからさるなり　河には大鏡云帥宮和泉式部あひのりて祭のかへさ見給とあり

心やましうおもふ人　源典侍のみならす思ふ人おほしと也

一日の御ありさまのうるはしかりしに　源の御さま也禊日の事也　秘是は惣別の人の思ふ心なり源内侍にはあらす　私枕草子云昨日は車ひとつにあまたのりてこあひのおなしさしぬきあるはかりきぬ

なとみたれてたれときおろし物くるほしきまてみえしきんたちの齋院のゑかにとてひのさうそくうるはしうしてけふはひとりつゝさう／＼しくのりたり

たれならんのりならふ人　紫を誰とも人のしらぬ也

いとましからぬかさしあらそひかなと　河不挑也　秘源の心なり　聞書おもしろからぬ人と歌よみかはすとおほす也　此段聊心得かたし心を付へし源内侍はおもなき人なりさならぬ人もはたあひのり給ふにはゝかりてことをもかはしかぬると也　私云いとましからぬかさしあらそひとは源内侍のすけの人のかさせる葵ゆゑなとゝあらそひかほにはいへれと源の御心には源内侍への御心さしはなきなり只今のりそひ給へる紫をいかなる人そと思ひてかやうにいへれとそれはいまたさやうの心おはせねはかさしをあらそふへしともおほさぬなりそれをいとましからぬかさしあらそひとはいへるにやとおほゆ如何

かやうにいとおもなからぬ人はた人あひのり給へるにつゝまれて　秘源の心なり源内侍はおもなきひとなりか様のおもなき人ならすは今源の人と同車し給ふと知なからは申かはす事も有ましき也いとましからぬとはおほせと是も興ある事也　聞つゝまれて也云々人とあひのり給へるにつゝみもせぬはまはゆきといふ心か　私云おもなからぬ人とは源内侍なり面つれなき人といふなり人あひのりとは紫と源となりつゝまれてとは源の心なりはかなき御いらへも心やすくきこえんもとは又歌よみかけたる事なりまはゆしからも又源の心歟さて此一段の心源の返歌をし給へはおもてつれなき人にて源内侍の又歌をよみたるなりさて又こゝをあひしらひ給はゝいよ／＼何かと申かはさん物そとむつかしく又紫の心をもさすかつゝまれ給て返歌し給はぬと云義歟猶此段能々心を付へしこゝまて祭の所をかけり

御息所は物をおほしみたるゝ　秘是より六條の御息所の事をいへり

年ころよりも　源のうと／＼しく成給ふうへなりと御禊の日の車あらそひの事かそへる也

つらきかたに思ひはて給へと　源をつらき物に思ひ

はつるなり
ふりはなれくたりなん　伊勢への事
立とまるへく　此まゝ京におはせん事なり
みな思ひくたす　こよなきは事外なり思ひくたすを
河には思ひ下すなりとあり思ひ朽すもよき歟
つりするあまのうけなれや　河一いせの海につりするあまのうけなれや心ひとつをさためかねつる
浮子釣はりのをに杉なとをつけたれははりはしつみもはてすして魚のくひやすくする也　花御息所伊勢へくたりやしなましと思案し給處に釣するあまのうけなれやと書るたより有て面白し心ひとつを定給はぬ心なり御心ちもうきたる樣にとあるもまことのうけのやうなるへし又下の詞に定かねたる御心とありみな一首の歌にかゝれる詞なり　秘奇特なる引歌なり伊勢へ下向の事心ひとつに定かね給ふ由なり
くたり給はん事を　伊勢へくたり給はん事を源はしひてとゝめ給はぬ也
數ならぬ身を　私源よりの詞なり御下りをさまたけすしてたゝうらみなし給へる體なり

いふかひなきにしも（てイ）　とても源との御忍ひかよひの事は有そめたる事なれはと也
さためかね給へる　秘前の引歌の詞
みそき川のあらかりし瀬に　花車あらそひの日の事也　河萬葉には禊身とかけり禊は河邊にてすれはみそき川といへる此外略之
大殿には御物のけめきて　葵也
御ありきなと　源の御他出の事也
さはいへとやんことなきかたは　秘平生葵へねん比ならさりし源も只今はことに思ひきこえ給となり
聞書二條院にもと云は紫に御心のとまるはしられたる二條院にさへといふ也花の義略之
めつらしき事さへ　葵の懐妊也
わか御方にて　源の御方なり左大臣の方にても源のおはします方別にあるへし
物のけいきすたま　聞書いきすたまイキスダマ如此歟　河遊仙窟云窮鬼故調人　注云魂子鬼通をいふ也
弄九禪　生靈共云　又只靈の事とも　或抄御説に人の魂の夢に通して來るをいふ也
人にもさらにうつらす　花是は御息所の生靈なりよ

りましもうつらぬとなり人はいかにもかゝるなからひにはなさけ有へき事なりまめやかにみそき河のあらかりしよりかゝる怨靈になり給へるなり

けんさとも　驗者也

御かよひ所こゝかしこと　源のかよひ給所々を大殿かたの衆いつれにか〳〵といひあつかふ也

御息所二條の君　秘紫上のかくをさなき程を人はしらてかくうたかふと也妙なり弄同

物なととはせ　うらなひなとの體歟如何

過にける御めのと　自然葵上の御めのとのうちに恨有てさきたちたるなとの靈もやなといふ也

おやの御かた　父左大臣かたなとにつたはりたる邪氣なといひてさらぬ物もいのられては出物なり

むね〳〵しからぬそ　棟々しからぬなりさしてもなきを云なり

たゝつく〳〵とねをのみ　秘物のけの體なり弄同葵の體なり物のけのしわさなり

院よりも　秘桐壺帝なり

をしけなる人の御身　葵の事なりわつらひ給ふにつけて威勢のみゆるからいよ〳〵をしき命と也

御息所はたゝならす　葵上をそしむを御息所のきゝていよ〳〵ねたむ御心のいてくるなり　秘靈になる心みえたり

かの殿にはさまても　人のうらむへき所をかへりみさるはあしき事なり弄同　惣して權門の方には不肖の方の恨あるをはしらさる物也かやうの所心をつくへしと也

かゝる御物思ひのみたれに　河大神事には佛事をいむによりて外にて修法をおこなはれたるなり　花是は御息所の御心もれいならさるによりてもとの宮はさか木のはゝかりもあれは外へわたりて御祈なとし給なり

おほしおこして　やう〳〵と思ひ立給なり御息所の例ならぬを源のみまひ給ふなり

れいならぬたひ所　御息所のかりにうつりて修法させ給ふ所を云六條京極の御家には秋好の神事にてわたらせ給へは前に源のおはしたる時も榊のはゝかりにことつけて心やすくも對面し給はぬよしありし也

つみゆるされぬへく　源の此程のとたえの恨をも忘

れ給程こと葉をつくし給へるさま也
なやみ給ふ人の　秘葵上の事源の方からいひ出し給ふなり
みつからはさしも　源の詞なり我はさほと思はね共父母の前を憚なといひなし給ふなり六條御息所をふかく思ふよしに源のゝ給ふなり　秘見すくさんとてなん句をきりて心得へし
おほしのとめたる　只今の程をとたえあらんをも恨給はぬやうにと御息所へかたらひ給なり
つねよりも心くるしけなる　是より御息所のさまを云源の心也
うちとけぬ朝ほらけ　花御息所より出給あしたなり　秘同　聞書源と御息所とのさま也　私云艶なるさま也うちとけぬとは明はてぬやうの心歟是も広に心ふかくうちとけぬ故に早く立かへり給ふさま成へし
ふりはなれなん事は　秘御息所の心
やんことなきかたに　秘葵の懐姙の事　御息所の心中也
かやうにまちきこえ　此程たえまかちなりし事也

本に茶あり
文はかりそ　源を待給へは也今宵は源のおはせぬ也
日ころすこしをこたるさま　秘源の文の詞なり　葵上のわつらひ給ふよしなり
れいのことつけ　秘いつものかこつけ事と思ひ給ふなり
六條御息所
袖ぬるゝ戀路とかつはしりなからおりたつ田子のみつからそうき　花戀路は泥をひちといふにつきたる詞なりさて袖ぬるゝともいへり田子もいやしき人なり早苗なととりて泥中におりたつ者に御息所の我身をたとへ給ふ也　弄此歌ことによろしきこえあり　秘此物語第一の歌云々心はたゝ我身からの物思ひとなり
山の井の水もことわりにこそ　御息所の文の詞なり　河「悔しくそくみそめてける淺けれは袖のみぬるゝ山の井の水　花山の井の水はあさき契のたとへ也源の御心さしのあさきはことわりなりと御息所の述懐し給ふなり　秘心はたゝ淺きとなり　聞書面白き詞なり
御手はなほこゝらの人の中に　六御息所手跡よきなり　秘いつくまても然へき人と也

いかにそやある世かな　源の心中なり有感なり　秘かやうにいつくもたらひたる人の聊打たのむへき所のなき人となりとにかくに世中なると也　私云源の心にかたちも心もとり〳〵にすつへきもなく思さたむへきもなきなりこゝはよきと思へは又思ひところありとなりそれをいかにそやもある世かなと何とやらん思ふやうにたかはぬを觀し給へる詞なるへし

袖のみぬるゝやいかにふかゝらぬ事になん　山の井の水なとある詞によせたり此歌をみては伊勢物語にみのもかさもとりあへすしとゝにぬれてなといふやうにしても行へき事となり　私云袖のみぬるるやいかにとゝかめて何をきりてみるへしさてふかゝらぬとは所詮源への御心さしふかゝらぬ故なりと也其存分をは返歌にいひのへたり

返源 あさみにや人はおりたつ我かたは身もそほつまてふかき戀路を　秘贈答の本となり身もそほつ花鳥說いかゝそほつは霑なり濕心も有は　花早苗とる田子は泥中のあさきにおりたつものなり身もそほつまては山田のそほつをぬるゝ心によめる是は身もひたるはかりの戀路とよみ侍り心詞たくひなくおほえ侍り　聞書そなたには袖ぬるゝとあり我は袖はかりにあらす身もぬるゝなりされは詞にもふかゝらぬ御事になんとはいへり山田のそほつといへる花の義如何　是は伊勢物語に敏行朝臣「つれ〳〵のなかめにまさる涙川袖のみぬれて逢よしもなし返し女にかはりて業平のよめる也「あさみこそ袖はひつらめ泪川身さへなかるときかはたのまん此贈答の心なり

此御かへりをみつからきこえさせぬとあり　秘　源の御返事の詞也大かたの事ならは只今參りて申へきをさもなきにて葵上のよく〳〵煩給ほとを推察有へき事と也　弄みつから參りて御返事をも申さぬ事をおこたり給ふことをおほろけならすさりかたきをりふしなれはとなり

大殿には御物のけいたうおこり　葵のつよくわつらひ給ふ故御息所へ源のおはせぬなり又御息所は待おはしつるに源のおはせねはいよ〳〵葵のかたへの心もかよひくへき也

此御いきすたまちゝおとゝの御らうなと　弄　此御い

きすたまとは御息所の御靈歟父御息所の父大臣の靈也なとうたかひいふなり 河大殿の父大臣歟 花御息所の父大臣の怨靈といふなり 秘河海あやまれり花鳥説可然歟御息所の思にひかれて父左大臣の靈もより來る歟

きゝ給ふにつけておほしつゝくれは 秘さもやとおほす事も有なり御息所のかやうの沙汰を聞給て思ひつゝけ給ふ心中なり

身ひとつのうきなけき 秘御息所のなけき也 我身の上をのみなけきて人をあしかれとは思はぬと也

物おもひにあくかるなる玉しひは 花是より御息所の心中を書たる也

かうしもくたけぬを 心をくたくなり

しつまりかたう 車の所あらそひの遺恨なほわすれかたきなり其心のしつまらぬなり

すこしうちまとろみ給ふ 前にさもやとおほししらるゝ事もありといへるはこれらの事なり 宮す所のまとろみ給ふ時はかやうの夢をみ給ふとなり姫君は葵也

たけくいかき 河猛帝也 ひたふるこゝろとはひたやぶりといふうちふてたる體なり 秘いかめしきなり御息所の夢如此 私遊仙窟に夢魂與鬼通也といへるはこれなり前にあり

けに身をすてゝや 弄秘此引歌有 河「身をすてゝいにやしにけん我身より外なる物は心なりけり

うつし心ならす 我身の本心のやうになきなり

いひなしつへきたより 我さへかくおほせは人のいふはことわりとおほす也

いとなたゝしう 花名にたつへき事也 秘名のたつなり

ひたすら世になく 秘死靈はつねにある事也

すへてつれなき人に 秘源なりかやうの事のおこりはこと〳〵く源よりなれは心にかけしと思ふなり

おもふも物を也 弄私同引歌也 河「おもはしと思ふも物を思ふなりおもはしとたにおもはしやきみ 面白くかけり是まて御息所の心中也

齋宮はこそ内へ入給ふへかりしを 河うちに入給ふとは諸司に入給ふ事なり九月は神宮の祭中なり延喜式凡齋王將入太神宮之時自九月一日迄卅日云云 花大内のうちに左衛門の司に入給ふへきをい

ふなり　いまたもとの宮にましますなり　弄諸司
に入給はん事なり
此秋いり給　是は諸司へ入給ふ事なり
野宮にうつろひ　諸司より野宮へうつり給ふへき事
なり
二たひの御はらへ　花齋宮諸司に入給はんとても又
野宮に入給はんとても東川にて御禊の事有是を二
たひの御はらへと云なり但群行の時の御禊は西川
にて有事也　秘花にみえたり弄同
ぼけ〳〵しうて　御息所の體也　耄の字なり
宮人いみしき大事　秋好の宮人なり齋宮の司の人な
るへけれは神道の行なるへし
まさるかたのいたう　秘葵上の事也源の御志のふか
き葵上のしかもわつらひもおもくおはすれは御心
さしのおとりたる御息所のそこはかとなきほとの
わつらひには猶おろそかなるとなり
またさるへき程　葵の御産の事なり
大將ときこゆへき　秘葵上の源へ物の給はんと也
れいのしうねき　みやす所の靈なるへし
いみしうてうせられて　驗者に物のけの調伏せられ
たる也
ゆるへ給へや　物のけのいはする也　葵上のの給也
されはよあるやうあらん　驗者ともにいのりふせら
れて物のけのいふへき事あるにやなと皆いふ也
いれたてまつりけり　源の葵のそはへおはしたる也
むけにかきりの　葵の體なり
きこえおかまほしき　秘葵の遺言なと有へきかと思
ふなり
おとゝも宮も　葵の父大臣と母宮なり源へ物の給ふ
事なれは用捨にてしりそき給ふ也
かちの僧とも聲しつめて法華經をよみ　ゆるへ給へ
と有し故に加持をやめて法花經をよむ也　法花經
敏達天皇二年渡本朝云々羅什三藏譯云々
みたてまつり給へは　源の葵をみ給ふ也
よそ人たに　他人なりとも此さまいたはしかるへし
まして源の心中はと也
しろき御そに　秘産婦の出たち也
うちそへたるも　髮を引ゆひて御そにそへたるなり
かうてこそらうたけに　秘葵上のかくうちとけたる
ありさまをはしめてみ給ふ也

御手をとらへて　葵の御手を源のとるなり

なき給へは　源なり

れいはいとわつらはしくはつかしけなる　物のけのそひたる故に葵の常のもてなしにかはりたる様也

なみたのこほるゝさま　葵上に靈のなりかはりて源をうちまもり涙をこほすなり

み給ふは　此葵のさまを源の見給心中思ひやるへし

あまりいたうなき給へは　秘葵上の也

心くるしきおやたち　秘源の心なり

かくみ給ふに　秘源を見給ふにつけてなり

何事もいとう　秘源の詞けしうはおはせしとはさりともとりなほし給はんとなくさめ給詞なり　是は葵の本心にてはかなくならん事をかなしく思ひ給ふと源はおほしての給也

かならす逢世　花秘後世までも夫婦の道はたゆましきとなり　私云いかなりともとは前にけしうはおはせしとありこれはとりなほし給はんとなり又いかなりともは又たとひいかにはかなくなり給とも契はたえしといふにや

おとゝ宮なともふかき契　秘親子の契は一世といひならはしたれ共只今はなくさめての給なり弄同

いてあらすや　秘葵上の詞なり御息所の靈の入かはりて云なり源の色々の給ひし事をさやうの事にてはなしといふなり

身のうへのいとくるしきを　源へ靈のいはすることはなり

かくまゐりこんとも　前に御息所の心中をかける所にすこしも相違なき詞とも也

物思ふ人の玉しひは　河後撰「物おもへはさはの螢も我身よりあくかれ出る玉かとそみる　和泉式部
私云此歌後拾遺廿詞書男に忘られて侍る比きふねにまゐりてみたらし川に螢のとひ侍けるをみてよめると云々「おく山にたきりて落る瀧つせの玉ちるはかり物なおもひそ　此歌はきふねの明神の御返し也男の聲にて和泉式部か耳にきこえけるとなんいひつたへたる云々

なつかしけに　物のけの源になつかしけにいふと也

なけきわひそらにみたるゝわか玉をむすひとゝめよ下かひのつま　河「思ふあまり出にし玉の有ならむ夜深くみえは玉むすひせよ「玉はみつぬしは誰とも

しらねともむすひとゝめよ下かひのつま　後の歌
は吉備大臣の誦文の歌也　玉の出ぬるをむすひと
むる事あれはなりむすひとゝめよとはうかるゝ心
を本心にかへし給へとかこつ心なり
その人にもあらす　常の葵のさまにはあらすやかて
みやすところの様に似たりと源のおほしあつる也
あさましう人のとかく　御息所の物のけにいて給へ
ると人のいふをいかなりともさは有ましきといひ
なし給にかやうにうたかふへくもあらぬをあさま
しく源のおほすなり
かくのたまへと　源の猶そらしらすしての給ふ詞な
り
たゝそれたる　彌御息所のさまに似たるなり
人々ちかうまゐるも　人のみやとかめんと源のはゝ
かり給なり
御聲もしつまり　葵の物なとの給ひやむやうなれは
宮のおはしましたる也
ひまおはするにや　御病のすきといふ也
御ゆもてよせ　花 榮花物語に一條院の母東三條院に
わかれ給へる事をいへるにいとゝおほしいらせ給

て御ゆをたに聞しめさすと有御ゆとはおもゆ也
程なくうまれ給ひぬ　秘 夕霧の誕生也
人にかりうつし　人に靈を祈りうつしたるなりその
ひまに生れ給へるを物のけとものねたむとなり
のちの事　秘 産以後の事ともなるへし弄
たひらかにことなり　立願なとのしるしに後の事も
平安になりたる也
山のざす　河 義眞和尚天長元年六月廿二日始補天台
座主號修禪大師
さりともとおほす　葵もはや別の事あらしと也皆人
人の心なり
まつはけうありめつらしき　秘 誕生の興ありめつら
しきにみな人心をいれ侍なるへし夕霧は源の御た
めにははしめの御子なり殊若公なれはめつらしく
一段と興しかしつき給ふなるへし
みな人ゆるへり　誕生の事にとりみたして葵の事に
ちと油斷のあるなり
院をはしめ　桐壺帝以下御うふやしなひ思ひやるへ
し
うふやしなひ夜ことに　接（ウフヤシナヒ）左傳第二　弄 三ケ夜五ケ夜

なとの事にや　秘禮記内則篇云國君世子生告ニ于君接以大牢ニ注云接讀爲捷而訓爲勝其義迂鄭氏謂食（衾イ）ニ其母ニ使ㇾ補ㇾ虚强ㇾ氣也（同イ）叉（擧イ）左傳桓公六年傳曰九月丁卯子同生以太子生之禮奉之接以大牢　聞婦人産後の空虚を補ふ也

男にてさへおはすれは　秘こゝにて男にてとかきたる筆法ちからいりて面白し云々

かのみやす所かゝる御ありさまを　葵かたの事を御息所の聞給ての心なり

たひらかにもはたと　秘「時鳥なく聲きけはあちきなくぬしさたまらぬ戀せらるはた　此はたと同物なり將字也

うちおほしけり　葵のかたには誕生につきて油斷の心あり御息所は葵のたひらかにてしかも若公なりとて院をはしめもてはやし給をきゝていよ〳〵ねたきおもひのそふへしさやうのをりのつかひに大事のみいてきけるなるへし

なやましけにのみし給へはれのさまにても　聞書邪氣のすこしうすらきて葵の本心なるから源へは對面なきなり病中なれは隔心也是葵の本心なり

もてかしつききこえ給　夕霧を源のもてかしつく歟ことあひたる　左大臣威勢ある上源をむこにとり若君さへ出きぬる事也何も相應したるをことあひたるといふ也　弄左大臣の事たらひたる時分なれは盈をかく理にて葵上の凶事出來たるなるへし此物語はいつくも此意有へし

たゝこの御心ち　葵也

さはかりいみしかりし　秘大事の靈氣叉産なとの名殘なれはきと平愈なきかとなり此段ちと油斷の心也

わか君の御まみの　秘夕霧の冷泉に似たる事也

まつ戀し　夕霧の春宮冷泉に似給へるよりまつ戀しくて參り給へるなるへし但此末の詞に院なとに參りていとうまかてなんとありされは春宮の事をおもひいて給へるにつけて先藤つほの中宮を戀しくおもひ出給ふときこえたり

うちなとにもあまり久しう　これは源の院内なとへ參り給はんとて葵のそはへおはしての給詞なり

うひたち　秘參内あるなり久しくありき給はぬゆゑにかくの給へり

けにたゝひとへにえんにのみあるへきにもあらぬをいとふおとろへ給へりといひなから物こしにてなとあへきかはとてふし給へる所に　此朱點をもて滅する詞の入たるは異本也青表紙には此詞なし是は葵のかたはらにさふらふ人のいふ詞なりえんにのみ有へきかはとはつくろひたるさまはかりをみえ給はん中にもあらすと申なり葵は病中のさまをはゝかる心あり

入て物なときゝ給ふも　源の丁の内へ入給ふなりよわけなるは葵のさまなり　秘葵に對面あるなり

されとむけになき人と　よわけなるさまなからかゝつらふをよろこふなり

御そなともたゝけしのかに　河邪氣祈禱の時護摩に芥子をたく事あり其香邪氣をさくると云々　秘護摩の芥子の香か御息所の衣裳にとまるなりおそろしき事なるへし

御ゆするまゐり　秘髮あらふ事也　河髮あらふ事云云　或云沐浴の事歟史記沐の字をユスルとよめり　私云沐は髮あらふ浴はゆあふる也

いとゝ御心かはりも　秘みな御息所の心の事也　私云心かはりもとはかやうのあひたなるしるしともにいよ／＼思ひもそひ心もわれにもあらぬやうに成行なり本心のうする心なり是物のけになり給へるさまのふかく成行さまなり

とはすかたり　秘葵上に靈の入かはりていひし事共なり

ほとへにける　御息所へ久しく無音となり猶やうらみのそはんとおもふか源の心くるしき也

けちかくて　對面なとあらんは何とやらんうたてあるへき物のけに出給ひし時の事源の心に忘れかたかるへし

人の御ためいとほしう　秘源心なり弄　私云唯今源のはたと御息所へ無音あらは物のけの事一定と人の思ひあたるへき事を人の御ためいとほしく源のおほすなり　又私云人の御ためいとほしうは對面ありてさても物のけにあらはれ給ひし事かなと心のうちに思ひ給はんは御息所の御ためいとほしき事なれはみつからおはせすして文はかりをたてまつり給へるにや又大方世上に云さまは宮す所もしり給ふへけれは源のみつからおはせんは宮す所の

御ためいとましきといふなるへし此両義共に私の今案なり猶後にしるす義然へきか如何

いたうわつらひ給ひし人の名殘　此段葵の産をはたひらかにし給へとも猶わつらひの名殘あれは大臣母宮もいまた油斷なき時分なれは源もいつかたへもありきし給はすと也

いきもたえたる　葵の大事にありし時物のけの入かはりて俄に源に物なとよくの給し時の事を心におほし出る也

またいとたゆけに　源の申たき事もおほけれといまた物むつかしさうなる也

御ゆまいれなと　秘源のの給なりかやうの事はいつならひ給ふそと人々思ふ也

いとおかしけなる　是より葵の病中のさまを云なり

うちまもられ給　秘年ころうと〳〵しかりしを源の後悔なり何も不足もなき人となり　聞書かやうのをりふし源の思ひそひたるか葵のなく成へき前相也源のまもらるゝ也

院なとに參りて　秘源の詞葵へいとまこひし給ふ也

おほつかなからす　此程は隔心にて逢給はさりし也

宮のつとおはする　秘母宮なり母宮の立さらすおはするゆゑに源のこゝへ細々えまゐらぬと也

こゝちなくやと　無遠慮なるかと也

れいのおまし所にこそ　秘かやうによみきるへし

あまりわかく　母宮なとのあまりをさなき人のやうにあつかひ給ふを云也それて結句すき〳〵と本腹もなきとの給なりれいのおまし所は源とすみ給ふ方なるへし　花大宮の葵ををさなき人のやうにし給ふ程にそれに隨ひてかたへの人々もかゝるよしの給ふ也

つねよりはめとめ給　秘葵の源に目とゝめ給也　弄葵の源氏を又み給ふましき先表なり　聞書葵の死期のちかく成て名殘ををしく思ふ成へし

秋のつかさめし　秘八月也　河春の除目を縣召といひ秋の京官と云也春はむねと外官を任せらる外官とは外國の守介掾目に至まて縣召と云なり京官とは京にある諸司共をむねと任せらるゝ故なりつかさめしとは外國の諸司等をめして任官をさつけらるゝ故に云也除目天武天皇四年三月始之

大殿も參り　左大臣一上也殊に內覽の臣なるへけれ

は除目なと此人のはからひなるべし但當代外戚なれは左大臣よろつをとりおこなふべし

君たちも　弄左大臣の息たち云々　私云諸家の人たるべき歟云々

いたはりのそみ　秘人々つかさの所望とも也　河以勞望官心歟　私云いたはりのそむは懇切に望の心か心を勞してのそむ心なるへし

みなひきつゝきて　つかさ所望の君たち

しめやかなる程に　油斷の程に物のけのとり入たるなり

うちに御せうそこ　内裏に左大臣のおはする故人ゐやり給ふなりその程もなく葵の絶え入給ふなり

あしをそらにて　足のふみ所もおほえす中にあるやうの心か

みなことやふれたる　秘何事もうちさましたることく也

山のざすなにくれ　をりふし驗者なともさふらはぬ也

物にそゐたる　廢忘したるさま也　此詞榮花物語にもあり杜人なとにも行あたるなり

えきこえつかす　え申次さるなりゆするは動搖うこき騒くさまなり

たひ〳〵とりいれ　物のけの細々かやうにとり入てたえ入給ひしとなり

御枕なともさなから　死人をは枕をかふる事ありと云々物のけ故かやうの事しけかりしまゝ又蘇生の事もやと枕をもあらためすしておき給ふとなり枕をかふれは蘇生せぬなり　私大鏡義孝少將の事勘へし　彼少將はよし孝とそきこえし御かたちいとめてたくおはしましけりとしころきはめたる道心者にそおはしけるおもくなるまゝにいくへくもおほえ給はさりけれは母上に申給けるやう己しに侍ぬともとかくれいのやうにせさせ給なしはし法花經誦し奉らんの本意侍れは必歸まうてくへしとの給ひて方便品をよみ奉り給ひてそうせ給けるその遺言を母北方忘れ給ひつへきにはあらねと物も覺ておはしけれはおもふに人のしたてまつりけるにや枕かへしなとにやとれいのやうなるあり樣ともにしてけれはえかへり給はす成にけり後母北の方の御夢にみえ給へる「しかはかり契し物をわたり川かへるほとにはわするへしやはとそ讀給へりけ

るいかにくやしくおほしけん
かはり給ふ　蓬生あるましきさまのみゆる也
おほしはつる程　今まては猶さりともの心ありしな
りおやたちの心をおしはかるにさもあるへき事也
かなしき事にことをそへて世中をいとうき物に　閑
かなしき事は葵なり世の中のうきは院の御位さり
給ふ事〃時分かやうのつとふをいふと云々如何
私云おなしき事は葵の事なり世中のいとうきは物
のけにあらはれ給ひし人の事をおほすなりなへて
人の心うくおほさるゝとにや此末の詞にたゝなら
ぬ御あたり御とふらひともゝとあれは是は忍かよ
ひ給ふあたりのことなるへし今度物のけにあらは
れぬ人まてなへていとはしくおほすとみえたり如
何
院におほしなけき　桐壺みかと也
おもたゝしけなる　面目らしきなり
うれしきせも　大臣の悲の中にもかたしけなきを云
それにつけても涙はひまなしとなり思ひやるへし
いきやかへり給ふと　秘人の中まゝにいきやかへり
給とさま〳〵の事をし給ふあひたに相好のかはり
行くと也
とりへのに　葵の逝去八月十四日の夜なり葬送は廿
日餘なり
いみしけなる事ともおほかり　葬送につけてあはれ
なる事おほきなりかきのこしたる面白し
院をはさらにもいはすきさいの宮春宮　桐壺御門藤
つほの中宮冷泉院なと也
もこよふこととはちなき給を　弄まとふ事云々同心
歟　聞書腹はふやうなり立もあからぬなり　秘文
選第二郭璞江賦神蜧蝹蜦以浣沈イ遊　注云神蜧蛇也也イ蝹蜦
行貌也又日本紀第二豊玉姫化爲八尋大熊鰐匍匐逶
蛇いつれもたゝよひありく貌也　弄思案もこよふは
たゝよひありく貌也此心にて無仔細歟　弄文選の
義永正七三注之日本紀同文選之心永正八九注之云々　私云湛明か子に
おくれてかける願文の詞あり勘へし
よもすから　葬送の夜也
いともはかなき御かはね　花遺骨の事也　あはれに
書なせり
つねのことなれと　葬送なとのさまはいつれもかく
ある事なりされと源はかやうの事しり給はぬと也

人ひとりかあまたしも　人ひとりかなり　秘人ひとりは夕貌上をいふなり弄同

あまたしもみ給はぬ　かやうの事に源のなれ給はぬ故にや別してかなしき也

八月廿日あまりの有明なれは空のけしきも　折からあはれふかゝるへし紫上にわかれ給ひし時此よの月の事を思ひいたし給ふ事あり弄同　閑書夕貌葵紫みな八月にうせ給へり

おとゝのやみにくれまとひ給へる　八月廿餘日有明なれと大臣の子を思ふ心のやみは晴かたしとにや又只もみるへし

そらのみなかめられ　源のさまなり物おもふ時の體さる事なり

源 のほりぬるけふりはそれとわかねともなへて雲井の哀なるかな　秘源のひとり詠し給ふ也弄義あらはなり葬送のみち車のうちにて詠し給歟此次に殿におはしつきてとあり

露まとろまれ給はす　源也

としころの御ありさまを　源の葵の事をつく〲と思ふなり

なとてつひには　秘平生のうらみのあるさまにつひにはみなはさるへきと思ふ物をと也

世をへてうとくはつかしき　葵の心中を源の今思ひたまふ心なり

にばめる御ぞ　秘本妻の服の色のうすきなり輕服なり弄同　閑書にひ色の深からぬ也

われさきたゝましかは　源の心なり我かさきたちたらは葵上は重服にてあるへき物をと也

ふかくそ染めましとおほすさへ　閑書此詞おもしろくかきとめたりおほすさへあはれにてといふ心をいひのこしたるか又歌へかけてふかくそ染ましとおほすさへかきりあれはうす墨衣といひかけたる尤面白しかきりあれはとは重服輕服のかはりめ法令のさためある事也

源 かきりあれはうす墨衣あさけれと涙そ袖をふちとなしける　秘限あるとは物忌令なとの定あれはさのみふかくもそめすとなり　弄色のかきりあれはさのみふかくもそめすとなり此外祕に同し　私云涙のふかきを淵となすといふなりさて藤衣にかり用たるなり藤を淵になしたる例此物語におほろ月夜と

贈答の歌あり
ほうかいさんまいふけん大しと　法界三昧は普賢菩薩の徳なり天台五佛順悔云南無法界三昧普賢相又大唐西院和尚禮拜詞にも法界三昧普賢菩薩云々文句云大論稱菩薩爲大士亦云開士也傳教御作　普賢は法界にあらゆる所作を三昧とす觀音は慈悲を三昧とし給かことし三十七尊一聚合身普賢延命大願薩埵秘同
法師よりもけなり　河勝なり露よりけなり又螢よりけに皆此字の心なり又云賢なり又異也萬葉　私云法師にもまさりたるなり
なにゝしのふの　河「殘しおくかたみの子さへなかりせは何に忍ふの草をつまゝし　弄後撰にあり子をみてよめる歌なり河に引
なからましかはとおほし（もひイ）なくさむ　源の夕霧をみてせめてなくさみ給ふ也此段此歌一首の詞にて書り
宮はしつみいりて　秘母宮也
御わさのいそき　或抄中陰の事云々只佛事歟　秘此程は產かたの經營のみなりしを思ひかけさること出來ぬるなり凡此物語は盛者必衰の理を悉皆あらはせり葵上は夕霧を誕生ありて十分なるへきに此事出來ぬるをいへり七日々々の事なるへし
なのめにもかたほなり　葵の事を草子地に評してかけり
又たくひおはせぬ　秘女子の兄弟なき事也
袖のうへの玉くたけたりけん　肇掌上之珠摧心丹伊行釋　或抄云古[illegible]文句云々　奥入云非本文云々　案之袖上之珊瑚といふ事あり　弄本文不分明可尋又切なる心なるへし　秘たくひなきをいふなり本文不分明　私云高國朝臣法名常恒　ひとり子におくれてなけきけるをとふらひつかはしける歌の中に逍遙院「たくひとてふたつたになき袖の上の玉くたけけん心をそしる　さなから此詞をとれる
二條院にだにあからさまにも　源の二條院へさへおはせすとなりまして他へは中々おはせぬなり
所々には　しのひ給ふかた〳〵なるへし
かのみやす所は齋宮の左衛門のつかさに入給ひにけれは　齋王三年齋の間卜定所より諸司へ入たまふことなり左衛門府は近衛猪熊近衛以北猪熊以東廳屋とて有齋宮入御諸司儀兼日上卿着陣令勘御禊日時

時幷定申前駈以頭藏人奏聞或殿上辨當日被進扇五位藏人爲勅使頭若五位藏人兼日奉仰令殿上人書之頭若五位藏人催遣二三牛車幷内侍典侍藏人所前駈也次入二御野宮一一如下入二御諸司一儀上云々　八月諸司に入給へき也去年中に大内の諸司へ入給へきを延引有を云なり左衛門のつかさへ入給事みえされともはやありしにて有へき也左衛門のつかさは猪熊也

いつくしき御きよまはり　河嚴重の潔齋　秘いよ〳〵潔齋なるにかこつけたまふなり　秘諸司に入給てはいよ〳〵神事嚴重成へし今源は葵の輕服なれはそれをはゝかるよしにて御息所へ無音なり

うしとおもひしみにし　私云うしとおもひしみにしは父帝の御位さり給ふ事なとなるへしそれに此葵の事世もなへていとはしくとは物のけなとの事をみ給てから人の心はうき物なりといとはしき御心のいてきたる成へし

かゝるほたし　秘夕霧の事なり　私不及引歌歟

ねかはしきさま　出家なとも有たき心なるへし

まつたいのひめ君　秘紫上になり　さう〳〵しくて物し給ふらんとは此程二條院へもおはせぬ故なり

よるは御丁のうちに　源のさまなり葵とつねに住給し方なるへし

殿ゐも人々は　女房達なり

ちかうめくりて　御丁のめくりなり

時しもあれと　河「時しもあれ秋やは人のわかるへきあるをみしたに戀しきものを上句同し　さるはよさむになれる比しも　弄秘引歌同　或抄云さるは夜さむになれる比しもの歌をこゝには引用へき歟云々

えりさふらはせ給ふ念佛の　秘こもりゐる僧也　河常行三昧　引聲に阿彌陀經を誦する也

ふかき秋のあはれ　秘引歌に及へからすおもしろき詞なり

身にもしみけるかなと　河續古秋上「吹よれは身にもしみける秋風を色なき物と思ひけるかな紀友則　弄吹よれは身云々いつれの歌にても心通し哀ふかからんやよろかしるへき「身にさむく秋のさ夜風吹なへにふりにし人の夢にみえつゝなとも哀なるへきにや

あかしかね給へる朝ほらけの霧わたれるに　折ふし
を推はかりて音つれ給へるなりかやうの心つかひ
御息所はすくれたる人とみえたり
菊のけしきはめる　秘いまたひらけさるをいへり
なり　弄ひらけさしたる體なるへし　聞書開かゝりたる
こきあをにひ　弄花田に青げのましれるなり服者の
方への紙の色なるへし菊も同色なるへし　花田の
こきなり菊の葉の色にかよへるなるへし　河菊の
枝には白色にても紫の紙にても有へけれともいま
たひらけされは青にひの紙に付るなり葉の色也
さしおきたり　或抄云御息所の御文の折ふしおもは
ゆく思ひて是非をいはて源の御まへにさしおきた
るにや云々聞書此心に同し
いまめかしうもとて　何ともいはておきたるを忍ひ
たる方なとの文のやうにとおほしていまめかしく
もとの源のとかめ給へる詞にや
きこえぬほとは　弄文詞　花人のなけきはとふにつ
らさのまさるやうなれはきこえぬとなり秘同
六條御息所　人の世をあはれときくも露けきにおくるゝ袖を思ひ
こそやれ　秘人の上を聞ても我身も同事と思ひやら
れて哀なる義也菊によせたり秘同　私云葵の事を
御息所の公界の事に聞ても露けきに源の袖の上思
ひやらるゝとの義か如何
たゝいまの空に思ひあまりて　弄問給ふ事もいかゝ
と思ひわつらひ給へともなり　御息所よろつすく
れ給へり　秘これまて文の詞なり　或抄云きこえ
ぬほとは齋宮のきよまはりによりておこたりぬ
と云文の詞なりさて源の御かたよりもさらはお
ほしゝるらんとあれは此義可然哉云々　又弄一本に
源氏御息所へ此程はとりわきうと〳〵しきほとに
思ひ給ふもいかゝなれとも折ふしの過しかたきと
なり　花鳥の義は別なり云々
つねよりもゆうに　生得手跡すくれたり
つれなの御とふらひ　今の時分此あたりの事はひと
うるさけれとも手跡のみことなる所はうちおきか
たきとなり　つれなのとは物のけなと出給へる人
のしらすかほして只今とふらひ給へる事也
さりとてかきたえ　秘源の心なり　是より御息所へ
源のかたのさわきをいかやうにしてよからんそと

色々に思ひ給ふなり
人の御名のくちぬへき　聞書只今はたゝ源の義絶ならは物のけに出給ひし事治定そと人のしるへきとなりされは御名のいつるなり
過にし人はとてもかくても　秘葵上は定業にてこそ有つらめと也
さた／＼と　さたかにとなり物のけにあらはれし事なり直にさた／＼と聞給はすはこれほとまてうとましくはおほすへからす直に聞し故一段うるさく思はるゝとなりさやうに思ひたまふは源の心にえおほしなほすましく心にしみたるなりと思ひしり給ふ也
斎宮の御きよまはり　いま斎宮は一段の神事なるによりて穢所より文をまゐらする事もいかゝと源のためらひ給也
わさとある　秘わさと音つれ給ふを返事なくてはいかゝと也
むらさきのにはめる紙に　河紫の黒くてにひ色にかよひたるなり　秘花田にあか花の入たる色なりにはめるは何も服者の用る色也　秘にはめるはくろみたるなりにひ色なり
こよなうほとへ侍にけるを　秘源の文詞也此程も申たき心なからとなりこよなきはことのほかほとへたるとなり
つゝましきほとは　源の軽服の事也　秘穢所なるによりて斟酌する也　花つゝましきはたゝからはしき心なり是よりも聞えたくあれと折ふしはゝからせ給ふへきをおしはかりて聞えぬとなり
さらはおほしゝるらん　私是は御息所の文の詞にきこえぬほとはおはしゝるらんとあるをうけてそれたにもさやうならはこなたの心をもおほしゝれといへる詞なりつゝましきほとは源の服忌の事なりしからは御息所よりの詞も神事ゆゑ音つれも申さぬといへる義とみてしかるへき歟如何　花秘の義は各別也
源とまる身も消しもおなし露の世に心おくらんほとそはかなき　秘世間の無常をいへり　弄心おくらんとは御息所の御物のけなとに成給ひし事をほのめかし給なり秘同　私云おもては世間の有様は消しもとまるもおなし露の身なれは葵の事なとをしひて思ひ

なけくもはかなき事といふなり下の心は御息所の物のけなとにあらはれ執着のふかきはゝかなき事とふくませたる義なるへし

おほしけちてよかし　河此程のおこたりを思けち給へとあるか神事なれは穢所の文をはよく御らんせしとうたかふ也　花何事もあたなる世にさのみおほしいりそといふは物のけに入給事をほのめかしたる詞なり　秘何事も世に心なとゝめ給そうらみを殘すはあしき事と御息所を教訓の心也

御らんせすとやとてこれにもと　河内本誰にもと有　河神事なれは穢所の文はよも御らんせしとうたかふなり　花齋宮の御きよまはりの折節なれは穢所の文はよも御らんせし誰にてもの方へと云心なり　弄服者の方よりの文なれは御らんせぬ事もやとて此文にも思心を書つくさぬよしなりかこつけたる詞成へし　秘河内本誰にもとあり花鳥釋も同之然共青表紙にはこれと有心は御息所の詞に聞えぬほとはおほししるらんやとあるをうけてこれにもとみるへしこなたも同し心と也　源の文の詞にさらはおほしゝるらんとてといへる詞の末なり　私云いつれも穢所故の事とみるへきか

さとにおはする　御息所の里亭なり

しのひてみ給ふなり　いつれも詞に穢の文をは神事にはゝかるよしみえたる也

ほのめかし給へる　秘まへのかつはおほしけちてよかしの詞の事也

心のおにゝ　河わかあやまちたる事を人やしるらんとおそろしく思ふ心なり鬼とはおそろしき事をいふ也　私心にかゝるからやかて思ひあたる也

されはよと　秘わか靈に出たる事は誠なりけりと思ひしり給ふ也

猶いとかきりなき　御息所の心也　身の上をさまさまにおもひつゝけ給也

院にもいかに　桐壺帝也

こせんはうのおなしきおはらからと　弄桐御門と前坊とは御兄弟なるよし此詞にてみゆ　花前坊は桐壺帝の同腹の兄弟なれは齋宮も御門の御ためには御めいにておはしますなりやかて内住もし給へとは御息所の事を院のの給ひし事なり

その御かはりにもと　秘前坊の御かはりにもと院に

はおほすによりて内住をもし給へとねんころに申給ひしかと自然院の心かけ給ふ事の有てはとて參り給はさりしと也　弄

やかて内すみ　前坊は春宮なりなくなり給てかく前坊と申なり春宮坊は大内にあれはやかて内すみといふなり御息所の六條京極の家におはせしはちゝおとゝの里亭へ退出の義なり

心よりほかにわか／＼しき　此源の事にあはさるよしなり

れいのさまにも　御息所の心も心ならぬ也　私云物のけに成給ひてから又かやうの事につけて何かと御心の本心にもなき也

さるは　御息所をさして云さはさなからなといふ體也

昔より名たかく　秘よしある人と也

野宮の御うつろひ　河四條の西の末なり　弄諸司より野宮へ入給ふ也秘同　花延喜式云凡齋内親王定畢即卜二宮城内便所一爲二初齋院一祓禊而入至二明年七月一齋二於此院一更卜二城外淨野一遷二造野宮一畢八月上旬卜二定吉日一臨レ河祓禊即入二野宮一自二遷入日一至二明年八月一齋二於此宮一九月上旬卜二定吉日一臨レ河祓禊參二入於伊勢齋宮一　今案齋宮はすへて三年の御神事にて其中に三度の御禊あり初齋院へ入給はんとて御はらへ明年野宮へ入給はんとて又明年伊勢へくたり給はんとて御禊ある事なり野宮の御うつろひは二年目の八月の事也

殿上人とも　わかき人ともの心もそむるなり

朝夕の露わけありくを　野宮のあり樣をおもしろく書なせりやくになんとは此比のしことにする心也

きゝ給ひても　秘此御息所は天性よしある人にて人人心よせ奉るよしを源のきゝ給て也

ことわりそかし　秘人々を源の聞給てことわりと思ひ給ふ也

世中にあき　御息所の伊勢なとにくたり給ふは又をしき事なりとさすかに源のおはす也

御法事なと過ぬれと正日まては　河正日とは四十九日の名也然は御法事過ぬるとは追善を引上て行はれたるか　秘四十九日の事を云なり法事は四十九日よりうちにしあけ給成へし

心くるしかり　源の御つれ／＼を葵の兄三位中將細

細まゐりてみまひ給ふと也　秘頭中將なり三位に成給事こゝにみえたり　河三位中將　文武天皇四年月日太神宮市麿始叙從三位正暦廿一年十一月日坂上田村麿叙從三位元左中將是三位中將始歟

かの内侍そ　秘源典侍也

おはおとゝのうへな　秘源の詞年老たるを祖母といひてわらひ給なり　秘うは殿と云心也

かのいさよひのさやかならさりし　秘末摘にあひ給ひし時の事いさよひの月にひたちの宮にて頭中將の源をみあらはしたりし事也弄

秋の事なと　秘末摘巻に常陸宮よりの後朝に頭中將猶いとねふたけなるなとたはふれし時の事なり此段かやうによく句をきりて分別せされはすへて心得かたし弄同　花是は末摘の事也頭中將のもろともに大内山とよみしは春の事なり源の末つむの君に逢給へるは秋の事なりさていさよひのさやかなりし秋とはいへるなり　私云花の義いさゝか相違秘の義を用へし

くまなく　のこる事なくといふ心なり

時雨うちして　秘是は他日の事なり十月になりての事なり　弄一段なり上の詞の同日とはみるへからす　私云前の詞は此程三位中將の細々おはしてのさまを大かたにいひたるなり日をさしてとは心得へからす

中將君にひ色のさしぬき　花中將君は姉妹の服三月いとま廿日なり鈍色直衣平絹冬は練有レ裏夏は生無裏指貫は夏冬同鈍色は移花にて染なりうすらかとは十月の更衣の頃に色をうすくすること也　秘更衣の頃に鈍色をうすくなし給也　弄直衣花にあり　私更衣は四月朔日十月朔日兩度也　服者更衣事　河萬壽四年十二月御堂薨長元々年夏有沙汰宇治關白有更衣被着夏裝束重服猶有例輕服更衣勿論也　經任卿云服者夏冬衣替事公卿並辨官所爲也顯官之故也自餘人不必着歟云々　兄弟の服なれは色のうすらくか十月の更衣なり姉妹の服を着する例可勘　同父兄弟姉妹暇廿日服三月也物忌令此心歟私云河の義をみるに三位中將公卿なれは更衣したるか

いとをゝしう　河雄拔日本紀　雄々しきなり男々しき心歟三位中將のさま也

君はにしのつまと　源也
涙とあらそふ　時節の景氣を思ふへし時雨にあらそふなみた面白し
雨となり雲とや成にけん　河文選　宋玉神女賦曰武帝之妾女名瑤姫未行而巳封于巫山之臺所謂巫山之女高唐之姫曰朝爲行雲暮爲行雨朝々暮々陽臺之下有所嗟二首　劉夢得　庾令樓中初見時武昌春柳似腰支相逢相失兩如夢爲雨爲雲今不知鄂渚濛々煙雨微女郎魂逐二暮雲一歸只應下長在二漢陽一渡化作中鴛鴦一雙上飛　劉禹錫婦におくれて作詩也　秘劉禹錫が句を引へし
つらつゑつき給へる　源のさまなり
女にてはみすてゝ　中將の心なり　源を夫にもちてなくならん女の執心のとまらぬ事はあらしと中將の色めかしき心から思ふとなり
ちかくつい居給へは　中將の源の御そはちかく居給なり
ひもはかりをさしなほして　直衣のくひかみのいれひも也　花夏のひもの損したるによりてとりかへたるへし　秘花鳥説難用中將のちかう居よるゆゑにしとけなきすかたをすこし引つくろひて直衣のいれひもはかりをさしなほし給へるなるへし弄同
これはいますこしこまやかなる　河源氏は夫婦なれは三位中將より服色こかるへきなりこまやかは濃とかけり　私云物語なとをこまやかにといへるは仔細とかけり　河の義不審　花本妻の服も三月なり源氏は更衣し給はす色もいさゝかこまやかなるなり志の淺深によるへき事なりひもはかりをさしなほすは夏の袍の損したるによりてとりかへたるへし　更衣は重服の人も兩説ありいはんや輕服は更衣勿論なり然共志によりて更衣せぬも人の所爲たるへし　私云河の義不審本妻の服も姉妹の服も暇廿日服三月ともに輕服なり然とも三位中將は更衣の頃にいろをもうすくなしたるなり源は更衣し給はぬゆゑそのまゝ色こきなり源の更衣し給はぬも心さしふかき故なれは也
くれなゐのつやゝかなる　秘弄花にみえたり　弄輕服に紅の絹を用事例あり見花鳥下襲の事とみえたり　花鳥きぬの事歟いかゝ　花輕服に紅の絹を用る事は長保三年二月一日定子皇女心喪に御堂關白强て

火色の下襲を着し給ふ由みえたり政事要略に其仔細しるせり

中將もいとあはれ　秘我妹なれはあはれに思ひ出給なり

三位中將雨となりしくるゝ空のうき雲をいつれのかたにわきてなかめん　秘源の誦し給ひし句をうけて中將のよみ給なり前の劉禹錫か二首の詩のうちに只應長在漢陽渡ともいへるをこの葵上の行衛はいつくとも定かたしとなり　私上の詞面白し　それを定なき時雨の空にそへよめるなり

ゆくへなしやとひとりことのやうなるを　秘此語面白なり他人の事ならは源へよみかけ給へきを我妹の事なるゆゑに卑下したるさまなり　私行衛なしや引歌あるへきか

返源みし人の雨となりにし雲ゐさへいとゝ時雨にかきくらすころ　弄此歌尤あはれなり結句この餘情これを思へし　秘面白歌なり結句の餘情思ふへし中將の歌は詩の句をうけて尋常の事なり雨と時雨とを引はなして云なり是はみし人の雨と成にしは八月わたり成しかはや十月はかりに成けるよと時節のおしうつりたるを雨と時雨とにていひかへたる殊勝なり

あさからぬほと　秘中將の心なり　源のおほし入たるさまのしるしみゆる也

あやしう年ころは　秘年比は父左大臣のさま〳〵もてあつかひ給故又帝の御敎訓大宮の大切にし給故かた〳〵のさりかたさにうはへはかりの御志と思ひしに今愁傷の樣は眞實の志の淺からさりけるよといとゝふかく葵上のあたらしくおかしき事を中將の思ひ給也又源の御心さしも此比そひたるなり

くしいたかりけり　秘苦痛也

かれたる下草の中にりんたうなてしこ　弄此景殊勝也可見云々　河拾遺十月はかりに床夏をりて人のおこせたりけれは冬なれと君か垣ねに咲けれはうへとこなつに戀しかりけり

わか君の御めのとの宰相の君して　夕霧のめのとなり中將のたちたる跡にて大宮へ源の奉り給也

草かれのまかきに殘るなてしこをわかれし秋のかたみとそみる　聞書草かれは葵のことなてしこは夕霧歟　私云なてしこは夕霧わかれし秋は葵の事歟

にほひおとりてや　弄夕霧は大宮の孫なれは葵上よりは次なるへき心なり大宮の歌也秘同　秘後拾遺哀傷小式部内侍なくなりてむまこともの侍りけるをみて　和泉式部一とゝめおきて誰をあはれと思ふらんこはまさるらん子はまさりけり　とゝめおきて和泉式部殘りたる孫よりも小式部を悲しくおもへは小式部も我よりも子ともをこそはかなしく思ふらめとなり殘る孫は小式部か子なり

けに何心なき　夕霧のさま也

宮はふく風につけてたに木の葉よりそもろき　花俊成卿の歌こゝの詞をとりてよめるにや「あらし吹岸の紅葉の日にそへてもろく成行わか涙かな　秘花に俊成卿の歌をいへり面白し　私河海寡婦賦略之　私心なき風につけてさへ心をいたましめ給なりまして源の御音つれにはとりあへす涙もこほるるとなり

大宮 いまもみて中々袖をくたすかなかきはあれにしやまとなてしこ　弄かきほあれにしは葵上のなくなりし事なり　私云此初五文字やまとなてしこを形みと今もみてと云心也

猶いみしうつれ〳〵なれは　私あはれのなくさめかたきにと也

けふのあはれは　時雨なとして哀なる空のさまなるへし　秘哀のなくさめかたきにとなりたゝいまの物の哀は此姫君ならてはかひあるさまの返事なと申へき人もなしとなりつねにはうちとけたる返事なとなくともけふのやうなるあはれなとをはみ過し給ましき御心と源のみしり給ふ也

くらき程なれと　秘暮かたなり

たゝまとほけれと　秘源より久しく音信給はされはなり

さの物となりにたる　秘さやうの物といふ詞なりその物也　源より槿宮へ久しく音信給はて文あれは例のけさうの文にやと思へとも此文を内々にてみしにやたゝ折節のあはれはかりなる文なれは女房のとかめあらしとて御覧せさするなりそれをさの物となりにたると云り秘同　私此義いさゝか心得かたし案之にたえまとほけれとゝは細々の事にてはなけれとも文かよはしはありつけたる御中なれは今さらとかめん事にてもなけれは御覧せさする

也まことの情なとかはし給はぬ中は文かよはしも
あるましき事なれと此槿の姫君はつれなき物から
をり〳〵の返事なとはしたなからぬさまにし給ふ
と前にもありさの物とはさうある物になりつけた
る御あひたと云にやともおほゆる
空の色したる　河鈍色唐紙　花是も服者の用る色な
り秘弄同
源わきて此くれこそ袖は露けゝれ物思ふ秋はあまたへ
ぬれと　秘槿姫君にかけていへりつれなくて年をふ
るよし也
いつも時雨はと　河「神無月いつも時雨はふりしか
とかく袖ひつるをりはなかりき　秘引歌よくかな
へり弄同　源の歌と心かよへり
御手なと心とゝめて　いつとなき中に一段とうつく
しく執してかき給へるなり
すくしかたき　秘此返事はなくてはと人々も申なり
返事なくて過し給はんはかたき事となり
みつからもおほされ　槿の御心にも折からあはれに
思給ふなり
大うち山をおもひ　秘これより文の詞也　河白雲の

九重にたつ峯なれは大うち山とむへもいひけり兼
輔　此歌の心猶不叶歟此外在大内山歌歟今の歌の
心ならは白雲のかさなりたるを思ひやるか遠心歟
花大内山は是も大内の事なり其故は左大將の直廬
は宜陽門の内の廊にあり右大將の直廬は陽明門の
内の廊にありともに中重の門の内なり西宮抄にみ
えたり槿の姫君の返事にそなたの事を思ひやり奉
れとも心のうちをはよもしらせ給はしとなり心は
歌の詞にみえたり　是より文の詞也花鳥説大内山
は大内の事也大將の直廬を云とあり又は亭子院仁
和寺の大内といふ所におはします時堤中納言兼輔
勅使に參て白雲の九重にたつ峯なれは大内山とむ
へも云けりとよみしことを思ひていま源氏の物さ
ひしくこもりおはするによそへての給へるなり此
二説はいつれにてもとなり弄同　聞書源のこもり
て居給ふ事をいふなり
えやはとて　聞書　秘弄の義に同し　河色ならはう
つるはかりも染てまし思ふ心をえやはみせける
秘引歌同心はそなたの事を思ひやりたてまつれと
も心のうちはよもしらせ給はし思ふ程をもえみせ

ぬと云心なり弄同
返権姫君
あきゝりに立かくれぬときゝしより時雨るゝ空もいかゝとそ思ふ　秘葵上におくれ給ひしよしなりうちむきたる歌のさまなり
なに事につけても　秘源の心なり大かたの事ともをおもひつゝけ給ふなり六條御息所なとのすくれ給へるにも又思ひ所のある事下におもへる心なり弄同
つらき人しもそ　槿宮又は藤つほなとの事を思ひての給なり源氏につらき人也されともすくれたるはこれらにこそはとなり引歌まてもなし秘同　私云あやにくなる事に心のとまる源の御くせ故か
ゆゑよし過て　御息所なとのたくひなり世界のましはりを云也あまりに交こき人はあく心有也人はとほあさにてあるへしと也　弄六御息所なとの類さま／＼おほしあつむる也　私人めによき人とみゆる程なるはゝや過たる心ある也あまりの難とは（半イ）事過たるかた也槿藤壷なとか過不及なき人と也
たいの姫君をさは　秘紫上をはよくおふしたてんと也　さはおふしたてしとはゆゑよし過たるやうにはおふしたてしと也おふしたつるは生長さする也
つれ／＼にて　秘紫上の事なり
めおやなきに　はゝなき子ともあり　秘源中最秘抄に無用の沙汰あり不用之
みぬほとうしろめたくいかゝ思ふらん　弄紫上いまた實事もなく物えしなとなき程の事なり　秘紫上の心には我を恨給ふ事の有ましきと思のみ心やすきと也　聞いまた嫉妬の心なき事也
中納言君と　秘葵上方の女房源の心かけ給ふ人弄
さやうなるすち　此御おもひの程は中納言君にも心かけ給はぬ也
あはれなる御心　中納言の心
大かたには　よのつねのさまにはかたらひ給なり
かうこの日比　秘源の詞
みなれ／＼て　河「みなれ木のみなれそなれてはなれなは戀しからんや戀しからしや　秘引歌同此歌にてかけり　弄戀しからしやとよみきるへし
いみしき事　秘葵上の事也
うち思ひめくらす　惣別の事にたへかたき事おほきとなり

いとゝみなゝきて　さふらふ女房達のさま也物あはれなる夕にてみなゝきなとしたるか又源のかくの給ふにいよ／＼泪を催す也
いふかひなき　秘みな／＼の詞葵事也
なこりなきさま　秘今よりは源の御出も何故にか有へきの由なり
あはれとみわたし　秘源のみわたし給也
なこりなくはいかゝは　源の詞何とてさやうにかきたえ無音あるへきそと也
心なかき人　葵のおはせすともこゝに堪忍してさふらふ人たにあらはわかこゝへうと／＼しからぬをはみはてんとなり
命こそはかなけれ　秘弄引歌の沙汰なし　聞「命たに心に叶ふ物ならは何か別れの悲しからまし
火をうちなかめ　秘おもしろきさまなりみるかことし　弄此詞妙也みるかことし
とりわきてらうたく　秘葵上のとりわきおほしたりしあてきと也
ちひさきわらは　是あてき也　河紫日記に上東門院の上童に此名有由みえたり昔はなにきといふ事さたまれる事なり
あてきはいまは我こそ　あてきに源のゝ給詞なりいまは葵の御かはりに源をたのめと仰らるゝなり
ほとなきあこめ　秘程なきはちひさきよし也
くろきかさみくわざう色のはかま　秘服者の用る色なり花に委　河黒汗衫　萱草色紅の黄はみたる色也軽服なり　花萱草色は柑子色と大略同色あひはすはうにたうさを入てそむる由みえたりふるき繪なとにはちと黄色のましれるなり
むかしを忘れさらん人は　秘源の詞なり
をさなき人を　秘夕霧也
人なかゝるへき人　人々のこゝに心なかくさふらへとある事をのみ源のゝ給ふなり
いてやいとゝ　秘何との給とも葵上のまし／＼し時のやうには立入給へき事も有ましきとなり　私云葵のおはしましゝ時さへ御うと／＼しき折もありしにましてはとおもふ人々の心なり
人々にきは／＼ほとおきつゝ　遺物なとくはり給なり人により差別のあるなり
かの御かたみ　御形見にといへるも皆葵の物也

君はかくてのみも　源のはしめて出頭のさまなり
遺物なとくはられけるは四十九日の比なるへし
御せんなと　源の前駈なとの人々也
をりしりかほなる時雨　秘此段殊勝云々
すこしひまありつる袖　秘此時のさま思ひやるへし
日數も過行て愁歎もいさゝか障有つるにいま源氏の出給折節の様折しりかほなる空のけしき感情深きものなり書類心を付てみるへし
かしこにまちきこえんとなるへし　此程源の葵かたにおはしつれは源氏の家司以下皆こゝにさふらふへしそれをさふらひの人々といふなりその人々の院へ御供に参らぬは二條院へ参りて源を待申へしとて出るとなりこゝのさま一段物さひしくなるへしとみるへし
けふにしも思ひとむましき　秘あなかち今日よりはこゝをふりすて給へきにてもあらされとももとなりこゝにとまれる人々の心中を思ふへし
宮もけふのけしきに　秘源の出給ふをいへり
宮の御まへに御せうそこ　源の出給ふを大宮へ使して御いとまこひあるなり

院におほつかなかり　秘源の詞　弄源の今日の出頭のいはれをのへ給ふ也
あからさま　白地とかけりかりそめなとやうの心也
そなたにも参らぬ　大宮のかたへ源のおはしたらは思ひのもよほしなれは人して申と也
しつみ入て御かへりも　大宮は返事もえの給はぬ也
おとゝそやかて　父おとゝはおはしたるなり
いとたへかたけに　秘おとゝの愁傷のさまなり
御袖もひきはなち　大臣のかほに袖をあてゝ涙をまきらはす也
おとゝ久しうためらひ　秘涙にむせひたる體なと妙也
よはひのつもり　秘大臣の詞
さしもあるましき　此段まことにことわりにもあはれにもかきなせりましてひるよなうなと面白しせめておもひしつめて　おとゝの用意のさまなりの給ひかねたるさまをおもふへし
君もたひ〳〵　源のさま也
おくれさきたつ程の　秘源の詞　河新古「末の露もとのしつくや世中のおくれさきたつためしなる

らん遍昭

世のさかと　私悪の字をよむと云々　然らは悪はうきと云事なと丶同心歟世のうき事のならひなと丶云やうの心か猶たつぬへし　又云此世をは五濁悪世とおくれさきたつ事は濁悪の世そといふか或抄さかとは色々あれとも恐（悪イ）の字を萬葉にはよませたり云々　私云もし悪の字か

さしあたりては　眼前ある事には世のならひとも思ひなされぬ事そと也

院にもありさまそうし侍らんにおしはからせ　秘父御門の御心を源のおしはかりての給なり　弄院もよく御分別ありて推量し給ふへしと也

さらは時雨もひまなく侍るをくれぬさきにとそ丶のかし　秘いまおと丶の心は片時も源をと丶めてみ給たき心あるへきをさらはとの給ふさまのあはれなる心ふかきものなり　私時雨のひまもあるましきさまなれはくれぬさきにとく院参もあれと大臣のもよほすなり聞書に只今源のかたからふりきりては立給かたき所なりそれを大臣のおしはかりて抑留ありたき心なからそ丶のかし給へる御用意のほと奇特なり

うちみまはし給ふに　源のみまはし給ふなり

おしこりて　一所にこりあつまりたる體なり

あはれと見給ふ　源の心也

おほしすつましき　秘大臣の詞なり夕霧事也　弄左大臣の詞なり女房たちにおほせてわか心中をのたまふなり　私夕霧の事をの給ふか云々

たちよらせ給はしやとなくさめ侍るを　源のいかなり共夕霧を御らんせんとておはせぬ事はあらしとおと丶なとは思ひて心をなくさむるとなり聞書には大臣のかくいひきかせて人々の心をなくさむるとなり猶始の義可然歟

おもひやりなき女房　分別なき女房たちなとは源の今日より後ははたとおはせしと思ふなりおほしすつる古郷なとおもしろくかきなせり

なかくわかれぬる　葵上の死別よりも源の生別をなけくとおと丶の丶給ふなり

ことわりなる　大臣も各おもふ所を尤と也

うちとけおはします事　秘源の葵の御方にうちとけてまし〳〵し事はなかりしかとなり

さりともつひにはと　秘かやうにてはゝてましきと
たのみ思ひしと也
けにこそ心ほそき　秘今日よりはいよ〳〵心ほそきよしなり　秘各の中ことくまことに心ほそき夕そとなりわれはとき〳〵にても立よらせ給はぬ事あらしと思ひなくさむれともまことに心ほそしと也
いとあさはかなる　弄源の返答なり
まことにいかなりともと　聞書大臣も葵の存生のとき源の疎遠なりし事をの給ふを源も又陳する詞源の葵上のつひにうちとけ給はさりし事をいふ心也
おのつから御目かるゝ　聞書もとはかへりて心やすき故にうとき事もありしなり今は中々さやうなるましきと也
中々いまは何をたのみにて　弄葵のおはせし程は油断の心にてとたえも有しと云心也
いま御らんしてん　秘過しかたは心のをこたりもありつるなり今よりは御らんせよと也
いり給へるに　大臣の源を見送りてまた葵の住給ひし方へかへり入給ふ也
うつせみのむなしき　源氏君の此程の御さうしを出給へる留守の事をいへり下の手ならひすて給へるも源の事也　秘葵もうせ給ひ源も今立出給へるあとはたゝせみのもぬけのことしと也弄同　或抄御説に蟬のもぬけはかたちは少もかはらずして身はなきもの也少も所の様かはらねと住人のなきかよく叶へる所云々
手ならひすて　秘源の也
わかき人々は　秘おとゝのあまりなるまで愁傷し給ふをいふなり　私あまりなるまてとはみるへからす年より給ひて愁傷し給ふさまなるをすこしおかしく思ふさま成へし
あはれなるふることゝも　手ならひの事とも也
からのもやまとのも　河詩歌也
さうにもまんなにも　詩歌を眞草又かんなゝとにすさひかき給へるなるへし
かしこの御手や　河是は賢の字也　秘源の手跡をほめ給ふなり
よそ人にみたてまつり　秘草子地　大臣の源氏をよそ人にみんは口をしきなるへしと察してかけり
ふるきまくらふるき衾　弄鴛鴦瓦冷霜華重舊枕故衾

誰與共秘同長恨歌文集第十五引勘之　弄長恨歌唐本には多分翡翠衾寒誰與共とあり舊枕故衾とあるは和本の義にやおほつかなし　私云古文眞寶に所載翡翠衾寒云々白氏文集第十二唐本引勘處舊枕故衾誰與共云々尤叶源氏の心なり永正七七三記之

源なき玉そいとゝかなしきねしとこのあくかれかたき心ならひに　花「聲をたにきかて別るゝ玉よりもなき床にねん君そ悲しき　秘我心から葵の玉しひもさそあくかれかたかりつらんと察したる也此義よろしきなり花鳥に聲をたに云々此歌をひけり此歌の心はなき魂の思ひおきたるさまなり此義不叶歟聞書花鳥の引歌は女のなくなるとてよめる歌なり尤面白云々　私案之なき床にねん君そかなしきとも葵のおもひおきつらんと思ひやりて源の方からもいとゝかなしく思ふ也その故は我も此床をあくかれかたきにて思ひしるとにや如何

霜の花白し　秘河海に連昌宮賦文選　弄おもしと有を白と書替たり此ことくの事所々に有り　以前の同詩歟　重與白參差するにや如此常習なり郢曲なとにも本字を改て當座の景を云是故實なり古來其例なり此物語中にも右將軍墓草初秋とある詩を草初靑なとゝ誦せり又四條大納言公任の和漢朗詠集におほく古集の句を文字を改て入たる事あり文選連昌賦一句獲落危牖壞宇秋有秋風とあるを有秋聲とあり樂天詩に可是禪房無熱到とあるをも不是禪房無熱到と改たり是等の例か云々陰森古柳疎槐春無春色獲落云々

源君なくて塵つもりぬる床夏の露うちはらひいく夜ねぬらん　とこなつを床に用るなり玄宗の楊貴妃にはなれたるときを思ひやりたり此二首は文集の二句を題にてよめる歌なり此句によせて思ひをのふる也　或抄なてしこは夏より冬まても咲物也　「霜さゆるあしたの原の冬枯に一花さける大和なてしこ　定家　私初五文字結句たつぬへし

一日の花なるへしかれてましれり　花一日前栽に枯殘たる花を折て草枯の籬に殘るとよみ給て大宮に奉らせ給ひし其花の枝の手習の中にましりて有を云也　秘上の詞に枯たる下草の中にりんたう撫子なとゝ有し時の花なり弄同　弄歌は床夏を床に用ひたる長恨歌の別の心あり

宮に御らんせさせ　弄大宮に左府のみせ給なり
いふかひなき事をは左大臣の詞　秘葵上の事は無常の習ひ類ある事なり宿業を思ひて慰とすれともとすれはまた戀しき凡情のならひなり猶さま〳〵に思ひさまし侍となり
かへりてはつらく　聞書契のなかゝらぬをうらみて思ひ忘れんとの心なり　私此段葵の事なりかゝる事は無常のならひなりされとも契のなかゝらぬは先の世もつらき事そとかこちて思ひさまさんとなりされと猶戀しさはたとへかたきと也
この大將の　秘源をよその物にみなし侍るよと也
此二宮のかなしさをおとゝの給也
かれ〳〵におはせし　葵へ源のうち〳〵しかりし事なりそれさへ物思ひなりしに今よそ人にみなしては朝夕の光うしなひたるやうなりとなけき給ふおとゝのさまなり
殿のおほしの給はする　秘左大臣の詞のやうにおほしすつましき人もとまり給へれはとおほしたるなり又殿といふを源にみるなりをさなき人をみすてす物し給へと人々にの給ひし事にやいつれにても然へき也　聞書左大臣か云々或抄殿とは源の御事也　私云源と大臣との内決すへし
いとはかなきほとの　夕霧の事也
あからさまにまかてゝ　女房達のいふなり
おのかしゝ　おのれとちの事なるへし
院へ參り給へれは　秘源の院參ある也　前に院參あるへき事をかけり是よりは院にての體を云なり
いといたう　源を御らんして父院の御詞なり
さうしにて　精進いもゐと訓す
中宮の御かた　秘藤つほの御方也
命婦の君して　秘中宮の御方よりさへきりての仰也
思ひつきせぬ　弄引歌までもなし秘同　中宮よりの御の詞なり葵の事也　河「鳫のくる嶺の朝霧晴すのみ思ひつきせぬ世中のうさ
つねなき世は　源の返事の詞なり細々中宮よりも御とふらひありしよしみえたり　私云世間の無常はさる事なから此度は目にちかくみしにつけていとはしく彌なりたる也
けふまても　秘此詞幽玄なりなからへぬるなとゝ云心をふくめり弄同

御けしきとりそへて　聞書さらぬ時たに藤つほへは心中に愁のあるに只今の袖のけしきましてとなり

むもんのうへの御そ　にひ色の御下かさねえいまき給へる也　無文の袍は夏穀(ウスキヌ)冬は平絹色は常の袍のことし冠も無文なり纓巻服者のさたまれる出たち也弄同　弄問云無文の冠其様如何　一答常の冠は有文の羅なり服者は無文の羅を用るなり　秘輕服なり　私云近代有文の羅をおる物なし　仍糸にて文をぬふなり是實義なり今の世のは無文の羅なり

とうくうにも　秘冷泉院なり

よふけてそ　春宮にも久しく参らぬなととの給へと只今参り給へるとはみえす院よりは二條院へ退出とみえたり

われも〳〵とさうそき　弄源の心なりかゝる所をみ給につけても葵かたにとまりし人々の心を思ひやり給ふ也

かのゐなみくむしたりつる　葵方の女房達を思ひ出給ふ也　ゐなみくむしはすゝまさる體にや　私居並か云々河にあり　私居ならひ屈したる也

御さうそくたてまつりかへて　花源氏は三ヶ月の服なれは八月より十月まで也いまは除服し給ふへき也　花鳥の義おほつかなし除服は是より後なるへしこれは只院へ参給し装束を二條院にても源のつねにすみ給東の對にてあらため給成へし　或抄云御説に花鳥の説わろし院へ参り給ひしさうそくをあならためて紫のおはする西對へ渡り給ふなるへし返々花鳥不可然云々　弄服衣をかへ給しにや云云

にしのたいに　秘二條院の西對なり

衣かへの御しつらひ　秘十月更衣の御装束也

少納言かもてなし　秘かやうのしつらひなと心もとなき所なく少納言かよく沙汰したると源の思す也

ちひさき御木丁　さし木丁なるへし夫婦などの間もひた面には座敷にてもみえぬなり木丁をさして居かくるゝ也

あかぬ所なし　不足成所なきと也

ほかけ　火影也

たかふ所なく　秘藤つぼによく似給ふ也

ちかうよりて　源の紫へちかうよりて也

日ころの物かたり　これより源のこゝにとまり給は

ぬいはれを紫への給也
いま〳〵しう　聞書葵の事也
しはしことかたに　秘二條院内東對なるへしうちやすみなとし給にや
いとはしうさへや　やう〳〵おとなしくみなし給ておもはせての給へる詞なるへし
猶あやふく　少納言の心中也
やんことなきしのひ所　秘草子の地　是より少納言のあやふくおもふ心をいへる草子の地なり
立かはり　葵のかはりに又別人也本臺にならんと少納言のあやうく思ふなり
わか御かた　二條院の内源の常にすみ給ふひかしのたいなり
中將の君と　秘源の官女也　秘誰ともなし東對にて御足さすらせ給ふなり
あしたにはわか君の御もとに　秘夕霧なり　聞書同し
あはれなる御かへり　夕霧のめのとなとの返事申たるにや
おほしもたゝれす　聞書夕霧の方へもあはれとは覺しなからおはせんとはおほしたゝれぬとなり
姫君の何事も　紫の萬おひとゝのほり給ふと也
にけなからぬ程　やう〳〵新枕も有へき心也　聞書紫十四歳か十四にて嫁をゆるす事此まきのはしめ花鳥の義にくはし
けしきはみたる事　けさうする心なり
こなたにて　紫上の西對也
碁うちへんつき　聞書文字の片をかくしていひあつるか云々　九禪云　篇突　篇築　或抄云へんつきとは文字のつくりと篇とをわけてつくりをかくして篇をもてなにといふ文字といひあつる事歟たとへは嫁（本ノマヽ）かくのことくなるへし橋姫卷にことならはし碁うちへんつきなとあり大君中宮なとにをしへ給ふ事なり古集なとの文字をかくして何篇の文字そといひてあらそふ事侍るにや　私云猶尋ぬへし
うつくしきすちを　心はへのらう〳〵しうといふより此詞にて紫の所作からのよき事をいへり
おほしはなちたりつる　花をさなきほとのあはれなりしのひかたく成てとはやう〳〵けしきはみたる事なとをいへり　私云夫婦のかたらひの心もなき

程はをさなきをのみうつくしみ給ひし也さるかた
とはをさな心ちにむつれ給ひし事也しのひかたく
とは男女のかたらひあるへき比と源の思ふなり
人のけちめ　新枕し給ひし事はみしるへき事ならぬ
なりつねにむつれ給ひし故なりされとそのけちめ
みえたる事を末にいひのふる歟
さらにおき給はぬあしたより　是は新枕の時の事也
君はわたり給とて　秘源の我方へおはしますになり
弄同
御硯のはこを御丁のうちに　花文をかきて硯にそへ
てをき給ふ則返事し給へといふ心なり
かしらもたけて　紫のさま也
源あやなくもへたてける哉夜をかさねさすかになれし
中の衣を　秘源のかきておき給へるなり心のへた
てをあやなくもといへり後朝の文を何となくいひ
まきらはし給ふ也　聞書あやなくはあちきなくと
なり前かとよりなれし物をとなり
かゝる御心おはすらんとは　秘紫上の心には源の眞
實の子に成給ひて自然いかなるありつきをさせ給
ふへきとおもひ給ひしに思の外に思給ふ也　私云
秘にいへるそれまての分別あるへからす只新枕の
さま思ひの外に思へる也をさなきさまなるへし
あさましうおほさる　紫の心なり
ひるつかたわたり給て　源の紫のかたへなり
なやましくし給ふらんは　何となくとひ給へるなり
御ぞひきかつき　紫のさまなり
人もいかにあやしと　けちめを人の見るへきと源の
の給ふなり
御ふすまを引やり　論語云必有寢衣長一身有半注孔
安國曰今之鴛鴦被也又曰文絲雙鴛鴦裁爲合歡被鴛鴦
被錦之被也　衾は色紅なり紅衾とも云四角四方也中重
やうはさしの組あり女御入内の夜女御の御母義た
てまつり給例也　私云此外略之
つゆの御いらへもし給はす　紫の返答なき也
よし／＼さらにみえたてまつらし　いまよりはさや
うの事あらしとなくさめての給歟
御すゝりあけて　御返歌のあるかとなり
わかの御さまや　若々しき也
いとゝらうたけなり　源の心に紫のさまをらうたく
思ふなり

ゐのこのもちひ　河群忌隆集曰十月亥日作餅食之使人無病掌中暦曰亥子餅七種粉大豆小豆大角豆胡麻栗柿糖

かゝる御おもひのほと　源のかたへは参らせさるなり紫上はかりなり　弄紫上はかりへまゐらせけるにや

こと〳〵しきさま　聞書色々には無歟葵の思ひの程と云々

君南のかたに　源なり

かす〳〵に所せきさまにはあらてあすの暮に　秘新枕の三ヶ夜のもちひの事をの給ふ弄同　聞書かすかすに所せきさまにはあらてといふは三ヶ夜のもちひは一色なるへし　河亥子もちひは色々なり三日夜餅は一色なれは数々にはあらてといふなり

けふはいま〳〵しき日　河重日を忌云々　秘當座のまきらはしにの給なり弄同

心とき物にて　惟光やかて心得たるなり心ときさまなり

あいきやうのはしめ　秘惟光新枕の心をいへる歟愛敬初なり

日えりして　是も惟光かとり合て申詞なりいまいましき日との給をうけて申也

さてもねの子は　秘説あり　聞書亥の子の翌日なれはとりあへすいふなり源の詞たしかならぬ故おほめきておもふ也弄秘同　河亥の子の次日なれは子のこと惟光當座に申たるなりふるくよりの名にはあらさる也　花嫁娶の三日にあたる夜餅を枕かみにおく事は先はよからぬ事なり人の死せるには世俗にまつ餅を供する事あり枕つくゐといへりそれにかたとるなりたとへは女の男のもとへよめ入しては二たひ父母の家に歸ましきなれは偕老同穴の契を名付てとつくと云文字に歸の字を用ひたるは女は夫の家を我家と思ふへき由なりさて餅を用るもつひに男のもとにて身をゝへたる心なり嫁娶の日白き衣裳なとを用るも此ゆゑなり榮花物語第十三にも此事あり餅のはこのふた御丁の内にさりけなくさし入ておはしましつるほとものいみすましうあはれにみえさせ給と云々是は御堂殿の御女を小一條院にむことり給ふ時の事なり三か一を諸抄に三坏一具のこゝろにいへるはあやまれる事也む

かしは此餅四坏のもちたる故なり秘説これあり別にしるすへし　紫明抄云三日夜餅三か一事爲殊秘事云々一説云三日夜餅は女の年の數を調進する也紫上十四なれは十をは置て其餘を四といはんをいむ心にみつかひとつといはれたるか元來員數定りたる物ならは惟光いくつかと尋申へからす紫上の年齡惟光しらさる故なり待賢門院御入内三日夜餅記（德大寺左府記）紫檀箱文（鶴丸）摺貝普通の硯筥よりは高さも大さも過分なり銀小器三に白色の餅の丸きを御歯固の物具盛たるやうに三に同樣にうつくしく盛て御器（箸イ）の臺は銀にて洲濱を作て鶴の立たるに御箸をくはへさせて御所あらはしにとり出さるゝ也とあり　或抄紫上十四に成給へは十はおく所（四か）と云文をいみて三かひとつとはの給へり此物語に三ヶの大事の内なれはやうあらんかし其三ヶ條やうめいの介ねの子のもちひとのゐものゝふくろ也一條の禪閤なとはさらにいつれも大事にあらすさりなから昔より秘説とあれはあらはすへき事にもあらすとの給ひて別にしるし給ふ也

みつかひとつにても　源の返答なり　三歟一にてもとよむ説ありと云々此段三ヶ大事の一なり口傳前にあり　聞書云四坏をはゝかりて三と一といふか

心えはてゝ　秘惟光かやかて心得て立たるを物なれたるさまやとおほすなり

手つからといふはかり　惟光の調るさまなり

里にてそ　惟光の家也

君はこしらへわひ　紫の機嫌を源のとりかぬるなり

年ころあはれと思ひきこえつるは　新枕の前に紫を思ひしは事の數にもあらすと也私「逢みての後の心にくらふれはむかしは物を思はさりけり此歌あなかち引歌にはあらねとも此心歟

人の心こそうたてある　新枕の以前も紫をたくひなくおほせしか今は一よもへたてん事のわりなきを云なりかやうに今さら又おもひのましたるを我御心に源の思ひしり給なり

夜ふかしてもてまゐれり　惟光のしのひ給ふ事も思ひて夜ふかして持參なり心つかひある人也

はつかしくや　聞書少納言の心つかひなり　私云惟光の心つかひして辨をよひたるか

むすめの辨　弄少納言か女なり　私惟光のよひ出た

るとみゆ
かうこのはこをひとつ　河香壺匣或香粉筥　香壺匣は定れる調度なり諸香を入る器なり　土佐記曰以下略之　一説曰香粉筥か普通の手箱なり件懸子にちひさき箱等あり或は鏡箱或は白粉箱或薫物箱等と號す香は薫物なり粉は白粉なり是等を箱に納むるによりて手箱の一名を香粉箱といふなり云々
たしかに御枕かみに　惟光の辨にいひきかするなり
あなかしこあなたになと　秘一本あたになとゝあり
いつれも人にしらすなといふ心なり弄同　聞書惟光の辨にをしふる心もちひ也
あやしとおもへと　辨の心なり　秘辨は何事ともしらぬなり
あたなる事は　辨の詞　秘もらさしとなり弄同
まことにいまはさるもし　花いまはにて句をきりてさるもしとよむ説あり又一説あり別に注すへし秘別勘にあり但いまはあたなる事はといふにて事たるへきか　聞書あたなりといふ字の事なり惟光のいふなり
よもましり侍らし　聞書さはあるましけれともと辨に惟光の陳していふ詞なり　又或抄にはよもましり侍らしとは辨か惟光に返答なりよもさやうの事は申ませしと云心なりあたなる事はよもましらしと云なり　河あたなる事いまはよもましらしと云なり
わかき人にて　辨君の事なり
君それいの　源の紫にはいひをしへ給へしと也れいのとは何事も御心のまゝにをしへたて給へは也
つとめて此はこをまかて　河退　食退なり　もちひの具なり
したしきかきりの　秘ちかくつかうまつる人となり弄同
御さらとも　秘もちひのさらなり
けそく　秘臺のあしなり
少納言はいとかうしもや　河嫁娶なとの差別もなくいつともなくてあらんと思ひしとにやかやうの所まて御心のつきたるを御懇切なるとうれしく涙のこほれたるなり
さてもうち／＼に　秘少納言心なり我に仰有へき事をとなり　私云前に少納言はおとなしうてはつか

しくやおほさんとは惟光の遠慮なり少納言にはしらせすして辨してまゐらせたるなり少納言は明日朝はしめて知也

かの人も　秘惟光なり　源の仰つけられにくからんこと少納言なとの思ふなり

かくて後は　かやうに紫をみ初給ひて後はたくひなき御思ひのそふさまなり

あやしの心やと　源のわれとおほす心なり

かよひ給し所々　源の御忍ひ所ともかく也

いとほしとおほすも　源のことわりと思ひしり給ふ人もあれ共それさへ紫には思ひおとし給へるなりまして其外はとなり

新手枕の心くるしくて　河「若草の新手枕をまきそめて夜をやへたてんにくからなくに秘弄同　私紫上をは前に初草若草なとゝよせてよめり此初五文字自然に面白し

いと物うくて　外へおはせん事は物うき也

世中のいとうく　源の御忍ひ所のかた〳〵よりうらめしけにおとろかし申せとも葵の事故よろつ物うくなやましけなとかこつけの給さまなり

今きさきはみくしけ殿　秘今后は弘徽殿御くしけ殿は朧也　花御匣殿は朧月夜也御匣殿は内藏寮の外御服なと裁縫する所なり然へき大臣の女のなる職なり

大將にのみ心つけ　朧は源にのみ心を通はし給ふ也

けにはたやんことなかりつる　葵上なく成給しかはりにはと右大臣は思より給なり

いひにくしと　秘源への事を弘徽殿はさも思より給はすにくしとおほすとなり　弄弘徽殿の心なり

宮つかへもをさ〳〵しく　河古今集とのへもる身のみかきもりをさ〳〵しくもおもほえす　私長歌伊勢物語またわかけれは文もをさ〳〵しからす躬恒序云あるしのをさ〳〵しけれはおかしくすみなれたるをさ〳〵しは長々成長なりおとなしきなとも心得へしをさ〳〵の詞にはかはるへき歟　此外略之　聞書おさ〳〵は宮つかへをも治定かくたにし給はゝあしからしと源をにくみおほす故に引すきて内へ奉らん事をおほしはけます也

君もおしなへての　源の心　秘源もさもとはおほすれと今のをりふしと思ひ給ふなり　私是は紫の外

わくる心なき故なり
かくておもひさたまり　紫上にて定まらんと也
おもほしこりにたり　葵の物のけにてうせにし事也
かの御息所は　人のうらみもおふましかりけりとおもほしこりにたりといふつゝきよりかの御息所といへるいさゝかおもはせていへる也
まことのよるへ　六御息所を本妻には心おかるゝ事有へしとなり
としころのやうにて　此ほとのことく時々のかよひ所又はものなといひ合給ふへき心はせなとはよろしきと思給なり
おほしはなたす　御息所のつらきふしは忘れかたけれとも又ことの外には源の思ひ給はぬと也
この姫君をいまゝて　秘 紫上也父は兵部卿宮也　紫上の俗姓をしらぬ故に物けなく人のおもはんと也
ちゝ宮に　兵部卿宮也紫の系圖をあらはさん爲なり
御もきの事　紫のもきなり
こようとみ　紫は新枕の後思ひうとみ給ふなり
年ころよろつに　是より紫の源をうと〳〵しく思ふ心をいひのへたり

さやかにもみあはせ　正體に目も見合せ給はぬなり
ありしにもあらす　紫のうとむさまなり
おかしういとほしうも　源の心紫のさまを思ふなり
なれはまさらぬ　秘弄同聞書同　河「みかりするかりはのをのゝ楢柴のなれはまさらて戀そまされる
年もかへりぬ　花 源廿二紫十五に成給也秘同弄同
院に参り給てそ　桐みかとなり先父みかとへ源の参り給てから内裏春宮へも参り給ふなり
それより大殿に　かへさに左大臣へおはする也
むかしの御事とも　としの始なからことわり成へし
いとゝかうさへ　源のおはしたるにいよ〳〵もよほされたるなり
たへかたく　父左大臣母宮なるへし忍ひあへすたへかねてなみたをもらすなり
御としのくはゝる　源のいよ〳〵物々しく光そひ給へるさまなり
たち出て御かたに　葵の里亭源と住給ひしかた也
人々もめつらしう　こゝにさふらふ女房たち也
わか君みたてまつり　夕霧なりことし二歳なり
わらひかちに　花鳥にはゑかちにとありてわか君の

ゑみかほなり云々
春宮の御おなしさま　夕霧の冷泉に似たる也
みたてまつりとかむれと　冷泉に夕霧の似給へるを
人やみとかめんと源のおほすなり
御しつらひなと　源も葵のおはせし時にかはらぬ也
みそかけの御さうそく　秘 さをなり　河 椸架延喜式
御衣架也　衣荷　神衣　内則曰男女不同椸架不敢
懸於夫之揮椸架枷与架同注云謂之椸桶材也　今案葵上
の存日には同様に源氏とかけしかいまはかけなら
へすといふなり禮記の心にはかはるへし
女のかならはぬ　禮記にも男女椸架を同しうせすと
あれは葵の存日にも源のとひとついかにかけたる
にては有へからす椸架をならへて別々にかけたる
なるへしさて女の椸架のならはぬかさう〳〵しき
とみるへし　或抄御説に衣架はあて字なり椸架よ
しと云々ついたて障子のやうにして衣をかくる物
なり云々
けふはいみしく思ふ給へ忍ふるを　秘 これより大宮
よりの詞なり年始なれば葵の愁傷を忍ふれとも源
のおわする故にもよほされて忍はれぬなり

昔にならひにける御よそひ　源の裝束を大宮にて年
來したてられし事なりされと今は涙にふたかりて
いろあひもうつくしからしと也
けふはかりはやつれさせ給へ　聞 葵のおはせぬをか
こちたる體なり　秘 妙なる語なりさためていつく
にも御服はあまた有へけれともけふはかりやつし
給へとなり大宮よりの御さうそくを卑下しての給
へりこのころは涙にくれて色あひもあしきとなり
やつれさせ給へとはなほ葵の名殘をもいふへし
又かさねて　いかなとにしかけられたるほかに今又
御使してたてまつり給へるなり
かならすけふたてまつるへき　秘 今日の元三の用と
てこそかし給つらめとてきかへ給ふ也　私 元日に
き給へとおほしきは殊更に色もおりさまもすくれ
たれは只今源の着給はすは曲なくおほさんと覺し
てそれをき給へるなり
かひなくやはとて　私 これを河海に卑下したるよし
なり云々是は隨分色もおりさまも心をつくしたれ
共そのかひもなくうつくしからぬと卑下したるよ
しの義か尤非なり

こさらましかは　私源の心なり待まうけ給へるを申
也　秘今日源の御出なくは口をしかるへきよし也
御返には
春やきぬるとも　源の詞　秘引歌なし聞書同　河六
帖「あたらしくあへるとしを百年の春やきぬると
鶯そなく　弄此歌相當せりともみえす如何祝の心
をの給ふ也云々たゝ春のはしめにみえまゐらせん
の心はかりにても有へき歟云々
えきこえさせ　秘申やるかたもなきとなり　葵の事
　心にあり
源
あまたとしけふあらためし色ころもきては涙そふる
心ちする　あまた年は數年なり　秘下句あはれなり
　去年にかはりたるよしなり
えこそ思ふ給へしつめね　是まて源の詞
返大宮
あたらしき年ともいはすふる物はふりぬる人の涙な
りけり　秘哀傷おもてには出すして妙なりいつとな
く葵の事のみ心にあるよしなり　年のあらたまり
たるしるしもなく涙のみなりとなりふりぬる人の
とかこつけて下の葵の心有　河「あたらしき年と
はいへとしかすかに我身ふりぬるけふにそ有ける

此引歌に不及
おろかなるへき事にそあらぬや　草子地也　或抄云
心は源氏も大宮もけふはゆゝしと思ひねんし給ひ
てもつゝみかたくて涙そふる心ちするとよみふり
ぬる人の涙とよみかはし給へる心はいかはかりな
らんおろかなるへき事にてはあらしとかけるなり
作者の詞たかひの御愁傷の心まとひ共を察してか
けるなるへし

岷江入楚第十　賢木

二條右大臣越左大臣任太政大臣
廿二歲　大將
六條御息所相副齋宮可有下向事
九月七八日比源氏參野宮事　對面御息所事
十六日齋宮群行事　齋宮十四歲御息所卅歲
源氏奉付榊枝文拾御息所事
十月院御藥事
行幸幷行啓事
十一月一日院崩御事
十二月廿日御中陰畢中宮移三條宮給事　大將君參給事
廿三歲　天下諒闇
大將君籠居事　宿物袋事
二月御匣殿任尙侍事（朧月夜葵卷に爲御匣殿）
以梅壺爲御曹司事
桃園姬君爲賀茂齋院事（槿齋院是也）
大將君未思離給事
大將君又於細殿之局見參尙侍事近衞夜行事

頭少將出自藤壺之次奉逢大將君事
密通三條宮一日籠居塗籠中事　無實儀事
秋詣雲林院事
習讀天台法文事
遺書於二條院事
奉書於槿齋院事
奉雲林院紅葉於三條宮事
九月廿日夜源氏於宮御方御物語事
退出之次頭辨奉見源氏誦白虹貫日之句事
參東宮御方啓中宮給事
朧月夜尙侍送書於源氏事（有返歌）
十一月一日故院御國忌奉書於中宮事
十二月十餘日中宮御八講事
結願日中宮御落飾事（御戒師山座主）
命婦君同出家事
廿四歲
正月參入道宮給事
左大臣上致仕表事
夏酉日三位中將等參會有掩韻興事
十日許三位中將負態事

中將二郎君歌高砂事時八九歳紅梅右大臣是也
尙侍君里居之次度々密通事
雷雨之日父大殿來尙侍君御方見付源氏帶疊紙事
二條太政大臣以尙侍事被訴申太后事

賢木　以詞并歌爲卷名

花此卷には三ヶ年の事あり源氏廿二歳の九月より廿四歳の夏までの事をかけり秘弄同　河「神かきはしるしの杉もなき物をいかにまかへておれる榊そ詞にはさか木をいさゝかをりても給へりとあり私云さか木の字葵の卷にあり
坂樹日本紀賢木同榊俗字也
齋宮の御くたりちかう成ゆくまゝに　秘秋好中宮なり　齋宮群行九月十六日の御祭前の事也　弄同
みやすん所物心ほそく　六條御息所たちそひてくたらんとおほすにつけてさすかなる御名殘なかるへし
わつらはしき物に　大殿の君とは葵上也御息所のわつらはしく思ひしかそれはうせ給と也
さりともと世人も　秘葵上のうせ給かはりには此御息所こそ源の本臺にも成給ふけれと世上の人も思ひし也
宮のうちにも　弄野宮にての事也秘同
そのゝちしも　秘葵なく成給てから結句うとみはて給ふをいへり
まことにうしと　秘源のうしと思ひ給よしはもれ聞給をまことなりけりとおもひはて給なり物のけにあらはれし事は眞實なりけりと御息所の心に思ひしり給なり
よろつのあはれを　秘萬事をさしおきて下給ふなり秘源にいまた何かと貪着の心也都の名殘なとをも心つよく思ひきりて一すちに伊勢へ下り給はんの用意也
ひたみちに　花直路也云々　聞書一すちに思ひ定めたる也
おやそひてくたり給れいもことになけれと　河殊になかりけれと毎になかりけれと度ことにと云心云云不用拾遺圓融院御時規子女王齋宮くたり侍けるに母の齋宮徽子女王齋宮女御也のもろともにすゝか山をこゆとて「世にふれは又もこえけりすゝか山昔の今になるにや有らん大よとの浦にて「大よとのうらにたつ波かへらすはかはらぬ松の色をみましや　齋宮女御徽子式部卿重明親王女承平六年爲齋宮歸京之後天暦二年十二月入内同三年四月爲女御生規子

女王此女王爲齋宮參向伊勢之時母女御被相伴雖摸此例延喜以後近代の事なれは例もことになけれともといふ歟此物語今古准據なき事をは不載也　秘河海に圓融院の御時規子女王の事をひけり此例侍れとも延喜以後の事なれは例に用さるは此物語の例也されは例もことになけれとゝはかけり　弄此事例ありといへともその時の事をうつして書たれは無例と也圓融院の御時村上の御女規子齋宮にて下り給ふ時母の徽子重明親王女の女御のそひて下り給し事有見河海此時はしめたるを例なしとかくなり　花村上の御女規子內親王天延三年に齋宮に立て下向し給ふ時御母徽子女王重明親王女そひてくたり給へり今物語に六條御息所を徽子女王になすらへて申侍れはこれよりさきに母子あひそひて下向の例なきによりてかくはいへるなるへし　私河にいへるも同しことなれと心いさゝかかはるにや花鳥にいへることく規子女王の時の初例を今此御息所の事になしてかきたれは例なしといへるおもしろし

いとみはなちかたき　秘齋宮十四歲也

ことつけて　かこつけて也

うき世をゆきはなれ　おもしろくかけり

大將の君さすかに　私葵巻に此心あり源の心也

御せらそこはかりは　是も葵巻に紫上と新枕し給ひてからは御忍ひ所のかた〳〵へも物うくておはせぬとありしなり又御息所へは葵の事から隔心なるへし

たいめし給はむ事は　秘御息所也源に對面の事也

人は心つきなしと　秘御息所の心中なり人とは源なり私源の心には底に隔心有へしそれをみては又我心にもいよ〳〵もの思ひのまさるへし又貪着の心も出くへきとにや心つよくおほすなるへしといふまで御息所の今さら源へ對面あるましきとおほすをことはりて察して草子地にかけるなり

もとの殿には　花六條京極の御家也　弄六條京極の宮也御息所はわたり給ふ事もあるなり秘同

大將殿えしり給す　秘忍ひ給ふゆゑに也

まうて給へき御すみかに　秘此野宮へはたやすくおはすへき所あらすと也　私野宮に潔齋の所なり御息所の里へは忍ひておはすれと源はしり給はてあ

ひ給はぬなり
院のうへおとろ〳〵しき　秘桐壺帝也　弄此巻の末に崩御し給ふへき御氣色のおこりもみゆ秘同
つらき物に思ひはて給ひなんも　御息所の心を源のおしはかるなり御心つかひは殊勝なり
おほしおこして　物うきを忘給て思ひたつ也
九月七日なれは　源のおはしたる日也　弄十六日群行ちかき比也時節又艶なるへし　秘十六日に齋宮くたり給ふへき也　河齋宮群行は九月十六日御祭前の事なり　私云群行は十四五日の事なるへきか
女かたも　御息所方よりあはたゝしは周章とかく也
たちなからと　秘あからさまにもと連々申されし也
いてやとは　花御息所の心也　河古今「我をのみ思ふといはゝあるへきをいてや心は大ぬさにして　弄引歌我をのみ云々又不及引歌也　秘不及引歌聞書同　私云いてやとは心をおこすなりおもひきりてあはしと思へ共といふやうの心なり所によるへし
うもれいたき　埋痛也うつもれゐたると云心も有へし　或抄御説にあるかなきかのやうなるをいふと云々

物こしはかりの　秘さらは物こしはかりにてはと源を待給ふなり
はるけき野へをわけ入給ふより　私是より源のおはする秋の野の道すからのさまおしはかるへし
秋の花みなおとろへつゝ　或抄御説に秋の花といふ事惣別はわろしされともこゝには面白しとなり宗長か面かけさへもおとろへて似すと云句に一目みし秋の花みな野分してと付たるを宗祇稱美のよしなりと故内府逍遥院物語のよし被仰と云々
あさちの原もかれ〳〵なる虫のね　おもしろくいひかけたる詞也
そのことゝもきゝわかれぬほとに物の音とも　聞そのことゝもに琴の心をもたせたりさて末に物のねといへり連歌なとにも物のねとはかりはすへからすことゝいふ事をそふへしとそ　秘遊なとし給ふなり「ことのねに岸の松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけんとよめるも齋宮女御の野宮にて詠し給ひし歌也こゝろかよひもおもしろし弄同
御前十よ人はかり　秘十八人あまりはかりとよむなり

或抄御説に十餘人とかきて十人あまりはかりとよむなり云々此義尋へし
いたう忍ひ給へと　供奉の人々はおほからぬ也
ことにひきつくろひ　是は源のみつからの御さうそくなとは殊にとりつくろひ給へるなるへし御息所はつかしき人なれはなり
御心にもなとていまゝて　秘たちはなれさりつるとなり　こゝの所のさま源の心にしみたるなるへし
物はかなけなる小柴を大垣にて　花延喜式に大嘗會の垣は椊柴爲垣よしみえたり齋宮の野宮もこれに准すへし弄同　秘野宮のさまなり大嘗會の垣を柴にてするよし延喜式にみえたり潔齋の心なり大垣は惣まはりの垣也
いたやともあたり〳〵　秘そこ〳〵としわきたるなり　或抄當々なり有へき所々に物のある事なり
くろきのとりゐ　河くろ木とはくろもんなといふ木なり云々只又皮のつきたる木をいふかくろ木の屋仁德天皇の御時はしまると云々　花皮つきたる木をいふへし河海の次説を用へし私鳥居又衡門とり居は天の字をかたとる云々　神前にたつるも天地の間を人の出入する心なり云々
かう〳〵しく　秘神々敷なり弄同
わつらはしき　ゆきにくき心なり御息所の里の亭なとへ忍ひかよひ給ひしやうになき也
神つかさのものとも　私伊勢齋宮寮　頭一人四位五位殿上人若諸大夫任之相當從五位下　助相當正六位下　允大少屬大少此外したのつかさあまた有へし
ひたきやかすかに　河火燒屋也炬舍火爐順和名　助鋪
又云コヤ　花火炬小子二人山城國葛野郡の秦氏の童女をとるよし延喜式にみえたり　弄花鳥に委しと也　秘春宮にもあり所用不分明野宮のは神膳をしたゝむる用なるへし
こゝに物おもはしき人　御息所の心中をこゝの有さまをみ給て源のあはれさおしはかり給ふなり
北のたいのさるへき所　秘内々の方也面は皆神事の方なれは也
立かくれて　源氏也
あそひはみなやめて　花上の詞にそのことゝもわか物のねともなり秘同
たいめしまたふへきさまにもあらぬは　まへにおほ

しわつらふよしあり
いとものしと　ちと腹立の心か源氏の心也
かうやうのありき　秘源の詞弄同　秘葵巻の始にも御身のやんことなさもそふとあり又年なともすこしはおも〳〵しきほとに成給へるなるへし
しめのほかには　或抄云引歌と有へきかと云説あれ共只内へもいれ給はぬを神事の所なれはしめの外とはいふなり云々　花こまの〻物語の四の巻にしめの外と云詞あり　河注連日本紀　御綱縄舊事本紀
人々けに　御息所の女房達也
いさやこゝの人めも　秘御息所の心也
かのおほさん事も　秘齋宮のおほさん心もいかゝと也　私いさやこゝの人めとは齋宮以下侍ふ女房なとの事也　かのおほさん事もとは源の心をいふへしかやうの詞にてこそしひてたいめんあらんとの給ふともいまさら逢給ふましき事と下の心には思ひ給ふへしと源の心中を御息所の察し給へるなるへし如何
たけからねは　秘たけからぬ心なれはえかけはなれ給はさる也　私源へ情なく見えたてまつらんと思へとも心つよくさやうにもならぬと也
うちなけきやすらひ　色々に思ひわつらひ給へるさま御息所の心中をしはかるへし心にくゝよしある樣を面白くかきなせり
こなたはすのこはかりの　秘源の詞也　此北の對は縁まてはくるしからぬかとて源のあかり給なり
はなやかにさし出たる夕月夜　河夕付夜日本紀萬葉暮月夜舊事本紀　初學記云月七日爲魄　源氏野宮へおはする事九月七八日比なり
うちふるまひ給へり　源のさま也
月ころのつもりを　此比のとたへ（えイ）を何かといひわけなとし給ふへきほとならねはとなり久しき中絶なれはとなりまはゆきはいひにくき心也
さかきをいさゝか　源のおりてもつ也月比のつもりとは久しきとたえのいはれをのへ給はゝ葵のわつらひよりなく成給ひしほとの事なといひ出給ふへし然は物のけの事なとも給はすとも心に互にうかふへけれはまはゆくていさゝかもいひ出給はぬなり心つかひ面白きかきさま也
さし入て　みすの下より榊を入給ふなり

かはらぬ色をしるへにてこそ　秘　わか心のかはらぬ
さまを榊の色によそへての給ふなり弄同　花後撰ちはや
ふる神垣山の榊葉は時雨に色もかはらさりけり
賀茂女集ときはなる松にし心なれきなはかはらぬ色もいま
はたのまん　私松にし心の引歌に及さるか弄秘　二
首なからなし
いかきをもこえ侍にけれりイ　河ちはやふる神のいかき
もこえぬへし大宮人のみまくほしさに　秘　引歌同
弄大宮人のみまくほしさに心も有へし
さも心うくと　私前にかはらぬ色をしるへとは此榊
の色の不變なることく御息所の心もかはり給はし
と思ひたれはいとひかほにし給ふは心うきことよ
と源のうらみての給ふ也
御息所神垣はしるしの杉もなきものをいかにまかへてをれ
る榊そ　河古今戀しくはとふらひきませ我庵の三輪の山も
と杉たてる門　河殊勝の歌也とふらひきませの歌
ふくませて尋ぬる人もあらしと思へはの心あり思
ひかけさりしよしなりいかにまかへてとは思ひ
たかへてやなとの心なり　弄ことから殊勝の作な
りしるしの杉とは尋給ふへきしるしもなき物をと
なり我庵はみわの山もとの歌いかにまちみんの歌はべらイ
の心にてよめるなりぞイいかにまかへてとは思ひたか
へてやなとの心也　引歌我庵はみわの山もと戀し
くはとふらひきませ杉たてる門三わの山いかにま
ちみん年ふとも尋ぬる人もあらしと思へは
源返をとめこかあたりとおもへはさかき葉の香をなつか
しみとめてこそをれ　河未通女萬少女日本紀　乙通
女　乙女　貫之集おく霜に色もかはらぬ榊葉のかをやは
人のとめてきつらん　拾遺神樂歌榊葉の香をかくはし
みとめくれは八十氏人そとまゐせなイりける　私一
首略之　弄榊葉の香をかくはしみの歌を讀り秘同
私云御息所の歌にはいかにまかへてなといひてお
ほしめしたかへてはしといひ給へるかわれをさし
ては尋給はしなと樣にかこちかましきを源の返歌
は御息所のおはするをよく知りてこそ榊の香をも
なつかしくてとめては來りたれとなり面白き返歌
なるへし
大かたのけはひわつらはしけれと　秘　神事所なれは
憚あるさま也
みすはかりは引きてなけしにおしかゝりて　源のさ

まなりみすの內へも入給はすなりなけしとは今の
世に敷居といふ物なり今の世には鴨居はかりをな
けしといふ也
心にまかせて　秘是より源の心也
人もしたひさまに　秘人とは御息所なりしたひさま
に思ひ給ひし程はさしもなくて只今切に思はれ給
ふと也　弄御息所の事也
御心おこり　源の我物と理運に思ひし事也
いかにそやきすありて　秘物のけに成給ひし事なり
弄同
めつらしき御對面の　秘此程中絶たるゆへにさらに
めつらしく思ひ給ふ也
心よわくなき給ひぬ　是まて源の御さま也
女はさしもみえしと　御息所の心也
いよ〳〵心くるしう　源の心よわくなき給ひぬと
いふうへに御息所も忍ひあへぬ御けしきなれはい
よ〳〵心くるしき也
おはしとまるへき　源の抑留し給ふ也
月も入ぬるにや　秘上の詞にはなやかにさし出たる
夕月夜とありしにあへり弄同

うらみ聞え給ふに　源の御息所をうらむる也
つらさも聞へぬへし　秘御息所の心につもりたるう
らみもこよひにてきこえぬへしとなり　無限心中
不平事一霄清話又成空　面白き詩なり
やう〳〵いまはと　秘御くたりを治定し給ひしに也
されはよと　秘御心の置くと也　私是御息所の心中
なり前につりするあまのうけなれやなとあり下
國を定かね給ひしを此比やう〳〵と治定したるな
りそれに今又源のおはしておほしとまれとあれは
其方へ御心のひくなりそれを御息所の心にもかや
うに心よわからんと思ひしにまことにさやうにあ
るよと思ひみたれ給ふ也
殿上のわかきんたち　秘葵巻に殿上人とも朝夕の露
分ありくをその比の役になんするとあるを云なり
庭のたゝすまひ　野宮のけしき也
えんなるかたにうけはりたる　或抄御説に我はとい
ふその事に成てほこりたるやうの心也　私その事
に成て我物なるやうの心也
おもほしのこす事なき御なからひ　源御息所互に心
ありてふかきあひたなるへし草子地なり

ことさらにつくりいてたらんやうなり　花 三秋末暁之候五夜將明之天別緒依々之情虫聲切々之恨遭逢斯時ことさらに作り出せるやうなりと云り　私惣別此段は所の景氣時節の感慨なほさりならぬに源御息所互に心ふかき間に心に隔るうらみ有て久しく中たえつゝ只今遠く別れんとし給ふ名殘よろつに心をつけてみるへし誠にあはれあさからすしてすくれたるかきさまなるへし

源 暁の別れはいつも露けきをこはよにしらぬ秋のそらかな　秘 このつくり出たるやうなる曙の空たゝ大方の身にもしみぬへきを此時の心思ひやりて見るへし　河 業平朝臣のかりの使にて齋宮わたりにて夢かうつゝかとたとりし暁の別れに思ひよそへらるる歟　花 暁のなからましかはしら露のおきてかなしき別せましや貫之　大底四時心惣苦就中腸斷是秋天　私此別は常の暁にことかはりてみすこしの對面はかりなるをよにしらぬ秋の空といへるにや普通ならぬ心なるへし

松むしのなきからしたる　私此景氣誠に今もみる心ちするはかりなるさまなるへし

わりなき御心まとひともに中〳〵こともゆかぬにや

水原抄には中〳〵ことゆかぬといふ詞は御息所の返歌なきをいふと云々此條いかゝとおほえ侍りわりなき御心まとひともといへるは御息所一人の事ともきこえ侍らすそれに源氏君の歌は二首ありて御息所の所詠一向になかるへき事おほつかなし野宮の庭のたゝすまひ淺ちかはらに鳴からしたる虫の聲さして思ふ事なき人なりともきゝ過しかたけなるをましてわりなき御心ともにはいかなる秀逸もいてきぬへき事なれとも思ふやうならぬ御口つきを中〳〵ことゆかぬとはかけりとそおほえ侍るいかゝ

秘 爰のつくり出したるやうなる所にて只いかなる秀逸もいてくへきをさせる歌もなきをいふ也花鳥によく沙汰あり

返御息所 大かたの秋のわかれもかなしきになくねなそへそ野への松むし　河 此歌も源氏の歌とみえたり水原抄云源氏二首つゝけてよみ給ふに御息所の返歌なき事如何といへり詞に云ましてわりなき御心まとひともにこともゆかぬとあれは返歌なきも其故か不可

及疑貼 貼イ 花 是は御息所の歌なるへし源氏の歌なら
は二首なから秋の別をよみ給ふらん事物せはき樣
なり曉の別とあるに秋の別と對せられたれは誠に
贈答とこそきこえ侍れ御息所の御くたりは人やり
ならぬことなれはいまさらに又別のかなしきとは
いかゝよみ給ふへきなれは大かたの秋の別もかな
しきにとてさしあたりたる離別をは詞の中にかく
され侍るこそ心ふかく旨遠くは覺え侍れ愚意のお
よふ所をいさゝかしるし侍る後のあさけりをまね
くなるへし 秘 此別は我心からなる事なり然は只
秋の感はかりになしていひ給ふなり別のかなしき
計はおもてにいはさるおもしろし花鳥にみえたり
私中〱こともゆかぬにやといへる面白き詞なり
或はさかりなる花のかけさやかなる月のもと又は
名所の花紅葉なとのおもしろき所にて作者の秀逸
をよみいたす事はありかたき事なりかやうの所も
同事なり後人にしらしめんとて書る詞なるへし
くやしきことおほかれと 花 是は源の心をいへり
秘 源の心なり此程たえ〱なりしをいへりそのゆ
へにこそかやうのわかれもいてきぬれと後悔ある
なり 前にもなとていまゝて立ならさゝりつらん
なとあり
道のほといと露けし おもしろくかきすてたり
女もえ心つよからす 御息所の心中又思ふへし
あやまちもしつへく さふらふ人々なり源のやうな
る人にあはゝしめのうちのはゝかりもいかゝとい
へる心也
なみたくみあへり 秘 さふらふ人々のいふなり 是
にあやまちもしつへきほとめてたてまつる人々の
心也
御ふみつねよりも 秘 源よりの文なり
おほしなひく 後朝の文のさまなと御下りも思ひと
まり給ひぬへくかきつくし給ふなり
いとかひなし おもしろくかけりかやうにの給ふと
てとまり給ふへきならねはかくいへりこれにてい
よ〱思ひのますにつけて也
おとこはさしも 秘 草子地也 源はなほさりなる事
をさへよくいひなし給ふ人なり此御息所なとをは
おしなへてはおほさねは源の御心にもさのみかや
うにの給ふもそらことならしとおしはかりてかく

也
たひの御さうそく　秘色々源よりとふらひ給ふなり
何ともおほされす　御息所の心也
あはく／＼しう心うき名　前坊のなくなり給て後かやうに源なとに逢給ふ事は誠にあるましき事なりさてそれ故物のけの事なともみな事おこれりそれを名のみなかしてといふなりさてかやうに必定下り給ふに定れは源と義絶になる故未もとけぬ事ゆへかやうに成し事よと後悔の心からいまはしめたるやうに思ひなけき給ふ也
齋宮は　秘秋好なり
ふちやうなりつる　秘不定也　私母御息所のそひて下り給ふ事の不定なりつるか今治定したるをうれしく思ひ給ふ也
世人はれいなきことゝ　秘おやそひてくたり給ふ事
私此たひ初例なり此巻のはしめに注し畢
もときもあはれかりも　私例なき事ともときく又源との御中かれ／＼なる故とあはれかる人もあるとなり草子地なるへし
何人も人にもとき　弄世間の人のをしへとなるへき詞なり秘同　秘心をつけてみるへき也一向数ならぬ人の身はやすき物なり御息所は何事も人にぬけいてたるを此源の事のみ御身のきすなるなり人にぬけ出たるとは抜群の事也
十六日かはらにて御はらへ　花齋宮群行の日は西河にて御禊の事あり幄の屋にて中臣御麻を奉る事あり　秘西川御禊なり
ちやうふそうしなと　秘花鳥にみえたり　河長奉送使天暦御時齋宮くたり侍りける時の長奉送使にまかりかへらんとて　中納言朝忠　拾萬代のはしめとけふを祈おきて猶行末は神そしるらん　花延喜式云凡齋内親王臨行豫定監送使參議一人或以中納言充之弁一人史一人六位已下官人一人　西宮抄云大臣着陣定御前大中納言各一人參議二人四位四人已上勅使中納言參議各一人四位六人長奉送使中納言若參議辨史中務丞各一人已上　奏聞下外記外記下式部云々　今案群行の日御前とは勅使とは河原まて供奉して歸來す長奉送使は伊勢まてしたかひ奉りて上洛の時弓場殿にすゝみて事故なく御下着のよしを奏聞すれはきこしめされたるよし職事して

仰らるゝなり花鳥にくはし
さらぬかんたちめ　御前の公卿又は勅使なとなり
院の御心よせ　桐壺帝御子のことくおほすよし前に
みへたり
れいのつきせぬ事　秘御息所の御かたへさま〳〵あ
るへし
かけまくもかしこき　弄齋宮也　花宣命詞掛畏　こ
れは齋宮へまいらせ給なりかけて申さんもおそれ
なれとものゝ心也弄同
ゆふにつけて　一榊葉（おひや）にゆふしてかけてたか世にか
神のみまへにおいそめにけん（イナシ）不及此歌　河復令
粟忌部（粟イ）祖天日鷲神造木綿者舊事本紀
なる神たにこそ　河古天原ふみとゞろかしなる神も
思ふ中をはさくる物かは　弄天原ふみの歌の心に
ての給ふなり歌にみえたり秘同　秘此思ふ中をさ
け給ふは齋宮ゆへなれはなり
源やしまもるくにつみ神も心あらはあかぬ別の中をこ
とわれ　秘くにつみかみは地祇と書なり山祇と書て
は山つみとよむなり神は惣名歟地祇とは一切の神
といはんためなり弄同　或抄云さゝ波やくにつみ
神のうらさひてとよみし山王二宮の御事を日本の
地主なるによりてか讀ありこゝには入さる事也
河八洲之事　舊事本紀曰伊弉冉尊產生淡路洲爲胞
意所不快故曰淡道洲即謂吾耻也次生伊與二名洲次
生筑紫洲次生壹岐洲次生對馬洲次生隱岐洲次生佐
渡洲次生大日本豐秋津洲因斯以先所生謂大八洲矣
惣產生大八洲次大小島合十四ヶ島其處々小島皆是
水沫潮凝而成者也
思ひ給ふるにあかぬ　源の文の詞也　秘さても思ふ
にあかぬと也
いとさはかしきほとなれと御かへりあり　花これは
御息所の御返事あるを云也秘同
宮の御をは女別當して　宮の御返事をは也　秘齋の
御返事也女別當は齋宮の別當也　花宮の御返事は
女別當かくといへり齋宮の女別當延喜式にみへた
り弄女別當は齋宮の別當也一助今の世にも院宮關
白家なとに別當の局とてある也
返秋好くにつ神そらにことわる中なら讀なほさりことをま
つやたゝさん　秘なほさりことゝは大將の僞を先
たゝすへきとなり　此齋宮の母御息所へ源のふか

からぬ心さしを見知給ふなりさて宮の御かへりのおとな〳〵しきと源の思ひ給ふとみえたり末の詞にあり

御ありさまゆかしうて　今日禁中にての儀式なと也

うちすてられて　源の御息所にすてられてなり

つれ〳〵になかめ　秘二條院になり其比のさまを思ふへし弄

宮の御かへりの　齋宮の御かへりの心尤おとなおとなしきなり　秘御返歌の下句をいへり　河水原抄云上に宮の御返歌は女別當してと見えたり源氏もし宮の御手跡と好給ふ歟又女別當の手跡とはみしり給へともおとなひたる詞つゝきはかりをほめ給歟云々　今案女別當の手跡なりとも歌は齋宮の御返歌勿論なり仍おとなひたるとは歌の事なり其故は源氏の歌にあかぬ別の中をことわれとあるになほさりことをまつやたゝさんとあるをおとな〳〵しきといへるなり又同抄にやしまもるの歌を源氏兩方へ御息所齋宮進せらるゝか云々是又不可然歟御息所へはれいのつきせぬ事ともきこえ給へりとはかりかきて歌有ともみえさるにやもし又歌あれとも物語家に畧之歟かけまくもかしこき御前にとは齋宮への心なりくにつみ神の歌は齋宮の御歌也

御としのほとよりは　是より源の齋宮の御ありさまをゆかしく思ひやり給ふ心中なり

れいにたかへる　秘わか物にもすへき物をとおほすなりわりなき源の御心のくせなり弄同

いはけなき御ほとを　秘御息所にうちそひてあらましかは此齋宮をもわか物にてみるへき物をとなり私是はたゝよのつねの御かたちなとに事なとはかりなるへし

世中さためなけれは　御代のかはりめなとには齋宮はかはり給ふへけれはなり　秘又も逢ひ奉る事も有へきと云妙なり終に源のうしろみ奉り給ひしなり弄

心にくゝよしある　秘御息所のおほえなるよしみえたり

さるの時に内にまいり給ふ　齋宮群行の日參内ありてすてに御くたりあるとなり時とり中の時にてありしなるへし

みやす所御こしにのり　弄花鳥に委し　花齋王のい

とけなくおはします時は御乳母いたき奉て御輿にのるなりいまの齋宮は十四歳に成給へとも母御息所そひてくたり給ふによりて同輿にて內へ參り給ふ也幼主の行幸の時母后の御同輿ある例になすらふへきにや御輿は葱花とて鳳輦にてはなくて一ものたうをかねにてうちたるを御輿のむねにすうるなりこれは神事の時めさるゝ御こし也主上は御禊(祓イ)の行幸或諸社の行幸なとに乘御あり齋宮群行の日八省への御こしも則葱花を用らるゝ也　幼稚なる故に同輿あるなり但聊不審あり幼稚とはいひなから今齋宮は十四才なり同輿の儀いかゝとおほえ侍り但諸抄此沙汰に及はさるなり　聞書輿の事道遙も不審云々

ちゝおとゝのかきりなきすちに　弄御息所の父大臣の事なり秘同　秘此人をは宮にもと思ひ給し物を思ひかけさる齋宮の同輿にて內に參り給事臨時の事なり無念の事なり保明太子之例歟　河世繼云忠平のおとゝの御女前坊(保明太子)の御息所にておはせしかつひに御位もきはめ給はす成にしかはと云々此事歟

十六にてこ宮に　御息所の前坊へ參りしなり

廿にてをくれ(おイ)たてまつり給ふ卅にてそ　秘年紀の事花鳥にくはし　花年紀をかんかへ侍れは御息所は十六にて故宮に參り給て十七のとしやかて秋好中宮をはまうけ給へるなり廿のとし前坊にはなれ給へり源氏君十二のとしの事なり朱雀院の立坊は源氏の四歳の時なりそれよりさきの東宮にてましましによりて前坊とは申侍り保明太子小一條院なとの例なり弄同　河玄宗末(末イ)歲始選入之時十六今六十(樂府上陽人)

六條御息所
そのかみをけふはかけしと忍ふれとこゝろのうちに物そかなしき　弄御息所の心中に詠したまふなり秘同　秘今日は祝義なる故に何事をも思ひ出しとすれとかなしきよし也　或抄御說にそのかみとは神の字をかりてよみ給へりちゝおとゝのおきてにちかひ又その外身のうき事源にあひ初しやうなる事けふはしめて又九重を去給ふ事なと成へし

ゆゝしきまて　河雨𥡴に通ずる詞なり忌の字をもゆゆしとよむ是はいま(このイ)/\しき心なり又稱美の心にも多用之いまのゆゝしきは其心なり

みかと御心うこき　朱雀院なり此時の事此物語の末

にもみえたり忘れかたく仰られし也
わかれの御くしたてまつり　秘　花にくはし　花　其儀
齋王西河に出給ふよしをきこしめして天皇八省に
幸して先大極殿の後房　小安殿におはしましに常の
御衣をぬきて帛の御裝束に改給て大極殿に出給
て高御座の東の御座に東むきにつき給て中臣御
麻を奉る事ありて其後五位藏人をもて齋王參給
ふへきよしを奏す齋王の御輿は嘉喜門より入て大
極殿の北の壇上にて輿よりおりて則東北の戸を入
て南面の座に着し給ふ齋王はうす物の地すりのか
らきぬ目そめの裳をき給て玉のかつらをかけ給ふ
いとけなきによりて髮あけをはし給はす女房几帳
をさすいとけなき時は御乳母いたきて座に着す次
に天皇とねりを二こゑめせは少納言版位にすゝみ
つきて中臣忌部をめす兩氏次第にすゝみよりて御
幣をとり又仰の旨をうけたまはり次に額の櫛の筥
をめす藏人頭内侍につけてこれをたてまつる仰を
うけたはりて内親王すゝみより給ふへきよしを申
すその時齋王御前へ參り給女房几帳をさして祗候
す天皇筥に入たるくしをとらせ給うて齋王の額に
さし給て京の方におもむき給ふなと仰事ありくし
の筥をは内侍これをめのとにわたす此度は大極殿
の東の戸をひらきて壇上にて乘輿ありて昭訓門よ
り出給ふ勅使長奉送使なともそなたに待まうけ侍
り件の櫛は藏人作物所に仰て黄楊の木にてつくら
しむなかさ二寸はかり金銀にて松鶴を蒔繪にした
り方四寸の筥に入るなり勢多の頓宮にて御額のく
しを撤して此筥に入らるゝと云り　群行儀　河　齋
王御輿居嘉喜門外解舁木等舉依召入自其門自大極
殿北面東戸下御也女房等先ト自東昭訓門持几丁等
參會主上所給櫛不令落至勢多納給云々其後毎日在
御輿云々齋王給櫛後出自大極殿東戸乘輿出昭訓門
出御（於イ）乘其（乘其イナシ）前結付舁木出入給也又云小櫛筥中入櫛之
時藏人以檀紙献之云々白川院仰曰件櫛更不褁紙只
入筥云々或云齋王給櫛之後不復本座直出給歟花園
左大臣記太政大臣雅實公之說也　弄　花鳥にくわし
き儀式さま〳〵あり
あれはにて　弄　天皇大極殿の高御座の東の御座にて
筥（宮イ）に入たる櫛をとらせ給て齋王の額にさして京の
方におもむき給なとおほせ事あり

八しやうにたてつゝけたる　秘　太極殿の事也　河　八
省中務　式部　治部　民部　兵部　刑部　大藏
宮內等なり　孝德天皇大化四年二月始置之　花　大
極殿をは八省院と云たゝ八省ともいへり八省の本
院なる故なり朱雀門內一町にあり南限冷泉北限中
御門東東坊城西西坊城をかきるなり　八省の東に
太政官廳西に豐樂院北に中和院はあるなり出車は
八省の東路にたてつゝきたるへし
わたくしのわかれをしむ　秘　御息所の御かたの女房
に物いひかはす殿上人ともあるへし
くらう出給ひて　秘　さるの時に內に參り給とありし
か時刻のおしうつりたるさまみえたり弄同
二條よりとうゐんのおほち　秘　二條院のそはの事な
るへし此大路事花鳥にくわし弄同　花　齋王乘輿出
昭訓門至八省東路南行至郁芳門路東折至待賢門南
行即出東掖門經二條大路東行至京極云々洞院大路
は西洞院とも東洞院ともいふへし其子細はゝき木
の卷にしるしをはりぬ箒木卷にしるされたるをみ
るに二條院は二條以北京極以東也齋王の下向は二
條の大路よりも東洞院へをれまゐりて下向たるへ
きなり　弄　齋宮下向事一勘　さはりあれは一代のう
ちにも又立かはり給へきなり此比の齋宮秦子女王
は式部卿爲平宮の女御の御おとうとの中の宮そお
はしますみかとはかはらせ給へと齋院にはおなし
村上の十の宮おはします選子內親王齋宮不相替事
私勘之榮花第三
さか木にさして　河　西四條の齋宮に榊にさして
敦忠集　いせの海千ひろの濱にひろふとも今はかひなくお
もほゆる哉秘弄無此歌
源氏　ふりすてゝけふはゆくともすゝか川やそせの浪に袖
はぬれしや　心つよく思ひきりたるやうなりともさ
すか袖はぬるへしとなり是は下の心なり面はすゝ
か川は八十瀨とてあまたわたる川なれは袖のぬれ
ぬ事はあらしとなりぬれしやとはぬれまいと思し
めせはぬれぬ物をゝなり鈴鹿川伊勢國鈴鹿郡にあ
り云々
せきのあなたより　聞書御息所の返事勢多の頓宮よ
りありしなるへし又伊賀にも頓宮あり
返御息所　すゝか川八十瀨の波にぬれ／＼すいせまて誰か思ひ
おこせん　秘　ぬれ／＼すとはぬれもせよぬれすもあ

れ也　ぬるゝとも ぬれすとも思ひおこする人はあらしとかこちたる心あり　河「すゝか川やそせのたきをみな人のめくるもしるし時にあへる時にあへるも催馬楽「すゝか川やそせわたりて誰ゆゑによこえにこえん妻もあらなくに

ことそきて　秘旅の中なれはなり御息所の手のさまなりことそきてかき給へるとあれは手跡のよしあるにあてなる心詞をそへはやとある也又能書の中にも随分に難のあるにや定實事なり小野道風弘法大師の御筆大内の額を難したる事もあり　花ことそきたるとは草かちなるをいふにやあてなるとはあてやかなる正體の文字すかたをいふへし

秘御息所の御返歌あはれすくなしと也歌を思ふへきをしへなるへし弄同　私河花兩抄の義共にあたらす後の義面白し手はつくろはすかき給へるも殊勝なるに歌の心なさけなしとなり伊勢まて誰かおもひおこせんといひきりたる所なり

きりいたうふりて　弄折から朝霧の景氣等思ひやるへし

源行かたをながめもやらん秋はたゝあふ坂山をきりなへたてそ　秘おもしろきうたなりあり〳〵とみるはかりなり

にしのたいにも　秘紫上の方なり

人やりならす　しゐてとゝめ給はゝ御息所もとゝまり給ふへきをさやうにはなくて今更又かやうに思ひ給ふは人やりならぬ思ひといふ也

まして旅の空は　秘ましての詞妙なり　聞書是より草子の地云々或抄同し

院の御なやみ　桐壺帝の御悩なり

よわき御心ちにも　院の東宮冷泉の御事也大將は源の事也帝朱雀へ仰置るゝ事也　弄此御詞末にみゆ

侍つる世に　桐つほのみかとの御在世にかはらすめしつかはれよとなり私寛平遺誡云左大將藤原朝臣功位之後其年雖少已熟政理云々

世をまつりこたん　花まつり事せんの事也

世中たもつへき　いつれも皆源の事なり桐壺巻にさま〳〵ありし事なり

女のまねふへき　筆者の詞なり

みかともいとかなしと　朱雀也

さらにたかへきこえさすましきよしを　朱雀の院へ
　の御返答也
御かたちも　朱雀の御かたち也
たのもしく　桐院の御心
かきりあれはいそき　御のこりおほく也還幸の事を
　云也行幸の儀式こと〳〵しき事なれは御心のまゝ
　ならぬ也
春宮も一たひにと　冷泉也　秘行幸と一度にとおほ
　しけれと他日になると也
御としの程よりは　東宮冷泉也　河李部王記云延喜
　御門最後御藥之間春宮（朱雀院）七歳御時貞信公予
　時左大臣爲御供參內主上御對面之時同有五ヶ條仰
　一者可專神事二者可仕法皇三者可聞左大臣訓四者
　可哀古人其外一ヶ條御忘却春宮御退出之時左大臣
　被奉問之（非正文取意）
戀しとおもひ院へ久しく春宮の御對面なかりし事な
　り御わつらひのことよりもあひ奉り給事をうれし
　くおほす也
なに心もなくうれしと　弄春宮のいとけなくおはし
　ます御心あはれなり秘同

中宮はなみたに　秘藤つほなり中宮の御心のうちは
　院の御なやみと又東宮のいはけなくおはしますと
　さま〳〵なるへし
御心みたれて　桐帝の御心なりさま〳〵とは東宮中
　宮の事也
よろつの事　秘延喜御門最後の御藥の間の事李部王
　記河海にくはしくひかれ侍り　私冷のいとけなく
　おはしますをうしろめたく桐壺帝のおほしめす也
　いと物はかなき御ほとを　私藤壺心なり云々
大やけにつかうまつり給ふへき　源へも御門朱雀へ
　の奉公のやう春宮冷泉へ御うしろみ有へき心をき
　てを仰おかるゝ也
夜ふけてそかへらせ　春宮のかへり給ふ也
あかぬほとにてかへらせ給をいみしう　院の殘りお
　ほくおほしめさるゝ歟春宮の御心歟いつれにても
　可然なり
太きさきも　弄弘徽殿皇太后宮也
中宮のかく　弄入道已後も中宮たるへし例あり　私
　此事不審也
かくれさせ給ぬ　秘太后の參り給はぬさきにかくれ

給也　私此事此物語の筆誅といふへし藤壺の中宮へわたくしの確執ありとておもての義理にそむくは道にあらすこれも弘徽殿のよからぬ心さまをかける也

御位をさらせ給ふと　花位をさりて猶世の政をおこなひ給ふ事嵯峨天皇の御例なり後々の世には連綿なり弄秘同

おほき[ちイ]おとゝいときうにさかなうおはして　秘二條太政大臣也　弘徽殿の父なり　弄右大臣　任太政大臣也左をこえたる例也花鳥にあり又の本おほちをとゝ云々花二條右大臣任太政大臣越引入左大臣元慶四年三月右大臣藤原基經公任[なイ]太政大臣越[なイ]左大臣源融例也　河後漢書注有革弦革はおし皮也おし皮は韓也是を帯に用れは緩也弦は弓のつるなり是を帯に用れは急なり是を人の緩急の性にかたとるなり君急なる時は臣緩く君緩なる時は臣急なるへしとみえたり朱雀院は御心なよひたるかた過てとあれは性急なる左大臣政を輔をその故なきにはあらさるにや　私凡此物語には朱雀院漢惠帝に似たる事なり弘徽殿太后を呂太后に比してかけり惠帝も其性仁弱なりといへり人に仁なるはよしされとも弱なるは惡し朱雀の御心仁弱なる所ありとみえたり猶可勘本說

のちのみわさなとけうしつかうまつり　河龍事日本紀論語

孝事　孝養の事なり　秘孝事也

ことわりなから　源は御子たちの中にすくれておほしめしつる程にことわりなから又別して孝し給ふを人もあはれとみたてまつる也

藤の御そに　河纏衣　和名ふち衣は服者の着物なり本義は藤の皮にておれる布なり御素服に布を用る此義なり主上は以日易月とて十三日着御して令脱御なり又裁麻とて麻布をも用る僧の着する黑衣も佛の御服と云々　國史云仁明天皇承和七年五月癸未後太上天皇崩于淳和院天皇除素服着堅絹御冠橡染御衣以臨期御簾及屏風縁幷用黑染細布

ことゝしと　花去年は葵上の事ことしは又かゝる事なり秘同

さま〳〵の御ほたし　花「世のうきめみえぬ山ちへ[にイ]いらんには思ふ人こそほたしなりけれ　弄紫上夕霧等の事也秘同

御四十九日まては女御みやす所たちみな院につとひ給へり　河七條の后のうせ給ひにける後よみ侍ける

伊勢古今歌「おきつ浪あれのみまさるみやのうちは秋のもみちと人々はおのかちり〳〵わかれなは云々桐帝おはせし院也

しはすの廿日なれは　弄御なゝぬかの事也

大かたの世中　秘雪霰の空也

おほきさきの御心もしり　秘呂后爲人剛毅史記　呂太后の事なとを思ひていふなり

すみうからんをおほすよりも　藤つほのわか身のうへよりも御門の御別をおほしなけく心あはれなり

かくてもおはしますましう　桐壷帝のおはせし院にそのまゝもおはしまさすみなまかてちり給なりいよ〳〵御名殘なきをおほす也

宮は三條の宮に　秘藤つほは御里亭の三條宮にうつり給ふなり

御むかへに兵部卿宮　秘紫上の父藤つほの兄宮也

雪うちゝり　時節のさまあはれ也

院のうちやう〳〵　是もまた桐壷みかとのおはせし院にての事也

大將殿こなたに　源なり是も此程は此院中にさふらひ給ふへしこなたとは藤つほのおはする方へ也

ふるき御物かたり　桐院の御事なるへし

兵部卿宮かけひろみたのみし松やかれにけん下葉ちり行としのくれ哉　院に松をたとへてよめり松やかれにけんと大やうによみ給殊勝と云々秘同　秘下葉ちり行とは人々のちり〳〵になるさまなり　聞かれにけりといひてはことの外つまりてきこゆへし　河松は君子の樹也

さへわたる池のかゝみのさやけきにみなれしかけをみぬそかなしき　弄あまりわか〳〵しうそとは此歌の事なり當座の思ひのまゝなれはあまりおとなしからすとやされとさしあたりてあはれなるにや水の面にしつく花の色さやかにもの歌のおも影あるにや

私古今諒闇のとし池のほとりのはなをみてよめる篁朝臣水の面にしつく花の色さやかにも君かみかけのおもほゆる哉　河大和物語に式部卿宮におはしましける時亭子院にすみ給ひけり此宮の御ともに兼盛まゐりけりめしいてゝものの給ひなとし

けりうせ給ひて後彼院をみるにいとあはれなり池
の面白きにあはれなりければよめる「池はなほむ
かしながらの鏡にて影みし君がなきぞかなしき
秘あまりわか〳〵しとは草子地なり　私河に兩朱
闍之詩あり略之
王命婦年くれて岩井の水もこほりとぢみし人かけのあせも
ゆく哉　河後けふよりは天の河原はあせなゝむそこひと
もなくたゝわたりなん　私この歌ことなる義な
き歟
そのつゐて(ひイ)にいとおほかれと　秘草子地也弄同
わたらせ給きしき　中宮行啓の作法は今とてもかは
るましき也
ふるき宮はかへりて　弄三條宮也秘同
御さとすみたえたる　秘葵卷に今はたゝ人のやうに
そひおはしますとありしなり　さて暫時の里住も
なかりし也いまあはれにおほすとなり　私かへり
て旅心ちし給ふなと面白くかけりあはれ也
としかへりぬれと　弄源廿三歳也秘同
なにのいまめかしき　花天下諒闇の事なり
ちもくの比など院の御時　秘御位の後も院の御給な
とに門前市をなししも今引かへしつかなるさま也
私院の御時とは桐帝の御位の時の事としころおと
りけちめは桐帝の御位をさり給ひても政をしろし
めしつれは源の御おほえもかはらさりし也
御かとのわたり馬くるまうすらき　花門前零落鞍馬
稀琵琶行
さふらひにとのゐものゝふくろおさ〳〵みえす
弄二條院のことなり三ヶ大事の一ッ也秘同　花
ことなる事なけれと秘事といひつたへたる事なれ
はあらはには記さす　河殿上宿直人の名字かきた
る簡號日給簡を納る袋の事歟云々　一説云一年中
の(大イ)公事の上日をしるして官家より公家執柄大臣家
に献する袋草子の事歟云々　此事有秘説注別紙
ことにいそく事なけにて　物しつかにあはれなるさ
まなり
いまよりはかくこそと　速々にいまよりはかやうな
るへしと思ひ給ふ源の思ふ御心也　秘かねてより
思ひなけく也　或抄御説に院崩御し給ひて今より
後いよ〳〵かくこそあるべけれと也須磨の卷にも
ましていかにあれゆかんとあり俊成卿こゝをとり

てよめり　あれわたる秋の庭こそあはれなれまし
て消なん露の夕くれ
みくしけとのは　秘朧月夜也
院の御おもひにあまになり　秘もとの尚侍は院の御
ために尼になりたる也その闕にいま朧月夜尚侍に
なり給ふなり　弄院の御おもひ人にや誰〻もなし
やんことなくもてなし　これより朧の體をいふ也

私勘

御堂關白
- 一女彰子上東門院一條后後一條後朱雀御母
- 二女妍子三條院后
- 三女威子後一條の后寛仁二年二月尚侍にて參給其年中宮云々
- 四女嬉子後朱雀后これも尚侍

秘みかとの御おは尚侍にて宮中に入例也
后はさとかちに　弄弘徽殿の太后也秘同　秘太后里
かちにおはします也自然の御つほねには梅壺を用
給ふなりさる程に弘徽殿には此内侍のかみすみ給
ふ也
とうくわ殿のうもれたりつる　梅壺弘徽殿登花殿已上后町西殿女御等の曹司也　花登花殿は弘徽殿の北に梅壺は又登花
殿の西にありいつれも皆ちかき殿舎也うもれたり
とは此年月人もすます塵にうもれたる心也　秘登
花殿は弘徽殿よりも奥なりうもれたる所なり此弘
徽殿はうちはれたる所なり花鳥に塵にうもれたる
心なり云々如何只かくれの方なる心なるへし　弄
朧月夜の登花殿におはせしか弘徽殿にうつり給ふ
なり　聞朧の奥ふかき登花殿に住給ひしかはれ
はれとしたる弘徽殿へうつり住給ふとなり花の義
わろし
御心のうちには思ひのほかなりし　秘源氏密通の事
也弄同
しのひてかよはし給ふ事は　ときく文は源とかよ
はし給ふなり中納言君といふ女房こゝろしりのよ
し末にみゆ
物のきこえ　秘源の心也　私今は太后あたりのきこ
えいかゝと思ひ給ふ也
いましも御心さしまさるへかめり　源の性をいふ也
草子地なるへし
院のおはしましつる世こそ　秘桐壺帝のおはしまし
つる年ころこそはゝかり給へれ后のさかなき御心
いまはとうち出給ふへきの御心をいふ也

みしり給はぬ世のうさに　源の御ためよからぬ事のおほき也　秘とし月なれ給はぬ世のうさと也
たちまふへくも　源の心也
左のおほい殿　秘葵上の父也
今ひめきみを　葵上を朱雀院より御けしきありしを引まきて源へさため給し事也弄同
おとゝの御中も　弄左右大臣中あしき事也秘同　秘そは〳〵しうとはそむき〳〵なる也河海に觚稜文選
是は文選上都賦之上に上觚稜而棲金爵とあり心は少かはりたるか宮闕の角を云也
わかまゝにて　秘左大臣の悉皆し給ひし也
したりかほに　今は又右大臣の太政大臣になりて執政し給ふをあちきなしと左大臣の思ひ給ふ也
大將はありしにかはらす　秘源は左大臣の御かたへ一段としたしくし給ふ也さふらひし人々　葵上の女房達也
いとゝいたつき　左大臣の一段と源をいたはりかしつき申さるゝ也
かきりなき御おぼえの　弄源氏を院の思召し時の事を云也

秘故院の御在世は出仕し給事もしけくて又かたかたに隙なくありしを今はさも侍らさりしも紫上のさいはひなるとなり
かた〳〵にたえ給事ともあり　世のさまのかはりたる故につゝしみてかよひ給ふ所もすくなす成と也
ちゝみこもおもふさまに　紫の父兵部卿宮なり葵巻の末に御裳着の事あるへしとみえたりいつにても御もきの事ありて其次に紫の父宮へ對面し給へるなるへし
むかひはらの　弄當腹也　河當腹事子依二母抱一史記子依母貴公羊傳
まゝはゝの北の方　秘兵部卿宮の今の北方やすからす思ふ也
物かたりにことさらに　秘ふるき物語なとにあるさま也　聞書物かたりにわさと作りたるやうなりといふ也　弄大かたにいへり又住吉物語に當腹を思ひし事あり
齋院は御ふくにて　秘院の崩御によりて也葵巻に后はらの女三宮ゐ給ひしとありし齋院の事也弄同
弄一説槿齋院は桐壺帝の御めひなりそれは輕服な

り七日の服三日のいとまなれは程もなく日數は過へき也

かものいつきにはそんわうの　河 孫王爲齋院例　眞子内親王文徳御子中務卿惟彦親王女 仁和五年卜定孫王例此一度なり仍おほくもあらさりけりと云也　花 延喜齋院式云若無内親王者依世次簡定諸女王卜定云々今案此物語のならひ延喜以往の事をは例にひきて延喜以後の事をはいまの事にかきなし侍り孫王の齋院に立給ふ事は穆子女王眞子女王のほか以往の例なし故におほくもあらすとはいへる也　秘 そわうそんわうとよむ也花鳥の說然へし弄義略之

大齋の君　秘 權齋院に源の心かけ給ふ事やまさるなり

すちことに　秘 齋院に成給ふ事也

中將におとつれ　秘 權のつかひ給ふ女房也

むかしにはかはる　秘 源の事也院のおはせぬ後かはり給ふ事なり私源の御おほえのちかひたる事をは心にかけ給はぬと也

みかとは院の御ゆいこん　秘 朱雀の源の御事おろかにし給ふへき御心はましまさゝれとも御心につよき所なきによりて后の中まゝなる事あると也是はをしへなりなよひたるかたはかりにてはかなふましきよしなり承平の御門は大絃急なれは小絃しらふるにたへすとて主上つよく急にましませは臣下たへかたきとていさゝかよはき所まし〳〵しなりこれによく叶へり　秘 史記云孝惠爲人仁弱也

母きさきおほちおとゝ　母きさきおほきおとゝ云々弘徽殿の父太政大臣に成給とみえたり一本おほちおとゝとありおなし事也

御心にかなはぬ　朱雀の御心のまゝならぬ也

わつらはしさのみまされと　源の御身の上の事なり朱雀は源へ疎略ましまさね共御心のまゝならす太后太政大臣なとは源へあしくあたり給ふなりされ共猶朧への事はやまぬ也

人しれぬ御心　秘 朧の心源にかよふよし也　私これも朧のかろき心をいましめてかけり

五たんのみすほふのはしめに　河 五壇御修法　不動　大威德　降三世軍荼利金夜叉剛夜叉或抄御說に五壇の御修法とて禁中にておこなはるゝ事なりわたくしの家にてはなき事也不動を中尊にして五大明

王の法を修せらるいかめしき事也
つゝしみおはします　みかとのつゝしみおはするひま也　秘此ひまに源の参り給ふ也
むかしおほえたるほそ殿の　秘弘徽殿のほそ殿なり
花の宴の夜の事也
中納言の君まきらはして　弄朧月夜かたの女房なり
秘同　秘源の心しらする人也
そらおそろしう　源の心か中納言君の心か此心いつれにてもあるへし
朝夕にみたてまつる人たに　弄源のさまを云秘同
秘草子地なり　聞朝夕と云より草子地なりいかてかおろかならんと云までなり
おもりかなるかたは　朧はかろ〳〵しくはしちかなるをつみしてかける詞也　秘いさゝかはしちかなるよし也　聞好色過たる心か
たゝこゝにしもとのゐ申さふらふとこわつくるなり
河近衛夜行の事なり　弄問云とのゐ申時申はかはるにや同事なり一勘　私是は近衛の官人か大將次將の間其夜御とのゐしたる中の上首を尋て申也
かくろへたる近衛司そ有へき　私是は物語の詞とみるへしかやうにいふは源の外に此あたりに近衛司の人のかくれてあるなるへしとまつ釋していふ也
はらきたなきかたへのをしへおこするそかしと大將はきゝたまふ　私別人の近衛司を尋てかやうにいふを源はいま大將にておはすれはかやうに忍ひつゝおはするをみあらはさんと人のをしへおこしたるにやと心にかくるなり　花はらきたなきとは日本紀に黒心とかきてきたなき心とよめり
こゝかしこたつねありきて　花是は別人のかくれてありつる近衛司を尋ねいたしてとのゐ申するなりさては源を尋つるにてはなきと思ひ給ふなるへし
私此段心得かたき樣なり　秘この義同し事なれと段をわけて注する者也猶弄秘の義載之　弄今案宿直申の近衛は其夜大將次將の間御とのゐしたる上首の人を尋て申也今の物語にいへるは近衛つかさのかくろへたるは誰にかあるらんそれをとのゐ申の近衛人にをしへられて此わたりにてこわつくるを大將はそこにて聞給ふなり此故になまわつらはしとはかけるなりとらひとつと申は右近のとのゐ申なり此時は源氏も右大將なり已上花　又云次將

に告へき事なるに近衛つかさのみえぬ折ふし傍人の源氏のかくれゐ給へることにあらんとて共通人をしへおこするにやと源のきゝおひ給ふなり一勘源氏の御身にはかゝらぬ事なれときゝくるしく思ひ給ふなり此夜禁中に大將にてはなくて近衛司の人祗候する有へしはらきたなきとは無骨なる物の尋ありく也さためてこれもかくれても有ぬへき物を無骨なる事やと源のきゝ給ふなり又はわれも大將なる程に我身のこゝにあるをしりてかくのことく尋るかともおほすなりされ共別の近衛司を尋出して時を申也　私云秘の義加朱點分いさゝか相違の文あり是はかくろへたる近衛つかさそ有へきといふを源の心にみる義なり聞書の心をこのゑつかさそ有へきと先釋したる義にみるなり猶聞へし河大將の外に又かくろへたる近衛司此邊にあるよしなりもし承香殿のせうとの藤少將歟　私花鳥西宮北山等の義略之

朧月夜 こゝろからかた／＼袖をぬらすかなあくとをしふる聲につけても　花あくとをしふるは夜のあくるを夜行の近衛はつけ侍れと人をあくといふ詞にきゝなしたれは一かたならす袖をぬらすとなりそれといふもわか心からの事なりとよみ侍り　秘只今とら一つとつけ侍によりてあくるとをしふるといへり明を履によせてよめりさてかた／＼袖をぬらすとはいへりとらの時より明日の日にとるなり

はかなく（たイ）ゝちて

朧のさまなり是も風流過たるさまなるへしいとおかしは源の心なるへし

源 なけきつゝ我世はかくてすくせとやむねのあくへきときそともなく　花胸のあくとは心にあくをいふなり　秘むねのあくとは人にあく事なきと云をそへたり我はかくてははつましきと也弄同むねのあくとは思のはるゝことなり

しつ心なくて　源の心なりかやうに夜行の人にさわかされて心ならすあかぬ別のさまなるへし

夜ふかきあかつき月夜の　おもしろき時分なり

にる物なき　かやうにふるまひ給へるしも人にことなるへし

承香殿の御せうとの　花承香殿の女御は朱雀院の女御今上の御母父は明石卷に右大臣とみえたりひけ

くろの大將なとの父なり　秘　當今朱雀の女御今上
の御母也弄同
頭中將　弄　鬚黑の弟也秘同　頭中將頭少將藤少將種
種の異本あり　私云三本とうの少將とあり頭の字
の時は中將までも少將までもとうの也藤の字の時
はとう少將也のゝ字を入へからす弄にも頭の少將
とあり
藤つほよりいてゝ　私云もし承香殿の住給ふかた歟
如何
しらて過給ひけんこそ　源なり
もときゝこゆる　かやうの事やう／＼世にきこゆへ
しとまつかけるなりこれらやう／＼須磨の卷をか
き出すへき序也草子地歟
かやうのことにつけてももてはなれ　弄　藤壺事　秘
藤つほの御事なり我につれなくましますゆゑに忍
ひたる事もなきと也かならす心のまゝならましか
はかろ／＼しき名もたち侍るへきと也　私云此前
にもときゝこゆるやうも有なんかと大かたにいへ
れとさやうのかたはしのもれきこえたるを源もし
り給へりと此段にはみゆ

內にまいり給はん　秘　藤壺の事也源にはあらす
春宮を見たてまつらぬを　藤つほの御心なり　春宮
坊は大內裏のうちなれは也
にくき御心の　源の藤つほへ密通の事也
いさゝかもけしき御らんし　花　源と藤中宮との御事
を故院はつゐにしらせ給はさりし事なり秘同　秘
薄雲卷に此御祈の事みえたり
いとおそろしきに　藤中宮の御心也
春宮の御ために　弘徽殿のいちいやくおはする故也
この事おもひやませ　河伊勢物語此男いかにせんわ
かかゝる心やめ給へと神佛にも申けれといやまさ
りにのみなりまさりつゝ猶わりなく戀しくのみお
ほえけれは陰陽師かんなきよひて戀せしといふは
らへのくしていきけるはらへけるまゝにいとかな
しき事數まさりつゝありしよりけにこひしくのみ
おほえけれは「戀せしと（ろかなイ）みたらし川にせしみそき
神はうけすも成にけらしもといひてなんいきける
聞書　浮舟卷にもあり
あさましうてちかつきまゐり給へり　秘　源の藤中宮
へ忍ひより給ふ事也　私まへにともすれは御むね

をつふしつゝとあり源絶す心かけ給なるへし　聞
夢のやうにとは草子地也
きこえつゝけ　源の詞をつくし給ふ也
御むねをいたうなやみ　藤中宮のしひていとひ給ふ
心ふかき故なり一たひの密通ありしも御心とけぬ
事なるへしよのつねの人ならは桐帝のおはしまさ
ねはうちとけもし給ふへき事なるをかやうにてつ
れなくおはしませしは一段の貞心なるへし
うつし心うせにけれは明はてにけれと　秘　源の本心
うせたる樣にほれたる故なり弄同
しけうまかへは　秘　人のしけく行ちかふ體也
ぬりこめにおしいれられて　塗籠也　或抄ぬりこめ
とは帳臺のやうにしておく所なり文庫なとのやう
なる體なり榮花物語に伊周公のぬりこめを殘しお
き給ふとあり此所へ命婦なとの源をかくしおきた
る所なり
御そとも　源のさうそくなと也
御氣あかりて　前にかくのことく春宮の御ためさま
さまの事を思ひつゝけ給うてあるましき事とは思
ひ給ふ程に女は心よわき物にてかく有へきなり御

氣のゝほりたる也
兵部卿宮ハ大夫なと　秘　宮の大夫は中宮の大夫也
秘　兵部卿宮は藤壺の兄宮なり大夫は中宮大夫なり
私云兩義のうち秘の義然るへし今中宮御所にて中
宮大夫を大夫とはかりいふへき事うたかふへから
す宮の字をは兵部卿へつけて然るへし
こもりゐ給へらんとは　秘　源のかくこゝにこもりお
はしますとも藤つほはしり給はさる也
人々も御心まとはさし　源のえ出すしておはする事
を人の藤つほへ申さぬとなり
ひるのおましに　藤つほの體也
宮もまかて　秘　兵部卿宮也
氣ちかくならせ給ふ人　常に御前ちかく人々めしな
ともせぬにやおくふかきさまなるへし
いたしたてまつらん　命婦辨なとは源を出し奉らん
事を色々思ひあつかふなり
君はぬりこめの戸の　源也
見たてまつり給ふ　源の屛風のはさまより藤壺を見
たてまつるなり　私御屛風のはさま三本にみひや
うふと假名にて書けり

猶いとくるしうこそ　秘藤つほのひとりことに宣ふ
也
世やつきぬらん　秘我世やつきぬらんと也此世のかきりにやと也　花樹下集あかさりし涙のもろく成行は世やつきぬらん時やきぬらん　私云此歌をひくに及はさるか
かたはらめ　そは目なり
はこのふたなと　硯箱のふたなとなるへし
たいの姫君　紫上也
としころすこしおもひわすれ　源の心歟此ほとは藤壺へ遠さかり給ふかちかつき奉りてはいよ／＼思ひのもよほさるゝといふ歟　又紫のよく似給へる事を思ひわするゝといふ歟
おほえ給へる　紫上の藤壺によく似たる事なり
物おもひのはるけ所　弄紫上をみん時藤つほの戀しさをすこしなくさむへき事を思ひえ給ふ也
猶かきりなく　藤つほをは昔より思ひしみ奉る故にやおもひなしの別なると也
心まとひして　源の心をゝさめかねて又御丁のうちへつたひ入給ふなり

あさましうむくつけに　藤つほの御心なり
ひれふし　河蝶臥　藤つほの體也
みたにむき給へ　源の心藤つほの御覧したにむき給へかしと也
御そをすへしおき　ぬきすへらかしたる也
すくせのほと　えのかれいり給はぬをいふされとも此たひ實事はなかりしと也
まことに心つきなしと　藤つほの御心也
かゝらぬをりもあらは　藤つほの詞なり
いひつゝけ給ふ　源の宣ひつゝくると也
さすかにいみしと　秘源の詞の藤つほの御耳にとまる事もさすかにましるへしと也　聞春宮の御うしろみを源へたのみ給はんとおほしめせは源の御らるゝ事をさすかにいみしときゝ給ふふしもましるらんと作者のをしはかりにかけり
あらさりし事には　一たひの密通は有しなから更に再會をはおもはさるなり是又貞心なるへし
なつかしき物から　これ又春宮の御事なとに源に御用捨の心もましる也
せめてしたかひきこえさらんも　秘源の心なり藤つ

ほの御樣のなつかしき物から心つよく心はつかしきさまにおはすれはそれにつゝまれて源のしひてゐえみたれ給はぬ也これ又心のをしへなるへしたゝかはかりにても　是より藤つほのつれなくおはしますに源のしたかひて又了見したる詞なりかやうにてなりともをり〳〵御對面もあらはうれひも忘れんとなりうちとけさせ奉らんとのはかりことなりそれをたゆめ給ふとはいふなり油斷さする也

なのめなる事　秘　草子地　聞　大かたなる事さへと也

明はつれはふたりして　秘　辨と命婦と也花弄同

心くるしけれは　源の心か藤つほの御事をさすか心くるしく思ふなるへし

世中にありときこしめされん　秘　源の詞也弄同

又この世ならぬつみと成侍りぬへき　源のかくてありはてんもはつかしけれはやかてうせぬへき身そとなりされはそれは藤つほのゆゑなれは御身の罪のむくいとも成なんとおほし宣ふ詞なり此詞の末歌にみえたり

むくつけきまておほしいれり　藤つほの御心にむくつけくおほすなるへしと也

源　あふことのかたきをけふにかきらすは猶いく代をかなけきつゝへん　弄　やかてうせ侍りなんと宣ひし詞をもてよめり

花　やかてうせ侍りなんといふ詞にてよめりさもなきにてあらはいつまてふへき我身そとなけきたる也　聞　けふにかきらすはとはけふを命のかきりといふなり　或抄只今を逢事のとちめにせすはといふ心なりやかてうせ侍りなんといふ詞にてよめり

私此のする所の義ともは源と藤つほとはあふことのかたき中なり然るに此度つれなきほとをみはてて今を命のかきりそといふなり只今命をかきりと思ひはてたれはこそあれさやうにもなきならは猶いつまてかなからへて物をおもはん身そと也

又或抄頭注にかたきをけふにかきらすはとは人をおもふあまりに後世はさりともと思へとそれも又あふことのかたかりぬへくおもふ所をけふにかきらすはといへり　又同御說に前に又此世ならぬつみと成侍ぬへきとある詞の末なれは生々世々にあふ事のかたきならはいつまてさても輪廻せんとよ

み給へりと也　私云此義は今の世にては先途事のかたき中也さてこの度此おもひゆゑうせはてぬへき身なりされともその妄執は生々にもはなれかたかるへし然るに來世にても又かくのことくつれなくはいく生々世々か此念力のやますして物思ふ身と生れんすらんと後の世かけて恨の殘るへきさまを深切にいひのへたる歌なるへし　此兩儀私に注する分しつかに吟味するに猶後の義甚深なる歟此世ならぬ罪といひ御ほたしにもこそなといへり又返歌の心も後の義にかなふといふへしや如何

御ほたしにもこそと　秘御ほたしにもこそと思ひしかと也引歌なし　聞「みくまのゝ駒のつまつく青つゝら君こそ我かほたし成けれ　私只源の思ひはなれすして藤つほの御ほたしにならんと色々に宣ふ詞なるへし

さすかにうちなけき　藤つほのさまなり

なかき世のうらみを人にのこしてもかつは心をあたとしらなん　秘人にとは藤つほの身に源の恨をのこしてもなりこゝろをあたとは源氏みつから知へしとよみ給ふなり弄同　あたのたの字清なり秘同

或抄他本にかつは心のあるとしらなんとありて今は我つれなしとおほす共春宮の御ため身のためにも心あるとはつめておほすへしとあり云々私此義不可説云々用へからすといへとも注之

いふよしなき心ちすれと　私云此義諸抄に注せす案之に前の詞に世中にありときこしめされんもし又この世ならぬつみとなりぬへきといひ歌にも生々世々恨の殘るへき樣又御ほたしなとさま〴〵詞をつくしかつはうらみかつはおとしきこゆるやうに源の宣へるをこの藤つほの返歌に生々世々の輪廻（道イ）に成へきなとさま〴〵の給へとも人のかたよりなせる罪にはあらす源の心よりなし給へる事なれは心をあたとみつから思ひしり給へとやす〳〵とよみ給へるを詞をつくしつるかひもなしと源のおほす心にやいふよしなくとは詞をつくしていへるかひもなき心なるへし

いつこをおもにてか　何を面目にと也

いとほしとおほしゝるはかり　藤つほの御心をつらつら思ひはてたる源の心中を藤へ思ひしらせ奉らんと也

心たましひ　源の物思ひほれたるさま也
世にふれはうさこそまされ　河古今　世にふれはうさこそまされみよしのゝ岩のかけ道ふみならしてん　秘みよしのゝ岩のかけ道ふみならしてんの心にての給へり弄同　或抄御説なそや世にふれはとはなせに世にはふるそ世にふる程うさのまさる物をと思ひて岩のかけ道ふみならし世をのかれんとすれは又紫上のみすてかたくおはすると也
この女君　秘紫上なり
宮もそのなこり　藤つほの宮なり源の忍ひよりし時御氣のあかりし名殘なるへし
かうことさらめき　是も源の事なりことさらめきはわさとかましきなり藤つほへ思ひしらせ奉らんと思ひ給へる源の心のしるきなるへし
宮も春宮の御ため　藤つほの心中を察してかける詞なり　源の藤つほへ御心おき給はゝ春宮の御ためあしかるへし又かやうの事に世をそむきなとし給はゝいとあやふくおほすへしと也
かゝる事たえすは　源と密通の事なり是より又色々におほす藤つほの御心のうちなるへし源へつれなくおはするとて藤つほと御中よからすは春宮の御ためあしかるへしさりとてまた心とけたまひて密通たえすはうき名のもり出てよからねことありぬへし所詮中宮職をも辭退ありて尼にも成なんそのうへにては源の恨もあらしと覺しなる御心中なるへし
太后のあるましきことに　秘中宮職のことなり院の太后をさしこして藤つほを中宮にたて給ふ事をそねみ給ひしをいまはさやうのことをもあらため給ふ事ありてはと恐怖ある也　弄藤つほの中宮に成給ひし事を弘徽殿のそねみ給ふ事也
院のおほしのたまはせし　秘春宮の御うしろみもなきにとて中宮にたて給ひしそのしるしもなくかはり行世のありさまをいへり
せきふしんの見けんめのやうにこそ　秘此事を奇特にひけり河海にみえたりよくかなへりこゝの心は戚夫人のうきめを見しほとはなくとも人わらはれなる事必有へしと也弄同　花戚夫人は漢高祖の妾趙王如意の母なり惠帝の太子にてありしを立かへんとせしかともつひにその事ならすして高祖は崩

し給ひぬ恵帝位をつき給ひて後呂太后かのむくゐせんとして戚夫人の眼をぬきて人彘となつけてかはやの中におしこめておかれし事のありしかは見けんめのやうにはあらすともと藤つほの中宮の太后をおそれ給ふ御詞なり　河史記云呂后怨ニ戚夫人ニ其子趙王一囚ニ戚夫人一断ニ手足一去レ眼煇レ耳飲ニ瘖薬一使レ居ニ厠中命曰ニ人彘一　聞見けん目のやうにとはうきめをみるといふ心なり凡此物語には呂后恵帝なとの事をひきてかける所おほし

そむきなん事を　秘藤つほ御出家あるへきよし也

春宮みたてまつらて　藤つほの御すかたのかはらぬ時春宮をいま一たひ見たてまつらんとおぼす也

御おくりにもまゐり給はす　秘源は中宮の行啓にも参り給はすいさゝかおもふ心あれは也

心しるとちはいとほしかり　源の心中を命婦なとはいとほしく思ふ也

宮はいみしう　秘春宮の御さま也　弄聞同　私宮は中宮ともみるへしいみしううつくしうおとなひ給てといふより東宮の御さまをいふへしかなしと見奉りといふは中宮の御心中なり宮は春宮とみても中宮とみても義は同しき也

おほしたつすちは　藤つほ御出家の事なり尼になり給うては内わたりなとへも参り給ふ事かたかるへき故におほしとゝこほるやうなれは又内裏邊なと見給ふにも昔に引かへたる事おほく御身のおほえもなけれは又それにつけていとはしき心のすゝみ給ふなるへし

宮の御ためも　河春宮冷泉院也　私河海に呂后の趙王に鴆毒をのませたる事をひけり其義におよはさる間略之

よろつにおほしみたれて　藤壺の御心中也　春宮を見奉りての事御身の御出家の事又故院の御事源と密通有て春宮の生れ給ひし事なと成へしかた〳〵にて愼心有て御出家もし給へるなるへし

御らんせて久しからん　秘藤壺の春宮へ申給詞也弄同　私出家し給はん事を心にもちての給ふ也

御かほうちまもり　春宮の藤つほの御かほを見給ふなりをさなき御さまなり今年冷泉は六歳にておはすへし

しきふかやうにや　春宮の御詞なり　秘式部とてと

しよりたる人あるにや　弄式部とは老たる女のあるをそれかやうに母后のなり給はんかとおほしての給ふ也　河紫式部日記に大式部と殿の宣旨年老たる人なりとみえたり　私式部かようにやと句をきりていかてかさは成給はんと心得へし春宮いとけなくましませはかたちのかはらんとあるを尼の事とはしり給はて俄に年のよらん事と思ひての給ふ御詞なり

いかてかさは成たまはん　秘何かさやうには成給ふへきそと春宮のやかておしかへしてのたまふ也

いふかひなくあはれにて　藤つほの御心なり春宮のいはけなくおはしますをおほす御心中也

それはおいて　藤つほの詞式部かさまをのたまふなりさやうに年のよる事にてはなしと也

かみはそれよりもみしかくて　花式部は年よりたる女なれは髪か落ほそりたるへしそれよりはみしかきとはさげ尼の事をいへるにや

よゐのそうのやうに　河夜居僧二間護持僧也　内裏の二間にさふらひて夜もすから加持まゐる僧也

いとゝ久しかるへき　参り給はんことの絶間有へきと也

まめたちて　秘春宮也

ひさしうおはせぬ　春宮の御詞なり

たゝかの御かほを　秘源によく似給ふと也

ぬきすへたらん　さふからうつしとりたるやうなると也ぬきすへたらんとよむへき歟

女にてみたてまつらまほし　弄春宮の御事なり女になして見奉らはやとなり秘同

いとかうしもおほえ給へる　よく源に似たる事なり玉のきすとはおもしろくかけりよく似てうつくしきはよけれとも人のみやとかめんとおもふかきすと也　玷タマノキス

世のわつらはしさのそらおそろしうおほえ給ふなりけり　聞草子地也

大將の君は宮をいとこひしう　聞宮は春宮歟云々　或抄藤つほの中宮なり　九禪藤壺の事と云々　私云藤つほの義然へし

あさましき御心のほとを　秘藤つほに思ひしらせたてまつらんの心也

雲林院にまうてたまへり　弄淳和の離宮なり見河う

りんゐんともよめり　秘三光院自筆にて被注加畢

```
五十二代嵯峨──五十四代仁明──五十五代文德
　├五十三代淳和　　　　　├五十八代光孝
　　　　　　　　　　　　　└常康──空也上人
├良峯安世──遍昭
```

秘河海序雲林院は淳和の離宮なり紫式部墓は雲林院白毫院の南小野篁か墓の西なり宇治の寶藏の日記にも紫野に雲林院あるよしみえたり云々紅葉なとおもしろき所なるへし「わひ人のわきて立よる木のもとはたのむかけなく紅葉ちりけりと遍昭のよみ侍る所也

河雲林院にて櫻の花のちりけるをよめる　承均法師　古「いさ櫻われも散なん一さかりありなは人にうきめみえなん　雲林院は淳和の離宮也仁明天皇に處分し奉り給次常康親王傳領本堂は彼親王の室なり其後御願寺として天曆に寶性僧都別當に補せられなとして殊に尊敬ありき御記にも本尊千手觀音有靈驗云々又謙德公康保〔三イ〕元年二月廿二日補雲林院別當于時參議從四位下小右記云定覺阿闍梨年來籠居雲林院天曆七年正月八日於雲林院令轉大般若又康保四年五月十四日始從今日於眞言院東寺雲林院蓮臺寺寶相寺講仁王經限廿ケ日竟之爲息災なと有　花國史云天長九年四月癸酉鑾駕幸紫野院御釣臺院司獻命陪從文人賦詩御製和成賜祿有差新撰院名爲雲林亭　承和十一年八月癸巳幸北野駐蹕於雲林院閑覽池塘賜宴群臣日暮還宮　元慶八年九月十日丁卯權僧正法印大和尙位遍昭奏言雲林院者故無品常康親王之舊宮〔宅イ〕也親王出家爲沙門貞觀十一年二月十六日以此院付屬遍昭曰深草天皇給此居之後天皇登遐常康落髮旻天罔極德猶難報恩願永爲精舍令學天台之敎伏思元慶寺永賜年分度者三人傳天台之法門試度之道請以爲元慶寺別院成親王之心願矣院中雜事擇遍昭門徒中堪幹事者令其勾當　勅依請聽之

こはゝみやは所の御せうと　秘桐壺更衣の御おとゝいなり　弄同

秋の野のいとなまめきたる　聞「秋の野になまめき立る女郎花あなかしかましく花もひとゝき古今遍昭歌也

ろんきせさせ　花つかひろんき　番論義也　私青表紙には只ろんきとはかりあり
所からにいと世中のつねなさを　私おもしろき語也
私論義なとさせてきゝ給ふにつけて佛道に御心も進むに又所からのあはれなるさま也
猶うき人しもそ　河「天の戸をおし明かたの月みれはうき人しもそ戀しかりける　弄秘聞書引歌一同
私藤つほの御事なるへし猶うき人しもそといへる猶の字心をつけてみるへしかやうに佛法のことわりをきゝ所からにあはれに世のつねなさの思ひしらるゝ時さへ猶うき人のうへは忘られぬと也
おし明かたの月かけに　法師はらのあか奉る時分おし明方の月也前の歌の詞書おもしろくはなかけり
からくとならし　花花さらの音也
菊の花こきうすき紅葉なと　佛にはしきみの外に時時の花紅葉をもたてまつる也これを時花といふ也
このかたのいとなみ　佛道の事也
さもあちきなき身を　源の心也
律師のいとたふとき　桐更衣の兄源の外叔也
ねんふつしゆ生　河光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨觀无量壽經文也
なそやとおほしなるに　秘何とてそむきはてさるやと也
先ひめ君の　聞又此次にも紫上の事を思ひ出給ふ也
わろき御心なるや　草子の評也
れいならぬ日かすも心もとなくのみ　三本聞書心もとなくとあり一本おほつかなくとあり久しき程ならねと紫上とこれほともへたて給へるならひなきをれいならぬとはいふなり
行はなれぬへしやとこゝろみ侍る道なれと　秘これより文の詞なり　弄世をのかれはやの心なり秘同
聞遁世のこゝろみといふ也
つれくもなくさめかたう　或抄御説に紫上の事を思ひやりてこのつれくもなくさめかたく心ほそさまさり給ふと也下の詞に人ひとりの御事とあり
きゝさしたる事ありて　秘法文の事也弄同
いかになと　むらさきの上もいかにつれくならんとおしはかりてかき給へる詞也
みちのくにかみに　弄檀紙也白くてあつき紙也
うちとけかき　聞そさうにつくろはす書給へると也

源 淺ちふの露のやとりに君をおきて四方のあらしそしつ心なき　うちむきたる歌にておもしろし一條院より上東門院へまゐる御歌の上句なり源氏のしつ心なきを嵐によせたり　弄　源のしつ心なきなり嵐によせてよめり或抄に歌の面は明なり下の心は世中はかく／＼しくなる事を四方の嵐といへり源をよからす思ふ人のおほき事也御説同之云々　河　れいならぬ事おもくなりて御くしおろし給ひける日上東門院中宮と申ける時つかはしける一條院御歌「淺ちふの露のやとりに君をおきて塵を出ぬる事そかなしき　私秘にちりを出ぬるとは出家する事を出塵といふなり人間の俗塵を出るよし也　又私「露ならぬ心を花におきそめて風ふくことにものおもひそつく此歌の心も相似たり

女君も　紫上なり

返紫上 かせふけは先そみたるゝ色かはる淺ちか露にかゝるさゝかに　秘　女君の我身を淺茅のさゝかにゝたとへてよめり　弄　淺茅か露にかゝれるさゝかになとの體を女君のわか身にたとへてよみ給へり色かはる心末の詞にみゆ　或抄是は前の嵐をうけて世上のはけしきとあれは紫上の心もみたるゝと也色かはるとはよろつ故院の御時のやうにもなく源の御威勢もなきは色かはる淺茅のことく也しかもそのはかなさ淺茅の露にかゝりたるさゝかにのやうなれは風につけて先亂るゝそとなり　同御説もかくのことし

御手はいとおかしうのみ　是より紫上の手跡の事を源のほめおほす心也

わか御手に　源のに紫の手跡の似たるなり

おはしたてたり　やしなひたてたるとなり　源の心也

吹かふ風もちかきほとにて齋院にもきこえ給ひけり

河 權齋院は紫野なり齋院にちかきといふなり

雲林院權齋院なり賀茂近きわたりなる故なり

吹かふ風もとは只ちかきと云事の餘情にかけり

中將の君　秘　權齋院の女房也

かく旅の空に　是よりは中將君への文の詞なるへし

おまへには　齋宮への文にはといふ也

源 かけまくもかしこけれともそのかみのあきおもほゆるいふたすきかな　河　ゆふたすきとは木綿を手繦に

するをいふなり舊事本紀云以二天香具山之天日羅一懸爲二手繦一古語拾遺云以蘿葛爲手繦といへる也 花 齋宮に朝かほ奉りし時の秋也 秘 齋院なる故にかけまくはかたしけなきと也かけて申はかたしけなけれともといふ義なりそのかみの秋とは朝顏奉りし時又葵卷におとつれ給ひしも秋なり今は齋院なれはかひなきよし也 弄 秋おもほゆるとは必いつとなけれとも昔おほゆるの心なり槿奉り給ひし事なとあれは秋に緣あるよしなり今は齋院にてかひなきゆゑなり

むかしをいまにとおもひ給ふるにも 河「いにしへのしつのをたまきくり返し昔を今になすよしもかな 秘 齋院にたち給はさるさきならましかはとなり引歌同 花 齋院に成給ふはすちことなるとあれは昔をいまにとりかへさまほしく思ひ給ふなり

とりかへされんものゝやうに 秘「とりかへすものにもかなや世中を有しなからの我身と思はん 弄 とりかへす物にもかなやの歌の心也心は齋院に立給はぬさきにはさりともとたのみ給ひし事也

なれ〳〵しけに そのかみの秋おもほゆるなと事ありかほにかきなし給へるをいふ歟御返歌の心もさやうにきこえたる歟

からの淺みとりの紙 花 榊につくるにたよりある色也 私 源は服者にておはすれはかた〳〵似あひたる色なり

まきるゝ事なくて 中將君の返事の詞なり 齋院はまきるゝ事なくてつれ〳〵なるへし

かひなくのみなん 槿の意つゐにつれなくおはしつれはかくいふなり

心とゝめて 隙ある故に文をこま〳〵とかきたるなり

おまへのはゆふのかたはしに 秘 齋院よりは木綿のかたはしにかき給也

返 槿齋院

そのかみやいかゝはありしゆふたすきこゝろにかけて忍ふらんゆゑ 弄 源の歌を何となくうけてよみ給へるもむかしおほゆるをとかめ給へり秘同 私昔とても忍ひ給ふへきゆゑ何事にかとよみ給へるなり源の歌に實事も有しやうなれはとかめてかくよみ給ふなり

ちかき世にこそ 花 歌の詞なるへしいまたかんかへ

す弄同　秘引歌末爲ちかき世には思ひしらぬとい
ふ心也
さうなとおかしうなりにけりまして朝かほも　秘草
字也　花朝かほは女の御かたちをいへり夕貌卷に
しるし侍りぬ　秘かほの事をよせたり弄同　齋院
の御朝顔を思ひやり給ふなりしかも槿を奉り給し
事あれはそのよせありていへるなり手跡につけて
御かたちをも思ひやり給ふなり
たゝならすおそろしや　弄神事のはゝかり也秘同
此比そかし　秘去年を思ひ出て此比よと思ひ給ふ也
野の宮のあはれなりし　秋草のさかりなる時分の野
へのけしき又は齋院の事につけて野宮の事をおほ
しいつるなり
あやしうやうの物と　花あやしうやうの物とはあや
しき樣の物といふ心なりよのつねならぬ心なり神
をうらむるやうなるをあやしきとはいへり　箋秘あ
やしうやうの物の注花鳥の義如何以下弄と同し
弄齋宮齋院いつれもおなしやうに心つくしなる事
の神事にはゝかりある事なれは神をうらめしう思
ふとなり秘同　私やうの物とは物の一やうなると
いふやうの心也
神うらめしうおほえたりみきに　花左右は伊勢賀茂を云
去年の九月は齋宮の御くたりに心をつくし給ひい
まは又齋院の御事によりて神をかこち給ふ事也
御くせのみくるしきそかし　如此よむへし
わりなうおほされは　秘是より草子地也　六條御息
所此齋院なともしひてあなかちにおほさは有まし
き事にはあらぬをさはし給はて又かやうにおほす
事を評していふなり源はわりなき事に心のとまる
くせとみえたり
あやしき御心なりや　聞是まて草子地か
院も　弄齋院の心也　秘院は齋院の事なり院とかく
はめつらしき事也
すこしあいなき事なりかし　秘こゝまて草子地なり
つれなくおはしなからたまさかの御返事のあるは
あやしきと評する也　聞草子地也　私云秘の心は
わりなうおほされはと云よりあひなき事なりかし
といふまてをつゝけて草子地とみるなり又聞書に
は院もかくといふより齋院の心とみてすこしあい
なき事なりかしといふをさらに草子地とみるなり

いつれにても同し事か但九禪抄以下は一同につけて草子地と云々此說を用へし
六十卷といふふみ　天台六十卷　本書卅卷 末書卅卷 玄義十卷 釋籤十卷 文句十卷 疏記十卷 止觀十卷 弘決十卷 天台大師作 妙樂大師作　是號三大部　中右記云近日主上學六十卷給一條院令學此六十卷給例也
いみしき光おこなひいたし　源のおはしこもりたるを人々よろこふ也
物うかりぬへけれと　かやうに心をすまし給うてはかへり給はんも物うかるへき事なれと紫の御事のほたしとなりて心よわく又たちかへり給ふと也
人ひとりの御こと　秘紫上也弄聞書同
みすきやう　御誦經也
山かつまて物たひ　寺中の外の民まて施を行せらるる也
このもかのも　此面彼面也　夕顔卷にあり
しはふる人とも　しはふるひ人とあり　秘たゝいやしき人なり　弄柴なととるいやしき人なるへし又皺古人とも聞書同　河柴振人木の葉なとかきあつむるいやしきしつの男なり木の葉のちりかゝりたるをうちはらふ心也　一說皺古人年老てしわよりたる人也阿佛房說物語の面は賤者の體なり老人とはみえさるか　仙源抄云敎隆說は老人なり皺ありてふるき人なり　私云柴振人なり日本紀折ニ枝葉ー人と有たとへはいやしきしつのをなと頭にも柴のかゝるを麻の袖にてうちふるふよしなりよし悲愚葉あなかちに袖にてうちふるはすとも柴をもちありくを柴ふるひ人といふにこそ定家本にはしはふるひととあり已上仙源抄　紫明抄云柴シハ皺シワの兩義なり木草にうつもれたるしつのめしつの男なり云々或云皺古人歟云々しわたゝみたる老人を云也
くろき御車のうちにて　河服者の車なり　板車なといふ歟　花西宮抄云重服公卿乘黑蓑車也　今案諒闇中といひなから源氏大將は父御門の御事にて重服也　秘服者なれはなり
ことにみえ給はねと　服者のいてたちなれは衣裳もあさやかならねとそれをさへめてたてまつるなり
女君は　紫上也
ねひまさり給へる心ちして　秘雲林院よりかへり給時の事なり　聞日比の程にねひまされるやうに思

へる也
世中いかゝあらんと　紫上の心也　秘当代に成て時
うしなひ給へる様なるを思ひ給ふなり
あいなき心のさま〳〵みたるゝや　秘源氏のしかし
かみたるゝ也弄同　私此詞いさゝか心得かたし秘
弄の義叶はすとおほゆあいなき心のみたるゝとは
藤つほのつれなくおはするをみはて給ひて源の御
心に世もあちきなくそむきやしなましとおほす御
心の程此前の詞にみえたりさやうの事をしか〳〵
紫のみしり給てかやうに世中いかゝあらんとあや
ふく思ひしつまり給へるにや一日の返歌にも色か
はる浅茅に源をたとへ給ひしはとおほしてうちか
たらひ心とり給ふと云へしされとも紫の心はさや
うにはおはすへからす只世間の習のかはりたる事
をおほすなるへし源は御心のうちにさま〳〵おほ
す事あれはわか御心より推量してさりやとおほし
けるなるへし　又私あいなき心のさま〳〵みたる
るとは藤つほ朧なとの事なるへしさやうの好色の
事をみしりてやう〳〵うらみ給ふ心のあるにやと
らうたくおほすことにや

色かはると　秘紫の返歌に色かはる浅茅か露と有
事也
山つとにもたせ給へる　集日本紀土産　畏萬河に
は山里のつとゝあり
私家つとも同し事也
おまへのに御らんしくらふれは　秘二條院の御まへ
なり　山林の紅葉は庭前のにはかならす楽ます物
也
おほつかなさも　秘いまた藤つほへはそのゝち無音
なりし也
宮にまゐらせ　弄藤つほの中宮へ也秘同　たゝ大か
たにてとは中宮へはたゝ大かたなるやうにて参ら
せ給うて命婦のかたへねんころに文をつかはさる
る也
いらせ給ひにけるを　秘是より文の詞中宮の春宮へ
参り給ふ事也云々
聞春宮へ藤つほの参り給ひし時分なり細々なき事
なれはめつらしきといふなり　花まゐらせ給ひに
けるをとありて中宮の東宮へ参らせ給ひしこと也
云々

宮のあひたの事おほつかなく　秘此程寺に侍りて中宮東宮の間の事心もとなきと也　或抄源は東宮の御うしろみにてましませは此程のおこたりを申給ふ也宮の間とは春宮の御やうも有へきをと也中宮の春宮におはします時分なれは此儀然へき歟

日かすを心ならすやとて　秘心さしておこなひし侍る日數をやふり過なんはこゝちならぬとゝ也弄同

にしきくらう　河「みる人もなくてちりぬる奥山の紅葉は夜の錦也けり　秘よるの錦の心なり引歌同　弄花同　よるの錦はいたつらなる心なりそれを錦くらうとかきなせる面白し富貴不歸故鄉如衣錦夜行史記

をりよくて　秘御機嫌よろしくはみせ奉り給へとなり

御めとまるに　藤つほの此紅葉を興し御覽する也

れいのいさゝかなる物　秘源の文也　花もみちの枝にちひさき文をむすひつけられたる也

御かほの色もうつろひて　赤面し給へるさまなるへし或抄御說紅葉に付たる文なれは其色も御かほにうつろひ又此文をみ給ひて赤面の心もあり

あたら思ひやりふかうものし給ふ人のゆくりなう　弄源の事をおほすなりゆくりなうは不意なり思ひやりもなき心なりゆくりかとも用る也

かめにさゝせて　紅葉の事也

宮の御事にふれたる　秘春宮の御事なとの賞めなるかたの御かへりはかりをし給ふなり弄同

さも心かしこく　秘源の心也　聞風流めきたる方の御返事はなくてたゝよのつねの事又春宮の御事はかりとりあはぬさまに返事し給ひつるを心かしこくつらく源の思ひ給ふ也

何事もうしろみきこえならひ給ひにたれは　秘今さらよそにみんも人みとかむへき事そとてまゐり給ふなり　聞藤つほのつらくおはする故うちたえ疎略あらは人の不審すへき事なれは參り給ふなり

まかて給ふへき日　弄中宮の三條宮へ御歸りの日源氏君參給也　秘藤つほの東宮よりまかて給ふ日をしりてまゐり給ふなり

まつ内の御かたへ　秘まつ當今朱雀の御方へ參り給ふなり

御かたちも院にいとようにたてまつり給ふ　秘朱雀

院の故桐壺のみかとに似たてまつり給ふなり
なこやかにそ　河「あつふすまなこやかにしてきたれとも君としねゝははたへさむしも　又柔心也引歌の心にてしるしやはらかに穏かなる心なり
かたみにあはれと　源の院に似給ふよと朱雀にもおほす也互にあはれと故院の御事を思ひいて給ふなり
かんの君の事も　秘御門の御心なり　朧月夜の源と密通の事もしり給へとはしめより有し事なれはとおほしなたむる也帝のなこやかなる御心をかきあらはせり
ふみのみち　學文かたの事なり源氏に問給ふなり
すき〳〵しき　艶書なとの歌かたりなり
齋宮のくたり給ひし　秋好中宮の伊勢へ下り給ひし日の事なり朱雀の後まて忘かたく仰られし也
かたらせ給ふに　朱雀のかたり給ふなり
我もうちとけて　源也
野宮のあはれなりし　齋宮の御事を帝の仰らるゝ間源も齋宮の御母御息所のもとへおはせし事を申給ふ也

あそひなともせまほしき　帝の御詞諒闇中なれは御遊なとあるへからさる也
中宮のこよひまかて　秘源の詞なり中宮の東宮より退出あるへきをとふらはんとなりかやうに申さるる故は自然御遊なと有へきよしを仰いたされてはまかり出かたき故に先遮て此よしを申さるゝ也弄同　私云此義は御遊も有へしとみえたり諒闇中も内々の御遊なとはあるか尋へし
院のゝ給はせおく　源に東宮の御うしろみの事桐みかとの御遺言ありし事也
いとほしう思ひ給へられて　中宮をみまひ給ふ意趣を奏聞あるなり
東宮をはいまのみこになして　秘御門の御也　朱雀院の御子に冷泉をはし給へと御遺勅ありし事也
とりわきて心さし　秘心におほしめすそのかひもなきよし也　私東宮の御ゆかりいとほしう御たよりなきさまに奏したまへは御門も御心中を仰らるゝ也
何事をかはとてこそ　こそと句をきりてよむへしも　とより御諫略もなけれは事あたらしく何事をかは

とおほしてとりわきたる御心さしもみえぬを仰らるゝ也
としのほとより　秘東宮を褒美し給ふ勅定也
御てなとわさとかしこう　わさとは殊更かしこきとの事也
ものし給ふへけれ何事にもはか〳〵しからぬ　秘御身のおもておこしなるへきと也
大かたし給ふわさなと　秘源の詞也
またいとかたなりに　物のそろはぬ事なるへし
まかて給ふに　源の東宮へ參り給ふ時也
大宮の御せうとの藤大納言の子の頭の辨　秘大宮は弘徽殿也　弄弘徽殿の兄也　頭辨の弘徽の甥也

二條太政大臣（朱雀院外祖）―藤大納言―頭辨（白虹日をつらぬけりと誦せし人）
　　　　　　　　　　　　　└弘徽殿太后（朱雀院母后）―麗景殿女御（朱雀院御位の時の女御こゝにいへる妹の麗景殿これ也）

いもうとのれいけいてん　秘當代の女御也　系圖に

注す
大將の御さきを　源の退出の時のさきをおふ也
しはしたちとまりて　秘頭辨のたちとまる也
白虹日をつらぬけり太子おちたり　秘史記并漢書鄒陽傳上書の詞也文選にものせたりこゝの心は源のいまなりたつましき事を思立給ふとあさむきたる心なり當代へ野心ある事を言るなり弄同　花日をつらぬけり日につけり兩義なり白虹日をつらぬけるともつひにとほらすその心さしとけかたかるへき事を荊軻おそれたるなりいま源氏を荊軻にたとへたり又冷泉の東宮にておはしますを太子丹によそへていへる詞也　弄おちたりはおそるゝ也　漢書曰荊軻慕二燕丹之義一欲レ刺二秦王一其精誠上感二於天一白虹貫レ日太子畏レ之注曰後漢書詳節曰貫猶レ屬也虹蜺者二内姪一聰明蔽二塞政一在二臣下一婚盛二于朝一君不レ覺悟二虹蜺貫レ日燕の太子丹か始皇をかたふけんとせしをいま源氏にたとへたるなり證本云日につけりを用へし云々　仙源抄云漢書の文也史記にもあり太子とは源氏にたとへたるなり紫明云虹蜺は内姪につかさとるといへり　愚案おほよそこ

の文は燕太子丹荊軻をかたらひて秦始皇をころさんとしけり其象天にあらはれてかくのことくありけれと事のならすして害にあはん事をおちたる也史記には白虹貫日なと侍りしからは源氏さるくはたてはなけれと春宮に心よせてみかとのためにはらくろき事ありぬへき人と思ひていへるなり又内姪の義にかなへるにや虹を姪亂にたとへたる事毛詩にも見えたり此義ならは源氏内侍のかみにかよふ事人もやう〱しりたれはかやうにいへるか又おくの詞にも頭辨のすてしことをおもふにわつらはしくてかんの君にも久しくきこえ給はすとありこれもたゝなへての世につきたるしんしやく歟又かゝるすちにかきるへき歟了見にしたかふへきなり　或抄御說にはくこう日をつらぬけり太子おちたるとあそはすはくこうとはあそばされずとおほえ候又白虹は荊軻か眼のうちに此すちあり共あそはす

きさきの御けしきは　弘徽殿の源をあしく思事なりかうしたしき人々も　秘此頭辨なとの事なりけしきたちいふへかめる事　源の御上をよからすと沙汰する事なるへし又朧の事なともこもるへしつれなうのみ　源のしらすかほつくり給なりおまへにさふらひて　秘中宮へ源の參りて申給詞なりみかとの御前にありつる事を申給なりいまた春宮の御所に中宮もましますも　遲參のことわり申給ふ詞也

月のはなやかなるに　秘上の詞に廿日の月やう〱とあり夜のふけ行景氣なるへし

御あそひせさせ給て　桐壺帝の御事を藤つほのおほし出給ふなりその感にもよほされて歌をも源へよみかけ給ふ也

おなしみかきの內なから　御垣の內は內裏也內裏は同し事なから中宮の御身にかはれる事おほしと也東宮のおはします坊も大內のうちなるへし

藤壺　こゝのへに霧やへたつる雲のうへの月をはるかに思ひやるかな　秘おまへにさふらひてとある源の詞をうけて今はことの外にへたておほきと也　聞心はあらは也　或抄九重に霧やへたつるとはあつく霧のふりたる心なりしかも下には九重をかゝへたる詞なり此霧を春宮源氏なとをあしく思ふ人の心に

たとへてあそはす末の詞に源の霞も人のとある詞も霧も人をへたつる心なり此歌の事を須磨にていひいて給へり同御説前の詞におなしみかきの内なからかはれる事おほくかなしとあり昔をおほしいてゝ今かやうに同し大内なからこよひの月なとを餘所に思ひやるは霧やへたつらんと也

ほとなけれは御けはひも　藤つほの御歌を命婦していひつたへ給御けはひもほのきこえたるにつらさも忘られて源の涙のおつるなり

返源
月かけはみし夜の秋にかはらぬをへたつるきりのつらくもあるかな　秘うへは前の歌をうけて下の心は源の心をのへたるなり　弄此歌の面は中宮の御歌をうけて月の事みせたり下には源の思ひをよめるなり中宮のへたて給ふ事をよめり　私云此歌おもては月の事又朱雀の御心にちかふ事はなけれともおほち大后なとを霧によそへていへるかさて下は藤つほの事か　聞面はたゝなり下は藤つほをうらむ也

霞も人のとか　河　山さくらみにゆく道をへたつれは霞も人の心也けり　弄秘に引歌なし　私霞も人の心なりけりといへることくに霧もへたつる事は人の心のことくなりといふ

宮は春宮を　秘宮は中宮也

よろつの事を　何かといひをしへ申給ふ也

ふかうもおほしいれたゝぬを　秘いまたいとけなき御さま也

いとうしろめたく　藤つほの御心也

れいはいとゝくおほとのこもるを　東宮のつねははやく御寝なる也

いて給ふまては　中宮の御出あるまてはおき居給ふなり今中宮はさまをかへ給ふへきとおほす故一しほあはれふかき御心のうちなるへし

うらめしけにおほし　藤つほのかへり給を東宮のおほす心なり

あはれとみたてまつり　藤つほの御心なり

大將頭辨のすしつる　源の心なり白虹日をつらぬけりといひし事

かんの君にも　蔦つゝましくて朧へも源の無音也

はつしくれいつしかと　聞此時分朧のかたより源へ音信なり是か朧の好色過たる性也くせ事也

朧こからしのふくにつけつゝまちしまにおほつかなさの比もへにけり　秘 源の無音を木枯によせたり　花 久しく文の音つれもなくてことの葉のかれたるを木枯のふくとはよみ給へるなり下の源氏の返事にきこえさせてもかひなきことの葉のけにこそかれ侍りにけれとあるは源氏のかたより久しく音つれぬ事をいへり　孟 又此花鳥の義いかゝとおほゆ又源氏の返事の詞とてのせられたるも當流の本にはなき詞なり仍朱にてこれを滅する者なり當流の本源の返事の詞にはきこえさせてもかひなき物がたりにこそむけにくゝをれには聞えさせけれ身のみものうき程にとあり此歌の義もはつしくれけしきたち木枯ほとの胸あはれなる時分をはさりともおほししりてとひ給はんするかと待すくせとも猶御音つれなくて程のふれは我は此時節の感にもよほされてこそおとろかし申せとにや朧月夜は歌の上手とはみえたり心をつけてみるへし又は朧と源との密通の事は帝なとさへしろしめしたれは人の何かといひあつかふ事有へしそれを木枯にたとへたるにやさやうの事につゝまれて互におほつかなくて程のへぬるとにや此兩義みなもつて今案の僻説也後賢これを定むへし

をりもあはれにあなかちに忍び　秘 源の思ひやり給ふなり　時節の感又忍び書給つらんを懇切の心さしと源のおほししる也

からのかみとも　唐紙なり

筆なとも心ことに　箋 朧月夜手跡すくれたる人なれはなるへし弄同

これはかり（たイ）ならんと　秘 いつくよりそと皆いひあつかふ也引つくろひ給へるさまたゝ人ならしとおもふなり

きこえさせてもかひなき　秘 源の文の詞也

物こりにこそ　聞 朧月夜にほそ殿にてまたあひ給し夜とのゐ申の聲に聞をひ行（給）ひし事にや又同し夜髯黒の弟藤少將のたてしとみのもとにてみたてまつりしにや云々

身のみ物うきほとに　河「數ならぬ身のみ物うくおもほえてまたるゝまてに成にける哉　花 またるゝまでになるといふ心なりこれも內侍のかみの歌の詞につきたる引歌也　聞 朧の歌にまちし間にとあ

れはまたるゝまてにの歌をひけり　弄秘引歌同し
秘こなたよりこそ申へきをまたるゝ程に成けるよ
と也
返源
あひみすて忍ふる比の涙をもなへてのあきの時雨と
やおもふ　秘この比の時雨はかりにてはなきなりこ
なたの涙もそひてふるなるへし大かたの秋のしく
れはかりとは御らんすへからすと也　或抄御説同
之
私云あひみすて忍ふる比とは世上にはゝかりてあ
ひみたてまつらて忍ふるなりこの忍ふるは物をこ
らゆる堪忍のかたなりされは只この雨は涙なりさ
れ共時節秋なれは大かたのならひの時雨とや御ら
んせんとよみたるなるへし逢みすては逢みすして
なり
心のかよふならはいかになかめの空も物忘れし侍ら
ん　我心はつねにかよふなりそなたの心もかよふな
らはかきくらす時雨の空をなかむる物思ひも忘れ
ぬへしとにや又はかくのことくかきくもるはわか
涙の雨ともしり給ふましき也それは心のかよはぬ
故なり我心と同し涙ならはかやうにかきくらす空

のなかめも物思ひはなからんとかこちたるへし
花「人こふる心はそらにかよへはや雨も涙もとも
にしくるゝ　貫之「君おしむ心の空にかよへはや
けふとまるへき雨のふるらん
今案なかめは時雨によそへ侍り心のかよふならは
雨もさはるましき心也　秘花鳥に引歌両首あり但
此詞歌のおよはさるらん　弄人こふる心はそらに
云々但不及引歌歟聞書同
いかになかめの空も　秘引歌有へき歟未勘御忘れも
なくはいかにと也
物わすれし侍らん　秘これまて文の詞也
こまやかに成にけり　秘えうちおかすしてかきもて
行さま妙也
かやうにおとろかし　秘此かんの君の外にもかた
かたとたえあるかたよりおとろかし申人おほかる
へしされともうちすて給ふ也
ふかうしまさるへし　源の御心なり紫のおはする故
也　聞草子地也
院の御はて　秘桐みかとの御一周忌也
御八講のいそき　弄中宮のかたちをかへ給ふへき御

心さし也　是は故院の御佛事にはあらす別に中宮のおこなひ給ふなり此ついてに御くしおろし給ふへき御用意也

しも月のついたちころ御こきなるに　故院周関の御佛事也　御國忌持統天皇元年設國忌齋於京師諸寺聞みこきとよむなり昔は一ケ國つゝ山陵へつけらるゝ也日本は國かはらぬ故に廟をたつる法あるなり宗廟とて前のをすつる事あり

宮にきこえ給ふ　弄中宮へ也

源わかれにしけふはくれともなき人にゆきあふほとをいつとたのまん　弄ゆきあふとは雪によせたり　秘同

けふは物かなしう　秘御國忌なれは也

なからふる程はうけれとゆきめくりけふはその世にあふこゝちして　けふまてなからふるもうけれともなからへてこそはその世にあふ心ちもけにし侍れとなり極而面白し　花此雨首ともに雪をかくしてよみ給へり

すちかはりいまめかしう　藤つほの手の事也

秘いまめかしきは一かとある故に曲なきなり常の物なるか何も上手なるなり御息所の手跡は一かとあるやうにいへり藤つほの手跡は極上とみえたり
弄ほめたる詞也よろつの事つねのやうにてよろしきを本とす

人にはことに　秘人よりは別なる也

けふはこの御事も　秘けふは藤つほの御事をも源のおもひけちて故院をとふらひ給ふ也

雪のしつくにぬれ〳〵を（おイ）こなひ給ふ　涙の御さまあはれ也

十二月十余日はかり中宮御はかう　弄定たる法事かとみゆ　弄聞書中宮の御八講は毎年定たる事歟一猶不定事也　巳上弄　聞書中宮の御八講は例の事也

玉のちくらのへうしちすのかさり　玉軸羅表紙帙簀のかさり也　河玉のちくへうしひもちすのかさりとあり　帙簀　文巻也帙簀とは巻物のたけなるすの面に錦をおしてへりをさしてくみの緒をつけたるなり経にかきらす書籍をも納るものなり
秘竹を簀にあみたる文まきなり経をつゝむ物なり
弄同

佛の御かさり　佛の荘厳也

はなつくゑのおほひ　机の脚に花かたなとをほり物

にしたるへし經や佛具なとすうる机なりおほひと
はうへには打敷有へし
はしめの日は先帝の御れう　秘藤中宮の父みかと也
弄同
つきの日はは〻きさき　これ又藤中宮の御母后なり
八かうの第二日なり
又の日は院の御れう五卷の日なれは　第三日なり此日を桐壺の帝の御心さしにし給ふなり此日中日にて五卷の日とて提婆品を講するなり　弄五くはんの日とよむへし一簡　秘第三の日なり薪の行道ある日也
世のつ〻ましさをえしもはゝかり給はて　秘弘徽殿わたりの事のはゝかりをも忘れて參り給ふなり
私五卷の日しかも故院の御心さしなれは世上を憚らす公卿殿上人皆參ること也
たき〻こるほとより　河五卷日なり　採薪及菓蓏隨時恭敬與　法華經五卷提婆品
拾「法華經を我えし事は薪こり菜つみ水くみつかへてそえし　行基菩薩　私此歌を伽陀にして行道あるなり

さま〳〵のほうもちさ〻けて　捧物なり　河伊勢物語云田むらのみかと〻申みかとおはしましけりその時の女御たかきこと申みまそかりけるそれうせ給て安祥寺にて御わさしけりたてまつりあつめたる物千さ〻けはかりありそこはくのさ〻け物を木の枝につけて堂の前にたてたれは山もさらに堂の前にうこきいてたるやうになんみえける　或抄御說にうち枝といひて金銀のうち枝に種々のほう物をつくるなり云々　私云御八講の時諸卿捧物をみつからもちて行道するなり猶八講の作法くはしく注しくはふへし
つねにおなし事の　秘草子地なり　八講事西宮抄にくはし　閑源の事をあまりほむる故に筆者のかくいふなり　みるたひにめつらしからんと詞をつかふなり
はての日はわか御事を　第五日なるへし　秘藤壺出家の事
みこはなかはのほとにたちて　秘中宮の御願の趣に驚て立給ふ也弄同
心つようおほしたるさまを　秘兵部卿宮さま〳〵申

されとも心つよく思ひ立給よしをの給ふなり
いむことうけ給ふへきよしの給はす　河受戒の事な
り　の給はすとは兵部卿宮へ山座主に受戒給ふへ
きよしを藤つほの仰らるゝなり
御をちのよ河のそうつ　秘中宮の御をちなり弄同
御母かたなり
みこもいみしうなき給　御兄の兵部卿の宮なり
故院のみこたちは　桐壺帝の御子達なり　秘中宮の
御腹にあらさるみこたち也
むかしの御ありさま　故院の中宮を大切におほしめ
したりしをおほし出るなり
大将はたちとまり給て　源はあまりほいなくていま
た退出し給はぬ也
なとかさしもと　人にすくれてなけき給はんも人の
とかめぬへき事なれは也
みこなといて給ひぬる　聞故院のみこたちのとふら
ひ給ひぬるかいて給へるといふ歟又中宮の御兄兵
部卿宮歟　私是に兵部卿宮いまたおはせは源への
あへ〈ひイ〉しらへ有へし然は兵部卿宮もかへり給へる跡
と云なり

やう〳〵人しつまりて　こゝのありさま思ひやりて
みるへし
いかやうにおほしたゝせ　私云か様に源のとすくな
なるも心をしつめかね給ふなるへし秘大将の詞也
いまはしめて思ひ給ふる事にも　秘藤中宮の御返事
也　私源のかう餞にとの給ふにつけてかねてより
の心まうけとの給ふなり
物さわかしきやうなりつれと　秘人々物さわかしく
せし程にかへりして心みだれぬべかりしと也　弄
心みたれぬへくこの詞尤殊勝也云々したりかほな
らてあはれなりし　私御出家の事は今はしめたる
御心さしにもあらす桐帝の崩御の時よりの事なり
されともそのきはに落飾なかりしはあまり物さわ
かしくて御心みたれぬへかりし程にいまゝておそ
なはりたるといふ事をかきのこしたる詞にやとお
ほゆ如何
ことわりにいみしときこえ給ふ　人々の簾中にかな
しむけはひをあはれに源のきゝ給ふなり
みすのうちのにほひいと物ふかき　秘簾中のそらた
き也　物ふかきは心にくき體なり

くろほうに（はイ）　黒方なり
みやうかうのけふりも　秘これは簾中に名香をたき給ふにはあらす法事の有し方みすの外の事也　名香は佛にたてまつる香なり種々の香なり名香には蜜を入さるなりみちをかくしほろゝけてとあり（也イ）案之に蜜は生類の故歟但あまつらを用るになんの妨あらんや
の給ひしさま思ひいてきこえ　秘東宮のゝ給ひし事を女院のおほしめし出たるをいふなり　秘式部かやうにやなとの給ひし事を中宮の今思ひ出し給ひてたへかたく思ひ給ふ也
御心つよさもたへかたうて　弄中宮の御心也あはれ也〳〵　私中宮御落飾の時は御心つよかりしも此東宮の御使にはたへかたくおほすと也
大將そことくはへ　東宮の御使にも源の返事を申させ給へる事也
大將おしはかりて返事をし給ふなり代貴に御返事をはかく源のしりふ也本如此朱にて書入私ことくはへはこと葉をくはふる也
たれも〳〵あるかきり　源の心中にこゝのあはれをのたまひたき事もおほけれと人々の心をさまらぬほとなれは中々いひいたし給はぬと也
源 月のすむくもゐをかけてしたふともこの世のやみに猶やまよはん　花中宮の御心中をおしはかりてよみ給へるなりこの世のやみは東宮の御事也　秘雲ゐをかけてとは禁中の事にはあらす中宮の出家し給て忉利天上なとの望おはすとも天上にても子を思ひ給ふ心のやみははれかたかるへしと也
とおもうたまへらるゝこそかひなくおほしたらせ　かくのことく句をきりて心得へし　或抄思う給へらるゝこそかひなくと藤つほの御事をはいひかたくや月のすむ是は源の我身の事をあそはすにや云云　私此義について案するに月のすむ雲ゐとは只今中宮の御出家の事なりかけてしたふともとは源の中宮の御跡をしたひて又出家するとも猶妄執ははれかたかるへけれは猶冥闇にやまよはんとおもふこそかひなく侍れと詞へつゝけてみるへくや下にはこの世のやみは東宮の御事もこもるへし此義如何
おほしたゝせ給へるうらやましさは　源の心中也

秘中宮の御出家の御うらやましさはかきりもなし
されとも前の歌の心の如く源のおもふこそかひな
くといふにやとおほえ侍りかひなくといへる詞を
諸抄に注せす抄ともにのする義のことくならは中
宮の御出家ありても御子の事をは忘れ給ふましけ
れは猶やみにまとひ給はんとおもう給へらるゝこ
そかひなくと云やうにきこえたり只今御出家の人
に對してかやうにはいひかたき事なり如何心のう
ちをたにえきこえあらはし給はす
返藤壺 おほかたのうきにつけてはいとへともいつかこの世
をそむきはつへき 箋 幽玄なる返歌のさま類なしま
ことは世のうきとはかりに出家はあらつれとも皆
にこりにしむへきとなりよのつねならはさやうに
まよふ心はあるましきとこそ有へきを是か眞實の
道心あるさま也高光少將の「九重のうちのみつね
に戀しくて雲の八重たつ山はすみうしの類也 弄
此歌又幽玄なり下句なとまたあはれなり高光の雲
のやへたつやまはすみうしなとよめるかことし
私高光出家して横川にすみしに天暦のみかとより
つかはされし歌 一都よりくもの八重たつおく山の

横川の水はすみよかるらん 此御製の返歌に九
重のうちのみつねにと詠せり 私さきの源の歌
を注する今案の義のことくならは此返歌も心か
はるへし源の心は御跡をしたひて出家したりと
も猶此世のやみにまよふへき心ありとおもふこ
と我はかひなく侍れ中宮のいさきよくおほしめ
し立給へるは御うらやましさのかきりなきとの
義なりされは此歌も世のうきをいとふはかりに
こそかたちをもかへたれ源のゝ給ふことくこの
世のやみをいてはつへき心にはあらすと身をか
へりみて詠し給へるとみて然へくやいつかこの
世をとは是も春宮の御事こもるへし凡此歌うき
につけてはいとへともといひていつか此世をの
かれはつへきと二重にいひわけたる所面白し大
かたのかたちはかりはかへたれとも眞實の心の
世をそむきはつる事はかたき事なるへしと也
かつにこりつゝ 花 歌の詞あるへし尋へし 弄 引歌
不見又歌の心ならすとも
御つかひの 秘 章子地也 中宮も御心をさまらぬ時
分なれは御使なとのことくはへたゝ歟今案してか

けり
まかて給ひぬ　源の退出也
とのにてもわか御かたに　秘二條院なり紫上のかた
へも御出なき也
世中いとはしう　源にも出家ありたき也
母宮（君イ）をたにおほやけさまにとおほしおきてし　秘故
院ゝ此中宮をこそ御うしろみにと仰ありし物をと
なり　闇おほやけさまとは中宮にておはしませは
春宮の御たよりになる事なりおほしおきてしとは
故院の御心中を云なり
もとの御くらゐにても　秘中宮の事也辭退し給はん
と也弄同
われさへみたてまつりすてゝはと　源の出家して春
宮をみすて奉らはいかならんとおほしあかす也
いまはかゝるかたさまの　秘尼の道具なとしたゝめ
て源のまゐらせ給ふ也
御心とものなりにけれは　命婦も中宮と同しく尼に
成たる也
くはしういひつゝけんにことゝしき　秘さう
さうしやといふまて草子地也　かやうの所におも
しろき歌なとのなきは物たらはすやとことわりて
かけりことゝしきさまとは中宮命婦かもとへも
とふらひ給ふ事也
まゐり給ふもいまはつゝましさうすらきて　秘源の
心かけ給ふ事もいまはあるましきと也
御みつからきこえ　藤つほの源へみつからみすこし
なからに物の給ふ事もあるなり
思ひしめてし事は　秘源の心なり
としもかはりぬれは　秘源廿四歳に成給也弄同　花
諒闇も過てあたらしき年の始なり
内わたりはなやかにないえんたうかなと　内宴者唐
太宗之舊風也嵯峨天皇弘仁三年幸神泉苑覧花樹命
文人賦詩是始也　延喜二年正月廿日御記云左大臣
令下菅根朝臣一奏中先朝上雖二御傑寝一至レ有二内宴一多
用二仁壽殿一此度内宴可二仁壽殿行一云々藏人式清涼
殿錚廿日注曰廿一二三日之間若有二子日一使レ用レ之
廿日藏人及所司裝二束仁壽殿一新儀式云正月廿日内
宴事前一日藏人所雜色以下幷所司裝二束仁壽殿一木
工寮立二舞臺東庭一遣使藏人於親王第示（仰イ）明日可レ參
之狀又藏人頭奉仰令三廻二仰可レ參文人等一當日御仁

壽殿踏歌之事在初音巻

御おこなひしめやかに　藤中宮也

むつかしかりし事　秘源のけさうの心の事也

つねの御ねんすたう　持佛堂也是は前より有しなるへし

ことにたてられたるみたう　これは尼になり給て後にたてられたるへし

とりわきたる御おこなひ　つねのおこなひの外の別行なるへし

大將參り給へり　源の藤つほのおはする三條宮へ參る也

宮のうちとに　弄三條の宮なりあらたまるしるしは春に成たる事なり

みやつかさとも　河宮司くしいたきは苦しいたきか屈いたきか

あを馬はかりそ猶引かへぬ　白馬節會の日春宮中宮后なとへも引て參る事有　秘白馬はかりは今も中(之イ)宮へひくと也　河十節錄云正月七日看白馬々性以白爲本天有白龍地有二白馬一是日見二白馬一即年中邪氣遠去不レ來也　皇世記云高辛氏之子以二正月七日一恒登二東山岡一命二靑衣人令レ引二靑馬七疋一調二靑陽之氣一馬者主レ陽靑者主レ春山岡者萬物之始人主之居七者七曜之淸徵(徹イ)陽氣之溫和(知イ)也寶龜六年正月七日天皇御楊梅院殿設宴於五位已上旣而內厩宴一進靑御馬一兵部省進二五位已上裝馬一中納言石上朝臣進就二版位一宣命其詞曰令詔今日正月七日豐明聞食日爾在是以岡甫登遊止云々靑馬見(多末居天)退止云々　承和元年正月七日天皇御二豐樂殿一覽二靑馬一助二陽氣一

心喪中覽白馬事　貞觀十四年正月七日無節會去九月太后崩心喪中也召左右馬寮御馬於內殿前覽纔八不裝束　白馬參中宮事　權記曰白馬同參二中宮一給二酒祿於寮官一

みちをよきつゝ　秘三條宮をよきて也人の心得になる心也

むかひのおほいとのに　弄大殿は二條のおとゝの事也三條宮にむかひとかけるなり別の子細なし一注大殿ともあり可然歟

千人にもかへつへき　秘源の今まゐり給ふはまことに一人當千ともいひつへき也

あいなく淚ぐまる　感したる淚なるへし

まらうといと物あはれなり　源のさま也
みすのはし御木丁の　簾のへり也尼のすまひは色のかはるへし又みすのへりの色はかはるへからす御木丁は色かはるへししからはみすのはつれに青にひなる御木丁のひま／＼よりうすにひくちなしなとの袖くちのみえたる成へし
とけわたる池のうすこほり　私　河海に池のうすらひとありて左の注あり　河萬十「さほ川にこほりわたれるうすらひのうすき心もわかおもはなくに　うすらひはうすき氷なりと八雲御抄にあり予六帖の樋の所にうすらひの歌を入たり如何
きしの柳のけしきはかりに　河岸容廻臘將舒柳山意（進イ）衝寒欲發梅　杜子美　柳は非情にてしかも心あり風に隨て氣をしる故に人柳といふ漢武帝園中蒔人柳一日二臥三起云々
むへも心あると　秘　あまといはん爲也　河「音にきく松かうら島けふそみるむへも心あるあまはすみけり　弄　引歌後撰おとにきゝし　私云此引歌後撰十五雜一にあり詞書云西院の后おほんくしおろさせ給ておこなはせ行ける時かの院のなか島の松をけつりてかきつけ侍ける　素性法師「おとに聞松かうら島けふそみるむへも心あるあまは住けり　私西院の后は嵯峨の御女淳和の后とみえたりいま此薄雲女院も先帝の御女桐壺帝の后にて尼に成ておこなひし給ふに源氏君おほしいてゝ口すさひ給へるなるへし心あるあまといふはかりの義はほいなき心ちする聞本集の詞を勘へくはふる所なり
源　なかめかるあまのすみかとみるからにまつしほたるる松かうら島　秘　義なし　聞書聞イ本なまめかるとあり云々
おくふかうもあらすみな佛にゆつり　秘　奥のかたには佛をすゑおき給へるによりて中宮の御座いさゝかはしちかなるさまなりおもしろきかき様也
返藤壺　ありしより名殘たになきうらしまにたちよる波のめつらしきかな　弄　うら島とよみ給へるは源の松かうら島をうけてよめり秘同　秘　松かうらしまをたゝうらしまとよめるにやめつらしき事也　いま源のたちより給ふをたくひなくうれしとみ給ひしなり　又案之源の歌は松かうら島を詠給へり此歌は浦島太郎か心なるへし後古郷にかへりてありしにかは

りたる心成へし何もかはりはてたるに源のたちより給ふを波に比していへるなるへし　以上秘又案之といふより末は細字書入歟　聞書秘の義に同し
ほのきこゆれは　藤つほの御こゝろなり人つてならすときこゆ前にみつからきこえ給ふをりもありとありし也
なみたほろ〳〵と　源也
はしたなけれは　源の心也　秘簾中に世を思ひすましたる人々おほかるべし
ことすくなにて出給ひぬ　源の三條宮より退出也
さもたくひなく　秘簾中の人々の源をほむる詞なり
心もとなき所なく世に榮え　不足なる事なく故院の時さかえ給ひし事也
さるひとつ物　花又たくひなき心也
世をおほししらん　聞世間の盛衰の理をもしり給ふましきとなり
いといたうおほししつめて　秘故院の御時は思ひの有へき御身ともおもはさりしに只今毎事物思ひのあるさまのし給也一しほ又たくひなきことゝほめたる也

心くるしうも　人々の源をいたはりおもふ也
宮もおほしいつる事　藤の心なり御身のうきにそへて何やかやとおほしいつる成へし
つかさめしの比　弄春の除目なるへし　秘こゝにては春の除目をもさしていへる歟　私春は縣召除目とてあがためしとよむなり秋は京官除目とかきてつかさめしの除目といふこゝは春の除目をつかさめしといへり推量するにいつれもめしてつかさを給ふ事なれは除目の惣名にいはんも相違有ましき事なり　或抄御説にこゝに春の除目なり秋の除目をなへてはつかさめしといへと惣しては除目の惣名なり春のをはあかためしとこそいへともこゝにはかやうにいへり
この宮の人は　藤中宮也
大かたのたうりにても宮の御たうはりにても　大かたのたうりとはその身にとりて加階すへき年勞をいふ宮の御たうはりといふは三宮の年爵をいへり院の御給りもこれにおなし弄同　其身にとりて加階すへき年勞ある人も只今中宮に祇候ある人をは結句それ故に加階なともせさるなり臨時の中宮の

御給こそあるへきをあまりなるとおもひ給ふなり
かくてもいつしかと御くらゐをさり　御出家以後も中宮職のとゝまる事もなきをことによせてかはりたる事とものあるよし也
みふなとのとまるへきにも　河御封　太上天皇二千戸　三宮は千五百戸　弄御封なと不可改也入道したまへともなほ入道宮と申へきなり　問云封戸の戸といへるはいかほとのことそや同一勘戸は民戸也千戸萬戸といふは民戸をよせらるゝ心なりそれを封戸とも云なり
かねておほしすてゝし　御出家あるからはおほしまうけたるなり
猶御心うこく　弄中宮の御心也　さふらふ人々の事には猶御心うこく也
わか身をなきになしても　東宮の御事におやまり給ふ事あるゆゑにかくおほす也
人しれすあやうく　秘春宮の御身にきすある事を佛に念し申さるゝと也
よろつをなくさめ給ふ　わか御身にかへて東宮の御事を祈給ふ故にいまかやうに御心にかなはぬやうなる御身をも何ともおほさぬなり
大將もしりみたてまつり　源の心にも藤つほの御心むけをみしり給ふなり何事につけても道理にもそむきたる事おほけれとも藤つほの御身をつゝしみてかまはぬやうにし給ふ心なり太后の心のまゝおしけたれておはします也
この殿の人とも　秘源の御かたの人々も藤つほの人人と同しく加階なとにももるゝ也
こもりおはす　源もさい〳〵參内もなく籠居也
左のおとゝも　秘葵の上の父也
ちしのへう　秘致仕表秘致仕花鳥說尤可然用之　弄致仕例花鳥等に有七十以上の事也　秘曲禮上大夫七十而致事注致其所掌之事於君而告老　若不得謝賜几杖　河七十老致仕懸二其所仕之事一孝經注　尙書注曰伊尹旣致仕老終以二三公之禮一葬之也　正義曰伊尹湯之上相位爲二三公一必封爲國君又受二邑于畿內一告レ老致二政（尋イ）事於君一欲下歸二私邑一以自安上　禮記曰雖其致仕猶可即而謀焉　漢丞相韋賢地節三年以二病老一乞二骸骨一丞相致仕自レ賢始貞觀政要曰玄齡自以一居二端揆一十有五年頻表辭レ位優詔不許十有六年進拜司空玄

齢優以ニ年老ニ請ニ致仕　本朝例　孝謙天皇天平勝寶八年二月日正一位行左大臣橘朝臣諸兄治部卿従四位下美好子致仕辭大臣大臣致仕始　藤原良世寛平八年七月十六日任左大臣十二月廿九日上表致仕詔許七十四號致仕大臣昌泰三年十一月八日薨七十八　執政臣致仕例　謙德公天祿三年十月二十日依レ病上表乞ニ致仕ニ勅攝政太政大臣幷隨身如レ故　東三條關白寛和二年七月二十日辭ニ右大臣ニ致仕永祚二年五月五日上表致仕太政大臣攝政等更蒙ニ關白勅ニ　案之致仕は雖辭官猶政事にあつかるをいふ也此致仕の准據古來難義たるか仍弘安源氏論義にも醍醐天皇の御代の致仕良世なりといへとも攝政臣致仕の例にあらすとて終に不レ決云々此事秘說有　延喜八年十一月九日庚戌御記云召大臣給民部大輔大藏善行朝臣言致仕表依請許之　弘安源氏論義云　十六番左　具顯朝臣　問云六條院におきて准據の人おほし致仕のおとゝたれの人になすらへたるそや　右　爲方　答云致仕のこと准據の例ひとつにさためかたし但光源氏高明公に准せは其時の致仕をや准すへからん致仕ならすして思ひよそへらるゝも人さためて侍らんとおほゆれとも間につきて致仕を出し侍り醍醐天皇の御時致仕良世也かれとやいふへからん　左又申　まことに此事致仕をむねとすへし大かたは淸愼公あひ似たる事おほく侍るにや貞信公子淸愼公の致仕のおとゝも太政大臣の子とみえたりかの花宴の春かとよ明王の御代四代といへるも貞信公の面かけあり其上母宮腹の事淸愼公の母は亭子院の御女也藏人の少將ならひに頭中將へたる事女御入内事紅梅の右府廉義公なと昇進おなしき事辨少將右大辨をへて丞相の位にのほる西宮の左大臣とあひならふ事も源氏によそへられ侍り但致仕の事をむねと准すへきに淸愼公天祿元年五月に攝政にて薨すとみえたれは此義相違すかれこれをなすらへて朱雀院の論義に同しき歟　右又申　淸愼公を准する事まことになすらへらるゝ所おほしといへとも致仕又むねと有へし此外たかへる事も重難をくはへおほかるへしといへとも准據の事ひとかたに定かたけれはとて猶爲持云

私云河海に此義をのせらるゝ間所詮なしといへともかきのする物なりさて此卷にいへる致仕はのち

に攝政太政大臣なり弘安源氏論義にいへるは此攝政の息葵上の兄なりしかれは父子の義相違せるを河海思ひわたりてかき給へる也こゝにいへる致仕の人官は左大臣なりみをつくしに攝政太政大臣也攝政太政大臣致仕太政大臣弘安源氏論義にいへる致仕也　葵上の兄藤のうら葉に太政大臣若栄に致仕何事源氏にならひし人也

葵上の父　花大臣致仕の事は左大臣藤原良世寛平八年十二月廿九日上表致仕七十四太政大臣藤實頼安和二年正月八日上表致仕七十　此等之例也今の物語左のおとゝといへる良世の例あひかなふなり又清愼公は致仕の表奉りて後同八月十六日圓融院受禪の時更に攝政し給ふを例として引入大臣も此卷に致仕し侍てみをつくしに冷泉院受禪の時攝政たる由みえ侍れは清愼公の致仕の例にちかきにや又致仕といふは七十に成て出仕すましきによりて此間もちひたる車をも先祖の廟にこれをかくる事あり故に懸車の齢ともいふなり官を辭すといへとも猶政事にあつかるへきよし河海にしるされたる事おほつかなし

なかき世のかためときこえおき給ひし　私李部王記延喜御門崩後御參之間春宮朱雀八歲御時外舅貞信公于時左大臣爲御供參內主上有五ヶ條其內三可聞左大臣訓云々　私云此事桐壺御門崩御の時春宮冷泉御參內の時の事に河海にひけり又此所にも引て然へきの間略して又かきのする所なり前注する所此卷の始也

たひ〳〵もちゐ(ひイ)させ給はねと　官を辭するには表をたてまつるなり是を辭表といふたてまつる事を上表といふ官を辭する事をゆるし給ふ時は表をとめおかるゝなりゆるしたまはぬ時は表をたひ〳〵返し給ふなり此時も度々返し給ふ成へし

せめてかへさひ　無理に左大臣の上表なり三度の表なといふ事あり

いとゝひとそうのみ　河一孫　秘二條大臣の一族はかりなると也

世のおもしと　上表したる左大臣の事也

世の人も心あるかきりは　おもしろくかけりあしき臣下なとはかへつてよろこふへし賢臣はをしむといふなり

御子ともはいつれとなく　弄左大臣の御子たち也
こよなうしつまりて　こゝに句をきりてみるへし
左大臣の息たち心ちよけなりしも皆時にあはてし
つまり給ふなり
三位中將なとも　秘葵上の兄也　なともとおもしろ
くかけり此人は二條のおとゝのむこなれとも四君
へ疎遠なるから隔心のよし末にも前にもみえたり
さて時にあはぬ也
四の君をも猶かれ〳〵に　秘二條のおとゝの四君也
猶かれ〳〵にといひて前よりうとき所みえたり
めさましうもてなされたれは　三位の中將の方から
も猶義をたてゝかやうにあるなり
心とけたる御むこの　二條大臣三位中將をむこのう
ちにも思はぬ也
おもひしれとにやこのたひのつかさめしにも　弄三
位の中將の事也　秘三位中將を今中納言にも昇進
あるへきをさもなき也
おもひいれす　三位中將の何とも思はぬ心也
世ははかなき物と　源のさしも榮花なりし人の今時
にあはぬをみて三位中將の我身なとはことわりな
りと思ひなしてつねに源へまゐりかよひ給ふ也
いにしへも物くるほしきまて　聞箒木卷に有し事な
り
さすかにいとみ給へり　源と別して御中らひよき物
から又藝能なとはいとみ給ふ心もあると也
春秋のみときやう　河春秋御讀經　弄聞云源氏のお
こなひ給ふよし定たる法事にや是は源のおこなひ
給ふ歟一說　禁中なとには定れる事也　秘二季の御
讀經私には行たる例なきなり今私に源のし給ふ歟
いたつらにいとまありけなる　是も時にあはぬはか
せともなるへし
ゐんふたき　河に見えたり　河掩韻　古集の韻の字
をふたきて何の字と推して勝負をするなり上古掩
韻をむねとして連句を不好云々見家範朝臣記
心をやりて　隨意におはするさまなり
うちあそひておはするを世中にはかやうにわつらは
しきことゝも　秘世にはやう〳〵讒言とものあるな
り　聞源や三位中將なとの朝廷の奉公をもし給は
てかやうに心やすく遊ひなとしておはするに付て
も又いろ〳〵のことゝもを人のいひ出るなりやう

やうすまの事の序なり
人々あるへし　筆者の詞也
夏の雨のとかにふりて　秘おもしろき景氣なり
さるへきしふとも　河集詩集也　三位中將持參也
とのにもふとの　二條院の文庫也　文殿
めつらしき古集　秘韻ふたきの事也
その道の人々　作文かたの人なり
殿上人も大學のも　殿上人の儒學にこゝろさすなと
なり大學のは儒者なり地下におほかるへし
ことりにかたわかせ給へり　秘對座に着座するな
り　左右にわかれこれをぬきとりてつかふ也　仙
源云駒取歟愚案細取歟細分なといへるたくひ成へ
き歟かたわかつ方を分るなり　私云三光院なと申
されしは勿論左右にわかつなりその座の次第なる
人左右へ一人つゝませてわかつをいふやうに申さ
れしなりたとへは
左一三五七九　　左一四五六十
かくのことし
右二四六八十　　右二三七八九
かやうになとは有へからさる歟
かたきゐんの字　推しかたき韻字なるへし
時々うちの給ふさまいとこよなき　源の詞をくはへ
給ふさまなり　秘源の才學也
猶さるへきにて　源のさやうに有へき事と生れつき
なる天才といふ也
右まけにけり　三位中將まけ方也
まけわさ　勝負の時かならすある事也
かけ物なとさま〳〵　纏頭なり
はしのもとのさうひけしきはかり　河甕頭竹葉經春
熟階底薔薇入夏開　はしのもとのさうひんと有是
は朗詠にうたふときふしかやうにきこゆるにやと
云々
古今物名にさうひ「われはけさうにそみつる花
の色をあたなる物といふへかりけり
中將の御子の　弄紅梅右大臣也
殿上するやつこゝのつはかり　童殿上也八九歳なる
と也
四の君はらの二郎　秘紅梅おとゝ也　私これまて一
人の事也
よせおもくて　四君はらなるゆゑなり　二條のおと

との外孫也
高砂をいたしてうたふ　河高砂催馬樂律長生樂破たかさこのさいさこのたかさこの一段をのへにたてるしら玉椿玉柳二段それもかとよむましもかとまもかと三段ねりおさみおのみそかけにせんたまやなき四段なにしかもさんなにしかもなにしかも五段こゝろもまたいけんゆり花のさゆり花の六段けさゝいたるはつはなにあはましものをさゆりはなの七段
れいよりはうちみたれ　花これは源氏の君の事也　秘源のさま也
うす物のなほしひとへを　秘此事うたかひ有直衣と單にてあるへき事なりされとつねよりもうちみたれとあれは直衣はかりをき給へるなるへし又すき給へる御はたつきといへるも直衣はかりといふへし
あはまし物をさゆりはのとうたふとちめに　これは高砂の歌の詞也　秘高砂は七段の歌此句は末の詞也　聞さゆり花時節にあへり又さゆりはのとかきたるはうたふふしによりてかやうに聞ゆるか或抄云御說高砂の歌の末の詞はさゆりはなとあるをさゆりはのとかきたるは花の字をまたいひもはてぬにはの字のとき御さかつきをまゐらせらるゝ也　私此義あまりいりほかにや又源の御そぬきてかつけ給ひしは此歌ののちの事なるを前にかきたるへし　私とちめにとは高砂の歌のはてさまなる故也
御かはらけまゐり給ふ　三位中將酌をとり給ふ也
三位中將それもかとけさひらけたるはつ花におとらぬきみかにほひをそみる
高砂の歌にけささいたるはつ花にあはまし物をさゆりはなのとあるによりて源氏の君を花にたとへたる心なりそれもかとはそれかと云心也高砂の詞也源の御かたちは今朝ひらけたる花よりもたくひなきとなりこれははしのもとの薔薇をみてよめるなりけさひらけたるとは古今物名部にさうひをわれはけさうひにそみつるとよめる心にてよめるなるへし源の歌も同し　薔薇をみてよめり云々此歌にけさひらけたるとよめるは古今物名部にさうひを我はけさうひにそみつるとよめる心をもてよめるにや云々花鳥には高砂の歌をうけたりと云々

私高砂歌の詞古今物名歌兩義共に可然乎今朝ひらけたる初花は高砂の詞に今朝さいたる初花とあれはたよりあり又こゝにあるはさうひの花なれはそれに對してよめるなりわれはけさうひにそみつるなといふも今朝のはつ花といへる心なるへし

ほゝゑみてとり給　源をほめて歌をよみ給へはそれをあひしらひ給へる體なり

返源 時ならてけささく花は夏の雨にしほれにけらし匂ふほとなく　花 これも源のわか身にたとへ給ふ也　秘 源も我かほを花に比して讀給ふ也　或抄前の歌に源を花にたとへたるを返歌もそのまゝ花に成てしをれにけらしとよみ給ふ也時にあひ給はぬよしなりこれも又我はけさうひにそみつるの歌をおもへり同御說に時ならて今朝さく花とは花といふ物も春の花こそあれ時ならぬ花は見所もなきとの給ふ心成へし下の心は時にあはすして雨にしをるゝよし也

おとろへにたる物を　源の詞なり

らうかはしくきこしめしなすを　秘 さうときとはおとろへたる物をなとゝさうときの宣ひつゝらうかはしく酒をむさときこしめしなすなりらうかはしきは亂かはしき也　河海にはおとろへにたる物をとうちそほれとありて感たるなり云々或抄御說にらうかはしは勞かはしき也いたむやう也云々

とかめいてつゝ　秘 事外しひ給ふ也　弄 三位中將の源氏に酒をねんころにしひ參るてい也　私とかめいてつゝ源の酒をむさときこしめすをとかむる也

おほかめりし　記者の筆なり人々の歌おほかりしを二首の外はかきとめぬをいへり

つらゆきかいさめたうるゝ　花 かやうの時としてとりあへすよみたる歌なとはよき事はすくなかるへしそれを後まてかきとゝむるは心なきわさと貫之もいひし事なりたふるゝはたはふれなりたはふれことのやうにて後まてとかくのあつかひくさなるは物むつかしけれはようなき事ともおほかりしかれはかきとゝめぬとなり　たうるゝかたふく心なりたはふるゝ花鳥義也　秘 此事出所分明ならす心は只かやうの酒の中なとにてよめる歌はすちなき事もおほくましる物なりしるしおくへからさるのよしをしるせる事有へし或抄御說にいさめたうる

るとは一方にはいさめくつかへる心一方つきにかたふく心也　聞かたふく心なり歸伏の心なり

皆此御事を　秘皆源をほめたる事ともなりと也

やまとのもからのも　詩歌なり

わか御心にも　源の心なり

文王の子武王のおとうとゝ　秘源もみつからほこり給ふなり文王をは桐壺に比し武王を朱雀に比し源の我身を周公旦に比し給ふなり　弄史記の文見河海源氏の身を周公旦に比しての給ふ詞なりほこりたる心なり　河史記魯世家曰於㆑是卒相㆓成王㆒而使㆘子伯禽代就㆗封於魯㆒周公戒㆓伯禽㆒曰我文王之子武王之弟成王之叔父也於天下亦不賤矣然我一沐三握髮一飯三吐哺起以待士猶恐㆑失㆓天下之賢人㆒子之㆑魯愼無㆓以㆑國驕㆒人㆒

成王のなにとかの給はんとすらん　秘こゝは記者の詞なり周公旦の詞は成王の叔父とあるをこゝは春宮にておはする冷泉院は源の御弟なりしかもかくれたる事あるによりて成王かためわか身を何とかの給ふへきと云なり花鳥の說大なるあやまりなりこゝにては冷泉院を成王に比していへり記者の詞なり花鳥には成王は武王の子なり此物語には冷泉は朱雀の弟其次第たかへり云々　聞書花の說わろし武王には冷泉を比するなり周公旦も成王の時の攝政なり源も冷泉の御時攝政をし給ふ也　花文王の子武王の弟といふ事は史記魯世家に周公の自稱の詞にかけりこれを後江相公の貞信公の攝政を辭する表の詞にかけり周公旦者文王之子武王之弟也自知其貴忠仁公者皇后之父皇帝之祖世推其仁云々源氏君は桐壺のみかとの御子朱雀院の御弟なれは周公に比して此一句を誦し給ふ也成王の何とかの給はんすらんとかけるはたとへは周室の王位のついてのことくならは武王の後は成王の位につき給へりそれに此物語をなすらへていはゝ朱雀院の脱屣あらは今上の位につき給ふへき事なりそれに朱雀院の次に御弟の冷泉院の御位につき給へは相違するやうなるによりて成王の何とかの給はんすらんとは今上の御意をはかりかたきといへる心なりおもしろくかきなしたる詞なり　私云今上の御事をいへる相違せりことしは源二十四歲なり明石卷に廿六歲の春よりの事有今上は明石卷に二歲とみ

え給ふ此卷はいまた生れ給はぬさきの事也
それはかりやまた心もとなからん　聞書それはかりやなり　これは冷泉いまた位につき給はねは心もとなからんといふ歟
兵部卿宮も　秘紫上の父なり帥宮となる本あり是は螢兵部卿宮なりいつれにても然るへし　弄帥宮螢兵部卿也　或抄同之　聞書兵部卿宮前の帥宮螢兵部卿なり　九禪抄同　私云兵部卿宮とある本も帥宮とあるにても二ゝの詞のつゝき螢兵部卿源の御弟の事とみえたり
かんの君まかて給へり　秘朧月夜里出し給ふ也
わらはやみ　聞書朧の瘧病也
れいのめつらしき　つねにかくのことく有しか
いとさかりににきはゝしき　朧のありさま也
きさいの宮も　弘徽殿の太后なりこれも同しく里居し給ふなり
いとおそろしけれと　源の心なりかやうのわりなき事に御心のとまるくせ也
宮にはさなんとはけいせす　弘徽殿へは源の通ひ給ふをみる人もわつらはしき事也かゝりてはとおちて申さぬ也
おとゝはた　父大臣は思ひよりもなき也
雨にはかにふり神いたうなりさわく　夏の夕立のさまなるへし
とのゝきんたち　弄二條のおとゝの君たち也
みやつかさ　弘徽殿は皇太后宮なれはそのつかさつかさ也
出給はんかたなく　源の出へきやうなき也
心しりの人ふたり　朧と源とのあひたの心しり也
むら雨のまきれ　俄なる雨のまきれに大臣のわたり給も聞えさりし也　白雨　急雨　暴雨なとかけるなり
おとゝわたり給てまつ宮の御かたに　聞二條のおとゝのわたり給て弘徽殿のかたにおはせしを朧のかたには雨のまきれにてしらぬなり太后と朧とはひとつ殿に住給へるなるへし
かろらかにふとはひいり給ひて　朧の方の御すのうちへ父おとゝのふといり給ふ也
ひきあけ給ふまゝに　簾中へも入はてす先物の給ふなり

いかにそいとうたて　雨雷なとの事をとふらひ給ふ
大臣の詞なり
中將宮のすけなと　弄二條大臣の息也　秘中將は弘徽殿の弟宮の亮は皇太后宮の家司成へし
したとにあはつけきを　舌はやにあは〳〵しき物いひのさまなりこれも人のをしへ也
大將は物のまきれにも　かやうに物にかくれなとしてあるまきれにも也源の心也
左のおとゝ　秘葵上の父なり源のおほすなりかやうにあはつけきかたはなき物をと思ひあはせ給ふ也
けに入はてゝも　聞草子地なりみす引あけ給ふまゝに物の給へるさまをかくいふなり
ゐさり出給ふ　朧の源を大臣にみせしとていて給ふなり
おもてのいたうあかみ　朧の赤面したる也
猶なやましう　かほの赤きをおとゝは猶わつらひの名殘あるかとみ給なり
なと御けしきのれいならぬ物のけなとの　おとゝの詞なりなにとて御けしきのれいならぬそ物のけなとのあるか修法なとをも猶久しくさせつへき物をと也
うすふたあゐなる帶　河二藍帶なり　花源氏の御帶夏の直衣の色なり
あやしとおほすに　大臣の心なり
たゝんかみの　ふところかみなりたゝうかみとよむべし
いかなる物ともぞと御心おとろかれて　帶たゝんかみの事なり大臣の心におとろく也
けしきことなり物のさま　あやしき物ともとなり
大臣の朧にの給ふ詞なり
たまへそれとりてたかそと見侍らん　それとりてたまへたかそと見侍らんといふ詞成へし
われもみつけ給へる　朧は大臣のかくの給ふにて見つけ給ふなり
こなからもはつかしと　秘たゝうちの人にははつかしくはゝからはしくて子になりともいひかたき事なるを此おとゝの性の急なる故にかやう成なり
おほしもまはさす　性急にして遠慮をめくらされぬ也
木丁よりみいれ　御丁のうちなるへし
いまそやをらかほひきかくし　此そひふしたる源の

さまなり
あさましうめさましう　大臣の心なり
ひたおもてには　直面なり
しん殿にわたり給ぬ　秘弘徽殿の御方弄
女君の心くるしき御けしきを　秘源は朧をなくさめ給ふと也　私大将殿もいとほしくとは朧の心中をいとほしく思ふと御身のためもあしき事いてくへしとおほせと朧のなけくを心つよくなくさめ給ふどなり
おとゝはおもひのまゝに　おもひたる事をありのまま心にのこさぬ人といふなり急成性なりこれ又人のをしへなり
とゝこほり給はんゆく〳〵と　すこしもとゝこほりなく心のゆく〳〵太后へ申給なり
かう〳〵の事なん　これなり太后へ父おとゝのいひつゝけ給ふ詞なり
このたゝうかみ　ふところかみをとりてみせ給ふなり
むかしも心ゆるされて　されてのてもし清か　秘さき〳〵もかよひ給ひしと也　私云心ゆるされて文字にこるへきか父大臣の心にもゆるされすして有そめし事なりされと人からに思ひゆるしてありしとなるへし
さてもみんと　秘又ゆるしてみんとありし時は源の心をもとゝめ給はさりしと也　私ゆるされすしてありそめし事なからとりかへされぬ事なれはそのまゝ源へ朧を参らせんとありし時は心もとゝめ給はさりしなりそれか一段の腹立なり
さるへきにこそ　それもささへき契にてこそとうちおきし也
よにけかれたりともおほしすつましき　秘此源にあひ給へるけかれはかりを朱雀院はおほしすてましきをたのみにと内侍のかみにも参らせ給となり
ほいのことくたてまつりなから　朱雀へ参らせんとの本意にてはありしなりされはほいのことくといふなり不慮に源の密通ありし故にさらは源へ参らせんとありしかちかひたる也
うけはりたる女御　秘此けかれゆゑにと也　私本意のことく朱雀へ参らせは理運に女御にとこそ有へきに源のけかれゆゑ内侍のかみにておくと也

あかすくちをし　不足に口をしく思ふ也

又かゝる事　又源の密通の事也

おとこのれいとは　男のつねのならひとはいひなから也

齋院をも　秘 槿齋院也弄同

世のためのみにもあらすわかためも　秘 源の身のためを思はゝよもさはあらしと思ひしと也

時のいうそくと　河 是は有職事歟　聞書物の心をよくしりたる人也

うたかひ侍らさりつる　世上にいふ事は實ならし源の世にすくれたる人なれはさるあしき事あらしと源をはうたかはさりしと也

宮はいとゝしき　秘 太后也　聞書源を弘徽殿の一段にくみ給ふにかやうにおとゝの腹立給へはいとゝしくにくみのそふ也

いと物しき御けしきにて　太后は一段腹立の氣色歟

みかとゝきこゆれと　朱雀也　太后の詞也　秘 帝をも何とも思はさる時節と太后の述懐の詞なり　私 此朱雀を人のあなつらはしく思ふとなり

ちゝのおとゝ　葵上の父也

ひとつむすめ　葵上の事ひとりむすめとはいふ也

このかみのはらにて　秘 朱雀の東宮にておはせし時の事也

御そひふしにとりわき　とりわきとは引よきて奉れるなといふ心也

又この君をも　朧也

をこかましかりし　宮つかへにと有しにさきに源の密通有し事也

たれもあやしとやおほしたりし　秘 二條のおとゝもさらは源をむこにとるへきやうにし給ひし事なりみな〳〵源に心よせありしとなりいまおちあたり給ふ也

かのみ方にこそ　弄 源に人々の心よせし事をはらたち給ふなり

そのほいたかふ　弄 内侍のかみを女御にもと思ひしと也　源の領掌なき故にこそ思へは朱雀へは參らせ給へと也

さふらひ給ふめれといとほしさに　かやうにほいたかふさまにて内侍のかみにてさふらひ給へともわれは朧を猶ねんころに思ふと也

さるかたにても　秘内々にても何とかなと思ひ給ふとなり　私ほいならぬさまにてさふらひ給ふそのうへにても何とかなと然るへきやうにと太后の思ふと也

さはかりねたけなりし　秘此かんの君の事はさまさま世間の人のもてあつかひし故にいかにもよくもかなと思ふと也　私源氏を聟にとらんと有し時領狀なかりしをねたけなりしといふへし其人のみる所もありいかやうにもよくもかなとおもへは結句朧は源と密通のあるを我心のひく方にとはいふ成へし

しひて我心のいるかたに　秘かんの君の心を后のゝ給ふ也

齋院の御事はまして　秘源は我身をもかへりみす齋院なとへ又まいらせ給ふ事必有へきと也　御門の寵愛ある內侍のかみなとにさへかやうなれはましてといふ也

おほやけの御かたにうしろやすからす　菅家は御外孫西宮左大臣は聟君爲平親王を位につけんとて御門をかたふけ申といふ讒言によりて左遷せられ給ひし事によそへてかける歟　聞書左遷の事をくはたつる序の詞なり

東宮の御代心よせことなる　秘春宮の御代をいそく心となり

すく〱しうの給ひつゝくるに　太后の詞なりまつすくにの給ふ也

さすかにいとほしう　秘二條大臣の心なり　いとほしうは朧也

なときこえつる　花大臣の心詞也　此間に大臣の分別かいてきてありのまゝにいひしを後悔あるなり急なる性のくせなり人のをしへ也

さはれしはしこの事　秘太后の殊外腹立ある故に申出し給ひし事をおとゝの後悔ある也　私さはれはさもあれといふ詞也

かくのことつみ侍りとも　河如此罪ありとも也

おほしすつましきをたのみにてあまへて　あまへてとありてあまへたる心也世俗にあまへかすといふ事あると云々　秘あまへてとは源の朱雀へあまへ給成へし云々或抄同　聞朧の心也朱雀へあまへてと也

うち〳〵にせいし　秘此かんの君をも内々に制し又源をも連々に教訓あるへきと也秘　箋内侍のかみを内々にて制し給ふへしと也　聞書内侍のかみをせいし給ふと也

みつからそのつみに　秘朧のかはりに大臣の罪にあたらんと也　私おほしすつましきをたのみにてあまへて侍るなるへしといふを源の事と秘にありいさゝか心得かたしいつれも朧の事なり此一段朧の事をいとほしく思ひておとゝの色々申なほし給ふなり源の事とはみるへからす聞書の分を用へし

御けしきもなほらす　聞書太后腹立の御けしき也

かくひと所におはして　太后の御心の中なり朧と太后の一所におはするにとなり

つゝむ所なうさていり物せらるらん　源の太后へ所もおかぬも腹立也

かろめろうせらる　河輕哢也

このついてにさるへき事ともかまへいてんに　花須磨の浦に謫居の本たて也　秘左遷の事なとなるへし

おほしめくらすへし　聞太后の御心を推量てかける詞也　私さるへき事かまへいてんといへる心もちの誠に惡さきといへるに叶ふへし

岷江入楚第十一

花散里

廿四歳五月の事なりさか木の卷の末よりはいさかゝ前の事也

夏參麗景殿女御之許之次過中川之女之家前事 麗景殿は故院の女御花散里之姉なり 中川の女は不見系圖人也

於麗景殿女御之許逢三君給事 三君は花散里也

花散里 以歌爲卷名

橘のかをなつかしみほとゝきす花散里を尋てそとふ源氏君の歌也 秘 卷の名歌によて號する也源氏廿四歳五月の事なりさか木の卷の末も同し夏のことなりこれは六月わたりまでのことあるにや夕立の比とみゆ此卷はさか木の卷の終よりは前のこととみえたり弄同 花 榊卷源氏廿四歳の夏也此卷も同夏のことをかけり或抄さか木の卷に隱居の本立あり此卷は餘情にかけり隱居のあらましありてやかて須磨へのうつろひあれは餘情なき故なるへし又須磨より京へをとつれなとし給ふへきおもひ人のたくひのためなるへし 私曰此人のこと此卷に始ていひいてたる故に花散里といふ系圖の外の人なり花ちる里といふ詞は河海に云「橘のはなちる里にかよひなは山ほとゝきすとよませんそも 赤人集「時鳥鳴て日數を橘の花ちるさとにすむ人やたれ

人しれぬ御心つからの物おもはしさは 秘 源の心藤壺朧月夜のことにたへす心をつくし給ふなり大かたの世につけてわつらはしうおほしみたるゝとは

白虹日をつらぬけりなときこえしことをいふへし
弄聞書なとに白虹日をつらぬけりと云々　河心つからは手つからみつからなといふかことし只心から也　私曰好色かたの御物思ひはいつともなき事なり唯今は世中のわつらはしき御物思ひのまさりてなへていとはしう世をおほすなり故院のかくれさせたまへる後よろつかはれることなるへし

さすかなることおほかり　さすか世をそむきかたきことおほき也東宮冷泉紫上なとのをなるへし

れいけいてんときこえしは　麗景殿女御也　秘桐壺の御時の女御なり花散里の事をいひいたさんとてなり花ちる里の姉なり弄同

みこたちなとも　桐壺のみかとの皇子も出來さりしなり花散里にも御子なし

いよ／＼あはれなる　御子なともなき故也

すくし給ふなるへし　源の御はくゝみにて過し給ふとなり

御おとうとの三の君　女御のいもうと也　秘花散里のことなり女御の妹也源のかよひたまふ人也

わさともてなし給はぬに　花散里をわさと見（めイ）かくして物めかしうもし給はす又忘れもはてぬなり

人の御こゝろをのみ　此花散里なとはたまさかなる事にて女のかたより心をのみつくすへし

此比のこる事なくおほしみたるゝ世のあはれのくさはひ　秘此花散里の事なとはおもひわすれたまふをたゝ今なにやかやと物あはれにおほしつゝけ給ふに思ひいて給ふなり世間の有さまなり　くさはひは聞書種也あはれのかすといふなり

しのひかたくて　思ひいてたるあはれの堪忍しかたきなり

九月雨の空めつらしう　おもしろき夜の體なり

何はかりの御よそひなく　河無粧也　無行粧也

御せんなともなく　前駈もなきなり

なか川のほと　秘京極川なり中川也

さゝやかなる家　ちひさき家なり　秘逼サヽヤカナリ　或抄云小々なり狭々なりいつれもちひさき心なり

よくなることをあつまにしらへて　河和琴に能鳴調と云あるによそへていへるなり秘和琴也　私和琴はあつまなりよくなることをあつまにといへる不

審なることか　こと〻は絃の惣名なれはよくなること〻は器といふ心なりなくなる和琴の器をしらへてといふ心歟諸抄にもしゐて沙汰に及はぬことなれと不審なきにあらさる歟　又よくなることは琴歟眞名にてかきたるをこと〻假名にかきなして不審出來たるなりしからはよくなる琴を和琴にしらへてかきあはせたるといふにや（てイ）兩義今案の僻説なり猶可尋聞なり

さしいて〻　秘　車よりかほをさしいて給ふなり　門ちかなるとはあたりもせはき家のさまなるへし

かつらの木のおひ風にまつりの比　聞書賀茂祭の比を思ひいつるなり桂は葵をかくる物なり　河天稚彦門之湯津楓樹舊事本紀　或云烏津桂木日本紀門に楓をうる事是本説桂なり

た〻一め見給ひし　花散さとへ出給ひし道中川にてのことなり是も源氏の君のたまさかにかよひ給ふ所なり此卷にはしめていひいたせり　秘此家誰ともなし源のもとかよひ給し人なるへし此卷の餘情にかき侍るなり若むらさきの卷に行すきかたきとうたはせたる時の類なるへし弄同

た〻ならす程へにける　なほさりならすなといふやうの心歟源の心也

おほめかしくやと　たと〳〵しきなといふ心歟おほつかなき心なるへし

過かてに　河難過なり

ほ〻きすなきてわたるもよほしきこえかほなれは　聞書は此やとりを問ひたまへと郭公のもよほす也　或抄頭注に「時鳥なく聲きけはあちきなくぬしさたまらぬ戀せらるはたといふに似たるへし引歌にはあらすと云なり　也云もよほし聞えかほとは行過たるをかへるにはしかすともよほしたるやうなるといふか

御車おしかへさせ　秘　源の車をかの門の前へおしかへすなり

れいのこれ光　かやうの御つかひになれたるなるへし

をちかへりえそ忍はれぬ郭公ほのかたらひし宿の垣ねに　花をちかへりとは萬葉集には百千返とかけり　秘ほのかたらひしと云にてもとかよひ給ひしと云所みえたりをちかへりは百千返とかけり隨分

堪忍して行過んとしつれともあまりにたへかたくて問ひ奉るそとなり此分細字に別に注す　私をちかへりは郭公にいふ詞なりいくかへりともなく鳴を云なり

しん殿とおほしき屋の　ちひさき家は本のしん殿つくりにはあらねはしんてんとおほしきといへり

惟光もきゝしこゑなれは　秘惟光も又内の女房たちもたかひに聲をきゝしるなり惟光の心にさきさき聞なれしこゑなれはしらんとおもひてこわつくるなるへし

おほめくなるへし　源の御とたえありしによりてかやうにいふなりこなたの事にてはあらしとなり又此人もはやぬし定るとみえたり

女返　郭公こととふ（かたらふイ）こゑはそれなれと（からイ）あなおほつかな五月雨のそら　秘内よへりのかへり事なり此時分いふかしきなり源氏のうとかりし故にあなおほつかなとよめるなり弄同　内よりの返事なり桂木の有家中川わたり也　或抄御説云惟光こわつくりせうそこきこゆとあれはかたらふ聲はそのみし人なれとゝいふ歟　私云イ本にかたらふこゑと有五月雨のまきれおほつかなきよしなり

ことさらにたとると　秘わさとたと〳〵しきさまをするとみる惟光か心なり

よし〳〵うへしかきねもとて　河「かこはねとよもきの籬（かイ）夏くれはうゑし垣ねも茂り合にけり　「花ちりし庭の梢も茂りあひてうゑしかきねもえこそみわかね　秘花ちりし庭の梢も云々惟光もたとりたとる心にいへり聞書に引歌同し惟光もおほめくなり弄同　私云うゑしかきねもとは源の御うへしらする人なれとも夏にてのたとる體（稲イ）をみてさてはかよふ人なともあるにてとかくいふなり

人しれぬ心には　秘内の女の心也今すこしねんころにも尋よかしなり　此人しれぬも此巻の發端に人しれぬ御心つからの物おもはしさとありこゝも此女はやかよふ人もあれは物なけかしきとの心もあるへし此詞如此あはせてみるへし

ねたくもあはれにも　惟光かそらおそれしたるを女のねたく思ふなり此引歌よく叶へり

さしもつゝむへき事そかし　秘惟光か心なり此ほと久しくとひ給はさりし故にもしことかたに心ひく

かと也　私云此義如何只女の事とみるへしはやかよふ人なとあるとみえたれはつゝむも道理とおほすなり源の心也

あはれはさすかなり　さすかにあはれとおほす也ぬしさたまりたる事の御心にすこしはかゝるへし

つくしの五せちか　河本朝月令云五節舞者浄御原天皇之所制也勘載處女巻　花大貳のむすめなり是も源のあひ給し人也すまの巻にみえたり　秘源の始終心かけたまひし人なり此外花鳥に同し私云大貳只今筑紫に有へし須磨巻に京へのほるとて彼浦へ御をとつれ申たりさやうの事かくへき序にいひ出せるなり唯今中川へわたりの人同ししなの人と心得へし又五せちとよむへしつとはよますはやとは者哉といふ歟者也歟

いかなるにつけても　よしあしにつけさまく〵に心をつくし給ふ人おほしとなり

中々あまたの人の物おもひくさなり　秘久しく成て忘るへき人もかやうにすてすをとつれ給によりて人の物おもひともなるとなり　中々といふ字おもしろし

ほいの所は　秘麗景殿のおはする所なり花散里もひと所にすみ給なり

おほしやりつるもしるく　かねて源の思ひ給ひしことく人めなくあれたるなり

あはれなり　源の心なり

女御の御もとにて　秘麗景殿のかた也

むかしの御物かたり　桐みかとの御代の事なるへし

廿日の月さしいつる　秘五月の比ふりたる庭のさま思ひやるへし弄同

いとゝ木たかきかけともこくらう　新緑も此時分一段と茂りあふ物也仍いとゝといへり　花鳥には木くらきかけともこちたくみえわたりとありてこちたくはことく〵しき心にや木たちの大なるを云へし云々

近き橘のかほり　河國史云垂仁天皇九年辛酉春二月庚子朔天皇命曰田道間守遣二常世國一令レ求二非時香菓一今謂橘是也十九年秋七月朔天皇崩明年三月間守至レ(惡イ)自二常世一則齎(貢イ)物也非時香菓八竿八縵(縄イ)焉　間守於是悲歎之曰受二命天朝一遠往二絶域(備)一萬里踏レ浪遙度二弱水一是常世國則神仙秘區也俗非レ所レ到是以往

來之門自經二十年一豈期獨凌二峻(險イ)峒一之更向二本土一乎
然賴二聖帝之神靈一僅得二還來一今天皇已崩不レ得レ復
レ命臣雖生之亦何益矣乃向天皇陵叫哭而自死之群
臣皆流涙也間守是三宅連之始祖也　橘はむかしを
しのふさま也女御のむかし物語の折ふしおもしろ
きさま也

すくれてはなやかなる御おほえこそ　秘　桐壺の帝の
御寵愛のほとをいまおもひ出たまふなりこのかけ
るさま花散里上によく似たるなるへし

うちなき給　源のなき給也

ほとゝきすありつるかきねにや　花　中川のやとのか
きねなり　秘　おもしろきさまなり此所のさま廿日
の月さしいてたるも此ほとの五月雨の晴間めつら
しきにはなたち花うちかほり時鳥のなきてなとい
ひつくしかたく心をやりてみるへし

おなしこゑにうち鳴く　おなし聲になとおもしろく
かけりそれかあらぬか聲のかはらぬといへる歌の
心なるへし

したひきにけるよと　有しかきねの猶忘られぬ心た
へなるへし

いかにしりてかなと　河「いにしへの事かたらへは
ほとゝきすいかにしりてかふる聲になく(なくこゑするイ伊行釋)
也私云秘にはいかにしりてか鳴こゑのするとあり
古今にはふる聲になくとはかりありふる聲に鳴と
はいにしへといふにあたりてほとゝきすもかたら
ふやうによめるなりなくこゑのするとは涙によせ
ていへるなりむかしのあはれなる物かたりをすれ
は時鳥もなくよといへるなりいつれにても引歌に
はよくかなへり

(源氏)橘のかをなつかしみ時鳥花散里をたつねてそとふ
河「橘のかをなつかしみ時鳥かたらひしつゝなか
ぬ日そなき　萬「橘の花散里にかよひなは山ほと
ときすとよませんかも　赤人集「郭公なきて日數を
橘の花散里に住人やたれ　萬「うくひすの　かひ
この中の　ほとゝきす　ひとりむまれて　しやか
ちゝに　にてはなかすや　しやかはゝに　にては
鳴すや　うの花の　さけるのへより　とひかへ
り　き鳴とよまし　たちはなの　花をゐちらし
ひねもすに　なけはきゝよし　よひはせん　とを
くな行そ　我やとの　花たちはなに　すみわた

れ鳥　秘橘のかをなつかしみ云々　橘の花散里に云々　古今二首をとり合たる歌也巻の名是より出たり　私云二首なから河海の引歌也仍略之　歌の心は橘は昔をこふるつま也今女御ならては故院の御代の事かたり合てなくさむへき人なしそれをなつかしく思ひて尋ねまいりたると也ほとゝきすの橘をしたふに源のおはしたる事をたとへておもひをのへ給へるなり此次の詞にその心みえたり

いにしへのわすれかたき　花これより源氏の詞也

秘源氏の女御へ申給ことゝ葉也

まきるゝこともかすそふことも　弄古のことをかたりてなくさみかつはかなしさのかすそふとなり

秘かやうに御物語申せは思ひのなくさめにもなり結句思ひのます事もあると也

おほかたの世にしたかふ物なれはむかしかたりも　人の心は當世の時にあふを本とする物なれは源なとの昔かたりはなもなき（世イ）と也むかしの事をいひいつれはかならす當時をそしるやうなるなりその時にあひたる人はむかしの事はきゝたからぬ物也

かきつくすへき　此物語にむかしの事をくつしいてかたるなといへりつもりたる事をとりいへるやうの心なり　イ本かきくつすとあり　三本かきくつすとあり

ましていかにつれ／＼も（まイ）　秘源はあなたこなたとし給さへむかしの友はなく侍るをまして女御はかやうにてのみましませはさこそとおしはかりて申給ふ詞なり

みないとさらなる世なれと　花これは女御の御事を源氏の御心に思ひ給ふ事なり　秘女御の御心中なり花鳥にいへる（うイ）義如何　私いとさらなる世なれとはさらある世といふ心とみゆ女御の心にみなさるならひの世なれとこれ程まて源の物をおほすさまをあはれにみ給なり人の御さまからにやとは源の御さまのすくれたるから一しほあはれにみゆるなり

返女御　人めなく（きイ）あれたる宿は橘の花こそ軒のつまとなりけれ　當意をありのまゝなる歌なり　私橘の花散里をたつぬるゝ源のゝ給へは（ゐイ）橘故こそとはれまゐらすれといふなるへしうちむきたる歌の御返も花散里によく似たるへし

さはいへと人にはいとことなりけり　聞書前にすく
れてはなやかなる御覺はなかりしかといへり仍さ
はいへと人にことなると源のおほすなり　箋故院
の御時は此女御なとははなやかになとはなかりし
を今の世はかやうの人もまれなると思ひくらへ給
なり愚案さはいへとゝはまへにをとつれ給し中川
わたりの宿なとにはにるへくもあらさるの心歟
愚案以下細字に注すといふ也　私云秘に愚案とて
のせられたる義はおほつかなし

にしおもてにはわさとなく　花散里のすみ給ふかた
也　源の用意あるさまなり女御をとふらひ給へる
つゐてのやうにいふ心にわさとなくとはいへる歟

つらさもわすれぬへし　秘久しかりし此程のとたへ
をも此御ありさまにて忘れ給ふへしとなり　私花
散里の心を察していへり

おほさね事にはあらさるへし　秘僞はあるましきと
花散里は思ひ給ふ也　源の御心にもおほさぬ事を
かほとまてはかたらひ給はしと女の思ふへしと心
を察してかける歟或抄同

かりにもみ給かきりは　聞書是より草子地云々　秘
源のみ給人の中にさのみあしききはなる人はなし
となり

さま／＼につけていふかひなしとおほさるゝはなけ
れはにや　いふかひなきほとの人にはいひより給は
ねはにやとなり

にくけなく我も人も　秘源のたえ／＼なるをうらみ
すして有し人は此花散里なりさる程に始終おほし
すてさりし人なり心用ひのゝとかに然へきは此花
散里第一とみえたりわれも人もとは源と女とのあ
ひたの事をいふなり

それをあいなしと　秘とたえのみあるをあいなしと
思ひてたゆるをうらみ給ふけしきもなきなり源の
性也　私それをあいなしとはとたえのあるをくね
くねしくうらみて中たゆる人もあるなりそれをも
ことはりと思ひて源のうらみ給はぬと也

とにかくに　河左右

世のさかと　世のならひ歟但よからぬ習なり　悪の
字の義歟

おもひなし給ふ　源の心なり

ありつるかきねもさやうにて　秘中川のやとの事な

り花同　よの(かすかのイ)への中河のやとの女もとたえをうらみてあらぬこそよのいてきたる人といふなり
已上草子地とみえたり
　秘抄別勘奥にあり
一よくなることをあつまにしらへて　これもよくなるあつまことをしらへてとみるへき歟
一わさともてなし給はぬに　わさとかましく源の御方よりもてなさるゝ事のなけれは花散里の御方には心をつくさるへきとなり
一此巻語(物イ)顛倒の所々をわさとかけるかわすれ給はぬの下に此比のこる事なくおほしみたるゝ世のあはれくさはひ以下の詞をいれ思ひ出給にはの下にわさともてなし給はぬに人の御心をのみつくしはて給ふへかめるをといふ詞をいれて忍ひかたくて五月雨の空のみとかくのことくみるへき歟
一こよなうそまさるゝ事もかすそふ　これも大かた世にしたかふ物なれはの語をこゝへいれてみるへき歟此巻に此心あり
一いとさらなる世なれと(てイ)　さらなるとはもとより何事も昔のことくにはあらすさらなる世なれとも其中にもいと物あはれなりと見給ふなるへし須磨巻にもさらなる事なれとありし世の御ありきにことなりとありさらなるとは思ひ出もなくなんといふ詞とみえたりおもひまうけつる事なれとなとゝいふかことし
以上秘抄の奥に書入有書様如此

岷江入楚第十二

須磨

廿五歲除名三月よりの事をかけり云々

源氏君有左遷（定イ）事　可爲三月廿餘日云々

前二日渡左大臣殿給事

對面中納言君事

若宮御乳母宰相君傳言御消息事

還二條院留西對給事

次日渡花散里給事　先對面麗景殿事

還二條院留守事其聞渡西對事

遣書於尙侍許事

參北山御墓事

先參入道宮給事

於路次左近藏人將監取御馬口遙拜賀茂社給事

遣書於王命婦啓東宮御方給事

二條姬君惜別事

申時下着須磨浦事

過大江殿事

行平中納言隱居地事

長雨之比立使者遣書於京所事（二條院入道宮尙侍大臣殿等）

奉書於齋宮又自齋宮有御使事

見花散里以下御文給事

七月尙侍歸參內裏事

須磨山里秋景氣催哀事

手習作繪事

出近海之廊事

御供人々詠歌事

十五夜見月思故鄕事

筑紫五節君過此浦之次奉消息事

京人々奉戀大將君事

山里冬氣色事

源氏君彈琴事

明石入道夫婦相語事

廿六歲　三位中將爲宰相

三月花比思都事

三位中將任宰相來訪須磨配所事

山里調度事

海人獻海津物事

宰相作文盃事

黑駒爲引出物事
三月上日上巳祓事
雨風雷鳴事
源氏君夢想事

須磨　河 光源氏謫居此浦之故名之歟
花 以歌幷詞爲卷名源氏廿五歲三月廿餘日に須磨の浦に隱居し給ふあくる年廿六年の事まて此卷にみえたり弄同
秘 卷名以歌詞號之源氏廿五歲の三月より次のとしの三月邊までの事あり廿四歲の秋より廿五歲の春までの事物語にみえす此內に源の除名の事なとあるへし榊の卷の末の弘徽殿の造意より遠流あるへき定なとも有けるにやさやうの所をおほしてみつから須磨にうつろひ給なるへし物語のかきさま妙なり
聞書源廿四歲の秋より廿五歲の三月までの事をかきのこせるは源除名なとの事又讒言の事なとこもるへし氣法也此卷は仁義五常朋友のなからひまてこと〳〵くこもる也　私除名とは成きたれる官位をのそく義なり　秘抄勘物云除名除去也又拜官曰除師古曰凡言除者去舊官就新官　令　獄令　除名者位記悉毀應毀者幷送太政官ニ毀式部　案註ニ毀字ハ以ニ太政官印ー々毀ニ字上ニ坐事坐被罪也　增坐獄對理曰坐

已上稱名院の自筆にて寫之唐紙の切紙也

世中いとわつらはしく　弄源氏を遠流あるへきなと定ありけるにや遠國なとにうつり給はん事をおほしてすまにくたり給し也　箋聞世中のわつらはしきさま花散里卷にもいへり榊の卷の末と此卷の間に去年七月わたりより今年の二月までの事こもるへし又わつらはしきとは白虹日をつらぬけりなと誦せし事なとなり今源をも流罪に處したきとおもへとも配流には先罪をさためらるゝ後陣の座にて宣下あり可然人には詔書ありそれにこと〳〵く罪をかきのするなり是はさしていふへき罪なき故にさま〳〵わつらはしくいひあつかふへしさやうのことにほとうつりて過つるをかゝすしておく也又爰に宇治十帖をかくへき心か見ゆる也朱雀のみかと御心なよひ過てよわ〳〵しくまします故に冷をはやく源のとりたてんとし給ふといひなす也それに八宮を太后のとりたてゝ春宮になし源に虚言をいひかけて冷を春宮をしりそけんとしたるなりされともその事叶はすつゐに源も奇瑞なとありて歸京の後八宮の御おほえもなくよろつ住わひ給ひしに京の宮さへやけて宇治へうつり住（移イ）給ひし也されとその事をこゝにはかきあらはさす　榊卷此卷にかきもらしたる所とみるへしさてその心は宇治橋姫卷にいたりてかきあらはせりおもしろきかきさま也

せめてしらすかほにありへても　秘此まゝ籠居してありぬへくやとおもへとも也　箋聞源のみつから罪のなきゆゑにかくのことく思ふ也されども無理の政にあふて是よりまさる罪にやあたらんと遠慮にていつくへも隱居あらんと思ひ給ふ也　或抄是まてはかならす須磨のうらへ御隱居と定給ふとはみるへからす云々然へき歟　九禪抄云入道右府云（稱名院）毛詩三百篇は思無邪の三字にこもる風雅は無邪心肝要也源氏物語をば盛者必衰の心にて見よと也此理をおもへは萬事にわたる也再問の時かくのことくこたへ給ふ也（此イ）　又天正甲戌春之比大納言實隆公三光院内府に御物語の所見幷同詞のかはりたる心もちゐ雙子の體用之義なとを不審に思ひし事ともを問侍れは答云惣別源氏の詞は一卷の内にても其心を用かへ侍り況乎五十四帖の内悉以同詞に

て心はかはるなり用にて書たるものにて候しを體にて心得ては一向理すみかね申へき也用にて書きたるとたに見定候へは其所々にて體か出來候是か則無と思ふ中に本有をあらはす心にて候かやうに御分別こまかにまいり候はては一部の面白き味は御入候ましく候たゝそこ〳〵の注はかりのやうに思食候ては式部か本意可失面目候人の一生涯の前後は古今集一部にてその古今一部は五十四帖となり候と御分別あるへく御返禮をありのまゝ書載之爲後人覺悟也　又對談之時云源氏は段々の句々一章々々又前後の首尾文勢と作者意と大度の義とを不失樣に御了簡專一也五十四帖の內一言一句も式部か私の詞を一毛頭を不書云々詞に虛言無之能々御覽し定られて作者の本意無相違の樣御吟味可然一言一句も式部か私の詞をかゝさる事第一の奇特と申事也況乎卅一字の內に我まゝなる新造の詞候へき事天道恐ある事此段御分別專一抄云々如此敎訓依レ成ニ殊勝之思ニ書ニ加于玆ニ者也已上九禪

かのすまはむかしこそ　光源氏大將在納言の昔を尋ねて此所に隱居せらるゝ歟古來赴謫所之人は配流の宣旨によりて左遷する也今の源氏大將は讒におそれてわれと城外に籠居せらるゝにや周公旦東征の跡を思へる歟風雷の變異も相似たり又行平中納言も此義たる歟古今集云田むらの御時に事にあたりて津の國すまといふ所にこもり侍けるに宮（都イ）のうちに侍りける人につかはしけるとありかの野相公の歌のこと葉は隱岐國になかされ侍ける時分と云云　花　源氏大將須磨浦に隱居の事はおもてには行平の中納言のもしほたれしいにしへと周公旦の二叔の讒によりて東征せし事を詮要としてうらには又菅丞相西宮の左大臣の太宰府に左遷せられ野相公の隱岐國へなかされし例をもてかけり又伊周公かはしめは播磨國に籠居せしかひそかに京へのほりしとかによりて宰府へ更につかはされ給へりかれこれを取合て物かたりにつくりなせり榊卷に文王の子武王の弟と源氏の自稱せしは周公旦におのれをなすらへたる證據也　秘　行平卿すまにありてもしほたれし事又周公旦管叔蔡叔の讒によりて東征せし事をとり合又管相丞高明公左遷の事（所イ）をかたとれり人一人をさしてはかゝさる也五大取成して

一身となり草木を生するかことし凡此卷は行平をもちてかけり其譯は行平は我と蟄居したる也今源も我と籠居あるへしと也行平の事にかなへり弄の義花秘等に同し

むかしこそ人のすみかなとも　箋聞等に高鹽のことありさやうの時より家なともまれに成たるとなり

人しけくひたゝけたらん　河叨ヒタヽケ　花叨也人しけくかまひすしき心也　秘河花叨字を出せり云云　勘物云思案滔レ天一點滔天尙書堯典　帝曰吁靜言庸違象洪水滔レ天ニ註滔漫也　恭敬而心傲狠若レ滔レ天言不レ可レ用　又云浩々滔レ天　注盛大若レ漫レ天　箋聞洪水滔レ天ひたゝくは滔字也是は人しけくにきはしき處といふ也　聞書同之

いとほいなかるへし　箋聞大やけのかしこまりなる故也

さりとて都を遠さからんも　秘須磨は都より不近不遠よき程なり

よろつの事きしかた行末　箋聞桐壺御門の御字榮花なりし事を思ひ出て給ふ也行末とはかやうにはしたなき世にあひて彌いつくへも隱居し給はん事なとのさま也

うき物とおもひすてつる世も　箋聞かやうにうくのみ成行世中も住はなれんはさすかにかたき也尤かやうなる物なり

おほかる中にも　箋聞おほかるときりてもよむ又おほかる中にもとつゝけてもよむ也物毎に心のとまる中にも別して紫の事となり

姫君のあけくれに　紫上なり

又あひみんことをかならすとおほさんにてたに　或抄下の帶の道はかた〳〵わかるとも行めくりてもおはむとそ思ふ此歌諸抄になし引に及はす箋聞此卷はたにの字に精を入てかきたる也是はかきりをいつともなき別といふ也

猶一日二日のほとよそ〳〵に　箋聞雲林院にて法文を聞給ひし時の事榊卷にあり

そのほとゝかきりある　箋聞勅によりて流罪なとならは却て赦免なとも有へし是は心と下給故盡期なきと也

あふをかきりに　河「我戀は行ゑも知すはてもなく逢をかきりと思ふはかりそ　秘弄聞書等此歌を引

やかてわかるへきかとてにもや　河「かりそめの行かひちとそ思ひこし今を限りのかとて也ける　箋聞
書弄秘引歌同　秘源の心につゐのわかれにもやと思ひ給ふなり弄同
もろともにもやと　紫の上を具してやゆかましとおほす也
さる心ほそき海つら　前に海人の家たにまれにとあれは也
波風より外にたちましる　面白くかきなせり
かくらうたき御さま　紫の事也　箋聞勢の字の心也いたはる心也此字こゝによく心叶へり心いたきなと云やうの心也
おほしかへすを　源の心也
女君はいみしからん道にも　箋聞紫の心此世ならぬ所なりとも也おもむけてとはさやうの口むきをの給ふと也
かの花ちる里にも　秘これも一すちに源をたのみ給ふ人也　箋聞源よりも年のまさりたる人なりつゝやかに女の本にすへきは此人也
おはしかよふ事こそ　箋聞づんと源の心にしみたるとはなし只心もちゐをほめ給ひし人也
此御かけに　箋聞源のかけにかくるゝと也此心花散里巻に見えたり
覺しなけき　箋聞源のかけにかくるゝ故にわかれはかりにもあらす別してなけく也
なほさりにてもほのかに　なほさりのよそ〳〵にて源を見奉りし人もをしみたてまつるなりまして一たひにてもいひかよひし人は也
入道の宮よりもものゝきこえや　河藤壺女院男女にかきらす佛法の道に入をは皆入道と號する也藤原導子二條關白頼忠女圓融院后　天祿四年三月十九日落飾世號入道宮云々　秘藤壺の事也こゝにはしめて入道宮といふ也男女に通して云也弄
物のきこえや又いかゝ　箋聞太后かたを憚る藤つほの心也大やけのかしこまりなる人へは誰も不通すへき其故也さなき事たにもあしく取なさるれは是はいかならんとなり
御とふらひつねにあり　箋聞是は風流方の心にて源をねんころにとふらひ給にてはなし冷の御ためを思ひ給ふ也

むかしかやうにあひおほし　箋聞是より源の心也太后の天下を心のまゝにし給はぬさき又源の心をかけ給し間分かやうに御懇切ならはと思ふ也

さもさま〳〵に　箋聞今かやうにねんころにし給ても藤つほは出家の御身なれは曲もなしと也　にかくに物を思へといふ中の契かなと源の心也

三月はつかあまりのほとになん　花西宮左大臣安和二年三月二十六日左遷太宰府云々　聞高明公の左遷三月二十六日也弄箋聞同

都はなれ給ける　箋聞只今京を出給にてはなし以前に其日に定りたるとかねていふなり此次に都にてのこと御いとまこひさま〳〵あり

人にいまもしも　箋聞都はなれ給定日なとをも世上へ忍ひ給ふなりさやうの事聞えては太后かたからまたいかやうなる事かあるへきとの用心なるへし

七八人はかり　箋聞無人にて京を出給ふなり

いとかすかに出たち給　秘かやうにはいへとも奥に出立給事はあるなり此筆法あまた所にあり心をつくへし

あはれとしのはるはかり　箋聞世をはゝかり給ゆゑみつからはおはせす御ふみはかりにて仰らるゝ也只今あはれなる折なれはさためて忍はるへきふしおほくあはれなる御歌なとの見所のあるおほかるへしとなり

そのをりの心のまきれに　秘草子地也　聞書筆者詞也　弄例の紫式部詞也　一云式部は西宮左府の思ひ人にてありしかは左遷の折のまきれをかけると云々但此物語かき出る頃と左府の左遷の年とはるかにへたゝり不必當事也　箋聞源の人に忍はるゝほと文の詞も歌も心深く見所もあるかおほかるへけれは後代まて書とめてもおきたき事なるをたれも〳〵心をつくすはかりにてさやうの事までも心をとゝめすしてきゝおかすなりぬるとなり

二日三日かねて　京をいて給はん二三日以前といふなりかねては兼日といふなり

よにかくれて　秘夜と世と二義あり夜の義よき也　聞書同　弄世に忍ひ給ふなり　夜イ本末の詞夜とみゆ如何

おほい殿に　箋聞葵の父大臣なり　秘致仕大臣なり

あしろ車の　河網代車なり　榮花物語云あやしのあ

しろ車にて殿にかへり給ぬ帥内大臣左遷の時の事也　箋聞女の乗用する車なり人に忍ふ時の事也路次にて人に禮なともなき物なり

御かたいとさひしけに　葵上の住給し御かたなり

わか君の御めのと　夕霧のめのと也　夕霧此時五歳なり

むかしさふらひし　箋聞葵上の官女也　葵巻に此事あり

わかき人々さへ　箋聞老たる人の心ふかきなとはおもひやるへし

世のつねなき　箋聞葵の事と又源の事と也

わか君はいとうつくしうて　秘夕霧也

されはしりおはしたる　箋聞左禮也　虚レ左とは上座をのこしておきたるゝと云なりこれは左をたふとふ義なり唐にも世によりてかはるなり是は左をさくる也打とけたる禮也麁相なる心なり

久しきほとに忘れぬこそ　秘源の詞也　久しくみ給はぬに夕霧の見忘れ給はぬを哀にみ給也

忍ひかたけなり　源の夕霧をひさにするゑ給へるさまをいふ也源の御心中を察してかける也

おとゝこなたにわたり給ひて　致仕大臣歟

つれ〳〵にこもらせ給ふらんほと　秘左大臣の詞源の除名せられて出仕なきなるへし箋聞老者の年おとなしき人の詞に似合たる也源の蟄居の事にてさいはひ御隙なれは参りもすへき事となり　或抄源の除名にておはせし事也こゝにて去年の夏より此三月までのこと物語のおもてになけれともきこえたり

くらゐをもかへし　秘官をかへしたる也　箋聞是は官の事也位の事にあらす　河致仕は辭官不辭位云云階位をやむるは罪科ある時の義也いま位をかへすとあり如何　史記秦帝記第五注曰如淳云嘗有爵而以罪奪爵以皆稱士伍といへり但唐朝には位を辭する事もある歟見貞觀政要　或はつかさをも位といふ事あるへし大臣をは台位星階といふ和語にはほしのくらゐなともいふ也不審有へからす貞觀政要云玄齡自以一居端揆十有五年頻表辭位優詔不許十有六年進拜司空玄齡復以年老請致仕

わたくしさまにはこしのへて　河腰を屈するは官仕の禮也いまこしをのふるは休退の心なり　花蟄居

せる人の外へいてありくをはこしをのすといふな
り左のおとゝ致仕の表をたてまつり隱居のよしを
申なからわたくしには又ありくといはれん物のき
こえをはゝかる心也河海抄の義あやまれるにや
秘河海に退休とあり花鳥にこれをやふる然とも河
海說も然へき歟
ひか〳〵しかる（れとイ）へきをいまは世中をはゝかるへきに
も侍らぬを　箋聞官を辭して出仕せさる時はおほや
けよりとがめもあるましき事なれと當時の政のよ
こさまに非例なる故に無理の罪にあたりてはと法
度のみたりかはしき世を恐るゝ心也
いちはやきよの　河最强也　伊勢物語云いちはやき
みやひをなむしけるとあり親行云すみやかなる心
なり水原素寂云すくひたると云詞也紫明抄案（察イ）之急
なる心なり早字也いちは最也いちしるしなともい
ふなり　箋聞早速也物の急なる心也何事もかと
かとしき心也　秘嚴密にきひしき心なり
かゝることを　箋聞源の事也
いのちなかきは　河壽則多辱
あめのしたをさかさまに　秘かけても源の御身にか
やうの事あるへきとは思はさりしよしなり　弄あ
るましき事なれはいへり　箋聞天を地になし地を
天になしてもなとゝあるましき事にいへりさしも
桐御門の御時榮耀なりし源なとのかやうなるはお
もひよらぬ事となり惣別は致仕大臣へも葵上の事
か太后の存分なり　花うつほの物語天下をさかさ
まになすともかゝる事はあらしと思へと云々又日
本紀に神功皇后三韓を征し給ふ時新羅王のちかひ
の詞に東の日更に西よりいてありなれ（れイ）川のさかさ
まになかれ川の石のほりて星とならんかきりはみ
つき物を退轉せしといへるもこれみなあるましき
事のたとへなりあれなれ川はしらきの國にある川
の名也　私此義引用に及はさる也
いたうしほたれ給ふ　おとゝのさまなり
とある事もかゝる事も　秘源の詞也只前業によると
也
いひもてゆけはたゝみつからの　箋聞前世の宿業と
いふも我身からの事なれは世をはうらむましき理
そと也自業自得果也　河おこたりは過怠の事也懈
怠の義にあらす

さしてかく官さくをとかれすあさはかなる事に　秘
除名の事花鳥にみえたり　花　つかさくらゐとらるるとは除名と云事也出身よりこのかたなりきたれる官位をこと〳〵くのそきて無位の人に成（官イ）事を云源氏も除名せられしによりて無紋の直衣をき給ふと見えたり配流の人をはかならす先除名する事也除名はかりにて流罪せられぬ事もありそれは罪の輕重による事也源氏の除名は左遷の例を用たるなり　私こゝの心は官位をとかれす只勅勘なといふ體の事もよのつねのさまにてはありかたきなりそれをうつしさまといふなり人の國は異國の事なるへしもろこしなとにもさやうなると也云猶引事あるへき也　花　うつしさまはよのつねさまの心也

とほくはなちつかはすへき　箋聞遠流なるへし　秘　源除名せられて大かた配所もさたまるなるへし

さまことなるつみにゝ　箋聞さまことなるは新法といふ也罪ありてつみにおこなはるゝは勿論の事なり是は罪のゆゑもなくて罪にあたるゆゑさまことなるといふなり

にこりなき心に　箋聞源の心のにこりなきまゝになん條とてしらぬかほにて過したらは是よりも猶おほきなる罪にやあはんとみつから世をのかれ給ふと也法度のみたりかはしき故也

むかしの御物語　秘　故院の源を大切にし給ひし事をいひ出給也

院の御事　箋聞桐御門の御事

おほしのたまはせし　箋聞桐御門の源を思ひ給ひし事又相國なとの事をもおほしのたまひしさま成へし

御なほしの袖もえ引はなち　箋聞致仕大臣なり源の袖を大臣のひきはなたぬなり　又袖をかほにあてゝなくさま歟

君もえ心つよく　袖を大臣の引はなたぬを心つよからすといふ歟又源もなき給へるさまをいへる歟いつれにてもなるへし

わか君の何心なく　夕霧なり此の次に葵の事をいひいたさんとてちやつとかけり

いみしと　源の心なるへし

過侍にし人を　秘　葵上の事也おとゝの詞也弄同

もし侍る世ならましかは　箋聞葵の存生の時ならは

いかはかり源の御事をなけかんと也
よくそみしかくて　秘奇特なる詞也
をさなくゐのし給ふる　秘夕霧也祖父母の中にてお
ひ出給ふへき事也箋聞同
なつさひきこえぬ月日　昵近ナツサウ　秘源に夕霧の
なれ給ふましきをかなしと也箋聞同
いにしへの人にもまことにおかしある　弄左大臣詞
也源をたすけたる心歟云々聞同　秘聖廟なとの事
也讒言の事也　箋聞まことにおかしあるとは實に
犯罪の人もかくれて罪にあたらぬもありと也
なほさるへきにて人のみかとにもかゝるたくひ　是
は猶さあるへきと定りたる前業にてかゝるたくひ
とは源の様に罪なくして罪にあたる人もろこしに
もためしおほしと也
されといひいつるふしありて　罪なくして罪にあふ
人の事也それも實ならねと讒言にも何事をかまふ
る謀反の企なともいふにつきてこそ罪にはおこな
はるゝに源にはさやうにいひつる事もなくてかよ（ヤイ）
うに成行を分別もなき事と大臣の詞なり　箋民無
所措手足これは法度か善にも悪にも一方にあれは

せめてなり定る所なき故にすへきやうのなかりし
也かようの政のあしき事をかくも四書五經なとに
般紂なとか事をかける類也後代をいましむるなり
秘世にいひ出てゝこそ進退をも定め給へき事なる
をその前にはいかゝとなり　私此義いさゝかおほ
つかなし
とまり給て　葵のかたに也
人々御前に　葵にさふらひし人々歟（也イ）
忍ひおほす中納言の君　秘葵の女房也　箋聞前より
源の中納言君を忍ひおほせしなり
いへはえ　箋聞引歌に及はす　秘いはんとすれははい
はれぬ心なり花同　箋聞引歌に不及　花秘の義に
同し又古歌の心もあり「いへはえにふかくかなし
き笛竹のよこゑやたれとゝふ人もかき　具平「いへ
はえにいはねはむねにさわかれて心ひとつになけ
く比哉伊勢物語
人しれすあはれと　源の心也
とりわきて　中納言君を也
これによりとまり　秘草子地也中納言君ゆゑと也
よふかういて給ふに　秘三月末の景氣たくひなし

あり明の月　箋聞源の京をはなれ給へるは大かた廿六日とみるへし是は廿二三日の比とみるへし高明公左遷三月廿六日也前にあり

わつかなる木かけのいとしろき庭に　私三月の末の體花の木ともやう〳〵さかり過てと有て木かけのいと白き庭さなから落花の體みる樣にかけるいみしくも侍るかな

うすく霧わたれる　箋聞詩にても春霧消すなと作れり空の朧々としたるをも云也又現景に霧も有へし

秋のよのあはれに　箋聞心中の思ひゆゑ也　又此時節の景氣の秋夜のあはれにもまさるへし

すみのまのかうらんにおしかゝりてとはかり　箋聞源のさま也とはかりはしはらく逗留のあるなり

又たいめんあらんこそ　秘源の詞也

さしもいそかてなと　箋聞中納言君に細々心安く逢給へき事なりしを心やすくて過ゝと源の後悔也

物もきこえすなく　中納言君のさま也

わか君の御めのとの　箋聞夕霧の乳母なり

宮の御まへに　秘大宮よりなり

御せうそこ　箋聞宰相君して口つからの給也

みつからもきこえまほしきを　秘これより大宮よりの詞也

夜ふかく出させ　秘世を忍ひ給ゆゑ也　聞書はやくかへり給ゆゑ大宮御對面なきよしなり

さまかはりたる心ちのみ　花葵の上のまします世ならはかくはあるましき心なり　秘葵の在世にはかはりたるとなり　箋聞葵のおはしまし〻時と又世をはゝかり給はぬ時とのさまにかはりたるといふなり

心くるしき人のいきたなきほとは　秘夕霧の事なり

夕霧にはいとまこひをし給へかしとなり

うちなき給ひて　源なり

源 とりへ山もえし煙もまかふやとあまのしほや（たイ）くうらみにそ行　秘奇特なる歌なり葵上をしたひよるさまなりさて只今須磨の浦へ尋行よし也　花鳥部山の煙は葵上の事也　箋聞もえし煙は葵上なり其跡をしたひて煙をたつねて海士の鹽やく所へ行也俊成卿室の八しまの歌もこれよりよみたるなり御かへりともなくとは大宮の返事ともきこえすの給となり

あかつきのわかれはかうのみや　秘宰相君にの給なり　花江文通か別賦云黯然銷魂者唯別而已矣　秘載之

いつれとなくわかれといふに　秘宰相詞也弄同　箋聞わかれといふものはいつもうき物なり其中にも今朝のやうなる別はたくひもあらしと也

あさからすおもへり　箋聞宰相君のさまなり

きこほえましき事も　秘大宮へ源の返事詞なり

たゝにむすほゝれ　箋聞あまり心にあまりて中々申もいたされすいたつらにこゝろの中にのこるよしなり

いきたなき人は　箋聞夕霧を見てはうき世のほたし共成ぬへけれは中々見給はぬとなり

入かたの月　箋聞前のあり明入かたに成ぬるなるへし

とらおほかみたになきぬへし　河虎狼荘子仁なきものは虎狼に過たるはなしそれたにも哀知ぬへきと也佛涅槃の時は虎狼も花をくひ人をねふりてかなしむといへり箋聞同　花一本には鬼神たにもなきぬへしとあり心は同しきなりおそろしき物も本心を失ふ心也

ましていはけなく　秘葵の人々は源を元服のはじめより見奉りし人たちなり此巻はましてといふ詞をもてかけり

たとしへなき　秘なそらへなきなりむかしにかはれるをいふなり

まことや御かへり　箋聞前の源の歌も宰相君してさたかに大宮へ讀かけたるやうにはの給なさぬと書たれは此返歌をも如此かく也

返葵母大宮
なき人の別やいとゝへたゝらん煙と成し雲井ならては　弄此返歌面白よみ給へり源の歌に引かへたり

秘鳥部山の返歌なり都の中を出給はゝ猶なき人の煙は隔たるへきものをと也　箋聞是は煙の立所かちかふたる程にや都に居給はすは鳥部山かいとと遠くならんとなりよき返歌なり

とりそへてあはれのみ　源の只今の別に葵の上の事さへとりそへてなり

ゆゝしきまてなきあへり　葵上の方の人々のさま也

殿におはしたれは　秘二條院なり弄

わか御かた　二條院にても源の御方は東のたいなり

まとろまざりけるけしき　源をまちあかしたる歟又
物思ひあかしたる歟成へし
さふらひには　秘殿上なり弄　箋聞二條院の殿上也
攝家より諸大臣家まてかならす殿上あるなり
心まうけして　源の御ともにしたしきかきり七八人
と前にあり皆私の家へ用意のため出たる故人なき
なり
さらぬ人は　源へまいりかよふ人もとかめあれは世
をはゝかりて誰も無音申也
むまくるまのかたもなく　箋聞門前零落鞍馬稀也馬
車の跡かたもなき也此物語になほさりなるをは馬
車うすらきとあり
世はうき物なりけりと　源の皆人の心をおほすな
り
たいはんなとかたへはちりはみ　秘殿上にあり弄同
花臺盤は殿上にありひさしくもちひられぬほとに
ちりはみたるなり
たゝみところ〳〵ひきかへし　箋聞是は古來の不審
なり昨日けふの事にかくは有へからす只何もかは
りたるさまをかきなせる成へし

みる程たにかゝりましていかにあれゆかん　秘俊成
卿「あれわたる秋の庭こそあはれなれまして消
なむ露の夕くれとよみ侍しも此心とみえたり箋聞
同
にしのたいに　秘紫上の方也
なかめあかし給けれは　紫上のなかめあかす也
いまそおきさわく　箋聞臥たるわらはへとも源の
御かへりにおとろくなり
年月へはかゝる人々も　箋聞源の久しく在國し給は
はいかゝあらんとおほすなり
さしもあるましき　秘平生はかやうの事には御心も
とまるましきをとあはれなる也
よへはしか〳〵して　箋聞源の紫へ申給詞也　秘同
しか〳〵とはおとゝの對面むかし物語の事三位中
將なと參りあひて夜のふけしさまをの給ふなり
思はすなるさま　聞書葵の方にとまり給事を風流か
ましく紫の思はんと源の陳し給ふ詞なり　箋聞出
京あるへき事のちかけれは紫上への名殘ををし
まるへきをと源のゝ給なり
心くるしき事のおのつから　聞書葵の父大臣母宮又

夕霧なとの事なり又そのほかかりそめに物なとの給へしかたへも情なくうちすてゝはおかれぬも有へし

ひたやこもりにてやは　秘無意趣なり　箋聞何のわけもなく引こもりてゐたるやうの心なり　聞書ひたやこもりにてやはと句を切てかゝる世にもとよむへし　私かやうの折ふしにかくの分といふ事をもいはす無意趣にてやは過へきと也さやうにしたらは人にも情なき物に思ひはてられんとなり紫へ色々ことわり給ふ詞なり

なさけなき物に　聞書中納言君にあひ給へる事を下にこむると云々　私此義如何

かゝるよをみるよりほかに思はすなる　秘紫上の詞也例の思はすなる様にやおほしなしつるとあるをうけての詞也かやうの事の出來ぬるより外にまして思はすなる事は何事かはとの給なり　箋聞前に源のれいのおもはすなるさまにやとの給ひしは好色かたの心なり此紫の詞は源の事より外の不慮なる事はあるましきかとの給ふ也好色の方にはとりあひ給はぬなり思ひ入たる心みえたり

ことわりそかし箋聞紫の深切になけくを源のことわりと思ふなり

ちゝみこはいとおろかにもとより　紫の父宮なりこれより紫のふかくなけき給ことわりをいふなり　箋聞紫の父式部卿宮云々紫の繼母の中狀に式部卿宮もつき（母イ）給て紫へおろそかなりこの故に紫の外祖母のつゐに父宮へ紫をわたし參らせさりしなり又其後も少納言か心合て源へわたり給もこの故なり紫へおろそかにてしかも此須磨のうつろひの程なとのうと／＼しかりし事か源の後までの遺恨なり源の性は隨分舊惡を思はぬ人のやうにかけるさへかくのことし

世のきこえを　秘紫の父宮人めをはゝかりて御訪もなきを紫上はかなしくおほして中々なにゝかくてある事をしられけんと後悔し給ふ也

人のみるらんこともはつかしう　紫の心中なり中々しられたてまつらて葵卷に御裳着ありて其時しられ給へるなるへしあらましにはかりかきてその時の事をはかゝす　秘源の御方におはしますをもしられすしてあるへき物をと思給ふ也

にはかなりしさいはひの　箋聞紫の繼母のかくいひしと也俄なりしとは源へ紫のわたり給ひて後葵上なくなり給又世人の立かはり給ふへきと思ひし六條の御息所も御中たえたれは今は紫の源の本臺のやうなるをいふなり

おもふ人かた〳〵に　秘　かた〳〵とは祖母又母上にもはやく別給ひ今源に逢奉りてかきりなき幸を得給とおもひしに又ほとなくわかれ給と繼母の心にいさゝかにくしと云給也

いみしう心うけれは　聞書繼母のしりうことを紫のきゝ給へる心なり

也

これよりたえて　秘　紫のかたからおとつれし給はぬ

けにそあはれなる　箋聞　草子地　私けにそとは誠に繼母の云ことく只今賴人なきと云歟

猶世にゆるされかたう　弄　源氏詞也　秘　源の詞只今紫上をもあひくし給はさる由をことわり給ふなり箋聞紫のたよりなくかなしむをなくさむる詞也又前にいつくへもおくれしといふ樣にの給し事もあれはかた〳〵只今くし奉らぬいはれをことわり給ふ源の詞なり年月をへてもゆるされかたくはいかなる所へなり共むかへんとなり只今は外聞をはゝかる也

いはほの中にも　河「いかならん巖の中にすまはかは世のうきことのきこえこさらん　私箋聞いつれも引歌をのせす　只いかならん住かたき所なり共と云成へし又は隱居したる人しれぬさひしき所なりともいふなるへし

あきらかなる月日の影を　此事本文を尋へし　私只公界ひろからぬ事を云歟　禁秘御抄云　勅勘　無風情不見天氣閉門之外無他云々是はたゝ除名なとにもあらす勅勘はかりの事なり

あやまちなけれと　箋聞犯罪なけれとも前世の定りたる事なるへし凡配流ならてもかやうに隱居なとあらん人の思ふ人具するはあるましき事成へし配流の人いふに及はす

ひたおもむきに　箋聞是はかた〳〵にくき人をはとこまてもあしくし給ふなり

たちまさる事もありなん　秘　又これよりまさりていかなる事かいてくへきとなり　聞書伊周公なとも

はしめは播磨國へつかはしゝを忍ひて京へのほりし罪によりてかさねて宰府へ配流の例あり
日たくるまで　葵のかたより夜ふかくかへり給し同時なり
帥宮三位中將　秘帥宮は螢兵部卿なり　三位中將は葵の兄也
位なき人はとて　秘除名によりて平絹を用給ふ也
むもんの御なほし　河平絹御直衣也或しゝら雖非凶服散班宿老公卿なとは常着之今源氏も無官位人と也仍着之歟　箋聞無紋の直衣は常の綾の無紋歟又平絹歟只平絹然へし末にもかとりのなほしとあり
おもやせ給へは　源のさまなり
こよなうこそ　源の詞紫への給也
このかけのやうにや　箋聞鏡によりて人の顔なとも色々にうつる物なりされは紫へとひ給ふなり
いと忍ひかたし　源の心なり
源身はかくてさすらへぬとも君かあたりさらぬ鏡のかけははなれし　秘給源サスラフ注行不止也又流浪もさすらふ也　仙娟伶俜　又龍鍾たゝよふなと云心也さすらへと聞書に付たり　箋聞身はかくのことく流落するとも此おもふあたりを立はなるへからすさらは鏡のかけの其まゝに殘らんとなり
返紫上わかれても影たにとまる物ならはかゝみをみてもなくさめてまし　箋聞源の歌に鏡のかけははなれしとありされとも影のとまる事はあるましき也もしとまるならはさやうにてもなくさめてまし物をとなり
はしらかくれ　箋聞寢心歟殿のもや也仍柱のあるなり
おほしゝらるゝ人の御ありさまなり　紫をすくれたりと源の思ふ心なり
みこはあはれなる御物かたり　箋聞帥宮なりくるゝほとゝあるにて久しく居給はみえたりこゝの樣體を又かきたらは前に葵の父おとゝに逢給し時のさまと同し樣なるへけれはかゝぬなり尤妙なり
花ちる里の心ほそけに　秘是は女御の事なり弄同つねにきこえ給とは細々音つれ給ふなるへし
かの人も　秘是は花散里のうへの事なるへし　弄同
その夜は又　葵の父大臣のかたへおはしたる次の夜なり

いと物うくて　箋聞花散里へ出給ふなり紫に心のとまるから物うきなり

かきつゝけんもうるさし　聞書草子地也　女御ちとふるめかしき體をかゝぬ也

いといみしく心ほそき　花散里の體なり源のかけにかくれて過し給ひしをおはせさらん時をおほしやる體なり

殿のうちいとかすかなり　箋聞花散里の體なり　前にもあり

月おほろに　同所のさまなり

池ひろく山木ふかきわたり　箋聞こゝのさまに只今住はなれん所の事か思ひやらるゝと也かやうの所のちと荒て人めなきさへなりまして都の外の海つらいかならんと思ひやり給ふなりいはほの中不及引歌只隱居し給はん所の事をいふなり

にしおもては　秘花散里上のかたなり

かうしもわたり給はすやと　箋かくのことくしもといふ也かやうにわたり給事もあらしと身を卑下したるなり

うちふるまひ給へる　箋聞源のさまなり

ゐさりいてゝ　ちと源をまちよろこひたるさまなり

やかて月をみておはす　秘花散里の用意然へきさまみえたり　箋聞花散里の上のうちむきたる體なり初音卷にも木丁をしやり給へは又さておはすといへるも此人の事なり

こゝに御物かたりのほとに　箋聞女御の年よりたる人にて長物語といつくにてもみえたり又こゝに物かたりのほとに明かたになるなり

みしか夜のほとや　秘源の詞

ことなしにて過しつる　秘無事にて有し時何とてたえまかちなりしそと後悔なり引歌に及はさる歟不及引歌の間河海義略之　箋聞無事なり徒に過しつる年月の程を又かへらんもしらぬゆゑに今後悔するなり

きしかた行さきのためしに　箋聞罪なくしてかゝる事にあふ事前後の例なるへき身との給なり

何となく心のとまる　私云此義諸抄に注せす案之に心のとまる心のどまるいつれそとおほゆるにかやうにためしなき事にあふへき身にてやらん何とも心のとまることもなくありしと過にしことをの給事

とみるへきにや如何
よにつゝみて　箋聞夜につゝみてかこれにて世上につゝむ心もこもるへし又世の字にても然へし
れいの月のいりはつる　弄源氏の月の入かたを身に思ひよそへ給なり例のとは毎夜の心歟花鳥には中納言君の別の時をおほすと云々　私秘箋弄に同し或抄御説花鳥わろし　箋聞是は源の御身の體をかたふく月によそへ給ふなり花鳥説あやまれり　箋聞「紫（イナシ）はかりにて源の外へもかよはすして有へき物をとなり」　聞月の西へ入るを源の體に比する也只是西行不左遷と菅家の御詩有此心也れいは毎夜の義也宗祇説云々　花三條宮より歸給ひし時中納言君に別れ給ひし曉の月の光思ひよそへられて哀なる故に例の月の入かたと云也上に見えたり
（以下一本ナシ）猶しのひてや　秘紫上をしのひてもむかへばやとおほすなり
又うちかへし　紫をむかへやせましとおほす御心をうちかへしてかゝる折にたに罪業をもかろめんとおほするなり
やかて御さうしんにて　聖廟宰府に御下向の後不斷御精進にて朝夕法華經を轉讀せしめ給けりと云云叙意千言の中にも微々抛愛樂漸々謝葷膻なとあり又重陽の御作にも菊酒爲誰調長齋終不破云々　秘聖廟も御精進なりし
大殿のわか君の御事なとあるにも　箋聞夕霧の御めのと宰相君よりの返事にあるへし又大殿も文あるへし夕霧はよき御うしろみのある故に心やすく思ひ給ふなり
をのつからあひみん　秘つゐにはあひ給ふへきと也
このもしき人に　秘祖父母ましませは心やすきとなり
このみちはまとはれぬにや　花子の道をこのみちとかける也わか君の事也　秘「人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬる哉　といふにはかはれり夕霧の事よりは紫上の事心もとなしと也夕霧はたのもしき人々もあまた侍る故也恩愛の中には夫婦の中一段大切なるよしなり　箋聞　秘の義に同し　弄人の親の心はやみにの歌にはかはれるにやとなり
まことやさはかしかりしほとのま（き歟）されにもらしてけ

り　秘草子地なり
聞書此詞は夕霧の事をそくいひたるをことはりたる詞なり又伊勢よりの御をとつれの事を今いひ出す歟と云々」
こき御そ　秘紫也箋聞紫なりいつくにても同し
ぬるゝかほなれは　秘「あひにあひて物思ふ比の我袖にやとる月さへぬるゝかほなる　秘弄引歌同箋聞同引歌尤面白云々
花散里上
月影のやとれる袖はせはく共とめてもみはやあかぬひかりを　秘花散里の心のうちむきてよろしきさま此歌にて見えたりたゝ今の別の名残をしき心をつつみもせすよめり我数ならぬ身にも此源の光はとゝめておきてみたき由なりよのつねの女のよみさまにはかはれり弄同　箋聞ぬしの心のことくまつすくによめる歌なりたゝ今の月をせはき袖の涙になりともそのまゝとゝめたきとなり月を源によそへたり
いみしとおほえたるか　秘花散里上事外に此別をかなしとおほすけしきなれはなくさめ給ふなり
返源
ひきめくりつゐにすむへき月影のしはしくもらん空ななかめそ　女君をなくさめてよめり　箋聞月は山へ入ても又いてくもりても又晴るゝものなり源の身上もかくのことくなるへしとなくさめてよみ給ふなり
おもへははかなしやたゝしらぬなみたのみこそ　河「ゆくさきをしらぬ涙の戀しきはたゝめのまへにおつるなりけり　秘弄引歌同し　私云行めくり終にすむへき月かけ（ナイ）そと思へとも行さきをしらぬなみたか只今はかきくらすはおもへははかなき事かなといふにや諸抄注せさる間かくのことし
よろつの事とも　箋聞すまへの御用意と又跡に仰をかるゝことゝなり
したしうつかうまつる世になひかぬ　箋聞太后へもおそれす世にしたかはすして源へ奉公の人々を御供にもめしつれられ又跡にも残しおかるゝなり
とのゝ事とりおこなふへき　是は京にとゝまるへき人々なり
御ともにしたかひきこゆる　源より人さしなるへし惟光良清以下也
山さとの御住家のくは　箋聞結構なる道具なとはお

ほからぬ也いらすして叶はぬ物はかりもたせ給ふなり

よそひもなくことそきて　箋聞かさりなとも危相にしたるを云なり結搆なる物は無位の人又かやうの所に似あはぬ也こと〳〵しくみゆる故に殘し給ふなり

文集なといれたるはこさては琴ひとつ　河漆琴一張儒佛書各三兩卷樂天既來爲主白氏文集草堂記　花文集白樂天の詩賦をあつめたる七十二卷あり長慶集と云り長慶年中にあつめたる故なり　箋聞昔は唐人の詩集此外にはわたらさりしなり其外のは後代におほくわたるなり

さふらふ人々よりはしめ　是は源のかたにさふらふ人々なり

にしのたい　秘紫上なり　箋聞跡の事はぬしに成て仰つけよと源の紫へ申給なりわか御かたの人々をもみなあつけ給ふとなり

れうし給ふ御さうみまき　河領給　御庄　御牧　秘皆所領ともなり

所々のけん　河券也　秘券とは支證の物なり　契約なり　箋聞券は支證なり桐御門なとより拜領し給へる所領なとの券なるへし

みくらまち　箋聞源の藏也重寶なと入たるなるへし

少納言をはか〳〵しき物に　紫のめのと少納言をさやうのかたたしかなる者と御覽して源の家司なとをくはへて樣體ともをしり給へき事を紫へ仰おかるゝなり

しろしめすへきさま　箋聞紫へ大體をの給ひこまかなる事は家司ともに少納言をくはへて仰おかるゝなり

中務中將なと　秘皆源のつかひ給ふ官女也　箋聞皆源の官女なり紫の人とは各別なり

つれなき御もてなし　箋聞中務中將源の思ひ人なれはかくいへり

何事につけてかと　箋聞中務中將の紫の御方へ參りてはあらしと思ふなりされとも源の宣ふにつきて紫へ參る也後には紫によくおもひつきてさふらふとみえたり

いのちありて此世に　秘源の詞なり

こなたに　秘紫上方也

かみしもみなまうのほらせ給ふ　源の方の人々紫へ
參るなり　異本かみしもみなまうのほらせ給てさ
るへき物ともしな〳〵くはらせ給ふわか君の：か
くのことし朱點ノ分三本ニ無
わか君の御めのとたち　秘宰相君なとなり　夕霧の
めのとともなるへし
花ちるさとにも　女御又花散里上へもなるへし
おかしきさまは　箋聞おかしきさまは風流めきたる
心なり其外眞實のうしろみのかたまてねんころに
おほしよるなり
内侍のかみの御もと　聞朧へ源の音つれ也さやうの
事ゆゑかくなり行し事なれはなほさりならす忍ふ
へき事なり
とはせ給はぬは　秘これより源の文の詞
いまはと世を思ひはつる　秘朧月夜をちとうらみ給
ふなり
源あふ瀬なき涙の川にしつみしやなかるゝみをのはし
めなりけん　弄朧月夜の方へイの歌に無實なる事のやう
によみ給へるは用心なり　つみのかれかたう侍け
るとはかゝる事も先世の罪にてそあるらん然れは
のかれかたきとなり　宗祇已上弄　秘無實なる事
のやうに讀給へる用意淺からさる也若菜卷に柏木
右衛門督の文を心なき書樣との給しも今もケ樣の
所なり惣して多は實事ある中も我思心の切なれは
あひてもまたあはさる心のある也されはあふせな
きとはおきたるなり用意可然事なり此歌俊成卿女
云此物語の中第一の歌と申されしとなん　河涙の
川名所と云説ある也後撰に男の伊勢へまかりける
に君か行かたにあるてふ涙川まつは袖にそなかる
へらなるとあり然は伊勢國の名所たる歟同集に伊
勢「なみた川渡る袖より流るれととふにとはれぬ
身はうきぬめりとありしもなほ涙のよし歟文選に
も水滔々而日々涙なとあり只涙によせたるなり非
名所歟一説にいせわたるとは五十瀨也非伊勢云々
俊成卿女は此歌を物語の中第一の秀歌と申されけ
り云々水尾萬葉　水源日本紀　瀐同上
つみのかれかたう　前世の業にやといふなり
道のほともあやふけれは　此心歌をも無實のやうに
詠せしはきこえたり
女いといみしう　朧の思ひみたれたるさまなり

なみた川うかふみなわも消ぬへしなかれて後の世をもまたすて　河水沫也　水廻は各別の事也　秘みなわは水沫なり　私なかれて後のとは源の歸京有へき折節をも待つけずわか身はみなわのことくなれはやかて思ひに消ぬへしと也又ふかき思ひの涙にわか身もうかふほとゝいふなり

いまひとたひたいめなくてや　是より源の心也いま一度朧へは對面ありたけれともうしとおほすゆかりおほくておほしかへすなり弘徽殿かたの事なり

忍ひ給へはとは朧の忍給ふ歟(へけれイ)されは源のしゐて對面あらんともの給はぬ也又忍ひ給へはといふを源の心共みるへし

きこえ給はす成ぬ　聞書これまて草子地

あすとてのくれには　秘かくかきたれと又色々の事此間にあり

院の御はかおか(なイ)みたてまつり給ふとて北山へまうて給ふ　河山陵事神武天皇七十六年春三月崩橿原宮時年一百二十七歳明年秋九月葬畝傍山北山陵　榮花物語云帥殿伊周公夜半はかりにいみしうしのひて御おちのあきのふはかり御ともに人二三人はかりしてぬすまれいてさせ給てこはたの御はかへまゐり給ふ　弄いつれの所ともみえす榮花物語に岩陰と云所に御廟の事ありヶ様の事を思てかける歟云云岩陰は松崎のおくの名所なり天暦陵云々又榮花物語と此物語との時代同歟可决　秘北山は岩陰也岩陰は松崎の奥也　天暦陵云々．

あかつきかけて月出る比なれは　花家定卿此詞をとりてよみ侍る歌

内大臣家の百首に「春はたゝ霞はかりの山のはに曉かけて月いつる比　秘定家卿歌に其まゝ下句に用たる事かつは式部の高名歟云々　私曉かけて月出る比なれはとは先夕やみのほとにしのひて藤つほへ參りて夜ふけて北山へ參り給はんとなり

ちかきみすの前　藤つほのちかくおはする簾外へ御まし參りて源にみつから物なと仰らるゝなり

春宮の御事を　源の心歟藤壺の御心歟何にても可然

なつかしうめてたき　藤つほの御さまを源の思ひ給ふ心也

かすめきこえまほし　源のつらくおはせし恨を藤つほへかすめいひたきを思ひかへすなり

いま一きはみたれまさり　中々源の心にも物思ひの
そふへきと也
たゝかくおもひかけぬつみに　秘源の詞也
思うたまへあはする一ふし　箋聞藤つほへ密通あり
て冷の生れ給ひし事也
宮の御代たにことなく　春宮の御事也　私そらおそ
ろしき一ふしのとかめを天道にかへりみるなりさ
やうの事に我身をはかなき物になしても冷の御位
につき給やうにとおもふ心となり
宮もみなおほし　秘是は藤つほ也
なき給へるけしき　さま〳〵の事を心中におほしめ
しつゝくへき折節なりおもひやりてみるへし
御山にまゐり侍るを　花山陵をいふなり弄秘同　源
の詞なり
とみに物もきこえ給はす　藤壺のむせかへりたるさ
まなり
藤 みしはなくあるはかなしき世のはてをそむきしかひ
もなく〳〵そふる　河「新古あるはなくなきは數そ
ふ世中にあはれ何れの日までなけかん小町　一句
は故院二句は源の事也　私そむきしかひもとは世
をそむきたれともそのかひもなくかなしき事はな
くさめかたきとなり
いみしき御心まとひともに　秘草子地也　此歌を評
するなり只今の御歌思ふやうなる秀逸にてもなき
となり
返源 わかれしにかなしき事はつきにしを又そこの世のう
きはまされる　私桐御門に別れ奉りし時悲しさはき
はまりつるに又この世のうさといふ物は別れにあ
りけるよと也この世は子の字の心ある歟如何　僻
案の新説なり
月まち出ていて給ふ　曉かけて月いつる比なれは也
聞書曉かけて月出る比なれは入道の宮に參りて月
まち出てゝいて給ふとかけるおもしろし云々
さらなることとなれとありしよの　秘さらなるは事の
外なるなとゝいふかことし此奥にもあり花散里は
いとさらなる世なれとゝあり同心也　或抄いへは
ことあたらしくめつらしかましき事なれとゝいふ
心云々然へき也
右近のせうの藏人　秘中川の紀伊守か弟伊豫守か子
系圖にあり　弄同　葵卷に源氏御禊につかうまつ

りし日より隨身せし人
うきかうふりも程すき　秘源の家人なるによりて
なり　私六位藏人四人の内第一を極﨟といふそれ
か毎年の叙位に一人つゝ叙爵するを巡爵といふな
り
みふたけつられ　是を除籍といふ籍はふだ也殿上人
は四位五位六位まて昇殿する程のものを日給簡と
いふ物にかきつくるなりそれをけつりのくる事な
り
つかさもとられ　解官停任なり
御ともにまゐるうち也　右近の藏人は須磨へも御供
の内也
かもの下のみやしろ　下鴨御祖社　これを下のみや
しろといふ今糺と云是なり
おりて御馬の口をとる　右近のせうのわか馬よりお
りて源の御馬の口をとるなりありしみそきの日を
思ひ出しなり風流なるさまなり
右近丞
ひきつれて葵かさしゝそのかみをおもへはつらしか
ものみつかき　秘神もうらめしきとなり
けにいかにおもふらん　源の心に右近藏人かみゝき
の日はさしも人よりことに所えたりし物をと心中
をあはれみおほすなり
神にまかり申し給ふ　河辭見日本紀　いとま申なり　秘
賽はかへり申なり　賽は報なり　報其所祈なり
源
うき世をは今そわかるゝとゝまらん名をはたゝすの
神にまかせて　聞書身はたゝいま都をはなるれとも
とゝまらん名をはあきらかにたゝし給へと也神の
御名によせたり
物めてするわかき人　右近の丞か心なり
おはしましゝ御ありさま　陵へ源のまいり給へは故
院御在世の事眼前のやうに思ひいてらるゝ也
かきりなきにても　秘十善帝王の位も生をへたて侍
れは何事も口をしきなり
なく／＼申給て　源の御はかの前にての事なり
いつちへかきえうせにけんと　源の心中也
御はかはみちの草しけくなりて　河古墳何世人不知
姓與名化作路傍土年々春草生樂天　秘古樂天か作れ
る心うかひて面白しと也弄同
ありしおもかけ　秘まほろしのことくなり
そゝろさむきほと也　箋聞　洒淅　洒々　悪寒　悪

風　巳上素問經

源なきかけやいかゝみるらんよそへつゝなかむる月も雲かくれぬる　秘折ふし月の雲かくれたるをみて故院いかゝ我身を御覧するにか月のへたゝるを心のおにゝ思ひとかめ給也藤つほ密通の事を思ひ給ふなるべし弄同

東宮にも御せうそこ　源より冷へも御せうそこはかりなり大内のうちなれは源の參給ふ事はならぬ也

王命婦を御かはりとて　秘今藤つほの御かはりに可然人なりとて春宮にそへ給ふなり弄同

けふなん都はなれ　源より王命婦への文の詞なるへし

又まゐり侍らす　今一たひ春宮へ參らぬ事の御名こりおほきとなり

源いつか又春のみやこの花をみん時うしなへる山かつにして　秘春宮を申給なり　聞書東宮榮花の春にいつかあひ奉らんとなり我は時うしなへる山かつそとなり

さくらのちりすきたる　秘ちりすきたるとは散透也弄同

かくなんと　王命婦の冷へ申きかせたてまつるなり

をさなき御心ちにも　冷のをさな心ちにまめたち給なり此時八歳にておはすへし

御かへりいかゝ　命婦の東宮へ申詞也　東宮中宮なとへは啓すると申也帝王へは奏するなり

しはしみぬたにこひしき物をとをくはましていかにと　秘冷の御詞也をさなくあはれなる詞也

ものはかなの御かへりや　秘王命婦の心也

あちきなき事に　是より命婦の心中に藤つほと源との間の事を色々思ひつゝくるなり

物おもひなくて　さやうの事のまきれなくは藤つほも源も別におほす事はあるましきを也

心とおなしなけき　源のわりなき心より我も人も物をおほすと也

くやしう我心ひとつにかゝらん事のやうに　さやうの事のむくいに只今源のかやうの事もあると思へは我媒をしたるそれゆゑかやうにありたる事のやうに後悔に命婦の思ふ心也あまりなけき思ふあまり成へし

御かへりはさらにきこえさせ　秘さらにといふより

命婦の文の詞也　秘御かへりはさらにこれより命
婦の文詞也
御前には　秘春宮に啓する也
そこはかとなく　命婦の返事のはか〱しからぬさ
ま也
返王命婦さきてとくちるはうけれと行春は花の都を立かへり
みよ　花花の開落を源の榮辱に比するなり又こん春
をかならすといふなり弄同　私行春はとは只今暮
春なれは源の都はなれ給ふによそへていへり春は
花の時分なれは都を花の都といへは必イ心立かへり御
覧せよと祝ひてよめるなり
時しあらん　花歌の詞あるへしいまた見いたし侍ら
す　弄引歌未見心は明也　秘時あらはやかてかへ
り給への心也
名殘もあはれなる　命婦のさま也　返事申たる跡に
てあはれなる物かたりともして東宮のうちしのひ
てなけくさま也
一めも見奉る河　源を一度も見奉りたる人は惜奉る也
をさめみかはやうと　秘いやしき物なりとの字不清
不濁きこゆるやうによむへきとなり　河おさめ八

雲抄には下女也とあり水原抄云長部をさめとは曹司の
事也御河とはひすましの事也云々又おさうる女御
かはたもちといふ商人なと云りたとへはいふかひ
なき下女なとまてといふなり　案之云行幸の後騎
に厠長女洗女とてあり此こと歟　仙源云をさうる
めみかはたとておほきなるをけにものをいれてい
たゝきてありくひさいめ也又長部チサメ長女同曹司
也御河ミカワ　ひすましなり故人說也又云いつれも
大臣家の執權の人也云々愚案しりをよひ給ふまし
きと云り執權にはあるへからす又御かは定本には
みかはやうとまてとあり御厠人といへるにや記錄
なとにも長女御厠人とそかきて侍るめる　私只あ
やしき女はらなとの事ときこえたり
御かへりみのしたなりつるを　秘皆源の御めくみの
下なると也　私御かへりみのしたとはおもしろく
かけり
おほかたの世の人も　これより惣別の人の源ををし
み奉る事をいふ也　秘此除名の事誰々も心よから
すおもふよし也
なゝつに成給ひしよりこのかたみかとの御前による

ひる　或抄云源の御ことをいふ小學に入給てよりこのかた也　是は七歳にて文はしめあれは物の分別のあるへき心にてかくかけり　私云此義甚然るへからす不用之只七歳の比より御前さらす候ひ給ひ御鍾愛ありし事と心得へし又三歳にて母更衣にはなれ給ひ六歳にて外祖母にわかれ給へれは七歳の程よりはつねに內裏にのみさふらひ給ひし事と計みるへき歟

この御いたはりに　花御はくゝみの心なり　源の御とくに誰々もあつかりし事也

やんことなきかんたちめ辨官　いつれも官位なとの事につけて御執奏を賴ける成へし

さしあたりていちはやき世を　太后のいちはやきにはゝかりて源の御德をも忘れたる樣なると也

世ゆすりてをしみきこえ　花かけろふの日記云西宮の左のおとゝなかされ給ふみ奉らんとてあめのしたゆすりて西の宮へはしりまとふゆするは動といふ心也

身をすてゝとふらひまゐらんにも何のかひかは　世のはゝかりをかへりみす參りても源の御たよりにはならぬ事そと思ふとなり

かゝるをりは人わろく　秘世のならひなり

よろつにつけておほす　源の心中也

その日は女君に御物かたり　秘此日は未下向也弄同

かりの御そなと　源の旅のさうそくのさま也

月いてにけりな　秘いまいてたち給也　聞書源の詞なり

いかにきこゆへき事おほく　只今わかれ給てやかて又の給ふへき事のつもらむ事をかねて察して源のの給ふ詞也

わかみかくてはかなき世を　源の心中なり紫の事を思ふなり

おほしいりたるかいとゝし　弄源氏のかなしみの色を紫上にふかくみせしとてなくさめたる歌をよみ給へり　秘うしろめたくはおほせと女君をなくさめおき給ふなりいとゝしのし文字はやすめ字なり　私いとゝしくかなしみのそふへければと成へし

源いける世の別れ（にイ）をしらて契つゝいのちを人にかきりけるかな　或抄大かたの後朝の歌のやうによみなせる紫上のくつし給へるをなくさめて此砌にはいか

やうのかなしき別の歌もいてくへけれどもつよくかなしき心をは見せ給はぬ成へし只戀路はかりにの給ふなり同碩註此世なからの別をもしらす命のかきりと契給ける成へしされははかなしやとあり只今のかなしみにはあらてたゝ大かたによみなし給へり女君をなくさめ給ふなり　私云只今の後朝はかりのやうによめるといふ義おほつかなし生別のありけるをしらて命をかきりと契りけるははかなき事かなと也されとも紫上の思ひをなくさめてなほさりなるやうにの給なしたるをあさはかにききなし給へはといふ也

返紫上 をしからぬ命にかへてめのまへの別をしはしとゝめてしかな　秘おもしろき歌なり　或抄さしあたりて哀ふかし　私をしからぬ命にかへてとは源のつねに命をかきりて契りおきたまへはこそ紫の命もをしけれかやうにおなし世なからの別あれは紫の命はをしからぬなりその殘れる命にかへて眼前の源の生別を少しなりとも抑留せはやとなりかやうにみて哀れふかゝるへきにや又先年三光院内府詠百首の和歌の内歸雁の心を此歌を取て「こん秋の契にかへてめのまへの雁の別をとゝめてしかな

けにさそおほさるらん　紫の心中そのまゝ此歌のことく成へしと察し給へる源の心中なり

いそきいて給ひぬ　源の出京の體也此程のあはれなとなほさりなるましきをあさ／＼と面白くかきなせり

御船にのり給ひぬ　弄淀川より成へし　河の義略之

日なかき比なれはおひ風さへそひて　秘あまりに早速なる歟文章にのそみてはかやうにかく事つねの事也

またさるの時はかりに　弄一日に彼浦に下着の事不審也但さる事もや又大やうにかき侍る歟　聞書追風なとふき都をいそきたる體なり　或抄日なかき比なるに追風さへそひてとこそ有へきを比なれはとあり是物語の書様也　私云おひ風さへそひて日なかき比なれはまたさるの時にといふ詞とみるへし

かりそめの道にてもかゝるたひを　遊覧なとの事につけてさへかやうの旅をはならひ給はぬにましていつともなきさまにて須磨の浦へうつろひ給ふ心

中おしはかるへしされともならひ給はぬ御心にお
かしくもめつらしくもおほすとなり
おほえとのといひける所は　花齋王歸京の時伊勢を發て大和路をへて攝津國におもむきて難波にて御はらへありて七日に大江の儲所につき給ふ十日に入京し給ふ也故に大江殿は齋宮歸洛の時の旅館なりそれに松はかりしるしに殘れると也　秘齋宮歸洛の時の旅館なり松はかり殘るとなり齋宮爰にて禊をして都に入給ふ所也一代一度齋宮の旅館なれはあれたるといへるにや弄同　河後拾遺良羅法師歌に「わたのへのおほえのきしにやとりして雲ゐにみゆるいこま山かなと有此所歟但松はかりそしるしなりけるといへり定可有古歌可勘一說云渡邊橋東に樓岸といふ所あり昔此所に驛樓を立と云々
源から國に名を殘しける人よりも行衛しられぬ家ゐをやと（せイ）む　河楚の屈原かはなたれたりし事をいふ歟
楚辭漁父序　曰漁父者屈原之所作漁父避俗時遇屈原恠而問之遂相應答屈原既放身船遊江潭戲水側行吟澤畔履荊棘也顏色憔悴　杜詩注曰屈原有宅在歸州　後漢書群國志註曰荊州記抒歸縣北一百里有屈平故宅方七頃累石爲屋基今地名樂平　花河海には楚屈原か江潭になかされしことはかりをしるされたり此外流刑をかうふりし人は數多有し事なり　秘河海に屈原をひけり一人にかきるへからさる也　屈原か事を思へる也楚屈か淸醒を源氏の身に比したる也但屈原にかきるへからすと云々花
うらやましくとも　河伊勢物語「いとゝしく過行方の戀しきにうらやましくもかへる波哉秘弄引歌同
うちすんし給へるさまさる世のふのこと　秘たれもしりたるふることなれと源の吟し給ふは殊勝なると也　弄伊勢物語のやう思ひやるへし業平旅行の時詠此歌事あはれもたくひなき事なれはふりたりといへとも今源氏の吟し給へるは又殊勝なりといへり
まことに三千里の外の心ちするに　河十一月中長至夜三千里外伊行釋遠行人若爲獨宿楊梅館冷枕單（草イ）床一病身
白氏文集　三千里外隨行李十九年明任轉蓬在昌賦蘇武
弄三千里外隨行李云々須磨への程十二三里はかりの間も三千里の心ちするとなり其心あはれなり
秘同　秘には二千里はかりとあり

かいのしつくもたへかたし　「このゆふへふりくる雨は七夕のとわたる舟のかいのしつくか赤人　我うへに露そおくなる天川云々　弄涙の心もあるへし此詞面白し秘同　聞書此夕へふりくる雨は云々

源ふるさとをみねの霞はへたつれとなかむる空は同し雲ゐか　秘おなし雲ゐかは雲ゐかな也心には聊もへたてなけれは同し雲ゐ也霞も思ふ心をはへたてはつましきと也

つらからぬものならなん　秘折ふしの心にひかれてこの山の霞なとの無心なる物もつらきよしなり羇旅の感慨ふかき者也　私云古今に「山かくす春の霞そうらめしき何れ都のさかひなるらんとよめるは京へかへりくる人のよめるなり只今かへるへき都をへたてたる霞さへつらけれまして只今立わかるゝ都をへたてたる霞のつらかるへきことを思ふへし

おはすへき所は行平の中納言の　河古今田むらの御時にことにあたりてつの國須磨といふ所にこもり侍けるに宮の内に侍りける人につかはしける在原行平朝臣「わくらはにとふ人あらは須磨の浦にもしほたれつゝわふとこたへよ　秘是よりは舟よりあかり給ての事也　箋聞須磨の浦にて御住居の所也關吹こゆるとあるは忠見か歌也それをかきちかへたると花鳥にはあり此說あやまれりもしほたれつつはかりを行平の事と花鳥にありいつれも行平の事也此所前に行平住居のあたりと聞えたり　私此義奥に註すへき歟

かきのさまよりはしめてめつらかに　箋聞源のみならひ給はぬ體也城外は今はしめ成へし

かや屋ともあしふけるらう　弄此所にもとよりかゝる體の屋ともありしとみるへし秘同し

所につけたる　かやうの所に似合たる體なり

かゝるをりならすは　箋聞かやうの折ならすはやうかはり面白かるへき所と猶風流なる御心におほすなり　弄罪なくして配所の月をみはやといへる心に似たり箋聞同秘同　此詞顯基中納言の語と云々世繼にみ給ひしにや

ちかき所々のみさう　秘御領の在所とも也　箋聞源の領地なるへしちかきとは須磨へ近き所歟又只京へも近き所歟　私須磨へ近き所の事也

よしきよのあそん　前播磨守か子良清朝臣也かやうの方奉行する人成へし

したしきけいしにておほせおこなふもあはれなり　良清なとは都にては面むきの事なとはかりにてこまかなるかたなとまてはとりおこなふましきを只今は人すくなにて何事もとり沙汰するをあはれなりといへる也

時のまに見所ありて　末の詞に春秋の花の事あり弄　こゝのおはし所なり御さうの人なとの参りてかやうにしなすなり

いまはとしつまり給心ちうつゝならす　箋聞當座はちやつと面白く源の思ひ給ふ共程ふるほと物うき御すまゐ成へし（かりイ）

國のかみもしたしき殿人　秘　攝津國の守也　箋聞誰ともみえす

しのひて心よせ　朝家をおそるゝ故なり

しらぬ國の心ちして　箋聞日本國の内ならす外國のやうなるなり異國の事也

むもれいたく　はれ〳〵しからぬ心也心中にある事をもはるけやらぬ體なるへし

いかてとし月を過さましと　年月を送り給はん行末を今よりおほしわつらふ源の心中なり

やう〳〵ことしつまりゆくに　御居住も定り御みまひの人なともうすらきたる體成へし

なか雨の比になりて　秘　夏に成てなり　箋聞花鳥に時分あり但是はよのつねのなか雨なり

京の事ともおほしやらるゝ　閑なる御すまゐの長雨の時分の源の御心中思ひやるべしつねに御心にかからぬ人のうへもかやうに程へたゝり心のしつまれは思ひいてらるゝ物なり是はましての事なり

女君のおほしたりし　紫上なり

春宮の御事　冷泉なり

わか君　夕霧也　何心もなく源にむつれ給ひし事也

二條院へたてまつり　紫上へなり　花　紫上への歌は物語にのせすゆゑあるへきにや但紫上の返事は下にみえたり

入道の宮とは　薄雲女院なり

かきもやり給はす　此二所へは別したる文のさまなるへし

くらされ給へり　箋聞　涙にかきくらさるゝなり

宮には　秘薄雲女院なり
源松島のあまのとまやもいかならんすまのうら人しほたるゝころ　花松島のあまは入道の宮をたとへ侍りなか雨の比なれはついたなともくつれぬらんの心にいかならんといへる也　秘大かたの長雨のつれつれなる思ひやり給成へし花鳥についちなとの沙汰まてはあまりにくたくたしき也　箋聞松島のあまに藤つほの事をおほくたとへ（よそへイ）たるなり　むへも心あるの心也　海士を尼によせたり　私さか木巻に西院の后の事を私に説之畢かの后は嵯峨の御女淳和の后なり此藤つほは先帝の御女桐壺帝の后也いま尼になり給へは素性か西院の后を松か浦島の海士にたとへてよめれは其心にてかく准したりと覺ゆ又須磨の浦人しほたるゝころといへるも俊成卿歌に「五月雨はたくもの煙うちしめりしほたれまさる須磨の浦人と詠せる此歌の心にやかよひ侍らん

いつと侍らぬ中にも　箋聞不斷時をもわかすわすれ奉らぬとなり又都へかへり給はん事のいつともなきなり其中に此比のなか雨の空かきくらす時分となり

みきはまさりてなん　秘是まて文の詞也　花「君戀る涙おちそひこの川のみきはまさりて思ふへらなり　此引歌よく叶へり　箋聞五月雨に涙をもたせたる也引あくるよりみきはまさりてとあるは只涙はかり也　聞書汀まさるなり　私見涯まさるなり云々

私凡みきはまさるといふ詞水のまさる事にもいへり又多は涙をよせたり此引歌の心も水のまさるを涙にそへていへるなり先年紹巴法師（於勝龍寺藤孝興行會始）なかれよりてみきはまされる哉かなといふ發句の聞え侍りし比三光院内府は此詞不可然と申されし勿論水の汀のまさる事にはかり詠したる歌もありされとかやうの涙の事なとに用たる詞をは不可用事也とそ申されし凡本歌をとりて歌なとよまんにその心詞にはきこえすとも哀傷の歌なとのいま〳〵しからんをとりて詠せん事は席によりて斟酌あるへき事とそ其つゐてに申されし

内侍のかみの御もとに　朧月夜なり
わたくしの事のやうにて　秘朧月夜の御かたへ也

中納言君は朧の女房源の心しりなりそのもとへのやうにしなして中に朧への文あるなり

中なるに　朧への文なり

つれ〳〵と　秘是より文の詞なり

源朧へなり　こり須磨の浦のみるめもゆかしきをしほやくあまやいかゝおもはん　秘源の方より須磨に戀しきをそなたはいかにおほすにかとなり又は中納言のかたへの文なれは此人もいかにとなりいかさましほやく海士とはむかひをさしていへり　河「しら波は立さはくともこりすまの浦のみるめはからんとそ思ふ　秘には不引之箋聞同　聞書には引之　私云秘の義然へし下句の塩やく海士とは朧をさしていふへきにや　箋聞諸本　此歌に朱點あり是は夕顔須磨明石の卷なと青表紙の正本うせたる故にかやうの事あり又句にも惡數事等ありと云々

さま〳〵にかきつくし給ふ　箋聞　草子の地なり

大殿にも　秘致仕大臣なり　弄大殿聞云大臣なる人をも大殿と云る所あり如何一勘答云いつれにも通用したる詞なり大殿へもさま〳〵文ありとみるへし

宰相のめのとにも　夕霧のめのとなり　私大殿にも宰相のめのとにもとかけるは大殿へも文あり宰相の君のわたくしへも文あるなり

つかうまつるへきやう　夕霧へつかうまつるへき樣體仰つかはさるゝなり　箋聞源の京への文ともに朧月夜藤つほなとへの文のやうをはかきあらはして紫上への文のやうをかゝすさて末に京にて見給へる所を紫上はかりの事をかけりやうをかへて面白く尤妙にかける也此事を花鳥に不審をたてたりはしに在

京には此御文ところ〳〵にみ給ひつゝ　物語のおもてにかきあらはさぬ外に猶あまた忍ひつゝ文つかはし給ふ所おほかるへしとみるへし

二條院の君はそのまゝにおきもあかり給はす　紫上は源の出京の跡にそのまゝおきもあからす思ひしつみ給ふとなり

こしらへわひ　箋聞　詞也なくさめわひたるなり

心ほそく　さふらふ人々の又紫上さへいかゝおはせんと心ほそく思ひなけくよしなり

もてならし給ひし御てうと　是より紫の思ひなけき

給さまをいふ源の御てうとひき給ひし琴ぬきおき
給へる御そなとにつけておもひしつみ給ふと也
世になからん（なくなりたらんイ）人のやうに　箋聞源を世になく成たる
人の様に紫のなけき給ふなり死別は思ひ忘るゝ事
も次第にあるなり生別は又もよほさるゝ事のある
故に終に忘るゝ事のなきなり
かつはゆゝしくて　少納言か心なり　箋聞少納言の
心に紫上のかやうに思ひなけき給ふもたゝ事なら
すもし源の此まゝ須磨の浦にてはかなくなり給ふ
へき前表にてもやといま〱しく思ひて祈念なと
する也
少納言は僧都に御祈の事　弄北山の僧都の事也
ふたかたに　秘紫上の御心をなくさめんのれう又源
の帰京をいそくへき事なり
かつはかくおほしなけく御心しつめて思ひなき世に
箋聞二宮（色イ）に祈念するなり覚しなけくは紫の身の上
の祈也思ひなき世は源のうへをいふなり
いのり申給ふ　僧都の心中なり
たひの御とのゐ物　紫上より源へしらせらるゝ也
箋聞常のとのゐものは袖なとも長短の寸法有之女

のと男のとかはりめあるなり是は常の夜被にこし
らへたる成へし是旅のかはりめ成へし
かとりの御なほしさしぬき　河練直衣絹をかとりと
よみ絁をきぬとよむなり然はこれも平絹の直衣な
り白襲のかとりもうすき絹なり　弄平絹のなほし
也直衣指貫の地の事なり夏秋は直衣年齢によりて
うす色あさき也冬は白也さしぬきも年によりてあ
さきの浅深ある也一勘　秘平絹地今源無官なれは
なりさるさゐにさまかはりたるとはいへり　箋聞
平絹のなほしさしぬきなとのさまかはりたるにつ
けても物を思ふつまとなり
さらぬ鏡のとの給ひし　秘まへに有し源の歌の事也
私前に源の歌に身はかくてさすらへぬとも君かあ
たりさらぬ鏡のかけははなれしとありし事也此歌
は源の京出給はんとてのまへに帥宮三位中將なと
のおはせし時くらゐなき人はとてむもんのなほし
をたてまつりて御鬢なとつくろひ給ふとて鏡によ
りて詠し給ひし歌なり今又かとりの直衣指貫なと
をてうしてたてまつり給ふとてかのをりの事を一
入おほしいてたる心面白くみえたり此義如何

げに身にそひ給へるも　私是又おもしろくかけり源
のさらぬ鏡のかけははなれしと讀給ひし時鏡にか
けのとまる事はあらしとおほして別れてもかけた
にとまる物ならは鏡をみてもなくさめてましと返
歌によみ給し也されともその面かけは源の詠し給
ひしことく眞實身に立そひてはなれぬ也さてはあ
りなからそれにてもなくさまぬ心は紫の返歌によ
み給へることく也となり
いていり給しかたよりゐ給しまき柱　河「わきもこ
かきてはよりそふまき柱そもむつましやゆかりと
思へは　秘まへのもてならし給し御てうとゝも引
ならし給ひし御琴ぬきすて給へる御そとありし詞
にかけてみるなり　箋聞わきもこかきてはよりそ
ふ云々此引歌尤面白し又前のもてならし給へる御
てうとひきならし給へる御琴ぬきすて給へる御そ
とあるに此詞をつゝけたらは面白かるましき也詞
をへたてゝ出入給ひし方より居給し眞木柱とかき
たる一段語勢に成也又物にふれ折につけて覺しい
てたる心の深切なる程もあらはるゝなるへし
物をとかう思ひめくらし　箋聞此段は惣別の世上の

人の事をいふなり世中の習ひをしり功のいり齢の
たけたる人なとさへかなしき事はあえと也
世にしほしみ　秘紫上いまた世に物なれ給はぬ御よ
はひと也
ましてなれむつひ、是よりは紫上の心をいふいまた
さやうの事になれ給はぬ人なれはなき事のやうに
かなしくおほすもことわりとなり
ちゝはゝにもなりて　源は紫の父母のことくなりし
事なり
ひたすら世になく〳〵　秘死別よりも生別の悲は猶ふか
きよしなり　箋聞　死別已呑聲　生別常惻々
やう〳〵わすれくさも　河古「こふれともあふ夜の
なきは忘草夢ちにさへやおひしけるらん　私秘箋
聞に引歌なし　闕書此引歌在
きくほとはちかけれと　秘此攝津國すまといふは只
うち聞には程近き所なれと歸り給ふ期なきよし也
いつまてとかきりある　花「わかれてはいつあひみ
むと思ふらんかきりある世のいのちともなし伊勢
箋聞是は源氏勅勘して左遷たるは却て勅免のかき
りも有へきか是は心と隱居の義なれは結句いつと

も盡期なきよしなり
入道の宮にも　箋聞冷の御うしろみと源を思ひ給ふ故に藤つほのおほしなけく也
御すくせのほとをおほすには　箋聞源藤壺との密通の事也藤壺の心なり
とし比はたゝ物のきこえ　是より下の一段は入道宮と源氏との御なからひのことなり互に物のきこえをはゝかり給ひてめやすくもてかへし給へる事也　秘薄雲の御心中通也　箋聞源へは藤つほの御心のかつてかよはぬにてはなけれとも世をはゝかり給しとなり
なさけあるけしきみせは　是も藤つほの御心なりなさけ〳〵しくいひかはし給はゝそれにつけて源も忍ひあまるさまもみゆへし然らは世の人のとかめいつへけれはしゐておほしかへして源をあはれとおほすふしふしをもおほくみ過してしらぬさまにもてなし給へると也
かはかりにうき世の人と　弄源氏藤つほに密通の事をは世にいひ出る事なき也人言也秘同　箋聞世の人ことゝは口さかなき事なり太后のさはかり藤壺方の事源の事なとをは毛を吹て疵を求る時分なれは前にいへることく藤つほの堪忍の心つよくおはする故に人のしらぬなり
やみぬるはかりの人の御おもむけも　秘はかりのといふにてよみきるへし大やうにいひのこしたり其故は人の御おもむきもよしといへる也人のとは源也　弄いひ出る事なくてやみぬるはかりのとはなと云る心成へし大やうにいひ殘したり其故は人の御おもむけもと云る心也人の御おもむけとは源の心つかひをいへり　私云詞いさゝか前後したるやうにて心得にくき所也此前の段は藤つほのふかく堪忍し給しと也さてかはかりにうくつらき世の人の口さかなきなれといひいつる事なくてやみぬる程の源の御心もちゐもかつはめやすくもてかへしつるそかしといふ詞なりさてあなかちなりし心のひくかたにまかせすとは藤つほは女の身にしてゐて貞心をたてられたるか源は忍ひあまるをり〳〵の氣色はみえなからその心のひくかたにまかせすいひ出る人なくてやみぬるはかりの源の御おもむけは殊にすくれたる心もちゐかなと藤つほの心に

ほめおほす成へしもてかくしつるそかしといふまては源の心をいふなり　又私云此詞いまの心にてはむつかしく心得かたき也只かはかりうき世の人ことなれといひいつる人なくてやみぬるはかりの人の御おもむけもとつゝけてよみてあなかちなりし心のひくかた〳〵にまかせすかつはめやすくもてかくしつるそかしとみるへし我は勿論隨分堪忍せしか源もおもひあまるほとの度々の心のひくかたにまかせすおもひ返して人のいひ出る事なくてやみぬるは奇特の心のおもむけかなといへるなるへし義は同事なから詞を前後すれはむつかしきにや

戀しうもいかゝ　秘草子地にことわるなりかやうなる故に薄雲も源をあはれにおほすへきと也　かやうに源の謫居なとしておはする折ふしなれはさすか戀しくもおほしめすへしとなり

御かへりもすこしこまやかにて　箋聞下にふかく藤つほのおほす故なり

このころはいとゝ　歌へかゝれる詞なるへし

返藤壺 しほたるゝことをやくにて松しまにとしふるあまもなけきをそつむ　河「秋まての命もしらす春の野の萩のふるえをやくとやくかな　花鹽やくを役の字にとりなしたる詞也なけきはしほ木によそへたり鹽をやくを我身のやくによせたり

かんの君の御返には　朧月なり

返朧月夜 うらにたく海士たにつゝむ戀なれはくゆる煙にゆくかたそなき　花後撰「風をいたみくゆる煙の立出て猶こりすまのうらそかなしき　今案後撰の歌を本にしてよめる也　弄まして朧の思ひのゆくかたもなきとなり海人を源に比する歟也イ　秘鹽やくあまやいかゝ思はんとある返事なれはそなたは鹽やく煙にすイもまかへ給ふへきを我身のかたはさやうにまかへへきもなくくゆりわひたると也　箋聞すまの浦は思ひの煙もまかへつへき所なるにそれさへ鹽やくあまやいかゝ思はんと忍ふやうにの給に我はまかふへきかたもなくくゆりわひたると也　聞書海人を源に比したるよりも世間のつねの海人に見たるは返歌にはよく叶へる也と云々　私云海人は源に比すへき也如何

さらなることはえなん　秘これまて文の詞也　源の

諳居のあはれなる事をは中々今さらなるやうなれと申もいてぬといふ義歟

中納言君の中にあり　中納言君の返事の中に紫の文（朧イ）をまきそひ給也

おほしなけくさまなと　源の事を朧のおほしなけくさまを中納言君の文にねんころにいひ送るなり

あはれと思ひきこえ　源の心なり

うちなかれ給ぬ　源の朧の事を思ひやるなり

姫君の御文は　箋聞紫よりの返事也源よりこまやかなりしかは又紫上の返事にもあはれなる事おほきとなり源の文はみえす　弄二條の君へ文の詞本になし　秘心ことにこまかなる御返事なれはとあるにて源より文あるよしはみえたり事しけき故に此物語にのせたるなり

（紫上）うら人の鹽くむ袖にくらへ見よ浪路へたつるよるのころもを　弄よるの衣とよめる下の心にはとのゐ物なとをくたし給ふよせもあるべし　秘紫上ひとりねのさまなり又は只とのゐ物なとくたし給ふよせも下心にあるへし　箋聞鹽くむ袖よりも浪路へたつる衣は猶ぬれます也

物の色し給へるさま　花二條院（の君イ）よりすまへ源氏君の衣裳をしておくり給へるを物の色とはいへるなり　秘くたし給衣裳をいへり　聞書物の色し給へるさま也色あひとしさまとなり　私歌より此詞につゝかねはしほくむ袖にくらへみよといひかけたれはつゝけてかけり

何事もらう／＼しう　秘紫上をしかるへき人と源のおほすなり

いまはこと／＼に　秘今は心しつかにわくる心もなくして有へき物をと也

しめやかにて　箋聞紫はかりにて源の外へもかよはすしてあるへきものをと也

猶忍ひてや　秘紫上を忍ひてもむかへはやと覺すと也

又うちかへし　紫をむかへやせましとおほす御心をうちかへし／＼かゝる折にたに罪業をもかろめんとおほすなり

やかて御さうしんにて　聖廟宰府に御下向の後不斷御精進にて朝夕法花經を轉覽せしめたまひしと云云　叙意千言の中にも微々抛愛樂漸々謝葷膻なと

有又重陽の御作にも菊酒爲誰調長齋終不破云々
秘聖廟も御精進にてあるにと
大殿のわか君の御事なとあると　箋聞夕霧の御ゆの
との宰相君よりの返事に有へし大殿も文有へし夕
霧はよき御うしろみの有故に心安くおもひ給ふな
り
おのつからあひみん　秘つひにはあひ給ふへきと也
たのもしき人に　秘祖父母ましませはこゝろ安きと
也
このみちはまとはれぬにや　花子の道をこのみちと
書る也若君の事也　秘「人の親の心はやみにあら
ねとも子を思ふ道にまよひぬる哉と云にはかはれ
り夕霧の事よりは紫上の事心もとなしと也夕霧は
たのもしき人々もあまた侍る故也恩愛の中とは夫
婦の中一段大切なる事也　箋聞秘の義に同し　弄
人のおやの心はやみにの歌にはかはるにやと也
まことやさわかしかりしほとのまきれにもらしてけ
り　私夕霧のことならはまことやの詞あるへからす
この道のまとはれぬにやあらんさわかしかりしほ
とのまきれにもらしてけりとはかりあるへしまこ
とやといふ詞をくはへらる所は皆さきをいひ出す
詞也いつくも心をつくへし是は伊勢より御音信の
事をいひいたすなり　秘草子地也　聞書此詞は夕
霧の事をおそくいひたるをことわりたる詞也又伊
勢よりの御おとつれの事をといひ出す歟と云々
かの伊勢の宮へも御つかひありけるかれよりも　秘
六條御息所也
ふりはへ　秘わさと仰ある也　箋聞源よりも六條御
息所へ人を奉り伊勢よりもすまへ御使あるとなり
いたりふかう　箋聞文章何かのたらひたるなり手も
すくれてかき給へる人也　秘御息所をほめたるな
り
猶うつゝとは
あけぬ夜の心まとひ　花夢のやうなるといふ心也秘
同
さりとも年月は　秘やかて立歸給へきとなり
つみふかきみのみこそ　花齋宮にては佛經なとに手
をふれぬ事を罪ふかしとはいふなり　弄さま〳〵
のおもひなるへし神事に佛經にうとき故なりなと
いふ説あり不用之　秘我身の事也花鳥に齋宮にて

は佛經に手をふれぬを罪ふかしといふと云々只我身のよろつに思ひしつみたる心なるへし　聞書佛經をいむ事なり　箋聞御息所の齋宮にゐ給事也神事所に居給故に佛經をいむといふなり源の罪にあたりておはする人なれば面白きなり源はやかて歸京あるへき歟齋宮はいつともなき事なれは對面有へき事も程はるかなる事なりとなり
私此内あまたかきのする事所詮なしといへとも後後のためなり　箋聞の義用へきなり如何

六條御息所
うきめかる伊勢をのあまを思ひやれもしをたくてふすまの浦にて　秘すまの浦にて伊勢をのあまをもおほしやれとなり　箋聞此歌なとは風吟はゆかぬ歌也是は我身に源のうきめをみせられたるを今すまの浦にて思ひしり給へとちとにくきさましたる歌なりかやうの心はあしき也かやうの所か御息所の性なりよく／＼思ふへし

よろつにおもうたまへみたるゝ世のありさま　源よりもまさりて物を思ひみたるゝ御息所の心中の事歟　私箋聞に八宮を春宮にたてんと太后のくはたて給事なりとあり漢高祖の八人の子の事なとひかれたり是はよろつにおもふ給へみたるゝといふより源の返事の詞と三光院みあやまられたりとみゆ此次の伊勢島の歌源の返歌なりとあり仍此次に聞書を改へし此義箋聞末に又注して前にいへるはわろしと有可削也

猶いかになりはつへきにかと　秘是まて文の詞也
私是まて御息所の文の詞にて其次に伊勢しまの歌をかゝれたりと心うへし

又六御息所
いせしまやしほひのかたにあさりてもいふかひなきはわか身也けり　弄我身なりけりとよめるに源氏は定て歸洛し給ふ事も有へしといふ心あり　秘落句いひつめたる面白し源はかきり有て歸給へし我身ははてしもなきよし也　聞書あさるは求食也貝もなきとよせたる也

物をあはれと　秘うちおき／＼かき給へるおもしろきさま也　御息所の文のさまなり物をあはれに思ひつる體のこま／＼とかき給へるさまのしるくみゆる也墨つきなとにてみゆへしそれを見所ありと源の御覽するなり御息所は能書也

あはれに思ひきこえし人を　秘源の心中なり御息所

をあはれに思ふ也
一ふしうしと　花あふひのうへの事也秘同
かの息所も　源のうしとおほしつるを御息所も又思ひしりて伊勢へ下り給ひし也
いまにいとほしう　源故に世をうんしてかやうに成行給へる人なれは猶いとほしくは思ひしり給ふと也
折からの御ふみ　つれ〴〵なる御すまゐなとにいよいよみやす所の事をもおもひしり給ふ折ふしの御ふみに一段とあはれもそひたる也さて御使さへむつましくてねんころにし給ふとなり
かしこの物かたり　齋宮わたり又は伊勢國なとの事なるへし
わかやかにけしきある　秘御息所の御使なり　聞書けしきあるとは御息所の心ある人にておはする故に御使も然へきとなり
かくあはれなる御すまゐなれは　御息所の御使御前なとへめしいつるほとの人にはあらぬなり
涙おとしをりけり　御息所の御使也
ことの葉思ひやるへし　聞書草子の地なり

かくよをはなるへき　秘源の文の詞也かやうに有へき事とかねてよりしり侍らは齋宮へ御とも申て伊勢へ下るへき物をと也歌にも此心をよめり
つれ〳〵と（にイ）心ほそきまゝに　箋聞云是は文の詞にはあらす此浦の體をいへりときこえまし物をなといふまてを文の詞なりとあり　私云此義いさゝか不審也つれ〴〵と心ほそきまゝにおなしくは伊勢へ御跡をしたひ參らんする物をと思ふと也是までの詞にて然るへきなり
源 いせ人の波のうへこく小舟にもうきめはしらてのらましものを　河風俗に伊勢人「いせ人はあやしきものそなとゝいへは小舟にのりて波のうへこく　弄いせ人はあやしき物そ此歌をもてよみ給にや　或抄御說からまし物をとは同道すへき物をとなり
私云箋聞に齋宮の伊勢への御くたりにともなひ申たらはいかにうきめをかる所なりともわれはうきめをかるましき物をと御息所のおはしませはといふ義にや此義箋聞書の內私之由注之講釋の時思案をかきくはふる物ならし
又源 あまかつむなけきの中にしほたれていつまてすまの

うらになかめん　秘　我身もいつともしらさると也
箋聞　同し
きこえさせんことの　互に再會の期しかたき心也
つきせぬ心らし　秘　これまて文の詞なり
かやうにいつこにも　物語にかきあらはしたること
くいつくへも細々御たよりはあると也
花ちるさとも　これも京へ文とらつかはされし時源
よりも文あるへし
かなしとおほしけるまゝに　花散里のかなしさのと
とめかたくこまやかにかゝれたる文のさまなり
めなれぬ心ちして　箋聞かやうに程のへたゝりぬれ
ははしめて文かよはしなとしたるやうに一段とめ
つらしくおほすと也　私箋聞花散里はもて出ぬ本
性なりかやうにかなしくおほすまゝにかきつくし
給へるをめつらしくみ給ふはこれも私の義のよし
註し置し始の義然へき歟
花散里　あれまさる軒の忍ふをなかめつゝしけくも露のかゝ
る袖かな　秘　此歌の體又花散里の心みえたりうちむ
きて故郷の體をいへるあはれなり下句ふかく源を
思ふ心みえたり大かたの人は源の羇旅の御すまゐ
もいかゝなとあるへきをさも侍らぬさまたくひな
くみえたり　弄　此歌體又花散里の心みえたりすま
の事なとさま／＼有へきをたゝさしむきて故郷の
體也心中もまたあはれなり　箋聞別に義なし面白
き歌なりいつくにてもまつすくなる歌の體也心も
又同しかるへし　私云御息所の心ふかくかき給へ
る文又此花散里のうちむきたるなとさま／＼人の
性を思ふへし
けにむくらより外の　秘　さこそと源のおほすなり
箋聞花散里のたのむかたあるましきをおほしやる
なり　河　やへむくらして門させりてふの歌の心也
聞書同　私此義にをよふへからす
なか雨についちと所々　是も花散里の住給所の事也
ちかきくに／＼の　これは都へちかき國なるへし
もよほさせつかうまつるへき　花散里の住給方の修
理なとを京の家司に仰のほせらるゝなり
かんの君は人わらへに　秘　朧月夜も出仕をとゝめさ
せ給ふとみゆ　弄同　箋聞源のすまへうつろひの事
も朧月夜ゆゑなれは也　河　尚侍退出事　或記曰九
條殿六君尚侍綏子永延元年九月十六日任尚侍初參

春宮右寵長徳之間雖侍青園私與彈正大弼賴（定イ）之朝臣密（新イ）行後其事漸覺退出

おとゝいとかなしう　二條のおとゝなり朧月夜はおとゝの愛子なれはなり

せちに宮にも内にも　おとゝの懇切に弘徽殿へも朱雀院へも申なためて參內させらるゝなり

かきりある女御みやす所にもおはさす　秘女御更衣なとにてもなけれはなり　朧月夜をは參內させらるゝなり是も源をは申しつめて朧月夜をは申なほされたる事政のちかひたるなり又は朱雀の仁弱なる御心からなり

おほやけさまの　私女御更衣は御門の御寵を必かうふるへきの人なり尙侍以下は女官にてその職ある事なれは必しも寵をかうふる事有へからす仍大やけさまのみやつかへはかりをと申なほし給ふなり

又かのにくかりし故こそ　秘源故にこそと也　此段當代の政のみたりかはしきさまをかきあらはしたり

猶心にしみにしかたそ　秘源の事を朧は忘れ給はぬ也　箋聞尙侍のゆるされて參るから猶源の事をふかくあはれとおもふなり此朧月夜內へ參り給はぬさきに源へ逢そめ給し事なれはさのみのとかにはあらすと前の卷にもあり

いみしかりし御おもひの名殘　朧は別して朱雀の御寵愛ありし人なれはかやうの名なと立て又めしかへされたる時分なとはさやうにも有ましき事なれと又もとのことく寵愛あるのよし也人のそしりとは人の口には朧の事を色々にいひ又かやうにもとのことく御寵愛はあるましき事そなとゝいふなりそれをもみかとのえはゝかりあへ給はぬと也

うへにつとさふらはせ　みかとの御前さらす朧のさふらひ給ふ也

よろつにうらみ　源の事なとなるへし

御さまかたちも　朱雀の御さまかたちを朧のおもふなり

おもひ出る事のみ　秘源の御事を朧月夜は忘れ給はぬなり　箋聞朱雀の御さまの源よりはおとりたると朧の心中におもふを冥加なきことゝいふなり

御あそひのつゐてに　箋聞御遊也

その人のなきこそさう／＼しけれ　秘勅定也　秘箋

聞源の事を朱雀のおほし出ての給ふなり
さおもふ人おほからん　箋聞朧の心中を察しての給ふ御ねたみ心なり聞書同　又惣別の事にても有へし
ひかりさき心も　何事も興のなきよし也
院のおほしの給はせし　前の卷に院の御遺言ありし事也　秘先皇の御心にもたかふとなり
つみうらんかし　罪を得らんかしなり　先皇の御遺言をたかへられたれは御罪業ともならんとなり孝行にあらさる故也
なみたくませ給に　朱雀の御さま也
えねんし給はす　秘朧月夜なり　聞書同　箋聞朧の心也たへかたき體なるへし
世中こそあるにつけて　みかとの御詞也　箋聞みかとの御詞御年の行まゝに世のはかなき事を思ひ知たまふなり　聞書世中の御心に叶はぬよしなり
久しく世にあらん物と　萬事御心に叶はぬ世なれはあちきなく御命もなかかるましき由を仰らるゝ也
いかゝおほさるへき　朧に對してかこちなし給へるさまなり

ちかきほとのわかれに　私源の生別ほとにも朱雀の死別をは朧の思ひ給はしとなり　秘源のわかれにはおとるへきと也箋聞同
いける世にとは　河　拾遺「戀しなん後は何せんいけるよの爲こそ人はみまくほしけれ　引歌戀しなん後はなにせんとよめるはよからぬとの給へり朱雀のおほろ月夜に後の世もとこそ契るへけれとなり　秘戀しなん後は云々とは心あさくいひしと也　花よからぬ人とは中のよからぬ人の詞にいへる歌なり御門の我身によそへて内侍かみの君をうらみ給也　私云此詞花鳥の義わろし
よからぬ人の　さしもなき人のいひおきし事也後世かけてこそちきるへき物をとなり　花鳥によからぬとは中よからぬ人と云々如何
ほろ／＼とこほれいつれは　秘内侍のかみなり　弄朧の涙なり　朱雀のあはれふかく覺し入たるさまにてなにかとの給にもよほされたる涙なるへし
さりやいつれに　秘御かとの御詞也わか御ためか源のためかと也　花の義同し　箋聞朱雀の命なかゝるましきさまに仰らるゝにつけてのなみたかちか

き程のわかれとありし源故の涙なりと仰らるゝ也
源故の涙と御覽してかこちて仰らるゝ也
みこたちのなきこそ　弄朱雀院いまた御子なし　箋
聞朧に御子のなき事なり　是も勅定也此時まては
今上も御誕生なきと也朧の御腹に御子もなきと也
東宮を院のゝ給はせし　秘東宮冷を朱雀院の御猶子
にさせ給て位をゆつり給へと桐壺帝の御遺言あり
し事也
よからぬ事　秘此春宮冷を除て八宮をたて給ふへき
と也弘徽殿の造意也宇治にいたりてみえたり　私
勘漢高祖に八男ありその中に淮南厲王をは呂后の
母として養て後に謀反の心ありし人なり此八宮こ
れに准すへき歟已上秘　箋聞八宮事也詞伊勢御息
所の文によろつにおもふ給へみたるゝ世のありさ
まといふ所に此事を申されて其義わろしと申さる
る也　私抄云すてにかきのすといへともけつるへ
きのよし註し侍し
心くるしうなと　冷の事をおほす朱雀の御心なり
世を御心のほかにまつりこちなし給人の　朱雀の御
心のまゝならす世をしなし給也まつりこちなし給
人とは母后おほち大臣なとゝ急なる御心ともにま
まにし給ふを朱雀のわかく仁弱におはする心には
たかふことのおほき也
いとほしとおほしたる事も　御かとの御心にさはあ
るましき事とおほしなから任せ給さま也此冷をと
りかへんとし給事源の謫居の事なとも朱雀の御本
意にはあらす　私此一段は草子の評ともみるへき
也
すまにはいとゝ心つくしの　秘秋にもなるとなり
河古今「このまよりもりくる月の影みれは心つく
しの秋はきにけり　箋聞心つくしの秋諸本點にあり
但不及引歌　是よりかきいてたるすまの浦のあは
れ思ひやるへし
海はすこし遠けれ　秘前に海つらはやゝ入てあはれ
に心すこけなる山中なりとありさて海はすこし遠
しといふなり箋聞同
行平の中納言のせき吹こゆるといひけんうら波　河
與入云行平中納言歌可尋能宣朝臣歌相似云々　伊
旅人の袂涼しく成ぬらん關ふきこゆるすまの浦風
能宣　案之爾人釋有疑續古今集第十三　津の國す

まといふ所に侍ける時よみ侍ける中納言行平「旅人はたもと涼しく成ぬらし關吹こゆる須磨のうら風　拾天暦の御時の屏風歌　忠見「秋風の關吹こゆるたひ毎に聲うちそふるすまのうら波　續古今集に津の國すまと云所に住侍りける時よみ侍る中納言行平「旅人のたもと涼しく成にけり關吹こゆる須磨の浦風　今案關吹こゆるといふこと葉は忠見歌と行平歌とにあり然を奥入及伊行釋に能宣か歌といへりおほつかなし此物語の詞せきふきこゆるといひけん浦波といへるはたゝみか歌の心はなはたあひかなへり旅人のたもとすゝしくとよめる行平の歌あるによりて忠見か歌を思ひわすれて行平歌といへるにやと邪推をくはへて侍りかやうの事は漢家本朝いくらも有事なり更に記者の瑕瑾にあらさる事なり其仔細箱後に申侍るへし

弄花鳥にくはし　秘花鳥には忠見か秋風の關吹こゆるたひことにと詠したるを此浦波と云にかゝりて是を本として行平とあるをはあやまりたるとしるされ侍る也いかゝ今案行平は忠見よりは先輩なり然は此行平の歌より忠見か歌も出來ぬるとみえたり此段の心は彼行平の中納言の關吹こゆるといひけん所の浦波と云心也前には心つくしの秋風にと書てこゝにて浦波とかける餘情たくひなく見え侍り　箋聞　秘の義尤吉　聞行平の歌はかりを用へし　歌作者相違の事若菜下にひらの山さへゆふかつらせり是作者篁とあり實は文時云々此時花鳥に委細に注す

ひとりめをさまして　箋聞　源の御さま也

まくらをそはたてゝ　花遺愛寺鐘欹枕聽白樂天　箋聞遺愛寺の詩爰へはさのみあはねとも語勢おもしろし云々

まくらうくはかりに　河「獨ねの床にたまれる涙には石の枕もうきぬへらなり躬恒　花拾「なみた川水まされはや敷妙の枕のうきてとまらさるらん　秘弄引歌を註せす　箋聞同しく引歌にをよはす聞書には石の枕も云々此歌を引

琴をすこしかきならし　箋聞源は諸藝のうち別して琴の上手なり

源戀わひてなくねにまかふ浦波はおもふかたより風やふくらん　箋聞我思ふかたより吹風にたつ波なるへ

しわかれてねになくねにまかふはとなり
秘京極中納言の新古今集「袖にふけさそな旅(かりイ)ねの夢もみしおもふかたよりかよふうら風とよみ給ひしも此歌をおもへるなるへし
河「浪たゝはおきの玉もゝよりぬへし思ふ方より風もふかなん躬恒
私此歌を引に及はさる歟
人々おとろきて　琴をかきならし歌を詠し給ふ御こゑにあつまれる人々のおとろきたる也
めてたうおほゆるにしのばれて　源の詠歌の聲に人々感にたえ(へイ)すしておきゐるなり
あいなうおき居つゝ　秘あちきなきなるへし　弄同
箋聞人々のさまなり
はなをしのひやかにかみわたす　人々のなくさま也
けにいかにおもふらん　秘源の心也祗候の人々も我身一人のためにかやうのすまゐをもし侍るよとなり
わか身ひとつ(りイ)に　箋聞書源一人故と也
いとゝかくおもひしつむさまを　箋聞源の思ひしつみ給さまを人々のみては心ほそく彌おもふへしとおほして人々をなくさむるやうにたはふれとなとの給となり　私いとよく思ひせりのとは人々の思ひしつめたるさまをけにも心ほそく思ふらんとおほして人々をなくさむるやうにし給ふと思ふにや
ひるは何くれと　人々をなくさめんの心にてかやうにし給ふ也　私云いみしうてとは人々のうへをいみしくかなしく源のおほしてと也
手ならひをし給ひ　是手跡の事なるへし
さま〴〵の繪とも　秘此繪のちに繪合に出たり　箋聞繪合卷の序文也
屏風のおもてともなと　河屏風の表裏兩說ありと云云然て此物語には繪のかたを表に用たり　紅葉賀にも在(表イ)之　或說云宇多西宮兩說也宇多は蘇芳のかたを面に用西宮說には繪を面とす或屋の母屋の廂の屏風のしつらひも兩家各別也而此物語はむねと西宮の說を本とするによりて繪を面とする事有其謂と水原抄　私屏風の面の事諸抄に沙汰なし此義しゐて沙汰するに及はさる事也如何
人々のかたりきこえし　花若紫卷にある事也山寺はくらま寺をいふやうやうあかしのうらの事をいひ

つるなるへし同卷に人の國なとに侍る海山のありさまなとを御覽せさせて侍らはいかに御繪いみしくまさらせ給はんとあり此卷の次の詞に繪の事をかきつゝけたり首尾相應せる事なり　私云花鳥にはいつそや山寺にて人々のかたりきこえしとあり三本以下山寺にての字なし　秘若紫卷にいかに御ゑいみしくまさらせ給はんといひし事也　箋聞若紫にすまあかしのうらなとの事を申せし事也

けにおよはぬ磯のたゝすまひになく　秘若紫卷にいかに御ゑまさらせ給はんといへるをうけていへり源の繪に巧なるゆゑに及はぬ事なき也

此ころの上すにすめる千枝つねのり　河千枝　常則在高名錄　共以畫師也應和四年四月九日御記云召左衛門志飛鳥部常則圖畫西廂南壁　白澤王像常則名字天曆御記中名有之　秘千枝當則皆繪師也　箋聞此時分の繪所也　系圖尋へし日本のかやうの名人ともの傳をあつめたるを高名錄といふ

つくりゑつかうまつらせ　河作繪新儀樂記　つくりゑとは墨かきのうへを彩するをいふ也源氏のかゝれたる繪を後叢に色とらせはやと也　彩色は畫師の口傳ある也云々　弄源氏のすみかきを繪師に色とらせはやといふ說不可然只色とりたる繪なとをもかかせはやと云るなるへし　秘今源のかき給は皆墨繪なれは今別に彼繪師ともにいろとりの繪をかゝせてみせたてまつらはやと也河海說いかゝと云々箋聞おもしろき趣を作りいたしてかく事歟云々聞書作繪也此人々にもかゝせたき也　但源云何にてもかゝむと思ふ物をしるしはかりかきて繪の具にてかく樣ありこれをうはゑ共つくりゑとも云也

心もとなかり

なつかしうめてたき　源のめてたき御ありさまに朝夕なれつかうまつるをうれしくおもふと也四五人は惟光良清かの右近のせうなと其外都より御ともの人々也京にてはかほとまてしたしくはあるへからさる故なり

せんさいの花色々　箋聞前に色々水深うやり流しうへ木ともして時のまにおかしうしなしとあり

海みやらるゝらう　海見遣らるゝ廊也　箋あしふけるとありし廊なるへし

所からはまして　箋聞所に相應せぬ故にいよ〳〵此世のものならぬ也
しろきあやのなよゝかなるしをん色なと　河白綾の御衣に紫苑色の指貫也こまやかなる直衣とは色のこき也濃の字也紫苑色は面は薄紫うらもえき也
花河海に白き綾の御衣に紫苑色の指貫とのせられたりさも有ぬへし又しをん色もおなしくは御衣の色ともいはんに相違有へからすきぬとは色々をかさねてきる故也こまやかなる御直衣は夏の直衣地は平絹の無文にてもあれ色は紫花田年齢によりて用る也花田ならは色のこきをこまやかなると云へし弄花鳥に委しなよゝかなよらか同心也　秘花鳥說可然平絹にて色は年齢に隨て花田紫こきなるへし云々濃なるかこきなりかされのあるを云　私秘に三光自筆にて被書加也依今以朱註之
こまやかなる　秘色の濃きなり
しやかむにふつてしとなのりて　釋迦牟尼佛弟子某歸命頂禮白佛言夫菩提道樹之月影隱娑羅之愁雲尼連禪河之水音咽提之淚浪本朝文粹願文　ゆるしとは緩なりのとかなる心也管絃郢曲の拍子にも緩急火引と時なり　秘金剛佛子某なといふかことし弄同　箋聞やかて御精進にてとあり又一切衆生皆悉是吾弟子と法華經二卷譬喩品にもあり佛弟子は四部の弟子なれは俗も其内也四部の內の優婆塞なり　釋尊の遺法をうけつきてをこなへは釋迦牟尼佛弟子とはいふ
ゆるらかによみ給へる　箋聞これは經ときこゆ
おきより舟とものうたひの[illegible]しりて　船中にてのうたひなり棹歌なといへり詩にも輕舟短棹唱歌去なとともあり
ちいさき鳥のうかへるとも　秘舟をいへり　弄雁陣易迷秋嶺上鳧舟難(誰イ)辨夕陽陽中此詩の心にかなへり
河鳥船事　日本紀曰渡生神名鳥之石楠船神亦名謂天鳥船神次生鳥磐櫲船神　彥火々出見尊御歌　奉宿萬「おきつとりかもつくしまにわかいねしいもは忘れしよのこと〳〵におきつとりとは鷗の名也舟をは鷗に似せておきつ鳥とおほくよめり詩にも鳬舟と作れりかもつくしまとは舟つく島といふ心也　萬「おきつ鳥かもといふ舟かへりこはやかのさきもらはやくつけこそ
かりのつらねてなくこゑ　秘雁陣易迷秋嶺上鳧舟難

辨夕陽中此句に叶へり　私云此詩両事を二所にのする事いかゝなれとこゝにて此句を引たる猶まされるにや前のちひさき鳥とあるは扁舟なりかりのつらねては雁陣也

かちのおとに　花雁櫓といひて雁の聲をはから櫓おすにたとへたり梶のおとも同し事也　箋聞同

くろきの御すゝに　箋聞旄相なる念珠の體なり　玉のさうそくなとのすゝなきなるへし

人々の心　こゝにさふらふ人々なり

源はつかりは戀しき人のつらなれや旅の空とふ聲のかなしき　雁のこゑのかなしきは是も我戀しく思人の類也云々　又云「待人にあらぬ物からはつかりの今朝なく聲のめつらしき哉の心にても有へしかなしきとは聲を聞てかなしみをまし思ひをもよほす故郷の人に類するよし也空とふは空飛也弄同　箋聞旅の空とふ飛也古本多分字にてかけり間にまきるゝ故なり　我爲遷客汝來賓共是蕭々旅漂身欹枕思量歸去日我知何歲汝明春　聞雁菅家後集　私此詩引に及さるなり

良清かきつらねむかしのことそおもほゆる雁はその世のともならぬとも　聞書かきつらねはかきあつめなといふかことくかきつゝけなるへし旅の空にては友のやうに雁も思はるゝとなり　箋聞昔の友にてもなき雁の聲にさへ旅の空にてはあはれをもよほさるゝとなり

民部大輔　秘惟光也はしめて民部大輔とはみえたり

惟光心からとこ世をすてゝなく鴈を雲のよそにもおもひけるかな　弄旅雁の愁をいまは身にしる心也心からといふはかりのさま也身にかけてみるまてもなき也　秘我今旅の身にていふなり旅雁を年月は我心からなるとよそに思ひしも今は我身のうへなりけるよと也　箋聞雁の事か我身の上に成たるといふは故郷をはなれたる事なり　聞書今旅をしてからさては雁も何とそ故郷にゑゐぬ仔細のありてこそ毎年來るらめとおもひしるとなり　或抄御説に雁の常世をいてゝ旅にのみある事はわか心からにてこそあれ人はしらぬことゆゑなきわたるよとこの雁のうへをもとかしくおもひしに今わか身のうへになりたるよと合點してさても雲のよそに思ひつることかなとなり　花とこよとは仙境を云り春秋

のかはりもなきによりて常世とはいへり雁は北國の世はなれたる所にすむ鳥なれはかくよみならはし侍る也　私此外常世の事河にくはし略之

さきの右近のせう　秘かりの隨身にてありし人なり　箋聞さきの右近のせうとは殿上の御簡をけつられし故なり

前右近せう とこ世いてゝ旅の空なるかりかねもつらにおくれぬ程そなくさむ　箋聞源のかくておはしますになくさむなりつらにおくれすしてきたる雁にたとへたるなり　聞書源又は傍輩ともの事なるべし

友まとはしていかに　花友をうしなふ心なり歌の詞なるへし可考之　弄かりのつらなれるか友をまとはしてはいかならんといふなりわが身の友をまとはしたる心よりいへるなり　秘友をうしなひてはいかならんいつくまても御供申さんとなり　箋聞是も傍輩の事なるへし　私云弄の義は父の常陸にくたりしにもさそはれすして参りたるといふ心ありされと末の詞に親類兄弟をすてゝ参れるをも思ひいれぬさまなるとみえたれは秘の義然へし

おやのひたちになりて　箋聞伊豫守か事なり　秘　源によくあひ隨たてまつる人なり　弄右近のせうか父の事なり紀伊守か弟なり　私せきやの巻の詞に伊豫介といひしは故院かくれさせ給ひて又のとしたひちに成てくたりしとあり桐壺御門崩御の次の年常陸介に任せしなり

さそはれて　箋聞如此て文字の濁を此巻におほくかけり　此右近のせう親類兄弟をはなれて参れる源への忠節の人なり其おもむき末の巻にみえたり

したにはおもひくたくへかめれとほこりかにもてなしてつれなきさまにしありく　右近の丞か親類をすてゝ参りたること下には一段迷惑なるへけれとうへには殊更におもひなけかぬよしにしありくとなり花鳥にはつれなきさましありくとありて註に我と心をなくさむるを思ひさますといふ也云々此詞異本の義也

日のいとはなやかに　私定家「卿いつはとはわかぬときはの仙人も空におとろく月のかけかなとよめる如く名月を空にあらはしたるほとの月なるへし

こよひは十五夜なりけり　私都にてならは八月十五夜をもかねて待まうけ給ふやうなるへし詩歌管絃

の御遊なとのもよほしかねて有へけれはなりこのす磨の浦にてはさやけき月を御覽して十五夜そと覺しいてたるさまをあはれにみるへし　箋聞此巻をはしめて石山にてかきたる其夜八月十五夜にあたりてかくかけりと云々此説不可用又高明公の事をかなしみてかけるとありこれも不審あり是は菅丞相の宰府にて九月九日に恩賜の御衣は今こゝにありと作給へるを八月十五夜にかへてかけりかやうの何事そありし折々又思ひいつる事のそふ物なりおもしろし

殿上の御あそひ戀しく　内裏の御遊なり

月のかほのみまもられ給ふ　河月影似鏡無明罪　風氣如刀不伐愁後集　私たゝあちきなく物をおほしつゝけて月にむかひ給へるさまなるへし

二千里外故人心と　河三五夜中新月色二千里外故人心樂天八月十五夜　此詩は白樂天八月十五夜禁中に直居して對月元稹によする四韻の一句也今度殿上の昔遊を思ひいてゝ此句を誦せられける尤有幽致乎　秘三五夜中云々と樂天か作しは禁中にての詩なり只今誦し出し給へる殊勝のよし河海にみえたり　箋聞弄同

入道宮のきりやへたつる　藤つほなり　花榊の巻にある歌の詞也　秘同弄同

いはんかたなく戀しうをり／＼の事　是は藤つほの御うへはかりの事也をり／＼は又惣別の事也

よゝとなかれ　花あけまきの巻にもしやくりもよよとなくといふ詞あり　箋聞是はつとむせかへりたる體也　聞書よゝとは聲にいてゝなく歟

入給はす　弄源氏の月を見給ふを入給へといふへきにあらす物思ひ入給へるをなくさめ奉る也　秘人人の申也あまりに物思ひのあるさまなるをなくさめたてまつるなり　箋聞入給はすとは源の寢給はぬ也

源みるほとそしはしなくさむめくりあはん月の宮所ははるかなれとも　秘月をみる程そ也旅懐をなくさむる心也都の事を月宮によせてよめり　箋聞みる程ならてはなくさむかたもなしなせになれは月とともに都へかへらんとおもふ故なりされとも猶はるかなる事なれは光みるほとなくさむとなり

その夜うへの　榊巻に霧やへたつると藤づほの歌よ

み給ひし時の事也　箋聞去年八月十五夜也うへは
朱雀の御事也
むかし物かたり　榊卷をみるへし
院にゝたてまつり
朱雀の桐壺に似給へしなり
おんしのきよいは　河去年今夜侍清涼秋思憶イ詩篇獨斷腸恩賜御衣今在此捧持毎日拜餘香後集　私云是は聖廟宰府にて去年內裏にて九月九日の宴に秀逸の詩を作り給て勅祿に御衣を給はりしを隨身して下り給ておもひいてゝ作り給へる詩也源氏も其ことく御衣を給り給ひし事あるへしそれをおほし出たるなりおもしろくかきなしたり
御ぞはまことに　花朱雀のみかとの源に御そ給へる事はいせんはみえたる事なけれと此物語のならひとしてさきにはまたいはぬ事をもふと事の次に有たるイやうにいひいたすなり　弄いつ給はり給ふともなし朱雀よりたまひしとみえたり　秘源に御衣を給はる事あるへし此物語の例ふとしたるやうにかきわたしてやかて實事になる類あまたあり　箋聞去年八月十五夜に拜領歟聖廟も讒言ゆへとおもひ給ふ故延喜帝へうらみはなかりしなり今又源も太后故なれは朱雀をはなつかしく思ひ出奉り給ふ也
聞書捧持毎日拜餘香といふ心なり
源うしとのみひとへに物はおもほえてひたりみきりににもイぬるゝ袖かな　おもほえて我身かやうの身に成ても上へはうらみなきなりされとも又時としてはうらめしき事もあるなりさて左右とはいへり　弄左右とはうしと一偏に思ふはかりにあらて御衣を身にそへてなつかしく戀しき心もありとなり　聞書に朱雀院の御事をさまぐ\におもふ也　箋聞に左右とは御衣のかたしけなきにもよほす感涙にかたかたは身上のなけきと也　おもほえて清濁兩義也　秘濁よし朱雀の御事偏にうきはかりにてはなきなり
其比大貳はのほりける　私職原抄云　太宰府帶　筑前國　當唐大都督府　聖武天皇天平十五年始置筑紫鎭西府先是有太宰府號云々天平寶字二年勅諸國司以四ケ年爲任限寶龜十一年勅太宰府任限爲五ケ年云々凡當府都督九國二島別帶筑前也　帥唐名都督相當從三位　勅任六官也多是以有品親王任之親王任之者權

帥若大貳知府務而已也　權帥　納言以上若前官任之中古以來例於正帥者擬親王官承府務人任權也或又任正依時宜歟爲大臣之人左遷謫イ之時任權帥然而不可知府務也凡於帥者令條所定已爲高官仍重其仁非華族又任之　大貳无權官相當從四位下唐名都督大卿　近代例多以參議散二三位等任之非參議四位又有其例有權帥者不任大貳任大貳者不任權帥雖無其謂已爲流例矣是以名家人任之以下略之　五節か父なり花散里卷に五節君に源氏あひ給ふ事みえたり父の任はてゝ上洛する也

るゐひろくむすめかちにて　類廣　私五節君の女兄弟あまた有へし

北のかたは舟にて　箋聞大貳の妻也　秘くかを行なり　私女ともおほく舟にてのほるなるへし

うらつたひせうえうしつゝくるに　箋聞逍遙しつゝ來る也

ほかよりもおもしろき　箋聞すまのわたりの事也ここにても逍遙なとせんと思ふに源のかくておはすれは只過るなり

あいなくすいたるわかきむすめ　大貳の女とも五節君の兄弟なるへし

舟のうちさへはつかしく　箋聞船中からさへ源氏をおもひやりてはつかしく心けさうするとなり

五せちの君はつなて引過るも　箋聞源の逢給し人なれは立よりたくも思ふなるへし

きんのこゑ風につきて　此折節源の琴を彈せしなるへし

所のさま人の御ほと　所はすまの浦也おはするは源なりすくれたる上手にて琴を彈し給へる折からおもひやるへし

そち御せうそこきこえたり　大貳の源へ音信申たる也　秘大貳なれともこゝには帥とかけり帥は親王の任する官也權帥をおきて吏務をも沙汰させ侍り親王は吏務をすましき故也權帥のなきときは大貳必吏務をつかさとるなり　弄大貳を帥といへるは帥のなき時は大貳か帥の事をとりをこなふ故也云云箒木卷に伊與介と有所に花鳥にみえたり　私云帥のなき時大貳帥の事をおこなふとはいさゝか心かはれり權帥を任すれは大貳を任せす大貳を任すれは權帥を任せすとありされは權帥にても大貳に

てもなるへき人あるかたを一人任せらるゝなり權帥は大納言の兼官也大貳は四位以上非參議の三位參議なとも成へし其人かはるへし　文武天皇大寶二年八月十六日以大納言正二位石上麿（式部物部府男　宇麻男イ）兼任太宰帥是始也さきには大貳といひいまは帥といへり如何正帥は擬親王官仍承府務之人任權但有權帥者不任大貳任大貳者不任權帥流例也今大貳知府務之故擬以云帥歟

いとはるかなる程より　祕是より詞也帥は一任五ヶ年なり　私云又遠路の事にても有へし

都の御物かたり　箋聞都の事を聞ゆへきにはあらす都にて國の物かたりをも源へ申入んと思ひたれは此御すまゐを思ひの外の事と申也

かたしけなくかなしうも　想入たるよし也

あひしりて侍る人々　祕今は人しけき故になか〳〵參りてもいかゝとなり

これかれまてきむかひ　都より人々まうて來りむかひたると也前にゐいひろくといへるにかなへり

ことさらに參り侍らん　只今え參らぬおこたりをことさらわさと參らんとなり　祕わさとかならす參へきと也　箋聞大貳其外任國におもむきたる輩いつれも歸京しては任府を返上する事あり是おほやけ事なるによりて只今はいそく心もありわさとかさねて參らんと也

このちくせんのかみそ　大貳の子なり　筑前守治部（權都イ）督所帶守以下官如例　榮花物語帥殿つくしにおはしつきたるにそのをりの大貳有國なりかくときゝて御まうけいみしうつかうまつりわか子の廣業してきこゆる京の事おほつかなうおとろきなから參るへく侍るに九國の守にてさすかに思ひのまゝにまいらぬよし申させたり

この殿のくら人になし　此筑前守は源の御かへりみにて藏人にもなりし人となり

いともかなしと　筑前守心

きこえをおもひて　箋聞京へのきこえ也　祕此筑前守は源の御恩をふかくかうふりし人也藏人にも源のなし給ふ也されと當座の事なるゆへにはゝかりありてとゝまらさるなり君臣の道をおもへり凡此卷君臣朋友の道をよくかきあらはせり源は謫居の身なれとも恩賜の御衣を携て君恩を忘れ給はす又

三位中將は朋友に信ありてすまに參り給されと物ひきこえをはゝかりていそきかへり給ふこれ君臣の道なり弄同

都はなれてのち　秘　源の詞なり

あひみる事かたく　昔したしうつかうまつりし人の尋ねまいるもかたきに筑前守の只今の參上をうれしくおほすなり

御かへりもさやうになむ　秘　大貳御方へ御かへりもなり大貳への返事も筑前守に仰られたると同し樣にいふ也

かみなく／＼かへり　筑前守か體也

おはする御ありさま　源の旅館のさまを大貳なとにかたる也

むかへの人々まが／＼しう　弄　今の世にもいま／＼しき事をまか／＼しきといへり枉々也　一勘　秘　枉々なりいま／＼しきといふかことし

五せちはとかくして　秘　源へ音信申也　聞書とかくしては大貳の音信申たる跡にていふ也又忍ひたる體也　私忍ひてとさまかうさまにわりなくかまへて文まいらせたるなるへし

五節　ことのねにひきとめられてつなてなはたゆたふ心君しるらめや　秘　源の琴の音をいへり　箋聞たゆたふは猶豫なり行もやられぬ心なりゆたのたゆた同し心なり　聞書たゆたふはやすらふ心也　或抄御說たゆたふは猶豫也何とせうかかとせうかと思ひわつらふ心也

すき／＼しさも人なとかめそと　こなたより申はさし過たるやうなるをゆるして御覽せられよとなり

人なとかめそとは　河古今「いく（てイ）われを人なとかめそおほ舟のゆたのたゆたに物思ふ頃そといふ歌の心なり　私云只今船中から奉る歌也又五節の歌にもたゆたふ心なとよめる（れイ）はそのたよりあり

ほゝゑみて見給いとはつかしけ也　是は五節の文を御らんするとて源のほゝえみて御らんするをさし過たる事なとゝやおほすらんと御心のうちをはつかしと御前の人のおもふ心なり

返源　こゝろありてひくてのつなのたゆたはゝ打すきましやすまの浦なみ　弄　心ありては五節の心を云也　秘　心あらはとまり給へかしと也　箋聞打過まじやなりうち過まじき事なりとなといふなり　聞書うち

過まじやうち過まじやは也　私ましのし文字清濁いつれにても然へし但諸抄に濁聲の沙汰なしたゝ清て心得やすき也如何

いさりせんとは　河古「思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは　篁　弄篁か思ひきやの歌の心なり秘同

おもはさりしはや　箋聞はやはものをといふやうなる心也　私はやは者乎　者也　者哉　此内歟　弄おもはさりしはや　私かやうに濁聲をさせり如何

むまやのおさにくしとらする人もありけるをましておちとまりぬへくなんおほえける（しイ）　河大鏡第二菅丞相おもひのほかにつくしへくたり給けるとき播磨のあかしのむまやにとゝまり侍けるにむまやのをさいみしくおもへるけしき御らんしてつくり給へる　驛長莫驚時變改一榮一落是春秋　くしとは口詩也物にも書つけすして口にいふ詩也　白氏文集口號絶句云々遊大林寺序たとへは口つうたなといいふか如し日本紀には口號とかきて口つうたとよめり口宣なといふも同心也或云句詩四句絶句にはあらて一句の詩也又云別の櫛をとらせたると云々或又くしとらするはくしせらるゝを書誤也駈仕とはかりつかはるゝ心なりともいへりいつれも今案のあやまりなり　花菅丞相は物もしらぬむまやのをさに對してたにも口つうたを作り給へりいはんや五節君はなさけある人なれはなほさりにの給はかりの事も後まておちとまり侍るへくおほえ給ふと也　故事をもてかけり此物語の面は五節のつれたる人々源氏の御方に候人々なと物いひなこりをしみなとするをいへり志のゆく所なれは口詩にたとへたるなり花鳥の義別なり　同ましておちとまりぬへく人々の物いひかはしなとするを聞て五節はまして源氏の前（所イ）におちとまりてもありたくおもふとなり　花鳥義異（箋弄イ）　秘聖廟の御句河海にみえたり心は此詩を聖廟は心なき者に仰かけ給したにも末代に殘れり此歌はまして五節君につかはし給事後代まてものこるへきとなり　又の義は今此御消息を申かよはす計をも名殘あるやうに思侍へしこゝにおちとまりてもありたくも思へきと也此説可然也　箋聞こゝろなき驛長さへ聖廟の御事をかなしみ思ひたるを御覧して句詩を給へり只今源の歌よ

みかはし給ふ五節君は一たひ御覽せし人なれは此まゝこゝにありかたく思ふとなり此外の說用ふへからす　聞書　口傳　句詩侍よし　箋聞に同し
みやこには月日過るまゝに　源の都におはせぬをみかとよりはしめておほし出る折々おほきなり
春宮まして　冷は別して源の御うしろみなる故なり
命婦の君は　秘王命婦也
入道宮は春宮の御事をゆゝしう　箋聞藤壺の御心に冷は源と忍ひたる事のあるをいかゝとあやふくおほせしに源のかやうにおはすれはされはよとおはして冷もいかゝおはせんすらんと恐怖ある也
御はらからのみこ　秘源の兄弟なり
あはれなる文をつくりかはし　箋聞作也都のしたしき人々に互に詩なとつくりかはし給へるなりその中にすくれたる詩なとを源の作り給へるかきこえたるなりこれにつけても太后のはらたち給ふなり東坡なともかやうの事あり云々
きさいのみや　秘弘徽殿也
おほやけのかうしなる人　秘勘事なり　勅勘をいへり　箋聞はぬる字をうの假名をつけていふ事おほし　河考辭日本紀勘事勘當の事也
この世のあちはひをたに
おもしろき家居して　箋聞源のすまの旅居の體を所所面白く作りなして所かはる心をのへておはするとあしさまにいひなす也
しかを馬といひけん人の　河史記曰趙高欲レ爲レ亂恐ニ群臣不レ聽乃先設レ驗持レ鹿献於ニ二世一曰馬也二世笑曰丞相誤耶謂レ鹿爲レ馬問ニ左右一左右以默或言レ馬以阿ニ順趙高一或言鹿者高因陰ニ中諸言レ鹿者一以レ法秦始皇本紀　弄趙高が事見河　趙高か亂を起むとせしを源氏の當今にうしろめたき心あるにたくへて源氏に心をかよはす人々を彼群臣の高に順して馬といひしによそへて今弘后のの給也　秘趙高か事河海にみえたり　箋聞趙高かことく源も謀反の心あるに人々のとふらひなとするは高に阿順せし人のことしと也それを追從するといふ也弘后の腹立也
二條院の姫君　紫也
東のたいに　秘はしめ源の御かたにさふらふ人々なり
はしめはなとかさしもあらん　箋聞源の官女のわた

り參りし始めは紫のさやうにすくれたる事も別にあるましきと思ひしに思ひやりふかくよろつ御心もちのよき人なる故に人々のおもひつきてそのまゝさふらふ也　人をあはれふ心のふかき人といふなり

なへてならぬきはの　秘おくふかなるさまなり　箋聞此中にちとさもとある人々には時々はみえなともし給ふ也

そこらの中に　秘源の紫をたくひなくし給ふもことわりと也

みたてまつる　源の官女たちの心なり

かの御すまには　秘すまをいへり

えねんしすくすましう　紫をむかへすしては堪忍しかたく源のおほすなり

我身たにあさましきすくせ　源の御事は力なしかゝるすまゐに紫までをよひすゑ奉らんはいかゝとなり

めさましうかたしけなう　秘此いやしきありさまをまちてかくみ給につけて源の我御身なからかたしけなくおほすなり　聞書心なき下人なとは何とも思ひしらぬ故にこなたから思ひしる義なり

しはといふ物ふすふるなりけり　けふりのちかくたつを鹽やくかとおほしたれは眞柴のけふりとなり

こゝは山中なる故なり

源山かつのいほりにたけるしは〳〵もこと〳〵ひこなんこふる里人　さひたる歌心はしは〳〵もこと〳〵ひこなんといはんための序歌也　箋聞しは〳〵柴をとりていへり是妙なり歌は義なし　聞書慶也柴をかゐるなり里人は故鄕人也

冬になりて雪ふり　箋聞云此すまの浦の體四季を次第にかくは物思ひのある人はその物に折々にひかれてあはれのある物なりされはそれをいひたてんと也幻の卷も十二月を次第にかけりそれも紫上のなくなり給ひし翌年をり〳〵につけたるあはれをかきのへたる也

よしきよにうたうたはせ　河悯然不能眠紛々專夜雪　遙知碧鮮所　家僕早逃散千萬言無郊連濡亦鳴咽近着白屋裡淩寒誰掃撤菅家　良淸唄歌也

たいふよこ笛　秘民部大輔惟光也　つねの笛なり

心とゝめて　源の琴におもしろきねをひき給ふなり

ことものゝこゑともは　秘源の琴の音に感したるなり

むかし胡のくにゝつかはしたりけん女を　弄王昭君花王昭君胡の國へゆきけんと有河内方の詞なるへし　王昭君か胡國の王に嫁せし事はなにゝもある事なれは事あたらしくしるすに及はすこゝにはわかおもふへき人なとをかやうの遠國へやりたらはいかはかりの事をか思はんとつれ〳〵のあまりにいまはなき事なれと京に思ひ給ふかた〳〵のあるにつきてむかしの事を思ひなすらへまつるなり

秘源の心也明妃は胡國へ獨ゆき侍り我は都に女をもすておき侍るよとの心なり　箋聞このくにとよむ也王昭君か事也紫の事に思ひなすらふる也琵琶を胡の琴とはいふなり琴よりおもひ出ひたる也

あらんことのやうに　さやうならはいかならんとおもふさへ有へき事のやうにいま〳〵しくおほえ給と也

霜の後の夢とすんし給　河胡角一聲霜後夢漢宮萬里月前腸王昭君朝綱伊行釋には血の涙と誦したまふとかきて卞和玉也と釋せり僻事前なりにも胡のくにゝつかはしけん女をおほしやりてとあり王昭君事也　秘胡角一聲云々　弄同　箋聞胡角は胡國の樂器也角笳の音なり　或抄胡角一聲霜後夢漢宮萬里月前腸昭君若贈黄金賂定是終身奉帝王王昭君　朝綱作

月いとあかう　聞書月前腸をいふ也

おくまてくまなし　箋聞旅の御すまゐおくふかゝらぬ體なり

ゆかのうへに夜ふかき空もみゆ　秘軒のみしかきさま面白し故宮の詩に終夜床底見青天といへるにも心かよへるにや

たゝこれ西に行なりと　河幾行南去鴈一片西傾月伊行釋　奥入云未勘云々　今案釋共以不分明　莫發桂芳半且圓三千世界一周天　天廻玄鑒雲將霽唯是西行不左遷菅家代月答　弄天廻玄云々　菅月のゆくさま也一勘　月は西へ行て東へは不行也左は東にとる也　秘天廻云々月の行様也　聞書左をは東にとる也玄鑒とは萬物をみしる也　箋聞日月は西へ行也是右にめぐる也不左遷とは菅家の天道の右へ廻る事をうらやむ也左遷は都へかへす心有　私劉元市

か詩あり題世事　世事不齊君莫嘆試看日月在青天一般造化却相背日月右旋天左旋　日月は右にめくり天は左へめくる也造化さへこゝろちかひなる程に世事の相違するは恨もない事と也是も日月の西へ行を右に旋といふたそ

源 いつかたの雲路に我もまとひなん月のみるらんこともはつかし　秘われは左遷したる也　或抄月は雲路を行ものなれは物かなしき時われもまとひなんといへるにや月はまとはぬ物なれと我はなといはゝ歌さまよろしかるへし只きふくいはて見たる優に候はん哉祇注々々　私此義如何

れいのまとろまれぬ　いつもね覺のさまみえたり

又源 友千鳥もろ聲になく曉はひとり旅ねの床もたのもし

弄たのもしとは源氏も又都の人にともなふ事もやとなり　秘落句おもしろしたのもしとは我も都の人にともなふ事時あらては有へき歟となり　箋聞友千鳥はさつと飛ちりても又やかて群をなすものなりそれを身の上に思ひくらへて我も又群をなす友千鳥のことくやと思ふ心也

又おきたる人もなけれは　人々はねたる也さひしきさま也

めつらしき事のやうにめてたくのみ　箋聞希有なる心也よき事にてはなし

家にあからさまにも　秘こゝに祇候する人ともの事也須磨にての私のやとりへの事なり　弄同　私源のこゝにての御さま何事につけても御心くるしくのみあれはかりそめに家に歸る事もなしとなり

あかしのうらはたゝはひわたる　花日本紀に八またの大蛇の事をいふに八のおか八の谷にはひわたるとかけり蔓延の二字をはひわたるとよめりかつらなとのはひわたるも同事なり心はあかしの浦はすまよりみわたしなるよしなり　聞書たゝ程ちかきといふ事也

よし清の朝臣かの入道のむすめを　明石入道女也明石上の事なり若紫巻にも良清の此女の事をかたり申事あり良清の父前播磨守にてよくしれる也

ふみなとやりけれと　秘つれ〳〵なるまゝに文をやるなり連々かよはすなり

かへり事もせす　秘女の返事はなくて父のかたよりかやうにいふなり　箋聞入道の心思ひあかりたる

故也
ちゝの入道そ　入道の良清にあひていひたき事のあ
りといひをこすなり　きこゆへき事なんあからさ
まにかやうに句をきりてよむへし　異本にはきこ
ゆへき事なむあるとありわろし　聞書夢の告なと
の事をかたるへきためなり
うけひかさらん　私むすめの事をいひかゝりてせう
いんせすはうしろてもいかにとなり　箋聞同　こ
れより良清の心也
心たかうおもへるそ　是より入道の心さまをいふな
り
國のうちはかみのゆかりをのみ　私國は皆當時の守
にこそしたかふなるを此入道のひかめる心には何
とも思はさるなり　私當時の國の守は良清の父に
はあらさるなり前播磨守とあり此さきの守なるへ
し其時より良清のいひよりしにも承引せさりしな
るへし
この君かくておはすと　源のすまにおはする事なり
　秘入道の北方にかたらふなり
はゝ君にかたらふ　明石上の母入道の北方なり

きりつほの更衣の御はらの　私是より北方にかたら
　ふ詞なるへし　箋聞是は源へ入道の娘を奉らんとい
　いふ談合なり是は漢高祖へ呂公の女を奉らんとい
　ひし事に叶へり
あこの御すくせ　河吾子御宿世なり　秘入道のむす
　めの事をいふ也弄同
母あなかたはや　明石上の母の詞也かつて思ひかけ
　ぬさまにいふなり
やんことなき御女　源のかよひ給おほんかた〳〵お
　ほしと也
みかとの御めをさへ　箋聞朧月夜の事なり　聞書同
　河みめとよむへし是師説也日本紀には妃字をみめ
　とよめり白氏文集にも八十一女御つまとあり但さ
　きのやんことなき御めともいとおほくとあるをは
　おほんめとよむへきなり是は人臣の故也
かくもさわかれ給　かやうにすまの浦におはするも
　さやうの事ゆへそとなり
かくあやしき山賤を　河史記高祖本記曰呂公曰臣有息女願
　爲季箕帚妾酒罷(怒イ)呂媼怒呂公曰始常欲奇此女與貴人
　沛令善公求之不與何自妄許與對季呂公曰此非兒女

子所知也卒與劉季呂公女乃呂后也生孝惠魯元公主
はらたちて　秘入道の腹立するなり
えしり給はしおもふ心こそことなり　秘夢のつけあ
る故　弄聞書同　箋聞高祖を聟にとる時兒女子の
しる所にあらすといふに叶へる詞也
さる心をし給へ　内々さやうの用意をせよなといふ
かたくなしくみゆ　入道の體也
しつらひかしつきけり　内々用意せよと北方にいひ
て又はしつらひに心をいれむすめをもてかしつく
となり
なとかめてたくとも　是より母君のいふ詞なり　箋
聞源のつみにあたりておはするを聟にとらんは母
君のいまいましく思ふなりさやうなりともせめて
源の心をもとゝめ給はゝかひもあらんかもし御
疎遠ならは後悔なるへしとなり母君のいふ詞な
り
つふやく　秘入道のつふやくなり
もろこしにもわかみかとにも　弄和漢無罪なとの左
遷の例をいふへし　花伊勢物語にわかみかと六十
餘國の中とおり我國をいふ詞也　河序歷覽古今歌
詩自（詩イ）風騷之後蘇李以還次及鮑謝徒迄于李杜輩其國
詞人聞知者累百詩章流轉者鉅萬觀其所自多因讒冤
遂征戎行旅凍餒老病存沒別離情發於中形文於外故
憤憂怨傷之作通計（今イ）僉云古什八九焉世所謂文士多數
歌詩人尤命薄於斯見矣（白氏文集序洛部）漢家本朝其例多也
野相公任納言菅家西宮左府帥内大臣以下拔群賢才
無罪赴配所之人不可勝計
いかに物し給ふ君そ　秘北方の事也　私追勘云此君
の字源にみるへきなりしからはいかにものし給ふ
とよみきりて君とよむへし　弄明石の尼公の源氏
へ女まゐらせん事を庶幾せぬをとかめたる詞なり
君そとは尼公をいふなり秘同　私尼公は何事をの
給そなとはらたちいふ詞なり　又私ものし給君そ
とは源をさしていふ詞なり此源氏君はいかなる君
とおほすそ御母更衣は入道か叔父の按察大納言女
にて由緒もある事そなといひきかすそ義なり　此
義僻案の新説なり追て決すへし
おのおをぢに物し給ひし　秘桐壺更衣と明石入道と
いとこなり　桐壺の更衣の源氏の君のやうなる
すくれたる御子をうみおきたまへるさいはひを引

事にいふなり母君に領解させんためなり

┌大臣――――入道播磨守明石の入道也明石上
└按察大納言――――桐壺更衣　源氏の御母

弄桐壺更衣の父は明石入道のをち也大臣の弟なり女のさいはひあり後まて光ありし例をひくなり

いとかうさらなる　秘よき心なり　桐壺更衣の事

こくわうすくれて　聞書入道の詞に似合たるなり桐みかとの御事なり

この君とまり給へる　更衣はうせ給へれと源氏君かくておはすれは猶光ありといひきかするなり

女は心多く（たかくイ）誠に女は男よりもさいはひにひかれてなりあかる事おほきものなり

ゐなか人なりとておほしすてし　秘源のおほしすてましきとなり　秘源の遠き御ゆかりなるをおもひていふなり

このむすめすくれたるかたちならねと　箋聞こゝにてはあしきやうにかきたれとさまかたちよかりしなり明石上の事なり

身のありさまをくちをしき物に　秘明石上の心なり弄箋聞同

くちをしき物に　我身のなりくたりたるをいふなり生得の族姓いやしからぬ故に猶かくおもふなるへし

ほとにつけたり　花あかしの上も大かたは心たかきゆへにわれほとの種姓の人にはみえましきと思ひ給へるなり

おもふ人々におくれなは　明石上の二人のおやなり

ちゝ君所せく思ひかしつきて　明石の入道あまりおき所もなきまてもてあつかふなり

としに二たひ住よしに　箋聞若菜上に此事みえたり箋聞住吉社は異國退治の神たる故に末社のたち様魚鱗鶴翼の陣を表するなりとそ此次に申されし

人しれすたのみ思ひける　明石入道の心なるへし

すまには年かへりて　秘源氏廿六歳なり弄

うゑしわか木のさくら　箋聞すまのわか木のさくらなり　聞書これよりすまの浦にわかきの櫻をよむと云々　私前にうゑ木ともしわたしとありし木ともなるへし

よろつのことおほし出られて　日なかくつれ／＼なる比なるへし

二月廿日あまり　秘去年の比そかしとおほしいて給ふてなり　箋聞是はすまにての事なり

いにしとし京をわかれし　箋聞京を出給しは去年三月の事なりそれをも思ひ出て給つゐてに昔の桐壺のみかとの御時の花宴を思ひいたし給ふなりそれは二月にて時分も同し比とおほし出るなり

院の御けしき　桐御門なり其時は御位の時なれと後に院に成給へはかくいふなり

うちのうへの　秘其時朱雀の春宮にてまし〳〵し時なりいまのみかと朱雀なり花宴時は春宮にておはしつれと今のみかとなれはかくいふなり

わかつくれる句を　秘花の比なれは思ひいて給あはれなり　箋聞春といふ文字給はれりとの給へる時の事也是等皆聖廟の事を下にふくみてかけり時平公よりも何時も文才のまさりたる故に偏執の心出來たるなり是も朱雀と源との事に下にふくみていへり面にはみえす

源　いつとなく大宮人の戀しきにさくらかさしてけふもきにけり　新古今「もゝしきの大宮人はいとまあれや櫻かさしてけふもくらしつ赤人　秘百敷の大宮云々の歌の心なり　弄花宴の事也　私二月廿日あまりは昔の花宴日也仍櫻かさしてけふも來にけりとよめり其時春宮かさし給はせてなとありしなり

大とのゝ三位中將　箋聞葵上の兄後に致仕太政大臣なり

いまは宰相に　今は宰相中將といふへし

物のをりことに戀しう　三位中將は源と他にことなる朋友にてかやうに思ふなり此中將は二條太政大臣のむこなれは心とけたる御習のうちにはあらねと時代のおほえかろからぬとなり

ことのきこえありてつみにあたるとも　箋聞前に大貳の參らさりしは君臣の道を正しうするなり此中將のおはしたるは朋友に信あるなり奇特におはしたる事なり信近義といへりたとひ罪にあたるともとておはしたる所は義に近きなり

うちみるより　宰相の君の源をみたてまつる心なり

ひとつ涙に　河「うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬ物は涙なりけり　秘引歌同　憂喜一なり　弄引歌同　箋聞此引歌の心尤面白し　私あはれな

るさまをみ奉るはうきなり又めつらしくとみ奉るはうれしきなり

すまゐ給へり　秘すまの體なり

箋聞こゝのすまゐのさまを前にくはしくかきあらはしたらは只今かくへき事もなく思はあるましきをこゝにはしめて所のさまをいひたてたる尤おもしろし　私所のさまとは惣別のすまのうらの境地なるへし

竹あめるかきしわたして石のはし松のはしら　河五架三間新草堂　石階松柱竹編墻　白樂天香峯下新卜山居草堂　秘五架云々　からめいたるといふに叶へり　箋聞同私是は源の御すまゐのさまなり

おろそかなる物から　麁相にて奇麗なる體也

やまかつめきて　これより源の衣裳のことをいふなり

ゆるし色のきかちなるにあをにひのかりきぬさしぬき　秘源の衣裳なり花鳥にくはし　花山かつめきてゆるし色のきはやかなるにあをひのうちきさしぬきうちやつれて　私詞の相違ある間これをかく花ゆるし色のうちき青にひのさしぬきといはんとてかやうにかけて先此色をいたして後に衣裳の名をあかせりゆるし色はうす紅をいふなり青鈍は花田にあをけのましれる色なり一本にゆるし色のきかちなるにとありうすき紅の黄かちなるかたによれるを云也　三善清行請禁深紅衣服奏議云但淺紅輕黄末及火色者不在制限云々黄かちなるとは此事なり河海に黄衣の證文をひかれたるはあやまり侍るなり又一本青にひのかりきぬさしぬきとありうちきをかりきぬとかきかへたるはかりなり心は同きなり　弄ゆるし色はうす紅なりきかちなるは黄なる色によれるなりきぬの色の事なりかりきぬとは如何あをにひは花田にあをげのましれるなり狩衣指貫の事なり花鳥にくはし此姿源氏の事なり

箋聞源の體なり直衣をはき給はす色はうす紅梅のちとこきなり無官の人なる故にうすきゆるし色をき給ふなり常ならはこき紅なるへし　私河海の義あやまれりと云々仍略之

みるにゑませてきよらなり　源のゐ中ひもてなし給へる御さましもきよらなるを宰相君の思ふ心なり

御てうともかりそめにしなし　旅の體なり出京の時

ことそきたる調度をもたせ給ふとあり

ごすぐろくのばんてうとたきのくなと　河圖碁　堯造之教丹朱雙六孟甞君造之　彈碁　後漢書梁冀能挽滿彈碁注挽滿猶引强也藝經曰彈碁兩人對局白黑碁各六枚先列碁相當更先彈也其局以石爲之　古今詩話求食彈碁有譜一卷皆唐賢所爲碁局方二尺中心高如覆盆其顚爲小壺四角微起　李商隱詩云玉作彈碁局中心最不平謂其中尊也道士席謙（吳イ）異人善彈碁　箋聞彈碁は今の世にはつたはらぬ物なり　私碁すぐろくのはんてうとゝは碁や雙六の盤也石なとなり皆つれ〳〵のまきらはしなるへし

物まゐれるなと　供御なとのおろそかなる物から所につけたるさまにしなしたる中々興ありとなり

あまなとのあさりしてかいつ物　河　求食　萬　かいつものはかつきしたる物也或海津物能因歌枕云海人のかいつ物とるをはあさりすと云　秘　あまのかつきしたる物なり又海物なり　箋聞海の物なりつはやすめ字なり　弄　具なとをとりたる物なるへし秘抄　聞書貝の事又海つ物なり　或抄日本紀に海物髻廣物髻狹物礒物とあり　私云海物は則貝の事也髻廣物はひれの大なる魚なり　髻はひれなり髻狹物はひれの小さき魚なり礒物は礒にある魚なるへし九禪貝なり　海藻歟云々

めしいてゝ御覽す　かいつ物とも又海人をもめして御覽する也

さま〳〵やすけなき　私舟の中波の底にそ老にける海士のしわさもいとまなの世やといふ歌あり心かよへる歟

そこはかとなくさえつるも　秘　あまのさえつりなり箋聞海士の物いふ體を聞ならひ給はぬ故に心えかたきなりそれをそこはかとなくといふなり

なにかことなるとあはれに　私引歌あるへきなりしかうして諸抄になし聞書に弄には世中はとてもかくても同し事宮もわらやもはてしなけれは此歌をひけりと云々案之にさま〳〵やすけなき身のうれへを申を聞給ひて色こそかはれ人間のやすけなき心のゆくゑは源や宰相君なとの此海人も同し事そと觀し給ふ心なるへきにや　或抄あまのおかしく物いふもとわりはきこゆれはおなし事也何かかはりたるとおほすとなり云々此義おほつかなし

御そともなとかつけ　源や宰相君の海人ともに物かつけ給ふなり
いけるかひあり　物かつけ給ふといひいけるかひありなとみな海人に緣のある詞なり
みやりなるくらかなにそ　或抄倉かなにそといへる上らうしくかきなせり前に柴といふものふすふるなりなとかける同體なるへし　見やりなるはみわたしなるなり　秘倉やなとなるなり秣なるへし
いねとりいてゝ　弄秣なとなるへし　箋聞稻なりかやうの所に似合たるかきさま面白し　聞書まくさの類わらなとなるへし　秘かきさま面白し稻とり出てなとしてみまくさもよしの心をとれりたくひなしとなり　河婆羅訶天馬食放香稻有部毘奈耶
あすかゐすこしうたひて　花飛鳥井は催馬樂さきにしるし侍り馬に稻かふと上にかきたれはみまくさもよしの心をとれるなり　秘箋聞同みまくさともよしといふ所をとれる也弄同
わか君の何とも箋聞夕霧の何心もなくとおはするさまを中將のかたり給ふなり
おとゝの明くれに　葵の父大臣夕霧をかなしみうつくしみ給ふさまなり
たへかたくおほし　源の心中なり
つきすへくもあらねは　秘草子の地なり　箋聞源と中將との御物語中々かきつくすへきやうもなければかたはしをもかゝぬとなり
ふみつくりあかし　作文なるへし
さいひなからも　箋聞前に罪にあたるともいかゝはせんとておはしたるなりされともさやうにすれは君臣の道かちかふほとに久しく逗留をはし給はぬとなり
いと中々なり　中々名殘をしくてあしきとなり
ゑひのかなしみ淚そゝく　醉悲淚灑春盃裏樂天　花白樂天か江州へ左遷せられし時三月三十日に夷陵といふ所にとまりて元微之にわかれし時つくれる詩の句なりそれをいま三位中將に源のわかるゝときにおもひなすらひてもろ聲にうちすし給ふなり此詩の心を定家卿旅の歌によみ給へり　「もろともにめくりあひける旅枕淚そゝく春の盃　秘樂天か詩河海にみえたり悉皆此段は樂天か元稹にあひたるを心にもちてかけり定家卿歌略之

河十一年三月卅日別微之於灃上　十四年三月十一日過微之於峽中停舟夷陵三宿而別言不盡者以詩終之七言十四句　一別五年方見面　語到天明竟不眠　生涯共寄滄波上　卿國俱抛白日邊　往事渺茫都似夢　舊遊零落半歸泉　醉悲泪灑春盃裏　吟苦支頤曉燭前　樂天謫所にて元稹に行あひて作れる詩句なりそれをいまの宰相中將の對面に思ひよそへて誦せられたる也　私云此二首の詩の面かけをとりなしてかけるこゝによもすからまとろますとあり是は語到天明竟不眠也今又須磨の浦の邊なれは生涯共寄滄波上も叶へりまたふみつくりあかし給ふとあり是も吟苦支頤曉燭前にといふにあへり時節又春也さてゑひのかなしひ涙そゝくなとおもひよせてもろ聲に誦し給へるなるへしあはれあさからすこそ

御とものゝ人　是は宰相中將のともの人歟

おのかじゝ　秘わたくしの別なり　箋聞宰相のともの人と源にさふらふ人となり

かりつれてわたる　歸雁也

源故郷をいつれの春かゆきてみんうらやましきはかへるかりかね　箋聞義はあらはなり　我爲遷客汝來賓共是蕭々旅漂身欹枕思量歸去日我知何歲汝明春是は菅家來鴈を聞て作り給へる詩なり只今の歸鴈なれと心はかよふにや來鴈の明年歸へきさへうらやましけれはまして只今歸る鴈をきゝてかくよめるはことわりなるへし　箋聞にこれをひけり　私只今宰相中將の都をさして歸り給ふを歸鴈の故郷へおもむくにたとへて源のうらやみたるなり

たちいてん心ちせて　故郷の歸路もいそかれぬなり

返宰相中將あかなくに鴈のとこよを立わかれ花の都にみちやまとはん　弄宰相中將の歌は秋の鴈のやうにみゆ只此時のかへるさの事をよみ給へるはかりにや鴈をかりなるにかりてよめるなり歌の面は鴈と心得へき歟　聞此歌悉皆秋のやうなり但かやうの即席の事にはむかしなとかやうのたくひもあるなり　秘かりなると鴈とによせてよめり歌の面は鴈と心うへし只今かやうに來會しては更に都へ立かへりかたしとなり　或抄源を鴈にたとへてすまをとこ世になすらへてよめり云々

さるへき都のつと　秘宰相中將のみやけなり

あるしの君かくかたしけなき御おくり　箋聞過分なると源の謝する詞なり

くろこまたてまつり給　河拾「よそにありて雲井にみゆるいもか家にはやくいたらんあゆめくろ駒　同「わかゝへる道の黒駒心あらは君はこすともおのれいなゝけ

ゆゝしうなほされぬへけれと　源は左遷の人なれはいま〳〵しくおほさんとなり

風にあたりてはいはえぬへけれは　河　胡馬嘶北風越鳥巣南枝　駒はもと胡國の獣なり仍て北風にあたれは舊里をしたひていはゆるなり云々　秘　胡馬嘶北風　故郷を思ふ心あり弄同　箋聞越は南國なり仍鳥も南枝に巣かくるなり胡は北國なり仍て馬も北風にいはゆ故郷を思ふ心あり源の心に故郷をおもふなり又馬を奉り給へる折ふしなれはかくの給ふなり

よにありかたけなる御馬　駿馬といふなり

かたみに忍ひ給ふとて　箋聞形見になり　聞書同

私此笛は中將の源へ奉れるなり但いみしき笛の名ありけるなとはかりとあれは源より馬と笛とを送り給へるなり如何

かたみにえし給はす　箋聞是は互になり　聞書同

互にとあれは馬は源よりの送り物笛は中將よりの事なるへし取かはし給へる義可然也

日やう〳〵さしあかりて　終夜まとろますあかし給て日のさしあかるまて名殘をゝしみわかれかね給へるさまなり

みおくり給けしきいと中々なり　又いと中々をかけり誠あかぬ別なるへし

いつ又たいめん　秘　源の詞なり　箋聞是より宰相の詞なりたいめんせんはいつともなけれとも又かくてはゝて給はしと申給ふなり

さりともかくてやは　秘　三位中將詞なり　只いつ又といふよりつゝけて三位の詞とみるへし

源雲ちかくとひかふたつもそらにみよ我は春日のくもりなき身を　花　三位中將をたつによそへてよみ侍るなり　秘　鶴に三位中將を比していへり雲井にちかくさふらひ給ふへきとなりわれはおかせる罪もなき身なりとなり　箋聞雲ちかくは天子にちかきなり我無罪を知給ほとに奏聞もし給へとなりそらに

は暗の字の心もありまたねぬ人をそらにしるかな
といふ類なり
かつはたのまれなから　秘我は罪なき身と思へはかへるへき道はかならすと思へともむかしよりもとの如くなる人はまれなるとなり聖廟なともさはなかりし事を思へり　箋聞源の詞なり罪の實なき故にさりとは思ふなりさりともかくてやはといふ詞をうけてなり
かくなりぬる人はむかしのかしこき人たに　箋聞流罪事也聖廟なとも宰府にて薨し給ひし事なり　弄菅家の事に相當れり又大かたにても
都のさかひを又みんとなん思ひ侍らぬ　無實の身なれはさりともとおもへと聖廟なとさへ歸京はなかりしなり我も二たひ都をみんとは思はぬとの源の詞なり
返宰相 たつかなき雲井にひとりねをそ鳴つはさならへし友をこひつゝ　河たつかなきあしへをさしてこひわたる云々萬十五　花たつかなきはたつきなきといふ詞なりかときと五音通せり又つるをかくしてよめるなりつはさならへし友は源氏にたとへ侍り　秘たつぎなき心なり鶴にそへたり弄同　箋聞鶴をもたせたる也　源の沈みはゝて給はしなれともいひしかれてはつしたる體なり源の我は春日のくもりなき身そなと御門へも奏聞し給へとよみたまへるやうなるをこゝろえ申たるとは宰相もいひかたけれはそれはゝつして引ちかへたる返歌なりさて都にてしたしき友なりしことをいひたり
かたしけなくなれきこえ　無體をかへりみすなれ奉りたるとなり翅ならへしといふをすこしおそれてかしこまりいへる詞なるへし
いとしも人に　河古「思ふとていとしも人にむつれけんしかならひてそみねは戀しき　箋聞河の引歌よし秘弄同
いとゝかなしうなかめくらし　前のつれ／＼の事をうけて也又あひ給はぬさきの事にてもあるへしあひ給ひていとゝしきなり源の體なり
やよひのついたちにいてきたるみの日　秘上巳のはらへ也河海に委し弄同　河世風記云三月上巳桃花水下之時飲食爲哺大飲酒也歩胡反招魂請魄拂除不祥　續漢書禮儀志云三月上巳日官人並禊飮於東流水上文選

第二曰於是暮春之禊元巳之辰方軌齋輪祓于陽濱西都賦 漢代三月上巳日白宮東流水上にして禊飲する自魏以後は用三日不用上巳續齊諧記に見えたり 應劭風俗通云案之周禮女巫掌歳時以祓除疾病禊者潔也故於水上釁潔鄭國俗三月桃花水の下時に以二上巳一湊洧二水の上にして執蘭葉招魂續レ魄拔二除不祥一韓子 成都記四三月三日遠近祈福於龍橋命曰蠶市王義之三月三日蘭亭序云永和九年歳在癸丑暮之初會二山陰蘭亭一修禊事也 晉書 白樂天開成二年三月三日洛濱宴詩十二韻在之

けふなんかくおほす事ある人は 箋聞三月朔日をいふにはあらす上巳をさしてけふといふなり 物思ひのある人けふはらへすることそなと申さまなり

海つらもゆかしうて 源の此事を信して(おほしイ)おはしたるにはあらす海邊なとの景もゆかしくてよきついてそと立いて給ふなり 河軟障有畫圖松也謂高松軟障堂上ヽ軟障堂下引幔 又堂下有立軟障事せんさうとかきてせんしやうヽ讀へし 新儀式曰内宴日妓樂出自綾綺殿軟障南着座 秘 軟障はついたち障子なとのやうの物なり假名にはせんしやうとかける本ありたヽせしやうとよむへし 弄 一答軟障と云幕のやうなる物に高き松なと繪にかきて壁にそへて引也 聞書せしやうとよむなり 箋聞せしやうとよむなり幔幕のやうなる物なり

このくにヽかよひける陰陽師 河 道滿法師居住播磨國云々此事也 此物語證本には皆おんみやうとかけり伊勢物語にはおんやうしと書之歟 秘 昔は國國に陰陽師醫師をおかれ侍り河海に道滿法師の事をひけり其義に及はさる歟箋聞同

こと〳〵しき人かた 河 人形 箋聞こと〳〵しきとは等身にしたるなて物なり等身とはその人の身のたけにひとしきなり

よそへられて 箋聞源の流罪によそへられたる也なかすといふにつきてなり

源 しらさりし大海のはらになかれ來てひとかたにやは物はかなしき 一かたにやはヽ人形をそへたり 秘 わか御身のなりは人形のことしとなり 私云此義五文字しらさりき又は思ひきやなといふ體の五文字とは心かはれりいまたしらさる大うみのはらになかれ來てなり又大うなはらになといへる祓の詞

にもあり

さるはれにいてゝ　秘晴に出給ていよ〳〵くもりなく源の御形のみえたるなり　聞海邊の晴やかなる體なり

源やをよろつ神もあはれと思ふらんをかせるつみのそれとなけれは　秘祓をし給ての歌なり　弄八百萬は神書にみえたる詞なり　或抄御說に八百神は世間にありとあらゆる所の神なり　可舊事記曰高皇產靈尊召八百萬神於天滿河之川原八百萬神達日本紀「みそきして思ふ事をそ祈ける八百萬代の神のまに〳〵　花中宮難波の御はらへに大伴皇子歌「とひみはやあまのまし人くさ〳〵におかせる罪はありやなしやと　箋聞八百萬神は世界にあらゆる所の神なり神名帳なとに入神祇式にのせたるは三千一百座なり心かはるへし

との給に俄に風ふきいてゝ　秘との給にとかきてやかて風雨の變をあらはしたる心は源の只今罪なきよしを詠し給ふに此歌に天も感して俄なる雨風ありて都まて吹しなり是ゆゑに源氏めしかへさるゝなり　弄同　私菅丞相なとも祭文をかきて七日高山にのほりて天道へ祈られしかつゐに祭文雲をわけてのほりてあら人神とあらはれ給へる事なり

ひちかさ雨とか　河引歌「いもか門行過かねてひちかさの雨もふらなん笠やとりせん　河笠もとりあへすして袖かさしたるよしなり但日本紀大雨をひさめ或はひちあめとよめり同心なり　箋聞俄にふる雨に袖なとうちかつきたるなり

かさもとりあへす　ひちかさあめによくかなへり

さる心もなきに　私雨の用意もなかりつる事歟　又今まて靜にて雨のふるへき心もなかりつるといふなり

よろつ吹ちらし又なき風なり　河暴風卒起屢降惡雨由王暴虎（嘘イ）不修善事金光明經　尙書曰武王既喪管叔及其群弟乃流言於國曰公將弗利於孺子孺雄之子成王也周公乃告二公召公大公曰我之弗辟我無以告我先王周公居東二年則罪人斯得　周公告二公遂東征之以二年之中罪人比得　于後公乃爲詩以貽王名之曰鴟鴞王亦未敢誚公　秋大熟未穫天大雷電以風二年秋也后蒙恒風若雷以感之故有風雷之異　禾則盡偃大木斯拔邦人大恐風災所及邦人皆大恐　王與大夫盡弁以啓金縢之書乃得周公所自以爲功代武王之說二公及王之問諸史與百

執事對曰信噫公命我勿敢言正執書以泣曰其勿穆卜
金縢篇 漢書曰君霧恒風若（師古曰凡言恒者謂所行者
天道則寒暑風雨不時恒久）
海のおもてはふすまをはりたらんやうに光みちて
秘 波の白きをいふ　弄同　弄花鳥に電光云々 花
道成集　女院の御前にて雪のしらう降て侍りしに
これをよみてと仰ことあれは「年ことに冬ふるも
のとしりなからとこめつらしきふすま雪かな　定
家卿明月記云雨（雨イ）脚融地雷光張衾云々
神なりひらめくおちかゝる心ちして　雷電のいかめ
しきさまなり「なる神はたゝ身のうへの心ちして
と云句に宗牧おもふもかなしすまのいにしへ
たとり來て　秘 やとりへたとりきてなり
けしきつきてこそあれ　秘 よのつねの風はかねて催
してふくるもありしなり是は俄に大風の吹をいふ
なり　箋聞此風雨物のさとしなる故に何とやらん
けおそろしきなり此心あまた所にあり
君はのとやかに　源の體なり
願のちからなるへし　秘 此風ゆへ願をたてつるなる
へし

たかしほといふ物と（にイ）なん　花 大伴皇子さて其比浪風
ふきてたかしほといふ物入ていとおそろしくやと
もみなかれてしん殿もゆるくいきたなかりける
人々はみなかれにけり弄
そのさまともみえぬ　箋聞源の夢の體也かたちもさ
たかならぬなり
宮よりめしあるには　秘 龍宮よりの事なり花鳥説お
もしろし　花 これは彦火々出見尊を源氏君にたと
へて龍神の豊玉姫をあはせたてまつりしをあかし
の入道の女になすらへかけること葉なり　箋聞此
夢に宮よりめしあるといふを源の心に龍宮の事と
思ひて恐怖し給ふなり是は都へのほりたまふへき
瑞相なり　私此雨義猶決すへし　河 彦火々出見尊
釣はりをうしなひ給てわたのへにいたりて尋給け
るを龍神顔容貌絶世たりとめて奉りてむすめ豊玉
姫にあはせてわたつみやに三年とゝめたてまつり
しなり日本紀にみえたり　又日本武尊東夷を征し
給時相模國より上總國に渡り給しに龍神めてゝ尊
をとりたて奉らんとしけれは波あらく御舟しつま
んとせしに弟橘姫みことの御命にかはりて入海し

てうせ給けり尊橋姫を忍給て上野國碓居坂にて東方を望てあかつまやとの給けるにより東をあつまと云なり我つまといふ心なり吾嬬とかきてあつまとよむなり東は宛字なり　紀正文略之　天平勝寶元年遣唐使中有副使陸奥介從五位上玉手人丸山城史生上道人丸者柿本人丸集中有入唐之時歌若以前輩令混合也大夫於途中爲海神被取端正美麗之故也云云見作手丸記

おとろきて　源の心なり

さば海のなかのりうわうの　さらばなり彦火々出見尊なとのやうに源をめてたてまつりてかやうの浪風のさわきもあるにやとおほすなり

このすまゐたえかたうおほしなりぬ　秘　あかしへのうつろひをかき出すへき發端なるへし　箋聞同

弄奥にある分

海にます神のたすけに　住吉明神をも申へし又海神にても花

しほのやをあひ　八百會日本紀　八百重とも

さは海の中の龍王の　弄彦火々出見尊兄ほのすそりの尊の鈎はりをかりて魚にとられてたゝすみ給し時鹽土老といへるものさま〳〵の術をして彦火々出見尊を海中にいれ奉て豊玉姫にあひ奉りて後干珠滿珠を得て歸り給ふ事あり此事なとを思ひ給ふへし花

おほやけにかしこまりきこゆる人はあきらかなる月日のかけをたにみす　本說如何　一勘本說未考之意は無相違也違天意者は日月の照覽も可畏之由也

なよゝか　問なよらかと同心歟　一勘　和の字の事歟

かとりの御なほしさしぬき　平絹のなほしなり直衣指貫の地の事なり　夏秋は直衣年齢によりてうす色あさきなり冬はしろきなり指貫も年によりてあさきの淺深あるなり

岷江入楚第十三　明石

私廿六歲の三月より廿七歲の秋迄をしるせり

廿六歲

雨風猶不休事

自二條院御使來事

雷落廊燒事

又夢見故院給事　任住吉神導可避此浦之由事

三月十三日明石入道艤御舟奉迎源氏君事去一日夢想事

源氏君乘船渡明石浦事

濱館有樣事

書御文令歸京使事

明石入道參源氏申昔物語事

四月更衣裝束事

召琴彈廣陵散事

明石入道參御前彈琵琶事入道語吾娘能彈箏之由事入道又彈箏事

入道語心中所願奉行位住吉神及十八年之由事

又之日遣消息於岡邊宿事入道　書返歌事

次日又遣書事　明石上書返事事

御門御夢奉見故院事　三月十三日

二條太政大臣夢逝事

八月十二三日比乘御馬出岡邊宿給事對面明石上事

遣書於二條院事

源氏書繪給二條院君同書繪給事

廿七歲

正月主上御藥事

七月廿日源氏歸京之宣旨事

明石上懷妊事六月よりの事なり

歸京前二三日向明石上許合物音惜別事

於難波修祓事

歸京着二條院給事

復本位任權大納言事去大將事

八月十五夜初參内之事

使歸之次遣消息於明石事

筑紫五節君奉文於源氏君事

明石

河明石の巻名　光源氏自須磨浦移居此之所故なり

秘 巻名以歌并詞號たり「旅衣うらかなしさにあかしかね草の枕は夢もむすはす 箋弄同　花 源廿六歳の三月十三日にすまより明石に浦つたひし給ふと有り

猶雨風やます　花 三月一日より十三日まて雨風やますかみなりさわくなり是はいまた須磨にての事なり周成王の時周公の弟に管叔蔡叔といひし諸侯周公旦を讒す是によりて周公東都に居する事二年其秋天大に雷電して風吹栗こと〳〵くたふれ大木の根抜たり成王其時金縢の書を（此書は周公の制作なり）ひらき見給うて周公の王室に功ありて更にとかなき事をさとり給其時雨風たちまちにやみ栗悉くおきて大木のたふれたるもみなもとのことくになれりこれはとかなき周公を二叔の讒したるを成王の信し給ひしを天いかりをなしたるゆゑ也成王の思なほり給へるによりて草木ももとの如くになれりいま源氏君を周公旦になすらへて十三日までの雨風とはいへるなり　秘 三月一日上巳の祓の時の事なり花鳥に周公を引り雨風故に歸京すへき事もいかゝと也

箋 三月一日上巳の祓より至十三日不止　周公旦の事　尙書を見へし（用イ）史記には雷雨の說無之周公居東都二年天大雷電以風禾盡偃大木斯拔成王啓金縢書迎周公天乃反風禾盡起（事文類聚）　世家第三云

周公旦者周武王弟也孝篤仁異於群子及武王即位旦常輔翼武王用事居多封旦爲魯公周公不就封留佐武王武王克殷二年天下未集武王有疾不豫周公於是乃自以爲質設三壇周公北面立戴璧秉圭注孔安國曰璧以禮神圭以爲贄告于大王王季文王告とは祝ク辭也史策祝策周公所作之簡書也曰惟爾元孫王發勤勞阻疾若爾三王是有負子之責於天以旦代王發之身於是乃即三王而云々人皆曰告周公旦喜開籥乃見書遇告周公入賀武王曰王其无（客イ）害周公藏其策金縢匱中藏之於匱緘之以金誡守者勿敢言明日武王有瘳不欲人開有瘳其後武王既崩元年乙酉六年庚寅崩太子誦代立是爲成王成王少在强葆之中周公恐天下聞武王崩而畔周周公乃踐阼代成王攝行

政當（國イ）周管叔及其群弟流言於國曰周公將不利於成王言於國以誣周公惑成王周公乃告太公望召公奭我之所以弗辟而攝行政者恐天下畔周無以告我先王大王王季文王三王之憂勞天下久矣於今而后成武王發終成王少將以成周我所以爲之若此於是卒相成王　管蔡武庚等果率淮夷而反周公乃奉成王命興師東伐遂誅管叔殺武庚放蔡叔封弟叔鮮於管封弟叔度於蔡武庚殷紂子祿父共云成王長能聽政於是周公乃還政於成王成王臨朝周公之代成王治南面倍（偝イ）依（天子負斧依以朝諸侯）（謹敬貌）及七年後還政成王北面就臣位窮々如畏然　初成王少時病周公乃自揃其蚤沈之河以祝於神曰王少未有識奸神命者乃旦也亦藏其策於府成王病有瘳及成王用事人或讃（譏カ）周公周公奔楚成王發府見周公禱書乃泣反周公々々歸　譙周云秦既燔書時人欲言金縢之事或失其本末乃云成王少時病周公禱河欲代王死藏祝策于府成王用事人譏周公々々奔楚成王發府見策乃迎周公　箋私云史記亦雷雨沙汰無之如何　尚書第七金縢篇云武王有病周

公作金縢爲請命之書藏之於匱緘之以金不欲人開既克商二年王有疾弗豫也（豫也不悦）公乃自以爲功（周公乃自以請命爲已事）爲三壇同墠（墠除地也）史乃冊祝曰惟爾元孫某遭厲虎疾若爾（君イ）三王是有丕子之責于天以旦代某之身公歸乃納冊于金縢之匱中王翌日乃瘳武王既喪管叔及其群弟乃流言於國曰（武王死周公攝政其弟管叔及蔡叔霍叔乃放言於國以誣周公以惑成王）公將不利於孺子（勢遂生流言孺稚成王也）周公乃告二公曰我之弗辟我無以告我先王（辟法也告召公大公言我不以法々三叔則我無以成周道告我先王）周公居東二年則罪人斯得周既告二公遂東征以二年之中罪人此得三監（管叔蔡叔武庚也）于後公乃爲詩以貽王名之曰鴟鴞王亦未敢誚公（成王信流言而疑周公故周公即誅三監而作詩解所以宜誅之意以遺王王猶未悟故欲讓公而未敢）秋大熟未穫天大雷電以風（二年秋也）禾盡偃大木拔邦人大恐王與大夫盡弁以啓金縢之書乃得周公所自以爲功代武王之說（所藏請命冊書本也）二公及王乃問諸史與百執事對曰信噫公命我勿敢言（今言之則負周公）王執書以泣曰昔公勤勞王家惟予沖人弗及知（言已幼童不及知周公昔日忠勤）今天動威以彰周公之德（發雷風之威以明周々之聖德）王出（郊イ）郊天乃雨及風禾則盡起（郊以王幣謝天即反風起禾明郊之是）二公命邦人凡大木所偃盡起而

築レ之歳則大熟　箋 私云河海には周公旦の故事不載花鳥に始有ニ此説一　私云河海には三月一日上巳の祓の時風の吹出し所尚書の金縢の篇を載たり須磨巻の末也但河海の本に依て載さるも有之歟

日ころになりぬ　三月朔日より十三日までの事也

きしかた行さき　箋 前後の事也二説これあり　箋 一義都のわかれ初雷風にあふ事中いまた進退の落着をしらさる後　箋 又の義往昔にも未來にも(界イ)其たくひなきかなしみそとなりこれは公家をいふなり

心つようも　秘 左遷乃愁の外に又かやうの雨風の恐怖あるはかなしみのきはまれる事なり　箋云たのみなきの義なり

かゝりとて都にかへらん事も　秘 雨風ゆゑに歸京すへき事もいかゝとなり　箋 源も行平なとのことくわれと蟄居の人なりしかれとも除名の身にて舊宅へ安堵も叶ふへからすと也　箋 伊周公自播磨國竊に上洛謁レ母仍配太宰府被處重科云々(榮花物語にみゆ)　私此義後に引へし

人わらはれなる事こそまさらめ　秘 伊周公の事なり

花 帥内大臣伊周公播磨國にくたりて後又ひそかに都にのほりて母君にあひ給ふ事聞えて重て罪をえて更に太宰府へなかされ給へるも榮花物語にみえたり　弄 伊周公の遠流の道より忍ひて歸京せし事をひけり時代等見花鳥源氏は又みつからかの國に向ひ給ひしゆゑなり

浪風にさわかされて　秘 浪風にさわかされてと人ききを遠慮し給ふ殊勝なり弄同

御夢にもたゝおなしさまなる物　花 すまの巻にみえたり弄　秘 すまの巻にありし龍宮へめす事なり箋同　私云聞書にはすまの巻の夢の事龍宮へめすにはあらす都へ歸り給ふへき瑞相なりしを源は龍宮と心得て恐怖し給ふとあり雨義猶追て決すへし

かくなから身をはふらし

空のみたれに　河 雲のみたれ同事なり　秘 只雨風のみたれなりあなかち天道のみたれにはあらす雨風はけしき事を空のみたれといふ雨順風調と云は五日の風十日の雨時をたかへぬ事なり其事に對して空のみたれとは云り　箋云風雨雷電の變を云又花鳥の義を引り

二條院よりそ　秘紫上よりの御文なり
あやしきすかたにて　秘此御使簑笠にて參れるなり
花箋同　弄簑笠なとの體なる人なるへしあはれな
り云々
みちかひにてたに　箋河に道の行ちかひなり　花篁
日記「玉ほこの道かひなりし君なれと跡はかゝな
くなるとしらすや
われなからかたしけなく　秘花鳥に辱字なり身には
つかしき心となり尤可然我なからケ様の物をはつ
かしとおほさて對面ある事はつかしき由なり　箋
花に辱の字なり身を耻る義なり
くしにける　箋窮屈　河若同
御文には　箋紫の文なり
あさましくをやみなき　秘紫上よりの文の詞なり聞
書同　弄文の詞の中をこゝに書たるへし
いとゝ空さへとつる　花くもりふたかる心なり古歌
の詞なるへし　秘此さへの字にて心のうちもあら
はれたり　箋云欝陶如レ不ニ雲披一
なかめやるかたなくなむ　秘定家卿歌に「行へなき
秋のなかめそせられぬに村雨なひくくもの遠かた

雨雲の峯になかめやるかたなき心はへなる歟
紫上うら風やいかにふくらんおもひやるそてうちぬらし
浪間なきころ　弄幽玄の歌なり　秘あはれなる歌な
り　箋相（想イ）像之影如溢浪況蜑戶乎
ひきあくるより　秘文を引あくるなり
いとゝみきはまさりぬへく　花すまの巻にしるし侍
り源の心なり
かきくらす心ち　源の心中なり
京にも此雨風　秘此御使の申すなり
ものゝさとし　聞恠異といふなり
仁王會なと　秘七難即滅の心にてかやうの時をこな
はるゝ事なり弄同　河仁王會とは經云講讀般若波
羅密七難即滅七福即生萬姓安樂帝王歡喜日月失度
星宿失度（炎イ）大雨風旱魃賊謂之七難仁王經持統天皇御
宇始渡ニ來本朝一此義箋にのせらる　三月被行仁王
會　例　天曆六年三月廿七日癸未被行臨時仁王會
秘　日月失度廿八宿失度大火燒國大水漂沒大風吹殺
（炎イ）央火烟然四方賊沒國　箋一代一度仁王會江次第十
五臨時　當日大極殿儀式也如ニ御齋會一講讀師或乘
輿云々　辨少納言　外記　史式部彈正着東西廊謂

之出居　朝座行香　上卿已上參內如常公卿不餝諸堂　三僧有法服科　中殿　南殿　大極殿　豐樂殿　武德殿　朱雀門　羅城門　西院　四后　春宮　太政官　外記廳　中務省　式部省　民部省　兵部省　大藏省　宮內省　左京職　右京職　左近府　右近府　左衞門府　右衞門府　左兵衞府　右兵衞府　東寺　西寺　聖神寺　私所々名廿九ヶ處なり　兩院　四后にて卅三ヶ所なり
南殿　中院　諸院諸宮は各七僧自餘皆三僧抑諸國六十六座也若京中卅四座可被定歟可滿於百座之故也綱所定進諸堂法用　維那者所司諸用　私箋に河海の義をのせらるゝ仍之始に注之
御前にめしいてゝ　京の使をめしてとはせ給なりあやしき物なれとかゝる時分なれはなり前の詞にわれなからかたじけなくと源のおほすも此事なり
たゝれいの雨　秘これも御使の申す也
れいならぬ事に　つねの事にあらすと驚きあやしむとなり
地のそことほるはかりのひふりいかつち　箋河に火雨雷電日本紀第廿二ィに第廿七云々　毀諸善人故天降雹金光明經　唐德宗貞元四戊辰四月五日雹落大如彈石　長和二年三月雷鳴氷降大如梅已上　河の義を箋に載之　秘京は是程まではなきとなり
ひふり　秘あられなとのふる也　仁王經六月雨水霜雹云々　弄霰なとのましるなり此さとしは周公の東征の時天變のありしたぐひなり　花周公旦のよそへ榊卷にもみゆ
かほのいとからきに　河辛苦の心歟　箋載之
その又の日　二條院よりの御使の參りて京の事なとかやうにとひ給しその翌日なり
いはほも山も　花野分卷に風のあらき事を云に岩ほも吹うこかしぬへくとあり
あるかきりさかしき人なし　秘おちおそれたるなり
われらいかなる　祇候の人々の云なり　箋祇候の人人なり　箋京の御使なるべし次の詞に各といへるは供奉の人々なり　私箋にかくのごとく注して朱にてけされたり京の御使と云義用へからす
めこのかほをも見て　妻子のかほをも見すしてなり
君は御心をしつめて　秘源はしつかに念ひつよりて

願たてさせたまふとあり龍王にても有へし兩說共に用なり八百あひはふかき心なり祓の詞八百會と書り弄　聞住吉の神は水邊に嫌なり住吉はかりは水邊にあらす

さこそいへ　秘上の詞に君は念誦し給てなとさかしく書しに對していへり

いたうがうし　聞困の字なりごうし

花こうしは劫困の字なるへしくたひれはてたる心なり　秘ごうし花鳥

かたしけなきおまし所　秘きたなけなる所なり

たゝよりゐたまへる　秘うるはしくはいね給はさるなり

故院のたゝおはしましゝさまなから　是より源の夢也桐壺のみかとをみ給なり御在世の時のそのまゝの御さまといふなり

住よしの神のみちひき　弄明石の浦へうつり給ふへき瑞なり

いとうれしくて　源の夢中の心なり

かしこき御かけに　秘夢中に院へ申給ふなり

いとあるましき事　秘院の御返事なり

いさゝかなる物のむくい　秘薄雲密通なとの事なるへき歟又さならても有へし

われは位にありし時　秘御門御在位の時なり

おのつからおかしありけれは　弄延喜帝の天子に父母なしと仰られし事をひけり又さもあらすとも私延喜に桐壺の帝を准し奉れは菅丞相の讒言にて罪にあひ給ひし事なとなるへしそれに付てあまたおかし給ひし事の色あり勘へし

いみしきうれひに　秘源の身の上の事なり

海にいりなきさにのほり　秘長恨歌に方士か楊貴妃を求し時上は碧落下は黃泉といへることとし

內裏に奏すへき事　秘源氏歸洛の事なるへし弄同

御ともにまゐりなんと　源の夢中に申給ふ詞なり

月のかほのみきら〳〵と　以下の詞絕妙なり杜子美か殘月滿屋梁猶疑見顏色といへるに心かなへり弄同　花月のかほすまの卷にもあり

としころ夢のうちにも　秘海にいり渚にのほりてとおほせ有し故に源のわか身かやうの事なからましかは夢にもかくさたかに見奉る事もあるましきにこれもさいはひなるとなり孝心の至りなり

よくそかゝる　かゝる左遷のかなしみなくは父帝を夢にも見たてまつらしとなり

中々なる御心まとひ　夢の名殘御むねもふたかり御面かけも戀しくかなしくて左迁風雨のうれひはまきれたると也

又やみえ給ふとことさらに　秘　ねぬる夜の夢をはかなみの心なり弄同　私ことさらにとはわさと寢いらんとし給ふなり

又二三人はかり　聞　ふたりみたりはかりとあり

のかしのうらよりさきのかみしほち　河　播磨前司入道なり若紫の卷に見ゆ　或云御堂關白出家以後世皆稱入道殿其時憚をなして世間に入道といふ事なし滿仲も自號新發意　明石入道なりもと播磨守なり　私自身御迎に參れるなるへし　私さきの守といへるは心得かたけれと明石の浦とあるにて播磨はきこゆへし人のしり名高き所なり和泉守を信太杜なとさへいへれはなり

源少納言　秘　良清なり弄同

かの國のとくいにて　秘　國にての知音なり良清か父も播磨守成し便なり弄同

わたくしにいさゝか　花　良清か明石の入道の女に心かけたるを入道ゆるさぬ事をうらむるなり若紫の卷にも大かた見えたり　むすめの事をいひよりしを云ふなり

君の御夢なとも　聞　此浦をさりねと有し事なり　秘　源は夢をおほしあはするなり

心えかたう　良清か心なりいつの波風のすきにきつらんとなり

いぬるついたちの日　秘　三月一日上巳の事なりはらへし給ひし日よりの雨風なり弄同

十三日にあらたなる　秘　夢のつけなり弄同

此うらによせよと　すまの浦へ舟をよせよとなり

いかめしう雨風いかつちおとろかし侍つれは　舟のよそひしてすまのうらへよせよといふはかりにていかなる事ともおもひ得さりしを雨風雷電の變ありてから入道のことき心にさては源の御身の上につきての事なるへしと思ひよりたるなるへし

夢をしんして國をたすくる　故事不可勝計　傳說等の故事不可勝計なり　史記殷本紀曰帝武丁卽位思二復興一殷而未得其佐三年不レ言二世政事一今決二定

於家宰ニ以觀ニ四風武丁夜夢ニ得ニ聖人ニ名曰レ説以ニ夢所ニ見視ニ群臣百吏ニ皆非也於是乃使ニ百工營求ニ之野ニ得ニ説於傳巖中ニ於武丁云々曰是也得而與レ之語果聖人擧以爲レ相殷國大治武丁高宗也此外無例

いましめの日　その日かならすとつけのありしを云ふなり

あやしき風はそう　秘　順風なり　弄　追手にしつゝまり

たる心也　私あやしき風とはことの外の大風をいふされとも告にまかせて舟をいたしたれはほそう吹て此浦につくしなり

神のしるへ　此浪風に船をいたしたるにかやうに浪風のしつまりたる事先奇特のみゆるとなり

こゝにもしろしめす事　秘　こなたにも自然つけなとの有しにやといふなり

このよし申給へと　聊爾なる義なから物の告なれはありのまゝに源へ申給へと明石の入道の良清に云ふなり

君おほしまはすに　こゝにも夢うつゝさま〳〵つけの有しなり

夢うつゝさま〳〵　秘　龍宮よりめすともあり又故院も夢にみえたまひ又かやうにうつゝにもあるをさま〳〵といへり

よの人のきゝつたへんのちのそしり　秘　世界より雨風におそれてなといはん人きゝをいかゝと遠慮ありなからなり　弄　上の詞にありし遠慮有なからなり

まことの神のたすけにもあらんを　人口を遠慮して此事眞實神のたすけなとならんをそれにしたかはすはあしき事もやとおほすなり

又是よりまさりて　秘　又これより眞實の神慮にてもあらはそむきかたき事なりなとおほすなり

うつゝさまの人の心たに　花　うつゝさまはよのつねさまなりなほさりよのつねの事なりとも神のたすけをそむかんはくるしかるへしいはんやわか身のありさまはかなき事ともを見あつめたる事に成ては世にしたかふへきはよからんとなり　秘　眞實の神のたすけにても有るやらんをそむきかたきとなり　又云只うつゝの世間の人の事さへそむきてあしき事のある物をとなり是より以下弄と同し又現在の人の事さへ神の助をたのむへしましてかゝる、

身にては神の告ならんには尤可賴事なり以上秘
聞 弄箋よしと云々
はかなき事ともをかつ見つゝ　秘 閑書に本につゝみてイかつみて同事なり云々辛苦の事ともありてなり弄同　かくかなしみを極たるうへにては何事の有へきそとなり已上秘
われよりよはひまさり　秘 官位もたかく又年齡まさりたる人にまかすへき事となり弄同　明石入道はとしたけたる入なりうちまかすへきなり已上秘
花 是は惣して人のいふ事にしたかふへきよしを云なり我より年のまさり又位高き人又時の權門なとのいふ事には何ともあれしたかふへき心なり明石の入道も源氏よりは齡まさる人なれはとり申事にはしたかはゝよかるへきとなり
心むけをたとるへき　たとるとは色々にしてみる心なり
しりそきてとかなし　花 此しりそきては位を辭し身をしりそく心にはあらすたゝ人の先をせすおのれをひけして人に隨ふ心にいへるなり　秘 退とは退休の退にはあらす人にしたかふなり人の義にしたかひてとなり　弄 老子經文と云々　聞 知進不知退周易　又老子經文云々　河 周易曰知進而不知退知存而不知亡知得而不知喪其唯聖人乎　老子經曰不進不退有咎知退取禍之道也　唐事此等の心歟猶可勘　唐書見可退而不退謂之懷寵云々國之姦也
けにかくいのちをきはめ　辛苦をつくし給ひしとなり
のちのあとの名を　秘 人のいふへき一旦の名をは思ひ給はさるなり　はふくとは物をおほひかくすなりところによりて心かはるなり
たけき事もあらし　聞 仕なほしかたき也　私さしたることにもなきやうの心なり
ちゝみかとの御をしへ　秘 夢の御つけなり
御かへりの給ふ　源のあかしへうつり給はんとおほしさためて使に御返事をの給ふなり
しらぬせかいに　秘 源の御返事なり　聞 御返事の詞なり文にはあらす　私都へも遠からぬ程なれと源なとの御心にはしらぬ世界とおほすへき事とわりなり
られしきつり船をなん　河 「波にのみぬれつる物を

吹風のたよりうれしきあまの釣船　河の引歌よく叶へり　弄に引歌花にもあり如何

かきりなくよろこひかしこまり　秘入道のよろこふなり　聞入道の歟（はイ）と云々　私しほちの船よそひて

まゐれりと自身御迎に参れりとみゆ

れいの風　秘順風なり御迎に來りし時のことくと云ふなり

とふやうにあかしにつき給ふ　花播磨國風土記云難波高津の宮の御時明石の驛家駒手の御井のくすの木をもて船につくる其船のあしのはやき事とふかことし一かちに七波をとふによりてはや鳥と其船を名付朝夕此船に乘りて御食を供し御井の水をくむある時この船にのらすして捨られたる時人の歌によめる「住吉の大倉むきてとへはこそはやとりとはいはめいつれはやとり　今案明石の浦よりいてゝとふやうなるといへる風土記の心に叶へり

あやしきまてみゆる　秘よのつねならぬ順風をいへり　聞牛得ちかけれともそれにも過てはやくつき給ふとなり

はまのさまけにいと心ことなり　秘入道のすみかのあたりなり

人しけう見ゆるのみなん　秘すまよりは人もあるよしなり　或抄前にすまにて入道にしつかにかくろふへきくま侍りなんやとおほせられし御心にてかくおほすなり

入道のらうしめたる　聞領するなりしめたるも同心なり前播磨守なる故なり

海つらにも山かくれにも　入道の領中所々におもしろき家居ともをしめたりとみゆ岡邊の宿なとも其内なるへし

けうをさかすへき　花花をさかするなといふかことし興を盛にすへき心なり　弄可催興の心なり

なきさのとまや　是より所々のさまをいひつゝくるなり

後の世の事を思ひすましつへき山水のつらに　おもひすましつへき山水おもしろく書つゝけたり

三昧をおこなひ　秘言去纏縛就解脱なり　弄種々のかまへなり

秋のたのみをかりをさめ　秋の田のみとかりたる詞なり

のこりのよはひつむべきいねのくらまち　花いなくらのある町なり　拾遺集に屏風に翁のいねはこはするかたかきて侍るところに　忠見「秋ことにかりつるいねはつみぬれと老にける身そおき所なき

此濱のたちに　是明石の入道常に住所とみゆ

舟より御車にたてまつるほと　源のはまのたちへおはするほとなり

ほのかに見たてまつにより老もわすれ　船中は夜中の事なれはたゝ今源をはしめてほのかに見奉るなり

すみよしの神をかつ〲　秘入道か本意ある故なり弄同

月日の光を手にえ奉り　秘入道の夢に見し事にたよりあり弄同　花に若菜巻にありかつ〲いひ出したり以上秘

えもいはぬ入江の水　聞こゝの庭に入江なと作りたるなり明石の浦の入江にはあらす

ゐにかゝは心のいたりすくなからんゐしは　秘妙なり詞なり

月ころの御すまひ　秘すまをいへり

御しつらひなとえならすしてすまひけるさまなと　御しつらひは源のおはしますかたの事なりすまひけるさまとはこゝの家居のさまをいふ

けに都のやんことなき所々に　聞都の住居は何事もかきりあるが田舎なとにては仕たきまゝにするほとに見所のあるやうなるなり

京の御ふみとも　弄京の御使はすまにとゝまりたるを又めしたり

まゐれりしつかひは　秘前に参れりし紫上の御使なりすまにとゝめ侍りしを只今めしよせ給うて返事を給はるなり

いみしきみちに出たちて　秘かくちのそこをとほるはかりのひふりいかつちのしつまらぬ事は侍らさりきなといひし事なり

御いのりのしとも　是も京への事なり今度おそろしきめにあひ給へるさま又京よりめしあるなと有し事ともなるへしつよく御祈なとすへきよしなるへし

よみかへれる　藤つほへは源より蘇生なとしたる様に申し送り給へるなり是も源の密通の事なとの罪

にかゝるめにはあひしにやとおほす故にかやうに申給へるなり

二條院のあはれなりしほとの、風雨をしのきてあなかちなる御心さしを見せたる御使のほとをおもふべし

うちおきうちおきおしのこひつゝ　涙にむせひてかきかね給へるさまなり

返す〳〵いみしきめのかきりを　秘父の詞なり弄同

世を思ひはなるゝ　なへて世もいとはしく成たるなり

かゝみを見てもとの給ひし　秘紫上の歌すまの卷にみえたり「わかれても影たにとまる物ならは鏡をみてもなくさめてまし

うれはしさはさしおかれて　秘今一度あひみん事をおもふとなり　私なへての世はいとはしくおほえなから鏡を見てもとの給ひしさまを忘れかたく今一度み奉らてやとおもふによろつのうれはしさもさしおかれて戀しきとなり

返源紫上
はるかにも思ひやるかなしらさりし浦よりをちに浦つたひして　秘第三句面白し須磨もあかしもわかしらぬさかひにうつり給ひし心なり弄同

夢のうちなるこゝちのみ　聞いまた本心になきとなり

いとみまほしきそはめなるを　秘さふらふ人々のそはめなり弄同　文のさまをゆかしく思ふなり

おの〳〵ふるさとに　秘人々故郷へ言傳をするなり　聞筆者のおしはかりてかくなり

あさりする海士ともほこらしけなり　「あさりするよさのあま人ほこるらしうら風ぬるみ霞わたれり　拾ホコル也

あまのいはや　只あまのすみかなるへし又引歌なとある歟

こゝはまたさまことに　秘すまよりはまさりたるなり　人しけきをいとひ給ひしかとも御なくさみのおほきとなり

いみしう思ひすましたるを　此入道おこなひすましたる物からむすめの事を猶もてあつかふを云ふなり

もらしうれひ　源へももらし申すなり

御心ちにもおかしと　花若紫卷に北山にてよし清か

物かたり申せし事なり　秘弄同　源の御心ちなり
見やこの人も　秘紫上なり
いひしにたかふ　河「程ふるもおほつかなくもおもほえすいひしにたかふことはかりなり　秘引歌に及へからす紫上のおほさん所もはゝかりあれはこなたよりうち出の給ふ事なきなり　弄引うたもありまた歌ならすとも也　聞紫上いつくへもともなはんとの給ひし時かゝるみちに妻子を具する事はなき事なといさめてとゝめおき給ひしに今又さやうの好色のあらんはいかゝとおほすにやそれをいひしにたかふといふにや
けしきたち給ふ事なし　こなたよりすゝみ給はぬさまなり
ことにふれて心はせありさま　明石上のありさま心はせもおのつから見給ふに心にくきなるへし是は源へすゝみて奉らんとおもふ入道の心よりさやうのありさまもをり／＼みゆるなるへし
ゆかしうおほされぬにしも　源も御心はとまるさまなり
こゝにはかしこまりて　秘入道の禮義ふかきさまなり　みつからも入道也
いかておもふ心を　秘むすめをたてまつらんの心なり
六十はかりに　入道のとしなりとしよりたれとさはやかなるなり
おこなひさらほひ　花勤行によりてやせさらほひたる體なり　河髏　莊子に見ゆ　秘かけりとこひたるなり　秘やせ／＼なる體なり弄同
人のほとのあてはかなるにや　あてなるは高貴なり大臣の子にて此入道の種姓もいやしからぬ事をいふなり
うちひかみほれ／＼しき　うちひかみとはあしさまなる心にては有へからすよのつねの人にたかひたる所のたてたる心ある人なるへし
いにしへの事をもみしり　老たる者あれは先代の事をもみ來るなるへし
としころおほやけわたくし　秘源は年來隙もなき故によくたちいりてもしり給はさりし事なと物かたり申さまなり
かゝる所をも人をも　秘かゝる所をも御覽せすはと

おほすなり人をもとは入道のよのつねにかはりたるさまをいふなり又年ふりかゝる物語なとのめつらしくおほさるゝによりてなるへし
かうはなれきこゆれとも　かくは馴きこゆるとなり
けたかう心はつかしき　秘入道の心なり源のけたかきさまなり
わかおもふことは　さこそいひしかとは源をむかへ奉りたらは娘の事を申出さんとたくみしか御心はつかしきさまにつゝまれて思ふ程もえ申さぬをは母君となけくとなり
さうしみは　秘入道の娘の事なり弄同
大かたの人たにめやすきは　明石は京ちかけれと又田舎なれはよのつねの然へき人さへみえぬ所といふなり
見奉りしに　垣間見なとなるへし
身のほとしられて　源の御さまかたちをみておよひなく思ふ心なり
おやたちかくおもひあつかふも　父母の色々に此事をもてあつかふを似あはね事とはむすめの思ひなから中々思ひよらぬよりはむすめの心にもかゝるとなり
卯月になりぬ衣かへ　入道の方より調へ奉るなり
御丁のかたひら　勿論夏冬の更衣にかふる物なり
いとほしうすゝろなりと　弄非分なる事なり
あくまて思ひあかり　秘源をあくまて思ひかしつきたるにおほしゆるすと也私此義如何入道の心思ひあかり何事も美麗なる故におほしゆるすなるへし源をもてあかめて色々に馳走申す事を何とも思はぬ入道の心なるへし
京よりもうちしきり　二條院なとより
いつかたとなく行へなき　とこともなくいはんやうもなく戀しく思ひやらるゝなるへし
めのまへに見やらるゝは　淡路島明石より見わたしと云々
あはとはるかになと　「淡路にてあそゝはるかにみし月の近きこよひは所からかも　躬恒　花みつね歌のあはとは阿波崎湊イなり此歌のあはとみゆるは海のうへに泡のやうに淡路島のうかひ出たる心也日本紀にも湖水のあはこりて島となるといふ事あり
秘躬恒か歌淡路にて云々此歌は阿波渡成へし花く

はし
源
あはとみる淡　の島のあはれさへのこるくまなくす
めるよの月　秘 是は水の泡成へし此さへの字は躬恒
か歌に詠せし時の（渡イ）あはれさへのこらさるよしな
り　弄 あはとは阿波崎也但あはとみるは海の泡の
やうに淡路島のうかひ出たる心也　一説むかしの
歌によみし月のあはれさへと成へし引歌花　聞此
うたさへの字面白し又此卷にはさへの字に心を付
へし
やすからすあはれに　きく人の心の感にたへぬ心な
り
かうれうといふ手を　花 廣陵散は琴の秘曲也嵇康か
花陽の亭にして神人にあひてつたへたる曲也此神
人はむかしの伶倫の變化なり　秘 琴の秘曲也河
海にみえたり弄同　河 晉書嵇康傳曰嵇康嘗遊洛西
暮宿華陽亭引琴彈夜分忽有客詣（諸之イ）云稱是古人而康共
談音律辭致清辨因索琴彈之而爲廣陵散聲調絶倫遂
以授康仍誓不傳人亦不言其姓字
雜抄云嵇康字叔夜晉時譙國人也康所居之處毎聞有
人聲（聞イ）悽切康及覓不有人後復同聲康更尋探見一髑髏

蘆貫眼匪而生康見愍之乃収爲好埋葬從是以去不聞
悽切之聲有須（項イ）於夜中夢見一人曰我是伶人也然我骸
骨散野爲蘆所傷不辜痛切蒙君憐愍荷德之深所相報
命授廣陵散以酬君德康於夢中度之及覺宛然即得靈
異志曰嵇康宿華陽亭操琴而聞空中稱善中散曰君何
不來此答云身是古人幽歿出此數千年矣聞君彈琴幽
曲清和故來聽而就終殘毀不宜及以琴授之作曲亦不
出當唯廣陵散絶倫中散受之誓不得教他人　或書云
嵇康字叔夜與向子期友善子期縛屋至家者爲妖精被
侵叔夜客子期終夜調琴及半夜深骨骸付陰來也叔曰
阿誰答曰莫怪我彼時之樂士也名伶倫栖此處久矣然
屋于我胸中積有年憂之故來訴所以已汝爲名祛之爲
幸爰授廣陵散樂名　謝云自是叔夜琴名大震于世矣晉
帝詔叔願令授后不應（昔イ）詔是以終被誅嵇康將刑東市顧
視日影索琴而彈之曰晉表孝尼嘗以吾學廣陵散吾毎
勤之（新イ）廣陵散於今絶矣
かの岡への家も　明石上のすむかたなり
このもかのものしはふるひ人とも　河 日本紀云折枝
葉人木の葉のちりかゝりたるをうちはらふしつの
めしつのをなとなりたとへは木葉なとかきあつむ

る仙かつなり　一說云皺古人云々はあるふるき人
也云々老人の事なり俊成の女の說只いやしきひと
なるへしはの字濁れは柴ふるひ人とひの字を入て
よむなりはの字清はひの字を除て讀なりその儀は
老て皺なとある人となり
はま風をひきありく　秘おもしろきかき樣なり俗に
いへる風をひくなり所にはやる事を人のまねする
さまをかくいひなせり
くやうほうたゆみて　供養法也　花三密六度の行法
なり
さらにそむきにし　秘入道のまいりて申なり
のちの世にねかひ侍る　河極樂の管絃歌舞の菩薩の
事なり花同
をり／＼の御あそひ　源の姓(性イ)の事をおほしいてたる
心中なり
かきならし給ふるこゑも心すこく　秘さま／＼の事
心にうかひたるによりて心すこかるへし怨若其吟
悲の心なり弄同
ふる人は　明石入道なり
岡へにひはさうのこととりにやりて　源の彈し給へ

るは琴なり明石入道合奏の爲に琵琶箏を取よする
なり
入道ひはのほうしに成て　河兼盛集云琵琶の法師の
ある所「四のをにおもふ心をしらへつゝひきあり
けともする人もなし　花琵琶ひきてありく法師な
り當時の盲目のことし　小右記云琵琶法師令忌才
難給小祿云々寛和元七十八むかしは盲者の琵琶を
ひきてありきしなり弄同
めつらしきて　河琵琶の手なり　入道のひく也
さま／＼いみしう　花よろつ源の具し給ひたるよと
入道奇特に思ひ奉るなり　河風俗通曰箏秦聲なり
蒙恬所造五絃筑聲幷凉二州箏形如瑟秦多善
箏者故云秦箏釋名箏施弦高箏々然　或說漢恭帝素
女をして五十絃の琴を皷せしむ琴聲悲帝禁不得破
て二十五絃瑟(琴イ)とす秦皇破作十三絃今の箏也云々
又天竺にも仙道大王妙解彈箏を有都毗奈耶と云り
はる／＼とものとゝこほりなき海つらなるに中々
春秋の花のさかりなるより　秘卯月はしめの景氣お
もしろきさまを至極あたらしくかきなせるたくひ
なきうへに定家卿みわたせは花も　葉もなかりけ

り浦のとまやの秋の夕暮ととりなされたる又深重
なるとなり　弄定家卿歌にみわたせは云々の歌は
是よりよみたるへし
くひなのうちたゝきたるは　河「また宵にうちきて
たたく水鷄かな誰か門さしていれぬ成らん秘弄引
歌同　此一段は明石の濱の家にての事なれは物の
とゝこほりなき海つらとは云り又此時節をいふに
夏の事なれは花紅葉のさかりなるよりはしけれる
かけは色なき物の中々物さひしくあはれそふへし
くひなのうちたゝきたるも物はかなく誰か門さし
てときゝなされ哀もまさるやうなれは時に感して
心さしをあらはす事はかゝるとりけたものゝうへ
にても同し事なれは物のねすゝむる中たちと成ぬ
へき心なり
ねもいといたうなる（になういつる〳〵）ことゝもを　琴は絃の惣名なれ
は琴箏にかきらす琵琶をもいへるなりよくなるこ
とともは物とももといふ心なり
これはをんなの　秘箏の事なり　源の詞なり
入道はあひなううちゑみて　是は入道のむすめの事
を仰らるゝと思ひて悦てうちゑみたるさまなり前
に源の大かたにの給ふといふはたゝ女のひきたる
かよきとは公界に仰らるゝ心なり
あそはすよりなつかしき　入道詞なり女とても源の
あそはすよりなつかしきさまをいふ事はあらしと
なり
なにかし延喜の御手より　花あかしの入道ハ箏は延
喜のみかとよりつたはりて三代に成ぬるを女のあ
るか聞とりたるとは明石上の箏の上手なる事を入
道のかたり出たるなりせんわうとは延喜の御門を
申なり　秘河海説然へし代は七代なれと血脉三代
とみえたり　弄箏琵巴の傳の次第をいへり　河或
古人釋云延喜帝令彈琵琶給事無所見如何云々因玆
清和の御門とかきて前大王をは南宮式部卿親王貞
保と釋したることもある歟この事不得其意物語の
面は箏のことゝ見えたり明石入道もてまゐれる箏
のことを源氏すこしひきてこれは女のなつかしき
さまにてしとけなくひきたるこそおかしけれとあ
るに入道あそはすよりなつかしきさまなるはいつ
このか侍らんなにかし延喜の御時よりひきつたへ
とかけり無不審哉又明石上の事を嚴親白歎の返事

にも源氏あやしう昔よりしやうは女なんひきとる物なりと有かつは煙は同しかたになひかんと詠する時も源氏琴をかきならされしに彼明石上源にそそのかされてしやうのことをしのひやかにしらへたる上手めきたりあくまてひきすましこゝろにくくねたき音は入道宮の御琴の音にもまされりと云云天下無雙と聞えたり

私勘　箏相承事

寛平法皇 光孝皇子　昭宣公男母人康親王 本院左大臣　或貞保親王子云々 宇多皇子　母更衣周子 弟子四皇子

●宇多院―時平―醍醐天皇―┬勤子内親王 唱女延喜皇子
母太皇太后班子女王母贈皇太后胤子
├實頼 小野宮關白 貞信公男 清愼公也　村上天皇 天暦帝也 母皇后穏子
└伊勢 伊世守繼蔭女 母寛平御女

河或人難云朱雀院を天慶帝に准すといはゝ延喜よりいくはくの時代をへす明石入道延喜帝より三代といへる久しく聞えたるにや答云縦延喜帝御在世なりとも御孫弟子なるへきにあらす殊更主上なとは直には御傳授かたき故に其御弟子に習たる人は三代ならすや況治世も巳二代なり其疑あるへからす

あやしうまねふものゝ　秘入道女の事をいへり

せん大わうの　弄延喜の事と云々花にせんわうと有　秘一本前王と有り花鳥是によれり青表紙は大王とあり大王とは親王をいへりしからは延喜帝の誰人そ親王につたへ給へるを其御手より此入道の傳へたるなるへし大王と侍る尤可然なり

山ふしのひか耳に　河山ふし野伏とはたゝ世をのかれて山林にふす心なり熊野山の山伏にかきらす　花箏しらへける女のあたりを過けるにこれをきゝてはいかにといひけれは壽玄法師拾遺作者「松風にみゝなれにけるやまふしはことをことゝも思はさりけり

松風をきゝわたし　河「琴のねにみねの松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけん　齋宮女御集　秘弄不引之

いかてこれしのひて　秘源の御耳に入たきとなり

涙おとすへかめり　明石入道のさまなり

君ことをことゝも　花源の思ひ給へるやう明石入道も女もこれほとの上手にてはことをもことゝ思ふ

ましかりけるあたりにてわかひきけることのはつかしさよとておしやりたまふとなり上の詞に山ふしのひか耳に松風をきゝわたすといへる壽玄法師か歌の詞をとりてことをことゝもきゝ給ふましきとはいへり

秘松風に聞しよとておしやり給ふなり花鳥の義可然　弄引歌松風に云々明石女上手にて源のしらへをもよくもきくましきにとなり　私琵琶をことゝも琴をことゝもいふやうによめり只事をことゝもいふやうによみて然るへし

あやしうむかしより　弄源の詞なり

さかの御つたへにて女五宮　河嵯峨天皇女五宮繁子母文屋氏久子嬰レ病爲レ尼此公主箏事如血脉無所見但上古之師弟不詳管絃者名人中猶以多之歟所謂嵯峨天皇箏玄上宰相琵琶大名富イ韞門笛井筳村上御師也敦忠朝臣笛琵琶等これ也　或又相承の人なき時其流斷絶すれは血脉入さることとも有となり　今女五宮も其餘流なきよし見えたる歟　秘繁子也但血脉にはたしかに不載之さる程にとりたてゝつたふる人なしとはいへる也　弄女五宮の事を源氏物かたりし給ふなり嵯峨の御門の女五宮の上手にておはせし事なり

たゝいま世に名とれる　嵯峨の女五宮の御說をうけつく人もなくて今はわつかにのこれるとなり

手のこまかに調らぬさまかいなての心やりはかり　手のならさる心なり心は行て手のならさる心なり

秘明石の女のひく事なり弄同

こゝにかうひきこめ　秘入道詞なり

きこしめさんには何のはゝかりか　秘入道詞なり

聞明石上を源へゆるし奉るていの詞なり

おまへにめしても　秘めしてもとよみ切へし此語影略してみるへし

あき人の中にてたにこそふることきゝはやす人　秘琵琶引よくかなへり商人の妻なとのひきたるをもきゝはやす人のありしとなり弄同　花文集の琵琶引は白樂天なかされて江州の司馬になれる時の事なり源氏も又須磨の浦にこもり給へる折なれは尤便ありかの琵琶ひける女はあき人のめになれる物なりふること聞はやすとは樂天をいへるなりあかしの入道わか女をいやしき商人の妻にたとへ申給へり上には箏の事をいひて是より又明石上の琵琶

にも達したるよしを申侍らんためにあき人のこと
をいひいたせり上を結ひ下をおこす詞なり物語の
作りさま面白く書なしたるへし
ひはなんまことの　秘此語決前生後の詞也花鳥にみ
えたりかやうの筆法心をつけてみ侍るへし　河長
安倡家女嘗學琵琶於曹穆二善才年長色衰委身爲商
人婦（白氏文集琵琶行）白樂天江州司馬に左遷せられて潯陽江
上にて船中に夜琵琶を弾するを聞て錚々然として
京都の聲ありと感せし心なり我從今年辭帝京謫居
臥病潯陽城潯陽地僻無音樂終歳不聞絲竹聲今夜聞
君琵琶語如聽仙樂耳暫明といへり　河明石上琵琶
にも達したるよし入道源氏にかたり聞えたるなり
彌以前は箏と聞えたり
いかてたとるにか　明石の上の琵琶のさまを入道の
申なり弄同　花此たとるはたと〳〵しき心にはあ
らすよく琴知りたる心にいへるなり　秘たつねし
りたるなり求なり
あらき浪のこゑにましる　女の事を入道の憂ひ申也
すきいたれは　秘すき〳〵しきなり　好色めくなり
女を源へ参らせん心を入道のみするをいふなり

おかしとおほし　秘源の心なり
さうのことゝりかへて　秘入道にひかせ給はんため
なり弄同　花入道はしめは琵琶をひきたるを又箏
を給はりてひかせてきゝ給ふなり
けにいとすくして　弄すゝみたるなり　秘すくして
とはすゝみたるなり又は當世ならぬ手を引なりふ
るめかしきなり
いまの世にきこえぬ　弄古めきたるへし
てつかひ　河手仕
ゆのねふかう　由音秘同　秘左手なり　花由の音は左
の手にて琴の絃をゆする事なり是に上手下手ある
なり
いせの海ならねと　河伊勢乃宇美濃支與起名支左乃
之保加比爾名乃利曾也津末牟加比也比呂波牟多末
也比路波牟（催馬樂伊勢海）明石の浦なれは伊勢の海ならね
とゝいへる也秘同　聞所のちかひたる故に注にか
き入也たるなり云々
こゑよき人に　弄さふらふ人とうたふなり
われもとき〳〵　花源なり
ことひきさし　明石の入道源のうたひ給ふにめつる

なり　ことをひきさしてなり
さけしゐそしなと　河殺は詩にも酔殺とつくるなり
秘愁殺すなと同心也　花殺の字は愁殺憐殺なと詩
にも作れりつよく人をうれひしめたる心なりしゐ
そすといふも酒をつよくしひたる心なり
はま風すゝしくて　所の景氣と良夜のさまとをよく
よく思ふへし
かきくす（つイ）しきこえて
おかしきものゝ　或抄是はまことにおかしきなり面
白きにはあらす源の心なり
あはれときゝ給ふふし〳〵もあり　源の心中なり
いとゝり申かたき事　秘入道おもひあまりて（たへかれてイ）娘の事
を申なり
おほえなき世かい　秘思ひかけぬ事にいへり
この十八年に　聞若菜の下に委くみえたり　むすめ
のとし十八歳よりはたけたるへししからは願をた
てはしめしより今年まて十八年に成へし　弄明石
女の歳歟　北山物語不審　私秘の義然るへし
めのわらはのいときなう侍し　聞入道の詞に似合た
り　花明石上のいときなかりし時よりの事をいふ

めのわらはとむすめを云
ひゐよるの六時のつとめ　入道の後世のつとめなり
前の詞に後の世をつとむるさまともあり六時は晨
朝日中日没初夜中夜後夜をいふ也
たゝこの人をたかきほい　女の位たかくとおもふか
入道の本意となり
くちをしき山かつと　秘入道みつからの事をいふな
り
おや大臣のくらゐをたもち　秘入道の親なり弄同
つき〳〵さのみ　秘次々なり　秘此入道は大臣の子
にてみつからも中將なりしを辭して播磨守に成て
つひに彼國にてかしらをおろしたるは事の外に成
り下りたる事なり是程つゝおとりゆかはいかなる
身にならんそとなり
むまれし時よりたのむそ　明石上の事なり　秘夢想
ありし事なり弄同
ほと〳〵につけてあまたの人のそねみ　花若紫巻に
代々の國の司なとさる心はへみすれとさらにうけ
ひかすと有あまたの人のそねみを思ふとは是をい
へり　秘代々此國の守より所望ありしにも領状な

かりし事なり良清なとも此たくひなり

せはき袖にも　私勘にのすれとも引歌に及はさる歟

花後拾遺後朱雀院むまれ給ふて七日に「いときなき衣の袖はせはくともこふのうへをはなてつくしてん　公任　同むまこのをさなきことを「思ひやれまたつるの子のをさなきを千世もとなつる袖のせはきを　藤三位

浪の中にも　聞若紫巻に良清かかたり申しさまなり

おきて侍る　私物をおきつるといふなりかやうにせよとおきてを置たる心なり

うちなきて　入道のさまなり

君も物をさま〳〵　源も心中の物思ひにひかれて感をもよほすなり

よこさまのつみに　秘源の返答なり弄同

かくさたかに思ひしり給ひける事を　秘まへの入道の詞に我君おほえなき世かいにかりにもうつろひおはしましたるはもしとし比老法師のいのり申侍ける神佛のあはれみおはしましてしはしの程御心をもなやましたてまつるにやとありつる詞をかくさたかにとはの給へり

秘何故罪なくしてかゝる世界にさまよふそと思ひつれは今宵の物かたりによりて分別したりとの給ふなり

都はなれし時より　くつをれは精進なとの心もなきなり　都を出給ひてからは精進かちにおこなひなとして過し給ふ事を源の宣ふ也世の常なきは盛衰の理なり

いたつら人をは　秘罪におたり給ふ身なれは卑下しての給ふなり

うれしと思へり　入道の悦思ふなり

明石入道ひとりねは君もしりぬやつれ〳〵と思ひあかしのうらさひしさを　秘入道の歌なりそなたよりも此方の獨ねをはしろしめしたるかとなり　弄女のことをは思あはせたり・河六帖「思ひつゝなけきあかしのはまによるみるめすくなく成ぬへらなり私但此歌に不及歟

ましてとし月　聞かりそめの御旅ゐにもひとりねは物をおほししるらんましてと我年月をへて思ふ心を憐み察し（らイ）給へとなり

されとうちなれ給へらん　弄源氏のなれぬ旅ねはま

じてとなり　花うらなれたるとは年久しく浦にすみなれたる人は波風の音もいまはしめて聞人のやうにはあるましき心なり　秘我ゝ旅の身なれは一しほのかなしみもあると也　潮聲（潮色イ）偏恐初來客海昧只廿久住人此心有　和歌の處に可引　私秘に源のかりそめの御旅居たに物うかるへしまして年月をふる心を憐察し給へと入道の申を又打返しての給ふ詞也我は聞なれぬ波風の音なり入道は住なれてさもあるましきとなり秘抄にひける詩の心面白し歌も此一義なるへし　河うらなれたるや（本ノマヽ）うらのなみかな風はふかねともさゝら波たつ萬歳催馬楽呂（源返）たひ衣うらかなしさにあかしかねくさの枕は夢もむすばす　花うらかなしきとは心かなしきといふ心なりうらは心をいふうらさひしきなといふも同し事なりあかしかねは所の名をそへたり　秘うらかなしきはたゝ物かなしきなり花鳥に心かなしといへる如何

數しらぬことゝも　秘草子地也弄同　私入道のいひたる事共さへうるさきをひかことましりにかきな〳〵したらはいとゝをこかましからんとてかゝぬとの義なり

おもふ事かつ〳〵　秘入道の心中なり　私思ふ事のかたはしを源へ申出してすこし心をはるけたるなり

又の日のひるつかた　此物語申たる次の日なるへし

中々かゝる物のくま　秘人の心つかひあるへき事のをしへなりかた邊土なとゝてあなつるましき由なり　私箏琵琶の事なとの物語の體又入道もさる古人なるゆゑにあなつりにくゝ推量し給ふなり

こまのくるみいろのかみ　高麗胡桃色紙也　河高麗紙也くるみ色とはうらは白く表はうす墨の色なる紙なり河の引歌略之

（源）をちこちもしらぬくも井になかめわひかすめしやとの梢をそとふ　源はたゝ入道のをしへのまゝなりいつくをいつくとも分別なきとなり　私入道のうちかすめ申たる計をしるへにいつく共しらす詠わふるとなり

思ふにはとはかりや有けん　私ありけんとは草子地に察してかゝ也　河古今思ふには忍ふることそま（逢にしかへはさもあらはあれイ）けにける色には出しと思ひし物を　業平弄秘引之

入道も人しれすまち　秘御文をまつなり
しるけれは　私源の御使の入道のこゝにある體を推量するなり
まばゆきまて　私かゝはゆきなといふ體なり　秘饗應するなり　秘ゑはするは酔はするなり
うちに入てそゝのかせと　私入道の女に御返事かゝせんとすゝむるなり
いとはつかしけなる　私明石上の心中也源の文のさまのはつかしけなるにいよ〳〵御返事申さんの心なきなり
よりふしぬ　明石上の體なり
いともかしこきは　秘文の詞なり
たもとにつゝみあまり　うれしさを何につゝまんの歌よりかけり秘同　河「うれしさを昔は袖につゝみけり今宵は身にもあまりぬるかな　「うれしさを何につゝまんから衣たもとゆたかにたてといはましを
さらに見給へも　秘むすめは中々と思ふとなり
さるは　秘さはあれと也かたしけなきは御返事もいかゝと覺え侍れと又うちおくへきにあらすとなり　弄さるはとかける心は御返事をかきて參らする事かしこさにはゝかりあれとも又御返事なくてやみなん事ならねはといふ心なり
返入道よめり　なかむらんおなしくもゐを詠るは思ひもおなし思ひなるらむ　秘源の思ひも女の思ひも同し心成らんとおしはかりたるなり弄同　私わきよりの返歌なれはかくよめりやかて詞にとなん見給るとつゝけてかけりよく聞えたり
すき〳〵しや　秘入道のおしはかりて申侍るもすきすきしき事といふなり弄同
みちのくにかみ　河檀紙の名なり陸奥よりすきいたしけるなり萬葉にみちのくのまゆみのかみといへり檀はまゆみの木のかはなり
けにもすきたる　秘すき〳〵しやとかきたる文の詞をうけておほす源の心中なり
めさましう　私よのつねのけさう人にはかはりてあなたよりすゝみて申又かやうにふしたる入道の心をめさましくみならはすおほすなり
玉もなとかつけたり　河後撰「いせの海に年へて住しあまなれとかゝるみるめはかつかさりしを　伊

勢　玉はほめたる詞なりすくれたる裳といふ心なり海邊のことなれは藻によそへていへるなり　花　玉もは後撰にいへる志賀のはらへよりおこれり黒主か歌におきの玉もをかつく身にしてといへる心なり纒頭に女の裝束をかつけたり裳は女のきぬにそふ物なり　弄に花鳥の義を用ふ　女の裝束なれはや裳を藻によせていへり海邊に便有　おきの玉もをかつく身にしてとも云又涙にうかふもくつなりけりともいへり
私後撰十五雜上に志賀の唐崎にてはらへしける人のしもつかへにみると云侍りけり大伴黒主そこまてきてかのみるに心をつけていひたはふれけりはらへはてゝ車より黒主に物かつけゝるその裳のこしにかきつけてみるにおくり侍ける黒主　何せんにいそのみるめを思ひけんおきつ玉もをかつく身にして
又の日せんしかき　秘　源よりつかはし給ふなりせんしかきはおほせかきなり　花　せんしかきは仰せかきなりさきの文を入道の返事かきたるを云なり私さきの文やり給ひし次の日なり

源 いふせくも心にものをなやむかなやよやいかにととふ人もなみ　河やよやはやしばしなり古今にやよやまて山時鳥ことつてんといへり　花やよやは人をよふにやといふやうなる心なり　慈鎭和尚の歌に「やよしくれ物思ふ袖のなかりせは木の葉の後に何をそめまし是も時雨をよひていふ心也　弄戀しともまたみぬ人のいひかたみ心に物のなけかしきかな　秘　引歌弄に同此歌よく叶へりやよと誰にいふへき人もなきとなり　私いふせくもとは不審なり心もとなく待かねたる體なりやよやとこととふへきたよりもなく心にのみ物をなやむとなり
いひかたみ　私此詞にて前の引歌よく聞えたり又歌の心も是にて了簡すへし
このたひはいといたうなよひたる　花　さきの文をこまのくるみ色の紙にかき給へるははしめなれはちきの返事はよもあらしと思ひ給てすき〳〵しき紙にかゝれ侍りき案のことく入道のせんしかきなり此度はさりともみつからそ返事し給はんすらんと思ひてなよひたる薄やうにかき給へりなよひたるとはうつくしきかみをいふなり　秘　わさとけふの

文は艶書たちてかき給ふ也　弄そへ(先イ)はしめたる時はなよひたるさまならて次第にかくのことくなり

めてたしとはみれと　明石の上の心なり

なすらひならは　秘たくひなくはおもへとも我身に相應なき事と卑下したるなり

なみたくまれて　明石上の心かやうの事につけて身の程に恨のいてくるなり

れいのとうなきを　河動なきなり

せめていはれて　入道にそゝのかされてなり

あさからすしめる紫のかみ　秘たきしめたるなり　花あさからすしめたるはたき物の香にとめたる也

返明石上
おもふらん心のほとやゝよいかにまたみぬ人のきゝかなやまん　花「戀しともまた見ぬ人のいひかたみ心に物のなけかしき哉一條院　今案源氏の歌女の返歌共に一條院の御製をとれるに似たりまた見ぬ人は明石上の我身の事をまたみぬとは讀る也　弄同歌詞(イナシ)にてよめり女の身を卑下したる也源氏のまたみもし給はてきゝなやみやし給ふらんさやうならぬ身なりとなり是又一義也また見もし給はては聞なやみもし給はしとの義なり又またみぬ傍人のあつかひを思ふ心なり　秘源の御心をしらさるとなりいひかたみの歌をうけていふ也下句(はイ)源のいまだ見もし給はて聞なやみもし給はしの心なり一目も御覽しもせすして聞給ふはかりにてはいかゝと也又はまたみぬ傍人のあつかひをとなり只前の義然るへし　私一義源の覺しめす御心の程いか成そしりかたしそれを何とこなたから聞わつらはんそとなり又源の覺しめす心のほといか成そ何ともおほしめすましきとなりなせになれはまた我を見もせぬ人の聞なやみ給ふへきことかは聞なやむましき事なりとなり猶よく吟味すし

手のさまかきたるさま　明石上手も歌も上手なるよし末々にもみえたり

京の事おほえて　秘今はかやうなる事をも思ひはなれしを此事ゆゑさらに京の事を思ひいて給ふとなり

二三日へたてゝつれ〴〵なる夕暮　弄此心面白し人もみしりぬへき程をおしはかりてと次の詞にいへるにかなへり如此の心つかひの事帚木卷にも有物うらめしき折待かほなるらん夕暮なとゝ有り

秘此心面白し人もみしりぬへき折節をはからひてなり帚木弄同

にけなからす　御返事なとのさまのつきなからぬを云ふなり

心ふかく思ひあかりたる　明石上の體を源の推量り給ふなり明石上の此心もちゐ末にもみゆ

みではやましと　源の心なり

よしきよからうして　良清か領してなり明石上に前より心かけたる由若紫に見ゆ

めのまへに思ひたかへん　秘良清か我物のやうに物語申たりしに今めの前にはいかにしてむかへてんとおほすなり

人すゝみまゐらは　秘入道の方よりまゐらせはよかるへきとおほすなり　私大かた女のかたよりすゝみまゐる事はあるましき事なれと是は入道のかたよりすゝみて申出したるゆへかくおほすなり

さるかたにでもまきらはし　入道のすゝみて參らせは了簡なきさまにてさもあらんとなり良清か心の程を覺すなり

女はた中々　秘此女の心は源のあなかちにの給はすと思ふゆゑに心くらへなるなり

京の事をかくせきへたゝりて　弄須磨より此うらにうつり給て關のへたゝりたるなりいとゝ遠さかる心を思ふなるへし秘同　私明石上とことかよはしなとし給ふにつけしきりに京の事を戀しく覺し出らるゝ心あるへし

たはふれにくゝも　秘紫上を戀しく思ふとなり秘同
河「ありぬやと心みかてらあひみねはたはふれにくきまてぞ戀しき

しのひてやむかへん　花是は紫上の事なり　秘紫上を明石へむかへはやとの心なり

おほしよわる　須磨の卷に都を出給ふ時はかゝる人の思ふ人を具する事はあるましき事とおほしとゝまれる事もありされはいまかくおほすをおほしよわるとはいへる成るへし

さりともかくてやは　源の末たのもしく心つよく思ふなり

今さらに　秘源の遠慮なり　私是も前の出京の事に合て見るへし

物のさとし　恠異ともなり

三月十三日に神なりひらめき　秘とりわきて怪異あるなり須磨にて雨風の時の事なり弄同　花是は須磨にての事なり京にても同しやうに故院の御門の御夢にみえ給へる事なり　私河海に後漢の靈帝の后宋氏を讒言にて罪せられし後に帝の夢に桓帝の見えて后の罪なき事をいかりたる事をひけり略之凡おほやけのさとしの事菅丞相左遷して薨せられし後内裏に種々の怪異あり又神なりの事も延長の霹靂なといふ事思ひなそらへらるゝなり

みはしのもとに　菅丞相の事の時宇多の帝御階の本にたち給て延喜帝へ申させし事有此事延喜帝の罪五の内にあり

にらみきこえ　河瞰鬼文選　耶睨日本紀　睚眦新猿樂記　斜眼同遊仙窟

かしこまりて　朱雀の夢中の體なり

源氏の御事　草子の地也

いとおそろしう　朱雀の心なり

雨なとふり空みたれたる夜　空のみたれとは五日の風十日の雨に對して云り　河周公解夢書云周禮曰六夢一曰正夢二曰噩夢三曰思夢四曰寤（寐イ）夢五曰喜夢六曰懼夢　秘河海に六夢の沙汰あり　私太后の中給ふ詞也　無雨風之夜無憂喜體之時分明爲正夢云云

御めわつらひ給て　花朱雀院の御めわつらひ給ふ事は三條天皇即位の後御耳目あきらかならさる事を思ひよせたりそれは民部卿元方の靈によれり又寛算供奉か靈とも云り　秘花鳥に三條院の事有弄同

内にも宮にも　宮とは太后なり

おほきおとゝ　弄惡大臣前に任し給ふ成へし　秘二條太政大臣なり弘徽殿の父なり太政大臣に任し給ふ事みえす但前に有り一本おほちおとゝと云々

つき／＼におのつから　太政大臣の外公卿なとのうせたるあるへし

よわりたるやうなる　太后のわつらひ給ふ體なり

内におほしなけく　朱雀院の御心なり世のさわかしき事御目のわつらひ又太后のわつらひ給ふ事なとなるへし

猶この源氏　源氏歸參あるへきことを朱雀はいそき給ふなり

まことのおかしなきにて　無罪をつみせはかならす

天のとかめあるへきを朱雀の御心におそれおほしてなり

もとのくらゐをも　源氏を本官本位に復すへきとおほすなり●

世のもときかろ〳〵しき　秘太后の申給ふなり

つみにおちて　聞罪に堕てとよむ　私罪に畏てなり

三とせをたにすくさて　秘花鳥の説然へし　河毛詩曰東山周公東征也周公東征三年而歸勞士大夫美之故作此詩也　五罪は笞杖徒流死也しかれは徒三年と云心なり　弄流移の人六載にて歸洛叉三歳にてゆるさるゝこと獄令の文花鳥にありされは三とせをたにとの給へる悪后の心なり　花令書の獄令云凡流移人至配所六載以後聽仕即本犯不應流而特配流者三載以後聽仕令案流移の人とは流罪せられたる人を云それは六年の後は公役にしたかふことをゆるさるゝなり流罪のとかにおよはさる人のことさらに配流せられたるは三年の後つかふることをゆるさるゝなり今源氏の君はあらはれたるとかもなくて除名せられ侍りひさしくは六年早くは三年にして出仕あるへき故に三年をたにすこさてとはいへるなり赦に二色あり常赦と云は八虐罪をはのそきて其外を免せらるゝを云大赦といふは非常の赦ともいふ是は八虐以下の常赦にのそかるゝものまて悉くゆるさるゝを云之は人主のもつはらつかさとることなれは別勅にまかするなり源氏の君三年をへすといふとも赦免にいたりてはともかくも御門の御はからひたるへき物なるへし河海に徒三年の文を引たるはあやまり也五刑の中に徒罪と云は徒は奴なり人をやつこにしてせめつかふを云也流刑よりはかろき罪なり其中に一年より三年まて役に隨ふことあるを徒一年乃至三年なとゝいふなり　秘律第一名例第一云凡除名者官位勳位悉除課役徒本色六載之後聽叙免官者三載之後降先位一等叙唐律註除名者官爵盡既除放課役本色免官免者免所居官　愚案只今源氏は除名とも免官とも定まらすみつからしりそきたる人なりされは免官なりとも三年をこそおくらるへきものをといへるなり書様尤面白し花鳥にも令を引り猶律の文よくかなへり私右秘抄の奥に追て勘也今此處に註加物也　秘後漢書曰董卓傳曰董卓死後其時牛輔既敗衆無所依欲

各散去李傕等恐乃先遣使詣長安求乞赦免王允以為
一歳不可再不赦許之云々　私云此義前に被註也可令(ィ)
奥加之
きさきかたういさめ給に　私凡此太后は呂后に比し
朱雀を恵帝に比したり恵帝は仁弱なと史記にも有
之此朱雀も御心ぬるくおはします高祖の崩せられ
てのち呂后のまゝに政をして忠臣おほく罪せられ
たるそ恵帝の心やはらかなる故なり朱雀院是に似
たり
御なやみともさま／＼に　朱雀の御目も太后の病も
おもるなり
明石にはれいの秋は　是より又明石の浦の體を云也
ひとりねもまめやかに　源の御心中なり明石をの給
かけて中々御心うこきて如此なり
こちまいらせよと　秘女をこなたへまいらせよとな
り
さうしみ　秘此女なり
くちをしきゝはの　明石上の心なり　秘一任四ヶ年
の人なとの人にかたらひつく事はいやしきものな
とこそある事にて侍れとなり

人かすにもおほされさらん　秘自然御けしきもなく
てはとなり　私こなたへまいらせよなとあるはさ
のみおほしいれぬさまなると明石上の心に思ふな
るへし
およひなき心を思へるおやたに(ちィ)　父母のよのつねの
人には見せしと心たかく思ふなり
よこもりてすくすとし月　河世にましらすこもりゐ
たる也　花世にこもりゐたるをよこもりと云又
人のをさなき程をも世こもると云それは二葉の松
に千世のこもるなといふかことし　秘世中にもま
しはらさるさきこそとなり一たひ人にみえ侍りて
後させる事もなくては親のたのむ所なかるへきと
なり　私世こもるとは行末とほくさま／＼の事あ
るへき事をいふ末のたのもしき心にいへり
あひなたのみ　弄かひなきたのみといふ心なり秘同
私さもあるましき事をさもあらんとたのむ心なり
たゝ此うらに　源の謫居の間文かよはしけるを思出
にてやみなんと思ふなり
あまの中にくちぬる　是まて源に申かよふはかりを
思出に思ふ心なり

おやたちはこゝらのとし月　此段源のかくおはしたるは神にいのりしかひありと思ひなから不定に見せ奉りて御心とめぬさまならはいかに源にておはすともうらめしからん也佛神は目にみえぬ物なるをたのみて人の御心をもしらすみせ奉りてはいかならんと思慮する故に思ひわつらふなり

君はこの比の波の音に　源はたえすおとろかし給ふなり入道にの給ふなり

しのひてよろしき日みせて　入道の吉日をえらふなり

はゝ君のとかく思ひわつらふを　明石の母君は猶遠慮なるを入道はとまれかくまれみせ奉らんとおもふなり

てしともなとにも　花出家の後つかふ人をは弟子といふ源内侍のすけを宮の御てしといへる同し心なり　弟子とは眷屬ともをいふなり　已下花に同し

十三日の月の　弄八月十三日也秘同

あたらよのと　河「あたらよの月と花とを同しくは心しれらん人にみせはや秘同弄同　心もはれてみるよしもかな伊行釋　花あたらよは萬葉に新夜とも又惜夜ともかけり惜はをしむなりいたつらにあかさん事のをしき心なり

君はすきのさまやと　秘すき〳〵しきとおほすなり私すきたる歟

朱にて註之

夜ふかして　都なとの人聞をしのひ給ふなり

やゝとほくいる所なりけり　河岡邊の宿へおはする道のさまなり

思ふとちみまほしき　河思共萬葉　河「思ふとちいさみにゆかん玉つしま入江のそこにしつむ月影秘同聞引歌もろともに行てもみはや云々可勘之

戀しき人の御事を　秘紫上なり

やかて馬ひき過て　花すくに都へのほらはやと思ひ給ふなり秘同　弄京へ此まゝもゆかはやの心なり此詞弁に歌なとこゝにてのかさりにかけりえんなる詞なり

源秋の夜の月毛の駒よわかこふる雲井にかけれときハまもみん　河「久堅の月毛の駒をうちはやめきぬら（らんイ）んとのみ君をまつかな　秘都へあくかれて出たきのよしなり此段物語のかさりにかけりやかて岡邊

のやとの事をこそかき侍るへきを此歌なとをかける物語の餘情ふかき者なり
つくれるさま　秘岡邊のやとをいへり
木ふかく　秘木草なとをしけく(心つかひしイ)うゑたる成へし
いたきそ　心いたきまてなり　私苦勞して何とかなとつくりたる心成へし
海のつらはいかめしう　秘入道の宿の家はひろきさま也弄同
これは心ほそう　岡邊のやとなり物あはれなるさまなり
こゝにゐて思ひのこすこと　秘女なとの獨りねに思ひ殘す事あるましきとなり
三昧堂ちかくて　秘入道のおこなひつとむる所なり
むすめすませたる　明石の上のかたなり
月いれたるまきの戸くちけしきはかり　花定家卿の青表紙にはけしきはかりおしあけたりと有明石入道源氏を引導申すにつけてけしきはかりといふは源氏に此戸口よりいらせ給へとおもへる心むけにことさらはかりあけたる心なりけしきことにと云はもとよりみちひき奉るうへはこれよりいらせ給へとわさとかましくおしあけたるへし兩說ともに其謂なきにあらす人の好所にしたかふへし此月いれたる眞木の戸は源氏第一の詞と定家卿は申侍るとかや　秘此詞殊勝と云々今夜源をさして待かほならんもさし過てにくけあるへし又あまりにとちこもりてもあしかるへきをけしきはかりといへるわたり尤艶なるなり弄同
うちやすらひ　秘源也
かうまてはみえたてまつらしと　秘明石上の心ふかきさまなり
物なけかしうて　明石上のかほとまてちかつき奉らしと思ふにかくあれは物なけかしうてうちとけぬさまをみするなり
こよなうも人めいたるかな　秘源の思ひ給ふなりあまりなるけしきなると也大かた源の物の給ふ人々にかくまてつれなきさまなる人はなかりし物をと疊す也
いとかうやつれたるに　明石上のつれなきさまなるを我身の只今よろつやつれさせ給ふゆゑかとおほすなり

なさけなうおしたゝんも　秘源の心なり
心くらへにまけん　秘源の詞なり
けに物おもひしらん人に　秘草子地なり明石の上よりも今ちと物の心を知たる人にとなり
ちかき木丁のひもにさうのことの　秘明石上奥さまへ引いりたるを源のしたひて入給とみえたり此箏なとは座のおくつかたにあるへし弄同
このきゝならしたることを　花此程入道の物語にせし事なとをかたり給ふ也　秘事の字を琴にそへたり聞ならしたるとは入道の朝暮語し故なり弄同
源
むつことをかたりあはせん人もかな浮世のゆめもなかはさむやと　おもふ人とかたり合せなは夢のやうなる身上の思ひなともなくさむへしとなり源氏の身上まことに夢のやうなるへし　秘源の歌なり源の身上悉皆夢中のことし思ふ人とかたり合なは夢のことくなる身のうへもなくさむへしとなり明石上のうちとけぬさまをうらみたる歌なり　河引歌略之
返明石上
あけぬよにやかてまとへる心にはいつれをゆめとわきてかたらん　秘只吾身も夢中なりいつれをゆめともしらさると也明石の返歌なり
いせのみやす所　けたかきさまなり心ふかきさまもさるへきなり
なに心もなくて　秘今夜源の御出あるへきよしをは入道の内々もいひ聞せさるへし
ちかゝりけるさうしのうちに入て　秘女すこしおくに入たるとみゆ弄同
しひてもおしたち給はぬさまなり　花明石上の思ひもかけすうちとけてゐたる所へ源氏の君の入給へるをわりなく思ひ給ふてちかき障子のあきたる中へ心とく入てしりをさしかためてあるを源氏の君もしひて心やふらしと思ひ給へるをおしたち給はぬとはいへるなり
されとさのみもいかてかはあらん　しひてもおしたち給はぬさまなりとかきて此語をかきいたしたる面白しからうしてつひにうちに入給ふよしなり
花　さてのみはいかてかあらんとはおもはせてかきたる詞也へたての關もつひにはかたからぬなるへし此下の詞にみえたり
人さまいとあてにそひえて　そひえてとはほそやか

なるすかた歟俗にそひ／＼としたると云體なり
弄そひえてとはやはらかにのみはなくすこしすみたる體にや　秘河海説ほそやかなると云々如何只人にうちむきて人まかせなるやうにはなきとなり一かとあるさまなり　秘ぬけ出たる心なり　私ひたすら物やはらかにのみはなくけたかく心はつかしきさまなとありとみえたりほめたる體なるへし俗にいへるかことく物すさましくつきなきをそひえたるといふやうには心得へからす

かうあなかちなりける契　秘源の心中なり前世よりの契かとなり　私須磨の浦へ謫居ありて思ひの外に又此浦にうつりおはし又入道の心中なとを聞給ふからかくおほすなり

御心さしのちかまさりする　草子地なりかやうに淺からぬ契のなと〻とやかくやとおほすもちかまさりする成へしとなり

つねはいとはしき夜の長さも　花長しともおもひそはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれは　秘あふ人からの秋の夜なれば也須磨なとにての獨ねの事をおほし出たり　私前に入道に源のよみかけ給へる歌に「獨ねは君もしらぬやつれ／＼と思ひあかしの浦さひしき（さイ）をとあり

御ふみいとしのひてそけふはある　秘此ほとは大かたの御文なり今日は後朝の文なれはしのひ給となり

あいなき御心のおになりや　花京の聞えなとおそろしく思ひ給ふをいふなり
秘草子地なり

こ〻にもか〻る事　けふは入道も忍ふなり御使をもてなさぬとなり

むねいたう　花女のかたにもは〻かり思ひて後朝の御使を思ふほともてなさぬを心やましく思ふなり
私本式の嫁娶ならは後朝の使なとには祿なと有へし是はかりの御旅居又殊更忍ひ給ふ時分なれはさやうにもてなさぬを入道は滿足ならすおもふと也

かうてのちは　此後は時々源の岡邊へおはしますなり

ほともすこし　濱のたちよりすこし程あるなり
秘道遠なりまへにもや〻とほく入所也と云々

物いひさかなきあまのこもや　弄源氏の例の遠慮なり　花人の物いひさかにくき世にといへる歌の詞なり私引歌に不及歟
おほしはゝかるほと　秘京の聞えをはゝかるなり源の遠慮あるさまなり　花流罪の身にてかゝる數寄事するなとゝ京のかたへ物いひさかなき人のいひやもらさんとはゝかり思ひ給て其後は岡邊の宿へよかれかちなりしをされはよとありそめたりしことを悔しく思ふとなり
されはよと　秘忍ひ給ふゆへにたえ〳〵なるをいへり
けにいかならんと　前に入道も母君も遠慮の有し事をかけり其後猶母君はこの事いかゝなと思ふを入道のかく思ひ立しとありされは只今たまさかなるを入道の心にけにといふは前にこたへて云り
たゝこの御けしきを　秘入道は源の御出を悦樂の來迎よりは待事にし侍るなり　私前にも此女の事を源にかたり申とて六時のおこなひにみつからの蓮のうへにねかひをはさゝ物にてたゝこの人をたかきほいかなへ給へとなんねんし侍るとあり

二條の君の　紫なり　秘源の心中なり　私こなたより宣はぬさきに人の口よりもれきゝ給はゝ源へ一しほ恨のあるへきをと源のおほすこれをあなかちなる御心さしのほとゝはいふなり　草子の地也
かゝるかたのことをは　秘紫上嫉妬のかたは心ふかきよしなり
あやなきすさひこと　これは都にてあなたこなた忍ひ所のあるを紫の恨給しをおほしいてゝ何とてさせやうにせしそと源の後悔也
人のありさまを　明石上をみ給ふに付て今さらに戀しきなり
おくにまことやわれなから　秘文の詞なり　花是は紫上へまいらせ給ふ文のことはなり
われなから心よりほかなる　是はこゝの前の詞にいへる都にてのすさひことよとなり
又あやしく物はかなき　花又あやしく物はかなき夢とは明石上にあひたる事をほのめかし給ふ秘也同
ちかひし事とも　河わすれしとちかひしことをあやまたは三笠の山の神もことわれ　秘引歌河に同し誓言をたて給し事なり

なにことにつけても　秘此詞歌へつゝけてかけるなり弄同
源　しほ〳〵とまつそなかるゝかりそめのみるめはあまのすさひなれとも（清秘如此又濁）　花しほ〳〵といふ五もしは何ことにつけてもの詞にかゝりたるなりかりそめのみるめとは明石上の事なり　秘何事につけてもといふ語を上におきてみるへしこゝはたゝかりそめなりそなたをこそ思へのよしなり
なに心なくらうたけに　源のかたよりうちあらはして宣ふゆゑにねたみかましくも返事にかきたまはておくにすこし書給へるなり
忍ひかねたる御夢かたり　花是は二條の君の返事の詞也　秘是より紫上の文の詞也過にしかたの事にもおもひ合る事も侍りされと此浦なとにてかやうの事あるへしとは思はさりしなり　私是は紫上の文のおくに明石上の事をかきたる詞はかりなり
返紫上　うらなくもおもひけるかな契りしを松より波はこえしものそと　秘我はあさはかに浪はこえしと思ひしとなり　花松より波のこゆるは末の松山よりおこれりあたし心あるを浪こゆるとはいへりうらなく思ふは人の心の表裏もなきをいふ又浦ちかくふりくる雪はの歌にもかよひつゝうらなくは浦のなき心にも讀り　私末の松山波もこえなんの歌を引へき歟又是も詞より五文字へかけてみても可然歟思ひあはせらるゝことおほかるをうらなくも思ひけるかなとなり如何
おいらかなる物から　紫のなほさりなるやうなる物から恨給へるさまをいふなり
うちおきかたう　源の紫よりの返事をうちおきかたく思ふなり
なこり久しうしのひの旅ねもし給はす　秘かやうに紫上かすめ宣ひしをあはれと思給ひて明石上にも久しく御いてなきなり
女思ひしもしるきに　秘入道の海に入ねといひしにいま源の思ひすて給ふゆゑに身もなけつへきとなり此語おもしろし
身もなけつへき　河後撰「おなしくは君とならひの（契てのちにこそイ）池にこそみをなけつとも人にきかれね　花入道の明石上のゆゐこんに思こと叶はすは海に入ねと云しを思ふ筋はかなひたるやうなれと今又あらぬす

ちにて海にいらまほしく思へは今そまことに身もなけつへきとはかけるなり
行末みしかけなるおや　明石上の父母ともに年の老たるなるへし
人なみ〳〵に　秘人並々なり
たゝそこはかとなく　秘獨身にてありし時は中々物思ひもなかりし物をとなり
おしはかり思ひしよりも　かやうに定りてから世間のさまとや角やと分別の出くるから一段物おもはしき也
なたらかに　源にうらみあるさまもなきなり
あはれとは月日にそへて　秘源の心中なり
やんことなきかたの　秘紫上なり　私源の紫上をかきりなく覺す故に明石上をも大方にはふかくおほしなから紫の心くるしく獨すみにて過し給ふをいたはり給ふ心より源もさのみ明石の方へおはせぬとなり
ゑをさま〳〵にかきあつめて　秘紫上へみせ奉らんとてかき給へるなり此繪をみ給はゝさためて紫上の返事も心ことに有へし是は返事きくへきとのためなり繪合に出たるにてはなきなり　弄紫上なとの方へのほせてみせ給へるとみゆ此繪を見給はゝ紫上の返事も心ことにありぬへしされは返事きくへきとあり繪合のときの兩巻にてはあるへからす一勘云返事は紫上の返事に思ひよせていへり又の義大やうに心得へし繪なとをかきあはれなる事ともを見ん人のあはれなる事なとあるへき様なりとなり紫上なとの事なるへし
いかてかそらにかよふ御心ならん　秘同時に紫上も繪をかきおき給ふなり
にきのやうに　秘日記のやうになり
いかなるへき御ありさま　秘此行末いかなる事ともかあるへきと草子地にかくなり　此様なるはいかなる人共そと源と紫とのよろつにすくれ又心のかよひたるさまをいふなるへし
としかはりぬ　花源氏二十七歳になり給ふなり　秘源氏京を出給ひて三年めの春の事歟廿七歳なり此年歸洛あり弄同
うちに御くすりの事　河御薬の事なり　主上御悩の事也

たうたいのみこは　當代皇子　率右大臣の御女ひけくろの父　承香殿の女御とは鬚黒の妹なり　私當代は朱雀院也御子は後に今上と申たるなり

鬚黒太政大臣 今上の御祖父
├ 右大臣 明石に右大臣とみゆ
└ 承香殿女御 朱雀院の女御 今上の御母也

右大臣の御むすめ　秘　鬚黒の大臣の父なり　承香殿の女御は鬚黒のいもうとなり

をとこみこむまれ　秘　後に今上と申也此とし二歳なり

東宮にこそは　冷泉院なり秘同

ゆるされ給ふへきさため　源の歸洛のさためなり

こそより后も御物のけに　前に太后のわつらひ給ふ事あり

なやみ給ふ　是まて太后の事なりこゝに句を切てみるへし

さま〳〵ものゝさとししきり　是より世間おたやかならす恠異しけくおほきおとゝもうせなとし給ふやうの事ともをいふ也

いみしき御つゝしみともを　よろしうおはします御目のなやみさへ又此比おもくならせ給ひて　世間のおたやかならぬのみならす御惱なともしけし仍さま〳〵いみしき御つゝしみともありしるしに朱雀の御目なともよろしかりしか又此比おもくならせ給ふとなり

七月二十餘日のほとに　源歸京の事也

又かさねて　秘　まへにゆるされ給ふさためいてきぬといへりさてこゝをかさねてとかける

つひの事と　秘　つひにはと思ひしなり　或抄是より源の心云々

よのつねなき　源の心中にもつひには歸京せんとおもほしなから浮世無常のならひいかゝとおほしつるなり

にはかなれは　かくなりはつへきにやと覺しなけきつるか俄に歸京の定りあるにつけては此浦の名殘さりかたく思はるゝとなり源の心中なり

入道さるへきことゝ　かく思ひまうけたれとも此浦をさり給はんを思ひなけくなりされと歸京し給ひてこそ後の榮花もあらめと入道は思ひなほすなり

その比は夜かれなく　歸京ちかきゆゑ名殘おほくおほすなり
六月計より心くるしき　弄明石上懐妊の事なり秘同弄前に歸京の沙汰ありと先かける成へし　私あやにくなるにや　歸京ちかきゆゑわりなき心なるへし
あやしう物思ふへき　秘一生涯物思ひのたえかたきとなり又今あやにくなる事かな是も宿因なりとおほすなり
女はさらにもいはす　此比御心さしもふかき樣なるをうれしく思ふに又御歸京のちかけれは一段思ひふかきなり
いとことわりなりや　草子地
つひには行めくりきなん　秘都を出給ひし時はかならす時ありて歸るへきたのみの有しなり此浦は又かへりみすへき事もかたきわかれなれは一しほ名殘をしきとなり
さふらふ人々も　御旅ゐのほとつきそひ奉りし人々なり
あるしの入道涙にくれて　花六月もたちて七月に成なり　弄七月の事にや花鳥には六月と云々次の詞にほとさへあはれなる空のけしきといへり初秋也　秘七月なりほとさへあはれなる空のけしきといへり初秋のさまなり　私弄秘等の義は七月のたちて八月に成といふなり　七月二十餘日かさねて宣旨の後とりしきりたるなるへしさて八月に歸京とみえたり後にしるせる參內の所は八月十五夜なり
なそや心つから　秘源の心なり
さま〳〵におほしみたれたるを　源の明石上へ名殘あるさまにおほしたる體のしるきを人々とかく申なりわりなき所に御心のとまるくせなり
心しれる人に　秘惟光なとなり
月比はつゆ人に　秘明石上の事をしのひ給ひしよしなり
此比あやにくに　是は心しれる人々の源の事を申なり月比はさほと御心さしあるやうにもみえさりしか此比とりしきり御心さしふかくみゆるは人に心をつくさせんためのやうなりと取あつかふなり
少納言しるへして　秘良清也若紫に有し事なり　花少納言は良清が事なり源少納言と云卷のはしめに

みえたり　弄北山にての物語也さゝめきあへると
は人々のいふを良清か聞也
たゝならす　弄良清か心なり我もいひよりし物をと
思ふなり
あさてはかり　秘あさつてなり　花源氏君明後日歸
京あるへきをいふ也
れいのやうにいたうもふかさて　前には忍ひ給ふゆ
ゑ夜ふけておはせしなり今はやかて御歸京なれは
さのみ忍ひ給はぬさまなり
よし〳〵しうけたかき　明石上のさまなり
さるへきさまにて　秘京へむかへてんとおほすなり
さやうにて　京へむかへん事をちきりなくさめ給ふ
なり
たゝかはかりをさいはひにて　秘此まゝにて源の打
すき給にても此程の御ちきりはかりにてもその身
にとりてはさいはひなるへきとなり
めてたきにしもわか身の程をおもふにも　明石上の
心かくるにつけて身のほとのおよはぬを思ひなけ
くなり　秘かやうなるにつけてもと思ふとなり
波の聲秋の風には　波の聲も秋風には一しほ高く聞
ゆるなり
しほやくけふり　秘此浦をわかれ給ふへき折ふしの
秋のあはれともをかけるなりみをつくしの歌(巻イ)にも
此けふりの事をいへる也弄同　此段感情おこるへ
くかきあつめたるさま所の體よく〳〵思ふへし
あはれあさからす
源このたひはたちわかるともゝしほやく煙はおなしか
たになひかん　秘つひにはおなしかたになひくへき
となり　私京へむかへんと契給ふことのおなしす
ちなり
返明石上かきつめて(せイ)あまのたくもの思ひにも今はかひなき
うらみたになし　花かきつめてとはかきあつめてな
りおもひは火にたとへたり　秘かきあつめてなり
私今はかひなきうらみたにといへるは身の程のお
よはぬ事を思ひしりたる心歟
あはれにうちなきて　弄明石上の體よろしきさまな
り秘同
あさからすきこゆ　是まて明石上の體なり
つねにゆかしかり給ふ　明石上のものゝねを源のゆ
かしくし給ふなり

しのふはかりの一ことをたにとて　秘言を琴によせたり弄同
京よりもておはしましたりし琴(キン)　源出京の時もたせ給へるよし須磨の巻にあり
入道はえたへて　秘明石上をすゝむるなり　入道源の御琴の音にもよほされて堪忍せす筝のことをみすの内へさし入て明石上をもよほすなり
みつからもいとゝ涙さへ　明石上の源の琴なとにもよほされてしのひやかに引たる成へし是は筝をひくなり
入道宮の御ことのねを　秘薄雲の女院筝の上手なり
私たゝいまの又なきとは薄雲の筝は當時無雙といふなり源の心に明石のと思ひくらへ給ふなり
いまめかしう　是より薄雲の筝の體をいふなり源の心中におほすさまなり
これはあくまて　明石上のことのねをいふなり
ねたきねは　秘一かとあるなり　弄ねたきとは心もとまりいかにそすこしゆゑある心にや
この御心にたに　秘源の御耳にもめつらしとおほす手をひくなり

心やましき　おくゆかしく殘りおほきやうの心成へしうちとけてひかぬなり
くやしう　源の心中なり
心のかきりゆくさきの　御心のおよふかきり契り給ふなり
琴は又かきあはするまてのかたみにと宣ふ　こゝにかたみにとゝめおき給ふなり
明石上　なほさりにたのめおく(なイ)める一ことをつきせぬ音にやかけてしのはん　花一ことは琴によせたりさてつきせぬねとは云へりねは又なくねのかたにいへり
弄一ことを琴にそへたり　一言を琴によせたるなりきんはまたかきあはするまてのかたみにとあるをそれはなほさりことなるとなり
いふともなきくちすさひをうらみ給ひて　是程心のかきり契り給ふにこの歌を口すさひ侍れはうらみ給ふなり
返源　あふまてのかたみにちきる中のをのしらへはことにかはらさらな(るらイ)ん　河中のをとは調子の絃なり發のをとをいふ也　花中のをは六より十までの絃をいふにや調子の絃なるへし

このねたかはぬさきに　花ことはひかで程をふれは塵ほこりかゐて絃もゆるくなるほとに此ねたかはぬとは久しからすしてあひみんと云心なり　弄やかてといふ心なり

わかれんほとのわりなさを　明石上の心中なり

たちたまふあかつき　歸洛の日なり

人まをはからひて　人のすきをなり　人間也

源
うちすてゝたつもかなしき浦なみの名殘いかに（はイ）と思ひやるかな　花打すてゝたつとは歸京の心をよせたり

返明石上
年へつるとまやもあれてうきなみのかへるかたにや身をたくへまし　花歌の心はすみなれしとまやをもあらしてうき浪のかへるかたに身をたくへんとはうらみたる心によめり　弄身をもすてんなと云心によめるにや花鳥に恨みたる心と云々　秘花鳥にうらみたる心によめると云々いかゝこゝを波にあらしても源にともなひてのほりたきとなり只うち思ひたるまゝをいふなり　私此秘の義尤然へしうち思ひけるまゝなるを　弄明石上の身をたくへましとよめるは此折ふしの切なる思ひをしのひあへぬ心なり

しのひ給へとほろ〳〵と　源の此歌をみ給てしのひあへすなくとなり

心しらぬ人々は　花源氏の女ゆゑに名殘を惜給ふを心しらぬ人はたゝ年へたる浦をわかれ給へは名殘をしく思ひ給ふらん人の心はさのみある事とことわりをやりて思へるなり　秘明石の上ゆゑ名殘をしみ給ふをもしらさる人はたゝかりそめなれと此浦の名殘を惜み給ふかと思ふなり

よしきよなとはおろかならす　秘明石上をしかるへく思ひ給ふゆゑと良清なとは思ふなり

うれしきにも　秘草子地なり　秘いひあへることゝも何かにつけてなるへし又みのなとの事も心にこもるか何かはとてなんとはかきもらしたるといへる草子地なり

入道けふの御まうけ　御歸京の日の事なり

たひのさうそく　供奉の人々下々までのさうそく入道のまうけたるなり

御よそひは　源の御裝束なり

御そひつあまたかけ　河御衣櫃あまた荷也

かりの御さうそくに　河狩衣　短裳日本紀
秘入道歌云々
よるなみにたちかさねたるたひ衣しほとけしとや人のいとはん　秘しほどけしとはしほたれたるなり
花同　聞しほのかたまりたるかとくるをしほとけじといふその時にしほたるゝ物なり　明石上の歌なり云々　或抄御説にしほしみぬれはなへはまぬをしほとけぬれはしほたるゝとなり
御らんしつけて　御さうそくのかたはしに結ひつけたるか伊勢物語にも裳のこしにゆひつけさすなとあり
返源
かたみにそかふへかりけるあふことの日かすへたてん中のころもを　秘ぬきかへてかたみにとゝめ給ふなり　弄ぬきかへてかたみにとゝめ給はんとなり奉りかへてつかはす心あるなり　私歸京あらはすこしはむかへ給はん程も有へけれはいさゝかへたつる程あるへしとなりしからは前の歌明石上の歌なり
心さしあるをとて　秘今入道のたてまつるにきかへ給ふなり

御身になれたるともを　花此程御身にきなれ給御そともをかたみにとてとゝめおき奉つるなり
けにいまひとへ　今一きはなり衣にかけていへるなり
入道いまはと世をはなれ　秘遁世の身なれともとなり　私出家入道の身なれは御おくりにもまゐらぬなり
かひをつくるも　聞何語にも目はたかひなからとあり
入道
世をうみにこゝらしほしむ身となりてなほこのきしをえこそはなれね　花世をうみは世をいとふ心をうみによそへたるなり　此きしとはうき世の岸なりかの岸とは菩提をいふに對するなり　秘此岸は今生をいへり只こゝをえ立さらさるなり私しほしむとは年經たる心歟
心のやみにいとゝまとひぬへく　河「人のおやの心はやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬるかな明石上の事を思ふよし也歌の心前にあり　弄心のやみは子を思ふ事也御のほりにおくりに參らは是につけてむすめの事を思ふへしとにや　私心のや

みにまとふといふにて道の御おくりもなりかたけれは此國のさかひまてたにまゐらんと申なり

すき／＼しきさまなれと　秘　むすめの事をかすめ申なり　私むすめの事を思召しわすれぬやうに思ひあまりて源の御氣色をとるなり前に心のやみといへるも此事申さんとてなり

いみしう物をあはれと　源のさまなり

ところ／＼うちあかみて　花　なかんとてはまつかほのあかくなるをいふなり　秘　涙ぐみたるさまなり

おもひすてかたき　秘　源の詞なり　懐妊の事なり

いまいととくみなほし　秘　やかて都へむかふへきとなり

たゝこのすみか　秘　明石上をはやかてむかへて見侍へし此すみかは又きたらて見るへきこともかたしとなり

源 宮こ出しはるのなけきにおとらめや年經る浦をわかれぬる秋　歌は義なし

おしのこひ　源のさまなり

いとゝ物おほえす　源の御さまをみて入道のいよいよ心まとはすさまなり

よろほふ

さうしみの心ち　明石上なり

身のうきをもとにて　明石上は身の程のおよはぬを根本の恨なり

わりなき事なれとうちすて給へる　源の只今歸京に明石上をぐし給はん事はあるましき事なりされはわりなき事といへりされとわかれ奉る事のくるしきまゝにうち捨給へるをうらむるなりそれにおもかけのそひて戀しくとり／＼にせんかたなき心のうちなるへし

たけき事とは　せんかたのなきまゝにはなくのみなりと也

母君もなくさめわひて　母君の後悔なり

ひか／＼しき人　秘　入道也

母君後悔して入道の心にしたかひて似合はぬ事故如此あるそと思ふなり

あなかまや　入道の詞なりおほしすつましきとは懐妊の事なり

あなゆゝしやとて　母君は後悔し明石上は涙にのみくれたるを入道のいさめて如此いふなりおほしす

つへき行末を思ひていまく\しくと制するなりよりゐたりとは入道なり

めのと母君なと　入道の心のひかみてかゝる事を思ひよられたるといふなり明石上の乳母と母君となり

なけくをみるにも　母君めのとなとのなけくを入道のみて制すれともさすかわれも心くるしく思ふなり

ほけられて　老たるうへにいとゝほれたるなり　耄の字也

ひるはひと日　晝は一日なり終日の事なり　花いをのみねくらしはねをのみねくらすなりねはぬるをいふ一日はぬる事計するといふ心なりあかしの入道のありさまなり

すゝのゆくへも　數珠也おこなひもおこたれるさまを面白くかきなせり

手おしすり　是も入道のよろつ忘却したる體なり

でしどもにあはめられて　河淡悪也　私行も懈怠しよろつ忘却したるを弟子ともの教訓するなり

月夜にいてゝきやうたうすゑ物は　弄入道事也

秘入道の事也物の字には心なし只行道するは也

よしある岩のかたそば　やり水のゐたりなるそひえたる岩なり

やみふしたるほとになんすこし物まきれける　入道の事なりさうしみはましてといふ所より源の御歸京の比から歸洛の跡まて入道母君明石上なとの思ひなけきたるさまをつゝけてかけるなりやみふしたるなとゝいふは御歸京ありて後の事と心得へきなり

君はなにはに御はらへ　秘是より源の御事をいへり私是より源の歸京の體をまたいへり難波にてみそきし給ふなり難波の祓は上古より御祓の有所なり仁徳御代以前よりの祓の在所なりとみえたり

すみよしにも　たひらかに御歸京あるよしなりさて須磨の巻に色々の立願ありしをやかてはたさるへきよし御使して申給ふなり是も宣旨にて御歸京あれはいそかるゝ儀なり

ことなる御せうえう　河逍遙也　住吉へさへ參詣なけれはましてせうえうはし給はぬなり

いそきいり給ひぬ　源の入洛なり

みやこの人も　源の御留主の人ともなり

女君もかひなきものにおほしすてつる命　聞御出京の時命にかへてめのまへのなとよみ給ひし事なとなり

いとうつくしけに　紫上のねひとゝのほれるさまなり

すこしへかれたるしも　秘すこし髪のうすらきたるなり

御心おちゐ　源の御心の落つきたるなり

又かのあかすわかれし　明石上の事を心くるしくおほしやるなり

猶よとゝもに　秘とにかくにかやうのかたに心をつくし給ふなり

その人の事とも　秘明石上の事を紫上にかたり給ふなり

たゝならすやみたてまつり　源の明石上の事を宣ひ出たるさまのあさからぬを紫のたゝならす御らんして歌なと口すさひ給ふなり

わさとならす身をは思はす　秘「忘らるゝ身をは思すちかひてし人の命の惜くも有哉秘同箋同　私さしもあさからすちかひ給ひしにたかふたることとなり

思ひきこえ給ふ　源の心中なり

かつみるにたに　弄かくみるなり昔は此詞をかくと用るなり　秘昔の歌かくといふへき所をかつとよめるあまたあり　私かつこえてわかれもゆくかあふ坂の此類なり

とり返し世中もいとうらめしう　紫上をみすして三年へたてたるをいかて過しつることそと思ふからとり返して今更過しかたのうらめしき也　秘世中の事故にこそ紫上にも此程へたゝりてもありつれとおもふにさらにうらめしき世中なるとなり

ほともなくもとの御くらゐ　花配流の人召還の後六載ののち出身の本位に叙すとは最初の位よりさらに叙する法なり但し三位以上をは奏聞して別勅をうくれは時にしたかひて定らす是によりて源氏の君は最初出身の位には成給はて此程の官位にかへり給ふとなり此間の位は三位の大將なれは則その官位にあらたまりてやかて權大納言にあかり給ふなり　秘花鳥に見えたり本義は流罪の人はかへり

て叙爵よりすへきを是はさせる罪ならさるにより
てもとの三位の大將になり給ふなり
かすより外の權大納言になり給ふ　花職員令に云大
納言二人也云々令の文のことくならは二人の外は
數より外なれは權の字をくはふへきなり寛平遺誡
云大納言勿過權正三人云々遺誡の心も三人のうち
に權官あるへき心なりさたまれる官の外をはいつ
れも權の字をくはふへきによりて源氏も權大納言
といはれ給ふなり　弄中比よりは大納言は正一人
權十人になれり　弄正の外の權にあかりたまへる
なりと云々上古は大納言の數二人寛平遺誡には正
權三人云々花鳥には中比より正一人權十人也と云
云　秘大納言昔は三人也花鳥に見えたり本義は流
罪の人は歸て叙爵より始めてすへきを是はさせる
罪ならさるに依てもとの三位の大將になりたまふ
なり大納言昔は三人なり源只今新任し給ふなり按
公卿補任寛平九年大納言正三位藤原時平一人なり
六月十九日聖廟幷源光此兩人同日に權大納言に任
せり權大納言此時始なりこれらを摸してかけるな
り　河大納言正員令云四人相當從三位寛平爲正二
人權一人其後權官加增高倉御宇初爲十人　天武天
皇元年改御史大夫于時三人爲大納言　淳和天皇天
長五年三月八日夏野始任權大納言　永觀元年八月
始置五人藤原賴通加任　長和二年六月又置五人又
慶雲二年四月十七日勅曰依官員令大納言四人職掌
既比(一イ)大臣官位中納言三人以補大納言不足(至イ)同日勅大
納言二員爲定置中納言三人以補大納言不足也依至
于中納言者是令外也公卿正員者太政大臣左右大臣
各一人大納言二人中納言三人參議八人合十六人寛
平遺誡之詞也　公卿爲正員代々時によりて加階(增イ)す
る也且大納言增減事見端仍光源氏權大納言加任せ
られけるなり毎人員よりほかの大納言を權大納言
と心えたる無念事也それはかすよりほかの大納言
とあるへし權大納言とかくへからす權大納言の員
數を猶加任せられたるなり
つぎ〳〵の人も　すまの浦へ供奉の人々なり　秘ま
へに御ふたけつられし人々なり
かれたりし木の春にあへる　河昔周公勤勞王家權孫
幼人弗及知今天動威以彰周公之德發雷風之威以周
公之聖德也朕小子其迎我國家禮亦置之王出郊天止

雨及風禾則盡起二公命邦人凡木所偃盡起而築之歳則熟（敦イ）倚書寔灰更煖枯樹復榮續日本紀

めしありてうちに　源氏勅喚に應して參內し給ふなり

ねひまさりて　源のさまなり

さる物むつかしき　秘ゐなかの體なり

老しらへる、只いたく老たるなるへし故院の御時よりさふらふ人々成へし

うへもはつかしうさへ　主上は朱雀なり源に對せんをおもはゆくおほさるゝなり

いておはします（すイ）　天子のいて給ふを出御といふなり

御心ちれいならて　朱雀の此比まて御目なとわつらはれし事なり

十五夜の月　弄八月十五夜にや今夜歸京歟

しほたれさせ給ふ　朱雀院の御さまなり

物心ほそくおほさるゝなるへし　御不豫の事につきて春宮に位をゆつらんとおほすなりさやうの御うしろみもなき故に此源氏君はめしかへされ給ふなりされは位なとさらん事もちかくおほしめすゆゑかた／＼心ほそかるへし

あそひなともせす　秘面白き勅定なり十五夜なれは折ふしの興あるなり　弄主上の源氏に仰らるへき御詞いかにそ有へきを此御詞面白し

源 わたつみにしなへうらふれひるのこのあしたゝさりしとしはへにけり　弄或本にはしなひうらふれうらふれとはなつみうれひたる心也　花一本にはしつみうらふれとありしなへうらふれはもの思ひなつむるなり蛭子のあしたゝぬは三年になる事なり日本紀にはひる子をあしの舟にのせてはなつとは侍れとそれは後の事也あなかちそれまての心をはいはすたゝ三とせといはんとてひるの子と朝綱か歌にかゝりていへるなり河海に根國へなかされしとあるは素盞嗚尊のことにおもひわたりてしるされたるにやもの思ひなつみうれへたるなりひるのこ河引歌に「かそいろはいかにあはれと思ふらん三とせに成ぬあしたゝすして朝綱歌たゝみとせといはんためなり蛭子のなかされし事無用なり　河大海之神日本紀海底萬喜撰式海若わたつ海はうみの名なり　日本紀には海神と書之萬葉には海若（君イ）ともかけり莊子北海若といふは龍神なり山神を日本紀に

山つみと云る同事なり蛭子の事根の國へなかされ
し事を源氏我左遷に思ひよそへていはれたるなり
私此事あやまりのよし花鳥に見えたり仍不用之
日本紀竟宴
かそいろはいかにあはれと思ふらん三とせに成ぬ
足たゝすして朝綱　以上河海　うらふれしのひつゝ
古今集にも秋萩にうらふれをれはと有萬葉十六君
こふとしなへうらふれ右の返歌　同十七うちなひきしな
へおもひなつみたる心なり
返主上朱雀也
みやはしらめくりあひけるときしあれはわかれし春
のうらみのこすな　花　太神宮造替の事を古抄ともに
は引たれとそれは廿一年をへて作かへられ侍れは
あまりに久しきたとへにや是はたゝめくりあふと
云詞詮要なりしからは日本紀に伊弉諾伊弉冉尊の
天の御柱をめくりて一面にあひ給ふ事あれは其事
を宮柱めくりあふとは申侍るへきにや蛭子の足た
たぬなとにも其よせ有様に覺え侍り八尋殿を立て
同宮に住給ふといへは宮柱といはん事相違あるま
しきにや　弄　めくりあはんといはんための宮柱な
り造替年限の義なと無益なり　秘　此五文字めくり
あふといはんための枕詞なり造宮の義無用也　河

古人釋云伊勢太神宮造替廿一年廻事と云々然るに
以前の三年の心には相違するなり但又久しき心に
いへるにや堀河院百首に「あひにあひてあまてる
神の宮柱たてかふるまてあはぬ君かなとよめる此
心なり　文武天皇朱鳥二年に廿一年に一度可有造
營之由宣下れり　私花の義然へし河の義不用とい
へとも是をのす
いとなまめかしき　主上の御さまを申なり
院の御ために御はつかう　弄　源の行はせ給ふなりこ
こにてはあらましなり秘同　聞みをつくしにいへ
る御八講なるへし　私故院を須磨浦にて夢に見奉
り給ひてしはししつみ給ふよしあるゆゑなり
春宮をみたてまつり　弄　此時十一歳也　私十歳也明
年御元服十一歳也　秘　末に受禪の事あるへき故に
先かきいたせり
おほしよろこひ　源をまちよろこひ給ふなり春宮の
御さまなり
あはれとみたてまつり　源のうれしくあはれにみた
てまつり給ふなり
世をたもち給ふへき　弄　末に受禪の事あるへき故に

先此詞をかけり
あはれなる事とも　薄雲の女院に御對面の體あはれなる心こもるへしと推量してかくなり
まことやかのあかしには　色々の事をいひもていきて又さらにあとのことをいふ發語也是は明石より御おくりにきたる物とものかへる時の事なり
かへる波につけて　花打おくりの人の歸るにつけて文やり給ふなり　秘御おくりの人のかへるにことつけ給ふ也　河後撰「須磨の浦をけふ過行とこしかたへかへる波にやことをつけてまし　能宣　私引歌におよはす
ひきかくしてこまやかに　ふかく思ひ入たる體なるへし
浪のよる〳〵いかに　秘文の詞也　花伊勢集「あま小舟我に思ひをつけてしを波のよる〳〵まつとおもはん　此歌不及引
源なけきつゝあかしの浦に朝きりのたつやと人を思ひやるかな　花明石のうらの朝霧は人丸の歌をとれりたつやとは明石の浦を立て宮こへのほるかとまち給ふ心なり　弄朝霧のたつやなとおもふもすむ人のなかむらん程をおもひやる心なるへし花には彼浦よりおもひたつやの心云々心得かたき歌なり花の說いかゝなけきつゝあかしとつゝけたるへし心は人丸のほの〳〵と明石の浦の朝霧の歌の心にてはる〳〵とみやりたるなり朝霧にはいくたひも源の事をこそ思ひ出給ふらんとこなたより思ひやりての給ふなり　又の義は萬葉第十五に「君かゆく海邊のやとも霧たゝはわかたちなけくいきとしりませ此心にみれはわか思ひのゆくゑはそなたのなかむる空の霧となるへきとなり　私此兩義の內君かゆく海邊の歌を引たる義尤相當なり源のいか許明石の上の事を戀しく思ひなけくとかおほすらんあかしの浦にたつ霧はさなからわかたちなけくいきなりといふ義おもしろし此義稱名見たてられたる義云々　聞弄幷或抄にも御說とてのせたり可用之
かのそちのむすめの五せち　せつとは不可讀秘是より次の歌へつく詞也　秘大貳のむすめなり須磨にて音信申せし人なり　弄大貳の事　問云太宰帥を大貳の兼て任する事あるなり　一答一人大貳帥を

兼することはなきなり親王の帥に任する時大貳帥の職をおこなふゆゑに帥ともいへる也　私正帥には親王の成給ふ也其時は權帥をなさるゝ也其時は務を知る也又は大貳か府務をしる也又大臣左遷の時權帥になさるゝ也其時は左遷の人は府務をしらす大貳帥の事をとり行ふへし惣別は權帥を任すれは大貳を任せす大貳をなさるれは權帥を任せられぬ也されと左遷の大臣の權帥になるは各別の事なれは大貳をなされて府務をとり行ふへし大方權帥と大貳とは一度に雙ふ事なき故に大貳を帥ともいふなり但權帥を大貳といへる例は覺悟し侍らす

物思ひさめぬる心ちして　源の御事を思ひなけきつるに今御歸にて物思ひなきなり　人しれぬとはしのひたる事なれはなり　秘都にのほり給ふをいへり　花鳥説如何　弄あちきなく人しれす源氏の事を思ひなけきし事の今歸京し給ふによてさめぬるとなり　花物思ひのさ（いイ）むるとはまさる心に云りとたえつる思ひを人によひさまされたるやうなるへし源氏の君の都へ歸り給を聞てたゝならぬ心なり

まくなきつくりて　河蠛虫の名と摩愚那岐日本紀　秘まくはせなと俗にいふかことしいつくよりともいはせすしてめをくはせさしおくなり蠛匀會又印蔑此（如本）字註にみえたり　めをくはせたる體なり又花に未決也云々　或抄にまくなきと云虫をはらはんとてあらくすきおりて蓑にも笠にもかけてゆけはまくなきあたらすされは蓑笠きて誰ともしらせぬをまくなきつくると云と云るまくなきはらふことは日本紀にみえたる事なれと蓑笠きるよしは所見なし又五節君の文をおくりし日雨ふるとは見えすさらんにとりて蓑笠きるへき事いかゝとおほえ侍り又河海抄には文の使のひらめきかる〳〵しきをまくなきのこひちるにいかゝと覺え侍り猶別にしるす也私此事源語秘訣にあり　河允恭天皇略之虫の名也春の季夏のはしめなとに蠅のことくなる虫の目邊にとひまかふ物なり云々ひらめきかるかるしき振舞をいふなりつくりてとは其體をまなひたるなり

五節君　須磨の浦に心をよせし船人のやかてくたせる袖を見せはや　源の須磨におはしませしとき御音つれ申て今まて源の御事をのみなけきつるに袖もみなくち

たゝもとなり
手なとこよなう　河もとよりも手のあかりたるなり
秘大貳の女子の手跡とみさためて返事つかはし給ふなり　私まくはせはかりにて誰ともなくてさしおきたる故に手又歌なとの體を大貳の女とみさためて返事かき給也
源返 かへりてはかことやせましよせたりし名殘に袖のひかたかりしを　花後撰一徒にたちかへりにし白波の名殘の袖のひる時もなし　今案よせたりし名殘は波をいへり後撰の歌をとりてよめるなりかことやせましはかこちやせましなり須磨の浦にありし時五節君の船をよせし名殘に一しほかなしかりしとをかこつはかり思へるとなり　河是はかこちやせましといふなり　弄かこちやせましの心なりかこつかことと横の相通なり又所によるへし　秘かことやはかこちやせましなり尋さりしをかへりてかこち給ふなり　さらはとゝまりもせすしてかへりをの給ふなり花にみえたり
あかすおかしと　秘五節は源の平生心かけ給ふ人なれと今はわさとすく／＼しくの給ふなり　私歸京ありてほとなくしのひありきなとし給はんもいかかなれは源の遠慮し給ふなり
花ちるさとなとにも　是へもいまた音つれ給はぬなり
中々うらめしけなり　ほと遠くて思ひしは只なけき思ひし計なり歸京ありてからは御疎遠なるかたもいてくるなり　闘草子の地なり云々

岷江入楚第十四　澪標

二十七歳
私十月より二十八歳の十一月までの事見えたり
十月奉ㇾ為故院ㇾ行ㇾ御八講ㇾ事
御門與ㇾ侗侍ㇾ御物語事
二十八歳
二月任ㇾ内大臣ㇾ
二月春宮御元服事　御歳十一歳云々
同二十餘日春宮受禪事冷泉院是也
承香殿御腹御子立坊事
同源氏大納言任ㇾ内大臣ㇾ事
致ㇾ仕左大臣ㇾ爲ㇾ攝政太政大臣ㇾ事　歳六十二云々
宰相中將任ㇾ權中納言ㇾ事
權中納言四君腹女君可ㇾ入内ㇾ事　歳十二云々
二條院東院造作事　花散里などすまわんと覺す也
三月十六日明石上產事　女子也
宿曜師勘申源氏御子可ㇾ有ㇾ三人ㇾ之由事
中のをとこは太政大臣にて位を極め給ふへしといへる夕霧大將の事也竹河卷に左大臣に任するよしは見えたれとも其後の昇進を五十四帖の内に所見なし爰の所には始終の事をいへるなるへし
宮内卿宰相女爲ㇾ明石姬君御乳母ㇾ下向事　少將君是也
源氏君物ㇾ語明石上ㇾ事紫君怨給事
五月五日明石姬君五十日事
五月雨比渡ㇾ花散里方ㇾ給事
源氏君如ㇾ元以ㇾ淑景舍ㇾ爲ㇾ御曹司ㇾ事
入道宮准太上天皇事　御對院司等事
八月權中納言女入内事　弘徽殿女御是也
源氏住吉詣事
此内明石上同詣ㇾ住吉ㇾ遙奉ㇾ見ㇾ源氏ㇾ事
左近將監任ㇾ廷尉ㇾ事
賜ㇾ童隨身十人ㇾ事
若君騎馬供奉事　夕霧なり
難波御祓事
惟光以ㇾ源氏君ㇾ疊紙歌遣ㇾ明石上ㇾ事
齋宮歸京六條御息所因ㇾ病爲ㇾ尼給事
源氏詣ㇾ六條御息所ㇾ給事
遣ㇾ書於前齋宮ㇾ事

七〇(月イ)八日以後御息所卒去事　三十六なるべし
奉ニ御文於前齋宮一事
院御方念ニ六條前齋宮一給事
源氏参ニ入道宮一申ニ前齋宮入内事一給事

冷標　或澪標　以レ歌爲ニ卷名一

花 以レ歌爲ニ卷名一源氏君廿七歳の十月より二十八歳の八月迄の事あり二十七歳は明石卷の末同年也

河 みをつくしこふるしるしにこゝまでもめくり逢ぬるえには深しな此卷の名此歌にて付たり

弄 私勘云流澌投レ澌砏汎䎐軋 文選第四南都賦但立切澌水行出也

聞書云冷ハ水ノ深キ所也標ハシルシ也

同 此卷には源氏二十七歳明石より歸京の年の事より次年二十八歳の十一月迄の事有二十七歳は明石卷の末同年也

私 花鳥に二十八歳の八月までといへるは誤れり二十八歳の十一月迄の事此卷にあり

さやかに見え給ひし夢のゝち

河 清冷亮 同上 明 同上 鏗鏘 日本紀琴其音音 今のさやかはさだ(やイ)かといふ心也やとたと同響也鏗鏘は物の音のゆうめきたる心歟また明の字も其謂ある歟分明に見給ひし夢也　古語拾遺云阿那佐夜憩とは竹葉聲なりといへり

院のみかとの御ことを　河 桐壺の御事也院の御かと

と有聊義有歟上古雖レ無二即位之儀一追號不レ可二勝
計一中古寛仁に小一條院なども如然漢書に太公を太
上皇と號する注に師古曰天子之父號曰レ皇不レ豫治
レ國不レ言レ帝也云々帝は御門と訓せり尊號有といへ
とも國を治せす帝位にのほり給はぬをは御門とは
申まじきにや是は帝位につき給へる院にておはし
ます故に御門の字を副奉る歟朱雀院をは山の御門
と申冷泉院もおなし六條院をは院の御門とは號す
各別の義歟　花 源氏の故院を御夢に見給ひし事明
石の卷に見えたり寛平御記寛平元年九月甲辰依二
御夢一有下被レ行二御八講一之事上先帝遷化之後講公子
勠レ力當二果行一也即任レ意遊獵不レ勤二此事一可レ謂二
不忠不孝之甚者一也云々 先帝を夢に見給ひて御八
講を行れし事此卷にいへる所と相似たり此先帝には
仁和の御門を申す也　弄 寛平元年九月に故院 光孝
を夢に見給ひて御八講行れし事有花鳥に此物語何
事も如レ此例有し事を思ひて書る也
いかて彼しつみ給らんつみかろめ　花 あかしの卷云
我は位に有し時あやまつ所（事イ）なかりしかとおのづか
ら犯し有ければその罪をおふるほといとまなくて

と云々故院桐壺の源氏の御夢につけ給ふ詞也
私桐壺をば延喜に比する也延喜の帝も聖廟左遷の
事に付て五種の罪を犯し給ひて鐵窟苦所といふば
かり（にイ）おはすと（とイ）日藏上人に語り給ふと北野縁起にあ
り
かみな月に御八講　河 十月塞風日本紀　河 明石卷十月
御八講同時の義也
世の人なびきつかうまつる　又源氏に人のなびき隨
ひ奉る也
太后猶御なやおもくおはしますうちに　太后病中に
も源氏をつひにいひけたぬをねたみ覺すと也おも
くおはします中にもとつく也
御門は院の御ゆゐこんを思ひ聞え給ふ物のむくい
主上は朱雀院也故院の御遺言を覺し出てかく源を
召かへして御心ちすゝしく覺す也御門の御心也源
のなげきのむくいもやと覺しける也源氏を惡后の
あしく覺すに帝は故院の御遺言を覺して惡事はむ
くい有事なれはと思召て歸京の事を改め給ひて御
心ち涼しく成給へると也
御めもさはやき給ぬれと大かたの世にえながく有ま

じう　主上の御めのわづらひなどはよくはおはすれと大かた世もはかなくおほしなる故心ぼそくおほするなり

世の中のことなどもへだてなく　主上の源へ隔心なしと也主上の御本意如此なるべし

あいなう嬉しき　源氏の君の歸京を誰も〳〵うれしき事におもひて太后のあながちににくみ給ふ御心にしたがふ人なきをあいなくと云る也　弄一かたにおもふをあいなうといへるにや　私此あいなうと云詞聞えかぬる也花鳥の義もいかゞとみゆ或は河海の義也無憂眞實に嬉しき也かきら（さらイ）ぬ心也云々此義もいかゞ

おりゐ給ひなんの御心つかひ　朱雀院の位を東宮冷泉院に讓給はんとなり

内侍かみの　朧月夜也

おとゝうせ給ひて大みやもたのもしけなく（のみなりイ）あつひ給へる

弄皇太后宮なるへし前の卷に太后と云々　朧月夜を哀に朱雀の思召也おとゝは朧の父大臣也太后は姉にておはすこれも御煩なりまた朱雀も位をさり給はんの御心あればかた〴〵朧の便なきを覺す也あつひ給へるとは前にあつしうなるといへるおなじ心也

名殘なきさまにて　此程までは時々あへる朧也その名殘もなく引かへたらん世に經給はん事を哀に覺すと也朱雀の朧に仰せらるゝ也

人にはおもひおとし　朱雀の御詞也朧の源氏よりは朱雀をばおもひおとし給へると也

みつからの心さしの　朱雀の御志は朧にならぶ人なきと也

たちまさる人　是も源氏をさし仰らるゝ也

おろかならぬ心さしはしもなすらはざらんとおもふさへこそ

朧のもとより源へ引心なれば今本意のごとく源にそひ給ふとも朱雀のおもふほどは源は朧を思ふまじきと也左樣ならんとおもひしるさへ朱雀の御心くるしきと深く覺すよし仰らるゝ御ことはなり又は源は住給ふかたの立ならびてあれば也

女君かほはいとゝあかし（さやかにイ）　朧の樣也源の事を仰らるるゆゑはぢ給へる心もあるべし

らうたしと御らんせらる　朱雀院の御心也
などか御子をだに　又朱雀院の御詞也契深き〳〵とは
源のことを仰らるゝ也それには朧の腹にも御子い
できなんと也それはたゞ人の事也凡人なるべき事
をさへ仰らるゝ也
いとはつかしうもかなしうも　朧の心也
御かたちなどなまめかしうきよらにて　朱雀の様を
朧の思ふ心也
めでたき人なれどさしも思ひ給へらざりしけしき
花是は朱雀の御心に思ひ給ふ也さしも思ひ給へら
ざりしとは朧月夜の朱雀院を源氏君よりも次に思
給ふ心ばへをやう〳〵思ひしらせ給ふと也
なとてか我心のわかくいはけなきに　花朱雀院の我
心のをさなかましくて萬を太后にまかせ給へる故
に光君を須磨へ移給ひし事を悔給ふ心也　私云此
段花鳥の義誤れりめでたき人と云るより朧の心な
りめでたきとは源氏をいふなりされど朱雀の前に
仰らるゝごとく朧を源は深く思ひいれぬけしきを
物思ひしるまゝに朧の見知給ふ也などて我心のわ
かくこれも朧のわかく分別もなきに任せてさやう
にみだれたりしぞとなりさるさわぎとは源の謫居
の事などもかやうの事よりおこりたる事なり人の
御爲とは是も源氏の事也朱雀の色々仰らるゝに付
て分別して後悔有朧月夜の心中也　聞書勿論如此
いとうき御身なり　朧の我と身をうくおもひしるな
り
あくるとしの二月に　源氏歸京の次の年也源二十八
歳也
春宮御元服の事あり　冷泉院の御事なり　春宮元服
之例
はゝみやはいみしうかたはらいたき　薄雲女院也
冷泉春宮の源にあまり似給へるを覺す心あればか
くおぼす也
うちにもめでたしと　主上朱雀も春宮冷泉をうつくし
うみ給ひて國を治給ふべき事など宣ひきかせ給ふ
也
おなじ月の廿日餘り御國ゆづり　御元服之後同二
月二十餘日御譲國なり　私延喜の御門の御位をば
朱雀承平の御門づき給て其次村上天曆の御門は承平の
みかどの御弟にて御位をつぎたまへりこの冷泉も

朱雀の御弟にてうけつぎ給へる事桐壺帝を延喜に比するによく相叶へるものなり　或御説に御國譲に踐祚と云は先帝崩御し給ひて天位をつぎ給ふを云也先帝位を去給ひて位をゆづり給ふをば讓位といふ御子ならずとも兄弟に御位を讓給ふもおなしく讓位なり　私大鏡云円融院歟冷泉院安和二年己巳八月十三日即位十一歳是に十一歳即位はおもひ准ずる歟

おほきさき覺しあはてたり　御國譲を太后の驚き周章し給ふ也

かひなきさまなからも心のどかに　朱雀の太后へ仰らるゝさま也位を去給てはかひなき事なから心やすく有べき樣を宣ひて后をなぐさめ給ふ御詞也

坊には承香殿のみこ　河承香殿(ジョウキャウデン)　春宮には承香殿の腹のみこ居給ふ也後に今上と申て若菜下に冷泉院の御讓にて位につき給ふなり

朱雀院(只今位を去給へる御門也)　今上(只今春宮に成給ふ承香殿腹の御子也)

右大臣(明石巻の末内大臣なり)　將異太政大臣

承香殿女御(只今春宮に成給ふみこの御母女御也)

いまめかしき　代のかはりて色々めづらしき事共有也

源氏の大納言内大臣に成給ひぬかずさだまりて　河内大臣は天智天皇八年十月十五日以㆓內大臣大織冠藤原朝臣鎌子㆒始任㆓內大臣㆒此時位在㆓左右大臣(イナシ)上㆒(大孝德天皇元年鎌子始任㆓內大臣㆒)　其時無㆓大之字㆒其後此官久絶至㆓光仁御宇㆒藤原良繼魚名等任レ之初次㆓左右大臣下㆒令外官也左右大臣闕なきによりて內大臣に成給ひたる也數定てとは內大臣は令外の官なればいふにや　私云凡三公は太政大臣左右大臣此三人也其上に內大臣に任せられたるをくはゝり給(たるイ)とはいふ也又令外の官とは令に載せざる官也大織冠の內大臣に成給へるは令を撰せられしよりも以前の事なれと其後任する人なくて中絶したる也仍令には不載之光仁天皇の御宇に又任せられたるは令より後代の事也

弄一揃數さだまるとは左右大臣の事也依レ無レ闕左右の外に內大臣の官をおかるゝ心也

やがて世中のまつりこと　源氏君萬機をとる人成べ

しと也

ことしげきそくには　河 繁務職也　私 執政の器に非ず謙譲して葵上の父大臣を攝政させられける也

ちじのおとゝ　致仕大臣也　河 致仕大臣執政東三條關白之例歟

攝政し給ふべきよし　花 天皇御元服之後もいまだ幼主の御時は攝政と是を云　復辟表聞書復辟はキミニカヘスと訓ず云々表を奉て君に政を返し奉て後は攝政を改て關白と稱す冷泉院十一にて御元服有てすなはち御位に即給ふ太子元服の後受禪の時攝政の例は清和天皇貞觀六年御元服有同八年九月忠仁公良房攝政の詔を蒙る也此例に准する也六十三の年齢など忠仁公の例に違はさる事也　弄 一餉忠仁公良房攝の例也六十三の年齢など無相違也　河 攝政　異朝唐堯時擧舜爲攝政殷湯以伊尹爲阿衡周成王幼而即位叔父周公旦攝政漢昭帝又幼而即位博陸侯霍光奉武帝遺詔攝政如周公故事然乃以周公旦霍光爲濫觴也關白者漢宣帝立霍光猶執政非幼主之故霍光還政宣帝猶重其人令關白萬機關白號自此而始云々本朝仲哀天皇崩後皇后攝政卒三韓而歸筑紫誕生皇子云々在襁褓皇后猶攝政遂臨天下六十餘州雖同正帝奉稱攝政其後履中天皇二年以平群竹宿禰爲攝政推古天皇の朝皇太子厩戸皇子也（常始）攝政齊明御宇皇太子中大兄皇子又攝政清和天皇幼而即位外舅太政大臣藤原朝臣良房（忠仁公）奉文德遺詔而攝政貞觀八年八月十九日始蒙攝政宣旨（去天安二年十一月七日始行内外層庶事清和帝即位日）是以人臣爲攝政之初也爾降彼一門爲執柄之臣關白者陽成天皇元慶四年十一月八日詔右大臣正二位藤原朝臣基經（昭宣公也）始爲關白（元攝政）是又關白之元始也昔景行天皇五十一年八月以武内宿禰爲棟梁臣（無攝政號）履中天皇二年始置執事四人（執政疑歟）譽田天皇代平群木菟宿禰爲執政

やまひによりて位をもかへし　是より致仕大臣辭退の詞也

うけひき申給はず　致仕大臣の承引なき也

人の國にもことうつり世中さだまらぬをり　私 世のさだまらぬ時隠居したる事しるしつくすべからず又是より異國の例などを引て攝政有べき事をすゝめ給ふ也　花 漢高祖戚夫人を寵せしによりて趙王

如意を太子に立かへんとせしとき呂太后おそれうれひて張良にはかりことを問はれしに父子の間の事なれは如何ともせざる事也但商山に四皓とて四人の隠士有高祖めせども出ぬものなり是を太子のたすけにせられば高祖もしらや思ひなほり給ふこともやあらんと張良がいひしに任せて四皓を召て是をつれて高祖の前に伺し給ひしかば高祖大に驚て羽翼すでに成と宣ひて恵帝をもとのまゝに太子にてかへられざりし事をいふ也　河漢高祖欲レ易ニ太子ニ呂后恐問ニ留侯ニ々々計ニ言願上不レ能レ致者天下有ニ四人ニ々々者年老矣爲ニ書使辨士固請宜來於レ是呂后奉ニ太子書ニ迎ニ此四人ニ々々至ニ高祖ニ置酒太子侍四人從ニ太子ニ年皆八十有餘鬚眉皓白衣冠甚偉上怪レ之問曰彼何爲者四人前對各言ニ名姓ニ曰園公角里先生綺里季夏黄公上乃驚曰羽翼已成難レ動矣史記
凡此外漢家其例多也

さるためしも有ければ　弄　致仕の人の攝政する例

太政大臣に成給ふ　河天智天皇十年正月當代第四皇子以ニ大友皇子ニ始爲ニ太政大臣ニ寶字元年改ニ乾政官ニ爲ニ太政官ニ忠仁公貞觀八年八月十九日始蒙ニ攝政詔ニ年六十三此例歟　私太政官當官統ニ八省及諸國ニ天下事悉決ニ此官ニ也故云ニ都督ニ本名乾政官　太政大臣師ニ範一人ニ儀ニ形四海ニ無ニ其人ニ則闕云々故云ニ則闕之官ニ有徳之撰故非ニ其人ニ者常不レ任レ之又無ニ職掌ニ之官也

世中すさまじきにより　致仕大臣も病などにかこつけ給ひしかども大方は先朝の時太后などの心のままなる世なりし故に籠居し給ひし也

とり分て宰相中將權中納言に成給ふ　此宰相中將は後に致仕相國といへるなり是は二條の相國の聟にて先朝にも時に逢べき人なり然とも只今の攝政に成給へるおとゞのかたざまとて心とけたる聟のかずにもいれられずとなり扨先朝の御代にはしづみ給へる故にかくいふなり權中納言持統天皇六年始置ニ此官ニ其後罷レ之大寶二年定ニ官位ニ今日元ニ此官仍爲ニ令外ニ歟但慶雲四年又置レ之云々相當從三位也

かの四の君はら　二條相國の女四君也太后の妹也朧よりは姉也

十二に成給ふを　この巻に冷泉院當今へまゐり給う

て弘徽殿の女御といふなり
かのたかさこ 花榊卷にあり紅梅の右大臣の事也
紅梅右大臣ノ事也柏木も昇進有べし弟の事を云に
てしるべし 私是も四君の腹也
はら〳〵に御子ども 權中納言の子どもあまた有也
下に載之玉かつら近江君などは後に尋出給へる御
子なれば不レ載レ之柏木大納言母四君腹 紅梅大臣同上
左衞門督 藤宰相 頭中將 藏人少將 八郎君
弘徽殿女御母柏木に同腹也 實非難力也北按察大納言之女今之北夕霧大臣之室也
大殿ばらの若君 源氏の若君夕霧也 河當時攝關之
父爲二前官一蒙二內覽宣旨一之時稱二大殿一而今太政大
臣其身攝政子息權中納言なり號大殿之條不審然而
是はたゞおほいとのをおなじ心にいへる歟 花大
殿ばらは葵上をいふ若君は夕霧のことなり中比よ
りは大閤を大殿といひならはし侍れど昔(イナシ)は必しも
定まらざることなり攝政太政大臣の人世人おもく
して大殿といはんことかたかるべきにあらず大臣
を大い殿と云義にはあらざる也 弄大閤を大との
と云太政大臣をも云べし云々 花大臣をもいふと
云々一勘にいづれも通用したる詞也 私此弄の義

如何花の義可レ然歟
內春宮の殿上 夕霧の童にて內春宮の昇殿をゆるさ
るゝなり
故姬君のうせ給ひにし 弄悅の折にも思ひ出給心尤
哀成べし須磨への別の時もさま〴〵葵上の事を思
給ふべし
あらためておほし 葵の母君は父おとゝの今更又思
ひのそふ也 須磨への別の時よくぞなくなり給へ
ると宣へる事有今はかく源の歸京し給うてさかえ
給ふ故に又かなしき也
此おとゝの御光に 此度も源の攝政をもゆつり給ふ
故也
むかしに御心はへかはらす 源の今も細々攝政の方
へおはする也
わか君の御めのとたち 夕霧のめのとたち也
さらぬ人も 是は葵のつかひ給ひしまゝにかくさふ
らふ人々也
ことにふれつゝよすか(つかイ)へらん事を 河從(ヨスカ)日本紀賓(クイ)使也
弄人々にしたがひて然るべき事共をめてみはから
ひ給ふ也

二條院にもおなしごと　紫上の方也源氏の召つかひ給ふ女房などをも須磨の御うつろひの比紫の御方へわたされし也其まゝにてちらぬを殊更あはれをかけ給ふ也

中將中務やうの人　いづれも源の思ひ人共也

ほかありきも　源のいまだ御忍びありきなどなき也

二條院のひむかしなる宮　弄東の院と號す　河昔の東院は七條后備子御在所によりて號東院歟西宮の在所も朱雀院の西なれば時の人西宮へ參るなどいひつけゝるよりやがて稱號となると云々

院の御そうぶん　院の御處分也此東の院は桐壺帝より源へ傳へ給ふ也云々

花散里などやうの　源の思ひ人共なり便なき人々共也

心くるしけなりし事とも　明石上懷姙の事也

おほやけわたくし　弄忘(忌イ)給はねども御國ゆづりの事等大義を本とし給へる心也　源の御いとまなき也

春宮御元服よりうちつゞき御國讓以下さま〴〵の事ともあれば也

三月一日のほと　花去年六月の比より懷姙のよし明石卷に有此三月十ヶ月にあたれり　弄前の詞に一日比と書たり少し後にや

めづらしきさま　女にておはするをいふ也　河明石中宮也光源氏の女也子時左大臣母明石入道女也贈皇太后宮藤原胤子內大臣高藤女母交野大領彌益女也擬二此事一歟

すくように御子三人御門后かならずならひて生れ給ふへし中のおとりは太政大臣にて位をきはむへしとかんかへ申たりしに中のおとりのはらに女はいてき給ふへしと有し事ともさして叶ふなめり

花宿曜に源氏の御子三人ましますへしと申すは夕霧の左大臣と冷泉院と明石中宮是なり后御門は冷泉院と明石中宮とを申也中のおとりとは夕霧のおとゝはたゞ人にてましませば御門后にならひて中のおとりとはいへるなり但夕霧は竹川に左大臣とみえたりその後の昇進は五十四帖の中に所見なしといへども夕霧の大臣の薨逝の事も物語に見えざれば終には太政大臣迄あがり給へると推量すべきなり物語の作りざまおもしろく書たるべしまた中のおとりの腹(はらは女にてイ)に女はいてものしたまふといふは則

明石上をいへり紫上葵上などにならぶれば播磨守
の女なるに依ておとりの腹といへる也弄同　私此
事若紫巻に藤壺女御源の密通有て懐妊の時の事を
いへるに中將君もおどろ〳〵しう樣こと成夢を見
給ひてあはするものを召てとはせ給へば及びなう
おぼしもかけぬすぢの事を合せけり其中にたがひ
め有てつゝしませ給ふべき事なん侍ると云そ此詞
の下に箋の義にいはく此事澪標の巻に見えたりと
注せられたり此義尤可レ信レ之也但前の若紫の夢の
兆は源氏一世の事也此御子の數計の事にはあらず
と心得べし其中に此御子の事も籠れる也又此末の
詞にもあまたの相人共とあり高麗人の相し奉れる
事も桐壺巻に有宿曜師に限るべからず又前の夢を
合せたる内に宿曜師も有べきなりと心うべし　弄
若紫巻に宿曜師の勘る事歟
世のわづらはしさに　源氏流淪の折節はさやうの事
もあるまじく覺し捨ける也源はたゝ人なから太上
天皇の尊號まで得給ひたれば前にかみなき位とい
へるも相叶へり
たうだいのかく　當代は冷泉院也是にて又相人と
もの聞えたることゝもを頼もしく相叶ふと覺すな
り
みづからはもてはなれたる　源の位につくべき事は
おもひかけぬ也
たゝ人におほしおきて　故院桐壺の源をすぐれて御
寵愛有しかとも位につけんとはおほさゞりし也是
も相人どもの申すにより又帝のみつからも覺しし
る所有て也桐壺巻に帝かしこき御心に大和相をお
ほせてといへるは御門の相し給へるもの也前に
注す
内のかくて　冷泉の位につき給へるを奇特に相人の
見たるよとおほすなり
今行すゑのあらましことを　相人の御門后ならび大
臣に成るべき御子有べしといへる冷泉先かく位に
つき給へるはおもひかけぬ事ながらよく合たる事
也されば夕霧の太政大臣も明石にて生れ給へる姫
君の后に成へき事も一定成へしと覺す也扨彼明石
の入道の心高く及びなき事を思ひしもかやうに有
へきにて有けるよと也されば明石浦などにて生れ
たるはいかゞと源のおほす也

此ほど過してむかへてん　明石上又姫君をもやかて京へむかへんと覺す也

さる所にてはか／＼しき　明石の浦也然るへき乳母なともあらしとおほしやるなり

故院にさふらひしせんじの女宮内卿の宰相にてなくなりにし人の子なりしを　弄花鳥にあり　花明石の姫君御めのと(ちつけ宰相イ)につける少將君の事也母は宣旨の局といひし人父は宮内卿宰相也宣旨の名は今は攝關家に有昔は院なとにも此號あるへし御形(ミアレ)の宣旨なと云名和歌集の中にあり

はかなきさまにて子うみたる　弄此詞哀也さる體思ひやるへし

さるべきさまに宣ひちぎる　明石の姫君のめのとにと覺す也　是もゆくすゑ后などにも成給ふべきと覺すから人からを撰み給ふ也

またわかく　宰相の君の體也

あばらやに　河あはらなるいたじき伊勢物語　私草亭遊仙窟

おもひたとらす　とやかくやと思案にも及ばぬと也

物のついてにいみしう忍びて　花源氏君の宰相君のあはらやにしのひて出給へる也　弄明石へくだす乳母の所へおはしたるなり姫君を大切にし給へる心也

さはきこえなからいかにせましと　さやうに御うけをは申なから又思ひたゆたふさまなる也

いとかたしけなきに　源のかくおはしましたるにつけていよ／＼領狀申たる也

かゝなれともと源の用意也

あやしうおもひやりなき　私乳母なとにの給ふはいみづからおほえぬすまひゝ我もかゝる旅居しつるに思ひなくさみてかたゐ中成とも思ひたつべきさまに宣ひなす也

ねんじ給へ　念じ給へ也堪忍し給へと也

うへの宮つかへ　內裏にても時々宮つかへせし人也

家のさまもいひしらす　宰相にて宮内卿かけたる父の家なるへし

とりかへしつへき心ち　情の詞なるへし此人に源のたはふれことの給ふ也乳母にと覺しつるは悔しく取かへさまほしきと也

けにかなしうは　宰相君の心也おなしくは御身ちか

くもつかうまつらはやとわかき心におもふ也

源かねてよりへたてぬ中とならはねとわかれはをしきものにぞ有ける　心はあらは也

返宰相君うちつけの別ををしむかことにておもはんかたにしたひやはせぬ　思はんかたにとは明石上の事をいへる也したひやせましと源の宣へる詞にもかけて詠したる也別にはうちつけの事なれは僞也それをかこつけにて明石上の事をは御したひやはなきしたふ心のあるへきものをとなり

なれて聞ゆるをいたしと　弄いたしとはほめ給ふ也私なれては物なれてと也

車にてぞ　めのとのくたる時のさまをいふ也

御はかしさるへきもの　皇女禎子三條院皇女陽明門院是也御母中宮妍子御堂關白女也　長和二年七月十六日降誕即日被奉御釼是其例也

めのとにも　宰相君なり所せきまてとはいつくまでもおほしやらぬことなくこまやかにとふらひ給へる也

入道のおもひかしつき　入道の馳走のさまを覺しやりて源のほゝゑまれ給ふ也又我御心にも此事のみかゝると也

かへすかへすいましめ給へり　いましめとはかくのことく〳〵とかたくいひつくる心なり誠宣也私詞に法度をいひのふる心歟猶可レ尋也

源いつしかも袖うちかけんをとめ子か世をへてなつる岩のおひさき　抄「君か代はあまの羽衣まれにきてなつともつきぬいはほならなん　此歌の心成へし津の國までは舟にて　めのとのくたり道のさま也

そなたにむきて　都のかた也

いよ〳〵いたはしう　弄明石の女御をかたしけなうおもふ也　私源なとの御子うみたる事を世にもあるましき事に思ふ也

ちこのいとゆゝしきまて　明石の姫君のうつくしき事也

けにかしこき御心に　花是よりは宰相君の心に思へる事也

むへなりけり　諾の字の心歟　尤御斷と云心也

なけきもさめにけり　此乳母のはる〳〵と知らぬ所へ下りたるを思ひ歎きつるも此姫君の樣にて思ひさまさるゝ也

子ゐちの君も　明石上も此ほど迄は源へ別奉りてのもの思ひたえぬうへに此産の名殘なとわつらはしくおほえしか此度源のさま〳〵覺しいれたる體に何事も思ひ慰と也

とく參りなんと　京の御使の上洛をいそく也

御返り思ふことゞも　明石上の返事也

河明石上
獨してなつるは袖のほとなきにおほふはかりの影をしそまつ　此姫君わが袖のせはきにはくゝみたてんはかたしけなしと源へ申心なりおほふはかりの影とは源の事也大空におほふ計の袖も哉と有下の句春咲花を風に　此歌を引には及す歟　明石上の性源なとへかやうの事を打とけては申さぬ人也されはとも子を思ふ心の切なる故にかやうの歌をも讀也云々

あやしきまて御心にかゝり　源の姫君を見たく覺す也

女君にはことにあらはして　明石に御子の出來たる事なとをもさやかに紫へは宣はぬ也

さこそあなれ　弄世のならひさこそあれといふ詞なり

花ねちけは口きゝかましき心にいへり但爰には思ふやうにもなき心とみえたり　聞さこそあれとは明石に姫君の出來たる事を源の紫へさう〳〵こそ（さこそイ）あるなれと樣體を語り給ふ也云々　私兩義何れも可レ然歟弄の義をいはゝ紫なとに御子もあれかしと思ふにはさもなくてかやうの所にはかく出來たるあやしうねちけたることかな世の習ひかくこそおもふやうならぬものにてあなれといふなり聞の義はさう〳〵（さこそイ）女子を生たるにてこそあるなれあやしうねちけたる事哉紫なとには出來すしておもひの外にくちをしきとなり猶後の義然べき歟いかゞねちけたるとは常にいへる口きゝかましき心にては有るへからすおもふ樣ならすあしき心なり此物語所々におほくあり　此段紫の御氣色とりて宣ふ也

をんなにてさへ　おとして源の宣へる也

おもてうちあかみて　紫のさま也はちらひ給へるさま也

あやしく常にかやうなる　紫上の詞也　物にくみなとし給ふ樣に源の宣ひなすとかこつ也

いでよくうちゑみて　源の様也
そよたかならはしにか　源の詞なり紫のおもはすに物えんじし給ふはたかならはしにかと也　私云それといふなり源をえんし給へるにつきてかく宣ふ也　花たかならはしにかあらん　つなしにくゝそ 此詞青表紙ニハ非
見え給ふ サル歟 となりそよなとはさこそなといふ詞也
五音通なり物 思はずにイ本也 にくみはいつならふべきにかと女君の宣ふにつきてそれはさそなといひてさらは又たれにならひてかつなしにくゝは見え給ふそとおちあひて源氏の答へ給ふ也人の思はぬ事を思はせて物えんしなとするをつなしにくきとはいへるなるべし　つなし河に强顔と云々つれなし也れいの字を略していふ也
はて〳〵はなみたくみて　源の様なりたはぶれ事なとのたまひてかほとまても見なしたることよと紫のをさなくおはせしことなどを覺し出たるなるへし
年比あかず戀しと　花是よりは紫上のことを源氏の御心におもひ給ふ也　弄紫上の心也　或御說紫上心と云々　私云此兩義をは了簡するに花鳥の義はあかず戀しと云より御文のかよひなといふまては源と紫と二人の心中をかけていふなるべし萬のことすさみにこそはと源の明石上へかよひ又其外御忍ひ所のあるもすさひ計也此紫にはなすらふへきなしとの義なるへし弄花のことく紫の心といはゝ是も文の通ひなといふまては前のと同しかるへし萬の事すさみと言はか様に一たんうらみなとし給ふも只すさみばかりといふ也　戀しかりしをおもひ出れば眞實のうらみにはあらずと也　私此兩義をいはゞ猶前の花の義によるべし此次に明石上の事を源のいひ出給ふやうにて萬の事すさみにこそあれといふを源の心と見るにたよりあり
此人をかうまで　弄源の詞也明石上の事を宣ふ也
なほおもふやうの　明石姫君行末頼もしく覺す事なるへし
またきに聞えす　弄卒爾に語らば紫のあしく心得給ふべきにやと也
あはれなりし夕のけぶり　花明石卷云源氏の歌に「此たびは立わかるとももしほやくけふりは同じかたになびかん　弄明石卷の烟やく煙の事又いひしこ

となどかたり給ふ也
そのよのかたちほのみしことの音　明石巻にかたちも琴の音も隨やく煙の夕はじめて御覧せしと有
われはまたなく　花是より紫の心に思ひ給へる事也紫は源の御事ばかり歎きおもひし事也
すさひにても心を分　箋閑事にても明石上へ心を分給ひしよと也　かりそめのすさびの様に源の宣ひなす故紫のかく思ふ也
われは我とうちそむき　紫の源にそむきたる様也
哀なりし世の有さま　花紫のうへの過にしかたの事を思ひ出して宣へる詞也　聞「あはれともいふべき人はおもほえで身のいたづらに成ぬべき哉　私此歌不及引歟
紫 おもふとちなびくかたにはあらずとも我ぞけぶりにさきたちなまし　弄源氏君の煙は同じかたになびかんとよみ給へる歌を語り給へるによりて紫のその心をとりて讀給へる也　明石にての歌など語り給ふによりて煙をよみ給へり源を恨み給ふ心なりさきだちなましとはおもひにきえぬべしと也　私よく聞えたり源の明石上に對して讀給へる様におなじかたになびかん煙には非ずとも我ぞ思ひの烟にきえんと也あかしに深き心をうらみ給へる心也
何とかあな心うや　花源氏の君の詞なり何と宣ふことぞやあな心うのことやと紫上の歌を宣ふ心也私源の紫の歌の恨みたるさまを聞おどろく也
源返 誰により世をうみ山に行めぐり絶えぬ涙にうきしづむ身ぞ　花源氏の紫上を又なく思へる心にてこそかかる有様も見え奉るにおもひ知り給はぬ事のうらめしきと也　弄紫上を思ふ故にてそ世を遁れなどもし給はでさま〳〵浮沈みぬれと也　私うき世の沈淪をも堪忍するは紫上故ぞと也
いでやいかでか見え奉らん命こそ　いでやは心をおこすなりいかでか志のほどを見え奉らんと也　命には限有志には限のなきよし也
人に心おかれしと思ふも只ひとり故ぞや　花紫上ひとりをさりがたく思ふ故にこそ人の恨をば負しと思へと宣ふ也
さうのことを引よせて　源のかきならしすさび給へるさま也
すぐれたりけんもねたきにや手もふれ給はず　花明

石上の箏を宣ふ也　私紫に箏をすゝめ給へと明石にての物語を聞給ふ故にや引給はぬ也
うつくしうたをやき給へる　是より紫の樣をいふ也
源のうつくしみ御らんずるさま也
しうねき所　箏などに手ふれ給はぬ樣もしうねく恨みたる樣の心あるなりさなから能ほどなる體をほめていへる也
五月五日ぞいかに　河五十日也　花明石姫君三月十六日誕生五月五日五十日にあたる成べし　弄五十日の祝也　三月十六日よりあたる也
何事もいかにかひ有さまに　弄都にてあらばとの心也
をとこ君ならましかば　男子は嫡男夕霧のおはすれば次にはさしも有まじき事也是は御心のうちに后がねと覺す故に打捨がたくおぼす成べし
我が御すくせも此ことにつけてぞかたは成けりと
花かたほなるとはをさなき時をいへりすぐせのかたほなりといふは行末の心いまだ定らぬ心なり
弄源の須磨などへ沈み給ひし事も明石女御の誕生し給べき宿世にやとなり花鳥には行末いかゞなどいふべしと云々　私花鳥の義不レ可レ然我御すくせもとは此姫君をば源の心中に后がねと覺すに紫上の御腹などにも出來ずして明石の浦にて生れ給へるは物たらはすに滿足なき心也かたほとは物の正體ならぬ事にいへり　河片耄　私云片帆の心に用る歟
御使いだしたて　五十日の前につかはさるゝ也
覺しやる事も有がたう　御心つけもたぐひなき也めでたきさまにてまめ〳〵しき御とぶらひもあり
眞實の御とぶらひもあるあり
源うみ松や時ぞともなきかけにゐて何のあやめもいかに分らん　河「おぼつかなけふは子の日かあまならば海松をこそ引べかりけれ　六帖貫之海松和名みるの名也一説あらい磯の岩に生たる海藻の松の葉のやうなるもの也　浪のそこにあれば時ぞともなきと云也　花五月五日なれば何のあやめといへり又いかゝは五十日に思ひよそへたり返歌のけふもいかにといへる同心也　弄海邊の松なるべし不變の枕詞也　聞海邊の松也　不變の陰にゐてけふをもいかに分らんと也　けふをはいかに分て祝せらる

らしと也　海松をみるといふ心はわろし
心のあくがるゝまでなん　是は源の御文の詞なるべし
入道れいのよろこびなきしてゐたりかゝるをりはいけるかひもつくり　聞貝をかる也前にもかひつくるとあり又いける甲斐とつゞけたる也　花いける世のかひなりかひつくるは泣を云　悦なきの心也
爰にも萬所せきまで　明石にも五十日のまうけしたる也
此御文なくは闇の夜にて　三京よりの御文みずは闇の夜の錦にて有べき心なり
めのとも此女君の思ふ様なるを　明石上の事也
をさ／＼おとらぬ人も　をさ／＼おとらぬとは源の京より下し給しめのとに俗姓などはおとらぬもあれど爰もとへくだるは世に在侘て下ればすぐれたる人はなき也　此乳母は源のわりなく宣ひかたらひたればくだりたる也
いはほの中たづぬる　弄たづきなき人などの山住もとむるがくだりぬる也よろしき人はまれなると也
これはこよなう　あかしのめのとのさまなりほめていへる也
おとゝの君の御有さま　めのとの源氏の御おぼえのほどなどいかめしきをもかたる也
なこりとゞめたる身もいとたけう　河烏師 日本紀勇猛武かほどにおぼしいへるほどの身と成たるも殊の外の事とやう／＼我身の程をも思あかるゝ也明石の心也　心づよくたのもしく思ひなす心也
御ふみもろともに見えて　源の文を明石上の乳母と諸共に見る也
あはれ人はかうこそ思ひの外にめでたきすぐせは　乳母の心に明石上の宿世と身のほどゝを思ひくらぶるなり明石上は播磨守の女なり　乳母は宰相ほどの人の女なれば也
何事もなくさめにけり　乳母はいかでなど源の文にあるになぐさむ也
返 明石上 かすならぬみしまかくれに鳴たづをけふもいかにととふ人ぞなき　弄いかに五十日をそへたり卑下の心也
萬におもふたまへむすほゝるゝ　明石上の文の詞の様の哀也かやうに思ふことをも書給ふべき人なら

ねどむすめの事に思ひ給はぬなるべし
うしろやすく思う給へおく　源の文に都へのぼるべき事をすゝめ給へるにみづからの事にはあらで姫君をうしろやすくのぼせたきといふやうの返事のさま也　思ふ給へおくといふにてよく聞えたり
うちかへし　あかしよりの返事を源のみ給ふさま也
哀となかやかに　河若有古歌歟　但此物語の中にただあはれなる事を哀とながめ給ふといふ事あまた有松風の巻にも有歟　歌文などを御覧じて打詠吟じ給へるさま也
女君しりめに　紫の源を見給ふ也
うらよりをちにこぐ舟の　我をはよそにといふ心なるべし　奥入河「みくまのゝ浦よりをちにこぐ舟の我をばよそにへだてつる哉
まことにかくまで　前にも明石の事に紫のえんじ給へる事ある度々になれば源のかく宣ふ也
わすれがたきひとりごとを　所のさまなどのあはれに思ひ出らるゝやうにかこつけ宣ふ也
きゝすぐい給はね　紫の聞過さず度々とがめ給ふと也

やんごとなき人くるしげなる　弄上臈なども是ほど難有と也
かく此御心とり給ふほどに　紫の上のけしきとり給ふに御暇なくて花散里へ無音と也
めづらしく御めおどろく　弄花散里のさま也
五月雨つれ〳〵なる比　花花散里へわたり給事也
覺しおとして　御心をおこして思ひくはだて給ふ也すゝまぬ心也
おほしやりとぶらひ　花散里は源の御はぐゝみにて過し給ふ也　恨イ　さればたまさかにとぶらひ給ふをも風流たちにくみなどはし給ふべきならぬ也
にしのつま戸には　花ちるのかた也
月朧にさし入て　五月雨の雲間をおもしろく書り
うち詠給ひけるさまながらのことやかにて物し給ふ　らイ
けはひいとめやすし　源の用意ふかくふるまひなしておはしたるにおとろきかほならす其まゝさしむかひたるさまことに何となくよき樣なるべしはな散里はいづくにてもかやうにうちむきたる心ばへすぐれたるさまに書り
花散里　くひなだにおどろかさすばいかにしてあれたる宿に

月をいれまし　弄この歌尤優也云々　源の問給ふを月にたとへたり　卑下の體此家のふりたる心ばかり也

とり／＼にすてがたき　源の御心なり紫は勿論なり明石もすぐれたりまた此何となくよきほどにさしむかひたるさまなどまたたぐひなしかた／＼に御心のとまる故に身もなか／＼くるしきと也

返源　おしなべてたゝく水鷄におどろかばうはの空なる月もこそいれ　すこしかこちなせる返歌なりおしなべていづくをもたゝく水鷄に門をも明給はんならばうはの空の月も入べしと我ならぬ人もやとうたがひ宣へる心也

うしろめたうとはなほことに聞え給へと　源の男女のならびなれば歌にも詞にもかやうにうたがふにはなほさりに宣ひなせと花散里の本性さやうのあだ／＼しき類にてはなしと源のおぼす心をやがて斷てかけり　殊勝の詞也

とし比まち聞え　源の歸京を待つけ給へる御心を嬉しとおほししると也

空なゝがめそとたのめ聞え給ひし　須磨の卷に源の出京のいとまごひに花散里へおはしたる時いみじうおもひ歎きければ源の歌に「行めぐりつひに住べき宿の月しばし曇んそらなながめそとなくさめ給ひし也

などてたぐひあらじと　弄花散里の心に源のしづみ給ひし事を一身のおもひのやうに思ひしかどもうき身にては對面もかたくておなじなげきなりと云云

おいらかにらうたげなり　弄さして恨なとはし給はぬ體也　神妙なる花散里の性也

つきせすそ　源の花散里につき／＼しくかたらひ給ふさまを云也

彼五節をおぼし忘れず　或花散里の卷に桂の木の家あるじに覺しなずらへて思ひ出給ひし五節君なれば今も花散里への御音信の次におぼし出すにや須磨明石にこの人の事あり

おやは萬におもひいふ　五節君によすがつけんと也されど源の御事に心とまりてこと人に契らんとは五節君のおもはぬと也

かやうの人つどへても　弄五節君などやうの人をつ

どへて然るべき人をむかへたらばその人のうしろみにと覺す也

或紫上などに御子も出來たらば五節などの類の人々つどへて御子のうしろみにもといふ心也　私聞書には明石姫君の事云々只御子も出來たらばとの義然るべし

彼ゐんのつくりさま　花是は二條の東院の造作の事也　弄二條院にはおとるべき作りざまにこそ中々見所ある也

よしあるずれう　花受領に人を申なして其切に殿殿門々などをあてゝ作らする事なり造内裏などの時も如是有也　弄其たよりある受領などに仰て作らせらるゝなり花鳥にみゆ

内侍のかんの君を　朧の事を源の猶おもひはなれぬ心有

こりずまにたちかへる　こりずま面白く書なせり引歌に「こりずまにまたもあだなは立ぬべし人にくからぬ世にしすまへば

女はうきにこり給うて　朧のこり給へるなり又明石巻源歸京の後朱雀のさま〴〵の事を朧へ仰られし所も物の心知給ふまゝに思ひしり給へる樣をかけり爰に叶たると云々（云イ）

中々所せう　聞書朱雀のおりゐ給うてからは中々障もなくうちそひておはすべければ對面有べき樣もなき成べし朧の心なるべし

院はのどやかに　朱雀なりおりゐ給ひて御心閑なる也

女御更衣みなれいのごとく　御位の時の女御更衣今もかはらず朱雀にさぶらひ給ふなり

春宮の御母女御　弄承香殿の女御也

かく引たがへめでたき　承香殿の女御もとは朧におしけたれておぼえもなく（かれにイ）おはせしが此御はらの御子春宮に居給ひぬればそれとそひて引はなれておはします也

此おとゝの御とのゐ所は昔のしげいさなりなしつぼに春宮はおはしませは　弄源氏の直廬は桐壺なり一勘に春宮は別殿におはしますによりて昭陽舍におはします也　いづくにても便宜にしたまふべし

河淑景舍桐壺　昭陽舍梨壺　已上東

宮をもうしろみ　春宮をも源のうしろみ申給ふと也

入道きさいのみや　弄尼に成給ひしかば皇太后宮などに成給ふべきならねば也　花女院〔后イ〕もしは御位に即給はで院に成給ふに小一條院などをば太上天皇の尊號とは申侍らず但封戸年官年爵などは差異もなければなずらふとは申侍るなり御封とは封戸也三宮は各千五百戸〔へるイ〕なるを太上天皇になずらへて二千戸給はり給ふ心なり院司は女院方の事つかさどる判官代主典代などなり　河本朝之太上天皇は持統天皇より始る女帝なり東三條院延喜以後の例なれば今の薄雲の女院の尊號は持統天皇の例たる歟東三條院正暦二年七月一日院號依レ爲ニ國母一也　續日本紀云延暦九年閏三月丙子皇后崩甲午奉レ誄謚曰ニ天高藤廣宗照姫之尊一雖レ爲ニ崩後一皇后尊號之准據也今之薄雲の尊號は專持統天皇之例たる歟

封戸員數　太上天皇二千戸　三宮各千五百戸　東宮千五百戸　一品親王六百戸　二品親王四百五十戸　三品親王三百戸　四品親王二百廿五戸　無品親王百五十戸　入道とは男女を〔三イ〕限らず佛法の道に入る人を云〔三イ〕名也圓融院后藤原遵子二條關白頼忠女天祿四年五月九日御出家號ニ入道宮一　弄花鳥にあり

ゐんしとも成て　河院司　判官代　廳　召次所　任所　別納所　御膳所　進物所　所衆　武者所　御隨身所

さまことにいつくしう　愚本いつくしうと有　一本いつくしとはかりあり　院司ともなりて嚴重の體也　又御行ひの嚴重なる歟

御おこなひぐとくの事　薄雲女院行ひつとめ給ふ也

年比世にはゞかりて　源氏君と薄雲との間の事也今は出家入道し給へばむつかしき事なく又源氏君も世にはゞかる心なくて出入も心やすくし給ふ也

太后はうきものは世なりけりと　是は薄雲と源との事を太后の覺す心也心のまゝに申行ひ給へども終には又薄雲も源も御心のまゝなる世に成り給へる事を口をしく覺す惡后の心なるべし

おとゝはことにふれて　弄惡后は源氏をよからずおもひ給へども源氏はかへりて后に心よせつかうまつり給ふ也

世人もやすからず　弄惡后の心を世人もよからず云る也源の心よせ給ふをみるに依て也　源の性みえ

たり　私悪后の源へあしくし給ひつれども源は今よくあたり給ふなりそれがかへりて恥かしげなるなり我に悪き人によくこなたからあたるははづかしき事なるべしそれを世の人の色々に太后の心をあしくいふなるへし

兵部卿のみことし比の御心ばへ　須磨の御うつろひの時兵部卿宮紫上に聞え給はざりしを源氏君のうらみ給ふ也

中々なさけなきけしきもうちませ給ふを　弄　源氏の心大方の人々には左遷の時節の恨をもみせ給はず舊悪をおもはざる也されども兵部卿宮には其時のけぢめを見せ給ふ也紫上の故にも理をまけぬ性をみせ給ふなるべし

入道宮はいとをしう　薄雲は兵部卿宮の御妹となる故也兵部卿宮の御為いかゞとおぼす也

世の中のことたゝなかばを分て　河　執政臣二人之例
　寛平九年七月三日權大納言兼左近大將藤原時平權大納言右近大將菅家、先帝詔云少主未レ長間一日萬機之政權大納言藤原朝臣菅原朝臣可レ奏所レ請之上之事　延喜十五年十二月五日大納言源昇藤原道明已上宣云可奏弁官雜文書　私源氏の君執政の臣たるべきを事繁き職には堪ずと宣ひて太政大臣へゆづり給へども大形の事ばかりにて源氏君も世をまつりこち給也

權中納言の御むすめ　太政大臣の息もとの頭中將也二條相國の四君腹の姫君也十二歳にて參り給ふ弘徽殿に住給ふ弘徽殿の女御也

おほいどの居たちて　攝政太政大臣也此おとゝの孫女也

兵部卿宮の中君　此中君は紫上の妹とみゆ鬚黒大臣の北方と一つ腹に三人姫君あるべし其中君とみゆされど今一人は系圖にも見えず此同腹の妹君一人あるべし

兵部卿宮
- 鬚黒大臣北方 大將に火とりの灰かけし人也
- 紫上 母按察大納言女也
- 冷泉院女御 母鬚黒の北方と同し乙女巻に入内澪標に中君といへり然とも紫上よりは妹とみゆ

人よりまさり給へども　弄　源氏のおとゝの心也　兵部卿かたをあしさまに源の覺すなり

いかゝし給はんとすらん　弄　宮の女御の事也

私草子地なりかやうに兵部卿宮をあしざまに源の

覺すはいかゞし給ふへきぞと猶行さきを疑ひいへる心なるべしかやうに御中悪しくてはいかゞあらんとあやふみ給ふ也

その秋住よしにまうで給ふ　弄源二十八歳の秋なり御堂關白の例にや　同時の事をもかけり　聞須磨にての願はたし給ふ也後に書故に其秋とかけり

折しも彼あかしの人　明石上も此時節參詣と也

こぞことしはさはる事ありて　聞去年とは本になし

　私三本にもこぞことしと有て本になしと去年と云字のわきに注して不滅之なりこぞと有てよろしき歟　花明石上年ごとに住吉に詣で侍るが兩年は懷妊にておこたりし也　弄明石上懷妊によりて去年の秋今年の春參詣解(懈イ)怠也

舟にてまうで　あかしより浦づたひなるべし

のゝしりてまうで給ふ人のけはひ　源の參詣をよそのことのやうに舟から見やりたる體也

いつくしきかんだから　嚴重の神寶也　河たらはしきかんだからと有て糺嚴重也或本いつくしきと有同心也　私よの常いつくしきとあり

かく人とをづらなど　河十列弄同　花十列とは東遊の舞人十人馬に乘て裝束は青摺といふ物を着て神社の行幸關白の賀茂春日詣などに召具して社頭にて求子など舞て其後馬場にて馬を驅る事あり尋常は左近右近の官人是をつとむ八幡臨時などには殿上の雲客舞人たり源氏君住吉詣にも樂人十列を具し給へるなるべし

内大臣殿の御願はたしに　源氏君の御參詣をしらぬ人も有よなどほこりいふさま也

けにあさましく　此下の詞にしほたれたりといふ所迄明石の心中にていろ〳〵におもふ也

身のほどくちをしう　明石上の心にかくよそ〳〵に見奉るも身のほどの及ばぬ故と思ひ又はさすがにかけはなれぬ身ながらかく心をつくして餘所々々に過すらんなどゝ心のうちになげきてうちしほたれたる也

松原の深みどりなるに　所の樣源の參詣の體をいふ也

うへのきぬのこきうすき　花紫もあけもみどりも位によりて淺深あるをいふ也

六位の中にも藏人は青色しるく　花六位之藏人麴塵

の袍を青色といふ也　弄一勘麴塵を青色と云今も
極臈の藏人は着之也
彼賀茂のみづがきうらみし右近のせう　河齋院御禊に一員つとめたりし人あふひかざしゝそのかみと詠せし事なり左衞門權佐になりたる也　私此左衞門權佐といへるはあやまれり　花齋院御禊に一員つとめし源氏の須磨へ移り給時御ふだけづられしか歸京の後もとの位に成て今又ゆけひの尉にて六位藏人かねたり隨身なと召具してこの御物語につかうまつれる也　弄一勘六位藏人にてゆけひの尉を兼たる也
よしきよもおなしすけにて　花廷尉の佐にて赤衣を着る也　弄衞門佐なるべし同とは前のゆけひのことなり一勘廷尉佐は赤衣を着す五位なる人なり三事かけたる五位藏人は今も規摸に申す事なり同じとは衞門佐の事也
あかきぬすかた　聞書又或抄赤衣に二樣有と云々　紅花には染あげたると又蘇芳にて染ると也　聞外記なとは紅花染と云々　これも紅花と云々
御車をはるかにみやれば　明石上の心也
かはらのおとゞの御れい(イナシ)をまねひてわらは隨身をは給り給けり　河河原左大臣融賜ニ童隨身ヲ事所見未ニ勘出一　中右記云御堂入道殿令レ賜ニ童隨身一九條殿例云々　今案御堂關白長德三年給ニ童隨身六人一云云　花長德二年八月九日御堂殿于レ時左大臣辭ニ左大將同日以ニ童六人一爲ニ隨身三年十月九日勅賜ニ左右近衞府生各一人近衞各三人一爲ニ隨身佃停ニ童子一云々　今案童隨身みつからゆひて紫すそこのもとゆひてするよしは見えたれどその裝束の色目見ところなし　水干たるへしやかり衣なるへしや隨身といへるは弓やなぐひをおふべきにや何れも慥なる證據を見侍らす御堂殿は六人と見えたり是には十人とあり　弄花鳥にみえたり或說忠仁公白川に往たまふを河原の大臣と號と云々　一禪の御說忠仁公賜ニ童隨身一事無所見又融公童隨身給事國史なとにもしるさずされども如レ此事注せぬ事も有べし此物語にかけるは即支證ともなるべし一禪御記　弘安源氏論義此事あり可ニ勘入一なり
大殿はらのわか君　夕霧も參詣の御供也　花夕霧の事なり殿上わらはにて供奉せられたる也　弄夕霧

八歳也源二十一歳のとし生れ給へり
つくりあはせてやうかへて　夕霧に相應したる様の義なりやうかへては源の童隨身などゝ又様かはりてしたてたる也又例にもかはりて結構なる也
雲井はるかにめでたく見ゆるに　花人の行へ遠き事を云也弄同　私只物へだたりたる様にはるかに及ひなきさまにみやりたる體をいふ歟　聞書明石上に思ひをそへてかく也
わか君のかすならぬ　新若君也あかしの姫君也
いよ／＼みやしろのかたををがみ聞ゆ　明石上の姫君の御事を祈申也
國のかみ參りて　攝津守なり常の大臣の參詣よりもことに御まうけなどいかめしうすべしと也
いとはしたなければ　明石よりの衆爱の體に立ましり難き也
神も見いれかすまへ給ふべきにもあらず　弄古今
「手向にはつゝりの袖もきるへきに紅葉にあける神やかへさん素性　此歌の心にかよへり　聞上の歌の心を下にふくめり
けふは難波に舟さしとめてはらへをたに　河神武十年戊午春二月丁酉朔丁未皇師遂東舳艫相接到ニ難波之碕ニ會有ニ奔潮ニ太急因以名爲ニ浪速國ニ亦曰ニ浪花ニ今謂難波ニ訛也　花代始に八十島祭は難波にて有典侍の人御衣を持て參向して解除する事有是は皆難波の御はらへの例也此義するゑに注すへし
君は夢にも知り給はず　明石より參りたる事を源の知り給はぬ也
きしかたの御ぐわんにもうちそへて　もとの立願にも猶取そへてさま／＼ことをしつくし給ふと也誠に斷なるべし
惟光やうの人　すまの浦にての難義を思ひしりたる人々也
あからさまに立出給へる所に　白地也そともいふ心也　惟光の歌を源へ申入る也
惟光 住吉のまつこそ物はかなしけれ神代のことをかけておもへば　秘先なり松によそへて神代のこととは古き事となり須磨明石にしつみ給ひし時の事也　或抄御説花鳥におなじ　聞かなしけれとは感ずる心也こゝにては常のかなしきと見てはわろし
源氏 あらかりし浪のまよひに住吉の神をはかけて忘れや

はする　須磨浦にての心を宣へり
しるしあるなど宣ふもいとめでたし　秘めでたしと
は惟光の見奉る心なり源の詞なり靈驗有など仰せ
らるゝ也　聞しるし有なんど如此よめり　私惟光
にしるし有など仰せらるゝ詞歟　然らはなんとゝ
よますともなとゝ讀て可レ然いかゝ　猶私に注す
る義可レ然歟

明石の舟此ひゝきにおされて　此歌の次に惟光の知
て申たる歟

神の御しるべをおほし出るも　須磨浦に沈み給ひし
時の事より又あかしのうらへおはして明石上なと
を見初給ひて御子なと出來たる事なとも皆入道
の申をきゝ給へは此明神の御しるへ也となり

いさゝかなるせうそこたに　明石上のおとつれたく
覺す也

難波の御はらへ　河花等の義前に書之　こゝに注す
へし

七瀬によそほしう　一勘に七瀬の御祓今の世にも毎
月有事也　近江の七瀬遠所の七瀬といふこと有
私洛中に七瀬あり猶勘注すへし難波の七瀬尋注す
へし　或祓は七瀬か本也七瀬は在所有歟所をかへ
たるもあり是は難波にて七瀬の御祓し給なり　是
首書也

堀江のわたりを御らんして　河　一ほり江には玉しか 井手左大臣幸難波時作歌
ましを大君の御舟こかんとかねてしりせば　つ 貫之
の國のながらへゆかば忘れなて又もみまくのほり
江なるらん　花　仁德天皇の御時はしめてほられた
る川也弄同

いまはたおなし難波なると　河古今「侘ぬれは今は
た同し難波なる身をつくしてもあはんとそおもふ

さかめしもやとれいにならひて　るイ　旅の具なれはつか
みしかき也職事なとは旅店にも隨身するなり是も
惟光が懷中に用意したる也　河旅店筆硯の由歟
職事なとは硯袋を隨身すれは是も其體歟 紙本

御車とゝむる所にて　御車たつる所にて筆硯を車の
中へ惟光の奉る也心つかひおもしろし

おかしとおぼして　源の御心にも心はせをかんし給
ふへし

源濟 身をつくしこふるしるしにこゝまてもめくり逢ぬる
えにはふかしな　聞書みをつくしなれと爰にては身

を盡しとつ文字清へしと云々　或御說みをつくしのつ文字清也云々　私えにはふかしなは緣深きなりそれを難波江によせたるなり

みをつくしは水の深さ所に立るしるし也自然にめくり逢ぬる緣を感して是は身を盡して戀るしるしといふ也　河國史に難波に始立ニ澪標一のよしみえたりその所をはみをつくしと云と土佐日記にあり萬葉十二には水咫衝石とかけり水尾共書なり又みをとは瀸澪濃水急形 みをつくしとは江海の深き所に木を立て是をみをとしらすればそれをみて舟をよせ下す也

かしこの心しれる　明石のあたりの案内者をつかはす也

こまなへてうち過給ふにも　源の下向のさま也

心のみうこく　明石上の心也

かたしけなく覺してうちなきぬ　明石上源の御音信を感したるなるへし

返明石上
數ならてなにはのこともかひなきに何と本みをつくし思ひそめけん　心はあらはなりおよひなきちきりゆゑ心をつくすよしなりなにはの事もは何事もといふなり

たみのゝしまにみそきつかうまつる　河田簑嶋也
弄明石の上の御祓也　御はらへの物とは木綿につけたるなるへし　私此事明石上の御祓の御はらへのゆふに付けて返事を奉るといへる不審なり是は源氏君難波にて七瀨の御祓せさせ給へは田簑嶋も此内なるへし其たみのゝ島のみそきの物を奉る次に明石上よりの返事をも奉ると見て可レ然歟　明石上は難波にての御祓なり七瀨とは見えすよそほしうつかうまつるといへるさまも源の御祓の七瀨のうちと見えたり

夕汐みちきて入江のたつも聲をしまぬほと　河「難波潟汐みちくらしあま衣田簑の嶋にたつ鳴わたる
言語道斷おもしろく書りこの詞をとりて道具大納言「風はやみゆふしほみては難波かた入江のたつの聲もをしまぬ　私難波かた鹽みちくらしの引歌をおもしろく書り前の詞に田簑嶋にみそきつかうまつると書て其うつりに夕しほまてみちきて入江のたつも聲をしまぬといへるおのつから便有て書なせる歟

源氏
露けさのむかしに似たる旅衣たみのゝ島の名にはかくれす　河花古今「雨によりたみのゝ嶋をけふゆけは名にはかくれぬ物にそ有ける　弄名にはかくれす難波をよそへたり雨によりの歌によそへる也　私明石にての事なとを折ふし參り逢たるに覺し出られて露けさのむかしに似たるとよみ給ふにや

みちのまゝ　道すがらなるへし

御心にはなほかゝりて　明石上の事也

あそひともの　河遊女也弄同

上達部と聞ゆれど　わかやかなる公卿ほどの人も是に目止る也

されといてやおかしきことも　弄源の心なり上達部などさへ彼遊女にめとめぬるもあるを源氏見給ひて大かた世の人の事を思ひ給ふなり人からによりてこそ心をもとむへけれと也

すこしあはきかたによりぬる　花あはきかたは淡々しきと云心なり遊女を賞する事をいふなり私人の位程によりて有へきをしへなり公卿なとまても昇る人は遊女なとに心とむるはかろかろしくあはあはしき事成へしとなり人の敎なり

弄たのめなること今は大方の事（事イ）もと也心はさやうの人のこともあは〳〵しきには心もとまらぬものをと也人々（今あそひ一本）遊女に心とめたる氣色を見給うて思ひ給ふ也これ又敎也々々

おのか心をやりてよしめき　弄遊女ともの體也

彼人はすくし聞えて　源の下向の跡へ參る也明石上の事也

みてくら奉り　あかしの奉幣也

ほとにつけたる願とも　源の御願はたしにくらべて程に付たるかと云也

また中々物思ひそはりて　源の御ありさまのみ（イナシ）まこと〳〵しきをよそに見又夕霧のさまを姫君におもひくらべて物思ひのそふなるべし　明石上の心也

いまや京へおはしつくらんと　弄不日に音信給ふ御心殊勝也可ㇾ見々々云々

この比のほどに　京へ迎ん事を迎へ（おちくぼ歌）かはすなるべし

いまやまた島こきはなれ　花「今はとて島こぎはなれ行舟もひれふる袖をみるぞかなしき　九禪抄此浦をはなれんことはと明石上の心なり云々　稱名

院云ほの〴〵と明石の浦の歌の心にてみればやすきと也明石に縁も有て人丸の歌然るべしと云々
聞ほの〴〵と明石の浦の歌の心にてみるべし行末のおぼつかなき心をいふ也
入道もさていだしはなたん　入道もさすが京へのぼさん事を思ひやすらふなり又此まゝうづもれ過すべきにはあらぬ心なりとやかくやと源へ女を見せ奉らぬさきより物おもふと也
おもひたちがたきよしを　先上洛の事は斟酌の様に申のぼす也
まことやかの斎宮もかはり給ひにしかば　花冷泉院御位につき給ひて以斎宮かはり立給へば六條の斎宮は御息所共にのぼり給也　弄斎宮は御代に一度立給ふと云々　私斎宮は御代に一度かはり立給ふ也但御いとまの出ざればかはり給はぬか大斎院選子内親王は五十年餘斎院にておはせしにや斎宮も同じかるべし此かはりの斎宮誰とも見えす
かはらぬさまに何事もとぶらひ　源氏のおとゞむかしのごとく何事もとぶらひ給ふと也
むかしだにつれなかりし　弄六條御息所の事也　私

源氏のつらきふしみせ給へるを御息所のみしり給ひてさやうの絶え〴〵なる御音信に又今更に物をや思はんとつれなく思ひはなち給ふ也
あながちにうごかし聞えても　源も御息所のつれなきをしひて今更逢給ひても我心ながら又疎遠ならんもしられず疎遠ならばつらくうらみん御息所の御さまなればしひていひなびかし給はぬ也御身の位のほどもかる〴〵しき御忍びありきなどのむかしのやうにはならぬ故にかた〴〵大かたにて過し給ふ也
斎宮をいかにねひ（まさりイ）給ひぬらん　後に冷泉院へ参給ひて秋好中宮と申せし也故前坊の御女御息所の御はら也
なほ彼六條のふるみや　河六條京極御息所の舊居也
みやびかにて住給ひけり　引歌略之　河嫺　閑麗也　閑暇文選　臈朋遊仙窟
にはかにおもくわづらひ　六條御息所の違例也
つみ深き所にとしへつるも　花斎宮にてましますほどは佛經をいむ事なり
かけ〴〵しきすぢにはあらねど　好色のかたのかゝ

わつらはしき事イ
つらひ事にてはなしと也　源の御心也
きこえあはせ人に　心ざまよしある人なれば物など宣ひ合する人にとなり人の字濁てよむべし
けふそくにおしかゝり　脇息也　六御息所の體也
御かへりなど　源への直の返答也
たえぬ心ざしのほど　源の詞と云々　源の心歟　心ざしのほどを見えつくさぬ心也
かくまでおぼしとゞめ　是ほどまで源の御心ざしの程のあらじと覺しつるに只今の體を御息所の哀に覺す也
齋宮の御事をぞ　源へ御むすめの姫君の事を宣ひおく也
かひなき身ながらも　六御息所のわか身はかひなき物から秋好の今ちともものを覺ししるまでうしろみたきとおもひつるものをとていみじうなくさま也
かゝる御事なくてだに　源の詞也かやうに御遺言なくとも疎略有まじきにまして御遺言の上はうしろみ奉らんと也
いとかたきことまことにうちたのむべき　弄六御息所の詞なり源は頼もしげに宣へども世間のならひはさも有がたき事也と也　或源の詞をうけて御息所の返事の詞なり心は源氏好色の人にておはすれば齋宮の親と頼み覺すともたゞに置給はんことはいとかたき事と云心也と云々　私云此かたきこととは難事と云なり秋好の御身の難事なると御息所の詞なり眞實の父ある人も女子は母にはなれたるはあしき事有べしまして眞實の父ならねばと也
ましておもほし人めかさん　是よりは秋好を源の好色かたにて後見給はゞ人にも何かといひあつかはれ又紫上などやうの人々隔心ろイあるべきと也さて其事をうたて有思ひやりことなれとは宣ふなり
身をつみ侍るにも　御息所の我身にても思ひしるよし也源との間の事なるべし葵のことなどに御心もみだれし事也或引歌「身をつみて人のいたさぞしられける戀しかりしに戀しからんや
あいなくも宣ふかなと　弄あぢきなく也　源の心也御息所の有のまゝに宣ふをかくおぼすと也
とし比に萬おもひ給へしりし　是より源の詞也　御としの行まゝにすき心なきと宣ふ也

よしおのつからとて　よし〳〵自然に我心の程はみゆべしと也

御くしいとほしげに花やかにそりて　御息所の尼になり給へるさま也

丁のひむかしおもてに　秋好の様をのぞきて源のみ給ふ也

けたかき物あらひちぐかに　三本ひそひかに如此あり　弄けだかきものからひぢぐかにけだかくて又人ちかなる體も可レ有（そひやかイ）　河ひそやかに潜字也

さばかりの給ふものをと　秋好の事を好色のかたのなきやうにと御息所のの給ふものをと源ののぞきつゝも覺す也

いとくるしさまなり　御息所の病の切なるさま也

人にかきふせられ　脇息により居給しか又煩ひおもりて人にたすけられてふし給ふさま也

ちかう參りきたるしるしに　源の詞也まゐりたるしるしに御心ちよくはうれしからんと也

のぞき給ふけしきなれば　源の丁のうちをのぞき給ふさまなるを御息所のしりて病惱のさまいよ〳〵おそろしげに侍ると宣ふなり

まことに淺からずなん　句切　淺からぬ御懇切となり

思ひ侍る事すこしも　秋好の事をかつ〴〵申置給へる事を嬉しゝ覺して御息所のかく宣なり

かゝる御遺ごんのつらに　源の詞也遺言など有ほどに隔心なく覺したるはうれしきと也

故院の御子たち　弄源の兄弟の事也　秘源の御兄弟あまたあれど大后腹の宮達は源などへは一傾うとうとしき也

おなし御子たちのうちに　弄秋好を桐壺の御子のやうにと也　私此秋好をば桐壺の御子のうちのやうに覺すと前に有

すこしおとなしき　源の御としの事を宣ふ也

あつかふ人もなきければ　弄源の御子も數多なき心なり

御とぶらひすこし　此後はいよ〳〵ねんごろに源の御息所をとぶらひ給ふ也さて七月八日有てうせ給ふなり

あえなうおぼさるゝ　源の御心也

とかくの御ことなど　跡の事何をも源より仰付られ

給也
又たのもしき人　御跡などとりまかなふ人とてもなき也
齋宮の宮づかさ　齋宮齋院ともに宮司有り
御みづからも　源も見まひ給ふ也
宮に御せうそこ　秋好へ源の御せうそこ也
女別當して　齋宮などにある女官也
聞えさせ宣ひし　母御息所の遺言の事也
いとたのもしげにとし比の御心ばへとりかへし　弄
源の心をうらみおもひし人もと也
殿の人々かずもなう　源の殿の人を奉り給也かずもなくとは多き事なり
御さうじんにて　源の精進にておはする也
みすおろしこめて　心喪のさまなるべし
宮には常に　秋好を細々源のとふらひ給ふ也
みづからも御かへり　源へ秋好の直に御近事有也
かたじけなしと　草子地也　人つての返事ばかりは
源へいかゞと皆々の申すなり
源氏
たゞいまの空を　源の文の詞也
ふりみだれひまなき空になき人のあまかけるらんやとぞかなしき　戀イ　あまかけるは天翔と書りなき人のたましひのことなり此古宮のつれ〴〵なるさまを天翔てぞ見給ふらんと悲しく思やり給ふ由なり此歌ふるものなし若あまにてもたせたる歟
そらの色の紙のくもらはしきに　河薄縹色紙也　弄
くもらはしきはにび色の心也
わかき人の御めに　秋好の事也　源のつくろひ書給へる也
聞えにくゝ　秋好の此返事あそばしにくゝ覺す也
引つくろひ給へるゆゑにはぢ給ふ心歟
これかれ人づてには　爰にさぶらふ人々を是彼といふ也　人づてなどの返事は聊爾也と申す也にび色は鈍色也
墨づきなどまぎらはして　うすくこくまぎらはしたるなるべし
返秋好
きえがてにふるぞかなしきかきくらしわがみそれともおもほえぬ世に　花我身それともは実をかくしてよめるなり　私御息所におくれて我身のはかなくて殘れる樣を讀給へる也
御手すぐれてはあらねど　母御息所ほどにはなき心

歟あてはかなるとはけだかきやうの心也
くだり給ひしほどより　齋宮の下り給ひし後は猶もたゞあるまじく心にかけ給ひしかども今は我儘なる世に成たる樣なれど御息所のうしろめたげに宣ひし事を思ひ出し給ひて大かたの御後見ばかりはかはらずあつかひ聞えんとおもひはなれたる心也
今は心にかけてともかくも聞えよりぬべきぞかし覺すにはれいのひきかへしいとほしくこそ御息所のうしろめたげに　私此段秋好の御返事を見給ひて源の覺す心なり下り給ひしとは齋宮にて下り給ひし比より床敷覺しけることなり今は心にかけてともかくもとは今は源の儘に成たる人なりさやうに覺すには引返しいとほしくこそとなり心は源の性は成がたき事に心のとまり又かやうに我まゝなるにはさもなき御心のおはするなりそれによりて例の源の性のくせにて今はわがまゝなれば世の人もさやうにあらんとおもふべし又故御息所もさしも宣ひし物を只好色の方ならで心きよく主上冷泉へ參らせんと覺す也　扨後に入内有りて秋好中宮とは申せし也

かしづき草に　御むすめなどの多からねば也
かたじけなくともむかしの御名殘　名殘は御息所のなごり成べし源をば親共おほせと也源の六條へ渡り給て秋好へ宣ふ詞也人傳なるべし
わりなく物はぢ　秋好の物はぢし給ふ樣を人々の源へ申す樣也
女別當内侍　女別當前に有り内侍は齋宮にも有るなるべし
はなれ奉らぬわかんとほり　秋好の御母かたなどへつゞきたる王孫共歟　又宮がたにも有なるべし
花 齋宮にしたしく參りよれる王氏の女をいふ也
この人しれるおもふかたのましらひ　弄内へ參らせんの事也
人におとり給ふましかめり　内住せさせ給ふともさふらふ人になどはみな然るべきと也
いかでさやかに御かたちを　秋好の御かたちも然るべしとはおぼせどなほさやかに御らんしたきと也
何ゝ源の心也
うちとくべき御親心にあらずや有りけん　草子地也
かやうにまで覺すもまだ好色心やましらんといへ

る也

我御心もさだめがたければ　源の秋好へ好色心もあればいまだ入内の事も一かたには覺し定めぬ心なり

みわざなどの事をも　御息所の佛事也

いとゞさびしく心ぼそき　六條の古宮のさま也

さぶらふ人々もやう〳〵あがれ行　花宿をおらして行散心也　私分散とかける歟

しもつかたのきやうごく　花六條京極なれば也

山寺の入相のこゑ〳〵　今案是は東山の鐘の聲の聞ゆる事也　花「おほ寺の入相の鐘の聲ごとにけふも暮ぬときくぞ悲しき

ねなきがちにて　秋好の心ぼそき樣也

おなじ御おやと聞えし中にも　御息所と秋好との親子の御中をいふ也

齋宮にも親そひて　河圓融院御時齋宮下り侍けるに母の齋宮もろともにすゞか山をこゆるとて　齋宮女「世にふればまたもこえけり鈴鹿山昔の今になるにや有るらん　拾遺集　此物語桐壺帝を延喜に准ずる故に是は圓融院後代の事なれば例なしといへるなり

乍レ去今古の准據なき事は事もなきなり〳〵はしく賢木卷に載たり　私例なき齋宮へさへ母御息所はそひて下り給へるに御息所の限の道にはおくれ給へる事よと秋好のかなしく思ひ給ふ心を云也

さぶらふ人々につけつゝ　爰にさぶらふ人々のゆかりに高きもいやしきも秋好へいひよりたく思へども源のさやうの事をかたく宣ふ故にとりつく人なしといふ也

院にも彼くだり給ひし日　朱雀院の事なり齋宮に立て下り給ひし日の御有樣を忘れがたくおぼし召す也

參り給うて齋院など　此齋院は朱雀の御一腹の妹宮なりさやうのなみにてもおはしませと御息所へも仰られし也　弄朱雀の御妹たちなり

やんごとなき人々　朱雀院に歷々さぶらひ給ふ也

かず〳〵なる御うしろみもなくてやと　此秋好にはしか〳〵しき御うしろみもなしと也

うへはあつしう　弄朱雀院御病氣がちにおはしますをはゞかる心也　私御息所の心に秋好に可レ然御うしろみもなしまた朱雀も御病氣がちなるをいか

ならんとあやうく思ひたゆたひ給ひしなるべし
今はまして誰かはつかうまつらんと人々おもひたるを　御息所さへおはせねば彌御後見なければ御ましらひもなるまじきとさふらふ人々は思ふ也又朱雀より猶一段とねんごろに仰らるゝ也

おとゝ聞給うて　朱雀より秋好の事を懇に仰らるゝを源のきゝ給ひてよこどり給ひて入内させんをいかゝとおほす也

人の御有さまの　秋好の御有さまを云也

入道の宮にて　朱雀より秋好の事を仰らるれば源の横取て入内させ參らせん事をしにくゝ覺して薄雲の女院へおほせて入内させ參らせん爲に申給ふ也

かう〳〵のことをなん思う給へわづらふ　是より源の詞也朱雀院より仰らるゝ故思案し煩ふ樣を薄雲へ申入給ふ也

母御息所　六條御息所の事を宣ふ也　心深うおもおもしうおはせしを源の申なびかして彼御名をもたてつゐにはかれ〳〵にて源を憂物に思ひ給し事也

今はと成てのきはに此齋宮の御事を　御息所の遺言有し事也

さも聞置つるも殘すまじう　さも聞置とは前の詞にうき物には思ひおかれしをなんよにいとほしう思ひ給ふと有りそれを聞置て心にも恨殘すまじうこそ御息所の思ひつらめ如此事を宣ひ置しか忍びがたう哀なりと也

大かたの世につけてだにこそ　是は公界の身の上にかゝらぬ人のうへさへ心ぐるしき事は見すぐされぬにと也

彼うらみわするばかり　御息所の身をば悉皆源の引損ひたるさま也されば其恨も殘らぬ程秋好の事を後みんとの給ふ也

内にもさしておとなび　主上冷のおとなしくおはすれどもいまだ御幼年なると也

御さだめになんと　薄雲の御はからひ次第と源の宣ふ也

いとよう覺しよりけるを　薄雲の御返答也然るべき事を源の覺しよれるとなり

院にもおぼさんことは　朱雀の御方へ參らで引たがへ給ひたらばつらくおぼさんすれども御息所の御遺言入内有やうにと申置給へるやうにかこつけて

主上へ參らせ給へと仰らると也
いまはたさやうのことわざども覺しとゞめず
朱雀院の御事なり今はさやうの方はおのづからの事にやこそあれ只おこなひの事ばかりにて切に御心にはかゝらじと也
ふかうしもおぼしとがめじ　さのみ朱雀の御懷惜はあらじとなり是まで薄雲の御詞也
さらば御けしき有て　又源の詞也さらばおもてむきは薄雲より此事を仰出されよ其上のもよほす事をば源のそへ侍らん也　おもてむきしらぬ分にしたきの心也
とざまかうざまに思う給へ殘すことなきに　弄源の詞なり秋好の參內の事をとざまかうざま思う給ふによてかくまで色々の心がまへをし給ふとなり
聞齋宮（秋好）の事を何とかなど思ふなりそれを又人の好色かたに取なさんほどに今は先しらぬ顏にて後には秋好の親分にもならんと覺すなり私是は院の御前を憚りての事なりそれにかやうに心がまへをするをうちいひても世人のいかに取なさんと憚るにてあるとなり人の心のうちとけかたき事をいふ歟

のちにはげにしらぬやうにて　是よりは又源の心中也後にはおやめきてもあらんと也
女君にもしかなんおもふ　弄紫上也　私紫上へしかしか思ふと源の語り給ふ也
かたらひ聞えて　いひかはしても然べきあはひならんと秋好の事を紫へ宣ふなり
入道宮には兵部卿の宮の姬君　薄雲は兄兵部卿宮の姬君を入內させんとおぼすに此事さし合せてくるしく覺す也
ひまある御中　源と兵部卿宮と御間よからぬ也　中のあしき事をひまあるといへり　間の字を書けり
權中納言の娘は弘徽殿と　前にあり
おほとのゝ御子にて　權中納言の女をおほち大臣の御子になし給ふ也
うへもよき御遊びがたき　弄上冷泉　十一歲弘徽殿十二歲也御あそびのとぎ也
宮の中君（宮イ）もおなじほどに　兵部卿宮の中宮也弘徽殿も同じ程也いまぞ是は參り給はねばひゝなあそびの心ちすべきとはいへり薄雲の御心也
おとなしき御うしろみ　秋好事也

さる御けしき　入内の事を薄雲の仰らるゝ也
おとゝの萬におぼしいたらぬ事なく　是も薄雲の御心也主上の御事大かたの政は勿論也其外こまかなる事まで御心のそふを哀にたのもしき物に覺す也此秋好などの事も冷の御事を思ひ入たる源の御心ばへと也
宮はいとあつしく　弄入道宮の事也　私薄雲は御煩ひがちにあれば內へ參り給ひても久しく心やすくもさぶらひ給はぬ也
すこしおとなびてそひさぶらひ給はん御うしろみは
花御門は十一歳秋好中宮は二十に成給ふなり　私薄雲は內にも常にさぶらひ給はねばちとおとなしきかやうの御後見有べき事と薄雲の心中に覺しめすをかやうに書殘したる也
　弄與に注する分
薄雲太上天皇の事　中宮を辭し給ひて此以後は中宮にてはおはしますべからざるなり後まで中宮と用たる如何　陽明門院の誕生長和二年七月十六日皇女被レ奉ニ御劍一事也榮花第十一に御はかしいつしかともて參れり　私云河にあり

岷江入楚第十五　蓬生

二十七歲
源氏君遷須磨給後常陸姫君孤露御栖居事
宮中荒廢事已上是は源氏君廿五歲之事也大樣に見るへし
源氏歸京之事
十月故院御八講事　權大納言と見えたり　于イ
姫君之御乳母侍從伴姨大貳北方下向筑紫事以上源氏廿七歲之時
二十八歲
四月渡花散里給之次見付蓬生宮以惟光御消息事
同時源氏君分入蓬生露給事
送衣裳於蓬生宮又令拂庭草等事
可奉渡二條院東院之由舟給事以上當年の事也仍て横の並と云
此卷の詞云二とせはかりこの古宮になかめ給てひんかしの院といふ所になん後にはわたしたてまつり給ひけると云々此詞にて伊行本には關屋の次に蓬生の並をおけり但此卷の所詮は四月に源氏のよもきふの露をはらひ給ふ事なり關屋の卷は九月の石山まうての事をいへり四月と九月とのちかひにて蓬生關屋と並を次たり二とせはかりの詞か物かたりの作者の筆の次てにかけるはかりなり故に伊行說をは當流に不用也

蓬生

並一　只歌幷詞爲卷名但蓬とはかり有て
蓬生とつゝけたる詞はなし
花詞云えわけさせ給ふましき蓬の露けさになん侍
とあり歌にはしけきよもきのとあり　河此卷中に
無二蓬生之詞一惣常陸宮舊跡蓬競穢而生界と見えた
り　歌にしけきよもきかもとの心を詠り蓬生同事
蓬生事　杜詩云蓬生非無根漂蕩隨高風天寒落萬里
不復歸本叢容子念故宅三年門巷空此詩の心自相通乎
故いかてかく尋きつらん蓬生の人もかよはぬわかや
とのみち　聞此物語の名になき事をそへていへる
おほし是毛詩の名篇之例にもあり　此物語には夢
のうきはし夢とはかりありてうき橋はなしあるひ
は莊子の逍遙も遥の字はそへたるなり
並事　横の並也源氏二十七八歳の事みえたりさり
なから蓬生の君の始終をかきあらはすによりては
しめは源氏のすまへうつり給て歸京の事をかき終
には又二とせはかりふる宮になかめ給て二條の東
の院にうつり給ふ事をのせたりこれは物かたりの
家にかきそへたる事なり本意はまさしくよもきふ
の宿を尋給てわけ給し事源氏二十八歳の四月の事
也是をもて横の並にはことなる也　弄此卷は横の
並にや源氏二十七八歳の事八講みをつくしにあり事なとより
二十八歳みをつくしの末の事あり又末の詞に二と
せはかり此ふる宮になかめ給てとあり末は竪にな
りぬるにや但末の事を書たる計なり　聞書横竪の
並也　或御説にもよもきの卷とはいはれぬほとに
蓬生といふ並といふはその人ひとりの事をいふあ
またの說不用之　私並の事當流一人々々の傳記の
義を用ふこれにて心えやすきなり此卷は末摘花の
君の傍也しかれは源氏すまの御うつろひの事から
二條のひんかしの院へ末摘のうつり住給ふ事まて
をかけるなりそのうちにふかき蓬の露をわけて源
の問よ給へるは源二十八歳の四月なり此事此卷
の詮たるゆゑに名とすると心うべし
もしほたれつゝわひ給ひし比ほひ　河「わくらはに
とふ人あらは須磨の浦にもしほたれつゝわふとこ
たへよ行平　源氏左遷の時の事をかけり二十五六
七歳までの事をかけり　私是はひたちの宮末摘花
の事をかきいたさんとて源の須磨のうつろひの事

をかきいたせり是は大かたの事をかくいひ出した
るなり
さてもわか御身のより所あるはひとかたのおもひこ
そ　われ〳〵とより所ある人は源に別れ給ふなけき
はかり也それをひとかたのおもひといふ也　花源
氏の君にはなれ給ふなけきなり
二條のうへなとも　紫上なり
たいの御すみかをも　紫上は本たいのやうなれは別
しての御なけきなりされともそれは又旅居のさま
も折々聞かよひてもなくさめ給ふなり
くらゐをさり給へるかりの御よそひ　かりのよそひ
旅のさうそくなりかりそめの心なり源の除名の事
なるへし官位をとられたる人の装束なり
竹のこの世のうきふし　弄此世のうきふしといはん
とて竹とおきたる計なり面白し〳〵　花薄雲女院
は東宮をもち給てなくさみ給ふをいふにや　私花
鳥の義あやまれり弄の義よし　聞今さらに何おも
ひけん竹のこのうきふししけき世とはしらすや
左注にも（ひけり）拾「なよ竹のわか此世をはしらすしておほ（ふイ）
したてはと思ひつる哉　或御説に竹のこの世とは

古今の序にむもれ木の人しれぬなとゝいふかこと
し只うきふしといはむためなり　花鳥の說わろし
中々そのかすゝ人にもしられす　源に數ならす思は
るゝ人は思ひもあさからん事ちやかそれは中々思
ひの深き也そのさまを末にいひのふるなり
立わかれ給ひしほとのさまをもよその事に　源へ御
いとまこひさへ申さぬ人々の心なり
ひたちの宮の君は　是より末摘の事をいふなり此別
惣別の人々のうへなり　弄末摘の事なり上の詞共
末摘の事をいはんとてまつ人々の事をいひたり
またおもひあつかふ人も　父宮おはしまさて又御う
しろみの人もなきなり
思ひかけぬ御ことの　源のおはしかよひし事也
いかめしき御いきほひにこそ　源の御ためには事に
もあらぬほとの御はくゝみも末摘の御ためにはい
かめしき事におほすなり
大空のほしのひかりをたらひの水にうつしたる　河
盥水　是源のすこしの御はくゝみも末摘のために
はいかめしき事とのたとへなり異本の說まてもな
し七夕祭にも手洗の水を庭上におきて星會の影を

うつして見る事なり云々　案之源氏を大空にたとへてそのわつかなるなさけを蓬生君のまちえたるにたとへたるなり
なへての世うくおほしみたれたる　源の世をおほしみたれたるまきれに思ひわすれたるなるへし
うち忘れたるやうにてし　弄やうにての詞は爰にては忘れ給はぬなるへし
とほくおはしましにし　須磨の浦の事也ふりはへわさとは尋給はぬとなり
そのなこりにしはしは　源より前々御とふらひの名殘なり
ふるき女はらなとは　さふらふ年ひたる女なとのさま思ひやるへし
くちをしき御すくせ　末摘の果報なき事をみな／＼いふなり
神ほとけのあらはれ　源の御身をいふなり俄にかやうの御幸もある物かと思ひしなり
大かたの世の事といひながら又たのむかたなき御ありさまこそ　是は源の御事は大かたの世のなけき也されとかやうに源より外にたのむかたなき末摘のためはかりのやうにかなしきとなり
さるかたにありつきたりし　弄さひしさにすみなれたる比の事なり
すこしよつきてならひにける　もとは中々さひしき物にのみならひしを源の御はくゝみにて中比心やすくてすくし給ひしゆへ今のたつきなさはもとよりもみなたへかたく思ふなるへし思ひなけくへしとは草子の地におしはかりてかく歟
さてありぬへき人々はおのつからまゐりつきて　源の御はくゝみの折ふしはこゝへ參るへきゆゑある人はみな參りしとなり
みなつき／＼にしたかひて　又緣にしたかひ　さまさまみなゆきちるとなり
女はらのいのちにたえぬと　とし老たるはいつくへ行へきかたもなくて殘りたるも又死なとするなるへし
いとゝきつねのすみかになりて　河白氏文集凶宅詩の心也　夕顔の卷にあり
けとほき木たち　木なとの物ふり高くなりたるさまなり

ふくらうの聲をあさ夕に　梟鳴松桂枝狐藏蘭菊叢といへる詩の心なり此詩も荒たる所の心なり松桂蘭菊に梟狐なとのすむへきにはあらぬよしなり

こたまなとけしからぬ物も所えて　樹神　順和名　粉神木魅内典山鬼玉篇木靈延喜式に物の精也こたまは樹神也されはかたちをあらはしとかけり　或仔細なしたゝあれたるさまなり　聞かたちはあるましたた物すこきさまをいふなり

さふらふ人は猶いとわりなし　殘りたる人のたへかたきなり

此ころすれうとものおもしろき家つくり　この宮の木たちおもしろきを受領の人のほしかるなり

ほとりにつきて　あたりの便につけてなり

物おそろしからぬ　此宮をば受領なとにはなち給てせはく心やすきところへ移給へかしとさふらふ人人のたえかたきまゝに申となり みイ

あないとしや　弄末摘の性也

おやの御かけとまりたる心ちする　おもしろくあはれにかきなせり

御てうどもゝいとこたいに　むかしの御調度ともおほきとなり

なま物のゆゑしらんと　是は今時におひたる人の昔物なと見所あるなといふをきゝて物すきするよしの人の事なり

さる物えうしてわさとその人かの人に　弄調度ともを物の上手ともの名あるにしおかせ給へる事を聞つたふる人の所望するなり

そこにはよのつねの事とて　花計會すれはかやうの調度なとはうりはなつもそれこそよのつねの事なれといふなり

めにちかきけふあすの見くるしさを　朝夕のけふりもたえ〳〵のさまなるへし

みよとおもひてこそ　常陸宮のしおき給へるも我にみよとてこそさせ給ひつらめ人の家のかさりにはなさしとなり　末摘の詞也　宗廟の器不鬻於市禮記

とふらひきたり　別に音つれ來る人なきよしなり

たゝ御せうとのせんしの君

常陸宮
- 阿闍梨　こゝにいへる禪師の君なり醍醐のあさりといへるか源氏の御八講に参りてかへるさにいもうとの御もとにてありさまかたりし人なり
- 蓬生君　末つむともいへり

おなしきほうしといふ中にも おなし木ほう師／同じきほう師 両義なり 河きすくなる心なり橋姫巻にこは〳〵しきしうとくの僧都僧正のきはゝきすくにてとある同心なり世俗に木男といふかことしあら〳〵しきをいふなり 此説不幽玄同しき法師の中にもとなり 聞同し木法師同しき法師両義あり或御説河海花鳥のきほうしとあるはわろしおなしきほうしとすむて讀よし云々

たつきなく 此あさりの君もまつしきなるへし心も世上の事にとりあはぬひしり心なるへし

しけきくさよもきをたに これより下のあれたるさま註するに及はす

むくらはにしひんかしの御門を 河八重むくらして門させりてへの歌の心なり

くつれかちなるめくりのかきを 或ついちにてあるへし伊勢物語に人しれぬわかかよひちの歌の詞にわらはへのふみあけたるついちのくつれとあるを古今に入るゝ時の詞には門よりしもえいらてかきのくつれよりかよひけりと貫之かけり

はなちかふあけまきの心さへ 總角髮毛詩云憶汝總角時東坡詩也總角は童名也みつらゆひたるをさなきほとなり童のよしなり能因歌枕云冠者或小童の名なりと云々 秘説あり面白き詞なり 別の義あるへからす

八月野わきあらかりし いつのとしにてもあるへし

しもやともの 雜舍ともなるへし

けふりたえ 朝夕の煙也あはれなるさまなり

ぬす人なといふひたふる心ある ひたふるは偏の字なり類字抄にありと云々

この宮をふえうの物に おもひやりてさひしければ用なき故によりこぬとなり 弄賊貧家をうかゝはすといふ心にかなへり 河不要物也 無要の事なり

いみしきのらやふなれは 野等藪なり「里はあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋の野らなる 奥義抄云のら野なり萬葉には草の字をのらとよめり

つやゝかにかいはきなとする人もなし 花貧家淨掃地と云心也 東坡か詩にあり 私此詩を引て用なき歟 案するに此詩をひく心はまきるゝ事なき故に淨く地をはらひなとするとなりこの宮はそれに

も過て地中を拂ふ人も中々なきと也　聞貧家淨掃地貧女常梳髮東坡が詩也　いつれもせん事もなくまきるゝ事なき體なり慶長三年三月十九日夕

うるはしき御すまひ　塵はつもれとおきめなとたかはすある古體なるさまなり

はかなきふる歌物かたり　古歌や物語草子なとこそかゝるすまひのなくさみなるにさやうの事も心ほそくおはするとなり

わさとこのましからねと　文かよはしなと女ともちもあまりあるはこのまぬ事也されとかやうのつれつれなるあたりはくるしからぬあたりは文かよはしなともあるへきを父のもてかしつき給ひし時の心をうしなはて人にもうとくおはするとなり　弄男のかたなとの文の事にはあらす女とちのおとつれなとをもつゝましくし給ふなり

からもりはこやのとしかくやひめの物語　弄一勘合點からもりはこやのとし古物語歟　唐守　藐姑射刀自　赫奕姫　いつれも古物語なり弄同

まさぐり物に　河擘マサグル

おかしきやうにだいをもよみ人をもあらはし　題をも讀人をもなり題作者也　聞題をもよみ人をもあらはしとよめり如何

うるはしきかんやかみのみちのくにのかみなと　紙屋紙陸奥國紙檀紙也陸奥より檀紙をすきはしむ檀はまゆみの木なり萬葉集にみちのくのまゆみの紙とあり　紙屋川とは北野と平野の中を南へなかれたる川なり仁和寺川とも號すと云々此所にて紙をすきはしめたり

すさましけなるをせめてなかめ給ふ　或末摘の古體なる事をとりあつめいふ中に古歌の事をはいはて雙紙のさまを古體なるやうにかけり

いまの世の人のすめる經うちよみ　此體上らうしき心なり　私むかしは經かんきんことき事もせす又數珠なともつ事もせさりしなり有仁公の事をかけるにも佛號名イをとなふるとて檜扇をもて數をとり給ふとあるにや

かやうにうるはしくそものし給ける　末摘の古體なるさまをいひつゝけたる結語なり

侍従なといひし御めのとこ　末摘君の乳母の女なり

あくかれはてぬ　是も時々齋院へ參りしよりかけり

河あくかれはてぬといへる面白くかけり
かよひ參りし齋院　河葵の卷におり居給ふ齋院歟
弄此齋院誰ともなし
此ひめ君のはゝ北のかたのはらから　末摘のをはなり　常陸宮の北方此末摘のいもうとおちふれて受領の女に成て居たるなり
むすめともかしつき　末摘のをは君の女ともなり
よろしきわか人ともむげにしらぬ所よりは　弄末摘のかたの女なとの一向しらぬ所よりはとて受領の北方のもとへ行かよふなり花鳥說同しされとも末摘はかへし給はすとなり　花しらぬ所にゆかんよりはおやなともまうてかよひしをとおもひて侍從かつねに此人とむつふる也　私これは侍從一人の事とみゆよろしきわかうと人ともゝとは受領の北の方の所によろしきわか人なともあれと無下にしらぬ所のやうにはなくて心やすくて侍從か行かよふ也おやなともとは侍從か親の事也
人うとき御くせ　末摘は上らうしく古體にかやうのをは君にもすこしもいひ通し給はぬなり
おのれをはおとしめ給ひておもてふせに　末摘のをは君のいふやうなりかやうに受領の妻になりたるとて末摘の御母北方なとよりおもてよこしなりとおもひいひ給へるなるへしいまをは君の末摘のおちふれ給へるによりおちあたりていふ詞なり
もとよりありつきたるさやうのなみ〳〵の人は　花此段は大かた世にかゝる事のあるをいふなりたとへは種性いやしき人も我身をおとしあふさす思ひあかるたくひも有を又やんことなきすちの人もいやしき人にもむすほゝれぬれは下すしきふるまひをもするならひなり末摘君のをは君のありさまをいふなりなほ〳〵しき下すしき心にかなへり　末摘のをはの事をいはんとて先世にあるなみ〳〵の品ある人の事をいへり本の品たかゝらぬ人の妻なとは中々思あかり上﨟しき事をこのみまねひ心をもたつる事あり又やんことなきすちなる人なれともおちふれぬへき宿世にや受領なとの妻と成て心もなほ〳〵しきとなり末摘のをはの事をいへり
私両抄の義にてよくきこえたりもとよりありつきたるさやうのなみ〳〵の人とは受領なとの品の人の世の中ゆたかになとあるは中々位をも身をもも

ちあけんとよき人のまねをせんとするなり　此末摘のをは君なとは心の劣なる故にやむことなきすちなからかやうの受領なとの妻になるにやとなり
心のなほ〳〵しく下すしきをかくいふなり
なほ〳〵しき御をはにそありける　是は草子の地に嘲哢してかけるなり
わがかくおとりのさまにて　常陸宮のおはせし時はおよはぬ身なりしをとかくたよりなくあはれにて紫の過し給ふを我むすめともものうしろみにつけたく思ふなりわろき心さまなるべし
こゝろはせなとのふるひ　末摘の君の心の今の世にあはすともおも〳〵しく心やすきうしろみならんとわかむすめにそへたく思ふなり
御ことのねも　をは君のかたへおはして琴なとををしへ給へとそゝのかすなり
人にいとむの心にはあらて　末摘の心今おちふれたるさまををは君にみえしなといふ我執のかたにはあらて物つゝすみの心より猶いひかよひ給はぬを我執をたて給ふかとをは君はねたく思ふ也
かの家あるし大貳になりぬ　をは君のをとこ大貳に任するなり
むすめともさるへきさまに　大貳の女とも世にあらせつけて任におもむかんとするなり
この君を猶もいさなはんの心　末摘のうけひき給はぬとも猶いろ〳〵にいふなり
ことよかるを　都にたよりなくておはせん心もとなきなとねんころの體をみするなり心に思はぬ事を詞にいふをことよきといふなりされは末摘のことませ給はぬなり
あなにくこと〳〵しや　をは君の詞なりわか腹立したるさまなほ〳〵しきといへるに叶へり
さるやふはらにとしへ給ふ人を大將殿も　河藪原也
源氏還任大將事不見但兒女房なと日ころのことく申つけたるよし歟　私源氏歸京の後なりとも如此いふへしや女なとのいひつきたるけさまなるへし
えむしうけひけり　弄ヱンケイト讀へし　河怨しうけひはのろ〳〵しき詞なり呪咀也日本紀には誓字をうけひとよめり誓言の義なり
さるほとにけに世中にゆるされ　弄けにとはをはのいひしことくの心なり

われもいかて人よりさきに　源氏の歸京にわれさきにど心さしを見え奉らんとする事をいふなりあはれにおほししるとは源の心中なり

さらに思ひいて給ふけしきみえて　末摘の事は萬にまきれおほしいてぬ月日のかさなりたると也

今はかきりなりけりと　歸京ありても月日ふるまでとひ給はねは忘れはて給ふやと末摘の心中也

もえいつる春に　河「岩そゝくたるひのうへのさわらひのもえ出る春に成にける哉　私此引歌如何たた草木の春にあふにたとへていへるなり

たひしかはらまて　いやしき人々までの心なり　聞たみしともたひしともきこえぬ様によむへし　或抄云源語抄に出かつとたひしかはらまてと云々民氏河原はたみなりみとひと同音にかよふなり　或本たみしかはらと云々　清少納言枕草子にたみしかはらといふことあり貫之か白河大相國の亭の子日會序云草枕たひしかはらまて松の千とせを君にとのみいのる云々或云民氏なりしはやすめ字なりと云々紫明抄には渡守網引なと註せりいつれもいやしき者までもと云心なり河には度子老羅日本紀度師たとへはいふかひなき下﨟の心かとあり　私數多の說これを用ふへからすたゝいやしきものまてといふ義なり然らは種々の義を註する事所詮なしといへとも覺悟のためにこれをのするものなり

よそにのみきくへきなり　源の歸京ありてさかえ給ふさまを末摘のよそ事にのみ聞給ふなり末摘の心中なるへし

わか身ひとつの　河「世中は昔よりやはうかりけん我身ひとつのためになれるか弄同　私源の都はなれ給ひし時のかなしきは末摘の我身ひとつの上のやうにおほえしか歸京ありての榮花をはよそにのみ聞給ふなり

人しれすねをのみ　末摘のさまなり

大貳の北のかた　末摘のをは君の思ふなり

ほとけひしりもつみかろきをこそ　如是八難度の心あり

宮うへなとのおはせし時のまゝに　末摘の父宮母上なとの事なり

をこかましけに　さやうにあるへきと思ひし事よなといふさまなり

猶おもほしたちね　末摘を猶しも筑紫へいさなふなり

世のうきときはみえぬ山ち　弄歌の心なり「世のうきめみえぬ山ちへいらんにはおもふ人こそほたしなりけれ「みよしのゝ山のあなたに宿もかな世のうき時のかくれかにせん　聞書いつれも両首なから引也

ゐ中なとはむつかしきものと　夷中也田舎也　大貳の北方末摘の思ひ立へき様にことよくいひなす也

むけにくつしにたり　さふらふ人々のかくてもかなはしさしたることもおはせし物からかとをたをし給はぬなともときいふなり

侍従もかの大貳のいだつ人　侍従は大貳の従者か妻になりたるなり

こゝろよりほかにいてたちて見たてまつりすてん　侍従は夫につきてくたるへきなりさて末摘をみたてまつりすてんが心くるしきとてさすかに末摘にもくたり給へかしと思ふなり

たのみをかけ給ふ　末摘の猶源をたのむ心のある也

御心のうちに　是より末摘の心中をかきあらはしたるなり

あはれに心ふかき　源のさまをおほし出るなり

わか身のうくてかく忘られたるにこそ　たゝ末摘のうき果報にて忘られぬると観し給ふなり

ありしよりけに　家居なとの荒たるこそ了簡もなき事なれ調度なとをはうしなひ給はぬなり

たゝ山人のあかきこのみひとつを　末摘の鼻のさまを誹諧にかけりねなきかちなるゆゑに鼻もいよいよあかくなるなり

くはしくきこえし　此御ありさまをくはしくいひたつれはさかなきやうなるほとにと筆者の詞なり

いとゝかきつかんかたなう　とりつかんことのたよりもなきとなり常陸宮のさまなり

かの殿には故院の御れうの御八かう　河此時分明石巻の冬なり彼巻に八講おこなはるへき事まついそかせ給ふ澪標巻に神無月には御八講し給ふ云々今の詞又以同之三巻共に同時なり又源氏任大臣は明年の二月なりこの巻に禪君の詞にも權大納言とのゝ御八講といへりこれ横の並の義なり抑此並の

次第異説ある歟定家卿本源光行本には並の一蓬生並の二關屋なり伊行本には關屋を一にたてたりそれは時代前後するなり關屋卷は源氏歸京の次の年常陸介上洛しける道にて源氏石やま詣にあひたてまつるものなり　花十月のことなりみをつくしの卷にあり　弄みをつくしにありし八講の事なり同時なるべし十月計の事なり　私明石卷にいへる御八講の事は此八講の事なれとあらましにかけるなりおこなはれたるはみをつくしの卷なり此卷と同時なり

たふときかきりをえらせ　僧なともえらせ給ふなり此禪師君も世をはなれたうときさま前にみえたり御めしに應するなるへし

しか〳〵權大納言殿の　是より源にての御八講のありれまをせんしの君のかたり給ふなり

いける淨土の　生佛國土なり

ほとけほさつ　聞ほとけほさちとよめり　佛菩薩にたとへて源をほむるなり禪師君に似合たるへし

いつゝのにごり　五濁者劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁也法華疏云劫濁無別體但約四濁立此假名煩惱濁指四鈍使爲體見濁指五利使爲體命濁使々連落持色心爲體記云淮悲花經八萬至三萬亦末有濁至二萬爲五濁始云々

いかていて給ひぬ　禪師君のさま前にかけるによくかなへり

ことすくなに世の人にゝぬ　末摘の君も此禪師君も詞おほからすむつましからぬなるへし

心うのほとけほさちや　源を佛菩薩の變化にやとせんしの君のいひしによりてかくいふなりかゝる身をたすけぬ事をいふなり前に大貳の北方のほとけひしりもつみかろきをこそといへるより面白くよせありてかけるものなり

けにかきりなめりと　末摘の心にさては思ひ出給ふ事もあらしなとやう〳〵思ひよわるなり

れいはさしもむつびぬを　大貳北方は末摘へ參る事なとはなかりしかいさなはんために俄に參りたるなり

御さうそくなと　末摘へ御裝束なと參らする也

おもゝちけしきほこりかに　大貳北方のおこりたる體なり

左右の戸も　門の左右の戸ひらなり
をのこともたすけて　大貳の北方のつれたる者とも
なり
いつれかこのさひしきやとにもかならすにけたる跡（わけけるイ）
あなる三のみち　河將翊宗元卿舍中竹下開三徑文選曰
三徑就荒陶淵明三徑は門にゆくみち井にゆくみち
厠にゆく道也是はいかなる家にもある道なり　私
かならすわけたる跡あるとはいかに荒たる家にも
此三の徑はなくてかなはぬなり是はその跡さへ見
えぬとなり
かうしあけたる方によせたれは（まイ）　このをは北方のし
ん殿の南おもてまて車にのりたるとなり是あるま
しき事なれは末摘の無禮なるとおほす心なり
かたちなとおとろへにけりとしころいたうついへた
れと　傾費歟　私或抄聞書に皆侍從かありさまな
り此分可然歟しからは大貳の北方の心に思ふなる
へし侍從もおとろへたれと猶末摘の君よりはまさ
りとりかへまほしと心に思ひくらふるなるへし
弄としころいたうついえ　おとろへたる體なり
かたしけなくともとりかへつへう　末摘に侍從をと
りかへゆくへしとは侍從をほめたるなり
いてたちなん事をおもひなから　大貳の北方の詞也
末摘の事をいたはりかほにいひなすなり
御みつからこそあからさまにも　末摘の筑紫への事
を思ひもよらす京にて大貳のかたへさへおはせぬ
とうらむるなりさおはしますとも侍從をはつれて
くたらんと御いとまを申なり
うちもなくへきそかし　あはれ御すまゐのさまやな
と大貳の北方のうちもなくへき事なるに大貳にな
りて下るに思ふ事もなくおこりて心ちよけなると
そしりてかけるなり
故宮おはせし時　是より又大貳北方の詞なり
おもてぶせ　常陸宮の北方のいもうとなから受領の
妻になりたるを面ふせと思ひ給ひし事を今おちあ
たりていふなり
としころもなにかは　末摘の母北方のなくなりなと
しては又申もかよふへけれと又源氏なとのかよひ
給ふさやうの事に我等をは人數にもおほさしと申
しかよはさりしとなりいまおちふれ給ふさまを色
色におちあたりていふさまなりなほ〳〵しくみえ

たるおはの心を云なり

大將殿なと　源氏君此時は大將を去給へと女房なとはいひつけたる事をいふなり　弄同

世中のかうさためもなかりけれ　源なとのかよひ給ひしはすくれたる御すくせかなと思ひつれはそれも中たえ給うてかくさひしきさまにおはするよなといひて中々我等つれの身はもちやすきと時にあひたるまゝに心おこりして末摘をあさむき嘲哢するさまなり心なほ〳〵しき御伯母といへるによく叶へり

ちかきほとはおのつから　京にありつるほとは疎遠なるもさすかに程ちかきをたのむ也はる〳〵にへたゝらんはおほつかなく思ひきこえむなと又あはれかけて色々にいふさま也

こゝろとけても　末摘のこゝろにあはぬゆゑふあひしらひにし給ふ也

いとうれしき事なれと　末摘の返事なりかゝるつゝかなき宿世にては此まゝくちはてなんと心つよくの給ふなりかとをたをさぬ心さまみえたり

けにしかなん　又をは北方の詞也けにさやうにおほすは尤なれとかゝる難儀を堪忍する物はまれなりといふなり是もいさなはん心にてなり

ひきかへたまのうてなにも　常陸の故宮を源氏の又作りみかきて玉のうてなにならんなと又あさむきいふなり

たゝいまは兵部卿宮の御むすめ　弄式部卿とある本あり書あやまり成へし乙女卷に式部卿にはなり給へるなり　紫上の事也

かよひ給ける所々みなおほしはなれにたる　源の御しのひ所のあまたありしをもみなかよひ絶給へりといふなり凡源氏も明石より歸京の後は忍ひありきなとさのみし給はぬよしみえたり

やぶはら　ハラとよむ也　ワラには非す

心きよくわれをたのみ　末摘のかくて過し給ふを源をたのみにて心きよく過し給ふとは源のおしはかり給はしとなり

けにとおほす　末摘の心也

されどうこくべうも　末摘の思ひたつへきさまならぬなり

さらは侍從をたにと　北方の侍從はかりをたにゆる

し給はらんとなり
なく〳〵さらはまつけふはかうせめたまふをくりはかりに　侍従か詞也　聞になく〳〵といふより侍従か心詞也
きこえ給ふもことわりなり又おほしわつらふも　北方の事も理なり又末摘のたよりなくおほす理なりとさま〳〵に侍従のことわりをいふなり
この人さへうちすてん　末摘のたのもし人はせめて此侍従一人なり
かたみにそへ給ふへきみなれ衣　河身衣　日本紀には君かみけしとあり我さうそくなとにて侍従につかはしたくおほせとさる物もなきとなりおもしろくかきなせり引歌もあるへし
わか御くしのおちたりけるをかつらにし給へるか九尺あまりはかり　一本におちたりけるをとあり三本此六字なし又九尺よはかり如此よむと云々或御説九尺よはかりとあるを九尺あまりはかりとよむと云々　私九尺あまりはかりとよみて然へし　きぬのたけ昔は八尺或九尺と云々仍鬘もその長さにしける歟きぬのかさなりも廿五重廿重とあり近代略したる物なり　私末摘は髪のよきよし前にもみえたり
むかしのくぬえかう　薫衣香也親行云爲家卿申されしは源氏物語にはくんえかうとのゐもの丶袋殊爲難儀歟至分不覺悟云々　薫衣香は黒方の一名ともいへりまた薫物の惣名と云々然而各別の方有之梅枝卷に註す或御説に薫衣香はたき物の惣名なり
末摘たゆましきすちをたのみし玉かつらおもひのほかにかけはなれぬる　此侍従は末摘のめのとこなりされはたゆましき物なり玉かつらは此かつらの事をいふなり
こまゝの宣ひし　蓬生君の乳母の事なりまゝは乳母の通稱也　末摘のめのと侍従か母なりをさなきもののめのとをはまゝとをしなへてなつくるなり侍従か母の事なり
かひなき事なりとも　末摘の我身の事をの給なり
うちすてらるゝもことわりなれとも　たつきなき身をは給ひすつるもことわりとなり
ないたまふ　末摘の君のさまなり
この人も　侍従も申やるへきかたなきとなり

まゝのゆゐごんは　侍従の詞也母の遺言に及はす見すて參らせん事にてはなきを思ひのほかの縁にむすほゝれてなといふなるへし

とし比の忍ひかたき　數年堪忍もすれはこそしつかにいまさらあり〳〵て見すて奉る事よとさすかにかなしくおもふとなり

返侍従
玉かつらたえてもやましゆく道のたむけの神もかけてちかはん　たむけの神は道祖神なり是にちかひてやかて歸り參らんと云なり　河玉かつらとは打任ては女の笄の玉を云なり又かつらをもいふにや玉はほめたる心なり　或男纓をもいふよし後撰にみえたり伊勢集にもゐ中へゆく人にかつらやるとて「けつりこし心もあかて玉かつらたむけの神となるそうれしき　ゐ中へゆく人にかつらとらするとて「君かためなてしもしるくこのたひのたむけの神となるそうれしき　たむけの神は道祖神の事なり羇旅の人にぬさ以下の物を送る此神の手向のためなり是途中の祈禱なり昔黄帝四十餘の子の中に最末の子旅行の遊を好て敢不留宮中云々遂に羇旅の道にて死す其時誓云吾爲神可守行客と云々昔の名を遊子と號す其靈つゐに神となれり道祖神是なり此故に旅人餞送の所をは祖席とも云世俗にはさへの神とも云又たむけとも號する也　花間祖席離人醉　水上歸帆落日行　元稹　道祖神は和名　唐韵云禓音楊也漢語抄云多无介乃賀美論語云季氏旅於泰山注旅者祭名也云々聊今の心に通なりいかゝ

いのちこそしり給はね　いのちたに心にかなふ物ならはの心ある歟

いつらくらうなりぬと　此方のいそかしかるなり末摘の思ひ立給はぬなと無興したるさまなるへし

心もそらにて　侍従か心なり

としころわひつゝも　侘也漢語抄憀悷同上

よにもちひらるましき　よそへ行て宮つかへなとも成ましき物ともさへかゝるかたにつけてとまるましきさまをいふなり今もある事なり

人わろくきゝおはす　末摘の心なり

霜月はかりになれは　蓬生のやとりのさひしくたへかたき冬のさまをかきあらはせる也

よもきむくらのかけにふかくつもりてこしのしら山
河古今「君かゆくこしのしら山しらねとも雪の

まに〳〵跡はたつねん「雲のゐるこしのしら山おひにけりおほくのとしのゆきつもりつゝ　弄住吉の物語にもかひのしらね思ひやるとかけり此類なり　私あなかち引歌に及はす雪のふかきさまなりおもしろくかけり

なきみわらひみまきらはしつる人さへ　侍従の君の事なり

ちりかましき　塵つもりたるなり　私ちりはみたるなといふも同し義なり

かの殿にはめつらし人に（きイ）　めつらし人とはめつらしきなり　ひはつけたる詞なりことなつひともいふ

かことし　私此義如何　私此段は源氏の帰京し給ひて人々めつらしかり彌威勢なとも心はゝり給ふゆゑに御いとまなき體を云也此義然へしなり　殿は源氏なりめつらし人は紫上也　或抄聞書同し

ましてその人は　末摘也源の御覧したる人のうちに此末摘の君なとほとかたちのわろきはおはせさるへしされはましてといふなり

としかはりぬ　源氏廿八歳なり二月に内大臣になり給ふ也弄同

卯つきはかりに花ちるさとを　私みをつくしに五月雨のつれ〳〵なる比花散里へ帰京の後始めておとつれ給ふ由みえたり此時同時歟如何月おほろにさし入てともあり又こゝにも日ころふりつる雨すこしそゝきておかしきほとに月さしいてたりとあり其さまかよへり但澪標には水鶏の歌の贈答ありこゝにいへるは卯月のはしめ藤のさかりとみゆ別時か尋へし　又私澪標を見るに彼巻に花ちるへおはしたるは五月五日の明石の姫君の五十日なと過て五月雨のはれまのやうにみえたり此巻にいへるは卯月のはしめ夕月夜の比とみゆ同時にあらす然らはこゝの巻にいへるはみをつくしにいへるよりもまへの月の事なり

たいのうへに御いとま　紫上へなり

むかしの御ありき　源の昔の御忍ひありきなり

かたもなくあれたる　常陸のふる宮なり形もなくあれたるなり

おほきなる松に藤のさきかゝりて　此時のさま尤えんなり　河貫之「人もなきやとに匂へる藤の花風にのみこそなひくへらなれ

風につきて　引歌までもなし
たち花にはかはりて　橘ならねと又おかしとなり此時に花ちるさとへしのひ給ふ道の事なれは思ひいて給ふなり
さしいて給へるに　車の物見より源のさし出て御らんするなり
はやうこの宮なりけり　みし心ちすると源のおほすなり此宮なれは尤也けり
いとあはれにして　源のおほしいてゝ車をとゝむる也
こゝはひたちの宮そかしな　源の惟光に仰らるゝ也
しか侍りと　惟光の返答なり
こゝにありし人　末摘なり
またやなかむらん　そのまゝ末摘の居給ふ歟と也
よくたつねよりてをうち出よ　こゝの様體をよく尋てから源の立より給とはいへもしこと人なとのすむに音つれてはいかゝと源の用捨なり
こゝにはいとゝなかめまさる　うちつゝき雨なとふり物さひしきさまなるへし蓬生君の體をいふなり
なかめまさる雨の心もあるか

ひるねの夢に故宮の　父宮のかなしみたまふ故に瑞夢ともいふへし折節源氏の問給ふ也　宰予晝寢論語
もりぬれたるひさしのはしつかたおしのこはせて
此程の雨中のさまなり
よつき給ひて　掃除なとして引きつくろひたる體也
末摘なき人をこふるたもとのひまなきにあれたる軒のしつくさへそふ　弄此歌は感あるをりにてあはれなり
心はことなる事なし　河「ひねもすにふる春雨やいにしへをこふるたもとのしつく成らん　或御説に末摘花の歌いつれもよろしからぬか是は感のある歌なり
これみついりてめくる〳〵　惟光かなたこなたへめくりてみるなり
ゆきゝのみちにみいるれと　往來に惟光の見入るれと人のすむとはみえぬとなり
おそろしくさへ　思ひかけぬ事ゆゑかくあるなり
まつしはふきをさきにたてゝ　老人のさまなり
名のりして　惟光なりとこたへて侍從に逢へきよしをいふなり

それはほかになん　老人の返事なり
されとおほしわくましき　花これは侍従かおはの少將といふ女なり
きゝしりたり　惟光の前にきゝたる聲なるへし
うちには思ひもよらす　惟光を思ひもかけすおとろくなり
もしきつねなとの　荒たる處に住人なれは惟光を狐なとかと思ふなり　花新樂府古塚狐變尾　曳作ニ長紅裳ニ云々狐の女に變せる時はおのが尾を紅の裳になせりと今狩衣すかたの男を見て狐の變化にやとうたかへり其時は尾を狩衣の裾に變すへし男にも女にも變化するゆゑなり
たしかになんうけたまはらまほしき　これより惟光の詞なり
かはらぬ御ありさま　末摘の御心かはらすは源も又尋よらんとおほすなりこよひも門外を過かてに尋給ふとなり
うしろやすくをと　ありのまゝにのたまふとなり
かはらせ給ふ御ありさまならは　老人の返事なりこと人なとに末摘のあひ給はゝいかてかかゝる淺茅か原にそのまゝはおはせんするそおしはかりて申給へとなりおもしろくかけり
としへたる人のこゝろにも　これより老人の今まてまち過し給ひし末摘の心のほとみえ難堪なりし年月の事なとをはやかたり出んとする程に惟光のむつかしく思ひてよく／＼先此趣を源へ申さんとて出るなり老人の詞おほきさまなり
なとやいと久しかりつる　源の惟光にの給ふなり
しか／＼なんたとりよりて　おもしろくかけり惟光のありさまを源へ申なり
いみしうあはれに　源の性殊勝なり
我御心のなさけなさも　源の我御心をなさけなく思ひしり給へる所奇特なり
いかゝすへき　ふと立より給はん事を源の思ひやすらひ給へるさまなり
けにさこそはあらめとおしはかるゝ人さま　心かろ／＼しくなとは末摘のおはすましきを源の見しり給へるなり
ふと入給はん事　心かはるましき末摘とは覺しなからいかならんと少しは源の遠慮なり

ゆゑある御せうそこ　先歌遠とをよみて入れて様體を御覽したけれともむかしのことなく口おそく返歌なとの出來すはとおほして猶もよみかけ給はぬなり源の遠慮なり　此時は歌なとをよみ入て返しなとありてのちに入給ひなはえんなるへきを末摘の心おそさをいとほしくおしはかり給ひてさもなきと也

えさらにわけさせ給ふましき　惟光の源へ申さまなり

源 尋ても我こそとはめ道もなくふかきよもきの露のかことを　弄歌をよみかはし給ふこともなきはすへなきやうなれはひとりこち給ふおもしろし　私たつねても我こそとはめとは末摘のかたちなとあしくおはすれは別人はみたてまつるましきなりわれたにもみすてたてまつらしとなり源の仁恕ある殊勝なり此末摘はかたちあしき故に御覽しすてぬ心前々にもかけり

なほおり給へは　惟光のよもきの露のふかきさまを申せとも猶下車して內へ入給ふをいふなり

御さきの露をむまのむちして　私河に此事古人種々に義を註すといへとも只何のやうなく御さきの露を馬の鞭してはらひたる也と心うへし但後學のために河海弘安源氏論義等左に註す

河帝王略論第四曰梁孝元皇帝傅極群書才辨冠世不好色聲篤信五行多忌諱庭草無芟令鞭去之江陵既陷王僧辨等立第九子是爲敬帝太平二年禪位于陳封江陰王　或說八代記云梁武帝馬の鞭をもて露を拂ひたる事ありと云々可勘　春秋獻馬梳及馬鞭日本紀第九弘安源氏論議云　十五番　右問云　爲方　えわけ給ふましきよもきふの露を馬のむちしてとありたゝかのよもきふの景氣か又由緒ある歟如何　左答云　具顯朝臣　此事日ころも思ひよらす又難義釋にも見及ひ侍らすしからはたゝ景氣はかりを申へき歟但しおもひかけすきゝ給ふ事あるによて此問の後あひとふらひ侍につきておもひよそへらるる事侍り梁元帝の問事に庭の草を馬のむちしてといふ事あるにやもし此故にて侍るやらん　右申此事相違なく侍り元帝のふるまひにはあらすすへてかの時世をさまりて茅茨きらす采椽けつらすといへり又重難におよふへからす因以爲持

あまそゝきもあきのしくれめきて　おもしろき詞なり

みかささふらふけにこの下露は雨にまさりてときこゆ

河「古みさふらひみかさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり　只今露のしけきはけに宮きのゝ木の下露とよめるやうなりと也　私これは惟光の申たるなるへし木のした露といふに前に秋のしくれめきてとはおもしろくかけり御かささふらふとは御笠をさしたるなり

入給ふにつけてもいとむとくなるを　河無徳也所のあれ過たるさま又主人のかたちなともすくれぬ事なるへしかひなきやうの心歟

たちましりみる人なきそ　目はつかしからぬかとり所となり

姫君はさりともと　源のわすれはて給ましきと末摘のたのもしく思ひつるに叶ひてうれしけれと又おとろへたるさまをはつかしくおほすなり

心ゆかすおほされしゆかりに　大貳の北方の參らせしさうそくをは心にもいかにそやおほしてき給はねとも今たてまつりかふるにせんかたなくて着給ふなり

かうの御からひつ　河納諸香辛櫃也

かのすゝけたる御木丁　大貳の北方の參りたる所にすゝけたる几丁とあり

いり給ふて　源の内へおはしてなり

としころのへたてにも心はかりは　是より源の詞也

いまゝてうらみきこえつる　源の心には忘れさりつれと末摘のかたよりおとろかし給はぬをうらむる心にて心くらへしつるといましての無音をかこちなし給へるなり

杉ならぬ木たちのしるさに　河「我いほは三輪の山もと戀しくはとふらひきませ杉たてる門　花「三輪の山しるしの杉はうせすともたれかは人のわれをたつねん「わか宿の松はしるしもなかりけり杉むらならはたつねきなまし　今案杉ならは尋ぬへきたよりあるへきを杉ならぬ木たちなれと打過かたくて尋ねまゐれるよしの給なり　弄杉はたつぬるしるしなれはなり　或抄御説に杉ならぬ木たちとは松にかゝりたる藤の事也

まけきこえにける　心くらへにまけたるとなり

おもひおこしてそ　かゝる露わけ給へるをなほさりならすうれしくおほすゆゑにやう／＼と末摘のほのかなる返事なともあるとなり詞はみえす

かゝる草かくれに　こゝろのさまを源のあはれとはおほすなり

またかはらぬこゝろならひに　源の我心のかはらぬならひに人の御心もかはらしとおもひてかやうにわけ入とのよし也

なへての世におほしゆるすらん　歸京の後も猶事しけくて心ならすのさまをことわりの給なり

いひしにたかふ　「いとゝこそまさりにまされ忘れしといひしにたかふ人のつらさは　私今よりは無音あるましきさまをの給ひちきる也

さしもおほされぬ事　御心よりさのみおこらぬ事も情ありての給ひなすなり

立とゝまり給はんも所のさまより　こゝのあれたるさま一夜の御枕もかなひかたきなるへし

まばゆき御有さまなれは　こゝの體の結句源の方からはつかしからんと思ひやりたるなり

宣ひすへして　河宣ひすへりとかくしてなり

ひきうゑしならねと松の木たかく　河「引うゑし人はむへこそ老にけれ松の木たかく成にけるかな　躬恒　弄引歌此宮の松はうゑしにはあらねと木たかく成たるを驚き給ふなり　私引歌の心は松の木たかく成たるを見て引うゑし人の老たるは尤理りなりといふなり是は源のうゑ給ふならねと松の物ふりたるをいふなりさて引うゑしならねとゝいふなり　聞童兒悉成人園林悉喬木　夢のやうなる御身のうへを觀し給ふなり

源氏 藤なみのうち過かたくみえつるは松こそやとのしるしなりけれ　弄上の詞に杉ならぬ木たちの詞よりよみ給へる也　私花鳥に三輪明神の事なとひけりそれ迄には及へからされ共左に註す　松をしるしといふことは上の歌にもみえたり又三輪の明神の住吉のきしもせはらん物ゆゑにねたくや人にまつといはれん此歌を住吉の御託宣としるしたるを三輪の明神をまち給ふ時の事にいひならはせりを神のめ神の所へかよひ給ふ事にそのよせあるにやされは源氏君のよもきふの宿を尋給ふ心に松こそやと

のしるしなりけれとはよみ給ふなるへし末つむの返事のまつしるしなきわかやともおなし心にて侍るへし　或御説にもまつこそとは末摘の源氏を御まちあるをまつこそ宿のしるしなりけれとその御まちありつるをしるしにまゐりたるとよみ給へるなり

都にかはりにける　すこしの間に都もおもかはりしたるやうなるなり

ひなのわかれにおとろへし　河「思ひきやひなの別におとろへてあまのなはたきいさりせんとは　私すまあかしの物語なり

又としへつらん（としへてイ）　さてもよすかなくて過し給へらん事を源のの給ふなりいかやうの御うしろみなとする人もあるやらんもしらすわれはかくうらもなく思ふとかこちかましくの給ふなり

返末摘　としをへてまつしるしなきわか宿を花のたよりに過ぬはかりか　大かたうらみたるなりはなのたよりは藤なり過ぬはかりとは哉歟又うたかひたるか如何猶可レ決レ之猶うたかひたる心にて然へき歟

けはひも袖の香も　大貳の北方の奉れる御そなり

月いりかたになりて　おもしろきさまなり

あたり〳〵みゆる　はつれ〳〵の心歟　或御説そこそこみゆるなり

むかしにかはらぬ　御てうとなとのかはらすあるとなり

忍ふ草にやつれたるうへのみるめよりはみやひかにみゆる　忍ふ草にやつるゝとは古歌にも「君しのふ草にやつるゝ故郷は松むしの音そかなしかりけるともあり引歌にはあらす　弄宮のあれたるさまはみるめのあはれなるよりは又みやひかにみゆるなり　私住なし給へるさまは猶心にくきさまなりとおもしろくかきなせり

むかし物かたりに搭こほちたる人もありけるを　此事一決せさる事なり奥入なとにいへるもあたらす或御説にも搭こほちたるとはむかし貞女のありしかくらくてあれは人のうたかひありとて家をこほち夜もすからたきあかしけるなるへし九禪抄同之此事いまた一決せさる事なり顔叔子は男子なり奥入に女といへる相違せりかつらの中納言の物語いさゝか似たる事なりそれはまとしき女をいへり常

陸宮の事にたよりあるにや　私花鳥には丁こほちたる女とあり　弄河に顏叔子か事云々貞心の事なり花鳥には顏叔子は男也かつらの中納言の物語にあり丁こほつなりまとしき女の事なりと云々未一決云々畢竟しほうなる人の事なるへし　河内本には丁とあり　私弄花には塔こほつとあり奥入に顏叔子といふ人をとこ他行のあひたその男のうたかひのために塔のかへをこほちて夜もすからあかしてゐたる事也古人釋一同顏叔子事とは定家卿本には塔こほちたりとあり或又堂とかきたる本もあるなり奥入云顏叔子といふ人をとこの他行の程そのまのうたかひのために塔のかへをこほちて夜もすからともしあかしてゐたる事也と云々　毛詩曰昔者顏叔子獨處室隣之嫠婦又獨處於室夜暴風雨至而室壞婦人趍而至顏叔子々々納之而使執燭放乎旦亟蒸イ盡壞屋而繼之自以爲避嫌不審矣若其審者宜如魯人然魯人有男子獨處室者隣之嫠婦又獨處室夜暴風雨至而室壞婦人趍而託之男子閉戸而不納也婦人自牖與之言曰子何爲不納我乎男子曰吾聞也男女不六十不同居今子幼吾亦幼不可以納子婦人曰子何不如柳下惠然嫗不逮門之女國人不稱其亂焉男子曰柳下惠固可吾固不可吾將以吾之不可學柳下惠之可孔子曰欲學柳下惠者未有似於之是伯巷篇　此事は毛詩史記以下共以爲室歟堂と云ふ事は如何或云堂者佛閣人家通する歟佛閣は堂也人家は室也聲各別也塔は一向に佛菩薩之住所也非室義矣若今物語堂の字室字を書誤歟魚魯之疑也又曰註文選有所見云々未勘　或說云かつらの中納言の物語といふものあり源氏物語以往の物なりそれにいはく貧家之女號小大輔机下のかたひらをきぬにぬひてきたることあり若此事歟丁こほつとは破る義歟

おなしさまにて年ふりにけるも　私こゝの物語のかきさま御調度とものかはらすあるを源氏の御覽しておほす心中なりむかし物語に塔なとこほちて身命なとをたすけたる事あるなりさやうのためしさへあるに此調度とものかはらぬをあはれと御らんするなり

ひたふるに物つゝみし　是より末摘の體を源のおほす心なり

さるかたにて忘れしと　風流ならすはくゝみあはれ

まんとおほせしなりされと何かとまきれしほとを
いとほしくおほすなり
御めうつしこよなからぬに　弄花散里の家の様もはなやかならぬ所なれは末つむの宮のあれたるもめうつしことの外ならぬとなり
とかおほくかくれにけり　末摘の宮のあれたるさまもことの外に花散里とはかはらぬゆゑにそのとがのかくれたるとなり
まつりこけい　賀茂祭　齋院御禊也弄同
さるへきかきりも御心くはへ　源の御かけもかくれたる人々の事をいふなり
この宮には　末摘の君なり
しもべとも　下部也
いたかきといふもの　河みたいたなとの事歟　私やかて二條の東院にわたし給ふへき御心あるによりてこゝの修理なとかりそめにしたるなり
わたり給ふことは　源のおはする事はなきなり
御ふみいとこまやかに　源の末摘へつかはす御ふみなりこまやかにかきたまへるさま源の性の奇特なる所なり二條院いと近き所とは東院の事也

よもきのもとにはおき所なきまて　唯今のとふらひ給へるはかりも此蓬生なとにはあまるはかりの御はくくみといふなり
そなたにむきて　源のかたへむきてよろこふなり女はらのさまなり
なけの御すさみにても　河ないかしろなりなほさりの心なり　是より草子の地なりなけやりさまのすさひにもとなり
心ちにとまるふしある　かり初のすさひにても一かとなきあたりへは源のいひより給はぬと人のさやうに思ふに此末摘はおしなへにもあらぬ人をいかなれは物めかし給ふそとこれもさきの世の宿縁ならんと云也是は源の性の奇特なる所なり　なほさりにもあらねは我さへみすてなはたつきあるましきを思ひやり給ふなり黄ムタツギの聲如此濁る也
いまはかきりとあなつりはてゝ　今ははや源も尋給はしなと思ひていにし人々の事をいふなり
きほひちり　河我さきにとちりあかれたるといふ也
うもれいたき　むもれいたきあはれ〳〵しからぬ心なり

心はへなとはた　これより末摘の心なたらかなるを
ほめたるなり
受領なとやうの家にある人はならはすはしたなき心
ちするも　弄末摘の性なたらかなるにならひたる人
人の又受領なとのはしたなきにうつろひて末摘の
かたをしたひかへるなり
君はいにしへにもまさりたる　源のいよ〳〵權威あ
るさまをいふなり
物の思ひやりもまして　弄しつみ給し時思ひやりも
しり給へるなり
にほひいてゝ　常陸宮のにきはゝしくなりたる體也
草木の葉もたゝすこくあはれに　此ほとまては木草
の葉もあはれにすこくみえしか今は木草の色もよ
く見なさるゝとなり主人有和花竹有和といへる心
なり
ことなるおほえなきしもけいしの　花下家司　源の
下家司ともの數ならす何にもしか〳〵つかひ給は
ぬさまの人は此常陸宮へ參りて追從しありくなり
是も源の懇にし給ふを見しりてなり
ふたとせはかりこのふる宮に　弄此詞にて一兩年う
つるへし　私是より物語の要を取てかきたる詞な
り　花是よりは物語の家に已後の事を次にのせた
るなり
ちかきしめのほとにて　河しめゆふあたりと云也
かの大貳の北のかた　年のうつりたる事みゆ例の行
末をかきたるへし
侍從はうれしきものゝ　末摘の心やすくおはするを
うれしく思ふ物から今すこし堪忍せさりし事をは
つかしく侍從のおもふなり
今すこしとはすかたりも　弄紫式部の詞也　河是よ
り已後はものかたりの家に省略したる詞なり
かしらいたく　何とやらん物むつかしきなり
きこゆへきとそ　これも二段に書なしたるなり本に
侍めるといへる類なりわかいひたる詞にせしとて
きこゆへきとそと書たるなり

岷江入楚第十六　關屋

伊豫守任常陸下向以來事
是は賢木卷之時分源氏廿二歲
廿八歲
源氏歸京次年秋常陸守上洛之事九月廿日也
同日源氏石山詣之事
常陸守於路奉逢事
自石山出給時右衛門佐參御迎事右衛門佐は昔の小君也
常陸守卒去事
空蟬君爲尼事

關屋　以詞爲卷之名

河せきやよりさとはつれ出たる旅すかたとある詞なり仍號之　弄關屋いかなる關なれはとも云へけれとも關やいかなるはてにをはのや文字に用之然へし　此卷横の並也花鳥の義あやまれり　弄此卷横の並也源氏廿八歲の九月までなりみをつくしの末には廿八歲十一月はかりまての事有蓬生は卯月迄の事見ゆ仍此卷横歟　花堅の並也源氏君廿八歲の事也去なからみをくしの卷は八月のことにととまる此卷は九月石山詣のことをかけり故に竪の並とはいふなり　私此事あやまれりみをつくしの末は源廿八歲十一月までのことあり此事をあやまり給へりみをつくしの卷のはしめにも註せり此卷は源廿八歲九月まてなれとうつ蟬の事しはらく後の事をもかけり逢生卷の末に末つむの事をいへり其類なりこれ皆一人々の別傳なる故なり是は空蟬君の別傳とみるへしさやうに心うれは横の並竪の並のさたもいらす心得やすきなり
伊與の介といひしは故院かくれさせたまひて又のと

し　花さか木巻に桐壺のみかとかくれさせたまふそのあくるとし常陸守になりて下向せるなり　弄源氏すまへおもむき給ひし前の年常陸に成て下りしなり

伊豫介（空蟬君の夫也はしめは伊與に下り常陸に成て關屋にのほり同巻にうせぬ）
- 紀伊守（空蟬のまゝ子也源氏御方違の中川の家あるし關屋に河内守なる子共あるとはゝきゝ巻にみゆ）
- 藏人右近將監（源氏の大將にて須院の陵にかうまつり給ひし時めし具したりし人大將すまの浦におもむき給ひしをり殿上の御ふたけつられかへりのほりて靭負尉になる松風にかうふりたまはりき）
- 藏人少將妻（空蟬君のまゝむすめ源氏の夜あひ給ひて軒はの荻をむすはすはとよみてつかはし給はりし人なり）

かのはゝきゝもいさなはれにけり　空蟬の事なりはゝきゝの心もしらてとありし事なりいさなふはさそふなり引率也

人しれす思ひやりきこえぬにしも　空蟬の心なり

つくはねの山を吹こす風もうきたる　奥入戀そつもりてふちとなりける此歌不叶此心　みねの紅葉はおちつもり又不叶　「つくはねのみねよりおつるみなの川戀そつもりてふちとなりける　奥入云此歌不叶此事猶可勘歟と云々　花古今「かひかねをねこし山こし吹風を人にもかもやことつてやらん此歌の心こゝには叶ひ侍り常陸國の事に書なし侍るによりてかひかねをつくはねといひかへたるへし兩首ともに東歌の中なり　人にもかもやことつてやらんの心にてかけりされともうきたるやうにたのみかたくてとなりかひかねを引かへたり聞同

かきれる事もなかりし　源は心も須磨へ隠居なり仍かさる事なきなり前にも此心みえたり左遷ならは却て其期あるへしとなり

京にかへりすみ給うて又のとしの秋に　河此巻逢生の巻の次なる事此詞にみえたりと也　源氏廿八歳也歸京のあくるとしの事なり　弄一任四ヶ年にて五年めにのほるなり源氏はすまへ下り給て都合三年にてのほり給へりその前の年くたりたれはいま五年めにのほる成へし

せきいる日しも　相坂の關なるへし

石山に御願はたしに　河石山寺　聖武天皇御宇金鷲仙人建立云々　河舊記云聖武天皇師僧正朗辨者先生震旦修行者也爲求法向舍衞國欲渉流沙依无功錢數月逗留天皇者先生沙船師也不願功錢濟度修行僧既畢爾時件修行僧爲酬罔極之恩可生將來國王之由致誠精祈誓以其念力生日本國王也然而今生樂盡後生可受苦因也朗辨奏云建立大伽藍可爲後世之資粮天皇依敎喩命建立東大寺奉鑄大佛依无砂金晝夜大息之間夢中有人奏云水邊建立伽藍祈請砂金出來歟者夢驚令求勝地建立觀音像不經幾月下野國初貢砂金今之石山寺是也　聞紫式部は觀音の變化なといふ也又石山寺の觀世音に祈して此物語をかけるといへは旁いへるなるへし云々

この殿かくまふて給ふへしと　伊與守子ともは皆源氏の家人なれはむかへに來りて石山へまうて給ふ事を告しらするなり

ゆるきくるに　車なとのさまなるへし

うちいての濱くるほと　今の世に大津と云所なり常陸よりのほる人の打出の濱へくるほとに源は粟田山こえ給ふとて前駈の人々はやこゝへ來る也

逢坂はあはた山　「あはた山こゆ〳〵るとおもへとも猶あふさかははるけかりけり

せき山にみなおりゐて　常陸よりのほる人々源を過し奉らんとて關山におりゐてなり　河「關山のみねの松むら過ゆけとあふみは猶そはるけかりける

車ともかきおろし　河かけはつす歟　弄牛をはつして轅をおろすなり

車なとかたへはおくらかしさきにたて　こと〳〵しくみせじとかくのことくしたれと猶影ひろく歷々なる體なりといふなり

車とをはかりそ　これはうつ蟬なとの乘たるあたりの事なるへし

ゐなかひずよしありて　うつ蟬君のさま然へしとみゆ

齋宮の御くたり　弄伊勢齋宮下向の事　私此殿伊勢へもとほり給へけれは齋宮の事思ひ出給ふか如何

なにそやうの　弄賀茂祭なとの事を思へり

殿もかく世にさかえいて給ふめつらしさに　源のかく御威光の花々しきにつけて人のなひきしたかひ申ゆゑに前駈なとかつもなきとなり

めとゝめたり　源の前駈ともの常陸よりのほる人々
にめとゝめたるなり
九月つこもり　おもしろき時節なり
せきやよりさとはつれいてたる　稱名自筆之本にさ
とくつれいてたる如此あり　河内本くつれいてた
ると有不用也　源へ忍ひて關屋へみなかくれ居た
れと居あまりてはつれの猶みゆるなり
色々のあをのつき〳〵しきぬひ物くゝりそめ　色々
襖狩襖也　縫物　纐染　狩襖はぬひ物をもくゝり
染をもするなり又織物をも用るなり　一本にひも
のくゝりそめのさまもとあり弄同　或御說に襖と
は裏は絹面は布なりうらのなきをすあをといふ素
襖歟
むかしの小君いまは右ゑもんの佐なる　花　此人も常
陸に下りていまのほりたるなり
けふの御關むかへは　源の小君にの給ふ詞なり　河
客を送迎に四方の關を限りとす異朝の例なり　聞
勸レ君更盡ニ一盃酒ニ西出ニ陽關ニ無ニ故人ニ三體詩也是
も行人を送りての詩なり關外なともいへり　行人
を送るを關おくりなり歸る人を迎ふるは關むかへ
なり
おほぞうにて　大かたはかりにてなりおほするをも
小君してたまさかにの給ふ心なり
とりかへして　空蟬の君の心中なり此人の事にはい
つくにても此心あり
行と來とせきとめかたき涙をやたえぬ清水と人はみ
るらん　河　往と來となり引歌に「せきこえてあはす
の森のあはすともし水にみえし影をわするな　或
は「あかすしてなかるゝ涙瀧にそふ水まさるとや
しもはみゆらん　聞　此二首にてかけりと云々　私
心の内に源をふかく思ふ心はみえたり
えしり給はしかし　弄　空蟬の心中に思ふ歌なれはな
り
いし山よりいて給ふ御むかへに右衞門佐まゐり一日
まかり過し　源氏は石山に七日參籠し給へるにや一
日といふ詞はかくみるへきにや　源氏石山に御逗
留ありしにや　私まかり過しかしこまりとは常陸
守にうちつれて都へ上りし事なりさて御迎にいま
まゐれるなり
むかしわらはにて　是より小君か事をいひのふる也

かうふりなとえしましてこの御とくに　此右衛門佐
　敍爵なとせしまて源の御かけにかくれたるなり
おほえぬ世のさわき　すまの御うつろひのあるへき
　ころなとよりこと〳〵しくなりて御供にもまゐら
　すひたちへくたりし也
すこし御心おきて　源の小君を昔の様に覺さぬ也
きのかみといひしも　秘中河の家あるしなるへし
そのおとうとの右近のそうとけて　河解　弄紀伊守
　は中河の家あるし此右近の丞と伊與守か子也すま
　へくたりしなり
とりわきてなしいて給けれはそれにてたれも思ひし
りて　聞すまへ御供せぬ人をもとかめはし給はす又
　御供したる右近のそうなとをは別して賞し給ふに
　て思ひとかめ給ふ所をしるなり
世にしたかふ心を　其時の不忠を後悔するなり世上
　にある事なり
すけめしよせて　右衛門佐也
御せうそこあり　空蟬なり
今はおほし忘れぬへき事を　右衛門佐の心中なり
一日はちきりしられしを　弄文の詞なり

わくらはにゆきあふ道をたのみしも猶かひなしやしほならぬうみ　河わくらはに邂逅なり　しほならぬ
　海は湖海なり　花行あふみちは近江路にそへたり
　しほならぬ海とは見るめなき心に云るにや　後撰
　集に紀貫之「しほならぬ海ときけはやよとゝもに
　見るめなくして年のへぬらん　弄しほならぬは海
　はみるめなき心をよめり
せきもりのさもうらやましく　猶文の詞なりねたみ
　の給へるやうの詞なり源の関の關守となり　河常
　陸の前司を相坂の關守にそへていへるなり
としころとたえも　これより源の佐にの給心なり
いとゝにくまれん　空蟬の巻にわれはかく人ににく
　まれてならはぬをとあり
猶きこえ給へ　佐の源の文をつたへて空蟬君にいふ
　詞なり　花空蟬君に猶きゝ給へといふ詞なり　私
　御返事なときこえ給へるといふなるへし
昔にはすこしおほしのく事　弄小君か源氏にしたか
　ひ奉らぬ故にかく思ひけるなり　私昔にはすこし
　おほしのく事あらんと思ひ給へるに同しやうなる
　御心のなつかしさなんといとゝありかたきと書此

詞は佐か身上の事をいふなりすまの御うつろひなとの御供をもせぬほとに御隔心もあらんと思ふにすこしも源のけちめを見せ給はぬはありかたき事なりといふなりすさみことゝそえうなきことゝ思へとえこそすくよかにきこえかへさねこれより空蟬への文のことをいふなりかやうの文かよはしなとこそえうなきことなれとそれをもすく／＼しくいなひ申事もならぬと也此句をよみきりて然るへし

女にてはまけきこえ給へらんに　空蟬の身にてはまけて御返事を申させ給へ何事かあらんと右衛門佐かさかしらするなり

今はましてと久しう　うつ蟬の心なり年月もへたゝれは猶隔心も有となり

えしのはれさりけん　秘　草子地なり

空蟬 あふさかの關やいかなる關なれはしけきなけきの中をわくらん　弄 關やいかなるとはてにをはなり　花 相坂の關は杉の木陰をとほれはしけきなけきとはよめり　私なけきは木によせたり面は愛の景氣をよめり下の心は源と空蟬との間の事を思へり　相坂は戀路の逢ふ事によせたるなり

夢のやうになん　年月へたゝりゆき又中川にてあひ奉りしもはつかなる事なれはなるへし文の詞なり

あはれもつらさも　かゝるわりなき事に御心のとまる源のくせなり文かよはしなとありて又逢たてまつりし事はなきなり

かゝるほとにこのひたちのかみ　これより行末のことをかきいたせり

子ともにたゝこの君の　常陸守か子ともに空蟬の事侘のみいひおくなり

女君心うきすくせ　うつ蟬は中納言ほとの人のむすめにて受領の妻になるは心うき宿世なりそれにさへ又わかれん事を思ふ空蟬の心也

思ひなけき給ふを見るに　伊與介か心なり

いかてこの人の御ために殘しおく玉しひを　花「子のためにのこす命をえてしかな老てさきたつ悔なかるへく　弄 花に歌を出し給へり河には「あかさりし袖の中にや入にけん我玉しひのなき心地するかなしき事にいひ思へと　伊與介か心なり

しはしこそ　伊與介なくなりたる名殘しはしこそ子ともおやのいひし事思ひいてゝ空蟬へもねんころ

にすれ後よにさもなしとなり
なさけつくれと　河うはへに情あるよしを作る也
とあるもかゝるよのことわり　浮世は生死も盛衰も
みなさたまれる理となり
なけきあかしくらす　空蟬のさまなり
なさけかりける　河内守は紀伊守なり空蟬へ心をか
けてなさけがるなり
いとあさましき心の　空蟬へのけさう心なり
うきすくせある身にて　空蟬の我身の上を思ふなり
あまになりにけり　空蟬の尼になるなり
ある人々　空蟬のつかふ人々歟
かみもいとつらう　紀伊守も我をいとひてかく尼に
なりたると思ひてにくけなる事ともをいふ也
のこりの御よはひ　空蟬いまたわかけれは末のよは
ひの久しかるべき事をいふなり
いかてかすくし給へき　河内守はらたちていまより
後は御身の事は我はしるましきさるにてものこり
の御よはひいかてか過し給はんといふなり
あいなのさかしらやなとそ侍るめる　河進恐日本紀
同古今「さかしらに夏は人まね篠の葉のさやく霜
夜をわか獨ぬる　六帖「秋の野にゆきて見るへき
花の色をたかさかしらにをりてきつらん　私夏は
人まねの歌はかしこたてになといふやうの心なり
いろうましき事なとにさし出るをさかしらといふ
なりいさゝか所によりて心かはるへしこゝの心も
河内守のとやかくやともてあつかふをいふなり又
此事なとそ侍るめるとかきとゝめたるも本に侍め
るの類なり是まてうつ蟬のことをかきたる別傳な
りさてのちにはこれも六條ひんかしの院へうつり
すみしなり

室松岩雄
保持照次　校
信田重並

明治四十三年九月二十五日印刷
明治四十三年九月三十日發行

定價金參圓

編輯者　室松岩雄
東京市麴町區飯田町五丁目八番地
發行者　三里半七
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷者　小西幸吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所　日本印刷株式會社

東京市麴町區飯田町五丁目八番地
發行所　國學院大學出版部

國學院大學出版部